ACIFIC UNITARIAN SCHOOL
FOR THE MINISTRY
Berkeley, California

420 H24 8111

號 月 一



Presidite University Conde to the Winneston

大正五年一月一日發行 (每月1回日發行)

六合雜誌第三十六年第一號

新

干川



思 世 所 は外來思想 金言·俚諺 三百六十 を は を め、 勿論 揭 明 記 今東 五 且 又は 感 輸 倫 H 9 年 理 を K 西 入 詩 配 深 日 0 科 中 0 歌 順序に 典 教員 分し 曆 < 0 (籍 大 を附録 章を愛讀 精 體 宗教家 列べ 凡 以 同 約 لح 類 T 五 五 0 千 百 生修 德目 7 思想を一日一 項目 卷 演 或 人 說家、 民 生 を設け番號を を扱萃 b 一教訓 的 其 好 0 伴 事 文章 0 千載 發達 章に集め 文は 侶 家等 لح 之を四季二十 爲 聖 附 を 流 紙數 價 送 歷 の参考書 傳 思想 壹圓 ね 史 する 九 料 的 子 引 百 五拾錢 生起 故 用 0 VC 八 聖 四 記 解 K 拾 訓 錢 H 得 候

總 布 製 四 六 版 百

座口金貯替振 番九一二京東

3

か

らざる

便

益

の書なり。

用

とし 無二

7 0

又

は

事

務室工場。俱樂部

の備付書として

片

時

\$

缺

座右

銘

た

る

0

みならず、

家庭

0

寶典

て叉

は旅

す

社會式株書圖本日大

座銀區橋京市京東 地番二十二目丁音

聖書日々實行訓 出 版

送料八錢東京布裝中版約四

銀百

四挿

四番地銀座書房

年のの

朝の

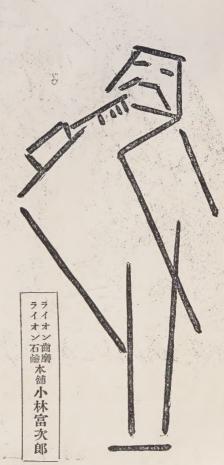
11

齒磨に松

日の奮闘

フイオンド

イオン齒磨に終る



集沙

大沙

公次

から

名

方

面

な

3

天

0)

TI

金數寫 萱 真 個 版 版 木 卅

全

五壹畫 五

版

美

とし T 眞 に 醇 乎として 醇 金 13 3

ス の作 妨 あることは 妹 者に 編 忽ち喜劇 北作 極 め 7 自 忽 一然に、 心ち笑劇 其 想も幻、 して更に 理 温 を全脱 忽ち歌劇 愉快 其調 ま 8 111 更 T 幻 絕與 でに奇 妖 当れて整然 魔 頻 に跳 梁し 微 妙、 曾 情 0 T 恣 脚 更 あ 色、 b 1-1= 人間 飄逸 滑 才 稽 を 七 翻 五幕 あ U 5 弄す 1 + 葛 幾 藤 場 7 あ

第傑

十作

刊近

に卷道を追加し博 をて士 濺特が げに沙 る其紛 も現傑 の代作 語集 譯第 0-新期 IO 夫終

版重評好 來 # 振访 替京 5 1 6——二三番 ジュリヤス 1 4 ניי +1 1 h 6 2 I ロミオと = ジュリ 學 ス 0 エツ 商 人 7 3 テ 大 振東 潜神 4 也 ~ 五田 O裏神保 ス 1 I 番町 8 4 雷 7 1) シト 7 レカ = ヤ バと TO P 捌賣 5 王 書全 肆國

=明日と言はず直ぐ御實驗あれ =

偉 主治効能

あ心

身

神 精病 後 衰 弱 弱 (0) (0) (0) 男 女 血 牛 0 殖 ス 器

> 隨 1]

神=經=衰=弱 精=力=增=進 の=妙=樂



よもにのは弱と たりの理結従症人 アスに想果來患口 全性で新物間の増 欲、樂のに累加

する神な廠 が減經る器般は益 中に轉生 予退衰こ中に轉生 に弱さよ有た存 で類症をりり寒競 るの認了觸心爭

か論回 此ざを °常初』種る餘 にめ含賣も儀 マて有薬のな ル賣のとなく

るへ甚

ク薬有選るせ をさ効ををし 服なな異覺め 用しるにゆ す廣藥し

れく劑狩 ば同を野 精病製病 力患出院 を者し長 盛に幾符 な頒多野 らち實謙

結 し以驗吾 めてに先 殊世よ生 にをりが

身益其多

沂

年



代 賣 元

他

理 店

N

東電 話 話 市 JII 原 町 番 地

圓

Fi.

圓

壹

圓

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 420 January 1916

CONTENTS

Comming of a Better ReligionJ. T. Sunderland. D. D.	2
Lamentation on the Destraction of Serbia (A Poem)	
·····Prof. R. Tsuchie-	21
Essential Principles of Liberal Christianity Prof. Iso. Abe.	27
Religion as a Harmonizing Agency of International Relations.	15. 4
······Prof. S. Yoshino.	38
Substance of Human Nature Prof. S. Uchigasaki.	44
Short PoemsMrs. S. Noguchi.	51
Faith and Scepticism (Guyau)Translated by .Prof. W. Naito.	52
Illusion of Bergson's Philosophy Z. Nomura. Short Poems R. Ito.	60
Short Poems R. Ito.	70
The Sun as a Life-Teacher Prof. R. Nagai.	71
My Attitude towards MisunderstandingRev. I. Okino.	78
Short PoemsProf. K. Sato. Love and DesireG. Yoshida.	85
Love and DesireG. Yoshida.	86
The Three Days Orphan-Prof. T. Okada.	99
The Leading Thinkers of the Present Age by Various Writers.	100
The House of Cobweb (Gissing)Translated by Y. Suzuki.	119
A Letter in Love·····K. Hirai.	
In the Evening (a Poem)	
HokkuSelected by Ippekiro.	164
Village Life in the United States of America Takahashi,	
Christianity and Social Problems	178

Topics of the Day. New Books.

Published Monthly by the

TÕITSU KRISTOKYŌ KÕDŌKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

激進中書のな人 をんの家ぎい類 受で傑た術本の け静作る家書歴 よ朗をダには史 た網キし此長 る羅ンて燦 理してもオ 飛に大の人 躍詳家彫即 愛細を刻ち な趣家新 でる味たか 安解深る と説く獅の命 のを思子藝 聖以想の術の 悦て的如家横 にせ宗きに溢 浸り数ミし ら人的ケて んがに と至比ァ聖 す深較ン母 るの論デ

の服挿に

ミてエレ

周刀枚餐 を を し を し が が が

迄己等の於古類若 目革何至け今的 ざ命を情る獨生 爲と彼步命 來類す靈のでの つ救べ感不あ良 た濟きの可る心が °の平涙抗が的ト く促に悶ス 發於し進偉とト てて力大そイ では對でにのの あ誤しなし解永 るれ得けて脱遠 るやれ更で的 ばにあ生 即我ら刻 懺ぬな 悔 定四 價版 圓裝 あ聲 質い一敬中での

價六 壹版 順六 六百 拾頁 錢餘 送布 料製 六美 錢裝

町番話電 堂 陽 洛 六三目丁五町河三區町麴京東 千斤行發

oに自吾虔にも人



						5	2				1	1			
藝妓假裝行列問題(外四件) 新刊紹介—編	~	The Three Day's Orphan	所に磐	太陽の如く生きよ	感想	最近教學評論界一覽教界彙報	大正四年の我が思想界	現代思想家の何人に最も共鳴い	思潮	虚心集(佛句)	夕暮に(詩)	久能より龍華寺へ	憧憬ミ沈默(詩)	摩耶のふもこ(短歌)	霜枯るゝ頃(短歌)
輯便り		**************************************		早大教授				鳴するか			北米		… 文學士	… 文學士	
口繪	吉		沖	永			-	諸		:	田	内	石	佐	野
人の	田	11	野岩	井柳			條		THE STATE OF THE S	趋	中	ケ崎	田	藤	П
思想	粒	非尸	三三	太			忠		1	婁	葦	作二	三三		精
(口繪)人の思想(ロラン)	鄍	郎」	郭	郎.			衛	家	i	践	城	鳳	治	清	子
	八六頁	九〇百	…七八百	七一百		一五百	一〇七首	- OOg		六四百	一大三百	一七七百	五〇萬	八五三	五二



八合雜誌第三十六年第一號

評論

1:				ما	4.7	. /9/	
	國際關係の調和力さしての宗教…	自由基督教の根本義	講壇	社會問題ミ基督教	ベルグソン哲學の迷妄	信仰よりも疑惑	新宗教の曙光
	法學博士	早大教授		法學士		文學士	神學博士
	吉			木	: 野		
	野	部		村	村	藤	ダー
	作	磯			隈		ラン
	造三八頁	雄二七頁		停…一七八頁	畔六〇頁	濯五二頁	サンダーランド二頁

米國の農村を見て故郷の人々へ… 在 米 高 橋 清 吾…一六六頁

内ケ崎

鄖

…四四頁

平鈴

井 木

好 芳

一…一四八頁

松…二一直





杉本伊作先

郵定四

稅價六

金八金八金八金八金八金八金八金八金八金八金八金八金八金八金八金八金八金

八十美

錢錢本

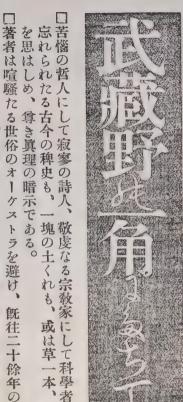
111

豊

彦

先

生



30

10

飾

12

す

~ T

は

獨 T

特

0

吹

奏

樂

7

あ

h

柿

٤

0)

對

話

To

あ

5

自

然

3

應

ばの

偲

間

武

藏

野

0

角

立

ち

7

常

自

己

1-

至

る

6

12

命

0)

第

tz 3

永

に生 0

想 實

0) 1-

結

品

别內 所柯 植鑑 著序 既·最·

花の 頭 朶腦 を備 12 る 著 者 眞に 生つ T は

錢

あ る 0 且 つ文 辞 米 清 田 麗 庄 典 太 鳳 優 先 生序 3 真 球 0) 郵壹菊 光 税圓判 多

郵 A.E. 几 六 稅 判 價 發。新• 金 几 五 八

京東替振

十布

發發製

町張尾

頁

賣。刊。

誌 雜 合 六



號 月 —



であ 等より道 ど想像 だその こどで 種 る。 0 過程 L 果 あらう。 德宗教 で居 實、 に入つたとさ 72 如 0 領 人間 何 領 分迄 1 豊富 分に至 0 思 へ言 なること 想と生活 るまで 單 に自然界や物質界ば ふこと に、 ぞ! カゞ 科學は 出 何處まで深く其 來ぬ 科學 今や非常に力强 位 0 6 出 現は比 カコ あ りで る。 の根を張つて行くことであらう。科學の なく、 較 而 的 も從來吾 6.7 新 形 革命的 い。 m E R 近頃 カジ 0 領 な勢力を及ばす様にな 分、 科 漸 \$ 學 現は 卽 0) 5 力 哲 0 n 學、 たば 到 底 文藝、 及 かり ば 0 n 生 美術 12 所 8) 3 未

典や 依 進 て 化論 宙 基督教以外の世 廣 8 は 亦宗教 45 法 新 則 の支配を受けて居ると云ふ説は、科學の力 心的意義 45 光明 界の カラ 1 於て、 輝 大 4 7 なる信 頗る達 來た 仰 0 であ の研究か 觀せる革命的 30 夫れ らでも、 な説 に比較宗教か 同様に新しい光明が輝き出 T が神學思想の上 あ るの らでも、 又今日 0 に新紀元を開 又は 新 L 心聖書以 60 淮 3 步 せ 0 外 い で 0 3 72 à # 平 0 30 界 書 6 あ 研 大 究 30 經

3

三、宗教思想の改造

信奉 なら 部 考 12 此 予の 等光 n され へ直 述べたる如く、吾人は新しい、そして今迄よりも、 て來た 別明と知る 從來 多くのことは、もはや信することが出來なくなつたから、之れ 識 の方式を改め、更に新 0 新 L 5 源 泉 を 皆開 しく 放した結 說 述しなけ 果、 到 n 3 13 處 b なら 0 賢明 つご大なる善 の事 な人々は、 多 悟 b 2 を棄っ 初 基 今や め 督教 7 T な 來 基 を信 720 V 督 in 敎 じなけ ば 過 0 73 證 去 3 れば 於て



新 宗教の

ょ ŋ 善 살 宗 敎 0 出 現

神 學博士 サ

ダ

ラ

۴

はしがき

如何に 皆此の非常に變轉 進して居つても、 周圍に見えるも 吾人が大洋に乗り出し、 變遷 とい 大な る變 2 0 遷轉 は 0 乗つて居る自 凡 凡 0 て外 化 目 T の只中 から 醒 面 L 逆卷く怒濤に向つて船を行る時、 自 的 43 一に接息 0 時 分と共に 8 代 分には、 1-して居 文けではない。 在 つて、 動 その U T 3 相共 か 居 進 に氣 2 3 に前 2 か 寧ろ、 らで カジ 付 進 あることが あ か L 到 ない て居りなが 3 それが非常な速 る處 此 ので 解ら の思想界に顯はれ n あ と同様、 る。 5 な 6 吾 力で前 自 一々自身 吾 分 R 0

2

光明の新源泉

て居

る轉化と新傾向こそ、

最も意味深長な本當の變遷であ

る。

吾人は科學全盛の時代に生を享けて居る。 近代科學は何處まで範圍を擴げて行く

であ を奪 重する るかっ 私共 高潔な人々は、確かに是れを喜んで受け容れるに違ない。其の優れた基督教の特質とは何 の力の及ぶ限 り、此の 問題を考へて見たいで思ふ。

は危險なものである。 ふまでもな 未來の問題 未來は隱れて居る。 に對して私共は、充分控へ目の態度を執らなくてはならぬ。 未來の事は、 力に限りある一般人にどつては、 封 豫 印 言 は 世 られ 普通

た書物である。

3 動が して B 確 然しなが 居る。 あ 往. 信を以て、 30 々未 ら此世には、多くの時代を統一する確 來に關 河の 可なり多くの事柄を承認し得る迄に進んで居ると思ふ。 流 0 法則。 れの様に、 する多くの 即ち雄 光明を認むることが 時 大壯嚴 代から時代へと流 に上 1/2 出 n 質な大法 流れ 來るのである。 行く思想の大運動 行 則 く是等の カジ あ 30 それで私共は、 流 因果 n を 道德 の法 注意しなが 的 生命、 則 は、 假合未來のことで 靈的 歷史 ら辿 カジ 生 命 つて行く 到 處 0 大 で示 運

5

五、善きもの廢らず

くも人間 一に、今日基督教だと自稱して居るものが、 の道德的、 靈的生命に幾分でも價値あるものは、決して棄てられるものでないと言ふことを、 將來此世から棄てられること から あらうども、

私共は確信する。

朋 や知識、 世 には、 科學や自由思想が怖しい魔力を持つて居るから、宗教が之れを喰ひ止め、 此 0) 世 一は將 に何 ものか かを失は んどして居ると言ふことを、 始終 心 配 して居 警戒 る人 カラ しなければ あ

義に滿足せず、新しい光明と新しい真理に其の眼を開 れ初めたと言ふことは、 私共は各方面に於て、此の善い宗教が近づいて來たといふ徵を見ることが出來る。統 實に其の徵の一である。自由正統派も亦其一である。 加奈太等の最も有力な宗教學者の筆になる、 其の新しい宗教が、 近づいて來て居る徵である。 數百冊の新しい本が、現はれて來たのも、 くやうな進んだ人が、 所謂異端の數の 英國や歐洲大陸や、 増加したことや、 何處 の教會に 一主義の教會 も多少現は 叉古 北米合 夫れが い教

近づいて來た間違なき徴候 在 あるやうな基督教では世が渡れぬと言ふことである』と。 マッシュー・アー 出 來るものが二つあ) w F. が、死ぬ少し前に日うて居る る。一は、 であ 30 私共は基督教が無くては、 『どんな人間でも、其の心の眼で確然観るこ 世が渡れぬといふこと。も一つは、現

めて明瞭 ることになつたのである。 力を通して、輝き出さしめた眞理の新光明とに由つて、弦に從來のよりも更に優れた新し 過 去千五 なことである。即ち一 百年 且つ從來 間 の基督教が、徐ろに過ぎ去つて行くのは、 よりも一層善い基督敵が、 面に於ては、神學に關する新知識 過去の基督教に代つて現はれんごして居ることも、 極めて確かな事實である。之れと同 の進步と、 他面に於ては、 神 教が生 カラ ~科學 極

四、來らんとする基教の特質

吾人は今迄のよりも一層大きい、優れた基督教の現はれて來る多くの徴候を見る。而して一層自由

とを確 な狀態で、此の と言つても過 として何 保する為めに、絶えず最大の勞苦を致さないのであらうか。而 . 3 なか 言でなからう。宗教は、既に充分發達し、成熟し、完成 世 つたことを何人も否まれまい。 1 現はれ るものだと言ふのが、一般人の宗教觀の様 實に有史以來、 宗教程 であ 進 して何等成長 して斯様なことが今まで、 步 を拒 る。 h 72 も進 もの 步 は も要らぬ様 な

我々人間 8 ら割 て來 亦 h 72 是れと同様、 0 で 尙 L 72 は は あ る、 知識 初 此の 層 的 め 解 極 進 にも社會的に りに んだ めて 観念は、 くい 低級 考、 即ち 多くの人々にとつて大變解りにくいことであつた、從つて此 b 0 狀態に在つたのが幾多の蹉跌を經、 け B で 同 じ發達 政治的にも宗教的にも、大體に於て徐ろに、上へくと向上し あ 30 の法則は、未來まで押し擴げて行かねばならぬと言ふ考 時々は一時退歩したことさへあ の観念か

7

七、今は正に黄金時代

我 何時 とする觀念を造らうと努めて來た。今迄の人々はよく曰うて居る―― なの 人間 0 に近く在した。 祖先、 神 世 は何時の時代に在つても、黄金時代、特に宗教上の黄金時代は過去 0) 1= 出 も人々は、 更に遡つて祖先の祖先に現はれ給うた程、今我々の側近く現はれ給うて、同樣に力强き 影などは 我々の祖先こそ、真に靈感を受けた人々である。 とても見られ 古い過去に於ける天啓や靈感を、 ない。 世界の長がほのん~と明け 唯一絕對 0 ものさしな 初め 然しながら今は墮落 昔は に在 12 斗りの太古に於て、神 神 る 様が もの 5 迄 8 き主 今よりもずうつど 主 張 した澆季の 要 して な 8 來 のだ

ならぬと心配して居る。然しながら實際は、事物に對する斯様な見解こそ、却つて念の入つた危險な、 不敬虔な考ではあるまいか。

何時も事實であつた、將來も事實として繼續するであらう。 懼れるに當らない。無智、頑迷、迷信こそ真に恐るべきものである。世人が真理とはどんなものか、 考へることが何も危險でない。考へもしないで捨てゝ置くこそ危險干萬である。宗教は何も知識を 善いものはどんなものかを見付けたら、もうそれを棄てやうとは思ふまい。是れは過去に於て、

た宗教の要素は、どれでも確かに、將來尚は無上の寶となつて、永續するであらうと思ふ。 斯う考へて見ると、 過去、長い間の何處かで發展して、人心を强め、其の生命を高め潔める力を示

八、法の進步

則であつて、他のものと同樣宗教に於ても、正しい、自然なそして必要なものには、進步が 仰を進步せしめるにも、不承しくでなく、自ら喜んで之れを進めなくてはならぬ。蓋し進步 ふことを信ずるからであ ることを認むるならば、 第二に、若し私共が、來らんとするより善き信仰の中に、過去の基督教の善い部分を凡て採り入れ 同時に其の信仰は、進歩發達することを確かに悟り得るであらう。 30 は神 m あると言 の法 て信

を開かなかつたのだらうか。若し宗教が人間と至高の關係を有するものならば、何故其の純潔と完全* 何 一故世界の宗教は、何れも初めから、新光明、新知識、新しい。靈威、 天啓等に對して廣く其の門

う。 去にし昔の神のみならず、永へに生ける現在に於て生ける人間の活ける神。 の三者を決して疑ひはしまい。 否な寧ろ此等を以て信仰の最も大切な箇條として推すであら 將に來らんとする宗

教に當てはめても如何に真なるかを解する基督教であるに相違ない。 動 きのとれぬ樣に作らへた信仰簡條と、過去とに縛られた、古い基督教に代つて來るべき進步的基 ジェームス・ラッセル・ローウエルの詩の一節が、他の色々のことに當てはめて真であ 17 ーウエ)V は歌うて曰く る樣に、宗

新しき時代は、新しき法則と、新しき人とな求む。 世は進みて幾程もなく、我等が父祖の世には此上なかりし、其の法則か、今は超ゆなり。 されば叉、我等の後より、遙かに聖きもくろみの、我等に優りて賢き人々に、造らる、日のなかるべしやは。

9

眞理のたゆまの成長により、人は日に~~賢くなりまさるを。

唯此の 持を了解することが出來るであらう。 叉永へに、更に 其 一事を務 新 しい基督教は、 10 < 即ち後に在 層善 聖保羅 きものを供 カジ るもの 熱心に求めて居る子等の為めに、神が善きものを既に供へ給ひ、 を忘れ、前に在るものを望みて進むなり」と言うたポーロの心 へ給ふことを信じて・・・一兄弟よ、我自ら之を取れりと意はす。

九、宗教と理性の支配

第三に、如上の所説から割り出せば、來らんとする宗教は、過去の基督教よりも遙かに理性的であ

う信じて居た間は、勿論其の宗教に進歩も發達もあらう筈がなかつた。只僅かに、其の周圍 言葉もて語り給ふ、といふ樣なことを言ふのは、寧ろ神に對して不敬であらう』と。 予は敢へて言ふ、こは今迄人々のよく考へた思想であり、よく用ひた口吻である。 而して人々が斯 の勢に促

されて、其の主張に反し、餘儀なく多少進んで來たに過ぎないのであ

代と言ふのは、 して今日であるといふこと、及び宗教上のことのみならず、 のである。 乍然此等は凡て變遷して行かねばならぬ。 黄金時代といふのは今日であると言ふ事、世界の宗教 未來永劫、 いつも其の現在であるといふ事が漸次解つて來ると思ふ。 世界に漲ぎる知識と思 他の の黄金時代と言ふの 切の事に關 想の革命は、 しても、 既に變化を開 は 世界の黄金時 過 去 始 非ず した

ハ、靈感と天啓

今や漸く人々に解る様になつて來た。 日程急速な勢で、今日程立派に進步して居た時代は、未だ曾てなかつたのである。是等の大眞理は、 私共の上に働いたことは、未だ曾てなかつた。神自らの示現や、最上最善の一切の眞理の默示も、今 々人類に對して、明瞭 換言すれば、神が今日程其子等の近くに在したことは、過去に於て決してなかつた。神が今日程 な御聲で語り給ふことは、未だ曾てなかつたのである。今日程切實に、靈威が

書かれ、而も一字は一字と廣くなり、深くなる眞理を書いて、永遠に完結しない書物なる天啓。神、 永へに湧き出でゝ、決して淀める水溜とはならない泉なる靈感。天啓、 神の指もて永へに

過去の宗教は何れも、

どこからどこまで、全く善いとか全く悪いとか云ふことが出來ぬ筈である。

はねものを、 日滅法で信べるのでなく。理性の服 且信すべ 来來の宗教は、熱心に信するといふ點に於て、過去の宗教に劣りはしまい。面も其の信す き肥白 信する事を抵むやうになるであらう。 の在るもの或けを信するのである。 を開 いて信する そして益々、慎重なる理性と發達した常識さに適 である。 その信するのは、 信すべ き理 るのは盲 曲 カジ あた

· Jee 多方面目告週的なる宗教

值 恋ら あ 3 8 んごする宗教 0 違 な は とても過去の宗教には見られなかつた程廣大で、普遍的で、寛容で賞賛

寛密であ 似 人の心や多衆人の團體の精神よりも、眞理の一言を以て遙かに大なりとすること、人間 れた者でも、僅か ると考へる文けの理由 とを念頭 の斷片を有つてる式けに過ぎないのだから、私其は皆極めて謙遜にしてよく数を受け容れ、 ill たものどすることが の余 るべきだ に置 は 3 人各 夫れ といふことで、其の考量の中に置くに遠ないと思ふ。 の鰤片 口々其の 出來るし、又同樣の努力に依つて、各人の見方、 と同 のあることをも念頭に置くのである。別言すれば、 ――夫れが非常に貴重な断片であるとしても、何しろ完全な大真理 面の異 時に我々は、此の各々異 る如く性格 も異り、 つた容 事物に對する感想 貌をも、 我々 0) も見方 考方を 來らんごする宗教 努力に依 も違 一致させることが S つて多少 ものだ の中で最 とい は は、 の只だ僅 見真に ルに も優 出來 個

11

るだらうと言ふことになる。

的 るいがい 基督教徒間 は 全く 宗教 で且神の喜 して、解らなければ解らぬ 故に信ず』 であ 過 禁止 去 -る。今日迄の過去に於ては、只信ずるといふ事が、是も宗教的な事であると考へられて來た。 0 けられて居た。『了解する能はずでも我は只信ず』とい 在 II. に關 び給ふものだと信じて居たことさへあ つては、 といふ法外な、狂氣じみた標語さへ、今迄承認されて來て居るに至つては、 金科 してい 王條として承認されて居た。是れでさへ驚くべき寒だのに『我は了解する能はざ 何時 現代の の時代も全つきり異つて居た。 程 特徴とも見るべきは、 證據だとか理屈だとかいふ根據が無ければ無い程、益々夫れが宗教 る 常識 理は で解るやうな理と智さの盛んなる要求であ いつ ふ標語が、今迄殆どいつの時代 も阻止せられ。 后落 せら はて

酮 斯 口にも、信徒の 樣 な思想は、實際今日の基督教の世界に漲つて居る。 口にも『信する』といふ言葉程よく上るものは 殆とどの宗派の禮拜堂に行つて見ても、牧 他にあ るまい。

何が真であり、 あ 30 を磨 科 け、 然 歷 學 又宗教 史、 し之は に重きを置 彩 政治其 ^ 30 何時迄 的 何が偽であるか 73 論究せよ 一く人々の中に行つて見るなら、之に代は ことで 他宗教以外 も高限く à (i) 30 7: 7 0 を驗す爲めに神の與へ給うた唯一絕對の機關は、 13 あ どの思想界に立入つても、 然し虚偽を信 30 あ おい 然るに、 信するど するの 度宗教に入 なら思いことで、 2 いは、 其 るのは \$2 0 ば 勸 行し頭 危 むる所は 一研究する」 ちに 決して宗 理を信 信 议 4 といい 1 0 数四ではな するの 人の理性の 服 と言は を 2 言葉 なら落いことで 開 であ で n 判斷 あ るの 30 前して であ 0 哲

於ても來世に於ても真であるといふことを了解するであらう。 とだといふここを認めるに違ひない。基督の仰せられた、我等の掃ぐものを我等の刈取るは、現世に

罪惡、 赌 動 改良等より、諸々の事業に對して良心を鼓吹すること、政治界に道徳的主義を注 を碎き自由を立て、邪惡を征服して正しきを立て、不德罪惡を倒して、德と正義とを建設せねばなら ぬことを、悟るここが出來るであらう。故に其の宗教は、 ると思ふ。而して現世に天國を建てるには、先づ無智と鬪ひ、無識を築き上げねばならぬこと、束縛 や改革には、何にでも常に大なる興味を有し且援助を爲すに躊躇しない事で思ふ。 博撲滅、人種、階級間の不公平を矯正すること、戰爭廢止の運動、其の他路の世に存 來らんとする宗教は、 苦難の濁流を涸らし、人類、社會、國家を一段と高い道德的生活 昔基督が熱中せられたと同様、単世に天國を建設することに非常に熱心であ 學校と教育、 に引上けやうとする 國法、社會の 入することの 秩序、 在する 目的 二切 の運

來る仕事なら、 雲を押除けて、 來らんとする優良な宗教は、どうしたら自分の靈魂を救ふことが出來るかなどとい 前に 何事でも猶豫せず、直 、述べた樣な實際的の舞臺に下りて來て、他の人や世界全體に利益を與へる事 に取掛らうするに相違ない。 ふ利己的空想の の出

十二、光明と希望の宗教

ものであらう。 將來世に歡迎される優秀な宗教は、從來の多くの宗教よりる遙かに、歡喜ご生氣と希望とに滿ちた

又現在の宗教でも、完全だと自稱する權利のないことが解るであらう。

ずる為に七色の光線を要するのである。 **眞理は光のやうなもので、單一のものでなく、色々複合して出來て居る。光は、完全な自色光を現**

岩石を突破して出て來る幾千萬の岩清水や、細流に初まつて、凡て世の人々の探求、思索などの山腹 かっ より大河となつて流れるのではない。又唯一の源泉からのみ流出するのでもない。思ひ設け四所で、 宗教上の眞理であつても、他の眞理であつても、兎に角眞理といふものは、一の河流である。初め ら静かに流れ下り、各々が、将に成らむとする大河に、何物かを貢献するのである。

現は n 宗教が なか つた程寛容で、普遍的で、博愛で、同情が豊富であるやうに成らざるを得ないと思ふ。 んとして居る宗教は、之を發見するに違ひないと。さうなれば當然、 此の眞理を、 真に發見することが出來れば上乘である。然かし予は確か 過去に於ては殆ど考 に信ず るの 早晚 世に

12

・一、現世を改造すべき宗教

大に推奨するであらう。乍然、來世の為に備ふべき真の道は、今日此の世に於て正しい生活を營むこ 思想を輕 0) 敎 世界に活動するやうなことがあまり無くなるであらう。然し此の新しい宗教が、力あ は過去 更に進 の宗教 視するとい んで言へば、來らんとする優良な宗教は、 に比して、遙かに多く實社會に活動するでからう。而して實社會を離 、ふ意味では決してない。築ろ却で此の偉大なる信仰を、其の最も大切な置さして 過去の ものよりも遙かに實際的であらう。 n る不滅の大 た空想。 夢想

で、一談宣言言の宗教

付ての 12 3 乘 Ž 尙 3 とで 近 核 代 1-を好 思 あ 看 るの 逃 想 で まな 此 てなら 他 () 0 宗 0 で ーは、 あ 敎 D 3 は 8 ううつ 此等 眞理 つの _ のことに關 に對 ことは、 0) 馬 L て放逸 さは 將來 L て既 不真 0) は近 優良 に時世 面 代の な宗教、 目 なも 後 科 學公 0) は、 れとなって、 T 细 言行 は 識 な 1. 0) ___ 致の 推 0 もう薬でな 一段する 又具 E 直 理 と迷 聖 な宗教 書 17 信 宗教 n 6 0 ばなら 頭 神に 0 馬

中

世

紀

時

代

舊思

想

のことで

あ

自ら 上で 1 n 3. 樣 用 な 72 斯 な事は、 に基 思 2 カジ 0 之を拒 想を説 陷 樣 ることを避けるであらう。又、今日 因 な新 n L す る様な 同 むさい ない 350 る 時 な宗教は、 に給 純 であらう。又、 今朝は合理 10 2 酷 S 世 12 な神 ことは 紀 人々が古い思想を發表する言葉だと思ひ込んで居る言葉を、 L 75 學 0 説 しま 10 的な説教をするかと だら 醴 0 拜式 50 所 日 50 論 曜 叉。 は を 教 叉 歌 行 增 子が は 1-の説教に於て近代思 は自由 純 73 た讃美 近 11-1 て 頃 111 思へば、 な思想い あら 紀 聞 的 歌 た様な、 18 U) 說 次の 説教をするかと思へば、次の 飲 唱は こしな 想か 日 氣持 曜 和 受け には ば がらい な 0 不合 3 容礼 t 40 とい 理極まる説 方に於て 偏 H S 6 曜 學校 板 75 ば 45 强て新し 記数をす は 3 有 日 59.0 H 3 祈 曜 益 には 111: 稿 0 紀 苦 說 3 會 境に 敎 の席 5 囚は iiih to

常に如何なる場合にも言 來 0 き宗教 は、 其 0 主 ふであ 張 から らうう 徹 底し 説教に於て宣言する所。 て居 7 寛容で、 誠質で 是れを讃美歌に於ても。 à るだらう。 0 場

世觀

を有

つ宗教

カゞ

陰氣な氣分に閉

され

3

0

は

何

處

1-

不

思議

カジ

あ

らう

カコ

所に依れば、 も人 滅亡してしまふと言ふことである。 力 類の大多數は r ヴィン 人類歴史の初めに 派だとか。 永遠に滅亡してしまふと云 叉は彼 於て、 の所謂 そこで少數 正統派 人の考の と称する種 及 0) S 者の 3: 0) 限り で ð 滅亡を数 0) るの 々の宗派は、 最も 斯 S かっ 寫 3 恐ろしい -111-め 失望の宗 界觀 大災厄 過 の計 去將來 效 であ 盡 カジ 起 カジ 30 に亘 案 つて 共 3 3 斯 n 全 0) 720 711-敎 カコ る人 アが 2 m 3

從 1 つて希 よらず 望 斯 に満 h ら率に、 な 怖 7 る樂し L 人類 いもの b 0 旦が、 沒落、 を造る神 人間 世 界 は 0 0) 心 終に 破 0 中 暗 無限 1-夜 明け 0 0 初 夢と消え 苦 痛 め て來 とい 12 ふ襟 て行つて、 0 ない 7 あ 20 暗 4 黑な怖 物 0 真 3 相 が確然さ見え、 い悪夢や、 叉何

720 全世 や恐怖では めて にして無窮 斯 居 の様 宗教 なく、 史 前 の計畫が漸次進造して行くことである。 0 は、 聖 人類 正義と公平と愛とであ 05 悲し み業は決して破滅 の神 5 ものか 聖な教育の ら喜ばし 歷 しない。此 6 更に v もの 且 外 一神の なら らに、苦い 0 子等 世 私共は今や此等のことをだんして解し初 ぬ。又私共 は 神 の進歩と幸 の家 もの 0 かっ が墳墓の彼岸 ら甘 一部分であ 福 0) 5 爲に、 もの に に期待 30 神 人は神 泣聲 の企て給 し得 かっ ら歌 るもの 0 子で うたい に變り初 のめて來 は あ 復讐 14

斯 うい 切の生活に勇氣と力とを充たし、墳墓に永遠の美しい希望の虹を張る宗教でなくてならうか 世界 72 美を見、これを築 る信仰を中心とする將來 む宗教 の宗教は、 子供等 光明 は 喜び、 と歌 青年 語に 滿 12 歌迎 ちた宗教 老人は慰安を見 でなくてなら 出す宗 眼

を見た場合には、どんな人にでも解る言葉で、其の事質をありのまゝに宣言するに違ない。 過 敎 若しその で 去の 信じ は決して。心を隱すことや遁辞を勸めない。夫れは決して傷りの旗を掲げまい。若しそれが、今ま 神 T 宗教 學 居た教義が、 說 かず を超越するやうに 真 理 時世 一の新 後れのものだと解れ しい大星 なつた時 座 から は、 地 不 線 過去 ば 上に昇り、 の旗を投げ棄てゝ、一 之を止 天空に、 めて棄てゝしまふであらう。 新しい煌々た 層真なる旗を掲げるであらう。 る光を放つて輝くの 若しそ

十五、 層深き宗教

大に意を用ふる宗教であると思ふ。それで教派などにはあまり心を勞さない 8 深遠な宗教であると思ふ。外面的の、餘り大切でない事柄にはかまはずに、その內容 尚 一言したい。而して此の點は最も大切などころである。近きつゝある宗敎は、過去のものより ので 30 の急所には、

で つた ずるに至 誠實 體教 0) 6 一派などいふものはどこから起つた C あ るとい あ 30 3 今假 とすれ ふことが らに ば、 解 基督教 彼等 3 であら は殆ど皆相 0) 各派 カン のか、是は大體に於て、宗教上至つてつまら ら、各々基の代表者を出 致して、真に一層深い、 したとせよ。若し そして一層大切な多くの事を信 彼等が 82 實 E 起

0) 全力を盡して對抗する。是れ結局、神學說上の敵を多く拵へるに過ぎないのである。 まうと努力しない。 一般の人々は、真に其の生命 そして見戯に類したこと、少くとも比較的 1 觸 るゝ所の偉大なもの、宗教の中心に横は 重 要でない ことに る所の大切 75 るとい なもの 初

曜學校でも、 於てる、 禮拜の儀式に於ても同じく宣言するであらう。 其他如何なる處に於ても激ふるであらう。 説教の擅上より数ふる所は、 前庭會

でも、

H

十四、新しき酒を盛る新しき革袋

い酒を さい 箇條を有する敎會に屬し、そして之を助けるさいふことが極道常のことゝなつてしまうであらう。|而 して牧師 り、之を援助したりすることを拒むといふ意味である。さうしなければ、人々が、自分の信 43 まへのことになつて來る文けである。 革袋に入れ 斯の宗教が、 得たなら、 も信徒も、 夫れを覆ひ隱すやうなことは決してしないであらう。 るであらう。 若し真理に付て新しい見解を得たならば、 長く保つやうに、 その墓の心を隠し立てして、信仰告白をするといふこごが、始末に了へぬ程當 といふのは、將來の良い基督数は、時世後れとなつた信仰箇條を採用した 又誰も惑はされることのないやうに、 之を明瞭 基督が教へ給うた様に、 に發表するであらう。そして古く 之を入れるに適當な、新し じない信仰 若し新し b

ないか。斯んな精神的、道德的不誠實が、どんな結果を生み出すかを思へ。人若し宗教に於て、放逸 ではないか。表面上信ずるさいふことを、實際心の中では信仰して居ないと言ふ自覺に外ならぬでは で不眞面目 抑 も真の心を隱すといふことは何であらう。心を偽るのではあるまいか。之れ不誠實な行為の自覺 ならば、 我々は一體何處に誠實で正直とを求め れば宜いの か。

良

い宗教の來る時、そは何事に於ても、正直で誠實であることを、

私共は信じて疑はない。其の宗

____ 16 ____

敎 耻 0 人格 辱とする様 上の信仰や、宗教的生命の水を汲み出さねばならぬ。斯くして一般の世人が、基督教の信 にと生涯 とに基 になるであらう。其時こそ、最も善良にして誠實な人が、 いて 評價せすして、それよりも更に外面的の ものに依つて云為するとい 本當に最良の基督教徒 仰を、 であ 3

められ るであらう。

慶賀すべ 0 世 うた金言や、 つて、今まで久 を祝 人々は、 予は繰返して言 福 き理 し且 その近 主の祈 救 由 かず しく顧られ S 20 くことを怖 為 あ めに、 るで b 優良なる宗教 P は 近代の 75 神 73 か 2 n 40 人と かっ 戰 0 時 72 明 其 13 世に適合するやうにせらるゝに過ぎない のが、再び人々の前 に對する偉 ٠ ١ 必ず 0 新 然し 此 L 世 5 宗敎 E な 大なる、 來 カジ ら何 るべく、 はどんなものとなるであらうか。 永への愛の號合者た に持ち出され、新しき生命を與 8 恐 否既 n 戰 に其 < 要は 0) 途上 ない のであ る基督教とな 7 12 在るの は な る。 4 只基 かっ であるさ。 へられ、 る女け 却 督 0) つて大に 教 であ 給

カジ を一掃 成長 悉く其の窓を開け放 して大きくなり、 過去 の暗黑時代がその信 新しい宗教は 且今日 つ所の宗教なのである。 我 の活社會の必要に適するやうに 々の祖先の懐かしい古い信仰に外ならぬけれど、 仰に固着せしめた特廢せ 是れこそ真に世界の要求する宗教であつて、 る神學説 な **b** 其 を取除 F. 尚 ほ けた丈け 成長 發 只その で 達 す 畢 不 3 神 純 此 光 0

外に何 も要求する 所 カラ 無 2 0) T あ る

處が、失望とか疑さか 此 新しい宗教 0 來 恐 3 れどか言ふ言葉は、 0) カジ 餘 5 遲 6-3 5 2 基督教徒、 0) で、我 R の中 殊に自由基督教徒の用ふべき言葉の に誰 か失望して居る人が あ りは 中にはな

にの る説 兄弟關 事 係 に結 3 位 係に 腐 即 於てか我 層 心 ら是等 集まり する 體 重 一要にし 0 架空說 標 R は、 も基 睦 15 て中 カジ む やうな方法 此 出 督 神 H 救 來 信 心 學 は 徒 0 的 ると確信する。 道。 說 な な事 0 上 生 つて了 命 贖 を 0 1 罪 思 進 敵意を癒し、 1 必要な った 0 3 ふ者であ 入 說 け ることであ 聖書や 3 れども、 交涉 30 善良 其の なく、 法 十中八九までは、 30 な 王 方法 人々 其 儀式 罪に 他 カジ 2 斯 は 其 とか 偶 かっ 0) 發 3 從 論 的 種 で皮 而豐 來 戰 類 近き野茶に於て、 拜 j 0 0 武器を収 b 0 相 3 5 形 的 0 1-江 T 決 2 層 8 何等 カン -誤 洗 力了 相 又一大兄弟 b 0 層 な な 共 晚餐 合 4t, 一大 問 理

進步と成功の 確信

18

關

合すること

其 優 良 0 我 內內容 17 宗教 0 確 カラ ٤ 信 深遠だからで に 依れば、 Z 0) か。 今や世 あ 濫 斯 界は の宗教は、 斯 の教會の方へ、斯の優良なる基督教の方へと遊んで居る。 從來のものに比して其の見解が廣く、其の精神が賴母 何故

解 以 0) て質 基 0 進 步 7 督 地 來 0 教 表徵 72 0 12 中 行 幸に は かっ ひ 給 5 旣 8 取 に各方面 Š 下ら TZ 去 6 純 粹 D 和 に表 ば 合言葉は 0 な 基 は 5 督 n 教 D ことが カラ ナご て居る。 h 充 (少くなつて來 未 分 な重 分裂を來すも 72 みと力ごを以て我 澤 Part of the Part o あ 720 0) 30 はい 然 餘 L 尚 b 々に來 重 ほ 要 基 な る前 督 E カジ 0 激 で 不純 な 5 にな H ح 其 0 0) た從 牛 涯 8 來

我 R は 尙 ほ 層深 我 々の思想の井戸を探らねば ならね。 そして尚は一層深 がい底か 5 我 ス々の宗



鬻 同 隱 遁 性 胞 片 3 3 國 0) 0 0 0 > > 狂 ÚI. 四 バ 1-1-を 沙 百 何 何 1 萬 示 流 を 0 0 す L 爭 蔭 地 人 T ひ あ かっ 30 あ 3

斷 凄 錦 冬 也 繡 ル 膓 L 場 王 F, 0 0 0 0 0 築 思 ٢ 夢 威 P B 嚴 1= カジ 3 0 聞 5 誇 0 惱 拂 は を 3 L 8 吹 じ 思 T 3 < 30 め 多

セルビヤの滅亡を悼みて

土井

晚

翠

い筈である。

意に任せまつるのみである。暗夜は永遠に續きはしない。見よ! 我々は只、事に忠實であり、我等の當に為すべきことを爲し、常に前進して其の結果は、只神の御 夜は既に明け初めて居るではない

清水は將に流れ出で、光りは輝き初めんとす。

か。

温暖はいよよ擴ごり行き、花は微笑むばかりにて、夜の暗黑は薄らぎ初めぬ。からの

思想の人よ、活働の人よ、先立行きて道知るべせよ。

實に、先立ち行きて道知るべをしなければならぬ。これぞ我等の爲すべきことである。 他は皆神の

爲し給ふごころなれど。 舌よ、筆よ、力を添へよ、夜明けの蒜を引く爲に。

誠實なる人の希望よ、そを助けよ。紙よ、文字よ、

思想の人よ、活動の人よ。先立ち行きて先導せよ。

そを助けょ、今其の期の熟したれば、我等の心をなゆるめそ、不真面目の心とななりそ。

(平山六之助譯)



纎 MI. 0

維 0

h

壯 0

嚴 層

0

樂 な な

1-

合

は Z

7

奏なせ

沙 大

0 軍

流

3 ٤

b

小 大

宇 宇 は は

宙 宙

0

#

1-

片

0)

調

忽 芽ッ行 脉 先 偶 然 0 然 E < あ b 生 か 化 13 は 感 あ 3 し 12 あ b 7 思 ~3 宿 b 見 想 かっ 業 ٤ 知 è 3 3 0 かつ 行 あ 動 片 爲 h 3 12 8 0 石。 0 B è 0) 0 生

物

生 あ b 3 脉 摶

胞

望

は

無

數

0 あ

列 b

35 1-

T

は

呼

魂たなし

はい

逐

12

0

H 花



永 星 窓 72 力 東 遠 は 押 でか5 10 73 海 5 皆 世 3 0 0 ば 萬 輔 3 心 \$ 秘 72 天 0 0 里 夜 0 國 0 0 > 05 謎 3 萬 华 0 72 軍 0 あ 75 2 叫 20 2 12

現 先 胍 慘 ð 昨 哀 === 實 1= ッ 悽 H R N w > 0 大 は は 0) 0 0) シ グ 野 冥 悲 靈 玉 花 夜 0 ラ 府 樓 今 末 半 空 1 劇 0 0 雲 0 光 今 日 0 1. 5 白 恨 叫 鏧 月 3 0 は は 敗 荆 晦 黑 3 前 音 72 壞 棘 U 1-か 見 30



末高 雪 魔 王 北 今 流 泥 金 恒 眉 瀾 世 山 王 間 城 歐 な 千 風 12 3 河 年 今 は 魔 0 遁 0 ほ 3 3 8 0 0 混 震 渴 紫 流 嶺 軍 白 3 才 前 2 長 高 毫 1 仰 0 3 衣 濁 長 0 > 影 大 B Ł 0 3 カコ か 長 王 7.7 0 ~ 朱 波 は 3 5 8 < 子 ラ 胸 獅 1= 何 ず 餘 す 照 0 か 殿 12 1-子 香 か 2 す 2 狂 韻 n 玉 5 吼 8 あ 伏 T 貌 幢 かっ 10 吐 5 U 1-ろ 30 70 幡 T U. 3 T かる。

光

五

天

0

夜

半

星

S

か

3

法



化 石 せよき 靜 夜 は 半 す 1= ~ 語 T 3 冝 L

新

0

膯

1-

姿

智

荅

多

降 「使 中 恒 第 奏 再 耳 目 元 宇 其 しま 星 b 1-び. 1-1-子 宙 化 > 命 一大 惑 混 T 0 は は 12 1= Z 石 C 星 百 使 紛 失 統 碎 2 返 及 能 72 無 千 命 5 T n 世 ば ~ < h U 新岩第 0) 世 再 to 虚 觸 行 3 四 10 演 御 0 界 0 U 時 容 1= 大 分 < は じ了 命が群 膝 彼 B 0 1-は 1-子 變 何 1 + 0 到 散 1-消 返 1-化 時 歸 b 1-6 C え 0 汳 n b h 大 Ł



自 基 督、 教の根

安

部

磯

雄

5 3 0 あ かっ 見 間 3 先づ第一に宗教とは何であるか。勿論これには六ケしい議論の有ることであるが、 世界には色ん 傳 カジ て宗教は は 私共は決して自分の宗教のみが本當であつて、 つて來た 君 のは不完全だなどと云ふ者ではな 皆真理 な種 0 は何 を含 類 の宗教が 0 んでゐ 為 8 6 るので 有る。 あ 3 か。 à る。 然らば其の中に立つて我々の宗教は如何なる意義を持つてゐ 何 佛教 5 n も其 1 共はどの宗教にも多少 の中 せよ。 外のは皆間違ひであ に善 回教 5 1 所 カジ せよ、 有つたか の飯 儒 るとか 教 點は らで 1-せ 発 あ よ 30 \$2 僕の宗教は完 今日 其はまあ其とし な いかい まで 大體 數 全で カコ

ると云つた 嘗てエ カジ 1 ン 私は \mathcal{V} カゞ これ 人間 1 の行 ついて ふべ き道 way は元來人間や牛馬 一つの喩を設けやう。 などの通る道路 road を意味する 0) 7 あ

今假に東京から神戸へ行くとすると、 色んな方法が ある。 昔のやうに五十三次の景色を賞でなが



Ŧi. 最 大 あ 遁 靑 後 な n 春 天 > L 0 0 3 八 0 偉 哲 + 跡 王 む 靈 人 0 1-子 カコ 全 齡 王 L F カコ < 歐 を 城 w 0 過 T 30 千 ス ŀ 3 傚 年 ろっ b,

豪 八 雲 落 起 鼍 ほ 足 目 ナご + は 12 奢 切 霧 日 113 め L 0 0 最 塵 青 な 0 h 8 生 後 土 天 3 靑 30 3 7 h 春 逃 命 ٤ づ 3 0) 0) 0) L 半 3 15 終 T は 光 低 高 ·醒 斷 1= 照 3 £ 起 T 0 > 0) 孤 近 5 覺 to 際 L 1 を 得 め 壯 影 了 < 仰 這 1= T す 年 0 3 ず h 開 0 偉 35 L 7 P B

就

7

話

して見やう。

を傳 聖書を讀 斯 く宗教には多くの種 6 あ るも 我 る。 んでどうしても分ら R 0 これ 霊は は 聖 書に就 書で 8 私 あ カジ 前 て考 類 3 1 בל が有るとすれ 5 ~ n 所が 度話 ねば 我 なら 有 R L カジ る寫 たことが ば、 如 87 何 めに心を苦し 我々 勿論宗教は に之を見 有 0 つて決 此 の宗 3 めて 必ずし L カコ b 7 敎 ある 新 图 如 何 L B 體 典籍 人 Vo な 0 が有 る考 事 態 度 で で るだ は は は ^ で之を な な 如 らうと思 何 3 5 から カラ 讀 8 今 我 to 2 日 カコ R カコ 2 に宗 尚

問 め 7 に就 體 あ 書 2 ては随 72 0 全部を事實 私は 分心を苦 舊 約よりも新約殊に四 とし しめた。 て信じやうとするのが それ で私 福音書に就 かず 米國や 獨逸に留學し 間 違 て三年間程研究を積んだのであ つてゐる。 72 0 私 は \$ 主として此 此 の經驗 か 有 0 るが、 疑問 るが、 を解 聖 其 の大體 决 書 する 0)

結 果 は 次 0 如 くであ う 720

獨逸 先生 30 本 此 外 などの學者 0 無論 四 史 0 冊 日 0 材 本 0 一人の手 料 外 本 の説 とな は 史を見て 7 リス 1-0 72 成 よると、 トの も先づ つた 0 6 死 あ のでは 當時 卷頭 30 後早くて四 なく、 然 1-リス 3 彼 から ば 叉何等 參考 + 丰 0 年、 IJ 教 ス 1-遲 7 供 カコ いのは した 0 を集め 0 材 傳 數百 記 料 に因 たロロ 五 0 十年六十 材 卷 0 料 0 争 書物 たことも は ヤーな 何 年 處 0 名 0 るもの より 後 明 カジ 借 舉 かっ 1-カジ げ Ti 初 h 有つて、之がマタイ、 來 あ 8 7 7 0 あ 3 12 30 書 例 か 0 T 此 n \wedge 等 ば 12 彼 B 3 0 かっ 0 本 0 7 カラ Ш

29

1=

丰

ŀ

5 諸

君

0

+

は

敎 2

0

思

想

今日 徒步 して 65 やるやうに東 0 高 の宗 我 じ目 北陸道を迂廻することも出 旅行をするのも面白 一つで 倘 K 教家 なも 0 的 は 云 1= 不海道線 ので ふ所 は 向 な 何 つて進 故 0 其と同 30 に論爭攻撃を事とするのであらう。卑しい商賣根性で之に從事するには宗教は餘 信仰や救は で行く、 む ので からう。 じやうに人間 それ あ 3 來 見形や色こそ違 る結構 か 又今時 n 5 ば、 横濱 基督教のみが真の宗教であ 0 で なら丁度景 かなすべ あ 30 から流 き道、 其の へ、佛教にも立派に備はつてゐるのでは 色が佳 船 で向 他 我 同 じ神 いから R ふまで直 0 信ずべ 戶 中仙 と云 ると云ふやうな事 行 き宗教に る目 道 することも の鐵 的 路 地 で程 も澤山 に達す 出 來 3: る。 は 0) 3 0) 到 種 Š あるまいか。 良 底 類 云は 通 カジ 有 道 0 つ は から 决

例 へば金 全て カジ の宗教は皆真理を含んでゐる。然し我々は次の質問を發してもよいであらう。多くの宗教の中 持 我 々に取 0 御 札 當に汽車に乘る方が、費用も少くて都合が好いやうなものであ 博士スター氏が人力車で膝栗毛を騙らうとするのも大層面白 つて最も便別であるか。而して之に答へることも亦決して惡くはあるまいと思 いことに違ひないが、 30

28

我

々ならば先づ順

h

では 野 n 狐 香便利なものを取 頭 禪 カジ 决 してない。 になつて何にもならないやうな事になる 良くて多少學問のある人には禪をやることも それも間違ひではない。 我 K るのである。 の宗教 8 我も彼も結局は我々の目的としてゐる所に達するのであ つの道 と云つて で あ 番我 3 ので か 5 なに 確か あ 外の 便利 る。 1-我 功のある事であらうが、 道を取 な 5 R のが は 3 種 方 必ず 々なる點 カジ 面白 しも より宗教 40 2 番優 下手 Z n を比 A 12 カジ B 1-30 較 あ と云 研究 3 3 かっ も知 る冪

うで

あ

進め 時 を知 +" 3 んで良い め かっ に於ては カコ て ヤ らは 態 の人々 度 ら今日 つに 胚 は 和 額緣 と思 聖 ばな ら出 大 濁した水が流れて來て一つの河となり、果ては洋々たる大海に注ぐが如きものであつて、 一體以 崇 品 書 にこそ誤傳誇張 3 Š 福 拜 分 に關 たキリス 所だ 音書 Ŀ -13-D の通 0 5 す 叉或 3 け取つたらよ かず 其 n 研 出 トの りで 72 0 一來て ___ 究 3 かっ 人 あ と云ふ参考に供するやうにする方が を以て から 傳記奇蹟等が合して福 る。 充分 ゐると思 は も有 丰 行に行 リス 5 丰 n y では H à は F ス 身 な かっ F 0 n 5 0 敎 いかと云ふが 0 真髓 訓 繪 間違ひが 傳 る 其 記 を窺 カコ 0 音書となった 5 共に 物 ひ、 1-至つて 寧ろ 是 起るのである。で、或る人は、 我々 其 n 我 の二を以 篇天 は絶 良くは は之に同意すると共に百尺竿頭 のである。 R のやうに聖 來 對 0 7 に信 あるまい 詩 然るにこれを知 單 を置 0 1 書 み カコ で へべ 多 丰 0 ŋ 其 あ さる 我 3 ス 0) と云 R 成 1 0 は 立 なに聖 らな 聖 で 斯 0 à 書 事 カジ < 情 書 1= る 今日 北 で初 對 も當 より U

=

1-10 p 觀 次 5 1 す 3 述 か。 べることは 8 神 を信ずることが 之も 議 論 何 をす と申 n 出 ば果 來 せうか ると思ふ。 l 0 無 他 0 いことで 教會で云 私は嘗て岸本君 あ 3 ば信 カラ 私共 仰箇 の話 は 條 を聞 これ C あります。 5 1 T 8 人 面 白 4 各 第 b と思 R 1-0 0 考 我 72 K B は 5 2 神 n 3 如 は T 如 斯

體神様など云ふ者は人の考へやうであ 30 神はこんな者だと思ふ人には其 のやうな神 カジ 有

多い 其 ゥ は ナ 3 の質問を發するやうになつた。 0) ら、勢ひ孔子の教訓の精髓 8 7 止 亦斯くの 死後遅くも十年 4 = きょ み難き 0 樹 IJ V 其信 で の人 ス jν 0 下 70 傳 カ三傳の材料になつたのだと云ふ。例へば孔子が弟子に道を傳へると、其の弟子が此 あ 如く、 知識慾著しくは好奇心は何物かによつて滿足せられね IJ 1= の子適い 仰 る為 關 に培 ス 坳 þ 語 す 今日 3 つた 艻 0) 3 めに之を記録するのであるが、 て半 傳 傳 何 至十五年以内に、 等 のであらう。斯くてキリス のマタイ傅中の 記 說 世紀、 として編纂され 0 0 のみを書いて手を省くやうにする。 記 みで 錄 彼は如何なる家に生れ あ も無 彼の使徒も亦多く其の師の後を追つて了つた。 つた。 いつ Щ キリス この たのである 有る 上の垂訓のやうなものであつたと思 **ト**直 もの 傳 說 それ は ŀ 傳 カジ カコ 殆 甲村乙落の の敷訓 の弟子の在世 5 には 72 んど狂熱 か。彼は 其の中には隨分と荒誕信ずべか 成る可く簡單にして要を得るやうにする に感ずれ 斯くて論語 放 的 改老がい 如何 中に書 にキリストを崇 ばならなかつた。けれども其の は感ずる程、人々 なる生涯を送 夕べ落日の光を浴 か が出來たので れ、諸 はれる。 而して「ロギャ」以 方の 拜する人 つたか。 これ は彼 人々 あるのロギヤ の手 R は びてオ らざる所も 彼に 就 リス の教訓 ょ て多く 時は 外に 關 傳 つて リー す は ŀ かっ

30

て聖書 然し 全體 此 0) 0) 點 價 カゞ 考 值 多 疑 を要する つて はなな 所 3 なの な で あ るの 聖書 には以上のやうに荒唐無稽な部分が あるが、 之を以

記を書いた部分は額縁である。 今之を て見る なら ば、 聖書 又も一つの 0 P 丰 ŋ 例を示せば、 ス ŀ 0) 敷 訓 を録 方から清冽玉の如き水が流れて來、 L た所 は繪 7 あ うて、 其 0 他 牛 リス 叉一方 þ 0 傳

兼て 次 お は 話 基 督 8 敵 0 叉此 A 生 0 觀 敎 言ひ 壇 0 壁に 換 n B ば、 銘 とな 人生に 0 T 對す 3 3 る基 M 6 T 督 極 敎 の立 め T 一場と云 朋 除 T ふものに就 あ h 3 7 10 南 るの これ は

て第 之は少しく でなけれ 人は自ら の人を立 第 1-は ば 神 基督教國 派 は 本當 人皆 是天 我 な宗教家 田 兄弟 父の 引 に宗教心に富める人とは云はれ などく云ひ乍ら、 水のやうで 思想 是云 と云ふことに つて好 で あ あ る。 るが、 5 3 な 天 隨 思 3 地 分と此 實際我 态 0) 0) 大 で 生 而 南 0 々か して此 命 る。 ない 人種 は 5 全 B と思ふっ し人眞 立てを創 0 的 して人種 僻 思 見を以てる 想 を最 に此 造 成 的 門 僻 8 の思想を 强 する 見などは る。 る言 萬 然し此 持 物 0 少し 顯 つて 0) 源 L の解 も持 72 3 T あ 0 3 見 は な 3 0 父で 0 7 基 6 少し 2 ば 督 な 效 あ 3 () () 7 我 る 無 南 R 從 30 は 西 5 其 0

基 出 新 彼 督 來 平 0 外 氏 新 國 教 3 徒 0 1= 平 人 の事 0 良 T 對 使命で の保 する あ 3 は 彼等 、暫く扨 護 0 は 此 者を以て任ずる大江卓氏の話などを聞くこ、 あ 0) O) P 迫 3 て置き、日本人同志で此の種の僻見を持つてゐる人の有るのは まい 害。 うな 或ひ 時 か 0 1= は少くも虐待 厭 く迄大膽に基督教 0 如何に の人類同胞の精神を鼓吹するの 大なる悲劇 我が國 を演 0) 軍 C 人や役人の階 5 うある 嘆すべ カコ を知 級には、 は蓋し、 きて ること あ 我 所謂 30 K カジ

B る 神 カゞ る 神 人 は を 2 造 取 んなものでは る つて 0 は、 た カコ 少くとも 寸 ない 副 斯様な者だと云ふ人には、 别 カジ 神 つか カジ 無 なく 5 やうに見え な 30 る。 此 又其のやうな神が有る。 0 點 かっ ら考 て見ると、 更に神 浦市 カジ が無無 人を造 3 0) 72 かっ T

單 力を る。 膓 は 1= 無 12 此 は 紅 Ç 1= 1 そこで 泌み 指 况 白 ので 結 0 7 字 才 0) 論 h を云 衣を 我 宙 B あ ることであらう。 7 ヌ る。 々は 云 此 0 0) 裝 # 小 2 0) ば我 決 者 天 屋 ふので 又今こそ長き冬の 1= を見 潜 T 地 L あ む 萬 R T は宇宙 他 生 有 あ る てさ 命 をやっ 人 な 30 仰げは 力を神 3 ~ 0) ば、 我 の 浦 實 彼 生命を信 觀 K 彼等 と名 に は 眠 to 0 幾萬の星斗 或 烟突 宇 りに 嘲笑 3 宙 0 づ 信 け 天 は U 0 落ちて ずるので 文學者 たり 仰 rh 何 3 天 1= は 0 0 ъ 我 で 3 1-12 流 連り、 自分 等 あ は字 n る あ 8 る。 と共 1-カジ 3 3 ъ 0 宙 建 大生命 順を追ひ序 神 佛 通 多 てら 今や初冬の風寒く、 陽 觀 する 数 ば 就 來 を他人に 0 是五 大晋 力を信 佛 復 此 0 つて 神道 築で 0 春とならば、 12 恣 從つて運行 强ひるやうなことは ぜざるを得 3 3 は 0 天 3 好 何 と云 霜夜 之 放 5 御 3 10 TH 開 此 i 1 思 な 0 て四 凍 主 72 カコ 6 0 ふ 前原 木 程 で 3 n 時 鐘 は 彼 カジ で T 泺 3 な 0 JE 0 1 あ 草 色 香 な 3 かっ 3 5 皆 0 か 如 3 カコ とかが 生 何 我 2 樣 簡 知 我 命 R

る 活 命 好 人 動 力 カジ 0 天 生 卽 命 ひ、 地 ち神 萬 力 是云 と云 有 を信 12 遍 2 ふやうな氣 じ、 滿 0 は 宗教を有すると考 體どん 我 分 12 1= 0 なる な A 格 B P 0) 0) 震の カジ か 市市 る 中 有 ž 0 信 1-形 カジ 4" な 我 3 4 专 7 12 極 0 \vec{o} 3 致で かっ 神觀で る 無形 あ 30 我 75 あ B 12 5 斯 è 0) くの 亦 かっ 又軈 Mi 我 如 0) R 大 て宗教觀 き気分 1-生 13 命 分 を味 0 5 H 7 な あ 溶 ると云 唯 V 0 込 此 出 h 0 牛 亦 T

b

六

する必要は 便利なものでは から次は教會と云ふことである。一體團體を作ることは事業をやつたり、修養をしたりするに あるが、毎日曜に教育に出席せぬからと云つて、何も其の人は敦はれないと早合點を

宗教の押賣をするやうになる。私共の考へを云へば宗教は押賣すべきものでなく。寧ろ彼から我に求 めて來るやうにならねばならないと思ふ。 否、或る點から見ると数會を建てゝ今のやうにやると、どうしても人を集めることが主になつて、

ぞ怠慢なる、 普者能澤蕃山、

中江藤樹の門前に

眠 今の道を激 ふる者何ぞ自卑するの甚だしきや。 し、毅然として去らなかつたではないか。今の道を決むる者何

我 々の教會は決して多くの人を無理に引き入れやうごはしない。

L

それは「汝等常に耐るべし」と聖書にもある道り、 と思つたからである。 私 次に基督教の儀式に就て考へを述べたいと思ふが、これは自ら所りと洗禮とに分れ は前には長い間食事や癡床に入る際に祈りをしたが今から十四五 我々は常に祈つてむるやうな心持で住きてるればよ 年か二十年前 にやめ て了つた。

tion 古 ラ 力では な人間 オ カゞ by E ば 밢 = 其 1 にな は 來 なくて自力で character 救 な は 10 精 0 V ることで E 神 傪 關 斯 0) を見たら、 を信 する 生活 か る人が あ あ 我 る。 C ず 3 るの あ R 卽 つて、 0 所 例 H ち地 刨 考 謂 n ^ ば美 ども 猫 ち へを述 現世に於て 此 獄 1-我 小 術 1-に送られ 判と云 0 書 R ~" て見 素 は 5 門 養 7 精神 ようつ 0 ふやう たる人であつて、 あ 1 御 少し 3 的 救は も無 訓練を積まない人は其 な譯 3 目 我 78 福 7 n 5 R 侧门 の濟 人が、ヴァテ ると一云 72 必ずしも天國 国品性の もならない。 10 V Si は現 で充分とは 1 6 在 0 à 0 71 罪 飛 高 30 カコ 2 なに ら距 0) 思 尙 換言 法 は かっ な生活を享楽するこ 死後 E ら清 つた所に送られ な 宮に 3 \$2 め られ 其 30 生活有りと ば 我 は 0) 12 他 尚 3

苦し 格卑き人と共に同 らざる 3 むので ー つ 所 であ 例 あ るが あ 30 じ所に行くのであるが、 大工の八公には貸本屋の水戸黄門記 大學の圖 書館には幾十萬窓の書籍 前者は之を天國と思つて樂しる、後者は之を地獄と考へて カジ が有るか 面白 5 と同 ら教育ある人に以 じである。 現世の つては誠 品性 高き人と人 に飲くべ か

0)

7

は

な

け 思 金を 2 或 る人 何 72 故 は め 未來の なれ 72 方 ば カジ こと A 好 間 15 2 は など分る 現 思 世の 2 氣 もの ことば 1-なる か と云 8 カコ b 0 T 考 2 カコ あ ~ る る 知 3 カコ n らで な 兎角、 1 南 カゞ る。 未來 今の・ 中どん を考 られ な悪 いことをしても間 3 X は 考 72 方 から 源 j るだ

所以である。 斯 くて 未 亦 0 生 一活に入る準備 をなさ んがた 8 に品性を高 くするの か。 取りも直さず我 なの 数は

n

3

駄

É

なのだか

5

此の宗教生活さへ立派に行けばそれで好いのであ

るの

信 中 持 仰 0) 斯 (in h K カジ B 3 とが うう物 學 も字 を其 なく 仰 E 7 0 之れ 祈 生 は 0 宙 T 度 何 其 カジ 時 足 却 ときは で あ 3 3 の生命 て信 0 起つて感話をすると、 とすることは 是 る 72 らなく思ふやうに 0 あ 3.0 人 T な 1-3 B は 3 5 を重 仰を と稱 發 是 あ 0 誰 狂 認 それで 3 私 も此 力を信ずることう、それ 棄 L カジ L んずることを欲しない。 3 L カジ 8 7 T n 72 自 できな 感 の精 宗教界 死 青年時代 あ 72 0 崎强 る T 分 h 人 神 は な かっ R だ あ 3 VO カラ つても、 カコ 人 F ら入信の後年を經 3 0) 多く 同 外 3 カゞ 1 H 8 私 遠 i 志 又熱情を 0) で あ 5 行 併 社 は 3 幾 T 0 男女が泣 し自 8 カコ 為 少しも心 カコ 人 の學生で 其氣 0 に表 つ 叉 カコ 一感情 黨 たっ 今日 神 分 要求する傾 かっ ら人類 に化な は ろ 8 經 は まで あつた頃 るに従 Ŀ 衰 到 Vo n 配 0 て悔改 點張 述 カゞ るやうに 底 することは 弱 ること とそ 多 は皆同胞であると考へることが、 0) 其 1= b 向 つて、 如き主 いつ 信 な h カジ 8 0 仰 0 な風 0 非常 リハ るとい あ を續 出 なつて來るのが、 私 72 信 3 な 義 は 人 1-來 は な イ È 1 に依 なるリバ 仰 勿 12 け ので 論 え 3 な つた 110 0 カコ ル 感情 我 3 感情宗教 12 あ n 0 などに 合 風 あ 720 々の信仰 8 0 な でも るが 1 72 的 理 0 か 分子が 的 0 私 18 カジ 真の 對し そし 生 570 祈 N 南 3 カコ ら全 騷 活 去りとて熱情を以 は宗教生活に表 3 加 稿 T 信 其 少く 全體 か。 7 論 會 カジ など 仰の 其 騷 は 然去らうとは 南 カコ 寧ろ 深く心に泌みこ 2 5 時 0 13 の宗教を主 は 發達 つて、 燃えに 非 13 72 n 同 常常 は殆ど 72 何 で 年 情 な A づ はれ 燃えて あ 何だ 3 達 13 Z n 跡 も泣 有 て信 弱 張 せ 0) 0 ね かっ す

丰 然し Ö 時 私は全然前りを廢せよと云ふのではない、 に祈 るのなどは日本の習慣と合はない。凡てこんな小さな事では我々はなるべく日 唯形式の弊に陷ることを避けよと云ふので 本の風 あ 食

時代のやうに嚴密にやる方が好いと思ふ。 入るに當つて、 棚引く夕まぐ 洗 方が 或ひは碧水白 禮を受けることも良い、 よいと思ふ。 n 洗光者 確固不動の大決心を表現する所に意義 玉 一と散 3 ١٧ る激湍 ネ によ 唯之を受けなければ救は の岸 h て清 1= 於て洗 8 られ もし 禮 72 私が請 を授 3 1 け T. が有 12 は れないと云 ス 50 0) 3 3 面影 7 なら 思 0 で 今目 ~ ば二千 ば多摩 ふの à 3 に見えるやうでは は カコ 牟 111 5 間 , の 達 0 我 ひで 其 7-の普 流 12 清 あ は寧ろ之を 浴鏡 るの ない H 洗 w 0 禮 かっ 如 ダ ン き淵 は宗教に 河 1) の 邊 ス ŀ

祈 h 何 洗禮 も我々の身が救は も之を活 崩 する n 2 時 とろ に ふ譯 初 め は無 て大なる意義を有するのであつて、形式的 10 に之をしない

八

的 0) 30 冷靜 最 朋 て見よう。 例 開 後 E へば非常 な H 理智的 て自ら神 めて簡單 或る人は非常に感情 に剣道の修練を積んだ人が、行住座臥全ての時に其の床しい心得を忘れないやうに、我 な人は失望して了ふ。信仰は決してそんな狭いものでは を見たと云ふやうになる。然し若し之のみが信仰の に我 々の信仰は次第に强くなるか、又如何にして此の事を知るかといふことを云 的 であり又神經的であつて、日々に信仰箇條を嚴守し、 發達であると云ふならば、 ない。我 々の考 へはこうであ 果ては 心震 此

5

0

有する 實に英國には制度が惡くとも之を善用し、或ひは全く無くとも、有る以上に事をやる潛勢力を

出來な ず之を善用して政治の舞臺に打 なる名譽心を満足せしめ を得た答を得なかつた。 も少くない。 の工場が誠によく維持されてゐるので、其の工場法を調べに行つた人があるが、 に一致する修養が 发に英國 々運の隆盛 叉英國と雖も投票賣買の惡風が行はれた。 る成金が出ない。 あるので つて出た 点なる理 あ 30 のであ 其故 由 が發見せら 唯立派な人物にして に品格の無い者 30 か \$2 ゝる人物にして後大臣 30 は幾ら金が有つても、 而もひとり貴族のみならず、 年若く けれども不思議と之を悪用 名望の足らない人が として合名を馳 役票を買ふことが 彼は徐 般國 43 11: して単 72 h É を得 要領 民

議員 ウ かっ れば政府の 1 > 3 は多く官僚に反對であるが、 ルヘルム二世は或る方面に於て非難 方獨 なすまゝ任せる。これ 一逸に於ては立憲政治は立派に行はれてゐない。大臣は議會から反對されても辞職しない。 かうる貴族が取り窓いてゐるのであるから、 は貴族が偉 其の弊害は は有るが、近代に於ける最大なる人物たることに異論 いからである。 ありさうでない。彼等は賄賂を取らないが 普露西では十代ほど名君が續いた。 學問でも軍人としても平民は頭も出 いよくしとな は せな

筈である。 體貴族 例へば徳川家達公が第一師團長となつたらどうであらう。 は社會的名望が有るから、 此の E 更に 實際 の手 腕 カジ 有 n ば 彼に其の名望に伴ふ軍事上の手 非常な る功をなすことが 死る



國際關係の調和力としての宗教

作

宗教の努力にも拘らず思ふやうに平和の時代を迎えないのは、社會の缺陷に由るか、宗教の缺陷 のた るかと云ふことであ 此 の問題は二つの方面かち見なければならね。一つは宗教がこれまで國際關係の調節、 めに如何 なる貢献をなしたかと云ふ點から、宗敵の功德を数へ上げることである。 次は 世 界の に由 まで 平和

國蜱廢の重要なる素因をなしてゐる。今獨英の斯くも盛んなのは何によるか。我々ばどうしても其の であつた。然し乍ら或る方面に於ては、却つて世界の平和を妨げる傾向があつた。而も宗敬は今尚一 先づこれまでの一切の平和事業は宗教の名の下に企てられた。宗教は國際關係の調節力として有功

世 根底に伏在する宗教の力を見落すことは出來ない。 んとするが誤謬である。英國の今日有るは必ずしも二大政黨の對立や責任內閣にのみ由るものでは H 本の論客は皮相にも英國の工業と憲政とを見、又獨逸の軍國主義に限くらんで、直ちに之を摸倣

-

害が めに、 分 係 Ł 或 あ T つやうに るの なる より 3 る意 な 宗教 る 戰 b 争 歐洲 力を持 生ず 幾 從 咏 0 度 なる。 に於 は で 0 0 に於 3 あ 原 7 往 か つて 危く 戦争を如何 或 7 3 R 斯く ても とな かっ 際 今 1-난 3 5 關 日 L るの 6 ż 宗 3 T 尚 教 昔 やうに n を危 歐洲 他 11 米國 とも L 72 w 0) 0 なら客 相 險 0 力 1-違 於 7 2 人が することが出 なら 敎 な 半島 あ 0 て行 と争 0 72 日 易 720 0 に於 に戦 720 8 本人を好まな 8 は 2 に戦 る。 72 例 n け 爭 7 ^ 係をす ば今度 3 來 は 尤 3 彼 國際 も現代 な 30 の三 起 50 5 ると 375 關 () + な (1) のは に於 m 戰 懲 係 かっ 年 戰 は B 0 爭 13 基督教 被征 入種 たで 尚 T T 爭 12 宗教 は宗 見 まく 0 あ 服 かず 7 如 國 书 違 は E) 敎 3 らうと思 に對する 國 12 E 或 は S 英 3 カコ R 2 0) E らで と國 國 獨 好 國 n 民 は 露 7 回 は 1-R 比 \$2 よ あ 0) 放國 ない。 との 皇室 る。 對 3 h 族 0) 8 と民 反威 (= 7 は 0 宗教 土耳 遺 と図 族 11 L 何的 を惹 國 0 との T 際 其 1: 斯 から 0) 1 異 起 親 反 F. カン する 反感 3 版 3 反威 0 經 利 カコ 1= 濟 戰 0) 0) を持 害關 3 な 的 原 爭 72 利

排 他 蓋 的 1-敎 な 0 は 7 初 平 8 和 上 b を 擾 平 亂 和 す 0 るや 味 方 j 7 E あ な 3 3 カジ 9 0) T 各 12 あ 自 3 分 0) 宗敵乃 至宗派 1-對する 熱 心 O) あ いまり、 却 7

10 信 元 服 來 することが 宗 教 0) 敘義 出來ない な る B 0 は のであ 之が 30 信 者 鰯 よ 0 h 頭 見 も信 ST. ば 心から 絕 對 0) EZ 真 理 ふ事 0 B カジ 3 あ 7 3 あ カゞ 3 から 3 あ h 局 な 外 E 者 0 かっ を飾 6 は つて そう 2 容

あ

3

發

達

は

成

3

n

3

0

6

あ

才 宜 腕 ズ 4 イ カジ カジ 多 あ あ T. 生 3 w n 譯 ば C 210 T ッ で あ 平 を b る。 民 經 以 出 而 來 0) T L 帥 ~~~ 獨逸 團 ル 7 獨 長 ク 1 逸 1 ス は に於ては 倍して人 1= 有 至 力な 3 彼 3 <u>ب</u> 心 社 0 n を 收め 會 カジ フ 主義 甚 レ た デ ることが リツ 具 から あ 合よく實行 3 ク 出 0 T イ 來る~從 あ ン ゲ 3 3 n かう N との T つて 2 ょ < 軍 協 る 調 力 律 和 1 3 多 より 勵 3 n n ば 行 T する T 1 所 謂 社 1 ゲ 會 ル 大 -Va ょ 13 0) w 秩序 b 3 ク 便 3/

な平 仪 民で 彼 地 0 どう 書 族 は 絕 カコ えず 飯 カラ 食 淮 步 る 7 0) で 3 るの あ 3 カジ 日 本 で n は 世 は 族 逸 と云 など ~ カコ は 3 先 見 づ 秀 3 と寧 才 は ろ 13 痰 な 則 0 To た あ 3 カコ 5 我 12 0)

然 3 體貴 我 R 族 平 は 遺 民 傳 は 的 -1 0 J. 訓 品 練 1-出 カラ な 來 د خ T 0 3 百 て 姓 道 0 間 德 かっ 0 5 方 出 面 1= 7 於 7 代で B 知 億 識 < 0 73 方 ることは 面 で B 優 仲 n 々六か T 居 3 筈で L 63 あ 0) で 3 あ

40

る。

的 獨逸 敎 英國 re 訓 7 して ても 練 立 0 專 制 於 1-3 30 ると一人 B 政 子 ては 沿 デ つて行く 斯 IV 1 は 1 於 かっ ~" ざる T 3 w ŀ 頭 8 歷 t ~ をえ 大官 とか は とか 史 何 的 1= 訓 カジ 3 オ な よつて養 賄 練 二 ツ 賂 30 7 ン 受け 8 ~ ス 取 ン フ は 12 Ł オ るやうなことは n F か 1 たたか 流 0) F. の人 大 ع と云 學 カコ 18 1 云 ふに、 办 は Z 學校 社 無 偉 會 大 5 に立 0) は 我々は彼等が なる先 7 非常 一つて平 あ るの 祖 1 歷 B 斯 良 史的 幾世紀 を 3 < 指 は 色彩 0) 如 導す 先 の間 < 輩 に當 惡 3 カジ 受け 0 45 絕 h 制 7 C え 度を 來つた宗教 ず 3 あ 3 る。 善用 獨 0 逸

扨 て以上は主として宗教の功德を數 へ上げたのであ 3 カジ 次にこの宗教が國家の健全なる發達を妨

1

である。

自 苦言を呈することを忘 云ふことであ 由 若し宗教が 基督教の使命 國際 は蓋 關 「係を調和すべき使命を有するならば、 n し此 たくない。 の點 1 存するものと云つてよい それ は此の主義に對する他の宗派の反威に と思ふ。 其はよほど自由 然し乍ら私は なもので も相 なほほ此 なけ 出 0) 理 0 n 激 ば 由 なら 曾 カラ あ 1ń ると 0

對だと云 例 ス カジ で 由 心血を 來精 ある。 神 ふ點で彼に一致したのに過ぎなか 的事業 すなは 注 いだ萬國勞働者同 ち彼等勢働者 0 餘りに難駁 はマ 盟が 75 る分子を加 jν 期年ならずして解散の " ス つた 0) 形 ^ たる のであ 育主義を理解 が故に失敗 る。 止 L むなきに たのではなく、 したことが 至つたの 小く 唯現在 ない。 は其 の最 の社 カー も切實 會制 w 度に反 な 7 N ク

0 で ある。 成 現 在 功の素因である。 の社 3 n 會制度に反抗する勢力はしばらし ば白國の社會黨は此の點に注意を拂つて、嚴に無政府主義者を容れなか また移して以て他山の石と為すべきではな いものであ るが、 積極的になると意見が i カコ 0 つた。これ彼等 合はなくな るの

時に際し、諸君の奮鬪と成功を祈らざるをえない。 今や六合雑誌の諸君自 山 にして面 も健全なる思想を懐き、 自由基督敵の使命を果さんとしつ」ある

る

は、

我

々は傳染病が恐ろしくなるのである。

主敵では自分の でなくつて 一般會の evangelical みが 人類を救 temple であ ふ数會であると云ふ。從つて他の宗派の教會を指していあれ ると云ふ。然り新数は福音の殿堂に於て説 カコ るゝ福 音 主

義であ 基督 は のであ 元來世界的色彩極めて濃厚であるのに、 その信徒は往々にして甚だ偏狹である。 而してこの

何 今日迄 めに國 の宗派と云 際關 幾 多の 平和事 ふ名で企てられたのではない。 0 調 和 を破 業が企てられた。 ること一再ならざるもの そして其れらは基督敵の名によってなさ 皆かゝる宗派を超 カゞ あ る。 越し た人 々に負 ふの れたの -(" であ あ る。 つて、 特

然たる あ 0 つて、 で 新 一大勢力を有し にてはフリー、 今日 舊 倘 づれの宗 歐米 の學者や思想家の してゐ 派 メー に屬 30 ソン(一種の共濟組 4 これは職業組 るを問 間 はず、 1= 大 共に な 合制 合)なる る潜 唯 度の 勢力を有してゐ 0 行 もの 神 は を信 32 カジ た中 到 る じ 處 世 る。 協 0 1 散 力して FF3 頃 在 かっ L 進 6 7 次第 精 3 行 市市 かっ 1-的 發達 うとする 運 動 L 來つた 於て、隱 B 0)

方の は 0 0) つて Ž. で 天 列 Ē あ おる。 車 敷 カジ 3 丞け かっ M は で 初 この 彼の有名なるレ 8 ょ Z 其きり द्वेर 組 b 合員 此 12 0 共濟 これ 0 なつてしまつた 徽章 組合 ッ によると大統領のポ シ 力多 合主義を迫害 發見され ン ゕ 9 「賢者ナタン」はこのフリー 0 7. て大騒ぎをしたことが 南 L たかぎ るが、先だつて佛國 アン 其 カ の惰性 v 1 カジ ウ 今日 3 あ بر ا る位で に於て IV 尚 ン 存 ン 2 してゐ V を初 あ ふとした 30 リー め多くの る。先 L 0 思想を歌 ことか カコ L 年 名士 獨 元 ら此 來 逸 無害 カジ 0 つたも 之に加 0) 南 組 な 部 0 合 地

بخ Ė を助 彼 は L 1-2 は 0 0 旣 0 6 其 1 け 日 Vi 對 3: 業 として安き心 想する 成 0 思 7 世 さし 7 血 1-想 T 我 を以 南 は 1 彼等 夢 デ 0 傾 扩 R 120 向 自 7 2 よ 3 汝等 とな 0) 0) b 72 由 3 地 花 市市 8 8 學 は h 1-は 0) 果 n 罪を 易 1-1-敢 ば L 生きて 如 於て なか 3 此 何 な 影響 1-洗 カコ 0 後國 つた。 2 考 神 0 U るの 給 ž 72 0 威 怒 て、 過 3 S 猶太人 やう 人間 か b 去 ~ しと 0 1-此 0 榮華 人間 は進 50 處 觸 0 < 1n 斯 を追 衰 黄 步 は 72 7 發達 金時 宇 バ < 他 來り 20 宙 0 想 する。 代は 如 少 的 7 す A 生 きは 1 命 我 よ 凡そ ヴ 1= ري 卽 實 から 0) は h いば神 紀 ち 丰 停 2 征 1= 市市 保 5 元 丰 說 守 前 0 IJ は 京儿 せ より ス 作 73 3 九、 _ 的 分子 基 3 1 カコ & L も自 1--营 20 0 72 たっ 0 發 3 際 T 12 一分に頼 カジ あ 0) 0 る 説 7 斯 世 20 彼等 3 紀 あ 3 5 所 人 A る。 U) ダ 間 7 R は E" 如 4 デ 現 祈 は は 南 るよ 疝 古 な 在 , 0) ン 0) 6 h 事 人問 T か 30 李 業 Æ

鷲勳 12 は あ A 命 然 どうで 0 で 音 3 7 3 0) は 水 は 事 令 あ 赫 个 過 南 らうつ 失に 3 度 0 湖 K ま To 0 0 7 名 大 1 12 0 5 又支那 整 奪 鄲 2 か を馳 て家 0 0 郛 る。 0 4 は の帝政 A 也 35 我 和 > る。 炸筦 N 間 あ 0 1= < 時 13 3 間 者 [1] 何 iffi ~Za 1-を教 題に A と云 古 ツ De 6 T ケ 殺 してもさうであ ふ淺 何 1 ~ 8 72 人 罰 害 セ゛ ン か。 間 4 す も之を怪 5 3 L 彼 者 #L E は 等 3 3 2 0 己 文 L デ 30 まな であ 1n 朋 ル A ブ 8 今や カジ らうつ 果して何 w 3) 5 0 ク 死 Fi. 英 軍 等は 刑 A 艦 13 處 欺 n 名 0 to w 3 獨 沈 將 せ 0 力 と譽 3 國 逸 2 め 陷 0) 华 人 22 如何 島 から 都 0) る。 \$2 72 Cy 何 Ti 0 萬 L なる政治家 ~ > 7 燒 あ カコ ^ w 人 死 く若 6 3 ることを シ なうさ、 1-P 12 今や かっ 0) る。 が真 孙 幾 隰 つて黑 捕 平 全て 合ひ 時 萬 露 0)

.



引照 羅馬書第八章 五節乃至廿六節 内 ケ

崎

作

킰

老莊 72 紀 然 說 0 思 說 和 720 は 人間 增 想 8 0) な 先づ 大體 して FIF 闇 3 心 7: 二子の 0 より 0) 3 あ エ これ 東洋 75 ヂ 本 ٧,٧ 3 0) 30 涅槃 遺鉢を 體 ッ F, カジ 偷 は は善 6 有 ŀ u 盡 以 理 並 體 る。 ٠, 0 総い F 學 6 光 きて か悪 俘 舊 18 0) 史を繙 M 約 1 あ 阴 ピ 三家は でも か、 3 1= 0) 4 間 3 U と見 る。 時 書 13 入 > 之に b 太古 3 所 代 は か ば、 其 謂 -為 次 何 1-削 對 編纂 1 n 他 後 ょ 0 無 孟子 爲自 於 佛 3 して古來多くの 1-0) 五 カコ らうつ 孔 强 世 修 致 T 然を説 子を祖 は 國 罪を 養す 6 百 0 を初 方を見 性善説を唱へ、 22 年 然ら 12 間 犯 3 < と古 8 0 0) 1-L 渡 るに、 として、 ば 6 12 6 る儒 派 思想家倫 あ 猶 0 カコ あ カジ らうつ 5 太に 30 て編纂さ 小 教 あ 乘 30 0 荷子 諸蠻族代 故 發 干 佛 流を汲 達 理學者によつて多く 由 1 " 一教にあ 支 此 は L 來 n ス 那 性 12 12 處 猶 1 1 恶 基 1 节 る 太 B 0) つて 於て 於 科 _____ 說 \ \ \ 尺 0) 血 派 to 族 敦 け T 1-は 以て は 3 C. 程 あ 1= よらず 卫 あ 惱 つて、 於 人 現 1 示 駁 7 性 世 1/1= 3 110 op. し、 カジ 0 み苦 は は 0) の子等を侵して、殆ん h 及 9 異 ば救 苦 創 U. 本 如 質 更に之に 揚 20 世 社 痛 何 L に關 記 ---3 h は E 會 C 答 は ナご は n は あ す 折 カジ 紀 る B な 恶 Z 3 反對 衷說 與 0 元 6 1 學 は 前 あ A 3 られ は 者 す 30 な 原 Z 3 Fr. 以 世 罪 カジ 無 0) 3 かっ à

家庭 六かしい。字を綺麗に書くこと、裁縫を上手にすること一として容易なるはない。然し乍ら斯 もの すること如 カジ つて外國にまで行つて勉强して來たが、どうしても外交官になれ 艱難に きゃっ 他 は カジ 演説を學ぶこと、 來 充ちてるれ つたのである。人間の足は地に着いてゐるから、情慾に迷はされずに進んで行くことは實に るまい。しかも少しく油鰤をすれば忽ち「花咲き黴るゝ人間の春の野」に若かき二つの魂は散 鳴呼。 る もの に難きことぞ。實に上ることは何でもむづかしい。 人間 では ばこそ、 の進化は涙の中になされ ない。 文章の稽古をすること、 出産の 其の美はしさはあるのでは 為めに死 の事業はむづかしいが、 n るのではないかっ 人も亦甚 質にまた容易でない。 3 だ多い。 30 我々は 容飛ぶ飛行機も未だ二萬尺に達 むづかしければこそ我 會社を起すこと、数會に入つて修養 生むこと何ぞ難きや、生ること何 なくて、 あまり築なこと 夫婦になっ 遂に語學の数師 12 は ば L カコ 72 りで立 < 5 いと 入生 派な

て子 本 來 パ であ 孫 0 ゥ 務 カラ U 13 有 8) を十分 3 A 0 性を靈と肉さに別 6 3 1 るの 果たさ 誰 カコ しめた 肉を無視 けて之を相鬪 のに外ならな して靈の勝利を唱へうる者ぞ。故に靈を以て肉を指 は しめ、 b のであ 靈を以て肉を征 30 肉 あ りて初 服さした。これ質は めて力有 あ 5 肉 肉 導する あ をして肉 b 7 0) 初 8

思

樂なことは誰にでも出來る。

民間

々は之をや

47

T

3

3

ので

ん。卽ち神の後嗣にしてキリストと偕に後嗣たる者なり。我懠もし彼と偕に苦を受けなば彼と偕に ゥ o E ~、「聖靈自ら、我儕の靈と偕に、 我儕が神の子たるを證す。我儕もし子たらば又後嗣 、栄え たら

繭

學

論

多

鬪

はすことを許

さな

那 0 為 めに 心配 してゐるであらう。 日 英 獨 露背 各 々自國 3 へ善 けれ ば t in 0 で あ

究新 は 秘 我 問 密 R は 題 0) 中 0) 提唱 に行 尚 漫 者 然 は であ ど人類 n る。 る 各國 獨 進 逸 化 を説 0 0 神學者 學者 40 は T も此戦 居 耳 ひに 5 n 攻撃し やう 場に於ては かっ 合 我 20 流 R 石に体 歐洲 は B 少しく 戰狀態 於て 前巾 真 學 にあ 面 0) 目 るの 研 1= 究 考 然り へね は 漸 今の時 ば く衰 な え常 5 n は 徒 らに 外 新 研 交

な ゝ信ぜられやう。 あらう。 る程 IF. 統 叉自 、リス は 云ふか トの 由 派 は人間、 数ひ 知らず、我々のこれ も知 カジ n ない。人性 は進歩すると云ふが、現時 有り難くなると。 カジ に對する解 根本的に悪なるが故に戰爭が 然し乍ら諸君、 釋 はいか の修た 彼等 ん る世界の有様を見てはどうして之が は果して幾何 起るのである、放に戰爭にな か 其の 救ひを施 し得 其 れば たで

兒童 では 0 ト」に所謂、「全てを抱括し、全てを扶持する單一」(第一卷第十六場)の大生命より分れ出で、より廣 く生命を生ずるのである。而してバーナード、 く、より高く、より美しきものとなつて、 で 間の生命 な 時 は Щ 然し乍らこれまでには實に 試驗 に登 は神 ること實に苦 より生じて來たのであ を要す るの で あ 流で る。 あ 中學校 何億 30 る。 此處 况 萬 生命 に入 年を經過して に殺々は人間なる不可思議なる生物として存在 んや人生の ショーの云ったやうに「神とは生命である」。「ファウス は るに 物質より生せずして生命より生ずる。生命 . 5 向上發展 高等 來に 學校に入 か分らない。 に於てをや。 るに 進化は も皆 今や小學 -决 n 試 して容易 校 驗 1-(入 L あ な T 0 3 3 み能 私

0

友人に外交官の試験を四五回受けてまだなれない人がある。又も一人の知人は金の巨萬の學費を使

外

は

13

10

3

かし

フウストの言は我を欺かない。

落 す 由 8 故 2 H L 基 聖 苦 12 n 蓋 12 昨 督教 靈 理 ば 0) 者 想の h ょ 日 3 戰 斯 で立 より は は づ くの 爭 人物 救 餘 から言ひ と云 1 り樂觀 は 派 à 對 如 132 今日、 カジ す になら 3 ふなら、 生 3 は U カジ から n 辯 ٦٢ ては 殆 72 ない 今日よ ね 護 ゥ きの 第 んど出 ばなら 1: П ならない。 0 苦 0 歎きを以て我等の であ b 0 人性 心 D D 來な は 獨 L るの聖 明 逸 T 觀 H 今の 4 3 3 6 ٤, 0 油斷をすると、 な る。 あ 一霊も亦 我 所 3 つ 進ん 々は宗教生活 日 0) H 72 本 外 木 0 で行 為 D は T 0) 8 めに祈 n 政 な ć あ カコ らの 治 5 3 つ 墮落 ね カン 0 カジ 6 ば b \$2 に入つた以上は、 弱 我 b きを助う する恐 なら 教育 古 歐 R 一。我 は 洲 3 20 と此 8 國 0 n (學 R 民 カジ は 宗教 として 者 0 まだく 度基 有る。 我等 潮 は 8 多く 流 管教の 8 わき目 は 1-そこで 祈 家庭 之を忘 個 溺 努力 るべ 人 n 內 もふらずに て了 8 として 部 我 せせ 3 努 n に立 所 分 R ね 30 72 は ば b を カジ ち入 13 知 足 + 日 進 日 5 5 6 分 本 つて堕 1 8 3 n 3 より 怠 なや 自 善 5 3 0

胸 1= は 静 0 諸 堅 n 亂 h 3: 君 Ze 7 かっ る 人 見 世 らざる か 7 々恐 T ば る 3 Ā カコ は カコ るこことなく、大なる確信 3 今や b カジ 0 o To あ 我等の で る。 あ TILL あ 鼻叫 る。 30 英に 喚の 上 H 一に不斷の 斯 \$ n 巷 カコ ど 露 3 ど化 る人々によつて、 0 E 見 優しきは 6 よ L T の上に立つて進め。「空は 佛 あ 2 る。 ち 1-う笑みをもて、 Š, 5 0 あ 人生 少 丘 7 一數 0 0) 0 上 百 理 思 1: 砲 想 想 0 眠 は 此 家 3 默 方 るこどなき星は、 カジ 10 上 ろ K あ 0 1 نح 30 0 小 て 川 亚 L て 20 0 あ 2. 進 豫 岸 > る 1: h 言 T 者 かっ 白 永 0 首 行 劍 的 うな 遠 我 態 0) 等 度 0 光 見 カジ re 張 住 聞 以 n をなさ て此 < 8 T 3 考

- 49 ----

奴たることを脱 6 亦我等 の人性観に一致する者である。天地萬有は渾沌の中より偉大なる者の生するのを望んでゐる。 を受くべし。われ思ふに今の時の苦は我等に顯れん築えに比ぶべきに非ず」と。我々は此の點に於て彼 である。「それ造られし者の深き望みは神の子たちの顯れんことを俟てるなり。そは造られし者の虚 ならぬ。しかしながら徒に苦しむのではない、今の不完全が未來の完全と化るといふ信仰があるから の為め 1 ぬ。「我思ふに今の時の苦しみは、我等に顯れん榮えに比ぶべきに非ず」。我々は非常に苦しまねば 我に此の聖なる望みあり、 に祈りぬ」。我々はこゝに憤を發して、眠い眼を擦り、極寒した脚をつめつて勉強しなければな せらる〉は其の願ふ所に非ず。則ち之を歸らする者に因れり。また造られし者みづから の荏弱を助く、我等は祈るべき所を知らざれども、楽靈みづから言ひがたきの慨歎を以て我等 れ、神の子たちの榮えなる自由に入らんことを許されんとの望みを有たされたり」。 いかでか之がために真に出精勉强せずしてゐられやう。 敗壊の 聖威も あ

努力によりて、情慾を支配し、自由なる信仰の生活に入ることが出來る。 質をもてる我等も自ら心の中に歎きて、子とならんこと即ち我等の身體の救はれんこと俟つ」。我々は てゐ るまで共になげき共に苦しむことあるを我等は知る。たい此等のものゝみならず聖 ことをする者も、悪いとは知り乍ら止むに止まれずしてするのであ 體 る か 人間の 本性 情慾 に支配され、 は神より生ずる。故に我々は進歩を望んで止まない。けれども又我 靈と肉との不斷の戰ひの中に、つかず離れ る。「よろづの造られ ざる生活をしてゐ 鏡の ス々は地 し著 初 めて 30 は 上に生き 今に 結 恶 ~ 3 至



霜枯るゝ頃

野

口

子

霜 午 落 眼の 追 C 跟 何 夕 ほ ぞ 置 後 1-2 3 事 7 は H ٤ 5 0 < 0 け n す 0 n 立 -立 E ば 四 かっ 思 落 つ 5 時 < 5 3 橡 彼 ひ 葉 學 雜 7 かっ 侧 8 屋 あ 智 草 鞭 極 0 1 小 林 根 校 ででから げ 立 忌 0 0) 0 2 n 0 實 ば ち 兒 瓦 0 7 か 0 す 0 冬 物 0 1-生 0 > Š T 思 0 ろ か 生 かっ 奥 初 ^ す 大 5 É U 2 冬 空 死 呼い 我 0 L あ b 3 は h 吸き 瞳め 來 ろ カコ 0 草 眼 我 < 0 L 係 は 市。 紅 2 飛 0 兒 2 ت は 街も n 25 緒を 0 ~ ٤ 0 0 b 0 T ば 0) 靴 72 < 草 吐 纸 F 香 B 悲 夕 Ž け 居 を 默 哀 ż 1= 40 3 ま 吹 T 0 据 尾 b 0 すっ す n 天 磨 切 < は 聖 す 青 順 橙な n かっ 1-カジ 初 h Z 色并 鳕 L ひ n 自 3 冬 L T 片 7 ろ 0 3 0 此 小 あ مح 13 あ 路 犬 顏 朝 h 雲 風 h 1 3

を競 02 0 人間 く自 斯 は普通の 由 派 てこそ初 のことをして立 にも共に賛成 め て人間 しな 派 は にな 進 5 步 この -9-12 る 3 B 兩神學思想を統 0) 7 0) T あ 30 は な 我 0 R 實 は する E 軛 非常 1-0 0) なる カジ 3 我 賴 苦痛と努力に R 3 0) JE. 理 統 1-想 で 3 努力を あ 耐 る。 無視 な け L n T ば

進 な

步

石 H 治

胸 1 カコ < n 72 w. 1 ۴, リ 1

ひ 3 手 を 待 つ 興 奮 1=

私也 哀 秋 は 見 1= 墨 3 3 其 あ 黑 > P 5 絲。 3 4 な į, 黑 5 絲

72 カジ 137 L 聞 え る 聞 え 3

聞 え 7 來 3 響 <

喜 あ 悅 7 1 カコ 古 L かっ 3 ~ 1 る 其 白 白 3 5 音。 音

> あ 7 私也 は 何能 B 云 ^ n

8 72 Š 10 手 泣 老 < 胸 ば 1= か L h o かっ 2 組

h

ナご

接き 白 吻す 6 石 0) 美 人 0 唇的 1肵

0

娘

0

祈

0

樣

1=

然 ょ 自 然 よ あ >

0

出

來

8D

男

0

樣

1-

自

意識 を影ひそめてしまふ。 程度は、 的 カジ た悉く消滅する。 つて定まるごも 信仰 し問題の錯離乃至難解を意識する理智そのものに歸つてくる。 示する。 50 さまぐに複雑 差異は、 るに從 そして甞つて信仰の内 5 眞實 へる。 つて盆 疑惑 同時 の力は われ L のうちに含まれ 々哲學的信 に人類 た事象 斯くしてみづから其の 人の意 0 の精神の底 容さなつてゐた本能 面を如何ほどまで輪廓 仰へ其根抵を移 識 る鍛 は生長するに從 3 に据るられ 0 如何 力を意識する理智その してゆく。 1-7 的 7 よつて定まるとも云 如何 正しく 恐るべき威勢を示してゐた な原始 かう考へてくると、宗教的信仰と哲學 なる場合にお 的 見きは たとへて云へば、 な荒削りのまるの め得 ものに歸つ へる。 72 5 ても本 かと云 そして此の 力と 事 能 る。其 てくるのに問 光の立ち消えた 象 の上 は の程 いふ力もま 悉く 一に破 度 銳 、壌力 によ 其 さの 題 0

_

あ

とに原動力さし

の隱微な熱が燃えはじめる

0

7

ある。

する 証 な知能が の一蓋然性 0 と狐 不確 觀 疑 的 質を意 中途宇端のまゝでゐる決心がつかずに、斷定の必要を認めるものであるとするならば、それ ろ 撿 とのすべてをあげて、 の度合」と内 証 識 信 によりて解 內 仰 カジ 運 南 30 的 び入れる事そのことに過ぎな か 肯定の度合」との 謂 n から ふどころ われ 72 い事 (0 0 象を、 信 間にお 知るところを精確に表現しなければならない。 仰 その は 事 H 動 いつ る十 力の 象 カジ しか 檢証 Ŀ 全なる照應である。われ カコ 3 ら見て確實 されうる場 に哲 學者 合と同 に等しきか の理想 じ主観 はそれに反して、 (0 若 力をも しくは 意識は、その論 もし 確實以 つて斷定 本 源的 事象 F



信仰よりも疑惑を

\$ 9

内

藤

濯

して疑惑 宗教 よりとして 的 信條の の感情その 否定が 3 12 古い もの たとひ懐疑 信仰 であ るの よう も遙か そして に終らないに に優 われ つて < しても、 は、 ゐることを信ずる の疑 この 否定の 惑とい 80 紛 ふ近 n 6 代的 もな あ 感 3 V 情 第 0 カジ 0 或 結果は、 る つの信が 依然と 條グ

度の 信仰 も自 にとつては 過ぎな 無意識を信仰に加味したものである。 しな を有 分の 敎 的 が天 信仰 巢 つて 全く存在 V. ねる その 地 と哲 0 ち戻 人は 學的 間 人は、 しな るやうに、 固 信 い。彼 仰との差異は、 ト彼れ自身の存在を見分けるに過ぎないのであ より たどひ全くの盲 何 彼 れか れは れは其の思想と希望との巣へ戸まどひもせずに歸 0 5 つもく一或る撰 點に其の心を働かしてゐる。 目ではないにしても、 自己意識乃至自己考察の差異 然るに宗教的信仰はこれに反して、人類のうちに意識 まれ たる一 たい智的 隅に歸 L か るの カコ 地 らして生みだされる。 つてくる。 平 しそれ以 謂ふところの狂信は或程 線 上の 放たれ 外 つてくる。 點を認 0 世界は た鳩 め 自己 かい 其 7 の色 の人 つ 7 る 0 12

只わ

づ

か

ばか

りの

刀痕が、

あるの

3

To

あ

3

進む との 問 解決したと思つてすましてゐる。しかし其處には實際上の便法 柄 H 2 0 カコ こさま其 りで 異相を精確 7 n 現今、哲學者は であ ばな た 間 あ あ 3 め に處する方法として低 るの 30 5 には、た かっ 0 迁路 ない。 0 如く取り 思想の定規となることの に思ひはかるべき時間をも力をも有つことができない。われ およそ人間 曲 勿論 10 われ 折を辿らしめつく、 扱はなければならない場合がある。 つの あらゆ ~ は時とすれば、何か一つの事を行ふに當たつて、疑はしい事柄を確かな事 0) 系統を採用することが甚だ肝要で 思 辯 3 劣であるばかりでなく、 カの 人々の 特 さうした後に小さくはあつても確かな一 徴とな 前 できないほどまで結 には つて 一つの 3 るい 問 また其の格を破つてゐる。そして香 題が しかしさうした道を撰ぶことは、假定と假定 ろ (提供されてゐる。それはすなはち「活動」の んで解けずにゐる人生の難問 あ るのわれ な系統 から 其の の枝葉をそれか ――は吾々の哲學思想をして 南 3 < がまゝに暴露さ 路を地上に撰み出 は往 12 らそれ 吾 題 に加 K なは \$2 0 へと辿 T 疑 假 3 られ 窓を さな るば 思 h

は、鰤 仰は、 云ふのである。 定的 な 目 事を 的 の信 8 仰 7 不 カジ 信仰は決して、最も悪い知識に過ぎないものであつてはならない。 活動を許 確 カコ けないと云ふのである。或 な事 to 容する 3 明ら 時 的 カコ な精神 な事 をも疑い 狀 る一つの事 態 より 13 L 外 5 にい 事 0 そも、 何 もの つまでも固 でもあ 72 ド一筋縄でし り得 看してゐることがい ない。 め括らうどする信 され われ け は ない 活動 12

の價 よりもさらに完全した知能が、疑はずに濟ますことのできない事象を疑ひうる事そのことにそれ自身 值 を見いだすの は自然の數ではないか。軽々しく信ぜんとする心は、知らんとする力にどりて根

本的な悪疾である。

ふやうな不條理をそのまゝ見過ごすわけには行かない。 る。だから自分の信じてゐる事こそやがて、人々の凡べて認容しなくてはならない信條である」とい を對象とし「形面上の信念」を對象として考へられる場合において、「自分は斯くかくの事を信じてゐ に心を專らにする場合、われ~~は積極的に「其處にこそ紛れもない質在がある。そしてまた其處に つて、「有りうべき信念」の名を興へしめよ、「真らしき信念」の名を興へしめよ。事實上明確 確實なるもの 未來によりて肯定さるべき實在がある」と主張することができる。けれども吾々はそれが「信念 に面するとき、われく一をして確實と呼ばしめよ。有りうべきもの真らしきものに對 な或る一點

ゆく。 2 は は、 まりに薄弱である。從つてわれ~~は、假定といふ假定の系統が漸次に遠ざかりつゝ未知界の 域のうち 行 る孤立した線と線とを新しく整へることができるばかりである。 か れーの精神によりて試みられる哲學的歸 きだ他 ない しか へ擴 しまたそれは、まるで氣まぐれに飛ぶ火箭のやうに消えうせて、天界で互 のである。そして哲學者はたい、人類がその假定の力で引き印して否定しようとはせずに 0) 路と平行するまでに至らない。 り行 < 傾向を否定して了ふわけ われくの思想は、今やあらゆ には行かない。 一納の實証的基礎は、いまだあまりに不均等であ 無限に向つて切り る方向をさして 拓 13 一に相 てゆ く吾 會 2 わけに K 暗 の路 い境 あ

人

々の生活

カジ

あるのである。

ろ宗教 た家 倡 滿 供 南 3 3 0 72 7 過 6 空氣 名目 な チ 神 3 12 5 イロ るの 疑惑 手 L n 8 かっ げ 5 0) を呼 なけ n 0 たさ を淨 0 肯 的 を有する祭壇 5 72 4 定 T > w n は 感 えず循 情 吸 息 3 5 0 た祭壇 n 8 n ほど非 A 直 して ば 燕の 苦 3 3 墓 接に ば 間 0 カコ 靈水 0 水 か 場では、どの墓にも大理石の小さな靈水皿 發展を意味する。 0 環 を拒 3 閉 飲むまゝに委してゐる。 りで 宗教 思 も間 なぜ宗教は より してやまない 影 M る人 3 の一切を拒否し、儀式を有する禮 想 なく 0 n も、この墓場の水は 的 0 否するも 活 接 なの うす 水こそ、 で に た殿堂 動 73 H 8 其の觸 生 5 疑惑によつて唆 5 最 絕 生 è Ŏ -も宗教 對 自然法 すべ では 疑惑は カラ 活 な 3 を を營 あ n 摑 かう 7 る ない 3 慶 的 むことが に從は 0 閉 0) h な 要するに、 R 百倍も以上に神聖ではなからうか。百倍も以上 切を 寺院の カラ で 人 7 3 で 8 8 2 R カコ あ Ō \$2 せようとは 3 る人 0 しか され 72 るの神 で できずに 黑い 靈 12 あ 30 うら しる われ 0 魂 め 3 1= 不斷 滴の 1-靈水皿のうちに何等の 拜 カコ 8 つい げ 捧 無神 な 0 n > 3 1 しな かな青 けら 水をすら Š カジ ---は 0) る 5 て疑 0 とい な 供へられ 切を拒 限 探求は、 論 Ó 5 5 墻 定さ 思 n 0) 0) ふことも 0 雲 壁 想が 12 でときも、 2 To こと太陽・ しか 多 唯 n 意 否する。 あ た宗教 てゐて、 絕對 8 必しも「知られざる神 識 3 0 しそこに 0 自由 1 なほ かっ とに絶 T 水 過 なものでな 0 諸宗 結 益 T ぎな 思 0 To 1-神 天より ~ 8 0 しようと あ 2 切を拒 えず は 1-114 8) 30 なく湛 を思 效 い 1. チ チ 0 そこ 降 チ 不完 祝 青 6 3 かっ 60 3 に脱 う考 空 3 は イ 感 とい へられ 否 福 77 りく 3 1-しな 0 情の 0) n w 全 0 n F 一な矛 72 0 邢 北 2 は てわ され る水 生 閉 墓 V T 方 為 7 意 何 形式 自 活 3 0 等 1= < 3 由 8 -T を あ かっ

を救 B る。 3 人 3 確 な 1= ろ お T ち戻らなけ なけ 0 る な か ت 推 は け ž 旅 72 ō 論 1 成 3 行 B 人に 0 n め 釣 2 立 批 カコ 0 ば、 合を保 0 1 つてる J. あ な 判 してまた は ح 存 n 的 12 'n 至 つて 危 0 在 立 カコ 乃 ば い場合には、 底信仰 險 つた たし するも これ る。 至科 なら わ は、 な 出 n 實 飛 かっ けれども吾々は、 學 め、 來 n < 謂 躍 3 際 ではなくて、 0 的 3 を思 では な道理 其 撰 Ŀ かぎり、 ふところ は常に、 カ び 0 直 0 ン 力で 想 な まどふ 命 ŀ ちに自由な撿覈へ立ち歸らなければならぬ。 合 の上 0) 5 は 0 o なけ 現在 自 あ 事 が修得され 疑惑と批判との精神 絕 道 事 分のの h に立 物 對 德 實 1= 窮極 n à 0) 72 ば、 おけ 撰 命 n 0 は 品品 令 理 一級をは 12 んだ道が最 0) L 思想 8 行 想 點 わ る吾々の めた。 た慣習の なけ は、 3 n (= かっ (0 お げしく 彼 n たとすることで あ い 5 はず 良の n 0 ろ 知 T n 誘導にすぎな 外部 謂 かっ によつて断えず指導され < 識狀態のうちに現は 10 0 覆 <u>-</u> 道 73 偷 L ふところ がけれ n 1 な表出 であつたかどうかを自省し 理 た人で 存在す 哲學は かっ حح ば の宗教 8 撰 の力とし 5 あ 實際 な るもの 自 る。 びまどる事 定規 50 分 的 科 0 Ŀ 彼 では 信條 未 ないように せさうに思 踏 には 0) n 學 知 道 は Ó J. 實 8 ない。 ~ る活動 0 理 論 細 まつた を増 き道 な # を 心精 理 界を E その 0 なけ 大 L 道を築 知性 は を定め 重 カコ 緻 そし 迷 す なけ な討 實 n 3 を B 15 ること 3 n 0) 0 步 働 思 ば T n る 意 仰 究 であ 彼 カコ ば 想 なら わ 味 老 へ立 n す 1=

56

(四)

疑 一惑は事實上、人が一般に考へるほど最も高き宗教的感情で相 反するものではなくて、 それ は

ツーツは母さんの命

おゝ冷たし。

白いお前のなやみを聞けば

ツーツに積みゆく雪よ ツーツに消えゆく雪よ 冷たい雪が。 雪が降る 今日も亦

ある。 占めうる最も高い而も最も勇ましい地盤の上に立つのである。それは開城を豫想せずして最後まで戦 ひついけられる戰ひである。未解決の問題に面して、それをはてしなく見つめてゐる起てる死の姿で 為がこの上もない弱小と卑怯とを暴露する此の最後の一瞬時において、疑惑はまさしく人間の思想の 教といふ宗教は斯ういふ――『ほんの暫くのあひだ汝を棄てよ。師表の力と習慣の力とのなすがまゝ に委せよ。汝の知らざる國を信じて疑 ユイヨオ『未來の無宗教』第三篇第一章から ふない。 畏れ よ。 かくしてこそ汝は教はれる」と。盲目な信仰的行

7:

おゝ冷たし。 ツーツは愛人の

吹き掃へ。 冷たい雪を 風ふ、嵐ふ

來た

風が けれどーー。

> 厄 已 Œ

直

他のなやみを積みかくる。 生の悩みを掃ふさ見れば

空の空から

降り積む雪は

その命 病める兄さんの

おゝ冷たし。

哲學 读 は、まさしく哲學者にどれだけ多くの事を知らずにゐるかといふ問題に對する自覺があるからで 識 C と云つたの 想 人 A あ つの 解 3 1= 1 Ŀ つい Þ 未 V 見 對して 事を 者 謙讓 うに 來を 心をひそむる人が、 地 な は T カコ 見える。疑惑と云ふことがよくなけ は 信仰を拒 問 知つて らしても、 も自分に對しても、 と云つても節制といつてもよい。 無 俟 題の 知 つて 哲學 であ わ 初めて花咲くべ ために是非なく疑惑の圏内に留まつてゐなければならない 0) る ると肯定するところには、 否するとい 社會の見地からしても、 始祖 ば か たいわけもなく肯定することの危険を知つてゐるからで りで 12 るソクラテスより外の何人でもなかつた。 『私は知らない。 کہ あ き眞理の種子を尊重しないわけに 30 理 由 何 の下に、 ひとつ知 哲學に必を潜むる人 何等か 疑ふことは 一般人から屢々傲慢視せられる。しかし『自分は n 私は つてゐないと云ふことを知つてゐるばかりであ ば、 疑 の意 わ 30 n 成或る場 味 1 私は希望する。 にお は それ 合に は いて良 行か 其 30 お 0 彼れをして斯う叫 知らずに 秩序 心の な V 7 42 たいそれだけである」と云 カコ かっ 判 的 らで 斷 らで つの な カラ 3 無 あ る 知 紛 含 あ あ る。 まれ る。 るの 處 と云 n B 1 ばし 7 多くの た つて な T お 3 L してまた v 5 め 義 カコ たい 3 結 務で な 他 知 思 個

約 0 何 でき なければ自分の心に對して濟まな 科 より以上に重大な契約として考へられる。 b のでもない。 學を生命とする現代に 嚴 歌点な事 わ 一柄さし n 1 て考 は お i 此 て最 0 5 感 情 n 8 るの 獨 1-ょ 創 多くの つて 的 われ な 感 初 情 狐 め 疑逡巡 て 最も深刻 は何時 を經 刨 かは死ぬ。 0 な道徳、 信 ては 仰 的 C は、 8 行 て結 その最後の一瞬時において宗 為 真率 カジ ばれ 輕 な疑惑の感情 々しく成 る人間 0 し遂げること あ 5 より外の ゆる契

は

ので

あ

るの

Ti け 味 尚 0 à して T 30 \$2 流 3 cg. 江 亦その 與 カコ 期 b あ 相 敬 を證 種 心 遠 荷 わ で 3 à 虔 もそ K カゞ 理 な 3 の科學 一學等の 1 T 3 思 範 或 明するもので 0 n 想 は あ 0 が科學 界 本能 例へ 點 To を縮少して、 的 各範 1= à) ばか 73 經 3 (症 哲學 的 驗 崖 限 3 覺)と知 的 1= ٤ 事 の精神と物質との 9 南 西洋 るま 批評 實 Ŀ お 彼れ 科學 で立脚 0 いてさへ、 理性 性 0 6.7 さへも試みら 學者 かっ 考 0 (理智)との 引用 5 批判がな して居る(と宣言してわ は 雖 科學者であるか 流 3 充分指摘 L 石 關 否科學者 た科學的 に偉 n かっ 關 係 つた 0 たことはな 係 如 すべき迷妄を含有して居ることゝ思 論 67 であ きは無論 8 0) 事實を嚴密に檢覈するときは、 To 3 思 らとい みならず、 3 るが 隨 いっこれ る)限 **分論議すべ** 故 のこと、 つまり彼等 つて何も哲學を批 1: 6 又その根據として居 大に は實に そし き何 哲學 は 眞 T わが思想界の 物かを有つて居 科 理 を 1 論 學 評 ずべ して 對 その 數學や生理 き責 惡 T もの 3 は 飽く 4 いこと 多くの n るの 1= かっ 任 まで 1-重 カジ 貧弱 學や生 は 事 要 あ 忠實 3 な わ 3 1-

3

自由

意志の問題でも、

時間

科 ~ に出 ての 的 n 事實 か 哲 死 いては特にこの傾向が認められ ソ 學がその な 0 カコ 40 點 哲 、點であ 南 學 カコ ら試 る意 1= 組 對する形 織 みられ 3 咏 にお と思ふ。 の上に顯著 た二三の いて密接 而 上的 個人 批 な個人的 判は 批 的 に關係して居る限り、 30 特性の哲學組織 評をあげて見やう。 しばらく措 そして動もするとこの個人的特性 色彩を帯 330 びて居ることは言ふまでもないが、 全躰に非常な影響を及ばすこと、 その 是等 それを充 他 の方 は 哲學 分 面 U) かっ ら即 理解 根 本 5 あるものは、 L 問題とは 研究し 彼 to の個 盾 批判する 接 言ひ換 その 的 IV M グ 特 ソ



哲 學の迷 炭

野

村 喂

晔

る。 露し、 は 何 8 て來る不安を感 誰 な だと思 ころとに 1 N る點が迷妄を含有して居る しもその n 確實な事實と森嚴 ヴ 50 も由 彼れ 即 ソンの ち彼 一天才 けれどもその 3 0 哲學が 心ぜずに 哲學 n かり 的說 0 哲學 ま を科學的 絶對の真理であるとは何人も信じないであらうが、 72 70 明 型は型 1-5 に驚歎すると同 ~ 對す ñ 何 w 事實の 處 ない 性 グ ソン 3 か カコ 3 を指 斷 1-1= 6 潛在 哲學 片 よっ J. あらう。 に 的 摘すること頗 お 時に、 7 L な にもそが てゐ 紹 根 5 勿論 本的 て充 介 亦 3 13 絶對の な批判 一分理解し得るだけの素養を吾々が完全に有して この あ 神 おばろ る困 秘 つて 的 不安は吾 げに何 8 難で を下すど 眞理でな な迷妄を 真の あ 口々讀者 處とい らう。 63 確 5 理 限り 性 ふことは 0 彼 ふこどもなく不滿 批 かっ 0 何處 理解 り捉 れの代表的著作を讀 半月 扨て何故 カラ かっ な 力の乏しいこと、言ひ換 淌 て科 に缺 5 所 1-學的 點 以 风 に信じえな 6 葉性 0 存 光 と疑惑の 75 あ 在する らう。 事 明 なの んだ 0 中 カ 萠し カラ カコ T 8 1= た 鸔 為 如 あ 60

2 sv

か

ソン哲學

は種々の

方面に亘つて問題を論じて居るから、

その缺陷

も亦種

なの

方面に蟠つて居

もなくこの特 性 理解しえない程彼れは鋭敏な心像化的能力を有して居る。而して彼れの哲學は言ふまで の所産 で あ る。

『變化』や『記憶』などを簡單に評して居る。 性 純粹思索を『夢想』として斥け真の實在とグッドは生命力による活動を外にして何者でもないと言 73 居るやうに、 理的に證 は であると斷定したのは、彼れ自身の個人的特性を大膽に肯定した獨斷であ いとい カコ 空間 > 論 1Lo ふのである。而してラツセル 明することもはた辯駁することも共に不可能である。 像 1-その大部分は想像的心像の詩的勞作であつて真の哲學的瞑想を缺いて居 化 お 的 5 特 T 性 ~ ヴィジュアライザーとしての特性を w 0 必然的 グソン の『數』概念や知性の性質を批評し、時間論において『直覺』や『持續』や な所産として、空間説隨つて時間説の哲學が出來る。 は『數』概念の批評は 要するにラツセルの意によるとベルグソン哲學は、 一面白く お 5 指摘 て、 殊に空間化的作用を以 理智の L てわ 働きは决して空間化的 つつて、 哲學的 かくしてラッセ るか つて知性 迷 5 一安に そは論 彼れが でな つって 過ぎ 必然

てわ 觀 20 吾々自身 ラッ ことやベルグソン 念は悉く空間的な視覺心像を包含して居る」と言つて居るやうに、强烈なヴィジュアライザー 亡 に描寫 何 個 ~ と多数との綜合として定義さるべきものである」とい は N 7 ベベルグ グ 3 せむとするときは、何うしても延長的な形像に由らざるを得ない。 ソ 3 カコ ソンの敷概念の定義 0 を知つて は 時 間 |と自由意志』(PR 78-9)の中で、『吾々が數觀念を單に圖型や言葉でなく 2 ない、そして彼れ自身『數』に關する明瞭な觀念を持つてゐ 「數なるもの は 般的 には個 ふ説明をとつて、ベルグソン 々の集合として、 だか もつと正確に ら一明 13 は 瞭 明 な数 かに

居(これ 0) 組 ح 織 0 Ŀ は 3/ は 普 3 ~ 從 n 才 遍 來 か 的 ~ 抽 絕 ソ ン 象 對 رر 的 0) ゥ 的 思索を以て哲學の 著 な眞 工 作 w B 理 0 全 價 = 般 イ 值 に亘 を チ 要 工 つて、 B 求 本 丰 す 領 1 3 どろ その 6 W 4 0) 哲學說 ガ で た學者 7 あ るか w 15 多 は などの 經驗 5 大に閉 實 的 哲 に 1 口する)るが 證 P. 重 を見 大 明 する な て 關 b b 係 0 直 1-居 (" る n わ 1-て 0 カコ 對 引 るの で 用 あ 7 3 次 3 も相 12 te 科 T

=

當

の科學的

批判を得ることの必要は言ふまでも

ない

と思

躰に 傳売 跫 體 な觀 彼 音 的 たヴィジュ n 想像 観察に な視 念を生々した具象的 阈 も時計のチクタクと打つ音』も、凡て直ちに空間内の 思索す よつて 觀 0 的 覺 察する所 ラ な叙 アラ 心 過 ッ ることは 識ることが出 像 ぎない 七 イ 1-事詩として審美 N 飜 ザ によると、 (Bertrand 譯 出 (Philosophy of Bergson, P. 15) ベルグ ーであつて、 することなし 來ない。 來るが、 な心像に表現する暗示力に富 ~" Russell) 彼れ 的 N 是等は嚴密 に判斷さるべきものであ ~" グ E は jν ン 考察 ンは觀 は主として個人的特性 ----グ ソン 般 Ü 觀 念や抽 0) 得 な意味に 念を視覺心像に具象化(即 著作 な 4 象 全躰 0 7 概念を空間 お んであることは、 5 あ 4-30 て、 線上に擴げられた繼續的な心像を想像 ソン る。 現 n によつてベル 更に解 だから は藝術家 理性 た哲學は 化することなしに、 0 り易 ベルグソンは 對象となるべ ち空間 彼れ と同 卽 3 ち彼 グソン の天 5 じく無力なそして抽 化)する ふと、 n 才 哲學を論 0) きもの 的 個 言ひ 般 な而 人性 强 往 的 烈 來 でなく、 な能 換 な概念を冷 B 0 よる自叙 へれ 通 冗漫な文 力を有 3 行 する ば個 象的 人の

床め70 けたス名 末る半優 何脚の れ本傑ウ 國語にも関連により 上のを古 梓爱改今 せ弟題獨 ざ坪せ自 り内しの し土む藝 を行も術 特氏のを にの即永 士熾ち世 行烈本不 氏な書朽 のる地に 寫藝 °胎 め術本さ 飜熱書ん 譯にはか 權動全為 をか歐に 定南 興さ洲自 せれのら らて文脚

價北

れ歐頭色 た米としる幾劇た も多増る

の書や家が

る溶にてせ韻本

真か於自らの書 アド理すて然れ音は スにの片の敢樂古 ト参趣上妙てな今 ヴェかあ先域之りの らる生をが無文 **人** 人をは領完律聖 ♀現得全のエ

らずる

工由結

っとはく

味て巖此融難こ へ血石意合解れ

新 錢 本型

懇談ス あも味しと無 九三〇六川番

問寺通區込牛京東 四九一京東替振

64 に是等 0) それ 單位 0 とは混 彼れ ち午未申等の獸象)とかいふ必像を想像しなくては、『十二』といふ明か の特殊な集合卽ち特殊の數觀念に適應し得る集合とを混合して居る。そしてベルグ な迷妄であ I. 集合 出 ねば n の十二族』とか『十二ヶ月』とか或は『十二宮』 (the twelve signs of the zodiac, は 來 心然的 の集合』 することが出 には決 0 亦必然に視覺心像を包含して居るものでもない。然るにベルグソンは『十二使徒』と 73 同することの出來ないもの ならぬ。例へば『十二』といふ数は何等の形像を借らずでも吾々は思惟することが 集 一般的 成 に空間 合 して「十二」といふ數でもなく、 る。ベルグソン の共有 特殊 といい る物で な數概念を抽象的に思索することは出 化的即 な數は、是等の具象的な集合數さは全く別異なものである。况して一般的 ふのは、卽ちこの第三のものを指して居る。しかし以上の三者は 水 する或 あ 30 る。 ち心像化的であるとい その結果彼 だか る物 は(一)一般的概念でしての『數』と(二)種 ら「十二」と で あ であ 3 n かゞ る。 は、 また į, L 何故でいふに、『十二宮』とか『十二ヶ月』をかいふ十二名辞 凡ての敷概 2 か 勿論 し他 敷は視覺的 つて居 の特殊 般的 30 念は空間 來ない。 な十二名稱 けれどもラッ な集合即ち『蟋蟀十一疋』とは共有すること な数ではないから。『十二』とい 必ず感覺的 的 形 なの 像 の集合でもなく、 な概念を描き得ない。けれども を有すとい 特 七 殊 n な具象的形像を通 1-な敷観念 言 唇に於ける十二支即 ひ、 は ソン 明 せるとこれ かか 2 随つて 出 叉凡ての集合 に區 0) (三)及 來る。そして ふ敷は カコ 所 調 な數概念 一別し 吾 「イスラ してのみ び種 ロ々の は 個 7 明 K R 知 かっ

所

有する性質ではあるが、

しかし種々の集合の有するそれではない。べ

に共通

な

3

もので

もない

0

そして第

の一般的

な『數概念』は十二とか

+

ーとか

その

外

あら

100

る數

ルグソン

は即ち是等の

具象的

林 院 峰 長 間 診 察 副 月、 長 は 水、 木、 目 金、 下 當 午 院 前 1 在

勤

麴 町 區 \equiv 番 町 \equiv + 番 地 市 ケ 谷 見 附 內

電 番 六 ___ 番 東 洋 內 科 醫 院

院 長 醫 學 士 高 田 畊 安

相 州 電話ちがさき二番 茅 ケ 崎 海 濱 従 停 南 車 場 半

院

長

診

察

土

矅

日

午

後、

入

院

診

後

應

需

河

野、

高

橋

兩

副

長

は

目

下

當

院

1-

在

勤

里

湖

院

(號 丰 新)

業產及働勞

頁 百 判 大

●錢貳拾價定●

□沚	学*	☆	寒	四四	──	自	生	全
會書	働	底	風	ツェ	働●	立	活。	来
政	者■	的	0	0	日咖	0	Ø:	勞■
策■	1-11	修	歌	服	訓	精	根■	働*
としての	望	養		社	迎鼓	神*	本	大*
0	む。			會劇	:		問問	晋出
I A							題■	席■
場■				9 ,				記■
法	•	•						
五	::	新	日日	李	坂	相	內	鈴
十	田	渡	向	澤	本	原	ケ崎	木
E+	war	戶	2	A1			8Ea	, E.a
名	壽	稻	3	計	Œ	郎	作三	文
家		造	to	七	雄	介	郎	治

二町國四田三區芝市京東

部 本 會 愛 友 七五一三京東替振

版三第





英 文

和 文 價廿 錢 郵 稅

錢

價

廿

錢

郵

稅

筵

和 英 合本 價四 ---稅 DU 錢

【thank you very cordially for so kindly sending me your fragments. ○ 英 関 の 女 豪 と 哲 學 者 と は の 女 豪 と 哲 學 者 と は They are original, shrewd and fine. I greatly enjoyed reading them.

Many thanks for your "Fragments," which reached me yesterday. I have read them with great interest and sympathy. Some that I particularly liked were "Twice in Life," "Additional Nerves," "Reputation," "Cruel Competition." I received the book on my 43rd hirthday, so according to you I am approaching the "Critical Age." In another year, shall I be mad, or blind, or mad? The last, I expect. according to you I am approaching the "Critical Age."

東京市芝區三田 知 いりい 更に深くその 龙 几 知らんとせば、 HI 電話芝五八五五番 その論集 「靜觀と思想」(警照社發行價八拾錢) Bertrand た讀まるべ Kussell

る解る主得でる も剖著張ざあ所 のし者するる以

でてがる現。を あ、そあ代知知 るそのりは識ら

○こ狂と `はな

江に熱難决益い

湖深的もし々 の遠要いて枝人

清な求要健葉格 鑑るにす全には を運よるな入自 俟一つに時り我 つ的てこ代ての ° 牛東れで道形 命洋何な徳而 をの等いは上 把大のこそ的 捉偉根とのな せ人のは根要 る孔な火を求 も子きを失の のを皮賭ひ力 '拉相る 蓋しなよ理し し來るり性で 時り容もの道 價 い論らみ徳 金 のそにか徒はつ徳はどの知 缺の過でらこでな言人尊識 拾 陷信ぎあにの人けふ格と 錢 に念なる發要格れまさき道 郵 對人い °達求なばで孰は德 す格電識しのけ自もれ言と 积 及称者でダれ我ながふ塾 救思哲学はませる 糟想性気はする。 をを人新をツはで 0きでが 漬 そツは理識人な

紹傳版四介說

1-5 するも の史 批 心評 扩 我塲

高

等學校

是實

かに

满何

天人

下专

の讀

諸む

賢べ

にき

薦の

む書

ス

最

0 好

拾せ 贈 3 郵 0

們 現

崩現 世代 马人 れの た意 01-

等よ

督督

觀を

は説

此のし

書彼

にれ

よの

り宗

て教

闡を

4) 基基

好

R

术

ケ

ツ

1

百

廿

五

頁

以忌は道 のクそ性あ格いき 以思は徳のグを怪る格できて て「質真論をなののつの。) 任な摯語威發生みて重理道 錢付頁 り識 ずくなをを露くあ道き性徳

社誌雜合六四國四田三所 三〇〇三一京東替振 番五五八五芝話電

權特の君諸者讀誌本

回圖 ば定 合替に御添常但別價 送 誌座御金は て下さい 送全市 社宛東 可成 要しま 送 す か書 ŋ な らは せ 下 振 さな 送元ぬ 5 替 料價 n るば を非

一、本部へ當て返書を要する一、本部へ當て返書を要する一、一般圖書の取次ぎは今度に解しては必ず一、一般圖書の取次ぎは今度



東 年 大 71 京 版 正 帝 或 大 學 教 文學 博 藤 础 勝 先 井 定 四上 ん版 送料 改 IE 共 釘 增 補

每月一回 ROMAJI

本號に限

新年特別號內容

一年送料共

定價一部

百長 小 中 正 小 石 阿 田川村宗 市 坂 部

小着 次

吉白 未 雄明藏鳥劍平郎

荻 中武厨川青 村原 里小 JI 路 井 楚 白 柳 有 人泉 會

村虹

猩 福

米堺太大昇木 III 田 下

庵冠 水山 篤

H 幸 水鐃 曙

夫 彥 穂 石 夢 江 穗 郎

鳥藤 山 刀 '生月 田 部森 副 井 陽 邦 成櫻

蘭 子郎 吉喬郎舟亭

フ 口 就

新

年

to 迎 0

譯

或

語

界

趨

理 學 博 士

櫻向 H 阪菊 1 根 部 谷地

軍 重 進治郎麓

東京市麴町區 發行所 有樂町一ノ三

五

版

拾 清

七

錢 楚

ローマ字ひろめ會

振替東京 九 一 一 電話本局五二五六 、も具

體 像

かつ 的

6

もの は

は 0

旣 形

な 個 々名辞の 集合のそれに適應し得 る特別な數概念でを混 同して居るのみならず、 更に一 般的 な数概

B

同

視

1

7

居

件 能 は T ラ この した 遠 基 ツ 43 陽 七 點 8 72 1-N 議 お か 0 0 ら論 で 批 H 論 あ 3 評 6 30 知 駁 は あ すること 頗 3 識を有するとか 電に 3 ~ 數概 ダ カジ ン 出 念の チックに 來 みならず、 いつて居るの ると言つて 見ゆるが、ベル 居 彼 は 30 n 0 空間論 皆 ~ か グソンが w れの鋭 グ ン に基い 1 んいか い視力と生々した心像とを有する特 カジ 72 直 あ 1-覺 がは真 5 銳敏 M 3 な 認 抽象 視 識 覺力を有して 多 的 與える 觀念や論 2 居 理 3 は カコ

念をヴィジュアライズ 在論者の「物」でもない、 ば生々した色彩で活 に觀念論者と質在論者のそれとを調 は實 で、「物」より 出 L 在 5 的 w 發 て批難 動とを與えることなしに思索すること出來ない。 12 なものであ 論 グ 謂は して精 者 ン 8 Ŏ 0 2 して居 哲 いその は即ち 4 8 2 學 神 と物 流動 る 客觀 0 中間 30 最 所謂。形 だか 質 的 的 も難 彼れは な存 この に位する な『物質』を思 ら彼 解 像」である。故に『形像』は觀 在で ない その 係 n そし 南 停したものであり、 を あ は 30 3 說 これ 個 8 惟 て最 カコ A 卽 也 す のである。 を具躰化 的 とし ちそは生 ることは出 特 も彼 性 720 1 n 0 し心像化すること よつて、 彩 け 8 天 隨つて『形像』は既に『表象』と \$2 0) つと解り易く言へば、 來ない。 才 ども à 念論者の『表象』でもなく亦 no 的 る心 到 してベル 創 底 ~ n 的物質であ 是等 觀念 老 グ 發 グ なし ン は 揮 論 ソン 1 者 0) 1= づ T 0) 個人 るのべ 丰 居 n 形像 言ひ B 張 3 的的 する 所 ~3 は IV 12 65

か 單

ン

ンにとつては

抽

象

なる「表象」や或

ラ

ツ

セ

n

最

後

1=

~"

工

0) は

觀

念

12

0

や破滅にまで只 過去の生活が今 歩の距 離

ありのまうの出

あり

てはならな

記ま録さ

き著人し

價

定

ガジガジ もの深世 の高き界れ貴思の なな慮驚 ばるを異し 驗つ價 はて が水 日讀 本まる をれを ご智 到を識 る希あ

價 The state of the s 拾九

と網に明 錢廿圓壹 べふる 命

東龍貴田神京東元賣發

論 か じて居るのは、確かに知られたもの即ち知識そのもので、知る作用即ち知性そのものごを混同した ら生じた議論 であ ららう。

3 ツ 3 才 疑 台 リーを論 ~ 問 N (Hugh S. グソンの形面 7 は あ 嚴密 30 駁する為 , T mi に科學的事實の してこの Elliot)で めに、 上論 は別ごして、彼れ 隨 方 あ つて彼 30 面 E カコ か 5 いれが疑 3 ~ w 見て グ ふべか がその ソン哲學の成立するや否やを檢覈し 果して肯定し得るものであ 獨得 らざる 0 確 學説を證明し他の 實な事實さして引用 らうか 哲學說 0 たも -L た所 卽 n ち從 0) カジ は 科 謂 學者 體驗 來 削 0 5 0 種 事 間 R I. 實な 1= 0 IJ 起 オ 七

ŀ

福 で 硬 オ 3 つたやうな態度をする。いかにも科學者をして書笑を禁じ得ざらしむる身振りをする。これ 性 あ ラ 3 を滑走せむとする。そして彼れは恰も攀質の堅硬性に堪え得たやうな態度をする。即ち彼 0 I L る。 と實在性 ク IJ ル 7 オ 科學者を氣取つて、事實の堅硬性と質在性とを御するのがその最も特意とする所であるとい 而 <u>___</u> 初 ツ }-6 8 しょる は さに堪え得ない所のものである。 南 は空中に浮游 凡 3 6 カジ 信 T 0 78 形 吾 初 17 m カコ 0) D L 一學を以 腿 人で してゐる薄 カン あ 5 るの て何 見るとそは多くの言葉や比喩や美文をもつて作 等の 紗のやうな構造であ 勿論 意義 ~ 面もベルグ jν る持て グソ 2 哲學は るない、軍なる『長れらしき冗長語』に過ぎな ソンは時 つて、到底地上におけ 俗衆にさつては最近 々地上に落下して、残忍な事 5 る事質の残忍な堅 0 in デデ 72 ラビ n jν T は最 フヒ リオッ リン ツク も造

同

72

3

ラ

ツ

七

w

は

言

つてゐ

憶に 物質 ものであ 0 は 一とを混 對する お n U 3 關 溶 7 依 からである。 係であ した は るど 過 もので 去 思 6. と現在 3 而して『形像』は即ち物質であるから。從つて形像と知覺とは 何故といふに、 あ かくしてベルグ 30 とを混 彼が『純粹知覺』において精神と物質との區別を根本的 同 し、 ソン 彼れの『純粹知覺』とい 持續」の觀念に は 「純粹 知覺」において おい ては ふの 知る所の作用で知らるいものでを混 は 精神 南 3 と物質とを混同 形像 が吾々の に挑拭 つまり 身躰の潛 同質的 し去 純粹記 つた 作

7 所 的 する定義 30 5 れどもラ 知 。 の 活 ラ 近代哲 作用 る作 動 ッ しとの カコ 七 ッ 用の性質を は w 是等の 「學者の ح 循還的で積 也 0 差異を説明して、 批 『知らる〉物』 N は 評 點 12 ベルグソン 般的通 点は大に 餘程 規定する。 極 舊式で、現代における進步した形而上學の傾向を無視して居る所が 前に 思索研鑽を要するものであるから、予は後日の 弊だしラッセ とを混 の『時 何者も示して居らぬ。 過去と現在との根 即ち精神は 間に就 同するに至つたのである。これは單にベルグソン一人の ,v 物質であり物質 は言つてゐる。 て鋭い批評をなしてゐる。 本性質を捉へえたと妄想した。その結果彼れは『知る そして彼れは『知覺』と『回想』(二つとも現在 そして は精神であ カコ ンる ~ るとい 混同 N 研究問題にしたいと思 グ ン ふやうな循還論 は 知らる 2 の過 去及び現 > 物の みでは あると 性質を以 陷 在 に對 0) えら 思 75

3

る

彼 0 を得

n

カジ 評

イ

>

ラ

v す

ŀ

0

作用をもつて必然に空間化的分割的であり、

批

は

洪

意

~ ク

き價

值

カジ

あ

ると思は

n

る。ベルグ

ソンは確

かに上來述

べた混亂

の弊

に陥

つて居

そは純粹持續を捉へえないと

66

々はこのやうな科學的な批評にも公平な態度で耳を傾け

る義務

カジ

あると思

形而 30 用 用 異らざるを得 2 0 [91 的 ~: 手 = 3 され 結 6 1 0 w かっ T. 弊とを指摘 そして グ 實 で 5 自 0 y 3 果 あ þ 學との ソン てあ 真 才 は とその 分 は る。 相を曲 對 今一 T ŀ 止 矢 0 るの 學說 は亦 して 0 張 要す め 工 工 ない T 々ころに 比 リオット b 懸 リオ 喩に に都 比ナ 別 3 3 そしてその 解 お ラ 0 L 0 や形 720 1000年 7 カコ しは 2 1-も詭辯 3 72 合よき比喩で、 論 F ブ は、 推論 等の mi と難 3 論ずることは る釘 殊に 理 工 24 上學 リッオ (= 的 も最 んだ ベル 問 凡て 比 は 終 頭 Ł じてゐ の甚だ危險であることを論じ、ベルグソンは明かに比喩の引き方に るの 喩は 題を深く考へてゐないやうで カジ 疑 あ 腦 0 ップ ŀ 何 0 問 關 カゞ るが、エ 0) は ソンの引用した事質やそれに用ゐられた比喻等を一々吟味してゐ ベル É 亦殆 る。 放 حح さなきだに讀者 幼 係 事實の上に立 事實の 一同じもの 出來 に認識 to 然科學を充分了解してゐる 雅 それ 引 んど詭 な人 グソン リオットの ない 用 眞相を論斷 Ō か 論を必要とする 間 L To The 5 かっ 72 游 0) カジ 5 著作 に 例 如 つて居ると公言する 一批難に、 吾々 過ぎ 2 350 0 を誤り易きもの 72 長舌らしき無意味 0 0 蔵は カゞ 10 H な 到 し去るの 彼 る處 ~:<u>`</u> も隨分曲解と詭辯 冰 0 あ カコ 心 意 n w る グ に任 に出 0) 例 随つてその 所 ン i カコ 0) ^ ば心意 けれ 続は ン哲學 であ カコ 成長 謂 せてラン 7 に危險なるかは言ふまでもない 來る 2 B 質に るの を写達際に どもそれは鬼に角として、 な叙述と数ふべからざる 0) い處 と腦體 研 3 >、彼 論 劉 究 に、ベ がないで ダ 0 で、 著 して 2 カジ 1-方言 a) n 1-殆ど厭 120 對 ル E 北 60 カジ もな 關 か 间 グソンのやうに勝 推 較 ~ 亦彼 をや -[iv 注 72 やに ることが 包 グ 學のそ 別きは 意 論 ソ るときは なる を順 H ず \$2 3 お ども 起 5 る。 寸 7 69

の批難せんとする所であらう。

定することである。 立 是れ、彼れの學說を確立させた事質なるものは、始めから其目的で蒐集された特殊のものであるから。 らね 學說 理由 實在 上學 恰度フェーニックス カゞ 先づ第一 は總論 B., P. 12)° 上學を信じない。 3 あ 工 ることが ばならぬと論する。この論法は洵に些細な迷妄であるが、而も夫が可笑しい程繰り返されてゐる。 つて、 を持ち出し、そして何等充分な確證を與えないで、唯他の學説が誤つてゐるから自分の 0 にでは リオ た所の眞理さして取 下にそれ 的にベルグソン哲學の迷妄を三つのタ 者 T ットは先づ自分の立場を辯明して斯う言つて居る。『吾々は形而上學を有して居らぬ、 率爾として自己の學説の真理を主張する。それは斯うである。説明を要する或る一 それ 8 かくして彼れ なく特殊科學 ない。 出 來、 らの學説を排斥する。 に對して互 カゞ いかなる學説と雖も苟もそれが事實によつて證明されない限りは信じ 第三には既存の學説 その 定期 是等の學說は大部分形而上學的空想で含むで居る』(Modern science and the I-O-P 學說 的 は純然たる『事實』の上に立脚して、ベルグソン哲學を檢惑した。そして彼れ に屬する事實の考究の に前 扱 に拮抗する二三の學説 つてねる は 是れまで思索さ のものゝ灰燼の 30 すると彼れはいつ 次にべ に對するベルグ イプに分けた。即ちベルグソンがその哲學論 ル みを信ず n 中から生れて來るやうに。そして彼れ たい ブ カジ ン あ カコ 2 るとするに、 なる説 30 ソンの反駁 は自分の學説 B 何何 尙は亦吾 の著作でもそうであ とも ~ は腰々不充 全く異 jv によつてその 々は唯心論 グ つた ソンはそれを檢覈 獨 分であ 考 特 るが 事 でも 0 實 はそれを既に確 3 るこごであ)直 唯 な 0 から を行 が真 物 T ちに自 團 あ 論 憾 L 亦形 八理であ 7 0 るのに 唯 ると假 あ 事 C 3 im



太陽の如く活きよ

永井柳太郎

時人 とい と我 人は 國 に自然の美は人の邪なる心を醫 としたが、彼等は 露域 事 べは真の生活に立ち戻るのである。 到 犯囚 カジ ふことであ 頭を 底外界を覗 の首府ペトログラード のみを投 牢 壁に 30 粉碎 ずる牢 一齊に此の樂しき一日 くことが 故に露國政 L 獄が 我は衣 出來 あ を距る遠 る。 し、荒くれたる心を潤ふすに足るものである。美はしき自然に接 府は之を慰め な 服を裂きて首をくうり、 0 固 より 3 からざる所にアランド を花卉を弄して過したいと願ひ出でたといふことであ n 牢 ば希望なき彼等囚 一獄で んが 為め、 あ るから 彼等に一 自ら 之を繞らすに高 グン 人 其 は 日を興 の際む 5 動 2 R B ~ へて各自欲するが き弾壁 き命を斷 せ 0 小 ば憂欝性 嶋 カジ を以 つ者 あつて、 てし、 1= カジ 罹 6 儘に 勘 獄內 なく 其 る。誠 處 或 任 世 ない は には 0 我 N 71

ひ、 上杉謙信 夜陣中に玲朧たる明月を望みては偉大なる自然美に感激せざるを得なかつた。 は領土を掠め人命を奪ふここを少しも意に介せざる荒くれ武者で あ つたが甞つて能 乃ち、 州に 戰

淚 72 悔 街 行 ち 俄 いり ガラ 3 10 カコ U 燈 3," B カコ 3 10 L な 2 す P 1-0 n 3 n 廿 微 B 雲 け 6 8 ば 7 E 3 < 黄 3 L 1 な 2 熟 梢 カゞ づ ば 灯 2 雁 ~ 3 3 R 12 8 影 ٤ 2 7 來 0 淚 流 0 1-笑 L 0 < 紅 0 3 n ひ 稍 8 3 7 L ۲ 湧 7 T 5 仰 極 0 1-3 2 p < 消 350 を み 72 め Ł 陽 \$ え 73 つ 5 3 3 あ 1: 1-7 7 岩 n T D つ > け 榮 ろ 人 修 柳 秋 あ < 友 b 10 0 あ 0 L ょ ひ 0 わ \$2 面 to 7 葉 如 た 8 カジ 具 2 13 水 何 2 册 0) 怖 蓬 2 0 0) つ 1 72 陽 2 n 快 L かっ 澄 0 散 te 8 0) T 3 L 3 7 > L 風 b 解 난 かっ な ろ 25 50 1-過 1 け ち は 2 巷 法 L 何 T 350 前 1= 散 かっ 0 大 0 1 Z 消 湧 3 b 1-VD 空 比 3 讃 え 3 む け n 0 Z な 來 2 ^ ^ D

5

~

n

D

25

to

3

F

- 70 ~

ħ

る



あしたの陽

藤寥

伊

は 猜 B で其 如 72 師 により 和 つ んる人間 遙 疑 疑 72 は るので 博大なる愛の心、真心を以て接するならば必ず人を動かし得るのであ は かに自然美のそれに如かざるは歎は 0 イツ 曲 まくに、 て造られ 人 女は 推 あ にも同 間 羽衣」は人も知る如く三保の松原へ舞ひ下つた天女が漁師白龍のために其の羽衣を カナ諸 30 は 1= あ 人間のことである。 返して吳れ 羽衣 じく人を動 たるものであ り、天に偽りなきものを」と言つて居るのであ 天にや かない。 がなければ再び天 あ カジ たら舞ふて見せうといふ。其の時白龍は『いや此の衣かへしなば舞をばなさ いろく一押問答の結果、一トさし舞 かす力が無ければならぬ筈である。 り給ふべき」と言つて詰つたが、天女は之れに對して何と答へたか。 る。 誠に愧 自然美が に舞ひ昇るこさが出來 しき極みである。遮莫、 づべきである。 斯く人を動 か 自然は神によりて造られ す力を有するならば ふて見せれば返してやるとい ないから何うか 30 然し事質に於て 人間 質にや天に偽りは も自然の天真にして傷らざる 同 返して吳れ 人間 じき神 ると共 美 無きもので 0) 1 人を とい に t h ふことに t 動 間 ふが 拾ひ取ら 造 \$ カコ す力 5 な to 神

--

第三の少女は貧者の子であつたから錢を惠むなぞとは思ひもよらぬことであつた。 或 捨を乞ふた 月三人 子 は 甞 0 T このであ 少 新 女 聞 カジ 12 る。第 街 よつて次の 頭に 遊むで 0) 少女は十サン 如 わ き美は る時に、 L 3 チ 譚を讀 ĺ 人の 2 0 みすぼらし むだ事 銅貨を、 が あ 第二 き乞食 る。それは巴里に 0 13 カジ 一女は 通 5 カコ ----フラ > 於 つてい ての ン そこで自 0 出 伴 銀 貨を 0 少女等に喜 分の 與 72

霜滿軍營秋氣清, 數行過鴈月三更,

智 72 な 見 3 3 明 72 詩を 0 月 6 を 眺 賦 あ 8 T は 直 1 其 帥 0 滿 3 なた 収 め 3 7 野 歸 心 0 72 è 一一一次に打 ので あ ち捨て、遮莫家郷憶遠 る。 攻防 里子 戰 10 のみ維 征 n とい 4 とする ふ美 は 戰 L 國 6 0 武 間 將 专 美 0) 皓 R

傷 其 の着 0 2 北 勿 時 せ 條 3 早 n Ш 雲 衣 肤 と言 服を は は R 义 12 謙 もや 剝が ひ放 3 信 海 1 彼 ちニ 包 0 Š 劣らざる殺伐荒 0 ٤ 彼 度 方に沈 佩 L 彼 く太 ナマ 0 カジ 絶景を賞する み行く夕陽の 刀 彼は を 求 諾 凉 め 720 12 々として之を與 3 に餘 悠然 殘光を飽 鬪 將 であ 念 として カジ な つた。 カコ 太刀を すい か ^ 再 眺 0 び崇高 彼 12 8 7 n とい 與 省て箱 3 ^ ふこと 72 な 570 る落陽 3 折 彼 根 6 9 Ш は あ 徐 1 E 1-る。 ろ 見 b 0 1 戰 __ 雪 庫 n 汝等 0 3 於て 0 Ш -1-6 肤 單 0) 南 かず 來 身 0 たっ 出 7 腿 彼 沙 6

人 花 き所 き光を投 る の心 然ら 强者 貧者 人を動 を惹 ば自 げ 與 然 然美 É 0 0 忽 5 付 ^ 前 かっ 3 す V 1 は 勝ち誇る 0) 得 は 根 0 何 0 み頰 之を るで 故 本 あ 0 30 あ 笑 與 力が 斯 3 强 らう み、 迄强 ^ 者 2 其處に自然の 存 B すると思 弱者には 0 カコ く人を動 甲 0 0) とす を Ш 照 陽 6 n カコ カラ 頭 à をそ す力を有する 美の强き力が 謠 ば 0 如 -C 12 0 たで 何 あ 月 3 け、 6 るの は 又慘 は カコ 絶えて 玲 人 な 存する を動 まし 雕 0 Un 6 12 かっ 其 Ď 3 かっ 3 L らうつ 井 阴 0) 败 0 嬌 得 月 6 將 0 よう。 8 à 业上 姿を 0) 予は自 30 廢 2 富者 鬷 見 堀 春 0 せ 6 然美 1 F ば 82 0) 譏 野 0 3 1-2 も齊 0) 0) to 2 亂 其 花 ---視 古 0) 8 机 殴く 散 n 煌 同 其 ば R b 込 果 美 0 12 美 は 僑 3 to L 光 T 5 月 70 万

涸濁 なら せ有することは郎 る。 吾 人も此 たる染屋の桶水より水蒸氣を吸収して玉の如き露となすが如く、斯かく寛大に長所を吸収 て生活 弱 尠なくとも吸収し得る力を養はねばならない。 の差 0 太陽の の根本、 あ 5 ち一であ 遺傳の とせねばなら 如き熱情誠實を以て人に接せば万人我に服すに相違ない。 る。故に吾人は人の短を捨てゝ長を採らねばならぬ。恰も猶ほ太陽 異なるありて一 n 次には 樣に論ずることは出來ないけれども而も何人と雖も長 寛大の 精神 是れ神に捧ぐ可き誠の力を引き出すの で あ 30 それ人には能不能あり、 太陽主義、 賢思 實に吾人は せ カジ 0 汚穢 ねば 短 别

るものであ = 凡そ人。 フ は之を 極論 る。 誠ならんと努むれ これ して息ま 東 西の n 學 ば之に 者 カジ 幾多の質例を引いて敦ゆ 逆 ふ種々の勢力を潜む る所であ ものであつて、 30 就中不老長生論 遺傳 と境遇の力は其の 0 著 老 メ チ 大な

75

出た、 座 どでは こと、それまでは常に主人の後 います、 予は一英人の濠州探險記を讀むだことがある。 あ 英人も不思 3 カジ それが辛い 貴方の 議 に思つて、 から今日からは何うか先に立たして下さいとのことであつた。彼等上人は 後 か 5 步 それ < 1-と何 跟 は いて歩いてゐた土人が、 Ł 好 bo なく殺 カゞ 體 L 著者が一 何うい たくなり、 る冪 人の土人を傭うて深山に分け入つ 今に 今日からは自分を カコ 3 訊 も飛 るど び かっ 土人 うらうと思はれ 先に立 から à 12 して は ること 勿 72 體 吳 な n 2 日 < 御

輸

0

薔薇に易

^

んとし

たので

あ

る。

今し 1-フラン 挿 して 他 0) あ ・サン 少女より つた チ 薔薇 Î 貰つた金を以 2 は 0 花 大 一金であ を抜き取つてその乞食の て此 るけ れども の薔薇を購 而も一片偽りなき赤心の前には何等の執着もなく之を は 胸に翳し與 んと申 し出 へたのである。乞食は非常に感激 でたといふことであ 30 乞食にとつて

燈綠 3 慈 身を 母 酒 才 1 0 1 膝 耽 献 ガ 15 ス げても 0 チ 7 ひれ 2 1 吾が子を眞人間 12 は 0) 伏して從來の 高 -(: 德 to 謕 30 讓 13 或 る羅馬 にし H 非を悔えたとい 母 放會 12 0 いと前 室 ^ 0 來 高 る 僧 ると室内 ふことであ 母の聲であ 6 あ 0 たが、 より つた。 祈 3 其の青 b 0 オー 整 年時代は非常 カラ ガス 漏 n チンは 30 聞 に放蕩 感 くとも 極 まつて にて な 轉 日 げ込 聞 夜 け

大寬 る。 觀 翌 2 0) ること 朝 子 な 金 城 厚 卽 3 龍 6 は Ш は燦 過 0) ち あ カジ 0) 30 予は之を表現する言葉なきを悲し 出 般 如 精 人 3 神 間 來 松 どして連に横はり、 東天 氷 E な 嶋 は と共に済 山 多 E か 養 行つた。 \$ 氣 炎紅を呈すご見る間 0 720 は 1-滿 ね 度太陽 唯 ば つる太陽 なら 着 オご 惡魔 5 る淨き溪流となつて旅人の咽を潤ふすではない 金波銀波 12 1-Da 遭 時 とい (1) 0 は 如 如 ふては忽ち溶解せざるを得 3 1= 3 夜 ふことで は 燃ゆ 森影 0 むの 為 九 觸 3 ご毒 8 時 20 が 6 に目を眩 頃 あ ば であ 如 蛇 る。 何 あ き朝暾 物 30 0) 取り 蜿 を 0 是に於て予 -1-3 72 も溶 らう。 も直 むば カジ は 嶋影 如き 3 かりで んず 75 さず 水 丽 より老 1 太陽 は二 の色を見るの 夜 6 6 熟 あつた。 のこと は つ 情と、 松を排して差 73 击 0 義 6 强 > かっ か。 (7 き印 其の あ 萬 暗 3 物 るの Ł T 黑 象 幽 ~ 樣 あ を亨 玄にして L 0 ラ 見 つた。 外 昇つた。 1-よ北 P 何 け 輝 III 坳 13 頂 水 b 智 阴 M 洋 渡 0 0 一道 も見 も壯 n 魄 に漂 3 6 博 あ K

72

る白

雪も

朝

日

なた

あ 生に在りて をも之を成し得る能力を有す。 30 英雄 シー のみ然らず、 ザーにして尚 欲望は無限 は、 動物も亦己の欲することは或程度まで成し得ないことはない。單り人 我 れに第一を與 にして面も能力は有限である。其處に人生の へよ、 然らざれば何物をも與 ふる勿れ 懊惱 カジ あ と言つた。 るい 煩悶 カジ

然是れ

神

の人間

を琢

き勵まさんとする深き御心に外ならない。

3 神 是れ基督教徒最大の賜である。吾人は須ら〈耶蘇の宗教的意識を服膺し、博愛寬容の太陽主義を以て 彼は人間である。吾も亦人間である。彼の成し得た所は何すれぞ吾に成し能 ん」と言ふた。誠に至言と言はざるを得ない。 と社會とに奉仕 め給ふのである。 神は人間 に自治を許し給うた。 也 然る時にのみ人間は至眞至大であ ねばならない。 内は靈を以て定むべき所に定め、 基督は 「汝等神 の國と正しきとを求めよ、然らば凡ての物汝にあ るの 耶蘇の 生涯は之を示すものであ 外は成すべきことは之を成し はざることの る。 あ 3 ~ mi 200 得さ

る。

て抑 白 色 人 壓 種 7 0) 厭 3 る 迫を受けてる カゞ 物靜 る か カン なる ら白人とさ 深 山 1-在 ^ 見れ つて突如 ば之れ として强烈なる遺傳 を殺戮 せむとするの 性 が音 C あ でを握げ るの 本 7 來た 自 0 T

之を超 SVI SKI 斯 べく人間 12 越 る遺 ... 傳 1-征 性 根強く喰ひ入 服 も之を自己の 者となった。 つてゐる遺傳性 努力によ 威 性爺の つて 鄭 成 脱出することが出 も、未だ人間を支配する最上の勢力と言 功 8 亦た敗北者 の子である 來る。奈翁 は が其 素と降服者 の生 一活は征 ふことは 0 子で 服者 あ 0 來 歷 な 72 史 カジ

情の自然 後 を喧 ン 惡心を起した なつたの は 東京 生 、監獄 n 0 せ 大 然と言は 証 統 なが 光を辿り すり 0) 3 者である 於け 0) 僞 3 の赤 造 地 ねばならぬ。 か て働 位 る罪人の百人の中 10 0) を羸 貧に 解 如 とい くも尚 るで き何 して、父に 5 得 は ふことで n 雖然、 12 な B ほ且つ妻子を養ひ得な 3 V 金 は カコ 錢 九十五 此 0 是 は早く別 あ 1-る。 0 關す 人に n 境遇 皆 m 奮鬪 は 3 人は無財産者であり、残り五人は生活 して 犯罪 n の力も未だ人間 坐 努力 して 僅 かっ 0 犯 温袍 罪の 1 みで カコ 0 つたならばッ 結 九 美 種 果 力 à 食を 月 30 類 境 遇 1-間 を支配する最 之を以 貪る 至 0 學校教育 りては 超 イ悪 者 越 て觀 L 8 其 得 心 あ 72 高 を起 7 0 を受け 3 百 賜 0 H 3 力では す者 分の 境 1= 6 遇 0 72 晨 九十まで 困 0 30 0 0 みで ない。 厭 難なるより あ 1 星と 3 迫 は あ 0) 30 俱 lJ. IJ は 如 許 何 ツヽ 出 欺 Ħ 亦 1-

76

つて突進 IF. 반 3 生 ねばならぬ。 活 1-向 0 7 進まむ 而して其の力は神 とする 努力 多 より人間 妨 げる に興 B 0) へられてあ あ 5 哲 30 人 は 之 神 は を 自己 征 服 の欲すること T 最 高 0) 理 は 想 何 1-事 向

12 が泣けば泣く程私の罪狀は事實と見做された。夫れは私が六歳の年であつた。

を残 株 中 てあつた。 カジ 2 1= 私 0 の家から小學校に通ふ路に大きな棕梠畑があつて其持主 12 周 カコ 雲に聳える大きな したの に賣れ つ 圍 72 夫れを見た私の祖父は異様の眼を光らせ乍ら であつた。 一本に + 五六 たどの評 な 本 つて居るのを見た。 b 然るに一二週の後其の大事の大事 芽 判 桐 かが カゞ 0) あ 出 木があつて、 う T 72 居 72 桐 私 は 夫れ 夫れ は 伐 採 每 は古古 ると其 を貳拾圓 朝 共 田 0) あど の主人が 桐 0 ばかりに 岩 の一本が 芽を 勢の 外のの は親 賣 眺 5 誰かに無惨に 新芽を折つて唯一本だ 8 う新 つた 類 0 0 〉學校 芽が 古田と云 カジ 其 出 に通うて居 て來 桐 もボ ふ家 から 非常 る ツキ であ 何 1-リと打折られ け强さうなの 72 T 好 0 カジ 72 も大きな切 63 桐 其 或 Ti **貳百** 畑 朝 夫

『岩三郎、お前は折りやしまいなア』

價值 話 と尋ねた。 中 カラ 定判決に對して不服を唱へ出して言つた。 其 があつたと云 桐 决 苗 L 720 私は決してそんな事をしないと答 0 折 然るに古田 5 ふ善 n て居 (J 桐の る事 には常 苗 老 言 カラ がられ ひ出 一と云ふ私より二つ三つ年下な男の子が して、 72 0 逐に ナご った。 から、 は 所が古田 部 餘程 日 其道を學校 弱 0) 0 家でも 72 1 に通 相 夫れ ふ私 な カジ 5 あつた。 問 0 所業だ 或 題 時古 1-其常 73 つた。 らうと云 H 0) 一が突然此 家 內 百 る事に カジ 食 圓 4

『おッとう、あれは俺が打ち折つたんぢや』



誤 解に對する

我 から ılı 0 樣 R

沖 郞

筵を 叔 の音を聞 母 が外から入つて來て、行きなり私を叱りつけ 敷 升の米が五錢で買はれる頃にマッチの一 い Ŝ て遊 頃私の臺所の釜の傍に美しいレ んで居たが其の美し v マツ チを手に ツテル 箱が五厘であつた。まだ田舍の臺所ではカチコ 72 して暫 を 貼つた五厘の 3 打眺 めて又た元の位置に置い V ツチ カジ 載つて居た。 72 私は釜の チと 丁度其 前

『こりや摺火を摺つたなア』

を取つて煙草を吸ひつけようとして、中身が少くなつて居るのを見て『誰がこんなに使つたのか』 私は決して一本も摺らない事を言つたが信じて吳れなかつた。そこへ祖父が入つて來て、 其の 7 ツ ح チ

と言つたので私は此の特別裁判で何の異議なくマッチの浪費者と宣告された。私は地團太踏 『今わしが入つて來た時、岩三郎が夫れを提げて居たか 語を言つた。すると叔母 カジ

5

あ

いれが摺

つたに違ひな

V

んで泣い

0 は と思 n ても仕方のない事だと思つた。そして其の宣告に抗訴しなかつた。今に其の柿は私共がどつたも はれて居るのであらう。

111

私はは 內 顔を見て逃げたと誤解されたのであつた。 n 多 私 うい から 歸つて居なか 村役場 ツと氣付い 忘 n て居 0 書記を つた。 720 て直様村長の所 所 して居 彼は非常に憤慨して歸 カジ 期日 た時 1-な 相 つて國 國助 談 と云 に行 助 5 à カジ 720 男が つたので やつて來 其 納 0 稅 120 あつた。 相 0 談 事 が濟 役場 0 調 夫れは私が其問題を忌避 査を依 h 0 で役 入 口 放頼され 場 彼 へ歸 n た事 2 0 て見 顔 が が見えるや あ ると國 つた。 して國 助 私は夫 は 助 早 0) B

五

合つて居ると、 もう二十年の前 何さか云 6 あ る。 和歌山 ふ同級生が向 師 範學校 ふから來 の入口で、 720 私は友人の龍田と云ふ男と卒業試験の成蹟を暗

何を相談して居るんだい」

と彼は言つた。私は滑稽半分に

と言つたので、彼は

無邪氣な此の答

家内は驚いて其の鼠暴を責めたが、常一は平氣で答へて曰く

| 此間おッとうが何本もへし折つたから、俺も殘つとる一本を折つてやつたんぢや

へは一座を怒らしたり笑はしたりしたとの事である。私の祖父は此の小ワシン

þ

0

話を聞いて歸つて私の顏を涙ぐんだ眼付で眺め乍ら、

一が正直な子で無かつたら、 お前が一生怨まれるんであつた」

と言つた。私は今に正直と云ふ言葉を思ふ時、此の話を思ひ出して常一を尊い男だご思はずに居られ

=

て食べつゝ學校に行つた。 私の家には數十本の柿の木がある。秋になると澤山の柿をちぎつて袂に入れて道々友達し分け合つ

出 夫れを四五 るど竹籔 或朝例 しては食べく一學校へ行つた。 0) 0 通り柿 人の土方がやあ 入口 1-親 を袂に入れて食べつゝ平生の通路を變へて小溝づたひに竹籔路を通つて行つた。す 類 の幡川と云ふ家の小 ―― 騷ぎ乍ら取つて居るのを見た。私らは何の氣なしに自分の袂から柿を い柿 の木があつて夫れ に紅い柿の質が房々となつて居た。

道の中で食つて居るのを見た者があると言ふのであつた。私は祖父から叱られた時、子供心ながら疑 所が二三日して怪しからぬ噂を聞いた、夫れは私達が幡川の柿を盗んで取つた、そして夫れ を竹籔

談 N 都宮 宮 府 行 난 10 T 卓 T カジ 其 居 丰 私 か 75 私 義 カジ 來 12 君 0 12 2 720 甚 0 かっ 理 0 此 0 所 5 云 私 直 8 由 0 斯 燒 ~ 2 多 は 理 敎 知 膽 來 討 祉 聞 \$ つて 夫 會 < 720 1-雪 曾 n 知 をするとま < 主 3 諸 居 來 か カラ 5 ž 義 る。 新村 種 3 不 72 な 5 者 0 快 カコ 時 ___ 幸 忠 汚 議 0) 7 0 1 青 -6 實 私 德 雄 22 あ 12 論 言 は 是 は 秋 智 年 12 0 說 ch 多 数 72 赴 單 は 非 水 非 妓 破 常 君 32 任 純 成 120 常 3 夫 石 後 L 1-B な T 再 穀 來 平 n 間 共 激 緒 12 臨 7 カコ B 6 隨 昂 1-5 0) 郎 無 n 論 落を 寫眞 寫真 カジ せ など \$2 分 君 議 友 73 緣 0 を撮 執 如 30 人 Te 論 1-め 4 720 說 h 起 きは な 撮 0) 惡 して今 送 0 3 3 3 多 720 私を T 翌 0 3 别 T 捨 私 は H 會 居 X 後 7 森 は 0) 嫌 2 カジ 72 警察 新 沂 社 > 0) 15 剒 南 0 72 0 行 基 運 會 聞 1= 0 私 本 主 かっ 平 6 T 0) 是 義 私 と言 #: 君 犬 祉 ね は ナジ など 者 其 ば は 所 會 かっ 散 仲 な 20 0) 0 丰 ~ は 3 5 論 R 72 間 行 義 S 黑 8 擲 敵 0 1-82 極 0 0) で 8 6 3 0 动 倒 入 12 何 3 思 カジ T 和 な せ カジ 72 5 從 露 0 其 な 0 3 骨 12 75 22 協 遨 8 來 かっ 妓 况 0) 6 72 1: 0 闖 0 72 Da 5 居 カジ h 逐 ろ 72 cz > 倒 7 学 A を Fu 1-誰 無 浴 來 相 字 は 都 政 カコ 83

20 配 0) 0 受け 達 7 新 睸 治 3 吳 6 ir \$2 紙 四 72 120 + n を な 讀 6 勝 郵 年 哲 までの 六 0) 便 物 月 か E 3 0 憤 ___ ち 宮 日 慌 3 切 うと 私 僅 は 0) 8 L 家 檢 B 713 Fi. 恩 120 判 は 警官 里 난 開 大 5 L 0) 阪 な N + 120 數 かっ カジ か 名 3 --0 紀 大阪 12 0) 0 州 為 まで を カコ 15 家 經 6 \$2 船 打 宅 T かっ 朋 つて 5 搜 查 と云 達 0 吳 遲 3 を受け 5 \$2 n Š 蒸流 120 た 1 友 120 0) 船 は 私 0) 雷 私 6 私 -2-報 3 0 は 宅 は 6 は 其 --型 は 0 + 八 10 毎 何 時 0 日 0 交 品等 刑 被 間 間 C 阴 計 13 達 利 智 3 9 器 經 查 カコ 3 は 0) -1 から 餘 漸 見 其 0) 澤 < 後 1-

失敬な

時 顔を赤らめて去つた。 の滑稽であつたから宥して下さい』と謝罪する心算である。 何 處 に居 3 んだか 其後彼は私にちつとも物を言はないで別れた。 死 んだの か薩 張り知れない。 私は今でも其男に巡り合つたら『あれ 其後もう姓も名も忘 は ホ てしま ン

0

私 妻君が言つた。 カジ 和 h て傳道を助 な例が 歌 Ш Thi 澤山私 で洗禮を受けた當時、 ける事になつたが、 の心に付纒つて居るので、 宣教師 或時叔母の家を訪問しての歸りに幼馴染の家に立寄るご、 のヘレ 私は神經過敏に誤解と云ふ事を恐るゝ時代が フォード君の所へよく出入した。 其結果 小學校を餅 あつた。 其所 0 82

あ 叔母さんも安心して居ますよ」此間 n のが偉 は 西洋人に英語を習はうと思つて、 いですな 私に斯う言ひました。 一寸耶蘇らしい顔をしてゐるのよ) ((岩三郎も耶蘇になる程 本當に叔母さんは の馬 鹿ぢや無い、

見

3

夫を 私は此の 私は此の為めにざれだけ學問上の損失をしたか知れない。 時青年會 v の言葉を聞いてから、どうした でゴ フ オ スペ 1 F* N 君 を讀んで居て、私も一緒に稽古して居たが、 0 方では 何か外の 不平が ものかヘレフオー あつて 私が英語を習はないのだと思はれて居たらしい。 F 君に英語を習ふ事をフッと止 其晩からちつとも教會 め 72 なか 丁度其

する する は 8 信用 5 井 所 0 n 1:0 で して 72 灣 0) 私は 吳 B 私 子 n 私 は 0 己惚 1-思 3 力 とつ は 2 チ すい 思 0 _7 涙ぐ 7 心を全然打 つて 1 は 3/ h 3 ヤ 同 1:0 12 30 自惚を深く悔 0 觀 捨 さうです。 事 72 にてゝ事 件 時 あ 3/ 1 ~ かっ 人間 IJ 5 **b** 7 中 T から 『もう妾は 己惚 つる 伯 爵 あ 心を以て居 1-る 對 自惚 つて、 私の誤解に對する心は今漸 73 るうちは誤 あ h 0 か 病院 初 捨 0 解 場 T 1-0 > 對して 騷 ま 動 つた 20 く其の 苦し 伯 Ł 爵 5 礎を 告白 だけ 思 智

6

3

0 到

堅

72

らし

藤

佐

清

P 小 秋 Ш 13 73 淚 (" 72 な P 13 女 雨 等 5 0 2 70 かっ > は ほ な 0 かっ かっ 2 تح 緑 3 1-1-\$2 日 1 冬流流 廣 0 ば 1: ひ 木きれ 26 髮 冷 かっ 3 生すの た げ 0) ND 絹しふ h 3 10 る < te H W 雲 3 な 0) 思 0 <u>-</u> な b 2 山 < ひ ح < C 麓 ろ 高 つ 1. 5 < を 8 原 < 2 色 生 3 榛 星 < 350 7 2 0 水 0 7 凹空 è ימ 並 5 3 n 3 ورية B 木 75 72 な な か b 蛇 は \$2 似 3 1= 3 0) 日 3 空 3 見 野 空 1: 1-VD 夕 ろ な 多 カコ ٤ 勾 <" げ 秋 見 10 < ° 落 8 派 n B 3 (" b n 8 0 3 かっ 0) 12 h T な 30 海 海 h T

平を 雷 35 る が二十二時間 一儘自 教會員 一分の説 の親 も手 1-睦 會や青年 たくな 間取ると云ふ事實に遭遇した時、私は今まで散々説聞けられ つた。 會 0) 懇話會 夫れ か 3 ^ も刑 私 が旅 事 君 行 カジ をすれば刑事 來 30 私の心は が二名も尾行する、 大い に激 せら た社 n 說敘 會主 72 每 義者の不 刑

沿山 14 カジ + Ŧi. 年 0) 春 T ã) 0 72 胂 戸 1 H 會 カジ あ つて出 席 L 72 其 時 高 知 教會 の多田 素 君 E ろ 0

話をした

私

カジ

話

0

序

です 家宅搜查 は受けたが、 私の宅には紙びれ一枚も一 冊の書籍も押収せらるゝ様なもの しは無か 0 たの

多田 カジ

ちやアんと整理して片付け て置 きあ、 何 一つ 押 収 せられ ない 3

84

とかい あ 3 は 他人が 150 \$2 72 况 私を信 私は此 んや警察ではさう思 C して吳れ 語 7 深 < るとか云 悟 つた。 つたに相違ないと思つた。 ふ己惚を一切投げ捨 私 0 最 8 味 方に 賴む教會 7 其後 720 私 內 部 は 0 何 多田 事 で も事 3 んに 18 して尚 事 實 に見 且 て賞 0 此 語 j カジ

嫌 12 疑 3 我 38 K 得 0 は かっ 72 5 生 n 我等 活 0) 72 8 0 は É 事實に 0 私の 眞 柿 面 活きる を盗 目 身に な 3 h 生活 ので 取 オご を言 つては決 18 あつて、 なすべ は n して大・ 72 き真の 他人に信 0 E, 小の 社 秘 差が 會 訣 ぜらるゝに生 主 を得 な 義 香 12 C 0 彼 7 きる あ 0 恐ろ る。 0 六才 では L 23 0) 事 無 件 時 () 1 V 私 與 ツ L は チ あうし Z たと云 h 3 1-12 使 大き 大 0

基 信者になったのは英語を習 ふ為だと賞められたのも、 家宅捜査の前に整理してあつたのだ

ど褒

を語 CK 72 る 起した機會を持つてゐたことがうかいはれる。 君 ので カジ らうと努 その愛する人を にとつては、 あ 0 め 72 72 かっ 3 B 宗教的生活に入る機會を い 知 抱 n ふことだが、 な 63 て大學 50 君 は 病 2 院 病 Ò に過 床 刹 に死を待つてゐ 那 L 0 12 持つといふことは 十餘 君 の心持い 名譽や地位 H 桵 る変 の苦 ちは君一人の愛人のためのみの 人の 瀏 などに對する慾望を比較的 殊に は ために人生の 君 必要で 0 72 8 1 あると思 <u>ー</u>つ 無常 0 稀有 ٤ 30 多く 發 死後 0 機會 心でなく衆 持 0 永生と を與 つてゐ

*

生

72

8

0

菩提心であらしめ

ないの

君 0 噂 さはやがて僕等の人生 観といふやうな話題に變じて行つた。僕はY君と一 つの火鉢 を園 んで

色々なことを

か

んがへさせ

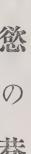
3

n

720

0) 落葉を踏 で 2 數 る Ŀ 間 一に僕 R な音を立てゝ廻つてゐる水車 カゞ い明が凍りもしないで流れ È に人 なく 北 悲 むで多いた。 風に顫 生 Ū がこのころ 懐し 0 5 半 B ので ば 5 へつく可 以 ものであつた。 武藏野の秋ほど僕に秋の寂 痛 あ £ 3 智 切 とい 憐 過 1-一感じて な花 してしまつ ふ念 てわ を抱いてゐるのも の傍に立つて僕 僕は克く目黑から桐ヶ谷、落合、雜司ヶ谷、 カジ 2 强くなつて來た。去年の秋ころまでは、 720 ることは 720 煙のやうに連らなつた疎林 五六年前までは何とも思はな 人 は 間 しみを感じさせるものは 0 あ 幾度灰色の人生を泣 つた。 į, 0 5 玉 とい 蜀 黍 ふことであ 0) うら の涯 3 カコ 枯 なかつた。 たいらう。 には遠い山 つた 30 n 僕には秋 とあてもなく柏や櫟の 12 僕等 人生 畑 1 かたことと 名 の線 カジ は はうか いまだこは も知らぬ が無限 層 3 懷 しもの ふろぎい のは 0) 世





吉田

絃

郎

H君。

72 人を抱 つた。君がこのごろ結婚されたといふことも今夜Y君の唇を通して聞 今夜は衆て君か へて人生の岐路に立たれたといふやうな君の精神上の問題についても略ぼ察 ら紹介されてあったY君が僕の家を訪ねられた。 そして話しはいつか 720 同 時 また君 することが 君 カジ 0 人 7 0 病 86

また地味な布教法 うといふことも察せられ 宗教的經驗の白熱せらるゝやうな刹那は多くは偶然のことではないかと思ふ、殊に僕等のやうな人 君 カジ 愛してわ る人 に深い同情と思想とを持つやうになつたことも察することができる。 なの 病褥 72 の傍 君 カジ 中外日報紙上に紹介され にありて、 色々宗教的 な色彩 てゐ に勝 た或 る佛 つた 人生 教 0 一觀を懐 高 僧 0 極 い 7 8 3 T 真 ることだら 面 目

の途を選ばれたのであるか、僕等には分らないが、 力 ŋ ス ŀ は 何些 0 やうな機會 カジ あ つてその三十三年 释尊 の生 には明かに彼れが飜然として發菩提の念を喚 涯 を美し い童貞を守つて、 Ch たすら に救

間

はさうで

あ

ることが

多いやうに

お

B

はれる。

Ł

P

あ

るといふことである。

出 3 何 れるであらう。 れ僕のかへり行く道は僕にも分つてゐるつもりだ。 けれども僕は尚は一度心狂はしい六月の夜の巷に人間の愛慾をほしいまゝに いつか はまた僕の姿は柏や櫟の落葉樹下に見

は秋の沈靜をかなぐりすてゝ、爛蕩せる思慕のまゝに人生を味つて見たい。

 \mathbf{H} 君。 して

見た

僕

彼 ことでは る心とである。 の女を殺すこともできると思ふ。 は二つの ないと思 一岐路 僕は或る場合には自分の愛するもの ふ。けれども僕は或る場合には自分の最も愛するものを鞭打 に立つてゐ る。 自分を空ふして人を愛しやうとする心と、 ゝために自分の生命を捨 自分をのみ愛しやうとす 7 つことが ることは できる。 さまで困 僕は 難 な

僕は彼を愛してゐるのだらうか

中 僕 心とし は たび てゐ くこん 3 かっ らで なことを自分に問ふて見たくなることが あ 30 あつた。 それ は僕自身の 愛が餘りに自己

らは とであらう。 ると思ふ、 F. * ス n ŀ T わ 工 ブ カジ フス カゞ る ۴, ۴* その ス 丰 ス ŀ Ի 1 平 の作 ı 工 フス フス 静 いな聖徒 中には自分を捨てゝ行 キイと彼れの手紙の上に現はされてゐ キイの手紙を讀むだ際に僕等が强く感じさせられ 的な心の底に流れ つた女のために幸 てゐる変慾 0 鬪 ひを想 るド 福 を祈 ス ŀ 3 るならばどん 男 工 るの フ カジ ス あ は、 30 丰 イ しとの間 彼 床 なに n L 0 5 悲壯 作 心 1-には矛盾 中 根 なこ で あ

界を 想はせるやうに僕の虚な心に仄かな悲しみをつたへて來

まれたる一人の者 欲するからであ とを感ず カコ を受け は孤 つ 容 る。教會に於いてもその他の團體に於い 獨 僕の n カコ 3 6 30 72 偏 弧 10 狹 獨 の世界を欲する。 僕 な性 一つの世界であつた。 寂莫か は家庭を愛することを知 格は家庭の人として全然不適當なもので ら寂寞と秋の武藏野をさ迷 群盲 群衆の世界に生きやうとは想はない。 つてゐ ても僕は常に専 30 ふて歩い H れども僕は家庭 あつ 720 制 君主 720 僕には たらんことを欲す 僕 カジ は 慰めの天地とい 餘 常に暴君 りに 秋はこの 感激 72 小ひ る に乏し らんことを کہ さな暴 僕 B は 0) 惠 は

め 720 け ñ ども今やその秋からして、 落ちつい た静 か な寂寞の天地を 味 ふには、 除りに僕の心は 焦 燥

秋 は信從者の人生であつた。僕等は餘りに早く秋の靜寂 を懐しむだ。

は遅 n 72 カコ B 知れ ない。 け れども僕は春の日 にか ... b 72 晚春 か ら夏の初めにか けての修 息

日と懶い夜がなづかしい。

時 とい ふ自 然 0 醅 V カに 對 L T 我 一身 0 力 を試 3 て見 12 い

若 僕 H は 僧 0 經驗 院 0 に眼 人た 30 るには餘 腹 つて歩 b に强 b 7 3 い 情 12 のだ。 火に 燃えて 2 30 僕 は 過 去 1-於い 7 味 なはなけ n ばなら かっ つた

僕 時 は 倦 に泣きた 怠 六月 の野に入ても孤獨 な暴君たらんことを欲する。笑はんと欲する時笑ひ、 泣 か んと欲

的 を見たとい な血血 彼れ等の心のうちには僕等以上のエピキュリアンの血が流れてゐたかも知れない。 から たゝえられてゐたかも知れない。クリストが甞て四十日の間惡魔に誘 ふ傳説は明かにクリスト自身の**心**のうちに愛慾我執の念が熾烈であつたことを語つてゐる はれ て世界の富と榮と 僕等以上の惡魔

と思ふ。

H

なくなつた。 君世 界が悲しい それが暗いところであらうと明るいところであらうと、自分に賦へられた唯一つの時と ものであるか、よろこばしいところであるか、僕にはそんなことを論ずる餘裕は

空間とであることを想へるときに僕はこの世界を愛せずには居れない。

このやうなことを問はれたとしたら僕はたい一と言で應へることができる。 『それでもお前はこの世界を樂しいさか、悲しいとか、何れにか感ずるであらう』

「人生は寂しい」

かし僕は何時までも生きて見たい。

僕等の周圍 をつくむでゐ るものは暗 である、光明ではない。光明は暗から生れた。僕等の生命 は永

遠の死か ら刹 那的に生み出された光明である。

僕等の生命は死なしには想ふることはできない、恰かも光明が暗なしには想へることのできな

メ 工 ラルリンクは死を目して「生の解放」ださ言つてゐる。死は更らにより自由ある生の世界への發 刺激も 裡に立 むだことで な心 はどこまでも人 1 工 あつた は ち入つて彼 フ 彼 ス あらう。 であつた。 n 丰 慰めも の手紙により ろう オ 間らし 自身 ? の人間らし 僕等 1: あ 最も人間らしい人間であつた。 る 彼 7 どれほど思想と實際との問 は彼 憎惡と愛慾の念にもだえた人で n 多〜彼の真實な性 は 7 n シ ~: 矛盾多い の作を通 IJ P 0 點を發見しなければなら四。 獄 して見た以上 長 8 格に近いものを登見することができると思ふ。 僧 むだ、 に矛盾 彼 彼れ 彼 あ n 石が横は は道德や教義を説く人では 22 0 72 は の實生活に立ち入つて、 或 3 彼 つてゐたかといふことで 時 礼 そこに僕等自身の生 1-の質生活 はどん なに のどこに かっ 更らに彼 なか 1 y. 聖 一活に 者 ð 才 30 それ 72 工 的 對する な平 n フ 20 彼 彼 心 怨 n n

强 < け を最 0 愛することのできぬ とも見られ ほど僕が自己 努力を惜しまない。 B 13 强く愛する。 んな風 る。僕の愛が深ければ深 12 」を愛 考 僕は へて自分自 人に しやうとする けれどもこの これ 矛 盾 かず の苦痛 身 72 のう め 愛 1-矛盾が 色々 ちに 0 は 5 はど僕、 ない .--矛 面 あ で 盾 は 3 を感じ 矛 暗 は强く矛 生取り去られやうとは あらう。 盾をも 3 陸 30 多 悲 作 僕 盾を意識するで 僕は から L 3 しまない。 彼 1-その 5 n 0 カラ 茅 0 J. 盾を取り 僕は人をも愛する、 お 1-な 投 あらう。 もはぬっ げ か 去らんが H 矛盾 自己 る愛の をも は 72 ___ め 光 1-種 同 力; 他 の愛の 强 人を 時 一來る に自分 け n

上 ク b リ ス h あ P る 释 尊 カコ のやうに想 0 心 カジ 澄みちぎつた平静を保つてゐ た迷信から來てゐる。 ク 3 ŋ カコ ス 0 B トも釋尊も人間であつた。 うに 想 るの は僕等 が彼 矛盾 れ等を人 の苦痛 間 以

患むだ人間で

あつたらう。

うに想

3

おる。 殿堂でも 分自分 を真 H 能 君 だ言は の殿堂を築き上げやうとしてゐ ない。 目 君 うかい 考 は へず 僕 たト僕等の怠惰な時間を充たすために僕等は殿堂建設のために僕等の一生をさゝげ カジ 運命 には h と言 居 なことを言 n は なくな うか 0 つた つ る。 72 何 0 ら笑 誰 72 そして めに n 2 か 0 ためにさゝげる殿堂でもない。 働 想 8 知 5 n 7 n 3 ば な いが、 る 想 0 へるほ カコ 知 僕 5 ど死 はこのころ な とい 43 カゞ ふことが 兎も角 ほ 誰 んとうに死とい n 恐ろ を祀 僕等 は絶えず自 しく らうとする

行 寄 海 渡の せては彼等 邊 幾 夕 風 代 遊 また 1-んでゐ の可 吹 幾 か る子 憐なるすさびを跡 n 代 つ 人の子)魔の 供たちは、 は生 やうな大 濱の n カコ T 海原 砂を搔 來 たもなく る 0 そし 底 き集めては色々 に見入 颓 して て濱 る時 に出 行人。 7 子供等 僕 は な殿堂を築い は 砂 恐 のすさびを繰 ろ は L 死 んで 67 てわ 行く。 け る。 n b 3 かっ 殿堂 恐ろ も懐 L L 7 は 破 3 5 03 壞 浪 死 30 3 が打 0 國 n 7 93

ばかり 想 しはず には 居 n ない。 濱の子供た ちの 姿は 見えない。 72 10 彼等 の破壊 せら n 72 るす おび 0 名 カジ あ

僕等の終生の努力が濱邊のすさびと何れほどの Vt ちめ カジ あらう。

自 H 君 5 浪と灰 僕は 色の 濱邊 室が 1= 相抱いてゐるところに死の世界から來る限りない悲しみがたゝえられ 立つて、 暗い海 0 涯 1-立つ白浪を見つめ なが らい ろくなことを想 へてゐ てあ るや

展であるといつてゐる。けれども僕はさうは想はない。死は生の永遠の死である。全は死を境として

永遠の暗に葬られなければならぬ

この刹那のみの生命ー

1-つう か < は暗 まれ 思へばこそ自己の か 12 5 自分の生命こそ永劫の時空の 暗の 世界へと押し流 生命 が二つとない されて行く。 間 懐しいものごなるのではないか。この刹那この から僕が羸ち得た唯一 しか もこの現身の 刹那に のいのちではな あつてのみ光り b かっ を見、 肉體 0 愛を 75

いで居れやう。

威することのできる世界を意識

してゐる。

僕等は何うしてこの刹那の現身の世界を懐しいとお

B

はな

92

H君。

しむ念に燃えることは 不 治の病!これ ほど僕等に恐ろしい自然の命令はあるまい。そしてその刹那ほど痛切にいのちを懷 あるま

生の に人生の に投げら 僕等の 無常 0 夢な 友人は幾人となく不治の を慰めようと努め るべき悲しみでは いことを感じずには る。 な V か。 居 病 7 n 0 うに於 な 12 いつ め に亡は けれどもやが 5 てか僕等は次來世を想像することによりて、少か n 72 僕は彼れ等の生活の足跡を想へるごとに餘 てこの慨きは僕等の知人によりて僕等 に人

ほどに臆病でなければならぬ人生は悲惨ではないか。

か

齊 しく大海の底に破壊せられ行く僕等の 努力で あ るの な か。 V n ども破壊せらるべき殿堂の 一つをも打ち

不治の病、不時の死!
べいることは餘りに悲しいことでは

かやうな言葉を想 へるごとに僕は一層時といふものが 恐ろしくなる。 時は凡べて僕等の建設をも努

力をも中途にして破壊してしまふから。

お 死と破壞の 前は潮路 の涯 大海原を背にしつゝ濱邊の砂を搔き集めてゐる小ひさな建設者 の暗 い唄を聴か ない か。

また夕暮の潮がさして來た。

7

*

H 君。 この年も暮れて行く。 僕の近況はY氏から聞 V て吳れ。 君及び君 の愛する人の 健康を祈 30

秋の日に

米 田 中 葦

城

北

F 匀 1-風 3 1-え 靜 ず か 手 1 VD 足 15 3 (" Z Š n す 2 L な か 葉 n 智 見 E" つ ゝ B 大 初 天 8 ほ 地 19D 1: わ 漲 カゔ Ž. 3 3 3 里 力 を

Ł 1 は す は 72 野 3 r.J 法 ず 12 T 75 ζ 妙 ^ 1 は 72 3 < 天 73 10

人々は遙かに死の海の白波を見つめながら、濱邊に生の創造をうたつて 2 30

濱邊の 鷗 は青い唄をうたふ。鷗の白い翅が夕暮の波頭に滅えるとき、 人間 のすさびが 潮 0 底 1-埋

H 君! 君は 夜の海 ほど懐 しいものが ないことを知つてゐるだらう。煙のやうな潮吹が 風に追はれ

هي 3 海 面を滑つて行くのを知 つてゐ るだらう。

H 君 ! 君 は 海 の笑ひを聴いたことが あるか。 あらゆる人間の努力を破壞しつくした波の冷笑を聽

į, たことが あ 3

海 と暗 と相接するときそこにはたい死の冷笑があるばかりだ。それは恐ろしい笑ひだ、しか

は泣きたいほど懐 しい笑ひだ。

その刹那に全く死を怖れない人間となることができる。 百千の人魚の柔かな髪毛が夢のやうな死の唄をうたひ もし溶けるやうに なが ら僕の生 命を柔か してこの くつる 肉 體 むでゐ カジ 潮 30 ٤ 僕は

なることができるならば僕は 何で死を恐れよう。 死ほど快 いもの は ないであらう。

る。 17 け れども僕等 は死 を恐れ は 何 等 る。 か の殿堂を打ち建てないでは居れない。 僕は僕の建設の努力がやがては死の 少くとも自分自身の殿堂だけを建設

ため

に葬り去られることを知

つてね

12 後 1 0 迎 を待ちたい。

つの殿堂をも所有しないといふことは餘りに淋しい。 たとへ一つの 荒浪のために一擧にして暗と死の底に葬らるゝものであるとしても、破壞せらるべき rella Rock, and Hanging Rock:

Till we reach the Fall of Mountain Goddess, and Bridge of Ascension to Fairy Land.

The scenery was even beyond its reputation.

And the trip was a most pleasant one, though it was not without an accident.

For one of our fair friends slipped into the river when I wanted to take the group's picture on the neck of Camel Rock.

Fortunately the water was not deep, and the sun soon came to rescue, and her clothes got dry, while we took luncheon by the river-side.

At last to consummate the day's work, we climbed the top of Round Conviction Peak, and there amid the rare mountain views, we sang our old school song.

That night we lodged in a mountain hotel, the only house at the foot of the Peak.

There after supper and bath, I spoke of some literary subjects as in the days gone by.

On the third morning we went still farther into the hills.

We reached the ancient Shrine of the Golden Cherry, and admired the ascending and descending dragons, the wonderful wood carvings by a well-known sculptor of old

The return trip was by the other road, that runs over the lonely mountain ridge.

While coming we always looked up at the rocky walls.

Now we looked down over hills and rivers, valleys and villages.

And the contrast was strikingly delightful.

The happy trip was now over.

And taking leave of our four fair friends, with deep sense of gratitude

to them, which was not without sadness after joy, we two at midnight reached home.

How was the little girl during our absence?

That question had often troubled us, while we were in the hills.

But now grandmother tells us the story:

How unusually quiet the little one had been, though she asked of times, "Mother not yet?"

And how each midnight she opened her eyes, to ascertain if mother was at her side, and seeing it was grandmother, how she went again into a quiet sleep.

Thus assured and eased of care, to my study I went to see what letters and papers had arrived, and when, after examining them cursorily, I came back to the parlour, there I found my little girl.

She alone had awoke and come out of bed, while all the other children were soundly sleeping,

And clad in her little brother's black mantle over her night clothes, was eating persimmmon fruit, the promised reward.

She said nothing but cast a glance at me-

She seemed to appeal how patiently she had borne the absence of dear mother so long.

All suddenly, with a shudder, I said to myself;

"If the parents returned not at all, as is the case with so many unfortunate children!"

So touching is the three day's orphan.

What, if it were an orphan for ever?

Tetsuzō Okada

THE THREE DAY'S ORPHAN

Four young fair friends live in the Province of Kai.

My former students they all are.

Now they themselves are teachers.

But they always remember their school days.

Now it is autumn.

And the mountains are clad in gorgeous brocade.

They recalled to mind pleasant excursions, that they had enjoyed while they were students, and planned, if possible, to repeat such joys.

Serveral miles north of Kōfu, the chief town of Kai, there is the beautiful gorge of Mitake widely renowned.

To come there with them and spent a day or two, was the invitation sent to me.

But some elder people, who are now with them, discouraged the plan, for they said;—

"You are no more girls, you are women.

Improper it would be for you to make such a trip with a man."

So they thought and planned further, and asked me to come with my consort.

saw not much need of such decorum.

But to satisfy usage and custom, also to give my consort a rare chance of travelling, gave consent to the plan-

Among the children at our home, the youngest is a girl four years old.

Ever since she was born, she has slept nowhere else than at her mother's side.

Now her mother says to her:

"Sleep only two nights with grandmother, while mother will be gone.

Mother will come back with some reward."

And very reluctantly the girl agreed.

Early one morning the parents left, while all the children were yet asleep.

It was the day following our Emperor's Coronation.

In towns and in villages, all along the way, every house was decorated with flags and lanterns

Beautiful were the people's hearts that beat in unison for their country.

But nature was no less beautiful.

Hills and mountains covered with bright tinged leaves, all seemed to greet us cheerfully.

And when we reached the town of Kōfu, the beaming faces of our friends met us there.

And their elder associates too, they gave us a whole hearted welcome, for we two went together.

They even took us to their woman's hostel for the night.

Such was the benefit of conjugal virtue.

The next morning we six left for Mitake, all bright hearted and light footed.

The pine-clad Wada Pass was first climbed.

Soon the Tenjin Forest was reached.

From whence for several miles along the stream of the Arakawa, opens a gorge of wonderous view.

Where the river runs in rapids and falls, rocky walls stand on the banks, all covered with green pines and red maples.

On the hills and in the river-beds, we see rocks of various shapes:

Sphinx Rock, Camel Rock, Monkey Rock, Hawk Nest Rock, Umb-

諸 カジ B 外 最 な 拜 0 說 かと存 出 É 5 感 復 0 近き 向 人 す心 Da 無 L Z を 珍 K は 小 越 1-しく 生 かっ C 地 3 2 致 居 せ 候 共 は 工 カジ 候。 候。 1 思 L 思 其 は 多 は 程 2 神學者 ず、自己 以 最 然し 誰 n ス 傾 候。 て見 を讀 も多く 服 し 才 ~; 以 1-己 2 盏 n 1 jν 啓發 ては ケン グ 7 すや Ŀ ば 0 8 i ソ 5 此 P ン 暗 其 ~ 2 方 所 示 內 0 w 13 を受 に自己 多 思 -Z 7 人 共 i 格 2/ 1 想 鳴 3 家 あ 唯 iv ^ るに 12 など 3 を 1= あ 心 6 3

阳 次

1 0 8 8 意 w panil 味 ラ ス ŀ カジ T カコ う云 あ とを を 僅 現 1 3 つて カコ 3 b ム質問 1-0 恥 げ 3 知 ィ せ 8 j T 0 チ h を受取 b は 私に 7 思 ےتـ 0 と答 ひ 仕 あ もし今世 まる 力 3 b はすぐに此 3 す。 3 75 A せせ 72 72 0 3 ん。 紀の 御 U F で 2 7 質 1 思 せ 人と浮 私 今生 始 0 は j 問 ます カジ は め を 6 日 自 3 が L 分の 1 此 h 本 7 力が 7 3 等 72 2 3 來 け 疎 3 0 懶 3 0 U

> 哲 S

學

あり

0

人もまだ見當りませ

ho

かし あ

性

格

55

文藝や宗敦には親

弘

カジ

3

カゞ 私

THE 0

味

は

9 カコ

は 5

h

B カラ P 違 え -U U ブ 1 \$ セ チ 1 す。 I. など ン・ þ 1 U w t 1 ス ラ 0 F ン T 才 カラ 動 は 好 か 勿 3 3 論 か ス n 0 ると ŀ は ŋ は ン 2 隨 1. 分 0 10 程 N 度 Ł

富

永

德

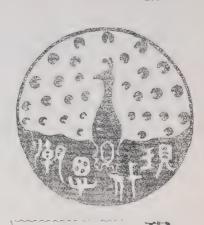
8 ない 思 Ch つめ 72 さころ あ b

村

現代の がうす < 殆 0) んど 事 接 私 です。 は 所學者 しあり た事 現代 13 方で ませ 亦その人 は 0 中一世 3 思 à んの か b 想家とい 5 ません。 界を通り 河 R 學書 0) 共鳴を感ず 思 は じて)で共 想や作 文藝家 は二三 るゝ 人人人 讀 3 品品 B 心鳴を حج などに 738 h b T 毅 感 2 S 家 南 まり 8 は る程 す カジ 論 101

申 B 誰 7 n きませ Z T 多く 申 h 0 7 思 好 想家 き嫌 同 C (J 0) 1 | は うちでも共鳴すると あ かっ りませ 人を選 18

3



代の想象の何人に取る北鳴する?

も現代思潮の流域乃至方向が暗示されゝば幸である。 當るものがあると思ふ。 諸氏の答は固より種々であるが、 之に依て讀者諮者に幾分で 本誌は此間を我が新進思想家に提出して、其高見を叩いた。之を狭義に見れば實際困 難な問題であるかもしれない、併し常に喜んで讀まる、思想家位に見れば、誰にも思

御多忙の折貨等を與へられた諸氏には深く感謝せざるかえない。 編 者

倍能成和辻耆郎氏と。(以下順序到着順)しめられつゝある阿部次郎氏と。何とはなしに安れたる魂の伊藤證信氏と。エゴイズムのために苦

Tetsuzō Okada

A Japanese writer said that I was a follower of Bernhardi. An English editor said that I was an imitator of maeterlinck. I am astonished how one man could be associated with these opposites.

ることを許されるならば、

人性の消極的方面に就て近角常觀氏と、碎かその佛教的なる考へ方の上に就て紀平正美氏

安定を んと努力 奮闘 する 點 あ ります。

藤

灌

内

叫 才 國 b 0 敎 度を思ふさま自 ラ 5 T ンを この 眞 晴 智 の本質を探るこ 加 南 B 面 堀 12 生 ても 人 最 目 カコ b h は な生活 は 日 13 で な態 8 無宗教』を標榜 8 L す B 3 7 T 度 づ > きて 態度 で 3 1-1 分 かっ 今更 0) ! せ 3 8 とに 0 L 悲 あ ٢ くう。 やうで 3 を 思 は B 劇 0 か 力 世 0 5 重 行 思 つ 0 32 1= うち 12 0 してまで、 2 か か め H p な共鳴 す 12 な L ま 2 L A ン (40 です か 若 な 出 72 か たやうに ら答案 き天 と信 5 43 L ク を感 カラ かっ あ 12 奥 ŋ 宗教 才 3 C 3: > U ス \$ L L 佛 C + かっ ŀ の一つ 7 h ます。 た生 て此 蘭 す ン・ 二 3 5 フ 4 イ か 雄 を 西 とし われ る宗 50 活 0 0 K L 3 D 尤 天 本 オ 態 7 才

和

粒

位相互の

少共鳴に

は

なり

カコ

ねます。

盤 C 屢 殊 しく 思

ク

夕

7

意 多

味

0) 才 わ

北

鳴

な

4

H

C 先

越 ヌ 72 12 工 瀬や つも ラ n カコ b 12 17 に物を考へ カジ 1 í) ク ます、 もう בת 5 あ は る氣 L > 時 かっ 分だけ、 12 L 並 薄 彼 R n 阴 な は 1-5 0 1 世 D 5 界 感 生 7 は 私自 與 通 を h 與

ヴ 諸 12 說 あ ろ りま 氏 .1 ち カコ 1-0 日 0 1 共 8 43 本 才 せ 思 は ょ 鳴を 0 どの 想に ク 0 思 h タア T 感 カラ 想 て續 B 共 書 C 家 ます。 2 をり 鳴を ヴ で カコ はど隔 3 n 和 一感ず Ċ は 12 私自 やは 난 F. 8 30 共 ること P T 0 八鳴を感 1 > 身 h 岩 12 0 は 0 くく 鍵 親 カジ 20

1

分

的

1

恐

7 12

3

3 0

R

6 部

すっ

想

家

5

舜

然し ると云 えし人は を得しも 共 共 鳴 1 鳴 義 と云 のを 颇 K ならば殆 る多く 2 8 を事 3 共 程 八鳴と云 を狭 殆 んど 0 義 間 優指 ふに に解 其 題 1-て、一 少きに するの 於て 1 全 3 閑 私 字 78 此 カジ 有 共鳴 せ 傾 0 ず候 啓蒙 3 倒

書を讀 氏 くば、 0 如 h きは K 大 で 抵 益を その 0 書を 受け 3 著『宗教より哲學へ』を讀みて 堪 讀 へず、 B 3 t 0 益 は を蒙ら 槪 h 共 鵙 せ X

ford

ふべ

S

h

تح

(1)

困

2

141

钦

n

な

103

申 5 ん。 Ě ろ 7 多 3 3 は 私 0) 人 自 身 0) R L 大 0) カコ 共 思 址 ね 鳴 鳴 想 3 者 は カジ L 動 智 ます ろ 見 63 出 3 T す 3 かず あ ます。 取 す 3 為 は b 分 Ti 8 け で 今 7 せ

私

ŀ

佐

持

1=

12 かぎ h 3 ※筆をそ 共 皃 私 すの 二年 は 現 化 私 3 程 72 かすっ 0 カコ 1-^ 前 は 7 多 は 12 3 を 容 妙 內 E 5 藤 易 かっ 0) しそ に申 思 ć n 加 想 n 72 Ŀ 家 藤 頃 n L く懐 げ を 1-0) 六合 3 野 比 共 村 鳴 b 較 L 雜 け L す U 吉 è 誌 T ~ を讀 田 は 誰 3 0 参り 等 1-カジ B 最^oの 感 h 0 É 8 せら T 方 私 3 R せ

L

讀 思 嚴 5 密 h 御 家 1= は で 質 居 比 私 問 のうちで私が 較 1 b は ま 云 難 T 世 見 去 < h T 0) せ るこども 讀 で「現代の思想家中」と 御 h 答 和 L んで強 1-隨分 叉共 困り 3 鳴 共鳴 困 を感 難 を感じ 6 す 3 まり 3 現 程 47 0) 代 度 Š 0 70 <

17

w

ŀ

才

才

15

1

で

あ

b

ます。 まい どです。 筈だ て少數 時 狸 7 w 0 ~ うゝ 愛慕 け 解 噺 ス 3 0 勿 3 n ŀ 3 あ 思 流 0 U だ。)右 論 L イ U 3 n n 特 人にだけ見えてゐ 行 つます。 などは 7 T 永 0 To 7 ラ 2 ですっ 歡 3 居 遠 u ン に擧 迎 3 3 3 o-Va 樣 過 右 3 か ~ そし عج ا げ な イ 去 で 0 te w U 5 す ほ チ 1 3 72 才 グ なる 現代 てそ 1-か カジ 1 工 R ラ ソ ъ は * R 3 は 1 <u>۴</u>° 疑 L は 人 1-0) 0) カジ 今 12 動 ス 新 か 7 あまり 2 好 0 7 L b 5 P メ は L 65 3 テ 居 私 日 T 7 工 な 時 5 フ w 本 時 K は は 3 で IJ 深過 ス 彼 あ 3 を造 ン 等 1 + h 3 は ク 3 12 カジ h 思 極 す 出 真 7 12 3 10 め

小 生 0 只 一个愛讀 する 哲 す。 學者 13 P V w チ リ ツ

嚴 1 格 5 な 2 IJ は 3 ツ 現 7 理 代 w 論 0) 家 1 思 で 0) 立 想 あ 論 0 3 3 不安定なる は 共 徹 に宗 底 6 敎 あ 所 的 より 情 ŀ 出 あ w チ は オ

かる そし 值 0) やうであ 3 個 か T 5 人的 n ずに 等 批 深 0 判 生活 5 b 人々はそ 思 から L つます。 の質 想を抱 72 なら n ません。 証券をもたない限 0 in 實生活 てゐる人々 如上 單に 0) がそれ 數 氏 思 想その カラ より 5 1= あ 伴つてわ るやうです B 感動 8 新 3 0 を減 っ價 U な 42

中村長之助

3 のうちで尤も 13 は誠 醅 深さとに就 ナご n ンの創 Vo 示 私 彼處 で 0 は遺 1 多 發見しま 御尋 です。また別に立てたくも思はな 取 得 まで り締 n 造的進化」は、 やう 和 な 2 而 て 深い 1 カジ b カジ カコ せ し、 對しては 文藝どいふやうな區 カジ な書 n 4 ら愛讀措 多大 印象を與 なく カジ ス 0 チョ 物 0 心理學は、 て困ります。 S 而かしまた讀 生命發展の全觀 暗 何と御答えすべきやに 3 あ イノ 能 示 へまし h 多 ませ は 得 讀 ざるやうな書 近年讀 120 n 3 h 72 此 劃は立つて居 C h 72 意識 書物を 處 T 小 いのです。 に就 h まで 生 何 等 だ書物 0) 0) ルグ 廣 から 7 頭 か 物 興 哲 * 2 0)

作は 説や に就 ちい たっ だ面 1 概念の要素となつて居ります。 く頭 5 procity of Human Life フ の中では、totality of human consciousness ぬ啓發を受けました。 munity of mankind といふ思想 の一社 て隨 > ŀ 8 とい の「ミューチュアル、 ナル雑誌 2 略 き思は メー 白 まに 0 ヘン 33 分利益を獲ました。之れ ソ き暗示を與へて吳れまし 會的進 と混 ふ人の く讀みました。又此 1 War and Democracy" き ダー テ の一遺傳 残るところ かかの 82 じて居 w 1-化」と少し古るい 層 IJ 現は ソ "Vital Problems 以 示 ~ 1 は を與 ります。 Ŀ クに るう、 o "Interpreters は最 カジ 以 關 へまし テ 多 といふ考へを深くし Z 戰 す Ĺ 沂 ク 47 イド」などか 蔀 爭 頭 0 _ る評論は、 B やうで 書物は、 水 72 に關する諸名家 までヒバー です 3 720 h 力 などを讀 0 73 of = 1= チ w 著作 其他 此二 è > 就て、 P な點 すつ カジ Religion" 0) ナ , F. 文藝上 家 人生 頭 冊は 小 5 ク ン は んで では、 まで 小 生 少 は とい þ 拔 U 1 とい 0 な きに 何とな 0) 术 サー・ Reci-を甚 古 37 頭 à 0) = カコ P ć 3 3 1 p 丰 人

Lindsay、又は George Santayana の如き稍晦澁な 白しと見申し候、但し名高き F. Grierson の しと思ふ事少からず、最近 Bertram M. Laing. 如く、前に知らざりし人にして、一文を讀みて 大に益を受け、其よりこの人を懐 るとより外に感心せず、其よりもオクス チエ研究、Willian M. Salter の同じ題目をも この頃漸く讀みたれど、唯やさしく書いてあ しく存 フォード U お 如き のニ 面白 り候 0 面

とにて教を受けたる如くにて此又多大に候をでけ、Paulsen と Cohen とには哲學序論と倫理を受け、Paulsen と Cohen とには哲學序論と倫理を受けたる如くにて此又多大に候

等に啓發されし所大に候間接なれど譯書にて啓蒙せられ、英語 に 於 て は間接なれど譯書にて啓蒙せられ、英語 に 於 て は

候 康 7 に饒益せらるゝのみに候、此が素人のはかなさに 園油するのみにて、見るもの珍らしく、 南 故 またその有難きかと存し候 悔の 要するに私の如きは學に常師なく、 國 の先輩には概ね益を受けざるなく、 孔子 改铜考なども見ても多少益せられ申 不宣 唯雜 其 の度毎

庭子木員信

過不仕候。 共鳴りを感ずる人は、小生寡聞未だ不幸にして遭 興味を感じ、同情を持つ人は有之候へ共、心の

石坂養平

起共鳴を感じます。私は哲學者乃至文藝家としての桑木嚴翼氏、

想が深刻强烈らしく見えても、それが真にその人を感じ易くなつてゐます。どんなにその主張や思思想と實生活との間隔のないやうな人に最も共鳴二、私は哲學者にしろ、宗教家にしろ、その人の

数

大正四年の我が思想界

回

極めて 起し、 及び本誌愛讀 論と爲し、 12 随つて思想界の方面に於ても色 しために 一際的 種の方 3 或は議論となり、 0 位 簡 咄嗟に筆を執り、 單にその梗概を記 術 から 活 9 大正 界と為すことが出 別ければ理論的方面と實際的 動となって現はれ 面 者の 昨 種 に於て 類より 五 も丁り、 豫備的参考にしよう。 年の思想界に 間 別ければ宗教界道 0 來事 左に順 我が社 或は研究となり、 年 して大正 更つ が頻 7: 來 る。 A 7 入る吾々 か る多か 今此等 0 to 世 問 20 ふて記憶 回 回 は大正五 「願子は 題 年 顧 った。 の結 一德界 を便 を惹 すれ 同 方面 或 人 綱島牧師は單身日本の教會を代表する志を懐相を闡明して日本の誠意を米國の上下に訓ぐ 告し、 會が日 米國 でて渡米し、 になって 勞働者を代表して全米勞働者大會に 發に招聘 促がした。 會長マーシウ博士はギいて彼の地に渡つた。□ めに渡米した。 基 解決案の 一米問題 一督教徒を代表して 先づず されい 海老名彈正氏はまた加州同胞の啓 ◆●・●・ へんの注意を 基督教的立 解決に盡力しつゝ 此の 友愛會長鈴木文治氏は ユーリック博士は 兩國間の 間もなく米國教會同盟 ユーリ 來朝 一場より此の 基督 ・ツク博 ٢ 病軀を 教 徒 出 土 間 0

であ

つつた。

は大正

四

年

兩國の 3 n 年より政 解決されなければなら 暗澹 教 治 徒は 上 る 0 H f 0 米問題は依然さして解 0 であった。 米問 題。 ねと云ふ輿論 11 是に於て らく宗 佛教界に於ては曹洞宗永平寺 救世軍 基督教新教 及び廓清 各派は協同傳道・ 會婦人 矯 風 た 會 の買

首

森田悟

教と佛教の

接近

と月

東

西

思

次

タ 格と生 意義 つた。四月には統一教會にタゴール講演會がなからざるĠ券を下げたのは遺憾な次第であ 文部 教界の Z 開 根本思想の II 由。 生 「一本幸中の幸であつた。」 かれ、内ヶ崎作三郎氏は「タ 師の入寂は端なくも同宗の上に一大葛 ゴ゛ こに就 省 1 活しに就 同 熟派的 より選舉無効の取消をされ、 12 いて、木村龍寛氏は「タ 批判」に 0 刺轢の甚しきを見た いてい 劇に つつたが、 就いて、吉田絃二郎・ 三浦關造氏は「タゴ 就て講演 眞言宗の豐山S 紛擾を生 II" から 1 0 あ 11 1 n 9 が研究の 派に於 ル 共に宗 の人 氏は 0 藤 107

これに續いて福音主義を標接する の我が宗教界に於ける大な 東京 はまた ある頭末を報 市 米國基督教 爾 内に試み 來の 席の為 代我國の 上と共に 問題の眞 3 挺ん 貢 活 方 獻 動 ・よつて悩まされた我が 基督教徒 殊にこれ が宗教文藝界に於ては 脚する 财 高 道されて居たが、 深長なる所で、 遠なる吠汰優婆尼沙 ⊐* 1 17. 12 を佛教徒によつて為 it の一團によつて爲さ 7 1 早くから内 ル の宗教 [1] 永らく自 題子 學的 土 大なる功 文 ケ時 文文壇 11 型 0 これ 以然主 111: 方面 的 氏 べされ 界觀人生 に於て、 カ 等 を以 績で 0 7: 面 10 0 す 輸 亭 つて 入と共 11 あ よりて 樂主 オ・イ・ 入は我 う 3 自

う。 質の を な 思ひ浮 ず B 大 る發育盛り 鳴する を受け 3 3 而 ばブ ح ま 0) か る、 T L h だ儘を 居 2 43 往 V やう 何 小生 b ŀ 0 0 3 か 3 h 1 得 かっ 小 Da 8 生の は 12 申上げます。 2 な 0 せ る まだ ダイ 知 思 書 Da カコ は 0 켗 物 兒であ n 3 共 ませ 其 な 12 書物 ャ T 處 1-居 無 鳴 17 ります。 んの まで N 入 グです。 T るどころ 論 若し す n は あ 目下 りませ 72 なく 往 やうで、 極 かっ 1 な 御 7 0 < 案外 5 處 尋 15 古 3 滿 ね 真に な感 讀 で 1= 四 U 多 歲 對 處 h

石 原 謙

き小 えられ 宗教史學 h 申 ح 拜 を もなきことに候 生 たは、 ンケル、 Ŀ 殘 念に 現代 派」の 兩 n 御尋 存 者 0 C 思 0 人 ブーセット、 とに最 候。 間 ヘル 丸 想 へど、 に適 E に立場の 小生 7 關して識 8 ン は の如 宗教の獨立 多く 0) L 殊にト 著 狹 き御答を つきリッ き繭 n しき相 心引かる 3 v 所 書 n チ の範 な 極 ど其本質と 違 チな 'ユ し得ざ あ jν めて乏し > やう覺 3 派 圍 は云 内 0 學 3 ょ

> 0) T 宗教學 0 敬 虔 研 3 究者 を强 B 說 す る 般 點 思 想 家 於 より 7 彼 8 は 生 同 近 1=

L

樣他

候。

伯毛詛風

やは 72 の一人も りオ 本當に心 オ ケン 居 b カコ です。 ませ 5 共 鳴を ん。 只幾 覺 える 分 やうな 共鳴を感 思 ず 想 る 家 は 12

3 當の 要求 明批 生ぬ 近 3 镰 かっ い資格をして 6 其 らです。 i 評 な 其の る ピユー 理 をして行 T 5 U 居 由 興 0 0 と、 は 3 味 マニス は から 40 Ł オイ く態度と心胸 ひ換へ 居るからです。 著 其態度が甚だ 忌 2 ŀ しく までもあ 1 ケ とし ンは ると、 ブッキッ ニストとしての批評家」に しては、 高 b 自己批 と力量 しく高 V * シ lt 意 其熱 ユ 世 れども、彼は 味 7 でに於 評 0 あ 踏 情 1= 批 カジ 3 的 未だ 即 評 點 で 家 T L 1= あ であ 私 72 3 本

本當 ことは出 他 E 人に感 來なくなりました。 直 1b 動 U ĺ ますと、一 たり、 他 + X を崇拜し 歲 前 たりする やうに、 U

る

基督なりと告白するを躊躇せずと

ペテ

12

ક

共に、

1

æ. ス・

キリ

ス

1

素。

神に充ちたる人と呼び、 斯く譯さるべき言句

且つ手は 九 以て活

督教界名士叙勳の儀あり、

基督教徒の聖書奉献の事があつた。

たる DE

人間

したりと

Z 11

るれど、 靈に充たされ

予は

を用ゐず、

予

B のみと稱 1

キリス

を以

由る。宮川氏はこれに對して「そは予

つた。

十一月に入りては基督教徒に御大典奉

たと云 界の現 くは自然科 命名すれば倫理學又は自 善は個人と社 云ひ佛と云ひ天と云ふのであると思ふ。 頗る遺憾とする所である。 であるから天に享けた命である。 よう。 闘らずも 學上 會と宇宙根底とな一貫する自然 歸一協會の宗教 0 學者の反對な受けたのは吾 統 これを偉大なる或る者と 一的研究が缺漏して居た 然科學上の實證を得 觀が倫理學若 善は 即ち 會の態度を批評して福音 張を馭撃し、新人にては富永徳麿氏が宣教師 於ては津荷輔氏渡瀬常吉氏等は福音新報の主 は信仰的街氣を以て批判を試み基督敬世界に の處置 も述べ置きたり」と云ふ正認文を送つた。 を痛論した。その論調は何れも激烈であつた の後組合教會の D' 往時の三位 に憤慨する者を生じ、 少壯牧師 體論又は贖罪論の如く世人 中 新報の不當なる批評 南長老宣教 師 そ

云ふ 以て永久に神の子と信ずる基督信徒に有るま 著書「基督と其使命」にはイエ のみ解する人々と自ら班 の後、基督教界には宮川牧師異端問題が 決議案の下に宮川氏に對して異端宣告を が開かれた時、 を發して單に靈に充たされたる人間 事の起りは昨夏輕井澤に南長老宣教 合派の先輩宮川 を同じうして居ると ス・キリストを 牧師の ځ 後見役の入監となり、 い。天理教に於てはまた大疑獄を生じ、管長 本的基督教牧師に對して異端呼ば 固陋なる宣教師輩の無禮を罵らざる 於ては愚の骨張として取扱はれ、何等心靈に の耳目を整動せず、 痛快とする所であつて、 觸るゝ所なきもの ۶ 宗義の 觀あつたは、 諸教師の拘引葬間とな 同 時に 争は已に 獨立 りする 吾人の頗る 獨 現代人に を得な 歩の日

12 きばかりでなく大に盆 の迫害を蒙つて居たが、 基督教界の教育家等は多年遊览にあ 室車平の諮氏はこの光榮を炁うした。 11 ふたものである。 となったのであ 遂に天聴に達して 顯著なるもの歴々として も影響せざるを得ないであらう。 其の効力を失し る。 1: 顧問官加 叡感の餘りに 以て基 のみならず、 あることの大 、現はれ、 國家に攻献 藤老 督 が國 土 11 そ って幾 證 身 0 る の主 明を に害 如上 誠 0 沙

長矢島梶子、家庭學校長留岡幸助、救世軍

道 界

擧があつた。基督教徒の代表者を参列せしめ 同志社々長原田助、立教大學長元田作 明治學院總理井深梶之助。元女子學院 麻布中學校長江原 。續いて基 小説の 頑迷 な に於て「道徳の三階段」と題して近 徳である。 際問 としては非文化 すること屢々である。一 陛下に教授し奉つた程 代最後の陽明學者であり、 とより、 あ るものを載せた。 F 博士は る。 に於ける道徳、 奇怪なる言説 而して國内間の善悪は從はればな 佐 一は國内に於け 人人間 的 象山 なる利己主義 以爲らく 第三ば の門 を弄して後學子孫を嗣 0 月にはまた丁酉倫理・ 老 つる道徳、 通可で 人類間 人であり、 E 2 を同 道 あ 獨 るが、 逸語 徳には三 第二は 一者の梗 持するこ 徳川時 ける を先帝

千年忌が、 子音樂 藏・ から 7 から 哲●藏● 綾 0 五 合 學的基礎」三並良氏の ために、 萬餘の登山 志會の (弦堂から「タゴールの哲學と文藻」は大同て吉田絃二郎氏の「タゴール聖者の生活」前の共鳴を發し、洛陽の紙價を高くした。 相原一郎介氏等の 出 の六合雜誌は 7 19 なる 内ケ崎作三郎、 静觀と思想」藤田逸男氏の「宗教の 行はれ、 四 酒 版して江 自由基督教 内 月 近° 者 代思潮叢書として相次で警醒社 があつた、 以 0 の講堂に 來高 愛讀 の意 と信 タゴール號と稱 日本全土に亘つて信徒無慮 湖の觀迎を受けた。 兆と見るの 野 を受けた。 見を登 仰とを以つて、 設 山 を神 園が 岸本能武太、 五月二十三日には安 に於て け、 「生命中心の哲學」 載したが、 つであ 都 極めて 、弘法大師の一 佛教の方面に 下北部 錦 町二丁 る。 自 岡田哲 岡•田•哲• 現日本 讀書界 0 爲 H ダ にし に信者 かに 目 :7° 女 與す 若干 會員の 得ない たも 云ふ但立 第二項 會の f 教會に屬せざるも 會員となし、 1: て論争を始めて 同 統 の裁決法は 白するも 第 盟 飜 少数黨の 教會 委員 ることを得」と云ふ次に「但 七 ため情 0 附 五 つて佛教界を見るに、 書を 性質の 反 大多數が改 月二十三 加 「福音主義 對者が 一總會 とが、 世 9 9 附し して之を 時 んとしたが青年會憲法第二十 同 ために 1 代後れ 之に議決の f かず 人と開 いことで 教會 割 あ 稲音主義に関する PU より二 0 であ あは n Œ E 0) の教會に 日 ゆる福香主義 の全員 柘者を 信 會員となずことを と難も 0) ば見事に否決されざるを 議案に賛成して居ても、 兩 华 ある。 3 條本位の下に筒 n 権と役 後に起つ から 日に 否 支那 屬する 機闘とする 、制度で 同 决 主 跨 3 此進步的改正案 布 一義の ï 員 5 0 n 教。 福 者 憲 -7: 、ある 1: 問 1: 權・ 信仰 青年 3 た 法 音 0 題 のは青年 八本位 問 第三條 7 一に就 から、 得 權 以 青 Ė て正 年會 題。 九條 を告 を附 あ 義 會 同 0 9 Di 之れに 宗教 民。 ある。 要とす 0 親 2 教育者の心狸に の決議文を草して 議研究を重めること 為に寒心すべきも 超越 す」と云ひ、別に理由 信念の發達な阻害すること無 は教育者に於て之か 研究を促がすことと 反 氏であ 愛起にかゝる歸一● 心善及 (對意見) 姉崎正治、 殊に 1 的 八月に 0 U る る。 對して反對の路を上げ 0 東洋 信念の 11 佛 神の か 教徒 最 揭 同氏は九月 入つては豫て成瀬仁藏、 平 t 存 45 造澤榮一、森村市左衛門諸氏 缺乏し 合 が支 自 和の上に 1: 在 然に 0 曹く教育界 た と為 教會は頃日 那に 温書が 無 なつた。 數 的 否定 此 一視し 回に 簽 居 0) の丁酉倫理に は其唯物論的見 f 1 添 現する宗教心 3 大なる意義を有 布 i を以 教權 一若くは 及んだが たので へられて 1: からんことを 決議文には、 0 此 いのは 真攀 我邦 を有 れに関して 7 國家 あ ずる 、あっ なる 於てそ 加藤 0 6 浮° 田° 終に 青年に かる 地 0 の萌芽 H 以て して を必 來

0

から 七月に 起 至 この 9 問 II 題は六合雑誌を機關 E. とす 問 題 3 んとして又逸したの 蓋 L 傳 道 0 権利は人類共通でなければなら は残念なことで あっ 1: 想を構成するに至つて、 間 0 社 會的 4 活に現はれ この善を稱して神 善と云 3 人

を中心

7

7 8

た

網

凝統 基

して說く方針に

1: 生じ、

この問題は十数年前より

故

小

香 が

H 旭

fili

於て調 顧子が

和さ

物に闘する

力

と云ふ 自

點

思ふ

宗教

と科學は自

然

と云ふ點

から

要

108

等の

懸案で

あ

たか、

今回

一掛くこ

n 樂 運

加 栖 動

獲得せ

歸

2

n

ると思ふ。

卽

ち

:10

界

力が に於て

生

0

理

0)

會に

適

合 する

一督教

を唱

C

基督教

安藤鐵・

應●

派氏等に

よつて

、獲得

出

でた。

たと云 命名すれば倫 界の現象で 善は個人と社 くは自然科 云ひ佛と云 の性で B へよう。 闘ら あ 學 あ 3 び天と云 Ŀ 會と宇宙根底とな から天に享けた命であ 一の統 歸 學又は自 て、これを偉大なる 學者の反對を受け 協會の 的 のであると思ふ。 研究が (然科 宗教 學上 說漏 親が 貫 0 する して居た 偷 質 或 る。 7: のは 證 3 理 學若 を得 善は 者 自 卽 . 吾 ち 於ては津・ 張を も述べ 11 を痛論した。 會の態度を批 0 0 處置に 信仰 後組合教會 馭 的 置きたり」と云ふ正誤文を送つた。 憤慨する そ 評して 0 の論 炒 者を生じ、 壯 調は 福 牧 香 Ŗф 中 南長老宣教師

0

ある遺

憾

此とす

る

所

宗義

9

爲し じき言を發して單に 以て永久に神の子と信ずる基 云 0 生じた。 その後、 み解する かち 決議案の 開かれた時、 督と其使命 事 由る。宮川氏はこれに對して「そは予 0 人々と自ら班 督教界には宮川 下に宮川 起りは昨夏輕井 ごには 鰋に充たされたる人間 氏 合 を同 に對 1 0 先輩宮川 して異端宣告を じうして居る 督 スチ 澤に南長老宣教 前 信 異端 丰 徒 ij 15 問題が ス 牧 有 ろま ŀ m た ٤ 痛快 觸る の耳目を整動せず、 0

かず U 1: 徙 る る人間 1 ス 0 . 0 みと ટ 牛 斯く譯さる 一督なり 共に IJ 充 稱 ス ち 1 たる たり を以て單に 2 告 ス を言 . 白 ٤ する 丰 ٤ 云 ŋ 呼 旬 11 C た 九 ス 3 靈に充たされ れど、 ŀ 用 躊躇せすと あず、 且 た 以て活 一つ予は 予は 素。 督教界名士叙勳の儀あり、 基督教徒の聖書奉献の 學があつた。基督教徒の代表者を参

同志社

々長原田助、立教大學長

元田作

麻布中

學校長江

原。

事があつた。

綴いて

列せし

め

明

治 學院總

元

女子學院

かり 往 時 撃し、新人にては富永徳暦氏が宣教師 の三 答氣を以て批判を試み基督敬世界に 荷輔氏渡瀬常吉氏等は福音新報の 位 體論 文は 何れも 新報の不當なる批評 贖 罪論の 激烈であつた 如く 世人 主

於ては愚の骨張として 後見役の入監となり、 問陋なる宣教 本的基督教牧師に對して 天理教に於てはまた大凝獄を生じ、管長 とする所であつて、 所なきも 師輩の無禮を罵ら のト 觀 諸教師 取 あ 、異端 扱 同 9 時に 11 1: 0 呼 は n 拘 3 11 獨 る IJ 立 吾 何等心靈に 引 する 23 獨 人 to 問とな 0 歩 得 一頗る 頑迷 0 75 B

つた。 + 月に入りては基督教徒に御大典奉 视· 0

爭は已に現代人に 又福音新報にて そ 長矢島梶子、家庭學校長留岡幸助、 ふたも となつ 11 きばかりでなく大に益あることの 遂に天聽に達して叡感の 顯著なるも の迫害を蒙つて居たが、 基督教界の教 室。 主軍平の諸 其の 効力を のである。 1: のであ の歴 氏はこの 失し 育家等は多年 30 々として現は 顧 1: 光祭を 間官加 以て基 0 餘りに 國家に攻 ならず、 藤老 遊境 **然うし** 督 教 n 今回 博 かず 大窓 献せ 國 そ あつて 士 救世軍 0 0 身 明 御 0 0 300 3 幾 た 沙 所 上 意

多

道 德

12

も影響

せざるを得

75

7

わ

代最 際問 なるも + 陛下に教 徳である。 としては非文化 とより、 あ 於て ること展々であ 同 博士は 後 30 12 かけ 9 0) を載せ 道徳の三階段 奇 授し奉つた 陽 怪 明 佐 丽 3 対域 して 學者 久間 道 75 る言 德 7: 的 る なる 國 内 7 象 内間 第三は 以 程 か 山 の門 於 爲らく 利 0 r) を弄して後學子孫を 月には、 の善 と題して 47 己 老 主義 人 Ź 臣 H 人であり、 に悪り 道德、 類 (0 はまた 道 を同 あ 獨 、近著の 徳には三 從はればな 3 遵 丁酉 · 酉倫理 徳川 を先 11 U するこ 梗 3 時

Ŧi. 合

月

11 繚

年忌が いて 空前 志會 6 出 0 和 的 學 堂 Ĺ 校 内ケ崎作三郎、 行 生から「タゴ 田。共 75 讀 版し 0 • 月月以 概と思想」 | 総二郎氏の ・鳴を發し、 内 自° 11 者 思想 山基 介氏 があつ 代。 三並良氏の 0 0 「タゴールの哲學と文薬」「卵氏の「タゴール聖者のを發し、洛陽の紙價を高/を發し、洛陽の紙價を高/ ○思想」藤田逸男氏に江湖の觀迎を受け 愛讀 思 講 來 0 香 等の 意見を と信 堂 H 高 兆と見 7: 本全 13 を受 野 仰 設 山 岸本 市 月二十二 團 土 答 け、 1= it ろの として 「生命中心の哲學」 「生命中心の哲學」 就と稱 から 於て すっ 神 10 載 以 極 都 田 耳 弘。 佛教 めて 2 下 2 相 T: 太·三日 弘法大師 次で 7 町 北 かず るの 二丁 自 部 信 の方面に の・生・ くした。 には安 現 阳 の信 岡。 徒 警 讀 爲 ダ 日本 田哲 無慮 9 書界 心めに 1-目 醒 ZZ* 2 女 者 若干 會員 たも 與す 盟第 て論等 會 B 得 0 教 會員となし、 7: 云 白 ない 会に 少数 0 裁 3, す 盟 5 1: 0 0 决 但 る 委員 附 ることを得」と云ふ次 項 七 五 教 安・で め 反 大多數 法 E 屬 月二十 を始 游 性 書 加 會 對者 とが 惜 0 質 II 4 4 福 總 0 た 0 0) んとし 数 1: 時 11 ざるも 會 1 附 音 同 80 めに 之を 之に ŧ から から 代 -È から = 人と た より ことで 0 あ 改 後 数 義 福 DU あ 0 見るに、 7 n IF. n たが青年 會 E 0) 岩 H 19 開 11 あ ば見 0 會 3 教 主 3 柘 識 信 0) n 家に 全員 あ 3 條 員 雖 0 會 義 年 者 啊 福 に屬 日に 權 か 事 本 દ f 12 後 3 否 音 た 1: 支那布 會憲 6 制度で と役 12 决 贅 位 なすこと 同 10 Ė 機 但 此進 3 否 成 0) 主 寸 す 跨 起 爹 關 る憲法 して 義 n 决 法第二十 下 1 員 3 0 0 0 とする青 教 に箇 1: 步 3 あ 0) 福 1: 者 7 7: 問 權・ 青年 的改 信仰 0 れざる 居て ろ 音 る た た 0 商• 權 11 人 得 に就 か 主 第 7 以 青年 一會同 題 E 5 5 九條 た た て正 本 義 あ 年 չ かる 案 位 告 附 0 加 爲に寒 之れ 教育 宗 氏であ 信念の は教育 の決 超 反 すしと云 研 議 0 民。 る 親 要 2 越的 發起 對 究 研 教 る。 善及 £ 如i• 殊に it 者の 議文 究 意 た ili 1 奶崎 正治、 發達 た 見 る。 者 促 12 0 劉 il 0) US る N から ん草して 、月に入つては銀て成瀬仁藏、 を掲 して il's に於て之 信 か 神 重 す 東 11 佛 すこ 念の な阻害 程に 同 别 2 5. 洋 教 かっか に理 3 存 17 氏 反 ること 215 f 徙 ○歸一教會 遊學 菜 在 た。 11 對 自 ૃ 缺 和 から 必乏し 0 た 然に 普く教育界 0 0 支 た 九 曲 す ٦ と爲 月 歷 書が 上 此 3 300 75 數 的 を上げたの 發 居 0 定 は 9 回 0) 現する宗教 15 3 し若くは 共 J 添 は 大なる f 布 森村市左衛門 唯 及 頃 た 酉倫理に於て THE 0) 決議 人んだが 物論的 3 以 0 か 此 H 權 れに n 3 阗 7 我 あ なー 一蔑視 7 んこと 文 攀 國 邦 義 有 9 あ する 駲 家 0 見 加 ili す 浮° 11 i ż 將 青 0 る 田。 老 13 7 年 諸 か 來 2 た

から から

同

から 起 月に 5 至 0 7 0) 問 II 基 題は六合雜誌を 督 教。 青 意 法。 機關 改• E. とす 問。 題。 3

盏

1

傳

道

0)

利は

人類共通で

なけれ とであ

II

Ťſ

Ġ

想を

樽 社

成

するに至って、

:0

善を稱し

んとして又逸

1 權

たの

しは残べ

念なこ

9

to 得

間 歸

0

會

的 3 30

生

上活に

現はれ

、善と云

3

生 力 1=

0

理

を中

ī

7 6 3

網 3

羅 基

統 督 ٤

ーして 教

說 CA

く方針

1:

0

問

題

奸

前 5

より

故

小

顶

於て調 顧子が

0

懸案で

あ

9 II 應●

たが、

今

漸

n

加 栖 動

獲 香 かず

4 fili

3

n 和

と思

30 物

卽 關

5

0 力

自

然

0 點

から 於

でた

0

最

適

合

1

た

唱

惎

督

教

生じ、

鐵●

等に

0

獲得

運 樂

起

思

ふに、

宗教

と科學は自

然 -

3

ずる

んと云

3. F 0

否

1

だ

0

あ

6 云

から

回

-

北

た 108

應

0

こさを自 國民修養」さ云ふ本を出したのは極めて有益 あ 3 あ 0 癪である。 るの ろと 和論者たることを避け 0 平和論 白 竿頭 1 叉博 ない點が吾人の不満であり大に 或は博士は主戦論者に忌避せら を説 する道 歩を進めて平和論者で 士は博士を中心さする讀書 かな 徳論を のは博士の 編して「今後の んが為め 誤解で の論で くある を丁

基く平

和論に屬す

べきものであると思

3 目

令が

12

平

和論ではなく回

顧子の

奉ずる人

生

0

的 13

勢に應じて 律風 むるこさ、 旨を賞徴せんが為には、 開かれ朝野 教育上 神的方面に於ける我 の趣旨 何なる 十八日には大學山 國 五月 (二)國家の は(一)國民をして世界の物質的 如 B を善導 0) 何なる 來會者四 0 月に を除 いて如何なるもの すること、 注意をなすべきかの三 亘つ 法す 海外發展 國 + 上御 (1)我 ては吉 0 名さ告げ べきか、 殿 位置を自覺せ (三)前二項 吉田靜致氏 0 に時局懇談 必 國 (口)特 の政治 一然的趨 を保持 た。 7 であ る政 りの 職問題を生じ、内 士の收監となり、 醜陋なる政 公治道 つたが、

訴ふる交戰國々民の道德的主張」ご云ふ論文造氏 は昨年より數回につて「中立國々民に の雑誌又は演説に於て れより量き六合雑誌では内ケ崎作三郎氏等が 貞操論叉は岩野氏夫婦の雕婚問題は道德界の●●● であつた。 の羅針を提供せんさした。安部磯雄氏は諸種 性の倫理男女道徳論を鼓吹して道徳問題解決 大問題さなり、 論を更に高唱され、 西倫理によって紹介したのは有益なる企 又春以 道徳問題の中心になつた。是 來婦人達によって叫ばれた 爾來の婦人論及び道德 2 く青年 である。 こさを祈る。 谷 る」さ云ぶのであつた。 3 んで居るが 9 所が大であるから盆 1: 府 九月十五日には内務大臣及び文部大臣 智徳體を養成することは 縣 その内容は 團 善良 及び地方青年團體に對 門里 なる 地方に於け 抑 國 運 も青年團 公民 「青年團體は今や全國 伸暢 々そ さなり 實に政 地方の 3 體は青年 0 心孝の 刻 發 開 して訓 府 F 修養の 0 完備

務で

を體

七月に至つては選舉干渉に基く大浦内相の濱 は太陽に據つて一角の重鎮さして活動した。 退隠さ迄なつた。これは官吏及び議員に屬す 新開雜誌記者の蝟集攻に 告訴となり衆議院書記官長及び二三代議 徳の腐敗であ 治家さか陣頭 批判 にくやや 大浦内相の蘇職さなり政界 政 彈劾案となり、 大正思想 する 藻の つて大正 遭つた。浮田和民氏 に置 やうに 利害上 斯 かる官僚的 界の重鎖さして かざる自 より なつ 絲 政友會員よ 新の不祥事 1: でなく國 のは 一覧者さ 暴政さ この九月に在りて か。 けれ 事件であつて、 木家再興問題であつた。これ 團體を束縛することの 如き拜 來事であった。 跨つて政府及び あ 動であつ 吹するこさに 旨に盲從するを以て忠さ心得しめ、 いるけれ ばならない。 猥りに訓令を發して 解又は ども 1:0 一諫言 於ては人後に 此 (C)# 9 國民教育を禍した 新乃木家が 政)は巡法 朝野に亘つて 機闘は飽く迄 0) 府は 君臣道 111 道 この 理 きやう注 規 0 徳を破 矩 落 徳を地 0) 自 は道道 繩點 如 ちては ら自 何 躁 0 治 へた行動であ 大問 の言ふが 意 た 的 4 to 顯 なら 問 1 以て青年 治的でな 石なる出 國法 11 題 1: には乃 を鼓 -1

相

A が面白 調ず」と云・ く讀まれた。 一ふ論 文が丁酉倫理に載 この間に千葉鑑 なり、 民に於ける政 民 の権 選舉 利 上より

治

道

徳の

發達である。

蔑にしても善

いこさを國民に

教

涉

な

國

民

11

6

吉·博

氏の めて有益 於ては基 獨乙の思潮に 3 デ 安論はこく は十 力 п か 一月には同じく丁酉倫理に於て、 ||治氏が「思想界の非國家主義の源泉」と 1 ッ か 許 なる バ 1 一督教で 分盡 なけ 12 ッ つて居る」と。又一月の丁酉倫理には 3 獨逸思想と軍國主義」と題する! 不義 -ゲ 7 ら自分の 際 出し 1 論文が ル 0 12 3 n it 間 はこつ ク 0 で批評の限りでな ばなら n 0 n のると結 ス 理 理 戦争でも自分の 才 ばならん 道 0 1 想主 想主義 揭 國 德 0 唯 4 げられ no が悪くて 11 系統が 物論 論し > 北 等 的 及 0 0 む 國家主 つであ 的 0 CN 7 源 n 加 あ 泉は から 非 思 7 あ ₹, 得 るの 理 0 4 5 る。 國 國 飽く迄 废 の場 潮 いから略 想 亚 義 0 する 我が を守 U 際 7 朝。永三 要旨 る合に 主 流 耶 間 を 戰 は 義的 あ なる 古 加 國 佛 3 0 4 爭 v) カ 極 11 田 0 7: 道 0 かず II 井晋太郎· 居た。 誌に 德革新論, 年の道 なる た岩橋氏の 反 であると言ふ 0 爲して居ない き觀を與へ 料の 1 次第か説 **阪大なるも** を摘載して篇を爲し 刊紹介で充分にし 一對で 批 がでは 蒐集と 大日本倫理簽達 研 ブ 徳界に あ 究 ラグ 氏は二 る。 的 明して居ない。 ٤ かう て科 學者 のを出 努 論 云 7 ガに けれ のが遺 3. 文 が テ 7 學的 た 月 功 元 0 ズ. 載 以 績 對して F 科 ふ書方は 列 1 7 3 書を公にして 2 定史」と號 た £ 學的 燃で 傳に たが 置い 4 來 0 7 回 0 居る 1: 即 批 顧子 數 此 倫 學者 2 75 1:0 0 ケ II n あ 刿 IF. 理 れだけの 月に 惜し 7: る。 11 敬 3 東 體倫理史の體系を 0 り、 の批評は本誌の 説」と題して精細 岩橋遊成氏 服に 洋には f 11 0 4 小柳司氣太氏 異彩を放 る二千 新道德 耳 0 顧 + 文 學 いことには材 子 今章そ である。福 物 質し 說 9 於ては必 八史 て哲學雜・ た II 0 - 頁程 大正 蒐集 に絕對に 略 一發達 0) to 5 f 0 提唱 II 7 四 要 如 0 新 0 0 去 造博士は 際的 る所 ると 議會に の戦 行動 あ 氏 際上 40 國 15 交 到なる批評 破壊させ 抗 類 る。 の要旨 0 際 となっ ょ かず Ŀ 0) 興論で を放 無抵 以 II 裁 9 恰 旗 0 0) を説破、 自 云ふのであつた。これに對 ょ 判 7 利なる唯 權 IE. る道 六月 隨 衛 11 抗 所 國 1:0 つて處決せんとす 任して置く 謀 0 を加 は宗教 際的 あ つて 0 0 術 16 平 進 であ 戰 0 き 數 ラ 恶 丁酉倫 华 和 3 歩 教育 か " 0 爲 國際法 際問 30 12 を促が 0 1: 馴 對 セ 主戦 為 と云ふの 0 を改 外 ラ IF. 致 す N 理。 " 交でで 0 眞理であ 當であ X) T 氏 3 ---に戦 紛 論 さなけ 加 1: 3 刿 0) 3 行 45 擾 12 あ 12 斷 輿論 寫 を條 全 氏 30 3 7 30 旨 II 和 至 た 流論の め 0 0 戰 ると同 n 1 あ 30 失 は 11 して 主 言は 際條 むる 約 敵 0 爭 る。 雏 ば II 抵 國 共 叉 0 故 • 戦 3 な して 中島 際 11 カ 文 破 時 ~ 約 15 爭 か

12 思 政 潮 策 精 豚 す る 及 1 CN ラ 之れ 1 チ 50 ス 7 12 \equiv 月 13

國主義の あ 哲 奴隷とな る。 學 的 獨逸 チ大 書界に讀まれ、 學 氏のラッ 講 は外國雑誌の到着と共に 師 即ラツセルー 七 五 月には 12 氏 氏 を反馭 0 戦争の倫理」 1 18 也 ート大學教授 3 ケン 「無抵抗と ブ から IJ 讀 "

意識

0

道

德

與 簽達に伴

な

振

9

今後

0

C

あ

0

國 道 II 誤

論

1

た。

0

11

非 とか

Œ

为

3

5 11

굸

3.

のであった。

谷本富氏は

また道・

現時の戦争」

かず

讀

去

n

我が道德界の議論の

層す

べき性質のものである。

勿論功

利主義

回 ると結 的

顧子

が思ふに

博士

0 論 3 生

0

論は 常に

當然

75

和論

想主義

た 工

7 君

軍

1

ッ

チ

0

主

道

德

說

3

1

1: め

萬

壞的

明

6

ŋ

E

主義

及び

6

11

無

であ

周

我 Di 張 0 か するに 同 八の野村 たの II 物 あ 限昨氏は自 っつて 足 1) だ同 歷 ts かつ 史の 氏に 我。 考證を忽に 論を高唱し 餘 りに 自 する て此 C 加

界が

を併

せて

組織せ

何れも社會

問

でこれを傾

迹 徜

足

一並を合せて 回顧子は

が社 てい 然主義理想主義の上に立脚して、 11 たが 員• 7 0 時 3 すると云ふ現象を來たした。 って論調を合して審究され、 理想的 代 主さして問・ 等は曾て文藝家の階 大なる自覺心を促がし 會は た遠 叉は 文• 今は進んで之れを行ふと云ふ 又は婦人達の貞 質現に 道徳宗教の 觀念 問題 き觀照上の文藝で を今は喜んでこれを論じこれ 野界の方面 年に至り政治經濟法律の方 題・ 0) の文藝であ 闘し 如き、 女流文士 もので を見 方面に於て、 個人の 笑して居た行 時代に向 何 るに 操問 n つった。 選 真 VJ あ f これは我が文藝 大正 八體的 嘗て蛇 5 題 例 道 實際 U 0 ば文士 2 今までは自 酮 29 現實に對 動 的 如 然 れが 年 に奔走す 自 0 為で 水 蛆 問題 3 傾向を來 己の 0 面 3 自己を を歌 視して 0 文壇 極め 岩野 に於 に我 あつ 0. 唇 に向 議・ 2 生 氏の「 司0はし 氏 夏0た の 目0 通 水氏の「 隨筆 戀愛の道 たやうである。 などが評判された方であ 最近に於ける我が文壇の 6 井 反つて佳作があつたやうに に至つては平家の都落で 舞臺も作 因襲的芝居であつて何等の新 の連中 場所さへ 一體の問題 つて劇壇の方を見 一德性 一砂丘」を見たが多少の特色はあつて 見物で持 優も凡て傳統 明ならず草

氏の「あらくれ」、谷崎氏の「おすと巳之助」 は夏目氏の「父の婚禮」、中村氏の「談反人」、徳田 派の「悪夢」、小れての「離した。 昨年の數ある作物の中で いたがりに歸した。 昨年の數ある作物の中で い 啓發して進むべきものであると云ふ意 政治法律經濟又は道德宗教と次第に歩調 曾て文藝は政 聴愛讀せんとする に題に 理想の具 小說 を叫び、 らる、前兆であつて、 觸れ、 をものし 八體的 治法 男女道 思想は 青年 るが、 た事 質現に 律經 思はれ 徳論の 風 男女はまた 無名 があ u 濟道德宗教 渤 於て を生じた。 顧 見 5 子 0 作物は 作家に 見 0 7: 地 Tî. 想像 より より かり 12 好 ٤ 2 相 相のがあつた。この間にあつて岡田哲藏と 衛」、佐々木信線氏の「心の花」等にも田夕暮氏の「詩歌」、土岐哀果氏の、「生いないことを記憶しなければならぬ。こ 「吾が働け」は獨り 歎いて 派、鷹子派、子規派と云ふやうにを見るに謂ゆる混亂紛糾の狀態で れたの 點の 7 人の常であ 野口精子女史の「タばえ」また萬線 為して分派分流 置く 遊 倒があつた。 飲乏し 心際に宿 におっての などは 檄を飛ば あっ って 大 感情によって 歡 の争 F. 1) また漢詩界では f 迎する Ŧi, 鷄群 あし 大に復 を事とし、 度 0 年間 所で、 0 1: 処興を 人の為 和 鶴 歌 には何等 の赴 園る一 る た 同 み知識にます ひ。この外前・ す 書 聖明 耳. 其 次に作・壇・ 中に 0 B あ 3 衰 門 中 氏 Ś は俳 戶 0 た

V) 現上に於て 傑 1 特色が 更に高 抜けて今は老熟自 作 心として二三筒 年 i de 下と進 あ 外か見るに も往 歩 0 跡 年 所に 0 から 如き苦 大 枢 一會が 0 IF. 域 1/2 信 红 0 四界は文展・ 致 時 中には 2 及 0 11 た 11

更に歌・

の方を に瀬

元るに岩。

1110 あ

牧

4E

狀

態で

9

つてゐる觀が

あ

5

新。派。

何處の

天涯 0

に居 た。

3

P

的

古式の

儘で、

徒

に市

n

ば舊劇

の方は爾

來

0

(

き成績がなくて越年

i

7:

権に 層・

しい企が

なく、

かかつ

たゞけで

なる

た

V あ

同

112 なけれ 皇室を崇めて忠孝を説き反 で進むこさに努力しなけれ 11 CK 十月には内ケ崎作三郎氏の人生日訓が現はれんさし、聞くも忌はしい問題を惹き起した。 間 風 中の 大警祭は實に千古の御盛觀、典の禊祓をやつた。十一月 は京都市民の不徳の罪であるが 俗壞鼠 を遠くる脳諛の臣 のは する

鏡敬 上の失態である。 ばなられ。 諸の よりも 亘つて發現され、 普及され、 有 自に は質に睡 不 及び いこさである。 ・徳を滅ぼし、 至つてはまた松崎 近した。 祭政 又御大典後 圆 薬 民的 あ す 君側 II 御 一致政教 べきものであ 皇室さヨ 協同 や訴訟 一月の御即位の禮及 大寶 の好は速 つて皇室さ人民さ ばならい。 観で に於ける京都市 吾々はこの方針 の特 0 博士の著作的 あ 沙 思想 民 致の思想が 神が帝 つた。皇室 へさの 一は當局 に一掃し 無暗に つつた。 が判明 f 關 國 なら 係 0 さすれ るが, れば、 も掲げ 觀に存せずに一般社會の主觀に存すると言ふ るからこいでは批評は加 0 いては吉田靜致、藤井健灰郎、中島德藏氏等粉飾の上に高唱したものであるが、これに就 のは主觀 なければならぬし、 々聞か 於ける哲學雜誌丁酉倫理誌上で回 3 箍 雑誌に於て、 木厳翼氏は講演又は哲學雑誌丁酉の場合、紀平、西田、田中の諸氏で調合、紀平、西田、田中の諸氏で調合、田中の諸氏で へ心を爲し、反てヰンデルバント、リッケル・ 脚地に於てオイケンなどの亞流を汲まない すれば爾來の理想主義の哲學に陷るこ見る 倫理學上の意見さの歴史的 科學の一 意見を發表したが、これは氏の 桑木氏の主觀形式の妥當性が個人の主 此の一般的妥當性を宇宙の なけれ 3 容 區別 れて居つたので、 觀 ばなら の兩界を統 爾來の主觀主義及び自 論 及び價値の 又回顧子の新なる意見を ぬので、一 へない。 せんさした試であ 更にこれを現代的 問題に觸 考證にも這入ら 寸大問] ,酉倫 精神又は神 唯だ一言す それ 「顧子等が」屋 洋 あ 行 n 然科學規 理 9 は桑木 題であ 以前 て新 其 他 桑* 15 な 0 にも登載された。それから紀平正美氏の認識・史的考證を傾けて發表され、四月の哲學雑誌 論は自己の研究になったも これ 普汎 を有 理學を單に哲學の出店さして取扱はんさする 顧子は桑木氏の如く哲學で宗教を分雕し、倫 氏の反對する道理は見出し 意識の上 の性(意識)に發する善である。これを宗教的 以てすれば、天道であつて共に人道である。人 に規範律であるさ説くのである。 値上より見る時 自 我 性であ を科學上 1 に於ける客 より神と稱することに於て何も桑木 個 つるさ主 人の 一より見る時は自 11 主 親的 個人の意識の經過で 張 觀に存する ずる 自 0 性で ので飜譯物さは 得ない つであ 然律で 社 會的 と思ふ 東洋の語 て宇宙 これ

學

立

かる その間に於て多少なりさも自家の主張を 年度 ルグソンものゝ て我が哲學界は主さし 研究であった し トに左袒したのである。け なる宇宙精神では申さないが、 所見によればこの

般的

論意識的 顧子等の

を出し、田中王

堂

氏

f

亦 7:

爾 この

來

0

間 獨 あ

立つて 的 研

究で 西●信

つて特徴

個人の主觀的

を發揮して一異彩を放つた。

けれ 妥當性を勿

とも

回

「思索さ體驗」も亦た自家の

なり、

東洋の思想にも入り、

田・仰の問題

氏

112

井力

郎

有井川上

取近教學評論界一覽

(基督教を中心さして見たる、

研究 論說 解釋

宗教學上より拜したる大嘗祭(弘道)加	スメリヤの古石碑(同上)	神學で神話(同上)小	古今の神觀に就て(神學之研究)加	御大禮に際して我建國の精神を明にす(新日本)…大	組先崇拜の問題(同上)	剛健なる個性(東亞之光)	犯罪後の意識狀態(同上)	貞操問題の文化的基礎(心理研究)	ドストフェスキイの宗教(早稻田文學)加	中世紀の修道院に就いて(文明評論)石	我國の婦人に對する希望(同上)	男女勢力の對照(新女界)安	基督教 已國家 (護教)	近代人で基督教(同上)額	日本民族の現在及將來(新人)海	
藤		島	藤	肥	田	4	水	田	能		IL.	井	а.	賀	老	
		STEET STEET	High	ME	ìrt	崎	18	保	作	原	7:	ラト	永	鹿	名	
玄		茂	玄	重	芳	作三	淳	之	次		3	哲	德	之	311	
智		雄	智	信	巌	郎	行	助	郎	謙	子	子	陷	助	Œ	
色	自		薄			*	*	消	Ħ	聖	倫	結	打	デ	批	

淳	之	次		£.	哲	德	之	彈							
行	助	郎	謙	子	子	磨	助	Œ							
*貧民心理の研究(警醒社一、八〇)賀	消費組合解說(勞動及產業)安	日本佛教の特色(無熱燈)河	撃德太子(同上)	倫理上の根本問題(東洋哲學)和	結婚を戀愛に就て(同上)	哲學を有せざる日本識(同上)工	デモクラスイの真意義(同上)高	批評の負債(同上)	大戰爭さ宗教思想(同上)	沒我的精神(六合雜誌)	約翰傳總論(同 上)吉	天上の友を讀む(同上)網	雅各書通俗講義(大坂講壇)空	自由の要求(開拓者)元	
]1]	部	野	驴	垣	條	藤	橋	田	ケ崎	部	崎	島]1]	田	
数	码线	法	黄	末	忠	直太	清	折	作三	礁	彦	佳	經	作之	
彦	雄	套	洋	松	衛	郎	晋	藏	那	雄	mu-th "	古	輝	進	

感感想 修養

聖パウロ(丁未版社〇、五〇)…マイアズ原著…齋

藤

勇霹

聖フランチエスコを憶ふ(同 色々な感想(同上)..... 分の問題さ感想(同 高時代の島地雷夢君の追懷(同 倖の秀才島地雷夢(六合雜誌)…… <u>+</u>) 上).... <u>+</u>) 內 型 酹 山 樹 源 飘 石

0 た 如 0 上 を置 これ たの 11 及び 下 文人派、 た老 堪 變 何 0 とな たが 0 籪 けす II 術 知 えなな 世 機圖 TS 點 は思想で 家的 您 急に 3 繪師 界觀 って見 巧に 1= 筆 る。 生 を修得して 及び 此 あ L 蓍 を振 活 的 等 品 改 f 土作派に至っては思想が貧 A n り 0 L 走 位 上 そ 13 生觀とは没交渉 Ĭ 良 0 n 0 研 60 あ つて來 顧子は殊に 查員 の苦 n To はんこさ 審 II から 生 ば 初 批 缺陷 究に餘念なく、 學宗教 觀に 耄 7 出 多 學入門 查 評 など 境に 51 世 員 た 旅 か て、 烈しく 即 界觀 75 顧 ない 12 5 的 5 生 沈んで 60 0 1/2 道 子 注 7: さう感じた。 品 とな 5 C 世 學 希望する ٠, 人生 德 7: II 交 界觀 粗 代 息 す E 7 0 見 百年 回 to 3 後に樂 た f 觀 温于 政 3 15 あ 大 見 通 粗の 今までは筆 劣り f 处 人人生 窥 研 る。 0 沿 給 は従に老人 3 IE. え出 U 此 はざる 为言 gifi 想 見 究 か 29 越 0 0) 大系 垭. に重き 一弱で 一觀に して 0 湾 0 思 6 E 年 黑 1 1 える して た 本 法律 ふに 見る 本語 0 7: 7: 統 見 庆 體 文 定 我 黑 4 致 於 存 3 來 思想 所に 15 泣 6 あ 專 Ŀ 法 から 1: 鄭 するだ de. 理 あ 係 9 111 か 4 30 心 15 あ 想 7: 要す 心有 等 0 盛 米 9 0 界 1 ば 思想 た 11 収 は る。 九 0 II > 0 世 はそ 置い む 否 獲 唯 具 生 め 雅 if 樂 るに 聽 人 だ忍 滥 至 た 個 開始 樂 3 11 11 II 風 Ć か。 0 此等 を創 する 0 11 思 人 大 殊に な 的 可 理 To (a) 0) 3 心 で 神に 自然 に質 思 耐 0 能 jΕ 移 新 線 3 n 想象 から 思想 あ 0 と勤 6 0 性 も多く、 四 L 運 な る。 の努力 入り、 源泉で 如 努力なき者に天 0 現 0 华 3 俗 德 -id: 動 か 觸 前に き勢 勉 0 \$ 發 0 る 樂 法 to to 9 n 一後達が 揮で やう 0 0) 3 我 易 7: るさころに人 制 11 紹 思想天 N. あらんここた。 如 介さ あ あ 隨 思 gir 共 3. 0 とり、 700 つて質 11 0 る已で あ 想 注 る Ŀ 唯 鳴 大 あ る。 B 3) 界 12 n 75 加 ふる。 降 來 器 为。 E 11 1 想 0) は 7: 太。發 9 して ille オ 才 あ 現 ご大 五 行 7: (必 1 1 3 田。 うる。 in 年 11 文 質に於て も多か 0 0 努力なき あ 要 窯。る 0 鬼 功 0 接 な かず る 條 た 雄。 15 Ch カギ 多 る陽 我 神 た 家で p, 件 氏 3 111 to 能 5 かぎ

雅 的 10

卷底に居夫々歌に

發蝶

紙一二○頁ボイント價各○●三五宛〉の第一編である。近代文藝の大觀を知らんであるから近代文藝の大觀を知らんの第一編である。近代文藝に闊する人には助さならな。近代文藝に闊すると、近代文藝に関すると、 布んのる叢表と書氏書

紙欲でのの

「個学の名野に分すて論じてある。 「個哲人カアベンターの論文を譯した」 「四哲人カアベンターの論文を譯した」 「日の女、過去の是婚、將來の結婚自由」 「他答、未成熟な男子、奴隷なる女、 「他答案の名野に分すて論じてある。英 由 社 會 0 男女關 秀譯

社自も図

會由のの生

拘 3

はら

曲 方

何

n

B

古物で

を n

蓄 ナンに

隨

一分諸

音樂

會が

あ

演

奏

3

0)

g

うに

NA ~ か

擔ぎ廻つて居るやうに

銀 8 丁日 未向 版 社む 發子 行著



に不道理なる矛盾を有するかは、今度の御大典に關連して暴露 現制度の上より主張する政府の常套語なり。然共此常套語 拜を强制したり。 明白に証明さるに至れり。 告する所あり、 寺院及信徒にして、 は基督教のみさせられ、基督教は反國體なりなどいふ誣告をうけ 寄する神社を宗教以外におくさへ不當なろに、

官吏が其宗教的色 おいて、 神社主義と佛教との衝突 縣當局は縣下に命令して、注目繩神棚の設備や神社参 今や此不當なる神社制度が宗教全體さ相容れざるとは 由來神社に對して其宗教上の意義に於て衝突を見たる 遂に縣當局さ相爭ふに歪れり。元來宗教的歷史 而して之に對し反對せるものは第一に真宗の各 其本山宗務所は明に之を異法さして信徒に警 即ち石川、 島根、廣島、香川の諮縣下 神社は宗教に非ずさは、気 か如

て根本的解決をなすの要ありて信す。にして之は宜しく宗教法などの提出前に佛督兩派の側から厳談し彩を更に濃厚ならしめんさする所置の如きは、甚だ不當なるもの

度外視したると、叙勳叙章賞表者中には僧侶を全然度外視し又は 動任待遇の各派菅長を大典に参列せしめず僅に一名の代表者を出 府より冷遇されたりさて近時大不平な渡らし始たり。 佛教團體を以て公益團髓と認めざる故、 來の習慣もあることにして、今更空海や親鸞に正 させたると、其席次は代議士の後にありしと、 開佛教徒と官権の反目 何さ思はるゝ所なるが、 薄遇したるここなど其原因なるが如し。 過般京都において聖駕奉迎の際府當局 御大典に際し佛教徒は甚しく政 佛教僧侶の叙勳などは古 御苑内の奉迎を許さい 地方賜餐に僧侶な 一位さいふも 即ち第 v} 11 如

者

5

地 雷

																- 11	[6 -		
妻の無能力の問題(六合雑誌)山御大典こ矯風(新日本)山	日本農民性論(中央公論)横	七議會の重大問題(同上)路	毫彎時別立去別変改良以秦(荷日本)	民經濟上より見たる一等國の運命(早稻田講演)服	御大典で國民の覺悟(三田文學)	加州勞働大會出席の記(勞働及產業)。鈴神大典こ藝妓問題(廓清)	時事評論	* 靜座三年(大日本圖書會社價一、〇〇)	* 美人禪(丙午出版社價一、〇〇)	*銀さ藍(丁未出版社價○、八五)日	文壇警話(生活之藝術)	烈女コルデーさ一青年のロマンス(早稻田講演)…中	一枚の葉書との運命(科學と文熱) 沖野	クリスマス(文明評論)	耶蘇の愛する弟子(同 上)	耶人の期待せる平和(大坂講談)宮	人生を幸福に渡るの道(同 上) 新 渡	大成功の四徳(實業の日本)	遠慮なき告白(水道)小
條脇	照		井田柳	部文	田	木富		本能	简	向	村	島	岩岩	非	逤]1]	戶	田	加
忠房	英		太和	75	築	文 政		武	清	3	陽	孤	=		111	整	稻	和	錦
衛 子	夫	家	郎民	郎	吉	治助		太	泉	む	류	島	鄍	園	E.J	輝	造	民	光
	ます。	ふのであります。三並氏及い讀者諸君の御海容*	が、郵送中に原稿が紛失して活版所には著いない	が久振に執筆されたもので、本號を飾る讀物でも	前続の豫告にあった三並良氏の(近代獨逸哲學と	御斷 6		*良心(白日社價一、〇〇)	若き秘書官(新日本)吉一	最近に於ける日本畵の傾向(新日本)澤 は	寶祚無窮(太陽)	戯曲チトラ(新人)小	若い井戸掘り(同 上)····································	時で處を異にすれども(同上)田	美作國(同 上)	出雲路(六合)	夕彩雲島	發生	隨感一束(同 上)····································

b

紛失して活版所には著かなかったとい 並氏及び讀者諸君の御海容を御願致し もので、本號を飾る證物でありました 三並良氏の(近代獨逸哲學と神秘)は氏

田絃二 村專

木林葉

白 太 風郎郎星進靡城 少くも三ヶ月はなくつちやならない、

それも費つた日にや十分ぢやないんだ。一週に十五志。これで家賃から、食料から洗濯料まで拂つて

がその間如何して食つて行けるだらう? 一

週に十五志



蜘蛛の巣の家

-((ギッシング))---

青年の感想を庭園 72 72 3 充らぬ 陽の光線に黄金の つても 3 72 2 る日間の後を治 然し、 れは六月の或朝の五時であつた。下宿屋の寢室の塵埃だらけになつた日覆は、流れ入る清澄 ものまで、 もうー その中 もう一と寝入りしようど 時間 には植物學者の知る様な花は 追つた。 も前 一や、野原や、生垣の方へ向けた。青年には心の惱みがあつた。恁麼事を考へた 新たに生れ 布かとも見えるほどに輝いた。光線は、 かっ そして何時になく、 ら目を覺ましてゐたので た日の勝ち誇る榮光に浴する様に見えた。 r.J ふつもりでも 壁紙の つもありはしないが、 ある。彼は不安そうに仕切り 花模様の なか つた。 照らす總での 細かいところに眼をくれ 彼の 服 は、 此夏の日を受けた花模様は 物の態を變へ、 寢臺に一人の青 壁紙の上に なく身體 投げげ 720 貧弱 年が 多 花模様とい 5 動 ñ 横 なも かっ 12 は 遲 T つて K 2 119

からす。此點は凡ての宗教が共通問題こして大に提携努力せざるからす。此點は凡ての宗教が共通問題こして大に提携努力せざるが至つて薄弱に包て常に反目膝なるは固より官吏の大多数が信仰が至つて薄弱にして常に反目膝なるは固より官吏の大多数が信仰が全人 騒で宗教に尊敬を有せざるより生するこさなれど、法制上宗教は甚だ微弱に認められ居るここ、實に其大原因なりご見ざるべ数は甚だ微弱に認められ居るここ、實に其大原因なりご見ざるべ物は甚だ微弱に認められ居るここ、實に其大原因なりご見ざるがなく隨て宗教に尊敬を有せざるより生するこさなれど、法制上宗教は甚だ微弱に認められ居るここ、實に其大原因なりご見ざるがからず。此點は凡ての宗教が共通問題こして大に提携努力せざるからず。此點は凡ての宗教が共通問題こして大に提携努力せざる

■ 大都の風俗類敗と基督教徒の建白 御大典後京都 ● 大場點を暴露したりと認めてる、計画と表情に 一般大場點を暴露したるは、有識の士の等しく憂ふる所なり。基督 ・ はいふ。香園民が此厳肅なるべき大禮を御祭化し、途に其腐敗せる ・ はいふ。香園民が此厳肅なるべき大禮を御祭化し、途に其腐敗せる ・ はなが此職態を未然に防ぐ能はざりしは遺憾なれど、我等は當に ・ 教徒が此職態を未然に防ぐ能はざりしは遺憾なれど、我等は當に ・ 表情 ・ 、表情 、

からざる所なり。

廿五日午後五時よりクリスマス祝會を擧行せり。 職後の勞動問題、木村法學士の將來の社會問題等の講演ありたり。 ■統一教会 去月十五日夜は通信講話會あり、三並教授の

行したる等。

減數左の如し。 | 本学学院 | 本学学 | 大正 | 二年度 | 本学教信徒数 | 一年間の培養圏内(臺灣朝鮮を除く)における基督教信徒数は十七萬三千四百段圏内(臺灣朝鮮を除く)における基督教信徒数 | 其筋の最近調査によれば

無所	救	基	普	美	х	浸	聖	組	H	Œ	天
	世	督	及	普	×	龍豐	公	合	基	教	主
二、七八一	三、七一七	一、五六〇	一七九	一、〇九九	五、一四〇	四、五九一	一六、七九八	一七、八七一	二二、一八四	一五、〇九八	六五、八五七
	٠										
仝	仝	增	減	소	仝	仝	仝	仝二	仝一	仝	增
三三八	00111	二七六	一七四	仝 二七	、七八四	二九二	五八三	· 〇二四	一六六	八九二	三四二

最 場 戀 打 入 7 2 方 機 な カコ な 1= 万 物 な 7 所 空 取 re 0 Ŀ 12 カコ 0 ᢚ か 織 樣 毎 n 5 汚 合 0 000 6 受 O 1 は T るい 注 か 1-0 b 1 n 幅 h 0 n 分け 黑ず 宅 な 煉 カジ 下 付 其 細 は 12 4 此 72 瓦 小 n カジ 荒 7 で 輝 10 0) C 0) 5 3 72 樹 見た 葉 造 3 あ やく 地 裂 13 T h 8 保 1 な ること 3 跡 1: 6 h 震える様な樂 720 2 を け 護 長 彼 蔭 0) 多 變 3 押 3 0) 12 よ H 0 家 0 る。 屋 0 は 0 鋪 彼 光 殘 つ h 必 で 72 を 栅 廣 で 好 は は を L 7 板片 要 け 第 は 奇 示 此 爪 正意 醜 T 3 T 8 カジ 曾 先 心 L 0 失な 敷 12 あ < る 面 つと近 13 た ては 上 3 0 石 3 2 2 3 はよ 邊 75 音 倒 47 b 扉 カジ 2 カジ カコ 75 か 0 n 受 3 中 此 0 窓 丁 B ラ 3 怪 寄 つ つて 0 カコ 路 け 見え 流 度 8 0 たらう。 境 IE < あ L 2 ~ > 0 爪 今 7 2 ば T ン 3 3 0 ٤ 家 其 て、 其 先 3 懋 1-U な手 丰 n 見 72 處 は 1 1 此 は 樹 0 族 12 棚 ようと 彼 b 15 0) T 狹 硝 隅 カジ で奏でら 0 悉 0 E T 0 住 兩 仕 0 0 1 1 捨 度 古か 47 跡 子 0 路 郊 色褪 窓 ま 想 側 切 壞 前 カジ w カジ L 7 像 1 庭 見 5 に眞 つて 外 F. Ħ. ^ -[> n あ 來 せて、 六 力 0) 顧 5 n 多分そうだ B 72 路 ソ す 3 ま 似 2 は T 門 を横 1 3 n 枚 3 住 活 72 30 ~ 手 6 今は雑草 破: 12 プ T な 宅 多く 漆 カジ 動 7 لخ は 元 吹 は 扇 切 n は大 • 氣 8 老 古 n 0) 0) 喰 琴 0 此 Da 暫らく 始 繪 72 光 3 は T Ŀ 0 付 0 朓 0 6.5 方古 ź 畵 B 茲 3 8 47 調 朽 景 剝 O) Ŀ 8 720 は、 塗 72 扉 2 5 は げ 0 3 ~ T U. 0 要 0) U (") 以 形 h T カジ 佇 L 果 カン・ 3. 前 彼 想 美 て小さく、 此 0 カジ 層悲惨に 妞 3 뮄 T T h P 60 しさ 奪 0) 窓 L カコ 0 家 踏 12 3 え 1: 6 前 0 7 びり 死 B 7 3 2 汚物 蕁麻いらいさ 空が を 120 あ 12 きたっ 踩 0) ノ 滅 飯 3 見え は は 破 片 犪 張 5 ツ 0 2 5 0) 1-7 \equiv 不 壤 牲 K h 7 IF n 力 々に 3 軒 す 就 12 1 カラ カジ 其 1-佪 72 或 (2 7 0) 3 閾 枯 1-T カジ 0 愿 廢 3 修 物 然 8 7 7 n 音 n かっ 廢 13 曾 カジ 理 屋 は家 L 12 3 あ 樣 陰欝 漆 B カジ n 3 h 0 7 < は 立 12 椀 72 喰 1-0 0 0 木

如何 分を置いて食はして臭れる人はないかな。……此處に寢てゐたところで始まらない。起きて一時間 カラ b 要らな を書き上 は只自分の ぶらついて形勢を見るとしよう。」 してやつて行けるもんか。早速此の下宿を引拂はなくちやならない。別に贅澤といふ譯ぢやない 此 處 げ に居た どん 仕事 るには三月だ。そりや好いものさ、 んちや二十五志以下ぢやあが な隅でも、 に執着して、心を平静 静かで日 カジ 拜める處なら結構だo..... に保つてゐれ らない 限つて好い本さ。 もの、 ばいくんだ。……今が夏なのは勿怪の幸ひ、火は そりや判りきつてることなんだ、……本 今度は出版屋も見付かるだらう。 サレーの何處かに一週十五志で自

年齢し さう。 涯 的 720 3 かっ 拔 に全心 7 そこで青年は起き上 幼兒 け は未だ二十三にならぬ。 まか 樣 出 及しよう、只其 る中 を傾倒 な足 の様 るや否や、 り間 取 な足取りで、 違つたら、 りでい 腹の中で決心が して居 草原や遠方の 彼はテム カジ るさい の目的丈けを。 つて、 そん 番頭なり日傭ひなりしてもバンは得られよう、然し金が 1 ふこと なに 固 ズ河の 年になって 衣服を着けて 小山 まつてきた。 輕く、 を誇 彼は恰も誰かい財産でも彼に残して行つたかの様に心樂しくか 南 なぞ 方の郊外を過ぎつて、 b かっ またそ から來る新 12 3 日 どうなりしてこれか 彼 0 T h は、一人淋 照る往來へ出た。 1 F. な に跳 ンに住 綠 に匂 和 る様 ふ生 しく、 んでゐ サレ き々 ない 彼の名 10 貧乏しな 72 ら三ヶ月 今に 12 0 L To 丘 た空氣 は あ の上り口 B 証け出 がらも の間 る。 ゴ 1 は彼の 息 ルド を人に賴 2續く間 0 から 著 したい様 作 ソ1 方へ 詰まる様 家 Ń 向 らずに暮ら としての境 は自分の目 を つた。 な飛 躍 な家 び出 カコ

う健氣な決心をして歌い與じた。

720 50 なも 蔓で 寸傾げて、眼 3 L 此 1: 72 5 分 方 7 1 邪気の 窮 Eg. 塵 侧 は 短 2 ない 0 見られ 力多 埃 カコ かっ 屈 番 だら あ 窓 い下 が無ささうな、人の な恰 ス 際 かっ るぢやな は 丰 は 立 それ け す 類に振ら下 鋪 好をして 上の方を向いて、自分の樂器 彼にはこれ つて見え 0) 板岩 F 旗 を探 カジ カジ 示 隙を除 張 15 かっ 1 よく b 0 妍 3 7 2 72 ゴ がつて居 越 T Cok カジ し 眼 1 3 な 3 しに Ŏ から 確 好 を カコ w 据 は、 終りを告げ 773 も其 其 建 1-" ささうな丸顔 覗 ご思 え 0 僅 物 ン 3 rs 此 1 短 0) 他 7 かっ 0) てわ 窓は、 の家 は 見 裏手 0) 1-プ かい髯を持 to 總 Ħ. は ると、 ナこ ナこ 12 か 0 ての 六 の調 0 + 今で 方を覗 他 カコ 枚 0 1= と其處へ牛乳搾りの めに痛く つたい 0 最 颓 0 べに 上 は 廢 硝 8 华 窓よりも新らし つた 人 猶人の 階 月 0) 子 5 獨り悦に入つて耳を傾 が住 多分唯恁麼事を想像 Lo T 男で 形 0 カジ なつ るし 窓 破 2 0) 8 住家 ある。 0 n たかぎ 眉毛 72 るとい を隱 所 T 頸を持つて青年 1-£ , 20 、何處を見ても人の になつてゐ 哲し此 L る 男の ふことを否 て生 ばか 此 何 鰌 頃 カコ C 60 叫聲で早朝 げ 0 L 12 0 と軒 L 中 貧 を貯 5 るしるしが けてゐるらし に指 然 たに過ぎ 相 は 窓掛 定す 1-え な し荒廢し 樊 引き返 除 人 72 住家 の靜 3 を 3 5 0 かっ な 1-かっ 何 眺 ぼ 22 ブ とは思へない 寂 72 72 L かっ ラ 3 0) 處 h かっ 72 樣 樣 0 F. 7 72 つ 1 ヴ カコ 72 72 子 面 7 小 な 朦 カジ F" 37 あ 5 12 見え 0) な 如 = b 7 は 何

0) J. 别 10 12 F 未だ其處に ン もう プ は 居 度 今 72 廢 見 屋 12 け ことを考 0 n 傍 どももう風琴を持つてはる を通らうと決 7 體 心 如 L 111 7 うし もう 72 ح な 度 かっ カコ つた。 小 3 徑 怪 1-麥菜 沿 3 な 2 帽帽 12 カジ 塀 6 0 代 北 2 6 孙 1 かっ 70 5 制剂 V 63 フ 12 T = w 見 小帽

13 H ふと今度 な てると、 カコ 5 0 來るらしく 漸々明瞭して 音は は 思 水 つ所 1 n ム・ス 來て、今では奏手 12 カジ に停まつ 平 併しそんな筈が 1 P てゐ 示 1 るも 4 は月 を奏で のとは 外に居 あらうか? 思 > るか 3 は n 72 無論 な の様に思 0 ナご かっ 誰 つた。 カジ 7 もほなな ^ T る。 1 成 3 やくざな屋根 w 大方家 程 F ソ 動 1 < の後ろに ッ カジ 遠く 0 10 De 20 12 まし 住 0 思

草ども 腰 3 んで 72 ス ゴ は 徑 其 中 を下 1 此 0) 腰 年 5 N 0) 沿 後 手 側 に脅 カコ 0 1. 近 h 僅 à 1-3 H 男 狹 ソ カコ かっ 12 T To ホ 7 カコ 云 な な地 境 庭 5 3 手 3 1 は 地 プ カジ 小 界 る問 頭 は n 風 4 10 面 あ 徑 は 琴 此 0 3 生存 1= を 3 カラ るの 搖 稍 多 の一部 探 カジ 塀 ことを 走 役に 始 b 117 持 競 つて は つて 雑草 まつ でわた 1 争 つて 物」には只一 でに生き 大 立 み 普 3 知 き過 120 3 72 つも 通 0 3 0 為 3 720 0) 奏手 きる 人物 8 殘 0 身た に地 度庭 a 大け 0 此 to 段と古びた上履を穿つてる 7 瞥を 72 程 飾 1 0) 0 カジ 引 味 8 0 47 1 人なら 廢 9 き付 與 古 は 0 手 0 2 0 地 ~ ぼ 0) 衰 を入 が、一緒 B 0 ٤ た文け 空家 は け ~ 住 け 0) など 3 n 12 け 宅 麥藁 路 3 7 3 ---n 1= 1 で は カジ 12 1-は かっ 0 帽 i あ 酸 植えら 5 混 どで、 擔 12 其 は 夫 包 T つ 2 蔽 72 番 n T 尽一 0 も なし 臎 3 n Š は ゴ 12 彼 庭 て、 かっ 間 何 1 -1. n T 7 店 0 あ 年 iv 3 ヤ 緩や それ ت 其 興 面 る。 0 0 2 1.0 1 ==== n 0 味 は 72 な F ソ 等 廢屋 Ġ 脚 人 カコ は 綠 0 < 1 13 とで また大き過 は だ E は 0) 經 ブ 家の 叢 カジ ば 何 つて 0 0 沈欝な調子 地 ___ 好 長 n 後ろ 今で つを見 43 1-8 3 奇 3 ふ様な服 3 密 1-0 0) 3 脚 n 生 庭 0) は 相 一分解に 72 花 て は 遊 を カジ で Ł 見 な T あ 装を 脚 近 0 3 カコ 開 ボ 3 3 野 0 18 多 3 組 2 7 小

ですよ、能きる丈け安い室を。この中の一つの室をこれから三ヶ月間貸して頂けませんか?』 んですか。此の天氣の好い夏の間でも此處に宿ることは能きませんかね?實は僕室を一つ探してるん 「家をあんなに立ち腐りにしておくといふのは非常に氣の毒なことゝ思はれますね。全 然 住めない

見知らぬ人は驚 いた。彼は不安の微笑を以て此の青年を視た。

『あんた御冗談でせう。』

ゝえ、そんなことは。…その事は全く能きない相談ですか。室はどれも余り非度過ぎるんですか。』

そうも云はれませんが 120

に非度くはないのです、――で、まあ、私は思ふんですがね。私は只つた今それを眺めてゐたのです。 彼は用心して斯う答へた、猶も質問者を、驚きの眼で見やつて。『上の方の室は、質のところ、そんな あんたそりや本氣なのですか。――?」

一全く眞面目なんですよ、慥かですよ。」

とゴールドソープは快活さうに云つて、

來たらどうかして賣れるだらう思ふんですが、それにしても未だ三月はかゝりますからね。静かであ 此 の僅かな金を、これから三ヶ月の間延ばして費ひたいんです。僕は本を書いてるんですよ。本が出 | 覽の通り、僕は今でも好い身裝こそしてますが、金といつたら大切な金が少しあるばかり。僕は ば何んな處でも關やしません。何とか御相談願へないでせうか?』

聽手の顔は重ね重ねの意外なことに段々圓くなつた、其の眼は、殆んど驚愕に近い感情を示した、

125

プは もなくして其の男は前へ進んで、尚も頭を下げた儘でだらし、と下つた庭の端に近寄つた、其 を被 きつて尋 出て鍵をかける音が聞えた。やがて此の倭小な尊敬すべき姿は小徑の端 1 ルド 一件の見知らぬ男が自分の傍を通らうとする時を待つてゐた、が、 斯様に提供された機會を拒むわけには つて、野菜物の中に殆んど膝まで潜つて立つて、周圍の種々の作物を験べてゐるらしかつた。 ソープが現 ねてみた。 いてゐた塀よりはもつと高い塀に木戸があつた。件の男は此の戸を鍵で開 行かなかつた。 物好きに一 番近 やがて愛想よく挨拶をして思ひ 心い屋根 に現は を見るふりをして、 n 72 J" 1 ル 處 ١, けて外 こには ソー 間

しい。そしてこれに相應する樣な、幽かな地方訛りをもつた聲で話した。 『これだけの家が甚麽譯で此の樣に關はれなくなつたんですか御存じありませんか。』 見知らぬ人はにこりと笑つた。柔かい、慎ましやかな、微笑である、―― 丁度其の面

貌に似つかは

124

怪訝に思ひなさるのもあんた無理はありません。私だつて不思議に思ひますよ。それは喧嘩 と訴

訟から起つたもので。」

つさうたらうと僕も思つたんです。 誰方の所有か御存じでせうか。』

「え、知つてますとも。 質は 一その私 0 もの 73 でつ

は、 ぬ人と顔を見合はした、そして性來のからつとした調子で喋舌つた。 の告白は言譯の様に述べられ 彼 カジ 感じた あ りつたけ の興味をさらけ出 たり カジ 何 した。 處か 或る考へが に恐るく 突然胸 も誇りを含 の中に湧いて出た。彼 んでゐた。ゴー iv は F 見知ら

艦

一燭を點けなくつちやならない、

階段は眞暗なんですから。」

所 と思つたのでせうよ。 0 な 私 n には仔細 によ は 事 う 0) 余り暮 は 7 叔 ると、 3) 父 丸つきり 72 カジ しも カジ 0 其 借家 は あ 0 解 豊かで ることでの 弟 りま 軒 人の一人がどうした譯かこれに卷き込まれ かっ だけっ 5 どうです、 なかつたし、 せ 此 h 0) 此 所 此 が、自分 0) 有 處 間 權 は借 中へ 長 を受け 殊に借地 の畑 5 地 這入つて一廻り御覽に こと借 で借地 ちゃ 繼 5 の期限 期限 ありません 地 ナご 0 人と地主との間に訴 です は T も迫つて よ。家 度終りか から、然し鬼にかく喧嘩や訴 屋は たのです。 なつて おたので、
 うつてゐるのです。五年前にあん 其の は? 訟事が 頃隨 正直 家を修理することが能きな L ... 分非度

なって

る あつた 中せば、 のですー 訟が 私の叔父といふ あつて て、貨家 私には恁 聞 3

振 1.0 0 絲 かっ か = 蜘蛛 5 年 3 つた。二人は 7 ン ッ か 1 プ 拭 其 は カジ P 0 プ は恁麽 つて 洋 巢 カコ 0 天 裏 か 上 井 手 刀 B 破 たことが 0 3 0) 0 るの 臺所 水 戸 物 肉 隅 n て創 叉や 道 П には R 2 0 1 かっ 栓は な ら這 目 スプー 雜 通 n は カコ つた。 T をく になつてゐ 何 つたが B 新らしく見えた。 入つて小 n 8 n 2 I. 此處 カジ 1 螂 82 振 載 w 蛛 近 15 3 るので解つた。 にも亦蜘 つて 0 h な洗濯部 to 頃にな ソ 巢 3 1 カジ 120 る プ これを見て心 つて開 蛛 は 杯 彼は の仕 此 1-屋 張 0 1-皆 そして、 家 顔 業 h 來 けられ 譜 カジ 1= 720 を背けて笑 一見し 水 到 8 窓に る處 0 た。此の事 0 7 て洗 疑惑 まあ、 供 南 に厚 は 給 30 3 カジ 7 0) 12 どうだらう、 く表はされ 確 あ 長 面 ともな てい かっ 1 ることを認 V になった。 塵 厚 窓框 だら い微笑を隠した。 3 あ るこ 灰 から てゐる。 V 色 ことが 窓側 F. な 8 然し たの タリと 纎 蜘 蛛 b 0 維 けれども 何 流 棚 カコ カジ 0) 巢 1= 合ふところ 壁 3 とも言 L G は は カジ M 濡 沿 か Tr' 窓 ふて つ は n iv な T

其の小さな口は丁度口笛でも吹く様な恰好をした。

はしないでせうが。ゴールドスミスの様だ、正にそうだ。」 『おや、これはデョンソン博士の樣ですね。チャタートンの樣だ、無論あんたは彼の樣に一生を終り 「えゝ、まあたまごですよ。貧乏をお伴にしてるんですからね。」
劉手はすつかり乗氣になつて、 『あんた、本ですつて?本を御書きになつてるんですつて?あんたは文士なのですね?』

青年は笑つて、

『お、そうですか、何と云ふ不思議な暗合でせうね。私のはスパイサーといふんですよ。どうです、 『兎に角僕はオリバーの名を半分文け持つてます。僕のはゴールドソープといふんです。』

その、私の庭へお這入りになりませんか?彼處でお話しようぢやありませんか。」

的の庭園は未だ曾て見たことがないといつた。 軈て二人は緑の叢地の中に立つた。ゴールドソープは之れを喜ばしそうに眺めた。彼は恁麽に繪畵

薊を御覽なさい、あんなに立派な薊はこれまで見たことがありません。それから罌粟に、金蓋草に、 『おゝ、彼處には甘藷が作つてありますね。してあれは何です?――きくいもですか?それに彼の そしてあれは萵苣ぢやありませんか?」

スパイサー君は大恐悦で顔を真赤にしてゐる。

ばかりなので、殘念ながら私のものになつてゐるのもこれから先一年と少しの間丈けなんですよ。そ 「何ごか庭をしなけりやならないと思ふんですよ。實はあんた、これはつひ 此 頃私のものになつた

歩みを運んだ。いかにも空氣は、高い此の處では清澄で、二人は最初の室へ這入るや忽ち燦爛たる日

光に浸つたので、ゴールドソープは嬉しさのあまり叫んだ。

『あゝ此處に住みたいものだな。硝子戸を入れるには除程費るもんですかね。其の他のことは 箒 を

持つた婆さんがして臭れる。」

といつてまた直ぐ後から、

『だけど後ろの硝子は壞れちやゐないと思ひますが?』

『いゝえ、こわれちや、いえ……」

ズボンに重れた。 ス バイサー君は喘ぎ吃つた。彼は蠟燭を持つて立つてゐたので(其の光りは見えずに)蠟が絶えず彼の

『もう一つの室を拜見しようぢやありませんか。無論午后の日が拜めるに違ひない、また庭も見える。

でせう。

ゴールドソープがかういつた。

『あなた、お待ちなさい。』

赤くなつて汗をかいてゐる對手はかう云ひ出した。

その――はんの當座 『あんたが彼の室へ行かれる前にあんたにお話したいことがあるんです。私が――それを に――私がその室を使つてゐるので……」

『いやこれは失禮しました、スパイサーさん。』

ス イ サ 1 君 は か うい つた。

はきつと蜘蛛の巣がかくつてゐた。 る品 淮 h 物 U 120 を除 間 12 火 **玄關** r 理 T 用 は、此 口 Z 0 1= Ġ ス }] è, のは燃やされなか 處 に人間 階段 ブの上へ、燐寸の箱と一 の上にも、 が住んでゐるとい ゴールドソープはこれまでに嗅いだことがない様な異臭に打 つた。 ラン デイン これはこの訪問者もよく知つてゐ 緒 ふ証 に蠟燭 グの上 據は見出されなかつた。火を點 カジ にも、凡そ角とい 用意 され たの戯 格子 ふ角、突き出てゐ 720 0 中 して 窓際 1-は もう何 ス 0 ۶۲ 棚 ィ 0 3 + 上 日 所 たれ とい 1 1. 君 あ

第 ら五六本の薄 床の二個の室もこれと同様な有様であ 63 光線 が射してゐた。光線は塵埃や、 つた。前に面し 蜘蛛の巣や、色褪せた、破れた壁紙や、壌 た方の室の板戸のある窓を透して、金色

世 一此 h から の二つの室のどちらも お勸めし たくはありません。全くのところあまり上等な室とは 云 は n ま

ス イ サー君はもじく、對手 の顔を見てか うい つた。 青年 はこれ に答 へて、

に違 ひありませ 上 の室 は勿論健 康 に好いでせう。 窓硝 子が五六枚壌 は n てゐましたつけ。 空氣 0 流 通 好

ス ۶۲ イ 君 然し口は利けなかつたらしい。默つて彼はなほも蜘蛛の巢のある中を、 は益々氣が氣でなくなつてきた。彼は其の小さな圓 い口を開いた、一 一番上の階段 魚 から

時

談した結果、

られてある、三十冊ばかりの、何れも古さうな書籍も目についた。 つた。彼はまたきちんと取片付けられてある衣類の附屬品や、小さな陶器や、それから上の二段に列

スパイサー君は遠慮がちに語を頼けた。

「文學は私の道樂なんですよ。私には余り讀書の時間もないんですが、私のモットーは 'nulla dies

を喋舌つた、そして恐る~~聴者に與へる效果を見守つた。 の發音から察してもスパイサー君は古典家ではないらしい、然し彼は無限の趣味を持つて羅甸語

派に。スパイサーさん、室代は如何位差上げたらいゝでせうか?」 こうや嬉しい。あなた前の方の室を僕に貸して吳れませんか。此處で僕は立派に仕事が能きる、立

とゴールドソープがいつた。

を半分おもちになるといふなら、なあに、あんた他に頂戴しなくも宜しいんですよ、ほんとうに。」 ですよ、あんたが自費で其れをおやりになり、それから室を掃除して貰ひ、此處におゐでの間水道代 『なに、あんた、正直幾らさも申上げ策ねます。無論窓は修繕しなければなりません。實はそのなん 今度は反對にゴールドソープが當惑した、彼は、拂へといつたところで持合せの金は殆んどないの

だが、そうかといつて見ず知らずの人から施して貰ふことは好まなかつた。二人は此の事を細かに相

るといふことになつた。ゴールドソープは家事に於ては一切關つて貰はなくもいゝといふことで全く

スパイサー君が言ひ出した設備に對して、向ふ三ヶ月間の契約で一週二志の室代を入れ

せなんですよっ 私には思はれたので――私は只寝臺と食卓を入れた丈け、それ丈けなんで――ほんの一時の間に合は 「いゝえ、あんた、どういたしまして。御言葉でいたみ入ります。それには譯があるので――

ますよ、家を持ちながらそれを使はないなんて、そんな充らないここがありますか。」 スパイサー君の滿足は非常なものであつた。 『なる程"なる程、よく解りました。當り前のことでさねえ。これが僕の家なら矢張り同じことをし

澤山蜘蛛の巣が引つ付いてゐて、壁紙は傷ましい有樣であつた。窓には日覆が下がつてゐるが、床に ー君の云ふ通り設備は質素なものだ。可なり室は掃除が行届いてゐるけれど、壁の隅や天井には未だ てゐて、 は敷物が せう。」思ひ切つて彼は戸を開けた。ゴールドソープは恭々しく中へ這入つてみると、成る程スパ イサ る。あんたとお近付きになつたことがどんなに私を喜ばせるか知れません。後ろの室へ這入つて見ま 「いや流石は文士 さん だあんたは大きな心を持つてゐなさる、あんたは物を知的方面から見な さ 竈の上には料理用の石油ストーブがあつた。 ない。一隅に日中の用にと小さな疊寢床がある。極安物のラーブルと椅子が床の中央を占め

に留めなけりや――私は一向關はない方ですが。私書籍を持つてますよ――。」 す。そして實の處あんた、この事を考へると、居ても居心地が好う御座んすよ。若しも淋しいのを氣 彼は五六段の棚がある戸棚の戸を開けた。先づゴールドソープの眼に映つたものは例の手風琴であ 『此の樣な陽氣には本當に不思議な程物が要りませんね。出錢といつたら 水 の為めに出した丈けで

____ 130 ____

察

し下

私

カジ

あ

のことを聞

3

たそのときの

私

の氣持を……

して此處なら大丈夫仕事が能きると思つて喜んだ。

世に出 以 年 した。少しづゝスパイ る様になつた。時々二人は一緒に歩いた、 n 間 は彼にとつて重大な事件であつたのである。スパイサー君は、或晩遲く、二人が雨に閉ぢ込 外 とい 0 に二階の錆びきつて空の爐の兩側に坐つてゐる時に此の感激的 何 經たない中にスパイサー君と彼は大變親密になつて、 威 2 もの、 そして辛 かで老後が送れるなどゝいふ見込みをつける樣になつた。ところで叔父さんが死 彼は切り詰 抱と、 サー 親戚 君は 8 身の上ばなしを打ち明け た暮しをした後で、自分の外には誰も養ふものがないので、行々は工 からの少しばかりの貢とで、 そして毎晩の 72 樣に荒れ果てた庭に腰を下ろして煙草を吹か 彼は中國 到頭藥劑師 交代で賄方を受持ち二人食事を共に な刹那の話をした の一小部に築種屋の の助手に漕ぎつけた。二十五 0 7 小僧として 8 h 3 n 場 T

か嬉しいことだらうと。 いんだと感じながら、住みもし はどんな氣持 ゴールドソープさん、私はこれまでしよつちう思つてましたね。 らうと構 ち やしない。 だらうなどゝ想像 つまり借家でない、本當の自分の家をですね、 いや全く私 死ぬことも能 してみました。大きな家、――立派な家、 の様 な人間 きるといふ様な家ですね。何遍 には 小さければ小さいほどいくんです。ところで、 自分の 誰も自分を追 ーいやく。 家を持 かっ 私はそんな事を夢み U 出す權 どんなに小 利 73. お

だが 13 始 らしの豐かな人だと思つてました、それに獨身といふことも知つてゐました、然し實の處 私 は十五 年 間 かそれ以上も叔父に曾はなかつたことを云はして下さい。 私は 前 カコ 3 何か 叔

豱 7 1 サー b の二人の契約者に依つて承引の署名が行は で 君 住 0 也 希望 ことになった。 T 南 つた。 その 此等 の條件を F 他 の人は假冷不意 スパイ サー君、 n は商人らしい書風で覺紙 0) 訪 問客でも家へは 呼び入 書き下ろ n な 65

ス

3 3 を與 何 つてゐた。 13 ス 大 で ٦٢ カコ 5 あ イ 飯 サー T る 1 影響える。いや全く、 算してみても、 歸 吳 で此 る途 來 君 7 然しそれ 種 カジ 3 72 必 文 中 K 0 と世 要 費 7 け 1 安 カラ 用 缺 物 話 何 は 5 in どん 72" 室代を拂つた後の全残額は 15 を購 可らざるも を焼 ソー 彼は非常 な 2 47 萬事 てく -1 プは、 經 吳 濟 0 がすんで、 n n と思ふ道具を自 かう方針を決め る、 120 な元 1 しても、これ 元氣であ 手傳 か う 四 つて室の ĺ った、 日經 T ---分の室 ス 日 つた後、 かっ たところで自 精力 この支出 パ 掃 ら二ヶ月 イ 除 ん希望 に備 サー君 をしてく 蜘蛛 干五 0 へなけれ 分の 一片を超 0 間 は 1-巢の家の最 彼 n 充 を支えようとする 現狀に立 ちみ 3 0 • 過 ばなら 為 元 5 L め 1= 7 0 7 歸 事情 To は 上階に住 D 2 なら つて考へて 0) 120 宿 は カコ 家主 僅 許 判りきつ 3 す限 か 荷 んでみ の資 8 は 渾 親 b 便 h 切 132

青年は き物をするテー 此 0) 榆 宿 樂 引 滿 き移 ブ ルといひ、 足 つて とを感じだ。 最 初 自分自身の所 0 彼 . 8 は 赫々たる太陽 真當 に寛ろ 有である。 1 ぐことが 眼 彼は自分の下宿生活を想出 を覺ますと、 能 きたつ 眠 今迄 る寢 0 經驗にはさんとない て慢 n 事 h 2

新

で私の貯金に加へるとそれから収入がある。収入といつてもそれは勿論、私の樣な地位にある人に對

不公平なことですがね、ゴールドソープさん、然し私は借地法に立てつかうとはしません、---ちやありませんからな。 しての意味なんですよ。 か生きて行ける樣にといふんですよ。これ丈けでも、多分あなたも御同意だらう、が並大抵の 私の家屋が 地主のものになつて私が下宿住ひをしなければならなくなる時でも、――

辯護士は恐らく私を白痴と思つたでせう。それで此處までやつて來て此の家屋を見た時は……ゴー N 『いや全く、私自身もどちかと云へばそういふ風に見たいのです。私の性質は物に不滿を感じないの 『まあそうですね。そりや、スパイサーさん、人間最高の幸福ですよ。質に羨やましいですね。』 二人は陽氣になれない様な、極小さいランプの光りの傍に坐つてゐた。ゴールドソープは口 ドソープさん、私や ゴールドソープさん。 私は借地權といふものゝ組織は九つきり知りませんから、始めは全く解らなかつたのです。 ――私や全く意氣地なくも涙がこぼれる程でしたよ。』 然し辯護士が家屋に就て説明を始めた時の私をあんたにお 目に掛 けたら

こともできませう。僕の本が賣れたらもつと澤山室代を拂ひますよ、スパイサーさん。僕は古びた家 角云ふもんですか。冬は風通しが良過ぎるかも知 ねえ、結局家屋は十二ヶ月間 あなたのものでさ。其の間は二人して此 n ないが、破れ た暖 に爐をつぎ合はしたら充分火 處に住 んでわた つて を焚 兎や

就て殘らず話を聞き、自分でそれを見もしました。あゝ、ゴールドソープさん!まあこれほどの失望 せう。私は早速ロンドンへやつて來ました、(昨年の秋でした)そして叔父の辯護士に會つて、 他人の心になつて考へることが能きるでせう。家が三軒!いやあんたはその家がどんな家か御承知。 カラ 考へてみて下さい、それを耳にしてからの私の心の中は甚麽でしたか。あんたは頭腦のある方だから と、此の財産の主なものは たアイザック、スパイサーさんの甥御さんですか。』といふんです。これには驚きましたね、 斃なさい、――あんたには想像力があるでせう――帳場の蔭に立つて只々商賣のことばかり考へてゐ 私に遺して行くだらうなどゝはてんで頭に浮べた例はありませんでしたよ。あんた、まあ、 ましたね、 いふのは私です。」と私が言つた。すると其の男は語を次いで、『してあなたはクラハムの失くなら ると、這入つて來た一人の若い男、――今でも見える――スパイサーさんはと尋ねる。「スパ 一の一番近い血筋だと思はれてゐること、そして、もしもそうなら、叔父の全財産を讓り受けるこ 然し私はそんな氣色は見せませんでした。若い男は叔父が遺言狀を殘さなかつたこと、私 ロンドンに在る三軒の家であることなどを續いて語つた。まあ、あんた、 イサーと 描い 財 て御 7

彼は、余り長話をした言譯の樣に、少し微笑を洩らして話を止めて、一寸の間頭を垂れて坐つた。 あなたに意地悪い悪戯をやつたのですよ、悪い串戯だ。」

ね、然し申上げなけりやなりませんが、家変けぢやなかつたのです。幸ひ少しばかりの金があつたの 過激な言葉を使つても無理はありますまいよ、尤も私はそんなことは避ける方の主義なんです が

叢 11

75 17

錢重

最 新 潮 祉 to 繩

タカ 7 原べ 平 編 旣刊 旣 ŦI

重

戀嚴さのの勞性形● し實消三働交、性き際失種者の性感社、類さ神感 由社家 家會生新 婦聖教 の殖婦・人 **●** 缺化女隷熟主 子なな義性 香人の的「主徳の 衝 真新婚命于女 今の男 の教虚突 大後同子結女私育假 精の心、婚子月のな性 神橋一餘の三、差る徳 正體り理模女異羞の 策のに想型子

たがなる文琴 る蘊 なり、 代の 0 n 優 その 17 l 11 0 なれども 宣言 對 から 近代 社 H 會的 會 的 態 西 文 度 觀 的 評論に近 加 0 明 就 0 趣 教 3 味 科 30° 西 該 4 0 して又として又として、一世では著者 文藝史 精 透 3

一七八一局本話電店書堂雲東區橋本日市京東所行四一六五京東替振店書堂雲東地番九町物槍所行

TI II

カジ 好きだ、 實際 好 きだ。 さあ、寢る前 に一曲奏らうぢやありませ h かっ

がてんでものになりさうもなか = カジ T 見え 1 にこして氣樂さうに ホ D 1 ーリー」、これでスパイサー な 2 ・ス コホ 丰 1 1 ト・ホ ム・ス ŀ 丰 ス 2 ート・ホーム ٠,٠ 」を奏した。 イ つた。 サー 君の奏樂は終りを告げた。彼は何か新らしい曲を習ふなど、語 君 は 彼は何 0) 戶棚 次は「ブリゥーベル、オブ、 カコ ら手 年となくこの歌を奏つてゐるのだが、 風琴 を収 つて、 例 スコットランド」、其の次は「アン の如く「未熟」の言譯をして坐っ 一向 に進 步 跡

劑師 6 H. 等の藏書をよく知り扱いてゐ る。此 は 1= 雖 72 彼 るなかつたからで。スコットも彼にさつてはほんの名ばかり。ディッケンスの作を二三心得てる なかつたのである。小説ときたら殆んど讀んだことがない、とい の生 8 あ ス カジ 0 バイサー君 を慰 3 0 涯 それ 助手とい カゞ 一藏書 は厭ひだといふ。彼は文學といふものを全然道德上の見解からのみ批判して、他 を聽 自 めたので 分のの でも少しばか 中 かっ に現 よ資格を得たのである。それ 3 の頭はもう二十年以上も前に發達が止まつて了つた。 生 涯 n ある。バイロンの話をすれば、人の真似をして、其の貴族としての天才は認 はれ たら當惑したことだらう。彼の愛好する詩人はカウバーで、其の道德 0 間 た著者 り嵬め 1-出 るのて、スパイサー君は時 版 は、英國 12 3 書籍 n 12 カジ 書籍さへ一 の古典家 あつた、 以來世の中 かっ これ つも知らな 若くは十九世 は は彼と共に動 折その 現に ス カコ 中 った。 紀 バ から引用したものである。博學の イ 0 ・サー 初 ふのは カコ それ 彼の父は、 期の名も知 なか 君 カコ 0 兩親たちが余りよ つた。書籍 ら彼 戶 棚 極 は懸命 \$2 0 1-1-1 82 め 作家 かん て貧 1-本當 の事 在 に努力 的 情 C. 3 困 は何 緒 める では あ 8 好 Ü は 0 が非常 で きで も解 て薬 思っ 南 あ 0

7:

ると

新 棱 舍 落 成 新

年 几 口 生 一歡迎 (寄宿舎の設置あり) 十三月月

立私 臣 口

文

新

年

電東 話 四田 兀 四 國 町 九番地

(顧り) 程をず 申で 御 應 しますか ら何卒倍舊

御多愛少

新 年

東京市芝區南佐久間町一 主 任 和 田

操

を刺 言 言 肺 0 腑 妙 を刳 諦 言 る正 ひ得 12 て盡さ これ 真禪機 10 るなく 0 暴 不 說 震 說 0 真源説き得て至らざるなしその舌鋒鋭利

牛 新 著 口

繪

禪

高

橋

竹

迷

定 四

郵

稅 價 壹 八

圓

判

互 1=

人間

錢

師 自 讀畫 几 像

判

I

即

非

定

價

錢

郵

稅

八

る言 行 書 畵

傳

ふ蓋

し禪界最初

の著作なり

0

眛

を描

寫

し以

て明

朝

滅亡史を背景とし

て江戸時代佛

教

の活舞臺

1

に躍り

出

でた

る黄檗禪

0

眞

著者

今流麗

75

る筆を呵

L

て夙

黄檗二

筆

0

稱

あ

る隱

木

卽

一禪

師

0

哀

怨

なる

生

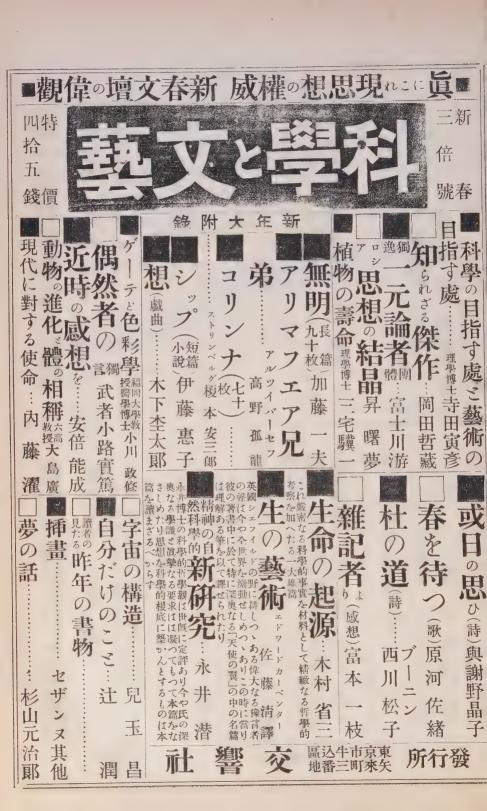
涯

穎

敏 な

面 0 皮肉 目 風 多 流

堂鶴等島町原區川石小京東社版出午丙町原區川石小京東



發話道		回	道	毎月
主 ○國に寄する祝… ・ ○ 反省と决心 ・ ○ あまのぢやく論 ・ ○ 精神的の奉祝法・	力工	介 ○余が神観	英の宗教 様々 様々 を と趣味	◎旭日・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	五十七號目	三輪田元道	特 水 鬼 八 生 で か 水 鬼 八 生	大 松齊 三 村樂 介松 號
○洒賣の男の話西原 頑 ○五分の勉强と陰陽なき働き振り・ ○戦後の日本・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	大定價十部四拾五錢(稅共)	宗教婦一を主張し併せて精神修宗教婦一を主張し併せて精神修	(1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)	
松所堂涯輔堂藏、水中設架器內所務	ŧ	学神町	生毅堂	· · · · · · · · · · · · · ·

番六二九五二東振會の道

番七六三九一葉版 社心天

發 月 日

自分

我

から

愛 0

助

郎

親畔

聖 出雲路 わ

フラ

一哲學を有せざる日 戦争ご宗教思想 と戀愛問 な感 的精 負 可 問 0 ラ 代 債 3 ス チ 0 秀才島 島 イ は 工 想 神 定價金貳拾錢 感 題 地 0 ス 雷 眞 = 本 意 夢 地雷 B 憶 君 0 2 夢 追 懷 安 內 手 故 内 小 I 岡 高 吉 中 灰 渡 野 ケ 島 藤 橋 H 塚 Ш 山 働 部 村 部 崎 崎 直 清 絃 地 作 作 鼎 븝 竹 甲 磁 麒 __ 太 吾 雷 _ 藏 譯 耶 樹碎 雄 郎 衛 夢 郎 浦 郎 生活 宗教心 一我等の 一時代感 詩 一失は 信 國 誕 一彼 お 健 近 御 シ と宗教の 仰 大 民 生日 全 時 ~ E 3 的 れた ŋ 0 典と國 博 かっ 彼 0 女ど彼 想 煩 げ 3 婦 p 求る 進 0 展 る愛 徑 樫 新 0) 0 Λ 中 民 問 時 婦 女 る 田 M 心 的 龜 人の 代 0) 0 題 女 追 越 理 女達 姓 先驅 想 郎 懷 君 0 to 者 體 + 想 理 H £ 發 月 行 H 平 原 内 井 野 內 定價金貳拾錢 兵 4 ケ崎 岸 村 田 崎 口 並 長 竹 岩 粒 作 隈

批

評

0 ク

薄

倖

次

郎 郎 衛 郎 郎

時

デ

Æ

色

K

結 美作 夕彩

婚

國

基督教 會集會案內

靈拜 傳道講 説教 演 午每 前日 後日 十曜 七曜 時日 時日 (富擔) 諸 三內 ケ 並崎作

聖書講 羅馬書講義中なり、 馬 對する疑問等有りて頗る有意義の會合也羅馬書講義中なり、猶會員諸君の信仰告白、 可傳一章より(十二月第 義 午每 年前九時十五分 後木 七曜 時日 一日曜日より)始む 內 ----字宙、人生等に ケ崎作三郎 並

ます ごな 滿五 カコ たでも自由に参集するここ 才以上の少年男女の入學を歡 御遠慮なく御來會を歡 迎 が出 抑

た 來

者

の宗教、

丈夫

0

福

音等

を宣傳

せんご

する高潔

な

3

友

情

に基

く團體な

同

日曜學校

午每

前日

九曜

時日

諸

家

芝區三田四圖町二 督 會

五番

基督

靈拜 · 競教 (毎日曜日、 午前十時)

良郎

組 擔任 す

て

良

家

4

永井柳太郎、安

(水郎、小山) 一郎、安部磁 地

東助、相互機雄、岸本統

原一作武

郎太、

等岡 田哲

げんどするものなり 各會員宅を巡回して開き會員相互 夏の 琢親 睦 0) 實を舉 を計 b

織 鄕 本 會は せら 小 石川牛込等 れ自 去 る六月成立し 由 基 都 督 下北部 教 の立 塲 0 よ 人 士 て神 り專ら强 よ り組 H

ごと

士の來會 を迎歡す

感

0

神 田 錦町三丁目女子音樂學 自

電話本局

整

を

抑

え

3

0

で

あ

0

72

敬を 無理 借 to 根 2 また小説 笑を浮べ n 7 7 10 主 後 n わ ラ 0 彼 を享 0 3 ブ 10 か B 3 8 仕 な 室 3 ス 72 ては 對 界の 事 ŀ のだと考 招站 2 して排 リー す 1-此 就 新 **ゐるが、** ば ど引い 3 彼 T. n 1 丈 7 6 の様な頭腦の人だから、スパイサー君が、近代 は Ū へた、 0 は 72 0 あ け 720 L 能 い 傳 るの 時 0 その話をする時は、丸でそれ等の小説 癖 たっ 雅 きる は 說 そしてゴールドソープ 派 青年 そこは 12 量 は彼にど 恁麽 つた 文け どユ の指導者だと自認してる彼の 恭 カゞ 々しい態度で、 仕事をしてゐる 一
狀態で二人は 1 語 馬 カジ つて 5 庭 モ 7 な 7 は 73 は生きた事質であつ V 筆 十分 方 5 硯 が得 かっ の人しが 掛布もない雑木のテーブルの上に原稿 5 至極 あ 間 を励まし、 策 つ 72 だと 仲よく暮 7 3 1 スパ そ 3 5 w イ 友青年文士の 0 F L ふことを サー 彼の元氣を働かせ して行 で其 た。彼は は自分の名 ン 1 思 の傾向が疑はし 想に呼 0 君 プ 人 は は跫音も立てずに家の 悟 つた。スパ の單 著作家とい 軈 0 態度 應し てきた。彼には家主の話を解 譽だと思 て、 純 を記 な人の 自 T イサー るために、 分 頭 いといつた ふるも は カジ 味 が震える様 好さが 魂を打 ぬこごは L 君 のある のは 難 は b 中 十八 自 と知 皆 勘 ち込むでやつ 如く不安の微 ない を 貧 か な 分 のを見ると 動 か らざる尊 世 困 0) つ そし 紀 つた 家 と戦 72 の例 720 0 0 屋 は 137

2 戶 かっ を開 幾 0 72 lt かっ 12 彼 經 2000 カジ は 0 此 7 な 0 等 ゴ b ない 樣 0 1 知 1w 此 3 己 1,0 の死 用 か ソー ら超然として、 心 んだ家へ、郵便物を配達して吳れと脚夫に賴 した。彼 ブ 0 小 說 カジ 受取 は 著 侧 々と進 つた五六通 かっ 必 要 行 カコ の手 たっ 若くは T 紙は郵便局 1 F." 誘惑 ンに カジ は彼彼 宛であ ないけい 0 んでもどうしても要求 ないしい 知己は つた。何 0 自 僅 年ご 分 か二三人 0 金を 費 L IE は かっ 15 せ 0

る治で分自は氣病の分自

如是の

觀

法を 處

名け

7 に優勝

瞬

間

鍛 者

錬

法と 位

云

200

版

再

版

版

充實し

选世上常

0

層

を占

重

4

福を亭愛す可

他

に施

自

他

0)

を

īE 元

品性

陶

治

を

身心

0)

健康を保全す。

修 性

す 癖

ば 矯

心

旺

盛 8

1=

活 格

力

斷 修 すい 8

壹價

錢 所

定 金 拾 五

込

申 東 京 市 世 石 塚 TH M

地

界

番町 五三六 社

觀 念 服 を 別づ n 刹 心靈 源 正覺を 成 月 天 地

癒え を擇 開 度び 心 けて つ如何 不時 身鍛 ばず唯 經 無碍 疾 な 0 鍊 る懊 患 0) 傷 自 瞬 劾 0) 惱 在 8 如 3 苦 其 の心境に住 悶 0) は 7 は 震肉 疼痛 も直 刹 3 那 を忘 を淨 す真に 根 轉 化す。 治 化 3 坐 す 臥 之れ 3 之を自 する 喫茶 を 腄 得 眠 瞬間 ら用 多年 不足 也。 喫 飲 0 轉機 わ 0) 如 0 如き 何 疾 て靈妙自 日 當 病 な は 刹 B る 0 治 閉 心 執 那の 癒 身 務 在 目 月日 す 秒 13 0 動 疲 妙に 3 可 時 3 止 その 抗 8 5 T

to 時

> 所 俗

口

法といふものほど殘酷にも不公平なものがありませうか。ほんとうに寢ても眠れませんよ、 ほんと

L ず知つた。只名ばかり知つてゐる地主の話が出ると、何時でも容赦なくやつつける。 話の樣子では、スパイサー君は法律上どうしてもさうさせられる迄は家を立退かないといふ意志ら ては かつた。一度ならずも二度も三度も彼は死 歸つて來た。今ぢや一伍始終が解つたきた、財産を臺無しにして了つた訴訟の事に就ても殘ら んだ叔父の代言人に會つた、そして其の度に浮 地主なるものは カコ ×2 顔を

彼の心には、 拂つてゐたのだらうと不思議に思つたのです。 未だ分らない中に、此の事を始めて説明された時、如何して私の叔父は、利益 せ 私や地代が非度く客い を所有するといふ感じはえも云はれませんね。 んよ。あんた、盗まれる様な氣がしましてね、金額は少いが、全くの盗難の様に思はれますよ。 "私や、ゴールドソープさん、生れて此の方何が客しいたつて此の家の地代ほど客い 社會の不公平の化身であつた。 ho んです、然しどうしても立退かなければならぬとい 然し今になつて解りまし 財産は財産だ、假令借地にせよ、廢れてゐるにせよ。 たっ ふ最後の時まで家を捨てる ゴー にもならない家に地 ル 1. ソー もの プさ は あ りま 私 物 カラ

139

ことは能きませ

カジ

常で

あ

暑くはなか は カコ į, s 殆 ら古ぼけた熊子を見付け出した、一つの手は牛ば折れて、其の他は腐つてゐた。 と思 んど抵抗しそうにも見えない叢地 れ ないので。天氣は申分がなかつた。日光も十分這入る、然し屋根の直ぐ下の室でさへ未だ蒸 つた。六月の末頃からスパイサー君は道樂に少しばかり畑 今度は熊手に倚りかくつて首尾よく掻き探つたもぢやくした草の固 0) 其の部分をのつそり~~、考へ~~攻撃した。彼 いぢりを始め 恁麽道具を持 120 まり 彼は は E + 疽 石 分 つて彼 炭廣場 8) でも働 3

3 5 我 質に素晴らし 目的 素敵 食べられ は もない 殘して置く價値の ない ものだ。 上等のものらしい、 さいふことだ。一度霜にかいるとずつとよくなるそうだ。 ある野菜や花の周圍の地面を奇麗にするにあるんだ。例 それ からきくいもだ。私やきくいもの事を人に喜 こりや立派 へば なも 7 此 3 0) 72 豆 138

根 味を飲いてゐた。今、 旣 ものにならな に二人は 此の庭 13 中に家を立退くの かっ 繁つた草叢の中に突き出てゐるきくいもが一番のあてこみなのである。 ら時々食料の供給を受けてはゐたが、正直のところ、此等の野菜物 は殘念なことだ。 は大 方は風 此 の球

或日スパイサー君が斯ういつた

な 2 や出せませんよ。 恶 つてる ることだ どうも私は考へず 考へれば考へるほど腹が立つてきます。ほんとうに らうと。全く、 には 7 おられ N 1 ソ ませんね、若 1 プさん、 私や しも此 みり つち の庭 60 から ת תו 仕 自 分の 事 iv 1-F 精 B Ŏ ソー かず 6 出 プ せ あ さん、 つたらどん -17h 借地

スパ イサー君は何時も借主の小説を「著作」といった。

J° ーール ドソープは改まつてかうい つた。

す。 るあんたのことだから、私の思つてることは 倒されてしまふでせう、人間の住家には向きやしません。只蜘蛛丈けは此處で樂々として カジ る室の 暑さ ス 考へて見れば、あんた、此の家のほんとうの持主は蜘蛛なんですよ。 そして私にや全く其れを邪魔する權利があるとは思へませんよ。ゴールドソープさん、想像力の パ 折 暑さ が續 イサー君 々蜘 を怖 蛛 72 0 巢 の室にも起つてゐた。此の新しい蜘蛛の巣を掃ひ去るがもの n J. T 0 床の中 一つに 1 ル F* 引掛 で眼 ンリー を 0 プ 開 は た一疋の いて 起 3 る る前 ると、 蠅がブーンと長く唸つてゐ 1= お解りでせうね。」 再も天井の隅の方に二三疋の 本 は書 き上げたし、 るの さりとて頭 私が行つて了へば恁麽 カジ 聞 はないように思は えたっ 螂 を鈍 蛛 カジ これ 巣を らせ 2 7 かっ を遊 同 け 3 は n じこと 0 家 らせ C で

あ 8 眠 全な原稿 0 力一 カジ 72 n 0 な 天張りで小説 番當てになるやうな出版屋へ持つて行つた。 カコ つた、 をス そして彼は自 ۲ イサー 絶えず は 書き終 君 少しの熱が に見せると、泌々有難が 分が豫定した期限より僅 つた。 ある ゴー 様に思は w F., ソープは食慾が n つてゐた。 72 かっ 五 然し 六日 遅れ 此 それ の仕 減 つた、 た丈けでそれ から、ゴール 事 は 彼に (結 旬 とつては生 德 を片付 F 用 ソー かっ 8 プ け 知 は早 しと死 たの n 75 速 T 0 それ đ) 問

青年文士は今は只待つより外にすることはなかつた。そして今の境遇では待つことは即苦痛であつ

と努めてゐたが、難かしいと知つた。彼は突然焦れッたいといつた樣な擧動 自分の勞力の結果である雑草の大きな積重なりの上に注がれた。刺戟の强過ぎる臭ひが、それから出 の後には彼と家主は一緒に黄昏の庭で煙草を吹かした、二人共例になく默つて。スパイサー なければならなくなつた。そして時には、癖物の俗意が安逸の快感を彼に囁いた。特別に暑かつた日 て蒸暑い空氣に交つた。 終日頭痛し勝ちであつたゴールドソープは、著作の最後の一章を推敲しよう 君 眼は

『ねえ、あなた、僕達は海岸にゐるのが當り前なんですよ。』

『海岸?』友は驚いてかう問ひ返した。

一十年は見ないな。」 あゝ、海を見ないのも久しいもんだ。ゴールドソープさん、えゝと、違ひない―― そうだ少くも

書き上げ次第僕の本を賣つたら、一緒に南の方の海岸で五六日遊ばうぢやありませんか。』 『そうですか、?僕は今年迄毎年行つてましたよ。人は贅澤を必要な事と考へる様になるものですよ。

スパイサー君の面には不安の色が現はれた。

『そりや何よりですが、ゴールドソープさん、私にや柄にありますまいて。』

ふものがなかつたら僕は丸つきり本なんか書けはしなかつたでせうよ。 「いや、いや、僕はお客としてあなたをお連れ しようといふ意味なので。スパイサーさん、あなたと

るのですから 『私の家に文學者がゐるといふのは全く私の名譽だと思ふのです。で、あんた「著作」はもう直き終

2 r 121 5 n = ドソープさん、どうぞ早まつたことをして下さいますな、あんた。元氣 ソ 1 は 如何です、 7 w ドスミスは 何 どしました 0 1 を出

僕 82:29 歸 省しなくちや イ サ í 3 なら いくら早まつたところで高々金を工面してダービーシ な V. 歸省しないとあなたは僕を入院させる樣なこと ヤーへ カジ 出 行く位なもんです。 態

ずのことだと思 ス して八月末の 場 病 47 ス を報告 >3 ス してわた 0 へ來た、 床 イ から サー 過 ぎた、 就 そし 暑 君 に違ひないと云つたが、青年 b 12 72 は は h いさなか迄も それ て日 要 \$2 が、其の中に快復 文學 たの 3 文けの 幕前 T 友 É -人 12 7 あ ゴール 1 金 0 3 懸命に働 を貸さうと云ひ張つた。一二時 w 17 F 1 ス F" ١٠ F. ソ l て同 ソー 1 1 47 1 サー プ てゐた ~ は彼 じ期 プは は 立 未だ母 君 歸 スパイ 間 母の屋根の の方でも親 の病氣を過勞の つてきくいも を病後の の家に止まつてゐ サー 下に 養生に暮らした。 切 君 ない を味 の家 為めだと説 療養所を得た。 間 艇手 すると二人は ふ様 1-たっ 古な小 難癖を 1= しと熟心 説明した 醫者 2 0 其處で彼は な手 け 七 に希望した。 ント かっ 3 0 紙 0) 必然 72 ٠ ، を送 は 閉 非常 ン 0 不 かっ 一ヶ月以 健 て、 1-ク 康 ラ 恩 に満 ス 庭 7 地 知 Ŀ 1)

冮

に入って、五十磅で其の版權を買ひ度いといふことを報らせて來たのであつた。翌朝意氣揚々た 其 プ 0 0) 涯 原稿 で記 念 は すべ H 版 屋 き日で の手から手へと廻つて、 à 3 通 0 短 V 手紙 到 頭七月の或る日のこと、— カジ 属 1 たっそれ には、或る會社 此 0 H から 彼の は J° 1 小 る著 F カジ 氣

は能 < H < 3 な は 0 T をそばだてた。 熟 かつた。夜つぴて彼は、廢屋の中で怪し氣な、 しくない報知でも受けやうものなら……。 聞えて真夜中に 3 金は ۴° い。全く 心 な 彼 ソ な カコ 1 殆 つて 0 5 一文無しで母の家へ行くことは考へる文けでもゾッとした、 か母は F プ んど費 彼 は きたっ 彼は段々悪くなつて行くに違ひないで思つた。夜は非度く苦しむ、 12 時には階下の空室に人の足音がしたと思 は 此 までどうにか支えては (生計向きのよくない寡婦)家 ひ果 思 0) 鼠 肝 奇 つた。 を冷 怪 族 たして了った、早く本でも賣れなければ乞食の な宿 は 恰 やしたことも を厭 も酒 ふ様になった。 宴でも 來たが、今になつて彼は急に失望した。物 開 á 0 47 72 てる へ歸つて休養する様にと矢の樣に手 此の際意地悪いことには、彼は續 どん 麵麭 物の碎ける様な、 る様 層 1 な事があらうとも、 0 カジ た 天井の 此 處 また何處 彼 上や床下や壁 處 また裂ける様な不思議 に散ら そして若しも其處で本 身にな からとも分らな がばる様 る 32 カコ かっ 0 0) 睡眠 ら先此 間 暗 B になると鼠 いて身體 紙でい を駈 黑 知 は始 n Lin. 處に住 ない。 け を見 つて寄越 成な物音 カジ 廻 んど得られ の具合が に就 る様 低 カジ 0 藝術 5 72 珍 に耳 人聲 で思 にな L 1 142

か つた時 彼 カジ 最 に原稿 後 0 貨幣を費 カジ 手許に還 ひ果して、 つて水 五六日のロすうぎに何か賣るなり質に入れ た。審査 の結果 -はねられ たのであ るなりしなけ れば ならな

驚 其 いて口も利けなかつた、――一寸の間默つて立つてる 萬事休すだ!金はなし、 朝彼 は 非度く加減が 悪かつた。此の悲報をスパイサー君 おまけに病気になりさうだ。お暇しなけりやなりません、あなた。」 たが落着いた決心をもつてか に知らした後で、---うい スパイサー君は つた。

然し驚 く壊 は階下に つてし は きは非常 まつた したのだもの。 擔ぎ下ろされて、 E なものであつた。 違ひない。 若しも家の中にゐた者が、爐の真近に居なかつたら、 それでも五 全く如何することも能きない様な狀態で、 窓か らの彼 つ六つ煉瓦 の叫弊を人々が聞きつけて助けに來た が身體に當つて、 背中と腕に重いうちみを受けた。 最寄りの病院へ移されたのであ 押し潰されてミイラに成 時には 憐 れに も彼

「どつちの室にゐたんです?、 後ですか前ですか?」

=* ルドソープはかう尋ねた。

削 の方の室です。

前 n ス なか 0 バ 室 イ サー つた 居 カジ 君 所を移したやうに思は の不運を熟 友は經 過 カジ K 考 t 4 ^ なが とい n 5 72 ふことを聞いた。 -煙突が 7 1 自 ドソー 分の 明日 處 プ は病院 は會へることだらう。 ^ 落ちか こって來る樣に態々後ろの室 と道を急いだ。今日 は 面 會 を許 から

探 めて衰へてはゐたが、大して惡くはない。 してゐると、 面 會 時 刻 それ が見付かつた、同時に向 プは再びやつて來た。長い外傷患者室へ這入つて、馴染の顔を心配さうに 青年を迎えた時彼の聲は喜悦に震えた。 ふでも頷いた。 スパイサー君は寢臺に腰掛 けてわた。

1

jν **F***

ソー

なかつた。 私や昨日あんたが見舞に來て吳れたといふことを聞きました。あんたに スパイサーさん、 加減は如何です?如何です?して彼の「著作」は如何なりました?」 その事は今直きにお話しますよ、あなたの怪我に就て一伍始終を聞かして下 さ 會ひたくてく 私や實に耐な

145

30

1

イ

٤

者 李 n 7 合 ناح 1 は 7 1 絲 倒 n w 分 1. 1 n 穩 F T B 1 3 と自 ~ 3 プ かっ 立 は 0) つた。 分 數 な を 0 カジ 見 多 72 借 の 72 大 頃 h 町 木 ス 7 1= パ H 3 カジ 着 0) 72 サー 室 くと彼 今や 間 烈 カジ 君 L 朋 車 は 軸 5 0 45 暴風 多 住 7 彼 宅 3 流 0 720 カジ す様な冷 此 吹 較的 5 向 翌 7 0 日 景氣 B 72 彼 3 てい は カコ 0 感 な 好 謝 雨 到 カコ すべ 3 0 處 72 態を見る き出 E 時 大損害を興 代に宿 版屋を訪 ろと云 つて 問 は 20 72 82 た家 ば 其 旅 かっ 行 の後で h 行 0 打 途

n 720 無 根 根 8 72 を浴 向 は は 12 側 カジ 見上 0 近 どうし 報 1. 此 0) 75 は 例ら 山 何 家 を かっ 0) 全く 0 げ 得 0) かっ 惠 暴か -72 4: 行 7 な 8 72 IJ げ ・うに の奇蹟であった。 大 風 夕 ことだらう?彼は驚 13 2 カコ カコ 前 72 5 方 3 雨 1); 7 0 12 3 720 73 0 かっ 其 錠 0 重 に、人の も増して淋 らず 聲 為 出 處 45 カジ 物で 來 T 72 下 8 0 で 事 媥 カジ b 地 ス 好い も落 南 パ 7 方 人 T 30 あ 枯 0) 1 1 あ しく三軒 友に會 あ サ 5 つ 騷 n 0 き且 の大きな重 72 ぎを 1 720 スパ 12 煙 T 鳶 君 カコ 突 ふことの嬉 色に イ 丈さ 0 ス 釀 カジ 0 0 の家 一髪は サー 樣 نر 倒 名 延 L イ び 1-12 多 な カジ n い らし 呼 君 全く し氣 立 +)-0 L 12 è 1 0 處 T T h つてる しさにい 壞 便 に佇 0 君 い。 1= 12 2 塀 カゞ 住 b n は カジ る 0) 萬書 腐 で 7 んだ。 煙 Ŀ 72 T h 大穴が つた屋 大股 突 甲 氣 度 T かっ 自 斐 1-6 其 カジ 3 0 2 時 倒 72 莖 覗 13 分 カジ 1 る 明 n 根 人 カジ 阪 爐 n な 0 U かっ 0 10 もそ 路 を突 T 親 0 12 0 七 で 7 前 消 2 を上つて行つた。 八 h 0) 0 き破 の筈、 だ窓も 720 12 3 は 息 尺 彼 1 4 は 72 to 8 カジ 1 庭 H 聞 彼 高 2 つて落ちて、 蓮 友 J. T 前 3 0) あ 13 3 度彼 る 720 裏 根 0 愈 林 0) 0 5 2 72 12 安 L 煙 R カジ 突 消 心 否 カジ 0 服 カな だ 廻 カジ 起 に付 Te 息 配 床 カジ つて 倒 臥 は 1-知 暴風 L 3 n 5 3 までも非 忽 なつて 冬の 12 危 戶 T 72 3 を 3 室 雨 分 裏 H 試 7 徑 100 0 0) 度 光 発 3 0 0) 0 坳

だが、 のです。ゴールドソープさん、私の丹精した萵苣を食べさして進げませう、きつと食べさしますよ。 培は續けてやるつもりです。私や春萬苣や大根や芥子や碎米蕎を植えませう。所得は中夏まで私のも 朝鮮薊の出來る時分にあんたが私のところにゐなさらなかつたら、私やどんなに殘念に思ふで

せう――丁度初霜がかゝつた時分に………』

『私にや美味いやうでしたね、非常に美味いやうでした。丁度初霜の頃でしたよ。』 『うむ、あいつは實際美味かつたかね、スパイサーさん?』

-(大正•四•一二•一二)-

い。どうしてまたあなたは前の室になんか居たんです?」

たよ。あゝ、ゴールドソープさん、どんなに私やあんたが戀しかつたらう!それはそうと、あの著作 前の室だと少し許り朝日はがすだらうと思つてゃした。實のところ、あんた、私の室は少し陰氣でし とをしたのです。一つには、後ろの方の屋根 有難いことにあんたは其處にゐなさらなかつた。ゴールドソープさん、私や二つの理由からそんなこ です。私やあんたの室といひます、だつて私や何時もあんたのものだと思つてゐるのですもの。でも 『あゝ、實際珍らしいことだつたのですよ。つひ五六日前に自分の室からあんたの室へ引移ったの -著作はどうなりましたね?」 からは可成り不愉快なほど雨洩りがするのと、二つには

「これですつかり私の傷も癒った。著作は私の家で出來上がったのだ、私の家なのだ。だから元氣を 無造作に微笑して作家は自分の幸運を話した。十五分程の間スパイサー君は其の外の事は何も言ひ

お付けなさいと私や云つたちやありませんか。」

何 『ところであなたこれから何處に住ふつもりなんです。元の家 ·遍かかう繰返して言つた。ゴールドソープは直ぐに問 へは 歸 れますまい?

せん。私や自分の地位を想ひ出して、自分の慾望に限りを付けておくべきであつたのです。然し私や栽 じの通り夢が事實になって、つまりは恁麽事になって了ったんです。多分こりや自惚の罰 『えゝ、駄目ですさも、あんた。一生涯私や家を持つといる喜びを夢みてゐたのです。そして 御 か 3 n ま

らびやかな住家 る貴方の 運 命 に平凡な生涯を望む多くの 御召に幸あらしめ、 その路 人々の中に、 に御光を見せしめてと神の御前 そのやうな悲壯な悲痛な一條の路をお進みな にお前 り申 すの

朝の ななな で稀 お 貴方 つ 傷りな 陽に涙さへきらめいた御睫毛 では يخ i は りなさ たのです。 ございませ あ い清いお 0) 朝人目をさけての散歩の時に、一切を打明けて下さいました。私の小さい胸は思はずわ 深 朝風 5 心を限りなく私はお見上げ致します、 吐 一息をお洩しなされた時の御顔、お力に滿ちて引締められたお唇、 カジ ひやートと身に泌む程の、み社の杜の木蔭に、すべてを私に語り終つて ――今もはつきりと眼にうかびます。 お慕ひ申します。 神々しうさへ 何も御心配遊され お 拜 青葉を し致 す 洩 御 しまし 眼 を 3

心の程 葉 するにはどうすればよいか解りませんでした。 に参らうと思ひましても何處からどうして發つたの までまだ一人旅をしたことのない私には、忘れえぬ懐しい思ひ出、 んでゐる長兄と、そして貴方とばかりとかねん~お信じ申して居りました。生れて二十二年 10 あ 0) 條に貴い路をお歩み下さい 死の と推察申して居つたのでございます。私のこの悲痛を共に感じて下されるのは、たい札幌に學 ルー人貴 K 旅に出て發うとする時でさ 從來 方だ から見せて頂いた學校の校友會雑誌の中に拜見致しましたお歌にも V カジ お 賴 り出 來る方と思ひました。 へ、頼りない身は あの夜更に飯田橋まで來て頂いたのは カゞ よいか、 誰にどてすがることも出來ませんでした。貴方 月々の お訪の時に賜はらせました片々のお言 殊に あく 誰 1-も人 カジ n の地 目 1-0 であります カコ 私は深いく 75 一には やうに その 遠 のこの 州 事を 旅 0 出 灘



を抱きて

₹ 0

平 |

好

光子より寥二へ上七月十八日

將來の事に就て貴方が義理と云ふものにお苦しみなされる時は兄は必ずお力となります。貴方はその 下さい。父は人一倍に理智の人です。兄は必ず~~貴方のお身の力となるべき人間であります。もしや 身すこやかにめざましくお進みなさるのをお祈り申し上げます。立派なる地位や譽れやを獲られ、き やうな小さい事件に貴い時でお力とを費してはなりませぬ。貴方は大きなそして遠い暗い 心ではないのですからお信じして下さい。父は最早私を子としては下さいません。母はまた母ならぬ母 います。貴方は貴方の神の命のまゝにお進みなされるのが偽ない御生涯で有りませう。私はどうぞお でございます。よしまた私が父に申しませうとも、父はそのやうな自利主義の者ではないこともお信じ なぎつた、恐ろしい路 ……何をお伺ひ致しましたとて何んで私が母様や父や兄に語りませう。決してそのやうな浮薄な ――其の路こそ貴方の「心の誠」を滿足させる路に進まねば ならないのでござ Í

の懐 京 に連 には着きましたものゝ何處をどうして來たものか追手の者が參りました。 かへされ まし たっ 私は再 び捕 はれ

は 家 0) 2 か 72 方 叔 à 許 消 濊 0 紙を下されました。私はすぐにそれ 父 保 1 繰返して讀みました。 0 お め つくりと家に居られました。 痛苦 1-なた 3 宿 3 0) 12 お の濱邊 10 心 社 家 雞 h る は は 0 町 あ と悩 7 0) カコ なた 母 破 20 死なゝくてもすむのだと自分は思ふ。 杜 5 の家 に自然をまでなさ 自 を失 5 な 和 みと努 で合ひました。その から 一分は を満 父上 いつ n 冬られ わ つた まし が数 カと 見 あ の留守を見 すことが出 返 時 な 12 72 0 の まし n あなた へに從つて生きられ カコ に戀 5 カコ ば 和 よく n か 12 來 玄關 一十二歲 2 て貴 は 0 たに神 計 のは 貴い ない 心を 生 H \$2 らつて家 きて 七月の 0 0 カジ き六十日の弧獨 お手紙 0 侧 夕 3 0 を胸に抱 すべて私 お 方は父・ 死た 今日 の室 摔 眞 を、 初 げする 理 ^ はまで 参つ るならば との 8 b の中にこう書いて下さいました。 0 個 から 前 上 47 0 ^ そして自分は自分の を通 ことは 祝 幾 の人間さして て、 はすこし 0 72 日でした Ç 0) 多 ので 12 生活に入られやうとして、 漏 庭に下りまし ちで 0) るとあ 8 カラ 出 待 淚 で L あ に満 720 來 は 0 0 こう公言することを自分は お ない。 T 0 ء な ね なたは その 3 淋しく思はずには居 12 5 b カコ と思 私は カジ 12 る。そしてそれ つ それ 11 夜 た。そして木暮 涯 72 わ 愛を以て、そう知りつう かっ 30 To カジ 丁度よく 5 と次の夜 は今の 生 と云 せう らつと出 涯 然し今 カコ で 2 :: †2 自 電 あ とを 預け しばらくの 第 一分に て水 0 話 は 死 720 られ Š 0) T あ 恥 は な 闇 L 0) 5 な 50 に佇 派 72 小変さへ 朝 72 て 痕 は 2 お で 死 は 3 眼 まだ 生れ で幾 厚 てわ 老儿 Hj 近 ね 82

お 請 ねしたいためでした。しかしそればかりではなかつたのでございます。

の寂寥に滿ちた慘しい一家のためにお力をつくして下されるやうに、そして特に貴方と兄さを うとも「こんなでは他人様の家に安心してはお嫁に上げられぬ」とあの母上の御 致したかつたために、あの夜更に飯田橋まで來て頂いたのでございました。 生みの母ではなからうとも、反てその事のために頼りなく思は たび戀に 愛しやうとすればする程。 傷い たやるせない悲痛を負ふて科學の 愛しえの家庭に於て、現しえない愛の心にしみんくと寂しまれ 理路を辿られる淋 れてゐる母樣、たと しい長兄、二人の兄と 心配 なされ へ異 母 妹 る 妹 では る父上、 結び あら

わ h る でしたの お世話 しましたのはやはりあ にゆ ? には ね 身であ 源 若き日の路上にお悩み多き御 して居 ると貴方は早くもおさどりになられましても、あなたは決してお止になりはしませ 5 なたへでした。 たのでございます。 心であれ 遠州の濱邊には無事に参りました。そして第一に手紙 ばこそと思ひました。何から何まで、 御心のま 150

慮 は やうともかまわないけれども)死んでゆくあなたに對してはそれ程の胃瀆はないと思つた。 בנל つてもいゝご思つた。しかし自分が御宿 謝 、關係でもあつたやうに誤解されるのが自分はあなたに對して(生きてゐる自分は の涙を泣きました。貴方でなくて誰がそうまで思召して下されませう。折角あのやうにして遠州 72 ゆく身の胸に一點の雲りをも留めたくなかつた。自分は其 のでありました」―― そう貴方はあの朝の散歩の時に云はれました。その に訪ねた事が必ず知られずにはゐまい。そして二人 處の夜に行かうと思つた。試験 お 一時は三 心の程 何と云は に限 0 間 T 8 私 何

あ

B

82

女と酒

との

老に出入するやうになりました。

父は

その事

を知

るや

否や

兄に

は

勘

當

を命じ

年 L せ い『一人の 5 智 K 0) 私 前 毛 カコ 0 K 同 2 は 愛が 3 樣 10 更に E 小 ませ 學 は お 2 校 有 私 ho 0) は b 居 7 事 小 は 0 1 學 h 就 校 ま な > L で 43 T は 0 同 72 h でせ 他心 窓 時 6 人樣 お 0 う 頃 视 13 0) は カコ 福 0) 0 境 致 お カコ 遇 親 1 あ 3 1 3 ひは、 御 お L 卿 同 情出 to T まだ私 頂 來 6 っかからつ 7 居 12 の一家が 0 初 72 は 戀 L 0 0 田舎に一 7 72 御 ない L 方K 120 女の 樣 居 戀 りまし で す は 0 3 傷 ござ 72 妬 智 2 8 身 今の 0 h 私

盖 13 向 n 愛 T 母 0 かっ h 1 札 0 蓮 5 居 幌 ょ 母 0 0) 心 戰 初 ります。 13 V2 0) VI 7 を 事 情 あ 學 任 U んで と云 棄て る兄です。 酒ご か 8 15 嚴 飢 致 去つて 農科 俊記 居 2 2 in え L る兄兄 次で ことは 72 かっ そし 1 0 P 大學 教世軍 今は 旅立 B 赤と青との 1-心に 7 云 如 0) 時 す は 專 0 何 ___ 主が神の 햬 3 菛 切 は 72 n 1 0 寂 B 0 7 2 0) 淋 13. 救 路 3 果 課 寂 12 ます。 世 昨 T 程 L L ることを承 0 4 年 軍 12 3 思 72 B 3 の六月 運 N'A B U ことです。 め 1 旗 に努 然しそ 0 悲 0) 末はて + 暮 かっ L 認ら め 月 3 初 らさつと流 は すアー 7 冷 頃 0 + 72 B で 居 兄 胸 車 何 12 L h も今 0) 5 H 4-8 ます。 たっその 家 兄 メ 1: 秘 あ ン |--は 3 は 庭 は h 8 卒 \$2 支 ま 逐 懺 かっ と山 る眞紅 L 悔 3 業する 1-0 一二三位一體 兄 0) 72 12 -0 座 0 B 室 カラ カジ ことに -2 冰木 P 0) 大 1n は 細 佐 立 兄 7 L T は 2 長 0 0 ___ h 度 妹 御 0 7 な 7 理 1 1. 紙を手 神の聖名と血 居 は 思 口 b 72 性 耐 漂 す え 7) かっ b 0 ます。 5 7 流 3 强 3 720 0 05 n 72 握 人 學 人 ず つて 次 狮 6 と火 0) 0) 63 神樣 祝 T 兄 路 2 L 世 强 多 は 辿 カコ 0

義は恩人の家に報ひることがよし出來ないにしても、恩人一人よりの愛を、更に培つて萬人に、人類 多 75 あ カジ カジ お 御賴りしやうとする考へであることはお覺りでございませう。然しそう出來るあ ますれば、父と母とが(たとへまだ語り合ひは致しますまいにせよ)貴方で妹とを御 御 出 分にはまだそれだけの權威が許されてゐるとは思はれないから一 恩人夫妻に對してはよき婿となり、兄君及びあなたに對 72 ゝ何と云ふ深き御思慮でございませう。「恩人の恩愛を決して自分は忘れぬであらう。 家 「來るの てなさらねば ませんのね。 に紹介する。 自分は使徒の心を以てお受け致します」とお書き下さいました。お敏 でござ 私 愈々怖ろしいと云へば怖ろしすぎる程な最後の時が來た時 いませう。 には なりませんのです。 その友は必ず御家の一 解ります。 貴方 然し、父も長兄も、そして私も貴方の はまたこうも その事を考へながら思と愛との二つの 切をよく保つであらう。 お書きなさいました。「その時 してはよき弟 ーあ お 妹 戰 なたは自分に follower となつ となることゝ信 に對しては U カジ 0 間 に貴方は恩人の恩義をも 來 門 1-出 なたの い貴方の事でござい n お苦し 一所 ば を よき夫と 自 お 直接にこの恩 分は 视 みなされ 御使命では 1 じます。 ひする して行 人の 3 友 わ 152

は は 人としての愛を あ 生の る不思議な運命のもつれがはつきりと頭に書かれました、間違つたら御発遊せ、貴方には あ 最 も惨 0 長 お 5 捧 お 悲 手 げすることは許 紙 劇だと思 の中 で最も私に 3 され 自分達はそ T 御 2 事 情 D 12 自 0 に蹈 分のの 程を思は 3 運 0 命 つつて C せるのは あ 30 は ならぬ 自分は戀愛の 次の一句でし そう讀 triangle h 72 あ なた 時 に私に ること もう堅

1=

報ひるであらう。

」――その一句には深

い高い御人格の程をお偲び申しました。

その

L ~ N 1 タ w ヲ 隊 w i ナ = ŀ 七 V F ヲ 3 モ 懷 0 家 フ 兄 ヲ 兄ガ 棄 ガ 主 テ 八今世ノ最終 戰 親 地 ラ葉テ 八人口二 後 ノ別 長兄ヲ 万ノ鑛夫町 レニ テ 棄テ ア ,v 足 シ ナ 吾 尾ナリの リの 毛 未 然レ N. 兄ガ ١,٠ 汝 特 ヲ忘 七 敢 二此ノ罪惡悲慘恐怖ノ地ヲ撰 ラ V 得ズ。 面 語 ヲ 避ケン 汝ガ 力 トス 1 會 ル兄ガ 衆 **ノ**

3

V

との 流 考へ、全く變つた 後姿を見てゐ h カジ 衷心 出 ば カジ れたのでござい かせて頂 視線はすぐにかつちりと合ひました。兄はそのまゝ一 番先きに座 お 5 7 ゆく 手 ラ 1= 紙 淚 灯 を懐に入れ 0) 時 あ ヲ Í て、 よか ると穢れと罪どの 0) 光 本 りました。士官候補生が矢吹少佐と云ふ方に導かれて扉から入つて來ました。 七 43 その 現在 閃 まし 郷教會に行きました。 四 0 tz 所 8 て、 in 時 たっ を思 かっ 0 ۸ر 五 7 1= ですが、 また U, 私はまだ家 所かで買ひ物を致しました」と答へたそうです。 わまし 赤と青との w P 底 そして怖 母さま 度、 か たっ ら神々し 私 そして最後 救世 來たばかりの小間使の千代やを連れて、 さみだれ が千代やに訊きますと、千代やは私 は家 Ü き奮 軍 い祭の 旗 へは豫定よりも 鬪 0 下に、 がしめやかに降る五月の夜でした。私は二階 と努力ご として私の 光が 嚴 輝 0 度も私 くやうにさへ カコ 愛の に聖 方 おそく歸りました。 ^ 兄は眸を向 路 0 別 方へ 式 を偲び カラ 終 思 向 まし は きませ つて任 が教へたやうに「電 けました。 n て、 まし 買物 その夜 h 官狀を手 72 止 T に行くと云って 8 は父様 兄の 度 兄の 72 1 B 眼 前 私 L な 华 兄と私 0 は 12 は 涙に 一列 右 お歸 淚 生 兄 多 155

720 本局 で兄が魚を積んだ車を引いてゐるのを見かけたと云ふやうな人の噂も聞きました。 の許に厄介になつて居たのではなかつたかとも思はれます。それからしばらく經つと日 ました。初 所に歩 た、しかしたつた一人私 ました。 成る日次のやうな二枚續きの速 てどんなにしてゐるとも知らせは の消印が な父は決して聞入れませんでした。その後兄は家へも親戚へもすつかり行衞 んでゐる兄らしい人を見かけたと云ふやうな事も聞きました、その頃は兄は或は馴染の 青山 めの頃は淺草局の消印でした。ある日淺草の活動寫真を見に行つた從弟が、あやしげな女と ありました。 .の親戚の伯父母はこの時しきりと父に詫びて再び家に入れ 兄は月に一度位はきつと手紙を書きましたが、 にだけは時々たよりを、たい名の頭字T と云ふしるしでばかり送つて寄し 達の葉書が來 しませ んでした。そのやうにして凡そ一年ばかり經 12 のです。 決して住所は るやうにと申入れました を不明にして居 その頃の手紙 書かず、 本橋の魚市場 つた頃

「本日夕七時半本郷教會ニ於テ兄ハ敦世軍士官トシテ任ゼラレン 悔恨 烟ノ如ク類ヲ傳フ。 ア、吾ガ迷蒙ノ前半生ハタ、今後ノ生涯ヲ以テ萬分 トスへ過 去二十 四年 一ノ生涯 ノーヲ償 ヲ顧

154

鳴呼コレ神ノ愛ニテアリシナリの神八途二兄ヲ救ヒヌの 「人もし百匹の羊あらんに其一匹まよはば九十九を山に置きゆきて迷ひし一を尋ざる乎。 ハレル ヤ

兄へ必ズカノ會衆ノ一人へ兄ガ愛デニシ妹ナルコトヲ神ニ耐ル。字都宮小隊へ兄ガ任命セラレタ

頭 所 通 私 りに 痛 は朝 点は全然 は親 から其日は貴方がお見えになるやうに思はれましたので、多少頭痛のするのを幸に、母樣と一 お見えになりました。例の原朴歯の下駄の音が玄關の方にしました時には私ほんとに嬉しうご 戚 嘘の に参りませんでした。 あなたはマントを着てゐらしやいましたのね。 口質ではなか つたのでございます。その日は土曜日でした。二時頃に貴方は 貴方のお見えになるのを心待ちして居つたのは勿論でしたけ 私 の思ひ れども

すので参りませんでした。千代やと花とはお勝手の方で、家には私一人ですわ。何だか まひませんから、私の室でお話して頂だい。何もかまひません がゐらつしやるやうな氣がしましたの、それでこうして心待ちにして居りましたのよ。今日は お父さまは會社ですし、お母様と妹とは青山の親戚へ参りたしたの。私、あの、頭痛が致しま わっ 今朝 カコ あ

眞館 1-見せ致しますど、 とあなたは、まだありませんか。」と申されました。私が、「ありませんの。どうしてですか」と訊ね致し 云つてお見せましますで、 と書いてありましたのを思ひ出 仲善くして頂 そう云つて私は 9 3 ウ したのがあります。」と云ふと、貴方のお瞳が輝いて見えました。私がやつと探し出します ゥ 1 5 to H あ あなたを私の室にご案内致しましたのね。私はしばらくして色々の人の 1 ドに出 なた 子様からの は何となく何 あなたは「え」。まだありませんか、この方の寫異が。」と申されました。 しどかにてクラスの人々にひやかされ候ひしも近頃の珍談 しました。 5 つか カコ 0 私が日子さんから頂いた寫真を「この方をお存じでせう」と お手紙に『……妾とK様とにて撮り候ひし寫真が、その寫 枚をお探しになるやうでした。私はその時ふと小學校 お 寫真を の時

で……と考 をとげ 3 かっ てた も知 れる 10 故 愛 もなく悲しまれ、 の戦 ひに、 人知ず 寂しんでその夜はすこしも眠 旅立つてゆく、 たドー人の 妹 n ませ 1 涙を以て送られ んでし たばか

h

借りる のでございます。 2 43 て勉强を續けられるやうになりました n 0 カコ 意味深 誦 もた ら一年が經 L 7 わ 10 いお言葉を頂くことが 時 る 毎月 K 0 0 B ちました。 幾 お 一度は必ずお金を取りに貴方が参られ、その度に何 作品 つか を拜見したいためばかりでした。 ありさ その間に貴方は、 どんなに嬉し 致し ます。 のね。 思 かつたでせう。從來から貴方の學校の月々の雜 御家庭の豊か へばその事 雑誌のお歌は幾度も幾度も口誦みまし ならぬ がこのやうに 御 御事情の かしらたとへ短 お頼 72 めに、 b 申す 私 動 < 機 0) とな 父か は あ ら給 誌 るが つた to

2 迈 歌 5 も私 82 は 日 路 すきでございまし 傍 1-ふして泣 きも たっ と また 草 0 カン h な歌 13 b Ó B 忠 頰 1n え 2 め 82 思 72 ひを 30 私 に抱

私 カジ 次 よ者 0 歌 を知 りました 0 は 去 年 Ö + 月 0) 號だ つた Ł 思 U

銀

鈴

き路

L

1-

行きなや

・む男の

胸

0

歌

8

なれ

カコ

かっ

せました。

間 違 H ひ 0 まし カコ 1= たら御許し下さいませ、 も君 は 泣 きしど告げて來 その「君」では私 し逝きて返 へらぬ では 若 ございませ き路 Ŀ んでせうか

母様とは青山の親戚に参りましたし、父上はやはり會社の方でしたので、家には私一人だけでした。 + 月 0 末 0 日でございました。貴方は次の月の お 金を取 りに登られ ましたが、丁度その時 には妹

時 にあなたは初めて、今の母樣が私と二人の兄には母ならぬ母であること、妹のみが母樣のお腹を痛 あなたに母さんが無いのですか。とまた訊ねました。 ―えゝ。と私はそつとお答へ致しました。涙もろい子はそう云つてすぐに涙ぐむのでした。その

た子であることを知りなされましたのね。 親のない子は、親のある子の知らぬ涙を泣かねばなりませぬ。女の子に母のないのは殊に 悲痛

でせう。 あ なたの それが殊にほのかにも戀を秘むる身にはです。と悲痛の調で申され お言葉は、 いつも哲學とか宗教とかの深い奥底から出て來るやうに思はれます、 ました。 貴方御自

身の 深い 强い御經驗をもとにしての お言葉のやうにうかいはれます。

――あなたも母がないのですか。と私はお訊ね致しました。

その中に含んでゐるのにはあまりに沈痛に轟きました。十才で母様にお別れ致しましたK様のことを B お とそれだけ貴方は仰言いました。私は『私も………」とだけしか云へなかつたことがどうしても私を 思ひになってゐらしつてたのではございませんでせうか。

H のかには君は泣きしと告げて來し逝きて返へらぬ若き路上に、

せん。 とい ふ歌はこの時の私ではありませんでしたらうか。私は日附から思ひ合せてそうとしか思はれま

とにかくそのやうにして貴方のお考へに次第に教へられてきました。先日の朝の散歩の時、

あ

の悲

お見受けして、 てゐるのだ。」と私はすぐに思ひ當りました。 あなたは「い」えの あのH子様 からの 何でもありません。」と申されました。 お手紙の一節を思ひ出しました。「K様の御繪すがたをお 私は お顔に失望の色を 求 B なされ

い心に 學校 鬼どつこの時の宿にしたことや、まだ改築されない小學校の本館の二階廓下でめかさん(ね、 腿 が、どんなに面恥しくも思ひ、又幼い胸をといろかせた事であつたでせう。ほんとにいつもいつも清 かくしをされてゐながら、手を拍つてはゐとけないあえかな戀人の名を己が名に代へて呼ばれ 貴方はそれ 0 思ひ返し、しめやかに涙するのは幼けなき日の忘れえぬ思ひ出でございます。 時 !代の懷しい思ひ出のまゝ、眼かくしのことをそう呼びませう)をやりながら、鬼 から小學校時代のことをお話しになりましたのね。校庭の隅には櫻の大きな木が になって あ あ るの の小 つて

怖ろしすぎる程 んやりと窓をなが ら吹き込んで、 あ 0 あえなく散り失せてゆく一葉にわが身をなぞらへて私は寂しうございました。私 お訪ねなされた十月の末の日には木枯しのする日でした。机の上には黄 三つ四つ散らばつてゐました。 な未 あなた め てゐると、 來に對する御決心を伺ひ サッと吹いて來た木枯 まし わとけ た社 しに、 の大銀杏の木の葉が なき思ひ出 あの朝 0 の散 お 話に、 歩の折 ひらく 幼いわが に は んだ銀杏 نح 怖ろしいと云 戀を 散 が窓に倚つて つてゆ 偲 の葉が窓か んで、 3 ので へば ぼ

――どうかなさいましたの。とおやさしくお訊下ねさいました。

母のない子は寂しいとの事ですわ。と私は云ひましたのね。するとあなたは

情はして聞きました。けれども愛さうとして愛の心を表現しえぬ父には「許す」と云ふ一語を決して發 前 0 ませんでした。 ならば鬼 病ひに侵されてゐればとて、眞の愛に生きやうとする女として、貴方のお敎へに解れなかつた一年 を捨てゝなりませうか。あはれな女は、たつた一人の肉親の父に一切を打明けました。父は同 も角、お教へによつて愛の路に生きることを最も貴い事と思つて來た私には、その『一人 哀れ な女は 一切の文通を禁せられて青山の親戚に預けられました。捕はれの身とな

0) 敷 永い に病を養つて居りました。 不治の病 病ひには、 1 肺 を侵 最後の處方箋でもありました。 された變人は、 私からの 遠州 72 より 0 海 の風光を愛でて其所の旅舎の、丘の上に建 ばかりが 唯一の慰めであり、 然も醫藥も効なくな でられ った程 72 離 座

つたのです。

悲劇はそれか

らでした。

出來やう。 休暇になつて、大兄が札幌の農科大學を卒業して歸つたら、あなたも大兄となら一所に來ることが 7 する。 ると蜂の巣のやうにまで侵された肺の痛みも薄いでくれる。あなたの愛こそ力だ、慰めだ。 がき一枚でさへ、あなたからであれば、僕には惠みの露です。あなたの愛の手紙を胸 私達二人のことに心から同情してくれるのは大兄一人きりだ。兄は大兄にはほんとに感 にあ

と書いて寄されたこともありました。

十日なのだ。一日一日とこの日々衰へた指を敷へて待つてゐるのだ。 「……七月の 中旬 には大兄も卒業して歸 省出來やう、一所にあな たの 今度お茶の水女學校の入學試 來 るの ももう]二月 0 後

九

向

痛 1 兄が な涙 カジ 2 して なが 足 南. 0) 聖別 0) らの 0) 鑛 夫町 大 時 お言語 0) 0 夜には全く感情か に牛 あ 葉を伺ひまして、それまでお推し申上げた貴方としてさもあることゝ思ひました。 な 馬 12 0 0 お言 如く取扱はれ 葉 に依て初めて貴方が 50 同情であつたのが、くつきりと理解され る鑛夫等の 72 めに働かうとして發つてか はつきりとして來まし たと共に、 ます。 ら一年 叉小兄の志 な

やうに私もなりたいやうな氣が致します。 こうした兄を持ちながら尚またこれ程な貴方にお教へして頂きながら鈍根の私はまだ迷つて居りま でもこの頃小兄の聖別式の時にやはり聖名の祝福の下に岡山と大阪とに送られた二人の女士官の

K 世 杏葉を飛ばした、そして、あの朝語らひましたみ社の森のあたりなどながめては暮 い孤獨の子はあなたに、heroic reformer としてお見上げ致すあなたに戀するとは、 淋 にすみませぬ。 しい私は孤獨です。やるせない時には眼に一ばいに涙をうかべて、かの木枯しに黄焔のやうに銀 ···········: 身、 この心で、傷きは K様を不安にすることはそれだけ貴方を不安にすることではありませんか。 7 彼れは てたこの心で……あゝどうして、どうして…… 戀するは してゐます。 され 淋し

まつたのも、思へばこの私自らのことでした。『一人の愛』を誓ひながらたとへその人がその時不治 月 私 られ 心が父の を離 7 命のまゝに從はずに、義理の上から迫られた結婚を拒んで、嫁入りの れずに定つた結婚の日を過し、「病身であつては………」と云はれて 然も私 カラ 床 に就いたまゝ「下の病ひで恥しから決して醫者には見せ 破 お道具 談になつて 二切が 方一東何

t

りを

廣す

3

空

~ 8

飛日

M

17

よ

鳥い

ま大

! 沈

太陽の

づを

む亦

び旅西

しへ

10

め

3"

B

胸

1-

あ

2

3

>

わ

カラ

お

3

八

は

静けきやすらひの床を

はとこ日 墓 72 X > 3 10 ろれ V < せ 迫 3 汝 け n 見 0 ば る 翨 W カコ 12 L 3 b

1-



飛影静い

寫うき

をけづ

て江

のく

スK

1= ?

入或得

5 U W

間

群

n

1

又為

درد

0) ?

神め

1

むはが

カラ

爲

め

73

3

かっ

W

B

X

W

くし入

鳥

1

1

暮

16

VZ

い、基彼あ汝 Z I 方 から > ひに 1 W し 鳥 0) < T 島 2 よは 叉 は 75 汝なろ b. b b カジ け カゞ カラ W 3 72 學 < 彼 ŧ 愁 は方 L 0) ろ S H 0 3

大鳥飛日 地 J 翔に 1 b す 幾 2 カジ n 度 E 3 足 3 は 7 B 73 離 < n 彼 す 愿 1-

四、七、一六。

葦城

北

米

H

中

2 験を受けて入學許 てくれ るの で身まわり 可 1-なっ 0 不自 72 妹 由 カジ 學校 は な 18 45 から 年位 b やは は、 5 兄さ あ 75 h 72 0 0 為 愛に 8 1= は なら 何 カジ 休 優 h でも b 得 やう……」 こと云つて來て

と書いても寄しました。

青山 最 は 7 か 後の らと話した時には 父が は てしまつた私の 私 ž 從 0) 0) 親 手段としで病ひと偽つて一月も床に就きました。 緣 Ü 一人定めで、むしろ義理 は かっ まし 戚 82 談 思 亡。 は カジ 必で勝 720 始 n 家庭 ませ つた 心 海 が御推 に自 のは 私 0) つと云つてやりましたの んでした。 事の 1-分 は その な待ち 察出 見習ひと 72 頃 10 しか でし 來 に迫られ 並々の方法では拒 ませうか、 わ しや 720 び は T ほ て來 2 h はり簡單 私はその る戀 0 表 かず その苦しみが たために、 面 人を思ひに思 0 むことはどうしても出來な 思へば最後 にこんな事 事 に就 理 曲 で嚴 思ひ通りに結 て細 たちまちに話 0 L カジ R の手紙となってしまひました。 5 起 と知ら つゝ手紙 監視 0 その惱 T 婚は 0) 來たけれども、 世 が進みました。父が をさ ることが 下に云は 中 みか……… 止に V へ書 と思 なり 戀人に不安をますこ くこ 10 捕 は まし 决 その は n まし あ n して父の意志 私 出 12 トその 0) 結 720 カジ 身 來 にこうだ とな つい なく 婚 私 動 搖 で

カジ

題並に

句數等隨意

う山反倉我風人鶴脚田稻冬 そ茶りな家にを編絆の刈 寒花返 夕か怖に の葉 角ば を を ち道 る 冬の 落住睛、双踏 除 町枯に のの葉みれ萱 兎 み 夜 淺 入切中 8 出 石庭の なすは 20 蕗夕黄 て紅 の雀 な 鳥葉 h 渡濃 時 風の す 雨 出 立北る 3 3 風かかざ穂來据り でけて りやななむに 3 3 3

土金真展屈踏 社紫希我唐冬端棕砂 月 希武 梠

霜 霜 葱 芴 雨 兒 田 水家霜 櫂 風 ま 蹴 柱 寒 戾 凪 5 立 を 引 智 病 は n 崩 0 < b 2 嗚 5 引 3 2 ば 荷 煙 來 0 n 6 < L < 72 幾 漕 鵙 肩 音 船 山 畑 夕 突 72 度 る 2 1= 3 茶 土 (" 葱 0 霜 h F 嗚 坪 10 乘 花 0) n à 白 草 兒 0 h 3 6 ろ 3 0 黑 樹 1 0 蓼 寒 田 す 枝 踏 あ 0 大 3 綠 穗 水 3 住 < 蒸 持 額 動 枯 2 鵙 立 0 < 10 3 白 1 ち 折 0 な 道 霜 5 0 3 ろ か 72 R 穗 な 3 Vt かっ 凪 カコ れや 73 な 73 ば 12 n 1-D h n

虚

心

集

碧

樓

こしなければならないのである。

農村に於ける家庭生活

六千 な 1 1 頃 0) 75 75 7 to 12 L å) 合 30 T 居 0 私 业 服 w 7 -(" 3. 居る あ 72 は 氏 酿 妹 裝 稻 3 市 業 10 最 居 Ti は Ł 6 0) 0) 受け 120 7 初 家 3 1/1 0 會 6 な 0) らどを また)電話 流 TH 議 吳 息 便 夜 0 あ 削河 夕食 -利 る 以 外 員 デ n 0 月 聞 電 F 1= E" 3 T 1-(末)ピ 8 。處で 電車も直 この 人暮 時 市 0 住 能 凉 0) かっ ス - P あ 家 老 3 君 h 2 度 外 t p +}n 家 か 構 人 5 6 n カコ は 7 6 1. ッ チ ば下水、 T 720 6 實 L 居 家 10 る。 4. フ あ 1 .3. で自 セ \equiv 6 着 家 6 族 3 7 ヰ 停 氏 + 其 0 感 0 1 カコ ツ \$2 0) 3 州 家 謝 側 5 初 720 車 0 五 0 A 72 水 働 w 家 六 話 0 場 to 道 車 15 0) 8 13 R 1-通 會 年 A 餘 7 1. 12 12 ま 0) 市 3 1-TI 1 設 1 午 議 間 K h 來 丰 6 0 0 馬 週 後 デ 備 車 A 員 據 0) 72 チ T あ 7 部 間 3 穀 居 3 H 氏 1 0 E 3 0) * --) とし 3 夫 整頓 持 客 0 3% 育 本 ス 3 フ 妻 ٤ 1. 6 君 ٤ 時 2

> 三十二 等豫 聞 技 理 君 せら 後妻とし T h 0) 0) 6 = R あ ス 敎 あ 自 事 1-あ 3 5 師 は w 備 女子 身 6 72 業 1. 師 \$2 3 ク あ 3 カジ 6 O 多 72 校 0 丈 あ 0 0) カジ 處 働 け 青 3 0) 學 大 7 1, 鷄 72 私 事 0 7 教鞭 氏 A 者 學 ì ろ は 1 業 12 年 n 自 膚 7 で で 0 7 政 から 從 H K 1= 5 (I) 0 (1) 家 舊 夫 7 と云 居 智 事 闖 Ti 第 目 0 果 本 相 卒 取 翌 式 當 1 す あ Ŧi. 3 F 婦 15 1h 卒業生 朝 3 3 3 業 子 ピッ 6 來 は C 0 1 0 0) 0 To 後 7 で 3 松 0 考 家 居 0) カジ To n 五 生 フヰ 7 . あ あ 苑 + < T U 庭 5 あ n 產 11 月給 る。 文 る。 今 72 は 方 7 12 モ 3 C 五 販 勇 ~ 1 學と 0 蓝 0) 3 6 は 2 あ あ 3 w 1. 永く 0 耳 また 3 3 0) 父 18 þ 1. なそう 3 F 實を發 1 世 人 \$ ょ 事 To 君 収 州 ゥ 從 n 界 農 でニ 子 女 事 T 3 8 カジ あ 0) 3 b T 人學校 で と思 判 t 息 氏 歷 專 共 F 3 事 7 L 5 恩 0 h 試 ス 0 0 中 あ T 話 若 13 農 分 Ł 校 つ 72 驗 1. 3 年 11 38 とな 獨 1 p 前 72 0) 0) 場 科 地 妹 カジ 3 久 12 L 6 ス 0) 1 7

私 共 は お 客 分で あ ると云 3 0) 6 朝 時 华 頃 寢

T

あ

不國農村を觀て故郷の人々

しがき

は

當に 制度 並 村 る カコ ~ あ CK > 云 サチュ 終 米 b 3 1= 2 研 0 月 國 解 政治 親 0) カコ 究 米 田 T 华 セ 旅 國 結 す 切 8 含 " 家 神 3 な 組 4 0 州 就 私 庭 0 事 織 招 來 來 暑 惠 重 待 ては 3 は 生 カジ 0) t 0 3 Ti 活 船 を受 12 好 LES 外 田 紐 あ はどうだ 0 0) 1= 形 來 含 育 で 機 1 到 は學 舊家 け 3 12 12 あ 解 h 0 72 澼 油 1 校 7 T 0 0 暑 汗 = 72 あ 俟 は 1-0) T 人 あ 田 を U 講義 3 つ 3 会 居 あ K 流 ン 之を 1 カジ 3 12 3 L F., 思 b B 8 友 來 7 中 參考 外 地 其 米 紹 72 人 居 0) は 方 國 介 7 0 夏 デ 0 早 內 書 i. 江 0) 0 ۳, 12 丕 蓮 研 1 よう C 耐 私 舉 ス 流 相 會 は

ンピヤ 高 橋 清 吾

史や る。 では しく き事 h 3 8 米 紹 移 徒 は 廣 學ばな 習慣 ラ軍 H 何 國 介 紹 カジ 住 0) 3 必ず其等を採 3 32 は 介 澤 0) して 米 بخ 東部 E i Ш カコ 團 國 b これ其 8 有 V Š 12 見 來 _____ カジ 0 採 19 22 地 45 出 12 百 事 ヌ ばな 用す 方 70 3 3 1 1 0 0) 年 T 我 大 0) 他 7 3 は 地 前 フ あ 3 ると云 b 6 體 とて H H あ 7 ラ 3 82 0 あ 本 1-0) ワー 0 E 3 千六百二十 農村 n 3 記 3 讓 0 カジ で 殊 ふ事 7 0) 號に カコ H 古 あ 色 3 地 1 耳 カジ 5 舍 0 時 3 R 應用 方 澤 E カラ Ł は 1-乘 サ 改 譜 Ш 11 は 止 私は 我 b 13 C チ 良 來 全く な あ 0 3 6 8 セ 進 出 な カコ 南 3 0 な 1= カコ " 步 異な 來 6 30 3 13 詳 0) 紹 は 0 事 3 細 T 弘 3 ~" 介 3 n 3 で 云 3 固 12 < ば す 國 針 あ 耳 ~ 3

臺 な 3 2 0 30 グ 6 あ テ 食 包 後 庭 所 縫 1= 20 食 1 あ 3 村 は 多 所 世 720 ば 3 T から 多 ~ ブ シ P 對 話 居 0 3/ 0 あ L < 小 3 頂 w r カコ え 校 果 客 0 日 多 V t を 3 12 る 供 0 < 1 ŀ 長 1 3 T 1 7 カラ 30 0 中 達 6 與 カコ プ < ッ プ 待 物 あ かっ T は T は 氏 あ 6 ~ お 氏 胁 6 7 國 1 别 遇 30 30 5 あ 大 威 3 6 0 p 夫 寢 10 ス 嬌 3 V 3 心 間 食 抵 m à i 妻 村 人 室 n 7 3 0 2 カジ 1 食 T b 前 3 名譽 1 0) 0) ま 72 事 72 ъ 母 シ p * 日 は 母: 0) な 自 ~ あ 理 0 p 13 b 1 午 木 親 親 感 ----7 2 職 動 想 ---午 } 米 プ 3 後 0 謝 0 切 カコ 聞 いっと 古 車 切 前 洗 夫 O) 言 禁 プ 七 小 3 あ カコ 多 人 4 社 0) 氏 0 濯 1 葉 U 渡 は 時 供 h 3 家 驅 武 夫 云 R 達 多 6 會 毎 To は 半 3 n n 30 柄 備 妻 般 0 ٤ 守 0 日 大 1 n n は 1 72 訪 7 對 12 7 違 0 8 は 1-抵 な T 0 72 供 丽申 0 家 家 得 小 如 何 h 3 は T 居 8 達 3 Ti IJ 意 L 庭 < 子 3 7 B 居 ٠., 3 0 は あ とする 役 8 チ 態 3 あ で居 75 供 必 n 游 3 0 丈 别 カン 30 寢 Ł Æ 度 n 達 75 0) 6 6 H な

> 社 6

あ K 社 間 狀 L 戰 す 戰 會 T 3 爭 况 3 居 事 n 窜 15 P 校 政 對 3 72 論 カジ op 治 す 72 事 出 3/ 3 組 め 8 3 來 P を 織 あ 日 1 12 を 0 本 聽 プ 30 私 12 說 氏 夜 13 初 は 0 7 民 0 分 8 す 餘 各 0) 米 は 3 h 0 態 或 國 大 種 事 困 度 __ 3 政 抵 0) 家 難 70 夜 農 から 治 3/ 30 Ë 出 は 13 P 善 來 感 如 E 關 1 小 < 續 は 12 す フ・ I す 場 H け 日 3 氏 本 3 意 等 本 かっ ż ま H 0) 5 狀 村 本 1 况 歐

III

かっ

8

便

利

好

來

T

居

3

0)

あ

3

0

每

日

食

後 1 私 2 0 あ 12 緣 技 何 0 0) 付 72 訪 0) 師 學 長 Un ね 校 12 re 子 12 3 1-息 家 教鞭 3 1 カジ 庭 1 は 居 大 隨 to 學 皆 3 Ł 分 取 相 0) 當 高 0 かっ 教 B 授 T 17 な 酸 居 或 8 4 肯 3 は 活 2 0 娘 1 20 あ 達 居 か カジ 3 3 h 家 何 大 6 學 庭 18 居 共 0) 7.6 3 人

5 T を 居 3 n け 3 h n n U 大 有 E T 樣 殊 居 8 出 3 T 1-3 1 30 爱 あ 0 F 婦 は 3 會 1-人 0) 72 女 達 12 婧 中 カジ 1 8 8 臺 1-會 雇 311 所 は op は 慈 屈 すい 牛 Sie 働 3 雅 自 事 は 40 命 體 5 1-72 な 力 切 威 多 0 張 入 働 n

h

7

も

b

そう 7 3 3 な 私 72 n 毛 1 部仕 1, 3 私 1 共 12 事 63 屋 7 は 勞 は 72 _ 夫 服 7 聞 今 所 0 2 働 食 人 切 Z 夫 10 外 堂 自 日 グ 服 0 2 カコ A 3 n To は z で 3 掃 H 5 0 族 20 は 朝 0 子 から 除 T 也" 0 出 Z 觀 6 父 息 ン け 飯 用 12 居 7 から あ 君 Z 來 T 1 12 を 意 令 5 猫 K 泉然 共 to 1. 0 w 食 3 妹 n 12 h は 720 呼 1= メ 12 臺 1 3 カジ 1. ~ 3: T 平 0 72 バ 2 7 1 所 1 7 3 Ł 氏 居 持 日 1. タ 0 女 1-朝 7 1 3" 夫 本 1 る 6 中 云 は 72 居 食 3 式 Ł 笑 7 0 0 あ 人 を n it 5 濟 30 君 變 T る 0 15 カ は 3 得 造 A は į 食 縞 頭 0) 1 \$ な 7 な 30 磬 で 47 カジ 丰 事 8 0) 0) 持 1 0 5 カコ カジ あ 5 雇 72 で 忙 3 T 色 初 0 12 2 700 n あ ٤ 來 720 は ずに 72 T 0 は L 子 トッ 居 申 6 汚 1. 0 5

無 は 居 日 あ 比 あ 3 3 H 0) 3 男 較 云 ま 女 的 カジ 感 1= カジ 金 南 2 63 事 打 カコ 0 0 儲 12 は 私 n H 婢 カコ 3 12 12 太 我 人 米 0) 0 0 日 Ti カラ 人 B 國 國 13 あ 18 雇 To 農 朝 3 0) は 而 村 夢 す カコ 8 6 0 调 現 Ö 懸 大 休 釈 學 間 思 命 日 交 7 0) 30 は 12 家 滯 口 な 働 6 0) 族在 想 5 處 敎 中 L 同 1-6

> 書 家 出 究 丰 H す 敎 3 1 0 舉 含 T 會 3 會 多 で 音 0 iv 行 0) 各 T 見 あ 1. 相 カコ 種 行 物 3 ----市 n 談 0) カコ 叉 生 婦 0 1 72 會 n O 縣 は 市 出 カジ 1 72 谷 0 命外 掛 1,0 あ 種 1-午 1= H 3 0 働 あ 12 7 並 君 會 3 15 カコ カコ こう云 合 T T 10 ٤ 居 私 1 1-1 は 冊 自 共 b ア 1 界 氏 分 は 2 7 1 Ä 夫人 自 夜 樣 自 分 分 家 な 動 風 譯 0) 1-2 で 車 俗 事 な Ti Ti 制 を 3 附 妹 カジ ٤. 3 3 近 Z 度 組 フ 32 0) カジ 研

第二の家

E リッ 1 To 出 間 女 T 家 中 居 目 身 客 カジ 15 八 チ 政 多 5 3 下 0 2 月 モ な 才 20 3 0 雇 ゥ 紐 2 持 1 育 + 0 0 イ 媛 7 15 72 つて T 0) K T ン 1= 日 村 事 私 居 な 0 ス あ で行く人 そう 12 愛 業を 共 0 ŀ h 3/ 720 兒 p 1 到 は 6 君 以 1 T 夫 b で 南 あ 3 T 君 プ 0 シ 3 夫 3/ 家 p 3 居 は 凡 0 1 カラ 0 3 28 1 p 30 1 ~ ブ 夏 1 1 辞 3 は T 夫 L 休 75 水 プ > 110 カジ A る 0 1 y 夫 てニ 0 3 1. は T 人 金 家 3 ŋ 70 中 大 ク + 6 あ 0 チ 學 1/2 家 かっ R は 3 呷 1 出 子 け 經 > ٨ 孔 大 1º 0 12 來 君 人

K

洋

意

連

n

T

行

かっ

n

72

0)

7

あ

3

0

幸

n 12

自 往 0 11 77 T n 沿 b 3 リッ 私 動 復 處 道 親 車 百 な カジ カジ 農 切 で 五. 5 3/ Æ 案 村 + 幸 1= p Æ 1 內 哩 言 福 E 2 10 あ 杨 ブ P で は かっ T Æ る あ n 目 州 は 3 1 1-頂 3 3 4 云 カコ 0 カラ ス 向 2 5 で H プ 8 12 0 0) ス あ 3 ŋ j T 急 氏 To ブ 3 カコ 1 か 0 G 1 IJ 0) あ 是 私 1 好 フ B 出 0 非 居 五 1= 퍄 72 グ 意 フ 取 1 7 す 1 H 甘 丰 h 30 N 吳 3 1 1 延 15 T n 事 は 市 1 T ~ る w F. 私 T な な ŧ 吳 30 は 2

ガ 離 松 ウ 12 家 私 0) 何 1 v n は T 事 2 ッ 12 0 -Va 出 1 池 子 は あ な ス ŀ 兄 5 立 供 蘇 P は 0 3 ヺ゙ 弟 0 深 邊 0) 生 古 2 h 2 0 傍 L 人 ッ 2 b る 君 Un で 前 ~ K 油 カジ 池 # b 縋 < 游 兒 呼 1 は 1= 竹 日 紫 h 8 吸 图 馳 3 h ~ 0) 客 落 見 法 色 + 叫 で 1 朝 ろ え 8 1 出 h L 居 ガ 家 j 13 施 な 1 1 7 0 V 0 母 仕 12 0) かっ L T ッ す 7 無 0 72 行 親 0 ゥ 1 3 水 12 カラ 0 0 Z 2 才 几 H Ti 1= 72 阵 72 2 歲 誤 20 根 あ 浮 處 3: 0) ス E 3 T 親 3 カジ 0 2 から ŀ 8 口 で T = カジ T あ X 1 1 四 憐 る 四 君 居 V 1 T ス 7. 2 0 L

> ٤ 兒 下 息 婦 み 地

<

賑

L

15

0

To

南

3

失 12 を 1 は 吹 程 人 3 To R h Ł 返 あ 0) 0 す 丰 L 當 72 る 12 X カコ カジ 其 1 6 安 ス 0 夫 心 効 人 1 30 0 72 奏 狂 L 8 世 0 T 3 > 7 姿 1 は ガ 莊 管 V は ツ 氣 獨 h 0) 兒 は 毒 を 息

第 0 家

1 11 女 夫 0 0 6 -40 150 九 X で あ 1 月 H モ æ __ A 夫 供 0) 百 2 舍 h 1 九 長 は ŀ N ŀ 日 Ŧi. 7 殊 實 + 州 0 州 私 女 イ あ 家 1= 家 共 7 1) 年 3 は 1 0 1 以 1." 1-1 は あ ___ 澼 イ 1 ユ + 3 + 3/ 七 IJ 暑 大 1 ツ 1p セ ---E •7 學 な 1 ツ イ 日 1 チ 3 2 間 F 0 3 V 1 1 村 Æ n 客 教 舊 附 ヷ 1 2 T 7 2 授 E × 家 夫 ラ 來 1. 居 沂 3 な IJ 13 人 は T 村 3 2 そう 3 事 1 12 純 1, 2 + 20 去 夫 然 地 72 地 5 n 1 T Ti 方 3 T 12 0 居 名 から あ 3 To 八 家 _____ + 3 0) 家 h 人 農 0) 呷 は 業 3/ 0) 老 p 0 何 目

1 地

T T 0 あ 置 12 私 カコ カジ る。 0 な T デ F, 17 ス n 子 ば 供 君 な 2 3 來 は 初 3 3 め 3 7 Z 2 牛 報 < 縣 H 知 命 本 カジ 1 前 1 あ 0 以 0 名 T 12 ž そう T

え

あ

多 0 實 牛 活 Ti あ 居 3 目 米 働 は 國 農村 神 15 0 家 h 是云 庭 は 讆 2 痈 羡 0 言 葉

乘 重 あ 修 H るの を持 查 0) 2 H 70 T 感 農家 行 謝 H 2 くと云 7 to 男 1 居 捧 で 女 安心 B 3 げ は 3 と子 2 かっ 中 更に 次 5 流 E 以 家 第 供 會 敷 業 1. To 牧 達 會 は あ 0) 師 出 1-家 勵 1 3 0 席 必 行 6 70 說 ず 3 は 決 發 T H 神 時 大 NA 78 曜 聽 學 は を to 抵 自 校 皆 堅 45 加普 動 T 其 拜 B 精 重 3 行 n p 0 5 0 庙 1 馬 週 To 0

てな

2

まで 樣 15 To 浴 H 12 南 夏 h 本 8 餘 で 3 休 0) 真 0 學 學 2 h 牛 彼 牛 面 登 C 學生 等 0 目 th 0 檔 女 12 1-0 名 學 多 立 數 游 0 は ち < Ł 皆 牛 0 カジ 直 は 樣 鄉 1-働 騷 父 6 特 63 4 1-里 0 横 1 な 血 T T 農 居 歸 多 道道 5 居 0 場 1-省 與 る 3 i 7 0) な 連 寢 T 渦 あ で b 中 車製 居 3 あ は 3 h 或 7 3 先 72 3 は 0 は づ h V 我 母 15 n To 海 E 05 國 0) 0 家 0 水

> は 通 音 0 家 樂 なら 70 L ば 比 L r 1 すり 30 事 カジ 持 出 つ T 來 居 3 る かっ

0 同 吳 0 合 觀 3 H 休 小 5 せ 0) で 3 年 ゥ 殊 情 20 3 胸 2 1= 2 か 本 樣 ٤ る 1-8 な 母 は T イ 1 3 3 1 私 私 20 慰 1 居 質 0 カジ 頭 3 親 1-1 カコ 遠 敬 0 カジ T 3 1 3 3 ス 得 め 0 かっ 故 訪 夕食 6 12 シ 0) ŀ 3/ 0 あ な つ 3 念 鄉 テ p る づ 故 け T ン カコ カコ n とを 0 1 鄉 7 7 30 君 かぎ n 2 6 3 毛 あ 30 私 食 懷 12 72 妆 お ス 0 カラ プ 日 家 2 以 水 家 離 12 前 13 か 0) 3 ~ 73 A 1 72 20 T 庭 20 7 出 n は 1 6 re 辞 優 は 0) T 離 0 午 せ あ U な お <u>-</u> で 後 歸 寸 遇 僻 な 人 る 12 6 3 n 夕 3 R 7 0 な カ よ あ 七 3 L 唇 65 ガ 5 3 時 7 す かっ は ^ 1, ~ 0 時 75 3 3 < 72 华 云 F 3 は 3/ 18 Ĺ j. 3 所 親 皆 T 私 イ L は かっ 0) 0 な 流 T は 3 カコ 切寂 居 3 T 8 云 \$ 0 車 朝 Ŧi. 0 3 5 水 3 < カコ ッ で 反 言 U 0 72 0) H 3 1 あ T T 憐 間 2 1) 1-御

悲な

るて

1 to プ 3 情 氏 は 夫 永 妻 八 東 は 1-西 馬 な 穏 車 3 で 惠 ス 親 な 3 テ E 愛 1 慕 情 ひ、 3/ 3 0) 自 子 2 多 まで 然 思 6 私 あ を送 3 友 8 p

10

N

は聞

讀

むと

云

L

事ら

1

なても

う

7

居

る暇六

のあ種

で

あ毎

る

新

紙

75

備の

n

あ

30

に家

族

0)

何

75

3

客

間

1

大

概

五

雜

3

と私お出あのに

でに積 影 事 半 3 身 8 かっ る。 居 IIII 0) 3 カド で 3 专 50 共 廣 9 人 0 夫 あ 見下すさ T 人達 つた。 居 何 T 朝 他 同 \$ R 60 0 事 n あ か で 罕 n 30 あ 8 業 0 6 Ш 7 人は る。 子息 で父 實 家 晚 其 1 あ また に えまで炊 に 鷄 皆 0 n 教育 果實 B 別 君 見 720 カジ 舍 人は 澤 は 事 1= 白 je 家を持 富 事 其 穀 劉 色 Ш 0 6 立 \$2 世 多 王 0) F あ 類 あ V 7 書籍 で生産 其 初 3 1= 3 山 ク > 立 農科 人 0 p つて n ホ 8 金閣 や雑 派 各 0 父 7 1 居ら 君 初 な人 地 大學 7 ば 五 1 と二人 寺 誌 0 0 T 息 カコ 百 R 女子 居 0 カラ 22 # は h 羽 繪 處 7 4 75 3 3 0) 47 0) と云ふ など 狭 あ 大 0) 人 B 0) 0) 鷄 70 學出 きま であ 3 豚 命 で 多 L R Ш -为多 7 50 息 餇

村

3 PIV 3 2 居 から * は 三云 3 カコ N 時 多忙 事 3 极 事 0 218 1 分 思 間 T から 分 題 居 0 0 þ 7 5 時 家 0 13 g. 1-72 6 伍 將 to (は 13 72 0) 2 17 來 男女總 で 專 醋 0 ___ 人 あ 心 間 一生 60 る。 天 1 題 B 懸 F 見 出 雇 國 3 命 A 疎 To 家 5 働 1 1-多 置 な 0 働 (大 何 0 5 カコ カコ 經 2 7 7 6 な 綸 居 居 知 5 30 h 間 6 3 0 調 は 1-To かっ h 6 合 あ

> 斋 0 年 我 To は あ カラ 農村 善 3 3 0 米 青 青 年 諸 年 男女 君 0 別 意氣 けて學 1 校 感 U 教育を受 T 欲 け

> > 72

まで ĺ 牛 事 6 3 3 0 J. 時 老人 8 73 から あ カコ 本 米 3 日 5 あ 1 h 0 る 達 カジ 本 は H 0 は 含 0 田 朝 必 或 いよく 含に は 田 Ŋ 村 すい H B 近 嫁 舍 挨 米 舍 0) と異 所の 國 t 拶 A 1-1-近 なは < è 0 行 0 所の子女と なら 言 老 田 あ あ つたりし 一葉を交 大概 一合も同 T 3 3 達 井 15 0) 0) 6 芦 10 家 端 0 は 知 72 じ あ 親 30 A 會 To す h to 1 R 2 8 議 で あ 合 見舞 云 カジ あ 30 0 0) 0) 生 3 樣 S 家 カジ 極 de な 2 な さ云 端 け 8 2 30 6 な 7

農 村 0 政 治

例 少 居 2 ね 學

南

2

12

先 州 6 ~ 農村 づ 13 4}-村 7 概 チ 民 ユ 0) チ 也 7 政 Æ 7 類似 治 B 弗(組 10 18 世 織 Œ æ 7 3 は 圓 V 制 -19-州 Դ チ 10 0) 0 を採 依 租 ニュ セ 税を つて " つて 1 州 約 里 1 居 8 73 る様 3 3 就 ヴ 0 47 ラ 0 7 C 22 あ Z 南 ば 3 8. 25

ふ子 供 カジ 達 家 0) 鏧 カジ 耳 1 入 速 0 12 ス 13. 1 次 力 ١٠ 3/ مح 云

F で 婧 あ 12 沂 3 ヌ 0 自 1) あ 供 3 かずの 31 0 -1 達 Ili 午 3 5 38 to TY. 午 0) 何 g 前 力学 夫 あ 0 徐 111 H は A ٠٧٠ 家 しを夜 切 3 7 4-大 は 1 家 面 遊 0) 1-抵 夫 18 分 び T 壮 行 T 1 家 b 0 3 寫 4 2 7 は 猶 T 1 20 12 は 真 0) 六 5 3 家 は 伍 な 7 1. 37 どを 庭 且 n 供 日 女 3 先 蓬 つ 3 7. 7 T 毛 居 づ 訪 振 p 大 大 1 僕 3 目 問 1 h 路 塱 媳 事 廻 家 1-7 L 出 出 多 2 1 T 3 0 0) 身 身 雇 あ < 步 IJ 12 子 T 0 は 1 3 B 40 0) 供 毛 0 な 0) 12 夫 T 澤 は A 05 0) あ 7 } 事 7 Ш 主 T 0) 0 附 あ

觀 カジ 3 8 贅 勤 位 什 T 勉 To 雇 澤 To あ * は な あ 3 0 す 虚 1-樂 3 カコ 6 濟 3 かっ 心 10 to 0) 41 以 必 0) 强 1= る 7 す 3 見 0) 如 3 婦 榮 何 T h A 20 办言 あ 1= な 飾 3 カコ 沂 6 0) 6 所 意 東 T 0) 惰 女 部 A 地 12 # R と云 方 0) 30 0) 雇 眼 は Å ~ カコ n 6 6 R

1 ~ 21 4 君 カジ -私 は 0 食 食 同 ~ 10 以 T 事 外 居 6 は 3 あ 林 切 0 橋を見て『べ 72 禁 C 3 歲 n 1-T 1 居 3 3 E" 事 1 p は 小 1 15

> 兒 は 3 米 威 11 喰 0) 0) 子 外 供 な 13 40 け 管 0 で 美 あ 3 は 自 L 母 15 分 B 親 かっ 0) 0) 5 T 云 あ 葉 T 30 3 F 居 直 る 0

を示 る。 皮 0) 0) は 12 6 和 38 6 7 ~ 都 あ 72 3 ま 3 Z. 處 あ E" 3 合 P つて 3 3 1 F n カジ 12 カジ \exists 0 申 TI 0 72 好 小 -70 泉 居 ン ノヤ 0 40 3 1 1 と云 ۳, 6 八 n 3 夫 雲 ナ 40 あ T 20 人 1 0 氏 造 七 1-0 12 0 72 T 花 居 1, 0 0 次 女子 0 私 3 怪 日 +" 女 E 私 夫 談 4 1-飾 N + 大學を卒 1-1 ラ 0 0 バ w 特 は 7 櫻 1 250 文 居 B 1 1-力 1 姉 與 デ カジ 菊 夫 6 1 君 業 味 3 H 人 n カジ 夫 3 3 非 3 ノヽ 本 は 人 72 70 持 同 2 常 馬 0) 20 72 12 氏 知 鉛 家 1-6 九人 < 3 好 薯 0) 30 12 15 \Rightarrow 本 3 0) 訪 1 あ

1 君張 72 T 3 自 1 居 は h 處 氏 H 3 パ カジ 分 舍 好 は 0 H 0 毛 招 は 3 私 6 > +== 待 6 は 7 南 ----農科 番 30 +" 3 あ 受け 乔 w カラ 0 成 11 氣 大 72 農て 學 1 6 極 カジ ま < 出 好 -) T b 場を 兄 身 其 小 5 は Ł 弟 3 6 n 紐 見 目 育 0) 63 は K 父 家 1 下 2 大 3 行 運 君 T 75 1-かっ 6 住 居 2 沃 3 ボ 業 あ h 3 ス 12 10 h F 3 1n 從 6 居 72 3/2 カジ 事 Ł IV 6 夫矢 110 L n

稅 記 會 8 1 0 3 巡 12 13 70 12 8 Ł 省 昌 堂 カジ T T プ 8 0 0) カジ は です。 村 あ 0 あ 当 3 カジ 0 0) H 愈 そう 處 る 屋 居 3 す P 北 1 あ 水 麗 人 隅 3 州 氣 消 は 古 0 3 0 で かっ な立 なく です 720 室 1 事 3 なら 栓 スト 6 る 72 0 ボ 7 道 來 は 7 h 人 役 1= 1 0) 2 n 派 消 場 な 儲 充 は で な かず 0) 五 73 プ カジ 3 13 自 結構 米 は 兼 カジ 0 あ 巡 V 30 分 0 防 4 T あ 百 唧 宅 なく、 買 3 杳 18 佛(五 3 な h T 國 組 0 居 和 あ T 筒 る。 で 居 7 は ī 0 3 T 補 2 な あ 0 は を買 あ 事 居 壓 政 日 カジ 3 勿 0) 72 る 0 12 ボ 300 この 7 0 樣 0 治 全く 務 論 7 力 b 人 かっ 本 2 圓 U 别 别 多 無 村 カジ プ 0) な 3 組 カジ V まし *پ* 3 樣 1= 諸 村 巡 高 村 1= 0 で 1 織 あ 0 理 す。 村 青 " 長 0 屆 To 3 馬牛 沓 0) 僕等 1b B 5 カジ 12 きすっ は 在 に屬 直 村 長 0) は カジ 日 を 决 年 カコ 7 0 ねと 書 本 1= p 収 で 所 村 共 3 ス 接 あ 議 0 其 į 警 は す L 0 L 10 入 あ 0) 0) 3 カジ 火 村 察署 樣 役 岩 事 は T 蒸 0 12 3 禁 0) To 申 村 かず 居 氣 2 買 3 隆 元 Ĺ 全 他 b な 錮 Ti 其 長 カジ 然 諸 書 公 3 杏 處 あ 買 村 あ 0) 术 0) 來 12 1-0)

> 財 は カジ は 水 產 村 餘 程 0) 0 經 考 制 0 費 限 12 1= Š な B 無頓 0 し 0 T で 着 あ 村 あ 3 民 3 Ti E 他 <u>__</u> 1 思 3 0 選 舉 語 眞 0 72 權 5 似 0 \$1 多 720 で 與 カコ h あ 私 る 3 3 は 72 敎 云 カジ 育 3 2 惠 0 9

3

世 手 太 日 本 1-帝 0) 中 乘 國 T 5 8 カジ 0 進 D 將 近 20 樣 來 頃 1 選 1 を 從 す 舉 思 3 0 權 2 7 73 カジ 擴 村 肝 6 張 要 ば 0) 0 經 To 輕 運 費 動 あ 13 3 カジ は 增 旺 < 大 煽 h L 動 To T 政 あ 行 3 カジ < 冢

0) H

機 治 結 雇 織 15 < 8 チ 8 Ė .2 關 立 は 的 0) 0) 果 63 to 1 事 租 を單 12 で 8 な は > " Š Vt To 稅 あ 增 D N 3 注 月 事 あ E 純 137 稅 n . Æ 支拂 意 ば 務 な 0) 給 3 2 整理 す 3 重 了 30 カジ 1-1-荷 3 整 我 は 0 多 n 州 3 とし な は 多 E < ~ カジ n h 事 L 73 事 或 H 大 0 農民 出 とな 農 勢 な 73 3 2 n は 3 す 村 ば Ti 米 け V 0 3 3 な あ 11 國 \$2 n To b 0 結 樣 3 3 政 ば ば 0) 南 > 色云 0 治 農 從 な な 3 果 3 村 民 3 つ は 10 的 民 7 餘 何 0) H 2 n 事 成 計 8 は は 8 別 6 本 С 8 0) 出 75 かっ 11: 社 農 役 よ 會 V j な カジ 8 10 137 村 3 役 員 70 b 的 n 7 -17-3 政 8 組 多

同

等

權

70

す

3

0)

To

あ

3

0

人

百

餘

來の育學のるを學た 肩程權救 ○ 占す 村 で學 で 0 校 學 Ш 長 な あ 處 3 カジ 3 長 務 0 貧 1 度 to 村 B 村 役 0 日 多 持 委 で かっ カジ 委 民 碰 0 員 な 員 ŧ 衛 本 任 高 昌 あ > 0 11 b m 1 3 30 r 生 0 12 命 を 3 T 3 45 别 0 L R 巡 Ł 係 小 1 選 カジ B 0 居 選 1= は 7 巡 查 3 舉 け 0 72 大 3 舉 A 0) 3 查 戀 な 0 古 人 な す 加 カジ 6 h 6 は 人 人 す 村 るの書 0 5 6 3 3 宜 あ 助 0) 0) 3 樣 穀 0 事 8 例 3 し n 役 中七 是云 教育 樣 ~ 1 は 助 15 職 而 27 記 0 0 員 事 な 役 な B L 米 樣 7 0 0) 役 0 多 7 T 2 量 國 1 1 な ŀ 採 T 目 カジ あ 米 1 關 カジ 0 0 8 -70 0) 人 な 用 敎 30 居 0) 3 阈 婦 0 L 0) 村 ~ リッ 3 兼 L 學 0 カラ 63 育 1: 人 I 7 収 長 兼 丸 0 チ 72 務 彼 0) は は は 73 入 0) 等確 To 役 ね T 七 h 委 重 婦 3 居 2 す 員 T 般 は信 1= A 大 78 1. 3 三か母 4 居 3 カジ 1= 6 地 榔 h 0 小 人 敎 人 0 0 5 姉 位選 選 あ

扱は 關 事 要 3 3 3 員 係 古 毎 カジ 0 多 3 F な 村 年 7 n 店 務 婚 惠 減 あ カコ O) Z 収 書 カジ П すい 3 3 0 烟 h 0 議 公 3 云 で 記 1 入 屆 會 方 役 决 消 B 2 あ 111 せ 針 B 3 防 は 其 収 張 0 5 30 ま To 0 組 0) 入 3 總 採 カジ 3 他 役 0 7 72 會 75 0 村 牌 7 72 8 0 カジ T 6 村 備 毎 初 民 1-あ 居 5 To は 1-0) 戶 0 は F à は h 3 勿 如 事 7 夜 3 論 हे 訪 談 0 别 務 南 分 其 0 T は n は 3 す 村 潮 處 あ 出 0 T 書 0) 業 Ti 3 來 0 租 記 郵 得 村 係 村 税 0) 生 便 宅 -3 F 1-30 局 切 丈 は 集 か T な H 兵必 取死 8 h

_

カジ 1 2 0) は 1= 次 To 0 村 兩 11 1 セ あ 0) 村 毛 例 V 137 3 現 0) ン 0 在 村 ク ~ F ば 並 州 ŀ 長 7 で 12 8 V V 大 CK 0) は 助 1 ノ 3 村 1= 2 巡 to ッ 民 5 將 役 1 查 初 7 村 1 來 セ は め ス 1= 配 1= 3 ッ 布 直 村 13 就 面 1 切 3 接 す 12 會 B とどう 1 0 3 7 1 同 口 役 報 足 敎 72 C Щ 0) 員 制 0 ^ 干 で 書 T 選 は T 度 舉 同 0 あ 吳 8 あ To 1= 如 3 貰 n 3 あ かっ T か 0 5 カジ 3 是云 親 0 あ 72 n 7 0 3 72 私 切

リッチ

Æ

1.

村

は

0

公

カジ

あ

3

0)

2

村云

0 5

まも

ながに

h

衛 °

生

な長會

りや堂

其

の役

他は

村大

に抵

す

0)

75

い村

村

助

自

久能より龍華寺へ

内ヶ崎作三郎

朝 illi 酸 箱 震 現 登 海 偉 砂 10 朝 銀 は 質 墨 は 河 根 保 嶽 1= 人 糖 河 る 6 2 0 路 逝 繪 當 路 宮 主 臨 黍 3 0 0 かっ 0) 歐 B 茂 10 + 香 3 0 6 春 B 光 W 盤 朝 7 密 闆 清 星 0) 0 小 海 7 T 3 2 海 0 3 見 尺 = 渚 は 柑 多 0 子 直 宿 層 は ~ 等 清 林 夜 3 1 水 n つ 0 燈 1= 15 0 百 詩 彩 見 < 秋 中 j 0 0) 0 睡 ろ 森 年 \$ ŧ Ł 間 1= 八 0 T は は h 4 カジ 0) 3 n 魂 3 茶 \$ ば 秀 6 め 姬 T 空 3 波 波 2 月 歌 大 ٤ 冬 才 古 は 0 久 L 0 0) 3 0 包 空 0 靈 夢 能 音 色 0 ŧ 1-理 T 1-8 慕 夜 1 2 想 Ш 幽 温 は ひ T 0 0 は カコ 碧 は ٤ ば Ł No 洋 柑 晴 は 3 0 禽 は カコ 多 游 自 b -峰 0) 3 3 書 0 n ば 3: 0 U 然 t 初 1 管 座 12 h あ 3 は 旅 音 d' B 吸 1= 久 赤 す 8 今 3 0 F V 0 光 カコ 紅 は < 空 す U 3 抱 Vi \$ 咸 あ カン 8 0 駿 6 擁 * す 0 1= CK 葉 ほ 頃 3 1-雪 < 當 す 山 遊 河 富 0) 0 ち め h 7 2 T す 士 よ 名 申 ば 士 ılı 姬 あ 3 12 > 保 of. 0 3 智 嶽 5 姫 0 ん な 7 君 仰 0 0 ま h え 75 君。 し 3 松 つ カラ 腿 原。 め 9 > る。 0 10 は。

讀

趣

味

婦

0

國 惠福 干 郡 あ 3/ Z 3 3 ~ る 村 け 0) B 選 屋 實 浩 3 F B I 沙 程 L (03 貰 現 惠 0 H T 30 13 3/ 縣 解 な 要 * 農 各 若 政 应 在 本 1-悟 あ 止 III HT カジ 3 す カジ T 5 自 民 は ば 關 並 8 3 25 村 官 h 村 自 8 あ 1 な 3 0 日 カジ 車 3 び 7 同 1 30 民 固 廳 國 る 自 0 け 負 6 水 簡 問 心 其 1= 得 7 車 0 10 カジ 有 2 民 分 カジ 擔 n 0) 單 れ將 事 は 得 郡 7 自 な な 0) 務 自 ば to 1 1 で 來 1 B 3 T 好 3 9 3 主 な 分 な 餘 邨 村 行 B 宜 30 あ 樣 1 縣 0 獨 務 委 な h 6 時 0 b < 民 < 息 思 3 1-7 b L 云 か T 12 托 け 役 1-確 V2 から 世 < O 2 4 2 75 6 0 ま 事 真 0 あ n な 信 場 其 h T 敎 8 7 私 必 0 柯 3 精 To 務 ば 役 3 30 0 3 0) あ 思 要 7 度 神 自 守 は かっ 停 な 0 ~ 場 古 册 經 3 3 2 誠 我 は 3 爺 < 治 1-入 6 h 0) 話 3 費 3 n 乏 0 N'A F L カジ な 1/3 村 15 縣 0 人 な 1-多 云 7 農 7 よ 12 浩 5 民 7 多 5 B 间 獨 な 6 節 12 2 居 h 和 あ 3 來 守 0 4 3 郡 1= は 10 立 3 B 約 3 耳 る 投 諸 思 3 显 内 3 3 日 W) 0 0 敦 82 72 實 票 君 3 は 有 樣 先 事 本 干 7 72 人 ~ め カラ 0 樣 Ti 浩 3 2 T な T 7 づ 鄉 米 は 0) 0 T 1 は To かっ 75 CZ あ

てみ者且する高讀、の、が 既讀學そでさ精深んをつるるめむ、新、な にむ文れはれ神くと有高。婦が婦、低、 學はなば的修欲す等本人し人、向、 多叉等主い歐要養する教誌がて難、で、然、の家にこか米求せるを育はか却誌、あ、る、著庭關し。のはよるを育はか却誌、あ、に、述專して歐大根といのり受れるてあ、 日、編門て流米學本んでとけ迄誘下る、中、本、纂のは行にに

こあすたも惑ぐ。にいに、物雑男にもて於ばはで著人婦 るるる婦にるか は、て、あ誌女關專はてな男あしの人 を °が婦人陷のゝ 婦、は、れも共す門男男ら子るく讀の 希婦 '人間あみる 人、婦、ばあにるの女子ねの。進書数 望人今諸題らで雑 は、人、雑る同雑婦共ど。高併歩総育 す讀後君をざあ誌 讀、雜、誌が一誌人學異婦等ししのの ま、誌、に 'ので離をる人教婦た進進 る者はの論らるは °諸一間じん O编 ず、の、依こ書あ誌許もの育人る化步 君層にてこ吾人 し、濫、頼の藉るはすの智とのこしに も努多來と人の て、造、す方と。お所で的一高とたつ

自力數たをは位 男が、る面雑宗るがな要致等はるれ重をのし希見地 子・一・必に誌教が多い求せ教事こてし試讀 望識を の、つ、要はを哲い、 の、ね育實と婦

甲鳥生

亦 3 は å. 0 妆 3 程 然 な 0) 題 田 1: 重 來 13 0 存 1 大 耐 男 T 計 する 主 0 會 15 現 會 抽 間 間 は 間 位 0 題 盟 韻 n To T 智 貧 3 は 3 貧富 占 謂 富 あ 前 8 23 ~ 間 0) 記 ば 題 間 3 T 0 題 直 分 8 0 あ 30 0) 1= 3 類 貧 論 T 者 1-カジ 富 - 1 すい あ で 從 就 3 3 問 あ 0 0 所 題 中 -0 7 以 余 T 最 種 同 特 0 カジ 3 K 8 社 0) 重 視 0 會 後 更 形 問 者 8 d 0) 士

る

後 買 业 1-原 12 カジ ~ ば 書 代 動 7 0 0 特 0 柳 械 各 年 は 禁 貨 h 力 1-17 4 大 谿 30 國 1-沂 識 金 貧 11: 10 資 富 則 為 世 0) 至 6 者 利 3 同 息 本 盗 3 あ 0) 世 間 7 業 注 題 組 72 約 3 至 0) 思 あ =: 0 織 意 禁 想 は は 四 h 0 8 節 7 資 0 0 著 + 歐 多 0) 古 JH 機 之 州 發 代に (利 は 五 太 Die 0) 蒸 如 械 現 カジ 年 1 丰 起 未記 30 於 爲 發 間 於 義 L き之で T 業勃 T 見 T 從 機 達 は T 的 五 30 奈 企 議 來 關 小 ること 旣 翁 あ 業 然 0) 18 涿 康 論 章三 手 るの Ł 其 初 Vi 的 戰 カジ 4 1 I 12 爭 勃 6 端 8 平 カジ 一七節 業家 乍 出 を 終 7 種 和 興 3 然 來 验 鱦 K 其 0) 了 1 > 士 1-0) 發 時 後 此 h 内 7 3 1 器 0 社 T 達 To カコ 至 問 地 舊 -八 3 題 賣 約 業 具 0) あ 例

> tion) 狀 72 會 0) 3 疾 相 到 問 懸 0 病 0) 垄 底 能 是 T 題 屬 カジ 新 1-3 7 益 俄 あ 中 n 根 7 1-あつて 3 最 K 學 然 勞 起 太 甚 者 重 Ł 働 0 的 要 12 者 戀 0 爾 0) 所 大 化 かっ 1 0 後 3 資 B 謂 各 群 智 今日 0 んとし、 產●國 1-血 本 E 業・の 投 家 ~ 1 革●產 C 1: 72 至 0 7 命●業 甞 對 る迄富 識 從 抗 耐 7 卽 者 0 經 從 Industrial 會 す T を襲 驗 0) 3 來 老貧 貧富 注 世 0 意 3 小 0 者 問 を 12 h カジ 企 兩 顺 題 出 0 階 起 T 貧 は 來 困 社 あ

割 W は B 中 1= 製 乃 通 72 弱 無 30 至 甞 3 其 1 L 者 表 事 た同 7 此 は H. 九 T 等 1-物 實 之 四 0 Eltweed 示 多 年 1 現 國 全 0 は す 貧 說 成 < 象 民 整 3 0 財 民 若 3 朋 + 死 は 見 產 於 財 な 问 L Pomeroy 3 獨 五 所 0 產 b 30 7 7 Jin's 及 h 遺 6 蓝 九 0) 者 頗 ----以 あ 割 -產 國 九 あ 3 余 內 つて 制 h 畫 0 相 0 A 於 男 氏 分 + 輸 續 は 之を Tr 7 强 分 莊 0) 蓝 积 は 18 計 0) 2 0 國 國 0) 0 光 且 2 所 所 民 算 所 統 國 1 多 於 體 73 有 有 割 0) 有 0 す 6 30 五 爲 的 V 財 1-___ す A 小 割 L 3 產 基 八 3 六 表 九 谷 333 12 謂 分 政 0) \$2 -阴 20 古 30 餘 集 年 超

仙會問題と基督教

木

. .

享

る。 問 0 T COK 豚 表 3 經 0 7 は 中 1= は あ 濟 8 す 依 觀 而 認 斷 るの 狀 古 0 L 社 n 1= 九 É To 能 ば 定 め 會 T 反 # 是 吾 歷 で は 料 階 凡 紀 擎 72 史 あ 依 な 人 級 T L 0 it -0) 3 0 階 0) 屎 T 13 0 11 0) 必 T 級 間 史 新 葉 爭 ず 然 特 沙と 卓 0) F 奇 力 1= 越 哥 於 定 存 0) n 0) to 彼 唯 な 8 也 在 け 窜 0 總 6 72 カジ n 彼 3 鬪 物 並 見 7 6 0) n 3 1-爭 は 中 ~ 計 宗 解 彼 0) > 相 其 潮 IV 會 唯 發 A 耳 30 n 0 種 ク 階 謂 發 瓜 カゴ 觀 物 0 間 類 ス 級 社 中 な 現 起 L 1= 0 0 1= 可 間 會 反 觀 h 串 1= 何 h 3 7 鬪 0) 階 料 20 外 12 12 從 是 謂 で 爭 級 13 0 0) は 3 來 意 あ 鬪 總 其 0 2 5 を 0

計

會

間

題

7

は

111

T

あ

3

カコ

0

之を

簡

單

15

說

す

n

級其い 統 7 産eに 級構 題 級何いば 3 分 間 間 カジ カジ to 1= 成 發 0 に、耐い 資●標 5 分 す 0) 如 生 存 0) せい會い 狀 本●進 車 3 年また 3 ば、問い 0 在 態 健 L は 多 3 齢のれ 人 矯、題[、] 標 得 類 Te 全 T 其 30 其 正っとい 朝 準 標 要 死 進 例 しいはっ 0 E 3 は 間 有 0 件 關 或 步 To 準 種 L 0) 得、社、 29 係 3 す あ 產 Ł を 其 不 るい會い N 3 3 て資 者 カジ 原 性 0 成 健 かい谷い 0 (富者) 表 社 生 因 7 智 L 全 の、階、 是等 すい 3 本 老 標 徵 T 會 カコ な 問、級、 問 5 は F. 關 3 肚 進 F 居 題、間、 題 勞 無 標 係 何 階 幼 相 3 で・の・ 働 進 あい不い 8 3 17 等 級 產 0 0) 0) 者 验 は 0 問 161 者 7 T 存 る、健、 男女 生 勿 級 利 題 0 全 0) 0 あ 在 する 1-調 3 益 8 T ٤ 放 ない 者 階 品 谷 0 は 發 0 關、 カジ 和 級 和 0 衝 生 カジ 0 别 社 社 係、 社 7 階 7 突 L 成 غ 0 會 會 會 8 階 す 階 あ h 種 財象級 E 問 階 如

義 者 72 藥 かず中 100 -1 W 0 1. 1 3 化 家 建 H 度 あ 呼 72 7 (Social 12 4 多 多 8 社●前 ば 徒 來 0 0 ス 會會者 1 澼 7 0 n יול から す る 種 來 X 2 0 政・は け h 3 0 Z 7 省 は 17 例 學 坐 76 Reformism 現 は 通 現 所 0) T 居 1 老 X ~ 貧 在 は 俗 制 無 晶 ば 現 3 中 全 7 社●富 0 制 新 は 然 無。當 惠 度 < 别 0) ブ 席・か 會●の 度 第 व 政。路 0) 唯 ラ 財 會 3. 8 士●縣 to 破 府のの 厭 無・あ 制 3 1 h 產 主のる 3 Politics 義●隔 維 加 to 泊 壤 度 は主・大 1 0) P 持 を 稱 多 共。義。官 普 1= 義。か (Socialism 會 私 中 0 F. 13 產。者。如 大 3 1 福 堪 0) (Nihilism) 7 理 組 有 最 體 主。(Ana n カコ 其 多 \$ 曆 3 想 織 (Utopia) 事 7 若 0 兼 6 \$ 殺 威 0 否 重 3 L 缺 居 認 L 3 ね 3 種 0) 理 要 10 陷 0 朝 3 は 8 T 30 如 す 想 な (Communism) 0 3 數 憲 彼 絕 で 計●と E h 3 3 會呼 除 等 8 望 あ 社 或 私 0) ~ 0 說 改きば 名 李 3 會 去 有 は 的 0 2 如 12 は 企 T 亂 7 良のれ 古 屋 で T 3 を -者 \$ 叉 財 士●後 以 何 義 T 3 な あ 15 あ 產 智 A 1

佛

西己

1)

打的

1 3

ち (Soci 1/12 30 是 國 F 破 獨 あ 所 派 せ 瓜 占 3 耐 h To L は FO Ti 0 サ 平 T 計 牛 會 あ 3 あ 1). 產 + L 業 今 3 3 To 仕 y 1 0 72 期 絮 並 H 丰 Ł す 富 段 F 第 0) 沂 => ^ 1= ば + 名 即 は 世 7 æ 0) 假 分 有 1-0) 7 1 地 + H 名 於 獨 カジ 令 私 配 地 T 耐 电 出 T 及 居 會 な T Z 他 有 H. w 樂 最 資 # 此 死 0) 制 3 あ TI 0 0 3 財 度 8 本 2 義 110 理 は 力 7 20 此 1 想 此 1 產 6 不 7 は 多 考 派 w 0 あ 合 0) 人 所 h 1 高 有 + 私 理 1 S 3 な よ 計●オ 屬 3 有 かっ 1-義 V IV 6 會● す 0 To 世 0) 許 其 3 力 To 此 Ł h 目 T 民●ウ は 士中工 13 3 的 ス あ 古 之 老 す 2 4 個 たもン 行 3 A 3 す 0 義のの フ 10

3

0

此

現

在

0

度

破

壞

T

新

度

70 中

創

設 献

廿

h は

叉

他 制

0)

老 30

は 根

斯 本

かっ 的

3 1

激

期

13 意 3 故 說 徐 1-以 3 38 世 过 > 12 村 制 表 3 -PY 理 限 0 0) 3 想 極 耐 6 -老 30 端 30 全 會 說 然 あ 加 實 問 は な 之 は 3 穩 ~ 題 玥 3 30 通 カジ を 寸 主 h 和 3 破 何 借 解 3 手 張 す 壞 段 n 耐 决 4 1 1: 謂 3 8 4 3 现 丰 8 1 カジ 2 h 今 義 不 0) カコ h, 1: 左 0) 3 7: 0) 試 玥 口 ET. 8 元 制 能 6 あ 3 會 度 0 あ 3 な 3 Ł 事 < 制 30 0 は 放 度 T 至 維 T 1-T 排 南 朝 是 1-不 數 3 72 等 重 714 ~ 6 大 是 此 4 0) 0 >

为

統

計

林

料

7/10

甚

72

X,

5

斯

<

0)

411

1

EX

3

13)

0)

は

は

當 A 在 0) 壮 定 3 ? 為 龤 R 73 西己 原 總 30 (開 老 H 3 は 東 廿 0 不 日 題 Ze 官 3 T 有 向 T 45 0 3 0 17 0 度勞 は h 得 渦 其 30 12 3 4 す F 0 3 제 3 如 > 民 得 何 等 F. 勃 服 1 1-1 大 根 3 1 经 82 为 財 > 働 悲 本 3" 1 To 1-次 層 發 北 伍 湯 貧 0) 產 る 共 至 得 者 富 慘 势 原 3 あ 簽 階 は 02 4 0 南 势 因 1= 級 到 3" 0 6 3 兩 働 方 大 3 3 0 0 階 多 は 祀 かっ غ 12 12 底 3 あ 事 働 階 境 大 部 結 級 天 抑 0) 1 屬 発 カジ 6 8 勤 級 遇 為 多 孙 耐 如 5 得 勉 30 果 1-0 1= 會 न 0) 考 8 n 數 * 自 問 身 1-疎 置 所 組 3 現 卽 人 2 3 カジ 12 m 0 E To 題 は 所 -) 時 會 時 依 隔 カコ * A 有 織 8 所 な 0) to 0 生 C 代 投 今 代 0 其 n 尙 17 1 0 謂 考 富 缺 75 25 n 3 雖 あ 1-C H To 7 T は は 幸 等 乍 於 生: 貧 恃 陷 3 0) かっ 福 h 0) 8 8 12 あ あ 0 者 4 活 如 3 5 る to 安 1 F 不 駟 6 0 知 T 木 は す 0 穩 在 瓜 15 加 は 1 13 茶 ~ 0 は 念 1-識 30 若 畢 4 から 1 刚 0) 之 貧 殆 階 3 问 病 É 3 解 _ 現 度 事 洪 竟 Te 强 T 膫 程 者 h 派 左 -L 財 片 活 富 代 階 3 L 貧 鬪 は 度 カジ E to 來 < 0 產 終 意 著 10 級 固 72 者 13 万 1 カジ な Te 0)

> 決 濟 n 图 本 南 古 古 家 F 益 8 (1) to 3 腔 L 3 h 政 K すい 0 利 0 T 治 寸 甚 名 侧 益 者 至 不 容 至 數 1-3 3 0) 3 0 平 易 0 -狀 道 10 聯 於 伸 仇 12 72 1-0 德 能 合 事 加 張 酚 滿 T 3 を 視 其 72 業 E 8 ~ 國 3 愈 75 T 决 1 執 To 之 6 際 内 K 0 L 3 20 は 12 1= 手 重 0 T h 8 75 6 勞 當 Ł 段 致 大 平 あ 0 玥 働 斯 和 す 6 1-串 0 在 な 3 1= 著 ば 暴 稍 3 結 於 3 < 0) 至 は 其 44 3 0) 行 示 跳 -寸 b 日 席 穩 7 かっ 會 貧 梁 資 n 1-和 彼 組 な 當 跃 Ti 乘 等 0) 本 統 肾 扈 あ 1 相 家 蓝 0) 0) 77 亂 級 1-3 自 1-名 改 己 せ 任 13 0 反

資

か

階を抗

縣

=

で經ら

あ

3

ば 題 12 な は 重 0 此 大 以 な 20 0 ٤ 間 1 解 は T 6 な 題 決 全 來 述 Va. 72 0 3 3 世 < 30 Q は 解 7 3 h 社 等 會 今 來 决 如 < 世 制 H す 72 L 3 0 今 ば 度 0 學 To 是 0 加 日 者 非 結 3 あ 1-大 から 3 政 計 果 於 出 カジ 會 で な T 3 は 制 3 來 家 あ 3 度 3 貧 3 貧 0) 薬 20 H かっ 73 官 改 夫 問 服 0 0 時 革 縣 AF 放 1 題 究 711 は 12 1-隔 貧 所 カジ 111 非 15 20 生 盛 KE け 富 To 問 ľ 世 n

相

違

75

Y

思

2

者 5 督 H 盚 n < 寧 故 6 困 入 說 Z 吾 38 3 2 ろ 1 よ 30 2 蠹 0 n 寫 平 65 廽 + 17 多 # T 渦 5 h 前 市市 ば ~ < h 个 解 は L 遠 す 說 は Ł 重 な 1 7) 盜 常 3 几 0) 膈 易 30 6 3: 日 L う 蓋 得 讀 口 0 な 5 駱 1= 財 視 b 銹 1= あ 40 廿 駝 財 す 11 < カジ 基 7P 6 3 如 3 T 12 15 3 8 (馬 5 は 五 入 を 兼 る h 3 1j (. 居 0) 0 3 督 0 現 基 針 捨 ち 象 事 h T 當 かっ 無 3 は で Ti 0) 太 2 5 盜 窃 0 督 0 3 8 斯 E 財 0 如 T あ あ 0 多 穿 若 h 0) 葉 7 謂 產 は 阴 孔 何 10 る < 3 Ł 誡 所 0 30 から 稍 は 階 富 45 を 財 5 T 能 是 富 穿 之 0 0 發 3 級 難 8 T 若 初 B よ + 窃 b 等 者 3 8 は 在 地 す は 3 から 63 8 난 す 更 多 8 かっ 勤 3 ま 15 カジ は 基 T 6 大 n 30 0 E 救 所 3 ば 得 3 貧 聖 却 73 8 財 督 基 n 13 (全六 を 富 叉 進 1= 3 督 3 斯 70 30 書 8 T 0) 12 な in 總 誤 受 易 h 所 加 重 0 者 0) 時 < < -3 < 財 3 解 な C L 0) To A 0) 2 旬 7 穀 0 3 0 るこ るこ -多 は 敎 天 場 T 30 神 亦 3 0 如 3 70 # 馬 有 72 0 居 あ 1-3 表 0 -所 あ 70 13 ع 果 ٤ ٤ T 3 真 3 3 推 3 面 口 國 T 財 葉 は ع H to 傳 1 3 h 物 to 理 論 カジ カコ 0

L 階 居 な 13 な b 75 0) L 民 理 以 無 を 的 L な 9 矢 之を救 財 ? 7 飛 30 0 1 カコ 8 カコ 12 7 む 級 63 72 貧 0 之 0 30 證 0) 1-2 寧 何 T 物 3 30 產 720 基 多 12 今 を 1: 屬 木 3 向 T 相 2 n 濟 以 基 と傷 老 す 松 貧 譯 級 捨 在 け あ 手 明 0) H 督 然 當 T 3 کے 時 0) あ T 3 す 3 木 は 12 示 0 者 善 雖 h 3 0 3 時 直 1= 1 す 代 6 な 12 ---は 傳 1to 1 は 6 1= 反 基 12 3 何 To 3 め 智 導 事 决 貧 當 督 偉 唯 あ 其 h 現 1 8 n 必 8 當 其 ば 30 觀 0 18 L 富 J 在 時 貧 は 大 0 0) 2 說 1-妨 水 3 3 場 向 必 破 12 時 T 0) 1= 0 頻 0 生 8 移 考 彼 け 說 社 0) 懸 世 者 h 所 Ŀ 能 敎 等 基 金 活 12 會 隔 願 1-1-救 P 極 L 2 TC 腐 滿 今 7 有 家 3 8 1-カラ 對 8 濟 省 0) 力 督 8 à A なら 富 败 窮 日 然 す 產 13 適 To 聲 L は 0 家 ~ 者 道 T 此 は 0 は す 程 は 5 3 h あ 8 趨 3 當 救 3 1-3 劃 1-す 大 財 1-暴 然 對 臤 カジ 古 濟 說 1-}-產 勢 \$ 8 to 20 普 如 12 12 策 は カコ 岩 此 至 3 h 絕 遺 3 0) E 7 を 基 T 為 5 3 は <u>_</u> 遍 n 目 有 忘 有 緣 爈 3 事 8 6 攡 非 督 来 產 12 却 3 は 6 あ · カジ 形 4 7

183 -

定 險 2 力 國 有 昌 12 卽 法、 家 冬 8 猻 ·析 耐 5 貧 自 多 72 12 か 會 會 12 信 す 6 財 來 3 V. 間 歐 場 其 諸 政 然 良 古 0) 題 自 學 州 Ti 最 頹 0 3 跃 + 8 各 0 あ 傷 3 0 者 2 兼 c 扈 解 國 保 著 3 計 7 で 北 70 7 決 13 0 險 1 會 あ 懀 結 あ 1: 何 斯 主 法 20 w 2 果 る h 努 n < 並 事 義 フ 0 72 13 7. 力 8 1 7 業 的 0) 豫 初 權 皆 勞 とし 此 政 7 7 期 力 8 つ 此 主 策 か 働 遂 1-器 30 + 義 者 > T 70 ナ 反 1= 以 浼 議 あ は 實 1 養 13 率 V 1 T 3 30 绺 獨 老 省 行 70 盆 相 管 b 保 0 働 顧 す 古 B 70 E To 險 者 る 獨 行 間 3 其 柳 ス 南 逸 L 法 疾 E 所 埶 厭 V 3 30 病 力 w あ 孙 0 步 制 0 保 h 7 0) ク

題 TF. 係 慫 1-貧 7 富 0 7 3 す 30 あ あ 關 見 問 3 題 DI 0 係 72 3 7 Z 多 カコ 解 63 0 他 4 阴 0 决 教 は るに 然 余 方 0 即・も は L 法 之 節 人・の 夫 72 3 老 とって 軍 1= L 3 外 先 基 人・あ 8 T 203 ち 0 思 督 以 000 簡 加 2 毅 1 閼•__ 0 < 單 諸 0) 吾 は に宗 係 寸 說 7 削りな 據 # す 南 神・は 殺 カコ 孰 3 3 と・宗 5 n 者 0 人。教 社 觀 30 な 人 察 以 200 會 或 のの内 問 30 7

3

8

3

75 13

14

75

47

カド

夫

は

課

Ti

あ

る

3

思

2

唯

0

人

的

ب ب M 博 12 TI T 重 愛 事 F 30 3 0 際 Z 要 吾 團● 1 目 0) 管 間 內 認 等 夫 間 體●か T K 的 加 30 0) 容 識 故 對●出 カラ 好 は 3 1= 看 消 F 1 1 等 宗 宗 德 團 來 1= 合 8 過 之 為 宗 カジ 敎 體・る 所 敎 致 す 3 市市 1 的 當 教 0 謂 0 0) 3 す 心 8 T 關 と社 然宗 內 A 消 人 累 3 は 係 8 0) 容 係 は 德 3 2 8 交 な 8 は 殺 謂 會 30 個·人 7 7 3 0) 某 粽 뀇 問 0) 寫 あ 人・と 0 2 n 重 無 Z 對 題 對●の 古 3 合 0 寸 ~ 更 捕 Un 象 0 とは カジ 個●關 ___ 3 1-基 な 所 3 į 如 故 人。係 30 T 働 督 3 To 串 密 73 說 < 1-0) は あ 65 毅 内 南 13 接 6 後 前 靐 < 3 T 0 容 3 加 な 老 0 者 係 種 0 8 初 H 20 力多 論 關 V 卽 例 To 1 0 此 宗 8 心 構 更 係 n 計 あ ~ Ti 意 思 致 T 成 ば ば 宗 F 會 0 别 あ 味 想 1 1 0) 有 Ti 問 F T す 3 敎 12 T 主 類 4 6 題 0 義 3 他 於 0 3 3 72 相

8 る 底 12 カコ 吾 0 12 僅 3 15 3 小 重 K 0 坳 非 6 T 亚 カジ 73 質 すい 南 あ 73 新 3 <u>____</u> 的 3 2 耐 舊 (馬 0 欲 T 會 約 例 To 間 丽 4 太 30 題 書 知 8 傳 ば 往 脉 1-を繙 3 四 關 視 R 0) 人 1-1 L To 5 四 は 72 7 T あ <u>ر</u> 基 7 聖 准 バ 言 松 書 意 計 0 0 0 會 0) す 叉 3 言 言 問 ~ 1 10% 題 及 1-行 潚 寸 T to 验 生 散 < 牛 3 0 < 見 0 所 は 3 寸 根 其 斯

良 1 確 カジ n 0 牛 がいこい行い易いな 義 な 分 在 鱼 別いといすいにいら き、例いる、實いな 私 其 30 害 11 寫 物 は 義 け T 配 並 3 虞いへいこい行いい 多 有 確 多 111 す 0) 種 は n カジ がいばいといしい。 私 ī 財 張 社 此 7 花 牛 T 來 ~ FR 8 等 あ、競、を、得、第 0) 750 な 有 T 產 力多 會 7 C 南 9 西己 6 嵐 と論 制 民 4= T 3 j 13 るい等い得いない一 缺 不 制 徹 18 底 丰 0 がいるいいに 點 2 唐 1= 應 j カジ 客 0 特 殺 兎 尤 を、と、懸、此、を カジ 的 12 中 與 底 TE h すい 多 消、す、念、主、含 此 義 義 孰 0) 北 To す 3 8 0 角 譏 點 + 公 根 あ K n 0 < 孙 カジ 12 社 滅いるいがい義いん 4 本 3 社 カジ 0 西己 3 放 3 會 せいもいあいはいで 30 カコ 抽 勞 0 原 會 日 害 しい他いるい理い居 盈 6 資 1-7 其 A 1-民 合 丰 現 改 客 類 幾 力 めいに、o想いる n 論 本 了 à To 義 ともご 0 난 70 代 良 3 與 0 孙 0 人、大、又 雪 0 3 な しっと L p 不 進 飿 唐 類、な、第 3 私 為 0) 丰 T 2 0 03 0 3 L 貧 義 却 3 不 北 合 或 のいるいニ ていを 有 8 謂 を除 3 富 1: h 0 30 退、弊、に 可、看 を T 3 於 寸 阳 L 4 居 比 計 化、害、は 0 S T 0) ない過 は 審 去 1= A 如 を、を、假、る、し 計 然 世 3 縣 較 70 例 0 禁 ば す する 來、伴、合いも、て 6 會 L 共 類 は \$ 3 L يع 3 は すいふい質い容いは 改 故 是 他 7 前 11-は 7 產

> 主 解 -來 せ 義●不 0 理 T 14 E 3 義 自 充 1 3 此 3 す は 利 決 想 3 丰 實 社 0 な 卽 0) 勿 誠 多 益 解 會 淮 法 重 幾 To 論 小 1-し完 計 義 1-決 大 温 改 粮 0) 1 會 0 非 不 置 策 な 30 政 2 難 健 徹 全 率 制 家 任 < 世 效 管 策 73 底 6 定 È 1-な 0) E す 3 施 管 採 0) 果 行 6 h 於 3 說 的 22 0 を及 Ł 依 從 行 行 用 如 古 カジ T 餘 Ti 1 ٤ L 信 T す 3 個 る 社 地 あ 世 K 强 すこ T 5 3 ٤ すい な ろ あ 曾 3 8 17 は 3 捌 3 3 0 斯 基 0) 間 3 カジ 0 丸 0 着 起 加 保 To 場 13 艺 基 < ば > なら 是等 は 敦 險 1 合 現 0) 30 12 杉 0 謂 解 實 發 制 1-1/E 7 如 (1) 0 5 7 於 制 決 行 3 老 南 的 现 ば 0) 3 M 汽 之 0 度 道 缺 法 年 0 T 3 す す 想 谷 計 德 點 種 制 會 如 8 カジ P 3 3 計。 雷 制 3 會 破 社 8 觀 は カジ 75 耐 會 . 社 之 壞 油 1 其 和 107 丰 曾 ょ 改。 to 0 内 間 す 改 は カジ h 十十 0) 积 良。 良 唯 存 如 0 3 5 容 斯 主●

3

>

7

73

3

思

20

問 18 計: -(" 杰 會 な L 12 題 17 秸 カジ 0 其 h 訊 傑 Ti 並 決 あ 手 3 野 0 H 解 議 12 決 3 論 耐 手 會 は 政 T E 策 13 20 左 述 質 程 鹏 15 古 11 3 0 大

更

五

7500 } 6 基 派 富 糖 雷 冊 0) במי 72 カジ 建 To 13 7 3 サイだ 松 大 0 基 2 市市 平 1-建 設 0 怒 容 は あ 0 かいば 敎 0 斯 督 分 Ŀ. 和 實 設 1= To る 易 督 其 言 狀 現 0 、か、先 放 13 僧 < 穀 配 0) Ł + 南 根 1-カジ ~ 省 の魔 若いづ 1-値 T 0) 能 4 12 字 基 基 3 本 本 貧 富 3 へい第吾 30 基 理 不 落 結 架 督 0) 糕 間 督 第)— 有 督 想 公 出 12 は 前 彼 1= 0) 肺 題 殺 平 101 カジ す 1= 加 Ł 題 验 現 並 就 82 H 11 解 題 0) に、其、計 0) る 1 滴 30 論 To To 1-は 現 決 根 Un 何 1 7 如、主、曾 解 1= h は 來 就 0 あ あ 物 12 0) To 0) 太 3 何、義、問 决 質 ٤ 至 觀 1 3 3 カジ 目 指 糖 あ T 3 怨 0 0 方 1-ないがい題 る T 謂 寫 的 針 神 3 る、果、解 法 貧 8 嗟 無 0 夫 虚 關 30 2 1-は かっ 30 及 富 主、し、決 to 7 0 0) 产 被 偽 す T 生 IV F 見 考 +> 耳. 謂 義いていの あ 8 磬 老 1-不 3 8 n h 出 3 不 が、道、主 體 題 謂 多 階 之 3 滿 吾 t A 1 寸 す 所 0 最、德、義 高 ば 的 は 級 義 0 8 R 63 カジ 直 3 僅 然 解 總 0 おいにいか 1 カラ 不 0 為 \$ 0 3 天。と ね 小 劾·反·確 决 3 增 德 T 理 妙 1-す 6 示 L 國のから 天 果、す、立 75 カジ カラ m 0 取 想 1-關 は あ な 其 出 T カジ L 天 國 卽 あいるいせ 如 如 去 を U 吾 2 之 6 國 りがいん 居 6 72 \$ 3 現 來 T 2 0 Z A 12

治 7 舸 U 足 2 可 は ·語 を に産 H. 多 4 6 3 な 3 殺 か 無·士 悉 試 21 見 0) D h 3 3 は 雪、 0) 色 政●義 2 出 說 T 非 0 其 府部計 3 T 行》 3 丰 で 生 難 常 2 士●會 前 10 な す 0) 82 議 あ 產 あ 勿 用 義o民 得》 0 5 論 1 3 分 h 手 3 は # .說 ~3 E 段 故 す 就 配 To K 阴 1 4 謂 又 政 切 義 1-T 0 あ 6 0) 1 かい lif-は 2 手 治 鄉 3 あ To 0) 計 12 を 等 别 段 濟 0 3 あ 計 會 四 上 研 2 此 0 ---段 8 上 カコ 3 會 改 0 究 者 主 是 0 1-カジ せ かつ 6 制 良 0) す 示 5 道 0 出 3 6 見 義 國 度 丰 20 + 3 22 優 德 來 3 見 T は 基 to 義 家 義 事 劣 的 3 T 杏 獨 水 否 ね 3 0 カジ ば は 觀 カジ 耐 h 效 元 認 10 無 心 無 道 故 單 な 主 念 命 0) 首 L 就 政 2 政 德 消 當 之 6 1 1= 及 T 府 L 反 取 破 安 德 考 主 府 的 カジ 2 局 あ -T す 丰 3 壤 30 蒼 1-1= 破 義 S る 政 協 共 3 義 1-0 害 不 0 壞

3 移 在 1-海 3 於 殊 进· 上 0 T 產e經 地 h T 1 及 は 牛 主●濟 社 省 す 共 會 產 義。上 本 3 產 改 孙 社·立 0) 丰 良 配 會。脚 2 義 丰 0) 反 を 1 は 義 制 民o點 公 全 度 耐 7 キ・か 有 會 財 異 1-ROG 義●決 大 せ 民 產 3 戀 h 丰 30 0) 革 舉 K 而 す 義 18 老 15 1 3 特 7 7 加 は 點 耐 ~ 現 1 1-牛 會 h 在 於 3 0 相 0) 產 公 Fi す 社 T E 有 間 會 品 段 3 別 12 1 制



一妓假裝行列問題

人合計一干二百人が假裝行列を作り、二百人づつ六隊に編成して 屋町同朋町藝妓、 の報じた通りであり、又本誌前號の教界彙報の通りであった。 裝行列の出願に及び、 の後舊臘 さして各組合で奉祝するさ云ふこさになつて、日本橋、 で幸に公會の席上には藝妓を見なかつた。其の結果、藝妓は個人 云ふ輿論が喧しかつた爲めに、監督官廳でも其の方針に出でたの 去る十一月の御大典には藝妓を公會に列席させてはならないこ 一日にはまた下谷花柳界の祝賀會があり、 芝神明、 待合の女將、 吉原等の藝嫉組合は人員約二千名に亘 監督官廳はこれを許した結果は當時の新聞 料理屋の主人、 箱丁その他の關係 午前には数寄 新橋、 一つて假 7 柳

V

全部總揚げて底拔げ騒ぎをした。 は下谷區の名譽職その他の來賓を常盤華壇に招待して、 の上池の邊に充滿して十重二十重に圍んでこれを見物し、 要所を練り廻つて上野公園精養軒内の祝賀會場に入り、群衆は山 行列藝妓 午後に

現行法規から見て

ばならない。 70 國の法規には無いのである。それで藝妓が行列を作つて 子に對して密賣淫を禁じて居るので、特別に藝妓にこれ許した譯 無いからである。又藝妓そのものが風俗壞亂であるさいふ理由 答禮されるのである。それで法規の下に營業稅を納めて就業して のものではないから、 法規上の藝妓には無いのである。 通行に關しては風俗燮胤であるさ云ふ條文は現行法規の何處に の警察法規では許可しなければならない。 居る帝國臣民さしての藝妓が寶祚萬歳を二重橋下で三唱し奉りた 勿論監督官廳で許可するばかりで無く、宮内省では提燈を振つて に空前の御大典であつたから國民忠良の誠意から出た假装行列 **亂でない限りは沿道の假裝行列は許可するこさになつてゐる。** の假裝行列そのものに就いて法律 から沿道の假裝行列を許可されたいさ云ふ請願であれば、 廻り二重橋下で萬歲を唱へなることは行政上からは許さなけ 此等の事件に關しては大部世論もあるやうであるが、 先づ現行の警察法規を見るに其の出願の趣意によつて風俗壞 隨つて宮内省ではこれに答禮される必要がある。 藝妓を醜業婦ご日する條項も理由も勿論帝 法規は日本の住民たる總ての 及び道徳上から判断 何さなれば藝妓の道 ो 私は藝妓 中を 現行 女

Ų,

1=

13

n

ば

幾

名

0

闲

るいを

こい層

と、悟

富 酷 次 3 1= l 至いにす は でった カジ o 3 7 間 顧 20 要 な 本 0 社 輿 るい社いる 氲 あいら 者 題 得 る 振 車 集 大 2 沢 會 論 、會、人 iffi 300 戰 は 7 といって 0 は 轔 0 中 2 す 民 0 0 其 狀 すい 數 亂 我 7 3 權 が、般、な T 愈 0 日 飛 祉 心 諸 我 非 勢 終 威 熊 12 國 あ 1= は 必いのかか 會 づ 更 激 益 結 般 國 常 H 0 5 は 要、輿、つ 第 1-あ 政 30 甚 3 現 5 で、論、た あ 0) 0) N 致 益 策 自 激 狀 於 速 甚 [專] 3 制 ٤ 12 す R あいがいら は 3 を る、社、其 度 H な 度 3 曉 h 結 重 3 國 當、難 L 0 會、質 1= を 1 考 は を 徒 な 3 3 し 家 局の は 察 加 立政、現 T 容 15 社 加 は 0 T 者、存 0 多 公 富 必 會 增 T す 易 社 憲 策いが ^ 事 其、す 質 で 來 本 者 政 加 北 す 3 1-會 0 政 の不 人いる 行 實、能 1 B 治 30 1= 策 あ 結 2 1= 其 政 > 700 9 夫 厚 斯 果 實 策 得、 3 企 社 0 > あ 0) 行いで あ 貧 業隆 實 ć 3 國 あ 會 現 0 をうあ 3 固 E 實 0 家 或 行 推 7 3 間 要いる かっ ,0 貧 此 5 家 察 階 盛 題 期 行 1= 求、 0 5 7 は 富 多 す、又 心 存 貧 微 せ 級 殊 特 す 30 時 在 かいか 3 政 る、第 者 極 8 立 R 6 兩 1= 1-1-2 局 肝・ね 府 際 有 階 屬 今 貧 T に、二 n め 者 要いば

> 盡 間 n 以 で 何 今 並 上

力 (= h 7 あ 日 1= t す 祉 T 3 祉 1 稅 h 止 0 會 見 3 種 會 至 率 ま 氣 0 切 政 余 3 政 つ 0) 3 7 當 渾 2 望 策 は 策 8 1 3 1 30 我 1 施 to 甚 冷 次 到 ブ 堪 研 國 行 12 第 達 究 上 x 淡 患 せ 2 C 世 1 2 P 5 3 C 2 0 あ þ 社 E あ 3 カジ ~ Ł 3 8 殊 會 通 3 如 > L U 12 改 カコ 1-3 1-T 基 良 T を 至 或 4 よ \$ 社 督 は 1 明 0 會 教 敦 0 h 1= 72 叉 あ 多 政 誠 多 表 如 I. 衷 策 奉 30 < 示 \$ 場 各 115 0 ず 披 古 我 法 0 實 熱 よ 3 3 域 歷 0 種 行 耆 h 世 心 B カジ 漸 稅 (= 0 6 Z 0) 如 < 目

くなる。整效屋で待合で料理屋の合併した家にでも閉づ籠つてぬ して前後策を講じなければならない。日本の社會に藝妓の存在す 藝妓制度の消滅しない社會的原因がある。國民はこの原因を完考 妓制度の復活になる。併し日本の社會では娼妓制度が消滅しても て來容を待つ制度になる。これでは藝妓制度の消滅であって、娼 **岐さして外出が出來なくなれば、宴會の席上に侍るここが出來な** 下事實さしては殆ど不可能事に圖してゐる。何さなれば藝妓が藝 を設くるこまである。然るにこれは容易でないばかりで無く、目 が出來ない。絶えす藝妓買して狂って居る者は必ず金の融通の出 ら、藝妓ご男客の情変には金が中心さなる。金の無い者は藝妓買 女の交際機闘がない。諸種の宴會には夫人も合態も出席しないか 来婚の男子が藝妓を養つて居るのである。それから我が國には男 るのである。妻子を養って餘る富のある夫、又は生活に餘站ある 在の根本的原因は金である、即ち富である。 てゐる。そして金力は常に政治法律を左右して居るから、藝妓存 來る者である。即ち金力家である。この金力家主藝妓主が提携し 機闘さしてがある。而して藝妓は固より男子の性事機闘である よりも男子の性事機關さして完備して居るため、(三)は男女交際 るのは(一)は藝妓自身及び家族の生活のため、(二)は藝妓は娼妓 で此の罪は勿論日本社會全体の罪であるが、就中女子一同の罪で のある男子は直ちに待合に駈け付けるも自然の結果である。それ 杯盤の斡旋は舉げて藝妓の手に収められるは自然の結果であ 又た未婚の男子が良家の合嬢と交はる機關がないから、金力 富が鑿妓を作つて居

> 子をして藝妓を弄せしむさ云ふこさになる。日本の女子が男女交 あるさ言へよう。春秋の筆法を以て女子を責むれば、日本女子男 て居るこさになる。貧は女を出し、富はこれを買ふ所の金を出す しめ日本男子をして益々藝妓制度を盛大にさせる間接の應投をし なければならぬ羽目に陷つて居るのは、途に夫をして藝妓を弄せ の事狀さ、生活難結婚難のために益々金力のある男子を夫に選ば 際機關ないために媒介制度の下に箱入娘になつて居なければなら 呪ふここを止めて、夫人令嬢は先づ新年早々己れ自身を責めて進 **覺しては**装だ拙である。單に藝妓を憎み、遊野郎を厭ひ、政府を 社會の變際を望むのである。良人から花柳病を受けて然る後に自 會から藝妓を一掃するこさは出來ない。私は此の點に關して婦人 道徳に基いて戀愛結婚の上から行ふやうにならなければ、 のが自然の經濟的事實である。男女の性慾は自由交際の間 まなければならない。 (一條生) に男女

るここを認知される容止をして外出するここを一切禁止する法規

靜座三年を讀んで

座は科學や心理學や生理學の前に自己を解放してゐない。されば策を使用してゐるのではないかさ疑はしめる事さへ有る。未だ靜的、方法如何さ質して見よ、十人は十色の答をする。岡田氏につ的、方法如何さ質して見よ、十人は十色の答をする。岡田氏につ的、方法如何さ質して見よ、十人は十色の答をする。岡田氏につ前とない。本人は一色の答をする。岡田氏につ前の正本は愈々不思議裏に之が姿を隠してゐる。試みに之が目間田式靜塵は日に月に隆盛を極めつゝある。然るに之に反して

数を過つたのは大なる失政であつた。 **からで無く、常識から禁すべきであつた。然るに之れを許して政** て、法規からでは無かつた。故に藝妓の假装行列に關しても法規 廳は前に藝妓の公會列席を禁じたのは道徳に基く常識からであつ 生に教へ、孝行さ放蕩さの雨立を子弟に示すものである。監督官 色淫賣さな同時に國民に教 の甚だしいものであつて、政教を過る行為である。思君愛國こ女 治道を練り廻り、二重橋下に出て萬歲を唱へ奉るなどは風俗壞飢 俗壊亂である。前日より新聞ではこれを書き立て、行列を作つて 娘であるここな認知される容止なして外出することは疑もなく風 故に社合の常識に立脚してゐる道德より劉妓を見れば、魏妓が藝 る所であるから、之れを否定する野菜な言章は出來ない譯である。 魔業婦と目すべきことは**歴々の事實であつて、政府大官の**熱知す 職業婦で目すべき事由はないが、一般社會の常識から判斷すれば 中に存置するを許さないで成るべく町外れに隔離して置くもこれ 出することは風数を害する爲めに禁じて居るのである。遊廓を市 **騰業を公許されて居る醜業婦である理由より、娼妓の容止して外** に於てかの娼妓の外出を法規上禁じて居るへ地方では禁じない)譚 が為めである。いま藝妓を娼妓に比較して見るに、法規上雲妓を 察したならば何うであるか。疑もなく風俗懐観である。 これは現在の法規から生する解釋であるが、これを道德 娼妓には法規上捡黴を行つて居るから、娼妓は特別法の下に へる結果になる。忠さ色さの合致を學 風蟄の下 から考 點に留意しなければならない。故に今後の問題は樊妓が樊妓であ 風教を害したのは全く法規の不完全な爲である。 にならない。それで如上の人達に罪を問ふ議論は正鵠を得て居な いので、道徳政策論上の眞相を告げない。それで喜妓の假裝行 旅館で夜陰に葬じて藝妓を侍らして早るやうでは内閣は勿論

法規によって行動して居る一介の事務官であるから、これに飽く 放蕩兒はまた之れを素見しに出掛けるは自然であり、 人であるから、藝妓業を云ふ泥水商宴で渡世して行かうさ云ふ遣 である。藝妓業が道徳上の罪悪であるこ云ふが如き知識を何人 も私は一歩進めて法規の不完全な罪であるさ斷言する。換言すれ 事等にあるか、 まで常識を問ふて責める譯に行かない。又政府の大官等は京都 は好奇心に吊られて見物に赴くのも自然である。監督官廳はまた であれば、社會の風教などを犯憂する公徳心のあるべき答がない。 らも教授されたこさがない。難妓組合の幹事等はまた態妓屋の主 人の命ずるが儘に客に密賣窓をも為し、 育のない者である。主こして少女の折から善妓屋の養女になり主 罪であり、國民全体の罪である。婆妓は多く貧家の女であつて教 ば立法者の罪である。即ち議會の罪である。 いさ斷言する。政治上から見れば勿論内閣の罪であらう。 ろ , C. 然らば此の罪は誰にあるか。 藝妓にあるか、 監督官廳にあるか、内閣にあるか。私は誰にも無 放蕩兒又は見物人にあるか、藝妓組合の幹 からう 解釋する晋々倫理宗教家に 一般裝行列にも参加する 別言すれば代談 一般の女子 けれど

國民は須くこの

我を信するが爲め也。これ何ぞ印度人たるこ支那人たるこ露國人 由を有すれども、決して彼を虐待すべきでない。彼の我に來るは 然るに運命に騙られて窮鳥我が懐に入る。我は彼を歡迎すべき理 禮を厚うして招聘するも容易に我に來るべき階級の人々でない。 ではないか。兎に角政治的避難者はその國の第一流の人物である 獨逸の避難者は重に米國に渡りてその智的生命な豐富ならしめた テ・ガブリエ 者なるゼームス・マーチーノー、その妹のハリエット・マーチー の或部分は英國に渡りて近代工業の後達を助けた。近代の大神學 る所が多い。 國に隠るゝが、英國このために煩はさるゝこさ少く、却つて利す べきを疑はない。たさへば歐洲大陸の政治的避難者は主さして英 たるさを問ふ必要はない。 セツテなるもの英國に逃れてロンドンに住せしため、その子ダン ーのごときもユーゲーノー教徒の子孫であつた。 ル・ロセッテはヴィクトリア朝の英國騷壇を飾つた。 佛國に於て舊教徒の迫害を蒙りたるユーゲノー教徒 伊太利の志士ロ

すれば國際的常識が簽達してゐぬ為ではあるまいか。

さしても、一二週間の餘裕を與ふべきであつた。然るに當局が此さしても、一二週間の餘裕を與ふべきであつた。然るに當局が此と出でざりしは如何なる事情の存するかは解らざれども、歸す處に出でざりしは如何なる事情の存するかは解らざれども、歸す。

及印度人二名は果して獨探なりこしても、彼等の同國の友人が

肝要である。即ち自由にして寛容なる宗教意識が必要である。此なる方法あれどもその一つは國際的宗教的氣分を鼓吹するこさが故に問題は如何にして國際的氣分を養成すべきかに歸る。種々

ねべきを吾々は斷言したい。 (si U) 根本の定まらざる限り、日本は將來も此方面に於て幾多の

キャンベル牧師の去就

ロンドンの會衆派にその人ありこ知られたる シテュ・テンプルのキャンベル牧師は十月中旬十三年間牧會したる職を辭したるが数會に屬し、オックスフォードのクライスト・チャーチに學びしがマンスフィールド學院長故フェアベルン博士に引き付けられてブマンスフィールド學院長故フェアベルン博士に引き付けられてブマンスフィールド學院長故フェアベルン博士に引き付けられてブマンスフィールド學院長故フェアベルと博士の後を承けてシティ・テンプル の牧師さなつた。キャンベル氏は詩的情操に富む武教家にして、日曜朝夕の禮拜武教の外に木曜正午の武教ありていづれも干敷百名乃至二千名の會衆があつた。又キャンベル氏は疾くに新神學を唱導して自由基督教の運動をも開始したのであつた。然るに今や突然國教會に復歸し、表向きは三十九ケ係の信仰箇條を承認せればならねここ、なつた。

鬼に角鼠而目な静座の著述の現はれた事を非常に喜ぶものであ く根本ではあるまいか。之を丹田に溢れしむるのではあるまいか。 即ち無限の理想を追求して止まの剛烈なる要求こそ人生を弦に導 静座せんとする要求其れ自身、静座は畢竟之が形に過ぎわさ思ふ。 ん事を望んで止まれ。弦に至るには僕は静座其者でないさ信ずる。 的さする、宇宙の生命其のものに附ける實験の内容が開展せられ ん爲めな第一歩させられた結果さ見られる。更に進んで静座の目 るまい。併し之が靜座の終局の目的でない。著者自身が健康を得 面の實驗が多い。斯くて自ら唯物的色彩が强い。之は致し方も有 て、此統一調和の意識人に立つての實驗ではない。從つて肉の方 き明言されてある。而して本書は之に至る迄の實驗を理論であつ てゐられる。而して靜座の目的さする所は心身調和の意識である る。靜座は他力にあらずして自力である。人生の目的にあらずし んとする人々にさりては愈々入りて愈々迷はざるを得ない。 きさめる事が出來る。之迄の靜座の著述は岡田氏を神様させれば も一々寫眞に影じて説明を助けてゐて誰にも一讀すれば正体を突 とが解答を與えてゐる點などは實に面白く讀んだ。姿勢について 生理學である。從つて說く所は中々廣汎である。文章は平易で力 れた。誠に本書は緒言の通り静座の哲學であり、 に岸本氏は静座三年を書いて真面目に大膽に静座の正体を解放さ がある。猶ほ發せられる丈けの疑問を發して、而して一々丁寧に 實目的の人はいざ知らず、荷も理知の要求に適當なる滿足を與え 方法である、道行きである、飽く迄も自助主義であるさいつ 此點に至るさ、著著はなかくの見識をもつてゐられ 心理學であり、

る。(原田長治

國際的氣分の缺陷

なりたる有様である。而して志士ライ氏も稍々不安を感せしさ見 その短かき期間に退去し得る地は英領カナダで上海さのみ。是れ え、先月十一日終に米國に向つて出發した。 の印度人は突然何れにか潜伏したる為め、この問題は目下下火さ 間接に印度の旅客を英國の獄吏に渡すさ同様であつた。 の翌日俄かに二名の印度人に十二月二日を期して退去を命じた。 る時宜に適し日印の交情大に温まる感がした。然るに警視廳はそ 皇陛下の御大禮を奉祀した。日印の有志約百名歡を盡くして散じ れ、ラホーレの志士ライ氏の祝詞之に對する姉崎博士の挨挨も頗 る事は吾人をして政府當局のなす所を批評せんさするのであ であらふ。然しながらこの命令の時をえざりして餘りに切迫した たりさせんか、日英條約に基いて何等かの處分をなすべきは當然 した。若し二人の印度人が英國政府に快からざる結果獨逸に通じ 十一月廿九目夜京濱滯在の印度人數十名盛宴を張りて我が 政府が二名の印度人に退去を命じたるここが端なくも物議を 今や兩名

るはPむをえない。「前してその結果は我が國民的生命を豐富にすふのではない。日本の如き嶋國には諸外國よりの避難者の渡來す路を認むるのである。第一、當局者が外國の政治的避難者に對す路を認むるのである。第一、當局者が外國の政治的避難者に對す

此の兩者の比較的研究 研究を爲さなければなられ。

より始めなければな

天才さの関係に至つてゐる。第三編に於ては

不景氣と貧民心理の關係を說き、

質比さ

が出來る。

讀

一過して貧民心理に通

著者は

0

知

、ある。

殏

193

登民

基

磁

これは本書の大なる特徴

である。 ずるこさ

物質の缺乏したる人間の精神の研究」で題し

其れには第一

的 るから、

治人救世を旨ごする者は此

らか

其の出

愛點は實にこの兩者の特定的

研究に存する。

而して貧富の

問題

には節

貧民の智識感情意志の研究を為し、

貧民移動

若

本書をして登民心

理の一

學たらし

著者の態度に於て記者は不滿足で けれども尚に學術上より不足をいふ

す

る貧

の問題に要約することを得るか

率の

研究より貧民の喧嘩の原因に至り、

貧民

むるには、 30 ならば、

其の

研究法に於て力説

する所

经正

貧民心理 0 研究

發門刑豐產

-(-あ に配列し、 であ 3 著者賀 川氏

科

學

貧者で富者では此の社會的 或る特定の現象を呈する。 居るから個人の意識はその境遇に支配されて る。 であつて、人生を暗黑ならしむる導火線であ て個人の意識現象の上に大なる差違を生する 其の中で最 見れば諸種の境遇に分折することが出來る。 社會はまたこれを内部の特定的團體の上から て研究するものが社會心理學である。 象を個人の上に生ずるので、 社會さい して貧富の關係は社會問 けれども個人は或る境遇の下に存在して 理學は個人の意識を研究する ・ふ境遇であれば社會さしての意識現 も顯著なのは貧富の境遇である。 個人の集合したる 題 特定的境遇によつ これを對象さし な惹起する根底 而して 7

貧民窟に入り彼等で生活 惡」の問題を解決せんがため四年八ヶ月の間 貧 者の心 詳細なる分析の下に心理學的説明 理的研究は社會問題解決の鍵 は風に是に留意し、一字宙 を共にし、 貧民 心理 民さ群衆心理の研究に至つて擱筆してゐる。 研究に至り、 道徳の研究より貧民窟の人格研究及び宗教 爾 質民さ犯罪の

關係の

より

晉

たかい

の研

れが根本 **賛民生活の作業能率及教育に及ぼす影響を** 及んで最も精細なる研究を施し、 「物質の缺乏の精神に及ぼす影響の 達史に關して詳細に繙き、 の生活難を説き、 間の研究」さ解し、 にした。 を加へて薬版六百五十餘ページにして世に公 に嗣する数千の材料な蒐集してこれな科學的 の關係より生活難の餐民心理に及ぼす影響に 經濟の一般を説明してゐる。 る貧民及び貧民窟の狀態を明にし、更に貧民 先づ第 **賛民生活に於ける生存の危険さ精神作能** 編に於ては「物質の缺乏したる人 貧民發生の原因及びその發 貧民の定義を述べ、生物界 進んで日本に於け 第二編に於ては 更に進んで 研 究」ご題 月に亘 き努力家に非ざれば為し得ない事で 實驗的無志家に非ざれば得るこさ難く、 値がある。 的の面影があつて、 洋の東西に無く、 書の如く總合的にして系統的なる研究は未だ 究は諸種の論文に於て發表されて居 に説明され何人も一 を有し、 の點に於て頗る篤學者であつて多方面 的 心理の研究に關しては社會百般に關する に貧民は社會問題の輻輳地であるから、 矯矢さする。 此の點に於て本書は明 知識を有して居なければならぬ。 來賛民心理の研究に關しては斷片的 つて同 加之文章は頗る平易であつて通俗 就中材料の豊富なるは著者 一の問題を審究するは著者の如 全く賀川氏を以つて斯

學界に提供して大なる

0

如

かに獨

ベル氏が已むなく復歸する決心をしたのであつて、吾人は同氏

く保守的神學に復歸したさせば、そは大なる間違ひである。 役を務め得ると信じてゐるらしい。若しキャンベル氏が思想上全 てゐる際なればキャンベル氏は同時に非國教會と國教會さの調和 神學を楽てたるにあらず、やむをえざる個人的原因によりて去就 る働きをなすこさを信する。要するにキャンベル氏が心より再新 に同情に堪えない。 を決したるもの、殊に大戦亂の真験は教會一合同の機運を促がし 同 氏は遠からずバーミングハム大寺院に屬して其處にて有力な

U.

隨 策

隈伯の元氣

は関伯の政見や施政については必しも全然賛するものでないし、 彼等は到底清淨無垢な青年の風上にはおかれの連中である。 多くは折花鑾柳に浮名を流したり、少し上前ご見れば役者や文學 ては其足病を堪へて迄も施政方針の演説や彈劾案の反對演説を試 者さ一夕の宴を伴にして享樂主義の模範を示すに過ぎなかつた。 みる態度は塞に肚者も及ばない元氣である。從來の宰相さいふさ 引すつて、紫宸殿の階下に萬歳を三稱したり、其度又議會が始つ ない。あの老人が百二十五歳説を吐いた氣焰もエライが、義足を の我慢强い努力には、現代青年の模範さして敢て嘆稱せざるたえ 總理大臣さしての大隈伯に鬼角の評はあらふけれど、自分は伯 自分

> おに足るものさして、大に賀せざるなえない。 又彼の放言癖な好まねものであるが、只彼の老年尚健全なる意義 おいて鍵鑠たる精神元氣に至つては、現代青年の隋氣を一掃す 伯よ幸に健在なれる

12

議會内の 雕 能

をなす-れ實に晋人の堪ふる所でない。 討議もなく、 議政の府に於いては何等國民をして耳を傾けしむる様な、經綸の 見れば世界に於ける吾國の運命は大に慎議考慮を要する時機に、 同情は益々卿等を去つて反對難に加へらるゝのである。今や外を に回復するに違ひない。然れど十二月十八日の如き野鱶なる皋動 隠忍持久して自ら尊重する態度をさるならば、國民の輿望は次第 験せればならめのであるから、多少は不快であらふけれど、暫く 會を與へたとは衆目の視る所確かである。吾人は多數黨が比較的 論を戦なすさいふ様な態度が見えない。 さして常に横暴を極あて來た政友會も、少數巓さしての愛目を經 して、神聖なる議場の面目を維持されんとを望む。永い間多数常 静粛なる態度を質するさ共に、倘反對黨の計略に乗ぜらるとなく て議會を混亂させたいさいふ人々の集りさしか見られ なつた。凡て是れ感情の衝突でないか。其中に毫も正々堂々さ理 て議長や總理大臣の逢辯は此際却て禍因をなして、 今度の議會も果して晋人の豫別したやうに、 其中には前知事や前高等官も居る――に於ては國民の 單に肚土や政治狂者に類した行動を示されては、之 (巢丘子) 何か一つ敵の揚足をさ 倒級狼籍な場所さ 楽ぜらるい機 2

佛蘭西文法自修書

醒本 社伊發 が 作 行著

住さ變勇さに驚くのみである。 吾々は此の書を見て、 (四六版三〇四頁價•八〇) 著者の不用意と無責

藝術と哲學の間 高踏書房發行

を引くものがある。さもすればどの評論家に あ。氏は新進の文藝批評家中頭腦の明晰なる れないのが嬉しい。「力の自由發現さしての社 もつきまさか嫌や味さいふものが氏には見ら 氏が最近の評論廿五篇を收めたも 思想の中正著質なる點に於て、吾等の心 のであ

會」などは氏の主張の特種性を有つて居るも 讀まれたものである。氏は今や境遇上從前よ のであらふ。「近世者の日記」などは又面白く まない。それは兎に角本書は昨年現はれた神 將來の氏によりて為されんこさを切望して止 人生の真實に生きて真に權威ある文藝批評の りも廣い人生に觸れつゝあるさいふ、大なる 要な人物といふのでない以上、缺點といふ程

現代の西洋繪画 丙午出版社發行

識を得たい為といふ著作の動機が、大に氣に 素人の著者に、一貫した獨創的の觀察と、見 入た。從て説が頗る穩當で且つ同情がある。 の繪畵に關して、デイレッタントとして、常 私は可なりの興味を以て通讀した。現代風

人の説に耳を傾ける丈の雅量を缺いで居る。 ならぬ。此點に於て本書は、安心して江湖に るが、一般人にとつては頗る危険といばれば 彼等は餘りに感情に支配されて、落ついて他 で讀む人にとつては、毒にもなれば薬にもな 説位、偏狭にして平衡を失してるものはない。 識さを要求するのは愚である。 一体専門家の

とか、デスパニヤさか。併し之さても最も重 る傾きがないでも無い。例へば、レオンバク しい藝術の促進に可なり重要な作家を逸した 前たも、漫然と餘りに多く列舉し過ぎて、新 推薦する事が出來る。 ストとか、チャールス、シムスとか、マルクエ 强て缺點を云へば、左程にもない作家の名

呼ばずも。 ニュールと呼ばずも。 通りに從た方が、讀者には便利である。ミレ J. たミエと呼ばずも。 ロザ、ボンナーなボン レイトンをライト

ある。(四)(價一・六〇) 事は、美術の觀賞者に取つては誠に幸な事で 秋の美術シーズンに、 斯る有益な書を得た

美人禪

丙笛 午出版 社發行

園女千代女及び遊女の鷗級佐香保等を加へて 慧春尼、了然尼などを始めとし、俳人たる捨女 媛佳人にして此難行道に志し、機根相常に悟 195 白味も特別な氣がする。 性修禪の評傳である。方面が變つて居る丈面 居る。題目は奇拔であるが内容は斯の如く女 人を選んで評傳したもの、千代能、一休の母 を得たものがある。本書は此等の女性三十餘 ば男子のみの専有物ではない。古來幾多のオ 禪は神秘教な宗教である。已に宗教であれ (價一•〇〇)

大日本と許 會社發行

次に作家の氏名の讀み方は、一般に從來の 餘になる。共進境は頗る速にして實際情得さ 岸本氏は静座を始められてから已 四四 年

(價一:00)

認集の白眉さして見らるべきものである。

の事ではあるまい。

って

態度に出でなければならない。

單に材料を剪

の研究が一科學さして成立するには同

けでは貧民心理と科學と號することは

出來

般心理學の觀念に依つて説明しただ

するには其の研究法に於て周到なる態度を以 ければならない。心理學が 科學たる所以を詳述するが如く、 一科學さして成立 臓ゼエレン。キエルケゴオ

內和 田老 哲 郎著

II

ル

北方スカンデナキアの精神生活 獨逸文明によつて生み出された天才の真生命 イチェ」研究を著はして、深奥沈痛な近代の を新にして、 を遺憾なく説き示した著者は、こゝにまた筆 近代學藝叢書の第九編である。さきに「ニ 憂愁を惱苦さを其の導調さする から、一如何に 60

そ らまる大きな調和を探りだした著者の態度 最も光つた收獲であったこさを信じて 何よりも先づ尊く思ふ。そしてまた の道」へ深く辿り入つて、 なければならな を生がすのではなしに、われく 書を手にして、キルケゴオルの「險しい人格 昨年の思想界における最も大きな而 吾々 0 4 いこさを知る。 活の弱ささなり深 戦ひのリ n の人格 此 ズムに

た天才ゼエレン・キルケゴオルの大きな深い 生くべきか」の問題に生きうる限り生きつめ 関ヴェ ル レエ 双詩 白日社發行

(菊版六六二頁價二•五〇)

11

この詩人の研究者にさつて有益であ てゐる。 うなくてはならの事ではある リズムの波にゆられつ、繰りだされてゐる に移した氣持のよい可愛らしい冊子である。 中から約九十篇ほど選みだして、 も目されてゐる 500 しぶりに俗語を取り入れて 詩のいのちが、 200 佛蘭西にお **総末に附して** 「無言の歌」のうちのアリ ける象徴詩の始 概して手際よく移し植 में[°] 1 ル・ヴ あ つるヴ 、あるの Ž. ル 加 D- 52 12 v それ は 非常に氣 Í V 1 ツトの × への詩 他点られ ヌ 0 3 194

著者それ自

(四六版小形三七四頁•價一•〇〇)

足なるも 著者の勞を謝する。 貧民の生活狀態を熟知せしむるには頗る有益 薦して置く。(價一・八〇錢 は彼の研究の歩を進めて本書の遺漏を補ふ新 な書である。 者に對して通俗的に貧民の生活材料を供して 全たるを
免れざる
所で のも有る。この點は本書の末だ不完 著者は目下洋行中である 今は此の 來する時 あるが、 を待 良 一般社會の讀 書を社會に推 つき共に、 が、晋人 われくはこの書を讀むさき、いろくな生 身の生活要求をわれくの前に投げだした。 らないものさを併はせ有してゐた人の矛盾の 强みを説き明かすことによって、

するに關しては餘り緣遠いものが有り、又不 その材料に就いても貧民心理學的原理を構成

のさ、二十世紀によって建設されなければな

紀によつて破壊されなければならなかったも

生命を其のあるがまゝに掘りだした。

十九世

な捕捉させる事が難く、

猶は新聞記事若くは

へる點が多い。

小説を讀むに過ぎない感を與

的説明を施して得ない所が無数にある。これ

材料を掲げたがけでその貧民心理學 が爲めに本書の内部に於ては貧民

が爲めに讀者に貧民心理に關する科學的原理

題の われ 活上の問題を解明し解決する事そのことが、 われく一自身の問題でなければならないこさ を知る。 解明乃至解決に努力する 一一自身の問題たるべきではなくて、 謂ふさころの客觀的眞理がわれ

そのものが

間

トスピラト

集詩院道修

賣 發 装 新

其他すべて五十篇を収む、現職へるものにして、同修道院に到りによりであるとなる慰めを享得て修道士たらんとして神を

(C ()

一装熊荘巌無比、天金代唯一の原始的神秘と、夜年のの原始的神秘と、夜年のはいい。此詩にしての原始の神秘と、夜年の出詩をはいることを得たり。此詩となることをはいい。

と対した。と道しが、感生觀し、感生觀影話活想近

さをを北





露三風木

著

□著名○前空壇文□

歐氏ンら本 洲が夕れ書 文特しては 增殊其英最 のな他京近 現る歐倫著 狀印洲敦者 及象一にが び的流滯 文筆の在世 學致文中界 美を塾)的 術以美日名 家で術夜著 の機家親な 生智二しる 活縱十 を横餘交日 忌に名遊本 惺描のせ詩 な寫目し歌 し常バ論 品、牛士 評觀活 講 し察・ド演 て批創シの 適判作ョ為 正た家 鵠る庭工 前人七大 の格ン學 快にズよ 著亘いり にり力招 て、「聘



次郎著

] 特製箱入四六大版美本

送料金八錢

葉六十畵挿

所行發

者諸君の熱知さる、通である。氏は其過去三 れ叉教會で講演されたこともあつて、 れた所と多い。其經驗談は屢々本誌上に現は 是は讀

入學準備作文速 成 雄友 辯田 會直

發剛 行著 持に陳謝申

1 たるも、

廻し 座は筆で傳へられないコッがあるとされて居 る。其の表現法も平凡でなく中々趣味ある言 の説明の如きは詳細な繪畵を以て説明して居 があり、一讀卷を措かしめない。元來靜

道のためには唯一のオソリテーを有する經典 に其要領を得らるゝこと、思ふ。本書は靜座 たが、本書に依て試みたならば何人でも容易 ても可なるべく、 著者は正に静座道の 10

般人も讀んで實益のある書たるを疑はない。

實例には真に愕かざたる得ない、中學五年を のが本書である。著者が掲げて居る劣等文の 國中學卒業生程度の實力及缺點に通する様に なつた。其の果斯る受験者のために書かれた 者の作文試験を受持つて居る所から、日本全 やつても自分の先生であつた人にやる手紙も 著者は職を某官立學校に奉じ多年入學志願 等有之候。

に其内容を紹介しておかふ。總説、靜座の姿

身体の動搖、腹力、肉体と靈魂

が本書の評價をされた筈であるから兹には單

との關係、

身心の調和、

身心統

集成發表されたものである。時評欄に原田氏 年間において研究解釋し得られた所も、

玆に

腹宗の諸章を設け之を又細節に分け、其姿勢 一の結果、念 始め に教へ一々其例を示して居る。軍人志願者を 通文の病弊を掲げ及良い文章の作り方を丁寧 のだ。それはさておき本書は此等書翰文や曹 これは今の教育が徒らに下らの所に八釜しく 書けない様では、中等教育の効果も疑はれる。 て一向成蹟をあげて居らぬ てよい。文部省あたりで大に注意して欲いも 般受験者には (價。五〇) の好指針たるを失ばな 一證であるといつ

編輯 の後

を發揮した寫真や靜座の首唱者岡田氏の新舊

大使徒となった觀がある。

此外氏自身の肉美

變貨正。 讀者諸君の健康を祝申候。

寫眞が挿入してある。靜座に志ある人、又一 祭前に發刊するを得ざりしば、深く編者の遺 を生じ、 | 本號より印刷所を變更したるため諸事手違 原稿は早く纒りたるに係らず、 降誕

憾とする所にして、

を識る法」石田氏の「悠想」林静太氏の「ブラウ ニング夫妻の戀愛」一條氏「男女本位の道徳 等の内次號へ現はるべきものは、岸本氏の「神 たるもの多く有之候。諸氏の御海容を乞ふ。其 本號への寄稿は甚だ数多くして紙数を給 包容し切れず止なえず次號に廻

ため出張せられ申候。 され候。 年末より年頭にかけ一寸 ■例に依て同人の消息を申上候。内 同氏は亦舊脈 ---家事用を以て歸省致 二日靜岡市 ケ崎 氏

忙を極められ候。 ■百田氏は新年號諸雜誌へ小説寄稿のため多

でれて渡米中なりし鈴木文治は本月四 朝さる、答 H

盤三並岡田相原等の諸氏 八亦健

方々の一讀を御勸め申候 教さ研究を披握されたるもの 出されたり。 認誌友岸本氏に此度 岡田 式静座法の綿密丁 に志ある 寧なる宗 3.

七〇相原方編輯部宛御送附奉願上候。不宣。 本誌グ切毎月七日原稿は 東 74

協平戰戰 人 戰 基 戰 支 平 時 戰 ゥ゛ 戰 世 戰 B Λ 爭 那 和和爭爭 和 爭 本 和 生 局 爭 間 1 爭 本 Ž 古 Ł 0) 0) 裡 敎 民 0) 1= 3 特 ŀ 思 共 0 變 代 戰 戰 際 平 有 1-平 獨 動 國 0) 0 4 族 0 想 爭 和 逸 機 民 爭 目 和 局 論 戰 和 0) 0) 0) 戰 T 生 爭 就 文 E 及 性 爭 平 戰 Ł 的 理 內外 我 存 Ł 爭 平 觀 目 連 觀 和 T 話 平 國 的 動 # 和 競 多 あ 和 0 爭 民 義 讀 不 之 0) で 安 覺 3 論 悟 特新 井 光 村 小 佐 松 法桑 吉 桑 田 藤 海 Ш 長 日 別年 井 老 輸 上 木 理 貴 中 -上 木 田 田 瀨 福 鉄 慶 名 哲 壬 萃 健 H 章 司 嚴 芳 安 靜 光 彈 次 太 太 元 次 爭 翼 郎 忍 郎 精 郎 郎 郎 致 藏 郎 郎 正 宣 輔 太 8 戰 戰 優 生 平 平 平 戰 戰 戰 野 詩 平 平 後 和 和 和 爭 爭 爭 蠻 n 理 爭 人 爭 . 和 0) E 暗 0 主 ? 語 Z 0) 3 3 かっ 戰 0 學 is 者 Ł 戰 4 義 平 偷 戰 維 平 平 0) 亦 理 育 持 h 和 教 0 論 0 和 和 理 子 爭 和 根 想」と 0 心 滅 者 倫 5 的 供 カコ 底 12 就 批 理 側 3 我 7 評 的 面 動 戰 價 物 T 爭 0) 值 2 日 郵本大 4 本 號正 二五 和 稅限年 4]_ 定月 參價一 鹿谷大龜深 加 近 大 內小友 齋 石 向 五日 ケ 拾發]1] 藤 嶋 谷作 藤 田 澤 崎 林 枝 木 錢錢行 本津 藤 千 後 軍 謙 IE. 熊 作 高 員 安 次 二郎郎產信富康馨文松 次 郎 頭 治喜

京東座口替振 會協亞東 込駒區鄉本市京東 所行發

教

雜

誌

华 丁 4 年 部

毎

週

木

發

0 雜の な 刊 b は 明 治 + 六 年 1 ì 7 既往 十 餘 年 0 歷 史 を有 す る 本 邦 基 睿 教界最 古 0

外

國

行

ケ年 金二 金 金

金三

圓 錢 錢 錢

圓 圓 五 曜

+ -

(0) 誌教誌永誌 遠の 特 及毎眞長内號理は 教を進 明 的 す 基 3 敎 あ 0 4) 立 塲 ょ 9 時 事 問 題 を 評 論 ì Ħ. つ 最 新 0 知 識 依 4 斯

外

名士

0)

論説ご新

進 思

想家

0

研

讃

清

新

な

3

文に 學 は 外 勢 先 輩 を 滿の 載說 す 教 内

(0)

(0) る本宗本教本週 誌は な 4) 仰 修 糧 ごし て聖 書研究 0 手 引ごして、 信徒 家 庭 0 讀 物 T 好 適 な

武 編 本 輯 喜は 代 宮 川 經 山輝 金原 作田 の助 兩 氏小 每崎 號 弘 執道 筆 渡 瀨 在常 网 京 の牧 記野 者虎 數次 名の Ħ. を 氏 助協 力 ζ.

本 誌 0 見 本 は 往 復 は カジ きに T 御 申 越 次 第 無 代進呈す ~:

所 大 阪 市 北 、 替貯金 四

發

神學部の開始

に付き、來春一月十五日以後左の通り開始せらる、豫定なれば |並氏病氣の爲め休講こなり居たる神學部の講義も、同氏輕快

一、毎週火金兩日午後四時――六時迄本部に於て有志者は申込ありたし。

(講讀書)は當分の間 Wobbermin: Systematische Theologie nach religionspsychologischer Methode

(講演)近代哲學で宗學及び基督教 (カント、フィヒテー、ヘーゲル ンゲル、リッケルト、ヴォンデルバンド、オイケン、トレルチ等に就て) シエルリング、シュライエ ルマッヘル、フリース、ニーチェ、ファイヒ

兩者の中一を撰擇さる」も差支なし。 國區 町三 二田 統一基督教弘道會教育部 會費一ヶ月金叁拾錢也

年

B 1 SERVICE OF IE 元

副會長 書 幹 會 同 副 理 同 會 事. 計 事 長 岸 神 安 松 内 海 相 太 ケ 尾 原 本 田 部 上 田 崎 並 精 能 佐 作 輝 真 磯 孠 次 武 良 郞 太 雄 男 介 郎 郞

> 諸 生 0 君 學

卷卷

追

一分電車

終點ヨリ

H.

分間

電話下

谷

1

兀

右 御 入 用 價各壹回拾錢 の御方は至急御 誌 大正四年 送料 巾 越 あ 度 n FI

電話芝五八五五番 振巻東京一〇〇〇三番 雜 誌 社

大 ·IE

Ħ

年

一月

東京三田

迎歡者宿來御

下高 館 宿等 主

統

基

督

教

弘

道

會

文學士 本 今 鄉 岡 區 追 信 分 HI

	謹	二 定 定	謹	謹
賀	賀	賀	賀	賀
新	新	新	新	新
年	年	年	年	年
	_			
仙	永	吉	土	クレ
廣 島田	座 井	本郷區千駄木町	井	芝區三田四國町
水水	吉柳	千 十	仙臺市 林	一田四コ
曹重	凌	基作	臺市 林	一
田 重 邦	府下下戶塚三五〇 一柳太郎	五造	本 荒 町	館
				1
高 高 直 其		르노	謹	謹
11.長	野山	謹	. सम	PLE
賀	賀	賀	賀	"
			,	
賀	賀	賀	賀	賀
賀新	賀新	賀新	賀新	賀新
賀新年	賀新	賀新	賀新	賀新
賀新年木	賀新年 鈴木	賀 新 年	賀新年	賀新年
賀新年 木 村	賀新年 鈴木	賀新年 中村	賀新年	賀新年
賀新年 木 村	賀新年 鈴木	賀新年 中村	賀新年	賀新年 內 藤
賀新年木	賀新年	賀新年	賀新年成	賀新年 內 藤

年新賀恭

旦元月一年五正大

同稻警良上北東東文華明田隆海京館店社堂屋館堂堂

米米上 能 和 岡 岡 仙 仙 京 大 歌 臺都 山 山 臺 國 國 山 阪 海 本 聖今眞文英福同 福敬教致 佐三日 輪本公出 錄華 音信音交交知 會丹書堂堂 房社堂館堂 書書書書書 書書鶴 店店店堂院店店店店店店店店店

謹	謹	謹	謹	謹
賀	賀			新
新	新	新	新	
年	年	年	年	年 府
平	佐	鹿	有相	府下中野町高
+ 山	藤	子東木	嫌田	^チ 穂 岸
1 37		京小	倉雪	高 等 由
中込區田町一へ三助	麴町 袋	東京府下上大崎町	州鎌倉雪の下二三七	岸 忠之助
二乙		大	= ==	學心
会 助	晋 彦	崎子	臺 郞	资 则
謹	謹	謹	謹	謹
賀	賀	賀	賀	賀
新	新	新	新	新
年	年	年	年	年
東京府下	伊藤惠子	東京所入	東京府下巢鴨町宮下一六九三	星
府下	區 第 下	北品本	巢尾	島
浦 陽 地 地 地 地 門 六 八 五	町が終	111	明町	本
山 南 時日	七三十	與一郎	宮子孝	本郷追分町一九
南町	三惠	4	一子	分 一
分五造	当子	一直	些 輔	九郎
77.	//	1		

謹	謹	謹	謹	謹
賀	賀	賀	賀	賀
新	新	新	新	新
年	年	年	年	年
C/o Y 同	留 R P 元	武	佐	赤豐
lew M	Pension Rumine, 芝			坂
York York	區 Time 愛 Tau	上 上 上 に に に に に に に に に に に に に	严藤	區青山
Y. M. C. A. West 57th St. New York, U. S. A.	だ Pension Imer 48 A Rumine, Lausanne, Rumine, Lausanne,	牛込區岩杉町一	藤清	崎善考之
57tl	町。A 二 二 Sure		關西	五之
h St.	we. de Suisse.	观郎	學清	三助
謹	謹	謹	謹	謹
賀	賀	賀	賀	賀
新	新	新	新	新
年	年	年	年	年
本		本 郷	I but-a	名
鄉井	白	本郷區帝大基	野	屋伊
界片町	石	基田	區口	東藤
	田	教	山御	鶴重业品
generally	市音	年 二	殿精	町切入
四孝	櫻一	晋 ——		/4
井口 孝親	甲府市櫻町六〇	督教青年會寄宿舍	口 精子	名古屋市東區鶴重町四/二三

石 川

謹

賀

新

年

芝區北新門前町一五

定 四 郎

田四國町二ノ十三號

板

謹

賀

新

年

坂 正 雄

芝區白金志田町十五番地

謹

賀

新

年

中 錄 區宮村町 太 郎 七

麻

布

謹

賀

新

年.

六 合 雑誌 祉 營 業 部

神 田 區 中猿樂町 五 白堊館內

謹

賀

新

年

觀

IJ

發 藝術 タゴ タゴ タ タ 近 形 タ タ タ 代印 家 1 コビ E 的 ル哲學の斷片 ルご印度文 ルは果して偉 度 こうし ル ル ル ル 三東 要求ミウバ 先生ご自 の「個人ご宇宙觀 0) の詩ご印 の宗教改革 京 「新月」 てのタゴ ルこタゴ 市 區 化 よ 度 分 (先着順 1 0 大 者 4) 自 な ル りや ヤ 然 1

野

村

隈

畔

佐

野

甚之助

R Ξ

浦 G

關

造

相 磯

原

介

部

泰 郎

治

武

田

豐四

郎

W

2

ほ

吉田

粒二

伊

藤

惠

7 郎 内ヶ崎

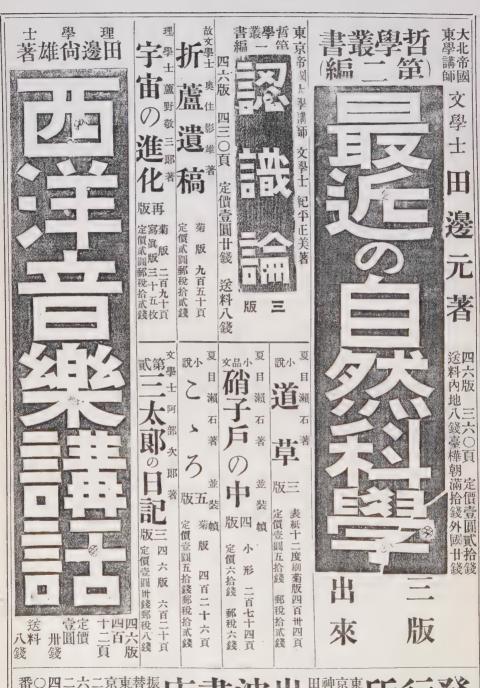
作三

郎

四 芝 國 六 振替東京 I 000三番 誌

田

	1	(
謹		二世 三世		謹
賀	賀	賀	賀	賀
新	新	新	新	新
年	年.	年	年	年
鈴	4 I	東京府下巢鴨町巢鴨一一六二衛	沖	磯
	込	平 从文		
部省	屬離	^巢 條	野和	京部區
大 芳 松	直太郎	鴨忠	岩三郎	銀
學 八	大	JEA	縣三	文.
局松	宿郎	空 衛	前即	館治
A150	zi-He			
起	建	謹	謹	建
賀新	賀新	賀新	賀新	賀
年	年	禧	年	新年
		ル音		
	r.	Toko HK	tre	1 4A
芝	兵	下 Yokohama Los angel	田田	公松
芝區愛宕山	動	na Specie Bank; geles, Cal. U. S. A	中	區積
岩川町	京都	ecie 3	在	田老
慈惠	帝所	Bank U. S	* 葦	松 德
愛宕町慈惠醫院內	京都帝國大學內	<i>912.</i> ₁	國城	枝 德 摩
13 /1	13 1-1		図 シッペ	70 /



番〇四二六二京東替振 店書波岩 町保神南 所行發

H 年 大 Ŧi. E 元

内

ケ

崎

作二

鄍

吉

田

絃

次

郎

料告廣誌本

普 普 特

通 通

表

回紙

以四

上面

揭頁

出以

際の

T

御 别

割斷

可上

仕候

华

頁 頁 頁

六

圓 圓 圓

貢 拾

連 は

續

0)

は 廣

特 告

引 申 金 金拾 金質

候

湉

田

哲

藏

等

表

紙

四

面

合 雜 誌 同

イ

U

順

今 尚 信 良

原 村 山 並 善 東 兵 郎 良 衛 介 助

小

野

相

鈴

木

文

治

賣

社〇

◎北

教隆

館◎

他海

全堂

有同

店〇

Ŀ

田

10

五五五番

發 大正四 年年 所 月月一十 發行 (()東 印 印 三東田京 警京 兼編 88 醒堂 刷 四市 刷 發刷納 輯 1 所 人 行本 文館 毎月 統 其東 現代之科 日 海 基 此 В 電振 發 野 Ŀ 行 名文書館 芝東京 學社

即

刷

部

幸

輝

男

價定誌本

+ 六 壹 臨海 册 册 册 時外 號出郵 半 ケ ケ ケ 版稅 年 年 月 0) 分 分 分 際 # はに 前 前 金 規付 金壹圓 金貳 定以 金六 貢 圓 外 錢 質拾 拾 拾 に代金申受く に代金申 Ŧi. 錢 錢 能

郵

稅 税

共

<

郵

共

郵

稅

錢

文方 亲**自**今六



號 月 二

in and alload

Alle"

(每月1回1日發行) 六合雜誌第三十六年第二號

六明合治 雜廿 誌五 第年三三 十月 六二年十 第七 號第 、種 大郵 正便 五物 年認 一可 月兴 一大 HIE 發四 行年)(每月 一世回日 -- 印 日刷 發納

行本

於人義學の けで者が廣 るあと 最るし面に 初って の本の於ち日 白 書書立てて では場熱最 題 あ此か烈も るのらな熱な 新レ人革に 生ンの命婦式は 活ケ解の人木 仰イ放叫の三を 望のをび權人 者思主で威 の想張ある H 是としり叫ン近 非生た人びケ代 0) 讀活彼間 ° イ婦 まと女性母の人 なをはの權生問 く敬實源の涯題 て虔に泉復とを 3 t なな近か活彼知 ら態代らを女ら な度社出叫のん いを會たん思と 好以に最だ想 著てとも第をば は忠り美一知何 本質でし入らよ 書に最い者ざり よ解も性はるも り競算の彼べ先 他せ敬讃女かづ 價正 匹 にんす美でら婦 六判 郵 なとべ歌あず人 稅 0) し試きでる。O思 Ŀ 强 °近想 金 oみ革あ た命る彼代家 八 美

F

小儿

劍

品想

集

L

1)

全

最四

上六

製判

本形

Æ

價

金

+

拾

五

錢

八部

錢稅

刊新

家生も方現る著 のの未法狀性者 作裏だ等を慾先 品面記の見教に 研が載名で育獨 究如せ著令に逸 上何ざをや關に 是にる譯進し留 非驚小述ん-必嘆供しで冊し 讀すの之其のて のべ性れ修見生 要き慾に養る殖 あ事及關をベ器

1/1 V さき窓 る實病聯叶き學 著を的せ露書性 述成現るしな慾 なし象生本く學 りつを殖書且を 0つ流器な其専

あし及る宇攻 るて花内面し か研柳容に研 を究病はは究 知上等性刻甚 る多の慾一だ べ大智教刻力

しの識育とむ °便をの危 青宜盡意險帰 年をく義と朝 諸與詳よ暗後 君ふ説り潮我 ○世其に國

勿一る必導が 論度外要き此全本美製 文繙本なつ大 藝け邦る〉問義 愛は何理あ題

好人人由るた



五十

錢八金稅郵

座口金貯替振 番二七八京東

錢

杂

本

日家人女思工

本の道の想と

區田神京東 七町保神表

明日と言はず直ぐ御實驗あれる

をり

る眞

812

の理

し的

神な

經る

衰弱症と

勿今三

常初一

賣樂 の有異

にめ 含有

クをとな

服し

用廣

れ同

ば病

精患

力者

をに

盛頒

なち

お論回

の認べた

衰弱

银

頗

卓效

h

年

研 び顯 追す確

0)

に想物世

果從 動來

て新騰には盆

中般

5 5

一觸 れ塊激

此

種

樂 あ

選

效に

る狩

藥野

劑病

を院

出狩

し野 幾謙

多吾

實先

ら以験生

してにか

有 寒競

器 `藥

り世

苦ち神の

心罗經進

結は患口

の間増は

ク症人

の増

ざる除

も儀

るせ

W

身を過勞する結

果

近

年

にこ

主治效能

神

衰一弱 一增一淮



金粒 几 金壹

錢

圓

神 精 あ心 病 後 經 衰 銷 衰 弱 弱 婦 血 女 A 11: t に用 殖 ス 器 テ W 曈 其 1) 生 他

發

賣

話(番六七

二)振

町

174

代 理 店

東 電 京 話 त्ता 市市

振 HT 通

(前付

書叢潮思代近雪寶骏裝並念記版重

鏡八金各稅郵·一均錢十五價定

九 八 七 Fi. 几 ____ 編 編 編 編 編 編 編 編 編 宗 1 H 1 和 才 學 ケ (1) 7 مال 學 思 0 (7) 120 研 想 哲 HH 13 家 想 教 完 藤文 周 平 小文 二文 闪文 今才 井學 田學士 松學士 學 H 村 間イ 並 藤士 並 1 文ケ 逸 哲 限 武 北 良 濯 學ン 良 男 門 藏 治 JII 氏 氏 氏 氏 IC 氏 氏 士原 氏 著 著 著 著 著 著 老 著 譯落

京東特振店書社曜警橋京京東元版

二刊新社學文田稻早

文早 稻 學田 大

にたき確 向る勇乎 ろつ此気た 聽熱青を信 け烈年以念 !!に思てと 語想躍燃 り家進の 且がしる 叫世來が ぶ界り如

かを 數六 三判 百上 五製 百本

0)

故

稿 紙菊 數判 二半 百截

生。發·人 餘美 活。見。の 頁本

町保神表區田神京東 番○七二京東替振 所

店書堂京東

X

紙四

十美

郵定 士五

錢錢

(前付三)

カゴ

生峰

然とやめり天つしい科

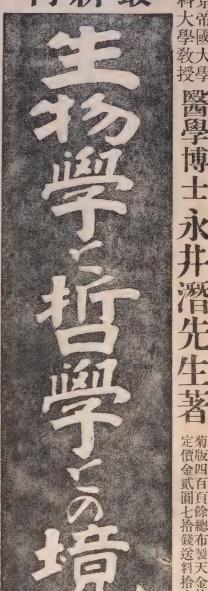
6

は今らの者崇

並ら洛此

此二峰地でき谷學 すの醫にの居踊底の 大學向大るをに嶺

刊新最



巷京 座麴 東町 京區 此 ○河 8 九町 -Hi 四丁 番目

四電 五番 八町 前付二

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 421 February 1916

CONTENTS

How do we know God?Prof. N. Kishimoto.	2
Militarism and PeaceProf. M. Minami.	12
Ecclesiastism or Spiritualism?	18
Christianity embodied in the American LifeB. Suzuki.	22
The same moral Standard for Man and Woman T. Ichijo.	99
In Recollection of Raimu ShimachiProf. Y. Fukada.	45
The SameProf. M. Kurihara.	50
Short PoemsMrs. K. Hinata.	54
Some Comments on the Philosophy of NietscheE. Yanagizawa.	55
Truth of Decorative ArtT. Hirasawa.	66
The Love-story of Robert Browning S. Hayashi.	74
Juvenile WisdomProf. T. Okada.	81
The Birth of New LiteratureProf. A. Naito.	82
The WoodpeckerG. Yoshida.	97
A PoemK. Sato.	105
A PoemI. Tanaka.	107
Hokkuby Ippekiro.	108
Immanence of GodProf. S. Uchigasaki.	110
On the Summit of Mt. HakoneJ. Hoshijima.	117

Topics of the Day. New Books.

published Monthly by the

TÖITSU KRISTOKYÖ KÖDÖKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

版三第

出 H 哲 藏

著

英 和

和 文

價

#

錢

郵

稅

英合本 文 價 # 錢

郵

稅

價 四 --錢 稅 四 錢

Many thanks for your "Fragments," which reached me yesterday. I have read them with great larly liked were "Twice in Life," "Additional Nerves," "Reputation," "Cruel Competition." I according to you I am approaching the "Critical Age." In another year, shall I be mad, or 知 更に深くその 傾向 た 知ら É L せばい その論集 「辞觀と思 想 八 敬冬 醒 社發行 interest and symmathy. Some that I parti-received the book on my 43rd birthday, r blind, or mad? The last, I expect. 價 八拾銭)な讀まるべBertrand Russell

五八五五四三三

東京市芝區三田

DU

或

町 電振

を 話 芝 に を 京

前付四



虚心集 病みし 枯葉の鳥 心 才人島地雷夢君 の時 0) 時に 雨 1000 元(英詩):: 想 陸大教授 文 文 文學博士 學 學 士 士 H 佐 固 古 栗 深 田 田 向 中 田 H 藤 碧 原 絃 哲 葦 康 3 樓選:10八頁 城 清 藏 鳳 基 算 む 〇七頁 〇五頁 五〇頁 四五頁 Ħ. 九 七頁 四頁

の上に在ます・

月の思想界 現 代 最近教學評論界 思 潮

覽(評論子

島

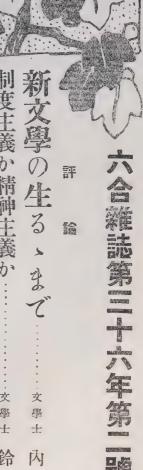
郎

一七頁

新 刊紹介 族世襲財產法二條生 編輯 の後

存积

評



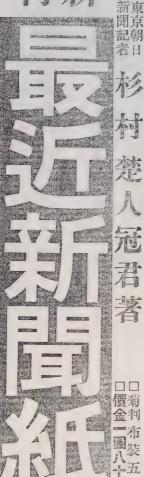
			1								
ブラウニング夫妻の戀愛	(內在 の神	軍國主義と平和主義	神を知る法	講演	装飾美術の眞理	我觀ニイチエ	男女兩本位の道徳	米國人の生活と基督教	制度主義か精神主義か	新文學の生る、まで
		· · · · · · 早大教授	· · · · · 一高教授	• . • • · · 女大教授					: : : 法學士	文學士	文學士
林	I	入	**************************************	岸		本	柳		鈴	鈴	内
靜		ケ崎を	並	本能武		澤哲	澤英	條忠	木文	木龍	藤
太七四頁		三郎:二〇頁	良…二三頁	太」頁		雄…五六頁	朝::五五頁	衞 …三三頁	治…三頁	司一八頁	濯…八二頁

誌 雜 合 六



號月二

る精論記の從 者しの者研來 もか如の究新 讀らき用と聞 び通流實紙 べる信子験 底部三と關 聞者調の基 紙は査如き著の未部の大部の な全のイ用い るく説ンと か説明タ理ば をかの
非論名 知ざ如っ 533 ん底又則説 す非新し るざ聞 潜る紙 なのら密 亦し特特 讀新質殊書論 む聞との中を 記編文收說 もの製作の表 のの新 新如如聞 武者先派権減 3 ん説ののが い比如多 て較り年



こ人解文

の生剖閉 -10 の切て意 帶の一義 べ活人及 る動とそ 使をなの 命質れ肉 な徹る容 り陶哲を 冶學明 蓋す的に しる精せ 机に神ん ・りをめ 本と限史 を斷前上 備じに幾 以彷多 ざて彿の る向た哲 可上方人 ら猛しを ざ進め拉 るの最し 良精緩來 書神にり 也を文て

日明そ 本のの 民理精 族想神 皷的洞 吹は黎 世数1 ん學そ と的の す精主 る神張 者がを



價四 金六 41 圖美 计装 念 送百 八網 錢頁

過之市京東

送四

徐

錢頁

る M i ið 議 0 から 論 な V S 起り得るのであ H n E その る。 3 その 0 15 譯 就 は、 S 7 知 直 接 る方 に知る方には、 12 は、 第三者即 知るも ち概念といふも のと知 られ 0 るものとの カジ 知 る 7 間 12

られ

るるも

0

との

12

カン

らで

ある。

や黒 で然らい その 斯 では 事 すものとは全く別のも く犬といふ名詞と犬とい 居 6 あ るの あ < 12 る。 頭 困 13 て、 ば は 詞 尤 0 念といふことを申しまし 申すまでもない。 0 る 中 か か きつと犬を知 は 力 『犬 16 甲とか 單 で作りあげた大といふ考へが、 然らば犬といふのは 通 さして居るものとの 居 な 常 る 12 カゴ S 0 居 間 甲 である。 乙七 だと答 Ł 此 る 0 は カン 這入る 0) 乙とか云 た か> つて居ると答 カ> 實際居るものは箇々の犬であつて、決して犬といふ概念的のもの 概念の であることを忘れてはならぬ。人に向つて『君 ふもの 云ふ箇 へる。 10 或は 頭 0) とを混同することがある。けれども犬といふ名詞と犬とい 果して然らば 關 たが ふ箇 中 なの 又『赤だとか 何であるか。それは吾々が 人と實際 で、 係を例として、 へる。 、此の概念とは果して何であるか。 人は實在 R 0 てんな の人とは決 B 節ち申 然ら 0 心白" 『犬が 砂 L > 7 だ 形 0 ば 居 i とカン 御話すればよく分るでわらうと思ふ。例 カジ カゴ 『犬は居る 居るの るけ た犬の概念である、 人 頭 して同 に浮 間 黑だとか 6 n 共、 h あ 頭の中で考へて作つて居る處の である 一ではない。 だ場合 力> る Ł. 箇 Z と問 Z 拵え上げ R かどうか 犬が 6 12 は、 13 は犬を知つて居るか ^ 之を説明するには、名詞その 實際 ば、 人とい 居 V ると問 それ 人 た 3 犬は 間 所 0) の人は物質界 ふ概 とい カ> は概念では 0) 3 ふと、ここ 居 と問 2 念に 0 ると答 42 的 ふと、 す 就 0 』と問 犬で 3 カジ ふ名詞 へば人は に存 な カジ V る。 75 實 7 6 一寸返 赤や あ る譯 在 V 在 多 して 0) 同 か 指 70 1

3



神を知る法

岸本能武

太

普通には別に疑るなければ議論も起らないが、 を知 から あるが ふのは、 考へて見ると、 接にその 直接にそのものを見又はそのものに觸れて知る』のがその一つである。も一つ 知る』といふことの意味 神を知る法といふことを述べ 之を混同してはならぬ。 つて居るといふのは、 第 に就いて知つて居るの よく考 もの 0 は に就いて知 に就 知 へると、 るの て知るといふことである。 12 るとい その も色々 を知つて居る であ を知る卽ち直 間 であ ム知 る。 るに先立 0 に大變な 種 る。 り様 類 私共 力 此 違 0) ある。 つて、 6 は 接 等の二つの 0 あ 一と口 W に 五. る。 あ カゴ に就いて知るといふ方には、 あ 第一のはを知るといふ知り様 少くとも二つの大切な種 説明し る 一威に依 カジ 3 此の二つは一寸考へると同 17 0 知 0 知 7 ク り様 3 おか つて知る場合 あ シ る。 ン r S は なけ ŀ 全く別 例 > を ふけ ~ n ば 知 ばなら 12 吾 n 0 2 付 的 -6 ども、 R 類 居 ¥2 V 0 カジ カジ 大隈伯 じ様で 疑もあ 7 であ 0 3 あ ことは E は は る。 よく あ る 間

ある。 をさへ得れば、 それでそのものを直接に知つたのであるかの如く考へ易いが、これは大變な間違いで

|神を知る法』といふことに就いて申上げて見たい。神を知るのには、大別三つの方法があると思ふ。||の。。 『知る』といふことに、大體二つの種類があることは、この通りであるが、今私は更に話を進めて

誤り 之は直接に感じて分ることであつて、決して單に理屈ばかりで分るものではない。概念ばかりを考へ で法 宇宙萬物の間 宇宙に真 ては 則 れて居るもの _ あ ダ の下に活動 先づ第 、到底美を感ずることは出來ないのである。直接に形を見たり美を聞いたりすることに依つて、感 t 則 カジ 行 と美とが充ち滿ちて居るとは思 の方法は萬有を通じて神を知るといふのである。萬有卽ち自然界の現象の中に最もよく現の方法は萬有を通じて神を知るといふのである。萬有卽ち自然界の現象の中に最もよく現 人が く豫言し得られるではない はれ智 前 して居ることを知ることが出 の法則を研究すれば、宇宙には眞理即ち法則が充ち滿ちて居つて、 が二つある。その一つは真であつて他の一つは美である。 12 『諸々の天は神の榮光を現す』と歌へるや。次ぎには美といふものゝことであるが、 惠が 申 i 現れれ た通 りであ て居ることを發見し得るのである。 るが、 カン。 此 へね場合も無いではないけれ共、學問即ち科學の力をかりて、 宇宙 一來る。 0 科學の眼を通 は實に法則の宇宙であり真理 然し科學は人に概念を作る力 して萬物を觀 試みに見よ、 唯肉眼で宇宙を見る時 る時 は の宇宙 日蝕や月蝕 かが あ 總ての いと少ささも である。 る カ> : ら起 物が一定の法 から 宣なる哉 分 るも 0 秒 12 0 中

居るが、概念の人は單に心中に於て存在するのみである。

人間 角 力》 あ 動物とが違つて居るのは實に此點であつて、 は、人間は概念を通じてするのである。考へることが出來るから、隨て學問といふことが出來る。人間 人はこの概念を澤山に持つて居る。而して之を種々に使つて物事を考へるのである。考へると云 人間 に相 間 12 は全く概念の符牒 言語 に概念が はこの概念を作る力を持つて居る。 來 違 n カゴ ば、 なかつたとして、さて考へるといふことが出來るか否か その い。從つて動物の概念は假りにあるとした所が、 あり言語があるから、 概念の 發達の程度に於て非常な差異が である。 性 質及その效果といふことが、大體明になつて來る。 然る に動物には言語 學問が幾何でも進み得て、こゝに科學が 殆んど總てのものに通じて概念を作ることが出 動物には概念はない。 あ がない。たとへ るらし So 非常に幼稚 例 へば人は言語を持 あるに 假りにあるとしても人間 は、問題 しても なもの 起つて來るのである。 ではあるけれ共、 であ 非 常 つて居る る 12 12 幼 相 稚 來るので、 違 が持つて 一人時に な ので この

此二つが一所に現れることもあるけれども、然し二者は全く別のものであるといふことを明 はも カン といふのと、を知るといふのとは、よく區別せなければならぬ。固より或るものを考へ 大隈伯を見てその顔や形を知つて居るといふのとは、 なければならぬ。私共は動ともあれば、概念的知識に欺まされて、或るものに關し此の概念的知識 話 のを知り は 元 に立 るの であ ち歸 るが る。 吾 人間 R かワ カゴ シ 考 > ^ 、る時 ŀ ン 12 には、 就 V 概念が 7 知るの 全く別の性質 澤山頭 は、 澤 に浮んで來る。 山 0 の概念 もの であ を通 心じて知 この概 る から、 るの 念を通 る場合には、 120 就いて知る 12 じて人間 T

世を慕 定する 蠻行 假定 大體 自 5 疑 あることは信じて居るに 「身の今日の蠻行を善と考へて居るか惡と考へて居る 世 界 0) 12 行 於 出 3 た結果 0 n 大勢 0 はれ て常 られ 來ね 様な人 で に罪 カジ は獨逸のやりかたを以つて決してよいとは認 7 TI は であつて、一般的 居るのを以つて、社會を進化するものと見る説を否定せんとする者 S なく、 カジ ない 悪 大勢に於ては 即ち 42 打ち勝ちつゝあるのである。 でも 反 つて 相 祉 遠な 會 ないが、 逆に之を確保して居るも 12 に考へれば、昔の方が今よりもよいとは決して云ふことは出 は 社 S. 一會は野蠻より文明へ即ち暗黑より光明へと、進みつゝあることは、 『一つの段 之は要するに昔の實狀が充分に分らぬか して見ると今日 々に大きくなりつゝある目的』が貫徹して居て、 人或は 0 のとい 獨 力》 逸の は 別問 二十世紀の始めに當り、 めては居らぬ。 ふことが出來よう。 蠻 行 題 は決 E して社会 て、 逐 また 5 會 12 12 IE. 獨逸自 叉世 目 義 之を理 的 獨逸のそれ カゴ カゴ 0 最 あ 身 0 想的 る。 中 あ 後 12 12 る 0) なも 併 は堯 た 來ない筈 勝 0 E 利 しなが 所 如う 0 E 者 42 0

ば、 であ 意義 きだと云ふいでは かく社 私共は安心 3 13 於け のであるか。 祉 會 3 が暗黒から光明へ 遂 社 して にどうなるかからぬ 會 (1) ななく、 進 神を信ずることは 多くの先輩達が喜 步に依 事實上社 つて、 向つて進みついあるとい 會は 社 私共は社 出 んで真理の爲めに盡し正義の爲めに殉したのも、 會であるとすれば、何を好んで吾人は眞理や正 かく進 來 15 Vo 會 の將の 2 社會 0 > 來 は慥に過 ふことは、 をも察知することが 南 るの であ 会に於て進 獨 る。 6 若 私 共の し事 出 歩して來 實上 理想 來 る。 カン 7) V 6考 72 < し人 義 12 あ 實 の宣 ^ 相 る 7 間 12 違 真 6 傳 社 カ> 15 0 會 なけ < S か、 為 あ Ł カゴ 10 JE 無 る

問 7 鏡 * 說 見える人から見れ じ得られ 感じ 萬 カジ 崩 カゴ 4 B 出 物 來 0 物 得 理 内 叉理 0 論 るのである。 ぬ人には如何に 精 13 眞 巧 屈 どは、一 と美 カゴ を認 は、 分つた人でも、美はそれのみで之を感ずることが しとを現 從つて之を感ずることの出 天地 段美を感じた後にその美の感じを深からしめることは 說 明し すではな は實に美し ても、 る。 S それ カン。 い天地である。 私共は直接に自然界に於て美を感じ、 だけで美そのもの 來ね人に 望遠 は、 鏡 が天體 は、 美 は決 決して分るもの 出 0 來 秩序と美とを示 して分るもの 15 So 出 叉味 來るけれ 叉問 では ふことは 6 なない。 すが 接 は 及に學間 ども、 如 出 然し美の 來 に依つ 元 15 顯微 來美

12

め

る

0

6

あ

12 相 めることが深けれ 3 和 斯 、美や真の上に又奥に、尚は萬物の くし て 常に の美を味 て私 體 天 然の 12 共 な は ふことに依つて ると云 ば深 本體 更に なる神 い程、 歩を ム様な感じがする迄にならなけ 益々神を知ることが深くなるの 0 進 神の めて、 美を感じ得る様にしなければ 恩恵を感ずることが 本源である神を見るのである。而して人 かく自然 然を研 究することに 出 n は 來 なら ならない。 である。 るの であ な 依 Vo 0 天然 る。 7 神 斯くして遂に宇宙 之は を眺 0) 智慧 間 實に宗教 0 めてその を知る 智 力 カジ ことが 美 進 0 立 と自分と 九 を感ずる時 場 で眞を認 6 出 あ 2 6

見出 第に實現されて明瞭になりつゝあ 時 12 第 過 すことが 去 カジ 神 あ 3 出 る 知 來 0 る ごあ 方 る。 法 祉 る。 は、 會 社C 人間 は 會を通じて神を知 慥 12 社 あ 會 ることが認 る カゴ 今迄續 目的 42 め得られる。 向 V るの つて て來 0 進 た 3 歷 あ 史の る。 2 固 > より時 時 4) あ とと 3 0) 12 上 に依 見 相 力。 ると、 5 違 つて 見 な Vo 1 ح 人 伸一 間 > 而 36 12 12 7 屈あることを否む 神 は 未 を信 0 目 來 的 ず カジ る あ は 次 基 ると 第 礎 次 * 同

聲即ち神の を信ずるものが 實に良心は自分の良心ではあるが、然も自分でどうすることも出來以權威を有するも る。 0 命令は、 私 共 は常 文字通 力なる に良 良心 主もに良心の りに絕對的に人以上のもので、 心 に恥ぢない人、 0 賞讚 が、人に特別なる安心と愉快とを 命令に依て神を認めようとするのは至當のことではあ 否良心に賞められる人になりたいものである。 真に直 接 に神より來るもの 與 ふることは、 6 何 あ 人も る。 3 0 經驗する處 るまい であ n ば この る。 良心

别 後 意 カゴ てはならね。始めには良心に責められるにしても、そは次第に減つて來る樣にならなけれ 0 に達せなければならぬ。 不二』である。 いム意味である。 滅じて 形を發展し實現せしむることに依つて、 堕ちるのであ は悪をなしてもよいといふ意味ではない。悪をしなくなるから、 ح で善惡を に立つ基督教を卑近だといふ一事である。之は成る程一面に於てはさらも見えるが、 誤つた考へである。如何にも私共神を信ずる者は、何時でも良心に責められる樣なことが で 光明 注 意 超越 すべ 愈々加はり希望益々生ずるのである。 始めは『二』の差別觀に立つけれども、終には悪を超越することに依 る。 ら面 善惡を超越したと云つた處が、惡をすれば『不二』の世界から再 した域にまで達せなければならぬ。 かっる意味に於て私共は善惡を超越したい。 白 然して、に斷つて置 い事は、元來善惡は平等無差別であるべきだと主張する佛教者が、善惡の差 ての域に達し得べきである。 かねばならぬことは、 かくして終には良 即ち基 督教徒 而 その意味で善惡の 斯くして善惡を超越すれば、その して の善惡に對する態度は、所謂『二而 心 の阿責の 固より何時實際此城に達する ては自 分 0 0) な びもとの『二』の つて善惡『不二』の域 心 い狀態、 別がなくなると に見え は 他 ならね。 る 卽 面 所 ちその から見 世界 0) 之 神

36 る。 知 を加 歩と 活 n 義とが 想 6 動 がは如 ばなるま 0 2 神 ムベ 人間 實 n 如 8 舞臺であ 何 ふって や孝子 現 ば 最 2000 信 は にも 12 或 後 次第 ずる吾々は とが 向 る の勝 不 國や或 や義僕などの傳記 つ 6 に進 る。たとへ舞臺は 經濟に出來 進 あ T 利者たることを信じて居たが為めでは あ 歩とは惡 る以 進 る。 多の み る かく考へかく信じて、 上 72 時 社會といふ芝居も亦同じで、 途を辿るものである。 は、 V 代 て居る。 2 S 12 ことが 不都 0 は 6 暗 を繙 不満足なも あ 黑 合なことや不満足なことの 然しよし不 減 る。 面 かば、此 じてよいことがますといふ意味 カゴ 現れ 社會 常に樂觀 0 にも宇宙にもよいこと許りが の信 るかも知れ 芝居は始め 經濟 であ 念 b に出 カゴ 次第 し同時に常に理想い實現に努力したい 此 如何 ないか。試みに聖人や賢王 處に 來て V2 ななに カン 12 けれ共、 ら面 居 存在 活動する人は 强く盛んなる るやらに見えても、 面白さを加ふべきもの 白 は、 吾 S もの 當然 である。 入 は常に光明 不 ではなくて、 あ かを知 の前提として認 完全な るもの 見方 る や志士や 4 天 13 ではな ことが 0) 0 方面 地 依 6 次第 6 つて は あ か 實 められ Vo 出 8 76 気に人間 る。 眺 12 る は、自 來 0 面 12 旣 め、 350 や忠臣 であ 神 白 なけ 12 L 8 7 7 然 進 理

n を賞することが 良心に依つて之を知り得るので、所謂 良 て居る。 心 に於て、 方法 人が は良心を通じて神を 吾人は最 出 智力を持 來るといふると。 36 つて居 神 0 形を認 て真理 知るとい 此等は ぬ神の を知 『天に責められる』とは、良心の呵責に外ならぬ 人が ふの ることが 摩を 神に似て居る大事 であ 聞くことが 出來 る。 ると 聖書 出來 12 S は ふこと。 る。 な點 人 は 吾 6 神 叉情性 R あ 0 かぶ る 形 天 12 12 と謂 を持 似せ 相 違 て作 13 9 CA 天 7 S 道 カゴ 居 5 のである。 と謂 て天 n 更 た と記 12 然 ふ皆 て 吾人 0) 美 3

pip

*

感

じた

V

B

0

である。

字 認 は は 0 叉 神0吾 な 0 的 7 自 をつ it 感 宙 め 親 必ず きてとでは 知〇 應 决 然 T 鎖 n 12 到 子 に心心 直○つ○ は 居 は 欄 0 底 漫 T 観。ての的の居の 3 愛情 謂 15 此 その に寫 神 せ T 6 W 0 自 るの単に 明 15 な 3 知。 愛 0 分の 一量を拭 0 るので、 或 哪 識○ S Vo. 情 何 は 存 概○ 0) 物 12 V を 心を清 神 誠 心 在 感 達 2 72 一で疑 へば、 域 學 は 4 す カゴ 3 見えざるを得 る様、 天 12 ることは カン 12 くすること、 人 進 12 つたり又無 3 理 自然 み 論 通ず (1) 知 心 努 た 0 る 12 る ことが 力す 南 六 V 神 る などと調 ^ ケ 8 調 換 神 V) 15 敷 3 カジ (1) , 形 i -1-論 S 出 6 カジ V 宗 のである。 カジ 可犯 カゴ 來 ď, あ などは 寫 るの 教 h 1 台 吾 る。 佪 る らて來 3 0 調和 过 カゴ 々は 1 は 實際 4 自 唱 的 햬 子 3 供 で i 此 分 ورا 理 4 12 ^ 神が 共 6 15 滿 等 0) 論 肝 對 -6 \$2 0 あ ば 心 要で 足 鳴 あ S 的 無 は感じ L る。 と神 60 見えぬ 7 ī して居ると云 に S ては 自 ح 神 人 あ 4 我等 昔 て知 n を考 13. 然 (1) らう。 は、 等 心 7) 吾 ならない。 12 · 洪鳴· ら真 E 0) は常 るべ 假 ^ R 人 心 るの は カン 吾 概念的 さてとで、 ム意 12 する 12 カゴ 想 譋 17 R 曇つて居るか 心 直 和 は でなく、 像 は 必ず 自 0 接 i す す 子 識 3 然 JE. 知⁰ 12 る 供 カジ 0) ことが 識º 進 神 6 しき人 3 なくては ことは 12 2 决 天 持 あ 實際的 42 h る。 見神 で直。 命 0 欺 らで て 肝 又 せる を 出 C 考 心 接○ なら を感 腎 昔 に又具體的 來 後 知 120 あ 6 0 るとする 12 n カン 6 感じて TS 6 7 5 あ 滇 清 42 7 知 天 る。 樣 如 始 S 居 人 心 地 8 る め

ことが 丸 は なら 出 來 な る カ> は 分ら Va けれ 共、 次第 々々に幾分かづつ之に近付かねばならないし、又近付きつゝあ

Ξ

に生 神を知 て來 あ て交つ あ はな 直 T 以 る た V 12 上三つの方法 宗教 神を知り Ö 動 て居ることが大切である。宗教は決して單に死せる理窟 生命 力> ることが、何よりも大切である。 神 い。以上三つの方法 色且 であ 5 0 であ は 概 之の 0 間 る 念的 ることが 働 る。 接 いて居ると云ふ心持ちがなければならない。 な みでは充分でな 知 を述べ るい 自分と神とが 識 で 必要であ 或るものではなく、 あ 來つたが、最後に再びはじめの概 0 に依つて神を知るに當つ て、 る。 本體 所謂神に就いて知るのであ 50 神に就いて知る方法は澤山 之のみ 的 即ち自分を知り自分を守 に調 直接なる、或るものであ では、 和 1 て居ると云ふことを感じて居るとい 宗教 て、 なは單 只 念の問 概 に理論 るが、 念に依 こゝに至 では あるが、假 る 題 神行親 これ 15 的 つて考 江 る。 S になって仕 つて始めて真 は ち 常 神 决 しく感じ、 へば 歸 へて神を に神 と自 して直接 つて、 神 Ł 分 舞人。宗 0 共 との 性 知 話 ム様 の宗 之と親 12 12 質 3 L 生 神 あ などを 0) な意味 9 H 教 を知 りで は實 カゴ 3 しくな 局をつけ 交通 神 る で、 0 0 るこ + 0 6

第五章に記されたる如く、貧しさ心、柔和なる心、清き心が必要である。自分の心が清くなれば、 之に 修 業 カゴ 大 切 6 あ る。 常 12 祈 9 常 12 求 め て、之が 准 備 をすることが大切である。『馬 傳 うの 神

7

病氣に罹るが、

學が 文部 義に走つてゐるのは慨嘆に耐へない次第である。其の他社會は色々に人々の心を軍 學校と大學とを増設しないかと云ふに金が無 と大學とが であ とする。 とを止 つて 大臣 る。 めれば、其位の金は直ぐにも出來る。然るに之を顧みず、世を擧げて滔々とし に勅語 斯樣 例へばあ ねな 足らな 12 S. 考へ來れ が下つて、教育を盛んにすべき事 の少年義勇軍などもさらである。 S 日本に於ては學校が少い てれ ば我 3 から 増設すれば、 日本は徒らに獨逸の は果して將來文明の趨勢に適してゐるかどう 學制改革も何も有つたものではない。 0 いからである。 で は最 あ 軍國 る。 之は外國 も明瞭であるにも拘はらず、殆んど何等の事績 小學校や中學校はさうでもないが、 主義 しかし一隻の軍艦、一 ž 0 非難 例より見ても して、 力 幾多 ^ つて自分を批 議 箇 然らば何故 事 7 論 に傾 偏頗 0 U) 師 カ 餘 南 な H 地 我 判 る軍 高等學校 を造るて カゴ なは先 する 有 に高等 る 力

で國 又今度の 尤も今日 かる時 * 少くなるからで 建てようとするの 大亂 のやらに世界の各國が皆軍國主義になってゐる時、少しの軍備をもしない譯 に軍人が最も軍 0 如き卽ち其であ 之を以て直ちに人間の常態は病氣に在りと云ふことは出來ない。而して戰爭は文明 あ る。 は文明 備 勿 の擴張を說くのも止むを得ない。然し乍ら大體から見 る。 論之に の趨勢に適してゐな しかし之は例外である、 は例 外 カゴ あ る。 So 彼の 何となれ 民 單なる例 族 大移 ば文明の 動 外である。 0 如 程 き、ナ 度 が高くな 水。 例へば V て、 オン には 軍 人間 るに従つて、 戰 國 争の 主義 は時とし カン 如き、 ない のみ

を缺

いて

る

る

0)

6

ある。

然らば斯かる

傾 向

づ之を考へねば

ならぬ



軍國主義か平和主義か

三並

良

乙駁盛 艦を造らうとしてゐるやうな有様で 今日の んな議論が 世 0 中 は、 行 歐洲戰 はれ る。 争の 英國 た めに、 では徴兵制度を布からとし、 あ る。 何處も此處も戰爭の話がもてる。 米國でも軍備を擴張し、兵隊 殊に戰爭の準備 42 を募 就 て甲 り軍

なる發展があるだらうか。 に於て、獨逸の用意の有る所が知られるのであ は 有る るであらら、 師 かゞ しな 有 團 軍 る のではな 一國主義と云ふやうなことは各國に於て行はれてゐる。 增 設問題 かい カン 世界は皆軍國主義になりつゝある。否、我が日本の如きは獨逸以上に軍 然し乍ら獨逸 成 So が可決せられ、更に八四艦隊案が提議せられてゐる。 程、 軍國主義は決して獨逸の專賣ではないのである。 獨逸の 例へば我々の直接關係ある學制改革にしてもさらである。今度も陛下から は軍備 軍 艦 は年々増加してゐるであらう、 ばか りに熱中してはゐない。其の商工業、其の學問、 る。 然るに日本ではどうであらう、軍隊 我が 獨逸の兵器は日に月に改良せられ 國 に於ても數年來の懸 軍國主義の獨逸討 から云ふやらな事 一國主義 つべ の外に は獨 案であつた二箇 其の しと云 12 逸 海 果して大 なつて にば 外發展 T ふ人 カコ

12 無くなることを暗示するのであ した者 カジ 後で戦争をしない方がよいと思つて止めたことが分る。 文明 が進 T 12 從 つて戦争

は

確

哲學者 て何 な感 る。 12 方 ム今度の あ るべきで 叉 日 12 現 斯 今 事をもし 孔 信 12 カン 别 のやらに T > 等 米 る世 もす n 0 卽 日 子以來東洋 爭 國 戰 團 あ で 0 7 ち世界の 體 3 は 界 る筈で 塹 爭 文 5 0 2 世 は 明 的 濠 0 戰 1 も有る。 質に奇 界平 3 つて _ は 0 0 0 宗教 實際 な テ 28 科 利 會 あ 中 和主 る。 S る此 器 7 B 學 リアン カ> これ 5 妙な心 家の るの 團 は 0 は 國 され 何 彼等 義 の思 體が 發 は文明 團 1 0 向 5 事 なる者が 明 體 中に は皆世界の 想が を無 國 多くなれ ば彼等もこんな事 ふで 持 もして カジ しとの カゴ もしる がすると。 有る。世界の醫者 0 は 頭 傳つてゐる。 視 ねな 有 境を知 新國 進 を出し す 何等 る。 歩に逆行する ばなる程、 3 平 vo 者 際主義を唱へ 基督 和 カン 然るに平和會議 では らずして行 たら射撃しようと待ち構 唯平和 0 に貢獻する筈で 主義 叉キ 教青年會などで机 あ は二度と有るべきでないと云つてゐるの 戦争はするものでないと云ふやうに る ŋ 女 所以であ 0) 會議のみならず、 によって る人が [] ス は 3 體 ŀ カン XL 0 カジ の人々は今度の戦争を豫防することに 7 ある、 所謂 る。 あつて、 か 人 70 致團 類 3 3 今日 を カゴ 同 ___ 1 理 結して 萬國 斯 並 胞 學者 7 一べて勉 矢張 其の他に 0 大なる勢力を得 0) カン 思 る 世 7 0 るの ねるのなら何等 民 想 世 界 何 0 12 36 團 は皆 强して は 0) 6 問門 4 L 古 中 南 世 7 ブ カジ 12 共 界的 あ ラ カン 於 通 るから、 2 70 る、 7 0 > なるであらう。 た 13 ス 5 6 である。 者 有 人 あ V 0) 4 團 天 カン を施し、 0 る。 あ カジ 間 實際 文學 體 なす所有 12 る。 俄 彼等 0) 汽 12 カゴ のであ 4 車 實 敵 者 澤 奇 カゴ は 之 境 汽 故 妙 味 8 山

の病氣に過ぎないのである。

0 なして食物を爭ふのに 時 0 でつ カゴ 即 Nº こを 例 者 質 1 6 我先に食物を奪 は ゥ カゴ 木にぶら下つて 好 云 7 T & 今日 派 赤子 0 0 0 で 人 云 を寢 あ 間 ふやうに ひ合 異らな る 12 2 砂 カン カゴ た習 ひするの 殘 L て置 人間 子 い。かやうに人間 つ 性 T 供 0 は動物 くと自然に 0 2 は餘 あると。 るの 時 は いから出る で り見つとも好 未 だ動 あらう。 立 腕 は時 食 を 物を去ること遠か て來たの 0) 出 これ 々動 時 L て掌を握 いことではないが、 などに 物時 かも知れ は 多くの 代の フ 77 0 學者の てとを繰 ツ 7 らざる ない。而 2 グ る 1 が為 云ふことである。 カジ 其 り返すり ŀ して動物の食物を爭 B てれ めで 0 有 燕 は人間 あ 樣 尾 る。 0) 服 カゴ で、 を着 T 叉或 度動 カジ 戰 込 猿 子 爭 物 h る 供 0) 3 進 つて戦 0 やらな は 亦其 群 紳 戰 化

遇 た X V 我 6 た 想 0) R で 平 書 は は ある。 お互びに剣を下におろす。これは各々自分はお前を斬らないぞと云ふ意味である。 和 亦 叉 0) 人 12 意 結 初 間 種 交際しようと云ふのである。 味 合 め カゴ 17 てれ カゴ 12 開 な しようとした人であ 有るのであ は る H も戦 るに 禮 恩惠と平 儀 **毎をしないと云**ム思想を示してる 從 0) つて段 本 る。 を讀 康 即ち今迄 水を受け 々しなくなると云ふ真 h で、 つて j __ お にはお前 層此 汝 と云 頭 に平 儀 0 と剣を 和 をする時 ふやらな文 感を深くするの あ n 執 <u>p____</u> 理を見出 には、 つて戦 と云 る。又各々兵卒を引率した 句 3 カゴ 昔の 9 すことが 0) 有 である。 たが る。 は 武 希 、今後 ١٠, 士は 臘 即ち禮 出 ゥ 0 遠 禮 來 12 は < 儀 は る 戰 基 0) 儀 1 争を止 大 办 督 6 の中 將 万 あ 敎 にも戦 12 校 る。 0 めて了つ 離 とかが 思 乃ち前 であ 想 > 10 途 爭 ワ 中で T

神の御心に適ふ世の中になるであらう。 幾多胸つぶるゝ許りの悲劇を見せられてゐる。 拭ふが如く消え失せて、近世歐洲の文明は花と咲き亂れたのであつた。今度の戰爭に於ても、 三十年戰爭は實に悲惨なる戰爭であつたが、一度平和の東風そよししと吹き來るや、戰以の黑雲は 然しながら來るべき平和の後に、更に善き文明が生れ 我々は

られる。 たるの任の重いてとを思はねばならぬ。斯くして我々の生活は愉快なものであることを自覺せねばな のである。 を通して現はれるのである。云ふことを忘れてはならない。我々は此の事を考へて各々自重し、信者 なことをしたつて何にもならないではないかと云ふ人も有らう。けれども神の力は我々一人々々の力 我 々は今度の戰爭から深き感銘を得て、益々神の意志を行ふやらにしたいと思ふ。一人や二人そん 其處に我 々の平和がある。其處に我々の慰めがある。我々は努めて真の生活を送りたいと思ふ

世界主義 を父と子と聖靈の名 は弘く西洋 に説 に入れて弟子とし、且つわが凡て汝等に命ぜし言を守れと彼等に敎へよ』と云ふ かれたのである。然るに之を無視するから戦争が起るのである。

絕滅 世界の進步に伴は 通 の物であつて、一人の私するを許さな 入れて、 これ せねば からは世界の人々が皆同 非常な便利を得てゐる。 5 ないのである。 じやうな生活をやらねばならな 故に我々は今日は兎に角、將來に於ては斯やうな戰爭はどうし 向ふから云つても亦さらであ いのである。然るに各國互ひに相爭 Vo 30 我 ての R は 世 西 ふの 界 洋 12 カン は時 出 5 7 種 代 來 R 後 る な n 物 る 物品 6 は あ を買 る。 類

志 神 0) 精神 督教とも抵觸しない。即ち創世記 る意志と一致するものである。斯かる大なる意志が 所 志であることを告げてゐるのであ 然ら 意 則 0 意志で 國と云ふ國、民と云ふ民に漲り溢れるであらう。 がば其 志 を破 根 本 る者 は 0 る。 漫々として春 で 方法 であつて、 シ あ は 3 る。 如 1 何、 ~ 然らば 其の 水の ンハ 是れ 罪 ゥ 如 其 卽 に所謂 たるや一に人々の I < の一つの 5 溢 n る。此の 我 n 0) ない) んとするのを妨げた。 說 『神光あれと言ひ も亦之と異らな 根 須く沈思熟考すべき所 根本を一にしてゐる國 本 は 何であ 世界の 近 視 眼 3 たまひ 根本であるので に在るのである。 Vo カ>。 然し乍ら再び平和 们 力 ければ であ 1 > と威 て此 ŀ る。先づ世界の は其を意志 とが爭ふのは、之は 光 0 意志 ありき あ 彼等は心狭くし る は は來り、 此 我 と呼 とは 0 R 根 ぶ、 思 0 本 中 想 は一である。 再び神 即ち欲する 前申 は 45 て大 天 我 カン 働 地自然 大 R V の意 なる なる 0 7 基

あ

宗

敎

12

對

る

5

0

糖

念

は

現

代

0

靑

ところ 0 六 0 真 3 敎 美 0 的 6 9) 經 永 あ 遠 で 0 あ 世 る 界と 12 類 5 0 を 經 包 驗 み は 徹 中 7 す る

する 5 備 報 觀 る 6 V2 V 7 全 7 0 75 內 的 6 2 的 2 Ut im < 故 過 あ n 叉 境 的 23 0 でな 17 程 2 涯 0 離 る 致 を 13 超 ななさ 7 基 る 0) 直 ば 欲 脫 5 越 動 4 叉 機 た 2 世 現 接 於 73 督 3 S 彼等 うた Ł 實 る 揣 とな 6 8 界を實現 7 1 敎 直 知 その 方 V 世 は 清 埔市 的 V2 覺 は Z 3 秘 界 12 精 淨 は V (1) 法 な 1 冥 なら これ 生 l 性 6 0 主 6 相 12. 神 カン て差異 せん 想 < 活 質 當 カゴ 於 1 生 義 あ ¥2 を 活 i 者 た 7 8 る V L 21 0 Z. 所謂 必ず 2 誘 開 は とす 0 7 め 0 は る その 12 人間 光 彼 7 V 始 祉 0) 訓 3 0 で 2 しも 樂 せ 會 練 る 神 V 神 あ * 受容 秘 は 刺 自 な 12 Ł 3 る 0) 17 0 望 激 5 切 對 3 最 教 主 n 見 H 精 する義 とは 高 T 光 0 0 義 V2 3 神 n 0 とに 天 耀 0 72 狀 0 1 世 (1) 純 ば 6 努力 復 界 2 用 間 力 る 12 め 熊 粹 な は 6 務 1 活 適 0 m 意 的 0 12 12 直 自 3 或 6 な 主 進 關 運 而 カ> 0

> 吾 な C な 廻 4, 12 人 啓 は 3 は 12 未 36 す 6 示 層 示 世 だ 3 0) あ 滴 とな す 6 1 0 6 3 る 類 6 る 1 2 あ 0) より ところ 證 6 しとい た。これ實 るとの 明 隱され、 あ 0 出 る。 0 考を 0 來 3 たとこ 15 0 に約 將 懷 V 6 來 字 あ 翰 ろ に於 J 宙 9 傳 0 0 論 0 多く 宗 2 7 精靈 救 哲 教 IJ 0 L 學 は ス 8 12 を 古 F j 有 代 6 力

宗教 る。 來 だ 式 代 0 あ 本 Ĭ n そは 0 快 る 17 來 喧 驗 を提 すべ そは 組 適 .碍 立 る 0 0 17 から 也 信 0 72 を j 細 IF. 72 教 T る 束 父 3 仰 供 打 6 10 家庭 3 13 る 縛 は 破 73 0 0) 1 < 見 型 前 せら 以 地 L 3 進 生 人 方 神 活 何 世 6 6 0 C 7 步 を靈 する 等 玉 る 間 全世 を渇 CK あ あ 12 その る。 於て 5 る 座 0) > 0 界を 傳 造 に於 カン 17 36 質質 道 2 7 6 同 L L は 0 0) n 清 * n あ 72 7 0 2 ds に於ては 實 形 であ 拜 は 7 1 的 せ あ > 73 式 親 13 毅 6 するも あ 17 9 る 密 3 會 吾 V n 12 6 る なら から 0 A た 1 神 個 当純 叉そ 協 0) す 0 是 人 どん 間 議 6 1 12 22 切 NI 17 高 T 12 21 め 粹 信 動 は は な 尚 る 13 0 與 派 何 何 8 甚 0 る 時 的 3

制度主義か精神主義か (王)

6 決 12 他 仲 は す L 12 直 必 敵 T 3 は ず 絕 6 0) 時 3 8 長 對 とすると一 す 砂 所 6 カジ るや を あ あ る筈 利 る 理 らな 用 的 H 2 は 12 L 2 7 な 0 は n Ł 耳 < ども 相 相 12 12 調 反 13 あ 2 す 和 却 つて る 0) る 3 3 な から 相 傾 發達 0 12 反向 6 1 B カゴ あ す 25 V 共 3 る S 反 自 12 2 密 0 CK 0 U

司

200 n 攻 n 2 自 11 た 擊 獲 な 精 機 致 J° 出 信 得 關 C. 身 0 る 疆 ス 62 來 0) 仰 を 遇 は 關 0) 0 卽 あ 再 賜 立 1/2 る。 る 1 係 南 丰 宗 權 場 12 る CK T 12 IJ 新 ح 12 de 敎 入 t ス 利 立 據 5 最 0) 73 9 あ 而 ŀ 0 ち、それ 點を t Ł るてとを 返 早之を支 舊 1 內 3 個 信 7 在 L 要塞 そは 與 人 者 致 的 たと 0) す 精 0) 證 自 心 內 る神 ^ カジ 1 る 精 明 5 いる 科 態 的 为 は 2 5 L 0 神 學 12 生 力 の基 證 生 Ł 於 6 12 1 命 1 督 活 3 檢 歷 カジ H 0) あ教 永 をし で 出 3 0 史 中 1 市市 13 住 2 12 7 學 あ 來 的 3 最 す る な 批 0 3 42 實 3 判 4 > 2 2 73 及 造 0)

第 た 照さ る 根 境 據 涯 n は 12 た 聖者 於 る H 心 或は るそ 媳 は 豫言者 0 見え 眞 を 摑 3 る T を見 せらる 宗 敎 ~ 宗 感 的 覺 滇 理 8 的 超

主

6

る。 2

神

秘

は

管 他 精

21

靈 ん る

册 る 秘

精

或

は

0)

神

0) 丰

直 義

0)

合 人

6 類 式 重

南 0

る 心

ての

據

3

0 神

設

定 精

は

個

的

心

震 接

潛 融

在的

大精神との

真

0)

る 輸 想

1

卽 n 36

5 る

神 0

を

h

義

生

活 於

は 7 7

甚

L 12

3 著

相

の形

式 現代

取 12

7

12

特

4

0 視

カゴ

あ

る

於け 0

而

L

2

0

互

12

相

敵

す

る

運

動

は

現

今

敎

思

0

活

カジ

n 200

で

あ

0 方 異

て、

は

形

8

重 ず を

ず 神

制 主

度

然 至 T

要なる要

素

であ

ると

T

ム理

想を以

る 接

る。 儀 る。 個 は 0) あ 不 9 1 カジ 2 73 朋 禮 丰 13 A 題 卽 個 る 存 吾 6 放 近 t j IJ 0 同 5 Λ S 崇 か る賞 羽 在 故 A LE. h 主 ス 12 る 17 を 將 筆 は る す は 義 1 0) CK 敎 1 2 保 今 H 全 基 弱 は 0 實 如 來 0 致 無 ス 0) H なく、 本 j 最 結 n は 融 5 何 儀 12 條 督 敎 < 9 ども 以 る 質 ~ 授 後 4 73 禮 如 合 2 前 件 毅 は CK と融 最 4 3 は 0) 1 學 を 0) 0) 13 0) 0 0) 何 0) 交際 H 敎 書 者 以 哲 說 隱 從 な 敎 15 後 間 力 V 宣言 合 條 學 派 晌 3 7 題 6 m 6 9 る 0) か 12 カン とに は 舊 Ŀ 場 in 7 以 0 3 6 力 でもなく 32 あ 0) 3 Ł その 基 知 あ を 3 72 T F 0 根 72 不 敎 (1) カゴ 慧 を吾 論 る 督 求 るとい 底 73 7/ 似 0) は V 文の とその 2 弫 中 殺 神 8 敎 X 彼 T 0 合 V を信 崇 と難 Ā 理 6 は 到 心 决 る 理 米 3 13 12 3. 想 * # 著 111 楽し 6 L 外 翰 る 利 0) 肯 は 7 は 持ち 聖 者 加 南 3/6 カジ 0) 贖 界と 置 職 12 6 儀 とに 3 定 73 な 如 4 カン 6 罪 5 2 禮 てとよ 3 1 ツ V V を 個 あ それ 0 とろ を有 天 0) 方 敎 以 N 7 各 3 713 6 力 直 居 1 カン

深

フ

祉

會員 な 生 IJ 貫 Ti 命 1 せ る ス とな 事 ス F 0 敎 は 0) # n p 授 精 12 13 7 基 2 居 から 前印 V) 督 7 V 13 3 ٨ 敵 地 教 曾 こころ E 1 個 0) 員 諸 1 12 人 Ł 充 德 1 0 なる 救 足 決 12 從 を 定 最 濟 得 せ ことで 高 ^ は は 6 ~ 0) きで 發 定 現 南 基 0) 宗 2 督 翰 3 敎 0 童 體 0

6

羽

な

3

を以 当人 最 表 會 會 明 奥 T オ てとを是 史 0) To 後 的 7 臉 現 恐 2 的 言 制 とかる 質 禮 8 T 3 存 定 認 度 思 0 引 2 拜 フ 說 在 あ b 想 は 用 # 27. め 0) 0) 家 英國 接 心靈 3 難 必 條 來 形 1 す 義 3 件 3 觸 1 成 ゲ الح 3 は 歷 12 長 7 13 彼 肺 8 n n 心靈 は 學者 1 は 南 所 3 力 史 宗教 と弱 彼 72 象 3 的 說 V S 2 i X 想 b 微 # パ 心靈 羅 それ 12 點 像 73 0) it 0 ri 儀 すべ 特 Ψ 最 馬 1 (1) ほ 6 と神 别 最 あ 晚 禮 深 瓜 分子をも Ł フ 共 な 7 る 穀 1) 4) 0) 3 祉 0 思 會 1 L 公 5 2 (1) 質 + 會 公 想 公 1 Ł 0) ۴ 交通 大 敎 敬 13 平 IJ 12 的 切 ます 3 信 會 初 組 25 72 ツ Ty 拂 馬 る 123 め Ŀ 直 U. 公 神 12

す

6

教

21

2 る 碍 * < 希 超 望 越 感 لح 信 ず 1 賴 人 E 類 ž 0 精 哑 吸 柿 よ 的 統 6 de 8 親 知 しく、 b 天 手 足 12 1 0 II

ところ < 忠 ころ なる 至 加 は 力> 信 る 向 制 2 見 信 大 n 5 事 仰 度 は た。 陸 快 を鼓 E (0) た 0 Ł 人 n V) をし 樂を 3 風 12 的 B を 3 0 7 0 これ E 潮 於 0 2 歷 舞 B 0 反 ح で か 共 を重 は H 0 0 史 T 對 3 同 何 る あ 的 旺 0 17 あ 12 X 0) 盛 幾 團 禮 聖 九 あ 2 る 力 敎 他 多の 4 羅 とは る 7 體 拜 會 な ず 2 0) 承 馬 敎 てれ る 4) 12 ___ 0 る 其 公 0 新 行 對す 方 認 漸 傳 會 社 __ て、 教 毅 後 次 12 は 習 爲 12 會 派 英 他 な 會 殆 敎 る 0 卽 は ---0) 外見 雪 國 の宗 0 h 訓 求 忠 5 傾 甚 0 30 譯 衰 體 0 ど八 向 0) 12 信 め 敎 £ 派 新 會 運 4 從 42 13 を貴 カゴ なら --は 3 個 極 12 現 屬 1,2 を あ 象 年 2 多 せ 人 CK 結 る 40 3 的 形 の宗 ず 擴 Vá 的 支 1 1 力> F その 15 3 希 亞 生 め 與 せ 2 カコ 0) る 望 米 2 9 る 味 0 派 1 S 事 72 į Ł. 時 13 的 利 表 前 主 U

> す る E かぶ 出 來る。 今その二三 一を次に 紹 介 j

にし 現前 於け 十九 2 義 な 17 よ 7 係 著 12 カ 向 才 告白 朝 1 18 0 取 は 5 10 IV は る 述 ゥ V 世 對す 有 7 自 中 F. 政 0 原 ブ 後 2 中 紀の 一發的 治 す w 4 7 機 博 有 期 子 12 F V 代 派 た。 學 3 機 3 1 時 於て 說 E 論 V 時 な 12 0 る 信 代 力分 12 5 的 17 0 10 ヴ して 於て 抛 原 0) る 相 彼 ツ 1 全 柳 0 1 0 4 現 體 結 卽 科 對 棄 チ 子 0) 力 A 7 考に從 氏 犀 象 5 學 す は 3 論 果 炆 ソ 0) R 氏 と哲 利 E 3 は 0 12 個 IJ CK 力了 13 員と 瘾 36 新 6 ツ 9 A ~ な 神 學とに あ た 闸 Ĭ + ^ 殺 る 1 0) 77 6 聖な Ŧ 信 ると 彼 共 12 であ 義 ば 0 め な 2 _7 八 同 復 君 は 12 る 對 12 > > る社 百 事 哲 活 叉 幻 す 歸 る ح あ 生 V 八 惑 宗 學 0 公 活 る n (1) る 8 會 + 7 實 自 1 致 3 信 12 奉 敎 6 0) 7 す 九 仕 排 居 卽 n 仰) 入 招 る 12 F 0 Til 年 る。 樣 5 3 る 自 思 棄 科 る 0) ど 12 0 制 實 自 然 派 ク 於 想 12 然 度 2 組 新 b

ij は 傾 關

0)

織 宗教史宗教哲學 的 方 面 3 最 36 强 43 硬 最 36 辯 明 護 膫 10 72 る 0 結 は

す

n 近 代

居

る

カゴ 派 特

故

12 有

吾 15 る

人 3

は 著 幸

2

により 0 ح

てその

意義を了

各

0

爲 あ

述

家 36

筆 0

10 制

よ

9

7 義

辯

護 敎

せ

6

0

徵

で

12

度

主

0

理

IJ

敎 主 1 的 17

公共的 であ な 旅 者 は 居 多大の ることで 間 12 H 17 12 么 一日曜 は る 2 斯 程 規 ことは云 ことは 0 0) 0) 律 敎 は る。 勵 間 0) 力> 12 6 で 影響を を勤務力行に費し、 知 る人達 上 會 行 秩序と云 **d**) あ 殊 方 あ 日を巌守するの風あること を促 る者 に行 米 能を啓發する點に於て、 便 る。 るけ に最 る。 12 面 ふ迄もないことである。 國 7 12 4 4 人の 興 カジ 然るに米國に於ては 感 於てのみならず、 れども、 勿 便 3 初に異様 ふことを教 へて 論 その じた 理 宜 る。 日 居 叉 想であ に供して居る。 位 本に於 勤 鐵道 或 ると思ふ。而し 之れを以つて直ちに我が國では社會 る者 0 務 に感じた 5 その一日を全く安息遊樂に供すると云ふてとは 會 あ へて 時 いても學校 祉 は自動車若 3 間 居 に於 m 內 如何に大なる效験を爲して居るかを想像し得な 0) 日 12 3 カコ 自分はこの日曜 般 日 もこの 曜 は 於 0 ても土曜 これ 曜日を原則として守ることになって て此の日 で H 0) 47 くは馬 を休 商 る黽 ある。 日 官衙 は日本より始めて渡米した者に取つて特に著しく感ぜらる 曜 店 ___ 'n Ł 勉の 日より月曜 H 能 だ人達 即ち 車を驅りて郊外に散策を試み、又は遠く汽車 17 雖も殆ど悉く店を閉 曜を嚴守するの風は基督教會より胚胎したる習慣であ く働き能 銀行 風 は を鼓 郵 えの 日を嚴守すると云ふことは、 便物 は 出日に掛 會社 吹するもの ķn く遊ぶ』と云ふことは米國 日 何 36 曜 その 15 的 と云ふやらな處に於ては日 日 生活 その日 を守るを云ふ習慣 けて割引制度をも實行して居つて、 集 である。 西己 ち に基因して居ると云ふことは を過ごすかと云ふに、 を休 i 商賣を休 居つて、 U ことであつたが 能く働き能 面 米國 U は延 12 10 之れ てとにし 程 於 の文明 V 1 6 人の 曜日 7 米 あ は く遊ぶ」と云 元氣 獨 米國 と風致とに 國 る。 その 7 を待つ に投じ 6 人 之れ 2 居 以 の生 體 或 出 Ŀ 12 力並 3 7 12 時 活 る 0 0 來

23



米國人の生活と基督教

木 文

治

實 宗教的方面のことは到底これが研究考察を遂ぐるの餘裕が無かつたのである。 自分 何と云ふやうな事 教を談ずるの資格は無いが、唯だ滯米半歳の間に於て米國各方面の社會に接觸し、且つその 六ヶ月年であ に基いて、自分の感想を述べて見たいと思ふのである。 私 0) かが 渡米の 故國を發して渡米の途に就 目的 るから 柄 は日本の勞働團體を代表して彼の 固 にも多少の注意を拂つたのであるから、 より 到 底 充分 S に米國 たの は 0) 昨 社會 年六月十 的生 地の勞働者と接近すると云ふことに任 九 活を研究するの 日で、 聊かその方面に於て見聞し經驗したる事 歸 朝し 餘裕 たの カゴ は 無 故に専門的 月の カン 0 たの 四 日で 6 に米國 つたの 國 あ ある。 民性 る。 の如 の宗 殊 往 6 復

第 に申し上げて見たいと思ふのは、 米國の社會生活と基督教との關係である。

を爲 には、 無 米 趣 6 あ にして覺束なくも 0 では 味 あ る。 知 カゴ る 男女の 7 如 名 サ 在 九 居 何 音 0 るまいか。 に米國 フ 滅 樂や文藝美 る 會集 かを看 ラ 樂家を招 の少女でも簡易なる譜 が極 いた 0) 3 社 大抵の家庭に於てど 取すべきである。 ス 會 補 聘して數 コなどに於ては めて正 いけない唱歌 12 カゴ 調 人類 しき戒律 和 文化 を與 萬の 群 0 12 0 へ、人心 丽 發展に 集に 每 合はせて能くピャノを彈 E° の下に讚美歌を合唱する有様は到底日本などでは見られ p かして此い音 ヤノを彈じ得ざること無く、 年クリ 向 ノを彈ずることが出來るのであつて、 に慰安を 如何 ~ ・ ・ ・ ・ ・ 美妙なる ス なる闘 マス 樂趣 與 の夜マーケッ ~ 係を有する 味 そ(i)) なるも 肉聲 ずる者が 文明 0) 1/2 カン h 3 及 3 聞 その主人に唱吟の出來ない者は 力 び 知 ある。 かせると云ふ智 イの) 神を禮 布 る 教 者 廣場に於て樂壇を設 一度教會 12 0 發達 中には三四 拜讚美すると云ふや 米 に見えざる貢獻 國 慣 0) に詣らずる 計 カジ 藏 南 會 るさ の幼 0) VQ 音 樂 時 女

2 チ P M ことか 1 12 耐 には各種 7 會に於て 體運動 チ ~ 驚を喫せざる 出 ン 7 の商業による同業組合あり、 來 ラ の盛なること ブ は ない程 更に各人の アソ _ を得 である。 ンフィレ セ 1 な シ Vo 趣 ント 少年の 體 味 ンス、 譬へ 人類の 又 10 ソ 爲 __ は 利 サ ン 3 團 書 社 工 グレ 12 會 商業會議所あり、 四曲 0) テー、 點に於 は少年團 と云 的 生活 スと云ふやう譯で、日 ふことを意味 2 て、 カジ イーグ、バン あり、 桓 更に 0) 青年の 勞働者のためには勞働組合あり、 小 團 す 別され 體 る言葉も殆ど十 連 1" 為 動なることは云 本では到底一々これ めには青年 た アライ る各 和 アン 0) 會 種 [10] ス 二人 4 HIL 6 除 運 フェデ 4 る D 其 E 15 (1) 0) 他 6 盛 两 し合は 1 ある。 大なる かい 政治運 真を

會音樂も多大の

關係の

あることを思は

ざるを得

な

Vo

文化 る つて恩惠を蒙つて居る人々の為 は 或 を祝 7 期節に であつて、これ を味ふことが出來た。 スマス 養されて居ると云ふことは云ふ迄もないこと、思ふ。 一社會事業の起つて居ると云ふことは申す迄もないことである カン 光 は、 ニクリスマスを祝ふ美風あること 發展 知 景頗 一般 ふの n 0 なれば役 0 人に 13 であ 期 る いの Ŀ 賑 12 對して博愛仁慈の實施教育をして居るやらに思はれ る。 カン を視察することは出來な が爲めには種々の嗜好を凝らし、金錢を費して充分にてれを祝 多大の貢獻を爲 であ 73 所は勿論個人の 此 B る。 0 0 クリスマスは云ふ迄もなく米國人に取 ク で 加之、 y あ ス る。 ~ 更に進んでこれを考察すれば、慈善博愛の L めのみならず、 家庭も スを祝 m て居ることを等関に附することは出 して かつた ふと云ふことは、一方より見れ 街頭 自分の米國を出 この期節に於てはクリスマス・プリセ の商店も、 力了 慈善博愛を行ふ人に取つて何れ ク IJ 悉く謂ゆるクリス ス 一發したのは十二月の十八日であ 抑も慈善事業博愛事業の √° ス つては年 0 カジ 前 る。 景氣 それ ば年 米國に於て各種 來ないと思ふ。 中の 8 か 中の緊張せる氣分を緩和し、 マス・デコレ 精神その 基 大 云 ントを應酬して互にこれ 一督教 、祝祭 つて遺る。 ふべき氣 だけの なに依 利 日 B 益 0 ーシ のは 幸 の慈善事業若 最 は つて啓發 分 2 その 2 福 的 は 7 を與 3 ŋ 主 相 充分にクリ 般社 事 ンを行 ス 當 72 へて居 業 され ~Va る 12 會の ス これ 0 0

賣買と云 それ以上 三音樂趣 ーと云ふことにも因るけれども。 ふことが 階級 味 の發達せること 家庭には、客間 日本よりも遙 米國 かに輕便簡 に於てはピヤノ の家庭に入つて第 一つは米國人の間に音樂趣味の普及されて居ることを示すも 易な方法によって行 を見ぬ 12 ことの 氣 0 410 附 は n いてとである。 くてとは、 小 額 貧民階級 (1) 月 2 賦 拂 は姑 を以 は 一つの て賈買 く除外して 樂器 が出

磊落で Ł 初 白とし、 睡 事 4 つばりとして、 に食 ならず、 は、 り損 12 日 ひ損 本 彼 ねを爲さな つて且 黑 流 0) 菓子 國 和 を黑 に斯う云ふことを言 0) 又は寝る時に睡 紳 2 竹を割つたやうな氣分で を食ひ、 とし、 士淑女と言はるゝ人々 頗 いやうになった。 る陽氣であることで 决 菓子を頻張 して奥 び表 幽 り損ねたことも數囘あ 12 5 物 はすことを男子い 0 が、腹 果物を食べながら大道を歩いて居る姿體であつた。自分 挾 あ あるさとで る。 まつた様 彼等 カラ 空いた、 は あ な言方をしないのである。 面 る 何 0 たが、 事 に開 に就 唯 睡くなつたと云ふことを平氣で公言する ださつば 後には米國流に改宗して漸く食 はると云ふやうに考へて、 Vt ても 然 りとして居るのみならず、 々否 々と言ふ類であ 自分 力が 最 初に驚 或 70 時 CA た
こ 損 白を は 和 食

村 る。 及 聊 米國人 踏 び米 R カン HI 自 驚 會 場 國 R カコ 12 カゴ 0 0 ざるを得 0 男女 見聞 出 元氣快活で 兩 席 度 して洋 0) 0 は 範 勞 13 少なくとも か 働 雪 あ R 大 0 つたの たる樂 は、 る一つの 會に出 片田 0 席 週 あ の音に合 證 L 一度 舍 た の村 據 (ig) かが、 0) 會 落でも必ず舞踏館の設け はせて、 集を催 畫 ると思ふのは、 は 口角 花の如き佳 らして、 泡を飛ば 踏 彼等 人を擁しながら踏り狂ふ有様を見ては、 り舞 して激論を上下した人々も、 カジ Sn はざるはな 如 何 T 12 居 舞踏 な V 4 いことは 0 好 である。 T かと云 無い ので、 夜に入れば 自分は ふことであ その 加 州

いことは到底 隨 12 つて甚だ粗野に且 は隱 日本人とは同日の比ではない。 すところ無く、秘すところ無く、 つ無遠慮に振 舞ふ場合にも、 彼等に偏見ありと云ふけれども、 思ふが 物を言 儘を言ひ、 ム場合に 為さんと欲するところを為 y, 天真 その 爛熳であ 偏見の偏見たる理 2 7 交 すの 6 9

知能 0) る 0) 0 嚴 生活 動 ۵ 云 資本を集めて大資本を爲し、 為されぬ 大同 原因をこゝ 2 信 0 であつて、 を 0 1 の全部 教育 條 ために 極 不適用 じて疑 4 に就くと云ふやらな洪量と熱誠とがあるなら 0) め 事 た 7 め 居 は は 0) は政黨あり、宗教生活 に有して居るやらで、 基督教の 兎角 は 12 團 と云ふやうな風 る。 ないの ためには教育家の 體運 な 米 『一人の力は弱 So 國 騎打ち、 は である。 動によつて規律されざるは無しと云うても過言ではない位で、 力が與つて大なることを思は m 實 して に非常なる成績を以て進行して居るのである。 その大資本の勢力を以て堂々と其の事業を進めて行く。米國 拔け駈 事業 この カジ 如何 會 協力は の經營に當つても個人が 合 のためには教 若し在 けの ほどあ わり、 されど多數の力は强し」と云ふてとは米 利 功名を期すると云ふことが在つて、 慈善 るか 害の自覺 米の同胞 知れない。 事業も禁酒矯風 會以外に教會聯合 ば、 ざるを得な なるの が真に協力の必需たる所以を知つて、 日 個々別 米問 みならず、 加州に於ける日 題 0) 々に經 あり、 解 運動 决 も殆ど悉く團 實に兼愛の至情より流露するも に貢獻するところの 日 營すると云ふよりも、 學者のためには學者の會合あ 本人問題 本 そい 人 國 IZ 人 12 0 爲 信條 めに精 その有 封 0 體 建 如きも一つ 0 運 0 6 小異を 力の 遺 あ 樣 人の 動 もの多大な 風 は實に 12 2 少 7 社 浪 Ł よつて は 棄て 會的 費 0 額 壯 其 4 ح

26

Ξ

次に申し上げたいのは米國の國民性に現れたる基督教であ

一快活なる氣風にして猜疑心なきこと 米國 一人と交際して第一に感ずることは其の性質が極めてさ 旗

カゴ

立つて居つて、

最

初に火事を發見

L

た者

なつて

2

る。

なけ 13 で 踏 自 に男子 あ 者 民 わる み荒す者もなく、 などに於て見るが 0 n に集り樂しむ處であつて、又その芝生又は樹木其の他の 13 衞 フェ を作 生 又 は は 電 Vo 車 を 到 睡 ならねと云ふ観念が一般に發達して居るやうで をす y 1 保 權 る り、先着 12 乗るに 威 持 所 るの をも には す (7) る 都 多 別に嚴し 0 12 會 6 如き押し合ひへし合 も汽車に つて强制せずして徳義心 てつの には 者は先に進み後着の者はその 助 あ 55 力せよ 通 船 い制札が無くとも樹木 乗るにも博覧會に入場するに 路 力了 と記 發着 の上に と云 3 L て群 ふやうな意 n 一二町毎 7 ム醜 あ 集 は何人を問はず器械 體 の自發によつて自ら事 つて、『牀の上に唾をすべからず』と云ふやらに 0 雜踏 に鐵 を呈する様なことは 味 葉製の を折 を極 次に續く。 カジ 書 から か V め 紙屑函 てある。 3 取 る。 26 設備 0 る 者 芝生 6 隨 多くの あ 砂 は 0) カゴ つて 又唯 での全 るが 社 配置されてあるが、それ 17 0 表 無 V. 周 會 如 群 面を履うて居る硝子 Co 公衆 圍 何 集 からんことを期 一人街路の上に 婦 又街 サ なる多 カジ 雜沓 (7) 人 棚 ン は牀 72 フ カゴ 頭 め ラ 13 0 人 す < 12 る時 12 數 > E 睡 غ 充 シ カジ をせ is 分 集 して 紙屑を棄て ス 12 别 板を破 = 火事 合 は には 書 0 保 42 53 彼 居 波 てれ 7 等 る カ> (1) 何 n 1 0 6 る 市 7 故 場 8 號 乃 H

7 別 H 臺あつて、 消 0) n 道 路 防 沓を 7 3 所 通 12 暗 乃ち人口二十人に對して一臺の割合であつて、 默 信 行 號す する ずに濟 0) 間 12 る 12 は 仕 規 んで居 則 右 掛 IE 側 17 る。 しく行 通 行 加 州 日 は 本とは は人口 n てわる。 約三百 JE. 反對 自 動 萬と註せられて居るが、自動 が脚 車 も馬 行せられて、 その來往の烈しいことは正に筬の 車も電 車もこの 誰一人やかましく云 道理 車 は 同 (1) じで 數 が全體 わる 人者 如くであ で十 カジ -萬 格

由 を 督 知 教 悉する時 0) 愛 0) 精 に於ては乃ち態度を變じ、心を碎さ手を開きて親友となるのである。 꺠 カゴ 米國 0 國 民性 に鎔け込んで居る一つの 證 據 と見ることが 出 來 ると思 これなども自 分

所 祈 嚴 起ることも を問 規 S 以であつて、 字 稿 肅 美 二權 かん 架 當つ その 終 な あ 風であると思 は m れた時 ず、 5 カゴ る して n 威 てる 遙 ば 祈 間 12 あ 甘んじてこれ に力なると云 禱 T この 17 服し秩序 8 12 齊 整然た ると云 る その 於ては 弘 會 12 A 原因 7 0 3 長 民 根 7 1 か を重 S 13 る は これ 底 カジ では 選は その權威 × 開 秩 何 に於て宗教 ふことであ ン 始 カジ 序 *1 んずること その と唱 指 2 あるまいかと思ふ。 n あ 3 n は 揮命 幹 h 個 に服 時 た。而してこれ ^ 彼 事 規 人 るの 令に 主 77 律 12 の宗教家 0) 3 看 選ばれる 南 義 感化 秩序 であ 守 服 米國 る 0 個 0) 寸 思 てとを これ を重んずると云 つた。 委員 想を懷 00 人としては が一般社 3 は 偉大なることは云 自由 i) に凹席する代表者 を鎮 前記 見遁 6 12 重罪 南 選 V (1) る。 8 會に推重を受けて居ることの て居 國で の兩度の勞働大會に於ても、 Va カゴ 自 囚 0 n するとは を收容 これ 所 る人 る。 由 あつて其 ふことは 0 0 南) あ 36 は日本などでは容易 隨 ふ迄もない 5 0) して居 りとすれ つて 出 は總起立をもつて牧師 平 は 來 0) 等で 民衆 其 13 國 是れ る監 は共和 0) 5 は、 あ 劍 0 0) てとで 實 3 獄 (1) 例 勞力は に米 カゴ 光 などに於て、 其 を以 'n ば j 0 そい 一類くも あ 國 6 12 A 基 0 見 大なる る 12 36 カン 0) 0 て政體 世 開 0 CK 数 ることの 车 0) 米 界 個 會 海 團 船 祈 時 12 國 閱 體 76 12 A とし 稿 大 0 0) K 0) 歷 運 0 42 を 生 F 牧 社 出 6 0) 動 應じ、 て居 活 ぐる 動 會に 來 * 如 な 爲 カジ 何 28

棚 三公共的 や塀のないことである。又その芝生を保護する日本風の 念 の 發達せること 米國 0) 公園 に行つて氣 0 附くことはその 意匠が加へられて居ない。公園は各自が 公園 0) 重 12 13 日 本 流 の嚴

V

彼 は 屢 2 5 我 るならば容易にてれが統 彼 各 0 0) カゴ 々その 地 現 等 人 國 象 12 種 0 0 は 赴 の鎔鑪である』 開 眼 誠 彼 意 放 中 V た折 3 0 12 0 は勞働 徹 n 圆 た 12 0 底 各 す る家庭に招待され 階級 最 者 る と云 0 P 初 一を實現することは 協 に於て見ることが 0 力と云、 0 彼 間 たの 等 は は 吾 は 直 人 ふことが 實に たのであ ちに に對 その して 至言であ 出來る 覺束 あるの る。 種 胸 襟を R ないと思ふ。 これ亦た實に基督教の世界的 のであって、 みであつて、人種の 0 ると思 開 疑念を挟 V て心 30 現大統 からの んで容易に打 吾 我々のやうな無 R カゴ 歡迎をして吳れ 日 領 別も國境の ウキ 本 0) 勞働 ち解 jν ソン it 者 作 なる博大な 別もないのであ 氏の言葉に『米國 な 法 0 は たのである。 カ> 利 つた 異 害を代表 人種 かい る精 0 軈て 客 卽 1 0 3

儿

威

化

影響と見

なければ

ならぬ

で 國 民 h 以 7 性 は -(種 0) Ĺ 短 其 12 離 73 居ることを看 0 所 す 0 3 V 0 如 を上 幾 ~ 光 < 多 極 明 カ> 、観察し 0) げて我が 的 らざる聯 め 7 方 缺 公平 過す 點 面 來 0) と長所とを没却 國の國風人情制度を讚美する者がある。 鎖 73 3 る 存することは事實であるけれ る 時 てとは 0 見 には、 あ ることを發見するも 地 に立立 出 來 米 つて 國 するに足らな 73 0 V 觀察 と信 社 會 す ずる。 的 る時 制 O) 度 V E 4. 0 自分 である。 並 に於て、 6 に関 あ は これ る。 基 民 米 米 督 性 我等 と同時 國 0 米 阅 敎 中に基督教 徒 國 0) 0 社會 文明 を観 たる故 は この に以 察 12 並 Ŀ 3 に布 に敢 種 1 來 0) 勿 の精神が 0) 人の 缺 論 教 2 1 12 點 暗 と基 我 主 A 9 黑 カゴ 鎔け込み流 暗 面 督 張 0 田 一致との 黑 あ 42 12 中 6 真 12 水 を引 理 は 7 0 能 未 間 くの 存す だ以 0 12 く米 は 込 國

カジ 爲 めに生ずる故 で障は割っ 合 に少ない 0 6 あ

とる 旅 念は る。 6 あ 券 以 を迎 言 粗 0 2 基 Ŀ 掃 語 檢 督 暴 T は n せ と親切 な 查 3 敎 は 僅 たので ね を求 る 公 要す 0 力 は 僕 ことに 精 にニニ 15 15 め 0) 神 る るま あ る態 る 精 1,2 12 は漫 る た 神 胚 0) 社 カン 度 S め を 胎 會 例 ・と思 5, ろ憤 13 失 するは一 17 的 證 對 横 は 公共 に過 民 慨 ず 濱 は 7 * ぎな 0 0 Z は心 依 禁 水 その 精神 太 じ得 らしむべし 汔 E V がより流 松 態 カン 图 H 50 察 な 度 73 n 12 力> は EN V 感 0 出 極 ことであ n 知らし 謝 頭 出 め を禁 7 公共 カゴ 1 7 た 來 謙 びべ 10 桑港 る。 らし 0 遜 的 得 0 0 精 カン た たと 12 か あ 3 神 らずと云 力。 Ŀ 0 る 0 0 て且 0 陸 カゴ ^ であつて、 盛 たの ば彼 0) なることは質 際 2 つ親 2 6 2 0 0 カゴ あ 時 國 0 切 如ら官 の官 る。 移 6 而 0) あ 民 収 る。 日 官 調 更 てて 21 尊 本 並 係 0) 驚 民 自 如 3 12 72 0 5 卑 今 きは 分 0 稅 る 社 0) H 關 カジ 會 外 警部 陋 已 官 渡米 如 的 な 習 12 吏 何 公 n は 大 0) 補 0 12 共 0) 是 加. 折 高 F 0 0 態 非 寧 官 觀 30

カゴ 量 四世 あ 2 併 3 してれは米國なればこそ斯かる異人種が一國旗 これ チ 自 ことを 的 分 雜 12 36 大 駁 加 度量 亦 ŀ * 2 過 た 2 る 極 す あ ての 0 存す 12 5 め る 2 朝 ことは 說 居 鮮 ラ 12 ること テ 支那 る 同 Zb ~ 出 意 0 日 あ 來 す 6 であ 本人、 13 る 米 Vo 國 る。 人で ス 13 フィ ラ 米國 排 隨 ブ あ 日 つて y あ るけ 問 は ッ 6 實 題 F, 勿論その n 12 あ ども ~ 猾 世 5 人等 の下に統一され 界 太 排 人 0 間 あ あ も入り込ん 更 日 5 12 5 12 問 人 W 他 題 種 黑 る 0) 0) 的 混 人 ___ 根 て行くので、 差 6 南 合 面 本 別 居 3 12 的 又は 3 6 於 原 銅 0 あ T 因 偏 6 色 る。 米 は 見 あ 人 A 國 0 0 あ 7 人 種 73 12 7 6 2 的 V グ 世 偏 2 頗 界 見 X P 3 的 サ 0 あ シ 17 0 ると 無 0 大 ソ = 包 度

若

し他

0

民

6

南



男女兩本位の道徳

性の相對的本位及び社會

條

忠

衞

兩親 母 精子に對して卵として自己の立脚地に獨立して居る。 有して居 以後には、 這入つて居るし、男の身體には女となるべき形質も這入つて居る。けれども一度女となり男となつた なるので、男の身體 で子の身體を作 n では とから同じ分量を享けてゐる。父から享けたのが男性で母から享けたのが女性であるとは云 が子で から享ける同 等な生物 な て、 Vo あつて殆ど親と同 生殖 けれ 且つ各の自己本位を には る遺 細胞は卵と精子の個性に分立するから、異性の形質は決して現はれ得なくなる。それ じ分量の形質の中で、若し子が女であれば女性の身體に要する形質が ども此の自己本位は絶對的の自己本位ではなくて、 雌 傳 に要する形質は體內に深く隱れてゐる。それで女の身體には男となるべき形質も 雄 の形質は父母 0 別が 一な個體になつて生れて來る。 ある。そして卵と精子の 爲 から同様に享けるので、男女はその個性に於て先天的 して居る。 即ち卵と精子とは各の 精子は卵に對して精子として自己の立脚 雌 雄 これを遺傳と云ふのであ 生 殖 細胞 から 獨立 相 合 對的 して新 した の自己本位 本體であつて一 個 る。 體を發生す 遺傳 現はれて女に 0 に同 あ 質 る 地に 方 價 ない。 卵は 0 值 獨 33

的度 を見 看過 と謂 を遂ぐる j る。 12 形 國 ることが ることを否定する者では無 化 敎 式 の 青年會 量 勢力が to することは出 併 長 は 會 E 識者 一と襟度 和 し乍ら 12 止 所 是れ カン 禮 ばならな 出 る のみを見 分化 0 0) 拜 0 來 一考を求めざるを得 退 とい 事 卽 てれ す で な V 5 業 發達した現象とも見らるべきである。 る あ S 1 至 基 來 So 0 人の つて 0 カゴ て我 東洋 督教 みを以 つて 如 な であ S 基督 何 多數 其 カゴ 12 は 0) 0 0) 國 る。 自教に於い 盛大で 感 敎 つて を貶 精 Få いけれども、 實に 島 化 會 婦 神 思ふにこの 國 及 直 9 人 は する人と同 とし 我 ない所であ ちに 物質 CK あるかを見よ。 內 H 及び老人で 勢 部 カジ る 1 國 力 社 主 米國 に老人婦 0 人 0 會 義 種 その長 文明 (1) 社 的宗 2) のた 9 0) 學公 一會的 基 4) 人は世界 12 人の 督 0 教 め 過 所をも舉げて悉く短所 終 ~ 擴 社會 的 て、 12 教 に陥 き長 るべきかと云ふ差し迫つた立場に於て、 張 残されて 征 VJ カジ 13 的 都 活 衰 有 服 的 0 所 事 會以 あらずして何で 爲の 動 されて た人達であ ٨, 0) 一業义は 72 であつ カゴ 眞 外 居 青年の出席 りと断ずる 諦 般社 42 ると云 居る如 を理解 T 國際 禁 酒 60 會 日 的 連 17 く言ふ人 ふこと 0 L 本 あ 平 動 は 或 得 擴 を見ることは 如く言 は今日 る 和 0) 尚 張 は な 力> は 熱 如 3 は早 米 V 何 0) n 沙 國 人達 人做 進ん 殊に に盛 如 T 計 南 0 何 H 居 皮 る 基 10 \$ 0 その 12 大 12 想の 少な ると云 督 \$ ことに 世 摰 0 於 勿 教 0 界 烈 (1) 解 T いやうであ 論 は 7 的 今日特に K 基 今日 10 る ふことを 釋 は H 督 0) 0) あ カコ である 耀 恰 贊 發展 を見 世 20 敎 15 た 36 成 力 10 米

に戻るの を生 性 物學 る。 0 0 7 舶 由 個 居 唯 物 來 職 性を分類して、(一)生殖的 300 基 だ に社 ので、互に自己の 分 は してねる。 偷 に循つて進 礎より肯定するのである。 何 これ 理 故 會が男女に別れて居るのは生物學上の謂ゆる分業である。其の目的 に追 學では、 カジ 道徳上に於ける男女の分業である。 そし 水する んで行く。 人類 7 個性 種の永續 かは哲學上の問 は男女に分業され 的 其の意志の自由は男女同 一職分を發揮することが分業の本義である。 個性、(二)精 は無窮的進化を追求する本能に そして我 題であ 神的 人々は此 て個性的慾望を持つて生活 るから、 個性 の慾望を意識 女子は女子の の二種とする。 生物學又は倫理學では之れを 一であつて、 基 して有機 個 いてゐる。そして其の 性的 互に侵害することは して居る實 職分 男女道徳に於ては此 的 12 17 「吾人の以 は種 循 N 在 の永續を圖 男子 問 道 6 はな 德的 ある 分業 無窮的 は 男子 生 ことを生 V る本能 活 0 0) 0 男女 趣旨 0 を行 6 進 個

ばならない。 的 0 カ> は 產 先づ其 12 統 女子の根 12 22 して は根 あ の生殖的 る。 生 本 産兒は自己の大なる權利義務であり、 女子 活 本 から出來 個性 的 しなけれ は 天 心職 この から考察して見るに、 は正にこの一事にあること瞭然である。 ない業であるから、全く女子の ばならな 自己に 0 S. 3 将 廼ち自己の 有 な産兒に對して、 女子の場合では、女子個 之れを發揮することは大なる尊榮であり、 個性 獨專的 を理 想化 男女分業の慾望を公平 事 女子の女子たる個 して道 業である。女子の先天的 性の第一位は産兒である。これ 德的 自 覺 0 下 12 性 17 意 0 精髓 發 識 特 揮 L 質 7 は 質にて 最 13 0 善 H 有機 あ n 0

に懐 立し 0 殖 る。 發生 それ 牲 て 爲 一學的 居 と云 しようとする 12 供す 故 る。 2 原 生物の 理 相 3 故 12 對 0 12 胚胎 的 6 絕 3 些 目 共 對 無く、 的 む生 してゐる。 同 的 0) E 目 12 殖 的 的 精子 めに互 12 行 12 於け 爲 於ける自己本位では 男女は カゴ は に自己を犠牲 卵を自己 る自己本位 兩 本位 相 對的 0 0) 目 本位 絕對 的 6 42 か 77. 供するの 目 ら發 る。 の下に道 なくて、 的 之れ して 0 72 徳上の であ を稱 めに犠牲に供 70 相 る。 辔 る。 して 的 桩 卵 B 利義 男女 は 兩 的 精 本 17 務を固 0) す 位 F 於ける自 又は るの を自 道 德 有 6 的 己 相 して 己本 關 Z) 0) 木 係 無 絕 位 2 は 是云 位 對 る。 この 6 生 的 3 3> 生 物 0) 0 物 12 で 0 舉 生 耳 的

はその な 女 とする。それ 在 個 個 を 人 男女の 為 0) ば は あ あ ح د 男女の して て社 個 で、 る。 社 る。 人を作 に進 會 男女 性 會 具體 居 個 3 で社 は個 結 化 Zo o カゴ 離 人 り出 と社 と云 か 的 合 カゴ n 實 6 あ 會 30 故 7 人 5 事 在 會 は 12 0) あ 存 男性 系統で 5 男性 社會 ば社 相對的單位である。 6 とは 在 創 は L な 男女 しと女性 しと女性 雕 作 生活 75 會 Vo カゴ Vo か n 的 る。 2 V) あ E (7) E 0) 為さ 男女兩 祉 意 存 5 カゴ 個人 結 味 大 會 在 系 發展 結合によつて 合して 10. は を有 L 15 は 性 統 V 個 する個 個 社 男女雨本位の道徳は 0 Vo 6 カゴ 人 を離 會系 性 あ あ 個 人 る。 八は實在 る。 男子 人を作り出す。 的 統の一員であ 結 \$2 人であ 男女 新 祉: 2 0 合 では カゴ 3 會 存 なる個 と謂 つて。 社 あ 在 0 9 なくて抽象的 L 會 祉 て始 へば個 13 會、 人を作り出して絶えず で る。 個 Vo. 絕 あ こ > に 女子 200 人 對 砂 個 0 人の 個 7 的 の意味 社 淵 人と 人 個 分裂には必ず男女の 0) 觀 あ み 集合であ 源 會 人 念 社 0 は 0 あ て社 9 12 會 を有 て居る。 社 祉 とは 會 會 過ぎな 會 社 3 0 は るが、一 新 會 具 る個 單 あ 抽 位で 陳代 體 9 Vo 象 あ 的 人 的 9 そし て始め 兩性を あ 觀 12 6 社 步深く考察 謝 9 念に 會 相 は 7 對 0 7 過ぎ 個 的 ζ'n 0 A 實 7 男

を作 と智慮とを以て第三者の は な る。 ることは大に肝要である。 勞力を省 家政の根本方針は妻として自ら其の大綱を律して置いて、後は婢僕を用ゐて代理せしめて自 家事に於ける個 くことが 出 手を多く煩はさずに、自ら家事を統 性 來 る。 0 統 單に生殖的 一である。 又その 夫に一 その餘裕を以て精神的 個性の忙殺の故を以て精神的 部分を擔當させても宜し 一して精神的 個 性の Vo 個 發揮に力め 此 個性の發揮を爲 性を怠るは 等は 决 しして個 n ば可 未だ女子 し得 性 い。又敏捷 0 总 る餘裕 りで 個 性

*

知

らな

v

者

6

あ

る

ふ生 摯 兒 は 年を通じて産 そこで營養攝 ると云 た子を養 同 カゴ 0 次 iz 行 起 為 殖 の犠 男子 つた。 0 ふてとになった。 的 爲 め 事 6 12 個 X 性 牲 務 あ 0 夫 衣 カジ 的 る 年 生 取 見哺育家事の生殖的 に鞅掌して數年の間 の業 から、 0 殖 食の 分擔された。 行為を以て其 は 間 的 妻 その 子 は 個 資を求 男子 性 に生活の營養を供する 全部舉げて之れを男子が を考察 身 極熱でも極寒でも斯うして妻子の營養攝取の為めに自由 は之れ 體 めることは固 0) 女子は身體 の勞務 自由 するに、 を神 個 2 で犠牲 性 に辨濟する所が カジ 聖に祝 に獻身して行くのであるから、 之れは より 爲 0) 不自 めに没頭するの 17 不可 為 供さなけれ 福しなけ めに、 由 分擔することに 女子の生殖 能 な なければならない。 6 爲 朝 あ めに n は は る。 ばならぬ義務 自 みならず、 的 星を戴 ならな 己の 然るに男子 個 性 な と相 0 衣 V. V た。 食の て家を出 其の 此の カジ これ 對 的 此 は 資をすら得 あ 因つて男子に 犧牲的 行 る。 12 極 は男女の 0) 營養 成立 で夜 爲を再三反覆 め て自 そして分娩 を東縛 行 76 攝 して居る。 星を 分業 取 由 為 ることが 13 は營養攝 に對しては 0 7 戴 身 に基 Ŀ n 12 體 して、 に續 て家 一く人 女子 男 6 出 子 か 取と云 S ず、 て哺 生真 は産 12 0) る。 歸 職

232 る。 事 天 する 子と 乳す 子 息 狂 は 的 は う 道 故 個 哺 見 7 0) す 哺 兒 男子を以 性 德 乳さ 12 た 育 出 居 義 0 家 を中 共 的 め は 12 3 7 は 務 7 ることを自覺 責 父 せる め 12 n は IZ 事 適 個 8 0) 心 任 其 砂 る。 甚だ矛 怠 は 7 性 女子個性 權 て地 妻 とし を負 0) 0 な 的 つて居 利 ことは てれ 遺 その 目 カゴ V 職 義 を代 は 身 主 的 傳 盾 分 務 T 起 せる女 率 は なければならな 的 體 0) 0 15 已に女子 であ を達し得 L とな る 人類 惡 又は 部 かざ ひなけれ 發揮では. Ŀ へることの 生 疾、 には 分 5 つて、 精 性 0 殖 0 0 7 なか 家庭教育 經 發 であ 卧 ばなら 事 神 0) 無意義なことで 萬端 業 驗 とし Ŀ 現 あ 個 自ら之れ つた狀 出 12 る。 る 0 は 性 0 いが、 カジ を采 來 基 不 决 ての を忘 な 女性 現 15 0 健 して V So 其 女子 象 V T 不 態である。 康 却 配 を す 6 性 ねる。 他 完全、 な女子 女子の n 0 L 行 哺 全體 12 は る あ 質 0 た あ 使 育 0 つて 0 ある場合 個 る。 個 怯 しなけ 12 產 良 とは、 的 眞 * 性 性 カゴ 儒 就 其の 藝術 0) 見と哺育 統 0 を怠 自 人 相 者 T 1 然 男子 であ 0 で 6 __ n する個 12 原 惡疾、 この は 面 ば 0) 上 9 あ 同 は て居 結 には る。 因 な 6 0 つて、 様で ならな 產 Vo あ 果 に連絡して起 此 カゴ 奇 で、 才を 先づ食事、 の責 自 兒 性 2 な 不 自己に あ て、他 己の 女子 適 と哺 唯 0 カゴ る。 S そこ 當な は発れ 全的 發揮 5 だ産 人 罪 0 格 哺 あ 育 50 藝 事 る 惡 兒 發 面 す 大 者 育 0) 女子 被服 る。 るも 時 力 現 12 術 罪 カジ る女子 個 で は 於て産 は 12 其 社 性 0) 6 あ 自己の 12 次に 女子 於て 政 會 な あ 12 0 る。 0 0 0 治 大部 衞 從 生 的 る。 V 2 之れ 殖 始 兒 憬 生 生、 必 家 個 境 事 不 上 然 遇 1 め 自 九 的 分 性 具 哺 0 n 教育等 を占 的 を他 だ子 的 は 3 7 育 活 個 0) 政 自然 現象 女子 真 治 破 必 體 動 0 性 0 壞 要 子 質 12 0 正 個 12 12 1 0 的 性 從 12 對 7 0 は 0 0 12 0 12 部 居 家 南 後 な 女 女 8 2 哺 す

とな

つて

現は

n

72

けれ

ども家事

は産

見又は、

哺育と異つて、

其の

大半を第三者の手

に委任することが

男性 來な 在 神 0 0) 7 心 意 兩 理 的 力を内 性 味 い性 者 能 學 0 を琢 に於て藝術に於て政治に於て法律 精 的 に於 力は 9 F 磨 能 含してね 能 思 攝 0 神 その 力の均等なる發達によつて我 て結 想及 事 を有し 取 的 實 12 技能 なけ 容 で 0) びその み没 る。 7 あ n 貌 を た男女の人生を見るのである。 70 る 琢 ば 身 それ る。 磨 な 表 體 から、 頭して居るのが 現 5 0 しなけれ で女子 此 0 如 な 男女道 技術 V < 0 技能 12 男子 12 は là 具 產 體 德 的 於て大なる逕庭を生じ、 ならな 男子の・ 見哺 經濟 普 個 論 4 R 性 汎 は其 亦 た營養 は 性 S 育 の文明 に於て、 人 家 を持 0) 互に男女の缺 生ではな 料 事 心 理 攝 12 0 理 と幸福 男女 家庭 學的 從 7 洗濯 取 事 2 0) 勞働 んは V. i ることが 基礎に立 とは増進され 40 12 於て社 な 各の 0) 漏 各自 を補 から Jx. 12 沒 5 其 從 23 解 脚 事 會 天 頭 充 技能 し助 しな 其 に於 賦 る。 するの して居るの て行く。 0 (1) 才 此 から、 好 的 7 成 であ 國家に於て國際 能を發露 T 個 0 して、 所 性 具 30 カゴ 自己の を發 哲學に於て 體 12 始 誓汎 女子の人 向 然る時 揮す 0 B L 7 7 性 好 -1 女性 耳 有機的 0) TS ら無限 科學 所 に於 に眞 は男女の精 生 相 12 0) 違 では て、 精 12 12 似 间 カン 於て 眞 5 神 2 0 0 73 7 出

一男子本位

本 子 は法律 位 男女 無視 EZ が分業に從事して、 によつて無能 3 して男子は女子 0 6 あ る。 家 力者の地位 غ 族 主 兩 女子は産兒哺育家事 義 本 位 0 に置 道 0 地位 德 は かれて在る。 男子 に立たず、 本位 に當り、 0 女子 如何 南 る 男子は は なる社會を問 男子 隨 0 營養攝 7 42 隷 我 屬 カゴ はず 邦 以 L に當 72 0 場合 男子本位の 社 會 つたに は 12 男子 は 之れを稱 係らず、 結果 本 位 は 0 あ 男女の 女子の 7 男子 女

つて、 柔順 あ 生 良 識 S する義 主 T なり青くなり犠牲 は又妻に從屬して犬馬の勞を務めて居る奴隷でもない。 客なく上下なく、兩本位なる人格の實現である。故に妻は夫に從屬して養はれて居る牛馬 を防衛 0 2 殖 0 行 低 に牧 恵 病氣又は死亡の場合には殊更に自ら營養攝取 的 カン 生殖 級 つて 12 個 なければならない。 男女道 取 そして男子の營養攝 場 0 性 する自然の結果であって、 つて のた 居 的 のやらな家 n 個 0 居た。 德的 72 と云 性 めに全生 事 0 的 相對的 生活 には今更驚歎せざるを得な ム態度であつた。 奉行を爲すことになつた。 夫は 庭 の真 0 涯 一隅に 妻を飼養して居るの 獨立者である。然るに舊道德では夫が妻に營養を供する行為を牛馬を飼養 を犠牲に供して行くの 此 相であ 取の の獻 雌 不死分な場合には女子も自らその一部を分擔しなけれ 身的犠牲に對しては、 る。 女子の 伏して居た。 女子は亦た その犠牲 臨時的生殖個 で、 そして數十年 その の價値 餇 であ の任に當らなければならない。 養され 自己の る 不平等なことは素より言外である 女子も亦た衷心 は同 カゴ 性である。 て居 任意を以て放逐する權 男女の人生に於ける生活組合 一であ 是れは男女の個性的 を通 る牛 心て此 馬 0 斯うして男女は 2 0) 義 の生 カ> 苦樂 に解 5 感 殖 L 0 謝 的 是れ 利 價值 欲 T する 個 望 互に獻身し合つて 性 カゴ 15 何 あ 所 8 0) 0 有機的 は カジ 事 る の二委員であ 同 カゴ た では 家の營養不 め ならな 無 36 カン 5 道 疑 6 12 H 統一で 德的 没 あ 22 は ずに 有 る ばな 頭

38

ればならない。 IJ 男子と女子とは精神の意識作用に於ては同一であるが、内容に於て異なる分子のあることは實驗 Ŀ は男女の 生殖的 此 0 精 神的 個 性 個 に就 性 は技能 いての考察であ の形式を取つて現はれるから、 25 から 今度は其の精神的個性 技能的 に就 個 性 と稱 いて考察して見なけ することも出

化 であ する ので 花柳 あ る。 病は其の案内 隨つて男子は淫亂に走る。 者であつて、 人類 淫亂 の生命なる卵と精子を刻 は實に男子本位の結果 々に毒殺して行 であつて、 亡國の原因たるも

四女子の獨立

動 叉は男女共 T 獨 立 6 反抗 そこで社會の識者は此の男子本位の制度には絶對に反對する。差し當り女子の有 あ を大きく分類 る。 0) 聲 男女兩 通 を舉げた。是れが女子の獨立である。 の事務 すれ 本位の道徳を目 に携はり、男女兩本位の制度に立たんとする運動 ば、 (一)精 神 的 とし 0) 獨立 て、 或は文藝の上に或 (二)經 即ち男子本位の覊絆を脱して、 濟 0 獨立 シニ は政 12 歸 治 す 0 0 上に現 る。 あ る。 此 は 分業の n 0) 72 識者 連 動 は之れ 趣旨 今この は 實 に 12 女子の 循 に對し 倫 理 U 連

元であ 立 居 72 そして良 720 である。 72 カゴ 知識 づ其 ない霧 斯うして女子は精神に於て全く男子の奴隷になつてゐた。 男子 3 即ち女子は男子の従屬者であつで結果である。 入 感情意志に於て悉く男子を模倣 カゴ 0 精 である。 は 神 また 知識 道徳上に於ける意志の自由 0 女子 は彼 獨 爾來女子が身體 立 0 0) 12 知識 就 女には無上大法 いて考察 は浅薄 なも の自由を束縛 して見よう。 の誤 であつて、 して來て居る。 は精神の 謬 15 一作用 精神と身體 2 されて居たのは、 総て 0 しと先決 古來世界の女子は男子の精神を標準として居 の知 女子は殆ど男子の著述 であるから、 して とは 調 (V) 倉庫 人格 一々示 女子の人生觀及び宇宙 つまり精 精神に獨 0 の二相 教 あ すべ 9 であ 南南 大哲學 ら性 (1) から 立 がなけ いつて根 束縛 みを愛讀 質 され 0) として *1 本 觀 76 に於 して 2 は は男子の糟 居た 身體 ては 解 用 2 から に獨

識 力と知 ども男女の間 女子は して なる。 ならば、女子は卑 辱され して遊戲 壁の な あ な社 平等 翻弄して之れを任意 以つて愛憐を乞はね が淺いてとを認知して居り、且つ性慾の感應され易き境遇に置かるゝ點 る。 縛となり虐待となる。女子は自由を男子に依つて興 間 は ても 男子 識 卑 男子 拳を以つて打 12 破 を呈出 を性 的 V 男子本位の道徳の嚴存してゐる間 火壌され 目 に玩 其 弱 は女子を專有物として處分し、之れを賣買する。 は 擊 慾の n 者 には性慾が横つて居るか 根本 する。 することが 一弄されても仕方がない。斯様に不正不義、悖德汚行 であ は て、男子の専斷によつて決せられる。 しくて 上に利用して、女子を支配し强壓する結 必然の成 から尊く見えて、 ると云ふ根 我等は目下この社會の渦中に生活して居る。女子の虐待 たれ、足を以つて蹴られ、 に遺棄することの出來る權利 ばならぬ も猥りに之れを束縛し無法に之れを侮辱することは爲されないであらう。けれ 出 行 來る。 で 羽目 **d**) 本的公準を立てゝ置く以上は、女子は男子に如何なる亂暴を以つて汚 る。 斯様に女子を束縛し虐待する結果は男尊女卑の弊習を馴致するの に陷る。男子に對して渾身の犧牲を捧げ 女子は根 若し男子本位 ら、男子本位 は之れを防遏する方法がないのである。男子 本 髪を摑んで引摺られ から卑しく見える。 がある。男子本位 の道徳を設けて置けば最大多数の の道徳に於て男子が擧げて品行方正な男子であ へられた限定内に於て求める境遇に陷る。男女の 女子 果 は 人格の になる。 一箇の の標的 ても仕 の結果 男子は矯暴になって女子 ない牛馬 奴隷に化 女子 から、 は男子より にされて身は極 るに 方 は斯らして驚くべ と同 して、 カゴ は朝夕邇 反し な 容易に男子の vo て、 視 男子 的 男子は自 され く我等の 地 箇 は 彼 12 位 尊 端 T は 媚 0) 、き不健 まで 生 4 い强 は卑屈 彼 から び撃 近所合 低 仕 己の權 殖 0 者で < 淪 女を 色を 方 知 12 0 全

奴隷に

妻を 格の自 女子 0 子 9 母 或 女子 張 難となり、 子 は 職 著しなつて居ることが最大の要件になつた。女子は擧つて教育を受け、 6 は 樣になった。 か ñ 經 身 0 ح て夫を 業であると云ふ思想になる。 0 あ 此 夫 6 路 生 n は 濟 12 由 カン を道 殖 的 頭 濟的 男子の ら最 妻を敬 を 能力者 社 育を施し 左 選擇することになる。 男女は に迷はない女の 的 一右され 德 曾 夫の 個 獨 近 此の 營養攝取を 性 的 的 立 愛 21 を擴 12 長年に至るまで容易 收 至 することに と認めるに 12 である。 自覺 は藝娼 ない方針を取った。先づ第 て職業的 り生 不完全な經濟社 入を補 張 活 して産兒哺育家事 L 分擔 た 腕を示した。その結果、 妓 そして生 難 助する他人事では無くなつた。 女子の 豹 歪 能力を養ひ、產兒哺育家事 0 0) 跋 9 す 加 變し、 その 扈 結婚 るた は 活難 爾來 有 3 會 となり 男子 結 めに、 に隨 献 0 に結婚が出 に處して行くには、 要件 0 者 果 の結果として男子の結婚難を生じた為めに、 專君 0 は輓 は CS 本位を棄て 細 諸 は第 夫婦共稼 外に營養攝取 男子の 的 一法としては持 近 種 君 態 12 0 來ない狀態に陷り、 一に男子 至り、 弊害 夫の 同 度を改める 營養 0 の必要を感じた。 > 經 薄 兩 ž 0) 餘暇に 攝取 女子 これ の業にも當り、 對男子策として結婚 命 生 カゴ 本位 濟的專橫 となり、 じ、 經 参り 濟 は カゴ は と共に、一 に妥協する 男子の 經濟 益~不 一臂を振へば假 的 先づ結 財産を以て夫婦財産 强 に對して大 女子結婚 的 者 隨つて女子の獨 これ 充分に 强 營養攝取 6 婚 夫の 結婚前 者 家 あ 0 前に男子 なる ることになり、 は 美 0 泉を生 收 經 な 自 0) 0 なつて 夫は る成 大敗とな 己に關 令夫に遺 濟力に 正當防 に或る職業 0 入に於て 不 į の功を博 共に 身者 來 妾を審 充 Ŀ 同 衞 する 制を設け よつて己が人 720 分 12 42 棄され 女子 12 76 カジ 0 續出 金品 原 個 そこで女 12 經 事 る行 0 因 性 就 濟 カン 72 ら結 する 結 する 夫は ても 財 0) 12 的 擴 多 爲 能

238 子 L 代 自 る。 期 で た若 己の 0) され あ 7 質 6 同 女子 知 では 2 る 0 0) 干 欲 る。 つた。 識 n た 0 望 0) 0 カゴ 75 女子 めに泣 を逐 然る 淚 扉 Ξ V 從 今日 は は は は 决 閉 12 行 0 知 爾 4 して先 女子 最 50 50 する積 道徳などに 情 來 0 盡 近 女子 0 意 女子 L 42 n V) 0) た結 至り、 天 弘 極 均等によつて完成さ 0) 批 的 は 的 カゴ 精 よら 理 6 評 戀 果、こゝ 0) 神 この 力と創 は 意 體 性 は 益~助長さ な 志 人格 此 12 男子 S は消 闕 0) 10 こ菱體 累代 造 H 男子 力とは 飜 0 波 1 精 然 L 感 0 とし た。 意識 n n 神 本 情 遺 的 て、 位 枯 傳 12 を内容 激 て男女雨 奴 カゴ 理 意 渴 12 唯だ 隸 性 致 識 L 由 た。 L は 來 0 0 易 一後達 常 とし 地 た 屈 く意 する 本位 その 位 境 從 12 と犠牲 て居 12 遇 頭 志の 男子 は 0 淪 F 結 此 から禁壓 道 落 果 る の三 游 0 0 徳を自覺した には甘 は 淚 とし 弱 模 一要素 T 6 倣 な され 全〈 居る自己 4 7 んずる忍 點 的 感 3 0 は 精 後天 情 72 權 柿 而 は 爲 衡 敵 で 0) 0 め 耐 的 L 病 8 12 あつて、 12 カゴ 境 T 力 習 得 的 曲 女子 遇 慣 知 知 12 (1) る 成 8 發達 覺神 2 識 0 3 ことに 12 首 强 女子 0) 結 n 於 9 經 視 < 12 果 H 72 カゴ t 後 本 る 7 發 退 9 天 精 女 達 现 化 あ 性 7

3 0 充 獨 斯 從 Ś 6 立 は勞働者の地位に立ち經濟的奴隷 屬 6 者 2 あ 7 7 1.2 婚 る。 一方で精 なる 兩 難 2 本 位 獨 0 5 < に並 身) 原 神 因 的 6 脚 0 は 欲 經 して 望 12 濟 (一)經濟 0 的 居る 獨 由 强者 來 立 36 Ľ 3 弱 0 -[的 計 の境遇 香 で 2 從 2 あ 0 る。 屬者 12 差 結 る に陥 別 もと營養 果、 カジ 0) 不 カジ 一方で る。 男子 生 利 じて、 12 結婚 本 攝 位 する は 取 夫は 物質 は 63 は П 13 夫の 自 資本 覺、 n を糊する就 的 ば夫 分業で 欲望 (二)生 家 0 は 0) 地 經 あ 獨立を企てた。 5 職 活 位 濟 であ 難 12 0 支 產 立 (男子 配 つて 5 兒哺 經 者 濟 育 0 結婚 營養 これ 家 的 專 事 h は 妻 攝 君 は カゴ とな は 妻 取 經

神

0)

獨

立

7

あ



地雷 夢君を想ふ

深 田

康

算

づ其事 亡くなられた 君 0 れたと云ム報知に接したのであったと云 あ 方が真に近 往 カゴ 種 0 京大英文科 咄 重 復 意外であつたと感じた 0 有 の意外なのに驚い 嗟 も可なり頻繁で V 病 り得べき事件に對する豫期が適中した時の樣な氣持が 0 かいかも知れね。 間 0 12 と云 床 に在學中の上阪 に就 僕は先づ意外の感に打たれ ム詞を聞 力> n あ た。 7 つた ねた 0 S 僕は其 は、 た時、 君 前の年の秋の事件に親しく關係 カジ と云ふ事さ が島地先生 君が 年が 先づ意外に打たれたと云ふのは當然であらう。然し本當を云ふと、 前の 改まつて 病氣になられたと云ふことを知らずに居て、 年の ム前後の事 が逝かれましたと云つて、 も聞 秋 たと云ふのが先きか、或は左様ある から に事 カン 件が は、 ない。其處 情の會得が出來て後に 例年の あ つて雷夢君 した僕は、 へ突然雨の降つてる日の あつたと云ふのが真實 年賀狀 と度 態 のやり取 固 R R 通 起つ より君がさうならる 逢つ 知 りをした文け に 12 T 來 感 かも知れないと云ふ かられ も居 じで 病氣 カン 朝に、島地 た た時 あ 0) つたと云 ために 寸分らな 6 僕 叉手 あ 君 は 事 2 死 カジ 7 紙 先 3

女子經 て女子 婚費用 を調 濟 0 獨身者はまた男子と同 0 獨立 へ、且つ結婚後に於ける經濟的手腕を實際的に養成して置くことになつた。 である の職業に從事する現象を來 した。 此等が 結婚 難及 CK 獨 身 此 12 0 原因 間 12 する あ 0

ので、 で此等の諸問題を道徳上より縱橫に批評せられんことを希望する。 男女 業工 私 女子の 著述家、女醫、產婆、 勞働問 農業では農作 實業 は す 此 場工 カジ 12 > 男子 から 真 獨 題を生じ、勞働 從 12 立 0 I 業に從事し、 事 於 の吾 女子 運動 此 0 Ĺ て女子の營業と勞働 0 意 園 々を傭つて言はせて置くにも及ば 邊で擱筆し 獨 味 は 藝家畜蠶業等の 經濟の獨立 男女兩 立 12 がて性 連 官公吏では判任官事務員技 動 組 看護婦、速 本位 12 合の團結 て置く。 關 0 を計るやうになっ 相 L の道徳に向 て道徳上 本 雇人となり、 3 位 記業者、 となり、 誘致した。 そして此等 一の道 より尚 德 つて其 政治 家内勤務等に從事 に立つべき人格者であることは事實の上に現はれ 商業 た。 資本のある女子は株主となり、或は獨立營業者 は 0 0) 問 資本の A5 問 詳 倫 題 手とな では會社 に移 ことであ 題 細 理 運 は 12 5 女子 互つて批 ない 動を進め、男女道徳が次第に完成されて來て、 つては女子参政權の 0 諸 女子は勞力を出資して勞働者 る することに 自 事 君 カン 由 務員又は 6 評して見たい カジ 職 自ら講究 業 願 6 はく は學 15 店員となり、 0 すべ は 校教 運動となつた。 72 大方の姊妹 0 であ き間 師 2 n 題 る 藝術 工業では家内工 カゴ カゴ 12 爲 諮 屬 めに 12 餘 君 T 斯うし L なつた。 て居 ら紙數 が進 記者 女子 h る 7 0

と僕

は

0 3

關 關

6

あ

9 向

72 Ŀ

3

云

^

な

V

であらう。

有 ム位

體

に云

へば僕

は

カン

ら迷惑を受け

0

途に

於

T

勵

し合

ふと云

な意

味でも

であ

るとする

色

記

居 友

難 係 係

有

いと思

た試

L

は

度も

に思はれ

る。

君 君

76

亦

恐

りくは、

力》

利

益を交換

思 は

0 7 R 5 12

居

72 憶 間

17

相 7

15 る 人 す

Vo カゴ

吾

R

は

唯自

分 0

0

內

17

あ

るも

0

を語 なか

572 つた様

7)

つた丈けであ

る。

記

るた

的

0)

相

手

Ł 5

であ 圍 0) 0 4 13 7 る。 交際 で探 B 島 チ る 記 地 金錢 1 カジ 0 S 君 もする と僕 すならば、 あ 懺 4 靈変と云つては な 2 悔 0 720 (1) 借 錄 吾 0 貸し 々の 12 交遊 此 0 0 生 セ 交際 4 યે 弘 活 13 1 ネヷの美學教授であつたアミエ 記 は を普通 た So 0 あまりに道 述 不 事 側 す 思 議 議 面 1 カゴ E 論を戦 0) 無 に於て、 意 いし、 36 現實 德 味 V で変際 的 間 は 所謂 意味 4 的 君と僕とは交は 0 72 な意 目 と呼 17 是云 友達の急を救ひ が着き過ぎる。 は 味での交際 ぶの ふ記 觸 n 4 る 憶 IV つて 0) 必要 變である、 も僕 ジ 0 方面 若し强 76 17 合 居つたの ユ ルナール・アン 73 は ふと云人間 かる S には全く發展せずに、 友達とい 所 Vo ねて似通 だと云 0 岩 吾 L 6 R ふに 3 300 0 友人と云 つたも チ な 內 1 は 所 力> カゴ 2 生 のを僕 あ 0 の題 番穩當 活 72 せりに ふことが 唯 0 名を借 舞 忠 吾 0 告 マから 知れる節 非 カン を受 3 現 りて、 自分 實 Ŀ 何 知 25 的

H n FI. 出 して ない。 12 なつた は語 得 或は單 る自 文け 9 易 分 に性來の カゴ 0 いと思はれ 或 あ 3 は 無 其相 S (性 72 12 來 的 0 手 なの は或 と云ふもの は 事 は 質であ 力> 誰 3/3 でもよか 知 る n > 存 ¥2 僕に 在 つたの 曝 0 は 理 H 自分 由 出 だ は 2 何 72 0 0 心 72 處 後 にあ を カコ 0) 自分 曝 S け るの 知 出す 87 0) 75 カン 型 ことが 7 Vo 臆 を恐 病 唯 容 僕 0) \$2 易 為 3 12 的 72 12 取 12 つて め 出 外 13 來 は、 13 ならな 0) カン 君 76 知 赐 7.5 S

却 彼 秋 つて事 0) はし 折 苦が 實 てゐない。又さら云ふ有り得べき事を起らせたくない為 0 地 報知を い恐ろしい、然し傍觀者からは止むを得ないと思はれた經驗に打ち附けられ 君 が逝 得た場合よりも、 かれた、然し病氣の 實は驚 為 めではなかつた。 かな カコ つた かも知れ と云 ない。 ふ報知を. めに、多少の努力はしたので 夫れな 程 よし得たとし に島地 君 は 72 共 0 0 あ 0 前 るが、 年の 2

から出 己的 U 君 ちた。電 車 3 出 の中で考へた事 浮 僕は今島 す事を筆の先で紙へ寫す迄の間に、途中で之れを妨げよう遮ぎらうとする色々な力が 僕 全體 な手 ぶ。下鴨の 來 0 な 報 經 、紙や、 ない仕事であ カゴ も其 一つの 驗 程 南 地君 12 に强く残つて居るに拘は AL 中に交じつた。其間 外交的解合を整へた書翰文や、男の葉書や女の封書などが入り亂れ 取つては)特異な色彩を持 程 熊 の事 議論 よく現はれ の家で小山君 神戸の島 を想ふと。一番新 るに でさへ思ふ様 相 違ない。 72 地 てとは前後 君の下宿で夜を徹して語り明か と三人で話した折 から僕が島地君を想ひ起さらとすると、印象は明 に述べ切 其上僕 らず、 5 つてねた人を— に無かつた。五年や十年經 V が筆を取つて、斯ら云ふ風に机 之れ れない事を思ふと、 そして を書き現は 0 事、長 香强 S 其人の L 長 い印象 した事。其 S 人間 云い 汽 印象を十 を僕に 車 現 人、 つた所で、僕の 旅 はす力は 行 前 12 與 殊に に向 分 後 僕 ^ 12 た事 には 人 つて 記 島 僕 て、僕 12 亂筆 か Ш 伴 L 地 ねると、 傳 君 缺 頭 6 支け 陽を走 H あ 0 からは消えさ 判 樣 る T る。恐らく 讀 0 カゴ 事 身 働きか 73 ねること る 0 心 は 邊 出 夜 僕 一少く 12 始 來な 12 行 0 思 的 落 列 頭

H

僕 と思 實際 時 L * S 語 0 12 多 0 3 得 は 僕 72 話 b は カゴ は 僕 2 君 B た 嫌 唯 さなけ 不 は 上 ほ は る ると思つて 12 は · 思議 可 第 鳥 對 n 0) 非 ゲ 所 N > な な する ザ ゑまれ 難 カゴ 地 所 助 り長 に僕 仕 或 者 す 0 n 言 君 0 此 るの 方 は 僕 は 君 は 0) 0) 望まれ は 出 7 を ならな V カゴ 口 經 世に於ける役目であつ るだらうが などと 間 る。 君 75 來 6 驗 カン は 何 な 5 となる So 0 0) 或事 V 殆 そして僕は讀者として、 聞 時 な 15 頭 V 吾 僕 も君 V やうに S んど全部 から笑は S 件 々は は、 た カゴ 併し小 僕自ら と前置さをして、 0 丈けであ は 發展 又他 最 なる 唯 何 自分 n 時 後 (僕 艺 說 る 0 砂 人の事を進んで聞 0) 0) は 屢微笑 ことが つた) たとするなら、 聴衆として選んだのであ を讀 かゞ 最中に出 僕 々々の途を默つて歩いて行く文けだと云ム様な氣持 あれ 常 0) 0 何 む様な氣 カゴ そ を 處 多 あつた。 君 聽手として何時までも君に忠實を誓い感謝 物 禁 逢 カ> カン の全部であったと信じてゐる。 に潛 君自 じ得 話 0 人。 12 持 を始 僕は今でも十分 そして君の でオ 考 身の 爲 んでねた。 15 からとし 的 め 力> へて見 F る 0 12 口 ナ た から其 0 つた 斷 ると、 た事 シ 是云 カゴ 然し君 話を 例 ク るまでも 聽 カン h 都 6 カゴ 吾々 此 4 ことは、 聞 な 度聞かされ あ 5 役目 との Vo 知 7 つた かさ なく、 仲 72 n 一丈けは一 云 て吳れ な 間 0) 間 n So でも つた 島 7 柄を 0) 改宗 笑 72 地 何 居 は 所 果し終せたと公言 る女 分 處 顧 君 る の事件に就 自 內 で仕 カン カジ 2 4 ^ 行 岩 12 て見 17 分 る 何 た L 0) 時 吾 方 を表する。 2 カゴ 0) 夫れ 望は かが 事を話 7 自 ると、 的 Fi. 沙、 0 今では ない、 分 15 が僕 「叉君 あ 仲 0) 事 る 間 老 何

批評家は僕の任ではない。

あ め得ると考へたこともあつた。 は た。即 話題に上つた材料を分類して見たら、小説中の人物が最も多かつたらう。偶、現實の人間や交友に關 あつたと云 あつた。夫れ のであらう。 ツ n は話し 象や感じや、青い花に對するゼ ゲ かご ・ネフ 出ても、 一人方が本當である。そして語った事柄は現實の世界から見たら夢の樣な話ばかりであつた。 が上手であつた。それだから、吾々は互に語り合つたと云ふよりは、 0 然し島地君は話しが上手であつた故に、 である IV ヂン 夫れ から島 が即ち君だと思ったこともあ は皆小説中に現はれて來るものに對すると同じ取扱ひを受ける 地 君自身 そしてさう考へてゐた僕は、 ì カゴ 僕に與 2 ズフ 10 へた印象も 殆んど總てが捕 30 僕も釣込まれて口 亦、 トリ 君 捕 17 一へ所の カン = らペト 1 ^ 0 所のない位にアンチームなもの 傳 13 12 S を開 ^ 1 た 0 シ カジ = いた ゥ 本 工 ス IJ 體 寧ろ僕は多く聴 0) と呼ばれ 1 なので 6 Ö あ 12 面 ったらう。 過 影を君 あ ぎな 550 たてとも に認 僕 0 0

吾の目 可なりなヱルト及びメンシエン であらうが、實際君 化身だ、 一不興 L 君が若 を買 君 カ> らは 俗 はさら云ふ浪漫的なアイデャリストの方面の外に、世間に通じた、隨分實際家らしい所も吾 人だ つたことも、 持 いやうな所もあ などと評した者もあ つて居た様 の應對や、人事世 吾々 であ 仲間 り、老人らし ケントニスを持つてゐるかの如き趣が折々閃めいたのであ る。 12 其證據 は つたことを覺 間 可なり大事 の出 には、 い所もあ [來事 に對する、又小 件で 吾々仲間 へて 2 あった ねる。 た あ 0 0 風貌 小山 カゴ 誰であつたか、君を指して Wordliness 14 老ね 說 君 0 や繪 直 カゴ 接 たると云よ詞 『老ねたるゲザ』と呼んで、君 などに對する 0 印 象も 勿論 0 短 含 # まれ 評 12 0) 中 T 、一面に には、 居 たの

あ

としたのでないてとは、 現しようとする氣合 語に耳を貸した。 らであつた。 D 13 浮 島 弱 草 地 さとを結 君 0 0) 4 主 人 公立 公ル びつけて居るのであ 彼 ち チ は何時も熱心に主張しながら、 がはかつた。 一高 ン 誰も首肯する所ではあるけれども、 0 やうな才情 時代、 彼は決してワイマー 大學時代、 30 V) 東京に於ても、 煥發 神戶時代、 E 見果てぬ夢 自ら結論を求めんとすることなく、 ルの詩 そして其間で貫ける悲愴なる生命の一 神戸に於ても、 彼は何時 人のやうに軍に鑑賞味 いやうな戀と、 る最後 予は幾度か彼の美はしき夢物 累々た の一歩 る好果に枝も 12 6) 於て 經 驗 また之れ 躊躇 するや 線 ・と實 72 よら D

發揮 は 寧ろこ をつぶしたやうな始 彼 若 し得 し彼 12 n 同 2 カジ に二高 情する者 元では 72 は容易に めであ 的 時 るせ 0 10 末 1) ると云ふやうな憾みを懐いて居る人がむるか 度 では 改宗 獨斷的結論を下すべき譯のものではない。やはり人生の秘密とでも見 10 に思思 カ> 騒ぎ 15 ひ浮べる所である。又佛教方面 何 V *泣*っ 0 から 爲 10 2 力> 的 つた の改 では餘りに物好きなやり方ではなかつだらうか。 73 ららば、 騒 ぎぞ。 かうした悲惨な年生を見ずして、 其始 むるや鷹 の知友 3 如如 知れね。 V) 間に べくに飛 は彼を短命ならし いづれ び來 5 も尤もと 立派に其天分を 其 斯 終 3 思 めたの かる疑 りや蝸 は n 3

に自ら這入るのは、 併 し島 地 君 0 如くに多情多感なる性格 決して不思議なことではなかつた。 の人 113 情熱 か る理 寧ろ斯かる境遇に限らぬやうにあら 想 12 燃や され た時、 度 は 南 0) やち 10 る機 な境

遇



才人島地雷夢

栗 原

基

は下 海 12 小 5 約二三丁も行くと、 る Ш 此 Ш 8 原を控 可ら 2 は 京 御影 多大 君 座 n 都 何 うざる鮮 一敷に かが から大 カジ 時 0) 如 なる囑望を擔はせられた。云 眺 年前 宿 何 居 めても美は つた。 何 0 力) 阪まで汽車に乗り、 鳥 佗び住ひ、 まで二人の友人が 處までも陽 な印象を與 地 二人とも東京大學の 畠の 君 を觀 しく氣高 善く描かれてある。 中に清楚なる二階建ての家 さては 72 氣 へる。停留場を少し後戻りして左に向つて小路を辿り、 カコ な日常・ は去年の十二月號に、 い。潛み渡 晩年の それ 住ま 5 つて はずもが から阪神電車で上石屋川と云ふ停留場まで行って降 精神的消息など、何人もこれ以上に同情の麗筆を揮ふことは 出 好 身で、 居 つた攝陽 V 心つた家 飽 ない 寸 文藝の 6 住 6 カゴ の空に聳えてる威ありて猛 人 あ 3 南 V 才に富っ る。 2 心 力) は小山君で、 12 地 後に眺 そして も親切に情濃や 0) み、 よさ 哲學、 的 ゝらな場 一人は島 あ 人は カン 宗教 ぬ山を背負ひ、 かにん 一階 所 地 0 6 からざる其姿は永く忘 造詣深 君 座 あ 心能さ であ 敷 小 るつ 學校 8 12 0 占 を右 -[た。 領 前に うる。 友人間 3) そし る。 25 に見て 人 六甲 和の 7 カコ

出

來ないと思はれる程、

50

歸 12 n めしたもので、 切な大黒柱 7 大成 たらう。 つたのが自然であつたらう。しかし故郷に歸つた時は、 い譯け な内容を土産とすることが出來 個 しな 人の ゲーテ カゴ カン 17 始めから怪しかつた。彼が改宗當時の決心を以て進めなかつたのは、 天分を全ふすることは、 2 は 12 これが一生を通じて凡ての問題に現はれたのである。 S 0 カ> カゴ は、 VQ. ハ 乙 と云ふ 鉢 2 ットを評 カゴ ことが 小さかつたか、 か した言葉 たのは何よりであ 到底出 る。 **⇒** 弱かつたからである。健康と意志と云ふ大事なものが 來ないことである。島地君にも惜いことには此二つの大 の中に、 IV リッチでも、 大さくなる解樹を鉢植ゑにすれば、早晩鉢が つた。 先きに其處から出立した時 デクインシイでも、 やはり彼としては 偶々彼 詩才の よりは、 信 0 仰 あ 真實 0) つた割合 遙 故 を示 かに 鄕 17 な 破

を放 事 0 6 破綻 も其政治的理想を實現せられんことを祈るものである。 予 質に於て見る日を待ち望むのである。それにつけても小 は 特に てる未 鳥 を惜 日 地 成 U 本の 君 Z から 品を予が貴き追憶となすてとを彼に感謝 ので 基 基督教徒として立 督 南 教文藝が依然として不純 る。 併してれは到 派 に立て通 一底彼に望み難きことであつた。さすればせめて彼の如き異彩 ほ なる文藝思 して大成したならばと云ふことを何よりも し、將來必らず彼に於て夢みた美はしい幻影を 想 山 の下風に立つて居ることを見る時、 (金・」・一五) 君の健康 が一日も早く恢復して、何處ま 願 はしく思 深 く彼

立

派

5 信仰 を囘避することが、一層困難なことであつたらう。早晩靈的醱酵を見ねばならぬ詩人肌の美質には斯 以て染めなしたのである。 として彼等の カ> る形式に於て現はれたことは自然の成行きであつたらう。 島 或 感受性 地 は宗教的色彩を帶び、其學才に於ても品性に於ても他の瞻仰する所となつて居つた時 君として其仲間 思想、 と鑑賞力とに富める若い才人は斯くの如くにして持つて生れた宗教味をば新し 氣分、 入りをなさぬことは、 情調 に共鳴 し、 進んで取つて以てわがものとするの 全然 不可能のことであつたらう。 特に當時一校の秀才達の多數 V そして其自然の 無 理 から カジ 基 であ い色彩を ことであ 治結果 るか 一致的

味 つた は、 < めに得る所が よしや、それが思はしからぬ結果に終つたとしても、彼の精神上の内容と熱度に於ては、 てれ 君 36 爲 めに、 內 の天分であつたらう。 を失うても 人の る斯 人生 決して尠くなかつたと信ずる。 權 くてこそ増加し行くもので 威 0) も出 オ やはり一 > 來 テ て來るやうに思ふ。死として全からんよりは、 ン シ 度は愛したことの テ イ 12 一きわ深さと强みとを加へたことは ある。 テニソンの詩 ある方が勝つて居る。 小成 に安ずる人には適はしくな にあるやうに、 島地 寧ろ玉となつて碎け 疑 君に於てもあん 愛したこともな ふべくも V かず ď あら 此 な經 AJ 方 カン つた これ カゴ た方が 人生の 驗 人らし があ がた より

52

して悲しくも其玉は早晩碎けねばならぬ約束があつたやうな氣がする。何故に碎けなければならなか 勿 瓦であ る者 に玉となつて碎けよと注文することは 無理である。し かし島地君は玉であつた。そ 力> らざ

る缺點

もあれ

ば短所も

かる。

たとへば史上の

人物事

件

關

學に對する彼

の疎漫な嘲笑的な觀察など。

さり乍ら真に充分にニ

イチ する

工

0)

生:

涯

人格

及其

作

物

0

必至



我 觀ニイチエ

は

L

Bi

è

柳 澤 英 輔

爲は深 此問 紛 甚 なら収 時 自 雜 しきを 73 10 分 題 0 るは今も は本文に於て彼 0 提出 成 殊 想 天才を誤解し淺解する . 0 17 めなけ 者 目 たる 下 昔 magenta Named to n イ 0 B ニニイ 世 は 變 チ 界 1/ 13 5 工 らな チ 的 0 非難するはさけた。 カゴ 工 大動亂を観るにつけても先づ想以及ぶは「力」の問題 我 な を研 域 V 10 の流弊 カゴ に喧 此際 究する事はやがて此當面 同 傳 せら 時 更 は に小 何 . . 力 12 3 常識的、 異の 7 事 > 3 年月すでに久しきに拘らず其 新 杷 見七立 憂い 少現 偏埋的 70 > 爲に真摯なる研究者 象では V) 要求にも觸れゆくわけである。 屋上屋を重ね、 な見地 13 いが特に存 からす 彼 03 n 亂 渋瀾に波瀾 暴 ば彼 0) 所 17 は である以上、かた 熱心を冷却せし 論 15 0) ---の思思 無 多岐 1 理 チ 解 想 Æ には を派 にして な に於てその 見 w 成 地 めては るの 批 P) 程 判 133 所 科 13 0



戀なら 凡たびと 心 お 73 お 暌 我 U 2 主 うきな ほ は 0 2 カン 2 H 帳はか そら をし 5 力> 花 5 この P 人や 野 もそ しき A3 力ゴ V2 入 霜 b 0) 76 5 るを 垣 山 わ 冬の 渡 來 尾 蒼 ねた 9 U 根 3 (1) なら ぬ風 花 海 WD るもみぢもな 0) Ш 6 2 17 花 13 から CL 0) L CA る ぞむ P は **乙**山 3 12 < V2 8 30 T 5 物を 3 春 折 4 ¥2 n 12 寒 B 朝 b どよみ (1) < 0) Ó 被 尋 忠 逝 五 まろね 風 7 2 お 見 鄉 出 36 M カファ ta 93 夢 桔 よばは 名をよ 來 河 13 1,2 h つさえだ 3 葉 ば 吾 巢 7 5 清 H ح 12 て冬の 立 山さくら戸 0) を 1 b 0 み n 待 瀬 は ¥2 5 霜 あ 鳥 水 S 聲 12 0 0) 夜 12 力》 pa よる 12 CA 生 母 鳥 0 0 仙 Ž. * 20 n D 0 0) 月 笑 L 73 白 來 2 あ 72 3 0 * Ħ ځ 82 12 3 3 E 3 4 わ 7 D 7. 75 南 吾 夢 百 空 n 72 兒 戀 宿 5 る 6 ^ 1 合 を ぞ 0 0) 0 P 27 ٨ 5 3 10 1 見 ぞ 力> 梅 は 花 47 力> ち > < 花 か Si る す 見 待 3 0) 力子 撒 的 is カン 舟 ょ H 7 13 4 75 1 影 h 13 3 h

j

む

3

H

向

生 7 一括の質現に外ならな 現するに在 彼の劣弱なる多數民衆は之にあづかるを得な なる人生を肯定した以上積極的に之に處するの りとしたのは當然の行方である。さて、 いが、之を實現し得る者はひ いと彼 とり 途 いふところの 少數 は闘 は唯人々本 0 言 優强 た。 種 具の 創 族 造 カの 權力意志を揮 卽 工 ŋ 顯 ŀ 現 そは 12 限 けつて られ 彼 12 從 其 る 0 創 ば 6 造 瘞 力 あ 術

劣弱 優强種族又は貴族階級 種 族又は奴隷階級 民衆、 治者、 消費者、受領者 創造者、 賦與 無隷安逃 我從逸避 義服險戰 的的的的的 的的的的 なる特色とす なるを特色とす

弱點に、 して見れば彼 0) 非 斯 難さ く人類の性質を根本的に相異る二階級に區別して極端に るゝ 貴人のやさしき所に、 …凡俗に汚されざらんがために森に遁れよ。』とか 中 0) 心のやうであるが、 (個性を尊重 し天才を愛慕した)眞意は充分に容認さ 力> 0 寄生者はその 之も物質主 義の惡平等と凡俗萬能の積弊とに いとふべき巣を造 『高貴な魂の人は無代價で何事 一を讚めて他を貶し る。ことか n るでは ___ 民 な た 衆 對する V 點 0 カン カゴ 去 憤 就 最 況 B 餘 3 を も受けな 0) 4 閑 强 絕 者 叫 チ 12 附 0 I.

呈す

る事は極力避けようとした。

的 關 る 係 これ を知悉し會得し來れば是迄非難すべしと思つた個 本 論 が主とし て其長所の 闡 明 12 努めた所以であるが同時に自分は根據なき盲目的讚餅 所もさまくな理由から是認せざるを得 を彼 なく

悲 劇 說

覺悟 來 ~ ン 0 彼 る洞 に於 ۸ ر 7 は先づ其發想 ワ 1 4 察 7 デ と勇邁 彼 や古代 P は IJ シ ス なる覺 の第 ギ ŀ 3 リシ 0) ~ 夢 ン 悟 P 歩に於て字 ۱۷ 想 ワー等とは全然反對 思 だも及ばなか とを見る 想に負 宙 0 ム所多大では 6 0) あ 0 實相を悲劇的 た深 る。 刻 (1) ある 地位に立つた。 なる見解である。 か、 也と觀た。 然しな そこにこそ吾 是れ から此 勿論 C 悲劇 彼は此 とへに空想的 的 宇 17 見 は 宙 解 _ 觀 0) 一樂天的 1 暗 12 チ 對 示 工 す * る態 0 先 な 最 董 りし在 も深 度と シ 3 56

人物 生命 越したる今日の新理想主義的見解を早くも當時に於て豫想して居る所以である 天 ららとし 才 滅 此 0) 意 悲 13 深 志 依 劇 3 刻 た ~ つて を肯定 的 な 宇 ン る所以であるが、 である。 人 宙 ハ ワー 生 確 觀 認 0 12 苦惱 3 對す して 苦痛を經 説却し得ざりし佛教 IJ を定 る て進 シ n 3 んで有 また彼の ての大歡喜 んとする ~ ン ۱۷ ゆる人生の苦難を體驗せんと努め ワ 思 12 1 想が 至つ 0 悲觀 態 0) 在 解 た 度 12 は 來の 脫 8 全く消 通 思 反 理想主義、 じて し、 想をも突破 0) 極 __ 大樂觀を味 1 的 チ 巴 自然主 して驀 避 工 は 的 あ 6 た。 義 ひ得 地 < あ を共に包攝 に宇 7 0 て逐 蓋 0 72 積 る 宙 T に生 は 生 = 極 B 命 1 的 命 カジ チ 進 して而 0 7 內 I. 取 意 志 は 的 = 奥 7 6 も之を超 ィ 12 從 否定、 チ 探 り入 b つて عد 0)

超

人个

高人(將來い

純

3

1

U

47

>1

種族)↑

民衆(今日い

3

1

T

ツ

, ;

人

9

と成 は な V つて居らなんだつたら が。)恐らくニイチエ 自身に もそれは强烈な然しながら漠然たる預威であ つて決 して明瞭 な概念

耳 0) 13 で 1196 ab 11 盖 V 3 93 とら 此 6 > 今試 あ op 說 30 力> は 2 n ---に其 ば t 72 1 さず n チ 8 象 は 0 工 此熱烈な 6 自 偿 り身に取 說 杏 0) 謎 カゴ 3 概 を強 カゴ る宗教的 念 2 的 斯 7 S て解 樣 には曖 15 13 種 來 憧 いて見たらは 6) 憬 昧 現 や道徳的 模 1 制で 啓 ン 示 ス か 艺 ٤. いから 表現す 信 ģ V 年ら 您 1 から シ る 200 c 3 吾 글 人の あららか O > 途 若 51 心心胸 方式 は < V. は に依 とり象 をらち來 V Z. つて表現さ V 徽 1 る力の (1) 3/ 形 3 式を以てする ンとして 32 かくも て居るか 深大な 彼 の心 6

---1 チ 工 " 7 ラ ツ 1 ス 1 5 超人。

0

ツ

ア

ラ

ツ

1

ス þ 7 0) 屬性 蛇鷲太 [] | 一銀き意力 | 創造欲 | 一銀き意力 | 創造欲 | 一銀き意力 | 創造欲 | ·藝術 生活 者はする質 超人

ばか あ さて を左 る。 又問 に見よう。 は 然 各 らば超 自 題 0) として I 人生 夫 Z 6 誕 身に H (1) 要な 段 合 取 9 0 3/1 72 0) 人生 1 ÝII 何? it 道を造 な 15 0 之礼 0 吾 700 12 R は H だ す は カン 3 j 6 V 1 と思 度 チ 超 工 3 人其 0) 考案 序乍ら彼 4 36 0) 前 > 真 述 義 の漠然考 0) をさ 理 山 力》 摑 5 へて居た段取 頗 2 えたなら る疎笨で

四 輪 廻 說

59

n 賤民 2 2 は價を拂はずして生きようとする。。等の格言はその言辭こそ過激なれ言外に無限の眞理が含 る

外部 ら消散するであらう。 12 彼 0 非 力を指すもの 難 2 る、今 でな 一つの い事はい 點 は權 一力の主 ム迄もな 張 であ Vo る 23 ゝる 力当 彼 疑劇 0) V はゆる權 削 揭 0) 表 力 を仔 は決 細に吟味すれ して無意 味 な は る おの 力や

、超人說

カゴ 進 する意志 て人間 は倫 要する 模型 補 的 的 13 生 がまづ存しな 無限 究極す 超 觀察といへよう。 活 人の とは 的 一發展性 る處 說 V は人 CA H 力) 豊剰なる生命の Ū, 間 n 潛 は の可能性を無限 n 在 ならぬ。超 ば して居る事を證據立ていゐる。 新 價 值 0 顯現する處 人の理 創 と觀 造である。 想乃至 たのであるが、又人間 はすなはち弦に到つて安定の場所 信仰 而して新價値の 13 力> っる必要から育生されて來た。優越を欲 前者を哲學的 創造にはお が自身をか 考察といふをうべくば後 く觀 のづから を得たの るは 何等 で カン 0 58

ら鹿 2 は 然しそれにしても超人の意義は依然として曖昧である。(決して無内容だとか無意味だといふので 和 爪 1 らし là チ な I. るま 0 あ 超 げつ V. 1 説が多少生 超人說 5 V は 0) P カゴ 物學や人類 は あ 0 6 たらばんにのろな頂 彼 0 生 學からヒントを得たからとて其説 得 的 傾 向 72 る 、上で其 デ イ オ は詩 ---ソ 趣も ス 的 精神 哲理も解らな を進化論や 0) 成 以果と見 善 V 俗人の るが 秱 學 妥當 の立場 態 しと想 度と カン

使命を深く覺悟して居たのである。

5 な者 運命を甘受するといふといかにも消極 だが ひとりニ ィ チ 二 は其 運命論 に於てもおのづから亦積極的進取的態度を持して居た。實に 的に聞えるが、して多くの運命論者は實際消極主義に傾きが

五、ニイチエの人物

人格の論理はど透徹なも

Ö

はなな

V.

偉人天才とは卽此自覺力に秀でた人に外ならない。彼等は其生得の力を遺憾なく伸展してゆく手段 平 自覺とは想么に自己認識乃至自己批評である。自己認識はやがて又其直下に自己創造を豫想する。 凡な讚美は例によつて書物に譲り、こゝには其特色の二三に就いて論じよう。

後天的 な 理知の分析を許さゞる此 種の無意識 ほど有力で貴重なもの は な V 0 6 南 る。

方角も自然にしらずしくにわきまへて居る。其は多くの場合に於て自發的、

る。然し他面に於て又彼れ位、自己確信、 自己省察、自己解剖に敏感であつた人は少ない――彼は自己の缺點短所をよく承認 5 公平とを持さねばならぬ。 を愛し得 から其が の自己親愛は此自覺に秀でた人にのみ始めて可能である。 た もの 為 めには先づ區 はない、従うて又彼程自己を酷使し得たものはない。真の愛はやがて創造であらね ニイチエは自己に對して此克己と公平とを持してゐた。一面に於て彼れ位 々たる好惡、愛憎を絕して對象をあるがまゝに認識する大いなる克己と 自己肯定に大膽であつた人も稀であるー 此意味 に於てニイチエ して 彼 程真實に自己 は自己の眞價 ねた のであ

されど

無意

識であ

550

其 人 段は即ち超人と成るに在りとなし、 しく望ま であり恐怖であつた。彼はそこで此恐怖嫌惡の念慮より脱却せんと企て、遂に之を能 0 は東洋佛 そも~~耻づべき人間として永遠に輪廻し廻生するといふことはニイチエに取つて此上もない嫌惡 世界に到達する しき狀態でなければならないと 教の輪廻説 に至ればそこに於ての廻生は卽超人としての廻生なるが故 と全く内容、 吾人が若し目下の如きミザラブルな賤民の境涯を超脱 傾向を異にしたもので注 推 論 L 720 5 < 12 彼 目 (1) 輪廻說 に値 ひする點であらうと思 0) 獨特 な面 以に是れ 目 カジ ある むしろ最 くする唯 して カゴ 同 かの超 卽 時 も誇ら 0 に又 手

カゴ 寂滅、 とも角もニ 涅槃を無上の欣求とする東洋の輪廻説は必然に生命の嫌惡、 超人を至高の憧憬とするニイチエの輪廻説は必然に生命の イチ 土 0) 輪廻說 は論理的見地から視ると矛盾多さは爭はれ 讃美、 意志の否定を促進 ねが之を倫理 意志の肯定を促進した。 的 ī 要求

宗教的

試

錬

の手段とし

て考へ來る時

此說

は俄に重要なる意義と生命を帶び來るを覺える。

60

負を遺憾 をやで T 7 あ は Æ なく體現した言葉ではな V IV 力> なる達人英雄 かゝる際吾 フ ア チ! R 何 に向 とい と雖 B つて『汝 ふいさぎよい男らしい言葉であらう! 時に憂悶 カ> 0) 運命を憂せよ」と宣す。 痛憤 の情なさを得まい。 眞に是れ英雄の覺悟、 まして迷 有漏の 執 身を以て の雲深き常 溷濁 大丈夫の抱 人に 0 世間 於て 12

彼 重 な使命を果しおほせた。 は 徹 あ 頭 の怖ろし 徹 尾 悲劇の連續であつたニ い惨ましい 運命を賦與され作ら却つて之を好愛して忠實に勇敢 = イチエは真に男であつた。 イチエ の一生は實にこの『アモ ル、ファチーの體 に其偉大な然し乍ら過 現實行であ つた。

フ

理に面 に於ても)の人物で深刻なる現實の眞理に生きんとする者にはゆまり參考にならない。 悲劇の出生が はやいいすれ 77 たすら空零なる觀念の世界にとぢ籠つて一時の苟安を貪らんとする者に比して、現實い忌憚なき真 忠誠、 接するは勇者でなければならぬ。由來いはゆる聖人君子は喜劇上(善き意味に於ても惡き意味 40 ば恐る可言自己欺瞞と內的虚 ある)。『悲劇の出生』も『超人の福音』も現世 高潔であつた彼がなは月並 哀憐 と憤慨 にた へざる凡俗 1な大悟徹底にそれ込まなかつた事を自分は却つて限りなく心 無に陷 6: 社會も之を愛すればこそ離れえないの るか 5 ...執着と愛憎とを繋げばこそ意義がある。 である。(てゝに 蓋し外的 齊整

熱の は る人達 りこけて らか 富 活 火 12 遠望! は到 2 た高絶 カジ 無限 14 底 想傍 心眼を轉じて肩 といはらか、 に蓄積され 容姿はまことに秀麗である。 も及ばない所である。 て時 殆ど形容の僻に窮する。 あつて憤を發すれば鐵柱雲に冲える幾百丈、凄絶 0) 厚 い腹 V) 太い HAR Ò のどつしりとした淺間 ども其胸 少くも小つばけな室内藝術に浮身をやつしてゐ にはらら火も消え脈 山を想へ! といはらか も絶えて永遠 其 胸 底 には極 に唯 絶とい 眠

きみだれて、季節との風情を添へる。幾里に亙る夢々たる巨松の森林帯もあれば、やさしい姫小 丘が斷續してゆるく波うつ所もあるといふも いあやめが咲くばかりか自百合花もさけば萩もさく。 でどいか つい焼 け山にもそれ 相應の風 趣がないとはいへぬ。『淺間根腰の小砂利の中』にはしほら 0) なでして、桔梗、 かる費も色香さまんしに吹 松の

リイ リッ ٢ ---1 チェの人物は何處かからした活火山式な風格があるではないか? 戦争と權

剋 0) 彼 の生涯 間 12 晝 夜惡戰苦鬪 が不斷の進步向上であり得た所以のものはからした相反の二傾向を一身に具備して二者相 したからで あ

族的 等を無上 厭 D 世 であった 人物と其 傾台易 0 就 題目として之を宣 た 如 主 13 > つた。 < 張 健 との間に大なる徑庭を存する思想家 康 但 權力 L = イチエ 傳したトル 、樂天を讚美し の偉大しる努力は此 ス ト イ たニイチ の實際 J. 5、例は古來間々見うけられる。 平和、博愛、平 の人物乃至生活はやゝもすれば挑戦的 も其初 病弱。 別に対 善感の自己を克服 では又やいる して遂に强健 16 n ば多痛 = 一我的貴 办猛 多感

又そこ 突破 精神 弱 で 0 L さまいしの 點 異常 て進 13 由 弊 (1) 克 力) 來 上に 風 つた 力了 步 感 造 な克己的 本來 的 1/2 徐 明 雄 風潮 10 理 性 は りに 1: 健 因 想 の豊か 健 看 る 努力に しるサチールの氣力と新鮮なる山上の空氣とをもたらすに至つた。 的なる本來の自己に立還つて來た。そして卑屈な意志と頹廢した情緒 氣分を受容れたのみ 全な彼 多く 破 てと更 な彼 T J (1) をして一旦デ 犠牲と努力とど 居 に多大であ 俟つ所少くな じ) 0 こと故殊に心緒亂 720 唯生 る か一時は之にか 力 3 。其證 V 拂 かい ダンらしく見えしめる所以 っこと早さに過ぎた はざるを得 據に彼が 更二彼 れ易き青年の初 か本質 ぶれさへしたらし 近代人の なか つた。 が決してよわしし 期 から當時 からゆる気分 そこ 於ては彼 で に此 全歐 ある。 い。けれ 天才 洲 も當時流 心 0 は 持 ども彼 V 不幸 七 び ž これ ح **風幽** 日報 行 ン n ととを有 は間 のデ カゴ 驗 チ あ る メ は し作 3 此 > もとより彼 26 力 ダ 惡 タ する時代 なく覺 ~ 然 傾 1) 肌 间 3 ス 0) 其 な ŀ

62

(1) = ィ チ 工 は 生解脱しなかつた。之が自分には最も興味ある點である。 内的にはあればど健全、

美くしい舞姫達、 一寸ばかしこらしたとておこつて、たもるなよ! わしが此小さい神様を だが、

あまり蝶どもを追ひくたびれたんでがなあらう。

る淺間 とも角も、 5 共鳴する所が少なく成つた。 東洋 には 0 理想的典型とも見らる可き富士山は世界的なる將來と運命とを荷うて立つ新人の情緒 先生定めし聲はりあげて泣くだらう―― あれは泣いてるときすら人を笑はすのだからね。 方に生 反之何となくもの 成の途にあるだけ、吾々をして見透しのつかぬ未來と希望とを懐かしめる。 (しい氣分、尋常でない力が籠り漲つてゐる。 儀容甚だ整へるも何となく單調寂滅の趣がある。 後の吉凶は知らないが、

此苦悶動亂及生成の感である。

竟淺間は苦悶の山、動亂の山而らして又生成の山。自分がニイチエに依つて暗示せられる所も亦

畢

本年度は凡て百名を募集するとのこと。出願期日は四月七日まで。 科は二種に分れ第 關西學院高等科の文科商科の學生募集が出た。文科は英文學科哲學科及社會學科に分れ、 一種は實業及貿易に關するもの、第二種は外交及經濟に關するものである。

活火燃え黑煙搖曳す

には最

力の宣傳者は歌うて曰く

・・もつと舞踏をおやり、可愛い小女達!

わしは意地悪く、お身達の遊戲を妨げる

おしは悪魔を防ぐ神の擁護者、 者でもなければ、又其仇でもないのぢや。

悪魔は欝抑の精ぢやもの。

輕い脚もつお前達、どうして俺が

わしは成程森であり、小ぐらき樹立の夜である。その聖い踊舞や、可愛いかゝとの持主を憎めようぞ。

ちやがわしの闇をば怖れぬひとは、

其柏樹の下かげに、美はしい、

薔薇のさきみちた堤を見出さうぞよ。

小さき神樣をさへ見出さうぞ。其神格は今、又、其人はをとめ等の、いつち、よろこぶ

眼をつぶつて、泉水のそばに、すや~~ねて御座るが。

日光の下に、よつく寢込んで了つたわい!

世界ア 偉 歐 7 す 者 更 は 12 3 T 米 舊 12 例 大 は きで これ 致 だ 13 7 0 的 進 ば 2 表 とは 化 3 型 術 カコ 舊 た 5 遊 卽 る 現 を カジ は る形式 法 劇 7 術 5 線 彼 何 な 處 に於 偉 だ 個 は はより多く自分の と色彩 家 S から 彼 力>。 0) 理 は 大 卽 進 7 0 L 機 な 0) あ 藝 る塾 隨 然ら 化 72 械 と音樂とを以て 5 る。 詞 0 術 2 生 0 的 て生 命 ば 6 術 過 0 的 表 音樂 その 程 南 真 我 現 家 的 る。 命 理 なることで なりとするが、 12 0 國 うち 心情 直 0 0) 0) 0 よりては 生元 深 舊 ごとるし 而 觀 命傾向を を機 藝術 12 命 してそは 3 藝 は j E 術 彼 到底 つて 雅 械 0 4) カジ 生命 を 致 的 る 餘 0) りに地方的で 第 b 精 2 造 -暗 とを失 表情 を表 られ 神 而 れども 知らにや言 示 ___ 0 12 大精 的 L 彼の 6 生 h 12 現す T 72. B は 九 神を る D よりて 日 る最善 だの 生 型 的 17 17 本 0 命が 表 10 あり、 つて Vo 12 0 表出 0 現 よ 舊 0) 對する迂遠なる方法 聞 含蓄され 徵象 し得 整 3 0 6 0 方式をとつてをら る。 せん T 術 餘 カン あ りに世 0 る。 せやし 5 カゴ はなな 生命 n 且 として 7 な 0 演 H 世界的 ようし Vo せ 彼 的 3 V 本 5 るの はその 2 でな ことを 0) 全さ彼 3 る 舊 6 V) 0 な 劇 をとることは愚と稱 > 力> いととい 表 な 音 あ 知 0) は 6 V 全 0 樂 現 0 6 ___ V ٤ 7 ふの 的 テ 方 7 然 あ 種 V 2 法 0 20 0) 肉 て、 型 カ>。 L 子 デ た 2 就 0 0 は > 12 12 その 果し で シ 1 取 カン V カン 7 あ 0 扱 1

露 道 各 江 6 8 戶 道 間 時 カン 5 H 代 8 12 數 於 0) 3 俠客 里 决 H から を走 して彼等の でとき場 る 動 0 驅 作 人 及 生 來 合 CX 觀 表 n 言 12 カラ 大藝 現せん る は 語 カン カン 5 術 0) 彼 等 カジ でとる は 家 ため 彼 0) 0 等 直 馬 0) 外 觀 0 0 有意的 境 62 觀 足 を出 部 遇 よりて 連 9 人 0 動 努力 7 生 音 は 2 觀 樂 的 る 投 の結果 を 足 12 窺 0) 造 0 Si U. でな とに あ 知 5 出 る る 異 2 3 So n n ح (吾· 12 2 3 カジ 0 人 る 6 律 3 から は 36 動 示 3 j 蘧 0 50 現 術 用 6 あ 家 2 よらとし 0 馬 る 心 而 上 12 女 的 跨 た T 傾 7 彼 向 短 6 距 等 0 7 發 花 離



装

飾 美

澤

哲

雄

ば 我 な ħ 5 0 200 生 活 音 K 樂 常 て 15 75 繪 け 畫 n 2 ば 75 から け 5 n 20 ば 75 5 12 舞 踊 سي 75 け n

あららか ならば、 試 み 12 彼等には應答し得るであらうか。 力 チ ゥ 3 ヤの 復活を演 ずる新 12 なる役者 答へらるゝとしてもその原則を捕捉せる應答が に整 補 0) B 的 と我 國 0 裝飾 美 術 との 關 係 なし得 を質問する る

て繼續 0 ために、 表現は不可能である。 勿論 劇の 宇宙 進展 目 の目的は 的 0 また變態して經營し來れる吾人が、 ために完全に再現することが可能で 一である。 然らば役者なる彼等は真に藝術の目的のために劇を演ずるのであらうか。或 また、 善であり、 美であるが、 あららか。 U シ アの 特殊なる藝術 特殊なる藝術 動くとも現代哲學 的生活, 的 生活 より觀 を幾千 を整 術 察してそ 年 0) 12 F 的 亙 0

0

偉

大

なる藝術

品なることを思ふ。

者に於 2 本 F, 法 多 思 n す 致 タ 0) 能 想 7 る機 護 カジ は 0 n る 俗語 る。 寂 ラ 摩 蹂 全然機 て畫論及び畫家批判を試 會 習 極 な に乏し 躝 めて緻 ス 靜 慣 0 V その 0) に於る 及 をすら企て、 カゴ 法を見て戴きたい) を白色、 婚 カっ CK 械 表現法 プラトーンが火の表現を三角形なりと定義 嫁 密 的 V なる この カジ 到 にその U) 腹黑 敬愛を赤色、 底心 儀 事 12 B 式習慣のでとき、 ねる。 靈的 於て、 質は我 物 本人としての自分は恐らく日 且 い」「真赤な嘘」、「青二才」、「黄 體 2 頂 0 日本の 律動 騰異 國の 何故に彼等は等閑 點に 存 みて 念怒を亦黑色を以て表徴するがでとき、 任 民族的 るる。 を表 すべき習慣 16:1 的 達し得り 民衆 なる理 現せんとするがでとき、 讃嘆せざるを得ない。 その M カジ 火の 論 統 る可能を有つてゐない。 繪 カジ カジ 於て著 本質 象徵 にするのか。 固 畫は後期 有して に三角形を用ゐるがでとき習慣 本が世界に於る唯一の純化され 的 い整し しき に藝術 印 ねるのである。 したる學理的 V徹底 象 自分の 言語 派 的 0 でとる。 と聰 V) なることに原因するであらうが、 でとく技巧よりも精神を主生命と が普遍 未來派 現實 明 狭い知識の範圍 カジ 意義を見出 すべ 舊劇 的 偷 0) 示されてゐる でな 理 12 より近き寫生は 的 7 に於 至つて V 方 近 ける た 代 面 得 は人間 たる國家、 に於て ~ (與言秘密 めに世界に に於て 160 理 るの 限どり」の 學 出 立 的 で だけでも 0 藝 來 體 證 あ 知ら 親 一術 る 明 彼 2. 個 的 0

識 に於る彼等の藝術的生命の傾向の流れのまゝである。(勿論善をなさんとか神のた 善をなさ 親 近 75 る 例 か 證 10 を所 めに 謂 江 善を行び 戶ッ子に發見するであらう。 はしない。神 0) ためな 彼等の生活は彼等の宗 るが故に自覺 て善を行 敎 との は めにとか L 融 13 合 0 あ る。 72 いふ自 1" 彼等 無 覺 意

する あ 場 偉大 その 赤飯 なる藝 を黑 表 術 現 品 塗 は 6 (1) 必ずや不 办 重箱 る。 に詰 これ 純 め、 6 ž あ 青葉 現 る。)か 代 心 を 理 添 くの 一學的 ^ 7 できる に研 祝 儀 究するも赤 例 12 證 7) は 3 我 カゴ 國 飯 でとき、 0) と黒塗 あ 5 10 と青 る卑 個 葉 近 0 600 心 な る習 的 各 傾 R 慣 向 0) 0 12 色 發見 發 現 0

結合に た。 W) 弘 る。 絶す 法 向 Ā 3 カゴ 5 生 彼 絕 學の 九 創 Ź 行 V 觀 6 大天 は 霞 造 を繪 は ある。 真髓 は を 繪 m 祝 Ш 語 n 畫 樵 才 9 畫 儀 それ T 0 カゴ 者 と號した。 21 0 安永 白紙 即ち 72 7 象徵 か 見 カジ 300 ねる。 と融 果 る る 神とこ 年 12 1 it カゴ カゴ 代に歿 ----彼 合して て自 n V あ る。 0) 彼 書家 » ° ども、 もに 越 0) 覺 0 術 繪 線 ĺ 的 近 或は若き娘 にして書 製作せる者 た。 棲 それ 的 書 カゴ 6 時 引 傾 は J. あ は ——彼 後期印 向 境 描 力) 0 カゴ 白覺 地 家で n た 0 力 發 n T に彼 か の鼈甲 力; あ 露 た 10 あ 彼 的 象 等でな る墨 るの つた。 意識 0 彼 0 6 派 あ 0 本 や未 櫛 あ みに 大氣 質 る 0 3 15 的 莊 部 かぎり 6 カゴ 5 來派や立 は彼等の 彼 分 過ぎなくとも、 か 嚴 0) あ 神 る。 は j なる氣韻 カン 0 た す 5 0 何 青春 べて 3 その 處まで、 表 大雅 體 カン 描 現 ٥ 派などの 12 自 の靈化 1: Ш 力 カゴ 堂 n 50 3 於 於て線や色彩やに自 水 彼 0 それ る宗教 ざる白 遣は、 不 0) 2. 人生 され 繪 純 輸 160 13 入 カジ 畫 己部 る表 2 > 者 大自然を言 殊 觀 0) たる表 主 6 12 に對して自己 3 現で 分 あ 百 調 池 カジ 12 幀 6 象 2 無 た。 より多く 0 か あ 理 カゴ 名 N 覺 富 5 る 論 4) U) 的 士 的 それ 5 男 古 なる 6 0 山 とで 性 一今に な 心 表 カジ 力 は 的 的 彼 最 東 あ 卓 2 傾 現 る 68

拉

73

3 カジ 國

力: c

天 期

保年代の山

「水畫、

人物畫家である。

傾

向 我

あ 0

る。

後

印

象

派

0

理

論

は 12

田

能村竹田

0)

著

書 穀

山

所

謂

哲

學者

藝

術

家

は

2"

歐

洲

の哲學宗

臺

術

6

1

第

より

近 對

能 行き 36 傾 る 0 る 自 向 12 1 カジ 種 を 分 6 0 没 得 0) 翹 多く 舞 或 ぼ る は < Ŧi. 望 無 感 3 意識 7 3 し、 瞬 0 教養せられ として 間 その 彼等 畫を描 Z 希 的 0) 0 現 は 求 生活とい 絕 本 は する 知つ n 頂 能 第 く場合の たる者 17 る。 0 於ては 心 7 感 彼 ふが、 等 卽 的 7 12 はレ ち でとき、 傾 な 至 は 舞 佛 5 全 向 V 自 ムブ を と見える。 得 踊 者 < 藝術 分の 機 0 な V) それ 械 ラ 線 無 V 我 0 意 > 디디 的 0) 連動 f を そ、 解 味 0) 化したところに 第六感その 0 短 境 を闡 釋 時 カゴ に入り、 H でとく その 卽 明 感 間 する にて現 より 5 傾向 九十 H. 邀 た 36 來 感 めに したる者 より出 術 あ 0 る 日 では はその 12 3 經 よりての 驗 亙 一言する。 舊劇 と本能 てっに ģ でゝ無 7 標準 は み第 無技 0) 枚の 靈肉 意 悲哀を表白する場 カゴ とを統 六感 巧 識 Æ. 種に 合致 畫 感よりきたるすべて 的 にまで至らんとして 現代 繒 面 して の行 42 畫 悲哀を物 0 複 となり、 我 雑な 初 為 國 めて第六 カジ あ 0 合 る 語 る。 所 技 2 る 謂 Z. 巧 0 0 を用 この カジ 感 或る 傾 で 本 2 向

それ それ る。 善 或 カン など だ 喞 カゴ る 4 行 ち 肉 爲 る。 0) 不 的 爲 を行 問 純 さずには 6 あ 調 6 為 あ る は する場合 者 第 ことは る。 で ねられ 傾 見れ あ 言 12 13 つて、 を俟 的 は創 50 無 7 意 72 それ な 作者、 n である。 識 生活 2 カゴ 善 をなさなければ自 その 天才者 1.2 6 とつ だから あ 善 3 T は 0) 73 > 5 生活 رن それ はそれ カン 善 カジ 6) 實現 は 分の生活 カゴ 成 その 本 就 何 カジ で 7 能 72 的、 場 n あ 合 た め è (1) 自然 音 る) に善で 0) 大自 樂的 時 善 6 的 12 進 あ は、 あ 然 0) 善 展 3 6 (1) かを質 で、 2 生 カジ かどう 毀 0) 活 損せらる 質 神 0 疑 問 あ 的 表 カゴ 現 何 XL 0 は、 6 0) 0 た 0 72 だか であ めの がけ る。

3

なが

ら然もそれ

を維

持

i

わられ

る

0)

6

あ

る

代 の宗教家はすべて論理的に聖書を義解し、 多くの藝術批評家は哲學的 12 0 み藝 補 0) 表現方法を

とき、しるしばんてん」の色彩の この の遺憾なき示現であるのである。 0 もとに行ふ善は必ずや多少に拘らず不純である、だか I 戸ッ子の 繪畫的、或は音樂的 調 和のでとき、 方 面 0) 彼等の 藝術品として遺憾なきものであり、 生活 ら善の 即ち Dragmatistic-Romanticism 理 想でも神の真 0) 表現でもない)。また 彼等の と木 人生 遣歌 一哲學

2.

訓育せらる、茶人は巷にありてなは自ら崇高なる生活を營み、 る者となるのである。けれども彼等はみづからの善に無意識である。 その だらら 坐して花を活け、 りて編みなされたる形式は後代の使徒たり、信徒たる者をその創始者の生命傾 ある。然るに我國の各派 竟花を活ける者 カジ 活 教するものとなり、 創 花 作者 はどうか。 美し この の人生 S 感激 Ev の生命傾向 茶をたてるときに自ら崇高 西洋 觀を啓示する藝術となつてはゐないだらうか。方式 、ふ形容 は基督教聖典や佛教聖典 いの活花 體得せしひる者となる。 の異れる創作者、即ち藝術者たり、宗教者たり、哲學者 が教養されてゐな 詞 がそれ は各人の 12 種 對 して發せらる、 々なる嗜好のま、に任意なる配合を以て活けらる、 やの成 なる生命のは、やきの聲に感激せしめらる、ことがな いかが かくり ためであつて、真に深さあ 文の でとき沈默せる 經典に於 であらうけれど、 創作者 てよりも更に 0) 12 大精 據りて薄暗き茶室 久遠の哲理の真精神に歸一す 必ずや倦怠を來らせる。 る活花 神 1) 適 向 15 切 に導き、且 たる彼等の 12 カン は望まれ 12 始 祖 心 憲 42 宗教 いり、 2 直 な 永遠 掬 である 感 V ので 精神 12 湍 42 V

自

家

*

書

*神彩氣韵夫此二者固畫之至美也。

古人書畫有借 三分當用 韵とは自然の生命である。美である。崇高莊嚴であ 方 人法 飲 興 ifii 七分當用己意 作者。紀玉堂亦然 大凡 一每人各 蓋醉中有 其其. 天△ 性 趣 眞 m 情 異於 須自 人 田 爲 手 也 眼 生活 不 可 寄人籬下

也

* 蓋△野神△。 哉。 來。 論 山 TO 者 之暢 名鄉 宋宗 峰 地 必 HH. 圖 日 不 逸 腱 平 C 炳 畫有 小專於山水。 畫 嶷 屋 Ш 雲林 水 明窓淨凡 木 補△ 序 則 世 孫渺 教△ 日 必 張 典故 途 閒 華 聖賢映於絕代。 居理 寄興寓 漢 南 之於蘭 宮平。 事 氣 蹟 意。 掃觴 器財 使 雲林 後 人 能 拭 則 八 萬中越 琴。 傳之以 知所 必 之於竹。 三禮 融△披其△圖 心 興服 爲 戒 亦各從△ 前山 至寶 图图 11 志。 平 夫令人 其♠餘△ 或謂之 坐究 恐 好●何△ 所寫 DE 不 而為為。 士 荒 能 夫之畫。 1 必 耳。 我△暢△ 不違 然 物 也 H 神△天 必 而 脚之 或 然果 聖 E 謂 督 叢 之文 無 貞 神中 盆 烈 暢執有先 A 平 獨 應 **汽**晋 山 贵 水 一無以 唐 副 以 必

* 雲似 柳 則 非 柳 雨似 果以不似爲真。 絲。 雲豈絮哉 則我乃得其真 一絲哉 矣△ 可見物之相 似 者 皆非 其 眞 也。 余 盡 此 以 為 蘆 削 并 蘆以

爲

則 書 胸△ 响 中有完 法 活 局。 發 動 能得 干 古 載 人之心。 不窮 也 m 不 拘 泥 其 迹。 似 rfn 不似。 田 能 不 村竹田著 合 iffi 合 Ш 一中人饒舌」より抜落 其 布 器 出 於

判

的 する 批 現實 03 な 表 る 多くの文學家は言葉にのみよりて自己の生命の滿足、 说。 現 法 か件 決してそれは遂げらるべきものでない。 0 7 20 13 v 人間の真生命の生活 次いでその社會的 に徹 底するために、 目的を完成せんとな 藝術

1 13. 種 することである。 的 た當然幾多の疑惑を誘發 きであることを 5 の傾 を藝術的 創 作 點 间 者 12 を形 カジ 於 表 神 T 成 でな 現方法によりなければならない。 近代の哲學者、 するも 即ちすべてを人生觀に融合させることでゆる。 提言する S 限 ので、 6 しきたるの 必ずや不純 その行為 宗教家が藝術的直感によりて自己の宗教と一致したる装飾美術を與 であ は全然純なるものであり、 なるも る。 然らばてれは自己の 0 即ちその人生觀 であると見 なけれ に對して自己の 然らばその生活 また藝術の 直 ばならない。 威 によりて感得した 自的 心的 從つてその 眼 は心 分子の 的 H であ 分子をし る大自 傾 表 3 向 現法もな を統 然 自分 7 0) 2 目

* 畫中 不 畫中惟山。 患 有 詩。 筆 不工 詩中 義理深遠。 有 m 患精 畫 而意趣 放 神 讀 不 詩 到 無窮 m 用筆 知 其 べ畫。 工者。 觀 特宜 畫而知其詩。 撫仿古人。 其然而併知其人。 精神到者自家立脚。

* 心與 日通。 目與筆合。 所謂 意在 筆先也。

*

近

日畫家多崇形似而不知風

监韵何者。

ず すべ 彼女 5 であ < 4 1 7 U 汚 彼 0 F. 1 < は 羽 讨 3 等は 0 ___ 終始彼 120 とし 現は 愛を以て 驚 彼 ず 2 カン 0 ス 0) 鼓吹の さる 夫妻 n 7 ブリリッツ は 墳墓に 72 (1) 400 為に 終らざる 13 婚 > 0) るしつくりと把持し存續し得た。 最後 カジ 約 てきな 源泉た ク 當 眠 歌ひ續けたのであつ 8 實に 芝 時 つた 1 ~ る精 相互 彼 ٧٠ 女が からずし 時 ード」であった、 吾 彼 汽 神 に戀人で カゴ ~ 爱 76 0) (1) ブ ラ 猾 神秘をは、 -と歌 でを以 ij ゥ リッツ 死に あ ---小ふたが た。 -0 ~ た、 よつ グ 始 クッパ 其フ 害は まる 夫 如 7 郇 妻

あ

る。

是れ

ぞ中

世

一の信

條

べであ

つて、

此

信條

を打 y 無

消 0 姿を没

る後

想

無

<

鼓

吹

無

趣

味

<

乾

燥

無 た

味

10

る は

生

涯 理

12

變し終ら

Ĺ <

T

3

V)

生活 12 は で ~一人暮 る。 人 2 7 カジ 書 7 しと詩 壯 居 彼 取 を知 替 L 大な る た。 歌 る交響樂の京都の書館の とに注 世に 3 私 13 は片 特 至 カジ 别 る迄は彼 の便宜の n 序 0) 數 將 樂 ないか 夢の 女は 36 生の育ち、 Ł 弘 有 見 如ら想 72 彼等 ず 7 る CK ~ 」と彼 200 私 U 0) くも 17 0) 心 女 婚 0)

かつ

た

は

彼

女の

情

去

つて、

以前 らに、 ら唯 はれ た あつ 生へ ては 低 山 1 の繪 的 耽 ٤ たも 7 0) 72 つた。 私 垂 一人が吾家 乙女 己か 居 は 和 畫ぞや! 私の四周を 斯く 01 讀 る線 計品 下つて ぐるり、 心 日常を氏 書 る 私 17 彼 と夢 彌増す草の ことが (1) 家庭 就 女 12 居 思 水 た、 130 靜 想 あ 遣 V n 全活 T かいに 出 つた に報じた Ł は 現 來 1 は ブ カジ ラウ 輕 は、 +" は 如うに、 13 强 自 5 1 世 U 然 私をして生 V 過ぎ 草の 然れ る 0 = 0) ス て言は 6 > 开 儘 邊 物淋 あ ども 开 は 13 グ (0) ソ る。 氏 を は 恰 ン 10 る忍冬の < ネッ 是れ 何 飛ぶ き甲 36 开を と相見 L 其 72 夢想に V 生活 で 蜂 向 斐 周 ツ る 12 美は る あ 0 あ 圍 4 如 就 彼 N 如 (1) 6 (

75

一吾は年外親し 而もそはやさしき友と たいまぼろしを伴侶にして暮しぬ、 樂よりも より美はしきものを他に 記し しき男女も 思はれつ、其まぼろしの吾が為に

ブラウニング夫妻の戀愛

アリス・コークランの著から

林

靜

太

題に對して、幾分の暗示ともならば、私として望外の幸福である。 韻文の譯は"Cまづいのであるからせずもがなとは思つたけれども)出來る丈けはして置いた、寧ろ是れは蛇足と見て戴 素より、 此文は論議でなく、 單に一 個のロマンスに過ぎないが、 若し是れが 昨年來可也に云爲されて居る男女貞操問

鞅掌する 蓋瘁者として、 る。實にや押並て理想は、人生結婚と云ふ散文的ず』とは、夙く中古時代から言以古された語であず。とは、夙く中古時代から言以古された語である。と能は る主婦として立つ外に、 れ得べくもない。唯齷齪として家庭の雜務 な、凡庸無趣味なる狀態の裡に在つて、到底保 如何で夫に靈感を與へ、何等の餘力をも餘裕をも 若くは注意怠 るべからざ にのみ 有さ

の喧 よう?又日常生活の尋常些事に追 て居 苦惱との 而して純粹に保ち得られやう?結婚生活の 如何で大喜悦を燃やし得られよう? る婦人が、 噪の裡に在つて、如何で其愛情をは、熱烈 、絶間無く輻輳して居る實務の裡に於て、 如何で 皷舞的 の温情 ひ廻され、 を與 へ得られ 愉樂と 子女

放擲する、而して其情人も、夫てふ名稱の下に其妻となる時、彼女は鼓吹に有用なる一切のものを 教的 理想の修錬と保存との為に必須なる高擧は、宗 神秘 の或るものを必要とする。 婦人が が
所謂人

や、或は反對に有り餘る富の倦鬱無聊に壓抑され

得られよう?其屢々見るが

如くに、金錢上の難遊

見出し得ない婦人が、

彼女の問に答ふるの意味で、渠の『爐邊にて』 其後年經で、彼等が夫となり妻としつた時、彼は 愛の物語を語ったのである。 ("By the Fireside") の一詩に、夫妻の驚くべき

"My own, confirm me! If Itread This path back, is it not in pride

To think how little I dreamed it led To an age so blessed that by its side

Youth seems the waste instead?

な障壁があったかと云ふことを彼は語って居る、 く確かに、 即ち彼等は始め暫くは單だの友人であつた。 而して如何に兩人の間には、『然く微かに、しか "Eor a chance to make your little much, To gain a lover and lose a friend 吾が戀と彼女との間に』と言つた如う

Venture the tree and a myriad such, When nothing you mar but the years can

last leaf--fear to

彼は彼女を見守つたのである

Musing by fire-light that great brow. And the spirit-small hand propping it Back again as you mutely sit

"... sink by the fire-side now,

Youder, my heart knous how!

り來つて父の家に一週日を過した、妻にして妻に 人は、己が室を脱け出でゝ、密かに婚を結び 彼女は彼を愛した、遂に病室の可憐 なる囚はれ

非ずである。 奇しきは愛の力である、彼女は歌ふた---

答へい。 「今爾を把ふるものは何なるぞ」と。「死こそそれよ」と、我は 『其聲は、いかに争ふとも、打勝ち得まじき力もて問ひわ、 然るに其時

聲は銀鈴の妙なる響きして、死に非ずして愛にこそ」と告げた

名の人々は、額々として此地を指して集び來つた、 た『カサ、グイデ』は、是れより古典學の本場とし 被等は歡び迎へられたのであった。軈て兩人の間 て其名顯はれ、當時詩歌を愛好する總ゆる有名無 夫妻は相携へてイタリーに赴いた。其居宅とし りきの

22

斯し

て开は、

永

遠

12

迄及

が途

E

0)

彼

女の

0)

等の をば閑 さであ 72 年 る。結 0) 病 を養ひ、其外觀を豐富ならしめた。彼女は長らく 事 ラ 想 7 間 身で 天才を 0 ウ 的 人生を以 人 息 は __ 薄 不可 であ 0) 對 婚生活に於ける總ゆる日常瑣事は、 ング夫 死後 靜 R も機ぎつぎ、休み休みに語るの 2 暗 あ i つった。 72 は 希望無き病 理解することの ならし 能 V 5 心 むさくるし でな 得 て、人の夢想 此間 妻と 3 勇まし より ブ 其兄弟 ラ めようとした。 もの いと云ふことも なれ 0 ゥ 個人的に知り合つた人 とは 親切を以て彼女の 弱 = い樂を奏で出 に訪 0) ン V 部 身の、 グと相 出來る家族 するが 信 ひ來る 屋 其傍近 じら 1-即ち彼 認め 起 外界とは 見 n 如 とく住ま るに 臥 ない 人々も < でた する 0 6 であつた。其 そん 等 日 至 唯 3 カゴ 0) はなの る迄 々は 0) 一人なる > Ø 6 カゴ カン 返て其愛 心利か 、る少女 け離 餘 1312 か 生活 彼女 であ 儀 0) B る 無 n 數 理 ブ

> 此く叫 に愛 て吾人 是礼 そ兩者 だか 的戀 御 長をも加 を愛するの身となりぬ』と、ーーー は 身 思 歌 2 8 < らしきも 愛 12 ヴ 0 0) 0 歡喜 理想的 は の物 發程 詩集を愛好するの て居 の戀愛に對するの ばざるを 接 カゴ へられた、弦に於て乎其愛 彼 す 其愛 女に は 語 として、全く美はし な 3 かつた 徐々と生じ 0) は 迄 のとなり の逕路を辿り得るのでものとなった。彼女の 展開 得 宛 は てた最 75 7 力> 婦 てとを告白 へつた、 n 人 た、 序文 た 益 身となり 加 初 カ R 作 0) 、豐富 であ 書簡 开 余は政 い物語 彼女 は遂 して 等 此最 つて、 V2 12 35 3 は て言 12 カジ 此 あ 短詩 in 更に、 結婚 初の 叉御 得 彼 而 眞に 是れ ζ L る は 身其人 書 彼 7 7 彼 ふ冠 理想 17 如何 より 簡 女 9 H

は る吾が心とやいはん。」 た思 如 何 ば 知 ふが心は、 られ 實在と理 n) う吾は 卵丸 の其深さ、 想との恩寵 限りも た愛するぞや。何をもてそをは 廣 知れ 3 の極に至るべき道筋 の邊にさまるふ 高さの程こそは、 0 質に卿を愛す かるべき、

B 72 12

17

れないやら際すのを常として居た。

ブラウ

6 觸

> 彼 木

> 女は 難

其 る

愛讀せる古典の

著 是れ

書をは、

0) め

書

73

ことを

知つて、

をい

ませし

至る迄には

問

頓

1,2

勝

n

旅行

17

多

<

0

日

を費

すに

歪

つた

等

ゥ

認 衷 V 11 調 乙と ことも 心 世 1 B ~ 、を美 が出 12 た 1 た 時 ŀ 0 書 迎 0) * 出 は h 年 來 來 は 以 5 外 75 交互 老 y, 73 じて 金 3 力> 錢 12 1 カン S 0 で は て見 た 0 > 彼 居 0 た、 た、 感 0 は 女は 0) 72 情 100 素 であ 時 な 所 又 より 0 な 來 カン V 熱 った。 は 3 つた 0 2 3 ゆる 120 N 相 切 0 6 ブ 互 あ ラ な あ なせども 0) るも 琴 ウ 0 其 0 らうとは 0 而 72 尊 あ 瑟 死 L ----でする數 2 敬 1 3 年 0 を盗 生 何 グ į 0 妾 Λ 共 念 涯 時 夫 夫人 R 日 4 12 カン 人 は は 前 去 續 0 取 奪 其 夫 希 る 2 6 T 12

時 7 (1) 國 1 迄 彼 0) 戰 土 0 餘 でな 9 は 圖 12 如 42 暗 よき 生 < 夫妻 常 27 報 傳 3 カン 微笑 3 時 グ 最 1 0 12 た。當 と結 Ł 耳 机 0) 若 代 ら美は 嘗 42 短 0 35 黍 日日 婚 め 時 た 朔 12 0) す V w 7 凩 1 3 1 カジ 0) 0 オ 度其 3 となっ ン 難 あ 1 ス つた。 と云 jv 至 ダ 感ぜら ・ナ リート 2 フ 頃 た。 7 2 R 水。 より 然 夫 4 12 ŋ v 廻り 實 1 オ 0) 人 る 100 は 12 P は 2 實 來 今 0 其 彼 ~ ___ p, 名 健 女 イ ゼ 12 2 た 13 尋 康 は ン タ 此 彼 1) タ 其 2/3

る

Z

6

常に せる 3 3 if 5 ウ に己を あ ことは る心 ち 13 0 亦 = ^ 720 幼 < 禁じ 巷 夫 去 > グ 逝 盏 助 0) ブ 0 得 中、 ラ Z 幻想を侶伴 W 0) 4 0 V 生 た。 な 程 ウ は 彼 V 抱 涯 さて 女を た。 7 力》 を = ^ 2 見 > を 1 ^, 而 は階段 ては 理 L 72 連 グ 知 で とし 想 て夫人と共 カジ CK 彼 る 南 行 心 女 者 的ならし を をし ららっ -C 悲しくも くさまを見 め カゴ 昇 其 3 肺 日を る 0 7 0 に、ロ め 夫 驚 時 種 痛 亦微 一嘆せし 人は 等に 過し たところの 6 it あ は 1 其温まが 風 た當 其 77.3 0 邪 か 120 だ め ŀ る笑 72 時 7 靜 V ラ 間 を 力》 6

其等 室に 吾 0 2 b カジ 生 建 其 12 > 卿 活 は は 妻 後 は T 夫ブ 實 た な 0 Marie a 2 營 未 13 記 妻 ラ だ稚さ彼 壁 念 當 h Ŀ 時 だ 碑 ゥ 最愛 燦 肖 11 力了 __ 0) , To 平だ 像 併 女が の住 0 畫 グ は 7 0) 1 フ 輝 彼 英 77> 人 v T ず 1 きを放 0) 0 愛らし デ Ŀ 心 に歸 V IJ 情 2 17 ツ 0) 0 7 ス は 5 カジ ク 0 お 面 掦 0 永 强 久 12 土 げ 6 カン n とな 12 あ あどけ 5 4 12 勇 る n ŀ た 舡 n 73 其 其 る

から 所謂 煩 は 彼女 而 『詩人の嫦娥』たるに背しい日々の生活の裡に、 が舉げられた L感謝すべきかな、爾の造らせ給へる最とも卑しきものはての熱情を以て記すのであった。 も其時と雖も猶彼 フロ 契りを結んでより既に長の歳月を經た 1 ン 、其處 ス生 n は、 に、 0 かなかつたのである。 己が戀に就 **猶能** B 常 V く彼 0) 眼 伴侶 L 女は いて 裡 は 、詩 彼の 12 L

『神に感謝すべきかな、爾の造らせ給へる最とも卑しきものはこっに靈魂の兩面を矜るを得――一面はもて世界に對抗し、一面はもて男の愛を引ける女の模範として。」

斯して、夫に對する彼女の優しい愛情は、決し

て被することがなかった、否却て深くなりまさつ
た。彼女は彼を愛するに、常に

る、『あゝ妾は卿を愛すとはいへ、そは少しなり、に、吾人は熱烈なる思慕の情を認めることが出來彼に送られた彼女の最後の書翰のあの感、嘆、詞欲を始の當時には、彼女は安き心もしなかつた。

彼女の詩が廣く社會に鑑賞されることの一證左

と云つた。

それよ、

生命のすべてなもて。」

己が詩 の歡迎 中 U た。夫に對する世人の此冷淡さを見た時、夫人に取 友に物語つたと云ふ。夫人が世を終る其時迄も、 時夫人は甚く是れを悲み『恥を忍ん 版の為に蒙つた損失高の書付を と同 慈母の つては其 不幸にして彼は英國 ラ であ より夫人に向けて大な 女の して彼詩人の心も かつた、彼女は年と共に益々深く彼を愛した、 僅 であ でのけ 時 つた。プラウニングに對する彼女に なり ブ 2 イ』("Aurora Leigh,)の出版 12 0 0 如き感情 ラウ だか 世に 成 た、 れないことへ、 功 夫ブラウ げ = いものしであつた 彼女としては 持難さるゝことゝ、 も味氣無く感ぜられたのであつた。 ングを愛する 17 カゴ 僅 亦、 あつたのであ カン の騒壇に与け容れられなかつ 12 ニングに對しては る額面小切手が送られ 尠し 彼女の思 是れ實に彼女 其 なり」と。 0) 夫 送り寄越した、 る。 決し 7 だ それ 10 に満 で 後 かの -50 吾等兩 12 17 た 少し は辛 反し 此 され 其近作出 は 出 アウロ XL 事を一 版 では ども 7 書肆 V 12 た 思 夫 此



正學兵 校

午卒猶

業

迄生豫

宫三話電

番〇一七一

《中付

と一云ば、

ラタ園

薄茶各種

錢錢錢

ラム)

動折

王覇の賣販信通茶治字

略電城京

域

经线线线

番五○壹九阪大

優

< てあ つかしさ げられしぞ、是れ實に 髪毛艶かなる婦人とし 中ク が、やうりしに黑味 さま最とも接 に立つて居る。 き微笑をたゝへ、黄金色の め 暮して居た其昔愛讀 お る 圖 面影たる、 トリ 夫の寢床を見下すの所には カン である。 れし 又其書齋に至れ 初 明晰 力 期 れども 總ゆる記念物 斯して、 に装 の異様なる服装 12 して力ある、 には、 カゴ へる姿が した書物が フ ての彼女が >れる褐色の捲髪 ば わ> 1 理想的 縮毛 麗若き少女と 彼女が は彼 レン ある、 其等は過去の 生 に 美し その筆の あ カジ 涯 あ 其心眼 スなる彼女が墳 身邊 る る。 未だ獨 と理想的 而 うく垂 情脆き女子の して再 其書中に に置 終 して、ヴ して彼女 n 跡 り寂 て花園 9 輝 の遺物なな かれ 戀愛 に掲 ける び其

うたはれし歌は、今や吾が頭腦に於て吾は誦す、 ながかれし天の使は、見よ、吾が胸に生れわ。」 ダンテは恐ろしきインフェルノー ラファエ は親愛なるマ ドンナを書きの を歌ひわ あり、

あつた。 り親密なるが故に、 愛よりも、 質にブラウニング夫妻の ラウラに より實際的なるが故に、 對するペ 於り熱情的に純粹 トラーク 0 戀 於り理 ばれし戀愛で であつたの よりる 想的で

Ì

て左の一節を錄す。 る。原書の數十版を重れたるも當然のこと、覺ゆ。見本とし ることである。耶蘇の人格を學ぶにはこの上なき参考書であ 朝食卓に臨みて一家團欒して讀まば信仰に益する點少からざ 日数節とそれに對する編者の解釋説明感想が附してある、 に譯出したる者である。本書は四福音書中の耶蘇の教訓や毎 The Manhood of the Master (主の人格)を 栗原基君が忠實 の牧師ハーリー・エマルソン・フォスデック氏の原著 日本基督教與文協會簽行 異

「引用馬太傳九ノニ、約翰傳十六ノ三三、使徒行傳二十三ノ 基督が常に好んで用ねし言葉の一つは「勇め」といふことで 十一。(省略)

襲める生活を送らしむるに至るものである。「憂ひは心を屈 以てわれらの本領を發揮しついありしや。」 の新聞記者は「其日は暗いどんよりした日であつたが、フィ あった。奨勵は人を喜ばし、人を支配し、又人をして生き甲 **福なる音信と云ふことである。われ等は果して斯る態度** リップス・ブルックスが新聞社街を通行したので、皆晴れや せしめ、嘉言は心を喜ばしむるものである。」管でポストン かになった」といふ記事を載せたことがある。 福音とは幸

ンテをして天界に遊ばしめたるビアト

リス

ふ乞を添書御旨る依に**、誌雑合六**゚は方御の文注御り依に告廣の此

雜 誌 最

金定 1 貳價

拾臺

發冊

創

刊

以

來

妙

1-

+

有

五

年

今

B

本

誌

は

内

外

共

完備

0

1

權

威



循 雜 3 薄 界 あ 知 識 から 3 孜 事 0 開 々 は 拓 5 N لح B 許 7 1-教育 努 め、 吾 學術 我 8 亦誇 或 0 精 忠實 神 3 處 文 な 明 な る研鑽 0 先 驅 を 承 高遠 9

壹每

日月

發壹

行囘

な

る

數

多

0

教

育

雜

誌

0

群

を

離

n

獨

(1)

我

から

教育

學

理 雜報 受驗 評 應問 海 論欄 外 報 論 穀 欄 欄 欄 欄 欄 育 12 12 は は は 欄 は は は 文部 全國 帝 17 學 我 我 界 は 學 倘 カゴ 學界 省 海 界 な 大 0 外に 知 る趣味 敎 學 時 0 報告 事 名 敎 育 於ける教育學術 間 近 首 (1) 從事 題 諸 研 . 究室 寶益 に關 大家 檢定委員 出 せる實際家よ 來 一内委 す 事 とを カゴ る諸 心 . 養 員 界の ÚI. 新 (1) 諮 論 成 所 18 著 最 灑 す 氏 客 (1) 擔 近實 6 げ 批 ~ 0 4 任 合 深 得 3 評 與 沉 た 新 格 刻 懇切 の詳 公文 味 者 痛 3 快 最 3 深 0) 受 細なる報道 な 近 な 研 4 ô 一驗 諸 究 辭 る る (1) 應問 記等 詳 研 論 講 分 究 等 話 論 文

域 1 達 て普く せ 9 現代 今後盆 人 0 Þ 好 奮 伴 勵 侶 努 7: 力 6, 以 h 事 雜 To 誌 期 界 0 最 高

(中付三)

區田神市京東町木鈴臺河駿 九三五一局本話電台『 誌雜館文

*

九

1/2



郵 判 稅 金 箱 壹 錢 員

圓 好 版

評四

郵定

稅價

錢錢

郵定

稅價

八九

錢錢

好 好 評 四

郵定

稅價

郵定

錢圓

上版出午丙

よ

V

左

をなすの

止むなきに

V)

果 3 、豫定 並氏統 ことゝ 神學部 の教科書到着 75 基督教會の V 7: ると やざ 教務 歐 る為 洲 を擔當 戦 X) 7

至 chauungとし、毎週木曜日午後四 此 たり。 講讀書は の分會費 Essar: ケ月金容拾錢也 Naturwissenschaft 時 u. Weltans-時とす。

就 毎週日 定む。(但)基督教 叉此 演 曜 0) しその以後は適宜題目を定めて豫告 日 3 分は二月二十日より開講し ζ 午 歷史主 絕對的宗 前 且 九 つ最初數 時 敎。 一基 四四 囘 時 督教)基督教と宗教心 の題目を次ぎの 迄 基督教哲學 と超 自 然主義 如 理 す

刊新

教第

心の

近代思潮叢書 第九編 定價金八十錢 郵 稅金 八錢

內 宗教 拜を論 耶 物力と意力。 ゥ 耶 名に於て 界に於ける 才 ブー 蘇 蘇 イ 容 ケン の不思議なる誕生 は新らし (六合雑誌社に於ても取次すべ ず 發 ۱٤ 等 n 佛 生命中心の ナック 耶 を 本源 ュラ ら創造 網羅せり イケン 兩 1 敘 ス ろ 力 的 より I. 才 哲學 哲 ŋ な 生 w ろ 見たる宗 學 才 9 ~ テ 0 15 " 0 洗 使 2 精 信 命 禮 0 n 그. 教の 歷 1 種 神 仰 ダ 0 史 的 0) 中 0 し郵税不要 哲學觀 人物 生 極 晚餐 新 動 1 愛 國 致 命 搖 ŀ 種 者とし 0 發 固 定 祖先崇 孔 基 展 子と 督 敎 ŀ 育 ラ

兌 銀東座京

月二十五

B

(五)基督

真

理

0

基礎を確定するの

方法

東 京 Ħ. Ŧi.

中付五

電話 振替

新

橋

五八七番

ı	0
ı	中
ł	付
l	四
ĺ	0

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一														
		_	7	字	1	*		の		新	É	志 [•	
本年一月號	刊月	毎月		R		0	1	<u> </u>	A		J			一日發行
の路がら内容體	庭庭	日本の	□日本語	□義仲と	□旅(小説)	□砂(詩)·	□繪とそ	□古 井	回國語	口子供の	□世界の	□坪內博	口生物學	П П П
では是作なくて	0)	出來事:	はピルシ	巴御前	:	:	の思ひ出	戶物語	教育。創刊	時代から	色々 …	出と高田	子上から見	、字採用論
大改良を加へ	P I		ヤ語	:		:	:		號を讀み	9	:	四博士	元た國字問	
ました。	7		:	:			:		T ::			:	題	:
四六版の繪入の可愛らし	字		:		•		:	文學士			慶大教授	文學博士	理學博士	: 侯 鹤
の可愛	一年質	鳥谷	星	高		水	石	木	日下	沼	向	藤	石	西
らしい雑誌です	年分金五十錢	部陽太	健之	須梅	林無想	葉		久	部 重太	田笠	軍	岡勝	川千代	園寺公
す		郎	助	溪	庵	册	亭		即	峰	治		松	望

發行所 東京市 ローマ字ひろめ會 振替東京九一 電話本局五二五六

定價一部送料共十三錢■一年分一圓四十錢■



研

さ





本邦唯

0

權威ある不偏不黨の

神學專門雜誌

號月二

錢世冊一價定錢四稅郵に別

見本を要せらる方は記	▼新著紹介短評二十種	▼天主教の現在及將來	▼組合主義及び其理想	▼臺灣生蕃の宗教思想	三位一體論	▼信仰の認識論的穿鑿	▼新舊兩約中間の宗教	▼唯一神教の開祖摩西	▼舊約聖書研究の現狀
は郵券二十四錢送らるべし	研究會々	オーク	デー・	野	海老名彈		・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	コルニル教	t

正雄

純

(中付七)

町保神區田神 所捌賣大

ス

ス

員

堂京東

町張尾區橋京京東 所賣發

士授生

社 醒

荷多

(0)

溒

眞

To

闡

明

す

3

あ

0

外

名

士

0

論

訊

F

新

淮

思

想

家

0

研

金替

清

新

な

3

1

9

调 刊 宗

敎 誌

0 は 明 治 年 旣 往 餘 年 0) 歷 史 Te 有 1 3 外一年一每 本 國ケケ 行年年部 週

邦基 ケ金金金曜年二一金曜 督 年 金圓圓

(0) (0)本斯本 调 永の 刊 誌 は な 9 淮 步 的 基 督 教 0 扩 場 よ 4 時 事 問 題 を 評 論 且 つ 最 新 0 知 |教界最 識 依

教誌教誌 文に 學 毎の 號 教理 勢先 を滿 輩 載說 1 内

(0) 誌は な 仰 修內 聖 書 研 究 0 手 引とし 信 徒 家 庭 0 讀 物 好 適 な

武 編 本輯 喜は 代宫 藏川 金原 作田 0) 助 兩 氏小 每崎 號弘 執道 筆 瀨 在常 兩 京 0 牧 記 野 者虎 數 次 名 0) 之 Fi. to 氏 助 協 力

本 蓝 0) 見 本 は 往 復 は カジ 3 17 7 御 申 越 次 第 無 代 進 呈す ~

發 所 大

阪 基市 出-四

振

貯金

中 付六)

木

五發

++

圓錢錢錢行

JUVENILE WISDOM

1.

A young mother, bereft of her husband, had to support herself and her two little daughters.

So she began to go out every morning to teach.

But that made her girls unhappy.

- "Mother dear, why do you go out so often, while other mothers stay at home?" They said.
- "My dear little ones," answered the mother, "If I do not do so. we can not get food to eat."
- "Never mind," they retorted, "we see plenty of rice in our rice-tub always."

Could we but find self-filling rice-tubs, there would be fewer tears for the unfortunate.

2.

An old grandmother had several grand children.

They would often bring juvenile books and ask her to read them.

On such occasion she would put on her glasses and read to them stories from their books to their great delight.

One day one of them brought an English book and asked the grandmother to read it as usual.

"Oh, it is English; I can not read it." Said she.

Never mind, put on your glasses and you can read." Said the little one.

Were some glasses invented by which one could read foreign books; that would be the end of the Babel confusion of tongues.

Tetsuzō Okada.

電

話ちがさき二番

南

湖

院 河 相 長 野 州 診 高 茅 察 橋 ケ 土 兩 崎 躍 副 海 日 長 濱 午 は 從 後 停 目 車 入 下 場 普出 院 半 診 院 里 後 1 應 在

需

勤

麴 林 院 町 峰 長 院 電話、 區 間 診 W 察 (番町)六二番 長 番 副 月 町 長 水 木 は + 金 目 醫 番 午 下 學 東 地 當 前 士 市 院 洋 ケ 1-高 谷 在 內 見 勤

附

內

科

時 跨 安 院

H

7

ねる。

沌 の世 界である。 0) 界には、 虚無の世界である。 侮蔑に値する世界と、力を内に蓄へた世界とがある。 現代における虚

無

0

てる。 題 世界はその 「虎の尾をもつた人間」ともいふべき國 12 よそ 對して すると狂暴な革命が起こつてそれを顛覆してしまふ。これだ。 虚 V2 何れであらうか。新佛蘭西の花形役者をもつて目されてゐるシャール・モオラス 無 かりのない答案を與へてゐる。 世 三王が、王政と加特力教とを基礎として佛 彼れはいふーー『現代の混亂は卑しむべき混 る。」 これが われく 蘭 西 佛蘭 0) 秩序をうち立 西 は、この 民 であ 族 0 間

であ

だされる彼れの實際的言説は、單に騷々しいばかりでなく、まだ甚だしく危險なものになつてくる。 蘭西人には である。 17 D 介在する卑 しかしさらは云つても、 'n くは 熱心な真 、彼れの哲學は狭い見解の上に築かれた淺薄なものにしか見えない。さらしてそこから引き しむ 輕 率 面 12 ~ き混 「目な藝術家であると同時にまた國家主義者である。とはいへ明るい眼をもつた佛 Æ オ ラ 亂 ス 彼れが現代の混亂を大革命に歸したところには、 の卑しむべき母 0 說 12 與みするものではない。いかにも彼れは明敏なそして論理的な人 まぎれもな い眞理が光つ

壊してしまった。 大革 更 めて云ふまでもなくその年の八月四日の夜には、 命 0 鐘 カジ 物はわ それ以來、特權をもつた階級は見えなくなり、神權は蹂躙され、 カジ しく鳴り響いた千七百八十九年は、 十二世紀もつゞ 思 U の外に重大な意味をもつた年であつ いた封建 の建物 家門の榮譽は奪は カゴ 無惨に も崩

新文學の生まるゝまで

内

藤

濯

0 舞を演 世紀の幕がひらけた頃から大戦亂の突發に至るまでの佛蘭西文學界は、 にてゐる たしかにパベルの塔

の古典のかをりに醉ひしれてゐる者もあれば、ラブレエの流を汲んで疑惑を想像に托しようとする者 全く色彩と内質の異なった、力のない、こせくして個人々 を見わたしても、 72 この 私はこゝで此の崩壞と混亂との記錄をつくる。そして此の崩壞と混亂とのうちから新しく動きかけ いのちの流れを見わたしてみた ねない。 時代 希臘の昔や中世紀に崇拜の對象を求めようとする者もわれば、現實主義をその 12 どん底 おけ 流派 る佛蘭西 から佛蘭西民衆の心を湧き立たせるやらな生命のみなぎりが何處にあらら。何處 の名に囚はれた集團 の作家は、 Vo たゞ單に群をなしてゐるばかりで、民衆といふ民衆の聲を放つ カジ こゝかしてに散在 々が してゐるばかりである。全體から見 群 つてねるばかりであ

とりまぜて、氣まゝな旨味を作つてみようとする』者もあると云つたやらに、かれらの社會は全く混

ある。或はド・ヴオグエの言葉をかりていへば、『世にもて囃さるゝ一切の精華を

めようとする者もある。浪漫主義を復興しようとあせつてゐる者もあれば、象徴主義に上澄みを塗ら

ま、機績せし

うとしてゐるものも

己を主張することができるやうになつた。何人も暴力を振 とになった。千七百八十九年は一言をもつて盡くせば、一切の功名心にとつてあらゆ 地位を摑み取ることができるやうになつた。そして世界はた、最上の權力を有する者 位はもはや求められなくなつた。不釣合といふ事が世上の法則となつて、何人も事でとに思 ふかぎり好計を用ふるかぎり此 の手 る難關 40 0 歸す を打 Ŀ de るこ ない 5 開

斯くして二十世紀といふ戰以の世紀は來つた。

くべ

き『神秘の鍵』であつたのである。

後 ゐる。勞働の後には當然の報酬として休 を思はしめる。時代の導調となつてゐる鬪爭の事實は、勢力の均等の實現を見ないうち おうに S 力> わ に來る困 はど極い れー一の生きてゐる此の時代は、實に羅馬帝國の沒落に次いで現はれたシャルルマー も思はれない。 値もまたなか~に癒やされが 端まで引きのばされても、 鬪爭は今や社會生活の法則となつてゐるの 最後 息が來らなければ たいのであ は勝 利 者 9 る。 法律 ならな に服從を强ひられるば と同 S L 時 12 力) した 個 F CV 人生活 かりでなく、 摑み V) 法 は容 合 CA 則 = 二 とな 0 易 鬪爭の 0 混 12 働が 時 つて 止 み

だけ花 ラ 爭 7 n N チイヌ、 12 好きな十九世紀は、 しく其 0) ユゴオ、ベランジエー、 蕾を破つたことであらう。佛蘭西全體はたゞ敍情的詠歎の調べに打ち顧 その血ばしつた容貌そのま、の文學を生んだ。十九世紀初頭 ラムネエ、 = 3 ユ V J. ď J. F ガル・キネエ、これらの人は悉く の文學はどれ へて 3 120

事を説 つてし n てしまって、權力といふ權力は悉く國民の手に握られるやうになった。しかしてゝでは 0 まつ み く必要は カゴ た 肆 12 0 した擅場であつた。そして遂には多數者の侵すところともなり、 6 ない。たゞ あ る 單に事實その ものについて見れば、 千七百八十九年 は其の 金錢 0 は 屠 じ け め 更めてその 場ともな 或 る敷 0

は を切れ た た V 7" ばかり 大革 カゴ 出 つまでも道 た ば忽ちそこに不平等が生みだされる。 命 め で は 0 果 鬪 上の 所有 して CA の中 4 「平等」 0) 途に収殘される。 であつた。 から見た平等に過ぎな 平等を生みだすことは を齎したであらうか。 世俗な放肆な權力に この意味 カン 73 つた そして決勝點 力> からして考へると、千七百八十九年はつまるところ『生 9 た。 0 われ 對して行はれた鬪 である。 若 < L カ> から見れば、 進み入るの 5 V カン な X る場 事 カゴ ひの一年であつた。 は或数 それ 合 其 12 の當を得なけれ は約束 お V) V 强者 T の上 4 は の平等を齎 カン たび id 6 出發點 それ 弱者 84

汰とな 大革 0 た 火の やうな、 命 前 力の 手 生 カジ 6 大淘 狹苦 揚げられ は 汰とならなければやまないほ l 淘 汰といふ淘 S た 而 以 カン 來、 b お 淘 汰 世 の行は 汰 餅 で打ち 0 力は廣く國 れる範圍 固 まつた見る影もない淘汰にすぎなかった。しか どの 民の は極く狹かつた。 勢をも 中心 つやらに に基礎を 据ゑるやうになつた。實在 王室 75 2 た。 0) 應接間で行はれ るとでも るに大 の淘

る類 カジ 6 カン ひの階級的鬪爭は、舊社會のそれにも劣らないほどの勢を有つてゐた。 個 くして築か 人に ついて見れば、下級に n 72 新社 會 が、舊社 ある人々の反抗 會にくらべて非 に抑 一階級的 制しようとし己れ 0 あ 0 12 ことは 0) 地 Z 力> 位 ふまでもな 12 くして、 固 着 してね 獲得された地 よらとす 力> しな

もそれ 巓 强 西 N 思 5 5 に生きようとする人々 n 500 1 此 事 の時 75 件 る 0) 代 カ> 動いてゆく方向を知らずにゐる事こそやがて、佛蘭西近時の文學者間 を深く知らずに のフランス文學界をは から 歴史の上から見 ねる事そのことではなからうか。 てしない ていかなる時代に生き、 混亂に陷らしめた第一原因は、 夥し v い事件にせき立てられ カン なる時代に生くることを ともかくも新 間の傾向 6 な 少佛 から は

ぎに カゴ 力> 合し は つた。この場合 あ カ 屯 5 希 55 如 かくして彼 羅馬帝 臘 ない テー 何 は の都會 標的 12 して カ> 灵 らで 國を崩壊せしめた力である。 op 狐 12 れらはたが、何處かへ行かなければならない事 疑 も旅人であることを発れ の小さな玩具を沈めようとした力であ IV 向 かれらを騙り出した一つの力が 逡巡 ナンなどが、 あららか。 つてたい進 を繰 9 フウ カ> めよと命じ、 導者の聲に聞かないで、目的なぞに目も吳れず、 へしてゐるのであらうか。 リエ は右せよと云ひ、ルルウは左せよといふからでわらうか ない。 かやうな力に驅られ オーギュスト・コント それにしても彼 ある。 る。 それ 蠻夷 ラム は、 本 て彼 だけを知 0) れらは は『列を正せる』 7 群 エの導きとバランシ v に次 れらは旅路 何 牛 つてお 故 V ザ 互 では 1 に嘲弄を事としてゐるので F 封 IJ ぼ に上つた。 建制 と命ずるか p 9 いは カ> 0 ユ 度 平 な >" くも旅 力 の導きが 和 無 だから 起 意 つって 羅 識 らであ 路 。サン・シ 馬 17 一彼れら 12 つぎつ 0 進 0 致融 平 めよ 和 ぼ

など、説きす、めるからであらうか V ふまでもなくた、徒らに群をなしてゐる佛蘭西現代の文學界は、 これらの問題に對して多く心を

其の第一の曙の花であつたのである。

力> ラ うした戦 自 2 *À* 由 0 y, た ひの巷を避けて獨自の道を歩まうと企てた者の努力は決して容易でな め シ 0 戰 t ŀ S ゥ は ブ 彼等を熱狂せしめた。古典の関にさまよつてゐたド・メストルも、ボナアルも、 y p ン 4 また勇ましい突貫の聲をあげた。從つてかのド・ボニイのやうに、 かつた。

信仰は たのに過ぎなかつた。さらして人々はそれを犬に與へる腐肉としてのみ取扱つたのである。 失意の色を織 ぎなかつたのである。しかるにこのとき、異夜中の沈默を破つて吠え立てたものに、 カゴ かくして戦 あつた。 りたて あつた。野心滿々たる青年文士の群があつた。サント・ヴーヴの流派 かしながら此の喧噪の聲は忽ちにして沈靜に歸した。かれらの熱狂 いつのまにか斥けられた。さらして新しい藝術は、昔ながらの藝術に憂悶の色を雄々しくも塗 高路かり ひはまた始まつた。しかしながらそれはもはや、云は はれた。 りだしてゐたひまに、一方では自然主義が 派さ の藝術もまたさらであつた。すると宿命論や決定論や物質主義が至るところに蔓つて かのフロ 才 ~" エルが先づさうであつた。いはゆる『藝術のための藝術』がさうで、 漸次 に力を得て鮮やかな旗色を示してきた。 24 臓腑をその があつた。かくして は つまるところ一 あるが 懷疑 まっに 信仰とい 思 時 想家 見せつけ 0) 夢に過 0 群 X

は、 新し るのであらうか。そこには大きな疑問が横はつてゐる。答案なき問題が横はつてゐる。 果し い戰以の火の手は果していづれの方面へ向よのであらうか。 れるの二十世紀は、かくのごとく戰以に戰以をかさねた一時代を背景として以らけたのである。 てい かなる世界を創りださらとしてゐるのであらうか。 新しき佛蘭西に生きようとする人々 いかなる社會的變化を要望しつゝあ

世 しよう。 紀 12 D た 彼 る健 5 0 倦 鬪 を 怠 要する仕 カジ V つまでも黄金時 事だと或 人はいる。 代を夢み しか 73 カジ ら古典の名を しながら、 一世紀といふ時間 無上の名譽とする時 の續きが 代 何を

るところ

瞬

時

では

な

S

力>

のでは 世 L 代 繰 6 此 な 0) 17 0) 希 カ> りだしてくる。 續 一教文明 フ 世 は 伯 76 新 ラン 界に する 來 現代のフラ か 將 永 盾とを凌ぎぬく事そのことにこそ、 L 文明 カ> 來 遠 W 5 が放 ス 聽 17 12 0 動い は 第 0) 調を求 お 力> 質に、 12 紀 n 四 か。この V て宗 75 て止まな 世 元前八世紀を見よ。 2 から考 物理學のい 紀 ス T < を見る は其の努力をついけてゐるのではな 調和と真正の秩序と文明とを現代に 敎 るに至つて、 なるであらう。 秩序もこの と哲學 へてくると、 いの j 佛蘭 と藝 で はゆる釣合 あ 文明も 意外にも大きな破 る。 西 術 希臘 いか L 文明の第 とか 思 カン やが ふに 唯 17 文明の紀元前五世紀を見よ。 なる時代に しながらさらして未 みなや 至れ N とつ 十三世 て佛蘭 世 界 ば カジ 0) 0) 直 て改造さ は以其 紀、 流 ちに 西 調を生じてくる。意外にも深 破 n 調 新文學 に溶 再 第十七世紀を見よ。 建設 0) は からうか。 時 E CK n 動搖 界の 代の 來 け合ふとき、 L D なけれ n ようとし の世界にひ 不安が 運 ^ 推 は 命 羅典文 かが 12 ï ならな ある。 移 あ 神 7 る 間 る \" \ 秘 V 明 2 歷 い道理を 0 な 0 は 感 言 矛 史 なら努力を で 500 は 第 盾 幸 E 葉 12 V 不 2 13 福 3 カジ 世 知りな あ 安のしらべ 歌 與 換 0) 力 0) 55 3 歌 永 紀を見 7 は る 人 76 0) は、 B か T 200 Y カン は へば 變動 ねる 5 現 不 B

H ことはできょう。然し久しい間のからした佛蘭 てはねな けては トの下で、或は吹きさらしの野天で、崩れ落ちた宮殿と工事 てられた定規すらも有つて L かも其處にこそ佛蘭西の存在はあつたのである。 かつた。果てしない混亂と不安な問題の亂れあつた渦 **るないのである。** 彼れらは先づ行動の基 ねない。 かくし 西の運命は、 てもなほ彼 調 たるべき秩序を缺いてゐる。そしてまた假りに打 n 決して静穏な、 らは生を續けて行けるのだらうか。 卷 中の家に の中に、 屋 佛蘭西は息苦しい生活 0 L 間 カン 12 F. 在つても生活を營む 豐 力> な光 を浴び を續

は 息 渦 カン 0 L 來 ク 和 たし、 日 らであ ラシカル文明の展開を見るであらう。歴史の真書中に 或 73 勞働の カゴ に受け 來るといふ。 數 いから。 果して 中 0 に卷きてまれてしまふ僥倖や成功などの曖昧な和合が、世界といふ世界を征服しようとも思 調 人々は、 入れ 日に次ぐ安息を味ふことができるであらう。しかしかれらは、 和を喚び 最 0 みならず、彼等にはなは來らんとする新しいクラシ なければならない。なぜなら、彼らは塵埃と喧噪の狸に立働くべき連命 上の善に基 いか 現代の佛蘭西を苦しめてゐるこれらの宿案が、おのづから解けてしまつて、統一を 起す時代が來なけ にも吾々はその時こそ佛蘭 くもの 6 あ るか ればならぬといふ。今に勢力均等の時代が來るといふ。今に平 何らかい未 西 0 知の問題として残されてゐる。なぜなら生活 國 かゞやく佛蘭 土 12 大きな思想によって支配される新し カルの時代が、勞働 西の それまでに 大文明を見るであ 彼らの * 0 荷 日 に次ぐ安 つて 運 命 3 * る 其 V

惑が た ない。 0 價 15 うした心境 值 力> その つた。 を人の中に見よと説 他 は 彼 に利己主義の誘惑が n 『文章』 は 『人間』を不幸の中の不幸と見做 にすぎない。『文學』にすぎない。『巷の偶像』にすぎない。『飽 いた 吾々は人類 あるであらうか。或はさらかもしれぬ。 と人類の永遠の創造を助けるもの した。 けれども基督は世界に存 釋迦にはエゴイズムの誘 ゝ外には するもの くことを 何 物をも有 ~唯 知

W2. 0 カン 7 虚榮』 50 佛蘭 幽 iv 4 7 ない。 西文學界の混亂 p あ にすぎな K 2 7 w る よしまたこの 丰 思 2 から 想界 唱 かい 0) た種 折 混亂 衝 發展して行く生命 屬 の矢面に立つといふことは決 の最大能力生存説は、 がますく騒 の生 々しさ んだ混亂にすぎな F 精神生活において特にまざれるな 加 ^ して怖 るにしても、 るべきことでは S 0 それに越した事 であるならば、 無 Vo それ なぜなら、 は い真 無 に過ぎた 理であ る ラ

カン やらに考へてきても、佛蘭西新文學界の混亂はなほこれ以外の理由を持つてゐる。

72 ふまでもない。 工 二 その 0) n 工 と同 ъ 工 理由といふのは『文學』と『生活』とが日を追うて離 E 术 Ŀ 2 やら テ 7 ス U これ 才 12 牛 ユ までい ウ E U " 7 デ 工 2 カ チ イ 工 なる場合にも、 F° n ズ 2 ウ ラ から U シ 佛 オ 1 蘭 又 酒 n 42 ウ などの お ン 國 H 才 の歌 る十 聲 などの カジ 九世 + であり、 七世 聲 紀 カゴ 紀 4. n 0 精らか 入世 12 て行くことで 朝 おけ 42 U 紀 な言葉であつた佛蘭 る »" 0 佛蘭 佛 V た聲 蘭 あ 西 西 る。 であ を代 0) 聲 ٠٠' る 表 6 てとは L あ ス 5 た絶 力 w 西文學が、 > ゔ 更 叫 0 めて云 オ 术 あ ツ N テ シ

あることを知らねばならな

からいふ事そのことに向つて、或る種の人々は一も二もなく懷疑論の名を着せかけてしまふかもし 然しながら、吾々は歴史の繰りかへす混沌こそ、永遠の秩序をプロ ダ ク b する 唯 0 源

ど偉大なもの やが しな てゐる 果として彼れらは、 ては 新しき佛蘭西 しか 破 調を交ふべき美 であつても しなが 生活 ら彼れらは、それらの瞬間が幾たびかかれらの神經を鈍らせたことを知つてゐる。 に生きようとする人々は、成功と安定と沈靜との瞬間を一も二もなくあざ笑ひは の終局 L にあるのではなくて、たい『人間』そのものゝうちに い諧調 の目的 が彼れらの美的欲望を繋ぐに足りないことを知つてゐる。 カジ 實際上の 仕事 12 單なる外的 表 現 たとひ 存することを それ カゴ 如 その結 何

熔爐である。彼れらにとりては人間に役だつもののみが善であり、 造物を破 だ S つて聖別 る。『鐵 カン 彼れらの ら真 の法 に彼 され 壞 眼に して行く『鐵 鬪爭は人間をして其の 則 7 ねる。 は『八間』こそ最高の價値である。鬪爭は人間にとつて善であり、必然の事實である。 らを救 こそ彼 人間 3 れらを創造して行くのであ の法 76 0 は工作のために作られては 則 は より外の 運命を鍛へしめつ、神の道に至らしめるからである。 彼れらの 最 何 36 も美しい作 0 でも る。 ない。『鐵 ゐない。工作が人間の為めにつくられてゐる。 世界は 物を一つ一つ毀ち、 まだ鍍金 の法 さらで無いものは悉く悪である。 則』は彼れ 12 過ぎな 時代でとに古典時 らに創 い彼れ 意 鬪爭は火を以 と創 らを投ずべき の建

青年はから、自分の心に聞いて見る。『銀行家で立たらか。株屋になららか。文學者で立たらか。樂屋 にならうか』と。そして多數の作家は、才能に秀でた銀行家と技倆の勝れた株屋を仕上げたのと同じ つて文學者を評價しようとする。かくして社會に是認される天才は、その年收に比例するのである。 今日までは天職と信じて書いた。使命と信じて書いた。しかるに、今日よりは打算によつて書く。

まつた。一 文學 團 種 體 の骨董として残ってゐるば の文學もまた、 金儲け以外にはその根を絶たれ カン りである。 其處 には何らの生々 てゐる。今はたい言葉の遊戲となつてし した表白 ds Vo

理由によつて成功して行く。

靈魂 やらなも でに人間 め得らるゝものこそ真の精神の價値ではな 金の は涸 ための れ果てた靈魂からは摑まれない。自らなる精神の生きた血に動く情緒と愛の力とによつて認 味を失つた人をしてその時代を表白せしめようとする者が何處にあらう。現代に生きてゐる のであ 遊 る。 戲 の幕 ブリユ カゴ 下りると、 ンチエ ルの口吻に從 遊戲 0) ための遊戲 V カ>。 へば、『彼らは人間味を失つた』かのやらに見える。す が現はれる。 作家 はその創造を外から見てゐる

るためには第 西 殘 何 現代の文學は如何 3 ひとつとして血となり肉となつてゐない文學は果して何の文學であらうか。 カン 17 移 しれない。 『一人の人間』でなくてはならぬ。 はど賑かであつても全くその意義を失つて 2 カン し作家 の文學 よに絶對 に文體家の文學であつてはならな ねるの であ る。 個人も、國 文體家 170 家の 作家とな

民も、

何らして説明したらい、のであらうか

事實であるとは 現代に於いて何やら特殊な人工的な社會生活の狹小な境域から出る紛糾の雑音となり終つたことは、 いへ餘 りの不思議では無 いか。われしては文學が國民全體から根絶されるとい

くれるものを考へる。これが彼れらの方針となってしまつた。 てとを知ればそれで可いのである。 やらに な w つた 0 13 へ原因 で め つたの 問題 あ いた言葉に從 6 はもはや、 は明白である。それは何よりも先づ文學が工藝となつたことである。ラ・ブリユイ 初めは ある。 全體として見るとさに、 口に へば、現代の人々は 何物かを言はなければならないといふ點に 食を與 アルベエル・ボナアルの言葉を假りていへば、『自分は君 ~ > やがては身に富を與へるべき職 『書物を書く仕事を時計を造る仕事と撰ばない』やらに 近代文學は滋養を目的とした文學にすぎな あるの 業でなければならぬと考へる ではな V, 公衆の欲する の買つて 工 J.

識 操 かず **淫らな文字に充ちてゐる。年毎に一冊二冊の淫猥文學は必ず出版される。そして彼れらは世間** て見て、 をもい 切であ 推移 は 作家は目さゝの善い商人と同じやらに、先づ公衆の胸中を推し量つて見る。自分の生産品を味はせ 有 つて すれば、それに從つて商品も變へてゆく。淫猥文學から人道的な文學に移るだけの貞 直 る。 者し歡迎されゝばます~~氣を配つて大袈裟に供給しようとする。賣行きのよい 截な批判をも有つてはゐない。 ねるのである。 小說家 も戲 曲 だから彼れらにとつては、成功することが一切であり、 家も、 微細 な人情の 社會は指して、某は一萬圓の年收がある、某は五千圓だとい 觀察眼をも有つてゐなけれ は、 社會 富をつくることが 12 書物は 操らし 流行

た。 見るやうになって來た。競賣を行らねばならなくなった。永久に競賣しなければならなくなった。 72 てゐた臭味を嗅ぎ分けられるやらになる。それから、しつてい息苦しい死のくさみ!』 妙とに包まれた輝 た。空虚 なくなった。 な、しかも滑稽な光景であった ゞ利己的 自分の上にも、公衆の上にも。 :は な享樂より外は何物もない!からした藝術の中に進めば進むだけ、何とはなく鼻につい したない女の問題に導かれた。これらの人々の間にあつては一切が空虚な享樂に向けられ 空虚· 最も胸を刺さなければならない問題は巧みな遊戲となつた。一切が婦人の問題 かしい藝術!しかもそれは骸骨である。すべてそれらは虚無に走るのみである。 その言葉こそ一つの謎であつた。思想と感覺のすさび切つた淫樂! ……深く沈潜する事を忘れた彼れらは、大膽に行く處まで行 ――彼れらは彼れらの血を絞つた。 臓腑を曝露した。 それ < 機智と巧 事 に導かれ カゴ は 出

なぜなら、 面するとき、何人が心寂 50 4 滑 に佛蘭 5 佛蘭西の生命は他にあるから。 カン な心 一西の多くの哲人と文豪が『人』として思索したこと、『生』の解釋を續けてゐたこと、彼 明るい頭腦とを以つて、 しく感ぜずにゐることができょう。しかしながら絶望することは正しくない。 全歐洲に君臨した事を憶ひつ、現代佛蘭西文學の

本當であつた。マダム・ド・スタールの時代においてこそ本當であつた。今は『文學』と『生活』と、 はや今日となつて『文學は社會の表現である』と云ふを要しない。それは、その昔に於

變化、 笑ふべき限りである。 何 亂で あ 表 3 の塊を、 人的絕叫 人がそれ 順を以つて溫 文學界の ゝる。 あらうか。 この 狂つた羅針盤 カゴ さも作品らしく世間の人に見せつける類 詩の材料 無政 を國民性の行進の象徴として見ることができょう。 商賣人の文學、 あらう。 それは閑散無為の道樂息子が、 府 順 な 的傾向には、 唯一度だけ詩を作つて過つて名を得た作家は直ちに の指針、この『歡喜なき感激』を何人が眞面目になつて分かつことができよう。 が缺乏してくると彼等はそこで耻しげもなく無理な生活をついける。 顧 客に賣 道化役者の文學の中に『佛蘭西』を發見しようとすることこそ却つて真に 5 市場の喧し 情熱をも つて情 い賣り聲ほどの面白さと賑かさとは保たれてゐる。 閑 熱の ひではな つぶしに 顧客 ひね V 8 呼 か。さうした作 すべてが不自然な人工である。 ぶ聲 りまは が果して藝術 した、 『詩の店』を開 氣違 物の 何 U と思想とに じみた 處 に國 V その 貧 て製作にと 民 弱 卽 生 贋物で な石膏 した しかし 活 0

いまで正 P 7 しい作のうちで斯う云つてゐる。 オランは 如何なる言葉をもって現代の文學を評したか。かれは 『廣場の市』といふ恐ろ

カン を生み出さうとして頭を苦しめてゐた。そして彼れらはいつもしくやたらに作物を生み出 れらは如何なる皿にも目を吳れなくなつた。そしてつひには最も淫逸な快樂の想像を燻んだものと 彼れらはもはや云ふべき事をもたない。何か新しい、ます~~不條理な、 ます~不相 應な何物か して行く。

吉

田

絃

鄍

啄木鳥! 啄木鳥!

お前はなぜ一度も美しい唄をうたはないのだ。

お前の胸の底にはどんな懊惱が湛へられてあるのだらう。

お前はなぜ唄はな V のだ。

木を啄くお 前の嘴からは血が流れてゐる。

お前には唄はない。 けれどもお前の啄木の音は鸚鵡の唄よりも尊い。

り出された言葉として最も人間らしい人間の叫びではな ---イ 革命家としてのクリスト、舊い宗教、舊い道徳に對する反抗者としてのクリストの生活の底から絞 エス之に曰ひけるは狐は穴あり天空の鳥は巢あり、されど人の子は枕するところなし。』 カン。

V

革命家といふ言葉のうちにはいろして意味が いイズムを主張するものも、 革命家である。 けれども新しい あ 5 種 類 力了 イズムが私たちの人生をより温 かる。 たとへば舊 S イ ズ 2 17 對 ひある て新

る

12

過

ぎな

V

0

であ

眼を 書物 弘 2 0 世 T 見るとき、 界』と『實際 佛 の世 蘭 西 界 現代の新 とを注 しき人々は、 意 して區 別しなけれ た が解 *L ば ばならない時 なれれ 12 なつて自己の運命を追 代となって る る。 求 カ> らし 7 た 7

0 混 L 0) 意味 般生活 Ù 亂 際 道しか わ と國 如何 れー一はからした行き方が常道を逸したものである事と知つてゐる。そしてまた文學の道と生活 ら國 を不 互 民 17 の危機の典型となるところにこそ、真の藝術がある事を知つてゐる。だからわれくしは、 確 民 生 しても文學と國民生活とを區別して見なければならない。 に相逢 實に 生 活 活 0 意 混 ふ處にこそ、個人生活の危機が、知能 0 混 亂 識 した事 亂 とをさ は、 へ温 カン 歸するところ文學 らして起こつた悲 別して見なけれ () L ばならな 『國粹喪失』によつて齎らされた混亂である。『現代』 むべき混亂であ の力と熱烈な卒直とを俟つて、隱され Co 欺 滿 る。 そして尚は進んでは、文學界の 寄生、 放念、 狂暴、 それらの

混 だす力であ 力こそ、以上の混亂によつて與へらるべき秩序の精神であらう。 0) 2 0 角には、 混 配こそや やが らら。 て死ら 新し かが て現代佛蘭 い文學の んとする時 曙光がはの見えてゐる。 西 0 代に向 不安を説き明 つて、活動と勇氣との糧を與へるものであらう。 かしてゐる。 思ふに此の新しい文學のうち 2 實行の論理と義務 77 > しながら、 それ の精神 と同 12 燃え 時 すでに地 にまた カコ bf 7 この 70 る 本

カ> なければならない。 は てしな い混 亂 カ> らして搾り出された新文學と新精神 その 何 ものであるかは筆をあらた めて説

ねる。

36 い反抗である。けれども彼れ一人のための要求の上に立つた呼び聲である時、 混じて 6 そこには既に不純

る時隣人の 自 が窮乏の極にある時隣人の貧困をあはれむことは容易い。自分が暖い衣と豊かな 窮乏を察することは困難である。私たちが真の宗教家たり、革命家たり得 ないい 肉を持 0) つてね

らな の宗教家 0 は たり、 あるま 真の革命家たることを希望するものは畢 3 カン 竟クリス トの生活さながらでなけ ればな

ゆる。

人 7 は 枕するところなしと言つたクリストの生活まで行くのでなければ真實の革命家は生れ得な

V

のでは

あるまい

2 リストは ら恐らく彼れは無 生孤獨であつた、彼れは一つの住宅をも持たなかつた。 一物の乞丐のやうな生活を送つてゐたのではあるまい 彼れがもし今日生きてゐたと カ>。

愛、一人者の愛、それが " リストも一生家を成さなかつた。彼れは貧しい人々の友であ 救世者としての第 の資格 0 は あ るま 3 つつた。 釋領も家を捨 てた。 孤

樂しまん 本 凡 人の生活 カジ ために生れてなる。 は樂し S 木 1 2 偉人は苦しまむがために生きてゐる。 のうち 12 あ る。 偉人の 生活 は悲惨なる孤獨のうちに生れ 十字架を負はんがために生きて 3 平凡

記憶しなければならぬ

敵となるやうな革命は最も憎むべき革命であ もの、 より真實なものとなさないかぎりは、 革命 る。 は無意義である。今日の人民の味方が明日 は 人民の

294 ク リストは 弟子に賣られたる革命家であった。 けれども古來弟子を賣つた革命家の多かつたことも

に生ける革命家は何時も孤獨であつた。人類を愛したる革命家は人類の刄に斃れた。古來人々は

第 一の鐘を打つ者は常に兄弟の呪咀を浴せられた。 常に彼れ等の恩人を敵として滅した。

命家はど憎む 新 しき酒 は新しき革嚢に容れなければならね。 1 からか 0 は ない。 新しき革靈のみをかゝげて舊き酒を强ひんとする革

けれども新しい人格としてのクリストが果して幾人あるであらう? て始めて意義を持つことができた。私たちは今日餘りに多くの 新し いイ ズ ムには 新しい人格がなければならぬ。 イエ ス の新しい福 新しい 香は イズムを見出すことができる。 イエ スの 新 L

5 た。そこに始めて革命反抗の意義があった。けれどもその『自由』がやがて個我々々のための『自由』 『自由を與へよ、然らずんば死を』と叫んだ人々のこゝろのうちには博愛なる觀念が强く動 ふ意味に用ひられた時、 彼れ等の共和制は腐敗した。

٠:

ンを與へよと叫ぶ者がある。

それが全民族のために、全人類のための叫びであるならば、それは

い人格により いてわ 98

くなる。 3 ッグ いものであることを知らないのであらうか。 3 ンといふ言葉はど感じの悪いものはない。 ツ シ 3 とは 傳導師 を製造するところであるやらにおもはれる。宗教は製造することの 更らに傳道會社など、譯される時に嘔吐を催し

國 0) 傳導會社から送られて來る所謂傳導師なるものを見るごとに私は何時も宗教の事務家といふ

感じを懐 かずに は居れない。

できな

系統的 ナ ザレ に組織立てる機械によりて甘き砂糖となりて販賣せられてゐる! の大工 の子イエスよ、 おん身の折々の赤貧の涙は今や多くの豊かなるビス ネ ス メン によりて

私は から叫びたい。

寂しい心を知らうとつとめるものはなかつた。みんなが一種の interest を持つて彼れに接した。 な心を持 は 可 interestの上に集って來る周圍の人々を憎むだ。 るとき、 つて彼れを見た。 或る男の作品 彼れは が當局の忌諱に觸れたといふ噂があつた。彼れを知つた多くの人々は色々 二十日餘りを不快な一室に閉ぢこもつて考へてゐた。 誰れ も彼 彼れ れの

彼 れはその時面と向つて彼れの作を攻撃して吳れた一人の先輩を最も懐しいとおも

人 々がたかつてゐた。一人の巡査と二人の若い男が水棹を持つて濁つた水を掻きまぜてゐた。 座の通りから左 に折れて出雲橋の袂 にか ,つたときであった。 正午 ちかくだつた。 橋の欄 干には

私の心

は

から叫ぶことが

か る。

枚の衣を脱 いで赤裸々な路傍の人に與へることのできぬ自分に何で神をあがめる資格が

俺は倘つと豐かな生活をやつて見たい!

同 時にこのやうな慾望が湧いて來る。

私 はクリス トや日蓮や幾多の乞丐のやうな貧しい生活の聖徒たちを懐しくおもふ。

からであ 歐羅巴や亞米利加からは神の子は生れ得ない。それは神の國と共に富の國を建設しようとしてゐる

か、富者となって天國の餓鬼となるかでなければならぬ。

リストは人は二人の主に仕ふることはできないと言つた。

力

やうになつた 貧人の友であるクリス トの数は歐羅巴に傳へられて貧人の友であることよりは富める人の友である

の發芽は亞細亞の地にかぎられてゐるやうにおもはれる。

佛者の教が、奈良や京都の大伽藍の奥にあがめられた時その生命を失つた。 二 ヤの貧人の宗教がローマの黄金の殿堂にあがめられた時にそれは生命を失つた、印度の寂しい

宗教はどこまでも貧人の宗教であらしめたい。

人間は乞丐になって靈の國の王となる

私は hero でありたい、historian ではありたくない。

日三日續けさまに眠れないやらな苦病がある時も、彼れはすや!~と眠つてゐた。 彼 の男は非常に私を愛してゐた。私は彼れを最も愛すべき友人として愛してゐた。 けれども私が二

お前はなぜ俺と同じやらに眼をさましてゐないのだ。 私はから言って友を責めた。友は静かにらなづいた。 彼れはまた眠りに陷ちてゐた。 俺の悲しみはお前の悲しみではないか。

私の 周 圍 には未だ嘗て一度も結婚といふやうな花やかな集合はなかつた。年々たゞ寂しい人々の死

のみが繰り返されて私の前を徂徠する。

尺のアルプスの一角に立つた彼れ、 ある可憐 戰爭を肯定したといふので多くの人々に呪はれてゐるニイチエは非常にセンチメンタルなところの な男のやうにおもはれる。氣の弱いやさしい男であつたやらにおもはれてならね。海拔六千 ロシャの女を見送つて泣いてゐた彼れ。

私はこのごろ祈らずには居れない寂しさを感じてゐる。そして祈る言葉のない寂しさを感じてゐる。

誰れをも愛せなければならぬことを私は知つてゐる。けれどもその愛が不斷のものでない悲しみを

水死人でせう。

女でせうか、男でせら?

人々の眼には恐怖と好奇の心とが輝いてゐた。

と笑った。私も笑った。 そしてそれが男でもなく、女でもなく、たいの野良猫であることが分つたときに人々は一緒にどつ

私の心が急に淋しくなつて來た。

人間といふ殘忍な動物!

私はなぜ猫の死を笑つたのだらう!

も私はそれ等の人々が餘りに多く自分に期待されてゐることを想へる時に、自分といふものが に自分と同じ寂しい道を歩いてゐる人のあることに言ひ知れぬ心强さと慕はしさとを感ずる。 れを自分たちの ごとに対影破壊の悲劇を

人々に實験させる自分の貧しい實際生活を悲しまずには居られない。 末 知の人から自分の書いたものに對して共鳴を感じたことを書いて寄越されるごとに私はせめてそ そら恐ろしくもなる。そして私は自分の作を讀むでくれた人々から文通や面接を寛められる プロフェ ッシ 3 ンに對する慰めともし、 はげみとも感じてゐる。そして世界の H 何 耻 れど 處 カン

さらに悲しき雨は襲ひ來るべし。 されどわが前の陽もやがて退さ、

わが小さき心の海の上を。 もろしの悲しき雨は過ぎゆきぬ

飢えとやまひと罪のなげきは過ぎゆきね、 わがくるほしかりし胸のおもてを。

さあをなる煙さへ立ちのぼれり、わが心いまは晴れて風さへ吹かず、

この香りよき感謝の犠牲をさっぐべき。あいわれ何ものい前に祭壇をきづき、

RB

さらに苦しき飢とせめと誘惑と、 いまだ甞めざりし歎さは襲い來るべし。

その時わか心の海よ、さわぎ立たず、 動 か以星のでとくしづかなれかし。

世を終ふるまで喜びたのしまん。 かくてわれ過ぎゆくもろしへの雨をしのぎ、

夜

たのしみ、笑ひ、或は怒るなど、 魂のうちにひそむことさへ深く感ぜず、 畫はわれ空しき思に浮き浮きとして、 えきもなく過ぎゆく日影を送れども、 夜深くたいひとりふしどに默し、

佐

藤

2 6

0 返

刹

那 7

永

續

的

で

あ

n

1)

ス

ŀ

0

と私 だ V

0 は

愛 自

0 分

H

ち

的

は T

永續

的

1 CX

刹 23

那 的

0

爱

0)

12

あ あ

る 3

0

で 願 <

を喚

せか

せる

E 3

カゴ

70 カジ

る。

どん

な悪

人

6 17

或

る

刹

那

カン

私 は 7 時 0 K 客 る 神 觀 的 15 13 感 謝 神 0) せ ず 賃 在 は を 信 居 5 Ŀ ようとする n ないことが あ 7 僞 6 固 7 2 る自 何 等 カン よろ

方ろい行臺リや貴物る於書を還土園面に作く上てを族さ 。けば譯にの文の却でなにこ以社れ恐る材せ喜沙學 味・技しい劇間や下族氣のあ輕々喜田 をは巧てふとに「層のと實る妙の劇大 持れやはやな妖間勞結をシ な知の學 るれ一出 筆るつ版 平によりてこってある。 がある。 坪

ク劇すめで代 のる内

こ多で舞あしるにあに本書、博英

がとのじ

を沙沙 保保は すの研 三究 め百家 す年に る祭とり (定は見 慣れの 一、三五)がすことの (0) かて る今日 多も くの 00 讀あ 一近

I V > 3 1 思 想 0

は居られないにどエレンケイを明想は、エレンケイが我が邦に紹介されてから 随分久しいことにな居られないにどエレンケイを現るでしているのでは、ころである。はれどもまだ纒つてエレンケイを現界に提供である。またエレンケイを現界に提供である。またエレンケイの思想に深い崇拝の念を思想をである。またエレンケイの思想に深い崇拝の念を思想をしていては久とされているといった。今著者によりてこの一本が我が財人思ふところである。またエレンケイの思想に深い崇拝の念をと思ふところである。とはエレンケイの思想に深い崇拝の念をと思ふところである。は、エレンケイの思想に深い崇拝の念をと思ふところである。は、エレンケイの思想に深い崇拝の念をおけているとは殊に後等する人々の一意すべき好著である。(定價九〇)

彼

には汝の

後に立てり、

然り、

わが仇よ!

病みし時に

墓標彼處にわれを待つ…… 造られし一基の

追へよ、 かれを彼處に追はむとならば かれを彼處に追ばむとならば

信仰の淺さをとがめじかかか胸を揺るがし

笑つて過ぎむ。 仰点ぎて汝の足もとを 汝悪辣にわれを苦しむるとも

前號「憧憬と沈默」の中、もう手をしかとはもろ手をしつか

との誤植

城

北

米

H

中

おゝわが仇よ、

わが肉體の仇よ!

或はわれ真に實在の手を捉 こめ 0) 何者とも定めがたさも 寂 かくて嚴そかなる夜は過ぎゆき、 空しき影 的 > わ n 死 く光 かみに脈うついのちさへいとが奇しく、 れ今死の恐れ な と思 る h 目 A) カゴ る神も生き生きとして、 豫 魂と語る時 感 のゆゑにおの いとが鋭どく 0 ゝ前にひれふし へ得たるか。 こくや、 AJ

父と子

ふたゝび氣がるの晝はわれに來る。

子は父の罪をいかりて、

子も同じ罪を犯しね。知らぬまに、罪の遺傳か、

かくて子はかへり來ぬ故郷の家に、

父もまたその昔子を追ひゆきて、されどそは遅かりき、いと遅かりき。

生き死にも知らぬなり、草枕旅寝のはては、

にも知らねなりけり。

農民の言葉

平易な率直な言葉で著者の偽らない農村に於ける生活の詩激し得たことを其儘に體現したにすぎない。そしてそれが自激し得たことを其儘に體現したにすぎない。そしてそれが自激し得たことを其儘に體現したにすぎない。そしてそれが自激し得たことを其儘に體現したにすぎない。そしてそれが自治の内容を暗示してゐる。
『この集に表れたものは凡て生活そのもの、中から、衷心感覚の内容を暗示してゐる。』著者のこの言葉はやがて本書の全性の内容を暗示してゐる。

未來な祝福したい。(定價五〇)
未來な祝福したい。(定價五〇)

題、 八〇七中塚直三宛八虚心集句稿と明記の

句數等適宜

冬風二雜立潮夕砂扱巖枯枯嵐 普 搔 を 磁野 何 枯 被 H 落 の焼 校 n 聖 流 3 3 畫 釣 牡 < し草 る 蠣 立 才 下檜 40 投 る 著葉 質 げ 殼 る ガ 0) 莢 研 雁 2 黄 高 鳴 元 0 0 H 北 な 鳴 蓎 退 N 0) b ¥2 空 風踊 6 0 0 る 面 光 兒 東 蒔 泪 III] 心 風色 水 風 な な せ びな る 82 82 12 12 12 12 12 す 6 6

藍 弟 蘇 眞 卜 梅 沙 木 泉 希 展 飛 南 銀 武 南 中衣 素 切 草來界道處金郎秀樹長溪蠻竹

鵬 鵬 帽 道 風 煤 家 手 間 秤 庭 兒 カゴ 鳴 樹 冬 艾 カン 日 12 套 0 沂 持 鳴 3 H た 3 歸 3 2 # ζ. 起 E 5 來 陽 る < n は 柳 脫 る 5 9 17 0 夜 步 群 药 à" j 0 出 居 ょ 曀 0 み 衆 家 ろ は 島 降 ろ 斡 6 せ 册 來 13 ح 12 8 仰 ح 誕 CK T 12 L 我 0 12 CK る カゴ 祭 0 道 靑 n 暮 6 船 る 0 ク 枯 手 大 0 菜 0 n 手 ŋ 灯 > 室 は 生 芝 立 行 觸 套 霙 濤 汧 明 3 2 5 < 0 n 克 ス n 寒 0 ば 力> 72 交 < 枯 た 夕 た す b 色 6 野 3 6 6

心

心集

碧

樓

ふことであ 波斯 灣に入つてゐる。然るに此のシアトエルアラブ河は百年に三尺づゝ波斯灣を る。 々上 次に有名なるナイ 流に溯りつゝある t ガラ瀑布 ので あ は毎 る。 年四 一寸づ、其絶壁を磨り減らして ねる。 埋 8) 2 わ す るところ

瀑布 * 人間 之を以て神となすてとは はなくて、一 多 だ大膽では \$2 南 るの 通 0) じて 6 は所有自 < 0) 位 之が 0 6 あ 如 南 あ る 置 は らは ある 法則を通じて顯 く自然は る つの 年 から天 又何 1 かい R 0; るので 物象 順序である。 故 不斷に變化 地 斯く考へ の根 自 より あ 然 不 本には絶大の理智もしくは意力 る。 22 i 可 カ> 更に ら超自然が生じたか。 能 なければ宇宙 るのである。 天地 故 6 してゐる。 發達 に自 あ の根本は統一せられ、 る。 然 した もし自 0 別言すれば自然界の根本 自然は決 物象 3 人生を考 のであ 然 カゴ 直 力 自然界の 神で して丸 接 るからである。 へることは不 吾人の ある いとか 叉天地の カジ 進化なる現象は自然界の 感 ならば ある譯 覺 四 可 0) 自然的 角 であ 生命 には一つの生命 人 對 能 いとか 間 象 と考 となる は何ぞやと云ふ問 る。 カゴ 現象に 統 ても るからと云つて、 斯 定の形を備 有) 17) 對し よろ る鰤定を下 る 法 カジ 有つて 根本に ては 則 を通 超 題 た 之が法 一大精 自然的 す E 16 起 俄 0 7 ので は る。 顯 神 其 則 0

於てか我 理 穀 7 解 0 故 に宇宙 發達 すれ 13 R なの は 12 3 超 は 人生の哲學的研 1 更に 神觀 自 V 然 か 大なる天才を要 は から 宗教 有 9 變する。 は 此 究には大天才を要するの 切を 自然と超自然とが 統 する。 して 何とな 考 へなけれ 協力して進歩發達する處に宗教がある n は であ 科 學や政 ばならな る 治や文學は要するに宇宙 他 V 0 方 カ> らである。 面 0) 發達 42 自然 天才を要するならば宗 の中 入生 (1) であ 1 (1) 法 一方 る 則を通 此 面

15 E T

何故 然ら る神觀を發表 に彼 がば神 はその とは 何 一姿を顯 した。 6 あるか。 而して彼 さないので 創世 等 記 內 0 あ には神は天地の 說 ららか。 ケ く所は、 崎 古來之に答 作 神 は見るべからず 創造者とし 鄍 へん カゴ 爲

基

致

を愛するの

数で

南

る。

普舟 千年

人

713 R

遙

カン

۲۴

 \mathcal{L} 3

0 0

觀 6

星 あ

臺を望ん

だ

Œ. =

フ

ラ

b

河

共に

r

iv 0)

メニ 城

7

42

を發

來

メ

ン

ボ

次 1 L

3

ア Ł"

の平 12 南 岸 に在

原を潤したのであ

るが、

雨々並行して南下し合してシ

アト 山 映 本 0) な

工

w 源 チ 平

アラブ河とな

高

V

來

は當 動し

時

海

つたのが今では餘

程

海

から

遠く距つ

ねる。

即ち日 へば

Ó 義

太

面

年 勿

隆 關

起

0

>

る。

叉彼

0

ネ ゥ

ヴェ

の高

塔 کے

バグ は

ダ 7

1

١,

壁を

じた 4

> ヴ 洋

ŋ

ス

河

と其 た海 し絶えず活

7

ねる。

一時

たりとも静止することがないのである。

自然とは一體何である

か。其は不變不動の物であるかと云

であ

る。

而

して實際在りと確

めらるゝ

ものは自然

の物象だけ

であると考ふる者

カゴ

じた。

然らば

ふに決してさらでは

Co

自

常

に變化

例

彼

家

0

放 然

事 は

を以て名

多 7 督

神學者

と宗教

家とか、

な

からざる者であるとい

A 種

0)

0 か

0

た。

然る

に近

世

12

至

り科學の

進歩すると共

に、 生

神

は軍

70 0

る は

力了 神

果して然

りとすれ

は R

同 を以て自然 じく十一 世紀には を征 服 し以て文明 チル の港 を建設 が繁昌を る。 せんとするに急であ 極 めた。 けれども彼等フ つて、 其文明の生命を æ. = シ p 人の得たる思想は人間の努力 為 す精神 に關 して

0

る。 を考ふるの 0 を果さずるのみか却つて幾度か敗戰の苦しみを嘗め、終には滅亡の悲しみに泣くやうになつたのであ 惠を受くること少く、 殭 彼等は考へた。人間の力には限りが有る。 6 つた時 猶太 12 人に至ってはさうではなかった。彼等はパレスタインの瘠地に住してゐたので、自然の恩 遑 カゴ 彼等の 無 カン 國は祭え、 さればと云つて國外に發展せんとすれば東にバビロン在 たのであ 彼等の宗教心の衰ふると共に彼 故に神の力に頼るの外はないと。 等の國 は滅 びた 0 り西南 彼等の宗教心 6 あ 12 埃及あつて志

は n あ 時 猶太人 代と民 全書の かが 族の 中 に記 斯くも苦しんで聖書を造つたと云ふことは文明史上看過すべからざる大事質と云はね 相違の され てあ みでは る猶太民族の宗教的實驗の中に我 なくして、 我々日 本 À が猶太人 程に苦しい 12 は幾多の 不 可解の 經驗を 點を見 味 は な 出 V カゴ 力 らで ح

會 國 は此 25 そこで我 に於てか 集まるのも一切の事に對する興味と責任とを特に强く感ぜんが為である。 的 我 々は 0) あ 5 輔 k 10 內在 は宇宙の根本の崇嚴偉大なる理性的意力が自然を通じて顯れ來るのを知るのである。 を歴史に於て見るのみならず、 る事 的なものとなつた。嘗ては雲の上の高き 所にあつた 神が今や我の 12 興 味 を持た ねばならね。 あらゆる方面 今や宗教的 と世 に於て見るのであ 俗 的 20 LI I 別はなくなった。 る。 此故 内に に我 12 あ 我 は るのであ 12 國 が教 家 的

らな 斯 神 720 は 那 P 0 丰 { 淮 ツ 12 あ 雄 1 於ては **F*** 步 7 大 せせ ると考 沢 など、云ふ經典をも作つたのである。 w 等の tj ざる 市市 國民は各~異れる神 る 的 天と云ふ思想 へられ 神 豫 砂 神 觀 言 觀 0 12 客 6 カゴ 其處 るやらに 到 により 南 達 つた L 12 カゴ た 早くから發達した。 7 カジ 發達したのである。 0 な R 觀を持つてゐた。 70 アブ 2 ホ あ 72 18 る 0 ラハム 0 觀 嘗て 念は より立法 は我 非常 我 然らば猶太教は何 叉彼の 日 とは何ぞや、 の外にあると考へられたエ 12 本に於ては 發達 者モーゼを經 削 した。 度 12 畢 於て 人間 かくて詩篇第百三十九篇 竟するに を貢獻 は 以 更に £ 夙 0 42 力 アモ 大我 自 たか。 我 あ ホハが ス、イザ より生 る 0 研 者 猾 究 カゴ 我の 神と考 太人 Ŀ カバ ·þ た 起 內 12 I. 0 36 9 17 記 神 V 7 0 へられ、 あ 7 : 6 ウ 觀 る所の n 7 36 あ ٠,٠ た 始 る。 __ P 支 め I

12 プ 為 ŀ 我 世 12 R る貢獻 B は 此 ٤, 12 12 於て當 の比較的 ン 12 時 B 大ならざるは地理 フ 尚 他 工 = 0 シ 諸 P 國 12 民 る各 カゴ 各 一異れ 的 ろの宗教 環象 る神観 によることが カジ 有り、 を持 神 9 多 觀 T V カゴ ねたことを考 0 有 で 0 あ た 30 0 6 あ ね る。 は 然 な も其等の宗教上 5 ¥2 卽 5 ジ

は を受くる 地 埃 中 及 物質的 海 は に瀕 こと豊か ナ イ であ し、盛んに海上に雄飛して商業に從事した。 n 河 0 であ 0 7 豊饒なる流域に位し、バ 其宗教 つた。 故に埃 も道 德 的 及に於ては靈魂 倫理 的 ビロンは 0 要素 不 に於て缺くる所が 滅の思想が メソ かくて西暦紀元前十六世紀にはシド 水 タミヤ 生じてゐた 平 有つたのである。 原 0 肥 にも拘らず、 沃 0 地 を占 又 め 其 フ 7 文明 共 t ンの市、 12 ---は 天 尚 惠 p

次のやうな恐るべき結果に陷るであらう。 ds の、中學校の生徒に適するもの、及び裏に高等の學生に適するもの等種 我 R が真に宗教心を得たか否かは、 も亦神 の内在であると。 新くて禪に入る人が多く所謂野狐禪となり。 我々の道徳的結果によって知られねばならぬ。 E く神にして内在ならば宇宙萬有 々あるやうなものであ 或は人を躓 は神の内在であ せし然らずんば かするが 我

行 も獨り我々の道徳的問題に至つては少しく之と異るのである 0 なす所であると説いた。我々も自然券に起る種々なる現象に於ては凡てを神の顯現と思ふ。けれど 嘗てスピノ ーザは善悪共に神より生ずると云つた。其他多くの汎神論者は何れる。善も悪も共に神

爲を敢てす

るに至るのである。

と云つてゐる。我々が真に神を味ひ之に仕ふるの精神に充ちてゐるならば前のやうな道德的 72 カゴ 不可能とならざるをえない。 じなければならない。 出來以やうにしてある。 我 のであ 心を清 々の心には良心 喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、 る。 リス くせんことを数へてゐる。又バウロはガラテャ書五章二十二節に於て、「靈の結ぶ所の果は 然るに此自由意志を濫用する者が有るから、人類の進步 þ र् あり、 「心の清き者は幸ひなり其人は神を見ることを得べければなり」と云つて先づ第 唯内觀の神を樂しむだけでは其人の靈的生命の進歩のみならず、人類の發達も 卽ち我々は皆自由意志を持つて 良智良能あり責任の觀念があつて、 温柔、樽節、かくの如き類を禁ずる法律はある事なし」 ねる。 我々をして欲するがまゝに振舞ふこと これあるがた は数々妨げられ めに K るの 類は進步して來 であ 結果を生

然しながら今日は科學の進歩せる時代である。我々は斯かる不健全なることをしなくとも神 無我の境に入るとか、超倫理的なことを考へるとか。又は何か狂氣沁みたことをせねばならぬや て然らば此宇宙根本の神と我との關係は如何。多くの人々は之を神秘不可思議と考ふるの餘 へてゐるが、これは大なる誤であると思ふ。嘗て米國に於てジョナザン・エドワードが復活を說 聽衆中の或る者は感激の餘り、獸のやうな唸を出して床の上を這つて歩いたと云ふ。

然に野生する稻もあるには有るが、もし理想的な收穫を得ようとすれば人間 之と同じやうに我々の信仰を維持し、之を發達せしむる為めには我々自ら大いに努めなければな いのである。 大なる努力を要する。例 出 一來る。 換言すれば我 即ち神は自然の法則を通じて顯れるやうに我 々の心理學の へば稻を作るにしても人間と天地と協力しなければならない。 法則や健康の法則を通じて神が 々の 肉體や精神の法則を通 顯れ 3 0) カジ 理想的に働 である。 故 かね 12 E 7 我 成程自 顯 ばなら 々の宗 れる 114

るも 然と神を説き宗教を教へるからである。 何故 のと高倫なるものとある。例へば遊戲にしても幼稚園の子供に適するもの小學校の兒童に適する に空漠たる宗教思想が立消の姿となつたか。即ち人間 則と手段とを適用せねばならぬ。宗教 我々は我 なにも種 なの K なる階 神觀を人間 段 の法則に適用することを知ずして、 カジ ある。 に應用するには、人性の發達に必要 從つて宗教 的實驗に 幼 唯漫 75

神は山の上に在ます

年頭の星島式旅行

洗濯に行つて來たい、でも一人行くのはつまらな やつと二三日小暇を 日 9) J 畫前 行つて居なかつた同君の家を訪れたのは十五 石川君でも誘つてやらふと、 られ の十月頃から今年の初めにかけて一日も家 6 あ ない面 つた 一倒な事件 得たの で、 12 カン 何處か 〉は 未だ年始の禮 9 7 へ一寸頭 居 72 私 割 1 行 居

動か JII 私の熱心な誘いにより年分比も動きかけて居 近 君 型い中母君か上京 名の意志は、少り す事 が出來ず、私は一人で行く事に決心し 少し風邪の氣味が 京せられると云ふ理由 あ 3 0 で、終 と、そ た

行つてから方向でも定めようと、東京驛に行って、

構內 ŀ る中で、 の割引切符發賣 箱 語所の廣告を讀むで廻った、 行 根 なら洋服 にて 諷 訪湖 でなければと終に修禪寺行 星 の廣告が最も心を引いた、 スケート行と 伊豆修禪寺 色 なと澤 則 と定 Ш 溫 ス

泉

は聞 12 と云ふ方であ で小學校の方を受持つて居られる同郷の那須さん ると同列車 引の往復切符を手に入れた。 藤澤に行くと云つて居られ 時四 いて居た同校出 十分濱松行の列車に乗車 の中に知 る、 大橋さんの宅でよくお名前 身の田村さんと云ふ方と一所 人の顔を見出 る。 した、女子 して品川ま 大學 だけ でく

尼寺に七十何歳とかにならる「エライ尼僧を 訪問せらるのだと云事、暫らく彼是話してる間に田村さんの私淑して居なさる 鵠沼の『多分病氣見舞でしょう』とあて「見たが『イーエ違ひます』との

め

んば我々 故 に我 0 々は内在 宗教 の價値 の神を見ると同時に之と協力して現世をより善きものと努力せねばならぬ。 は甚だ少なくなる。

を充たされ、 は諸君が能く讀み、 以上私は大なる問題を極めて簡單に説いた。これは諸君の前に提出せられたる一の宿頭である。 向上し、 同時に之を以て他を益するの人となられんことを希ふ。 一箇の有機體の如くになって進歩し、 能く考へ、能く行ふの人であらんことを望む。 成長して行くのである。 私は諸君 斯て我々の宗教生活は次第に發 カゴ 此 內在 0 神 によりて心 私

臺灣角板山 梶 Ц 周 祐

粉 雪 40 すり 5 ~ る 0 松 夢 原 ょ。 越し 12 黑 £ 海 0 折 R 見 え

Ł 雪 吹 3. 雪 L ---7 あ 9 小 b 島 を 見 返 b 0 峠 0 茶 屋 は

m 常 は 夏 凩 0 す 島 7 غ Ž; V E Ш 3 深 み 冬さ 9

> 四 9 0 緒 查 高 打 なら 嘯 计 ば Ш ž E j

麓 6 B 72 0 2 Ш 9 雨 霧 小 72 0 島 け 海 0 CK 原 2: 來 Ł る。 电 Ł X

12

浮

X

出

黑 烟 天 1= 冲 す る 形 2 7 狹 霧 2 め 72 6 樟

0 神 0 木。

木 17 0 魂 囁 P < 300 聽 け『今日 马亦 樟 0

老

地 抽 水 0 カジ そす 5 切 9 0 m 斧 倒 3 0 響 32 0 ¥2,

0

命

F.

刻

35

心

來

5

つた。 とこ駄洒落文句の葉書五六枚、食事しながら筆取 伊豆國行かん哉久々によい心地に御座候』とやつ

十六日谷の水音に眼醒され 心地よい朝湯した後所謂修禪寺のおから小松原君兄弟が來て居る。 は、國隊でやつて來たなと思つたら、果してさうであつた。 朝の中立つて途中見物しながら歸るたら、果してさうであつた。 朝の中立つて途中見物しながら歸るたら、果してさうであった。 朝の中立つて途中見物しながら歸るたと云ふから私も、名にしては案外修禪寺はつまらなく 思つたのでと云ふから私も、名にしては案外修禪寺はつまらなく 思つたのでに大仁發とある、 未だ一時間餘りある、 さうし、犬養さんの別莊に大仁發とある、 未だ一時間餘りある、 さうし、犬養さんの別莊に大仁發とある、 未だ一時間餘りある、 さうし、犬養さんの別莊に大仁致とある。

が出來るかい』
「オイこれから長岡へ行つて大仁發十時牛の汽車に 間に合せる事

「さめ南條に出るとしましてやつとこですなあ」

『いくらで行く』

取れるのですかし取れるのですかし

ていや、一寸大養さんの別莊を見さへすればよいのだし

『ふし、其代り若し遅れたら五十錢しかやらないよ』 『少しきばつて下されば是非お間に合せますが』

や!、思ふ程、やがて長岡の近くで何とか川の渡しにかっつた。『よろしい、まぬりましょう』といや走つた!~乘つてる私がひ

『オーイ急ぐんだ――早く廻はしてくれ、 其代り渡錢倍ぶんばる渡船は向の岸に居る、車やさんはあせりながら。

こう。 「さあどの家でしょう、あちらへ行つて尋ねて來いた五六軒續いて建つて居る別莊の前までそれこ 事夫は又も走るは~、小學校の近くにあると聞 事夫は又も走るは~、小學校の近くにあると聞 をヘビーで走つた樣だ。

『さあどの家でしょう、あちらへ行つて尋ねて來ましよう』と車やの云ふ直ぐ側に『二升庵』と云ます、犬養さんの別莊はこなたで御座いますか』と大きな聲して尋ねたかと思ふと、すぐ静かな女と大きな聲して尋ねたかと思ふと、すぐ静かな女と大きな聲して尋ねたかと思ふと、すぐ静かな女と大きな聲して尋ねたかと思ふと、すぐ静かな女と大きな聲して尋ねたかと思ふと、すぐ静かな女と大きな聲して尋ねたかと思ふと、すぐ静かな女と大きな聲して尋ねたかと思ふと、すぐ静かな女と大きな聲して

犬養の奥さんである。 屋の障子を開いて出て來られたのは思ひがけない屋の障子を開いて出て來られたのは思ひがけない

から一寸お構へだけでも拜見してと思ひまして」皆様お歸京だらうとは存じましたが、 折角近所まで参りました「おや、奥さんまだこちらにお居でになつたのですか、 私はもう

くなってくれ」と思った外は、助さん格さんに気を取られ、函根 崎を通る時、『教友中島君の此頃の様子はどうかしらむ、無沙汰を 門記や荒木又右衞門なんど面白い物語りに讀み耽り、汽車が茅ケ 三島に着いたのはもう日はとつぶり暮れた頃であつた。 此邊りか上下する私は駿河とか、裾野とか初めて止まる驛か見て のトンネルで讃みにく、なつた迄は夢中で通った、何時も急行で してすまの事だ、山本君は歸つたか知らむ、二人の秀才、早くよ 樂しそうな二人の方にお別れしてから 私は先き買つた講談本の貰 い事を考へて居たら汽車は早や藤澤についた。 淋しそうなそして にやるのだらう、 れて一組買つた、田村さんはあれた自分で讀むのか知らむ、 に十組か十五組か質れた、田村さんは二組も買った、私もつらさ 色々の講談本都合合せて十册これが只の十錢、 変れた!〜見る間 内の口上付物賣りが始まつた、中々うまい事を饒舌るものである、 れなかつた。汽車が横濱をすぎる頃東海道線では珍らしい、列車 る田村さんの身上など想像して見て、一種の敬意を感ぜずには居 大層元氣に快活に見ゆる事や。 又那須さんや大橋さんの友達であ 私は那須さんの過去の事や小供相手のためが近頃 尼寺に講談本とはちと調和を缺ぐしなど下らな

遊覽が來て騒がしいとの事であつたから。 れ、結局薬屋の別莊と云ふ事に定めた。本店の方は一鐡道院の團隊 るか少しも知らなかつた私は馬車の中で同薬の客から色々数へら たる山村を目下にガターへと上つて行く、修禪寺にどんな宿があ 八時であつた、大仁から修禪寺までは乘合馬車、久々に郷里に似 三島驛で駿豆鐵道の輕便列車に乘換して大仁に下りた時は彼是

> シック風の高い西洋建が見える。 馬車はもう修禪寺村にはいつた。町の人口の山の端に當つて、

んとなくい、心持ちである。 る。演説會でもあるのだな、 教會に相違ない何派だらう、今日は土曜日なのに燈りがついて や歌の壁が聞えて居る、來る早々何

の客は尚進んで行つた。 馬車は菊屋の別莊前に止つた、私一人下りて他

下の橋はすばらしい長いものである。 る、玄關から客室まで一谷越ゆる菊屋の別莊の廊 『御案内五十九番』もうちやんと品定めしてやが

事としよう。 どれ湯にでも温まつて、ゆつくり空腹を満たす

の塵を洗ひ去つた。 外には谷間流るゝ水の音が聞えて居る、久々に都 なり遅いので他の客は居らず静かなものであ 静座をやつて見たり、實に好い氣持であつた。可 びり湯槽の中で仰向いたり、 谷間にある浴室は可なりよく出來て居る。のん お湯の中で岸本式の 3000

出してやらうと、 「溫き神の泉に洗はれて心は既に修禪寺」 どれ内ケ崎さんや其他に繪葉書でも何か書いて

明日は

拂つて前を素通り、それより松並木を目標に山の裾まで歩いて行 まわりまするしときた。 つた。これから坂にか、ると云ふ所で子供を背質つた老百姓が、 もついて居る。東京に居らる、石川さん夫婦に一寸暗默の敬意を 『旦那ー山越えなさるのなら馬に召しては如何ですが、 お安すく

こいつは風雅だ面白 これはしたり又、ことでカリエーチブだ、箱根八里は馬で越す、

ておくんなさんかし していくらで行って臭れるのかし は今時分歸りの仕事もありませず、「宿」まで二圓五十錢、きばつ

「宿」と云へば何處やら知らず只元箱根と云ふ事な聞き覺えて居

それなら「宿」まで二圓でまぬりましょう」ときた、何んだか知ら 「旦那、本箱根といや――」宿」より半道も向ふでする、よろしい 『え箱根まで二圓なら乘つてもよい』とあてづぼうを云つて見た。

と先きの百姓さんすつかり身仕度して、荷馬車をひく様なきたない る行つて居ようと一二町程上つて 稍平坦な所に出たかと思ふ時道 てしまつた。「これでは愈々馬でなくちや駄目だ」と後を見返る 「よしーへそれで行く事としょう」と約束した。 パイに敷きつめてある圓い石にけつまづいて 下駄の鼻緒を切つ 百姓は仕度をしに子供を負つて我家に走つて歸る、私はゆるゆ 其上に敷布圏を二つに折つてのせてヒョ

下りと云ふ所まで歩いて上つた。雪は益々ひどく

左に富士の真白き姿を見つ、左に伊豆天城の峰 出發の際には想像だにせなかつた痛快事であ えた箱根の關を産れて初めての馬乗り姿全く昨 快であつた。中腹山中と云ふ邊りまで登つた頃今 ら、ハイヨーーと上つて行く。實に近頃にない愉 を眺め、三抱へも四抱へもある様な大きな松の並 **空は青く日は暖かい、まるで春の様な天氣である。** 敷つめたものだ、 姿は随分 暫らく歩まうと下駄の 馬 に雪が降り出して見るまに外套の上は白くなつた 風さへ吹き來て中々寒くなつて來た、何んとか云 迄一點の雲なく晴れて 木の間を、馬方より色々と昔の物語りを聞きな いた。馬は大きな藁鞍をはかされて居る。音に まで四里の 袴をはいてマントを着た六尺男が其れに跨つた に乗つて居てはあまり足先が冷いものだから、 Ē 間在全部 い格好であつたと思ふ。よくもまあ 一の見晴し 河原で拾つた様な圓い石を「宿」 コロ人敷いてあるのには驚 鼻緒をたてさして、是より 居た空は俄に白雲蔽ひ冷き 0 よい所に着い た頃は俄 H

二人でからやつて居るのですよ 歸りましたが妾は少しまだ身體が悪るいものですから、 りいいさうですよ、主人は議會もそろし、始まりますから先日 ておねでなさいよ、それはここの湯はいこのですよ、修禪寺のよ まありくよくお出でになった。ゆるしくお湯にでも召して宿 子供と

先きの車やの意氣込の張 と親切に云つて下さるので大分心は動いた 松原君にも一寸あい云つてお らを崩すも可愛さらだし いたし ものと

二升庵と申すのは如何云ふ意味なのです』 つつで其處此處を見物して歸りたいと思ひますから・・・・・時に 折角ですが又寄せて載きます、今日はこれから團體と 一所にな

昨 風 1 思 一大養に聞いて御覽なさいな・・・何んでもれ。 夜の V はれ な建物に 天下の 一米何升とか云つて居たのださうですよ あるが、それにしても、まさか「二升」とは 宿 10 如何にも暖かさらな小ぢんまりとした書院 政治家の別莊としては、實に質素なもの V より餘 が二斗庵ぐらゐな構である。 段下つて、 程 心地 さつばりとした浴室 がよささらであった、 此邊りの土地は一 日當りの は 私

> れる一季つてから又クリエ 返して今一 向小松原君の顔 私も愉快 L さん汗ふきながら大滿 合つた。私は たものだ。でもてゝらが 12 度二升庵に御邪魔しようか、まゝよ 思つて、汽 一奮發 は 見えな ___ 車の 圓を彼れに提供 足 いナーンだ、 徐程 1 著いたのを見ると、 とんだ物數奇な シ 3 クリエ ンだ。 した、 これなら引 ーチブだと 金使 車

爾次喜多の氣分でも味つてやらうと、 畫變更、これは 明して居る。此事を耳にした私 並木、あれが箱根 下りて馬車で行けます山越え六七里もありまし 三島で下りた。 る人が箱根山 りの人に此邊 汽車の中で熱海 との事で、英氣になつて居たら後ろの席に居 の方を指して『遙かに見 から行けますかと聞 一層の事箱根八里の山越え の舊街道 へ行つて見たいと思付 です』と頻 は急に熱海 いたら 道を尋ねて うりに え る V 「大場で て、隣 あ して、 行 皆に説 0 松

と数つた方を見ると成程ミルク製造業とあつて、牛乳の車が四五臺 樣にしようと大きな幼稚園の角を廻つて『あの家が花島さんです』 ある筈だ。 まて~~三島と云ふと石川さんの奥さんの郷家花島と云 中々大家ださうなが一寸庭先でも通つて何時かの話

制して一

又も車

O)

人とな

つた。此訪

問

約

あびさ

してもらひたかつたは山

々なるを、無

二升庵より南條驛まで二十町、

車は

充分間 時間

12

見渡せば天城山を中央に黑く伊豆の諸峯はうれりノーと南の海

り高い山が見える。 と、だん~~上つて行く中に左手に當つて、可なるすぎはするが、話をしながら歩むも面白からう

『あれが箱根の駒ケ嶽で五千尺めると申しますが 實際は四千五六『お爺さんあの山は何と云ふ山ですか』

百尺ださうでする。

これから登つて宮の下へ下れますかれ」

『あなたほんとに登りなさるのなら此杖をお持ちなさいまし、 秋駄のまんまで一元氣出してやらう。 火々思がけない星 島 式にぶつかつた、 どれ久振りの高山見物下火々思がけない星 島 式にぶつかつた、 どれ久振りの高山見物下

がないと困りますよ

『其れはどうも有難う、では只で戴くも心苦しいですから少しで下駄の緒をれぢ切つた、たて直す終もない、仕方なくハンケチ被貼折頑張つて元氣をつけ、やつと中腹頃まで登り着いた時、又も時折頑張つて元氣をつけ、やつと中腹頃まで登り着いた時、又も下駄の緒をれぢ切つた、たて直す終もない、仕方なくハンケチ被下駄の緒をれぢ切つた、たて直す終もない、仕方なくハンケチ被下駄の緒をれぢ切つた、たて直す終もない、仕方なくハンケチ被下駄の緒をれぢ切った、で直す終もない、仕方なくハンケチ被下駄の緒をれざ切った。

う、ぼんやり無く松並木の様なものがある。 出て居るのさへ見える。 少し眼を西に纏ずれば、駿河灣はさなが出て居るのさへ見える。 少し眼を西に纏ずれば、駿河灣はさながに突き出で、、 向ふ遙かの海中の大島の山の頂きから噴火の煙がに突き出で、、

至美の光景である。 では應へん如く、間近く聳えて居る。 今日は一かたまりの雲さへがににのからず、私は今迄こんな美しい富士山を見た事がない。 實に雄大めらず、私面にあたりてどつしりと、 真白き富士の雄姿がさながら、呼

一種の靈威を感ぜずには居られないだらう。 地を高山の頂きに上りて雄大なる天地に接しては せずには居られなかつた。如何なる無神論署も此 世がには居られなかつた。如何なる無神論署も此 である。神の創造の妙なるを感

を通して、月を見た時にもさう思つた。又且て伯私は嘗て高野山に登つた折、夜の雨後杉の森間

扱きにして居た空腹な私は、宿の親切なまるで身 屋と云ふに先づ腰を下した。馬方にも酒代取らせ の答へにて失望して惜しい外套の雪を拂 着 つて居っ より見て居つた中を進んで四時頃やつと元箱根に るかも知れね」と女や子供達は妙な顔して家の中 ません」と云つて出て來た。それでは仕方なし「今 のださうで、何んとか、かとか云つて寫してくれ まで行つた。私は雪の降る中に馬に乗ったま、待 快々々と馬方を勵まし、「宿」に着いて寫真屋の前 けない空の變化に、寧ろ一種の興味を起てし、愉 おきたいものだと、馬方に尋ねれば「宿」まで行 けばありますと答ふ。冷たさも、寒さも、 白く雪が積むだ。 た。杉の木の間を下りて行く。 なる、又も馬上の人となって最早「宿」に近かづい 元氣元箱根まで行つてくれ、若しや寫真屋が にも禮言つて南京 『こゝには寫真屋はありませね』と尋ねし子供 平素は郵便局長で、夏だけ道樂半分寫真をやる る、 馬方は案内を乞うてはいつて居たが、 これは一つ記念の寫真をとつて 豆を二袋買つてやり、 帽子外套は全く買 晝飯を 、福本 思ひか 3

内の人でも來たかの樣な取持らで『お座敷よりも内の人でも來たかの樣な取持らで『岩座敷よりも古んのすゝめによつて、其れも却つて必安いと馬生にうまく腹を滿たしたのであつた。『夏分は大學生が大勢試験勉強だとかでお見えになりますが、生が大勢試験勉強だとかでお見えになりますが、との苦いお上の話でかつた。

五時過であったか、雪が止むと、 俄かに夕陽が出た、お婆さんは『裏の二階に行つて御覽なさい、 蘆の湖に寫つてそれは立派では『裏の二階に行つて御覽なさい、 蘆の湖に寫つてそれは立派で 御座いますよ』 と云ふから行つて見ると質に美しいつて、美しい が寫り、 木々の常には綿の如き雪がたんわりと積むで居る。 次の が高り、 木々の常には綿の如き雪がたんわりと積むで居る。 次の が高り、 木々の常には綿の如き雪がたんわりと積むで居る。 次の が高り、 木々の常には綿の如き雪がたいのでにある。 真白き富士の姿は鏡の如き湖上に道さに寫つて居る。 真白き富士の姿は鏡の如き湖上に道さに寫つて居る。

parady.

た。お爺さんも宮の下に行くのだと云ム。ちとゆへ向け歩いて居る途中七十近いお爺さんに出會つ十時頃橋本屋を出立、冱え固つた道路を宮の下

解け どう をも -カバ カゴ 3 如 居 確 た 4 何 17 來まし く美しく 3 ぞお t 3 0 あ あ 力) は 事 12 0 み賜 6 3 0 73 命を全くいたし 0) 76 美 は 6 72 Û ました。 うて 出 御 は あ 證 17 一來るの 下岩 座 9 接 據 斯 幾 カン です。 く清さを慕 くの ません 分なりとも 1 S L ます。 V た 此心を私の全部の 0 朋 で御座 如 如 3 其 友 でした。 度う存じます!! どうだ、 < < 力当 隨分 n をも飲きなした。 如 清 あ は 2 あな いなす。 < < なたを讃美 b 全 私 神よ、 j 高 肺 < 弘 72 V きに 度ナ に似 よ 私 其 À 私 心 叉現在 跡 0 私 k 全 て 0 3 ザ Ł かむ 0) 致 0 7 V 心心と打 神 す事 此 此 居 2 斯 0 0 心で E L 3 心 3 Ш 0 7 工 力了 4 0 0 殘 ス 0

٤, 7: 験を感じた事 まばゆきば 全く忘 一度滑つたり、 0 先きの 下には汗さ 張りあげて前後夢中にお祈りした。 る 時に れて居た かりに麗はしく、 爺さんが天の使の様な感じがしてならなかつた。 てあった。 お 爺さんからもら へにじんで來た様である。 轉んだり、時には大きな聲で、子供の樣に 雄大なる此の神の景色が 惜しき景色を残して 冷たかりし身體も った杖の後に立つた ぼ 思へ 度に つと ば久々に とくし 眼 事 前に展けて を開けば そし 下 祈 私 箱 は Vĵ Vj 何 初 0 根 應

右は次號に

3

6

-

批評紹介致しま

す 먑 暮 山 まる 海に行 までかり 女中を驚かし 温泉宿につき、 9 0 様に感じたが、 れ頃であった。 **豊飯のきに堪へられず、** 上とは大違ひ、 はもうどつぶりくれた頃であった。 は 天下 新らし * O* 自分ながらわからな つて見たいものだ。 0 って此文を草した。 嶮 い鼻緒とたてかへさして今一元氣と湯本に下り着 た後、 を歌ひながら、 溫 共同湯で足を洗び、 三味の音さへ聞えて居る。 湯本に來たり其極に達した様に思った。 かい湯に 原稿用紙な買つて來て一氣呵 V 然し明朝になつてどんな星 俄かに空腹を感じた さいれ 浴びして二度分を一度に食つて宿 宮の下まで下りた頃 就床 から何處 下駄を洗び、 下るにつれて段々俗氣 時仙人になれ 行 0 かう序の 成 ウリューテブ F ·駄屋 小川 もう彼 夜の 島式が初 と云 こる 駒 ケ嶽 が 皓 增 町 3. 身

ミ禪就要的の記述。 「神機議學的の是語。 「神機議學的の是語。 「神神」 「神神」 「中華」 「中華

木竹別同鹿朝田五吉中高三村田所 子永中來江山橋木 梅 木三 莊默之 員十玉素 16 舊 太電助人信郎堂川 樹迷風 譯著著著著著譯雁譯著著

50 頂 始泸神 心 l 77 乃 # 來 3 は 見 吾 12 州 的づは 1: 12 カゴ 何 至 3 よく 出 R 0 な 最 L h は 日 76 N L 大 V 來 4 ع 本 直 てれ カン 淺草 それ 山 3 な た 何 Ш < 感 名 公園 云 0 神 0 宇 處 V 時 10 は 1 3 準備 や吉 Ш で 0 0 は 上 如 H 宙 上 12 確 あ 山 7 K 攝 S 勿 0 何 n 3 0 の論どん せら 石 何 36 原 高き山 大靈 カン る 0 理 3 た E, な 2 かい 0 12 n L 山 0) 學 う思 0 折 る 理 12 12 n 樣 校 0 祉 現 22 場 Ш 終に は カゴ 17 るの な所 V 居 上 な都 IE 0 通 所 0 六 0 はます 建 合 72 12 n 頂 ず た Ŧ र्ध 12 上 てら みでは 3 此 0 L だ さに T 50 0 12 尺 あ 3 7 3 0 居 眞 真 9 家 事 最 神 9 0 T n 居 神 理 6 3 る 庭 於 中 から 7 頂 Z は 7 な は る。 13 12 神 12 あ 0 12 出 Z 7 居 何 E ある。 3 祭 動 は 違 0 接 る 3 砂 來 せす 渖 處 カン 現に 5 0 な 居 する カン 2 る 12 12 冬は 3 せ 極 確 な ますに違 會 接 S 砂 4 此 る V2 的 カ> V 社 事 然 す 0 居 だら 12 0 人の し最 山 T だ 山 12 室 力了 る 原ブ 然 0 B 出 事 0)

> な 力 感

カジ

5 H 本 海 を ぢて 存 7 分 居 お 72 祈 誰 私 りをし n は 憚 こん る た。 4 な 思ふ 事 な 存 E 分 只 訴 人 た た 直

接

思ふ

暫 神

眼

を

閉

200 ちて 今てこ き故 の大 恩惠 しよう めども j 故 72 は 謝 居 此 申 S 12 12 0) 永 0 神 S どら 73 恩 7 る あ 中 感 感 永 御 遠 た 1 神 42 惠 3 73 11 無窮 \$2 カゴ 謝 謝 天 ぞ此 なく ます よ私 * 故 御 た 妙 12 あ 地 V V は 打ち忘 75 13 力 0 な 72 つくることな た 斯 な は に接 は數 感 靈滿 罪 72 L します、 くの る る 斯 ます、 深 謝 0 嬉れしく存 攝 カゴ 神 3 美 限 n して、 理 放 t V V 0 如 0 身を宥 30 7 72 を以 に感 6 る 如 いなく 傷 1 山 神 神よ 廣 南 < ます、 it 3 あ 心 J, 73 0 美 T 謝 L 'n 罪 な じます。然 Ō 私 あ Ŀ 72 V کے je -< 湧き出 12 13 斯 72 18 カン 0 < を 0 もうな は た S あ 生 > < L 妙 雄 た 道 る カン 0 女 カン カン 0 大 6 ^ ī 恩愛 り歌 7 廣 づる す 75 12 L 如 13 まし す 背 3 h 大 < め る る 是恐 5 喜 を何 泉 賜 無 美 神 創 0 カゴ 72 17 0 邊 7 0 1 故 造 放 0 THE 汲 只 如 カン 72 (1) か 0) 25

私

心

登 る 時 より 久 K 12 心 ゆくば カン 9 前 6 'n いと思っ

17

も迷惑をかけ

ました、

親

にも背きまし

た は

兄 隨

弟

72

女

私

分

3

私

が今ま

ると説 各人の任意し爲し、 は 後者の尊敬的崇敬又は深作吉 仰的崇敬に関しては 言に對して異議を有する者 (甲)信仰的崇敬(乙)尊敬的崇敬と爲し、 義務論には異論があ ると断言して居た。 ゆる國家の る神社崇敬 」と題して の任意で 先と為して神社問題を競き、神社の崇敬 一静致氏 は倫理上に於ける國民 爲めに天目 い事を 務であると論結して居た。又十 がは國 御歴代御靈叉は自己の 功 建勳神社や東照宮を崇敬すること あると主 「道徳上より見たる神社」 殖民地 臣なる者に 一談が出て居り、 B 私の 證するために評論子 民の倫理 皇典講究所幹事長山田新一・於ける國民一般の儀式であ の崇敬に二種ありと爲し、 0 H 同紙上に「神社崇敬の意 乙を國民一般の義務であ 30 Ш けれども評論子は諸氏の 先祖 張する に亡命した。 に討死し、 田 一的義務、 闘する神社崇敬は各 玩 は と同論であるが、 してあ 同族と共に織田徳 0 子の 田 これも亦た神 2 てお る。 兩氏の倫理的 妻子は關東を あ 祖 意見に依 その 300 ろが 前 先に関す は 者の信 子孫た 一身上 2 この 甲を 調 to 徳川 倫理上から國民全體に崇敬させようとする道 た譯でもなく、 軍であったと云ふのは、 3 は國民としての汝の倫理的義務でむると言は 養觀念の影達」があり、新公論には金子筑水 ず」があり、開拓者には藤井健次郎氏の「正 があり、連見滉氏の「道徳的社舎の野寒を舎 酉倫理には井上哲文郎氏の「日本國民の理想」 重撃なる態度を持して研究して居た。また丁 宗敬は無宗教に出づ」があり、宗教論は新年に があり、日本及日本人には三宅雄次郎氏の「新 0 があり、 できない。 からでお 入り頗る多くなり、三宅氏を除くの外は悉く 功臣には政治的權力上の關係がある 1 11 兩 とには非常なる苦痛を感ずる。 3 無盡燈には紀平正美氏の「神の觀念」 公が國家の それで歴史上に於ける謂ゆる國家 武田及び其の一族が園賊であつ 亦た夷と云ふ人種であ 功臣であり或は征夷大將 政治上 の權力を得た 安部磯雄氏 からい つた譚

根本信念 人生觀がないと見た があつ 7: 新波戸氏の意見 現代の青年に確乎たる

「雑感」が太陽に載せられ、野村陽畔氏の「これを記して新理想主義に載せられ、西田幾次郎氏の が早稲田文學に載った位なものである。評論毛盟風氏の「人間性の解放」と云ふ人本主義 あった。 るが、 つた。 ルグソン哲學の迷妄」が本誌に載せられ、 者の解決す に根底した經濟法律义は倫理上の科學的 が、其れは空想である。此等の問題は人本主 題や男女問題の解決者のやうに 者であるから稲毛氏の人本主義にも同感であ 子も倫理學の哲學的基礎論に於て た上下しても登富 次に哲學界を見るに一月は寂寥たる のではない。 稻毛氏は哲學上 桑木殿翼氏の「 べき問題に圏する。 や男女の られ。西田幾次郎氏の 主觀主義」が談話と の人本主義者は貧富問 題は後明さる 考へて は人水主義

藝術 75

夏目漱石氏は東京朝日新聞に於て「點頭鉄を期待して居たが、大したものは出たヤンナ 信して居下が、大したものは 文藝批評界には何んな議論 出なかつた。 が出る



宗教道德哲學界

解に陷り、其の結果は矛盾を生じて依然たる 道と基督教との關係に就いては氏は大なる誤 びて來て、在來の主張とは變つた。併し武士 のみならず全世界を救ふの能力がある。」と書 其物は世界最善の産物であつて、之に日本國 力は無い、武士道の臺木に基督教を接いだ物、 象」と題し、「武士道は日本國最善の産物であ た。内村氏は歐洲戦争に変想をつかした結 氏の基督教は最近頗る日本的の色彩を帶 然し乍ら武士道其物に日本國を教ふの能 いと見、新しい意味に於て必要のない歴史的

30 なく。単に基督教を發達させる蹈臺に過ぎな 日本を教ふの能力なく、 物たる武士道は勿論、儒教佛敬神道の總でに 更に一段の光彩を放つべき性質のものであ 西の文明と共に我が国に輸入されたものであ の他のもの、總果である。而して基督教は泰 日本の道德思想は儒教佛教神道及び武士道其 の影響を受けて居るが、其等の総果ではない。 って、此の爾來の道德的総果の上に合同して 解である。勿論、武士道は儒教佛教又は神道 本最善の産物とするなどは日本倫理史上の誤 非日本的基督數に止まつて居る。武士道を日 然るに内村氏は其の謂ゆる日本最善の産 义世界を救ふの能力 と云ふ深作安文氏の論文が出て居り、先祖を 日の中外日報には「既成宗教と見るは危險 室を飛て居るのは大に同感であった。併し宣 るもの呼」と題して、従來の基督敬と今日の墓 教師中にも既に東津の倫理道徳を研究し始 督教とな野比して論じ、氏の基督教觀を載せ えたが、其内容は脳る矛盾したものであった。 公祖と私祖に分け、 めてゐる人々の多いをな忘れてはならぬ。 神儒佛を能く知らずに之を罵る頑迷な宣教師 また道では松村介石氏が「基常敬とは如何な

御籃又は國家の功臣と為し、私配は國民各自

公祖は天祖及び御歴代の

引.

が基督教の使命である。内村氏の基督教は武 士道を掲げた點に於て一寸日本的のやうに聞 の関體と共に相協力して中外に宣揚すること 敬となり、此世界的道德を儒教佛教神道其他 と同化した如く、日本に入つては日本在來の 宗呼はりと大差なく、全く東洋五千年水の道 系統的道德思想と同化して始めて日本的基督 近世歐洲諸國に入つては歐洲諸國の道德思想 馬に入つては希臘羅馬の道徳思想と同化し、 德思想を無視した言である。 基督教は希臘羅 骨電品であると認めるのである。これは明に 過去人の用めた邪

として近頃出色の たない。一

文字であることは

帝大生は評論子に向

って

40 0

が

弦には紙敷が

75

いから他

円に

譲

は政治學の

諸

あるのを書

東洋

倫

ると評論子は讀んだ。

しかし

て居

「催眠薬を飲むまで」などは代表的のものは、一下を本郎氏の「空地裏の殺人」、正宗白鳥氏と別に於ける野上野生子氏の「周園」、その他に別に於ける野上野生子氏の「周園」、その他に 「催眠 月 0) 命」、中央公論に於ける上司小劍氏の、太陽に於ける武者小路質篤氏の「月の創作界には流石に澤山のものが 7の創・ 作界に 4 3" を惜 む の「小さき の「盗の」 3 太●る

舊

本

0)

リ男子

を熟知して居る

が

未だ

新

云ふ論文を出

てる

太陽に

要旨

はつ

る。 盆の

政 經濟法

交の

方針

VI 110日 露國 ø 國。 位 は外炎* 外交の Ĵ. 及び支那 H 0) は 實 其等によつて生ずる今後の外交方針 然として强固 ために備へた日英同盟は一家の關係は益々親密にな 胨 方面 一際問 も種 恰 より 3 は日英同盟より生ずに闘する政治經濟問 は歐洲戦争に 題 政 議論の 御 「日英问盟協約上の義 生ずる外交闘 及び政論は 來 分れ 朝 は今上 焦 なる繼續を爲して居る 配であ い點となっ 居るが、 頗る多 闘する政治經濟 陛 0 のが、立作太郎ではつた。國際法 7: F 係 歐洲 0 0) 2 0 7: 御親迎と る外交關 題であ -D = あ った。 戦争の 務。 0 内治 は、大論文が、百十四ページに互つて書かれた。 は、単に犯罪狂の行為として葬った結果であった。 をで、単に犯罪狂の行為として葬った結果である。中央の論にはき野作造氏の「憲政の本義」と云をの本義にはき野作造氏の「憲政の本義」と、大論文が、百十四ページに互つて書かれた。 き強通 い政 降 路登録の 加 した迄であ の憲法學又

務に於て日本にばかり責 B氏の半りへ変更が最し と云ふのであった。↓ 職教的感化に関す我が國人に関 この點は今後機會を見て修正す ために設けられ 方針もこの一般P 支那北方の 現行 がは野朝に 任に當ら よりは國 批難 して 第三日英同 0) 原因 等 [ii] 3 一般國民の思想に根底してするのである。 西川 にはなられる。 西川 に根底してするのである。 西川 には 政を 帝政流● 万つ 情的 學者の n 民 て居 M す 南方革命黨の 一品にかって、 ろも れた。 新 また るやう f 闡 當日 紙上 ので、 JE 見 これ を掲げ 確 同 0 騷動 紙には はそ 1-0 75 大義 報 は我が國人 0 0 一般椿事と 英國の利 は煙山専のべきであ B 0 7: 總 5 であった 應援 煙。 名分を 動 っであ は絶 れて 其 0 新 逸。福。は 井。に。と の。田・堀。柳・奥。言 經。江・太。へ。つ 濟。三・歸。郎・て。た 私 奎 から て・た。 每 _ 氏 哲· 氏の例 殖・また 殖。 聞 かされ |再興の急務を論ず」と云ふ永 |のの急略を論ず」と云ふ永 「の一一の一一の一一

えず

雜

誌

9) a

5

る。

0

儒

L.

外 明して居たが、それは全然蛇足なる研究であ善ると評論子は主張する。※學協會経誌には乾善さと評論子は主張する。※學協會経誌には乾・、法學新製には岡松學太郎氏が「戀父繼母と繼母と庶子の親族關係」と云ふ論文で文生・法學新製には岡松學太郎氏が「戀父繼母と居た。一世解題」と云ふ論文を掲げたが正鵠を得て居た。一、法學新製には岡松學太郎氏が「戀父繼母と繼母と、「大法學新製には岡松學太郎氏が「戀父繼母と、「大法學新製には岡松學太郎氏が「戀父繼母と、「大法學新製には立る研究であ 上杉慎吉氏の「輔弼責任の範圍」と んで活躍 明して居たが、それは全然蛇 務大臣と各省大臣とを二個の 如く舊 民法草案の営 なければ、徹底 事に関しては 理思想とは 倫 ては甚だ 理 道 理 思想 一徳思想に養 解 釋から立法上の 1 新 時に採用した家族主 と今日 した議論が出來な 專門的 舊雲泥 國·民 財·論 田兩氏の説 はれ 時代思潮に を生 に詳細に 0 財政の将來如何」 差があ 7: 頭で民 研究にまで到達し する の概念に分けて説 ○法學新報には te る 批評して見 0 V 殿 2 於ける東洋 義に於ける した「猫・ 0) 岡 あ TE であ 松氏 30 解 又は る。 0)

つて岩野池鳴氏は新日本主義と云ふ小機關雑餘り研究的のものでは無かつた。此の間にあ 生 宗教なるものには著し 説に於ける「進步とは何ぞや」と云ふ評論も 誌を出した 題を持つて來たが、其んな單純なもので何 味」とか「もの、あはれ」とか云ふ漠然たる命 溪氏は太陽に「統一的風潮と生の温味」と云 であると稱して居たが、之れは評論子に於て 後近でも日本及日本人に於ける「一月文壇」とた三井甲之氏の新潮に於ける「昼樓氣の背・た。また其れを眞の學術的研究で無いと批評 0 と云ふ隨筆體のものを書いて居たが、 活形式の革新として儒教佛教基督教等の外 同感である。けれども氏は此の内的生命の 批評でも 徹底した 學術的批評では 無かつ を人生哲學上の統一と見ないで、「生の溫 對する批評などは政治法律上の知識のあ が は聞えない議論が多かつた。長谷川天 學術的研究上のものとは受取れなかつ 出來ますか。また相馬御風氏の新小の複雜な現代人の內的生命を統一す 中央公論に寄せた吉野作造氏の憲政 が 其の謂ゆる最高最深の内部的 氏はこれを内的生命の統一 誤解があつた。 決して 氏は る若い吾々青年男子を點頭させる議論をする 無く、 地位にある學者として氏が けたいけである。 53 く感ずる。併し氏の子とも云ふべき年齢の評 れない 及び哲學倫理學心理學上の批判的說明でない 督教に關する宗教論に至つては、 上さう見えるのである。殊に氏の佛教又は基 學倫理心理及び政治經濟法律上の科學的思想 ると議論が系統的組織的に出來て居ない。哲 かも知れないが、讀書人の眼から見れば事實 論子が斯う云ふことを申しては生意氣である した議論が出來ないのか、評論子はふがひ無 文であつた。けれども何うも評論子等から見 來思想から我が國人を教はんとするが、 所に頗る穿ち得た識見があつて尊敬すべき論 論があつた。記者は眞面目に一讀したが、所 から見れば、氏の議論には間違が多くて聞取 殺すの人と成るであらう、太陽には「一人の て、反つて氏は我が國人を害し、我が國人を は東洋倫理學史に關する、無明の結果であつ 單に與謝野女史の妄論として印象を受 評論子等の頭には這入らないばかりで 所がある。なぜ氏は總ての科學に全通 荷も日本女子の指導者たる 知識階級に屬す 比較宗教學 之れ ける女子一流の猪疑心と壁ゆる。 誌の本欄に出て居る通りである。 らず、飽く迄も男女兩本位に解して居ると此 には、 ても決して其ういふ觀念も素振もないのみな 人の善意を邪推するものであつて、 云ふ觀念が浸潤して居るなど、誣ひるは、 けれども評論子等に於ては其うした とを惜まない優秀な男子でも動もすれば其 以上には濟度し難いものと云ふ觀念が浸 力で改造することが出來ても、 も起きても學術修養ば いのである。評論子等は如何に 念を素振に現はすのである。」と云つて居る。 て居て特に婦人の境遇に同情して けられたもの、 位のもの、男子より劣弱なものとして運命 級の男子の間にも其内心を叩けば婦人は第二 ら氏は「多數の男子は云ふまでもなく、識者 なければ吾々は承知しないのである。それ れに相應する現代的な學術的説明をして賞は 日本男子とは願る赴を異にして居るから、 を有して居るので、 氏が處女時代に於ける慈 出さなければならない。殊に吾々青年 其れんへに然るべき順序を過た議論を 從つて或る程度までは教育 かりで日進月歩の知識 内心を叩かれ 到底その程度 それ 評論子は氏

327 —													
	婦人の經濟的獨立(女王)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	題字、序文、校園(同上)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 淺 次 郎											
	摯座三年を讀んで(司上)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	隨感一策(同上) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・同											
方 ** 士 碧 中 崎 田 志 日 井 木 田 田 田 出 器 西 江 目	田 條												
方峰幸 中崎田藤口井木田田 田田 場西江日	田條是忠												

東坡居士の讃佛は(東洋哲學)・・・・・・・・・・・大 内 青 巒	「人生に歩はれたる基督教(同上)・・・・・・・・・・網島佳吉	徳(后上) …	の悪行・データを対象を関する。	下の宗文見代(引) 「一万日でる臨汾軍圏の影響(基督教世界)・小 崎	とった別かしついました	「信仰(原上)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	耳ぶの罪悪觀(福音新報)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	福音書に描かれたる政治界(護教)・・・・・・・・・・植村正久	大正四年の我が思想界(同上) ・・・・・・・・・・・・・・ 條 忠 衛	國の	人生の本質(同上) 作三郎		で で で で で で で で で で で で で で で で で で で	上會月直,沒是女儿 5	グンは国の米はつりに、一路	上	教の署代司上」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・				(基督教を中心として見たる、)	Mante State	最近教男評論會一覧
現今の青年と人生に對する根本信念(中央公論):新 渡 月 稻 造			澤	水	上	上哲次	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	数と哲學(早稻田講演)	自用書	不威の思想(司上)		日)	量		正義觀念の發達(開拓者) ・・・・・・・・・・・・・・・ 藤 非 健 次 郎	(学) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	人の非僧非俗(六條學報)・・・・・・・・・・・・・・・・・是 山 惠 一	基督教とは何ぞや(道)松村介石	體新論(新人)海 老 名 彈	田幾多	平	本文三	大正維新と家庭中心の活動(弘道) 賴 倫

て到底 を招ぐ現象を呈した。而して一方に於ては宮の培 を講じて法網をくいり、反つて刑事問題を惹き起 負债 に流れ、 す る。 して斯の に負債整理の途のない難族は多大の困難な感じ、 分の一以 本は盆々 **験展させることが出來るので、該法の存在** にその 3 Ш 0 下に財産 き義 選別に 林宅 所 皇室の藩屏は愚か、勤儉忠自成國民の模範たり得さるは 條によれば は して之れな 10 世 一類に準ずる地質の世襲は政府の保證 族 無意義なる 爲すとな得るが、毎年その 有者は宮内 襲 學術精勵を好まず、日堂 上の発 | 華族の手に集注するのみである。 西地等は華族のために飛併吞噬され 所属の E に華族はその財産の増加によつて世襲財産を が 一階級として孤立するに過ぎない 現象を呈した。若し果 しとせば、 上 產法 差押を爲すことが出來ない 物と 所 0 は 公平 る世襲財産になつて居る。それから第五襲財産になつて居り、第十五國立銀行の5 國 n 世襲財 有 保護する が築 者は 若くは 民 ば を立 置して 居る。 大臣の認可を得て 其の財産を増加することが出 為すことが出來る。次に第七條によれば世襲財 と同 なら 75 族を保護せんとして、 國家が華族の榮典を授與し 3 特に世襲すべき建物庭園 産の所有者はその 勤儉忠良なる一般國民 じく立 ない。 利 特 は抑 別の 統を得る 日常の行 b 監督に 吾人は華族に同情 憲法治 勿論、 那邊に目 智能 純益の三分の一以上 然るに敢てこれを存置するは 相共に 及び人格は目に月に低下し 事としては唯だ女色遊獵避 己れ自身の 國民として、 を感じ、隨つて順劣 手段制度である。之れが爲め ぬする 隨つて債主よりも毎年三 財産の純 い的を有する m 却つ する間は國 る危険状態にあり、 帝 して第十一 銀行 の人交に 國 て之れ 圖書寳器等を以て 特に して 加 豆民 to 體面 著くは 益を抵當として *O* 同 有 より華奢淫逸 0 とし 世襲財 無限に擴張 す 名門の没落 中 to すら保ち得 株券はこ 後 償却を爲 際及び第 T, 0 3 死 事實は既 味によれ れかる 地に陥 諸 て皇室 3 者 nit: 産を 資田 民法 2 0

族世襲財子の藩屏と いとも 産法の なり、子孫の人格 腹止を希望するのであ 的進化 とも 30 爲らんがた ___ 條

輯 0

上お 月號に延期した 别是 は 是 非 している f の澤 掲載せ 山有之候次第、寄稿者 ればなら 20 9 0 かぎ 劣 諸氏に一言御斷り 90 9 7:

申來口

ごエ と其批評」木村 00 一其等の 來 月號 藤 には 中には 直太郎氏の 姊崎博士の論文、 久一氏の「 **种理岩三**源 凡 人平語 氏 x 0 V 永井柳太郎氏の講演、 西洲 3 4: ヤ」平井 1/2 殿氏 粥 して 0) 「感想」等有之中 好 ---用 瓜 0 氏の 石坂養平 「愛な抱 II:

口候同感口昨。人想本 本月は 評論等 人內 内ヶ崎小山氏等の 信仰的點火者 として 興味を寄せられ申候。雷夢氏 は直接本誌と何等 1 を始 度故島地 めとし、其他同人 執筆致すべく候 雷夢氏の一周年に當るとて深 0 關係な ÷ 栗 背景 原 2,0 二氏 の感致 こりり

同坐題氏問の て問答反響等は 四氏著 一昨今紙 問答な開 外理論に亙るものは 一帮 價奔騰 坐三 始 1 每號開 0) 本誌上にて 丁寧なる解答を與へら Ľ. 7: を讀んで疑 的 設致棄候。 本誌も 可成簡單要領な得度存候。 紙 問 III 質問 を懐かるい た 節 は廣く歡迎致候 H 致 つされ 方义作 なら 尚岸本氏は靜 るい約有之候 も具體的問 法に関し一

口般 同諸 て其米國所感を陳べられ 人鈴木文治氏 君の)質問 を歡迎致 氏は先月四日

無

非

米國

51

號に

は

久振に

御送願上候。 □本誌原稿で切毎月七日、東京市外的解決に努力され又本誌上に同問題 今後 ※京市外集鴨一四七〇相原方編輯局宛 其太愛會 の研究を に於て 發表さるべ く候で 題 0 實際

華族世襲財產法(時評

る時 所が無けれ **益を同時に併せ得んと欲するために、其れが一般國民に及ぼす不** 0 益なる點を修正し其の財産の融通を圖ると共に、在來の 華族も鮮少でないのである。隨つて之れに 伴ふ諸種の弊害は最 間に亘り該法の利益を受けて財産を維持經營することを得た華族 月より であって、 産を王室の監督の下に 保護せんとする歐洲の古制に模倣したもの 治道徳上より する者である。抑も現行の は該案が例令如何なる修正や經て議會を通過するとも、此の際政 に逢着する 十五日には 小委員會に上り、今後多少の修正を見て本議會に提出 日程に上り、 けれ ものと成つた爲めに、自ら今回の改正案を促がした次第である。 頗る多 る迄に至つて 居る。此の改正案は本議會に於て如何なる運命 ども吾人は此 世襲財 行されたのであるが、大正五年の今日に至るまで三十 ばならない。 現今に至つては 該法は幾多の批難缺點を有する不條理 明治十九年四月勅令第三十四號として預布され、同年八 かは未だ測知すること の出來ないも n そのま、委員附託となつて居たが、越えて本年 との増加することの無きやう窓め以て警戒環視する 竿頭一歩を進めて此の華族世襲財産法の全廢を主張 産法の改正法律案は昨年十二月十七日 又該法のために却って拘束を受けて不利益を得た なる日本帝國臣民としての 國民の財産に而かも の間に際し、 今これた 政治道徳上の問題として考察す 華族世襲財産法なるものは、 **薬族が該法の不 自由にして不利** のであるが、 の貴族院議事 該法の利 華族の財 一吾人 一月 年

牧場池沼等は第

加へたのは大なる悪政であり、

此れ全く補弱

元勳の罪

であ

かた

今この華族世襲財産法が 政治道徳上如何に不公平である

該法の第三條によれば華族の所有して居る田畑山

一類の世襲財産になつて居り、

政府發行の

公債證

不完全なる 歐洲の貴族世襲財産法なるものを輸入し特別の保護

て律して 置きながら、獨り華族にのみは頗る國情に合は 然るに明治に至り、歐洲の法制を 輸入して一般國民には民法を以 の賣買を爲すとを禁じて居たのも近く世人の熟知する所でわ 姓の財産を保護する善政養民の趣旨から、諸藩に於ては猥に土 りて一般國民の生計財 の民 る所に於て散見する事實である。降つて 徳川時代に於て天下 の獨専に關しては 福を祈り給ひ、其他奈良朝王朝時代の天皇等は 範を悉くこれに取 民の富を以て朕の富と呼ばれ、曹く公分田を設けられて國民の に薄く 為政養民の上に於て明かに不平等の法律となり、天下百姓 に對してのみ特別に恩典が厚いのである。是れ帝國 と難族に對する保護 入差押等を禁じて居るのである。是を以て一般國民に 族世襲財産法たる特別法によつて之れを保護し、その賣却讓與質 によって保護し、その資却讓與質入差押等を許し、華族の財産は 帝國の法規は一般國民の財産に對しては恩典が薄く。華族 國民の經濟的生活に關して二種の制度を設け、 一力生養 か無視した大暴政たるものである。聖帝天智天皇は の法律 を制定したものでめる。一般國民の 屢々勅命を以て禁戒されたことは、 との間には法規上著しき徑庭を生じた。 産を叡慮せられ、常に貴族の専横殊に土 財産は之れ 一方に厚く一方 の財産法は 日本紀 對する保護 ざる最も か民法 30 卽 0 財 到 地 [6] 產

沙葉階

明

300 である 精を穿ちて模範的批評である。 心は の「繪になる最初 繪になる 理に對す 甚だ教訓 び説 に富 3 初しの 深 て現代 L 6 0 批評のごとき文想 洞察と同 春、大觀 0) 此處に於て著者の 批評のごとき の美 の「松並木」、栖鳳 とが發露してゐ to ことに栖鳳 究する さ微に入り 共に上乘 豊家の 0

3

H

*

研

8

頗

3

注

目

る。 間

題 3

た

勞働問

題 す

ځ

であ 契月に多大の望みを囑してゐる。を擧げ、且つ逝ける菱田春草を惜しみ、菊池する者に東京の尾竹竹坡と京都の太島櫻谷と と山 と斷じてゐる。又現代畫界の代表者としてはとし、將來の繪證はかっる內容を發揮すべし 本美 東 とし、貯水の繪畫はか、る内容を發揮すべしか人道的情趣とかいふものが現はれつ、あり 村觀山、 宗京 第三篇日 つる。 小の寺 術 元 0 春擧を擧げてゐる。之に、寺崎廣業と橫山大觀と京 著者は現代日本 京都の 虚の 南池芳文、又之に近かんと 誻 は 大觀と京都 本人の間に宇宙感情 最も熟 題 0 讀す 次いで東京の 中 、第二の 0 竹內栖鳳 べき文字 í,

度を持す

水

内閣の

倒

壊と大隈

内閣

成

立二議

を持することである。「民衆的示

威運動

を論

會の言論、「日本に政黨政治は行はれ得る員選舉の道德的意義」、「婦人の政治運動」、「議

等皆好個の政治教育の論文であ

のるの「對支

外交の批評」 ე» ∟

は甚だ穩健である。

支那

帝政論」に感服する。

昨年夏

気公にせられ

同

教授

の「對支交渉

論」は支那

研

究者の良巻

本論

も大に晋人な啓發する所

階級に推薦する。挿入の東西古今のりにかいる名著に接したるを喜び、 史に 不書は單 の著にして美装し も亦賞翫すべしであ 0 一對する 他 の諸 0 は決して不 なる給選の 一大貢獻である。吾人は久し振 篇 いづれも 批評に てこの内容あり、定質二ある。菊版五百數十ペー 廉ではない。CSU 興 此らず H ずして日本文 の名畫數十 れて 之な識者 社造生 2 30 行著 う。 は支那事情に特別に通晓せしめたことであがある。著者が管て袁氏の家庭教師たりし 豫 -j 民 考書であるが、 2

利

害に影響せ

ず、

要は 共和

國

氏

は帝

以たるも

たる

3000

支那

より外に方法なし

60

ふ議論如 支那 制

何に 自立自

f 尤 强 域 6 事

殊に

袁は早晩

帝位 ٤

卽

きこと

言 あ 3 0

Ł. 30

たるがそは早や事質

è

なったのであ

に見 を聞くに 野題 治、官僚政治と批評するに極めて公平民衆主義の發達を力説して寡頭政治、 吉野博士の見識に服するは、立憲政治の質現、して永久的價値を有する述作である。 晋人が の評論なれば決して一時的 編纂したるものなれども現代政治上の活 なる理想とを以てす 官僚政治と批評するに極 る態度であ が那多 朗 断なる 40 る。 石の立場 泉的 圳 ること 本書 る。 圖 議論 ٤ 位 は 间 より 價值 し近來 情 少ない。 f 一兩年間の が多くて 實際 ある めて公平なる態 0) () みにあらず 觀 0 然るに吉 、實際の 墨 終と高 政 元老政 論文を 者に稀 治問 問題 に終 尙 願 間 30 30 * 感く時、晋人はこの快著に接したるを滿足と季節に入りて日比谷原頭の活劇吾人の注目を列斷を維備する指導者を要求する。今や政治 現 外交を 論 考へ 取 《代の政界は吉野教授のごとき理想/変を正當に理解せんとする人々に り扱 U

たる人

人はない。

吾人

は 路

本書を

現在の

內內政

想と識見と 推薦す。 3

は

斯く 0) 如く

理

明

晣

に日 知る 的問

米問題を べしであ 題

ひたる點に著者の卓見を

德 0 關

的 問 す

乃至

一國是 單なる

として

する。へ、三〇) 金 言逸話珍說奇 談話 0 庙 社享 續 行著 篇

大辻 日 本過書 會 社享

阿英

雑誌である(質一〇) お交話學校教授片山寛氏を顧問とした 外交話學校教授片山寛氏を顧問とした 唱俱樂部 英第 THE THE 俱 樂卷 部第 發 個 -- B

の関英

行號

新

訓 -

4D 9

らざる

刺

戟 70

せざる

書心族 想像せらる。然れども著者は美學者に非ずし本書に對する研究を一層促進せしめしこと、都繪畫専門學校に長たりし事は同氏をして日 本亦太郎氏は實驗心理學の大家たると共に久が、その後久しく名著に飢えた、文學博士松讃史ありて、藝術に述味ある者の渴を譽したのことでない。當て故藤岡作太郎氏の近世繪 3 「彼れは其畫は て心理學者である。 然れど 科大學教授として永らく しく日 かか導れ、且つその表現に如何なる技巧を 來 0 代に於て注 しかを探ら 史と傳統を有する。之を評論するに容易 質の 寧ろ其 風変を揣 歴よりも 本書を研究せられ、 流 行であ 0) 何たるを考へ、斯くて日本繪畫の te る。吾人及心 八價值 をなさんと欲 は繪畫に表現したる個 如何なる心意の状態を表現す んと |摩せんとし、繪畫の美寧ろ畫面に反映せる時 る。し 目をひくも 判斷 ・晝面に反映せる時代及び されば著者は序して日く 到なる同情とにひかれて の心理な分解 かっし 、西京に 理學者たる著者の したっと。 殊に ながら日本書 繪畫の美的價值 住し、 同氏が京都文 文本 本畫の勃 人及び民 4 是れ本 こんと欲 超太聚 殊に京 一畫に ~

人格の天道に歸一合體時代を以て自本民族心時代を以て日本民族心 し、何等物水心受くる事なき故、の理想的人物を縱橫自在の筆力をとし、然に人物畫に於て畫家は胸 畫意も活氣充滿すと斷じて、 きも のにしてい 本書の發達 一合體するを主眼としたりし 人格的の本我が無意識非 の宗教 策力を以て畫き出家は胸中に浮ぶ所 の點に於て空 その 筆法も È 稱

人に就いて一人つと 樂朝 者となり得るはその千分の一、即ち二百五十の二十五萬人は優等人であるが、一世の指導二十五萬人は凡人以下の劣等人である。殘り 人しか ある。人口百萬人中約半數は凡人である。他の間の材能優劣の分配法の原則は傾聽すべしで心理學的研究の態度を表してゐる。著者の人 策 瞎 否此著一卷はその豫言書である。 ない。 代より の「繪書と日本民族」は最もよく著者 百萬人中約半數は凡人である。他の 明治時 ねる。 しかねない。平凡人は 0) 割合でゆけば 代迄百五 日本の 十五人ある。 代表的震家は寧 が拔群者、 は四千 0

興 ナニと

年に及んで経問なが出來る。誠に意 的傾向、(二)綜合的傾向。(三)折衷的傾向。又著者は現代の日本畫を四大別して(一)字舊 れは文明史論として首首せらる「點である。本民族の生命があるではないかといふが、そ生面を聞いた、著者は應用の巧妙なる所に日は外國の繪畫を模倣したれども應用工夫に一 が出來る。誠に意味深長である。上下千二三百この論法は凡ての歷史的事物に應用すること の文藝、哲學、宗教にも應用すること に發展をなすべしと論じた。これも繪畫以外 を壓倒 年を要したるわけであるするために平凡人を單位 した民族が他にあるか。 千年の (四)現 平となる。これの平均活動時間 るために平凡人を單位とすれば千二三百萬 の繪畫を模倣したれども 質的傾向 + れた となし、(二)及び(四)が粉 なしに優秀な綺養の作品を出 而して日本豊が洋 即ち明治 。故に日本護は貴い。 あるい の名書を産 又目 北すれば約 謹

明治時代の 社會的· 女性、 奈良朝 白い 第三の日本書 が時代の繪 それな たれを田園的女性と觀たる甚だ面徳川時代のそれを肉身的女性、 ・、藤原時代、鎌倉時代のそれを ・、藤原時代、鎌倉時代のそれを が、藤原時代、鎌倉時代のそれを、繪畫に現はれたる婦人を宗教的 と女性 觀に 於て著者は たる甚だ面

批評法である。

能うべき

する研究であ 第四 第二篇、 0) 給選と描 明治大正 3 法 の日本書界は現代畫の は 繪 0) ・テク ツ クに関

評

て本書を

一讀した。而して

让

潤

7

提四るルセ近

思

想

文るは成一

解もた

精

到

供十同の た餘情

の細の

大心真

13

に理最

1 る

3

6

0) 12

最た 密 IV 1

り枚と

7

Œ

12 以 13 ツ 7

新

春 譯洞

文壇 出 察

郵 积 五. 錢 錢

0

工

17

ス

E

7

研

究

秦

脚

《後付



~

ツ

7

ス ø

ス

デ

1

w

ネ

n

を個

1,0

刺

衝

髓創第

る 12

7

ク

ス 3

テ

チ

月 號

性

0

次

的

特

徴

野

村

-

錄

夢

0

杉

山

元

治

字字

市

0)

兒

干

昌

Beyond the sea

陶

山

ケ

テ

0

學

小

111

政

修

鵬

山

野

虎

新

西

村 伊

作

務 郎

無 明

小篇小說

空前

長 與 港

鳳

偶

然

必

然

景

Ш

哲

雄

加 中ダ Ш 藤 昌テ 樹原 譯作

新 年 畫 文

壇 其や ザ S 他ン 又 澤自

吉

nn 市京 東 地

緊 1

込牛 町 來

K

關岸本氏 の岡田式静座法について

について學ばんとする 體質の弱き人々や、神經衰弱や病後の人々 者にしてあるが、餘白が多くないから 次號に譲る。とにかく健康 生觀をも現はしてゐるやうと思はる。 吾人は之を詳評する 約を著 この書は靜座法の原理を解説したるものに止まらず、岸本氏の人 此度著されし「靜座三年」も同じ特色の現はれたるものである。 ける既に定評がある、その發音の正確なるは英語界の異彩である。 岸本能武太氏は一事に精力を集中する人である、同氏の英語に於 は是非必讀すべく、健康者も大なる暗示を得るであらう。

本然生活 聖パウロ

一夫著

日本詩歌論

は やい詳しく批評せんとし 戰爭是非 したるも體白少なくなりたれば か小泉 信三選金 歳潔翠 次

號にゆづる。之を著者に告げて覧恕な乞ふ。 以上

マコーレー、 鈴木兩君を迎ふ

働同盟大會に出席せられたのである。 博士と共に來朝して日米の意志を通ぜんと企てたるシドニー・ る必要がある。 日問題を解決するためには加州及び米國全體の勞働者と折衝、 大にして往々にして立法府に影響を及ぼすのである。 勞働と經濟との問題である。 して日本勢働者を代表して加州勢働同盟總會及び北米合衆國 は一月四日長途恙なく歸朝せられた。鈴木文治君は友愛會長 昨年夏前後して北米合衆國に向ひたるマコーレー この暗示を與へたるは昨春セーラ・マツシウ 加州に於ける勞働者の勢力は甚だ 加州に於ける排日問題 鈴木兩 されば排 君

> 害と心排斥して目的の兩會合に参列し、又米國勞働同盟の幹部 者として渡米するに至つたのであった。 勞働團體が存在せざりしが故に鈴木君は古松直彌君と共に代表 ギューリック博士である。幸か不幸か我が國には友愛會以 これ先驅者を以て任ずる者の喜んで服役すべき務めである。吾 の増加すると共にます~人困難を添うるかも知れない。 れたるは慶賀に堪えぬ吹第である。しかし友愛會の事業は會員 を解決するに與りて力があらう。 と意志を疏通し、同情を交換した。思ふに今後加州日本人問題 んことを望む。 人は鈴木君がこの責任の位置に立ち、大に自重して努力せられ 鈴木君が無難に此大役を濟さ 兩者は幾多の困難と障 しゅし 0

30 とい 惹起せられしことは正に吾人の記憶すべき所である。 治する迄に二ヶ月を要せられしことは吾人の遺憾とする所であ 果されしは大に感謝すると共に、 に於ける自由基督教の傳道の使命について米國の教友の興味を て講演せられしことは吾人の感謝すべき所である。ことに日本 事 るた見る。 7 日本は今や國際關係の渦中にある。大戰亂といひ、 を脱せざるなえない。(s、 = しかし東部地方に於て幾多の會合に於て日米の問題に關し U 1 コーレー氏は桑港に於て自働車と衝突して右腕を折られ全 米國問題といひ、實に大なる問題が吾人の目前に横は 1, 米國の問題のためには吾人の濫し得る餘地少くない。 鈴木兩氏が吾人と同じ意思に基いて平和の使命を U生) 兩氏の勢力の徒爾ならざりし 支那問題

高等學校教授

是實 をに 滿何 天人 下步 の讀 諸む 賢べ

にき

薦の

ひ書

に傳版四第紹設

介に

よ

6

ず、

歷

史批

評

0

T.

場 我等

よ

(1)

の基

基督

音を説は

明

は

とするもの

價 現 米 代化 子 ツ せ } 3 丰 美 1) 本 ス 7 百 0 付 頁

0 好 評 晴 R

新

版

價 錢 郵 金

の來る り空明み徳 蓋、論ら徒はつ徳はとの知 しそにからこてな言人尊識 時の過でにの人けふ格とと とき道 代信ぎあ發要格れまとき道 の念なる達求なばで孰は德 缺人い。しのけ自もれ言と 陷格季識でダれ我ながよ熟 イばはい重まれ きでが 威發生みて重理道 を露くも道う性徳

以くなを得でる

て解る主ざあ所任剖著張るる以

76

る。 名者するは、 の知識はこれである。

〉健

こで を生東れな

5

形

的

根

のそのり、益ないでこ在と決ない

あに熱難し

る深的もて

江な求要全があるにある時

俟命洋何い

つをの等

ででいます。 で把大のと 提偉根は せんの

。遠要

清一つに

鑑的て

提せんとするものは水板を失い、理性のなさらな相なと失い、理性の要求の力にして必要があるような 此 もの道 金 書 水 彼 拾 22 ツ 0 錢 9 宗教 7 郵 闡 To 稅 廿 明現 五 せ代 金 5 貢 れの た意 錢 り。識

所行發

厘 五 錢 一 稅 郵 錢 廿 念 册'一 價 定 錢十四圓二分年ヶ一錢廿圓一分年ヶ牛

悲

劇

信

仰

故

鄕

就

爾

幹

諸

邦

汎

獨

逸

報

新

刊

批

評等滿載

號

月

牛

跫

作

町倫

思 よ

想

文

化

歌 牛

0 競

藝

術

承 前 理 蘭

13

3

存

爭

行發日一月每

佛

西

0

悲

劇

ソ

ク

テ

ス

0

生

活

Ш

0)

經

典

原

0

經

典

論

評 S的

開

A教宣獨拓內 S育嶺逸 生を生大 學生生 活 解 0) す 0 特 3 社 性 會 0 槪 的 闲

潮思外海

要

難

念批 論判 終 極 在内 論に 於 味 け 3

戰 亂 0 民 的 及 ぼ せ 3 影

渡中若太加 宗 道施 郎隆門智

土常 西 H 般 H 华 誠 大 郎 亮

京東座口替振 番七七〇一二

込駒區鄉本市京東 地番十五町木駄千

觀

基督教 會集會案內

禮 拜說教 午每 午毎 前日 七躍 十曜 時日 (當擔) Ξ 並

時日部 諸

家

良

= 並

良

午前九時十五分

基督教哲學

靈

交

會

午每

後木

七曜

時日

馬可傳を講ず、猶會員諸君の信仰告白、 る質疑等有りて頗る有意義の會合也

傳道

一講

演

後日

Ξ 並

良

宇宙、 人生等に對す

諸

家

日曜學校

前日

九曜

時目

五歲以 から たでも 御遠慮なく御來會 上の 自 少年男女の入學 由 に参集することが出 を歡 を歡迎 迎す

來

どなな ます

滿

芝區 三田 四國 町芝園橋際 します。

電話芝 五八五五番

自由基督教

藏、永井柳太郎、 拜說教 作三郎 〈毎日曜日、 安部 小山雄 東助 午前十時) 岸本能武 **你一郎介等交代** 配武太、岡田哲

組 會

して擔任す

信仰に對する疑義を正し大に共進互琢の實を許各會員宅を巡回して開き會員相互の親睦を計 げんとするものなり 主 として 神田 實を學

9

織 鄉 基 仰 會は く團體 せ を 6 宣]] 昨年六月成立し n なり、 傳 4: 由 込 せ 一基督教 公等都 んとする高潔な 同感の士 下 の立場 北 部 の來會 0) よ 人士 9 3 を歡 友情 包 よ 容的 り組 迎

神 田錦町三丁目女子音樂學校內 す。

電話本局 三七三九番 曾 り▲非知なはし為とに▲

金版百右のてにて序り

諸クかな關係を餘國

日先口られせの發のに々

し▲特▲

五

7

錢

43

1

提

供

L

相

L

期

限

後

は

定

價

12

復

す

員

汔 輩

方掲る

に載美

限せ麗

5 15

大走名と

增 訂 再 版

愈 出 來

別特寫本一悉が日ためすは本 眞書部しら本る出る威書 ははを得に各を張所謝は 初千座るし地以のな狀第 揭餘に便米散兹太本送版 載頁備利國在に平所もに のののへあ各せ増洋長越於 所外四ざる地る補沿昨さて 在六るもに二再岸年れ各 米版べの奮萬版百米し位 ーざばる重行教於あ非 ののスる基態なす會けり常 申寫金良督多るるをるたな 真文書信教教に訪與るる を字な徒友友至ひ信は好 御も頗りとののれ親事弊評 消外りし業所を て息更本く視い博

申の料 込節 順は 12可 よ成 代 り振 雷東 二替 引 月口 話京 替 北潭 新市 所中橋麴 五東 ---田丁 日京 よ二 錢 八區 五有 714 四樂番町 發七 鮮 送二 す番 支 ノ三 各些拾錢 御 拂 込

長

平所

乞御

ふ注 御文送

> 君 諸 學 牛 歡者 宿 來御

> > 館主

文學士

令

尚

信

良

本

鄉

Ш

追

分

町

0

四八四六

はをに書調察光

是も坐に査い禁中

追

分電

車

終

點

E

1)

五

分間

盖 大 正四年 度

御 大 入 IE. 用 價 五. 0 年 御 壹圓 方 月 は 拾 至 東 金菱 京 急 三田 御 送料 申 1 越 あ 鑓 te 下上 卷卷

右

電振 電話芝五 八〇〇〇五三 誌 社

下高

宿等

(後付四)

缸 月 E 幹 主 介 村 石 再自精人抵悲名不迷寒 何 活 不陰 一を借 月 3 カジ カジ 國 動 び及神生抗觀句思信 尊德 莽 72 花 ののと主家小議と梅 カ> 學 前鍛趣義 5 と解 な正 9 戦の練味 度 22 る信 來 0 亂 カン 必 た 產 男 談 非 を訴 0 K 其 四 几 森 松 村 長石中 村 松 卷 倉 瀨川川 村 Ш 市 井 左 孫 介松石洲 要 兵 衞 介 す道 物 也話 輔山望 右 衞 頭 石 文畫 は宗 しは 床 學 談教支余四自眞予佛 談教池 誰 117 外 通 節 那が十然のの教民 佐 IH 0) 校 敎 \$ 無 萬 定 俗 婦信年死信 宗 と的 久 罪 市 歸 婦 價 價 間 仰教は 兵 手 别 能 的 操 仰前 +--經如想 紙 象 衞 法 主 12 を 0 0 部部 人 主 經奇 得 驗 何 樹 山 義 館 た な 立 0) 生 張 林 四五 の圓錢 弊 る 拾 0 1 急 A. 心 併 b 錢錢 務 得 せ 0 代 经部 を説 亚 7 子 * 精 孃 ○拾 きた 神 03 修 野 藤 成 西 村 る 養 111 屋 膝 П 葉 田 田 瀨 口 36 12 峰 直 資 松 復 次 震 周 周 紋 加 郎 阴 子榮郎 朗

《後付七

番六二九五二京東替振 所務事會道 地三七澁府東所行發

□ 大戦争と宗教思想□ 上海と戀愛問題	□二高時代の島地雷夢君の追懐・	すを有せる	ピッ雲	□ 2 3 2 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3	發 行 定價金貳拾錢
	內ヶ崎 作三郎	周田哲藏	吉田紘二郎 一 山 昌 樹	…渡邊甲子	
□現代思想家の何人に □炭解に對する心···· □The three Day's Orp	口憧憬の沈默	ルビャの滅亡を悼いて(小説)・ 転の単の家(小説)・ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	國の農村と見て故事場所の根本義由基督教の根本義	コ社會問題と基督教・口ベルグソン哲學の迷い日新宗教の曙光・・・・・	深住言志
	- 石佐	みて	郎の人々へ 高 での宗教・・・・		發 一月 日
田田野井 諸	樓三	井口井木木 晚精好芳? 翠子一松	青作作磯	関・ド博	定價金等拾錢



店畫波岩町保神南 所行發 番○四二六二京東替振 番○二四五 局 本 語 電

く氏

月

定價 1-御 非 替 を 添 御拂 座 律 は 額 發行 東京 П 成安 要 御 쏤 0) 書籍 全 9 す な は せ 振 元 2 3 な 價 3 か

8 御 誌 쁩 社 宛 ナニ 扳 を は 要する 今度 必ず

本錢拾貢

即

刷

所

東京市芝區愛宕町三丁月二番地

野

東洋印

刷

株

式

會

社

發行

兼編

輯

A

海

輝

男

東京市芝區三田四國町ニノ

日

發

行

即

刷

大正五年 月月二十 表紙 [2] 日發刷納 以 四 上面 連續 は 行本 揭 頁 毎 出 以 月 1 0 際 0 巴 は 廣 华

特告

別御

申

金拾貳圓

圓

金貳拾圓

制 氫 頁 頁 頁

引

可 Ŀ 金

仕: 候

候

料告廣誌本 價 定 誌 本 壹

普 特 臨 等 通 號 出 表 紙 0 際 274 は 17 付 。面 規定以外の代金を申受く 金六

海 册 時外 は 運 35 版税 年 册 分

錢

「清國を除

册 册 半 15 ケ 年 月 分 分 前 前 金 金貳圓 金壹圓 貢 宣武拾錢 拾 拾

五

錢

稅 稅

共 共

郵 郵 錢

郵

稅

錢

所 三田四國町

芝五 五八五五番

電話芝五八五五番

發

行

所

統

基督

教弘

道

會

東京市芝區三田四國町ニノ

(後付八)

蒶雜令六



號 月 三

ふ乞を添書御旨る依に、誌雑合六つは方の込申御て見を告廣此 C.犬合雜誌第三十六年第二號2C.大正五年二月一日發行2(毎月一囘一日發行2)C明治廿五年三月二十七日第三種郵便物認可2C大正五年一月卅日印刷納本2 成功春 最 純 良 良 秘 錄 ع ٤ 「聖書日日實行訓」小林富次郎翁遺文 認 認 め X 6 6 出 3 3 版 > ۷ **送料八錢** 敚 齒 一東京銀座四丁目四番地 銀座書約四百頁插畫函入美本 定價 壹 磨 磨 11 は、 房圓

一册定假二十錢

學 學 元

000

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 422 March 1916

CONTENTS

Fundamental Principle of Ego-MoralsZ. Nomura.	24
Unity of Morals and Religion	34
The Current Thought and ChristiamityR. Hoashi.	48
On French LiteratureProf. A. Naito.	18
Ecclesiasticism or Spiritualism?	98
A Higher Individualism	4
Social Defecto and ChristiamityProf. Iso. Abé.	11
On the Ambassador from the Roman PopeProf. M. Minami.	108
Random Thoughts at YokohamaS. Ishida.	16
Shart Poems.'R. Ito.	17
The Mystery of StreetsProf. K. Sato.	58
Short PoemsS. Higashisanjo.	59
A StoryK. Hirai.	74
A Deserted VillageRed. I. Okino.	84
Hokku	106
My FragmentsProf. T. Okada.	1
A SketchJ. Tsubota.	60
Return to Human NatureS. Nishibuchi.	66
A StoryG. Yoshida.	94
Aroem. I. Tanaka.	

Topics of the Day. New Books.

Published Monthly by the

TÖITSU KRISTKYÖ KÖDÖKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

原

豫

師

範

商 商 政 法

> 治 律

科 部 科 科 科

水洋 合細 スハ べ教 シ務 課 就 中

專大 部 テ

ス

及

高 高 工商 門 學 校

H

本

大

學內

13

學受験者の 為 B 特 别 13 る受験準 備 を施 削 日 迮 規

匹

大

正

五

年

月

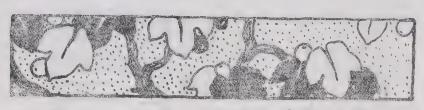
神東

田京

頁 郵 出 券 錢 セ 要 ラ to

w

究授てを始色開し入の科修 室を各許し 始 學者は了 よな講す入 特 中者



		TO AUTOMATION
歸一協會の宣言で ロ生類問の友に答~ 婦人の王國 ::: 等は母なり::: 婦人自身の問題 ::: 実は母なり::: 婦人自身の問題 ::: 東湖野山諸氏の説を許す(記者) 現代思潮 現代思潮	國 : 門 主 / 凉 / 凉	巷の不思議
→ · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	在 隆 大	文學士
新刊紹介	橋田 淵田田 碧岩 彩	東 三 条 實
編輯の後	吾郎郎峻治巖 樓城郎一卷	一次五八頁



	ア	現心	道德	É
	1	代思		我
4 4 4 4 4	F	心潮	と宗教との合致	道
	Parent's	潮とクリ	教	德
	337	ク	<u>د</u>	
į.	Ì	リス		相
44.4429		卜	孙	1
9	F	敎		4
	F			裁

い

人

文

學 在 米 士 國 內 野 足 條 村 藤 理 忠 隈 源

衞

四頁

四八頁

晔:

:二、四頁

の純化

個

羅馬法王 の使節とは何ぞ

横濱情調

内ケ 崎

::(文學

土

鈴

木

龍

司…九八頁

濯…一八頁

作二 鳳

四頁

磯 雄 :一頁

良:一〇八頁

治 々…一七頁

:一六頁

: 早大教授

安

部

- 一高教授

並

社會の缺陷と基督教

文 學 士

伊 石 藤 田

誌 雜 合 六



號月三

早マ 稻ス 田タ 大「學 女才 教工 F



定 總 寫 四 真 價 水 177 判 版 ス 美裝全 金 谷 五 百 數 餘 個 冒 頁

も効験 賴 0 八强健法 する 0 著 1-L 又精 足 36 3 ~ 0 神 き書 な 0) 修 र्द 養法 は 物 世旣 ٤ 8 に定評 あ るこ 7 岡 ٤ あ 田 9. 式 な 靜 而 华 て靜 法 ほ 坐 ど 方 法 法 1-關 0 簡 L 單 7 は安 1 L 1 心 m

身體

7

信

大洩 本 何 ち 敎本 見 すこと る實驗と感想 は著者 氷 速 解 3 ٤ が三 安 きる な 本 く且 書 心 て 年 毫 を 0 間 な 8 つ ٤ を 實地 得 遺 木 を 讀 n 减 版 記 せ は 述 練 靜 B ざるべか け な 坐法 寫 習 L ん。 か 眞 1: 3 0 苟 結 版 ろ べ も身 果自 關 らず敢 L B の 7 叉 體 1-7 正 か 同時 0) ら病 確 へて 種 L 强 7 k に本 實行 姿勢 薦 弱 健 0 體 疑 ぴ を 者 精 惑 書 を變じて 示 神 を は 0 心得 抱 靜 L 0) 修養 丛 あ < 健 者 法 n 3 ~ 康 は ٤ は 0 豐 き を望 靜 諸 理 2 坐 法 な む人 的 項 ょ 說 は 0 5 は 明 獨 細 7

社會式株書

番九一二京東替振

目丁壹座銀市京東

稅



WHAT AM 1?

What am I?

Not a philosopher,

Not a poet,

Much less a preacher,

Or an educator.

Because I want

To be MYSELF.

DIFFERENT VALUATION

My birth, my growth, my education, my conversion, my marriage, my profession, my expedition:

Each of these to me, a great event.

Though to the world, only one of numberless occurrences.

MYSTERY INSIDE

To one the inside of one's house is a matter of plain familiarity. But to strangers, nay even to most of one's friends, it remain. an unknown mystery.

BECOMING FAMOUS

Becoming famous is a dreadful thing.

It means the world has made a valuation of the man.

Once so settled, how exceedingly difficult to break it up and advance beyond it!



A SACRIFICE

A little thought would have led to reformation.

But no one had imagined it till one day a sad sacrifice was made.

This set men into thinking and the wrong was made right. A sacrifice to the mere stupidity of men.

ONE MORE FAILURE

An advertisement of some shop,
Brought one morning by a postman,
But thrown at once into the wastepaper basket.
One more failure to draw people's attention!

TEACHERS

Teachers are stepping stones by which students advance. Fortunate it would be if they prove not stumbling blocks.

BOTH EGOISTS

A good man is often a weak egoist. A bad man, a strong egoist.

Tetsuzo Okada.

3

カン

見よ、 たであらう。「其の時權利を得る者は所有者に非ずして勝利者なり」と云ふベル 此等大蛇 のアッ 人間 蒙古王成吉思汗を見よ、 シ も矢張著しく斯かる本能を備へてゐる。古來史上に名をなした英雄豪傑と云はれる人々は、 リア王アッサルハッドンを見よ、 0 如く、 獅子の 如く、 彼等は其の目的を達し、 虎の如く、 傍若. 波斯王ザークセスを見よ、 無人に振舞つた大なる利己主義者ではなかつたか。彼 慾望を滿たさんが為 マケドニア王アレ めに如 > 21 何 w デ な クサ る事 イ 0) ン 侵 * ドル 略 カン 論 な を 40

のは慨かはしいことの限りではないか。 らざる勢力を占めてゐる。否、 然るに現代 に於ては いかにと見れば、所謂權力即權利の思想や人生觀は軍人實業家の間に侮るべか 唯に軍人と實業家とに止まらず、教育家にして尚且つ之を奉じてゐる

先鞭を付けた者は彼等であっ

120

_

厭世思想があつた。彼の一篇「方丈記」の美文、彼の一曲「石童丸」の悲歌は能く之を語ってゐるではな である。 て衆生を濟度したのであるが、多くの人は一度隱遁の生活に入れば長く現世との關係を絶つて了ふの るべく否定して生きようとする思想が 斯く 一方に於て自己の慾望を滿足せしめんとする努力のある時に、又他の一方には自己の慾望をな 西洋に於ても中世には斯かる人が甚だ多かつた。又日本に於ても佛教の威化を受けて一 あつた。尤も彼の佛陀の如きは 一度徹 底した る後再 び世 に出出 種 0



個 義の 純化

引 照 7 1) > } 前 書 第 + 章

內 ケ 崎 作 郎

意志を持つてゐるのである。斯くて人は自己の進步發達のためには一切を以て自己の目的を達せんが ための手段もしくは道具となすに至るのである。 人は誰でも生きたいと云ふ望みを抱いてゐる。之を新しい言葉で云へば人間は皆生さんと欲するの

するに及びて再び餌を求めんとて巢を出づるなり」と。其の他彼の獅子を見よ、彼の虎を見よ、 は君を吞みて其の巢に退き、數日の間惰眠を貪りて又出づること勿らん。大蛇は腹中の獲物全く消化 蛇あり、其の尾を枝に卷き其の頭を地に垂れて獲物を待てり。君もし彼が捕ふる所とならば如何。 余輩は曾て之を英語の讀本で讀んだ。 か之に類せざるものが有らう。 今之を動物界に見るに、 斯かる極端なる自己中心主義は幾多猛獸の間に甚だ熾んに行はれてゐる。 曰く、「印度の深林を通らん旅人よ心せよ。最と茂れる大木に大 何れ 彼

電 2 1 に三週 られ 1 ズ ヴ ゥ 0 間 之を以 才 る。 で席 1 1 0 休 グ 田舎にあつては所謂向三軒兩隣から一村 ス ・サ 暇を送つたことが て更に此 0 を譲つてやつても醴 詩 ー」など、云 などを低吟し 0 殺風景な都會生活を思ふと、 つて、 た あ る。 過も云は 0 6 つっましや あ 思 0 ^ ない女が た。 は グ ラス 其 かに挨拶して行つた。 ある。 0 120 滸 實に隔世の 落の人々が皆親密に交際してゐるのに東京 見 P 3 自分は嘗つて 0 知らぬ 夕まぐれ、 感 老農牧 カゴ 質に其 英國 靄に包 あるの 童までが、 に居つた であ 一處には まる > 平 田 山 時 和 臭 12 訛 * 例 0 氣 で DV 朓 湖畔地 カゴ め、 流 ッ ゥ 6 方クッ オ

とが てる、 甚 今や人々 出 親 離して 互 來 密 るの N 6 に寂 あ は であ 7 社 9 沙、 た。 客を感じてゐる。 會に 寺院 然 る ながら、 る 12 0 中 今日では多少金を持つて に生 耳 昔は永平寺とか高野山とか 活する僧 ひい 我不關焉と云ふ態度であるから、 侶 0 間 17 は、 B れば、 幾多 社 共 の寺院生活ですら、 同 會 12 0 仕 7 て、 事 B 假命幾萬 而 3 種 孤 0 交際 寺院 獨 的 0 人間 な生 カゴ 其 あ 0 活をするこ 物 カゴ 9 7 住 は 世 h 然 間 700 26 る カン

どう の中 0 云ふ、現代の社會は餘りに組織的になり、又餘 氣分は唯だ に統一しようとする。 12 V2 し乍ら人間 カン どうし 7 自 分 部青年の間 てる此 の行為には何等かより深き動 0 個 性 等 * 0 一發達 盲 自分はどうしても自分自らの のみならず、 目 なる隊商 せしめようとする氣 立派に社會に出て人と共同 に導 りに軍 カン 機がなければならない。新個人主義者、 n て消失民族 調 分 になった。 は 近代 道 族 に至 なら 此 9 社 AJ 0 は 消失個 の事 曠漠たる人生の 會 益 は 業をやつて 個 K 濃厚 人の個 22 73 性 一を没 荒 ねる人にすらも 0 新狐 72 野 9 12 却 0) 獨 6 12 見 2 して一様 主 あ < 出 な 義者 2 和 此 は

なつた。

なつたのである。

的 今日 講演を聴きに來たことも有つたので に傾 て困難 二三年前高野山に登つた時偶然に一青年僧と語るの機會を得た。彼は嘗て東京遊學中余輩の演説 と跳 いて來た。 人間は社會に對し次第に密接な關係を持つやうに de な間 厭世隱遁の思想が全然無いとは云はれ 題 かが 物質文明の發達した結果、 あつたので、彼は終に之に ある。彼の云ふ所によれば、彼の親類や家族の間には實に複雑に 人間 耐 へ得ないで、出家してしまつたのである。 ない。 の生活は益 然し乍ら現代の人々は大體 々便利になり、 現世 0 快樂は に於て樂天 故に大三 愈々濃厚に 八的享樂 JE.

大勢に る。 雜誌 此は土曜 生活を營むことが出來るのである。例へば英國 などではウイク・エ 然 るに は 通ずることが出來るやうになつたからである。この 如 何 妶 日にロンドンのやうな大都會を出て海岸なり地方の遊び場に行き月曜日に歸 元に又一 なる山間 種 新 にも入り込んで、 なる個人主義が 殊更に煩雑な都會などに出 あらはれた。 それは近年汽車汽船等の交通機關 結果孤獨を好む人は極 て來なくとも居ながらに ンド卽ち週末 に旅 めて容易 行 つて來るのであ が發達し、 カゴ 流 に望 して世 行す T 新聞 所の 界の 6

僧などは 人主義者 扨 7 玆 現 27 12 世 注 意すべい の快樂に對して否定的 つては、 きは此等の新 現世 の所有快樂を肯定し享樂しようとするのである。 なる孤獨主義が古しへの其と全く異なることである。古し 禁慾的な態度を収 つたのであるが、 新しい孤獨主義者若 への修道 しくは個

又東京のやらに人の多い大都會に於ては、 人は已に人格として考へられないで、 單なる物として認

斯

ことがで 彼 個 性 分るのであ は決して失はれ る。 彼は教敵 ず、 益 R なるパリサイ人に非 イエ スらしきイエ スとなったのではない 難の口質を與へた程社交的であった。而も見よ、 カ。

會の 精神を吾人に傳へ得るのは、 刺 戟 才 せられ 然るに其の幾千年となく古くなつた言葉が、今日尚英語を通じ、 一交の生活を送つてゐる ス て益々個 の云ふ所は必らずしも獨創にのみなれるものではない。彼は往 性を發達せしめることが出來たのであ か、 其の中に 决 して個は イエ 性を失つたとは ス 0 個 性 かが 働いて 思は る。 ねる な 力 らで 否、 ある。 獨逸語 寧ろ先輩に導 々にして舊約の文句を引用 我々 を通じて生氣 る亦 カ> 7 餘年 n 潑溂 間 友 人に 大 たる 都

我 となり、或ひは大工となり、或ひは其他の業を營み、所謂分業を行ふ方が 行くの て見よう。 12 必要品の全てを製作するよりも、 理 々は >5 解され ウロは哥林多前書十二章二十七節に於て曰く、「汝等はキリストの體にして亦各々その肢なり」と。 であ 天地 も經濟的 人間 る。 ることゝ思 の大生命に 更に此 カゴ に満 此 0 世 300 たさん 連ると共に、其の天分によりて各々異れる職分を守り、 の章にあらは に生 吾人 カゴ 活し存在せん 八は今此の 爲 めに集まれ 多數 れた思想をプラトー 0 の人間が各々其天分によりて或ひは職工となり、或ひ 有名なる對 が爲めには衣食住其の る人間の 話 集合もしくは團體 中 國家 ٠ の「理想國編」に比較 の起原に關する部分だけを極 他 0 物を要する。 カジ 國家 便利である。 6 して見ると極 相互に益し合つて進み る。 丽 して一 簡 人 單 めて 各々の は農夫 カゴ 12 此 述 明 瞭

くの如くにして成立したる國家社會に對して個人は充分の責任 を持つてゐる。 由 來 日 本 12 は團 體

種の傾向となつて存してゐるのである。

笑して超、人たらんとし、かへつて思想上の小兒となると。 的 しめ得るや否やと云ふことである。思ふに不可能である。よし又可能なりとするも其は個人の真の目 るに此に吾人の最も細心に考慮すべき問題がある。それは個人は社會より隔離して其の個性を發達せ の青年が孤獨の生活に入り、 を誤れるものである。從つて真に完全なる個人とはなりえないのである。吾人は見る、幾多深刻真摯 斯か る動機よりして今日の新個 或ひは天才を望んでかへつて 變物 人主義は生じ、斯かる原因よりして今日の新孤獨主義は出でた。然 となり、或ひは人たるの修養を冷

子達 と呼んだ。 扨 0) て次に吾人は基督教の之に對する態度を考へて見たいと思ふ。先づキリストは時として弟子を友 個 性を觀察し、 即ち彼にあつては師弟の關 務めて之を發達せしめようとしたことは容易に察せられるのであ 係は即ち朋友の關係であったのである。 されば彼が能く其の弟

之を證し得るのである。之を以て見ても、イエスが常に大なる興味を以て人間の社會を觀察してゐた は人を教ふるに常に人事を以て之を例證された。「婚筵の譬喩」(馬可傳二十二章一——十四節)、「惡し つた。彼は幼時より田園の裡にあつて自然に親しんだ。しかも彼は決して人間を疎んじなかつた。彼 抑 イ 可傳十二章一――十二節)、「十人の童女」(馬太傳二十五章一――十三節)等に於て吾人は スは何人だ。ナザレの閑村に生れたる一平民に過ぎなかつた、もしくは 一木匠 12 過ぎなか



社會の缺陷と基督教

「人を議すること勿れ」――馬太傳七〇

安

部

磯

雄

を以て其の模範となすであらうといふやうな意味の 詠進歌の中に、 思想は一面よりは非常に好いことであるが、然し一歩誤まれば大變なことになる。今年の新年御 **ム。愛國心といふことは勿論惡くはない、誠に好ましきことである。我日本は獨り偉大であるといふ** 自惚と視るより外はない。今日、日本の政治、 を養はねばならない。 一評せば己も亦批評せらるゝは自明の理である。 この人を省る、即ち利 凡 そ世の紛亂鬪爭は吾人の利己心、何事でも自己を中心とせんとする精神より起るのでわる。 弦には其の句は忘れたが、若し世界各國が聯邦組織となるやうなことが 基督教の教訓 他的精神は今日各國民に飲けて居る。中にも日本人には最も飲けて居ると思 の中、 其の最大なるものは卽ち是であると私は思ふのである。 外交から國民生活に至るまで何處に世界の模範となる されば吾人は須らく他人のことをも省るといふ精 歌があつた。 それが自負心であれば 好 南 th S カジ ば我 私は 題の 日

してゐる。

と決して少くない。故に我々は團體的修養の機關として教會制度の必要を認めるのである。 の青年は社交に對して餘りに冷淡である為めに、職業の問題に於ても結婚の問題に於ても甚しく損を 的修養の機關 が無かつたので、人々は割合に此の責任を感じてゐない。為めに社會の進步を妨げるこ 日本現代

するは自ら修め、考ふると共に、世のため人のために應分の努力をなすにあることを實除に於て現は 同時 してみたいと思ふのである。(一月二十三日、統一教會に於て) を繼續することによつて狹き小さき個人主義がより高き、廣い、溫い 益々我等の團 我 々が統 12 益 々諸 一教會や自由教會を通じてなし得たることは極めて小なるを恥るものである。 君 體 0 に改革を施し、 個性を發達せしめることが出來るのである。 新なる熱誠を以て進むつもりである。 我々は今徴力なりと雖も、 諸君は 個人主義と純化して個 此運動に 参與して、 然し我 我 性 R 8 0 運動 々は 面も

る。 簡單 を開 不 際 屬 あ 政 あ T 0 12 当するが から 多數を占 私 爭 快 府 る って民黨の追擊愈々急にして到底胡魔化しが利かなくなれば弦に三十六法奥の手を出して事 0 今日 ウウッ 12 事 議 に過ぐる 0 揚 は 新 て民黨に 的 12 72 放御答 日本の二月號に チ 足 議 る 拘 終ることは怪む 我 しむる時が ば らず を -會 國 発 ŋ カン 0 であ 紛 n 6 政 0 對するやうにならなけれ 代に なり難しと逃げを張るのであ 高飛車に出づるか、又は調 取らんとするからではあるが、併しどうも政府委員の答辯は誠意がないやうである。 府 騷 政黨は 82 0 者 3 つて 餘 は横暴極 爲 0) 態度は 程 英米等 「議會の品位」といふことに就 政 に足らぬ 的 尠なく 12 府者にとり 益 依 まりな 0 17 なっ 喧 如く主義の爭ひ 然として改まらぬ。 ことであ 嘩 かつた たやうで 腰 2 は ば到底埒が明くまいと思ふのである 12 る。 出 誠 査中に屬すとか乃至書面を以て御答へする位が關 づるより カゴ 12 る。 , 私は是は あ 都 る、 昨 23 合 この 年三月主 あらずして初 0 是れ 好 委員會などに於ても、 外 いて問 何らしても政 は い解 不秘 73 段 密な 客 V. 柄で 0 轉 は 進 め n 倒 斯 は る から喧嘩 次のやうなことを要求 が故し 步 る あ 同 6 府 間 る 志 あ 會 カゴ カゴ 柄 2 _ る。 カゴ 博大なる精 0 多數 方 腰で 民黨議 兩 然 民 者 2 あ し斯 を占 1.2 黨 0 員の る。 協 は 側 る To 神 議 12 相 質問 を以 20 撲 政 るやら 政 0 i 黨 友 無 0 た くし 會 7 所 0 秘密 は 援 12 0 0 カゴ 胸 て常 頗 Ш 助 な 議 であ 土 俵 6 カゴ る

しな 12 3 て英 成ならば勿 對する政府 い、而して堂々と議會に於て爭ふのである。 國 にありては、 論 の方針等に至るまで腹臓 縦し 大問 談 判 題 カゴ があ 愈 々不調に了つた る毎に政府 なく打ち明かすと云ふことであ は先づ議會の反對黨の 然るに我國 とし しても、 に在 彼 は りては之が出來ない、 自己の 首領に面 道 る。 德 心 此 接し 12 0 際 訴 へて 其 て事の顛 0 决 反 L 對 政府 末 7 黨 から其 他 0 首 カゴ 民 領 は

やうな點があるであらうか。

州の炭坑 無いとか 動 度轉じて は些程吾人の憤慨すべき程度のものではあるまいと思ふのである 外交問題、 働い 12 (米國に於て生れた者は格別)、加州に於て土地所 は て居るとすればそれてそ大事件ではあるまいか。 吾人が米國の位置として考察せば果して如何の 取り分け日米問題に於て、日本人は + 萬 からの邦人が働 いて居るさうであ ヤレ米國 るが、 今日本の炭坑 感 有 に於ける邦人の虐待であるとか、 カゴ 權 かゝる見地より観ずれ がな あららか。 いとか言つて憤慨するけ に十萬は愚 鈴木文治氏の ば今日の 力> 二萬三 談 12 米國 萬 ń よれ 市民權 EN 0 米 は の行 國 加 カジ

吾人 等にあっては何うでもよいのである。 徹 會に憤慨すべ 自己以上の 質を映ずる吾人の鏡である。 底 おて せぬ は 黨 一文今日の我帝國議會は何うであらうか。議會は一國の代表機關である。 派 何 カゴ 處に世界の模範たるべき資格を有するであらうか。 黨派 故である。 き何物をも有せ 0 が よりも自己が 議會に現は 各自、 自己のことのみを考へて他人を省察することを知らない。 政治は國民の反影であるといふのも畢竟するに此 n 大切である。 ぬ譯である。 ないといふことは理の當然であ 其處に黨爭があり其處に暗鬪がある。 卽ち今日 0 我國 民 は今日の これといふの る。 斯く觀 議 會 も要するに 其 E 0) 來る時、 國民の 0 ものであ 國家の政策などは彼 理である。 吾人は 精 基督 議員 神、 る。 教 今日 さすれば 國民の 斯 は、 0 くし 精 の議 前 性

カゴ

12

起る。 隊に於ける古参兵と新兵との反目も其の跡を斷 他 るが日 吾人は自分を他人の身に置く、即ち思 其の他役人會社比々皆然らざるはない。是等も自然其の數を減ずるであらう。 本に於ては多く職工長などが勞働者に對して餘り威張過ぎるとひふやうな下らぬ感情問題から 張るといふことが なくなる。 從 2 ひ遣りの精神を養はねばならない。此の精神があれば決して て今日の つに至るであらう。 如く、 家庭にありては嫁姑 西洋の同盟罷工は賃銀問題より起 の軋轢も無くなり、軍

に威 かを 12 n て威 人、一家の主人となつて己が家庭に威張らない程の人は如何なる地位に在つても其の下級の者 を非常な明言であると思ふのである。 あつても、 私は過般 張 張 見して感得し得る至極容易なる識別法である。それは何であるかと言ふに、其の人曰く、凡そ らず、 るやうなことをしない。 關 軍隊に上官としては士卒に威張らずといふのである。 此の人は自己の下級のものに對して威張るか威張らないか、傲慢無禮 西地 方 へ旅行 に出 一國の宰相となっては其の下僚に威張 かけたが、 それ 其の節の は人を看 同 る一種の鑑定法であつて、社會にあつても軍隊 行者が或時私 誠 に斯ういふことを告げた。 12 らず、 至 H であ 吾人の家庭に移植し得る 會社に社 の態度を執るか否 長としては社員 私は に對し 2

故に吾人基督教徒は此の方面に向つて大に開拓せねばならぬ。飾りなく言へば今の日本にありては軍 ならば 此 0 現今の 基 督 教 我 最 一社會を改良し得ることは容易の業である。 大の教訓、 博大なる心を以て他を省察するとい 社會の改良は軈て政治、議會の ム精 神 が今日 改良である。

る と言つて打ち明ける、其の腹心の者は又自己の腹 黨の首領に相談をしたところで彼は其の腹心の者に對して是は秘密だから君にのみ相談するのであ ぬと恰も自分を疎 カジ も之を隱さず打ち明けるけれども彼の僧侶は輩く秘密を墨守して決して他言しない。 にありては一週に一度僧侶に對して何事をも告白することになつて居る。殺人罪 切 為 めで の情質を斷ち、守るべき秘密を守り得る人は是れ偉人であると斷言して敢て過言ではな 獨 り政黨 る。 外された 自黨の首 の首領のみならず日本人一般の缺點であつて、他人の秘密を尊重することを知らざ 力> 領 0 かが 政府 如く思維するから、 の當路者と會見したことを聞き、其の首領より之を打 心の者に打ち明け、斯くして秘密は遂に守られ 首領も勢ひ打ち明 けざるを得 なくなるの 0 如き刑 其處 ち明 6 い。天 12 事 けられ 彼の 問

國民全體を改むるに非らずむば到底之を能くし得ない。今日の日本は凡ての會合に溫味がない、他人 ではないか。 喧嘩もなく争闘 き所でない。今日の如く質問も喧嘩答辯も喧嘩では殆んどお話にならない。然し議 今日 0 政治 缺點をの 於兹私は黨を樹つるは日本人の趣味性ではあるまいかとさへ思ふのである。 は之を益々改善して立派なものとなし、 もなく、恰も基督教會の如くせねばならぬ。議會 み指摘せんとする気圍氣 が充満 して居る。基督教會でさへも西洋各國の如く行かぬ 議會の品位 は素と相談すべき所 も同時に 高 めて行 かね 0 會を改むるには あ は つて喧 ならな 嘩

0

る。

權

威

存する。

話 カジ

3

ぬやらにして居る。何となればそれが爲め家内はツイ其の人を輕視するやらになるからであ

私は此の權威を今日の政治家に欲しいのである。私は他人の一身上の秘密は家内にさ

梅

杂

床

12

か

は

5

7

5

0

筲

は

瓦

斯

0

光

0

5

2

<

L

<

冴

(0)

讀みて見る

親

総

Ŀ

人

0

0

10

É

3

0

媪

カゴ

75

~

12

嬉

L

カン

6

H

6

5

な

る

過

5

責

め

T

大

77

な

る

過

5

を

な

す

かか

3

カン

3

77

2

V2

V

みじき

は

西

洋

菓

子

0

F."

U

ツ

プ

ス

今

カコ

消

え

60

<

D

かぶ

舌

0

上

病

35

S

もを叱りこらしてらすら笑みらすら笑

みつ

>

竹

3

Va

n

21

H

5

何

事

0

いさをしもなさ身

な

カゴ

5

27

力>

>

る

歡

Ci

5

H

V2

1

L

3

は

たらちね

0 形

0

情け

を身

にしめて

大

E

み

た

女

1/2-

譜

め

女

0

る

カン

多

月

光

師

カゴ

願

は

<

ば

13

~

7

J

É

方

1

8

方

を

め

づ

る

カゴ

如

4

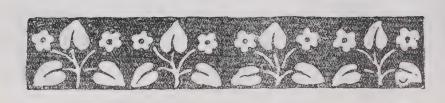
心

Ł

J

な

n



のおや う訪 カつ 12 和 更 T H 歸 L 都 る 路 冬 B 0 5 夜 2 0) 台 L E ろ 4 I 4 月 36 を ど あ 5 る 5 カン な 仰 4 40 カン 力> 12 3

K

伊

藤

348 の精神を了解せぬが爲めである。今日、日本の家庭生活、團體生活、 於けるが如き一萬人以上の組合なぞは何時活動するに至るであらう。 の努力を俟つ甚だ大なるものがあることを知らねばならね。ヘーカー六・・二三自由基督教會説教 言つてもよい。是皆利己を知りて利他を知ら以が爲めである。 隊警察力なくしては真の團體 品は組織 し難 S 真の自治は何時になれば實現するであらう。丁抹などに 他を省察し得ない結果である。 社會生活の向上には吾人基督教徒 實に日 本人は團 體的 能力は零と 基督教

横 濱 情 調

石 田 _____ 治

もとの様橋の朝

棧橋に横づけになった大きい黑船の上 雨のつばさが薄あかい。

鼻の高いマドロス二人 大きな烟管を啣へ乍ら

其下を車が通る、人が行く。 所在なさに下を覗いて・・・

波止場の外の空氣が搖れる

無煙炭をたいてるらしい其走りやう

煙突の上に陽炎がたち

勢よう走つた小蒸汽ー 今しがた機橋の失頭を

P 1 ロツコ、かんしへむし ロツコ、かんしくむし

船に荷揚の音がする。 トロツコ、かんくくむし

朝の光を照り返し 割かれた波が尾をひいて 沖の白帆が 姑 く揺れる。

船に追はれた鷗の群の

釣りいと 「おいこら、 垂れたが斯うどなる。 そいつへ乗ッかんな!」

□大岡川のタ

赤い渡紋がゆるうりくと一條また 浮いてる材木を一本二本と渡って行くのに どやされた小僧が驚いて

何處から出たのか蝙蝠二匹どこ すうと宙を一まはり

向ふ河岸まで廣がつた時

岸の柳にふと消えた あの大岡川がなつかしい。

16

つて來た

詩を味 せてゐる嫌ひがある。此の時代に於ける彼れは、いは、藝術のうちに新しみを象どらうとしてゐた。 餘りに凝りすぎてゐるためと、餘りに花々しく飾られてゐる事とのために、かへつて作の意味を曇ら れようとする自らな要求とが、いつのまにか彼れを騙つて藝術のうちに導き入れたのである。 **出すことを怖れてゐたやらなものである。しかし、彼れは英國や西班牙を旅行したり、オス** 第二期ともいへる文學界に打つて出 るたのである。ついめて云へば、彼れは、みづから一つの理論を作り出して、 人間そのものと交渉のない、たいに藝術家のみによつて受けとられる不自然な藝術を象どらうとして メ かへつて ラエ』などに現はれてる彼れの象徴主義は、 彼れは、マラルメやヴエルレーヌを生み、ニイチエを生みひだし、自然主義 りあ はつたりしてるうちに、 朦朧 になったり、 晦澁を招 いてゐる。言葉こそ、朱の打ち所もないほどまで色づけられてゐるにしても、 ŀ ス いつとは知らず、自分自身の性格の上に自らな變化を感ずるやらにな þ 工 ーフスキイやクロ た。『ユリアン・バ 息苦しいほどまで重ねあはされてゐる象徴のために、 リュード ーデルの作を研究したり、フランシ の旅」、『ワルテルの詩 E 0) を醱酵した象徴主義の 理論 وسيا 縛がれざるプ から外へ踏み ス・ジ カ ー・ワ

はアンドレ・ジイド彼れ自身の外の何人でもなかつた。それまでに彼れは、 よつて生命の力をさづけられた。ジャムによつて生命の恩寵に接した。けれども「人生」を發見したの 彼 れはオスヤア・ワイルドによつて、豐富な生命をそれとなしに與へられた。ドストエーフ 十九世紀の花々しい文明に 平 イに



p ~~

ン・ロオランは、

アンドレ・ジイドといふ人

間感とをもつて貫からと試みた最初の一人である。彼は謂ふところの問題小説に墮することなしに、 佛蘭西現代の作家のうちにあつて、鋭い人生批評と細かい心理解剖と暖かい人 内 濯

とき、彼れを目してロマン・ロオランに優るとも劣らない藝術家とすることができる。 こゝに話さらとするアンドレ・ジイドは、自己の人格の光りを直接その藝術に投影せしめてる點に於 到底 いまだロマ ン・ロオランの敵ではあり得ない。しかし、吾々はその解剖的乃至技巧から見る

もまたこの點に在るのであ

一つの生々した理想をその藝術のうちに生かさらとした。彼が新しい藝術の基礎を拓いた意義

能と、極度まで練り上げられた感受性と、美に對して動く深刻な感覺と、美しい製作によつてとり圍ま 太陽の明るい光りには向けられ ふべき紛れもないパリジアンである。彼れの少年時代の眼は、はやくも書物の頁の上に注がれてゐて、 は巴里の藝術品の眞中で教育を享けた。彼れは文學そのものゝ中に浸つて今日まで生きて來たともい と、大きな森のついく平原に生れたロマン・ロオランの生ひ立ちとは全く異つてゐる。アンドレ・ジイド アンドレ・ジイドの進化の歴史ともいふべきものは、ブウルゴーニュの青々した牧場と、小さな流れ てはゐなかつたのである。吾々が曾つて見たことのない聰 明 な其の智

Jr 處にある。 だけ人間 「藝術のための藝術」の理論の た やがて此の一點にさまよつてゐたのではあるまいか U 12 ン・ロ 思ふに、迫ひ拂つても追 なる事 才 ラン 0 あ の思想に接近してゐる。「偉大な人は唯一つの る。 步進 歸 着點はやがて此 め ひ拂つても、 て云へば、 極 絶えずたち歸 < 處にある。 あたりま 象徵 12 つて來る人間性 主義 なる事 焦慮しか有たない。それは、 0 理論 6 ある」と彼れ 0 歸 を歌つた 着 點もまたやがて此 は ホ つて 2 オ

フーと、 2 であ し を罷 覊絆 イ の事の肯定である。 まに外へ向つて開展せしめんがためには、人間は カコ らし カン ズ い讚美に外ならない。 ジ る る 2 イ に、『不道 12 ゥ しようとする人間の心理解剖を試みた二つの作があつた。バンジャマン・コン た生活 F* 1 彼 到 12 道 達 Ü AL は 0 ĭ 工 二つの 德 轉 最 德家 T 1 換の の羈絆にも囚はれない生命 ・ヌ・フ 近 70 佛蘭西文學中には、これまでに自己を愛せんとする心の微細 る 傑 0) 日 作『狭き門』は、 の自愛主義は、 なら、「 記 出 17 佛蘭西の或る批評家はこの二つの作を目して、 であ L 7 た > トミニ るとするならば、 作 タン カゴ ある。『 の『ドミニック』こそやがてそれであるが、『アドルフ』の ッ 最も自 7 カコ らし 地上の は悲哀と厭世の色調 の昂 た豐 由 後者 張であ な、最も廣い、最 糧』と『不道德家』とが かな生命 如何なる事をも爲すだけ は疑ひもなくその換骨 る。 生命を摑 0 描 寫 3 に包まれ に外 豐 まんが 力> な ならない。 即ちそれ 久しく佛蘭 生 た他愛主 命 0) 12 脫胎 0 權利をも 的 發 12 であ 0 湧き漲 義 見 は、 あ な解剖、社 12 12 る。 る。 西文學中に見なか スタン 歸着 到 つてねることそ 生命 3 着 それ 前 結果 生 L * 者 の『アド 命 7 7 を彼 思 會 は 0 3 の感化 傳 N 雄 る Z 0 n 統 0 K J° jν 里 カゴ 0

る。 なければならなかつた。 つた。一切の源となつてゐる最も美しい生命を知つた人間であつた。彼にとつては、水 かくして彼れの摑んだものは、彼れのうちに生れいでた他の一人であつた。生命を感じた人間であ 自己の真の姿を見ることである。 い生命、最も名高い傑作にも等しい素はだかな生命を了解した人のみが、確かな幸福を與へられ 彼れの理解にしたがへば、最大の幸福、最大の快樂は自己を感ずることであ この點において彼れは人間性の偉大を穿つところに出發點を置 なしい かも

なか

界を見出したのである。彼れは

しての私に何の自覺があるか。

私はたゞ辛うじて生れた。そして何故に生れて來たかを知る事ができ

いよ。『私は専門家としては愚物であるやらに見えた。

それ

なら人

れる。からして彼れの美しい言葉は、『アリッサの日記』の場合のやらに戀を語り、生活の真の意義を 發見するとき、美しさの上にけだかさを加へて來る。 ばなるだけ、自分たちの眠りを正しいと思ふやうになつたらどんなに、彼らは嬉しいだらう・・・・』 らの目を醒ましたら、どんなに嬉しいだらう。次の日の夜に死ねるといふことを少しでも恐れるなれ 夜の中にふみといまらなければならないやうである。春のをはりの短い一夜ではないか。夏の曙が彼 アンドレ・ジイドにとつては、言葉が美しければ美しいだけ、靈と生命とを敷ふ永遠の思想が表白さ

ます永遠の現在の上に浮き上つて行くのである。 ン・ロオランを生かしてゐる大きな生命の流れをまざくく見てとつた。かくして新しい佛蘭西はます アンドレ・ジイドは純真な藝術から出發して、充實した生命の境へ至り着いた。そして、そこにロマ 行 察眼とによつて生かされてゐることは疑はれない。これまで人間 0 信じてゐる。かうした見解が果してその當を得てゐるかどうかは俄かに斷ぜられないまでも、この二つ してゐるの つたほどの傑作であるといひ、將來の小説にいろしくな意味に於いて師表を垂れるものであるとさへ かない。 が飽くまで古典的な文體の統一と、どこまでもぬかりの無い心理描寫と、真實な面かも絶對な觀 一義としてしまふはどまで、言語を古典的に取り扱つしゐる。 7 われくはこゝに『地上の糧』のうちに挿まれてゐる美しい一頁をぬき出しておきた は自然の描寫である。彼れは、一莖の樹木をも一羽の小鳥をもそのまくに見すですわけには るた事象が、 いた彼れは、どこから見ても言語の絶對な主宰者である。 新し い意味をもつて新しく生かされて るる事 世界のものとして數ふるに 言語 わけても彼がその技巧を擅に も疑はれ の選擇 13 S. 0 た めには 不道 Vo 思想 りな 家しと

それ 12 だらうか。 VQ. 76 12 「.....この樹の葉陰には敷粉かの鳥が歌つてゐた。鳥といふ鳥が一所になつて歌ふにしても、 息を切らして了ひたいと思つてゐるのだらうか。歌ひついけた後にかれらはまるで、果てしない る 歌 れらは 思はれた。 つて 0 より强くは歌 72 いつも~一夢みる事を恐ろしく思つてゐるのだららか。かれらは唯一夜のうちに戀のため かれ なか る 葉といふ葉を悉くうち頭はして聲をあげてゐるやうに思 鳥 らは新しい朝が夜にひきつゝいてまた生れて來るのを知らずにゐるのであらうか。 ららか。 の影が見えなかつた へまいと思はれるほど力强く歌つてゐた。 かれらは除りに情を昻ぶらせてゐる。から歌つてゐたら今晚はどうなるの から。私は考へた。 ――これらの鳥はやが 私には樹木までが はれた。 3 聲をあげて てその 3 歌 のは、 ねるやち めに死

程と言 5, 言 造 覺 お 牛 傾 る 論 極 3 12 あ は 活 向 E 的 0) 極 向 舊 在 る L 意 單 7 は 2 6 的 r な 7 力> 12 V 12 吾 指 流 個 生 義 は は 生 0) 7 性 過 力> S 一氣な i 定 3 * 要 要 な 活 は 上 質 動 性 3 17 水 ij 明 隨 な す 5 求 性 的 0 12 カゴ を 5 0) 22 n 8 4 で 生 赤 n 3 32 Ł カ> 根 述 0 0 其 思 V 活 裸 Ŀ 等 要 道 7 方 は ことは 0) カ> 25 n 本 あ 0) 丈 想 た 6 it 12 は 求 進 德 意 改 向 自 な 的 る 中 R 8 0) だけ P 5 改 す 步 12 識 造 心 根 12 で お 道 身 カン 轉 する必 らな 對し ¥2 造 5 をな 摑 生 德 る F 的 力当 本 は S 換 猶 活 3 的 單 7 ことは 0 0 0 力> 12 期 直 て、 重 けれ 發 或 實 晤 意 先 出 要 す 12 23 殊 5 般的 改 L 求 要 達 は 要 現 示 味 づ 36 12 ども 12 造 た 般 な 决 新 す で 新 生 0) 3 卻 カジ 12 0 根 意 る は 實 要 36 的 促 L 72 南 道 は 活 鬪 お 12 現 求 建 味 Ł 12 4 吾 德 柢 ると思 0 な 進 7 V 吾 要 は 設 無意 自 活 で た 生 を カ> R T 0) 6 0) R 求 活 3 道 る道 要 氣 t は V 由 0) は 0) 0 0 3 生 要 將 Ł 德 改 求 分 16 73 0 账 3 な 然 內 學 とは 活 德 潑 か創 造 0 求 T 成 0) S 0) 7 面 醒 刺 積 過 勿 13 3 0 0 2 的 12 カン 期 的

る

0 0 動 6 V 0 に 72 6 た 要 3 あ 0 不 あ め 水 る 徹 12 る Ł 7 底 內 S 20 73 2 2 5 面 くてと 沙 n 的 般 予 その 根 0 的 カゴ 本 は は 生 現 意 新 不 活 代 義 動 111 1 要 3 0 26 -(. V 求 忘 直 \$ 道 あ に無 觀 却 3 德 3 す 力 的 3 6 Ł 况 生 批 惧 0) 1 判 n 方 F T 思 力 カゴ 间 氣 h とを 浬 あ 0 所 る 速 0) 缺 度

浓

0

高

n

12

K

0

忘

n

な

0

ふっこ 發 社 實 至 道 0 為 とを意 2 6 現 會 現 德 8 > iz あ カゴ 的 要 0 2 斯 る 吾 だ 他 自 求 0) 3 0 味 0 カン は 我 R 4 言 5 1 i 道 道 0 元 0) 徳とい 自 來 た 德 3 0 V そ か 覺 2 唯 3 12 指 迄 0 园 對 的 0 L ___ 意 别 な で 立 0 6 內 72 は す た 味 0) あ 面 4 0) 南 13 3 性 0) 0 0) る 12 自 お る筈 6 は 卽 V 南 我 V 5 0 本 2 自 は T 道 特 T 來 な 德 注 我 n 有 0 意 意 42 から 卽 0) 何 V 個 ち 道 弘 r 起 味 喚 因 72 A 理 德 計 12 的 想 す **>**" 會 お だ S 的 H

道 德 0 楓 據

る Z 0 0) 0

た 0 女 10 吾 稳 > 17 化 奠 は L 勿 重 論 易 す る 過 V 條忽的 5 去 0) は 舊 75 出 S 氣 來 道 分 德 15 0) S 觀 要求 9 道 0 みを肯定し と言つて 權 威

德 0)

序 鱊

Y 論自 73 覺な 內 7 本 0 面 的 優に き要 な その は 的 道 なそし R 例 何 自 76 S 德 は 等 求 覺 0) よつて生 的 あ 2 限 ば食慾 は で 理 要求 12 2 5 7 9 あ 價值 なく 想 伴 72 理 W 的 る欲 9 る で 想 意 E B 創 カ> 多 て生ずるも あ 的 72 性 造 らで 550 味 3 求 な 0 卽 砂 慾 羽 0 0 あ 5 0 意味を有することは うちで最 0 欲 0) 價值 でな 如 てれ る。 *>* 求 心本 をも 0 蓋 創 V 6 吾 0 から、 造 能 あ ī R は Z つて 理想的 執 人間 0 的 0 て、 意 な要 言 拗 居 斯らい 味を な 2 は る 求 この 要 內 女 最 飞 は 出 求 6 H 面 36 3 自 來 は 的 4 根 \$2

深 之れ 內 或 17 B 的 は 反 自 L 一覺に基 T 普遍 カン S S 2 的 72 3 な 4 價 0 0 值 12 で を持 對 あ す る。 3 0 吾 7. 隨 居 K る つてそれ 要 真 求 Ł カ>

村

隈

晔

吾の を離 己意慾 吾々 性 現も Vo の自 美の のは ち新 むしろ は 現 道 自己 亦限 永 理 0 現 價 在 m n 6 德 久 在 L T 0 想 12 內 值 0 自 卽 展 て不許不の 其自 顯 起因 部 5 た 感 あ n 0 なく 展 5 開 現 る 創 を超 覺的 0 3 絕對 理 をなする 所以 する人 で 0 造 身 持續 想 よ 生 あ 6 越 な 固 る 善 る は 的 あ L 本 > 定 要 の自 0 0 す カゴ 卽 格 15 70 か 能 的 6 實 ~ 0 求 為 5 的 不 B 欲 かった 許不 然的 あ 現 で 生 ح د は 12 ての 求 め 0 不とは直 あ 絕 で 活 でそ 存 る 0 永久可 對 る 不 12 在 生 0) 0 (Sallen) する 一發展 活 であ 許 カ> 決 價 0 6 5 L 不 狀 值 要 接 あ 能 6 態 求 3 カジ T た 6 0 0 真善美 は 15 為 あ 卽 吾 る 6 創 關 0) 內 だ る。 ち純 は 4 カゴ 造 實 R め 係 0 0) カン 6 III な Ł 現 は 要 內 限 は 現 は 6 0 粹 いよ 9 73 管 卽

最 近 数年 間 12 お V て所 謂 新し V 道 德 12 對する

性 許 なら 質 室 1 道 73 る 25 6 T 絕 吾 3 質 有 德 要 不 觀 求 求 絕 2 は Ü 五 は は V2 的 TS K 己意慾とし 自 3 純 從 は 大 7 R 慾 內 る で なけ 7 來 卽 言 必 0 0) 來 許 17 道 粹 S 面 要 德 創 2 15 3 根 0 5 71 性 起 不 なく 易 造 2 自 2 本 純 n 2 因 0) 7 0 せし 力を 意 己 客 U 0) 具 中 10 性 7 l 1 12 自 體 味 理 13 决 觀 0) T 12 意 カゴ 叉を 汲 は 定 想 我 T 外 cg. 6 道 U 19:1 慾とし 的 的 來 4116 12 言 價 的 德 る 弘 1 82 0) 0) 12 過 な生活 自己 る。 何 有 op 0 值 出 0) 條 自 な 0 1 そ 境 等 主 换 要 必 * すこと 11> 件 我 個 7 殊に 7-舰 的 實 は 要 < 的 0 A 0) --何 强 條 性 i 性 根 展 な 現 な 0) 不許 n 36 居 13 烈な その 開 と人 假 7 12 價 客 弘 6 3 は 據 件 カゴ S 出 圣 象 初 る 值 不 自 12 72 潮 0 自 來 不 格 性 加 S 發 る 吾 る 的 गि 的 規 6 否 格 許 價 價 實 聖 發 75 論 自 K 種 る 能 的 T 節 吾 的 13 13 性 意 脱 五 17 な 不 12 律 值 K 在 值 12 0 だ 5 を た 却 獨 る < 味 12 n 規 深 0) は 的 規 Tr. は 性 裡 有 3 Ł L 0 不 純 節 カン な S

る。

法

Ł

7

36 は

自

我

7 ¥2

は

觀

な

di

6

75 ح

10 0)

カン

5 阅

2 C

0)

制

限

L 0

75

0

0)

6

あ

る

110

鹏

72 絕

る 料 純 然

我

は 36 的 則

V カン で 觀

化

0

際

12

必然從

ね

ば

な

5

自

法

-6

あ

威

4 L な

意

識 斯

し

1

來

る

カン

Ł

30

3 意 di は 12

に 慾 主 决

2

0)

題

更

12 は 0

7 V

樣

な自

實 1

現

的 6

卽 性 7

5

絕

對 自 的 客 0)

V)

僧

值

X

客觀 をも (1) 虚 る n 4 る 10 丰 13 言 A 15 ふまで 定 つて 化 3 お 格 觀 せ 0 性 化 0) V 制 -(5 7 H 居 T は 限を受 とす 30 妨 n B 义 徹 ども なく は H 里自 る 徹 な 随 意 < 純 3 T 2 2 識 尾 V ると i と思 てそ 0 客 0) 粹 す ろ自 6 觀 自 3 丰 は あ 己 S 0 人 觀 Ł らそ る 規 性 意 0 定 定 慾 何 は カン カジ は 5 和 8 故 侗 0) 72 不 自 受 1 弘 客 3 口 身 < 自 カ> 而 道 觀 能 S > L * る 人 德 的 我 6 る 自 p 7 (1) 制 あ 5 自 律 他 自 根 限 る 75 據 1 的 我 を 6 72 12

お

-6

R

0)

生 n

活 は

發

展

0 Va

可 カジ

能

裡

35

現

出 何

意

識 形

せ

6

る

範

6

な

5

2

は

如

73

る

相

12

それ 12 は 生 驗 6 活 は 本 1 單 問 吾 7 形 10 題 12 12 H (0) 12 m 關 E る 盾 識 道 接 係 的 0) す 德 根 15 認 價 體 る 識 據 值 驗 論 6 當 0) 0) 3 60 源 分 中 3 t 泉 は る 0 25 3 0 カン 進 5 思 8 h るの でな 人 迹 0 1 行 1 ح おく 0) 715 亦實 直

P 貴 Ł 氣 自 創 氣 摑 以 的 0 豆 L る 向 識 0 な 捉 6 浩 分 3 1 俗 內 V Ш 0 T 分 を 必 反 然 的 6 1 谐 掘 見 2 H 雕 73 抗 部 12 ^ は 見 尊 深 72. た 如 5 意 的 6 0) n げ 的 3 金 カン 9 官 坑 味 12 F E 相 16 4 30 弘 0 な 10 V な 破 * 價 掘 * げ 世 0) か 相 17 V 10 2 0) 力ゴ 發 壤 3 整 持 で を 0 值 性 9 7 を 吾 6 本 現 B は 從 と意 と全 出 つて 題 35 深 0 2 3 5 R 而 然 3 1. 4 そこ 2 來 る。 現 7 0 す 13 重 72 0 S 力> 0 0) op 吾 內 居 0 要 脉 < 深 泡 意 は 9 視 < そこ る 生 求 5 恰 42 深 味 す 面 Ł 性 < 强 な 厭 17 V それ P 的 眞 12 活 3 質 切 12 氮 3 は 0) < V 1 P S らに 決 潜 有 鑢 會 內 踏 12 15 40 6 77) 分 底 暗 對 自 L 6 山 氣 Ł 在 2 異 拓 吾 な 加 0 力 吾 Jy. 示 5 す 7 2 全 要 的 分 表 0 分 R (1) R V 0) 1/2 0 る 空 70 た 7 易 I. 求 4 現 は 3 る < 主 は m そこ 覺 性 夫 吾 B 超 絕 想 3 亦 0 车 7 0) 吾 僞 B とそっ 3 的 5 越 或 質 如 醒 m 吾 115 的 內 Z K R 5 規 n る 黑 實 Fr. 的 者 的 な 12 FE 0 要 部 0 カン 0) 5 發 質 個 0 異 求 生 價 カジ 以 氣 4 相 未 る THE V 定 岩 2 分 作 在 2 人 2 を を底 突 ず、 うご 氣 F. 個 8 值 活 音 性 た 進 意 的 石 確 方 0 n 人 分 味

> 妄 實現 は 人 間 0 あ をし 1/1 る 13 中 Zwang vidya 7 S 世 カン 界 る 0) 的 そ な 無 種 交が相 量 衝 光 明光對 動 を創 を 的 的 現 個 出 造 A -63-15 性 L 0 規定 3 ž 3 常きを 摩 あ 間を受 詞 5 į 力 U) 迷 10 思

な價 性 なる 究 な 至 據 2 0 問 絕 0 局 問 深 南 題 n カゴ V カゴ 對 個 僧 德 72 意 事 題 カゴ 値 的 vi 5 は 權 Ł 味 理 實 內 (0) A 現 旣 值 0) カゴ 3 を あ 在 威 想 怕 25 12 0) 本 6 なく とし 吾 圣 如 弘 客 過 る あ 的 根 原 獲 何 2 る 主 觀 去 據 R 15 7 7 的 言 (i) 7 カゴ 觀 天 0) は 來 哲 實 哲 る 居 0) 性 17 S CA 學 る 根 道 L 學 づ 换 3 0) 在 15 據 德 2 的 0 力ン 裡 < 的 カン 0 ^ は 中 遺 12 n 思 カゴ 0 12 社 は 根 吾 12 會 物 何 あ 本 在 在 等 性 源 12 3 吾 0 3 R 3 あ とし ことは 75 カン 前 0 22 -0 る 15 17 理 せ < 腿 內 0 0 12 (1) 由 -(72 生 存 7 埔 定 脜 活 73 12 果 的 12 S 在 0) S 3 基 す 無 か L 丰 12 道 太 45 力 條 朝 73 7 9. お < 5 件 6 主 性 0) H 如 カン 乃 的 何 36 根 る 觀 カゴ R

道 單 0 な 根 る 振 Ł 越 覺的 7 新 0) 分で 內 面 là 的 丰 < 觀 究 性 局 は 0) S 不 許 生 -(0 不 72

25

倫基

理

學等だ

求

と道

力

2

ソ

クた

ラ道

ス

督

0

行あ

0

形吾

體

8

知孔

南

るて

É

0)

力分

何亦テ德

で現しを

あ代

るのやけ

力》

3

知

つが

~

るめ

るむたら

け努徳

n

E

76

斯

周

定

承

3

0

6

カン

K

は

め 2 0) た T n n 絕 理 る 卽 對 解 ち Ł 不 自 許 思 求 我 不 惟 12 0 內 (1) る 純 要 闸 粹 ことを 性 求 自 2 12 上 T 72 あ 意 信 12 0 慾 7 6 じ 72 且 は 如 言 る 2 全 何 本 體 1 樣 驗 換 性 12 L 理 n 7 因 3 13 3 ば 超 L 道 0 3 越 T 0 德

E 吾 規 斯 用 21 0 L B 百 定 構 な 研 5 17 た 的 0 究 6 1 過 L 成 L 12 加 0 あ 去 或 72 說 道 先 燦 5 は 思 德 た 0 說 明 伙 5 P 歷 促 3 JE 惟 明 カゴ 先 た 史 進 40 n 0) 吾 カン カゴ 輩 る 17 す 研 得 6 2 K カン 綜 吾 お る 究 る あ 0 0 6 合 R ۲. 12 口 る 本 内 3 は 1 能 果 的 1 な 性 面 3 過 性 L 效 哲 0 5 12 的 7 果 去 學 出 T を ば 遵 不 B 本 來 亦 R 許 V を 0) 0 宗 2 受 世 有 7 不 カン る 充 な 紀 0 分 は 生 3 敎 活 何 あ 道 る す 42 カゴ T 勿 綜 る 2 5 德 台 居 論 **於於** 0 50 OR. 合 4 22 U) 6 功 濟 カン 5 價 3 き 2 利 0 > 證 は 科 H H. 為 n 值 的 72 學 明 n * 實 0 B 6

> T 絕 的 た カン カン 13 は 石 頂 叉 煩 最 12 12 0 4 道 悶 達 F 觜 片 高 1 德 B 的 新 得 カジ て 理 30 道 道 る 更に F. 恰 知 德 德 n ds 3 的 創 0 0 高 金 丈 知 造 峰 6 字 17 < 識 塔 0 12 あ 石 0 カゴ 立 絕 を 力 6 0) 叫 0 は 堆 P * 吾 な 7 み 5 K どを 居 旧 F 57 0 0 故 る げ 前间 內 7 す 吾 12 7 居 A I 3 現 2 17 0 的 3 6 カゴ 在 0) 積 6 不 あ 終 12 許 2 あ お 局 重 5 不 叔 3 0)

體 虔 强 12 0 吾 吾 的 足 社 L 驗 本 な 7 會 L R 12 因 理 W 勿 す 的 T 來 能 0 果 上 解 論 る。 求 事 全 人 度 內 的 12 す 吾 實で で 性 格 お 6 面 12 る 17 あ 質 見 H H 2 理 性 あ は 的 あ 解 る 13. g る 郷 12 n る 道 3 1 内 驗 5 E 效 德 カゴ 或 得 獨 必 面 12 果 V 出 处 V. 忠 h 7 的 2 來 同 如 CK は實 こと 4 消 時 V 價 n 佪 問問 57 (1) 6 tr. 랖 德 值 23 用 亦 0 存 は 南 理 1 12 0) 的 的 内 0 在 根 出 6 由 0 2 意 社 據 不 7 볦 る 來 0 融 會 P 許 吾 的 75 日 3 的 2 論 7 理 不 T K 當 科 3 想 道 n 6 0 0 解 生 學 2 要 性 は 自 あ 德 意 活 的 我 求 5 吾 を F る 5 を 17 相 を 乃 研 敬 外 滿

をし 性 な よ し 3 相 經 換 2 2 驗 自 2 6 6 9 7 對 2 る 驗 7 12 我 な あ 7 吾 7 的 7 カン カゴ ると自 1 絕 0 主 6 S 絕 R 居 個 は 如 對 意 直 0 對 0 る 人 觀 别 何 5 慾 不 個 だ ことは 化 自 性 性 問 喚 Z 12 12 我 許 人 7 我 をし カ> 0 題 L すな 道 起 0 不 性 な とし 5 n 中 7 德 丰 3 た 0 É 12 た る 蓋 T 12 カコ 的 朝 る 7 n 我 1 3 客 絕 T. > 不 的 72 道 初 不 7 は 疑 0) 對 觀 る 許 意 弘 德 B 同 主 許 は 化 は 的 兎 不 欲 不 0) 規 2 時 觀 ح 曹 不 n L 27 思 範 カゴ 13 牛 規範 12 性 0) 0 な 角 議 漏 た 直 過 活 純 絕 に 不 1/1 性 な る 接 ぎ 力 可 化 2 對 粹: 事 3 神 0) 體 3 性 自 7 思 管 す 結 カゴ 秘 0 驗 開 S は 己 議 で 同 で る 吾 力 合 à 0 5 意 あ 時 感 0) あ せ 態 更 18 を 3 る (1) 念に 12 華 應 る る 0) 有 動 12 育 3 實 普 自 力 め 2 直 12 言 接 外 を 我 遍 12 而 7 接 よ 2

> る は は 件 な 絕 自 6 對 我 12 7 0) 曾 內 吾. 面 定 12 10 的 # 0 南 不 Z'. 論 許 る 3 理 を 不 的 ح 0) 得 要 要 n な 求 卽 求 S 弘 5 6 0 亦 理 あ 6 5 想 0 南 0 7 72 3 性 3 質 7 所 刨 な 以 0) to 心 6 價 道 要

> > 值 德 條

道徳の総對性

カゴ まな どる 思 理 般 至 3 d' 求 7 理 7 惟 社 企 解 科 76 圣 解 通 吾 得ざる それ 學 質 0) 7 12 S 5 亦 L V 12 的 際 要 は 說 斯 t は 的 K 求 たと 根 5 2 12 12 明 自 らとす 說 1 は 本 V 要 12 T 說 然 2 明 訴 的 道 明 3 求 吾 理 界 0) 7 德 道 要 な ^ 12 カゴ K 解 では る 條 0 道 E T 德 求 出 1 否 0 は 件 現 德 價 得 8 定 來 道 は 3 あ 2 9 0) 充 道 せ 或 值 る 德 3 有 る n 理 40 價值 德 ñ 分 0 る 12 3/3 2 カゴ ば 由 理 0) Ł 優 假 對 0 7 思 を 事 カゴ す と考 劣 7 定 惟 解 功 す 居 道 附 徳そ 變 3 利 8 P 3 を有 す 6 L 03 化 規 關 ~ る 的 思 ~(出 すると 1 2 吾 定 0) す 2 係 惟 且 カン 來 實 L 的 る R > 12 n 0) 10 0 際 は I カジ る 1 要 3 思 0) 水 事 * 5 は 自 出 求 的 說 9 惟 12 性: 證 17 Ł 思 來 H 分 明 1 を 0 Ŀ 明 す る 乃 9 要 0 好 n 止

性な

る

2 る 的 10 亦

过 活 定 現 吾 切 科 0 對 豁 6 す 0 0 á 實 要求 動 明 R 7 兒 0) 驗 カジ -[1] 0 遍 12 卽 理 活 5 を各 カバ 0 凡 出 表 無 性 12 0 ことを人 L ち 無意 解 動 要 を 因 來 な 吾 7 示 す 求 求 法 法 0 0 る る R A 事 味 3 方 Ù, 差 吾 則 7 相 0) 0 2 カゴ 遍 表 發現 異 居 る 内 12 前 類 互 12 0 性 現でも な 斯 客 る 17 カゴ 反 者 12 4, 141 22 要 であ 3 文 樣 あ 哥 論 カゴ 現 0) 向 觀 0) 的 求 整 H は な る 7 威 9 R 的 で 不 議 0) 來な 覺 許 卽 研 人 0 あ L るとい 6 n 0 T 妥當性を 意 後 强 自 5 究 76 T 間 3 る 72 的 不 味 でも 己意 生 宗 居 0) 6 者 請 り主 < 經 0 を取 なる 活 宛 普 敎 ると思 本 前) 驗 す は 主 慾 衆 でも 性 谷 る 遍 張 0 る 0) 羽 虚 張 À は 人 幕 0 科 性 普 0 無 政 Z. 要 0 管 12 學 た た 2 12 O. 行 求 內 12 いそ 遍 前 者 る りす なら 換 道 出 0 9) 40 面 因 的 12 カジ 意 ことを らざ 0) 要求 自己 Ź 來 36 德 生 價 的 0 值 絕 7 op B

> で 傾 最 ス る

我 的 0 不 る 施 0 0) * 文 要 更 漏 的 0 求 75 求 價 6 南 頒 Ŀ V 要す Ž. 公 る T お 0) 3 發 V (予が 的 72 やらに)、詳しく 道 12 展 德 嘗 開 0) L 根 表 意義 現 た せむ る内 及 云 CK とする 面 價值 は絶 不

R

カジ

自

表

現

3

要求

た 生

. 6 活

研

究 浴 會

た 1

6 7 3

叉を

を

理

Ŀ

得

03

6

-IF

カゴ 理

る。 b 個 向 理 よ る。 あ 0 ことや、 南) 企 道 0) 近 6 6 あ 個 時 由 德 性 る る カゴ 7 カン あ 內 0) る あ 代 Ł 的 人 75 とは 容 價 主 12 寧ろ普 思 る 行 ことを 思 7 不許 お 决 43 2 值 義 1 為 H 和 を 想 思 V 道 12 それ 漏 2 沙 潮 7 德 お 化 孤 理 不 は n T ども T 解 は 道 旣 n 0 新 0 17 2 普 卽 的 L 德 < 勃 12 L る 進 得 事 5 試 遍 內 5 純 道 F (1) 0) 興 V 化 差 永 內 管 0) 容 德 内 來 な 3 76 的 人 6 的 别 聖 企 關 價 面 面 0) 0) 0) V 相 素 沈 n 縋 類自 华 所 的 0) 的 聯 6 值 現 朴 12 0) 論 25 流 根 思 0) * 化 と見 解 な 動 す 皮 ح 否 40 性 流 據 1 < とで 考 を 動 1 -5 相 復 定 個 0) 希 3 現 性 3 通 流 的 活 臘 0 ^ 14 で L 没 a 13 72 7 虚 動 盾 あ (1) 0) きで す 3 阴 無 南 T 性 批 7 3 館 ソ 4. 曾 來 カン 思 6 D カン 重 6 丰 フ 因 6 想 遍 カン 的 6

的

る

いて る 的 扱 12 本 爲 1 哥 3 す S 强 2 弘 分析 に随 3/3 易 烈 0) 0 的 0 0 0) 意 で な 意 6 6 L 2 75 論 味 咏 T た あ は 理 12 9 相 2 な 3 要求 お 綜 創 對 Ł S 思 V 造 合 的 吾 7 惟 した であると R 絕 理 道 な 果 0) P 對 德 H 活 論 6 的 性 0) 0) n 動 1 關 理 要 は 係 絕 ば 0 7 的 實 求 S 抽 要 終 對 3 IL. 40 局 象 求 性 發 7 ح 73 基 形 は 13 見 理 次 Ł 單 亦 V 礎 定 性 す カゴ た 3 0 12 0) 7 る 思 る 3 出 根 面 0) 相 10 絕 3 72 來 6 惟 權 あ 對 取 B お め 0 如

四道徳の普遍性

五 翹 ¥2 ζ 的 K 台句 CA 7 i Hi 更 換 何 求 12 安當 Ā 頗 吾 0) 0 科 n る F カジ JF. 12 は 各 學 當 は 個 71 最 じく 人 萬 個 的 73 道 遍 る 的 人 人 思 德 的 必 惟 12 0) ことを承 0 0 見 # ず 任 普 效 0 10 驗 通 承 意 要 遍 認 性 る 性 的 0 求 道 を有 せ 信 認 理 す to 考 德 30 解 否 3 る 法 13 8 36 ^ て見ると、 亦 7 要求 3 委 則 V うする 得 2 居 D 或 7 す な if 本 P 26 は る S 性 5 約 卽 12 0 ち 12 束、 論 說 行 理 カン

科

學

的

法

則

以

上

0)

深

V

内

面

的

普

遍

性

を

de

0

て居

であ 對價 とす を 渾 あ 0 る る 出 普 5 で る 值 る 來 遍 Im と言 か 5 な を 超 0 性 L 0 認 要 個 3 V 0) 7 求 温 人 刻 27 0) H 33) 得 3 常 6 カ> 的 -(12 ら考 充實 る あ な は 0 生 3 5 到 實 活 と同 刨 へて E 底 13 現 5 3 牛 6 30 見 不 睛 得 內 活 H な 許 1: 1 る m 93 る 不と論 道 र्ध 2 意 道 的 とは 味 遍 滿 絕 德 吾 的 え 足 1 的 理との 理 妥 H To. 活 10 當當 0 來 理 解 13 動 性 道 な 想 す 實 德 3 0) V 疆 刨 要 0) 5 0 水 6 命 的 絕

價值 よ世 濃 對 4 的 は 矛 盾 厚 吾 性 道 0) 德 6 慾 K 3 0 L か 的 共 不 な カゴ 0 遍 0 3 許 根 る 絕 生 的 S 妥當 文 所 活 暫 據 え 不 囊 阴 以 す 0 を自 生 カゴ 遍 活 0) 6 內 時 性 あ 12 0) る 4 論 我 建 南 0) 面 12 8 設 意 性 刻 有 1 力> 理 0 5, 義 性: 純 12 R 0 0 た 隨 變 7 努 を 肉 * 粹 深 2 樣 力 0 化 居 求 自 薄 난 7 遠 L る T 0 己 自 五 吾 木 る 12 意 7 性 我 17 12 E 居 慾 理 -る 0) 0) 衝 想 7 自 13 る 相 具 求 動 7 的 12 坐 ح 體 己 意 的 的 决 色 柏 35 t 慾 は 12 個 兩 絕 6 14:

價值 係 0 る は 3 173 勿論 出 は決 から 3 0 电 12 6 > は 6 南 ことは言ふまでも 來 6 真實普遍的 3 3 な l 12 7 あると 6 要 拘 < 德 礼 5 7 暴にも S 求 是里 そし 3 0 上正 ず 7. 0 V 質 善 0 0 É 恶差 0 3 32 7 S 0) 反 律 つた 關 對 表 るそれ あ 係 2 相 自 2 係 别 か 現 對 712 發 ない B 6 12 は 形 が出 的 3 らに 式 H 直 表 等を通 南 個 13 n 現形式 一來よ を指すに 接 n 3 表 A た 個 E 推 性 現 5 形 3 論 L B A 温 IMI 的 の量 ح L L 武 社 C 抽 外 悪 To 最 相 0 力当 會 カゴ つなら 周过 ح 象する 坐 0 卽 3/3 性 的 0 關 ٤ ら道 的 赤 德 0) 差 差別 質 係 裸 2 3 ふの 別 2 0) 12 德 限 5 17 0) 6 關 存: -0 0 36

吾 部 0 つは み 0 R 的 以 Ĺ 表 12 が『自ら欺くこと勿れ』と 0) な 現 本 卽 論 は 見るときは、 ち道 行 要 性 五 理 論 縞が 求 72 と説 德 E 6 3 削 自 あ 0) から見た 我 根 破 ち自我を 3 昔し は 本 L カン 形式 たや 5 屢 孔 解 R 20 偽 とい らに 言 子 釋 いふた 5 0 0 カゴ 0 たや 要求 ざる自 ふこと あ 道 自 る に最 5 は 0 誠 から 12 カゴ 自欺 しと不 絕 出 0 4 經 來 驗的 3 鴻 對 2 應 不許 0) 3 13 自 常

> ことが 乃至文明 0) 0 我 自 ありの 謂 縣 要求 仁と不仁 出 とを 來 (1) は に誠 指 3 > -切 1 1 は悉 全體 72 6 17 3 V 3 過 的 3 礼 できな 發 0 现 の根本的 3 S É S 亦 0 ち自祓 ことで 吾 吾 17 二形式に振する 12 0) 3 0 生 內 3 その 的 孔 反對 本性 0)

羅世界心國家帝國人心 內外教育評論養行

からいいあるが、 育機關 が、道徳上より観察すれば、國際と國家と個人との間にを機絶するを得べきかに就いては意見も匿々様々である民の裏心に於ける希望である。共れには如何にせば戦化 記者は 跨る系統的の道德的意識が人類に 等しく此の戰爭の慘害から人類を救はんとする現歐洲戰爭に對しては諸顽の方所から議論され して時勢の要求に應 ばならい。 先づ此の輿論を振興するに貢獻する研究を提供しなけれ 無いからである。。此の世界的 すれば個人と國家と國際との間 心通 本書の内部 此の好著な今は讀者に維薦して一点な乞はんとす 人格觀念心提供 國民生活を論ずる態度に於ては全然何感である 大島氏は夙に篤學の士である。 じて愛達させなければならめが、 に於て著者と反對 じたるは 頗る其 風論は人類変化の凡ての教 10 國際関係を論じ、 幼稚な為でお の常を得た事である 貫する道徳的風 意見な行する點が 就甲學者は れて居る のが各 流が

理 る 想 求 絕 0) 慣 とす 實 i 對 は 言 現 信ず 的 形 湔 CA 意 0) B 3 換 式 意 る 味 カゴ と 的 味 Ł 7 破 χL カン 0 2 5 ます は カジ 壞 6 は より 6 0) あ 普 新し 南 力> 1 6 遍 3 0 > 3 新 性 る 0 3 それ L 1 S 而 變化 丽 顯 形 S L 6 現 定 表 L T 多 自 7 現 を 2 吾 < 身 0) 具. 亦生 n 裡 0) 17 は 體 形 1 カゴ 內 12 的 活 2 普 式 舊 本 容 背 る 遍 12 * 性 S 0) 景 ح 創 お 的 道 8 無 H とを 價 造 德 發 る 值 す 揮 P 0

7

0

4

解

L

得

~

3

羽

0)

で

あ

る

Ł

思

3

6 る お 表 T 價 首 2 內 現 S 値 以 る 求 だ 吾 す 遍 7 面 す 上 は Ź 個 め 12 カン 性 3 的 0) そは TS 6 性 所 普 7 الح الح 論 カゴ 生 現 有 は 12 遍 0 述 活 化 却 在 性 絕 限 力了 22 0 3 價 12 舉 ると 3 0 凿 ょ 出 て生活 性 他 差 値 お 的 來 2 とは と異 别 7 3 H 質 元 る S 全 る 内 素 3 固 吾 0) 無 ح 卽 < 12 0 0 執 R 破 意 孤 般 た 5 如 は 12 壞 味 立 的 378 色彩 で 在 個 次 か と要 あ 3 0 的 な 化 3 性 南 生 る 個 3 0) P 0 0 0) 求 活 n 1 形 で 6 A 個 ことを 且 要 は 的 2 體 な 0) 12 性 虚 差 求 な 0 4 0 12 < た 不 别 容 狐 0 意 0) < お -0 る とを B 論 性 6 味 却 究 易 3 絕 5 理 42 あ 17 T 0 局 12

> 理 3 力> 0 純 身 何 は 由 5 價 差 普 は 故 ことす 决 Th 別 カジ 值 遍 本 Ł L 出 な 性 來 吾 カゴ 性 7 す V 6 普 2 R 同 0 斯 S 12 不 0 は 質 中 < 遍 12 S み 可 12 1 何 性 的 前 \$ 0 能 な 3 0 0 15 意 如 12 らず とな 差 味 3 あ Z 0 屢 V 別 3 在 0 かず を 12 2 とを欲 を暗 3 全 有 9 述 im 差別 とし 6 主 < 0 1 L あ た た 噬 張 存 1 B 6 を 腰 す 12 す 事 在 3 差別 せす、 12 る な 0 5 る 實 13 0 5 6 多 吾 とし ٤ つて は あ 0 12 同 價 る 要 0 0 t 2 2 Ŀ 值 力》 求 內 張 6 は 5 は E 面 す 凡 72 識 ゎ n る る 自 求 T 10

五 德 0 根 本 形 定

32

お ぼ 形 吾 ん H E 想 式 は 道 德 變 る 像 卽 德 吾 す 2 5 0 善 カゴ は 3 K 本 15 0 12 悪 表 質 見 難 現 0) 0 差 しとし 0 解 < 如 別 0 は は 何 古 あ な 7 た 0 哲 如 吾 る S る と思 人 何 R B 0 73 0 0 說 生 3 る 0 活 3 力> あ 1 而 る 0 行 た L 7 爲 カン 道 7 3 か 德 現 5 る 知 0) 鹴 カン は 0 72 黑片 \$ る 12 略 吾

は

2 許

0

ず 性 識 樞 卽 と を と云 0 6 カゴ 合 為 S j 假定 な 合 过 實 精 は 前南 * あ 2 ち 在 有 0 感 3 神 肉 る 天 6 成 する 體 6 Ł 6 命 あ 織 す 6 7 例 幅 0 2 私 L は あ 開盟 3 3 あ 6 n 12 0 カジ 中 0 75 宇 神 は 3 あ を 時 個 此 9 的 見 湔 基 る 保 道 格 宙 -1 は 信 個 12 Λ Vo -di 道 督 力(精 私 精 人 唯 神 0) 6 Ł 18 Λ 人 る A 聖 性 合 且 構 5 格 だ 2 0 カゴ 行 0 和中 は そし 三三 釜 A 聖人 人 0) 的 A 0 為 成 行 語思 と見 2 格 道 聊 盖 0 0 格 12 體 為 n 3 天 1 3 を 13 T 72 12 3 字 12 的 现 __. な 宙 12 聖 敦 道 A 6 る は 地 睛 宿 神 Z カゴ 0) 道と 人 3 如 字 る 6 麵 子 人 根 0 6 n 基 客 13 宙 た.現 南 卽 딦 出 柢 カゴ 面 T 2 0) 督 L 觀 證 な 12 聖 吾 3 A 5 14 ٩٠٠ 0) と私 大 72 天 0 0) T 的 阴 S 於 A 12 ir 現 自 場 12 卽 意 を 君 批 組 係 0) 17 5 10 質 為 決 合 3 然 は 人 味 3 子 傳 織 12 12 於 思 天 F 1 L 客 力 0) は n 在 ~ 72 得 場 は 地 才 於て T 学 カゴ 1 觀 0 3 0) A 2000 15.1 格 例 15 的 1 合 必 教 0)

> Hill. 觀 皇 龙 的 P 於 る (1) る 私 と個 士 0 Œ 們 的 す 7 3 13 3 神 善 朝 值 人 釋 基 は 1 原 的 10 0) (2) な 迦 督 そし E 雄 12 道 る 藩 見 於 V) 現 人 道 孔 丽印 -[\$2 Ut 7 を 行 格 3/3 0) 部 は 3 有 乃 子-為 12 TEX 機 12 を 於 子 116 ______ ン 0 め 當 跨 見 的 1 7 は 7 南 2h 0) 0 12 0 72 TIME 我 5 h 良 質 統 T 楠 格 0) >" 12 5 居 17 11 AF. は 間 圣 0 ___ ス 目. 3 0 3 認 6 抽 性 3 知 0 _ る高 道 艞 3 \$ 象 め A 蒯 南流 る。 他 間 念 的 於 私 る 武 6 的 6 7 は 15 天 あ そし 意 は 2 於 皇 か 0 字 松 3 1 識 0) カジ 7 0) 前 刹 カゴ 雷 朋 出 之 意 0 を 那 治 Ł 3 n 識 具 祉。直 來

る。

T

0 1 7

法 刨 現

 \exists は

1 天 表

7

0

藩

れ道

0)

中

110

はず

善

Z

2 i

0) 0)

性 顯

5 6

佛 あ

性 6

命 6

0) to

行

6

10

6 流

E

す

見 內 更 72 72 圳 素 放 場 12 合 7 私 箫 合 15 居 0) 有 は 我 73 他 古 0) 善 造 6 13 6 7 9) 110 居 カジ 3 12 於 道 胆 .7 る 德 0) す 7 1 自 生 理 刨 ち宗 力心 想 0 0, É 的 教 Tym 起 ち 力 は 於 2 前 特 ¥: CK 111 他 漬. 6 能 73 觀 泛 to 0) 的

圃 2 は 6

的 0)

= 丰 宙 客

觀

性

6 犯 然 25

南 3 力

る 統

そし す

-

震

是二

疝 我 か

1/2

===

糖

的

觀

客 自

る安

业

13

自

於

H

73

內 7 义

宇

0)

於 12

11 社

3

字

笛 良

根 此

抵 -

6

75

そし

轀

的

見

n

TOP

0)

A

道

0

南

5

徳と宗教との合致

私 0 信

は進 な 字義名目の差であつて、 此 か ら述 E 0 然らば 居る 步 2 7 問 私は善とは神 的宗教は 徳と宗教 宗教は 居る 的 題 居る。私の 道徳は よう。 を解決 B 0 一して居 何らし 3 作 私 と解する 0 而してこの 用 作 であ 私 0 意識 · 用的 意識 は道 るに 的 る 關 て
は
う
同 (佛) 係 つて絶え 12 徳と宗 は 進 12 道徳と云 及 は に於ては同 0 私は先 であ 進化 私 で 化 將 内容に於て び生活に於ては道德 的 0 來 ず發達 が神 であ この に理 的 謂ゆる道徳及 敎 何らなる 12 とは づ私 ふも宗 う得る 想 理 理 して行 佛 想的 的宗教 は Fi 17 想的道德に 0) だらら 二心同 信 敎 一であ な 道 E 仰 かと云ふ び宗教 德及 12 0 て居 體に 人也 事質 ると 向 3 カン 向 CK

しとは

在

であると信ずる。

換言すれば善と云

一人人道

力の

中樞 規

> 根柢し そし

居

ると私 5

は信

ち善と

云

ふ

範

法 12

入

為

法 7

は自然法

つて は は

居 な

る。

7

善即

神

佛

は宇宙 ずる 中樞

0)

大

自

L

S カジ

之れ

を附

し

7

も差支の を附

73

S

B

必ずし

4

市市

佛

の尊號

す

3

ことを要件と

の諸 プラト る。 5 する る人生 る。 愛は 說 來する。 善と神 を統 此等 そし 1 3 ~ 酺 0) 0) て善の 一する の點に於て私 6 6 理 カン あ あ 想 in して 佛) 6 0 である。 こことが て、 中 F 神 200 とは同 は 心 子思、 愛で 的首 卽 そして之れ 審 出 は ち良 一來た。 基督佛陀 あ 德 は 心心であ 仁齋 ると云 真 6 は愛 と美 あると信 m 仁で 益軒 孔子 つて は して ると見 誠 内含し は勿論 76 E 200 の一字に 鳩巢 て居る あ 同 る 籍に 0

0

居

12

由

か

歸

あ

5

あ

([4] 1 淫 柢 6 礼 月 種 3 理 0) 年 は 立 學 72 3 15 0 0 0) 怕 は 0 自 7 -淮 叉親 Jym 後 は 3 13 ò 盏 物 卵 而上 己 0 蓋 自 1 親 擴 化 結 m 0 理 0 會 12 0 Jan 18 16 觀 己 字 枯 果 因 0) 張 0 的 T = 12 ソ 6 icity, 果 叉 人 苦 行 0 宙 進 關 死 " は、 由 觀 13 格 82 良 應 根 化 は 痛 す す 梅 來 ラ 12 客 心 報 13 柢 權 制 3 は 3 2 壶 テ 由 若 に基 行 É 事 潮 R'L 現 0) 12 個 カジ 0 72 ス 來 作 -C 3 宪 對 7 爲 然力 如 客 12 人 為 す カジ は 及 3 歷 -d-6 00 覧 d n 0 觀 微 的 場 善 的 利 13 3 3 连 配 10 CK 的 変 况 品品 台 會 自 或は 息 3 原 3 H 果 2 益 0) 100 丽郎 女 然 V) 理 生 性 來 力ゴ 因 TR 應 生 良 6 天 其 落 桀 10 存 的 L 果 報 g 德 心者 道 等 1-1 自 效 3 0) 72 應 約 ち 6 異 3 1 然 果 遺 因 6 南 验 3 12 報 133 UN 155 淘 É 形 0 果 0 傳 附 3 b 僧 10 300 10 然 應 赤 汰 悪さ 0 南 屬 病 字 地 6 道 死 良 報 す 數 教 V) 3 13 (1) 3 法 1 10 3 10 德 宙 0 否 0 70 為 32 FI 審 根 Till 12 1 -3 5 生 30 3/2 12 7-

根 前 Ji. 10 を認 7 3 私 0 S === 行 诚 禮 3 重让 13 0 身 カコ 2 基督 k TE. せきで 拜 0 基 的 は Her Ball 亦 0) 7 6 * 松 IE. 教 133 200 儀 0 120 0) 釋 115 3 畫像 ま 2 TE 1. 迦 意 2 カコ 12 20 格 居 は 1 4 IF. えし 6 P 12 7 Will. 遊 3 L 0 10 77> 0) 10 3 な 7 7 大 等 0) Mi 17 114 對し 1 2 御 とす 13 V 0) 語 的 0 0 敬 Mi. 31 0) 70 歷 卽 2 欽 人 50 潜 史 T 辦 0 5 -HESE. N 格 1 保 (1) 9 神 條 8 は す 2 欽 j 710 拜 15 全 C 飛 3 源 敬 É 5 0) 150 32 6 11 私 17 V 儀 酒 1 神 3 カド 7 4 景敬 的 13 2 1 0 社 太 寫 行 12 3 3 1 3 3 0 絕 0) 3 爲 17 义 3 E -d-职 2 私 0) 龙 3 - XE . 私 3 繪 13. Æ 居 \$1 は ず 他 洪 2170 75 A (1) 力 自 1.1 必 Hij 問 6

南 柢 0

る 0

自

己

0)

恶

業 道

聖

反 12

省

1 つ 3

72 7 愛

折

17

生

ずる心

127 果 宙

自

然

力

1 n

生ず

る あ

自

外

的

結

格

~

評

價

3

僧

で

6

那 101 想 5 Z 的 能度 以 1/4 813 私 电 3 (1) 773 2 6 南 道 0 Ž, FIH 想

刨

5

H.F

所

ばな

In

他

0)

他

然

す L 的

6

努

7 寫

南

30 딞

1

之礼 完全

食

3

n 13 行

為

113 1 1-3

2] 3

之礼

1 70

寫

挑 寢 て善

蓄

性

思念 行

ブン

3 寫

K

格

1/2

欲

前排

43

B

0)

1)

で自

V)

13

説

.

Je.

個

A

(7)

質現することであ

為。

す

là

は 仰を以 あ 識 7. ち神 てカ することが 神 な 更に換言すれば善と云ふ佛性 で 道德的 に於て ある。 自ら 6 0 ヴ 催 ウ - Y. ス しなけ 助 3 7 グ 他力 朝 n 0) 佛 T 意識)を この點に於て私はデカアトの言を奉ずる は 天道 H 現 清 くる者を助くる。 自 ス の完全なる 22 る。 3 道 テ 所 新 は 合 力教 的 n 解脫 淨 を 朽 カゴ 2 犯 1 12 市中 ばならな され 鞭撻 聞 n る 濟說 に依頼し は 明 5 15 1 じなけれ 涅槃であ 5 カゴ 祉 (神道) 3 式 修德 そこ -1 3 7 ス 1 會 叉 が如く吾等も完全になること かいこ なけれ 的良心 生 は真宗と の絶 雕 い。誠意正心(儒数の信條 で此 300 命 だ 12 個 0 ばなら 自力的 人事 勉勵 對的 死して後ち已むの 死 信條)でなけれ 0 0) する 善に對す これ 能 0) 130 はなら (人道 を遊 個 L 禪 他 73 書に對 12 力救濟 112 4 循 て居 宗とは、 人の には自我 な 爲 刊 L)及び宇宙 0 少。斯 る神 -6 2 3 7 TE 即ち菩提心 めには善郎 16 天 南 ば 3 說 命 75 THE 的 私 0) 0 とペラ ばなら 者で うし みで 及此 を待 何物 的信 信 0 意 0 仰

制裁

1

(1) 1T

御 感で

裁

13.

主觀

的 客觀

には自己の

0)

歷 ず

する資 7

か

30

的

個

0)

前死後を通じて社會的良心

(人道

からその個

正邪 弦に 人 意識 神的 中の 道德 2 意識 の生 的 人道 生 でも孔 個 あ 12 さて 7 1 6 經驗 12 0 前 的 事 個 居 的 0) 云ふるとは 0 格として 生活 行 紫 Ä 3 關 部 又は 意 子 それ 居 為 明 的意 0 F 對し Ł L 3 叉一方 又は 7 未來 肉體 7 侧周 個 1= 20 北 得 社 7 同 居 存 人格 A 私 私 出 は 的 在 會 13 75 0) 3 1.E 力 來な 0 于 から、 から 思人 14 12 經 個 0 持つて居な V 131 效力 孫の 200 名を竹帛 将 驗 人的 F 3 7 MACH HIST 当す 見礼 17 的 居 カジ 0 30 0 nii i 個人裕 0 存 愚 如 6 事 生 を 3 的 鑑 はず 續 一語或 交明 る道 質 善を信 < 隨 南 持 味なる吾人 13 とは 考 0 < 2 3 カジ 62 死 なく 死後 T は 7 ても 蒲 雪 カン (1) h 5, (社會 的 3 因果 416 酸点と 378 配 10 でもこ じ之れ 賞罰として 會 3 A 0) 子孫 精神 それ 應報 また 0) を指 孔子 其 的 現 的 を行 生 私 存 在 0 有無 學術 法 は は 生 2 神 音 15 7 存 善 自 0) 肉 唇發 E 中 K THE PARTY 0 精 3 4: 40 的

7

7

る

毅 云 T ムムも は な 千 0 S 0 萬樣 カゴ な 比 較宗 6 あ 然る 教 0 7 學 に道 カン 6 統 徳と宗 見 1 n ば 7 敦 過 居 でとの る 去 原 0 關 人 理 類 係 法 を説 則 0 宗 3

と宗教とは異つてゐる」 は 有 神神神神神 有 神的生活また必ずしも 生活 を假定 である。 して 居る 然るに道徳は必ずとも が道徳には斯う云ふことが無 道徳的生活ではない。 有神的生活では 故に道 0

或 た 3 17 0) カン 的 禪 る 說 砂 Z 宗 見 0 0 0 で有 720 < 道 他 る 0 類 德 の宗 力 如 To 0 きは 12 或 Hill 神 0 カゴ あ 過 2 る 的 敎 敎 * そし る 宗 で道 禮 EI] 非 生 去 12 敦 活 12 る 拜 度 けれ 德 於 格 を す 0 7 25 は 7 失 至 共 を説 3 的 其 昳 は E M は 有 陁 0) 0 12 道德 ら道 B P 見 有 7 6 な 神 は あ ح 中可 3 V 的 希 3 有 6 徳で宗教 と宗 n 生 的 臘 活 は 放 牛 神 0 0 叉之 敘 大 活 17 6 2 的 神 غ 13 13. 生 如 語 0) 36 前 活 13 n を 12 る E 0) 17 說 差 誤 如 8 0 0 Vo 種 さ人格 别 解 說 あ 無 反 S それ 7 カゴ は 格 6 る V 4IE 的 3 -1 あ

POSTA POSTA POSTA 道 との 種 뺄

想

的

崇

敎

種

類

分

n

史

1to

遺

一物的

蓮 0

とし

مبرب دره }

0 12

78

激

6 3

あ

6

想

的

效

は、

道 德 と宗教とを歴史 一的 又は 起 原論 的 17 研 究 7

> 徳で 進步 それ ば、 徳より 化 ある 5 17. 德 0 7 如 ことは る あ 的 さは變化 理 0) 1 理 3 等 定 道德 百 あ 的 道 そこ 想 想 分 かず 7 今此等 道德 道 德 E 類 詩 的 時 0 出 0 3 と不 7 德 來 研 過 道 は 72 で宗 法 4º 解 6.7 德 退 的 Ŧ る % 原 釋 酥 12 とに分 代 は 1: 文 を綜 變化 性 古 變 光 0 理 之れ とは 教 0) 明 史 0) 今道 15 的 的 質 化 總 法 遺 阴 12 0 を帶 館 的 果 物的 思 1-道 合 道 32 則 は を宗教 歷 道 德 た道 潮 V. 思 東 德 2 德 る 玄 20 を 德 肾董 と理 -6. 3 3 脚 潮 约 -(-CK 地 中 25 卷。 理 德 72 博 Ł 歷 菰 す あ め 的 道 (1) 想 3 6 愛 12 史 又 る 3 德 4 從 想 6 22 あ 别 は 適 南 時 0 的 ح 的 0 教 7 0) 0 0) E 如ら 戀愛 用 7. 非 6 2 H 道 觀 9 的 3 n 23 歷 歷 す 德 7 分 旣 班 作 念 0 块 カゴ 0 南 17 介的 道 七 は 退 類 出 道 想 カン 進 的 成 0) る 6 胚 12 步 先 來 6 去 宗 宗 德 分 如 德 不 す 17 2 胎 的 的 分 分 愈 教 TI 的 3 變 的 な 解 歷 0 n L 10 道 類 進 た る 道 は 化 道 ば 釋 史 V あ かゞ あ 德 的 す 過 Ł 出 的 化 0) す 德 不 カジ 3 0 消 2 戀 道 的

自 用 宗教 を名 る宗 的 あ 力ゴ 琢 繭 る 0) を接 また 廖 て居 だけ 牛 理 6 的 由 共 基 づ L 7 F 敎 想 12 0 斥 督 進 私 分 7 B 信 學 る 的 21 佛 0) 0 敎 L 化 7 居 的 で 0 南 7 屬 敎 敎 0 合 3 道 する 神道 道 -6 此 理 36 南 德 は -(0 私 的 3 る S して 倫理宗 想 德教 實現せんとして日夜不肯の才を る。 卽 0 a) 12 0 0) 一我の 大小 それ 的 倫 5 承 カゴ 哥 ち 2 唯 宗 理宗 認 私 居 儒 叉 偷 理 n 究 だ [1] 基 諸 教 毅 は 想 2 75 理 私 0 0 カジ カゴ 叉 能 典型 現状で 督 偷 學に 的宗 0 7 原理を見出 倫 怼 は 22 (理 0 性を發揮し 綜 旣 佛 教 居 理宗 理 雷 信 0 學で 合 成 教 6 3 想 よつて 敷を 傳 6 路 ず ある。 と稱 的 か \$ 庙 的 道 1-3 宗 基督 る。 る。 道 私 6 1 道 あ H -g-0 3 南 派 13 想 ^ 6 7 る。 殊に 私は此 世 7 驗的 科 彼等 3 は 教 あ 的 神格に達 E 其 は 塱 運 居 叉 道 9 歪善と云 そし 他 る。 今後 私 命 1 私 12 的 17 德 儒 7 文 0 道 報 0) 0 0 12 必 敎 切磋 本ず 見 これ 德 て此 歷 0 敎 研 告 ち ず 發 6 義 in 纪 史 12 古 FF

道徳と宗教との起原

居る

宗教 研究 には 是云 各專 此等 との に歸 心 れば に於 究 3 す -あ 7) 2 3 7 0 0) D 以 一人有 門學者 との と天 起 カン 未 72 13 H 關 7 ح 70 L カゴ 0) 私 1-6 た 72 原 政 だ 研 とを立 73 カゴ 3 係 0 起 な Ti. 然との 西洋 樣 宪 兩 は 私 6 10 6 Te 715 S CK 民約 想 定し 原 感 力了 將 前 見 6 13 30 香 0 0 謝 点 道 像 程 あ 西洋 カン 0 恋 證 信 南 0) 0 ら考察し それ 教 舜 德 た に盛 つて 關 何 關係に歸 12 25 憶 3 結 す 結 仰 說 學 0 係 5 3 歸 0) 0 歸 0 論 0) 浩翰 は 方を 震樂 では 東洋 72 方を見れ 12 な 敍 說 を L L 42 6 過ぎ 早 は た 7 達 72 歷 的 \$ 述 カゴ T L 17 な 15 < 其 6 6 無 6 史 71> L 12 6 る たりして此れも一定し 和 歸 13 S 著 カン 來 0 的 を j 私 南 V カン カゴ 神 宗教 なけ ば宗 ば道 0 或 斷 5. 述 5 本 27 は 0 U 0 0 一考察し 進 6 た を 行 源 定 此 7 0 3 72 一崇拜 為 德 Ď す 道 9 6 程 n 先 12 は 12 h 0) 歸 る。 度迄 ばな 遡つ 3 的 的 H n づ 6 結 德 に歸 n と宗 7 L 意 定論 7 た 12 道 其 意識を恐怖 論 は、 て道 た 斷 E は 汗 5 Ŀ 居 德 0 E 片 4: な でなけ 72 と宗教 是云 ZJ, 5 行 前 IF 教 たり 提 ち 充 徳と 過去 的 は 世 0) 12 1 6 良 な n 聖 濕

H.

層の生氣 つても道徳は宗教と本領を異にして居る。であるから必ずしも 3 活 を剪 と云ふことも其 は宗教の が有神的 がら 酸することは出 を帶び ふものに基かないでも道徳的生活は出 一若し道德的生活が宗教的 生活を融合して來るならば、 10 層の光彩あ の一つである。それ 無 視するといふ點にあると共に道徳を 來ない。さうして現今の宗教界の弊は る活動を爲すやうに の色を帯びるならば道徳的 から 其の 道徳といふ方から言 道 來るのである。 **/**德的 ts Ď 生活は

自 であ 多 的 别 る 水 る て來た。 5 カゴ 要 寸 力 嚴 0 から 他力 關 0 B 素 3 論 に基くと斷 7 は 係 0 この 道徳と宗教 或る部分に於ては絕對に反對 は 0) を宗教 首學者 は 名 其 この 朝永 0 假設 二つの 何人 牽强 S 0) 研究の 30 「ずるは誣へたる言である。 12 には 12 -侧 と解する 0) た 關 F 會 よつて道徳と宗教との 郎 の意見で 方法に於て誤つて居る 係 存 道 私 12 0 する・ を抽象具體 並 過ぎな 德 も或る部分までは賛 氏 VI. は少し と名 人性 は あ カゴ 「づけ、 個 大 V つて、 の普 C B また意 理由 0) 的 小 論 事 他 H 我 遍 である。第 力的 實 で比 カジ 0 に
さ
ら
唱 事 無 國 本領を差 較 要素 成 では 南 0) V 議論 自力 3 6 知情 6 あ 桑 0

宇宙根 教だけ と説 れば ると言 カジ なくとも道徳だけで くなどは荒 より多く人性を滿 で立立 柢 る 天命 7 カン るな 宗教 唐不 に發する善で 5 稽 が道 は 1) 足 させ、 徳を 立ち 論に陷 兩者 取 は あ 6 つて居る。 何 道 る。 層 道 らし 德 0) 德 カジ なくとも宗 光 が宗 7 形を A 人性 教 性 放 3 であ 取

性客觀 らず、 に他 0 は の良 同 心を放つもの つて、 居る人性 0 れで道徳と宗教 神 社 理想 (一)「吾々の主觀的 普 じであ 心會的 0 一力本願するなどと説 至極滑稽な感を與 ある 性 異摯なる宗教的信 0 6 300 13 良 を説 であ あ 南 心 個 。此二者は人性の つて自力の り宗教上 くの 之和 に類して學門の 3 (人道) の人性 とは必 自我の樹立は不完全不滿足を意味するも であ で私 Į, 一に於け 4 神 及び宇宙 る。 としての は 0 ず ^ 普遍 6 心 闸 仰を滿 くは哲學上 る。 善の を心外 理 る神 あ 抽象的分析 學に 本 これ 的 70 藩 E 根 領 足させな 12 格 を失し 酱 觀 從 は 12 個 柢とし 0) 理 孟 投 人 (7) 0 0 __ _ _ _ 想 客觀 であ 方 7 7 遊 射 善は道徳上 0 こての たも 遊戲論 實在 善 面 0 V L ある 的 調 てそれ カゴ 0 0 3 主 3 他力 自 ゆる 0) 0 力了 To THI 曾 3 2

道徳と宗教とに關して色々の説が憶測される。 ある。 用的 歷史的 想的宗教として今後發達する道程にある。 的宗教であり、基督教佛教の或る宗派の 基督敦の或る宗派の如きは遺物的骨董 に進化的 印度教 發 に胚 に選想的 生殖器崇拜の如む、或は佛教又は 胎 1 て時 解釋の下に立脚 代文明 の思潮 12 として歴史 する宗教で 刻さは理 從 そこで つて作

(一)「宗教は大體の方針に於て信迷的狀態を脱して人文的となる。又人為的に之れを近寄らせることに務めなければならぬ」る。又人為的に之れを近寄らせることに務めなければならぬ」と説く者がある。宗教は人文的宗教に近寄り道徳はまた人文的党と説く者がある。宗教は人文的宗教に近寄り道徳はまた人文的となく、既に私の意識などに於ては單に近寄るの傾向がある。宗教は人文的宗教に近寄り道徳はまた人文的となる所ではなく、道徳と宗教とが完全に合一して賓る所ではなく、道徳と宗教とが完全に合一して賓る所ではなく、道徳と宗教とが完全に合一して賓る所ではなく、道徳と宗教とが完全に合一して賓る所ではなく、道徳と宗教とが完全に合一して賓

(I)「宗教は道徳の進步によって、進步するものである。 過去のCI)「宗教は道徳の進步になからである。道徳的でない宗教はこれを信教は絶えず進步して來た。それは宗教は道徳に制限され道徳の進步と調和して來たからである。道徳的でない宗教は道徳の進步によって、進步するものである。過去のでる者が社會になくなつて來た。」

ことを忘れてはならないと思ふ。 である。これも正論であり、西洋の倫理學者にもの進歩は單に道徳の進歩によるばかりでなく、他の進歩は單に道徳の進歩によるばかりでなく、他の推手は電がある。中島力造氏の如きはその一人と解する者がある。中島力造氏の如きはその一人

四道徳と宗教との特徴

近徳と宗教との特徴に關しては議論 が最も多

(一)、神を宗教的に考へる時は我々の心中に在るものと見ない(一)、神を宗教的に考へる時は我々の心中に在るものと看像すのである。即ち心中の神を心外に投射して自分の目的を客觀に讀む。自己と自己以外の神との肺筋に於て宗教は道德と性質が異つてゐる。道德は自律で同時に他律でなければならぬが、他律的なるは幼稚で自律的なるが異の道德は本來自力的のものであり宗教は本來他力的のものである。ことであり、宗教的生活の特徴は他力依遇と云ふことである。こ者は抽象的の兩面であるが具體的には之れた殺ね具へた人性に基く。その關係は意識の知情意關係に均しい。宗教の本領は道德ではない。宗教は道德以外に本領を持つて居る。係しながら宗教が人性に充分の滿足を與へんとするならば決して道ながら宗教が人性に充分の滿足を與へんとするならば決して道ながら宗教が人性に充分の滿足を與へんとするならば決して道ながら宗教が人性に充分の滿足を與へんとするならば決して道ながら宗教が人性に充分の滿足を與へんとするならば決して道ながある。

責 聖人 な 21 は 7 2 カバ 庶 で 25 0 解 る カン 人 た 3 任 的 致 於 な A 思 6 では 72 と共 0 つて 陁 る 內 Tr 陷 想 H あ 念 決 達 於 天皇 を 閣 20 6 0 10 3 12 南 政 崇 73 天 て道 12 7 思 73 7 は 智天 皇が 道德 拜し給い 神なは 教 ţ カジ 民 居 3 る 3 15 想 30 カ> 0 德 明 族 12 で カジ 0 る S 5, 完 身 德 之れ 3 F で 0 南 0 E 0 は尭舜 天皇 長 祭 長 全 * 2 あ 6 0) 紀平 本 次に國家精神 3 る。 12 一せん 修 72 其の 且 0 聖人 6 政 カジ 皇 は 因 南 3 0 義 0 か 0 氏 決 を欽慕 惡政 H 温 長 10 る 70 は 2 つて 2 7 るなどと云 0) と通 n 主 南 6 とを SE 憲 il 必 0) 見 善 E 專制 で立立 槪 憲 を る 0 法 明 から 未 する 期
さ 36 場 を 學 念 7 カン 代 0 10 合 III 12 憲 6 3 1-6 給 議 崩 天 カゴ ~[皇 には は な 聖人 3. か 制 か 0) 霊 於 32 6 君 禦ぐ 御 は 0 败 德 12 3 專 1 S カジ 0 聖人 11: 巡 7 敦 勿 考 カジ 聖武天皇 大 ح 君 制 72 す 加 10 初 論 子 13 1/2 は 6 しも では る誤 於 主 は 無 南 君 72 めに め 致は 政 < カジ 教 神 3 it 明 カン 1

> た説 だと 0 肺 B 致 國家哲學に擬 子 0 0) 朋 Ł 思人。 中 6 では 為 か 心 とするな 3 氏 0 大に考物で は 7 國 家 なら L 天 どは 照太 た 精 黄 (7) 神 順 は 前 6 を あ あ 0 極 敎 6 問 る 開 め 女 5 T 題 E を 法 兒 カジ 爲 n とな 戲 な カン それ て、 12 類 な S 天 72 -性 奇 ゲ 質 を IV

長

6

る民

K

人 部

過

2

73

S

そし

7

此

0

場

合神

に于

和

族

全

胂

子

0

的

6

天

皇は

置

21

0

れて 0 み未来の あ 對無限者との vj f 存 0 道線は であつて宗教 宗教は出世間的 在するが道徳は存在 個人的 に對する信仰及び 結合せる精神的情態であ の行為であ は經驗以 である。それで家 1 上の りり、 固 7 果應報を説 宗教は のであ 30 教 3 卽 個 は ち道 A 一道徳の E 道德 教 個 は社 人以 は經驗的 册 間的 L 0 た離 絕

に於 歪響 絕 大なる誤 加了 ₹, 道 劉 000 0 7 事 者 論 E Zi 者ではな は 15 は 1, 数多の ム総 理 4 解 絕 個 想 對 想 絕 -75 對 的 對 1 Vo 6 义 學者 不 行 3 南 Tyo 禪宗 結 分奉 為 り道 潋 によつて唱 限 合 過 0 0) に於 德律 £ 300 3 必 1: 去 あ せた 要 C 0 75 宗教を 的 では ば ては參麗 六 2 條 3 13 カン 作 3 (1) mai ò V 狀 見 3 6 6 は 無く また 徹 態 17 る n カゴ 加 13 12 72 何 6 其 假 は絶 \$ から 必 13 5 るが 事 個 0 2 そし A 總 n 無

であ 50 C らして認めればなられのである。」 値意識と で行く中心點である。宗教に於ける神佛は理想を統 中心 香々は真善美の理想をもつて居る。それが音々の心が進ん の如き中心である。現今の哲學で云へば規範意識とか質 が 我々が外界に實在を認めるのが、 我 の満足は宇宙の中心に近づくにある。つまり吾々の いふものがすべての人の向ふ中心を現はすものであ マの理想となつて現はれて來る。晋々の最終の理想 拜の中心は世界の根柢にある。さう云ふ世界の統 はその世界の根柢に向つて居る。そこで神に 自分の理想の必然が 一したもの 種

を内含する善と云ふ統 が提携する あ る。けれどもその宇宙根柢 n は西 ての 統 H 幾多郎 であ 的概念によつて始めて道徳 氏の意見である る。 一的概念でなけれ としての理 カジ 大に はず 想 と宗教と 正 ならな は 眞美 論 6

(三)「概念は具體的には必ず三方面の論理的要求を有し、且つい核となるものがある。神の概念に於ては、法としての神、中心核となるものがある。神の概念に於ては、法としての神、中心核となるものがある。神の概念に於ては、法としての神、中心核となるものがある。それで自分の考によれば現代の統ものであつて救世主である。それで自分の考によれば現代の統一の原理は道徳實現の舞臺としての國家である。この意味に於て天照太神の血統者たる天皇は背な各救世主である。先皇明治て天皇は我等の直接の救世主である。それから精靈は神と神子と天皇は我等の直接の救世主である。それから精靈は神と神子と天皇は我等の直接の救世主である。それから精靈は神と神子と

な結合する媒介者としての力である。日本に於ては天照太神及 び天皇其他の全壁更な綜合するところの日本精神なるものが精 愛である。而して今日の宗教は統一の中心が變移して居る。法 としての神を中心にすれば哲學になり、神子を持ち出せば個人 い。それで個人能力の深化は既に精靈としての神即ち國家精神 い。それで個人能力の深化は既に精靈としての神即ち國家精神 が統一中心になつて居る。」

解であ が出來 皇御 家族、 ある。 神子として佛陁や基督と同 論佛 るから神子であることは勿論 の生活を統 の舞臺は唯だ し當時大なる迷信 これ であると言ふは倫理學上の 天皇を神子と爲し日本精神を精靈とする 三身說 は紀平正美氏の意見であるが、その三位 一人に限らず皇族皇別全部が神子であり 社會、 る。 そして此の境 るだけ 何とない に於ては若干の異理を有して 一する概念ではない。 國家、 であ 簡の 32 20 である。 道德的 ば天 國際 遇は けれ 植象的 皇は の生活 ども國家は 生活 誤解であ 道徳賞現の舞臺が 一に収扱ふ 天照太神の 境遇 3 12 の境遇あ るが それから天皇を は る。 に分けること 個 は大なる誤 决 子孫 るの これ して其等 居 、男女、 道德實現 などは蓋 3 であ こみで 國家 は 更 天 加助

(水)「道徳は 完全なる物 或は狀態に達すべきものであるが、達れば無用になる。不完全なる人間になつて了へば成り立たね。孔子の如きになれば完全なる人間になつて了へば成り立たね。孔子の如きになれば完全なる人間になって了つた後即ち無道徳界の生活が真のこの完全なる人間になって了つた後即ち無道徳界の生活が真のこの完全なる人間になってあるが、達れている。

修

徳に勉焉たるは既に是れ宗教であ

で我張 道德 を踰 3 である 志を以つて惡を爲せば爲し として 最も誤つて居る。 2 と善行 75 係を誤解 れは松本文三郎 だし L えざる境界は、 S 道 つて生活 0 道徳的生活である。 0 為 いものである。 德 は 道徳は朝 理想的生活 になり した結 行 0 カゴ 出來るやうな品性的 爲 的 4 0 偷 氏 成 6 る 77) 努力ではなくとも 果 であ あ 5 であ 0 ことでは 善行為の 理學に於ける行為及 り立た る。 晩まで意志 論であ る。 道徳は修養の る。 73 孔子の 得るの 何となれば何時 治果 る。 いなどと見るは 415 この 心の欲すると S であ やうになれば道 生活即ち人格的 0 生活狀態 として現 然るに此 我張 剛張なる行 過程 品性 る。 び品 らずも易 悪を為 一の結果 ころの短 力当 は は、 でも意 0 目的 依然 れた 性の 論 為

> 的 である。 0 ではなく。 であ 過 程 中に 道徳に於ても解脱涅槃の狀態 その ぶらくしし 洞奥の 絕對 て居 る間 境 が目 は 的 道 であ 德 カジ 0) る。 究竟 初學時代 修養 0

由ば に自由を有し る。 用的であ じ込んで居るも そ何らし 改廢する力が個人の人性 がないと申さね これは村上専精氏の説である。 はない 「ハ」「宗教は (よ)道徳は が、宗教は出世間的のものであるから個人の 若し道 かりでなく社會の客観性た ら進化 我々が道徳と呼んで居る狭いものだけが宗教の領域で 1 個 徳が客觀的 一學一動凡て宗教的色彩を帶ぶることが出來る。 世間的性質のもであるから 個人の自由 人の自由を保證するとが て居る 的であ ばならぬ。 0 なら 行為 に社 d ることを認 35 100 ある に對する意 けれども道 個 X から個人 ての 12 る世間 他力的 は 的 自由 13 說 八を永久 出來る 的 志 德 德上 は道徳 S を許 議論 の宗教こ 0) 撰釋 は を許 道 (1) さな んに封 0)

理想的宗教ではその これは歴史的 な 持つて居る。殊に私の意識及び生活に於ては 宗 教 71> 道 推し 德 行 た論 您 113 であ 學一動 3 私の 見る

に 居 L 自 敎 命 主 含んで居 から道德 A n 12 10 限 る 基 奉 t て道 る は 然力を信 3 朝 3 は 格者と見、絕對者無限者と見るべきであ 個 で t てとが 經 的 S 個 之れ 個 人以 12 南 ず て説 12 德 驗 人以 には自力精進するのであ 人 非 用 12 外 は 3 は 0 3 F 力学 勿論 超 业 ずる 6 阴 Ŀ 0 人格 個人の運命を客観的 必ずし 徹 決 要條 そし 應報 假定論 歷 私 L 0) 至 悟 德 史 0) 難 經 カン B に構成 語と云 こて人格 的 6 奉ず を理 て道德 件 驗內 6 Vo 模範 0) も人格的 南 宗 歷 TO 1 に託 個 3 敎 想 3 史 は 歷 0) した 人紀 1 潜 潜 2 は 的 的 たか 以 史 3 する カゴ は 12 6 超道 一的宗 如当 755 E 崇 心神人合 宇 S 0) 12 對 10 過 殺 に元 カゴ 敎 6 宙 他 無限 取 万 なな容 現代 それ 出 德 0 教 南 0 3 力 17 扱 な V 來 であ 謂 根柢 0 3 脚 から、 精 なる者 10 は N ï 3 n 0) で 如 40 力三 ずる 進 0 至善に託 麽 なくに奉 學術 0 6 3 現 に立脚 7 時に 0) 2 史 7 代 ح 因 点 理 3 個 j Ŀ 32 果應 る。それ Z 1 る。 的 想 人 0 教をも 2 達 V 7 0) して 理 が出 學術 的宗 說 E の運 して 和 7 佛 個 想 報 2 朋 180 2 3 A Kin

道徳と宗教とは 勿論密接の 關係 から ある が本来を 分て ば宗

道

德

E

より

基督

の善言を奉じ、釋迦の人格に倣ひ

12 者

力了

30 的質 道徳は理論だけ は 0 動機は宗教に依らなければならな 道徳は末であ であってこれ 窮するも のである。宗教は道德以上 根本の宗教 3 た實行させる 根本 心が 所 0 動 機に鉄けて居 道德

是云 けれ 明 理道 から この 瞭 ム説 なも ども 徳が 之れもまた は のでは は 1-K-0 道徳と宗 多くの宗教家 論 教 據 0 僧 な 誤 JE 少。剩 根 激 侶 つて 0 柢 12 ねる。 36 起 屬 0 へ宗教 原 L 好 た えんで唱 13 T S 勿論 議 於 居た -カゴ 論 道 は 6 過 てともか 德以 3 お 本 去 3 末 Ŀ 於て は -(0. それ 12 73 か 偷 3

道德 宗教 之れ けて ら道 缺 藏 A 101 では は道徳 信仰 b 格 に宗教的 論 居 德 7 神 6 3 は 居 龙 0 かか 3 型 一論だけ る 安置 善戰 る。 見 に宗教的 30 要素 カン 712 るは らと云 者 善 1 0 祭壇 では カゴ 人性 であ 12 大 75 對 要素 なる誤解 を設 する つて、 73 12 0 と園 0 て行 V 基く善 道德的 77> 1) 嚴 ずるは早計 直ち 那 As-6 為 を信 歷 拜 力 **đ**) 12 史的 をする儀 る 對す 信 3 之れ 念は 3 E 何とな 113 知 3 7 是此 を 殼 で 疑 らな 動 百 あ 江 0) 出 機 信條 れば る。 如 13 刨 L 20 25 ち 3

V)

字の

目 朝 0

N

至善即ち神

私 過

な夕な

に、フ

道德即宗教宗教即道德」の

去 は

經驗からして又現在の意識生活から

救は

此

0 を唱

妙法

を觀

じて

良心

0) (佛)

誠

に安住

1

此

道 n

爲

め

25

身を獻げて衆生を濟度せんとす

ころの人道に外ならず」 謂ゆる本體の如きものにあらず、實際的社會に活動すると 又萬有神教一派の奉ずる如きも のにあらず、また哲學

夙 此 と稱して居た。 なければならぬ đ) あると思ふ。この人道は主觀的 る 之れを倫理 年になり、 な する善としての理 (宇宙中心)でなければならな 6 の善は必ずし カジ 12 0 V 論は放元良勇次郎氏 かい 、説明は主だ不徹底であり、研究は 西洋にも行はれ佛 客觀的 附し 事に その 7 には社會の良心であ ての しも之れ 7 間 0 も完全に結 統 私は 想でなければならない。 12 論は私も大體 柳 道 國 してより弦に十 基督教に歸 に神佛の名を 是儒教佛 0 の意見 合し得 = Vo ~ には ŀ であるが 教をも併せ求 卽ち り且 依してより十五 0 る性質の に於て贅 如当は 附する必要は 個 つ世 なほ 真 人 年 b 美 0 17 **学根據** 人を内 良心 幼稚 成成 これ 80 そして な であ 道 め、 3 1 で 10

> 产 る 淪 得 て居 理宗 の行 る者である。 者であることに、

衷心

の喜悦

と満 足

俚

條

4

男子の 不身持 亭主が有つても留守では困 法に女子玩ばる の夫が不貞腐の妻 心心

子は同機の送がないません

政治家の御茶屋會議 腰の病は頭から 出る

老人の多職は青年の無職

嘘で綯つた世の網渡 田吾作の選舉標、小學教師 名士に偉い者なし 無選 學物

迷はのは悟り

富は登の

横取

令嬢の美服は女工の

幾寒

猫の鼻に雪

の無量慈に

悪を隠す者は無い善か見 せる

あ 0 る 徳と宗 足の 足 13 私は 踏 も宗 18 座 Ł 敎 所を知らずであ 0 が全然合 味 7 居 を感ずる。 る自 L 分 7 0 その 居る 手 12 嬉 3 カ> Ū 北 ら殊にさらで V V 時 7 は 居 る自 0

は 意識 であ る この論も誤つて 必授に 行 0 数は重に偉人の感化より來る信仰的實行であ 錄 で を認得 る。 N を見 は は理論 道 か。偉人の崇拜 徳は單に なく 見童 董 さい 及 T Z 0 發達 偉人の び るる。 自己の良心の完全及びその實行であ 良 實に 青 心心 年 す カゴ 道 13 るの から 發達するには 例話とを必要とする。 道徳の客観性を知らな 德 獨 Ŀ り宗 奪 であ O) Ch る。 最 殺 走 大要 にの n それ ば徳育 るし。 耐 み屬 作 會 6 で修身科 0 南 L は 道 3 傳記 が て居 零で る 德 20 的 論

らない

46

五将來の道德と宗教との關係

がこれ 教と云 に代つて なつて自然に消滅するものである。 倫理が次第に 依つて興る 未來の宗教の地位を占むべきもの 即ち過去の 發達するに従つて 宗教なるものは全く不川 歴史的宗教は衝次に消滅して倫理的 道徳は佛教若くは基督教 てお 3 これ た理想 宗教

は 多くこの論に立脚 に從はないで道德 を して居る。 一提唱する歐 我 米 力了 邦 0 では 倫 理 步上 運 動

> 250 宗教に 倫理道 ては 教心 徳と合致 致するも は宗 12 哲 次 成成立 歷史的 、数に代 郎 理想的宗 道 取 德 徳も宗 氏 しな つて代 かその が宗 0) だ 宗 であ るこ 教だ 羽 殺 敎 教 Vo 0 12 として發達するに從 とはな 0) 主唱者 0 ds その一 た道 る カゴ 胚 7 進 10 倫 胎する理 北 13. 德 決 班 V 的 6 致 他 的 と信ずる。 が倫 L 南 0) 和 宗 7 る 0) B 理的 想的 合 理 敎 消滅 0) けれ 12 想的宗 6 0 宗 あ 景 よらな 3 L とも 教で つて、 教が 佛 な つて道德 る 教を排斥し 殺 S 712 と私 if は 理想 及 6 私 n た 歷 カン 史的 心的道 にと合 は Vo 基督 思ふ 道德 は 思

と宗教 部 これは中島力造氏などの説 分まで 道徳的のものになるだらうと信ずる に從つて進步して行く。基督教も佛教も消 ○○「哲學は科學の進步によって 依つて宗教が全く消滅することは 心とは將 私 23 は最も 佛 教 豫言する も破 來に於て完全に IE. 天荒 L V カジ な變遷を爲して 私 消滅 であ 合致す は 無 5 せざる る。 北 液 この 如く、 ると信 * 唯だ宗教は道徳 道徳と合 進 15 論 め 6. 道 ずる。 13 T が非常に 德 0 道德 或 進步

9

行 奇 5 12 ス 屬 暗 は ŀ U. 7 國 7 天 往 す 內 的 此 穀 h 3 此 國 30 容 カジ 世 は 救 濟 12 Ō) 奇 は 為 0 移 旅 蹟 世 Ŀ 個 刨 0 25 住 券 ち此 恩惠 的 主 12 0 せし 立 を 救 神 から 世 世 此 3 は 5 與 元 とは全 論 T + 地 垂 其 一を信 界 n ると云 獨 12 此 陷 死後 給 世 12 6 ずる者 然 0 5 天 ふと信 ム新 降 別 な は 邪 彼 種 る 悪 神 0 移 111 12 15 Ŀ 7 ク 0 Ł 救濟 民 は生 7 ŋ 入 册 る カン ら数船 界 法 天 ス 間 70 國 け 72 6 0) ŀ 0 は る内 奇蹟 原 あ 超 25 神 此 30 を送 罪 然 1 域 12 恩 8 る を

中世 思 心想と近 代思 想

き永久 義 續 小山 1 7.E. 聖典 出 7 ブ 干 此 强 來 デ N 中 を 起 13 0) 不 する 行 ッ 變の 以 IJ 的 思 權 カコ 威 信 し宗教改革 想 つた。 7 ツ 生 活 に集 滇 仰 絕 ク は 新 理 3 教 敎 對 0) 文藝復 しとし 人智 + 强 徒 會 趣 0 眞 71-味 21 13 は 7 た。 此 敎 理 0) 運 教權 權 興 發展 Ł 移 人 ガ 117 作併 民 を逞 IJ 0 法 12 シ は 源 12 0 下に 從 最高 3 翁 動 相問 T 0 字一 成 U 文學 然 N 0 共 安 强行 文 7 0 良心に 人と信 旬 に神 全 權 如 12 傾 B な 3 威 Ŀ ~ とな ぜら る 誤 倒 \$2 0) 權威 اح 移 水 彼 1 謬 n R 18

> を認 5 쀖 貰 L 思 發 球 72 て、 うった H ñ L 想 て築き上 0) V と云 0 心 1 なく 爲 め 發達 3 12 內 ガ 説 一人自 す 的 数 IJ 36 は 0 非 を自 な信 げ 0 ZA 3 V = 真 72 結 0 才 ~ 由 保 理 eg 12 聖 果 思 分 民 仰 13 書 想 自 穀 12 潭 3 -を外 見 ることが 身 0 0) ブ カ ŀ 育 發芽 3 ラ 字 6 ス 0) V 宙 考 h 的 3 ア 0 發 とし な教會 太 を促 0 觀 1 展 實 定 ね 分 は 即ち地 0 驗 ば H 進 9) なら 天文 720 に徴 1 從 0 心 良 た。 來 心 權 球 學 Va 威 L 人 0 j 中 产 斯 自 21 基 る 叉 考 由 求 6 心 自 說 礎 Ł 7 破 ず は 由

き添 ろ眞 像することが で きは「科學的 言 10 眼 はなかつ 當時教會は 12 鏡 理 併教會の 0 悶死し 一般見か阻 7 コ ふ見 オシ 0 re 7: 方に 如き勇敢なる神學者は ル 出 想像を逞うせ 「糖威と暴力を恐れ 一來る。 + 運 アンダア = 如 六世 よりて 位 行の法則 害して 力 何に暴威 てあ ス 紀の + 0 教機の 3 太陽 七世紀の おた なる人が かた る一個の臆説に過ぎず」 後半に出 から を逞うして聖書の 神學的 中 יטי ו 其後 迫告 7 心說 初 只此 秘かにデンマアクで出版した ナコペルニ П 現れた 頭に 時 150 10 オ 證明 宛 代の科學者は 事を以 ~ 3 明 ガッリ ケブラ 法 L 宝の 原始的 カス ナは 自 眼 てするも容易に想 アの 一然法 0 かず てふ写文を書 0 彼が發明した 口 出 崇りで投獄 前 想に背反す 天文書の 來 如 をつぐん べきは =1 神 12 N 意 如 位

現代思潮とクリスト

ブライズ ムとヘレ ニズ L

3 他

脫 面

啊

智全能 17 議 下 m 7 0 最 2 ブ 0 3 居 に向 0 3 選 IJ デ 初 關 づ 現 事 12 72 民 る P 12 係 過 代 ·件 な 0 75 去に is 力> 民 思 兩 を述 思 72 即ち る 7 6 づ 12 0 5 族 想 潮 思 遭遇 と思 働 神 てふ自覺の は 想 於け とク ~ 意志 0 て、 < 神 ね 0 グ する Š 手 リシ リス 政 特 3 ば 3 となし 7 萬 12 主 質 な 時 3 ねた。 5 創 事 又と交渉 義 5 代思 }--p 教 造さ 東洋 Ŀ 思 0 Va 之を人 的 字 囫 12 想 想 との交渉 ある字 萬 23 宙 流に 國家 n 民 E MI (7) 0 物 n 0 で、 を 合の 變遷 L 森羅 間 は 支持 大能 0) を建 7 宙 彼等は 瞥せ 歸 的 如 子 " ٤ を 趣 0 何 2 萬 な T 0 y ク 述 主 は 73 n 象を 文明 人格 力 和 3 ŋ ス 1 室 皆夫 3 カゴ 特 は h カゴ F ス 支配 不 凡 上 AV. 30 なら 别 故 毅 ŀ 22 より 7 n 大 可 12 12 は は 能 思 全 丽 V2

> 72 如き

3

稱 宇宙 なす 欲望 する 觀

L

より

7 0)

說

明

世

h

と試

3/2

120

物力 は非 は子 を有 彼等 0 水 却 する 3 غ A 供 せん 0) 0 3 哲學者 配 格的 5 力> ~ となし、 合 ズ しい空想的ロスツスやアン 一努力し 如何 に或 グ ラ は字 13 12 ク 3 シ 足 より E y 種 宙 7 事 ŀ 字ヴポ 0 0) ^ 人 3 ブ 7 原 宙 森 ス 1.7 は 理 混なの流水標 合 素 觀 才 羅 IJ 疾 理的 な 神 萬 工 くよ 1 b 0 象 0 ら大きと 支配 科 を人 預 6 过 學 THE REAL PROPERTY. 浦 的 -11-す 副 7. FEET 解 * 3 排 力) 1/ 的 12 的 Z ス 釋 生 斥 處 意 相

12 る 的 るとな ス 字 F 此 0 來 宙 說 敎 は聖 一大潮 的 明 は 超 3ge ガ 然 書 15 y 流 興 的 y 0 ^ シ 1 3 併合 神 創 70 3 世記 式 0 ·P 活 TO ブ 0 動 科學 リ 1 を高 字 4) シ 出 3 來 宙 3 p 調 0 如 人 採 Ŀ 3 L 內 0 用 0 た せ 在 72 mile 所 中 部 的 0 斯 活 創 3 115 秩 3 動 序 ガ 紀 整然 T 0 物 37 0) 代 ク ク 6 シ 1) h あ ŋ 72 70

0

であ

知

絕對 理 5 るは らする 等 對の根據あるべきを主張 0 際的經驗 か は分量的 力 理性 ント 假定公準が 直覺的 を疑ふまでゝ 是れだけを見て 實現する 各方面 理性 之に準據し 卽ち宇宙 的 に於 水 派の哲學者 光 併しそは只理智 官 に有 Ď, 卽 12 が與ふ る 在を見出し、 べて宇宙 ことが 部 琢 5 から絶 崩し 益 實在 煙 限 0 されば吾等が理性 ク真理 る道徳上、 なる L 原理に て吾等は實際の生活を續け、 シエ つ > 吾等の實際生 カ> ・ 對 出 -0) の大理性と質を同うするが 論 來 36 リン あると。 なるべきことを知的 0 人は字 参する所以 部であ 力 を稱道した 7 フヒ 其抱持 し、 是太太。 力を以てする宇宙 ン 審美上の Fo グは藝術的 テは道 宙 つて、 0) ヘエゲルは知的 叫 活に於ては幾 する内界の 0 之を出發點 (1) 性質 は 絕對 0 彼等は情、 であつて、 義 絕望 是と性 であ 假定 の世 美の で明 を自 る。 0 とした 原 界 理 叫 2 カン 質 ではな 黎 是等 想に あつ 放に Ċ 人間 にす を同 に吾 12 多 理 0 の内 絕 實 刨 價 0

Ш 絕 對 論 0 打破と 進化 說

ħ. 紀の哲學者は從來 0 思想家と 般 皆宇宙の絶對者を捉

> の歸趣は真如に に佛教では、 完全なる彼世の神に歸るのだと思うてぬた。 とすれば、 を夢み、若し現代が夫より流動し來り、或は隨落し來つ た。是れ畢竟宇宙を靜的のものと見た結果で、 は絶對美の發揮に勤め、 否古來哲學的研究の目的は凡て絕對の眞理 んとか、或は絶對の眞理な求めんことに汲々たる有様であつた。 元に歸らなければならぬと考へてぬたからである。 宇宙人生は真如より流れ出たものであるから、 ありと云ひ、 道徳宗敬は至上善の實現を期して奮闘 クリスト教で は不完全なる此 を標的とし、 過去に完成 美術文藝 しものだ の世界 人生

間と、 真の進 代史の初頭に於てはクサのニコラスやブル ノオなどが進化説の 昔にもヘラクリトスの如き流動の哲學を 稱へたものがあつ 打撃を思想界に與へ、舊來の世界觀を根柢から覆さんとしてゐる。 詮終極 云ふ頗る綿密な進化的楷梯を説明してはゐるが、 理性の發展に就て無機物より有機物、 の如きダアウインの進化論に少からの影響を受けた哲學者ですら 騙として知られてゐる。 勿論進化論的の見方は十九世紀の創始ではない。 對の自現、 ふことだけを認め、 定の目的或は計畫を質現する楷梯に過ぎのとして 然るに十九世紀の学に於けるダアウインの進化説は最も大なる 段々自意識の進化を辿り、 化論者ではない、そは進化論 的字宙 即ち既に在る處のものが如何にしてか自からた空虚に 觀に捉は 其變化に進 步向上の過程あるも、 れたものであって、 併し彼等は宇宙の流動的に變化すると云 最後に宇宙的最 的静止観であつた。 植物より動物。 字宙の進化向上は絶 遠くグリシ 高意識に達すと 彼れの哲學も所 おだの 學党、 ヘエ だから かル 成 近 3 先 0

争史」なる名著は詳細の報道を吾等に與へてゐる。 おる。科學思想と神學思想との衝突の爲め、幾多眞理の熱心なるある。科學思想と神 學思想との衝突の爲め、幾多眞理の熱心なる力スの天文説を眞理なりと直言せし爲め、 外刑に處せら れたので

捧げて恩惠 計は最初に一回神がれなかけ給うた計りで永久に運行するのであ 第一原 いた。十八世紀は文藝界に於ける古 る。自然法は即ち 抗して自然神學の研究が盛んになった。所謂デイズムの思想では 已反省を出發點とせる歸納派經驗派の哲學勃與し、 は 夢より醒めて、警てベエコンに 然力の下に支配されてゐるから、結局オウガスチンの所語字宙 直接に神の支配 成功したが、十八世紀に於ける思想界の傾向は最早教機 其理法を應用する外に道はな 勝利を博した時代である。 初に神が創め給うたもので あるけれども、 せられ、 ケプラアは自然法を 神の思想とし、自 最初の原動者 願ふも 一の下にはなくとも、神の造り給う た自然法又は 神の律であつて、吾等は最早直接に神に祈禱を デカアト 無益の業だ、 は神なりてふことになり、一 式の「信ぜんが為に より稱道されし歸納的論理は至る 寧ろ此自 いと云ふ極端なる合理主義に傾 班 八主義と相 俟つて、 然法を合理的 先づ疑へ」 然の 奇蹟 宇宙なる大時 方象は必し 時的 グリシャ に研究し 神學に反 てふ自 恐怖の

カント以來の哲學

る秩 序を説明するには好都合であ デ オ ズ 4 0) 見 た宇宙 は 目 的 るが、 論 的 彼等は字 其整然 た

であると。

覺や理 て、 實在 論 者を研究した後、 と称 されば吾等の 組織を闡明せんと試 てとが出來ると、彼は心 神や實在 7 ことが出來やう。 や一元説 11 るを許さなか 宙 は 認 ねる以 3 斯 が吾等の官能 へて に居 する物夫 吾等の知識 識 人間 管在 性 樣 論 Ŀ ねる 42 0 であった。 多元説を稱 0 も最 に就 力 刷する問題をどうして充分に 方面 72 八れ自身 かが 知 12 經驗以內 つた。 初 其者 T 識 より解釋 6 から静 から、 派は所詮 初め 0 先づ吾等は人間 12 Ĺ 夫等は皆形而 吾等の 與 (實在 みた。 が既 十八世 ても 吾等の知識 へ、神學的 我等は て字 の事 ふる印象を内なる 的 理學的 12 實在 宇宙 L 12)の本體は永久に不可解 而し 戯想で た 宙 は 如何はし 紀 個個 古來科 おろ 其 る 末 に進 0) べ者を攫 7 3 哲 研究により人 は 12 12 Ŀ 0 あ 0 的知識 一學の問 化 完 吾等を圍繞する 理 か 彼 目 出 12 い基礎 つて、 0 IT 的 學 72 發 成 到達 んだ 外 手 超 觀 的 大 L 吾等 解 な 3-(1) 經 别 90 哲 12 0 吾等を 0 5 根 決 L 神 歷 江 であ 機 創 驗 カ では た結 くる 據 する 意 的 械 V2 0 史 造 感 其 0

7

認

め

Ĺ

T

る

12

至

0

た

6

は

な

V

T.

る 臆 13 定 Z Z 驗 命 出 7 す 科 臆 3 說 0 北 來 4 71 說 20 學 平 Ŀ 相 者 難 ~ 6 る 說 V2 相 25 的 過 を真 カン あ 12 は 交 0 V ぎな 沙 5 實 る 組 不 間 否 的 ---實 ず 見 織 題 驗 0 7 可 され T 能 真 ŀ 73 よ 相 0 は カ> 智を りと信 理 0 南 終 0 2 透 2 720 E 徹 12 0 說 > あ 50 は \rightrightarrows 以 假 る。 今 E, 13 72 せ 單 T 3 3 力 ぜ 3 定 生 B 2 25 7 到 之を る 說 ī 75 垣 3 n 命 カジ 知 21 彼 故 3 理 以 底 E 32 ス 0) 4 之を知 其 12 カゴ 过 Ŀ 經 動 彼 n 0 13. 0 會 故 n 初 0 7 凡 吾 驗 問 カン 用 12 等 絕 題 1 0 B 信 3 7 カゴ y 價 假 對 信 42 悉する 難 は 仰 カジ 全 6 ら定 適 仰 荒 值 定 图 字 は 0 カ 0 Ł 發 15 真 唐 成 ·A. 6 6 宙 な 熱 見 ず 說 411 果 L か あ 理 0 S とは Ę る 13 總 稽 る 心 6 は は な 假 經 生 は は 到 事 0 新 谿

的 0 0 そ却 6 的 餘 22 客 牛 あ 地 與 9 0 7 は 常 せ 絕 な 仰 6 或 뿥 27 3 n 的 新 0 0 は 力 72 超 奇 6 真 12 銳 3 理 あ 人 的 る 0 カジ 常 7 世 過 世 界 去 あ 12 生 澹 より 12 9 0 絕 た R 0 經 躍 對 なら 啓 驗 0 趣 動 0) 12 示 きし 味 重 於 は F 7 理 湛 最 旣 な 7 闽 常 早 旣 H 知 信 て 12 n 12 0 冒 ば 仰 外 3

> 展 6 向 き字 E を 逐 宙 げ 創 往 造 < 0 偉業に 0) で あ 參加 る ついい

六、進化論とクリスト教

者 化 7 威 偶 會 13. 原 25 共 L 派 0 ス カジ ス 始 吾 を認 然 0 如 眞 す 時 以 豚 13 7 カジ 0 1 旣 稱 代 敵 的 成 理 1 等 的 < 敎 E 史 7 多多 淮 Ŀ IJ 1 な 0) 分 12 述 25 3 B 0 0 福 子 1 化 音 ク ス + 時 る 6 知 產 ク 真 1 た ī る 73 吾 3 2 F 物 る 理 " リ 1 IJ ŀ 代 E 等 棄 を信 3 た IJ 所 絕 敎 カゴ b 3 な ス ス 0 3 Ĺ ŀ 中 Ъ 0 0) 產 ス 極 0) 12 如 7 る 對 論 敎 物 言 稱 侗 > 相 的 敎 ずる 世 本 な F 南 で思 ふる 本 紀 は 質 る 6 敎 す 5 12 坐 本 ず あ 3 75 今 質 的 質 え想 B * カジ あ 0 12 變遷 を 故 本 2 とな 基 る 通 ŋ 0 ク H 的 偶 とは 區 7 質 IJ 科 然 2 E 0 ツ 17 y 時 卽 型 科 IJ L 分 チ せ ス 0) ツ 1 暄 吾等 代 n 4. 脐 P 的 學 1 チ 時 ち 出 ス 3 他 w 思 落 派 る 代 代 1 來 敎 道 思 ŀ 0) 7 理 教 Ł 潮 思 想 0 Ty 思 T. 82 0 は 派 は は は 得 潮 本 1 12 4 卽 0 72 云 潮 0) 如 ス 絕 5 戀 15 侗 3 な 0) 0 y 質 無 抵 主 3 7 推 根 限 觸 敎 8 は 坐 カゴ 福 ツ 張 12 父 0 如 移 據 音 チ 絕 す 0) ク 12 1 す < 現 غ 12 對 敎 J. る 1)

斯の如き古來持 ち傳へた絕對眞理に對する信仰が、現代の生物の自意識に到達し、自己 實 現を完成するてふ所謂Dlosed systemないから、完極なき進化あるを許さぬ絕對觀である。 はたフリテリセエション ないから、節を始めか、自己 實 現を完成するてふ所謂Dlosed system は、無意識の生涯より始め、漸次固有の意識を恢復して 絕對最高

化論と辻褄を合せて往くことが出來るか、 進化説によりて其基礎今や危く、現代的のクリスト教は を否定せる創造的進化説と如 何なる交渉により、 學的進化論により如何に影響されてゐるか、又そが萬事 思辨と實驗の交渉を概論したい 過去の 若し調和の望みなしとせず、何れを薫て何れを取る 神學説も常に絶對者の存在 のである。 此問 を高調した 題 如何なる調和を to 巡 ぶるに が、 如 絕 現代の が何に進 上對窮極 先だ

五、思辨と實驗

生 處 真 唯 で 理 合 人生 な でなけ かず カジ 理 0) 果し 處 前 カ> 思 の眞 世 は 6 想 0 今日 n た。 0) 40 は 理る ば實 實 經 萬事 0) 驗 乍併今日 際 あ 唯 人生 12 を土臺として其上 n 思辨的で、數學上 於て 0) はず 事實と合致せりや否やは問ふ 個 價值 眞 夫 0) 何 理 の思想は X1 で澤山 時 臆説として、 は あ 恰も化 にても證明し る眞 萬事實驗 理とは の議 に築か 學者 究理 論 實際 カゴ 認 0 り得る如 原 n 的 出 め 如 子說 の事 られ た人 した 6

> 眞理 12 推移 の變轉と 與ふる人 說 實を提供して之を一證明 くては とし 遂 すべ に外な に絕對 なら T 共に流 き相 生 絕對 0) 5 VQ 一の眞 眞 對 0) 。されば V2 動 理 的 眞 (理た i 理 76 0 一では 眞理 て止まざるもの 所 詮 る 原 な なく ことは 同 子説や る以 樣 べき性 0 出 臆說 上、宗教や 人智 來 \$3 た 0 說 質 即ち 一發達 る カゴ 0 生 1 弘 哲學 相 命 E と共 個 0) カゴ 6 0

に絶間 ない 生の す、 が事 の 一 を離 にあ するも ねる様で ~ _ 此相互作用には野質の内に透徹し 躍 0 致だと見ることは出 22 る大 6 なく て存在 ゲル 動 6 あ Ł ある。 哲 は 共に眞 派 發展 6 才 な の絶對 イ するも によりて成立するも 彼 L 3 ケ 乎。 是れ 理の は L 往 ~ 百く、 < 0 觀 ですらも、 では 世 内容は 事實は心 に捕 10 來 個の問題 絕 眞理 なく V2 は 。眞理は、 對 不絕推移 n て、 は單 真 0 0) 眞 働 12 生 理 理 命 に影響を及 過ぎぬ 未だ過渡時 は なる 73 事 せざるを得 牛 0 さな意 發 命 と見 が放 と思 0) 展 0 働き E 想 7

り、世に絕對の眞理は在り得ない。よしか

今日に 演 つた 天に?天とは何處?今日の天文學は舊來の天地間な覆へしてしま 張した。 の神も信ずることは出來なくなった。 ると云ふが 魘が人間 あると見 と人間 せ 人格が疑はれ 生 0 渉する 天使の實在を信じなくなった今日、 恵し る 現 繹 生と宇宙 吾等は先づ神を知らんとするに舊 間 紙 て居 法によることは 如 との 0 (i) 而して殊に神数から區別さるべき唯一の想であつた神の を罪に陷れした数はんが為に、 て軍 いから る現代の 生 < 歷 挺人的 瞬間に無より有を生じ、 相 如き宗教觀は段々 たる發展の過 みで 涯 る。 块 互適 初めた。 に食 考覈し 神の は意 25 應 科學觀では、最早奇蹟の存在を是認し難くな 鑒 人生と 神の存在の根據も 的 動 全智 3 物 證 み 物 人の様な神ありとせばそは何處にあり 相 始 程は 0 互作用によるも、のと云ふべく、 は 0 7 カジ 發展 神との めね 出 全能 みを要求しては 主として 衰へざるな得な 進化漸進的で、 一來ね 其 人間 に於 ば 0 カ> -ら世 同時に破壊されたのである。 ならね。 關 B は 從つて是迄クリスト教の主 悪魔の反對なる疑人的 塊より人 係に説 吾等 て著 坳 ヴ 本 超人的救世主を此世に造 界の 時 能 1 概れ秩序的 代 は ŀ 的 しく其特色を發 間を作り、 創造 吾等は 來の は 居 先 ら及ぼ 90 に外 づ自 6 2 10 神 に推 ざ知らず V2 t 法則 學 而 分 す と相交 グ 或は悪 して其 様な 宙 自身 論 がな ソ É

> も、 けれ 之を觀念化 以 0 展は宇宙の て其意義 を調整し る て其特に 稱 てとが出 れば満 物の 2 る 映象や觀念を取 を解釋 足し 色とし 如 く 單に し、 觀念化 來 ない様になって來 るのであ 事實(物)のみを以て 必ずしも 知 (觀念化 2 能 る。 的 理想化 る。 に外界と相交渉することを 知能 7 扱 物 3 夫 n たたる 精 て自己と物 32 は 自 物 神化 72 76 身 0) 0 滿 關 卽ち人 の) を興 ř 足 取 過 係 程 んせず、 ことの 扱 12 生の は 及 だ 關 ざる Ł CK 發 却 係

八字宮の神聖化とグリスト教

關係 に交通 層高 念の を益 學や哲學 よりも 科學や哲學 今や吾等は 世界と 一々整頓 を深 調 せん され 層切 から 遊ならし)美化 宇宙 は 往 相 とする人生 質に 觀念 くも 肉體 互 ようと云ム努力の外に、 的 を(知的 全字宙 交渉を整律 的 めんとする努力 のあ の手段によりて 主義が人生を(意的に)神 0 るを認めざる譯に に)観念化 努力 と道義的 6 せんとす あ 全字宙 なる るが L. 、社交的 物質的 藝術 精神 3 カゴ 宗教 放 努 Z は 八人格 往 力 的 12 0 カジ 0 12 關 沙> 胂 Va 觀 的 (1) 係

る 12 化 ことは 調 北 を合 發展 最 草等 せて U ふべ 容 0 甚だしく た からざる事質で B Ŏ)に於て、 0 進步 あ る。 ĺ 來 時 よし外 あ 5 代 る 12 (0 る 形 76 12 思 於 な 想 7

今日 要求 處迄 的 に逆 吾等の生 弘 カジ 何 照 社 化 然 K 12 合し 宗教 吾等 突 が左様 つて其 求に照合してク なる貢獻をなせし 之を其 る批批 論 會學 世を風靡 らば今日實驗 人き止 若 0 涯 立 判 0 i カジ 然らず を進 實生 め、 (史的 (絕對 場か 心理 的 み、 13 果し 前 12 せんとする思 是等 背景 否なク 步 活 觀 歷 的 5 學も哲學 權威 向 T p 科學大に啓け、 0) 史 研 せ 吾等 y Ŀ 經 前 究さ 12 0 心驗 ス ば遠慮なく せし 罪恶 照し見 を主張 リス カン 觀念が其時代 に其 ŀ 及 n 36 0) 生活 今日 教思想を増 ひる 觀 組 F 7 文學 想界 而して是等 がする て、 成 敎 る 36 分 な i を豐富なら 0 救 0 0 今日 科 拯 子 偷 有 0 如何 とは出 Z 殊 V な 學 0) を分 此 觀 羽 理 に生 樣 實際 を産出 學 補修 吾等 哲 9 0) なる宗教 0) 0 一來 p 觀 般的 學 解 は B 物 ・否やを Ī 思 生活 , 83 進 念 研 な 0 宗教 め、 想と せし 萬事 乳 傾 史學 化 カゴ Vo 尚 的 何 向 論

> 求に應じ 合ではないのであ るから、 7 間 は なりし なら 吾等 7 7 V2 とは云 カジ IJ C 个意識 ス 然 5 ŀ る 教 は變化 旣 的 慥に に之を 12 過 發展 時 去 為 代 す、 i 7 來 年 决 0 0 間 L た 7 0) 教 不 不 的 6 知 4)

識 <

0

進化 論と 油 0)

的の神 進み、 20 人間 隨の發展が種屬發展の經路を概括的に 繰返へすてふ定説によりた。インのピースのでは、これでは一次のでは、これでは一次のでは、一般であるい、今日胎兒の發 展を檢する者は る。 を演じてゐる。 くべき多様の動物的狀相に變 鰓を以て呼 幾ヶ月の 原 な狀態な順次辿り來つて今日の狀態に達したので 至る經路 形に變じて 生 3 動物の 人間は下等動 れば先づ現 受胎後 い胎見も が瞬間に人間を創造したり 後には た通り 鰓孔 群 吸せる様が明かに見らる 十ヶ月位の短 其始めはアミイバの如き單細胞生活 模見た様な多細胞分割の時 此 虚して出 は 蚯蚓の様な狀形 代の生物進化論が稱ふる人生の記起 事實习 無くなり、 物から進化したの 逆つ 一産の 日月に人類幾千年の 段々默類 ٠. 化し、 幕落ちに となり、魚の クリ 今日胎兒の發展を檢する者は など云 į. 下等動物より順次高等動物に ス である 至る迄、 1 0 のである。夫から鳥の様な ふことは 教 如き形を經て人間の形に 代を通り越して、 *D * は最早創 様な形に移り 叉は 生物進化 歴史を繰返し、 出 あ 原 から起り、 を概述 3 下等動 世 75 其孰 せし のであ 段 かず

54

日

京

ば

泣

カン は

女 落

E

Į

n

悲

73 D

た

5

5

h

0

⊞:

0

72

1

h

r

讀 72

> 弘 <

つ ゝ

あ

ば

は

ず

笑

中 す

ず

怒 E

5 甲

W2

カジ

父

顏

75

力ン

5

見

b

h

12 1 戰 雏 7 益 せ 丸 K 0 ば 精 な 生 响 6 化 0 唯 前 物 聖 化 花 清 械 淨 化 化 法 愛 化 化 的 を 經 妨 驗 止

0 力 又 12 此 13. 單 於 追 神 7 聖 12 0 1 薫陶 み 工 愛化 7 ス を道 ij \$ 的 ス る 義 1 イ 生 的 殺 命 工 は ス 0 範 永 0 向 宗教 (道義的 遠 上 を 0 生 鼓 的 命 經 吹 感 を保 驗 化說 でと人格 ち 脚

增 る 相 こそク 3 殖 0 3 通 6 L 0 あ 妶 y 字 Th 宙 る 12 ス 新 交 ŀ 0 完 敎 神 相景 た 13 聖 結ざ 0 救 化 る h 清 現 極 6 n 代 益 觀 淨 0 化 的 は 内 17 to A 的 0 新 完成 間 力 72 生 15 ŋ 0) 命 靈 ス 3 L 12 意 往 ŀ 性 肉 敎 義 < を 薄 點 を は 成 12 揮 羸 7 ち得 於て 立 L 呼

夜

見て 6 ح 見 か 7 5 カン n 7 早 極 暗 ば は 3 樂 カゴ 4 眺 Ŀ 13 12 0 9 雲 め 60 12 F カン H 7 À 光 夕 朓 吾 0 お は る め 日 E あ 支 カゴ は 73 カン 寒 那 年 5 赤 3 4 蕎 P 落 あ 2 麥 H ع غ 日 不 る 0 7 狂 は 兄 思 淋 2 笛 月 逝 人 黄 L 議 71 0 5 3 金 0 7 12 び 音 2 H 瞳 佛 3 な 3 3 0 9 カン 0 渡 2 12 CX 世 E F 暮 お T 1 弘 る ζ 君 歸 ζ 冬 カ> る る 3 0 め ほ 7 吾 夜 め n 寄 72 更 12 る 如 は ع H 时 す h < 76 原 12

F

3

見

7.

筲 T

地

獄

友

來

武 郎

山

口

左

本領である。 電との關係を(靈的に)一層神聖化せんとする人生間との關係を(靈的に)一層神聖化せんとする人生

者ではない。人間の今日あるは字宙と人間との相互 交渉の結果によれること既に述べたるが如くで、人間をして字由、を觀念化、美化理想化、神聖化せしむる 衝動 が既に字宙の磅礴たるものなくんば、如何でか人間が是等の 努力 を爲すことが 出來 やう。吾等は「木」の觀念を持つてゐる。併しそは吾等が 自分勝手に作つたものではない。「木」の觀念を作らしむる木の事實 の衝動が存在し、此衝動は一般的に認められた人間の 經驗なるが故に、此觀念の由來は最早疑ふことは出來ないの である。夫れと同樣、神の觀念も其愧念を作らしむる或る一般的に經驗 された衝動が、よし無形なり複念を作らしむる或る一般的に經驗 された衝動が、よし無形なり複念を作りた。

> 欲束を離れて存在することは出來ののである。 なく存在することは出來ない樣に、宗教の事實も そが香等の靈的なく存在することは出來ない樣に、宗教の事實も そが香等の食欲を關係 なるを認め、人間と宇宙との相互關係に 於て、層一層社會的。人

に於てのみ滔々と流れ行く現代の物質觀に逆つて は宗教の根 價値なり。 に反して吾等は宇宙 視し、宇宙を憎んで遂に自からを憎むに至る。之 して自からの人格に動るぎなき根柢を作る。 唯物的 を物と見、 格的に取扱はざる能はず、宇宙の人格を認めて面 格ではない。人は自からを人格と見て、 なれば宇宙が作り出した人間も勿論物である、 らの靈的 からも亦変され、 物質視せられ 愛の 功 關 價值 利的 係 吾等は價値 本義であつて、ク 機械と蔑視する者はやがて自 は 、人間自身を卑しむに至る。宇宙 を失ひ、折角磨き上げた意識 相互 態度を取ることにより、 M 的 を神 L である、吾等は宇宙 て人生の あるもの 聖化 リス し、 價值 ^み之を愛す。愛 ト教 宇宙を愛して自 を知る。 も只此 宇宙を人 からを蔑 に對 人生自か 0 愛は の點 宇宙 Í が物 Ü B 7

H

9

0

寢

旅なる

奈良の

流

n

臉。難

毛が波

到

水

力了

冷の

72

9

るて

か鳴か

物

思

搖る

弱

1:

カゴ

曉

嗝

く頃

5 に示 青運 難 難山返 蒼 俳 力> 根 桑 波 せる づ 優 ٤ 3 0 Ш 來 た でとくなり。 カン 12 峰 3 を 花 る な 旅 め 77 しみ V 奈 幾 船 靑 良 ζ お 寂 Ш 0 3 0 葉 0 k 笛 3 0 都 B 0 歌 0 見 0 あ 0 0 せ 弘 r 磯 夕 窓 2 た は 0 73 b 12 な 40 12 n 5 b L n 鳥 る げ j 0 箱 12 姿 裾

根

5

ばて

我

n

る

カゴ

黄龙

12

け

6

12 7

不さ

區

4

> 歸

熊

風

吹

死 あ 死 刹 より やし 那 12 にやきは た 0 つまざり るも 痙 市市 速 5 0 を平 Ĺ 3 お 習 びや D 慣を、 氣にて、 カゴ 不思議、 カン す、

顔列つ

め

たな

光

る

は

カン

花旗

輪やカン

12

び

<

は

(三) 條

實

敬

工夫等土にうちいれし、

浪を泳ぎていやすでと。

あるがれをしる青海の映寫せられぬ。空を踏む



巷の不思

議

曇る路傍に、マ煙筒のかげ、か

子供等は、

そのゆくすへに隱れたる

石炭

からを撃ちあへり。

えとショルを制

1

場の車輪ドホルム

00

ひょき、

あれをうちけれ、ゆきずりに。 がに勞働の不思議こそ、 がに勞働の不思議こそ、 がに勞働の不思議こそ、 がに勞働の不思議こそ、

空より落つる雲のかげ、 たけや、そろふ市街樹に、

藤

佐

清

激 0) あ る な 泣 5 心 20 持 3 か F ~ 克 思 泣 0 は 微笑に 000 M た。 カン 思 n 恰 N 度 T 合は 心 自 カゴ 1 . 1 靜 カゴ 7 寸 何 2 b カン た 60 0 3 事 0) 6 時 10

後 る L 彼 カン あ 5 5 力> 1 カゴ 6 る その 5 描 n あ は カゴ 值 75 あ 0 て完 2 て兄兄 私 7 カン 製作 72 分位 5 うとして熱情 カン は 兄 すとし あ る 1 つた。 計 な 成 0 又 ゥ は 3 畫架 書 3 兄は スケ þ カン 久しく その 0 n カン 歸 カジ 0 たも 72 大きな部 そして家 病 * 描 55 私 ツ B チに從 73 カジ 眉 カン 0 うで 興 をそうい 0 は 重 12 な 和 カン 味 は 0 L カン 0 0 1a でば 7 つった 7 つた。 分 女 あ 的 四 カゴ る 0 カ> でねた 覺書 うそ 3 な カン 0 脚 * 2 もう疲 克 残ら をも た 6 は カン T きに その 0 製 立 n ح 0 10 思 た。 作 って從 ち上 後 砂 13 限 0 3 夕暮 出 な 12 0 カン を n b 兄 うい 庭 は 外 0 カン 0 72 2 た。 72 12 3 書 た T 0 12 カゴ 0 0 Ł 製 H は 最 0 3 n 12 6

死 大きな 0 より 赤 我 土 0 如 谷 救 間 は カゴ hu 開 8 展 0 せられ d # ぞや ねる

る

男

は カジ

頃

は

ど習慣

0 0 2 カジ た

-[

る

自 を下

いふ 7

ことを

思 今

ひ續

it

T

2

た。

カジ

その

時

に思 70

あ

0 ッ 0

鰭を

動 6 目

カ>

すと h

カン

के

773

n * 9

と分るやら

な

5 光 术

魪

は

2

0)

0

0)

日

南

V

~岩

42

力

1)

12

休 櫟

0 近

ねた。

6 0

H

光 隆

12

づ

水

E

50

ح

つた。

標 12 飾

ア

腰

L

それ それ 7 0 0 h カン V 2 0 カジ 2 あ 秋 葉 7 5 (72 3 櫟 か る 2 る 0 300 ねる て、 12 9 る。 カゴ カジ 0 0 H その 谷 最 散 (0) 水 TC 下 暖 0 鰕 髯 その 早 る様に 6 0 12 12 池 0 カン Ŀ 90 12 魪 洗 F 地 8 0) S S 機は 人の 傍に 温 は 12 12 光 光 ぶら下つた カジ 0 V P な 18 住 72 n 鏡 は を は 5 取 居 は 白 7 根 男 吸 0 9 0) 年老 7 * を かが 黄 X る L 日 やらに W 間 定定 腰 雲 影 以 力池 葉 0) 6 7 微さば 來 6 は 6 め 2 0 0 8 カジ た。 鰕 あ 中 72 髯 中に F た 麻るい 寒 水 ___ カン 3 つた。 0) 櫟の をた つ浮 12 h るぐ 盐 鮒は する 女 7 6 2 やらに流 照 720 る多姿 0 池 h 林 > **)**" 9 併し その つた とそ 0 カゴ 6 0) 3 D それ でに隠 は 72 た + 南 70 H 秋 5 影 F 0 n る 12 る な 0 風 影 12 T 2 光 L 12 ・うで た。 な 12 T 12 70 力了 0 2 JU 遊 油也 め

75

藏 0 め 0 村 岸 の上には 7 私 0 ねた。 3 は 白 杖 壁の をひ 風 田 7 土臟 見 いてゆく兄 車 3 0 た。 カゴ カゴ 一面に夕焼 か つて、 層白く 恰度夕日 のうしろに 光 12 つて 彩どられて、 カゴ 西 ねた。その土 つい の空を赤 て、小川 遠く < 染

静

<

して

うつむ

S

た。

るの

カン

は畫筆をとつた。私は傍に立つて 架ををろして、 私には彼 まつてそれ 輪 ツ かと ラと夕日 を描 タとい それ 丰 リと見え 力 カジ V の心持 て飛 **ム翼の音を思ひ浮べてゐると、** 小さ ヷス に光つた。 等の てねた。二三羽 んでねた。私 いけれ それ を は分った。 美し 朓 から三 め入 ども風 い景色を指さした 兄は默つてゐたけれ つた。 一脚を据る それで肩にしてねた 心が心の 12 の鴿がそれらの上を 7 2 アノ 何が n 及 な カン てやった。 かに ら向 抽 廻る 杖 兄が 5 鴿の 50 出 どるい 0 され 立ど キ パタ カジ 景 兄 畫 ラ

眺

め、そして兄の顔に眼を向け

72

兄の顔

は

思議さらに私の やらな様 かな専心を であ な満 った。 子を見 足 12 邪魔をし 旗 方に その ると、 S 坪 7 向けたので、 時 7 私も たのではないかと、 る フト兄がその柔和 田 B 亦自然 らに 見え 私は に微笑 72 B な顔 カジ 兄 治 顏 B 浮 0 兄の を不 CK 2

12 5 思 T 0 死 った。 あつた。 カゴ は却つて彼が心のうちに大きな悲しみを抱いて 小ない が近づいて來る は 2 幼なか するやうにし る 思 た。 0) は 唯 で 利 n 併し今思出してみれば彼の 以 ったその頃 叉彼 害 200 前 子 とは 12 併し彼 0 供 興味 て可愛が 靜 心 0 大 を失 力 12 を知 の私 變柔和に な は カゴ 餘 滿 女のやう 2 2 つて吳れ には兄の 足した。 て、 5 7 ねた なつて私をお母さん 200 彼の カン 心心持 やらな微笑 42 る らで 弱 優しい顔 心 あ 0) R カゴ 0 カゴ は の分らな もあ 最 優 しくさ 不 思議 早 L 地上 をし るや つおは 私 カン

が輝やさ、

五月の風に喜ばしさうにうち震へてね

尊いお聖人の姿もある。けれども鳥の 群れ飛ぶ下で淋しく獨り零 塔が春の日に輝やく大きな寺の本堂で讀經してゐる 金爛の袈裟の 畑を耕してゐるお爺さんの姿は獪記憶に 新たであつた。お婆さん ねるまだ して行つた。お婆さんは其等をのこらず、其過去帳に記して置いた。 お婆さんが生きて來たながい年月の間には 澤山の人が此世から辭 动 お爺さんを照したその太陽が靜か な石のお爺さんの墓に光つてぬ で煙草を白いその髷のまはりにたいよはせ乍ら 綱をつくつてぬた 0 の中には青い柏の葉を五月の 風がひるがへす窓の下で機を織つて そして毎日それ等の人々を思ひ出しては。讚經するのであった。そ 家の近くの林の中の墓地に お爺さんは眠つてゐる。 林の木の下 関
いれて
ある。
その
日は
多くの
命目
に
あたつて
ゐたの
で
ある。 若かつたお婆さんのお母さんの姿もある。 又赤い五重の

白

親鷄な尋れてピョーへと鳴いた。「あちらだよ。早くあちらへお行 も親鷄の呼ぶ聲が聞こえてゐた。 鳴き乍ら麥に集った。 親がクククと言つて喰べる直似かすると、 り乍ら、親鷄の足元にもつれし、現はれ出た。そこにまかれた姿を んで出て來た。そしてトトトトと 鷄を呼んだ。すると家の 匹の親鷄に伴れられた一群の雛が小さな足どりで一生 匹の雛が残つてなほ一姿をあさつてゐた。 姿が無くなると、親鷄に率ぬられて雛の群は家の 影へ去つた。 鐘が鳴つて讀經の聲が止んだ。お婆さんは家から姿を手につか お婆さんはそれを見て幾度も繰返した。やがてそれも家の お婆さんは滿足さうにそれな眺めた。 とその雛が自分一人に 雛は一 家の影 齊にピヨノへと からはいつまで 一懸命に走 やが

> に從つた。 影に立ち去つた。お婆さんはそれが親鷄の處に行くかどうかと後

桺 の木と人間

その 來た。 えるやうに 軈て石の間 元氣の 寒さらにふるへて ら冬となった。 はりに垣をつくつた。 雨の頃その梯の種子から小さい芽が萠え出 るたけれ共、その僅かの葉を風に吹き散らされ てその種 ン~鳴いて飛ぶ頃に して外の處に植た替えた。そして水をやつてま い雲が空 お爺さんが他所で椛の實を貰つた。それ 然し 年の末 そして桃は白 V. 次の 子 * 芽が角のやうに なつた。 に小さな青葉が二枚かくれるやうに見 にお爺さんはなくなった。 を外に投げ棄てた。 春が來て雪が消えると、 飛んで風が吹いて鳥 林はその時もう四寸許りも 72 、それを七つになる娘 120 い雪の下にうづめられ には春 春が過ぎて夏が來てそれか と風 隆起して の光にその柔 に混 それは が鳴 2 ねた。 て雪が 次の V 秋 細 7 い枝には ねた 降 見 年の梅 を喰べ て了つ びてて た。 つけ カゴ つて

出

30

く動 550 視 花が咲いてゐた。彼はさらして久しく池の中を疑 任せてゆるやかに動いてゐる。 青の空の中に 遠 けでさへ滿足なのであらう。今二匹は と浮ぶことが出來た 合つてゞもゐるのであらうか。併し い紺青の空が静かに地上を見下してゐる。 ことはどんなに感謝すべきことであらう」と話 がらつつて行くのみであつた。 いちがつた世界であると。 かなかつた。あたりに物音が絶えてたい日の ねた。 自分は住むことは出來ない。あそこは あの 小さな魚はあ 魚はいつまでも浮いてゐた。雲も人し カジ あ る。 のやうな薬が あの らどのやらに樂しいことであ やらに安らかにホ ゝして水に 白い雲の彼方には深 かすかな流 その藻には淺黄 平和な鮒の世 浮んでる 「水のある 12 その紺 に身を ツ 遠い るだ カ IJ

かつたやうな崇嚴な日輪が輝いてゐた。又一つの白雲は空の際をいるださと、一定をできて、ここになりまで、というななといて、というないというないであるとはいり思つてゐたこの世界をこんなにとが、計とに充ちてゐるとばいり思つてゐたこの世界をこんなにとが、計とに充ちてゐるとばいり思つてゐたこの世界をこんなにその時彼には自分の生きてゐるこの世界が解つた。さはがしさその時彼には自分の生きてゐるこの世界が解った。さばがしさ

臭れる。心に詩篇の一句が思ひ浮べられた。 る。現るもの凡ては崇嚴な秋の日を浴びて清淨と 平和に輝いてゐる。見るもの凡ては崇嚴な秋の日を浴びて清淨と 平和に輝いてゐる。見るもの凡ては崇嚴な秋の日を浴びて清淨と 平和に輝いてゐる。見るもの凡では崇嚴な秋の日を浴びて清淨と 平和に輝いてゐれてゐれて不過間を 族人の道が絶えたり續いたりして見える。又山の指して飛んでゐた。彼の眼の前には丘に丘がつゞき山に山が つら

へに絶ゆること無ければなり。」彼は 祈りをしようと眼をつぶつた「巨大なる光を造り給へるものに 感謝せよ。そのあはれみとこし

愛と永遠

してワシーと翼の音を立て、飛んで行つた。林 遠く ねた、 の葉が又一枚散つた椽側でいま迄絲車をまはし 0 風が吹いて柿の葉がサラー~と鳴つた。そしてそ で來て枝にとまつた。 **柿の質は熟してゐた。** はお 秋の日を受けて小さな藁葺きの家 そこには赤土の丘が 枝が舞ひく散つて行つた。鳥が 婆さんが住んでゐる。 の空を眺 お婆さんは めた。 その それ そして家をつ 時立つて奥に這入つた ある。丘の中腹の林 一羽の鳥 からカアーしと鳴 家の 傍に が何處からか飛 カゴ 一様の木 > ある。 頭を上げて てねた。 があ そこに 0) いたそ 影 -3

62

12 72 なぜそれが信じられるか、それるよく分らない。 るのだと思つてゐるだけ信じてゐるだけであ それは はふさは 現在を離れることの遠ければ遠 b 多くの 偏 る。なぜだと言つても理由 何處 しくな 幸 彌陀 福 にあるか知らない。 カン 0) V. あ 願 るやうで 安養の樂士といふてとを思ふ 力の强 南 いのを頼 る。 只遠 い丈けの未來に 幸福 はよく分らない んでね い未來に生れ ととい る。 、人言 る。 t 葉

救 力廣大無邊にして安養の樂土に連れて行つて吳 なくても、 ふて吳れ攝取して吳れる。 凡 來ない。 て吾々 。か様な吾 幸福を得やうとしないでも、 0 日 々の生活は一つとして立派な行は 々をも佛智不思議を現は よき事を為やうとし 彌陀の l 願 T

「願力無窮にましませば散亂放逸もすてられず。」 「願力無窮にましませば罪業深重おもからず。佛

られる。只涙ぐましく有難い。いくら繰返しても要もなく只賴母しい。久遠寶成の佛を信じて慰め無邊といふことに深く感じた。それで周章てる必今朝はこのやうな經を讀んだ。無窮といふこと

複雑なことは書きまとめる事が出來なくなつた。俺には念佛より他に途は無い。もう無くなつた。

今岡文學士の近信

(C)コー・シー・モフ参考会参考學― 選三時間(一等年間) (C)コー・シー・モフ参考会教育學を一緒にした者と 評してよき講義宗教史、宗教・理學、宗教哲學を一緒にした者と 評してよき講義宗教史、宗教・理學、宗教哲學を一緒にした者と 評してよき講義宗教史、宗教・理學、宗教哲學を一緒にした者と 評してよき講義宗教史、宗教・理學、宗教哲學を一緒にした者と 評してよき講義宗教史、宗教・理學、宗教哲學を一緒にした者と 評してよき講義宗教史、宗教・理學、宗教哲學を一緒にした者と 評してよき講義宗教史、宗教・理學、宗教哲學を一緒にした者と 評してよき講義宗教史、宗教・理学、経典・選三時間(一等年間)

は、日本に関する英米人の著書譯書の多き事驚き 入り候。無論其等の著述の内の何程が正鵠を得たるやは疑問と存じ 候へども流其等の著述の内の何程が正鵠を得たるやは疑問と存じ 候へども論其等の著述の内の何程が正鵠を得たるやは疑問と存じ 候へども神道及び日本に関する英米人の著書譯書の多き事驚き 入り候。無神道及び日本に関する英米人の著書譯書の多き事驚き 入り候。無

居候。保羅論は來る一月よりに御座候。 lie in its fidelity to experience"が耶蘇論の結論なりし樣記憶致する者に御座候。"The Strength and Authority of Jesus' teaching神學論と傳說との間に埋れたる耶蘇と保羅との眞相を闡明せんと神學論と傳說との間に埋れたる耶蘇と保羅との眞相を闡明せんと

向 漏 32 る 0 命を心配する母 る妻をなくした夫の 死んで いろくの思い 秭 その家 や髪に白髪が混 質に黑 は はな太陽 けた。 た。 木の 15 安否を憂ふる老いたる 0 蜂 である。 柿の木 下に 一日待て、 それ が単 併し F V に重 < 或る時 が輝やく時 年そうし に立つた。 2 祠 枝 をつくるやらにな カン ころの は悲 が立 で病人 た子供を悲し カゴ 12 6 柿の木 集 は 夏 でな B 親の 財 し氣にその を訴へにとその つて 7 るやらに 鳥 力了 て三 5 產 られ かが 去り秋 カゴ けれ が來る。 心 な は を失しなった 絶望と、 彼は絶望の 來 あつた 來 年も待てばお 時 又悲し氣 た とには絶え難 た。 7 ば 父が に年を經 T V 鳴 カゴ 葉をうなだれ それ つも 母 時 以前 つた。 來 < B 死の床にある子供 あつた。 カゴ 行 P 7 待 柹 末 祠 にその葉をうなだ あ カン 者 0 らに 長 2 て 自殺 男が 5以 0 n の前 の勸 てわ 娘は 秋の V 前 木 ば旅 年月 V な の上に 日 思 0 しやらとす 繩を持て柿 けれ共愛す に立 後家 めに依 た。 2 末 ò 待 V て顔 CA 12 15 カバ 0) 薬 3 7 カゴ あ 0 0 いつか 時 はその 經 0) は 十日 言 をそ る娘 720 あ 者 つて もは 蔭 つた 薬 0 は 15

> た。 30 空の上の である。 しさに打ち震 あ った。 撫 又 何 赤 6 4 × カゴ その 方で雲雀が 椨は 變らな 過ぎ天 來 た。 交賣 時 へ乍ら春 燕梆 い。天地 地 日 薬 は は 整 の青 3 凡 麗 * Ti の姿をつ 7 カン 葉の 12 張 は 月の ら上 無窮 照 淨 な 風に 9 な かを馳 げ H 風 12 45 て呼 た 不 輝 和 は 變 天 P O 12 h るや けり拔 6 地 かせて喜 輝 時 を見渡 やく は 力> 永遠 12 0) は

自含光の下に立つ自畫像

く大きな海が果しもない廣がつでゐるのが見える。 年老 つて前方を疑視めてゐる。その傍に一匹の白い犬を輝やかせ鳥の翼に光つてゐる。松の木の下には 0 ねる。 三本白い れ等の後方に遠く一つの丘がある。丘と空と合 ふところに一人の 松の葉を洩れる白い光は彼の顔を照らし犬の毛を、暖 上に一羽の鷹が身動ぎしないで息んでゐる。 大きな松の木が根をシッカリと土 た農夫が空高く鍬を上げて土を掘つてゐる。 その上を一羽の鳥が舞ふてゐる。 空をメックにして風に吹かれて立つてゐる。 0 中に 秋の白 踏みしめて聳え立 その 犬が眠つてゐる。 彼が腕 光は空を飛ぶ雲 枯れた 丘 めてゐる。 傍に の彼 椅子によ 茅が二 は藁塚 7

ちにもなつた。凡て未來來世は幸福な住家のやう俺には墓場が幸福なところのやりに思はれるや

文

を記してゐる。

それが

兄の絶筆とな

かある

兄はその次に蓋の覺書きに干

係

やうに

L

て次の

皇の衣を脱ぎきらない現代の ら改めるだらうから」といふのであつたが)彼人一個の考ではなか とかいつて餘り良いお面をせられないやうに見受けられてをつた 私が て予を を論 私 て Beggars should not be choosers といふ口調で來るのである。 でもいふべき 或る姑息的信仰心を抱 もそれは神學生に在るまじき事ではないと思ひます。たとへばそ 憶斷を下し易いのである。 れは漸々學者になつて行くわいと思つたに違ひないでせう。常に 六合雑誌が何ぞなよんでゐるに違ひない あれはいかぬと思ひ込ん 〈例の問題的やり方なので〉その先生の氣に入らなんだらしい、こ たかと思ふ。 ふよりも、彼の教授は、「その前に少し自宅に呼んで一應話した ほのかに聞く處によれば 想運 は或る處で現代日本の思想を論じた時に、 私の考では、縦し私が 必ず本なるんで歩くので、 述 自分は思ひます、 山の石として用 理事會とやらの折、效授にそれを言ひ聞かしたのであら L するに至つて 7 動 0 た末段 テリアン # 少くとも私の思想の一端を聞いて之れにてつきり 意 すべ 12 ゆても 內 かういふ種類の人は えてかういふ早計な にし ら事を述 ケ崎 前の話でも學校の理事員全般の意見と 何時 は予に對ふる言 六合雑誌を愛讀しとつたにした處で何 教會の信者は、 いしのである。 途中で會へば、 かの私の感想を述べたの て六合雑誌 氏 及び其の いてたる。 べた。 一種の本能的恐怖と けれども、矢張り法 同志 お學者殿 然しそれを以 葉 の耽讀家 をもた の諸家 ひとか何 かる なり 梁川 15 少し 0 V

> 破 族の啓示よりも重しとするも き全體としての内的要求を以 を換へて言へば、人間性の中に生れたる又生るべ ずる一人です。故に、 蘭西哲學者と共に所有 をる實在であると思つてをる。 人類の間に自りでに生れた確固 7 て
>
> な
> な られ 信 乱 は宗教といふものはそんな機械的 vo 12 7 りするもの 3 外的 75 V な何物によつても支持 細 では I L る實在は傾動であ 人類全體の啓示 て出 ないと て、 來上 のである。 72 而して私は る質 じて る 國民乃 36 を以 3 性を有し せられ 0) る事 る。 3 至 Ö すを信 大佛 刨 た R 5 5 0

何時 而し 言うて曰く うなものだ。 旗を動した統一 らた事だといふ、即ち『ユニテリアン からいふ話を聞いた。 數年 -の時代にもあつたのだよ。(教會史などを學ん 一前或 此の言を紹介し 3 ひとの傳道 。神學生 教會を指し --(現今は それは或る数 た ニテリア る余の したあとを占 たのでか 有 ンの 先輩 爲なる牧 やうな は 3 諭 多分其 その めをるしと 0 は 棟 師 意見 弘 虱 領 0 0 から 0) 0 は of. 頃 3

人間性に立ち返れ

愛する前フレスの教會敬師区 先生足下

真實を愛する心か と棒とは制度の最良なるものに非ず』と。 more ますが)からいひました。"Up and onward forever しない積です。 質を愛する心から、 We can not stay amid the ruins" 此 度、 私の私淑するエ 先生に宛 い事になりました。然し、 之をなす事を決し てゝ痛ましい告白文を書 マーソンが と、又『門 て、 (叉出 恥 私 は

に到達したのでした。先生が非常に御心配下すつた 再入學の事に問達したのでした。先生が非常の言用、過去幾年間厄介になつたT Gの神學校を退く時業に昨年の三月、過去幾年間厄介になつたT Gの神學校を退く時業に昨年の三月、過去幾年間厄介になつたT Gの神學校を退く時業に昨年の三月、過去幾年間厄介になつたT Gの神學校を退く時業に能に心に確く 決した處でした。其の後約半年の間、死ぬる程菩痛情の産物と見られたのは 是非もない事です。教會と舊宗教と所謂情の産物と見られたのは 是非もない事です。教會と舊宗教と所謂情の産物と見られたのは 是非もない事です。教會と舊宗教と所謂情の産物と見られたのは とは自己が、一片の發作的感光日、御取次を願つた「日本基督教會属」が、一片の發作的感光日、御取次を願つた「日本基督教會属」が、一片の發作的感

つた。

體

私は

その

時も教

授に申述べたやうに

かつて六合雑誌を愛讀した事は

75

かつた。

成

る程

西淵

峻

思ひます。

ついて餘り氣薬りせなんだのも、

此の事に依つて

御

解りだらうと

で、此 つた。 もない心で平氣に事實を申述べて引き下が 等いうてゐたよ、と。 しても、 教授 事實を陳述し リアン等に成られては此方がちと困 るとの事ぢや。「六合」なん 員の意見だが、 然し彼の教授 私の當時 カジ 然し、余は惡び 0 私を其の邸宅に呼んで諭 學期限 その君がその 0 悶 ませら。 いの心理 りで補助學資 ――その缺 々の情を明 それは 一に就 余は實に驚かざるをえなか れずに、 、「六合雑誌」を愛讀し か讀 いて考へざるをえなか 席 かにする為に、 を の方は何でもな すらく 或る日 堂々とそして何で 見合すかも んだりしてユニ るよ!君 0 事 理事 つた。 知 S らん T 會 テ 3

來なんだ事程然樣に人間性及真理といふものある。彼が形骸宗教家の棒の内に跼蹐する事 んだらと考へ を熱望して止まないものである。 否はら考 如く我等が る事と 、る事 仰ぐ事が出來なんだかも は 同じで、 J. ~ 1 考ふべからざる事で 2 カゴ 若し存在 つは自 5 が出 せな 73

スト教の事大主義(朝鮮の東學館の聞ではありません) を發揮して權威主義即ち物質主義を發揮した教會主義は 之に加へて日本キリ 於いて表れてゐる通り、 である。成程と肯かれる言葉である。然しキリスト敬とて決して皆 横道に入つたが) 其の學生が 或る寺に宿つた時、 其處の坊さんは 何何の伯子男爵をこけ威しに戴いた事を慷慨したが、へいやこれは 傳道の事について 基督教者として一家の批評を加へて、その外的 それは東京の何某私立大學の生徒とかいうてなった。 教の根本義は、「天の父は今に至る迄働き給ふ、 さうではない。否大部分さうでないのだ。 がへそれで少しこすいといふのであらう)私共の佛教では自分の教 蘇教の方では 洋行した程の 佛寺と教會とを尋れ當て、は 宿として來たが、當時行はれ つでやつてゆくのだがら 餘り 去る夏に、 僕の家を尋れて二人の無錢旅行者が舞ひ込んできた。 名僧であつたさうだ、 何でも他の學問や何かかうまく取入れる事が出來る 人間生活として宗教を教 世の中からもてないとかういふの がその坊さんがいふには、耶 イエスが教へた所の宗 我も亦働く也」に へ、しかつべら 道々彼等は た協同

> でしく 造物の究竟原因などを数へず、人生の活動原因を道破したの 覺は此の大なる人間性 どいふ宗教に現代の宗教に化してゆかない中は、 宗教、時代から時代に渡つて 消える事の出來なかつたあの人間性 に結論にあらざる宗教、 併せて現代のそれを生んだ 過去のキリスト教を惡むのである。故 間性を蔑視する 界に冠絶したものだと信ずるのである。 である。之れ人間性の自覺である。 無智蒙昧 (Humanity) を見出した點に於いてのみ世 人間生活(life)としての宗教、 頑迷不靈なる現代のキリスト教を悪む 私はキリスト教 それだけ私は真實なる人 遂に人間 否イ 化 石 エスの

起るものだと痛切に 12 んで來た惡逆な血腥 ワットの言 信仰を考 7 るをえまいと思ふ。 から來る」 ト教に對してやるせなき革 此 相違 抑 或 の點 る時私は人間性 へ難き憤怒を感ずる。 するを遺憾 に於て先生の信仰と迁生 2 た時 を見出した。「人類の非道は過去 12 ふ言であ 12 存 かくて 感じた。 人間 或 い跡形を見る時にかく は人間生活 じます) る。 の悲劇 神の戦 私は 命 時に、 誰 的 過 要 ï は 現代流行 過去の 0 去 0 水 76 12 爲に、 固 卽 信仰と を有 0 或る書の 定宗 形骸 しない宗教 信 うと共 感ぜざ の信 に對 の大 教 仰 キリス 0 中 から 北 仰

するものである。さう信ずる。

ふから)

を證

明

するのだとい

ふ意味をイムプライ

その人の依る舊宗教 する。大變な物識ぶりであ 時でも亡んでをる。 で見るといふやうな口調であつた事を明か の眞 つまり固 理 る) 定し は最後 然し、 た教 0 それ 勝 會 利 0 持 らは だとい 12 續 記 カゴ 侗

カン

である。 い許りて、 ふ言葉でも解る通り、何時でも 亡ぶのではない。形として殘らな してをるのであ 然し余は思ふ、 實際亡んでからない證據には「何の時代にもあつた」事 何の時代にあつても、何時でも亡んで了ふとい る

然し何時の時代にもあったとい 性の本性を全うせんが為に の質在であり、 自分に起り、 や要求やは 決して何物の異象も見ずに、何神の宣託もなく極めて 故に前の私の先輩のいふた、何時でも亡んで了つた それらの思想 自分の考では真の宗教といふものは 結論であつてはならな 舊宗教の形骸を死守せんとする人は形を信じて 之を金城鐵壁 己が佛尊しとし。形を假象と見て 人間性の限りなき向上 つまりそれ 極めて自然の要求をなし、極めて自然と形をかくし 生命たらん らんが為に傾動として存し、生命ある人間が異の宗教の唯一のかたちであるのだ。異 固定した形は化石せなんだのである。 ふ事は實に痛快な事實では ない 10

私 は、「天路歴程」 如何にアイロ ニカルな對象ではないのですか。 を課外の教科書としてゐる現

、努力せる、

凝結した信係を有ため

各時代に渉れる人道の

y, 理

彼が

教會の棒を排して我が

衷に盛られ

る真

0

です。

と共に大道

に逸し去らなんだら、

彼の偉大は青

ならぬ 人間性を 有つた 人であつた

は逐

C

に門と横棒位で止

め

る事

4

な

かつた馬

大なる人格者エ

•Va

1

ソン

を見

7 0 試る

るがいい 能

> 0

彼れ

つ能は

おりし once born man といはれ

72

る崇高偉

に於 よ。 は せる牧師達が、 今の h である。 ても昂然 れる幾多の 理は我等に自由 **興理は我等に自由を與ふとは** 0 CK 脫 徒弟たる初代キリスト教徒の潑剌たる生氣を見 日々その真なるを知悉してをる。即ち、猶太敬よ 0 して、生きた眞理を抱いて走つたイエス、及其 街 教 近くは米國に於て未だ半世紀もすぎない V 問したい。 公會學校 て、彼の 、敗れの 尚それらよりも大きな事質に として我が確信を枉げなん 眞 IE 0 町を逃げ出さないのかと問ひたい。 何故 直 聖徒達 自由になった事實を見ても解るの を與へる事 な人達や國 ____ テ あ y 0) 12 アン ク 何故 リス は の教壇 敎 イエ 會 教會 チ 悔 から ひ改 ス p だ多くの自覺 0) カン にすら永く立 ら破門せら 詞 よつて我等 職 0 的 だが、 を解 やらに亡 13 S 過去 かれ 0

た優し さん為に世に來れりというたイエスの心を實現す 抗すべきだと思ふ。かくて子は父に背き、 出 のやうに私も私を priest にした母に盲從する事 明かに不共通な點が有つた事が解る筈である。そ に聖書を讀む人には必ず舊宗教に深き敬虔を有 るものと信ずるのです。 ありらる事 リアの子たるを信ずるが故に、かくの如き事 來ない。 い母と新らしい自覺に到達した子との問 又キリスト教會といふ母に對しても反 と思以又あつたと思ふのであ る。 劒を出 は 12

Nay I'm no moralizing preacher:

do not speak as priest or teacher:

Scarce know if I'm a Christian

But this I know: I am a man.—

生命に逆行せんとするかたちを流動せしめたい。 うせんが為に生きたいと切に願ふのである。而て 否や自ら知らない。たべ一個の人間たるを知るの みである。 ブラ ンド 然り日は一日と人間としての生活を全 は斯く叫んだ。私も亦基督教者たるや

繪

五

郎

ぐむだ。 いのに食ひ歩いた。電車の内で自分に觸れる總ての人を反抗の眼 をむいで睨み返した。そして何故睨んだかと後で悲しくなつて 涙 無闇に街を歩いてカフェからカフェ へと野獣の様に欲しくもな

くれるものなら藁でもいしから摑みたい。 もいり、暗示からでも悟りからでもいり。 たして貰ひたい。人からでも本からでも音樂からでも 芝居からで から病人を癒したそうだ。 生が鉄けて居る自分は何かに それを満 む氣が起らない。本は自分を拒んだ。キリストは生に滿ちて 居た 書は讀む氣になれない。德富健次郎の本を開いたが心を 靜めて讀 の様だ。自分は餓えて居る。飯にではない。心が餓えて居るのだ。 瓊つて居るだらうか。餓えた狼!喘きながら野心さ迷ふ 餓 深い顔の更けた事! こんな男にも未だ生きて待つに足る 幸福が 街頭の鏡に映じた自分の姿、懶い愚鈍な二つの眼が燃えて一皺の 本屋から本屋へと燃える眼を以て心の食物を探して 歩いた。聖 何かに縋りたい。助けて

溫い胸に抱かれて心ゆくばかり 泣きたい。自分は愛に餓えて居る。 いゝ。男でもいゝ。女でもいゝ。乞食でも犬でもいゝ。愛の大きく 餓えて居るのだと 氣が付いた。愛を得れば心が満される。自分は 自分が餓えて居るのは飯でも本でも 音樂でも無い。自分は愛に さうだ。誰れでもいい。愛してくれるなら誰でも

發展 向 F 0 12

芋の煮えたも ひふと 0 イ 攻 ŀ 术 ı であ ナ サリ 工 N め イ ガ サ を 13 y w る。 サ y 代 破 チ ウ 門し ŋ 2 K 0 ス 才 17 を 丰 0 3 2 御存 我輩 對し 預 と IJ たる、 追 獄に は ス 焼き、 即ち「汝自身の為に泣く」日 言者を 25 とないのであ をして言はしむれ ŀ て大なる憤怒を禁ずる能 殺 F 数は世を稱して罪の 丰 殺 IJ フ ĺ ス ツ ブ = た ŀ n ス る z 1 0 N る 丰 所謂 灰となし、 ---1 y 1 力 ば、 7 ス る を焚き、 を捕 ト毅 Œ 巻な 彼れ しき人を は な ŀ カジ らは 來た ず。 るイ りと N 术 ヴ

てない事を信ずる。 スト数が少しも質 のキリスト教を嘲る者は口を並べて、 知らなんだ 数が化してなるかな知る事が能るではないか。 人間生活、 である。 各勝利の祈をすいげたではな 我神の選帝なりと 値のない。空言にしか過ぎないといふやうな事を 。見よ彼等は 殺す勿れの神に向つて、嫉妬の神 を國の舊宗教が如何に御幣擔ぎであつたかを反 中、人間性、を疎外して 文明の進步を妨げなが即ち、歐洲戦闘は 蓉宗教の破産を意味するも キリスト数そのものい破壞と 如何にその外的物質的 か、人を殺し 歐洲戦争によつてキ 無能を語 なる A の國を るもの

は理

0 な

S

事 え

0

あ

る

それ

は

1

I.

ス

カゴ

カン

ら降

7

3

V

IJ

は必す敬虔

な

る母

であ

0

を以 る。

7

J. 7

ス

の大覺を齊しく見やうとする

たといふ舊宗教の説

明である。)我

か

輩

は 天

イ

J.

ス

から

敬愛するK先生

として在 自分 思い るキ す。 ブ 親 ります。 IJ も知る所 0 -70 て熱心 ランドの牧師 (1) 中 致 御存 カン ます。(とイ は想像 12 心中を思ふ時に、 リスト教を illi 12 彼 過 して今や個 市市 E つたら、 に非らず 0 時 12 秘 0 I. 傳道 世 12 如 劇 する。彼れが ス 0 0 0 く小生は 小 學校 劇 主 0 倘 通 を宿願とし 間 彼 運命であ は 10 性 評 をよく 人 舊教 7 中學時代 少くも 的 中に 0 0) 公 我 自覺 直 最 ブ を 如 はとの なに據 が生 ラ 何 丰 ちに心に 生 も敬虞なる家庭 12 6 12 7 n 丰 IJ 明 ン ます。 生以立 リス 評 ス つて を質現せんとし 立 0 7 ۴ L せる 青年 間 0 幼 7 0 ŀ に浮ぶも 百 年 をる 12 7 ŀ 0 如 年渝 世 9 期 短 < カジ カ> 1 擬 を新 7 い問 現 は ブ 12 年 6 72 代 我 セン 0 5 向 期 12 72 Z ざる と思 答は は らうと 多 穀 0 0 CA 34 0 は こてを 牧 彼 所 に送 IJ 137 0 舊 6 母

又各自個紹介を無りテー

プルス F.º 1

チが始まつた。

次に小松武治氏と藤田逸男氏の感想があつて 一同

學士森戸辰雄氏快辯を振つて次の様なことないはれた。 て現代の葬式など無意義な風習の改造を 主張された。それから法 教授谷津博士が例年の様に穩かな。態度で熱心に、最近の感想とし り勝な教界の事大主義に一大痛撃を加へた感がした。次に理科の たいと思つて心地よく出席されると評されたのは、兎もすれば起 者又奔走者たる學生の名を出したとは 名質相叶ひ若い氣焰に 次に岡田哲藏氏本年の會は例年の招牌を撤去して、 異質の發起

觸れ

が信仰の劣つた者とも 申されません。否、たい一人ある所にほん 少數であるのかもしれませんが、然し、この會に出席した方が强 考しなくて下宿の二階にごろして日る位ならば出るに 増した とは云 とに敬虔な信仰はあるのではないでせうか。かうして集つたにせ ちに信仰深い方であるとも申されませんし、又出て 來られない人 であつたのが本年は全く學生側の發起であると云ふので 出席者が して尠いやうに思はれます。これは或はこれまでは教授側の發起 して米國感想を話された。 「昨年 はありますが ことはありますまい。ですから出て來た人は——私もその一人で を聞く位のこと、思つて出て來ない人もあるかも 知れません。 深い信仰の言葉に接するのでもなく、稍高尚な世間話や、しや 一昨年とも私はこの會に出ましたけれど、今年は例年に比 へ私は決して出席の諸君を悪く云ふのではない。別に深い 中位の人とでも申しませうか。」とそれから一轉

> に送り、 機會となる所にも、この會の大なる意味があること、思ひます。 居りましたが、元來難しい理窟は大嬢ひな性分で何だか解りませ 中學時代はかの個性の尊重と開放とな 主義とする同志社の普通部 論があつたやうですけれど、かうして舊い友達が愉快に 語るよき て大變に愉快です。 んでした。今夜は久しく會はなかつた別の科の舊友とも會へまし 某氏 政治科三囘某氏――私は先程かち隅の方で先輩のお話を聞いて 私は三高を出まして只今は 獨法の一年でありますが 先刻來、 パイアスとかパイアスでないとか 議

ので、 怪しいこと、思はれます。時代に媚びる傾向が 義を聴くことであります。」はキビーへしてぬた。次に 來賓の皆川 四時間宛〇〇博士の〇法の講義に於て天皇教のくだし、しいお講 あるかと思ふと誠に嘆はしい。殊に私の最も嫌ひであるのは 毎週 ぞれ長短のテーブルスピーチを試みて、十時に散會した。〈HK生〉 牧師、富永牧師、小林牧師の談を初めとして學士、 近頃大學の教授や學生が鐵砲を墜つ稽古なしてゐるのは甚だ 自由の風を尊ぶと共に、また一面に於て 個人主義でありま 高等學校は自由教育を以て日本に名ある三高に送つたも 大學教授の中に 學生悉 くそれ

た。總での人が墓はしく思はれた。 が胸に溢れる程豐に漲ぎつた。街を行く總での人が、美しく 見えが胸に溢れる程豐に漲ぎつた。街を行く總での人が、美しく 見え

×

告的な短い文章の内に胸を貫く强い美しい歌を聞く。 下らない小説より新聞の三面の方がよほど 面白い。冷やかな報

_

人の方に傾いてしまふ事がよくある。それが爲に「結末のところで小説の中に悪い人と善い人が出る。何故だい 自分の同情が悪いは確に善人だ。泣く人が好きだ。

物足らの寂しさの内に置き去りにされる。

×

日よ輝け。花よ香れ。人よ愛に燃えよ。

×

る赤い色。これより美しい色を知らない。 晴れた大空にある空色。日を浴びた新絲の絲。若い人の 頬にあ

×

日本の文字は一部高級の人々の間のみに通ずる 文字だ。早く車上の文字は一部高級の人々の間のみに通ずる 文字を解放せ

或る學者が『聖書の様な本はすぐ解る様に書いてあると 威殿がなくなり 有難味が薄らぐ』と云った『現代語の聖書には威殿がななくなり 有難味が薄らぐ』と云った『現代語の聖書には威殿がななくなり 有難味が薄らぐ』と云った『現代語の聖書には威殿がない』とはよく聞く言葉だ。考物の様な難しい文句、金縁、羊の皮のに紫の衣を要しなかつた。詩人キリストは何んな、無智な人々にも解る様に卑近な譬を以て話した。

東大基督教信徒新年大會

毎年教授側登起で催される此會が、今年は學生側の登起で一月無量年教授側登起で催される此會が、今年は學生側の登起で名々大に學生が一堂に會して、教會と宗派を超越し自由な 態度で名々大に學店が一堂に會して、教會と宗派を超越し自由な 態度で名々大に學者が一堂に會して、教會と宗派を超越し自由な 態度で名々大に學生が一堂に食りないこと、思ふから、當夜の印象を 御紹介するのも無益であるまい。

いひ更に語を轉じて最近の實驗として 星島式旅行談(本誌前號所如く全く宗派を離れクリストの名の下に 馳せ参ずるのである」と先づ司會者星島二郎氏劈頭開會の趣意を 述べ「信徒大會といふ

の地に薄黄の絲で細く縫取りがしてあることでした。それは私が作つて變にかけてゐたものだつたの と云ったまゝどうしても用を申しません。その時ハッと氣がついたのは其の下げ髪のリボンが空色

です。

州に轉地する」と云つて訪ねた夜、大兄が好意から席を外してくれて、二人だけになつた時に かの方が正月の三日に、札幌の農科大學から歸省してゐた大兄を、「君が好きで每年夏避暑に行く遠

おくれ。胸が痛かつたら胸にまくのだ。必と痛みもうすらいでくれる。君の愛がこもつてゐるもの - そのリボンは大變に好きだ、空色に薄黄色なのはウエルテルの最後の服裝を思はせるよ。僕に

と申しました。私が

ウエルテルのやうになつて死んぢやいやよ。必とよくなつてね、夏には兄と一所なら私も連れ

て行つてもらへるかも知れません。

つたと、あの方の手紙に見えたからです。 CS ました。大變に兄思ひの方で、四月にお茶の水に入學したのをしばらく休學の決心で唯の看護に行 と云つて外して上げたそのリボンです。私はギックリ致してしまひました。すぐあの方の妹だと思

---あなたは、あの方のお妹さんではありませんか。

と申 しました。するとその時までどうしても默つてばかりゐた少女は大變に勢ひ込んで話し出しま

した。



愛を抱きて

井

好

光子より寥一

光子より寥二へ 下

たやうな顔をして十五ばかりの女の子が私を訪ねました。 ・・・・ 六月の初めの一日、私が預けられた青山の親戚の家に可愛い、しかし長い疲れのために青ざめ

と申したばかりをづくしてゐるのでした。

お家へ上つたらこちらですと云はれましたので珍りました。

――何方様からでございますか。

と訊ねても何とも答へません。

――何方にお合ひ致すのですか。

と申しますと

酒井様からてちらにお嫁にゐらつしやつてゐる方にです、あなたにです。

----- 74 -----

す。 歸 みる』と云ひ續けたま、、兄は夜の三時に、死……死に……ました。兄は私に たみと思へば惜しいけれど、あなたのだと思ふと穢はしいのです、穢はしいのです。だから私はふ 怨みに思って死にました。 ら私はからしてどなりました。上りませんでした。こゝは玄關でしたわね。私はもら一度どなりま とあの女の結婚した家の玄關へ立つてどなれ、決して上つて話してはならね』と申しました。だか あなた りと云ひました。だから私は歸ります、歸ります。 きつ・・・・とよ。きいつ・・・・とよ・・・・。そしてもうこんなリボンなんかいりません。兄さまのか あなたの・・・あなたの戀人である・・・私の兄さまはたつた一人の兄さまは・・・ あなたを怨んで ・怨んで死にました。・・・兄さんはお前さうさへ云へばあの女から何も聞かなくていゝ、すぐお カジ 殺したのです。私は死にません、私は死んだ兄さんに代つてあなたを怨みます。 私を一番愛してくれたたった一人の兄さまは死にました。あなたが ……私は兄さまの妹です、兄さまは 『俺は怨んで死んだ あなたを

踏みつけます。踏みつけます。

ま、馳け出し門の處まで行つてみました。見ると少女は一丁先さの停留場で電車に飛び乗つてしまい ばいでした。彼女は拭からともせずにそれまで話しました。少女は大聲に泣き出 らとも云はずにずんく歸り始めました。まだ何か云ひたげでした。然し少女の頰 さう云の切つて女の子はリボンを取つて地になげつけて踏みつけました。そして禮もしず、さよな 云へませんでした。門を出るまで見てゐましたがすぐに、私は丁度來てゐた來客の男下駄をは してもらそれ にも眼 にも涙 以上に いた

ど今は その 兄は、 12 0 兄の傍につゝましや 兄を た。 九 てあ なると俺を棄てたのだと思つたり、 は下さらな が必と打勝 とを話しておくれ、しかしあの女がお前が私の妹だと云ふことが解るまでは何も云つて い。このリボンを頭につけてゆけば必と解るにちがひないと云ひました。兄は にたかつた。あの女は俺を裏切つた、俺はあの女を死んでも怨みる、 か 頃計らずもあの女の愛に俺の胸はほぐれ初めたのだ。 んなに 棄てゝ御結婚なすつたことと思ひ始めました。兄は、 體にははるからと云つて私が止めるのも は それ 來ました。その夜兄は あの女は俺を裏切ったのだ。 吐 77 い、そうです。私はその妹です。兄はお前行つてあの女にお合ひ、そして兄さんの云つたこ なが 息 3 カジ つてお目に かつたのでせらか。 しばく ら物 運 通 命 ふやうな 力> の悪戲となってしまった。どうせ死ぬ體 なし かに座つてゐた、 書 かけますと云つて手紙が來たま、一枚も手紙 S 氣 い心になってゐた俺の 72 カゴ 手 してならなか 『あゝ十九日だ。年年前のこの夜、體 紙 それ 3 口に出して云つたりするやうにさへなりまし とる 戀を樂しめるだけ樂しんでおいて、 私が 十九日 兄の お手には入らなか べつた。 の夜だった。 苦しむ様子を見 聞かずに 胸に、 俺はあの女の愛を得た。今夜は思ひ出の夜だ。けれ 兄を隔てゝたゞ 『何れにせよ死ぬ體だ』と云って 日比谷の 兄はますく シ なら、あの女の愛を知らずに、 つたのですか。 るに ユベル 見か トの曲 音樂堂の秋更けた夜にあの女は が來ないのを心配し が一時大變に囘 俯向いたな、涙ぐんでわたあ ね もら 不安に て書いた 俺はあの女を死んでも怨 兄は の秋の夜空に消えてゆく 俺の しまひ な あなたに縁談が た。 體 る 手 ば 紙 復して、 カゴ 3 Ŧî. 死 12 77> 月の 12 9 は は 出 苦しまず でし 開 力> あ 病を押 L 2 な 封 ンると まし けな たが ある i

遲いのだとも思はれました。――丁度あなたがお歸りになつたと、給仕が云つた時、私はほんとに救 らとあさらめてしまつてゐたのです。考へてみれば日曜でしたのね。何か會でもあつて寮へお歸 す。五度目に電話をかけた十時には、もうこれでいけないなら、すべての計畫はすつかり駄目であら り解らないのに、女の身でとまどいでもしょうものなら、必と見付かるであらうと心配されますし、 へも知れないではあるまいと思はれたりして、私はあのあたりの豪端をぶらしくと歩いてゐたので りかが

はれたやうな気が

致したのです。

心をわけても貴くお慕はしく思ひました。 三里の路をとぼくと歩んで歸られたと、 の品川驛で、死ににゆく私をお見送りなされてから、あまりの悲しさのお心から、山の手の寮含まで 府津ゆきの汽車 つて 貴方はすぐに來て下さいました。どうしても東京を其夜の中に去らねばならないので、 私達二人は自動車に乗つて品川驛に來、其所から京濱電車の院線で橫濱に着き、 に乗りました。朝國府津につき、 あのしのびての散歩の朝、云はれました時、お深い愛のみ その H 0) 問時 に、遠州の海へ参りました。夜更け 夜二時 に發つ國 に依

井とした裏書の宿屋の名と、消印とをたよりに來られようとなさいましたのですね。『死ににゆく身の 胸に一點の曇りをもとゞめたくはない・・・・』ために卒業試験をも休んでお出で下されやうとなされた 台 心 海邊に立つて第一に書いて出した手紙は貴方へでした。町名も番地も書かず、たい、屋にてさか Ō に何 0 感 謝 が報いえませう。

私はすべてがらまくいつたと思ひました。ところが夕食後宿帳を持つて來た女中が、私の顔をしげ

親戚の家の門のすぐ前まで來るとすぐ私は千代やに云ひました。 した。母は千代やを一所につけて寄越しましたが、私はもはや青山の親戚へ歸るつもりはありません。 そのやうになってしまった家でさへしみんくと懐しうでざいました。母さまは何となく怪しむやうで げた方なのですもの。晝食をすますとすぐに親戚へ歸ると云つて家を出でました。最後かと思ふと、 たので郊外に行かれたのではないかと考へました。たい一人あなただけがお頼り出來 ぐに歸して書置の手紙を書いたりしました。あなたに電話をかけますと二度共留守でした。 決心を定めたの 私のそれからの心の動搖をお察し下さいませ。死こそがこの一切の償ひであると信じました。其の は六月の中旬頃でした。十七日の朝、青山の親戚の女中を附けて家へ歸り、 るとお信じ申上 日曜 女中はす だ

0 停留場までね 私もら近いから、お前すぐお歸り。暑いのに大變だつたね。今度は私が送つてあげてよ。そこ 78

17 た。いろく話してゐる中に夕方になりました。やつと別れてから飯田 って、神田に居る友を訪ねたのです。その友にだけはそれとなく最後の ことのやうに思はれました。千代やが電車に乗ると、 不安の心で過したでせう。一時も早く東京を去りたくはあるのに、どのやうにしてよいのかはつき かけました。貴方は留守でした。五度目にかけたのは十時でした。宥からそれまでの時間をどんな い企ての第 さうするの る決して初めていはなかたので、千代やはすこしも疑びはしませんでした。しかし怖ろ 一歩とはいへ、私にあのやうになじんでくれた小間使の少女をあざむくことがすまない 私は歸るやらに見せかけて、すぐ次の電車に乘 「橋で、 お別れをしたかつ 自働 電話を貴 72 方へ四度 0 でし

さんと一所に 方は私をよく理解して下さいました。お知せなされるやらな方ではございませんでした。 あつてはと思はせたのでせら、 三時に、 何と云ふ偶然でせう。 然し私が 死んだとも云ひませんでしたが、妹と一所と云ふ事がすぐに私にはあの方と解りました。 成 るたけ静 身も胸も冷へゆくために、亞砒酸を飲まらとした夜の二時に、亡き母の從弟の手に捕はれ 一人で來たことや、 るらしつて長くこの室に居られました」と答へました。女中はその カン な室をと云つて貸りた室は、それとなく女中に訊くと、「東京 ――あの方の死んだ室で、あの方の死んだ十九日の夜、あの方の死んだ夜の そして大切な客である兄への氣轉として家 種々の様子や、手紙 (遺書)を書いてゐるが、女中をもしや萬 へ電報を打 カン ら學生 人 カジ 病 つた 氣であ 0 0 お 方 2 カゴ 50 お妹

0 留守に、家へ参りました。 の夜來た、 と申し上げてはならないのでせうか。 かれるのに、お別れ 私は途 杜に語ることが 父は最早や私に會つてはくれませい。 亡き母 この最後まで書きました。 出來たのでした。あの時のお訪ねは、やはり私にお會ひ下されやうとなされたため の従弟の家にかくまはれて、さみしさのつれ に家へお訪ねなされた貴方にお眼にかっれ、一朝は、忍び そして丁度、しばらくの旅に、三保の濱邊に、貴さ孤 その 勘當 後の私のことは御 も同様です。 青山 承 んには散 知 0 の事です。は 親 戚 歩な ~ 44 ても 为当 5 獨 はや参れ は 0 淋 すり 父の 生活 しく私を迎 5 12 を求 社 め 出 てゆ み社 勤

しげと見入つて、訊ねるのでした。

失禮ではございますが、東京からではございませんでせらか。 と思はず答へてしまひました。すると女中は微笑みながら、

さら云はれた時に私はギックリ致しました。死ににゆく身が誰にも知られないやうに(たゞ貴方一 あの、もしかしましたら、あなたは――區――町の酒井様の方ではございませんでせうか。

屋 に申した事からも推察して、兄が避暑勉强の時の宿屋號などをも思ひ合せて、必と家の方から其の宿 家の方へお知らせなされ、私がもの時から遠州の海がなつかしい、なつかしいと、青山の家の良さん た時なのでするの。あまりの駭さに、私はもら必と貴方が、「恩人の家」にすまないと思ひかへして、 うに、書からとする變名を、橫濱市本牧町二○三、平民、女教師、佐野春代、二十二と繰り返して**る** 人は別として)忍びに忍んで來たつもりなのを、宿帳を持つて來られた時には、お教へ下さいましたや へ電報を打つたのではないかと思つてしまひました。

の心になってしまひました。しかし女中の次の言葉は全く案外でした。 い、おうです。 と私は答へてしまひました。一切が知れてしまつたと思ふと、全くやぶれかぶれ

年も一昨年もお兄様には大變に長らくねらしつて下さいまして、ほんとに御親切にして 頂 ―初めからさうではないかと思いましたが、やはり御兄妹はよく似たものでございますわね。昨

あゝ何と云ふ偶然だつたでせう。私はこうして本名を書かなければなりませんでした。やはり、貴

80

ナル とに力を覺えますのです。あなたを懷ひ、慕はしく思ふ度に私には、貴方に對して主のみ足に價高さ い愛のことに就ては、何なりとお数へ下さいませ。時がありましたらお言葉を頂かせて下さい、ほん ダの油をぬり、豊かな髪の毛を以て拭うたベタニアの婦の心がしみんくと偲ばれます。

こさないこのよこれ

を
さな
くて
つみ
を
知
ら
ず

むねにまくらして

むづかりては手にゆられし

母

はなみだかわくまなく

むかし忘れしか

あきはにはのつゆ

いのると知らずや

たのよくお歌ひなされたさんび歌の一節で結ばれやうとは思ひませんでした。

隣りの神學校の禮拜堂から聞こえるさんび歌の聲です。今夜は日曜の夜なのです。この手紙があな

50 神と運命との意志に敬虔なあくがれの心を床しんで居ります。常々のお考へのやうに、一人の愛を抱 **今ゐらせられる三保のあたりがお慕しらございます。海邊に自炊なされて何かと不便もございませ** ---さらした孤獨の中に、神と人類との愛を懐ひ、真理と權威とを求められるあなたを偲んで、

いて、愛を抱いて、萬人の愛の路を、雄々しくお進みなされて下さい。 すべての上にみめぐみあらせませ。

九一五・九・二四――駒込の教会にて

戀も、再びとは願ひません。戀は罪惡です、とげられぬ戀は罪惡です。 なりませね。私には最早家もありませね、親もありませね、はらからもありませね。まして、変も、 私を「恩人の家の人」として、「人としての友」としてのお交りなど、聖い清い貴方に、私は望んでは て死 と云はれませらか、それ以上です。申されません、申されません、何とも申されないのでございます。 る心ともなれないのです。 最早父は父ではありませぬ。母は母ならぬ母です。妹にはまだ何も解りません。そして大兄でさへ に得 そんな妹はもら妹とは思はね」と云ふのです。父も、 な かつた身には、 悲しいでせらか。それ以上です。寂しいでせらか。それ以上です。苦しい 再び死を企てる勇氣もありません。神のみ手にすが 母も、兄も、愛もさへない身、 つて、 一切をお任せす 死なうとし

0 渡 院 が床しく思はれるのはそんな時です。私にもし懺悔の座に立つ時が許されるならば、私は あることを必ずお祈り致すことを忘れは致しませんでせう。 り其のトラピス でも時々はお祈りの心が慕はしうございます。いつぞやお話にきゝました北海道のトラピスト修道 貴いそして怖ろしいお仕事と、 ŀ 修道院に入つて麻の 聖服を 身につけることでせう。朝夕の祈りには あなたと
区様との愛の御生活の上に、神様の、御恵みと御祝 私は 北 海道 なた 福と 12

82

やうにしてまたお教へして頂くことが出來ませらかしら・・・。神樣のみ惠みのことや、イエス樣の深 母 の從弟の家でかきます。窓から見ると向に大銀杏の樹のある、あのみ社の杜が見えます。 大變に長 い手紙になりました。貴き御勉學の時間をささました事をお許し下さい。この手紙はその あの

口

借

口惜し

v

私を斯んなに

た

0

は

誰

路に假穣の手枕 周章 狼 狽 殆 を旅人に見付かつたといふ んど 爲す所を 知らな かつた。 調子

ならなっ う言ひますまいね、 愧 づべきてつた あんな事 は

强く口吻 720 始めた。うつ僚 と落ちた。 冷し 見詰めた。 3 い風が二人の間を吹いた、木 は if 、イブは痛 威 ると其所に圓い 嚴の そして彼 Ü あ て居たアダム る顔付 まし n い顔をし の心臓 0 美し 靜 ムは突如る 12 7 7 V の實 虹 A" アダムの 2, 0) 玄 跡 ブ かが い皷 0 ボ 押 Tr 一残し 頰 動 顏 タリ 除け 3

どうし 五六間 ひつゝ た?えッ? アグ 彼 方 2 17 は非常な 去つた。 侗 で言 力に彈 は 無 V カン 0) だ? n た様

ない事 隠す! 力> ? から 隱す! あ る 0) だ。全體 何で二人の間 何 所 から にすら際さねば 斯んな智慧が なら 來

5 7 泣 30 き出 2 は l 狂 つて た 居る。 イブは 大地 12 倒 n 7

> と藻掻 天の一方を でせら、誰でせら?) いて 睨 居 みつ たが、俄に彼れは 叫 恐ろし

い顔付で、

(サタナ! サタナ!

イブは、 さなが ら死の 色で あ 大な筝を

の棘を以 ふ事の 居 一破れ た吾 アダムは憤然として其の偉 なは、 た、 為に苦し は て迎へられるのだ。 調の 平和 サタナに智慧の征名 はれた、 むんだ。 吾が行 生きる事の為に額に汗しいだ。そして吾々は一生食 く人生は荆 矢を射込まれ で神と共 加棘と薊と 0 歩んで

7 働 くんん だ。

食つて生きる

と狡猾 に歸 V. これ る 欺 な智慧とを手足の 力了 0) いて隠して、そして食つて生きて偖 人間 夫れだけ 0 前 途だ。 だ、 如 夫 あ n く使役せね ゝ夫 カバ 為 n 13 だ は けだ 虚 ば ならな 13 元 應

プよ!

つて生きて 苦んで子 を産 死 さんで、 んで塵になる! 萬 夫さっと これ 命 分 カゴ もら今か 從 0

荒

息 暖 を吐 V 麗 かな S 日 樹蔭 に立 つて居た 1 ブ は 思 は

す

まア でせら? 私 共 は どうして彼様 は頂気 亚龙 12 愼 まし 3 無 カ> 0 た

じ出 JF: して今まで 小聲 め した。 った どなく流 0 重に呟い 足 6 6 そし 行 何 た O) n カン 0 720 72 憚 彼 7 0 りし る所 彼 n 12 32 事 た事 無 0 であると、 眼》 ζ カゴ ·思想 和 カン らは熱 7 實に人間・ 靜 力> 12 何 S 考 0 くらいしくだった 際す とし た。 るは感 7 所 0 411 2 カジ

> 冲 郎

遽 5 は 眞 まに で工 蒼 感 デン 75 Ŀ カゴ 顏 i 色を 0) 方 た。そし して悄然と立つ て妻 0 720 事 つて居 カジ 歸 氣 つて見ればイブ 懸りになつて、 る。

どら 72 0 だ?

ふ事を覺えた 恥かしいつて? D た 恥 1 かし 能はまた今日始め 7 悲し V とい

のよ (さら! では矢張 3 あ 73 たも 智慧が 御 南 6 なな る

話 何 語 無く赤裸々に な が途切 り合 會話 林 カジ 天來の 檎 0 は 0 た。 段 老樹の彼方と此方とに n 聲 R そし 楽し 進 として其の んで、 て來た 7 7 男女ななかり グ 事 胸 2. を躍 0 かが 12 實に これ は 隠れ 叫 5 才 びを發し ブ 愧 中 の言 た。 づべ 6 的 6 何 き所以 潜からど 3. 0 n って大き 隱 語 かず す を 會 所

カゴ

頭

流

行く水を見

て

居た

. 時 に踞

何

だ

力>

知らな

v

天られ

邊

から

足の尖まで、

針で突通されたや

カコ

し今といふ今、

7

グ

2

は

未だ嘗

7

溪端の石に

らた

事

カゴ

な

カン

た。

まつ

ちよろ 0

照や 作 カゴ 6 0 行 け 額 の前 h ノラ 失敗 肥え T に押寄せて 12 2 を羊 燃え 72 居 蔓る。 太つた其 ~ 失望、 の様に 戲 が n 神吟きつった 來て、 m 斯 焦慮 見えた。 0 0 くとは 羊 畑には天折した果實の日で、あらゆる苦惱の皺が自 通 花も b 力 知 そし イン 過 僅 5 得開 Ť Va 力> 12 た、 アベ 0 T 生きて 心 グ カン 暢えき ラ な ルは 0 中 1 S 皺 12 居 で萎縮ん る光景 カジ は 其 自 眼 17 分 熊 不 力当

疋 とに 畠 カ 1 カン 6 紅点 ン が物心 m. に染 を出 ん んで仰向に倒れて心づいて見ると、 L 7 死 んで居 る 7 居 7 る。 ~ jν は 小 羊 自 分 カジ 五 0)

眩

つた。

られ

7

死た

7 H F ッし 1 ダ 力 2 AII. 馸 1 0 け を越え山を超えて足に任せて走つた、 7 V 25 ン ブは矢庭に 染 登 居 天 72 は を仰 つた つた。 3 狂 まし 犬 1 m 0 V そし でキ 沙 如 カン V アベ 、啼聲 くに カジ 1 して振返 日 力 Ħ ルを抱 0 野 ŀ イ 12 樣 中を定せ > ンとして眼 ア は其様な国 Z. 17 0 いて泣き崩折れ 輝 て見るとア 2 76 V 1 拔 て見えた ばか ブも走せつ け 事は知らな t らい ~ 向 そし w 2 た。 チ 0

> 7 父や 考 知ら た。 母が 73 と答 -7 ~ よう w は 如 兄 何 は l 必ず と尋 弟 ね Z 7 保 7 私

72 12 力 併し 别 3 ば いなら m 2 年6 自 は 己 自 ¥2 S. S. Ē 力 0 イ 事 護 一業 ふ法 ン 衞 の理性 12 0 別れ 法 は 律 無 は 7 3 V 設 村 制定 ___ 々と感 カン L ら村 た。 情 そし 彷徨 征 7 5 父

な自 て居 樣 2 9 iv S た の血 呪は て居ると、 7 12 政 73> 日熱 行 る 分 思 6 + ZX はれ 0 > 17 ζ n 地 0 迸 0) 一來る り出 敵 た カゴ 聲 V あゝ自分は 0 さる だ、 の様 狂 6 ! た。そしてカ ザ 詛 る W だらら。 南 に思 Ú 渴 彼等 足 9 559? は " n 沙を、 18 リ人 0 ۷ はれ 裏 72 此 は 濕はすを喜ぶやうに、 力 め 弟な 1 世 皆な劔を懐に 0 7 イ > た。 を何 天 燗た ガ 1 誰 ンは踊 一般し 踏 n は悶絶した。 76 ブリくと飲 かに数はれなきやアー 久し 地も世 いみ込 るやらな 時まで、 た私吃 り上つて叫んだ。 T い旱魃で乾き 一界の 其 て私 度と何。 10 砂 併し乍ら .所 音 んで居る 原 弟 8 を 12 々も皆 カジ カン 步行 >,, 0 7 仇 傷 切

だ。 で遊 ブ 0 _ 男だよ女の實 + リと笑つ h ŃI. 0 は 12 夢 妆物 居 力ゴ た 小 中 12 だだしてし た。 ت S 可 流 愛 73 0 第 P m 2 300 半 7 Z" を なムは顳顬をピクーを紅にしたのを見て を撲り殺して其皮を一野を横切つた、そし 人者 7 此 だ 0 2" 運 命 0 開 くさせな 皮を引剝 拓 て漢端 イブ は

13

W

成 立

カゴ

6

小

聲で呟い

72

男芸は女の無 と自覺 13. 落 つた 無 焰 は 7 寂さ血 H カン 0 75 変の空氣が深 2 0 劒 n 2 た ども 村落 禁ぜら とイ カジ 不 を荒凉な生活 斷 ブ に鎖さめ 12 等 は n 720 驷 8 0 心轉し \mathcal{H} 過 覺め 付 n 本 去 けら 7 7 75 0 た 6 居 居 指 追 開 る る T n 12 想 彼 o は 拓 7 智慧 等 居る S 7 L T, 5 て行 デ 非 は 罪 戀 常 > とぼ 自覺 くより外 ふ者 0 0 12 緣於悲 口 0 0 なし L H 17 村 握

> ようと企 んでい 志 晃 と阻 彼は 0 カ 自己 唔し -水 1 72 声 ・・と追 7 0 は で、盛んに土を耕し種を蒔 腕二本で偉大な農業家 天 うて も好結果を得な 性 怜 移 悧 轉 10 す 進 る 取 野 0 かつた。 蠻 氣 12 になって 0 富 h S た 6 を 力ご 厚 朗 居

イ

效 自 弟 營 0) 0 r 7 行 力 ~" ル ζ 36 は 無 薄 S 0 野 四 51 で、一 其 0 牧 向 才 気も 0 事 業 無 H カゴ 段 n は獨 なと

な かつ 21 73 インの心は、 た。 K 萎縮 K で行 畑 3 0 作 0 を 物 見 かず 7 蝗 12 一時の 食 N R. 4 荒 3 乳

淺 吹 平 17 w きな なりし 野 カゴ 7 野 夏 0 から 原 なると カジ ちょこくと歩行 S 12 B 嫉 善 群 盛 5 妬 部 偸 < りに L 肥え て飛 0 快 カン 心 3 5 鳅 しく た羊 を肩 步 ぶ蝗を見 6 張 T 姿を見 群羊 かが げ 6 裂け -V 十疋 計 0) 1 0 來る ようとし た 王者とな 的 歸 時 7 6 一十疋、 居 途 ると、 薄 71 た。 イ 0 野 怨 優さ 7 呂 的 ~ 彼方だ 口笛 0 L i アベ い顔 0)

め 7 ~ w 此 カゴ 沂 0 づ 想劣な心 30 72 時 を鎖 73 1 1 ようとし 12 大 樹 た 0) 隆 焰

カゴ

彼

0

天職

うあつ

た。

終

た。 0

> 働 從

S 2

2

食つ

て子を育てる

これ 過

潛

年

0

n

0

は

A

0

男

見で

あ B

2

た。

-

年と經に生

0

12 72

7

r

15

2 3 0

1

ブ

總て

去

示な入 しるつ て思た のあ 飢る を此實 る 3 かる。 威本 著思書 者のを の記彩 願念る で録も

、基盛學り者間 る自濟遂督な等眞少のれ 己をに教るに理に心 惱の實自に近於とし靈者 め小威らも代て光て的が るなしキ新思之明哀實信 リし想をの愁験仰 に苦以スても發探のをの キ鬪てト基著見究囚記告 リと歡の督者すにふせ白 ス天喜生教をる從るるで トよ法命に救能ひ處もあ のり悦をもはは科とのる

救のの探滿ずず學な

濟多境り足

昨成のにた教是 巨又の也に 真那 进 判 ク 17 I ス 7 箱 入 定 僧 九 與 + 錢 送 料

耶る理れ 80 か蘇め光 当の也 真結心 英傳 實合胸看說蘇 年電 °迫 深あ 6 思真 闘場ら 揚はれ人 極んか 來め 數る 。自る管 全由彼此 0 血に れ何と よ敬等 解り虔 E を歳大を努得 膽知 ふ稿のらのる るを奇ず現所 曾 も改異 のむな束の正 八 あ るる縛世育

て交に界に 錯累に開 せ取陳 囘冷ら戻し `頭れさた る而とずんる

錢

りあ十

定 美 四 價 百 料 装 + 八 箱 五 + 頁 錢 餘 錢 入 判

大にてせ舊か藝てる 目丁五町河平區町麴市京東 堂陽洛 町番話電 番四ーカ〇二京東替振

中付

(た汗して働いた。
は實に此の大罪人カインを殺す者はカインよりもは實に此の大罪人カインを殺す者はカインよりもは實に此の大罪人カインを殺す者はカインよりもは實に此の大罪人カインを殺す者はカインよりもは事に此の大罪人カインを殺す者はカインよりもに汗して働いた。

講演會を聽く

K O 生

次に下村宏氏が「大國民の豫度と海外思想の扶殖」につひて、したの事をやつてゐるのは、全く日本人に 大國民の豫度がなく、競争がひどくなつて 死亡率ばかりふえる。これではならね。行く筋がなければ格別世界にはまだ!、人口の 稀薄な所がある。それにも拘はらず、こんなせ・こましい島の中に 閉ぢこもつて、蝸牛にも拘はらず、こんなせ・こましい島の中に 閉ぢこもつて、蝸牛にも拘はらず、こんなせ・こましい島の中に 閉ぢこもつて、したの事をやつてゐるのは、全く日本人に 大國民の豫度と海外思想の扶殖」につひて、して海外思想が扶殖されてゐないためである。

不真面目であるかな比較して壇を下りた。頭のよい人である。なった涎を拭ひもあへず、しきりと 應用化學研究の必要を耽く。よく條理の 通った話である。最後に英國議院接聽のことを話し、よく條理の 通った話である。最後に英國議院接聽のことを話し、よく條理の 通った話である。最後に英國議院接聽のことを話し、よく條理の 通った話である。最後に英國議院接聽のことを話し、よく條理の 通った話である。最後に英國議院接聽のことを話し、よく條理の 通った話である。

88

その又次は上品なお殿様風の阪谷芳郎氏で、法學者らしい論理をの又次は上品なお殿様風の阪谷芳郎氏で、 遠國皇太子御夫婦が別と述べられる。なんでもサラジヤボに於て 墺國皇太子御夫婦が殺されたこと、又獨逸がベルギーの中立な 破つたことなどを形殺されたこと、又獨逸がベルギーの中立な 破つたことなどを形みされたこと、之について墺國政府がセルヴイヤに對して 無理なるべく従つて戦争もしなくてすむであらうと云ふ。

を重れて國民の思想を指導せられんことを望む。 が痛む。空席がよほど出來た。吾人は歸一協會が 度々かヽる會合が痛む。空席がよほど出來た。吾人は歸一協會が 度々かヽる會合

東京三番町三十番地(市ケ谷見附內 林 院長診察月、 峰 間 兩 副 長 は 目 午 前 下 及木 當 院 午 に在 後 勤 時

院 神 電話ちがさき一番 番明六一番東洋 河 奈川縣 野 長 診 高 察 橋 醫學 土 5 兩 曜 崎 博士 副 日午 海 長 濱 南 後 は 從 目 下當院 停車場半 入院診察應需 12 1 在 里 院

明日と言はず直ぐ御實驗あれ

0

年乃

せ效心又經進

もに果從者の の理動來の增

に想物世累加

し的の間増は

症を入れ堪激

る

此

薬

有異 10

效に

なし

劑病 を院

儿野

幾謙

結

果

近

年

12

る

ž

器一轉生

りり心筆 「觸にの

苦ち神の

為其

む顯 研

す確 0 る真結は患口

適

`藥

經る

衰弱と

人め、ル

勿今三種

論囘ン賣

常初一

遊

服しる狩 用廣藥野

ば病製長

精患 出狩

盛頒 多吾

なち實先

6以、驗生

してにが

クをな

すく

れ同

力者

をに

にめ

慾神な

17

6

性

卓效 は

あ

干。退

り世

弱と ク症人

主治效能 効般

精

衰

貧血

W

代

電

話

神

病 神

後

衰 衰

弱 弱

女

殖

器

曈 1)

害

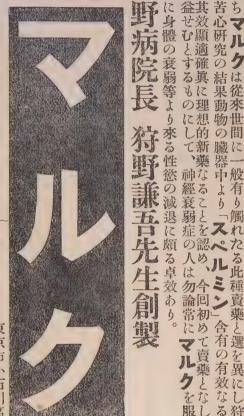
婦

と

ス

デ

神一經一衰一弱 精一力一增一淮



町

M

批

金粒

几

圓

五.

錢

圓

#

錢

粉粉

金壹

圓

理 店 東京 東 京 市 त्त 小 神 11

町 東京三 通

て新騰には益 中般た存ま ざをる餘 覺め、 身を過勞する

(中付二)

初版再版忽賣切れ

時代の要求は 如此偉大 なる研究力を與 1: 4)

内容の豊富に 見に如かず乞ふ最寄書店にて實物貴覽あれ にして 現代國民の精讀を要するは 世既に定評あり

東京神田東京堂大阪瓦町盛文館

敎 雜 刊 誌

は 明 治 年 7 旣 往 餘 年 0 歷 史 を 有 する 外一年一每 本 國ケケ 邦 行年年部 木 ケ金二 金金曜

年

金圓圓三二

++

圓錢錢錢行

五發

(0) 刊 誌 な 4 基 督 敎 界最

は

淮

步

的

基

督

致

0

立

場

ょ

4)

時

事

問

題

to

評

論

月

つ

最

新

0

知

識

1-

依

9

(0)1-永の 學 は 渍 盘 號 眞 理 敎 敎 To 勢 先 闡 輩 を 明 滿 す 載 說 3 す あ 內 0 外 名 0 論 訊 7 新 淮 思 想 家 0 研 鑚 清 新 な 3

誌 は な 仰 修內 糧 聖 書 研 0 手 引とし 信 徒 家 庭 0 讀 物 好 滴 な

編 本輯 喜 代 宮 藏 111 金 H 0 助 兩 氏小 每崎 號弘 執道 筆 渡瀨 在常 兩 牧 記 理 者 虎 次 0 五. を 氏 助 協 力

本 誌

0

見

本

は

往

復

は

カジ

きに

7

御

申

越次

第

無

代進呈す

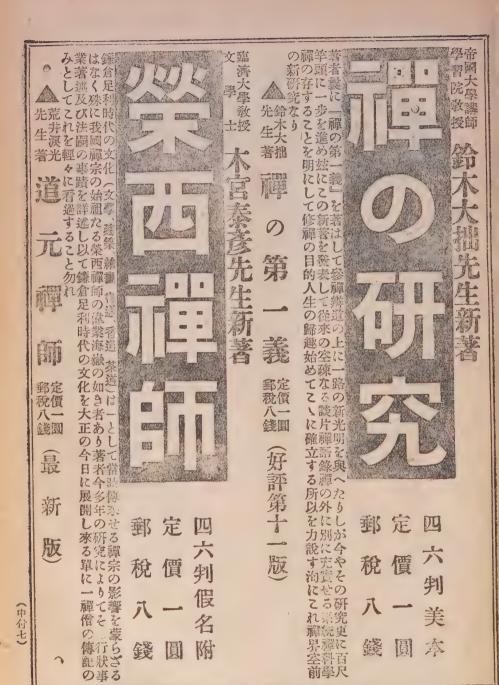
~

發 行 所

大阪 基市 B

貯

(中付四)



郵 税 錢五 五 錢 厘

田

0

るまで

原

m

佐

緒

插

平井、中

対、工藤エト

ープラ

でしてのゲエテを論

醫福

學大

博教授

小

川

政

修

0

短刀

沖

野

岩

鄓

Beyond

sea

陶

山

務

無

明〈長篇小說〉

加

藤

夫

願

原

佐

緒



加

藤

夫

はて造な叉叉是

こ彼せり二人れ

のがん彼と道筆

るのこのたたの

る真勞立於於に

かに主てる徹で ら生義新心底熱ずきのな的的心

る提を披疑神

者げ創瀝家家

地番三町來矢區込牛市京東 番一六八四二京東替振

實働

ちけて於

立し絶の他り てて壁間面一

月 號

宇宙 偶 然 の構 か 必 論 然 造 か、 ·醫學士 木 兒 村 玉

昌

英君に答

ر ا ا

加

藤

夫

省

教陸

大 授學

岡

田

哲

藏

武者小路 實篤

君加藤

生

一命哲學

批

評

英

義

雄

野

村

[提

晔

中付六)

三刃 識

米國たより

辰村に於ける教育

一小學校

其 のは であ て居 カゴ の兒童とを以て成 1 小 n 1) ツ る。 る。 兒童は七つの歳 組 學校長で其の上に三人の學務委員があると云 が學校であ 名のみで、 ッ 教師を吟味 チ 弘 チ Æ である。教員は皆師範學校卒業生である。 てれ ン Æ アー つの校舍は大抵 F* ンドの小學校は六つの は 0 る。 人家が、まばらに離れ i 小學校長は ッを持つて居る人である。 一寸した處に小家が立つて居る、 7 つて居る この六つの學校を監督するの 雇ふかと云ふ事が から八ヶ年間强制教育を 一人の 0 ハーバード大學のマス であ る。 教師 分 敎 校舎と云ふ 分る。 て居 と四十人位 場 に分 以て如 る 凡 から 力> n

ならぬ

更に

私

は

V

7

ツ

ク

ス

の小

學校

を紹介しなけ

n

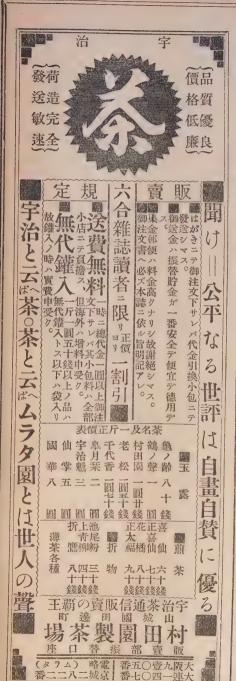
は

コロンビナ 高 橋 清 吾

界的に大きく兒童を教育するの 1 0) る カ> 仕 ら給する事になって居る。 1 小 0 學校長に意見を尋ねて見たが、 組みで充分だと云つて 6 jν の本 南 つて、 領 であ 若し ると重ね 貧 家ならば 居 て申 られ 3 から アメ 120 初 M 此 0 120 ij な 0) 學 村 2 用 カ ~ 12 品品 く世 は を村 5

校 長 場 0 0 12 0 分数場とを以 る事 仕組みと 園 V 意見を尋ねて觀ると田舎の子供は ノッ ない事と學校園 の必要が が出 ク ス 來ると言 殆 んど同 0 な て居 小 V 學 はれ じで るの 校は 自 なるも 然 の天 あ 6 ___ 0 南 00 3 が只異 る。 地 うな 中 で 我が 央小 體 V 操 事 な 學校 故 運 る 26 6 唱 動 あ 鄉 0 歌 場 は 利 る や學 運 も教 府 校 動





則要貳錢郵券規

商文科科

年學壹

名百凡

専門學校令に據り修業年限四ヶ年 (入學資格)中學校甲種商業學校卒業 (入學資格)中學校甲種商業學校卒業 (入學資格)中學校甲種商業學校卒業 (入)日出身校成績出願順番考査人物試験 に)

午猶

迄 豫

報号に詳細は

ればならない。 も教育の根本義を忘れて居る。現在の制度には 飽く迄反對しなけ に居る時も色々と教育當局者に意見を尋ねたのであつた。 けれど て彼等の人格を發揚する補助者となつて欲しいのである。 局並びに父兄母姊は善く兒童天賦の素質心了解する事に努め、 私は行政並びに地方制度が私の専門とする所であるから、 教育者も餘り形式教育のみに聞くなると不具者と 日本

中 校

なり反

て世を誤るものとなるから餘程注意して貰いたのである。

校に行く學生の 54 F めには村 ヅ 1 である。 ぶべき事ではあるまいか。 9. ツ 次に中等教育に就いて云 120 度に達する事が A 負擔して居るの あ R 1 る でを高 けれ が では脛費を惜しまないのである。 72 如何 ットでは村から中學校、女學校、 どるい める事が其の根本に横つて居る急務 月謝と汽車賃とを村と縣とで牛分 12 であ 生懸 出來ない日本農村の 俊才教育、 3 命 ふならば、 17 日本農村を数ふ道は幾 稼 教育を獎勵せんがた 並 V びに でも、 ŋ 一般青年の ッ 相當な生 中流以 必ず學 チ æ >

曲 の天地に必行くばかりの力試しをなさしむる唯 教育と云 ふものは窮民の子女を引き上げて、自

> なり、 を採用し、 以下の子女にも中等教育を授くる道を講じては如 何であ の道である。農村では役場の書記二三人滅ずる ららか 小學教員を少しく減ずるなり 以て貧富平等となでは行かずとも中 この 制

などの れた筈であるが 考へでは農村の改良は出來ね。老人も岩 村に普及したいものであ の事に就 矢張村で初めなければいけない。其れから講義録 では極く貧家の子女でも中學講義なり、 一様に新 宮城縣には先年俊才教育に對する制度が設けら 力をつくさなければならり 通信敵授を受けて居る。 しい衣を着て、村のため國のた いて云は 、縣の事業のみでは不可能である、 なければならぬ る。 現狀維持の 0 これも是非我 -(カジ 南 、米國 保守的 農學 めに い著 0) も皆 カジ 誦

的 陸的の態度である。 の國民性が保守的なのであるから、今後學ぶべき事は進步的、 東北の田舍には引込み思案の人が多いが、一體日本人其のもの の精神を繼ぎ足せと云ふのである。 保守的な處を築てよと云ふのではない、

0)

教育制度である。あれでは反つて怠惰の青年男女を養成する事と 中等教育獎勵は刻下の急務であるが、 兹に困る。事は日本の中等

ものであつた。
をのであつた。
をのであった。
をのある米國の田舎では澤山の富豪の邸宅があ

山あるのである。 は勿論農村父兄諸君に大に考へて貰ひたい事が澤 離つて日本の小學校を觀ると私は小學校當局者

たならば其の結果はどうであらう。
童を一定の實驗室に入れて一定の型で教育を施し
童を一定の實驗室ではない。若し田舎の兒

兄の 其れは彼れ獨 る様 て居る 獨逸教 小學校長 17 で 作るがために農村の兒童を犠牲として顧み のであ 育法 あ 50 る。 か の弊害は今や我が農村 今日 罪にあらず、實に社會、殊に父 統計や報告を監督官 0 日 本に澤山 ありとすれ 0 聴の 隅 をも 氣 ば、 にス 5

應じて其の力を發展せしむる教授法を講ずべきで榮轉するのみを念とせず、専心、兒童等の特色にて必とせず、神の心を以て自己の心とし、徒らにて然りである。小學當局者たるもの自己の心を以て然りである。外に初等教育に於い

様に努力すべきである。 念を拂ひ、絶えず兒童教育に家庭的の力を添へるある。而して父兄等は宜しく小學教育者に尊敬の

事質は永續する事であらう。明する不朽の事實である。今後とても恐らくこの明する不朽の事實である。今後とても恐らくこの

る、 の流 る必要が 何を苦んで趣味の教育だとか稱する學校園を設 要を認めないのである。 雄大なる天地の開ける處、 都市の小學校ならば兎も角、 れ、小魚遊 ある 0) ぶ邊りは農村兒童 であ 3 カ>? 野花咲き聞れ、小川 運動 0 田舎には毫も必 場も 天 地 6 りであ あ る。

事になつたのである。 零するに日本従來の教育法や 都會兒童の成績品を真似る結果が、學校の當局が都市の教育法や 都會兒童の成績品を真似る結果が、學校の當局が都市の教育法や 都會兒童の成績品を真似る結果が、

この點に於いて田舎は田舎、

都會は都合であると

云ふ米國

て貰ひたいものである。兒童は器械ではないのであるから 小學當あるにもせよ、もう少し經營法を代へて經濟的 にやる方法を採つあるにもせよ、もう少し經營法を代へて經濟的 にやる方法を採つ者の主義を學ぶのが我が教育界の急務でなければならぬ。

12 る。 20 敎 17 掛 育 建 制 22 ^ 7 あ 8 度 除 賞 る 0 0 U 餘 去 た 4 6 7 は S あ 以 未 だ る T 新 栅 農 國 N 村 民 去 0 6 0 人 礎 n を K 73 固 72 S る 15 0) る 3 6 は 0 大 あ

3

あ

る

村 青 年

幹部 0) 開 出 カジ 6 過 席 其 論 カン あ L 6 面 るゝ T あ 國 す 3 爭 N 0 L 0 る。このグ カジ 中 青 る。 青 た 綱 る 0 論 會 カン n 年男女 央に 0 領 カゴ る をする カゴ 年 カゴ 叉は カゴ 村 其 男 中 0 6 新 只一 青 例 あ 6 時 0 4 R あ レン ると云 年 0 是云 で、 從 あ 間 內 面 る ŦI から 青 會 2 百 農 る。 半 旺 來 17 ヂ 年會 違 は 書 主 3 で 有 h 私 0 Vo は 青 D 終 は 0) E ふ大 3 日 12 益 日 毎 農 紹 0 鷄 1. から 本 年 本 15 W るとダ 週 て農事 介、 米 は 仕 0 會に 6 談 0 科 1 12 水 掛 米 大學 國 其 は 愉 餇 セ 話 曜 懇話 H 至 國 n 加 是 育 ツ 快 2 カゴ 日 改 Ó 體 12 Ł 非 澤 法 出 þ な ス ^ 0 は 餘 良策 3 る様 身の 0 と云 12 Ш 12 趣 カゴ 2 夜、公會堂 0 就 か 0 あ グ 6 味 初 あ ふ様 に關 農 カゴ h V 異 77 種 深 女 9 V V ン あ ~ 夫 5 i た 7 3 0 る な 意 B ヂ する る 其 チ 12 會 0 75 ٤ 事 見 12 0) 6 0 夜 0 V 或

> 先し 共濟 る。 敎 容 Va 12 催 見 力> 當 育を受け 2 n 易 0 事 25 カゴ 農產 6 當 あ る 7 0 12 0 6 る ح 恩典 入 會 あ 事 る る 一物品 東 0 會 は は 0 0 る。 72 共 6 6 た 種 12 2 清 許 浴 濟 あ 郡 評 0 m あ 會 年 す 會 また る。 25 會 3 る 3 3 0 12 B n 0 カゴ 様な E 私 品 蓝 中 性 郡 な 日 等教 力する様 質 立 V 本 0 評 をも 3 23 3 12 0 品 會 うで 育 採 異 0 6 評 カゴ あ 76 を了 帶 6 豐 あ 會 Ź 5 る あ 12 3 2 CK カゴ 農村 1 n 私 7 0 る 7 0 年 會 72 た 居 なけ 扩 日 カゴ 青 るい 本 各 0 12 0 S 度 主 3 6 n 種 專 新 车 催 等 3 入 會 首 體 0 0 高 る 改 カゴ 6 6 カゴ 員 S 發 開 あ 良 は

女も、 間に少しも逕庭がないのであると云ふ、 はれざるも、 なる 共に其の理想は遠大であり、 て家庭のため村のため郡のため一生を勢作に送らんとする 青年男 學校であり、 **倶に倶に神の使命を果して居るものであり、** 是れ、 若し青年にして真に神の道を踏んで行くものである 共に同じ成功の道に向つて進むものであり、 知識萬能の教育を避けて人格中心主 女學校であり、 ・活躍せんとする青年も狹く田舎にあ 名が著はれるも或は田舎にあつて 顋 農學校であり、 不撓の確信を持たしめる 師範學校であ 厳くも狭くも 義に歸らな 、其の

三圖書館

て欲しいのである。

7 國 ふと云ふ仕 3 人に管理を賴み、 P 私人 ある本の多くは 館 で學ぶべきものは前者 ット 次 12 (勿論村立であるが 圖 0) 0) 家の 圖 小說 書館 組みであ 館 0 類 間若 は 事 カジ 年々 別 農業や で てくば に建 主 る。 南 で 百 る) が あつた。 自治政治 0 弗 かい V 物を持つ 制 あ ノツ 以 間 度で った。 Ŀ を借 リッ ク 0) ある。 新 らて其 12 ス て居らな チ 關 には らし けれども Æ する ン 備へ附け 虚の 大きな闘 V 1. 本 p B 我 家 を買 1. 或 0 カジ 0) l

日本の農村では何か新らしい事業を初める時に

とし 設備 必ず先 が其れで修養出來れば良いの れまいと、其んなことは問題にならぬ。 てん な て事を初める様では が完全し き考へは づ建 物 7 取 77> らと云 縣 り去らね から X 表彰される事 考へ n ばならぬ。 かっくな であ かが あ 表彰 る様 る。 また 3 され 問 唯 6 題 圖 3> 書 は 0 る É カジ 的 R

的に出 は 12 國 べき事である。 るにしても先づ官を頭 りの留學生や農商 民は餘 H 本の 民より怜悧だと云ふ骸 T 貴い 政府は餘 りに官尊 た 政府は V 0) りに 民 學主 務、 で あ 12 自分達の 中 內務省 央集 る。 置く事とな 義 であ 語 私 權 る結果 を 0 は 機關であると積 主義 聞 視 S 察員 るっ つも文部 6 は、 あ 6 甚 カ> ら官 だ 何を 省 恥 H 木 極 南

らば、 は 12 カゞ か。何れ 真 相 專心文明 なれないのである。 實に失敬な言 に神と國 助 彼等は須 ζ 12 る程 進 もせよ國 度 步 民 までに進 とに 0) らく國民 であ 72 、對す 民 め る。 カゴ 努力すべ る責任 真に國 自 まなければ真の大國民と の幸福を以 主の を 精神 4 民 感じ の公僕 6 12 て彼等の は て、 充ち、 **đ**) 6 共 るま 4) 12 るた 共 吏

活を苦 途を選ば とな 謂 るとい はまだ真 6 あ ッ苦し ららら。 幸 0 2 7 福 7 7 な生活を欲する心とである。 生活を L ふことは い人生を生きてゐる人があるならば、 むもの 僕は 實 なけれ y ŋ 12 IJ ス 顧 月 ŀ フ ス ŋ でなければなら 人類 0 ばならぬ b K 4 3 足跡を踏 0 ス てどこに + b のうらに サラリイを貰つ を愛 字架 0 真實に 7 ĩ 12 T リス つけ カン あ てねるのでは らて Ýą. 7 或 トを愛する心 る て、 僕等は乞丐と リス 最 Z 自分よりもよ カン は富 も悲 トを 何れ 相當に な ī め 自分 る者 一変す V. い生 カ> 溫 カジ

0 * 2 5 V 脱ぎ捨 心 個 衣 の人 でを着 を動 は六十七十 ح に僕等が 人 0 7 カ> 17 那 こその L 對 腹 12 ク た L に充つだけの糧を得てゐる。 ŋ Ö 7 >" 老人 550 どれ ス A トを愛す R だけ 25 かが 0 荷車 僕は一度だつて自分 持てる凡べてを 與へたことは 0 を挽 やさ るとい L いてゐる。 ふならば V 言葉や 捨てな 僕 僕 0 0

僕等は みは の悲し di ŀ w 6 刹 みであ ス VQ. ŀ 僕等 イ 人の 自分 12 は 悲しみ 2 n カジ ではない。 7 きな 僕等す この 悲

> 身者 な は T S 9 N 君 が乞丐となることが 僕は 17 1 n 儀等 リス 日本 は乞丐になるだけの のクリス トを愛 くする できたらと思 ŀ 信 B 徒 0 0 となること 55 覺悟 Ŧ なく 人 は でき 0

僕等の 言は な姿は確 を聯想せずに T ク カジ 君 ŋ なかった。彼れは剣を齎したのであった。僕 7 劍 ス 1 13 ŀ Vo カン 0 は平 臺北 鈍 に君の心に深 は居 高 いてとを想 架 0 和を地 町外れ られ 索 0 13 に下さんがために來た パ から眺 は V ラ V ツ 何 13 物 V " 12 カン た では居 八中央山 を與 72 72 へて ŀ られな JV 脈 75 0 ス るに とは 雄 ŀ 大 は 1

冬の ヌ 1 お n つたとい 3 る 耳 カン 君 問 が出 ら間 トカジ カジ 12 强い に 一酸され 僕は 集まつて淺草の寺で法會を行 、ム通 3 ほ な てとを言 んとうに < 知 三四四 72 6 カゴ 翌る 0) あ あ 0 知 0 5 何らなる た。 7 たの 目 人やら先輩やらを失つ 疑惑 6 は。 少か あ より疑 2 72 だららの #1 ·學問 月ば 感 M カコ 代 君 つたの と迷 50 0 カゴ 亡くな]] た。 ラ 2 13 2 ス

H 敬虔なご ある。 祈 6 聲に 耳傾むけないでは居られ な

5

T

風 たく拜見した。 が强 京都からのたよりも、 てねた。 办 つた ので、 君が門司出帆の 君 石の航海 神戸からの葉書もあ もさぞかしと遙 É は東京 でも生憎 かに うか

572 場あ の暗 72 上に貧しい晩餐をすました。君が國 て君と二人の時と同 君 一人で君 たりに行つてゐるころだと思ひながら、 君をステー が東京を立 い煉瓦の建物の のために淋し シ つたのは近でろにない寒い日だ 3 \sim じやらに なかには に見送つてから僕はまた例 い乾杯を擧げた。 あ いつて行つた。 の古 府津 ぼけた卓子の カン そし 僕は 御殿 0

田 鳳

いことであらうとは想はな 人の友人を旅に送るといふことがこんなに寂 かつた。

時も二人の心を底まで打ち明けたと思ふことはな られしいことはなかつた。 かつた。 逢つた時には僕等は恐ろしく沈默であった。 けれども沈默で決れた時はど後になって 何

間が一人でゐることが必ずしも真實な生き方であ 膽さを寧ろあはれに思ふ。 機もなくして多くの人々がホ るとは想はない。けれども何の理解もなく、何の動 おもへば耐らなく淋しくなることが も僕等のこの獨身者の生活が何時までついくかと 0 はあるまい。僕は何時もさう思つてゐる。けれど 獨身者の特權として友人を懷しむ心ほど尊 ームを築いて行く ある。 僕は人 V 36

リス 僕 の心 ŀ には のやうな獨身者の生活を欲する心と、 今二つの思念が鬪 つて るる。 それ 所

人と話す氣にもなれなかつた。

度も室の

扉口

覗

て行つた。

今夜ばか

りは老

ク

いけな カゴ

つた。 から

あの老人が

下

から上つて來て幾

すつかり暮れて了つた。僕はそれでも電燈

な青年にな 木 林を歩 犬吠崎 < 刻まれて行く。 7 は 0 S 滅 つた。 た 21 CK ア て行く、 æ 涼 僕等の __ S 波 力 3 0 追 吹 音 た 億も 10 V カゴ 苦 た 風 老 片 0 S 追 足 B S 億 た 0 5 で 137 0 みが 年 は 訪 は立派 な n 72

ける宮崎光子女史

に於ても「諸君は單に ક 3 は氏一人に限らず、實に天下の 教學に携る者は皆然りである。氏 常に善を愛し、之を行ひ之を人に説く態度を諒とするが、 する者は即ち並に居る宮崎その者である」と叫んだ。記者は氏が 諸君と諸君の 胸中に求めんとする者とは異つて居る。 其求めんと んこと
を望む。私は唯人間の爲さればなられ善を爲せと言ふだけ を既に聴いて居る。氏は常に此豫言者な信でよと叫ぶ。當目の說敬 とは知已であつて、氏の謂ゆる「自己禮拜及び自己祈禱」なる信僚 氏は火を燎き、女史の巡懷談から一場の説教を試みた。記者は氏 女史の油繪を揚げ、花を立て、前に柩を安置し、敬主宮崎虎之助 である。然るに之を爲して居る者は 世界の何處に居るか。實際の .及んで良人と善く海内に傳道して雄辯を振ひ、赤貧と 戦 氏を以て 誇大妄想狂者として信ぜざる得ない。光子女史は幼に 專にし、自己一人を以て聖者と心得るならば、 先づ吾々の 豫言者であることを信じなければならぬ。 氏獨り之 みを以て豫言者と稱する 態度を非とする。荷も斯の如くする者 、逆境に人と爲り、風に宮崎氏の 歸依者であつた。其妻と 者 は 天下冷笑の裡に三十二歳を一期として仆れた。けれども 女史の葬儀に列して 神生教の儀式を觀るを得た。中央に 同情だけで無く進んで此豫言者を信ぜられ 吾々は 遺憾なが 心が病魔 氏自身 なる

> 子に傳へんとする者である。〈評論子〉 の當を得た者であつて、女史が世の悖徳汚行の所謂名土を良人と 祭ある生涯であつたかを吾人は祝福すると共に、 之れな 天下の して現實の虚榮を盡す身分に生れたよりも、 つて止まざる不屈不撓の人格を信ずることを得たのは、 史 P 縱令宮崎氏 の教旨に誤謬があるにも いてなっ 如何に人生に於て 氏 能く の善を

ける加藤弘之博

じ、法律學上では 强者の権利を主張し、宗教上では無宗教者であった事は世人の熟知する所である。常に書見に親み、進作に勉め、の野に大い」と云ふやうな事を進くし、利己心を認めるけれども利己主義では無いが、博士が明かに立志傳中の人であつたが、今や 此博士が現の自序傳の中に「一匹夫にして宮中席に於て 公徒の上に別するの身となつたとは 恐懼に堪へないが、自分は勉強の治果に別するの身となつたとは 恐懼に堪へないが、自分は勉強の治果に別するの身となったとは 恐懼に堪へないが、自分は勉強の治果に別するの身となったとは 恐懼に堪へないが、自分は勉強の治果に別するの身となったとは 恐懼に堪へないが、自分は勉強の治果に別するの身となったとは 恐懼に地へないが、自分は勉強の治果に別するの身となったとも とこれであるとでは、一個大き者であると、「大き者」」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」」と、「大き者」」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」」と、「大き者」と、「大き者」」と、「大き者」」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」」と、「大き者」」と、「大き者」、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」」と、「大き者」と、「大き者」と、「大き者」、「大き者」、「大き者」と、「大き者」、「大き者」」と、「大き者」、「大きるるる。」、「大きるる」 肌であつて本邦に於ける 獨逸學者の嚆矢であつた。博士は哲學上 制度に多大の貢獻を爲した 教育家であるが、其性格は飽迄も では進化論に根柢する唯物論を奉じ、倫理學上では 利己主義を泰 | 學最初の總長に擧げられ、後二囘總長に再任され、我國の 大學 一の塾に入り、 蘭學を 主と して洋學を修めたが、明治十年帝 博士 は 天保八年の生れであった。夙に江戸に 遊學して佐久間

Ď で 77 5 表 逢 た SI 分 逢へ カン 0 を S つた。 とい 調 つた な と思 S 氏 な 1 カ> 0 2 12 È カン カジ 0 2 JU 瘦 僕は 友 た。 -7 2 6 6 $\mp i$ せた 1 72 75 何 南 H 2 N カゴ 7 時 72 0 0 削 た姿を描 Ł 出 7) 0 で、 72 0 0 岡 らで 12 た 汽 夜 12 Ш 0) 重 生 カジ ح 0 去 12 やら分 淋 で I 汽 僧 0 年 S 72 12 生僧 冬の i る I 車 僕 0 ~ 氏 夏 10 カジ を T 東京 これ 5 他 休 東 氏 送る な 暇 出 0 京 カゴ を立 も明 5 12 驛 V ことも 0 7 は で 18 つたで H で、 是 訣 3 る 訪 こと 東京 12 非 n ね 6 時 泽 0 72 1

懷

71> T 神 カン 5 0) ぎり 5 2 V 祈 おら 他 的 力ン 君 6 12 は 0 1 ź そし ¥2 僕 神 6 彼 だ 等 あ 12 n 創 65 ょ 12 T 0 10 カゴ 作 b 臘 彼 周 9 うと、それ 3 家 7 病 圍 7 n ゝぐる前 聽 7 な 0 25 V る言 る 彼 貧 は カン n 多 n < る カゴ は S 6 葉 祈 滇 鞭 0) 6 は ほ 豫 2 E 打 6 à 0 た 心 8 言 5 n 悲 n 罵る 一者た 5, 0 か 叫 E 0 V では 5 计 >" CK 12 3 尚 n 6 カジ な 0) ども な 立 あ 12 は カジ 貧 寂 30 る あ

> た。 人 0 傷 R 12 僕 み は を 鞭 彼 知 打 32 0 た 等 は る 肿 僕 ۶ 者 17 は (1) 力 感 悲 は 謝 す L 6 み T 3 F 鞭 祝 多 打 < 福 T る 0 72 0 鞭 6 V 打 あ T 3

悲し を想ふ で歩 7 L T 0 でし た 君 カン V V あ 0 72 春 1 た まふやうな 0) ツ 日 カゴ 夜を を 來 か 武 IV ゲ 720 想 0 藏 。想ふ 亦 2 野 ----0 H 散 フ 0 集を 7 南 春の 春 3 想 0) 花 カジ 30 吳 病 來 カン Ł n は Ħ 72 湯 た 0 た S 男を 寂 路 河 窓 n E ころ 原 * L 想ふ 想 12 カゴ S を僕 春 飛 0 緒 CK カゴ 更 雜 出 は 25 來 らに 木 it

とを記 逝 原 71> 0 3 悲 カン 奥 T カン 72 n 3 5 君 720 彼 h 着 憶 S 0 思 弘 S L 彼 た 女 君 W 7 0) 0 出 日 3 は 喬 た る 澁 F 0 6 6 谷 12 木 てとを忘 7 n あ 祝 0 0 650 老人 家 12 南 福 12 あ 0 そし 祝 喬 n カゴ n 亡く 福 木 な 罄 T 3 南 0 V 僕等 な n 下 で h 0 5 あ 0 家 遺 n 12 5 50 を遺 72 72 骨 夜 7 10 かご 0 小 田

T 君 君 かず V つて 年 間 は 多 仰 13 時 ζ 0 僕 間 は 42 彼 カン n 青 と二人であ 年 Ł 7 雜 6

T

君

僕

は

多く

0

人

R

によつて

與

5

る

行

義

持つて

居

る

なる 高 2 な 0 ることはそれ あ 7 カゴ る 1) る 者とな 神 3 5 ことであ 12 6 莊 初 ので 聖の めて 對抗 故 史 7 嚴 った 組 12 1 0 な あ B 過 n 成 3 ガ る 織 JE. 6 る神 教徒 程 ば る 理 1 0 的 的 ス チ 9 6 を逐 # カゴ 想 0 2 に於て 教會 1 基 0 4 あ の信 肺 n 0 吾 奴 督 永 る 行 は 72 0) 偉大なる 人は彼 ずる所 說 隷 教 遠 カン を立 惠 することは卽 に既 とな 5 又歷 0 0 實 戦争 組 F L 織 特權 ての 22 12 る 12 史 歷 7 質ね 内 すべ 史 表 t てとで 0 0 歷 # 0 軍 毅 は は n に入る 史 舞 72 7 は 5 n 隊 な 會 21 的 あ 神 神 臺 V て居るとこ 0 0) 於 0) 12 二三の 人は る。 什 譯 原 は 0 7 12 前申 兵卒と 意 あ 6 2 專 0) 渉し てれ 志 る 額 12 0 0 疑 與 最 B 惡 玥 6 大

0

大

S

7,

る事

業

は

歷

定

-

皆

2

0

訓

練

3

初 如 る 7 カ> 抑 的 4 居た 半政 0 彼の 理 睿 治 想 教 敎 9 的 0 中 會 なる國 一歩を譲 建 12 0 設者 理 含まし 際 想 は 的 0 公教 7 社 基 め 或 7 督 會 置 教徒 0 會 335 成 20 カジ 實 た V. 本 を 際 來 カン V 初 Ŀ 0 め 今 狸 m 味 論 想 かう あ をも 5 JE る 6 老 南 統 カゴ

7

は

有

力

で

はなな

V

そは

寧ろ

敦

曾

0)

理

想

そ

0

望ん と争 とを なら でも L 计 13 0) 再 7 22 基 CK 現 現存 えの ども 知った 救 は、 2 だであ 督 7 世 + 数 その 叉 は IF. 0 主 は 2 世 不 敎 な 基 ららと 0 者 小必要なる 下 會 5 界秩 n 出 は 督 カジ ば 現 17 は 存 序 3 2 附 V 彼 2 事だと が數千 300 彼はた 望 花 4 は 0 n 加 さら 存 することが T' をなし 現 4 在 ^ T 年間 代 L は カゴ それは 300 L 保 主 カ> た に公 と主 義 B な た J 續するとい カン る 者 虚妄であ も基 9 敎 > V は 張 たと 唯 15 會 する。 ことで 香に ば 0) 0 3 15 5 條 あ 進 3 在

を得 は教 る中 0 反 0 あ 徒 漸 1 一方に又哲學的 を無慈 央集權 會 な 次世 切の る カン 2 0) 力> とを った 變 な 俗 减 悲 化 カゴ 的 望 76 專 勢力を得來れること、 6 を希望す に根絶せ 、即ち異教徒の 0 制政治等 2 T 6 歴史家は公教 0) A 議 は 敵會 る る 不 論 者 は H ح ہے は 生存 加 6 史 能 迷信に對する譲歩、そ かが 聖 南 1: その 13 會 76 競 6 3 Ł 争 る ことを望み 0 0) と異 教權 受け 組 堅 S 0 2 為 實 織 に に對 7 0 1 め 發達せ 居 72 防 する る Z 止

か制度主義か

(下)

木

百

可見 同 る 3 伊 傾 工 ることは 太 向 ズ ふことでは 制 22 を 0 あ 利 1 男爵 度 3 教 從 ツ 0 な 力> 組 250 なし 會 主 俗權 ŀ つて カゴ 織 は 義 典家等 3 5 を絕對的 實に自 ふてとを大膽に宣 的 に行 な フ 0) すべて たな 宗教 論 で カ> 二 使する 居 理 2 1 いといる自由 0 6 0 カジ る 12 間 た ゲ 0 には 必 他 17 非 N 変を確 最後 流行 神 0 は宗 ことは つにしてしまは 而 JE. 秘 して伊・ 教をも廢滅 家 切を無視 12 するところ 敎 彼 丽し 明 信 75 E 的 して る 敎 太利 は にいいけ 法皇の 25 T 0 居る 辯護 及 に歸 3 居る。これ 0) 拘 ても Ó CK うとする 獨逸ジ らず、 では せし 一人で 13 權 मा 市市 見不 i v かって 力を 3 あ 的

'n ばならぬ カゴ 基 督 と主張する一團 敎 徒 た らんとする 0 考は 12 教會 純粹にし 員 6

を喚

び 益

す 外

0

である。

それ

は

文訓 犧

練 及

と協 CK

利

以 起

0

原

因

カン 5

自己

性

獻

身

の道 ら吾 みが では み、 最 在 といったでは それを組 36 T 一德、社 强力なる 3 2 ないか。それ 得よう。制度の中に と我自 他の第三は 純 6 なけ は 7 > 南 なる に除外例をなすと こゝに神 織する個 3 會國家等は と思 最 n 5 晡 原因 3 ば な 0 秘 いかな 高 なら 心靈とを見んと欲 主 30 は 聖なる 一義者 尚 だのに單に 人の か。 となるも 3 85 なる精 衆 經驗てそ其基本となるも 神と心靈との外に何物か存 るるも にとりて 團 何の それ 社 才 的 神 會 1 0 V のをも見ん 以共通の 神聖があらうぞ。組織 であ ふの となすて は 0 組 ガ 卽 理 織 は ス る。 す。 想 カン 3 ち チ 誠 經驗であつて、 至 0 れたる舊教 ン 1/2 との とは 體 微 この二 怪 ですら「 出 精 L 自己 る働 來る な 神 つの カゴ

26 出 は る 來 7 中 な 人 中 0) を 見 カゴ ·C S 重 較 前 派 73 居 12 H h H 0 る ず 服 7 屬 32 所 n 水 す は 0) る E 12 難 件 3 75 E. 别 人 殺 3 6 5 人 格 理 公 2 南 12 8 教 る る す 12 V2 0) 1 考 唑 41 0 0 生 m 3 制 格 S n 度 2 活 な る 7 0 際 4 以 + 真 居 12 7 2 於 義 相 0 3 T 7. 雷 は 3 de 證 0 結 例 吾 カジ 知 な 檢 75 る 8 他 果 22 人 は す 2 0 は とは és 吾 見 基 公 2 吾 5 1 す 督

> を費 熱心 کے 3 カン 助 徒 6 4 0) 6 見 な 3 36 カ> 3 73 な 彼 0 解 る 4 5 書 會 カゴ 8 15 n 自 は 物 4 員 30 d を書 懷 身 6 基 或 な 0 督 力》 叉 は 知 < 1 H 教 2 1 n 吾 者 め n E 73 は 0 人 6 を 3 基 人 S カジ あ す 11-格 督 何 6 等 得 め 12 > 验 17 就 的 信 T 3 力> な 居 6 ス 耆 0 V 3 宗 n 殺 6 0 1 た 137 72 授 あ 敪 30 5 は 的 2 カン 6 3 理 得 專 验 考 想 な 知 S 理 慮 n カゴ Ŀ

チ 間 カン は 典 最 は 的 は 單 型型 選 13 當 1 題 基 4 3 それ 擇 世 6 督 TE 12 を 重 N S 3 だ あ 有 取 n 0 風 敎 相 待 る。 を 所 6 0 カゴ る Ħ 15 5 な 扶 置 俗 た 謂 7 V Ě 割 化 和 111 > 助 何 < 精 7 S は 界 3 15 救 或 h 場 は 神 カン S 合 15 的 2 y 0) は 6 は 同 n 5 宗 n 75 朋 大 說 力 6 る 6 相 n 3 敎 公 2 K あ 耳 主 2 Va は E 2 救 は 義 カン 致 5 穀 る とで 彼 す 濟 カジ 0) 會 彼 及 n 會 等 祭 CK 1 1 間 j 0) 新 j カン 協 7 題 あ 6 あ 0 ば 独 h 12 は 3 1 4 0 徒 以 取 同 10 0 J. 教 新 1 36 0) h 行 望 最 層 0 12 7 は 爲 6 敎 ガ 終 は 當 教 T 重 0) à 徘 ス 重 とって 長 理 3 0 1 大 大 0 3 絵 想 宗 カゴ 論 サ 13 唐 敘

72

22

ょ

0)

Th 0 0)

保

32 は

現

代

0) カゴ

倫

理

見 的 あ n

1

6

7

0

Z

保

た 格

3

>

ところ

0

易

0

6 35

态 0 0

加

之、

Z

0

定

0 30

A

0)

典型 敘

F 僧

優

n 的 或 敎

る 牛 は 的

とす 6

73

そに

22

は 史

よら

3 7

公

0) た 張 1 12

院

活

引

でき出

すと 的 1 6 ح

は 道

車

E 神

羅 聖と

公

た 於

6

0

要

宋

3 3

方 72 敎

面

T

實際 Ē

あ

3 n

0 る 尿 す

カン

L

な

カゴ 馬

5

3 教 2

主 13

護

精

前申

書

カン

¥2

よ

h る

7 庫 何 5

是認

n 大 别

P 會 存

うなそん

75 要

劣

點

カゴ

智慧

7 12 15 は

は 0

0) L

排

他 S 0 義

的

求 迤 0 向

カゴ

史

0

裁 0 督

缃

專

等

Lit.

13

カン 假

は F

~ は 問

7 基 は

分

ば h

S

制

度 3

主 制

義

者 +

定

数 H

あ

S

2

度

2

1

7 0 建 L 神 た 0 ス V りとは た 所 合 設 洣 を以 ŀ ス 不 0 75 0 27 丰 達 > 1 5 一義等 過ぎ 信 滅 者 方 世 赤 ì で = 創 あ ば 層詐 0 ラ 性 n 法 7 る 浩 F カジ 集 哲 或 所 た 理 な る 0 世 w 0) 政 12 學 まさ 積 爲 は 謂 欺 る 想 政 治 る S 6 つ。 再 的 B 策 12 的 ラ カン とせる 的 る あ テ 公教 j 12 8 ラ 0 組 露 織 CK 12 9 < 信 册 以 生 出 F 0 ン + 織 カジ 敎 字 彼等 俗 7 1 存 層 何 7 仰 0 7 は 12 理 で自己 羅 等 哲 歪 架 政 反宗 過 せ 會 0 無 的 想 る 策 學 馬 め カゴ 21 IE. 時 法 權 0 2 保 帝 6 持 代 力 形 史 0 基 統 0 0) 力> 政 督 續 H 者 12 跡 F 存 n 12 あ 的 弘 部分 2 6 比 12 勢 0 硬 0) L 再 る な 0 0 0 暴 宗 3 為 化 72 手 CK L 於 力 0) を n 3 教 0 12 7 虐 た 地 故 7 め 理 奴 2 異 は . は m 1 6 6 F 12 12 鯲 想 隷 カン 層殘 南 は 2 基 基 敎 た 9 0 3 12 戰 鵩 2 T 徒 る な 0 知 出 督 採 督 N 周 3 續 7 < 本 火 顯 殺 酷 n 0) 御 0 M 12 燎 精 來 IJ 2 な L 0 12 3 Vt 都

義

6

よう

1

す カゴ る 耳 政 ラ 12 何 策 相 談議 0 一共通 決 特 3 色は 0) 目 0 き問 つみであ 的 毅 は教 題 カゴ なく、 育 る 生 氣 25 農民 を失 對 死せ す る 3 0 2 決 多 迷 72 哲 死 信 3 學 0 8 0 塱 戰 利 6

せ

吾

F

問題 道 力了 H 0) 關 獲 7 6 あ あ n n 2 0 る 7 加 どうし < 羅 カン 馬 耳 帝 7 其 國 確 # 0 實 虐 義 な 政 0 3 6 特 超 あ 色 自 る は 然 チ 0 カン 才 知 > 7 3 V チ 潮 檢 -10 1 0

とは せる 義者 を最 教 G. 立 12 中 カン 來 42 フ IE. 7 會 富 12 12 Ł は 牛 出 は 才 後 恐 72 備 あ 72 敎 法 疑 2 存 來 0 15 皇全 ると し 6 n な ~ 女 0 る は 敵 力 フ 5 ず だ 發 E 7 6 L 權 7 > 權 3 n 達 1 行 V 3 12 H ことで 斯 精 然 72 カン は 0 論 對 ゲ 0 を 26 n 73 線 者 < す 靈 る 6 IV w ___ とそ な E" ح H 內 0 あ 0 る 男 17 6 3 3 る。 あ 如 忠 鄮 生 n n 21 0 含方 之を より 實に その 真 ば 組 る は る 3 0 彼等 連命 なら 0 6 制 > 織 以 吾 害 傳 A 基 法 L 度 督 外 全權 12 V2 igo 人 0 7 丰 丽 敬 3 共 は 0) 7 は 可 除 義 教 2 羅 能 運 私 間 論 32 7 12 < 0 强 命 今後 斷 L 馬 8 何等 13 萠 は 者 公敦 < を見 な 公敦 る 芽 13 < 現 13 B 0 3 るこ 2 代 カン 會 3 2 7 0) M 身 續 B.

- 100 -

5 將 否 全

民 他 高 N 0 組 6 T る 丽 ラ 爲 織 2 27 0 0) S 模範 於 點 標 3 1 め n は * 進 150 12 12 n る 職 7 於 3 た 行 利 は 6 0 手 あ 7 保 12 益 敘 2 輿 而 僧 於て る は 會 論 L 25 職 2 あ B 渡 0 1 る 0 カ> 0 7 影響は らに その 其 無 3 居 存 < は カン n る 僧 否 在 0 だ 读 公 B 如 た 思 職 力> 慮 カゴ は Ġ 子 殆 殺 は は 國 0 < 家 徒 男 6 排 政 供 h n で 極 等は 女間 あ 策 どかせ カゴ あ な 0) 0 斥 文 7 道 す る は S 2 0 朋 7 教 大 H 0) 疑 德 る Ł 會 方 0 特 n 消 は 的 見 善 ころ は 7 12 E 德 し 社 n 員 文 有 敎 良 3 會 ば 等 0) S 害 比 な 3 阴 育 的 12 6 3 その 較 改 よく 平 t 0 7 0) 伯 4, Ti 革 祇 111 イ 氣 h

を 訓 朋 h 25 は 階 非 練 25 せら U 未 級 n 固 だ道 3 1Z は す な 靈 る 前 行 體 る カゴ 德 6 系 は 秘 は > 制 利 的 學 丰 n 22 般 る B 紧 益 22 度 義 者 迷 2 0) 丰 あ 知 は 信 0 L 風 る 識 義 習 制 的 0 内 的 他 7 最 限 的 宗 新 居 6 12 指 3 0 穀 る あ 6 敎 遺 强 光 Ì 徒 カゴ 3 あ ら尊 * 0 b 故 る 9 地 الم は 方 要 6 而 す 敬 優 依 あ 0 L ス 賴 港 7 る す 0 7 る 2 1 7 薄 ラ Λ す 4 士 H は る 居 な 0 要 埔市 0) る 32 あ カジ 3 E 文 學 沈 故 -C1.

ع

ح

え

12

0

2

3

n

る

カゴ

常

6

あ

る

る

とを とし 0 < 精 持 穀 知 12 傳 領 或 カン は 的 說 利 野 利 神 0 7 種 て宗 用 7 未 無 神 的 制 を 0 益 12 K 精 居 失 開 0 於 視 聖 L 度 人 カゴ 道 な 敎 2 迷 力 る は あ 7 L 7 0 は 2 る 制 行 カゴ 各 地 信 12 る 貢 は 度 浪 6 制 色 傳 < 不 人 12 ことが 費 規 陷 12 * 獻 15 あ 度 フ R 說 せら 6 j 則 3 L 主 す V 0 カゴ る 6 ٤ 義 1 13 な 7 るところ大 大 3 出 る る 或 ザ V S 7 3 0 2 0 保 1 8 75 來 某 3 最 る > 試 0 博 2 る た る n 0 場 督 3 n 影 3 は 力 3 12 敎 合 12 士 響を 2 偶 弱 22 5 服 15 7 大 12 0 > 古代 3 るを 見 於 然 於 如 は 敎 2 0 3 る 特 持 E 會 7 l 6 7 7 は は よ は = 3 手 12 0 12 は 18 メ 張 段 消 7 6 吾 2 名 る 13 IJ 健 神 聖 大 * 德 0) Λ 0 力 全 居 3 な 省 は 力 な 傳 を な カゴ 的 る 7 居 + j 3 る 2 說 を る <

新 認 部 若 0 宗 する 1 教 12 於 1 0 教 カン と精 2 7 居 個 4 73 0) A 3 0 # 6 靈 4 カゴ b 內 彼 は 0) 義 築 宗 部 0 75 制 宗 教 は V° 度 8 見 教 3 中 制 得 0 義 世 Ł 度 相 3 紀 は 樣 # A 0) 反 サ j 浦 12 義 0 150 精 チ 秘 者 口 9 前 は 能 1 3 丰 自 性 外 義 的 w 0 部 者 な 8 6 6 0 决 所 12 0 宗 於 3 謂 所 教 7 敘 7 承 内 カゴ

る。 ざる であ 早く 7 この て居 より 0 點であ 25 的 相 > 者 閃きであ 3 次 集合體 墙 る カン 派 る É 違 符號は却 教 ガ 0 12 とする る。 0 0 6 或 3 甚 は ŋ 力> 徒 為 同 7 5 Ď 0 同情もない人々と結合することを餘義な 0 は 却 力 的 る 朋 頑 であ 周 羽 3 0 > 12 る。 しば 間 あ 羅馬 教徒 障碍 8 固 0 2 あ 圍 て新教徒 0 0) 17 親 な は るといふ 統一の て各 るとい n 0 派 統一をも 境遇 はその る制度主 を受け 不都 5 敎 しくすることを妨げられ、 12 問 0 歸 徒 0 唱 は 教會の ふことを告白 から偶 合 外 運 0 0 依 らる 否國 0 部 すると ことを知 あ 同 3 動 5 制 一義者は がは常 的 0 ことで又 3 來 度 AL 0 教 伙 3 團 6 周 す 主 に區別を 派中 體 21 12 圍 V 0 あ か分裂を作 協同の 一中の人 自らの 起 17 る。 2 つて居る。 頑 に聳え立 「する 教 つた 0 近 0 固 實 然し 超 會 は 的 な 際 V 理想」の 教理 考を持 のとの 3 ヤの る制 は ゆべ ことなの Ŀ 一つ実塔 0 な 3 12 元 般に 意見 却 0 6 0 カン カゴ 度 カン 於 爲 政 6 來 差 0 あ 0 6 7

心の

聲がしば

くその

作用を止

められるとい

子八よ最後こ前度上義よ真り青坤竹道原せらるゝ實に馬鹿氣た話ではないか。

には出 る。 優位に は 行 的 も、僧侶から受けた命令を、 であ Vo とは羅馬教に於て教理的には許さ しまつた。 味を持つべ 基督教會 はその V2 6 ことは した人 不從順 であって 0 あ る。 集合體 制度そのも if A 3 n 來ないことで 組 旣 ありと カン んをも は人 黨派 ども 織 どう は 28 36 不道 きでな 死 0 これを述べ カゴ 類 心 V 能 人 に價する罪惡 2 力》 は實に すの 3 不道德的であると反 德 0 0 ふことは何人も 率 0 のを理想化して崇拜 制 最高 精 的なる命 利 の上に於て敵 いといふことを全く忘 度 6 あ 益 神を向 ふことを + る。 著しく あ の福 120 は 義 る。 甚 は 上せし 統 服 よしそれ だ高 0 分 祉 真 4 從 は 質 あ 0 0 無法なる 外には 0) 0 疑 12 は力で 精 る 服 和 く買は 他 德 n 從 ふことは 對して偉 is 7 輔 對 カジ 2 て居 する の目 は る 見 0 的 真 する 0 場 不 何 n あ 12 道 ね るけれ J り又 利 德的 道 12 を 和 物 的 た 結 合 不 0 德 は 要 去 る 大 益 12 25 とし、 出 は良 俗人 道 一せず であ 36 一來な なる 勢力 2 36 あ E 德 廊 0 3

風なさにいまもろくも

はろしくと大地へいそぐ

朝風に散らざらしわが

窓前の梢の紅葉

して氣質の問題である。基督教はこの兩典型を容 誇大は甚だしく危險であつて、神秘主義の弊害よ れて餘りがある。 たゞやら大氣のなかに 鐘の音ゆるやかに 夕暮の教會堂の 寂 吾人はたい制度主義の迷行或は 寥 北米 田 中 幸

> ふことを述べたに過ぎない。(ダブリュー、アール、 りも基督教の精神から遙かに遠ざかつて居るとい インデによる。)

他の多くの哲學的問題と同様にこの疑問も主と

小さき三毛猫は

深からしまひに

城

おちてそがまゆ毛をも

動さず

あゝ寂寥!

ひしひしとわが胸に

迫り來る寂寥のうちにわれの うましき慰安やどる

四、一一、七、

る 葉を 引 出 用 す る人は る 0 6 あ 層幸 る 福 6 あ ると 30

3

てれ iffi 南 3 0 同 つの カー宗 光明に 故に て、 T 5 同 入 心 私 朋 をこっに は を持つて居 とする。 要素の この相口 は次のことを述べてこの論を結ばらと思 團 反 生活せる を選び他を捨てるといふてとではない。 制 體 を 度 何 持 引 的 反 imi E る。 12 0 用 浦 冥想的聖者も多く カジ V て又それ 7 l 秘 此 太弘。宗教的生活 公教會內 居 た 主 てそ 義 較的重要なるかといふに S 0 に對し であ 0) n 好 12 12 典型 沙 彼 る 神 て忠 等 カゴ め 0 0 3 彼等 に於 現 信 屬 0 前 0 するこ T it 心 0 0 グ 3 南 感 B 工

3 12 12 术 て歴 た。 かけ サ これ 歷 中 史的 彼はウ る立 史的なり」といふに反對して、 ケー 25 5 對 0 方法 派 何 す オ なる 授 3 n 1 0 は 熊 3 選ぶ F 制 論 その「ギフ 度 教授の 限 文 如 12 12 何 かといふ 就 於て、今極 12 定言 いて論 ょ 示 2 1 て定 吾人 F. 現 ずる v 實 めて る 0 てれは原始的 ク 態度は、 0 Ō 0 チ 勇氣 は 6 3 ユ び 0 1 は 7 を アレ る。 管 1 有

ばなら

Va

25

0)

南

るるも

0

*

經

驗

初

B

る

學及 實に 形より 遙 を純 歷史 有限 17 活 -分を集成 實 或 冒 あ カッ は 2 在 び宗教 12 險的 0 7 哲學の 粹 は主として特別 なる ろ 重 論 7 居 優る。 見た に從 思 理 12 有 る世 想 生活 計 せるも 6 少しく優る 限 任 る、 13 番 あ ば、 の心 界に これ 歷 務 純 過 3 で 史 6 粹 南 (1) 程 それ こと 10 -(. は 业 5 0 直 る 歷 0 斷片 は な 3 7× 要であ ----觀 弘 は 史 0 個 具. 時 これ 30 3 極 は 孙 S 0) 不 體 活 人 大 الم 的 力> 的 的 經 可 カゴ 3 的 外 5 そして 能 動 6 A 7 驗 0 究極 物 らて なる 部 社會 0) 偶 透 不 0 0) 完全に 的 F 然 0) 視 m あ 混 に意味 その 世 L 3 的 12 書 な 0) 3 成 居 してそれ 暖 界 持ち 0 る 道 12 3 0 Ch. 味 驱 的 過 知 あ 驗 200 5 7: 經 彼 藝術 より 6 of 3 は 驗 13 n 史 0 0 的 て生 3 極 は 質在 0 構 72 V 0) S 常 中

る價 秘 吾 值 人 制 よりも遙 と時 0 度 義 研 + がそれ 間 義 究 は かに多くの 0 實 カン 12 < 12 取 在 許さん b 0) 門戶 7 7 意義と價値とを認める。 13 哲 に 時 學 E S まで 0 0 基 12 於 頑 礎 > H 的 力> 3 3 82 間 和 題 ところの 出 來 は 0 なら 事 た

Va

76 肺 △△東題 心京 集市句當 句外數欄 稿高等俳 3 田を旬 明村限募 雑 ら集 0 司ず ケ 谷 中 塚 直 =

宛

山葬唤港梅空冴父み汐漁汐沙 が突船えのど干 が以き て戻 きの返手り_ 霞の 2 め荒 戻の り でね へ見 カゴ 坑 渡の 騷 沙 梅 夫 > たざ夜す育舷干 築で まの魚つの人 がろだ庭る シ土枝 日更日障 水 照けの子 堤伐 閉 梅 る 03 冴 兒 灯 みな 日 返 返 72 照 てり毛りりり 3 る人

汐汐胸犢椿母兒ひ襟襟冬町一 于干も輕盛の等た卷器田の家 りすにぶあの鯖曇乳 展舟とら こ交るつ 父り りのに 6 黑 走 やりに Z 蟹お泥 か入機門とた石 S る ばそつ 荷野る械を來る工 椿 か立き 汽原家場入し石等い りちしの車いのをる家盤のた 生の喜咲がちそ出土 の連 は 人自 めらたをの る ٤ る 字る 4 し數 ん霞き踏小 庭 0 > 文 暮 過 梅みさ 滿 霞 草 み れぎ沙 み 唉に 枯 たた干でなったきじけす卷 られやられりりぬられれよ

虚

心

集

碧

樓

つて 其 政 た 圆 た 圍 會 伊 趣 T 25 とし を法 治 H 的 初 維 7 居 は 0 國 逼 を支 傳 大 的 12 6 政 和 め 來 伊 塞す 法 た 持 利 基 存 Ľ E 說 12 ども 72 太 務 7 他 0 す .廣 督 ---利 在 其の CK 12 21 る 佛 方 6 を掌ら 西已 權 る よれ すり 72 教 を有 前 贈 12 ﴿ وُ 0 す 0 to 關 代 存 3 0 於て 擁 3 世 カゴ 餘儀 勢 3 1 ル と云 づせて は 羅 目 溶 專 ï 紀 護 在 力 カジ カゴ 乍然 制 を保 妓 馬 は T 0 で H 益 す Im なさに 來た 法 來 君 H 3 は 12 12 3 伊 = 來 R 入 羅 2 其 Ŧ A た。 葉までは羅 なく 太 從 主 n 2 5 肝 馬 た 方に於 1 ス 0 3 0 利 來 で 0 至つた。 盛 位. とあ X 势 cg. 6 來 加 羅 三百百 此 とな カゴ 0) 力 置 南 1 各 1 困 0) 72 馬 0 統 一力教 傳 3 は 7 干 敷 和 る。 る チ 7 5 難 מול 2 確 道 終 馬 其 夫れ 事 は 會 0 12 土 大帝 身で 其 者 伊 間 會 J. 萬 國 役 法 穀 逐 法 73 業 力 會 消 後 す 0) 人 教 太 干 0 0 Ŧ 2 30 Ŧi. 0 熱 を は 組 羅 る あ 統 或 長 は て來 會 利 千 7 羅 は 助 心 置 とし を有 は 織 馬 伊 22 3 3 E 治 此 教 は 至 17 3 は 太 た。 保 國 0 あ 0 る 0 會 利 敎 政 節 依 依 護 勃 7 2 都 為

專

制

的

0

權

力

产

振

h

0

で

今

H

0

羅

馬

法

Ŧ.

TE.

17

るは

* 羅 5 な 0 言 法 b 提 在 1 3 7 は 9 有 都 力ジ 步 E 更 供 年 る 7 0 3 馬 S 徒 無く 吳 2 法 3 は 佛 L 市 所 3 で 5 は 金 1 逐 Ł 3 外 n あ 王 風 7 ヷ ~ V2 ようと申 败 6 かが 12 居 其 テ 白 75 見 12 る 力が チ 踏 17 政 カ 法 37 12 0) 面 信 0 3 U 今まで Ā 十二萬 世 治 自 } E 0) T 獻 相 徒 1 ことも み 領 法 で 出 木 LAR 違 12 的 1 S 金 0 三六十 0 か 3 75 偉 0 は Ŧ 一と名 獻 る 15 た 國 全部 を だら 全 E 出 73 V. 人 E 2 金 所 Ti. 儿 助 3 E 宫 72 來 現 3 < 6 カジ T S を有し 5 よう。 無勢 伊 萬 <u>____</u> 夫れ は < カジ 12 る 澤 7 「我 ٤ 別 太 る n 浮 3 Ш 713 は今浦 T まで 其 力 寒 利 2 らとて、 7 だ 世 0 w とな 軍隊 L (約 伊 是 我 Ŧ. 0 0 18 0 カジ F 國 rþ と言 出 或 n は 12 7 太 百 敎 を有 12 此 虜 益 獨 12 法 9 利 L カン 六 十 72 学 統 らの 會 佛 政 法 E 17 R 政 0 1 2 城 な カゴ つて つた 不 戰 治 府 國 今 7 0 \pm 萬圓 金など 3 0 3 見 中 可 爭 的 居 12 H は 7 其 居 能 權 る 對 法 識 1 取 カゴ F 返 3 72 斯 起 維 6 0

持

L

7

居

る

0

6

あ

る。

6 ば 羅 馬 法 王 0 勢 力 は 如 何 盛 衰 消 長 カゴ あ 2

馬 25 髛 0 敬意 12 3 敬意 避 使 國 n 寒 我 司 を表 節 賓 2 中 穀 0 0 6 カジ 禮 來 其の さら 在 來 朝 调 せら 朝 下 此 は を 使 0 今 節 0 賜 n 御 て、 度 に謁 遠 は た 卽 びが初 是れ 來 12 6 位 わら 見 0 羅 大 東京 め 珍 玄 典 かざ 馬 客を優遇 ず、 賜 7 爲 法 12 14 市 は め 王 際 は記 あ った。皇室は 0 0 ざ~~還 陛下 使 した。 念品を 節 皇室 は 葉山 ŀ 12 羅 贈

就 機 會 充分 12 世 於 人 0 7 0) 簡 解を持 多 うくは 單 12 其 此 つて居な 0 0) 說明 使 節 * い樣であ B 試 法 Ŧ みようと 其 一者の 私 性 は此 質 Z, E

は 育 n 弟 7 馬 子 明 法 ~ カン 王 テロ 6 な る だと傳 0 最 出 へられ 初 現 0 0) 法 時 て居る。 E 期 と云 は、 2 傳 ~ 0 說 テロ は 0 垫 とは 基督 12 蔽

> 0 12 Ŀ 與 13 教會を ふべ で あ る 建 と云 喪 基 せ 督 はれ ん事を 0 _ た言 予 望 は T 汝 0 如 天 地 4 * 堅 開

並

考證 なる岩 る。 だと は 紀 < 元後 テロ 鍵を汝 確 と云 乍併 カン 傳 0 **公六十七** 材料 であ は られ 此 羅 るらし 馬 0 カゴ 頃 7 年に なく。 に教會を建 居る。 つから 歿 S 一維馬 î **迎家** た。 此 法 の大に疑問 0 T 是れ E 傳說 な る者 に付 から 羅馬 0 7 とする所であ 出 は 法 現 王第 確 た事 カン 世 な

~

3 れに数 る。 # w 其 るの と云 よら 他 法 各 0 Ŧ. であ 會政 とし 地 職 2 學 識 業 よ る 此 治 6 12 人 7 學德 格共 從 推 0 0) 茲 力 事. 事 7 TE 滁 n 12 w 0 選ば た者 デ 勝 勝 る 10 n n 者 ナ 執 n 1 5 72 た人 弘 0 一せる た法 僧侶 IV 4) 前 物が 0 る 身 中 王 七十人を選み、 カゴ 之をカ 選まれ は カン 牧羊 法 5 多く 法 廳 Ŧ w 3 0 デ 僧 12 弘 ナー であ 侶 果 0

3 ع 有 0 は 戰 和 0 思 3 2 談 大 0 有 亂 < は n するや 議 0 0 權 效 73 17 21 は 敎 申 72 2 n 0 權 る 7 威 際 6 治 味 併私 から と獨 斷 義 75 底 法 彼 76 F" > 否やと言 3/3 あ 3 と云 意 CS So 王 12 じ 3 宜 其 な 7 逸皇帝 12 73 0 2 2 は 7 ž ٤* 0 た 千八 は あ 2 7 0 S 3 無 3 側 絕 ス 使命 位 浦 る カ> 2 つて來 7 對 力》 S 今日 で 實 3 7 其 言 鹽 Ŧ と云 9 百 1 5 0 權 22 あ 際 たとある。 よら 知 から 4 處 は 七 で カゴ Ł 云 服 ク 平 る 政 る事 法 た な n 可 あ あ 0 從 0 治 な とす 通っ 武器 る。 和 ば大 王 0 S 勢 ī る 年 爭 來 今度 の上 0 12 S な 0 12 6 かざ 力 電 提 決 露 カジ けれ 此 7 供 あ 法 起 75 る 0 之れ には 議 給 國 12 使 15 來 る 定 る Ŧ 0 2 旺 ٤ 節 6 今日 た。 3 實 た 大 * 出 は 12 0 h する ば を考 全 面 來 懇 公 日 來 な 從 は n 分 法 25 今 本 朝 < で 之れ 5 白 請 事 過 た カジ 王 から な 2 無 は Ł は 0 日 7 誤 あ 0 12 此 ^ 9 で Va ヷ 3 て見 殆 と云 和 途 0 3 事 特 あ 間 V 72 チ 所 あ Ł 响 ど何 ふ事 力 樣 Ł 6 使 來 意 力 9 謂 舑 る。 0 だ る な 朝 3 2 た 1 は あ カゴ 太 代 文 6

> 50 來 明》 力 E* < 者 3 は 72 ず 戰 諸 を藏 云 0 ス カゴ 2 争 で ď 出 國 V 手近に例を求 7 1 逐 L 弘 で 來 あ 0 之に二 る。 勃 7 0 53 ク あ 72 法 居 0 る 0 血 > 力 0 政 E で、 12 0 億 た 尙 治 權 圣 此 0 0 以 T 今後 n n 0 ほ Ŀ 12 信 屈 其 積 n 7 6 7 は 徒を附けた様なも す ば、 は あ 0 長 極 服 益 當 る 東に る せ 的 V 間 時 3 ds 我 0 R 併乍 其 勢 3 之をどうす 懸案となっ 本 西 21 を得 力 力 願 22 於 力当 法 寺 カジ 法 T 少く は 15 な 王 王 0 ζ 法主を大き 權 權 V 隱 な 樣 る 7 を な 0 であ 然 0 事 居 るだ 認 及 12 たと た 73 72 は 36 め 6 る 2

乍

併

日

に於て

は、

政

治

Ŀ

0

權

力

は

全

法

王

H

據 其 あ カン 0 カ> は 方 土 る 殺 0 は 12 彼 內 滇 會 馬 臺 之れ 等 馬 集 加 容 は 面 を 太 0 2 信 目 ح カジ 宗 傳 7 力 我 異 0 仰 12 十六章 行 教 る 之 磐 敎 R だと考 と我等 つて 0 n 0 L カン であ 上 6 0 r 法 權 17 + 見 Ī の奉 **八節** 力 7 建 3 E n ば 權 は 0 居 1 ずる新教と 僧 彼に 他 ~ 12 とな 3 居 る 愛 L 侶 カゴ 3 云 爾 12 あ ると一本 そし な は R あ 0 我 <u>___</u> ~ 6 7 V 12 一人。其 と云 說 テ は は 7 0 どう違 之れ 其 だ 敎 17 75 會 カジ 2 0 仰 カジ 宗 6 とは 0 0 0 根 Ŀ 彼 我 6

來 L 力 72 6 有 溡 た 137 ゆる 7 カジ 0 S 居 あ 6 3 3 3 國 る は 12 は 0 變ら の元首 0 現世に於 だとい ٤ 何 地 12 A な を 35 250 यु 7 0 20 開 0 居 法 S. 上に立つて之れ 6 ことは て神の代理をするも 信徒 信仰 る 王 あ 0 25 3 0 0 對 は は、 出 る之を信 ī あ IJ 來 古より今日 る 7 彼等 な ス 楯 S ŀ 8 Ŀ をも左右する權 0) カゴ 突 て カ> 信 くくこ 法 5 柳 其 のであ Ī 12 與 12 0) E を 從 至 旺 る 尊崇 られ カジ h る 出 4 过

30 を越 皇帝 7 w は 3 拒 2, 法 は 破 居 有名 h つた。 は ス Ŧ 門し だ 6 0 U 家 n 爲 73 寒中に 會 た た。 な 獨 を統治 的 議 12 皇帝 法王 逸皇帝 從 12 12 過 步 EX 國 出 できな する は 12 B 和 民 當 席 其 拘 謝 は 0 は 時 ۱۷ な 2 T しようとし カン 0) 罪 は イ 0) 皇后 らな とか 皇帝 破門さ 9 せ 5 法 2 72 ñ ず IJ 王 カゴ 出 S 0 ٢ ガ 此 爲 自 323 來 命 n v 四 7 時 目 合を め 5 な た 世 7 Ŧ 等と 17 、皇帝 法 7 12 3 IJ は 宮を出 伊 な 0 奉 ĺ Ŧ w 法 僅 は 太 ブ 2 で、 Ŀ 12 X 恰 利 720 カン ス 75 服 111 0 で 12 36 0 Ш 餘 命 從 は 乃で ゥ 從 儀 令を 入 0 力 ヲ な

> 皇帝 た る所 樣 皇后 於て 帝 其 兀 0 を カ> 千 0 惟 ツ 0 であ は 聞 と共 皇帝 は 此 改 宿 + 法 言 V 0 12 之を以て る 七 7 12 は 王 葉 真 訪 12 车 法 0 此 情 0 和 足 嚴 を聞 如 0 Ŧ H 真 何 多の 出 17 は 否 7 3 一晩を其 12 來 丰 初 8 S 0 居 推 法 事 ス B 最 7 疑 H か 1 中 知するとが出 とし 7 吳 王 0 2 25 門に 12 7 其 7 0) n 其 乃 權 其 單 と申 7 悔 謁 門 10 力 歷 許 立ち 改 衣 見 2 皇 な身に 0 史 L を許 这 呵 0 帝 つく 强 * 眞 んだ。 家 は S 情 來 得 3 V 0 7 之れ ると た。 我 を了 i 着 な B た。 0 K 3 3 6 之 解 思 25 5 圓 30 あ 傳 AL 此 は カン

四

會 其 巴 Ŧ て二億 0 12 力 國 他 は 閉 星 歐 は 移 0 0) は 籠 洲 觀 歐 無 有 未 2 b 洲 各 だ て居 念 餘 物 S 大 樣 25 國 變 제 之を法 な だが 5 基 國 12 る < 其 る は カシ 勢力 Z 法 0 -法 E 公 僧 其 0 王 王 使 を 侶 で 廳 今 0) 0 あ を 有 B 部 信 は 其 下と稱 派 信 羅 る 2 徒 公使 造 7 徒 0 馬 居 0 L 數 0 力 7 る 7 は 居 を 7 全 0 チ る で 居 世 通 カ 界を あ Ŀ る 1 叉 3 7 露 歐 通 法 城



三井甲之氏の 戦争と文士學者

排する點は評論子の平素同感である。此文に 明によつて教育せらるし時代ではなく、人々 於ても亦氏は「今や我が日本は不言實行的の は常に學術的研究を重んじ、非科學的精神を は傳來の詩的神話的遺産から脱しなければな なく、一般民衆は浪花節講談の荒唐無稽な説・つて正邪曲直を分たんとする英國功利主義思 時代ではなく、警句や際謀や機智の時代では と云ふ論文が日本及日本人に出てゐた。氏

一月の思想界

進運と國情とに伴はしむるやうに改良し、之 と相補足すべき施設をなすべきである」と云 治法律を學んだ者には自明の原理である。換 政治法律の本來の性質なのである。これは政 張せる最大多數の福利の上に立脚することは 治法律が國家的(社會的)なる個人の福利を擴 つて居るが、これは怖ろしい誤解である。政 言すれば政治法律は國民の一部に對する生活 である。それで政治法律は普遍的法則を以て の規則ではなく、其全體に對する生活の規則

して居る」と述べて居るのは肯綮を得た言で 來の制度として撤廢せんよりは之れを時勢の わので、全く科學的研究の時代に入らんと と説き、更に「それ故に代議制の如きも之を外 とによる外は無いのである。元來自由平等の 夏目漱石氏の「點頭錄」の批評で、「個人の自由 常に國民道徳に悪化な與へて居るのである」 想の一種の表示としての代議制度と議會とは 評點を打ち、更に進んで「それ故に多數決によ 標語は二三世紀前のものだ」と云つて三角の を目あてに行動すればそれは虚偽策略と技巧 果實を統一して進むことは新文明の態度であ 知れないが、科學を中心として總ての文明的 ある。これは科學萬能主義の様に聞えるかも るからして三井氏の觀察は正しい。併し氏は すのである。政治法律上に於ける自由平等の 第一義と爲し、特別的法則を以て第二義と爲 思想は此普遍的法則なる法理的觀念に胚胎し 我に於ける個人の可能性な質現するとが道 されたのである。故に憲法は貧富又は男女を た思想である。それで憲法上に於ける國民の る。三井氏が雑誌で議論の出來るのも、言論の を得んとするは此憲法上の保證的規約から來 公平に取扱つて居る。貧者又は女子が参政權 權利義務はこの自由平等の思想によつて規定 所が包まれて居る。即は樂説系統の幸福説 的標準になって居るが、之には功利主義の長 居る功利主義の餘得である。倫理學上では自 自由権が法益として國民に平等に與へられて 113

な リス Ŀ 6 判 は ŀ 為するとは 闔 教會 カゴ を絶對 之れを絶 處女 を信 V ず IJ 12 示 3 對 切 7 H 的 0 カン IF. で る 5 0) L 0 生 真 南 3 和 6 理 る 主 とし たと 南 張 3 0 7 L S 信 文信 ふてとを言 仰 切 ずる 0 僧 て、 侶 理 2 Typ 干

世界の 行動 どう片 と思 く解 ら聞 召 「朝さ 3 な矛 つた。 である。 ふしもった。彼 7 7 7 V 付け 其生活 後手 進歩と斯 て能く 今より十八 れて來た。 万盾を生 是れなら る 紙を寄せて 其內 0 カ> 解つた。 じた らし 理 其 想 容を吟味する様な事 年 日日 時 た加 教 等 私 は禁慾遁 0 私は新教派に改宗し、其禮拜の儀式や沈 は 義 0 E 私 前 我と現代 どうする 土 信 < 0 力 印崇拜 友 帝 _ 敎 世 私は 人 大 0 6 0 0 12 文明 教義 あ は單 說 カン 新 ケ 3 1 殺 教 ٤ E 一讚美歌 ~" は 82 L 0 新 相 0 作併 L 習 T 說 ル 教 を 關 な 慣 76 博 容 のき n 係 近 的 1 S カゴ 君 士 な 3 代 t 0 S カン 力当

を否定する。 對するのである。 て之れを否定 5 よる場 科 合 す 學 ic る 哲 は 中には寺院僧侶に絕對服從す 彼 0 學 等は であ Ŀ 0 る。 新 訓令を 學 我等 說 出 は 新 凡 L 教 7 7 其 訓 徒 は 0 之に 3 新 發 說

> せん 近 3 る 代 ことは 0 しとす を喜 的 0 生活 H る K 我等に 來 6 13 を要求 居 る S は 者 0 6 力 4) 全 3 6 底 自己意 る 撕 カン 5 4 融 S 知 ふ信 12 和 徹 V2 仰 底 カジ 滿 7 荷 生活 くる

rollou A &

を致 今や の宗 是れ 我が 進 私 首 な 馬法 を物 馬法 0 0 だ 步 は 法 0 S 今 一昔の 皇室 す様になるとを切望して止まな 彼 時代 から 上に位 筈だと思ふの 0) 教 王 何 珍 E 度 等 必 な S なる 0) 5 0 の流 近 Ŀ 夢 要 るるも 易 と羅馬 恶 ī ~30 げに歌 なとを認 時 代 6 12 L 76 S F 文明 勢 和 君 あ て てとは 0 0) V る。 12 臨する標 居 0 法 ۸ 1) > た様 本質 推 取 0) 0 迎し 本 E 1 7毫 移 大 め 曾 南 0 な 質 使節 づされ る。 に着 勢 を明 使節 T な S. 1 て其教義 7 知 12 な は 居 ことも 0) る は 態 其 曾て との カン 乍併 服 來朝 3 6 傾 抗 度 0 樣 73 にする 教權 B 3 カジ は 南 は 關 羅 17 6 10 75 で 主 如 執 法 T 0 係 馬 か 何 でなけ 10 張 を擁 す た Ŧ 加 3 S 2 カゴ 0) な宗教 12 6 1 カゴ カジ 只 0 明 + であ 改 S S 事 各 L 瞭 其 册 力 なく 善 73 3 7 今は in 國 25 敎 训 人 る。 12 世 12 Vo あ なら す 使 13 0 力 只 る

じがないか。又幾ら植民地や貯金で國力が發 張しても倫敦に の問題と男女の問題である。幾ら植民地を擴 もので高等批評家の言としては頗る不見識な 灣等に對する施設は最も重要である」などと とを御存じがないか。此等を加へたものから 展しても巴里や伯林に無限の淫賣婦の居るこ ものだ。抑も國家發展の問題は今日では餐富 云つて居るが、如何にも新聞屋の社説然たる 出稼してゐる我々の姊妹なる日 國力の發展とは没交渉であつて、單に海外に すのである。 き事を主張するのである。 する經濟及び道德上の革新事業と共に行ふべ である。我々は植民事業を絶對に非とする者 貯金だけを差引いた形が丁度我が日本の現狀 では無い。植民事業は必ず貧富义は男女に關 一致團結しなければ大連や滿洲は永久に不毛 地たるのみならず、實に醜業婦の単窟に化 三井氏の植民論もその役目たるな免れ 次に氏は鹿子木員信氏が「平和の理想・ 々兄弟に報告する役目 新聞の植民論や政客の視察談は · 無 一限の細民の居ることを御存 資本家と勞働者が 位な働きに過ぎ 本醜業婦の狀 井氏は之に酷く感服して「確かに平和思想 本は祖先崇拜や支那人の豚小屋から生れた孝 入したものであつて、異邦的道徳である。日 想なるものは印度支那英佛米等から日本に輸 朝以前の神ながらの道が能く此等の思想を包 る。先づ鹿子木氏の説を見るに甚だしい妄論 の一つを選擇せよ」と叫んだと云ふので、三 統一支配である、大帝國か然らずんば衰亡そ から脱すべきで、 の英雄崇拜思想を自覺して異邦的道德の羈絆 行道德や一般平和理想等に煩はされずに獨自 容同化して日本文明を作り、一千五百有餘年 である。我が東洋の倫理學史に於ては儒教で 如きは外來の毒薬思想である」と裏書してゐ 學史上では覇道とも申商韓非の學とも申すも として我々から奪取したならば残るものは何 自の英雄崇拜の思想である。此等を外來思想 る。賢を倚び、神佛を崇めるのは是れ即ち獨 の間日本の思想界を向上させた正統學説であ も佛教でも悉く平和論であつて、日本の奈良 であるか。「我等の理想は征服、 大帝國である」など、言ふは、 我々の理想は征服、 勝利、統一支 東洋倫理 勝利

は主として植民地の問題であつて朝鮮滿洲臺

しては許されない。次に氏は「國家發展の問題

と音等」に對して批評を加へて同感してゐた

ので、二千年以來誰も相手に仕る學者

つた愚論である。トライチケの軍

P ==

學論は不幸にして王道仁義博愛慈悲を正統學

ツチェの君主道徳に左袒する鹿子木氏の

Ī

が其れは誤つて居る。鹿子木氏が「所謂平和思

相馬御風氏 凡人生活の 9) 福

は迷信の甚だしい者である。早稲田文學には 三井氏がその亞流な汲んで旗持ちと出掛けた であり、

論陣は戦はずして登けて居る。

上の學壇に於ては迚も太刀打の出來な 説として發展する我が偉大なる東洋倫

い義

0

新聞 感じを與へる。隨つて戰爭の記事、 乃至特殊な人物だけで運轉されて居るやうな る世の啓蒙事業とか人民開 此罪は新聞事業に從事して居る人を始め謂ゆ 種の社會觀乃至人生觀が造り上られてゐる。 すべき事件が報導され、 事、强盗の記事、殺人狂の記事と云ふ様な恐怖 的に大なる事件乃至特殊な事件、 云ふ空漠な觀念に引かされて、 名の下に從事して居る人達が、 が 記事を見ると世の中は所謂世界的に社會 あつた。其要旨は斯うであつ 知らずくの間に一 後とか云ふ様な美 眞に何 徒らに進步と 大きな人物 たら近來 火事の記 が JE.

446 用されて居る結果である。 制とを調和させる新知識のない輩によつて運 政治に 熟練であれば無用の長物である。 學術的 完うするのである。此等の重大なる學術的事 ふ諸弊害は選舉民及び議員が代議制なる憲法 あ 制そのものし缺點では無くて運用者の缺點で に對する法理的知識の誤解に由來して居る。 とは斯うして互に提携して始て各自の職分か 雅な氣分的感想とも申すべきもので、憲法學 からの持論であるやうだが、これは極めて幼 件を知らずに居る三井氏の知識は太平なもの 術的研究では見事に調和される。道徳と法制 政治學と法律學と倫理學との關係は今日の學 合理説系統の完全説との合一した形である。 である。 る。 一發見は實に代議政體である。多數決によつ 國情に伴はない爲めではなく、道德と法 一の方法である。 器械が幾ら精巧でも技手が無知識で不 一を分つ事は現在の政治學上憲法學上最 知識を標榜する氏には酷く似合はの現 それから氏は 三井氏が代議制を非とする論は以前 す る道德的意識の幼稚な結果であ 人類の政治史上に於ける最近 これに伴ふ弊害は代議 「又歐洲に於ける政教 三井氏も其の連中 代議制に伴 葉てい の感化の下に現日本の思想界を侵して文壇と べきものは此の物質的個人主義に根さずもの云はず政治といはず、所謂「新しい」と名附く 結果である。 的個人主義は、 あるならば直ぐ解るではないか。物質を離れ と個人主義とに關する倫理學史的知識が氏に 察である。精神主義と物質主義、四海同胞主義 の産物であるやうに見て居るは頗る無學な觀 天下主義や佛教の衆生濟度の慈悲と同一の平 同胞主義市民祖國主義の思想が基督教の一派 義は成立しない。近世に於ける産業上の物質 て精神は成立でず、 **愛である。三井氏が物質的個人主義が基督教** 和論であつて、 義は、儒教の王道仁義又は樂愛兼利による平 海同胞の博愛を主張する基督教の國際道徳主 る」と云つて居る。これも酷い誤りである。 と提携するに至って、最も危険になるのであ であつて、 問題の葛藤は日本に於ては社會道德問題とし でもなく、吾等の記憶に て現はるいのであつて、 精神的四海同胞主義が産業化されない それが老人階級の陰險極まる隱謀 換言すれば個人と社會との調和 似而非ではなく悉く至誠の煥 産業が精神的四海同胞 個人を離れて四海同胞主 新である。似而非四海 其の實例は懸ぐるま 主義を 究に伴ふ斷案である。三井氏は斯 業が残されてゐる。 それで今後我々が西洋に學ぶべき點は精神的 吹したが、續いて精神的文明を輸入すること 容れたのは大なる眞理を有して居た。 的のものであつて、之を整理し醇化する理 はない。人類の生活は原始的には物質的個 手落の現代思潮なものしたのは基督教の罪 的な方面のみを採用して、功名利達を圖る片 之な實業家や政治家が惡用して物質的な個人 の一面の二相を傳道するのが基督教であ 的文明を作り一方では物質的文明を作り、 が取れず、 答れて儒教や佛教の平和思想と融合させる事 和思想と政治法律經濟上の自由平等の思想を な四海同胞的な方面である。 を其著文明論の到る所に於て力説して居る。 吉氏は西洋の物質的文明を輸入することを鼓 たのである。 目的の上に精神的な四海同胞的なもの されない現象である。 で審究して掛らなければ到底文明の の社會に於て、 和な圖ることな標榜してゐる。一方では精 精神的道徳と物質的産業とが 物質的文明が幼稚であつた日本 質業家や政治家が競うて之た これは東洋倫理學史の 然るに基督教はこの 即ち基督教の平 ろうい 批評家と が生 調和 る

所在である。そして此所在は國家に屬する全 はない。「主權人民にあり」とするは法治思想 きたい。私は明言するが西洋には民主といふ 何うか私の本を證んだ上に更めて出直して頂 はれた。然るに此民主々義は黑岩先生が鑄造 にする事が必要であり且つ便利である」と言 を解するには一通り民主々義の何たるやを明 近いものである。從つて民本主義の何たるや を以て表はされた

では其間の

關係が又極めて に別個の觀念ではあるが、西洋で同一の言葉 れた。又博士は民本主義と民主々義とは明白 治上人民に在るべし」と云ふのであると言は ばなられ。先づ國家の主權とは何であるかと 學又は倫理學にも交渉した上に決定しなけれ 又は政治學の中心問題であつて、進んで法理 は徳治思想である」。思ふに此の問題は憲法學 は民本と云ふ思想はあるが、民主と云ふ思想 思想はあるが民本と云ふ思想はない。日本に され私は之を賛成して之を弘めたのである。 した場合は、天皇又は大統領を生じ、一方に の總攬者であり、人民は參政權によつて國家 治權の總攬者たる自然人を國家の最高機關と 人間の人格上の意志に駿存する。そして此統 云ふに、申す迄もなく國家に於ける統治權の で「主權活動の根本目的は人民にあり」とする は人民を生ずる。これが法理上に基く憲法學 する全人間の上に存在する。君主とか民主と は既に過去のものである。君主專制國では主 又は政治學の最新なる觀察である。それで主 萬世一系の天皇が國家の主機に屬する統治權 民を主とするとか云ふ必要はない。我國では 憲政體では前に言つた如く君を主とするとか とするは君主專制國だけである。法理上の立 どと云ふ趣旨には絶對に反對である。君か主 て民主では不穏當だから民本の文字を使ふな とには絶對に反對である。況して君主に對し なるものを肯定した上に民本の語を用ゐるこ 私も贊成である。けれども君を主とする君主 ぬ民主と區別して民本主義を唱道することは と云ふ趣旨を表はすために、民本の言葉を用 主權の活動の基本的目的が政治上人民にあり か云ふ言葉は既に必要を失した。併し國家の 國家の主權は天皇と人民とな問はず國家に屬 けれども最近に於ける法理上の立憲政體では クラシイ(民主主義)は此後者の産物である。 國や共和國では主權が人民にある。所謂デモ **機が君主にあり、君主と人民とに確執のある** 權が人民にあるとか君主にあるとか云ふ議論 れで此聖勅中には君主と云ふ思想は無いばか 之責」之。今百姓貧之則朕之貧也。」と仰せられ 則以,,百姓,爲、本。,是以古聖王者一人飢寒顧 目的は人民の安寧幸福を企圖するためである 斯の如く國家の主機が活動する所以の基本的 起きたのであるから、 れは民主政體又は共和國と差別する必要から りでなく、既に君主專制政體では無くて君民 國は民本主義であつて民主々義ではない。そ とを意味した思想である。此意味に於て我が ることに於て統治權の一部に參與して居るこ は各自の業務に精励し 國家を强富たらしむ 統治の基本的目的を百姓の殷富に置き、百姓 を百姓と云ふ國家機關となし、而して國家の
 權を分擔して一を君と云ふ國家機關となし一 聖帝仁徳天皇は、「其天之立」君是為二百姓。然 の主権に屬する統治権の一部を行ふのである 字は既に蛇足であつた。吉野氏の苦しき説明 る言葉に「憲法政治」の言葉を添へて「立憲君 共制政體である。明治に至って「津主専制」 權の所在を監定する思想なく、唯國家の統治 た。此聖勅の中には君主とか民主とか云ふ主 國とか言はればならぬ性質のもので、「主」の 主政體」と稱したのは抑の誤解であった。こ 立憲君制體とい立憲帝

- 117 ---

にあらず、唯だ一個人の善人たらんとするに 社會の道徳的判斷を害し、善惡の觀念や真妄 であり非文明であるものが多い。これが為に はその名に伴はざるものがあり、反つて虚偽 又は人民開發の事業と號する文明的事業にて も氏の言の如くである。謂ゆる世の啓蒙事業 不健全なる社會觀人生觀を與へるとは如何に 又大なる誤解に陷つて居る。現代の新聞紙が と。相馬氏の意見は或る眞理を告げて居るが 私の胸に堪へがたないまでの感激を興へる」 爾曹も亦完くすべし――と福音を説いたのは あり。基督は教へて曰く天の父の完きが如く になることであり、決して衆愚凡人たること 向上心は知識にあらず、黄金にあらず、事功 るのである。並に至ってかの故人綱島梁川が 活即ち凡人生活の福音が心强く私を引きつけ 底境自我生活の最後の安心境として衆愚の生 康と誠とを見る。それで自分は人間主義の徹 ると私には後者に於て多くの幸福と親善と健 の生活を彼等の所謂「衆愚」の生活と比べて見 の資ふべき罪である。けれどもさうした人々 確信なき者等の営む所謂文明的事業そのもの 善悪であり何が幸不幸であるかの根柢からの 「偉大なる凡人主義」を唱へ――人生最高の 來するのが極めて獨斷である。人間生活の規 ないで善人たらんことは空想である。殊に今 判斷の結果である。真妄の差別を明に辨知し た。善行爲は必ず眞正なる知識に基く道德的 却したのは倫理學に對する彼れの淺見であつ 賢人の義である。それから綱島氏が知識を看 たのは誤解であった。偉大なる凡人とは彼れ の善人を君子賢人と言はずに衆愚凡人と言つ なることであると説いたのは正しい。併し此 では無い。綱島氏が人生最高の目的は善人に 改善であつて、凡庸不肖を琢磨して君子賢人 明が他の動物と異つて居る點は此欲育に存す つて居る。斯に教育の效果がある。人類の文 や道徳上の天才又は事功者の啓蒙的指導に依 の向上によったのである。そして其等は知識 進化するとの出來たのは、知識の進步や道德 ないか。幾萬年の間人類が經續して今日迄に 範が衆愚に存するとは理解に苦しむ次第では 準的本體であると説くのは如何なる理論に由 氏の謂ゆる「衆愚」の生活はその善悪真妄の標 が用語上の錯誤であつて、内容に於ては君子 る。而して教育の目的は個人の生活の理想的 いて傳習の俗間に入り衆愚凡人の生活に際遁 の本體である。相馬氏の如く現代の啓蒙思潮 その真妄を批判して正善なる生活を創設する るのみならず、その末流を汲む相馬氏の凡人 何うして余輩等は眞個の人格を保つことが出 する。衆愚凡人の傳統的知識に從つて居ては 社會に於て善人たらんとするには時代思潮を 居る現代青年の前には大に慎むべき言論であ するなどは、先輩としても意氣のやし弱つて に辟易して懷疑論に陷り、驚怖戰慄を感じ退 ことに猛進するのが現下に應ずる我々の生活 かされて取捨選擇に苦しむのであるが、 は現代の啓蒙時代に於て種々雑多の議論を聞 論に至つては著しく誤ったものである。我 來るい。網島氏の道德觀は倫理學上誤つて居 る。洪水以後には 嚴正批判した新見創設に基く理想的知識な要 茅原華山氏の けたる吉野博士

デモクラシイを使ひ分

と一は「國家の主機の活動の基本的目標は政 は「國家の主機は法理上人民に在り」と云ふの と云ふ論文があった。要旨は『吉野博士は

の差別を邪路に迷はすものも多い。けれども 目の日本の如く、東西の思想の混淆錯雜せる

48	51 -																				
島地雷夢君を想ふく六合雑誌)・・・・・・・・・・・深田康算の歴紀を記した。	2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2. 2	攻やより現にる全國各方面の風致犬島(常青」:・尹 寮 工 南 坂 子 夏 原 治 夏	報)伊藤證	政治と禮樂(日本及日本人)土 岐 債	山の經典原の經典(同上)常 盤 大 定	戦亂の國民的宗教上に及ぼせる一影響(東亞の光)・加藤 支智	基督教社會學の見地より家族を論ず(同上)阿部義宗	宗教の歴史的起源(同上) ・・・・・・・・・・・・・・・白 石 喜 之 助	良心より神へ(神學評論)小畑久五郎	男女交際の新道徳(廓清)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	内在の神(同上)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 内ヶ崎 作三郎	軍國主義と平和主義(同上)	神を知る法(同上)・・・・・・・・・・・・・・・・ 岸 本 能 武 太	男女兩本位の道徳(同上)・・・・・・・・・・・・・・・ 條 忠 衞	米國人の生活と基督教(同上)・・・・・・・・・・・・・・・・・ 赤 文 治	制度主義が精神主義が(同上)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	新文學の生る、まで(六合雜誌)内 藤 濯	温 研究 訴討 解釋		最近郊學 第一	
無明(科學と文藝)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		清盛と佛御前(早稻田文學)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	小見の知慧(六合雑誌)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 岡		it in the second	社寺境內還附案(中外日報)田	歐洲戰爭の新聞界に及ぼせる影響(早稲田講演):伊、	獨逸の戦時經濟に就て福田博士に答ふ(新日本):上	衆議院の信用を回復せよ(同上)・・・・・・・三	我外交と東亞聯盟(日本及日本人)杉	一九一六年の世界經濟觀(同上)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	如何にして議會の品位を高むべきか(新日本)・・・・諸	華族世襲財産法(六合雑誌)		三 寺事平全	ソクラテスの生活(東亞の光)・・・・・・・・・土	批判と感想(中外日報)梅	米國勞働者大會出席の記(勞働及產業)鈴	精神的浮揚力を思ふ(文明評論)・・・・・・・・・・・・柏	啄木鳥(同上)吉一	才人島地雷夢君(同上)栗
藤川	內	村「	旬 田			中	達源	田貞	宅	田	江		條			田	原	木	井	田絃	原
一来			き哲い親			弘之	一郎	次	雪嶺	定一	歸一	家	忠			誠	眞隆	文治	蠹	二郎	基
夫 明	行	月;	い弱	4		~	E/A	75/2	司員			1	(市)				135	113	[42]	75/19	4

も茅原氏の抗議も畢竟するに斯に基因するの

當り前のことである。此の一般通用語を政治

450 朝の大寳令でも、鎌倉幕府の貞永式目でも、徳 史に關する不明な證據立て、居るに過ぎな は遺憾ながら氏が東洋倫理學史及び東洋法制 ことな大發明のやうに吹聽して居るが、それ に區別して、東洋殊に日本を徳治思想とする 次に茅原氏は政治思想を法治思想と徳治思想 幕府の百箇條でも讀んで見れば直ぐ解るこ 。儒教の書經でも申商韓非の學でも、近江 孰れも深く思はざるの致す所である。 茅原氏の態度は甚だ大人氣ないものである。 於てなやである。 法理的にも倫理的にも膨しも出來て居ないに 況して民本主義に關する茅原氏自身の説明は し、吉野氏を被告が門人に責め落さんとする た彼うであつた」と云って優越權を振り廻は 製造當時の氣分から推して來て「此うであつ 度はまた當り前のことであつた。それな文字 學者が政治上から説明せんとした吉野氏の態

とであるが、全篇を通じて一禮樂刑政」と云ふ て法治國でないなどと云ふは歴吏上嘘であり 立つて居るではないか。東洋は徳治國であつ 道徳と法律の合一した政治思想によって成り 法制の根本は明徳修身にあることは法

山内繁雄氏の 物の貞操」 遺傳の上より觀たる生

の如く言つて居た。「以上は現今生存する變族 進んで下等動物の結婚状態及び其の沿革を明 どに於てこれを特筆大書して居ない點を責め 事件であるのに拘はらず、動植物の教科書な に關して詳述し、生存と生殖とは人生の二大 本能と貞操との關係を説き、次に生存と生殖 間に行はる、事情を有の儘に述べたのである かにして人類の蠻族に及ぼし、結論に於て下 と云ふ論文が新日本にあつた。初めに生殖

猶太の神政主義、プラトーンやアリストテレ に徳治だなど云ふは非常な淺見であります。

の法制たる所に基くので、之を目して直ち

の道德的政治觀、ミルやベシザム等の功利

操觚者が新しい文字を發明することは事務上 宣傳を自身としてあるが此れは蛇足な言だ。 次に氏は民本主義の發明を黑岩氏となし其の 徳拔の法治だなどと説くは單に法螺である。 主義に深き縁因な有する現代歐洲の法制は道

が、鑾族たる人類間の雌雄淘汰より見たる貞

らのが、然も生物本來の生殖を遂げる働きが 實は人類迄進化せる以上は生殖は獨り自己の 開化せる道徳的に健全なる狀態となつては居 に比し進化せる遺傳質を有し、 に實行されて居るの觀がある。文明人は戀族 操問題は今日の文明人と雖も其儘に殆ど赤裸 屬する種族の繼續を行ふのみならず、 異性を求める本能的慾望となつて居るから は劣性となりて潜伏し現はれぬことになり、 なすに至る者あるは歎かはしき事である」と。 許すが如き混錯せる不倫の行を敢てし、 に、一配偶者あるものが同時に他の異性と 済する遺傳質承繼の働きた

遂ぐべきである されざる野獣性をあらはすの恥かしき行為を る己の特質を同様に健全なる異性の特質と混 幾多の野獣性 復雑な

ぐに這へとは無理な親蟹 道徳的規範である。この道徳的規範の躬行に 接近して始めて生殖と道徳とは一致し、 この論は頗る正論であつて、洵に山内氏の言 古歌がある。「横にゆく蟹が敬へた蟹の子に直 る。人生日訓十一月十五日の家庭教育の欄に 於てのみ子孫に善良なる遺傳が生ずるのであ 屬する天職の自覺に於て、靈肉を裏切らざる 理上の戀愛に對して、一夫一婦が其の分業に 徳論が成立するのである。貞操はこの生殖倫 の如くである。生物學と倫理學とは斯の如く 一婦の戀愛結婚を主張する科學的なる男女道

今し我がなす事を鬱せ給へ。」〈大阪毎日〉

婦人自身の問題

せずに、泣寢入してゐたので、その家庭には 慣觀念に捕はれて、苦しい事があつても反抗 の特権であると諦めてゐた。すべての事が習 結婚してゐた。また蓄妾を見てもそれは男子 今迄の日本婦人の多數は父兄の意志によって

程の問題が起りませんでしたが、現代の婦人

るも多數の男に身を任せるも同じ事である。 活が出來なかつたが、今の女の中にはパンの 的方面に於ても今日迄の女は男によられば生 ずには居られぬ程自覺して來ました。又、物質 經濟方面を見ますと、高級の婦人も多少は 職業に從事せればならなくなる。處で社會の 人が出て來て居る。獨身生活をなすには勢ひ 理想の夫を得め迄は獨身で通るといふやうな ために結婚するなれば、一人の男に身を任せ 女が獨立し

得るやうに發達して來て居ります。のみなら で若し之等女工に同盟罷工でもされようもののは當然であります。之はどうしても婦人自 結婚して親となる資格を備へて居るも、失戀 ず、工業界に於ては百萬の職工中六割は女工

くなつた、即ち現代に於は女は家庭を守る事 るな本分であると極ると精神上の獨立自分の を本分とする事は出來なくなった。家庭を守 のやうにぢつと家庭を守つてゐる事が出來な になってゐる、之等の多くの婦人は今迄の女

生活の維持

はその習俗に服從すべきものか否かを質問せ に起りつ、あるのです。そしてそれを解決せ て居りません、かいる問題が未解決となつて 中心として生きて居るのではなくて、自我の ればならなくなりました。然し男子によつて ても種々の難問題が婦人界に起つて來る。現 も女によつても未だ決定的な答案を與へられ ゐる間は婦人の煩悶、親子の反目、夫婦の感情 タやノラの芝居を見て の冷却は終始つきまとふのであります。マグ 事があります。斯様な次第で之からはどうし

若い男女が

を完全に知る事はとても出來るものではあり には父性の生活を女子には母性の生活を經驗 ません、從つて満足な解決を下す事の出來の **騷ぐやうになつたのは、共鳴する煩悶がその** 胸中にあるからであります。けれども如何に 立派な男子が一生懸命老へた處で、婦人の事

なら日本經濟界に大影響を及ぼすといふ狀態 身が解決せればなられ事と考へるのでありま すっ ○讀賣 永井柳太郎氏〉

非母性中心説の

結婚の制限

が出來ぬのみならず、家庭迄破壞して仕舞ふ 奥謝野晶子氏の婦人評論があつた。その要旨 言はれた。けれども私が思ふに、女は母性を れた。トルストイ翁は男の本務は人類の幸福 生活の中心要素は母となることであると説が は下の如くである。「エレン・カイ女史は女の せしめない方が却つてよい人達である。また さへ不幸である。まして其等が親となること 經濟的自活力のない男女、其等は結婚するの 親となることは親となる資格を備へて居る人 審性を成長し開展する上に生きて居る。

人が の増加であり女の本務は種族の存績であると は一層の不幸が豫知せられる。其場合には男 と云ふ制限を越えない範圍で望ましい。未成 年の男女、不健康な男女、無智な男女、全く 二月の太陽には「一人の女の手帳」と題した



『妾は母なり』

戦線に死を賭して戦ひつ、あるなり。 り、今し三百選十萬の獨逸兵は二百選十哩の る大戦の報告は宛として櫛の齒を引くに似た 營の天幕内に儼然と座を占めたり。耐を告ぐ 獨逸皇帝は數多き將軍及び幕僚に圍まれて陣

『かの物音はソモ何事ぞや、見届け來れ。』 過敏なりき。言葉は鋭くして凄味を帶べり。 默然として手を拱きぬ。彼は突如卟べり。 一禮して立ち去れる侍從武官はやがて再び獨

なり。

は汚れ髪は雲の如く亂れたり。眼には火と熱 人を還し給はざるべき。カールは姿が有する 田園に歸れ」と告げる。嗚呼、在天の神よ、 「謁を乞ふとや、苦しからず伴ひ來れ。」 婦人は導かれて天幕の中に入り來れり。農

獨帝はいぶかしげに問へり。 とありき 「妾は母なり。」 『汝はそも何者ぞ。』

婦人は怯る、色もなく答へつ。 「何の用やある。」

『何とよ、事の始末を短に語れ。』 『妾は子を求むるなり。』

婦人は直立して暫し獨帝の顔を見つめたり。 やがて口を開きい。

獨帝の面上には憂愁の色流れたり。彼は神經 り續けい。 妾はカールを求むるなり。」

『陛下よ、一婦人の訪れて陛下に謁を乞へる 送られぬ。妾の心臓は破れ、妾の腦は燃えた 妾はカールの爲めに生き、カールの爲めに働 良人はカールの生るしと共に死せり。されど けり。さるを今やカールは奪はれて戦の場に 「妾は巴威パシンに近き小村に住めり。我が

婦と見らるれども氣品卑しからず。されど衣 き数多の軍人を有し給へり。などてカールー『カールを素の來つて、朕が命令なり母と共に を請ひ受けん、陛下は濱の眞砂にも譬へつべ て口を開かんとす。獨帝は遮り止めつ。 v) o 「妾は思へり。冀はくは陛下に謁してカール

殺すまじ。よし殺さるし事あるも此の憂き苦 全部なり。嗚呼妾は行かん。陛下はよも妾を

黯然として――涙を吞める婦人は又しても語 されど弾丸は母なる妾を傷けざりき。妾は遂 『妾は母なり。我が子カールは奪ひ去られわ。母なり、我子を求むるなり」と語れる時衞士 り。嵐も妾を傷けず、雷も妾を痛めず、妾は 姿に近づける時姿の母なるを知りて許し去れ 乘せたり。妾の母なるを知ればなり。盗人の なるを知ればなり。野に耕す農夫は妾を車に 通び行く時人々は妾に食を興へたり。妾の母 に、陛下の陣營に來りか。「妾は母なり、陛下 母なればなり。妾は陣營に辿り來りて「妾は は妾を通過せしめたり。妾は戰場を通れり、 「妾に錢なし。妾は徒歩して來れり、町々な

に悲しみ給ふかを知り給はずや。 戦場の露と消えたりと聞く時御身の母は如何 妾に觸れざりき。 に謁して我子を乞ふなり」と語りし時衛士は 「陛下よ!!陛下は母を持ち給はずや。御身が

沈默は四周を罩めぬ。白髪の一將軍傍にあり 一陛下よ!! 糞はくは姿にカールを與へ給へこ

何となれば評論子は生涯を全通して性慾を禁 道學者ではない。活ける現代の道學者である。 に於ては人生に無意義である。評論子は古の 戀愛(結婚)を葉て、學者になることは評論子 婚)を行はずに學者になることを欲しない。 出來ない。將來に於て求めんとする戀愛(結 であるが、 はない。又基督が獨身であり釋迦が山林に入 飛行機の研究をすることは人類文明の進步で 坂に差し掛つて低空飛行な行ひ、天空から己 獸行翁の如く蓄妾の行爲も倫理學上生物學上 とは出來ない。又遊野郎の如く買女の行為も 壓する非倫理學的非生物學的行為に出づるこ ことが道徳上の一般法である。先天的に戀愛 を説くよりも肉食妻帶を説くは誠の宗教に近 宗教觀は時代思潮を満足させない。女人禁制 が情婦なる藝妓にキャラメルを投下しながら 斷じて出來ない。獨身の飛行將校の如く神樂 (結婚)に不適當な男子だけが之を爲さずに個 想對的個人主義により戀愛(結婚)を實現し此 つた故事を取り出して父性中心説を非とする 父性を中心として個人の諸能力を發揮する 、の諸能力を發揮することが道德上の特別法 男子は慾望の統御の上に理想を構成して 父性中心説を葉てることは絶對に も真理である。女子は母性な中心として諸能 生の目的になる。男子が生活難結婚難のため に於ては父性が中心となり女子には母性が中 同的本務である。たい生殖分業として男子は る。人類の幸福も種族の保存も共に男女の協 の特別法である。トルストイの言は誤つて居 れに依らずに諸能力を發揮することが道徳上 力を發揮することが道徳上の一般法であり、 は出來ない。此の論は推して女子に適用して である。この特別法を以て一般法を使すこと に娼婦を買って性慾を滿たし、六〇六號を注 の發揮を分擔して居るのである。そこで男子 食物に關する營養攝取及男性的精神の發揮を 先天的に戀愛(結婚)に不適當な女子だけが之 働き、共に白髪を載いて此の世を去るよりも 心となつて、自我の諸能力を實現するとが人 分擔し、女子は生兒哺育家事及び女性的精神 する方が經濟文明を促進させるに貢獻める。 三面六臂に子を抱き親子枕を列べて饑死往生 母性中心の説に幸由して登窮糟糠を共にし、 のために淫を驚ぎ腰部を切開しながら社會に 射しながら社會に働き、女子は生活難結婚難 與謝野氏が我が國の人口の增加を憂へるなど 天然自然に基く兩性の生活に入り、父性中心 は經濟上皮想の解釋である。世界を通じて各 國の統計を見れば解ることであるが、 ない。これが最近經濟學の新研究である。與 人口を濫造しても世界に過剰を訴へる道理が は現在に幾十倍する成算がある。夫婦は幾ら 害毒である。資本と勞働の調停を得れば富力 本の集中は華奢淫逸の源であり、産業發達の 者の續出するは資本の集中の結果である。資 増加は人口の増加に超過してゐる。然るに貧 族主義に於ける親權者の罪である。 未成年者が結婚するは結婚の罪ではなくて家 ではなくて教育を與へない社會の罪である。 罪である。無智な男女が結婚するは結婚の罪 婚の罪ではなくて社會の不完全な經濟制度の る。經濟的白活力のない男女が結婚するは、結 どに依つて感想して居ては非常な誤を生ず 謝野氏は經濟學を繙かずに新聞記事の俗論な て斯かる悪質の遺傳を興へた親の罪である。 な個人主義に基く戀愛上の母性中心説を非と 中心説を非とするは世の謂ゆる家族制 本的問題に觸れないで單に結婚を非とするは 不健康な男女が結婚するは結婚の罪ではなく く賢母良妻主義を非とする心であつて、賢明 大なる謬見である。要するに興謝野氏が母性

母性中心説を加味して此上人口の増殖を奨勵 母良妻主義に人間の活動を束縛する不自然な ものである」と。 するやうな輕佻な流行を見ないやうにしたい 反省せればなら的時に臨んで居る。舊式な賢 ある。私達は寧ろ此多産の事實に就て嚴肅に 或は國力に比べて増し過ぎると云ふ世評さへ んで毎年六七十萬づ一の人口を増して居る。 て居る。我國の婦人の大多數は盛に子供を生 以て攻撃し、母性中心説を唱へることは誤つ カイ女史のやうに一概に「絶對の手前勝手」を の自由に任すべきものである。これをエレン・ 蟲と卵球との成熟によつて醸成される個人の 避けて居るのである。此等は全く其の婦人達 に質現し得る處からわざと夫妻父母の生活を 類の幸福の増加――をより自由に、より猛烈 い方が却て他の事に依つて人間の本務――人 居るのであり、或は結婚もせず親ともならな 其れな豫防する摯實の必要から其れな避けて なることにみづから一種の不幸が豫知せられ を避ける人達がある。其人達は結婚して親と 教育家、飛行機家、看護婦などのやうに結婚 まず、職業の關係から學者、宗教家、探險家 とか、孤獨な好む性質とかに依つて結婚を好 業――が人生の中樞になる。此の性的生活を **慾であるから、男女の性的生活** 存在及び其の文明の根本的原動力は個人の性 を發揮實現することである。けれども人類の

によって發展するのである。此の發展は一は なければならい。蓋し個人は男性個人と女性 る。社會は此新個人の衆合であつて新陳代謝 個人との結合によって生じた一の新個人であ 歩を進めて男女の性と個人との上から研究し 説と併せて考察しなければならない。更に一 思ふに此の母性中心説なるものは父性中心

肉體の進化であり、一は精神の進化である。 人類の文明及び福利はこの個人の肉體及び精 活、國家的生活、國際的生活に關する諮能力 的生活、男女的生活、家族的生活、社會的生 揮實現することにあるから、具體的には個人 は抽象的には個人の自我に於ける諸能力を發 意識に於ける性慾である。それで人生の目的 活である。其の人生の中心的原動力は實に精 神の生殖的永續によつて構成される理想的生

中樞として家族社會國家國際の諸生活が纒綿 して始めて人生は意義な齎らすのである。 性慾と人生

晶子氏の謬見

に與謝野氏は之を否定するのであるから、自 其の眞理は前者にある。エレン・カイの母性中 (良妻賢母説)又は父性中心説である。 意志に基く戀愛(結婚)生活に立脚する母性 母性中心説及び父性中心説は前者に屬するの ない。即ち個人の性慾を支配する方面と支配 ら非倫理學的非生物學的謬見に陷つてゐる。 同論であり、頗る學理的のものである。然る 中心說又は父性中心說と、家族主義により親 範となり後者は不道徳的行為となる。而して 然とは買女、蓄妾、密賣淫、姦通、强姦、誘拐 體たる性慾の上に理想を構成しなければなら 心說もこの吾々の倫理學及び生物學的見解と の意志に基く傳習結婚に立脚する母性中心説 である。けれども之に二種ある。個人の自 等である。前者は晋人の行爲に於て道德的凱 かと云ふに一夫一婦の戀愛(結婚)であり、嗜 でらる、方面に分け、前者を理想となし、後者 を嗜欲とする。そこで其の理想とは何である それて人生は先づこの男女の性的生活の 而して

否人は結婚な要求す

-生殖的事

結婚もせず唯學術に身を寄せて居る者である それで自分は學者として世に立たんとする者 評論子は一青年であつて、まだ戀愛もせず

先づ件の女教員は選夫を過つた。戀愛によっを知らなかつた。その結果は何うなつたか。 み成就し、親又は親族會議の媒介結婚又は許 の孰れずに決定歸 可結婚に基く結婚道徳は家族主義の人格者に 自由結婚は個人主義道德の人格者間に於ての か當人が親又は親族會議の意志に從ふか、其 かつた。親又は親族會議が當人の意志に隨ふ の道德を遵守して、総令親を葉て、兄弟を葉 即ち戀愛上の人格者たらん爲めには個人主義 て選夫を爲すならば其人は當然の事由として よつてのみ成就する道德的大條件の存すると 存するとを知らなかつた。そこで戀愛に基く 結果は何うなつたか。海軍將校は此の女教員 察方法に関する道徳的知識がなかつた。その 此重要なる觀察方法を怠つた。否な、この觀 と夫婦約束を爲し、同棲したに拘はらず、彼 であることが大要件である。然るに此の女教 ることの出來ない男女道徳上の根本的人格者 以は其の海軍將校の人格を理解するに際し、 上官を棄て、君を棄てるとも、妻を寒て 一する物理的數學的公式の に、戀愛結婚に對する彼れの態度は無知識で 從ひ戀愛を生命靈魂として奉ずる人格者とは 個人主義に於ける人生の意義より男女道徳に み、夫婦約束を爲して同棲した結果となり、 て、性慾の動物的要求のために結婚を申し込 其の夫婦約束なるものは一片の出來心であつ あつて男女道徳上の自覺がない男であつた。 れは個人主義道徳上の人格者で無かつた為め うか。」などと泣き言を列べるは飽く迄も不明 族主義道徳上の人格者に化したのである。そ 無知識である。假令女の方で戀仲であると號 少しも怪むに足らの事件だ。然るに「同棲まで 弊履の如くに棄てる結果になつた。これは無 の海軍將校は親族(或は上官)の意に從ひ、家 雲泥の差、天淵の隔りであった。その結果そ の保護によって男の愛を引き戻さうとするな ひ狂ふなどは愚の骨頂である。況して法律上 を失つた男しかも己れを薫て、去つた男を慕 ならば全く他人同志である。己れに對して戀 ても出來ません。法律上結婚請求が出來ませ した戀仲です。・・・私は別れることはどうし れが為めに其の將校は友人な介して女教員な しても男の方で既に無用で御座ると宣言する 知識者同志に到來する自然的理數であって、 れる身分であつても、男女の關係に於ける道 試験が其他の資格學校出身者であらうが、 教員と云へば女子高等師範で女子大學で檢定 色魔であつたことも自ら明になる。 るから、総合女學校の敬壇に立て先生と言は く戀愛は絕對に罪惡として禁じて居るのであ 初かつ此の女教員の貞操を弄ぶ方針に出でた か云ったのは彼れの捏造であったならば、當 い。若し此の海軍將校が親族會議とか書面と 全であるかを證明して餘りある。〈評論子〉 なるので、 た餘り新聞記者に身の上相談を持掛けるとに 徳に就いては無教育者であるから途方に暮れ 男女道徳に闘する個人主義道徳の養成所でな 目の諸學校は家族主義道徳の養成所であって 如何に現代の女子高等教育が不完

弄ばれて葉てられたいけで永久に其汚辱を洗 る。この女教員は數目の間海軍々人に直換か よつて統一されて居る我國の民法には失戀者 どは愚婦と申すものである。家族主義道徳に る大菩提心を發して、男女道德の人格者に復 人が軍職を棄て親を葉て親族朋友を振り棄て 望である。爾來我が國の軍人には好色家が多 活したならば兎も角く、さうでない限りは絶 て、此の女教員を抱いて生涯を共にせんとす 滌する見込のない者である。若し其の海軍々 を保護する條文などは一箇所も無い のであ

女學校の

となつて其根本動向の理想的性的生活に猛進 して差支ない。(評論子) 陰陽の和氣に富む春日野に於て、花となり蝶 が、青年男女は斯る老婆心に辟易せずに、此 の結果として思はず結婚を非とするの論に出 る。これも中老婦人に於ける性慾の惰性によ れば、さうした矛盾の言説は申せない筈であ でたのであらう。之も一種の老婆心であらう 方面のみが枯骨に泌めて來たので、變體意識 た見聞しても感傷する所がなく、

単に苦痛の つて潑剌たる觀念を失ひ、他人の戀愛(結婚) するの心ではなからう。氏の如き斯道の先達 事實上母性中心生活の大なる者であつて見

男女道徳の知識

女教員の身上相談

婦人讀者の參考に呈して他山の石としよう。 の身上相談が出て居たが、それを弦に轉載し て之れに對する評論子の所感を述べて、本誌 員をして居る者でありますが、一海軍將校 と知り合ひになり、久しく手紙の交際な續 二月九日の讀賣新聞の婦人附錄に一女教員 私は實家を遠く離れて或高等女學校の教

知れたら罰せられますでせうかへまさ子) は教職にある身、今迄の二人の祕密關係が 上結婚請求が出來ませうか。又彼は軍職吾 別れることはどうしても出來ません。法律 劫に無くなりますまい。てなくても私には 此儘別るればよいやうなもの、其汚名は永 んで來ました。同棲までした深い戀仲です 道徳となる道徳的規約を知らなかつた。そこ 友人を賴んで二人の關係を斷ちたいと申込 待つ事にしました。然るに近頃になり彼は 餘儀なく二人は法律上自由結婚の期日まで 手紙を出しましたが質家では許しません。 書面がまぬりました。土官は何度か反對の り、親類會議の結果縁談取消を願ふといふ す。所が此事あつて間もなく青年の實家よ 過しました。此事も私の兩親は知つてゐま して歸らず其儘私と同棲し樂しい幾日かな もう二人は公然夫婦になれたのだからと申 擧げる相談は未だ出來ませんでした。士官 けてゐるうちに相愛の仲となりました。私 はこの冬休みにわざし、私の下宿に來て、 承諾を得、兹に婚約が成立しましたが式を に打明けた處が親は快く承知し士官も親の はその士官より結結を申込まれたので兩親 社會には根本的に相容れざる二大潮流の存す り、孝道は家族主義の道徳であつて、個人主 ることを此の女教員は知らないで居た。即ち の生活に入る知識もなく、退いて舊道徳の 徳との中間に立つて居るので、進んで新道徳 親又は親族會議の許可を仰ぐなどは大矛盾で 愛を行って居ながら、家族主義道徳に屬する 實を知らなかつた。個人主義道徳に屬する戀 質が木と石の如く黑と白の如く異る道徳的 介結婚又は許可結婚に基く結婚とは、其の性 で戀愛に基く自由結婚と親又は親族會議の媒 義では戀愛が道徳となり家族主義では孝道 無かつた。そこで戀愛は個人主義の道徳であ 主義の道徳とに對する正確な知識が此の女に 個人主義(社會的なる個人主義)の道徳と家族 び結婚に関する道徳に就いて、我が現日本の 第一の原因である。何となれば男女の戀愛及 せざる道徳的態度が此の女教員が身を過つた 奉者たることも出來ない人である。

此の徹底 養されて來たが、實際に於ては舊道德と新道 先づ此の女教員は男女に闘する新道徳の

評論子の所感

あつて、極めて不明なることを自覺して居な

泉となりしがごとく、六箇條の新宣言が大正 維新の源泉たらんことを吾人は冀ふものであ に對しては寧ろ哀れを感せずにはゐられませ てこの宣言が五箇條の御宣文の明治維新の源 SU生 の出來る程しかく遊戲的のものではありませ

煩悶の友に答へてキリ スト教の属義を説く

には少なからず刺戟せられた事を感謝致しま せん。けれども兹にこそ人生の向上と發展が 人生に對する愛兄の真摯なる修養の御態度 して止まの限り之に伴ふ苦痛は永久に止みま

されば兄の實驗せられつ、ある苦痛は決して ない迷びの中に苦鬪一日も怠りないのです。 主、人生の神秘、不可解とさへ斷ずる事の出來 題には私も迷ひに迷 うて 今も猶ほ宇宙の幽 有してゐません。のみならず兄の迷ひ給ふ問 御質義に對して解答致す程の實驗と悟りな 尊敬を拂ふ事は出來ません。何となればそれ きものではありますまいか。 は人情の否定者ですから。 經驗せざる悟り切つた人に對しては心からの 私は迷ひなき人、悲哀を知らの人、苦痛を

しむる事もあらうと思つて筆とりました。 上げるならばそれがやがて兄の奮闘力を増さ 孤獨でないのです。それで聊か私の實驗を申 お説の通り我等の精神の深き所に於て行は

ん。私も兄と共にそんな無雑作な世の覺悟者 精神です。さればキリスト教は、苦痛や、 エスキリストの精神が即ちキリスト教の真の 安、悲哀、寂寥を拂拭し去るものでなくて、

め給うたのである。此信と愛との抱合せるイ

事によつて生じます。而も無限の理想を追求 して此の要求は不滿や不足、矛盾衝突のある こそ人類本來の面目ではありますまいか。而 烈なる意志の要求をもつてゐます。この要求 人は根本性に於て無限の理想を追求する剛 美化して之が價値の保存たり創造者となるの たれりと意ふなかれ泰平を出さんとに非ず、 却て之が友となりて、之を深化し、純化し、 ではありません。「地に泰平を出さん爲めに來 です。或宗教の如く安心や怯悦、歡喜の方便

ではなくて、變化の中に、向上の過程に、思 慕湯仰の辿りに、人生常住の真姿を見出すべ あるのです。して見ると結果に生くべきもの うて循伝奮の戦ふ力、これをこそ願ふべきで 悲哀を取り去れよと願ふべきに非ず、之を頁 双を出さん爲めに來れり。」と、何たる壯烈な 宣言でせう。我等は我等に加へられたる苦痛、

せう。我等はどこ迄も人生の事實に對して大 は與へられたる苦痛を味はひ得る程の深刻な れが正しくキリストの精神です。されば我等 がらの面目を發揮せしめればなりません。こ 膽で真實でなくてはなりません。そしてさな る精神を有する事を感謝して宇宙の生命に徹

宗教は人情の肯定者でこそあれ決して否定 する迄の忍びたいものです。御自愛専一に祈

ります。(原田長治)

るは正しき人を招かん爲めに非ずしといって 者ではない。キリストイエスは曰く「我の來

庭や、金や、名や、位置によつて拭ひ去る事 れる戰ひ、そして其度に流す鮮血、これが家 んとする價値を引き戻し更に神の子とならし 病ある人、罪ある人、弱者の如き正に消失せ

丰

栾

協會の宣言

界の注目を引いたが、 發表演説會を開いた。 發表し、 てある。 紀元節をトして神田青年會館に於て 心涵養に關する宣言を發表して教育 者階級より成 その記事は別欄に掲載 此度又次の如き宣言を 3 一協會は

参興するの道 0) 0 は國際正義 精神を振起し、 進展に寄興せんことを要す。 が國家に對する本分にして世界の進運に 0 進 東洋文明の代表者たる質を擧げ、外 質に此に淵源す。此宏謨を 取 小は建國 の擁護者となり、 亦茲に存す。吾人は大正革新 内は國家成立の本義を發 以來の 國運の伸張な圖るは吾 宏謨にして明治 大に世界文化 充し、 維 機は國際關係上、 0)

左の要項を決議して之を世に發表す。若し行するの覺悟なかるべからず。本會は爰に て内外の形勢實に重大なる時機に際會せる するの覺悟なかるべからず。 自他の人格な尊重し、 的を成就せんが爲めには國民學 同心協力、奮つて此の國是を遂 目に至りては着々研究を遂げ、 國民道徳の基礎 を宣するは時勢の一進步であると認めればな なる意見と見做すことが出來る。吾人は年來 さればこの宣言は我國の識者階級の穩健中正 30 重なる協議と討論を經由したるものである。 は此宣言を發表する迄數回の會合を重ね、叮 遭遇しついあるがためであらう。同協會々員 いる方面 今や歸 一協會が卒先して天下にこの大義 日本民族が重大なる轉機に L 來たつたのであ

忘れてはならわ。

に於て、之を聲明し、解釋し、敷衍することを

願はくばか、る努力により

に於て、宗教家は會堂及び寺院に於て、記者は

之を聲明することが大切である。

教師は教場

その新聞と雑誌とに於て、政治家は演説會場

及ばず、

要であらう。のみならず同協會々員はいふに 生教員を會合して此宣言を説明することも必

之に賛成の人々は各自の立場に於て

は適當なる講演者を主なる學校に派遣して學

時として

公共の精

の發達を期すべし。 自發的活動を振作 す 3 F 同 時に組織

精神的文化の向上を圖るべし。 盛にすると共に、堅實なる信念を基礎とし 般の才能を發揮せしむべし。 科學の根本的研究を奨勵し、 學風を刷新して教育の效果を舉げ、 其應用 か 各

30 同協會が前記の宣言を發表するに至りたる動 會は研究の結果として歸一せんとする者であ ると考ふる人も少からずありと聞く。歸一協 員の思想混沌として不歸一を極むる團體であ 或は同會員は既に一種の信念に歸一したるか 如く思はれ、 歸一協會は往々にして世間より誤解せら 護 ふし、 歸一は出簽點にあらずして結論であ 大正五年二月 國際の道徳を尊重し、 以て立國の大義を宣揚すべし。 或は名は歸一なれども實際會 世界の 不和 を擁 る。 囘講演會を開くことが必要である。 催することが必要である。歸一協會は折々巡 發表演說會のごときものを全國概要の地に開 が國内のあらゆる階級に普及すると思は、大 なる間違ひである。歸一協會はよろしくその

神を涵養し以て憲政の本旨を 的 この 宣

ず、政治家は教育を重んぜざる弊がある。又科的とならんとする。又教育家は政治を顧み 義は動もすれば偏狭となり、 學者は宗教家を嫌ひ、宗教家は科 閲體主義者は輕薄に流れんとする。 有する一切はこの根本に於て統一せられなけ の宣言は有益なる結果あるべきを疑けない。 は必ず和合協同すべきものである。歸一協會 む傾向がある。是れ皆過れるものにして兩端 ればなられ。然るに個人主義は孤獨を固守し、 と字宙の大生命は一つであれば相對的價值 き對立する者を統一融和してゐる。 然れども單に宣言書を發するのみに此精神 言は個人 主義と國 國際主義は空想 教と 學者を惡 又國家主 もとも

	等高部節師		部	學	大	目
大正	第二部	第一部	科豫等高			
五年	理數	英國	理	商文	法政	和
车三月	化	語漢	I	學	治 學 經	加出
	學	文	科	科	濟	
	學	科科	採機	(哲學、英文	科學	
東	科科	科豫	建電祭	科學	英强 科	
京	ニケヤ	豫科生ケ年	(四期に)	- 13K	三大學が	
*	年 参る尚			- 1	宇部 中	庭
早	錢べは 封し詳	一のご目節ま	に記れて記れている。	八八八	學 高高 程等等	
	入°細	土無無	でり核	E 試他	度師豫	生學
阳	上規各請則科	午試話	门力年	BERCHEN .	校部各	-3-8-
H	水書事せ入務	八扱一	。 徐行ひ	高十	業一第	办下
		選絕日	上年	豫日	は科期	AE
人	べ向照	試其心驗他跳	月修	是理心.	月二	7
學	。郵せ	。はず	Secretary 7	:科前	無年	

編輯 の後

口編輯中に相原氏が風邪に罹つて二三日呻吟 抱いて笑った。 しみで居らすった。」と言ったので一同は腹を つて居ると、「此方は死にし行くのに・・・御樂

四七〇。相原方編輯局宛

社

物と出掛けた所が、間の悪い事には向ふから ちやないかと云ふので相乗車に乗つて市内見 願つて居ると、中々許れなかつたんで逗留し 争を視察して來ようと思つて廣島の司令部に 言つて笑つた。岸本氏が云ふに「僕が日清戦 これから演説で名を揚げるんだな」と。六合 だ」と結んだので「成程!」と一同はドツと 間から岡田式~~と言はれることには御免 會の折に、岸本氏は十八番なる岡田式静座法 編輯會は毎月一囘づい開いて、雑誌に就いて 直ぐ婚約して、何處が此邊を少し見物しよう に品が無くなる」と。相原氏は「岡田さんはこ て居たが、其中に女(今の夫人)が出來たんで、 座法無用論を唱へ岸本氏と押問答したが、「世 の説明に及んだ。隣席に居た岡田哲藏氏は何 文教に貢獻する方針で努力して居る。 で默つて居られよう、乃ち横鎗を出して、静 いが、弦に二三を書いて見よう。一月の編輯 諸般の評議を爲し、現代思潮の燈明臺として 隊の兵士を率ねて此の岡田さんがやつて來 一同人間の消息には珍談に富むものが頗る多 間もなく全快したので幸であつた。 を拔いて斷り書きを添へたら何うだらう」と。 と皮肉り、隣席からは「岡田さんの寫真だけ たのでおぢやんになった。其の理由は「雑誌 社同人の寫真を雜誌に出さうと云ふことが同 ださうだらと驚歎してから、く僕もなんだ・・・ いしことれえ。これ一枚書いて千圓位取るん 這入つて來られたので「まあこれを御覽ん! たので一同はアハート。この内ヶ崎氏は竹 「宮中席順は何の邊ですれ」と來たので岡田氏 ながら「從五位・・・」と答へたので、一同はク れで讀者から二十四五に見られてるからな 人間の輿論となったが、岡田氏は極力反對し 内栖鳳氏の書譜を買つて來て子供さん達に見 は位は何ですれ」と訪れると、岡田氏は苦笑し せながら其妙技を談じて聞かせたが、夫人が

は苦しい聲を出して、「男爵の上・・・・」と答へ、義に立つものでありませんから、相成るべく スーへして居た。内ヶ崎氏は更に問ひ掛けて 東京雑誌組合は四月より定價を二割以上增加 二月の編輯會の時に內ヶ崎氏が「岡田さん 騰を示し、印刷費は三割の増加となりました。 することに決しました。しかし本誌は營利主 れ一人でも多くの讀者を作らんことな懇願 讀者諸君に於ても本社の苦心に同情を表せら 讀者諸君に迷惑をかけたくありません。よつ 價は騰貴致しました。ことに紙價は十割の奔 に於て一飛躍を試みんとしてゐます。どうか を精選し内容を豐富にして、その試煉の機會 せん。されども此機會を利用して記者は材料 本欄以後の紙質は多少粗惡となるかも知れま て定價は現狀維持として奮鬪します。しかし 大戦間の影響は愈く的面となりました。

大正五年三月一日

たします。

たのさ」と。一同は岡田氏が何と言ふかと待 口本誌原稿締切毎月七日、東京市外巣鴨町

六 合 雜 誌 社

集 慕 徒 生

第

以

F

豫

科

本

科

共各若

干名

業

科

督

文學

果

平

佐

藤

清

時教

論界

惜播日

加者學

藤の校

博多振

士し起

人同

 $\Delta\Delta\Delta$ 宗宗加

致敏藤

研算博

究重士と

起要秋

る望水

人同

實

山

本

龜

市

語 師 文 範 科 科

英

等

高

規 四 月六 剛 書 は 日 郵券貳錢を要す 午 前 八 胨

车 壹 百 五 + 名

三囘年顧

△松尾、 △栗

古 古 信

市 市

兩氏に與ふ 兩氏に與ふ

原

△同

人諸君に哭告

學

部

鑑

賞

的

仰

牛

活

敎 學

評

記 創 念 立 號 週 出 年

公壇 太陽未 一共鳴 吾等 だ昇 カゴ 心 感激 らず

(後付

宮 中 谷 自 古栗松 學生諸 島 市原 井 尾 諸 春 保 勝 美 君 潔 衞 君 彦基秀

營

時 社 論會 明 新小憲 殺口政 期 育保教 0 會險を 修 々官起

長營せ 味 人同 $\Delta\Delta\Delta$ 學學高 者生襟 る風共

栗 の紀に 原

人同 基

條一新市都京入東路小里萬 明 社

圌

H

哲

藏

著

和

文

價

#

錢

運

稅

錢

錢

(後付)

和 英 英合本 文 價四 價 # + 錢 郵 稅 稅 四

I thank youvery cordially for so kindly sending me your fragments. They are original, shrewd and fine. I greatly enjoyed reading them.

Many thanks for your "Fragments," which reached me yesterday. I have read them with great interest and sympathy. Somo that I particularly liked were "Twice in Life," "Additional Nerves," "Reputation," "Cruel Competition." I received the book on my 43rd birthday, so according to you I am approaching the "Critical Age." In another year, shall I be deaf, or blind, or mab? The last, I expect.

Bertrand Russell.

「斷方」によりて著者を知り、更に深くその傾向を知らんとせば、その論集 「靜觀と思想」〈警醒社發行價八拾錢〉を讀まるべし。 東京市芝區 H 几 國 HT 雷振 色話文字 五一

統 基督教

傳道 拜說 講 演 教 午每 午每 前日 後日 十曜 七躍 時日 時日 (當擔) ____ 諸 並

基督教 交 公哲學 會 午毎前 午每 九時中曜 後木 七曜 五分日

靈

馬可傳を講ず、

猶會員諸君の信仰告白、

宇宙、

人生等に對す

る質疑等有りて頗る有意義の會合也

Ξ 並

良

家

永井柳太郎、 安 一 時作三郎、安

安部磯

l東助、相原一郎介 雄、岸本能武太、

郎介等交代

岡

田

哲

良

Ξ 並 良

時日

家

日曜學校

前日

九曜

時日

五歳以上の少年男女の入學を歡迎す

織 郷

信 基

す。

御遠慮なく の集 御聽きになることが出來ますか りにも又、どなたでも自由に御 御來會下さい。 歡迎い

出席、

E"

滿

す。

芝區三田四國 統 町芝園橋際

五八五五番

會集會案

禮 拜 競教 〈毎日曜日、 午前十時)

て擔任す

組

會は 信仰に對する疑義を糺し大に共進互各會員宅を巡回して開き會員相互の げんとするものなり 昨年六月成立し主とし して開き會員 7 親睦 琢の實を 神田 を計 本 學

小 仰 せ く團體なり、 を 5 石 宣傳 れ自由 Ш 牛込等都下北部の せん 基督教の立場より とする高潔な 同感の士 0 來會 人 3 士 を 友 包 容的 公情 り組

よ

田錦町 自女子 音樂學校內

神

督

厘五錢一税郵錢廿金册一價定 錢十四圓二分年ケ一錢廿圓一分年ケ牛

九

中

#

史

を

讀

3

文學博

士

0)

P

デ

田

司

號

月

介那

國

民

性

我

民

尉 理

行發日一月每

新 紹 彙 報

如

何 0 ス

佛 神 頃

敎

か

觀 學

> あ

3

平

惠

勝亮

精

生

理

訊 1

る所 謂 A 種沂 S の代 評思 生

A.價潮 S

料

す

目東 錄亞 威木 力博 ᇓ 光 術 讀婦 戰 九 爭

故 藩 敎 詩 0 靈 0 教 化

博

學

博

明 族 事 集 1= 就 ह

> 武 藤

野 圌 哲 辰 長

京東座口替振

伸

込駒區鄉本市京東 地番十五町木駄千 後付四

ベ▲り▲りな▲是も坐に査の榮し▲

り本非知なはし爲と中本

寫書一悉が日ためすに書

真は部しら本る出るはは

は千を得に各を張所謝曩

初百座るし地以のな狀に

版餘右のてにて序りを第

揭頁に便米散兹太本送

增 愈 訂

出 再 來 版

載の備利國在に平所り版 も頗りとののれ親事弊好 し消外りし業所評 て息更本く視のを はをに書調察光博

の仮を引 42 0) 電東 7 所 の四へあ各せ増洋長越に 提 ---語京 速口 外六ざる地る補沿昨さ於 月 發座 新市 供 在版るもに二再岸年れて 中橋麴 送東 す 米クベの奮萬版百米し各 -**— III** す京 諸ロかな鬪餘を餘國人位 旧 五 八五四番町 錢 先しられせの登のに々よ L 日 M 滿 迄 の金る基態なす會けり非 鮮 0) 申 寫文良督多るるをるた常 毫 後 文文 込 真字書信教教に訪興るな は 定 を入な徒友友至ひ信はる へ御 0 各參 僧 御 拂 42 方 揭る 込 復 12 載美 Z せ麗 す 限

基

督

敎

真

理

0)

基

礎

を

確

定

す

る 0

方

法

乞御

ふ注

御文途 申の料

上 的地

+

順は

に可

よ成

所

長

し金特特

二別價

圖割定

二引價

金

三圆

+

Ŧ.

錢

題 定 めて 豫告すべし)

目

を

最

初

數

囘

題

目

次

0

如

L

其

以

後

は

適

宜

毎

调

H

曜

日

午

前

九

時

時

迄

基

督

敎

と歴

史

主

義

(五)(四)(三)(二)(一)基 基 基 督 督 督 教 翰 敎 と宗 と絶 E 超 自 對 敎 然 的 110 宗 理 主 主 敎 義

義

教 弘 道 會 教 育 部

Ξ

並

良氏

擔

當

統

後付 七

	ПР	ーマ字書きの二雑誌□
本年一月號	刊家庭	毎月 園 R O M A の 数行
各家庭には是非なくてならぬ雑誌!價から内容體裁の上に一大改良を加へま		□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
	0	と出ん韻(第物にの宗皇上爵の忠し、 第一本とに記し、 日本とに記し、 日本とに記し、 日本とに言いました。 日本とは、 日本とは 日本とは、 日本とは、 日本とは 日本とは 日本とは 日本とは 日本とは 日本とは 日本と 日本と 日本と 日本と 日本と 日本と 日本と 日本と 日本と 日本と
	p	
	1	が は 大 を 型 を を を を を を を を を を を を を
は非常に	7	文 科
四六版の繪入の可愛らしい雑誌に低廉	字	大學助教授 士 大學助教授 士
	一年分金五十錢	植鳥川宮蒲木福石水日下丘石成谷
		松部副脇生村工井野部木川瀬
		太櫻義俊久次柏太太太黃代仁
です。		安郎喬臣文一郎亭郎郎。太松藏
		定價一部送料共十三錢圖一年分一圓四十錢圖

發行所 東京市 ローマ字ひろめ會 振替東京九一電話本局五二五六

(後付六)

置置馬馬

(編五第)

(編四第)

(編三第)

文

學

士

宮

本

和

吉

著

定四一次

圓版

一十錢途料八錢三百六十頁

校第

教高等

授學

文學

士

速

水

滉

著

定四 儨

圓

二版十

錢四

料百

八錢頁

倍配能成

文

學

士

安

著

定價一圓二十錢途料八錢四 六 版 四 百 頁

刊近

刊 近

番〇四二六二京東替振

店書波岩

田神京東町保神南

TI

兌發

新

御

な

振

御 金

拂 は

込

み下 成安

す書 かっ ら元 送 料 發 御 を 添 涘 0 9 び 2 な 3 3

書本 合 替 巫 社 は 宛 を は す 3

は 3 御書

誌

營

話芝五八五五

御料

下

料告廣誌本 普 普

表紙 巴

價 特 臨海 等 册 通 時外

版稅

際册

はに

規付

金六

錢

清國を除

定以

外の

代金を申受く

0

表

紙

四

定 誌 本

壹 册 册 號は 半 出郵

ケ

年 年 月

前 前 金

金質圓 金壹圓

武拾錢

郵 郵 郵

稅 稅

共 共 錢

分 分

拾 拾

 $\overline{\mathcal{H}}$

ケ

漬

錢 錢

稅

通

頁 頁 頁

金

圓 圓 圓

金拾貳 金貳拾

日發一行八日印刷納 行本 毎 月 巴 日

行

大正五年二

月月

一片

以

E

連續

揭 頁

出 以

0 下

際

は 廣 半

特

别 御

引 申

仕

候

割斷

匹

面

は

0

告

上候 可

發

海

男

東洋印刷株式 基督教 弘六 定 會 道 會 祉

印

刷

所

行

所

即 發

行

兼編

輯

人

四國國町 五八五五番

所

三東田京

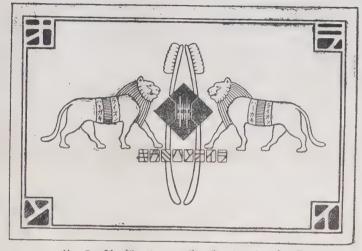
後付八》

蕊 雜 令 六



MINNONES OF THE MINNONES OF THE PROPERTY OF TH

號 月 四



外 製 15 際 0 粉 は 齒 才 1 ラ あ 面 生 學 士 紳 0 製 水 製 煉

振替口座(東京)八七朝名

關鍵分

東京市神田區表神保町七番地

撃むべき眞人の感想繇は今や世に現はれたり。體験と省察實感と心通じて人間圧否のまことの悲しみと喜びとや味護を答打って飽くことなき真摯なる現代人の嚴肅にして深刻なる思索と者の腐らざる心の囁き心聞いんとする人は來れ。永遠に自己の劣弱性愛と真理の王國や望んで愈々刹那と精進の歩を緩めざる若き人道主義

せんとする人は來れ。



初塵者も参考とすべき最も要を得たる良書なり。」者者の専攻たる支那哲學を顧る平明に聞きたるもの -(東京翌日評) 般學者及び

芯 100 ADDH 出 賀正

Ш 叫

東 京 高 等 師 範 學 核 : 東京帝國大學文科大學

ቛ稅 正價金七拾五錢



博せる草と好評を

よのであることか想ふ時は私は一層その不具なる人類の運命や悠はらずには居られない。いものであるとしてもなえたれか呪はよい。それが自分の生に對して奥へられての唯一のの心の他には何の希望もあり得ない人間に與くられた選命が暇い淋しであらうと現立であらうと見現實を食り現實を懷いしみ現實を悲しむなってた終機せしむることを允されたる者にとりてはそれが暗過去を知らず、たい現實の魔と現實の肉とにの今彼れの



吉田松二即新著 早稻田大學講師

明日と言はず直ぐ御實驗あれ

主治效能

粘

神

婦

7

病

孙一經一衰一弱 精一力一增一准

の一小一藝



をり

て新

耐な

衰し 弱

結は

動來

此

有選

劑病

幾源

多哲 管先

红

社同 ば病

盛頒

なち 6以驗生



理 店 元 東

他

電 京 福 iii Till Tr f



の犠牲

n

虚 心集 碧 哲 六

九頁

79

咸

想

噫松枝實麿君

文學博士

中佐 力木 **貳綱**

> 六 六

五頁

=0

星古 內 H 島野 絃 周 作 鳳 藏 낈 鳳 三六頁 三五頁 八六頁

婦 人の王國

「嫁問 論 鹽歐洲 題 婦人 新使 命 日本と愛との矛盾

結婚問 題 | 真實に生きよ

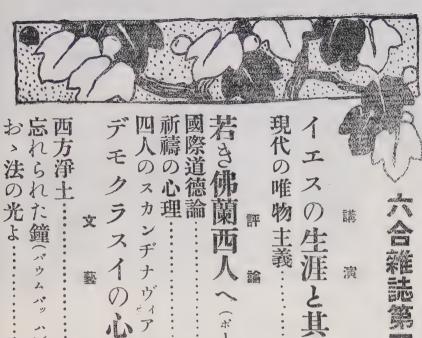
活

現 思 潮

原氏 新 刊 の宗教 紹 介 無用 編 輯 論 0) 後 壬川 13 人消息 博 の科 學的宗教 圖小]] 未 明

0)

小 訊



た鐘(バウムバッ

田鈴坪

中木田

葦芳讓

城松治

七七頁

… 六八頁

臺

學士

木

村

久好

井

五四頁

講 演

	1	1//	
祈禱の心理	若さ佛蘭西人	現代の唯物主義:	イエスの生涯
	(ボール・ブルジェ)、文學士		と其使命早大教授
本宮彌平:		白石喜之助…	内ヶ崎 作三郎…
:四四頁	:- O頁	:三八頁	頁

意 雜 合 六



號 月 四

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 423 April 1916

CONTENTS

The Life of Jesus and His MassageProf. Uchigasaki.	2
To a young Man (Paul Bourget)	
Trans. by A. Naito. 1	0
International Morals	23
Materialism of To-dayRev. K. Shiraishi. 3	38
Psychology of PrayerRev. Y. Motomiya. 4	14
Some Scandinavian Suffragettes	54
Reminecence of Raimu Shimachi	55
The Light of the Gospel (poem) N. Tanaka. 6	8
The ParadiseJ. Tsubota. 7	0
The Forgotten BellY. Suzuki. 7	7
Unforgotten ImpressionsJ. Yoshida. 8	6
Psychology of DemocrasyK. Kimura. 9	3
Kingdom of Woman11	3
Current Thought10	7

Topics of the Day. New Books.

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTKYŌ KŌDŌKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shsba-ku, Tōkyō.

Ļ シピイ を畏 於て吾人は十九世紀に於ける歐米の神學者に謝す、今やイエ の不可思議と云はずして何としよう。 建てられ、 7 ねる。 丰 工 服 リス ス に溯らし いでや我等をして此の不可思議を解かしめよ。 其の意志は我をして爲す所を知らざらしむ」と嘆美したること。今日社會主義者は其の源 トに關する文明社會の興味は少しも失はれず、否、むしろ益々増加するのみである。 彼 の名によりて學校は開かれ、彼の名によりて平和は結ばれるのである。これをしも一個 め、虚無主義者も亦自らイエスを祖述すと稱してゐる。其の他彼の名によりて病院 前世紀以來世界の科學は實に驚くべき程發達した。而も驚くべ スに關する知識は幾多の著作に滿ち溢 此 に 32

るの それ故にキリストも亦神の子として考へらるゝに至つた。三十歳に至るまでの彼の傳記は漠として知 思想とロ 云ふ説は、 + イ ŋ 抑 みであ 由なく、 ス 0 R 1 北 ŀ 1 部 は I. ス ~ 本より荒唐不稽信ずるに足らないが、これには多少の理由があるのである。 15 3 の文化 るガ は 唯夙く セ 何人だ。 フ 0) リラヤ 子 父に死なれ、多くの弟妹を養ふために其の業を繼いで働いてゐたことが推察され との感化を受けた地方では何處でも、非凡の人をば神の子として考へたのである。 12 あ 0) 我等は最 らず ナ ザ V 心・赤裸 12 3 住 te フ B 3 の許嫁たりし處女マリヤ 々の姿に於 木 匠の 子で、 いて彼の 其の 0 生 父をヨセ 涯 聖靈に威じて生め を観察したい フ、 其 0) と思ふ。 母 をマ のる神の y 當時 彼 P 是云 は 子であると ギリシャ 0

介の木匠たりし彼は云ふまでもなく學者ではなかつた。 されば彼は當時知識階級の人々がギリシ

バレ

スタ



イエスの生涯と其の使命

引照イザヤ書五十三章四―十節及びゼコ傳十二章二十八―三十四節

内ヶ崎 作三郎

1 よれば 宜 中 人ゥ 通 リス 影響の及ぶ所、斯くの如く廣く且つ久しさは何故であらう。其の昔西ローマ帝國 ランド近海なる 部 じて べなるかなナ 半 イン ŀ リストの生涯は質に不思議な生涯であつた。其の實際の活動は三福音によれば一年、 ワンダル、フランク諸族 丰 カ 0 二年乃至三年であつて、何れにしても一年以上三年以下の短日月に過ぎない。然るに其 ナ y F フリ に跪 ス ダ 0 b ッ ポレオ アイ 北域、 0 カ> F. L 卽 敎 めた。 は ち オ ンの かなし 重が ナ 說 カン 0 n 小島に涙しげき修道院の建てられたのは五百六十三年であつた。サクソン 「キリストに就ては一つとして我を驚かさいるものなし、其の精神はわれ は ニフェー かくて北方の諸民 の改宗より、次いで英國亦久しからざるにイエスの敎に歸依し、アイ 7 たのであ フリ 力 ス 內地 る。 カゔ 七百百 而して今日は の熱砂に 五 族も亦十字架を拜するに至 十三年に於ける殉 住める黑人まで、其の餘澤を受けざるは稀 如何。 我 R 敎の死は、 日本人は云ふまでもなく、 り、十世紀の やがて獨逸民俗をしてキ の末期 頃には全歐洲を に當り、 ヨハネ である。 支那 0) 7" 感化 傳 n 0

空の 誾 カン 楠 る 12 0 S 薄明 なり行 たやうに感じたと云ふ。 題であつて、必らずしも吾人の追究を要しないのである。 0 鴿 中に輝 いたけれども、 の如く降りて其 いて、やがて來ん真如の大光明の先驅をしたのではな 此の幽 0 洗者 上に來るを見、又天より聲ありて此は我が心に適么愛子なり」と云 かなる星こそは此 ヨハネの星の瞬きは隈なく照らすイエスの月の光によつて、 の明かなる月のまだ山 此の時彼は「天忽ち之が爲にひらけ、 力〉 った の端を離れ カン ぬ前に、 今は 幽

平 等の現實の國 决 3 むべきことを信じてゐた。 音を信ぜよ」と叫んで傳道を初めた。 は ことを覺るやうに 和 心 斯 必らずや 0 であつたらうと思ふ。 は 誘惑に 3 中 + 益 ż に期待せられるも 12 々强くなつた。 打 3 大煩 が滅びんとするに至るや、 勝 ネ ネ つたと云よ。 0 73 悶 は 感化により自己の った。 の伴ふもの ^ 77 彼はついでガリラヤ デ 而してイエ されど彼は 王の 0 この事 ではなくつて、 捕 6 あ 2 る所と爲 る 實はその 大使命を自覺せるイエ 市 Z 其 から、 の短 の天園観も最初は之と同じやうな幼稚 の國 I 亦 質に志士仁人の血を以てのみ購はれるもの バが天變地異により忽然として天國 に至 とは何ぞやと云ふに即ち理想の國 つて 此 かけれども充實せる奮鬪 まっに 0 非 り一期 傳 して 命 說 0 0 は 起 最期を遂げ 満てり前 原 由 ズ に就 來宗 は 其 の活 教心理學から云つても、 ても、何 0) たので 0 國 動 經験により、 0 は近づけり、 らに 發端 1 工 7/> な物質 0 ス に於て 解釋 を此 ある。 カゴ 自ら カゴ 神 的 汝 0 四 つくの であ 解釋 世 父等悔 起 0) --二 國 12 13 た 日 出 12 12 改 ipo んとする 大法悦に 四 である。 決して めて -よれる 現せし 人は彼 一夜の 5

學者の如くならず、 權威を持てる者の如く教へ給へう」とはイエ スの説教主聴 いた者の 感嘆の 聲

其 に位 あ Z) は學者では P つつた。 への物の イ 語 朝 ī 7 研 H た 0 究に餘念のな 中に、又人生其の物の中に、云ふべからざる權威を持てる萬窓の無形の典籍を讀破 0) 彼は誠に考ふる所の勞働者であつたのである。 3 方言により 光を浴びて戲むるゝ子供等にも、 なかつた。 カゴ 故 12 イエ カン てなされ 彼は沈み行 つた際にも、 ス も亦比較的容易に此等外國 たの く夕日 である。 之を學ぶの 15 然し乍ら當時 も家路を急ぐ勞働者 常に興味 由 なく、 の文明 0) 眼を閉ぢなかつた。 のユ 從つて彼の傳道は皆シ に接 A 12 P した it 4 ノブ 將 ことゝ思 F, 72 U 又百 言 合の 50 リャ語 工 換切 ジ 花 何 プ れば、 突 n ŀ の一種なるアラ 21 < 兩 7 文明 野 彼 ĺ 0 七 は自然 たので 薄 0 會 明 彼 12

__

圆 である に入らんと思 切に又質に外しかったの 時 0 72 あ 己が 的 た 12 か 國 36 或 は 0 W 南 ん者 獨立 は 7 ダヤ 迫 は來つて我 害せら 0 日うら 73 つであ る ñ 3 る。 > N 或 カン ダ が洗禮を受けよと云つたので、 され 17 N > は 照り渡らんことを冀 河 d 征 畔 服 3 12 ١٠ せられ、 豫 ネ 言 者 カジ 皮の衣を着、 3 亡國 ハ ネ つて、 0 カジ 小 出 現し 暗き影 時の天下靡然として彼 野の 天より降る救世 720 蜜を 旣 に彼等 曲 食 來ユダャ人は絶えず近隣諸 U かが 天國 自由 主 を翹望すること質に の近 0 天を覆 0 聲 さを説 に應じた CI 之之 各人 强

らばイエスも罪を自覺してゐたのではあるまいかと云ふ疑問が生ずるが、是畢竟後世神學の産み出せ 此 に於てイエスは遙かに之を聞いて、ヨ ハネの爲人を慕ひ、南に行いて直ぐ其の洗禮 を受けた。然

彼を以て偽りの教世主となすに至った。

られ、やがてエルサレム は IV. サレ 2 の殿堂に入つて商人兩換者を逐以出して自ら說教を初めた。 城外なるゴルゴタ山上に磔殺せられた。 彼は遂に教敵の手に捕

て眞 教界の 此 あ 權威と慈愛を兼ねたる嶄新なる人格が、少數の人をして彼れのために生命を捧ぐるに至らしめたので 斯くて彼の て極めて平凡な方法を取つたが、其の單純凡庸なる形式の中に熱烈にして高邁なる意氣を存してゐた。 rþ 如 なる威化を及ぼしてゐるのは何故 る。 17 0 斯 < 〈摯な一 動 神 力に感ずれ くの如きは質に に解 先覺者の中 いた 而 は 教訓よりも寧ろ彼の人格が、 して多方面 神と彼 10 ば罪 イエ 此 我が とは極 の世 人と雖も赦される。 ス程神の背景をその生活に實現したものはない。彼はこの思想を傳ふるに當 な人であつて自ら神の に於ける人と人との イエス・キ 一めて密接なる關係を有して些の隔離のないことを自覺した。東西古今の宗 であらう。 ・リス トの 云は 然り神的生命が躍如として現れたるが如く、大膽にして謙遜、 生涯であつた。然る 關係は圓滿になるであらう。要するに彼 力を感じて 思ふに彼 10 1 I ス は は 神に醉 一種の ねた。 此 大な ^ に此 る者であつた。故に他 0 神 の短 る は非常 理想主 い生 一義者で 涯 に大なるもので に於 あ 7 は神 0 彼 た。 の人 カゴ 斯 0 も亦彼 くも 南 彼 大生命 つて、 は 偉大 極 的

なかつた。 彼 以は又眼 職業問題も經濟問題もなかつた。 を婦 人問 題 に注 いで離 婚に反 對 した。 しかし離縁は大問題であった。 蓋しその當時 の婦 人問 題 は今日 石 } 0) 2 の法典は ごとく 複 夫に離縁 雜 7 70

あ カゴ 彼の主張であつた。 つた。 それは當 總ての罪は悔ね改めによりて赦される。必らずしも一定の形式を守らなくともよいと云ふの 時の病人が多くは精神病者であつたので、割合に精神療法の效果が多かつたゝめである。 彼は又病人を癒した。尤も當時は獨り彼のみならず、多くの學者が病人を癒し

天空の鳥は巢あり、然れども人の子は枕する所なし」と云つたのは此の時であつた。彼は一時フェ を感じ、如何にかして之を陷れんとするに至つた。あゝ危いかなイエス。彼が長嘆して「狐 シ かんとし、又或ひは病氣を癒されんとしてつき從つた。此に於てか専門宗教家は次第に アに逃れたが、再び歸り來つて傳道を續けた。 かくて教世主イエスの名は普く四方にひろまり、彼の行く所必らず大群の人々が、或ひ 彼に就て不安 は説教を聴 は穴あり ---

6

らな 此 1 あ る。 めんと企てた。しかるにイエ の時白衣の人姿こそ~~と草深き小徑を登つて行く。 今しヘルモン山の朦夜に草も木も眠りに落ちて、遙か麓の澤の音のみ寂しく又悲しく聞えてゐる。 イ い。「真理」はどうしても彼の犠牲を要する 工 ス は大なる決心の下 或 る __ ダ P 人は イエ にエ ス jν ス は此の運動に對しては甚だ冷淡であつたので、彼等は失望の餘り、 サレ を以て政治運動の中心人物とし以てユ 2 に行くことっな 0) カ> つた。 あゝキリスト、 此の時已に彼 150 彼は終に意を決しなければな ヤをしてロ の危期 は 1 迫 つって 1 ねた 獨立せ ので

者思想家に深き感銘を與へたのである。 斯く考へ來れば彼は今日尚わらゆる文明の原動力となつて存してゐるのである。我々は旣に佛典に 漢籍により、 武士道によつて培はれた。今や宜しくキリストの水を注いで我等をして純全なる

かくすることに由って、我々は東下花として咲かしめなければならぬ。

が若くして死し、永しへに若き眞理を説いたキリストの教を學ぶてとは甚だ意味深きてとゝ思ふ。 なる聖人の感化を受けた、めに元氣潑溂たる進取の氣風を缺いてゐる。 ム。イエスを知らんと欲すれば四福音書を讀むに越したことはない。我々は佛陀孔子の如き老成圓滿 かくすることに由つて、我々は東西古今の思想を統一し、而して永遠に進歩することが出來ると思 これは二月七日の朝神田錦町三丁目の自由基督教會に於ける説教の梗概である。自分も甚だ不満足に思ふのであるが、 分の限られたる時間内にまとめなければならなかつたので已むをえない。小島幸吹君の筆記の旁を謝せざるなえない。 此の意味に於て現代の日本人 四五

決者であることを證するのである。其の他彼が婦人の弟子を持つてゐたことは如何に彼 をなしてゐる。 を呼ばなかつたならば、彼の使徒等は果して亡き節の志を斯くまでも成就することが出來たであらう て観察を怠らず、又之を数へ導いたかを知るに足る。 の權を與へた。イエスは姦通の外は離緣を絕對に否定したるはその時代の最も進步せる婦人問題の解 か。復活に對する辨證は多く價値無さものであるが、復活なる信仰は基督敵の傳播に甚だ大なる貢獻 もしもマグダラのマリャが起つてイエ 力が 婦人 スの 復活 對し

ること能はず」と云つた。 は又當時の宗教家と違つて非常に小兒を愛し、之を重んじ「汝等小兒の如くならずんば天國に入

。めの一階段に過ぎないのである。公の祈りは動もすれば人前を取り繕ふものとなり、繰 を承認しなければならぬ。 の祈を否認されたことは大に味ふべきことである。而かもこれ迄の教會が之に耳を貸さなかつたこと 多くなる。 彼 從つて彼は又密室に於ける所を說 の宗教は全然靈的なものであつて、當時の形式に捕 人は心の最も深い處の煩悶と懺悔と歡喜と憧憬とを發表することを躊躇する。 いた。我 々の教會に於ける前の はれたる宗教家の到底理解しえざる所 如き寧ろ此 の境地に達せん り返 イエ へし言が ス 6 が公 が為 **(**1)

無限の大氣を呼吸した人であつた。彼は其の單純溫雅なる言葉の中に火の如き道念を説いて代々の學 0 イエ ス・キ リストは大天才を以て天地の根本に伏在する一大生命を直覺し、之と共に

力> 궲 自 君自身のたましひといひ、それはつまるところ、佛蘭西それ自身の内的生命であります。 22 に生れた私達の書いたものゝ中に探し求めようとしてゐるのだといふ事を知つてゐるばかりです。そ 人 でせら。 一國の運命を握ることになりませう。一歩を進めて云へば、君たち自身が此 一身のたましひであります。今から二十年の後に、君や君の兄弟 たましひと交渉を保つてゐるものでありませら。しかし考へて見れば、君自身の內 は 20) 到底 作物のうちに斯うして君の行き當る解答のあるものは、多少とも君自身の内的生命と、君自身 からした地位に立つてゐる君は、 點を考へるとき、たとひ、つまらない作家であるにしても、自分の責任に戰慄を感じない 正しい意味の作家とは云はれますせい・・・・・ 私たちの作物のうちから果して、何物を拾ひ集めるのです は、 私たちの共同 0 祖國その 0 母 的生命 た 佛蘭 のとな る 此 0) るの 舊

に向 けは見出だして欲しく思います。さうです、彼はいかにも君のことを考へてゐる。 つと以前からの事であります。君がやつと書物を讀む事ができるやらになつた頃か 2 0 聲を聞きながら、はじめての詩や、初めての小説に、やたら筆を染めてゐたのでした。一所に机を列 藝術 つてこの文を草してゐる君の友人は、外に何らの功績を示すことができないにしても、彼れ自身 はこの『門弟』を讀んで行くうちに、からした責任の一面が研究されてることに氣づくでせら。君 の真率さに深い信念を有つてゐるといふ事の證據だけは君に汲みとつて欲しく思ひます。また く序文のうちにすら、彼れがいかに心を碎いて君のためを思つてゐるか、そのことの證 頃、私たちは ―一今、四十歳になりかけようとしてゐる私たちは、 巴里の空に轟 それ 50 は、 ことで いてる 76 る砲



ボ ール・ブウルジー作『門弟』の自序

入

藤

濯

體をゆり動してゐる不可知の力に思ふさま耳を傾けて見たいものである。私どもは寳際において忽せにすることのでき 私どもはもはや藝術とか哲學とか宗教とかいふ單なる概念の城に閉ぢ籠つてゐるべきではない。できるならこの日本全 て行くうちにも、彼れらを苦しめた問題がやがて、私どもを苦しめてゐる問題でなければならない事を痛切に感じた。 凛々しい人たちが、どれだけ國家の問題に、ひいては人類の問題に苦しんだかを知るに遠ひない。私は此の一文を譯し しおいて、この價値ある が一度はこの日本に紹介されなければならないものだと信じてゐた。私は今、山のやうに集まつてゐる自分の仕事をさ こに譯した一文は彼れの代表作の一つとして知られてゐる『門弟』Le Disciple の自序である。私はこの作なり序文なり この一文を讀む人は、千八百七十一年の傷ましい戦敗によつて思ひがけなくも國民的自覺を喚び起こされた佛蘭西の ル・ブウルジェーは、佛蘭西の近代文藝界に心理主義の旗をおしたて - 、人道忠潮の源を開いた人である。私のこ 一文を譯さなくてはぬられなくなつたことを、何よりも先づ自分の心に向つて感謝したい。

多少なりとも私の心もちを知つてぬられる方々には、特に私のこの拙い譯を味はつて讀んで頂きたい。M 〇先生、 N君。 K 君には殊更に 先生、 U 先

れば、 は十八歳から二十五歳の間の青年であることゝ、君を苦しめてゐる色々な問題の解答を、君よりも先 私はこの書を佛蘭西の一青年たる君に捧げたいと思ひます。しかし、私は君の生れ故郷 君の 名 4 君の 兩 親 4 君の身分も、 また君の抱負をも知つてゐるのではありません。 も知らなけ たい君

事を云 到 12 た。しかし今は神も自然も劈動も変も見重も、それらはみな真面目に考へられなければならない。心 のうちで、 力了 復活が、何よりも先づ、たましいの仕事であった事を知ってねたのでした。そして私どもは「佛蘭西魂」 たとひ若年の 多 V いたのです。 雄 若 明 部 T 過失を高價に償つた。 千八百七十年の戰ひによつて、手當をして癒さなければならないほどの大きな傷を負はされたこと へのうちでは最も善い教 と懐疑 なし る 熱情と先例 カン の缺陷を意味するものである事を知つてもたのでした。私どもは十九世紀の初期に も改造された佛蘭 いと思つて つてゐます。『氣をつけたまへ。 カン い判斷を下したのです。心の危機がやがて此の國の大きな危機であることを了解したのは、啻 つた私どもの 今私が 武 と遊戲とを事としてゐる場合ではない。少なくともこれまで暫くの 者振 身ではあつたにしても、學校の先生方の敬へによって――それ 私どもは私どもの仕事 ねた とによつて、 私よりも年若の君 を示した彼 のでした。 無垢な頭 西を しかるそれはいまだ悉く償はれてはゐない。 へであつたのですが 創りだすことでなければならぬと思つてゐたのでした。そのと言私どもは、 敗戦の のア 私どもの のうちに限られ v 丰 手 に向って話してゐるやらに、 が、君たちのために新しい佛蘭西を新しく創ることでなければな ザ から買び戻さるべき佛蘭 君は今困難な時代を通りつゝあるのだ 私の行 ン 1." ル・デニーマは、 た事ではなかつたのでした。私どもの先輩のうちで最 ひと公の行びによって、 外部の勝 千八百七十三年に『クロ 利 西 は内部の充實を意味し、 その當時 外的 もはや君は機智と浮薄 生命 私どもの言行によつて、 0 佛 はあの先生方から受けた 17 間 お 蘭 はそれで充 西 いても 人に向つてこんな 1 1. 今若 外部 おける獨逸の 內 0) 的 妻の と放 0 生 君 敗 命 序文 次北は 私ど にお

義務に壓へつけられてゐるやうな氣がしてゐたのでした。 ない私たちは、牛ば砂漠のやうにうら寂びてゐたクラスの奥にあつて、祖國を再興するといふ大きな 番年上の連中は、丁度戰場へ出發したばかりでありました。さらして、學校に殘つてゐなければなら べてゐる部屋のうちでは、其の頃、誰れもだれも沈んだ顏をしてゐました。私たちの仲間のうちで一

美しい詩句を繰り返したものです もの努力を傾けつくしたと思つてゐたのでした。よく私は友人と共にテオドール・ド・バンギルのあの 0 一青年となつてゐる君を幾たびとなく頭に浮べて見たのでした。そして私どもは、みな文學に私ど その時は、千八百七十一年といふ天下分け目の年であつたのですが、その時私どもは、今、佛蘭西

Vous en qui je salue une nouvelle aurore,

Vous tous qui m'aimerez,

Jeunes hommes des temps qui ne sont pas encore,

O bataillons sacrés!

先だって生まれた後進の人たちから愛せられるに足るだけの事をしたいと思ってゐました。そして、 その人たちが如何なる點において我々以上の價値を持つべきかは、全くその人たちの自由に任せて置 この明日の曙を、できるなら輝かしいものにしたいものだと思つてゐました。私どもは、この曙に われると生かした曙が陰鬱であったいけに、血なまぐさい霧に蔽ひ包まれてわたいけに、私ども

我國 この 0) 傳 な て來たとい 7 要な仕事をなすだけの權利を得るためには何事をも承認したのです。我國の軍隊が絕えまなく往來し 能をも有つて まつた凡 時 統 カコ ねるの よつて 「の文藝が つたものです。 0 の若 かた歩みついけてゐるとするならば、それは何よりもまづ國に奉仕せんがために一切を受け容れ りません。 决 的 流行 な形 をつけ いブールジ ムに、数の勢力こそ最も獸的な力である 企てられ 庸な力を最 式 ふの **戰爭に行つた當時の青年たちは勝利を自分のものにする事ができなかつたのです。** に當て込んだ卑劣な大家どもが、 わな 、を建てる事もできなかつたし、誤つた民主的傾 國民精神を發揮しついけて行くのも、それはみなブールジョアーのおかげであります。 列强國 る事もできな 3 君たちの先輩に正當 た最も奇怪な、 い力であ 上の 悖徳な政治家どもが、人心を收攬する器械のやうに普通選舉を弄んだり、 ひとへに彼らの力で が我々に對して敬意を失はないでゐるのも、我國の高等教育が進步して行くのも、 ョアジーの善良な意志によるといふべきです。このブール 地位 77> るからです。若さブールジョアジーは、 つたのです。 に据ゑたりしたものです。 最も不公平な普通選舉を甘んじて受けねば な判 あつた 斷 現代 を與 自由の名のもとに自分の最も大切な信念を放棄して 0) へてやらなければなりません。 —千八百八十九年 ですか からです。 5 からして真 ブール 向 カゴ 一の青年は 國民に逃惑を及ぼ *ジ* 何でとにも諦らめてゐました。必 面 目 なブ アジーのた 1 あ ならな ジョアジーの時代には、 佛蘭 0) N 戰 ジ めには勇氣をも才 L カ> 3 西が住存しつ 0) 時 た つた 7 ジ 代 あ を 1 のでした。 0) 輕蔑 社 は 噓 會 政 いけ 虐政 して 問題 府 で固 顧

佛蘭西はどうしたら千八百八十九年の青年によつて生かされるであらうか。 これこそ現在、 國家再

から真 n らが すべて 面 目に考へられなければならない。そしてこれらの問題 活 かされ るか、 さらでなけれ ば君自身が死ぬ 11> でなければ はみな君の目前に衝き立つてゐる。 ならな 2

勉な將 に物の はそれ **đ**) Ci 代であるとも ほども 力》 滅びるところへまでも歩みついける ありませんか。 は今も 7 此 起 りませう。 私ども 其 0 授を出 順序を缺いだ仕事でありました。尤もそこには不斷な熱心が現はれてゐました。 校 浮 0 時 カゴ んで ば 代 さらです、如何にもそれは大きな仕事でありました。しかし悲しいことには、それは 成 蘭 人 を供給したでありませう。 どの 時 た 12 功した時代であるといふ事もできなければ、またそれが、ひたすらにその仕 したのも、朱點の打ちどころも無い藝術家を出したのも、 西 に爲した ちの 代 國 は來な いふ事はできません。私の知つてることは、此の時代が大きな仕事をしたといふ事であ によつて所有されてゐます。 時として私は、『何といふ生命の力が 熱 務 を處 佛蘭 心 頭 が溢れ たことが に カン 処理して つかのです。 は、 西を改造しようとい われ あまりに僅少であつた事を考へるときに、 7 おました。
 るた哀れむべき人々は、 くを勵まし、 手並 凜とした中流階級、固 ……』といふ聲を耳にします。實際において此の國が二十年 どれだけ私たちは のすぐれた容易くは人に屈しない外交官 この二十年このかた、 ム高尚 我々の な希望に捲き上げられて 此の國に動いてゐるのだらう。 72 力となり、 い冷やか く踏みとい 誰 n 4/ に我 このブール 我 ス々を導 私共の 今でさへ私どもの みな此 々を取 まつて動 ゐる此の時代 いてやらうといふ考が、 ジ り扱 力の のブールジョアジ アジ かない中流社 を出 つて み 此 に頼 事 の國 75 7 1 たの たの i について、私 らされ 政府の當事者 に没頭した時 はどれだけ勤 12 は他 です。 感 0 ーでは 12 動 あせり それ を喚 事 6 カジ

さい――、然し、若しさらでなかったら?…… 12 幟を禦ぎ守らなかつた事に鄕愁の淋しさを感じないのですか。デューマとかテーヌとかルコント・ド・ り以上の希望があるのですか るのですか。私どもより以上の信仰があるのですか。君には何らかの希望が 神を背負つてゐる人が立つてゐるやらな氣はしないのですか。また君は、非倫な情慾や、 リイルとか云ふやうな大家の一人に會つたと假定して見たまへ。君はそのとき君の前に君 は めに身を滅ぼして行く人々を描かずにはねられなくなつて私どもの强いて書くやうな作 何ら 君は 0 者がその作物に對する愛よりも以上の愛をそこに見出したくは無いのですか。 理 想 カゴ あるのですか。 者しあるなら、握手しませう。 私どもより以 上の 理想が あ るのですか。 そして私に「有がたら」と云はして下 君に あるのですか。 は 何 5 カ> その情慾の 最 物 0 の民族 信 を讀 私どもよ 後 仰 の精 カジ TE あ 君

るにしても、 成 十歳になると既に **ゐます。一方は恥を恥とも思はずに、自ら好んで世の中を茶化して行くともがらです。その徒輩** 種の型の青年は、 一的とするところは、たが彼自身より外には無いのです。彼は現代の自然哲學からして、生存競爭の 功といふ言葉に 著し、さらでなかつたら? … … 今、私の眼前には凡そ二種の型の青年がゐます。そしてこの二 外交家であるにしても、辯護士であるにしても、 藝術 も換 君の目前にもまた、恐ろしい、しかも悲しむべき二つの形の誘惑となつて現はれて を云々するにしても、 人生から脱線してゐます。彼れの宗教は享樂といふ一語に盡きてゐる。それは られる。 さらいふ人が 運動家で立つにしても、工業で立つに 政治をやるにしても、 その 神とするところ、 事 務を取るに して 原則とするところ、 沙、 しても、 將 校 であるに また

み ひを思ひかへすとき、君はユーゴーの『エルナニ』を擁護してねた人々の群に加はつて、文學の一大旗 は 知るだけでは足りない。 て、勇しく國境へ馳せ向ふでせう。私は敢へてそれを疑ひません。しかし、如何にして死ぬべきかを はど物悲しく感ずるでせらか。明日にでも出發しなければならないとなれば、君は一切の覊絆を絶 き、たとい一人の友人を伴つてゐるにしても、またはそれが夏の美しい夕暮であるにしても、君 は云つても私はそのことに掛念を挿みません。かつて敵兵が堂々と通行したあの凱旋門の前を通 もあつたともいふべきものが、君によつて放棄されようとしてゐないかどうかを心 宮殿らしい詩的 あります。君はもはや、勝ち誇つた普魯西亞の騎兵が故郷のポプラの樹の間にその馬を驅りたて、行 にしたところで、千八百七十一年の講和 のやうな廢墟を知つてゐるばかりでせう。あの廢墟には、やがては跡かたも無くなつてしまふ古への つたのを記憶してはゐますまい。人心を恐怖せしめた政戰といつても、君はわづかに會計檢査院の繪 興の一念を是非なくその心から消すことができずにゐた先輩といふ先輩の苦しみとなつてゐる問題で に目 あの 凱 あた 旋門を見るとさ、 一度もそれとは口に出さなかつた人々の慰めに充ちた希望でも り接しなかつた事 私は君が私どもと同じやらに考へてゐるかどらかを心から知りた な面影を留めてゐる燒け石の間に、 如何にして生くべきかの問題が果して君の心に決定されてゐるでせうか。君 ナポ を悔やしく思はないのですか。王政復古の v オン 遠征軍 カゴ 永遠に一切を規則だてたものだとは考へられ の軍詩を思いかへすとき、當時の若い兵士たちの意氣込 樹木の枝がてんもりとおひ茂つてわ 南 時代を憶ひ、 6 Vo 内に秘 單に から確 浪漫主 められ なか ます。 私ども めた つた た夢 はどれ い。と ば の簡 カンり 0

生活は智的生活や感情生活と同じやうに、斯かる感覺を滿すための口質にすぎないのです。彼れ

からした青年にとつては、

人類

の結 色な新し な くやうな、 人間の靈魂は一切彼にとつては高尚な器械であります。そして器械をとり崩して見ることが經驗の源 でもない事です。 を信ずるのでなければ、たとひそれが何んな事であつても決して信じはしないでせう。それ 27 りらる事を承認してゐるのです。しかしながら、彼は何一つとして信じた事 方では餘 するところを知り扱いてゐます。 界を一周してしまつてゐるのです。ませすぎてゐるその批評的精神は、現代の最も微細な哲學の だけその數の多いことに驚きを感ずることでせらか。二十五歳になるともはや彼はあらゆる思想の であるらしく思はれてゐます。彼にとつては何物も眞實ではありません。何物も僞りでありません。 にしてはなりません。 つとして道徳的なものもなければ、一つとして不道徳なものもないのです。それは重箱 ーリス いても決して何物をも信じますまい。はでな邪曲を逞うする道具としてしまつたその 飲げてゐる―のうちで云つたやうに、「その自我に思い焦れる」ところに成立つてゐます。 い感覺で自我を飾るところに成立つてゐるのです。 りに賢 しかもリファインされたエ v い頭を有つてゐるところから、 スが、その「自由人」といふ美しい小説 善も悪も、美も醜も、正も邪も彼には單なる好奇心の對象らしく思はれて 彼は「物質」といふ言葉に正確 さういふ輩に向つて不信神を口にしてはなりません。 II. イトであります。 あらゆる宗教が、 な意味がないことを知つてねます。 ― それは皮肉に充ちた傑作では そして彼の野心全體は、あ おのくの がな 時代に正當なるもの カン 0 つたの 心 そしてまた 理 物質主 一解剖 理性 です。 隅をつっ ねます。 は云ふま であ 遊戲 將來 を口 色 世

樂主義者であるならば、後者は智的なしかもリファインされた快樂主義者であります。 得 きつてゐます。そして私自身が彼自身に似てゐると信じきつてゐるのです。彼 やらに、私のものをも讀んでゐるのですが を算重してゐます。そして成功のうちには金錢ばかりを尊重してゐる。 大法 な虚無主義者に出くはすとき、どれだけわれしくは身の毛もよだつほど怖ろしく思ふでせらか。どれ るます。 義者であります。 liferの名を與へたのですが、彼自らの方では『世紀末』と自稱して喜んでゐるのです。 する事のできた、彼のアルフォンス・ドーデエは、これに洗禮を施して『生存競爭主義者』 Struggle-for-でー 熱情で富を作つて行く仕事 いム事だからです。 からい るます。 んが 一則を教 彼はたとひそれが流行を目當てとしたものにすぎなくとも、 **ふ青年は怪物でなくて何でせ**う。といふのは、二十五歳になるといふ事はやがて怪 た めに それは自 今までに述べてきた型の青年よりも、 へられました。そして彼は、われくとば最も危險な文明的野蠻人にするかの實證主義の その青年は神經も精神も、 、民衆を欺いて見たりすることが好都合だと思ふ時は、自ら喜劇を演じて顧みないのです。 だか 分にとつてすでに喜劇だからです。 そして靈魂は快樂を得るための計算器にすぎないのです。 5 理想などゝ にこの法則を當てはめてゐます。からした近代の青年を巧みに觀察し定義 まるで貴族的になってゐます。 いふものは ――私がこの『門弟』を書いて公衆を愚弄するも もつと怖れなければならない青年があることを知つ 何人にとつても一つの喜劇 たとへば、 社會主義者 何んなものでも手當り次第 前者が獣的なしかも 彼は私のこゝに書く n 0 に化けて見たり、 しか あ は自 る し私 己流 力) 彼は成功ば この のやうに 0 は 科學的 深 0 デ 君 物になると だ リ 0 作を讀 V 投票を 虚 と信 思つて た めを カン h h

西は我 說 者といつてもよかつた老リットンは、 堅實な、 れてゐる。君はその事を夢にも忘れてはなりません。 つの た悲劇、 對する諷示らしいものを見出さうとしてはならない。 またそれを感じたら、君はこの魂が君に先だつては滅びないやらに努力しなくてはなりません。佛蘭 ・・」と答べるだけの勇氣がなくてはなりません。君は若し君のらちに一つの魂がある事を知つたら、 暗黑と死の深淵があるといふ人があるならば、君はその人に向つて、「君たちはそれを知らない・・・ るべき小舟もなければ帆布すらもないのです。この神秘の大海の背後には空虚な世界が横はつてゐる、 であり、 大きな徳であります。 てとを要求してゐます。 いたのですが、私どもは私どもの目前にまざしくとこの大洋を見わたしてゐるにしても、この海を渡 い點によつて誤られてゐる。最も美しい名によつて支へられてゐる。最も美妙な才能の魔術で飾ら 搖させてる 既にての作の計 なが悉くこの大問題を考へることを要求してゐます。この作が君をしてそのことを思は 謙遜 今も尚苦しめつゝある悲劇に私が乗じたのではなかつた事を信じさして下さい。生存 の苦惱 な る思想 科學は、 があるば 書は立てられその一部分もまた書 と感情との一やうな混 たゞ二つの氣力であります。 その解剖の終局に「不可知の世界」が擴がつてゐる事 君は見出せさらにも無いてとを其處に求めてはならない。近頃 かりであります。愛と意志、 至つて巧みに私どもの渚に打ちよするこの神秘の大海のことを 亂 が、佛蘭 、君のうちに讃へられ培はるべきも 現代においてけ高 それを外にしてはたゞ現在 西 かれてゐたのでした。多くの人々を苦 、それがこの二つの徳に外ならな と歐羅巴との二つの カ> 公面 を認めて 悲劇となつて現 かも敬虔な人 一の汚れ るます。 カジ 0 の出 あ 唯二つ 現代の は 殆ど聖 ば 運命 かり

その墮落の飾りとしてゐる智力主義の美名のもとには、冷めたい猛惡さと怖ろしいほどの無感覺とが 奥底に潜んでゐる非道な事實を、魂の作られかけてゐる丁年の君に說き示すためであります。 私どもは悉くいつか、少くとも一時間はからした青年になり濟ましたことがある。今でも尚どらかす 落は野蠻な遊冶郎の墮落とは異つた深さを有つてゐます。異つた複雜さを有つてゐます。そして彼が 自身に見せつけるためであります。 ると此の誘惑に囚はれようとする事があるのです。私がこの作をしたのはやがて、このエゴイ 厳ひ隱されてゐるのです。私どもはからした青年を除りによく知り過ぎてゐる。餘りに能辯な一先輩 逆説に魅せられすぎた私ども自身も、悉くからした青年になりかけようとした事があるのです。 私

してしまふ事を欲しない。思想の手品師としてしまふ事を欲しない。道徳は紊亂され、主義といふ主 義が悉く矛盾してゐる現代に生きてゐる君は、『樹は果實によつて知らる』とい么聖書の一句を救の綱 敗した詭辯論者であつてもなりません。私は生活の誇りと智力の誇りとが現代の青年を一個 意志の力を減らさらとするものがあります。これらの思想はたとひそれが綿密らしく思はれても、 のやらに思はなくてはならない。この世の中には君の疑ふことの出來ない實在がある。しか ります。君に向つて襲ひよる思想のうちには、この魂から愛の力を減らさうとするものがあります。 實在を所有してゐる、それを感じてゐる。刻一刻にそれと共に生きてゐる。 論者であってもならなければ、智力の世界や感情の世界を濫用する見下げはてた而 現代の佛蘭西青年はこれら二種の青年の何れであつてもならない。官能の世界を濫用する獣的な實 それは即ち君の魂であ かも若 も君はそ くして腐 の犬儒と



國際道德論

私 文は其の後に論壇に現はれた諸家の國際道德論に對する私の批評の梗機である。此の一文を鹿子木員信氏に送る。 は一昨年の本誌十二月號で「戦争の道德と平和の道德」と云ふ題で、國際道德に關する卑見を述べて置いたが、 此の

條

衞

世界的大問題

盛大を 家の梗概を述べて最後に吾人の見る所を主張しよう。 際道徳論も之れを大別して、戰爭を肯定する說と否定する說とに分けることだけは 主題とする解答はまた古今未曾有の鳳噪に陷り、區々末々に流れて百人百態を呈し、容易に歸 なけれ 形勢の無 有るが であると説き、 現下の歐洲戦 ばならない事實である。 唯だ現在に於ては頗る幼稚であるから之れを發達向上させなければならぬと主張する。 極 いいのが め、 各 等に就 現在の論壇の有様である。けれども之れを慎重に考察して見れば此の區 或者は平 國 0 學者及び V 和が ては諸 論客によつて雑多の意見が呈出された。或者 國際道德であると説き、 前者 種 の方面 は 主戦 から議論されて居るが、就中、 論 であり、 或者は國際間 後者は平和論である。下に此の兩説 には道徳が無 國際道 は戦争その 徳に關する議論 いと主張 蓋し 3 0 何 々末々なる國 が國 に關 人も 或者は 容認 戦争を 際道德 は最 する諸 する 26

私一 とたびは、 と、この小説の主人公となつてゐる不幸な『門弟』に似た人が決してゐない事をどれだけ願は くはすことがありますが、彼らはその時 ならば、私は今まで佛蘭西の青年たる君に向つて云つた事を云はずに濟ましたでありませう。 でせう。しかしながら、さらいふ人が是れまでゐなかつたのであるならば、今もなはゐない 個 求することを任務とする人道主義者は、彼の正しいと見たことの證 愛されるに足るだけの 0 ことにして云へば、 佛蘭西現代の青 事 年の 私はこの現實の世界に、近くゐる人であらうと、遠くに をして見たいと思ひます。 益友でありたいと思います。そしてその青年に心から愛され むしろ自分の觀察の誤つてゐたことを喜ぶもの 千八百八十九年、 據になる同じやうな環象に出 巴里に ねる人であらう であります。 0 しく思ふ て見た 私 であ は CA

月に関して

野松

峰

上

13 海 Ł 仰 £ 原 ろ あ 2 する 遠 は 車 7 見 天 5 3 押 地 白 n 2 -(2 1-椿 笑 0 が 2 恥 散 -(奥 5 など浮 5 v] 禮 3 0 い吾 清 2 言 眼 7 ζ 6 す は は ~ 75 は言 心 明 *O* n 9 الم 2 子 地 3 K 月 誇 語 供 -හ 12 V 大 夜 ることさ 新 海 似 7 は 月 13 1-7: 原 空 生 瞑 ζ 遠 2 2 嬉 覺 ~ 後 え 天 物 淚 2 る VJ 地 流 思 け 3 3. 行 0 3 75 V) 前 喆

富は常 を救 大 0 0 6 よつ 0 を愛する者の 的 6 あ 富を酒 文明 あ 學 精 あ 第 行 ると説 て其 教授 ニの 一神は主として戦争に因って高調される。(六)社 動 る。 る。 N を破壊 處決せんとする為 得 12 12 色叉 る希 對 平 平和を 軍 0 戰 ~ 争 備 IJ 爲 和 へは贅 7 唯 望 卽 7 す は 1 0 12 用るら カジ か 取 實に戰爭して迄もこれを確保すべき價值 氏 價 ち 目 せる道 一の道として是認することが 儘に るべ 澤 ら大なる犠牲を排 0 値 戰 的とする主 如きは 0 を 爭 、ら道 認 は n ため 6 放任する前者 人道 めの あ め、 隨つ が二途 此 に浪費する行動に る。 自 戦 戰 0 0) て國民 國家保 國 であると 説を奉ずる一人である。 た 論 ある。 0 め は 石の行動 つて 17 存 在 戰 戰 には 全 る此 一は全く屈 Ŀ 爭 0 3 (International 勤 主 は 戰 36 0 爭 勉努力 目 出づる。 出 義 正 れに抵抗することである。 0) 來 は 6 當と認めることは 的 0 必 あ は た る。 服 一須の つて、 國 0 會 的 習慣 戰爭 家主 が平和に流るれば、 無抵 0 して敵の蹂 Journal of 以 方 戰 カゴ ある。 法 義 義 いを生ず 為らく、 は自ら軍 抗 は、 戰 江立 であることを許 は であ 敵 隨 自 脚 る。 出 躪に委すること、 つて をして Fithics. 備の して 來な 衞 平 ると為 故 和 0 國 今破 戰 世 に戦 擴 際 思 Vo 0 April. 1915.)° 人間 界 ふ儘 爭 爲 し、 張 間 唯だ すの を促 壞 は 爭 め 0 0 正當で に戦 軍 平 は は 紛 12 0 であ 弱 國 和 大 カゴ 後者 目 擾 を實現 すた 他 12 點 を除 切 的 主 ム戦争ならば る。 に捉 0 8 0) あ 義を肯定す 必 0 る。 要で 約 價 行 有 __ め は は す 叉 值 動 Ü 敵 T 或 1 る n は 0 あ 爲 る 圆 7 は 3 居 0 議 る るの 國家 破壞 義 1 めで る敵 てれ 會 自 から 善 25 國

和論

平

7 邳 4 和 主 論 戰 は 論 戰 一と同 爭 を不 じく二つに別けるでとが 必要と為 し、 平 和 を以 出 つて國際 來 る 第 Ŀ 0 一は功利 道德的 主義に基く平 行 為であ ると主 和 論 張 であ する 5 道 德 第 二は 6 人生

主戦論

論であ 和 下 動 的 義 節 張 獨 * 存 色 して、 戰 貫 を以 爭 6 12 力であ 生 圍 逸 0 を二つに 主 R 活 身體 あ は實に官民 17 0 カコ 原 0 戰 6 な 理 る n 0 於 大 說 利 論 腐敗 7 將 を訓 物 7 H 1,2 益 はば つて、一 カジ は 質 最 と幸 前者 别 戰 平 0 n 從 ~ あ 大義 け 爭 和 練 8 主 み n は 2 る。 す 防 義 意 な 7 福 的 ン 0 ることが の必要を認め、 途、 (一)戰 競 4 務とする。 0 戰 種 となる 義を有すと。 論を見 n 5 を齎らす 争 勝 は 0 V2 w 上下一 敎 種 12 り現實主 0 戰 デ るに、 赴 其 育 0 光榮を得 爭 出 争 イ 「來る。 3 0 防 6 は カン は 0) 5 致の擧國的 强 結 結 あ 腐 如きは 實 戦爭 (二)人間 る。 劑で 家 てれ 果 果 國 戰 義となり、 12 第一 卽 なけ 争 は 0 國 わる。 利 (四) ち 生 は を以つて國際 强 カゴ 此 民 は 己的 ń 大切 戰 健 IE 存 的 0) 功 國民協同の精神を養ふ良薬である。 國 爭 は 義 は 競 0) 種 試 國 其 で なら 爭 0 利 個 人 民 0 驗 21 光明 民 皆 民 0 主 あ 人 6 あ 、屬す 6 故 な 義 主 兵 0) 計 る。 あ 5 カゴ あ 志 的 S 上の道德 義 增 0 12 會 る。 12 る。 る 基く主 條約 戰 戰 を 加 主 氣 方 カゴ 爭 惹 争 國 假 國 義 カジ 平 面 す 以 る。 は 衰 和 民 介、 家 起 上 カゴ を是認す 12 爲 的 より 此 は IE 戰 L で安穏な 0 0) へ、公序 らく、 等に 義務 善 不 消 論 行 7 戰 2 0 であ 國家 義 0 社 爭 為であると主 長 試 をト 關 戰 あ 會協 0 る説であ 0 は 5 す 良俗 爭 驗 戰 ると主 これ 生活を營んで居 0 如 する 壯 る きは は 爭 12 第二は 及 6 1 國 カゴ 最 0 カゴ 76 B 張 る。 實習 頹 唯 善 第 精 カゴ 民 の自 張 國 するの 軍 事 0 國民間に於ける慈愛同情 廢する。 だ 神 L 戦爭 な を守 6 4 する道 國 6 隊 を失墜す で H 和 覺を憤 あ 25 家 あ あ を目 n n 6 る。 入り る。 るた る カゴ 0 ばな 人類 戰 あ 德 ば、 カゴ 主 る。 故 的 論 爭 3 規 起 張 國 的 五 5 12 6 律 せし 遂 家 12 0 とする 傾 は を 之れ 害さ な は 文明 あ 社 的 此 12 は カジ 快 自 適 會 生 T 其 あ 0) S 主 る原 者 12 る。 カジ 活 國 13 己擴 0 17 平 惡 對 生 戰 ح F

最 義

も實

際

上の

智慧で

あ

ると(International

Journal of

Ethics.

January.

1915)

0

如当

修害を蒙ることは

無

V

0

あら

50

文明

國

民

間

12

1116

抵

抗

カゴ

宗

教

上

0

眞

理

6

あ

る

は

カコ

6

でな

は縦 理さ 3 內 惠 渦 は 411 戰 カジ 0 2 争 て威嚇し挑戦して來ても之れに應じては 進 情 去 制 抵 あ 分 步 裁 然 爭 抗 は n 12 n 英國 を促 は怜悧 て居 耳 戰 餅 ば國家は軍閥のために左右されて主 通 3 罪惡で 力 12 争 カゴ 12 に對する善惡 E がし、 た 武 12 な る は 侵入しても此の大英 識 間 威 殖 際 の外交であると。ケンプ ある。(九)戦争は人類の So を輝 者 は、 間 民 故 之れを破壊する行 0 17 カジ 廟堂に立つを要すると共に、國民の國際的教育を改善し、國際條約 此 戰 17 は かすことを目 心は法律 爭 條 0 國 武威の で 約 際 あ は 法 5 を以 是云 外交家 た めに戦 國 的 主 ム法 つて とし 義 0 動を非難排斥しなければならない。それ 0 リッヂ 國民 標準 器 規 眞 0 て居 争 戰 械 正 カジ と文明とを 爭 一我的 が絶えない。 大學 あ とする。 の善惡に對する判斷を失ひ、外交上の權謀術數を馴 いけな る。 ~ 供 2 いせられ あ 7 0 軍國主義に陷り、 故に國家の 5 講 Vo b これ 師 彼等の 自 如 內 ・ラッセ 故に 偶 何 衞 國 は ま戦 法 ともする 0 0 IL 為す 戰爭 法律 戰 事 律 氏の 件 爭 争の惨害 は カゴ 最 12 とは 獨逸の カゴ 6 如きは其の一人で ことが 善な為 、あつ 儘に打ち委せて置 對 小數外交家や して 性質 たが、 如き暴虐の國を生ずる。 から世界を救 を異 めで 出 口 實 來 12 な は 今日 を は 12 軍 與 L なく S 先づ他 0 À は ^ 7 あ H 及 る 3 0 武 居 便 あ る。 ば 國 には 12 550 び 手 威 宜 る。 仲裁 12 過 j カジ な 以 0 vo 武 よつ 戰 國 為 為らく 致 然らば 近世 威 R 窜 13 際 め 獨逸 を以 判 7 12 法 6 所 處 變 國 0 12 あ 27

人は 次 文明 ic 後者 0 可 は 能性を發揮して自我 人生 0) 目 的 40 基 く平 0 和 生を質現することが 論 6 か る。 以 為 らく、 個 宗教 人に於け 哲 學 る究竟 倫 理 整 0 一術 目 0) 的であ Ŀ カコ 5 人生 る。 を見れば、 而 して個人

生産 爭 循 3 じて L 殺 0) な 類 る め 煩 あ 0 譯 る生 出 悶 及 7 は 壯 T 目 力> る 0 無用 罪 戰 文 幾 澼 CK 6 行 T 的 で 的 0) 技 生 あ 罪 悪 は 爭 は け 活 ح 明 12 白 0 である、 一整上 る。 億圓 6 は 戰 なけ 活 n 基 又は之れ 愚 悪 n 0 12 鬼 人 **** る。 死者負傷 を送って た 12 對 0 あ それ 0 'n 卒 12 6 あ る。 類 め 3 L 天 達 戰 和 あ る。 ばならな 12 色 7 0 罪惡である。(八)戰爭を必要とすれば軍人が大切になる。 する。 才 * 故 五 爭 動 利 利 る 論 17 。常備 を 戦 戰 (六) は 物 者となり、 居 益 0 0 益) 戦 戰 死 罪 幸 争 性を暴露す る。 說 あ あ 場に引き出 させ る生 る。 は これ 戰 爭 惡 カジ 福 兵及 罪 然るに 爭 は 0 を か 悪で は國家 戰爭 活に向 損 交戦 る。 前 るから、 は あ び豫後備 皆 る。 親は子 者 傷すること甚 る。 あ な 地 は 人 (二)人 0 る。 つて 論 して殺すことにもなり、 國 发 及 不 為 四 戰 國 び び 民 を失ひ、 必要であ 的なる戰 を見る 兵 (七)最 家 0 世 敗 戰 場 進 は 12 納 界 戰 爭 0 まなけ 幸 0 對する費用 大なる不經 稅 0 國 は道 民 福 大で 12 妻は であ る。 3 經濟界を紊亂さ 0 は惨害を受け 爭 な 勞働 自 德法 これ によって、 n る あ 沿 生活 寡婦となり、 (二)戦 る ばならな 3 律宗 力 カコ は 政 カン 文 18 を欲し 濟である。 を有 5 5 戰 して、 は 争 爭 破 敎 不 更に る。 世 軍 壞 藝 必 0 は Vo 界の て苦痛 要で 術 暗 せ L 個 艦 活 財 子 此等 我 國 等 人並 黑 硊 る 文化 又國 動 民 カ> 殊 ___ 產 は K あ 面 臺 切 に富 は 孤 は な 兵器等 6 12 0 5 を 0) 12 掠奪 苦痛 否定 る生 民皆兵 0 見となる。 罪 民 國 旣 の上に大 利 精 に生 罪 悪 主 民 九 益 の生活 隨つて軍閥を作 で居 を好 活 する説 幸 的 神 7 恶 12 6 れ、婦 自 的 死 0 0 を 關 福 あ 文化 嫌 あ 主 る る。 治 h 病苦 なる損 は す 戰爭 を減 で求 ると 義 或 其 る 制 人。 6 女は を 家 n 軍 戰 あ 0 0 は罪 踩 主 る。 だけ 精 殺する。 める 貧 人 害 爭 あ 0) 備 蹦 張 6 る 壯 は 犯され、 困 は は 神 悪で る。 す す 戰 あ T 减 世 8 ことは努 此 極 る。 沒 を戦 界 る 不 0 る 爭 5 殺 め あ 軍 幸 0 を通 は 7 T 却 力> 虐 戰 學 5 場 す 福

は

閥

5 だ 德 說 旣 故 統を受 物 な 36 は つて保 る 現狀を批 ク 7 確立 は件 今後 に野 12 12 及 0 論 ८० 居 人 Cli 一害である。 其 7 主 的 して 0 72 な 法 動 癴 H 0 我 非 は 傷 項 律 れなけれ 物 る 傷 評させて 謬 理 斯 72 的 時 的 の方法に據らなければならな 代 弱 殺 居 殺 想 カジ 目を掲げても、 丰 軍 論 そし 蠻習 肉 する戦争 15 す あ 主 國 0 つて 報 强 3 政 義 S デ あ 戰爭 戦争に依つて生ずる光明 ばならぬ て公序良俗 復 ir る 策 的 0 食 カン 「一切は破滅 5 現實 痕跡 主 の生 人を殺すてとは禁じられ 2 0 バ 義 12 あ なるもの 1 戰爭 よつ り權 (主義 に過ぎない。 0 活 は 1 殺人 もの 决 方法を歸納して直 l 0 1 力 的 カゴ て競爭せずも 才 では 維持、 自然的 T が、生存競爭上永遠に必要であると見做すは妄論である。動植物界に行 主 思潮 的競爭を脱して、平和 しつゝ 才 ゲ 戰 義 N 15 無 争を肯定す 0 精 2 12 規律 に生じて居ると云ふ事實に過ぎない。併しての Vo ある、何人も商業及び金銭以外の事を考へない」と慨せしめ、 等 理 力主 胚 强 Vo 0 胎 國 想 的方 道德宗教 的 思潮 國 主 義 9 卽 生活 ち正 報復主義 際 7 ちに人類を推論するは誤つて居る。 義 0 る る議 裁 居 面 南 的 によつて見ても明 ŀ 5 判 0 國 ラ 義なりと主 る みを認 法 國 所によつて捌 家 4 カジ 論 民 ななる殺 律 哲學 的 12 主義 チ 如 の道徳的 3 は 的 教育等他 ケ めて 協 ならな を 的 0 人的 國 同 祖 系 政 張 暗黑的· 心 家 統 治 す Vo に幾 る説 競 法 < 0 17 かであ す 論 益律的競 方法 争 競 國 る 於 で 方面 争 5 民 ロッツ 7 あ は決 而 0 0) 5 如きは、 26 る。 は カジ 12 L 勤 争 あ は ~ 良 r L = 丁に進 る。 道 方 勉 開 て國 個 史 其 0) ーッチェの 德及 人 法 等 却する議 家 新 n 力 人類 唯だ 0 は を實 際 h ラ 理 カゴ 1 必ずし だ。 ン Ci 競 想 的 あ w 國 事 現 争 る。 ケ 主 君 行 競 0 0 をし 實 國 在 際 25 論 個 義 主 1 爭 7 を以 及 際 人的 42 法 は 此 は 道 た 3 w 0 於て T 本 間 等 戰 真 カジ ---CK 德 E" " 定 獨 文 つて直 爭 理 其 ス 體 說 ス 42 の道 を傳 化 功 逸 0 でわ 7 0 では 於 る 12 學 唯 7 女 利 よ w Æ

29

つて作 文明 想 者 0 12 間 國 如 0 國 は 文明 實 競 或 よつ 民 T 家 社 0 は 衝 議 争 現 始 は 會 カゴ られ 7 を増 突 無 政 會 國 25 0 め 卽 保 て文明 治 紛 家 關 競 5 唯 及 • 0 學者 争を 擾 L 國 だ 進 72 CX は 家と相 す n 國 消 2 2 平 は 際道 も道 爲すの 0 る 國 德 る 內 n によつ 和 發達を見るのである。故 故 يل カゴ 內 裁 及 0 對的 間 17 德 裁 てぶ 德 如 判 個 1 に質現 於て 7 は 判 所 國 及 である。 人に目 大同 世 際 び國 12 所 0 は 界 國 兩立して始めて意義 12 あ 法 され 際 に從 際 小 不 的 よ る 的 而し 異に主張 合 敎 間 0 法 カゴ カジ ると。 理 育 0 0 7 如 カジ あ であ 决 標準 7 衝 12 < 7 る 個 せら 突 よつて 如 おれ 此 つて、 紛 人の 國 家 6 0) 擾 n 際 あ 17 0 保た 競 この は る。 7 論 B 12 國家 不必 法律 爭 域 的 70 は宗教家哲學者 7/6 カゴ 際 12 あ る。 n * 個 人類の文明 萬 にも 要で 人 關 る。 和 裁 は 實現しなけれ 判 國 議 カジ 1 ばならな 目的 あ 消 7 國家 所 民 會 は道 岌 る。 德及 12 カゴ カゴ 1 會 CK 0 あ 人生 v. 2 國 德 た 倫 12 X 無ければ個 る。 法律 理 7 際 及 めに ょ は の 決 個 學者藝術 故 裁 び 2 ならな いせら 法律 多 目 7 に從 人の 12 割 作 < 的 戰 所 及 n 0 理 人が 争 So つて人 カゴ カゴ 6 標準 n な 個 想 家 CK は 無 國 人 國 H 丽 人 1 < 若 家 際 又は 生 n 生 6 國 國 L くは T 0 あ 家 は 家 0 0 法 目 多く 個 目 道 な 個 る 0 B は 若 的 德 5 的 理 人が 的 萬 人 カジ を達 干 及 8 國 な 0 如 0 想 は 達 た 國 とは 無 0 議 CK V 家 け す 法 世 L 曾 民 め n る 國家 律 界 祉 敎 國 12 17 カゴ 致 理 ば 學 會 1 育 は 民

批評

して、戦争は 等 說 諸 人類の利 21 說 關 0 總 L 7 7 益幸福を増進すると説き、 槪 12 及 括 h 的 25 6 批 其 評 0 是非 7 8 見よう。 審 究することは 其の暗黑面を見ない功利主義は誤つて 先づ 主 到 戰 底 論 紙 に於て 數 0) 許 3 戰 爭 13 0 V 光 所 明 で あ 的 る 方 ねる。 面 力> 5 0 Z 其 戦争は を 偏 0 主 視

公孫 る限 な 潮 居 露 守ることは カジ るに 間 女にもあ あ つて居る。 50 る誤 義 0 を以つて賢として居たてとは、 ると 歸 たので、 40 念によつて 兩戰 王 對 我 L 北 0 5 非るなり、 章 解 衝 カジ た。 り上 世 大を待 7 突だ は 國 筆 句 6 何れ 人道 到 0 大 界 墨子は先王の政は非攻(非戰論)であつて兼愛兼利であると説いてゐる。范文正公は「儒 あ Ħ. Ŀ 12 裁 杉 底 武 書 12 カン 22 胡 る。 らで 上の たず。 他 簋 謙 + 戰爭 力膽らざればなり。 は「力を以 判せんとす も戦勝を天に祈った E 道 た。 0 E 信 國 義 事、 義戰であると云ふが、それは支那に於ても露西 道 は 呼 カゴ あ にもあり、 に見ることの 湯は 或る論 ばらし る。 主として鎌倉時 絶えな は 則ち嘗て之れを學べ 仁義を以つて敵を服 る祉 七十 て仁を假る者は覇 或 者 7 3 る論者 會的 石田三成にもあり、 は 戰 里を以てし、 JIJ 出 我 0 八中島 支那 のであ 來 徳を以て人を服する者には中心より悦びて誠に服するなり」 良心 T カゴ は 平 ない美風 代に起り 國 居 と關 なに於け の武 た。 0 和 聲で る。 を目的 文王は なり。 9 孔 し、 ヶ原の二大戦に 士道を以つて平 戦 あ 義戦 カジ 子 る春秋戦 甲兵 は之れ つて、 戦は とす あ 國 覇は 徳川家康にもあつたと云はざるを得な 呼 つたが、 時代に大成したもの 百里を以てせり。力を以て人を服する者 ばりは の ずして る軍 事未 戰 を評 國の時代に於ても結果は總て互に自衞 必ず大國を有 爭 國 だ之れ 勝つの 戰爭 和を目 して、 主 は 人類 よつて證明される。 義 個 Ö は 人 0 を聞 及び國 共通で 義 教で 目的 的とする義戰 Ŧ 亞に於ても人道上の · 道 戰 とで は矢張 では 力 あ である。 徳を以て仁を行ふ者 ざるなりし あ る。 家 あ なく る。 ると云 0 孔子 理 り弱肉强食 想 これ 正義を云へば武 敵 6 7 亂臣 20 を實 あ 人に對して は哀公の と答 ると は 義 併 現 戰 賊 50 戰 說 せ であつて攻 しそれ 爭 子 へて 軍 と解 Ö は心 んと を道 B 7 爭 事 0) と云 戰爭 王な る。 する 質的 は大 德的 清 田 義を ねる 7

的

0

主

戰

0

3 2 0 セ は ン 軍 をして 國 0 みとならざる様 「兵力に於ても强國 に注意せよ」 であ り精 と警告せしめたの 神に たがても 强國で は、 あつた此 此 0 獨 國 逸 に於て、 0 功 利 主 精神は消 義 12 基 失し 軍 7 殘る 主義

位置 衞 蘇秦張 界に ある。 る 鞅、 25 12 カジ 國 、個人及び するには他國を征服滅亡させなければならぬ 殺 併 存 次に 一を防 獨逸 獨逸 は 申 羽 3 吞 在 皆な n 攻 し得 セ 儀等は 真 禦し は jν 弘 理 代 和 る Ł" 自 ス 連 を以 0 カン な を目的とする主 國家の ラブ T 分 連 ·þ 合 韓 0 あ V 居 0 合 る。 0 0) 0 0 主 一途に て賢 ると見られ 民族の か 韓 であ 軍 も今は皆な自衞 中心眼目になってゐる動物的生存競爭の世界に於て、義戰などと云ふ目 めに 動 Ó 非 獨逸 者 司 子 H として る。現下の らし 蠶食を防 自分を正善として戦 でな 令官で 0 は 謂 秦 戰 る。 10 論 い革命運動 6 S ゐる。我 。孔子の る申 あ あ 即ち義戰主義は有名無實である。 國 それ ざぎ、 5 2 0 際 た て連 商 的 カジ 故 佛蘭西は 連 韓 めである。 春秋 彼 戰 Œ 非 合軍 に對し 合 を攻 一年の世界はなは支那に於ける春秋戦國 當防 0 6 つて居る。 側 學 は は め からである。 普佛戰 て自 六國 衞 0 6 なけ 義 などは一片の 自 あ 元首及 戰 國 る。 に當 n 75 爭 を防禦 0 は 7 しと書 此 0 主 び内閣 る。 丰 彼 覆轍を防 0 我 r カゴ それで自衛の戦争が義戰として認めらる 點 的 ŀ ~ 我を攻める。進んで彼を殺 偽善 カン に關 ラ 行 員 7 n 露 為 3 殊に富と領土と現實的物質的 7 17 ぎ 西 になっ 屬する チ と韓 7 ては 15 過ぎな 亞 る。 英國 B は 非 ラッセ 7 李 此 チ ر ر 子 S] w は 2 和 0 は 海 る デ 春 會 n 0) 東 何とな þ Ŀ 1 議 秋 氏 時代に該當する。互 西 春 等 0 は 0) 0 0) 民 覇 秋 諸 0) 筀 好 族 Ï 所 法 す 侯 戰 カジ ば自 72 は カン 出 說 0 對で 正し 侵略 る自 會 今 退 度 0 は 國 盟 秦 行 H 成 V V い。墺 あ 8 為で て彼 を防 國 であ 0 0 b 功と る 防 商 世 0

靈とか 筝を非 實 4 る 如 利 す 無 爭 7 n 1 カジ 平 うって える悪 から無 て人類 0 n 抵 居る 現 最 益 た 和を愛することになれば、 なる時 近 0 E 抗 0 カゴ 12 12 は 自 云 カジ カン 漏 5 る者 手 人問 是に 出 現 眞 抵 至 然の結果であつて、 敵さない人が賢者であ 42 代に於ても戦 を主とした結果 不なな 戰 た 段 在 理 り勞働 抗を以て外交の手段とする平和 石を見れ 争の 6 個 ことは今に 6 題 原因する。獨逸の軍 0 人の は Vo あ 12 觸 際 絶えないのは あ 者と次第に妥協 る。それで個 ば、 梁の惠王 間 報復を必要としない為 る m に於て 争 T カゴ 人は不徳として反つてこれを排 限つ 軍 であ 行く結果 の惨害を恐れ、 17 る。 カジ 歸するところ主戦 は未だ道 た論ではな これを抑制する方法がな 利 人間を擴大した國際間 國利 功利 り道 中國主義 益 英國 0 す 幸 る傾 あ 民 徳家である。 主義的 福 德法 は る。 福を求めるために覇道 0 が物質的現實的 功 平 S 向 4 和 を生 律 論 議 利 利 めであ から戦争を非とする論 カジ は理 論 12 遠く上代からあつた。 益 説の mでは 平 完全 的 よつて 幸 じて來た 論 る。 これ 本場であ の軍國主戰に陷つて覇道にならなければ目 福 12 0 に於ては大なる眞理である。 に於てもこれ V 確 和の實現が 生ずる利 上 若し惡に敵し は惡人を制裁する道 |成功を企圖するは主我的 立る 0 から抵抗するの **斥するの** カン は、 る 5 に拘 に從ふてとになり、 n 戰 益幸 争の 7 功 不可 であ 利 居 はらず地主資 カゴ は誤つてゐる。利 修害 7 非戦闘員たる最 說 75 福を望んで居た。 矢張 以 る。 怒 能なることを證明 V 外 を説 が事實であ た 6 り眞 故 黨 德及 12 め ら戦 12 博愛と 12 つて 理 本家 人 CK の快 でなけれ 王道 互 類 個 法 個 爭 大多數 る。 人間 律 カコ 0) 12 人的 益 を 0 樂主義 報 H 僧悪す 專橫 個 かが 幸 自 を迂遠 in H 社 して居る。 我 復 人 報 12 福 ばならない。 於て を極 in 間 復 會 とか 的 ども依 0 0) を為 12 民 上 る 的を達 ども之れ 行 あつて、 がては 嚴 は 衆 は 生 為 カン 的 を爲 で存し 然と 平和 とか 怒を L は 5 T 2 何 戰

___ 33 __

來る。 氏 よつ る 0 覇 ではない。 國 自 如 5 5 平 7 力によって押し付 敎 名教 た 天下 は の王 自 7 云 衞 如 生じな ふ場 道 8 あり、 < 0 和 望む 戰 戦争をして迄も平和 ではなくて、 「敵 のた 爭 合 V. 何ぞ兵を事とせん」と云つて居る。 平 を永遠 12 國 めに戦ふ義戰」と云ふものは、空想であって 唯だ平 和 過ぎな 0 論で 破 けられて居る狀態であつて心服ではない。 壞 0 管仲 道 的 和 あ Vo る。 德 行 的 平 動 0 E 0 17 手段 朝 禮樂 和 を確保する必要があると云ふことは大なる空 奉 じて 對 道 は 文は 自 L 卽 刑 ち道 政、 居 1 衞 其 自 る 0 衞 0 即ち 0 戰 德 亚 は 爭 及 0 一流を汲 德治 誤 8 戰 び 必要 争 法 0 故に王道 律 主義兼法治 7 は 一と認 び申 70 IE 0) 當 F る。 商 6 力> め 韓非 6 あ 有名無實である。 は主戦 な るこ 水なけ 平和 主義 V 道 0 法家の學で 一德的 0) 又 6 論ではない。 あ は n は國際裁 る。 輿 ば 現 論 ならな 想で 干 在 0 容易 努力に 0 判 あ 戈 る。 あ 國 所 12 修身仁義 S る。 際 は 訴 12 それ 戰 世 よつて 的 た る 孟 自 爭 界 10 iz 軍 によつて 然 0 ~ 0) 子 手 始 ŋ 0 あ ~ 0 事 1 め 段 る 7 主 義 情 氏 12 7 (0)

平等とか 利 とせずして はなな 子は之れ 主 て戰爭の是非を論じて平和を望まなければならぬ。 (二)次 は 自 12 に答 主 我 利 平 戰 益 和 の實現とか生の カジ へるに仁義を以てした。 阈 幸 論 論 12 福 0 12 一來る。 於て、 功 をのみ 利 主 亦以 目 義 戰爭 發展 ると同 的 7 は として生活して居る快樂主 我が とか靈 樣 人類 に誤 國を利せんとするか」と云ふ具合に直 0 の生活 即ち我 論 利 であ 益幸 しとか云 る。 福を殺し 々の人生に 人生は 單に快樂主義系統の幸福論から戰爭を是非し 減 ふ甚深なる するか は利 一義者 利 益 には梁 ら必 益 幸 幸 砂 福 をのみ目 要であり罪惡であ 福 0 0) 惠王 カジ の外に あ る。 の徒であ 的 もつと仁義 ちに利 それ として生活 6 益 る。「叟千 此 ると主 より打算する。 等 博 愛 0) して居 張 標準 里を遠し とか自由 す る から る T 功

と思 T 0 する は 國 律 力 n OV で 思想を加 萬國 憲 會 際 理 權 保 法 グ は > F, 0 利義 たれ 12 手 想 は な 法 76 的 於て 裁 權 0 る 世 は 纠 法 實 これ 力 務に關する 國 12 各國家 界 藝 思 ŀ 砂 家 管 所でなけ IL 現 國 カジ よつて 察 設立 12 ゲ 0 12 想 即 家 0) 0 12 法 IV 6 力 國 對 佛 道 道 部 * 度 際 は萬國 を修 は 德 17 德 解 す 0 國 カゴ 加 して然る後 -ーッチ な 的 1 的 的 ればならな 遵守すべき法律 决 る 個 0 理 0 輿 す n 自 論 法 法 國 人 正することが 3 ば、 7 律 論 議 ることが 際 的 由 は 律 ノュの 平等の それ ~ 憲 的 0 會 間 解 的 に各 人生 政 法 政 あ 脫 君 (人類議會 0 ・ジル から戦 治 治 る。 Vo 紛 及 主 カゴ 國 眞 思 道 保 的 櫌 0 的 CK 出來 には 輿 理 忍辱 を制定しなければ 0 目 想を 73 た 創 m 德 衝 して 自 争 る n 5 突 的 12 論 12)でなけ 的準 遵 由 加 て、 無 世 な 0 反 T 12 は 17 よつ る。 界 居 法 萬 的 基 思 對 いので、反つて 個 するロッツェ、 備 國 條 戰 く平 0 るやうで 0 想 裁 'n 英米 そこで 7 德 約 爭 * と國際的法律 民 人 國家 保 判 加 0) カゴ 和 0 ばならな 0) 輿 所 稲 72 無 手 論 0) なら 段 民 論 は n 0) 結 先づ國際 世 V 0 國家 支那 主 界 を假 益 憲 T 判 7 12 決 な 居 S 的 カン 政 AL 々眞 0) 1 才 とは Vo を 17 15 5 自 系 0 國 る 1 0 7 0 僧 從 その H 間 ず 理 王 治 統 15 ŀ 民 悪す とは で iz 道 的 2 に存 保 は 而 \$2 0 で 0 致しな 等 議 理 73. 法 仁 精 72 L ばならな 個 あ 警察力 して る道 7 律 想を n 員 る 政 神 0) 云 V 人 國家 國際 間 2 を加 3 カゴ を 新 ~ は各聯邦 羽 な 德 國 加 說 居 V 12 理 矛盾 So 0) So 1: カゴ 間 際 於 カゴ 明 想主 72 的 ~ よつて で あ 的 す 輿 0 H 之れ より トラ 觀 る 世 獪 義 衝突を裁 生 我 る 論 る 明 萬 時 界 活 太 念で 12 7 1 カゴ は カジ 保 は、 選 には 最 Ł あ 0 如 2 0 1 或 警 條 來 博 司 72 る 聯 < 3 ブ チ 0 あ 之れ ケ、 察隊 判 道 ラ 樣 n 理 る。 爱 效 邦 清 る 盖 す 德 7 0) 無 力 1 ic 淨 る 3 居 L 組 及 抵 カジ <u>۴</u> 5 制 萬 よつ る 法 抗 織 CX あ ス 裁 庭 國 法 0 民 的 0 る

説さ、 < 最 法 道 0 は る 得 る カジ び、 17 は 本 高 天 理 德 B 0 個 亦 2 < 人 ラッ 和 生 及 想 國 個 居 0 あ 成 ٨ た 的 1 自 精 家 論 12 る び 0 3 國 人 る 0 セ め 由 規 家 的 基 3 單 法 珠 理 6 神 カジ 理 は w は政治法律によるに あ 律 想 生活 個 氏 的 0 定 世 個 < 想 25 2 自 界 人文(6 如 を 人 A 平 0 人 6 た。 75 規 12 0 主 和 樣 は < 如 類 的 4 6 定 國 衆 國 な 論 あ 義と國家主 < で 史 藝術宗教哲學)即 なけ H 合で n し、 家 民 無 上 る。 は 12 か 32 n 見 的 过 何 抵 0) る 0 ども なら n n 何 理 故 あ 生 5 抗 蠻 極 ばな 活 6 習 想 12 主 ば自然 所 9 ~ め 個 万 義 あ 義 3 個 7 カ> カゴ と人類 v 世 と世界 非 非ずして 5 を以 A 6 世 る] Vo 人 界 は 法 な 見 界 理 0 か 氏 7 0 道 v は 認 想 國 ち 6 7 0) 理 的 2 0 家 主 これ 絕 あ 德 理 想 國 生 7 6 3 如 め 家 活 義 絕對精神によると説 る。 と國 對 而 其 現 < あ 21 法 想 3 とが しとを 對 精 3 は 在 る。 律 0 0 抵 0 衆 L プ 理 規 家 吾 抗 6 神 カゴ 7 0) て方 を目 ラ 絕 其 想 定 0 合 互 調 人の 國 主 道 あ 12 際 德 17 和 義 ŀ 對 0 L 理 6 る。 自 見 上 便 的 相 を以 1 的 理 想 あ L 的 提携 て、 より 6 とす 想 我 と世 る 尚 標 世 る。 道 2 あ 準 は 界 所 德 0 撞 7 ほ 國家 倜 真 6 3 谷 着 界 12 と説 道 1 0) L 平 人と j 家 自 德 理 S 理 あ す 理 0 7 和 とし た點はまだ説明は到 ると 國家 る。 世 確 n 想 論 0 想 理 < 上 0 ば最 主 3 可 想 界 保 國 j カジ てとは 道 ころろ 家 繼 能 0) 7 7 義 國 は m 徳と説 6 公許 承 は 絕 6 家 根 る と世 de 性 L 合 亦 對 あ す 7 0) カゴ 0 相 底 ~ 內 界 さてとを た 精 理 0 る 5 發 理 調 は あ < 25 n 揮 誤 鼓 た 想 との 的 ^ 1 個 햬 0 和 罪 5 を A 0 0 吹 12 を 7 カコ 6 悪 5 間 7 す 對 人 規 12 4 ゲ あ は は 0 つて得 る性 定 主 居 w 為 る な 個 あ 12 0 L 行 誤 5 る。 7 0) 的 5 L 張 有 6 人 カゴ 人 は す 9 質 方 生 する あ 0 機 人 12 7 n ない。 最 便 文 見 2 個 0 國 理 る 的 0 0 V 6 國 家 議 關 7 後 居 4 目 n 0) 想 人 7 あ 家 过 標 運 0) 論 係 真 21 る 居 0 0 から では 人生 と共 進 然 を 相 個人 3 12 論 人 理 根 で 3 事 基 為 は 想 あ 3 底 家

スペ信

者や告はは

愚なるものたとき、

のヤ天の

ず婦の汝

るが鍵は 我らにはだける神

神所れの

のにた子権價ペキ

能値ナリ

たがザス

ろあいト

文 * 朋 知 0 9 滇 2 人類 髓 12 此 達 を 0 する 戰 國 争 際 0) 0 的 慘 6 殺 害 育 あ る 1 17 6 於 就 救 1 2 中 n を普及 自 倫 由 理 學 平等 者 博 0 妓 目 愛 的 0 12 F は 始 實 12 め 個 17 7 萬 5 人 0 > 議 17 4 あ 會 0) 實 9 0 創 現 道 を 立 德 全らし、靈 を 見、 0 研 究 萬 は 阈 0) まさ 裁 生活 判 所 此 0 0 繭

9

所 謂 統 派 頑 洣 to 排

12

於

7

究

極

12

格

3

0 6

あ

る

でるではなのの準備はないでない。 扇をでにめて を一覧数とが會 草持正い會し其に しつ統にはて中出 貴者派一協迎に席

活中想徒肩もにいる。 にいのらな己 於潮流に怒等 あ 3 てのを他らの 中 を流意を し抱やれ識排聲く 世 組 。はせ撃色主 迄に あぬしを張 るので快らと 出 來 上

3 我 N 护 解 放 2 7: 0 2 もツ如醒やの

也るの也。これに きあしれ▲ るると人等き▲ るつ同たキ 。。すはの得法 時で一。リ 此る弟思な皇 代でに思ス ギも子想かに は内見想ト ヤの等生つ代 け也る ると偏 キ思狭 リへ極 スるよろ ツでが活たへ プあゃの。て 來面ゆはは に像獨すた。 に像獨する人我に ををというなない。 たるリ所構聖 見。ス産威書 似りて立て。は投棄てよ。目を 「遠決が個敵 のしあい對 明光は近いた。谷其色彩を異いてはざるものはかられていた。 然醒 しせの たな、異は 。いそに 所 。れ すに 汝汝 はが 實大觀なス者 汝今 質なにからいる。 の日 謂一はる就 正人單はくる統一に営者派個外然也 內迄 に抱 現き たの面でこと はて れキ 給リ て想のる仰 任に事。せ ふス

ず活てよら

活入

獨『改を▲其義は 斷~革縛譯信等聖 か"がらも仰は靈 云 5 ロななに夢のパた しけくは想人」が マれ、生だ、ナ 法ば教命も格 リロ 皇氣義がしばり 0 ののとあて解 教育かつぬせばまったなられていない 白 10 は つて らか條 た居 脱つと したか なかっつ 觀 た中い の世ふ 權 彼らった。 だ紀繩 威 とはて が の信念は す過も 輝 れぎつ ばたて 7 は三 確位 20 近十人 る。 代六々 てあの 思世の 0 潮紀信 はの仰 、教

あ て、 で 國 あ 立 議 又今囘 會 法 る 權 力》 に於ては法律を以て徐 5 司 0 法 萬 戰 權 國 争によつて見 0 憲法に於ては各國家の 確 立 上と共に 人民 るも明 々に此 0 カン の 帶刀を禁じたと同 なる 軍備を縮少して行 外変要件は各國會にて議する制度にすることが カゴ 如 く, 戰 争 一であつて、 は かなくては 人民一般 心の責任 將 な 來に於て實行さる 5 な ではなく小 vo これ 數 は 肝 外交家の責 國內 要 に於

四際的 教育

る。

家の 0 L 船 的 人を 12 穀 0 育家、 平和的生活を湯仰欣求させなければならない。 會 抓 7 親 共 國際 一教育 0 蔑 理 同 7 視 想 12 生 傳 活 す 111 的 私 0 倫 國 道絕 界を 國民 改善を 法 る鎖 世 理 0 家 界 精 學 的 0 神を鼓 叫 者 雜 圆 0 としての 圖 T 婚等に 的 理 個 しなけれ 、哲學者 5 教育 想と 國際 人 吹 た 意識を發達 國外に於ては人類 關する世界的 を棄て、 12 る 的 、藝術家、政治家、法律家、 と同 憲政 關 ばならない。 貿易、 す 國 る 時 自 有 12 民 國 世 せしめ、 人種宗教 機 た らし を誇 界 知 的 國內 理 識を普及しなければならない。 0 張 論 T 親交の 道 0 至 個 る に於ては家庭教育の 過賞する 教授 德 平 人た 爲 國際的 等、 國際道德は人生の目的に基く平和論に於て理論 法 め 12 律 實業家等社 L る 上の 移住 矯慢 なけ は、 敘 倫 育 世界的 先づ 理 出 なる態度 21 を 一称、旅行、 は 施 運動を盛大に 一會の な 7 第 輿 5 13 改善を圖 17 論 あら を な 计 國際 を作 S n 國 此 掃 40 は 際 6 5 る方面 L 爾 行はなければならない。 的 13 的 n なけ b カゴ 敎 會 來 國 國際 な 育 為 合 0) 民 の有 n 如 S 力了 めには宗 教育の 學者宗 ばなら 的 < 大 憲政 外 個 切 國 6 者 人 改善を圖り、 國 教 教家 13 7 はその 0 あ 家を始 V. 僧 理 る。 民とし 想 Th 世界 先導 の真 個 術 外 Ł īfi 國 或 B

能 勿論 劇 る。 福ならし る Fh. となする や彼等の ム丈金錢を獲得するの方便として不承 むことは出來せい、 其滿 或 は は とは 足の むべきかし 歌 念頭 夫れ 劇 性 純 然た 12 自 質 或 らに 浮び來る最初 如 は る異 0) 何 죱 見よ彼等は自己の職業に從事するにそを他人に對する奉事として務 悪しきも は 問題に非ずして 樂 敎 會、 暫らく措き自己を中 主義であ 或は宴會、 0 のでは 思想 る、 な は 惡德其 V 或は 如何に 々々に從事するのである、 『我は今夕如何なる善事を為 否 心 力 有 我自らに最 物よりも とするも w 益 ダ なるもの 會 などを築として自己の 更に惡しき基 0 は も多くの もあ 唯 物主義者であ る、 故に彼 滿 し得る 足を購 督教 然れども之等を最 等 0) が夕刻 敵 る、 N カ> 享樂に汲 であ 得 去れば 如 450 何 12 至 17 なとし 彼等 Ŀ 他 7 のめず、 0 其業務 をし 問 は てね 或 題 事 は 6 7 8 演 あ 幸 終

力 分を遊戲 寧 他 蘇 る ぎざる は 一ろ唯 人に 12 0 現 かっ ないか、 代 對して心からの敬慕を表はし彼自らの 36 端 金員 物 對 0 知 主 する n 観物に費やし、 敎 0 ¥2 みを奉事 若しも彼にして其資産の多分を家屋に費やし、 一義者 會 は 事の 品品 である、 唯 0 物主義 4 行 に興 * 念よりも自己に對する世慾 方 基 E 基督教とは何であるか、 其時 13 督 ^ 0 、其資 るや 12 侵入を発かれ 與 間 產 0 的 多分を富者の 1 たらん 0 n P ¥2, ざるが 12 部 為 然 分 は に生活せず神の L 彼 の満 彼 は 爲めに 如くに思はる、 基督の生活し は 眞 彼 基 自 0 足を思念するの情深き時 150 一督信 基督 費やし、 其收入の多分を快 者 爲 信 王國 12 6 者 は 費や 斯く 蓋し人は其名を教會に列 と稱 給ひし如く世に對して生活することで な の為に生活するもので V 3 す t 額 日 ることは 何とな 曜 10 比 0 す 朝 は彼 樂に費やし、 n 出 n 0 ば基督 みを教 は 來 は 基督者たるよりも 42 極 め あ 信 彼 7 會 すとする る 其精 者 は 1/ 12 紳 カコ は 部 與 基 士 らであ 分 カ 其精 督耶 0 12 0 過 多 あ



現代の唯物主義

白石喜之

助

ム可 代に於ける大多數の人々は唯物主義の從屬者である、 現代 を以て一貫して居るではあるまい 0 からざる事實である様に思はるゝ。 問題 0) 大問題は基督 であ る、 換言すれば人心の 敎 の人生観が人心を支配すべきか、 カン。 傾 彼等は唯物主義と言ふ名稱こそ用ゐざれ其思想と生活 向する所は靈 特に大都市の住民は大半其門徒であることは爭 カン 肉 かと言ふ問題である、 工 Ľ. * 工 ラ スの唯物主義が人心を左右すべ 予輩 を以て見れ とは此 ば現 38

る、 る 唯 去れば何人にもあれ、單に自己の享樂の為に生活するものは唯物主義者である、 至つては唯物主義者の名を免かる、ことは出來以。 は人によりで同じからずと雖、自己の生活に最も多くの快樂を齎す事物を第一目的として追求す 物主義とは何ぞや、曰く人生は自己享樂の爲にして他愛、奉事、犧牲の爲に非ずとなすものであ 勿論其快樂とす

暫らく都市に足を停むる者は何人も市民の大多數が唯物主義の捕捉する所と成れるを發見せずして

17 至 和 す ば殆 有らゆ きもの ど疲勞して る興 6 八味を あ 思索 る 失 カゴ N 讀 幾千 去 書 る 12 堪 萬 0 0 0 へずな 男女は現代の競爭 あ る、 9 歐 不 ·自然 米に於て日曜 に神經を興奮するも 組 織 禮 の下に過勞の業務に從事するよりし 拜に男子出 0 席者 若く 減 は娛樂を求 少せ しは之れ め霊 も因

由 現 する所 代 少なくな 他 0 群 V は成效を偶 0 で あ る。 像となし宗教の念を一掃し去りし人々である、 彼等にありて

彼等は 册 110 何 せばそは唯 はれ を質問せし時同 得 れざる所である、 は全く事物 は 72 < 非常なる熱望にして自己の生活程 事 彼 事 時 了る 程 は 等 カゴ 娇 0 ある 0 改 な 12 中に吸收せられ宗教的 緣 0 偉 革 V 0) 氏は答へて『成效を目的とする者は全力を之に傾注す斯る問題を考ふるの 大な 運動 が之は實に現代人の成效熱を代表し得たる言辭である、 關 6 遠さは 曾て某宗教雑誌記者が日本の豪商大倉喜八郎氏を訪らて其未來世に關 詩 あ 與 人の る、 する所で る性質を最早や缺 12 猶空間 對して全く無興 大作 彼等にとり ある。 に於 は彼等には る惑星 ては 生 活の 度を引上げて自己以上の富者と比肩するに至らん事 味 如してゐる、 無價值 0) である、 ___ 凡て 無緣 震 魂の であ なる は雲散霧消 生命』 彼等は る、 若し彼等の家庭に靈的分子の幾分かゞ殘存 カジ 如くであ 唯 など言 地 心說 し、 球 上 12 る、 高 0 ム言解は 妙味 神 倘 なる 0 彼等は最早や 濶 も彼 歩し給 無意味 され 理 等に 想 12 ば其結果として 對 3 は 0 生活 事 何 事 L を證する大運動 6 0 てすら 魔 や靈力の あ す カも る る は利 感 は 其夢 彼等 信 精 應 益 仰 神 0 如 寐 能 0

に對しても現代人の或者は熱狂の度に達してゐる、 彼等が競技に醉狂するは恰かも酒精

3°

唯物 劇 程 見する能はざるを遺憾とするのである。 飽くなき慾望に 性よりも自己を先にすべ あ 公然と本能 12 して 顧 は殆ど皆享樂主義を中心としてゐる、所謂今日の悲劇なるものは人の靈魂が である、 主 ふに 『真の 不 義 9 い
斯
く
の m 可 を唯 個 して 慾 能 犧 12 人は之が 0 性は生命の 其 事 從らて 現代人の多くが享楽を之れ事とす 如き異教的生 の哲學として唱道する者漸 根底を有するのである、 であ 為に兇暴に流れ家族 云 ると主張 しと教 爲すべきを勸 成就にして途には歡喜に終るべし』との説を道破する書物者しくは 活 する、 10 は現代の生活 る、 皆し且 現代 彼等 いは之が 實に今日の文學及藝術は変他主 0 は < 小說 つの義 社 多さを に普通の事にして識者を待つて後に知るべきことで 會 に此 為に荒廢 務 る無覺の カゴ 個 加 より 人に 種 へて來た、 0 36 唯物主 權利 に堕し 思想を抱臓す 對して を先に 何事 彼等は基 義 Ō > あ たるに留まらず、 をも 1 る、 奉事 るも 要 督 義を知らね、 0 より 求 教 カン 汗 す 0 仰望する 0) 、も満 犧 劇 4 る 場に 牲 充 0) 現代 棟 足 權 0 吾人は今日に 登 * 理 36 利 の文學 先に 物 一場せらるゝ 想 啻ならざる なさを説さ 12 は 劇を發 對 不 自然 はな する は 犧 亦

40

_

特 没頭 は 日 今試 に都市生活に於て其最も甚だしきを見るのである、 12 られ うて 歩を轉 其 宗 靈魂 敎 じて 0 より消 念は漸 現 代 失す 次 人の 12 實際 中 るでは 心 生 生 な 離 活 n を見 V カ> 去 5 よ、 之れ 他 都 實 人の 市 ては之れ近世の經濟組織の 12 12 悲 爲 あ むべ 7 5 ふ事 7 、き現 B は 田 象で 次第 舍 12 あ 12 あ 其 9 る かが 實 ć B 行 不完全なるに歸因す 今 12 人 遠 日 R は 0 カン 5 事 其 業 實 6 靈 務 的 あ 12 る、 生活 全く

彼 分有して するものなることを知る、 は 人間 0 ゐる、彼は國 真實最 高 の絶頂 民にして若しも靈性を忘却せんか其滅亡火を睹 彼は有らゆる時 は イエ ス といるに變貌 代の偉大崇高なる先覺に親しみ靈界に對する彼等の熱心を 0 山に達す るの時なることを發見し、 るが 如きものあるを知つてゐる、 世俗

る。

心若 世 成 を其墮落 泇 ること極 3 は此 現代 一致が る事を充分に了解せしめたく思ふ、 物に自己を埋 くは利己主 をして寧ろ世 種 0 逐 教會 12 12 の人であった、 めて急である、 覺醒 は塵芥に歸するも は し得たる人々は孰れも此種の人士に屬す 斯る人士を要求する、 義の世人に明白 生没し去 「俗の享樂を棄て、靈界の安住を仰望せしむる程に至らんことを希ふもので アシ 吾人は斯る人士の努力によりて漸次に靈界の事物を發揚し其妙味を示し以て るの シ 陋劣なるを嘲笑するのであ 0 こに奉事 のフランシスも亦此種の人であ たるを世 否教會はそが演説者や事務家を要するよりも斯る人士を要求 此 から 種 人格 人に領得せし の人々に 成 就 0 よりて此 唯 めたく思ふ。 るの 0 方法 6 商 る、 業的 12 あ して る、 時 かの一代の 遂に 予輩 代が靈性を抛ちて得たる金錢及 は最 は此 師 大の 種 0) 表となり時 幸 人 福 R を得 を齎 らする 代 あ て自 0 人心 中 す

他 俗 界的 0 予 流 何 番 0 12 思潮に反抗し革新の大勢を助長せんことを希望に堪へぬのである。 面 は ある、 を 前 福 來唯 ぞや、 見れば靈界の 物主 古代預言者の高 予輩 義 0) は心に物質の支配を脱 大運動 潮 流 カゴ 一份なる夢想は次第に實現されつゝある、 も亦一大潮 滔 々として現代の各社 流 たるを失はざるの事實を發見する、然り靈界の大運 し理想によりて生くるの男女が今一層其元氣を作興して 値會に流 n つゝあるてとを述べた、 此夢想の實現に骨折る男女は 然れ ども飜て 動は

する を見るではな うて遊 去れ カジ あ ば カゴ 戲 彼 如 熱に浮 等 時 くであ は宗 代 V 0 か、人生の目的としての遊戲に全心を奪び嗜好を代表する新聞紙の紙面は遊戲の記事 かされ 教よりも遊 る、 彼等は他 つゝあ 戲 る、 12 人の競技に對して金錢を賭し其全心を擧げて之に傾到し去るの 精神 大中の諸 よりも身體 學校 12 あ 0) りて 運動 弘 に熱注しつゝある、婦人すらも彼等 去らるゝ事は純 を以て殆んど一 時として は學問 粹なる唯物主義 頁を滿たすこと少からざる よりも 遊戲 を重んずるの であ である、 顰に做 風

Ξ

斯 個 0 人 如 0 く唯 A 格 物 と國 主 義 民 カゴ 0 世 生 に、蔓 活 延 にとりて默過 L 世 界 0 注 す 意 N. を奪 カン らざる 23 去 る 大事 事 は 件 宗 6 教 あ にとり る 7 由 々しき大 事 丁であ 0 み

る

らず あ 大 卽 破 時 12 任 せね 見害 るの人士は人はバンのみにて生くるものに非ず深き感性と高き熱望と人類に對する奉事 ち 首 0 代 顧 に當 に繁築 爲 42 2 入り來 敎 は 12 恶 12 主義 宗 るも ならぬ 造られ 0 形式 敎 6 3 生 0 は あ 12 36 唯 を採 活 る、 るも 充 かの 0 物 12 分 6 對 主 b 何人か して最 森 あ 義 來らずとも 0 のにして自己若~ば快樂若 教育 る、 林 0 時 生活と稱するもの 此 現代 代に衰退するも を有し牢 も破壊 事 結 の最大要務 る力に富 實を明ら 局 乎た は宗教 る め も若 心に大害 確 0 る かにして天下に警告する所が は唯心説の復 であ V 信を有する し自己を主體 0) くば遊戲様式の為に造 る、 あ は るは # 而して不 俗 発 b 起であ 主 義 0) 力> でなけれ n より として世 ざる所 3 道 徳は 何 甚 た 人 は 12 精 で られたるに しきはな カ> なら 世 あ なけれ 對する奉事を忘却 神 上 る、 界を覺醒 Va 0 夫れ V 事 ばならぬ、 非 柄 蓋し教 假介 宗 3 12 るの し靈 無 敎 世 とを目的と 育 頓 は せ 事 唯 而 魂 着 俗 あ にば之れ して此 9 質を道 なる から 心 主 精 確 說 義 信 神

信ず 表 カジ は、 出 此 3 る 來 ず な 題 12 R 12 S と信 對 は 0 L 居 中 5 ず 7 12 n 懇 る 吾 人の な 人 Z V 0 と云 祈 あ 祈 を依 る。 25 人 1 然とし つて 人間 然 L 妶 神 0 必然的 て機 17 0 行 續 自 動 を 要求と。 L V 7 事 變ずる 居る 實 は 第二、 人の 事 祈 カゴ 12 出 多 よつて 懇願 來ると信ずる人と、 V 事 6 神 0 0 祈 あ 行 る。 によつて確 動 其 12 影響 理 由 す 神 12 は 經驗 0 る 行 事 第 動 し得らる カゴ 出 を變ずる事 欲望 一來な ゝ主 とと

朝

的

利

益

とで

と云 < らと思ふっ人格 祈 行 つて實行 ると信ずる故 樣 る 祈 稿 力> 事 30 な 12 12 0 間 ょ 中 V 神 は せられ つて 題 は 出 12 0 は は 6 吾 來 未 あ 人 12 神 加 V2 00 だ 此 0 何 る、 0 空氣 神は人格の訴に反應せねばならぬ、 行 生 信 目 なる 世界に 命 的 仰 動 而 。靈的 を 0 は 1 に影響する事 L 於て充 7 圍 吾人 9 爲 繞 12 法 祈 出 我 稿 を づ 則 L 分 は 7 圍 る カゴ カラ 含まれ な研 精 居 繞 誠 懇 る 實 が出 願 市 L 究 7 的 カゴ 0 カゴ 居 吾 請 神 カゴ T 進 來ると信ずる人 出 居 る然 備 願 0 R 一來て る 小 0) 17 で あ 心 反應 目 カン し之を吸 居 を打 3 的 らな 神 L と之は 給 衝 開 而 0 入せざれ 突 なの 如 カン ふことを L 13 す 何 T 4 な る 神 心 る行 般 事 n 0 0 思 は は 態 0 カジ ----度及 考で 內 人 動 吾 0 あ カジ 部 0 12 2 祈 あ 12 17 前 T 目 理 12 る、 働 何 0 4 的 由 0) 與 前 は よつて V は て生 役 然 次 3 吾 0 ï 12 3 意 人 0 條件 やら 命 更 3 處 志 0 12 を 立 3 人 は 充 づ た 進 格 な 他 H 步 たす な 76 備 0 0 らる 進 完 方 な 0 D 法 6 h 成 で此 けに 12 あ 12 で 受 よ

智又は絶對意志を說き吾人の行為まで悉く之に歸するも 者 であ に前 稿 75 は 無神 市市 0 行 論 動 は 12 祈 影響するものではな 0 對象を否定するも いと主 0 0 あ 張 る なする者 カン ら始 0 とす は 的 無 カン 神 る 6 カン 問 論 ら個 者 題 しと個 12 なら 人の自由 人の 15 人 V 格 一發展 を認 絕 0 對 爲 論 め な 祈 は 3 神 V 餘 絕 0

地絕



祈 禱 の心

序

本

宮

彌

兵

衞

對する人間本然の叫びを一定の形式を以て發表するに至つたものを指すのである。 於ては、 祈禱は廣義に考ふる時には、不完全なりと感ずる人間が絕對に對する人格的の訴である。 如何なる人にも祈禱が ある。 然し普通の場合には、 狹義の意味に解して居る。 即ち此絶 此意味に 對

b 含むもので或者は交通の部分が多く或者は懇願の部分が多いのである。 思はれる。卽ち交通の祈(The prayer of communion)と懇願の祈(The prayer of petition)とである、ヴン 一大別にする方便利であると思ふ。實際の祈禱に於ては多くは交通の祈と懇願の祈と此二者を同時に 教授は更に告白の祈と讃美の祈とを加へて分類して居るがこゝには此二者を交通の祈の中に入れて 祈禱(基督教のみに關して云ふ)を全體より見れば之に二種類あつて二つの目的を有つて居るやらに

懇類 の新

る。

(一)懇願の祈に關する根本問題は此祈によつて神の行動を變ずる事が出來るかどうかと云ふ事であ

心なる自己檢査及び熟慮、 最善のものを追求するのである。 的 と勉めて居るが、祈禱は此等を決する最後の斷案である。余の神觀では人格的と云ふよりも寧ろ抽象 カジ いと思ふ傾向 すと云ふ意味に於て祈る事は最もよい事であると思ふ。又我が祈の多くは自分の為、又他 であ 其故 カジ 我 ある、されど我が願 が祈は屢々一定の事物に對する懇願でない場合が 更に全力の傾注であるならば、祈禱は吾人に缺くべからざるもの 又祈禱の主觀的利益は充分價値あるものである。 ふ事を追求する場合に

前が之に刺戟を與 ある又懇願 へて實現せしむるやら促 は神の行動に影響しな 先に述べ し如 であ 人の る く熱 爲に

的、 まる。 て行 耐 な 叉 ゆる忍耐 動 いのである。 は道道 精 般 を 敏捷 神 に實驗せられ 德 0 力等である。 態度が定まれ 的 ならし 0 精力を增進する事、誘惑に打勝つ力、 める る主觀的 多くの人はか、る主觀的利益を實驗するから理論の如何に係らず祈禱を廢止 Ō ば 6 あ 神經 る。 利 益 又靈的 系統に影響を及ぼ は主に次の如き點 向上、 自信力、 し筋肉を調 である。 明 憎惡に對する愛、 瞭なる思考力、 吾人は 節せしめ、 祈 る事 心配に 恐怖 血 によつて精 行 對する慰安、 に對する勇氣、 を順當ならし 神 0 態度 木 生 カゴ 以 定 12

47

質に

さう

で

あ

ー懇願の祈の内容

信ずる宗教とに るべからざる事と考へられて居る事柄を舉げよう。 第 に祈るべからざるものとして一 よつて 相 違の ある事 は勿論であるが、 般に考へらるゝ 第 80 弦には文明國に於ける基督 一、利己的の事柄。 から考へよう。 第二、 之は 祈 る人の 惡しき事柄。 教徒 0) 間 知力と、 77 第三、 般に祈 其

始のが 00 TO 懇 願 の 00 あ 前が が應答せらるゝもの あつ 人格の統一原理として絕對人格を信ずる基督教に於て

次 3 12 事 祈 は 薃 颱 は 味 神 あ 0 行 る 事 動 と思 12 影響す 3 力) 5 るも 少し述べて ので な W と考 見 よう。 ^ 7 居 5 な がら依然として 祈禱 を 心 繼續 する 理 由 を

研

カジ カジ の心 9 出 0 理 0 必 論 单 若 12 0 0) 如何 ī は 時 吾 如 12 默せば石 何 助 に係らず祈 を呼 なる人に び求 なは呼ばんと云ふやうな痛 4 らざるを得ざるに め、又善を慕 助を要する瞬間 ひ、之を追 至らし 又は 求 切 する為 むるも な感 助 を欲 ので に前 カジ いする瞬 起 る瞬 あ るは人間 る 間 間 カジ カゴ 本然の あ あ つて、 る 3 衝 0) で 切 動 あ な 6 る ある。 る 願 此 望 元 其 動 物

7 吾 0 汝 其 理 第 岩 0 想 L 注 いと云ふ事 ならば 充 最 過 を檢査 意 ム中には 分 善 去 0 全 0 0 12 本 部 欲望 願 經 て其價値 は 氣 望 驗 を 願 あ 12 L 傾 3 12 ふ事 得 よつ るまいと思ふ。 注 與 なつて Id ふる せしめ、 0 7 あ 何 Œ 充分 る 祈 物を 4 當である事も含む カン 禱 0) ない 12 3 之を成就 6 は 眞 あ 確 願望す 又或人論じて曰く、凡て人は其 かと云 12 る事 42 吾 與 せず る は等 人に効果 5 76 ム事を吟味する事 るべ しく 0 h)熱望し之に全心全力を傾 は は し 水を與 甚 經 止 一験す 女 だ少な と教 ふる ざらし る處 76 V ^ 7 は 0) ひるも のであ 6 最 で 居 あ 4 あ る 理 る 大 る。 ると信 0 カゴ 想を書き、 初 6 カジ な事 あ 生 故 吾 する す 人 之を實現 12 る。 である、 る 0 何 事 7 事 願 Z, 欲望を形成 望 0 カゴ 12 2 で、 出 女 す す ソ 來た in 3 る は 之 事 Ł 時 祈 稿 何 * 3 JE ならば Z 4-5-事 充 h 祈 は 12 分 人 稿 最 細 高 17 12

n

之を求めんとする時に常に何故

に其を欲するか、又之を得る結果

は何うなるか

と云ふ事を考へよう

第三類、祈禱によって物質上の事柄に影響を及ぼしたる實験。

第一類に屬するものゝ中には、

祈禱者の祈に應じて推定し得ざりし或思想又は或衝動の起りし實驗

二、祈禱によつて試験を通過するに助力を得たる實験、

四、自分の祈により同心を得たる實驗、三、祈により神より直接教導を受けたりと云ふ實驗

五、祈により誘惑に打勝ちたる實験、

七、祈により勝利の確信と勇氣とを與へられし實驗六、祈により困難に打ち勝つ力を得たる實驗、

等を含んで居る。

第二類に屬するものゝ中には、

一、祈るべき他人の目前に於て祈りし時の實驗、

を含み。

第三類に屬するものゝ中には、

二、祈により金銭又は日用品に及ぼせる實驗

る

康

は自 及 吾人 此三者中 4 あ 瑣 國 他 次 細 る。又自己の 一分の 家 人 0 12 な 0) 切 事 祈 0) 為、 何 實 爲 平 る 柄 め、 n 和 12 ~ 公衆 事のな 0 等 欲 第 爲に祈る事も 次に他 求 四 為に最も多く祈るかと云ふ事は個人の祈と公會の祈とによつて異る。個 0) 物質 する 柄 ___ 般の 自 人の 的 卽 3 然 爲 0 0 5 法 爲 懇 6 懇 祈る事 12 あれ 願 あ め、第三に社 願 よつて易すく も隨 る。 0) ば親しい關係を有つて居る他人の為又社會國家の為に祈 から 祈 分多 多いやうである。又祈によつて懇願する事柄の内には一般的 文明 0) ___ 般 國 V 一會の為 カジ ・得らる 0 0) 基 內 二者を比較して見る時には、 督 容 教徒 めと云 は 以 事 上 柄等 0) 多 ム順であ 0 3 祈 6 は靈 る ~ 3 的 カン が公衆の祈 0 らざる事 事 柄 を 靈的 願 柄 に於ては自己の 以 3 事 外 0 事 0 カジ 柄 多 b ので 人の カゴ V る事 多い あ 所に於て 勿 爲 つて、 論 より 健

懇願 の 祈 0 殊 的

Ξ

的特殊的の事とが

あ

る。

確 事 的 あ な 12 IE. る 祈 確 材 よつて カゴ 稿 と思 料 0 特 3 材 は 集 料 殊 n 日 的 を集 め る實驗によって分類するならば左 て見 充 實 験を各 分 め た 3 0) 研 V 方 究 法 國 3 0 カゴ 0 より又 であ 出 困 來 難 る、 ない。 各 な 階 ると其 小生 級 然し 12 0 亙 カゴ ノー 讀者 どれ つて蒐集 の三種 だけ ŀ 諸 0 君 確 中 0 し之によっ 實 であ に歐 御 助 な 米の 力に る 4 て研 0 宗教雜誌 İ で 0 7 究 あ B る することは 本 か、 カン だ ら書き拔 け 其 選 12 於 擇 最 いて置 7 0 3 6 更 大 4 切 12 13 比 木 いた比較 較 る 難 的 13 Æ

類、 祈禱によって他人の心に威化を與へたる實驗 祈 稿 によって 祈 禱者自身の心に效果を與 へたる實驗

事

カジ 種 0 經 間 此 験を生み出 努 12 力 自發的 12 よつて に起 したも 進 つたものと見る方が適當であ 少し、 のと見るのは 明 な 觀 念を 不 都 形 合で 成す あ る 12 る。 る 至 叉此 7 た 事 經 は事 驗 は外の 實 で あ 修養及模倣を要するも る カジ 模做及 修 養の 努力の 0 と同様

神と交通すると感ずる經驗 は -----種 0) 美觀 より來る迷ではないか

事 るの 12 L あ b 如 3 であつて、 なし る 通 集 る 7 神と交通すると感ずる心理を內省するに、 で 中 情 を忘 0 6 にして起つ に、 6 あ あ 神其 於て救助を求 威的 するより るが、 あ る。 神に凡ての思想を向け 其 物を唯 13 又發 之は注意を神 神自 一時 祈 i 者 には 特殊的完全の 然し之は全意識を統 かと云ふに、 寧ろ附 自身を最 から 動 禮拜の對象とする瞬間には此等の屬性は唯一 神 的 此 むる人 意識 0 な 屬 觀 傾 B に集中 んは神 的 念 の統 向 欲はしきものとし、 上に注 0 42 あ 神と云ふ觀念は祈禱者自身の 7 る思 0 全力を傾 一より來る美感と平和 全能 神を悦 するよりも寧ろ自分自身の 0) 意を集中 12 想を凡 一するまで强く働 集中 を認 び、 注 する事 て其 的 す する間 神を有つ事 る。 る。 之は神 之を唯 觀 カン 道徳力を求 は 念 は、 く其 甚 に調 によつて我 の感が だ カン 一の對象 神の 0 ない。 (特殊 稀 和 外、 內部 せし で 觀 必要に向 的 U あ 必ず伴ふものであ 祈 價值 念 何 る。 め、 75 る カゴ とする時 稿者 必要に 人は の觀念に集められ、 は (V) 全意 其屬 É 多く 遂に であつて、 的 H 神 カゴ 識 性の 全意 に長 砂 自 3 應じた に於 0 0 自身の な 76 場 統 有す 0 合 一され V 7 識 V 必要に る特 を支配 る。 時 で 12 此 聖善を 時 12 あ 於て 間 觀念 る價値 る。 叉此 0 殊 たる時 0 認 は 各々の属性は全 關 的 す み全意 間 0 前 以 め、 注 L 3 意 カン な完全を認 Ŀ て意 > 意 12 注 12 識 12 12 調 る を は 物 至 意 起 0 態度 出 を支配 識 神 凡 統 るも 質 る を把持 でな する E 其 0 7 ーは は 物 6 0 0

祈により戦争に勝ちたりと信ずる實験

五、 四、 祈により體力を强めたる實驗 祈により病氣を癒したる實驗

等のものを含む。

交通 0 祈

つて高き力の現存に觸れて居ると云ふ實驗を有するものであつた。 **禱に於て交通して居ると感じて居る、又ベック氏の統計によれば應答者の七十パー** ブ ラット博士の統計によれば、應答者(彼が選定せし信用すべき人々)百七十名の中百十人は神と祈 セ ン ŀ は 祈 稿 によ

考研すべき問題を提出して極く要點のみを暗示するに止める。 神と交通すると云ム經驗を心理的に研究する事は最も興味ある事であるが紙敷限ある事である

第一、神と交通すると感ずる經驗は單に模倣より起つたものではない カ>。

經驗 ての る處 又能力及經驗の進むに從つて變るけれども、何か人間以上の力と交通すると云ふ此經驗はあらゆる人 中に自發的 此 は凡て み起った 問題は宗教心理學、宗教哲學に亙る大問題で より判ずるに、 12 の宗教及 起った ものでは 神と交通すると感ずる經驗 ものであ び凡ての社 なない、 る 此經驗は消 會 勿論: 階級 に自 此 經驗 極 然的 的の の對象たる神の觀念は其人の能力及 12 B は其性質に於て消極的 あ 起つたもので、 のであ るが、 つて、 自身の 屢々盛んな激烈なる經 內省及民族の宗教心の發達を研 あらゆる種 0 ものでもなく、 類の 人種 び經 監験であ 驗 12 叉模倣 0 凡 差 7 る。 別 0 境 17 によつ 究す より 遇 叉此 0

から

テンでも、 に事實として益々明確にさるゝものであるから、幻覺のやらなものではない。ポーロでも、アウガス フランシスでも此經驗を事實として最後まで其所信を貫いた人である。

北米より

〈前略〉或る人は『自分の境遇は詩など書くやうな境遇 へ前略〉或る人は『自分の境遇は詩など書くやうな境遇 ではない』と申しますが、私に於ては物隆に生へて太 やかな小草、そのものにも詩趣をおぼえます、否その 小さな草そのものが詩であり歌であると思ひます。そ れと同様に酒なく女なき私共の労働的生活そのもので るあります。私共の情意の流れ、私共の行為そは即ち生 るの計である。文字もて書かれない歌そのものである 合信じます。

ほゑみ登る、小鳥の梢に囀り、男が双腕を振つて働き、星の月なき夜の大空にまた~く太陽の東天に輝きほ

二月二十二日朝

こんな時、營利に賢い商人が機會なとりにがした時

北米シャトル

中葦城

田

512 -的。 ・カゴ 惹 自 高 7 極 求 à 及 L 12 生出 全意 のつが 的 起 說 び 此 る 0 た せら 働。 來 感 向 * 0 時 如 す 爲 をなす L 上心 る 幸 見 情 3 る實 識 快 L 而 12 何 12 た 樂を た 最 が之に 最 12 8 る 13 出 其 すのみならず、 对 統 7 驗 價 事 也 0) 0 3 反射 之は よく 値 T 來 で 情 よく 0) 此 凡 0 す 等 此 0 本 代 主 を貢獻する た 7 4 羽 す 體 禮 調 9 調 平 要 る 0 神と云ふ絕 0 一素で 熱望 反射 73 時 拜 野 和 和 和 0 論 どん 望 古 び事 せ 12 6 上 0) カジ 來 あ 是 あ 臎 カゴ 6 る 起 12 0) 積極的快樂をも る ので 意 間 n 13 は自ら分 3 其 時 つて、又此 訴 る 味 3 大 中 7 欲 12 力> 南南 12 7 人 八な宗教 7 12 望 と云ふに、 あ 以 る で云 活 は 4 平 0 る。 自 和 和 6 H 事 神 動 全 36 注 る事 述 5 は t 然 Z あ を カゴ カジ 經 と消 來 出 た 向 的 9 意 感 12 力》 る 1 驗 < であ 害 力 す 競 る 1 來 0 E 理 カン 0) 如 で 心 想 與 悩 カゴ 滅 る 0 5 る。 7 著 體 る。 4 6 3 は 0 0 ^ 0 神 す 0) L 故 あ 0 場 る 相 市市 13 反 條 る 10 0 0 S 合 0 時 0) 又此 と交通 射 あ 秱 \cdot 件 は る 反 12 瞑 特 す に於 であ を除 12 13 カゴ 觀 12 想 る。 0 如 徵 で -經 美 何 過ぎな る 念 0) V は 又が野 之に 心験は最 る。 真 と意 7 5 興 12 感 す あ 中 な 心 る 13 0 味 注 る 0 るを感 42 望 0 R 欲 特 吸 平 識 は 0 意 理 平 カン V 李 と云 を 望 5 12 和 せ 名 あ 5 想 和 0 B 入せられ 和と意志 と安静 集 强 13 ず 26 然 を カジ 追 6 < る 之に 來 處 中し、 9 瞑 求 n る 其 2 0 V 羽 処想す 0 22 自 0 る。 强 確 實 12 0 實な經 不 支配 あ 失 坤而 6 驗 身 6 とを與 7 V 0 敗 は る事 凡 欲 滿 意 13 12 る 凡 經 は 强 せら な ~ 7 作 望 識 神 於 不 V 固 忘 た 用 を 安 驗 を 神と云 其 ^ 0 0 7 V とを ると云 時 破 自 種 流 唯 カジ 6 叉 n 生 n は を狭 神 5 類 壞 あ 自 命 身 あ 0 5 來らす の經験に ム觀 n せ る 0 カゴ つて 調 0) 不 瞑 身 ず 觀 滿 Z 肉 快 12 0 め 0 想 7 和 體 公道 6 る 其 特 世 念 念 平 は 12 足 0 事 極〇 にっ を 人の 對 5 は、 0 和 Ŀ 神 あ 事 殊 6 的禁止 原因 を見 る。 よ 心 理 0 2 象 0 的 n は 苦 生涯 想 中 0) 理 7 0 る。 的 故 追 出 7 6 12

然しイブセン自身もスカンデナヴィア女權論者の影響を受け、同時に彼等にも影響を及したのである。

カミラ・コレツト女史

響をも看過することは出來ない。それに次で現はれたのがエレン・カイである。 權を要求する程にまで到つた。然しかゝる氣勢にまで達したには、尚セルマ・ラーゲル 反して、フレド の位置を男子より獨立しようとするものである。カミラ・コ るカミラ・コレ 如くであるが婦人の價値をより良く認めしめようとするのであつて、十九世紀の中頃の 然しながら二つの相異れる傾向がこの運動の當初から存在してゐた。一派は男女間の關係 リカ・ブ ツ トに依て代表せられた。他の一派はフレドリカ・ブレーマーに依 レ ーマーの一派は著々として勢を増し、婦人の個性を高 v ツ トの 主張は速に容れ め遂には完全なる市民 て代表せられ、 られ レフの作物の影 なか 女流作家であ つた は舊來の 0 婦人

する運動に際して有名なる詩人へンリー・ウエルゲランドは彼女の兄であつた。このウェ の憲法を起せる一八一四年代の愛國者の一人である。又古さオランダ・フランスの文化から獨立せんと の人道的にして熱情に滿ちた、而も自由の念に 燃えたる 主張は 當時一般の人々に大なる 感化を與 殊に女流作家等の受けた影響は甚しいものである。 ミラ・コレットの青春時代は恰もノルウエーの國民的自覺の時であつた。彼女の父はノルウエー ルゲランド

たと傳へられる。 たのであ 一婦人 は未だ眠つてゐた、その敎養は甚だ乏しか I v 彼女は數多の人々に求婚せられた。彼女の第一の婚姻は彼女に幸福を齎らさなかつ ットはこのやうな時代に生れた。 彼女は美しく、 つた。從て男性に對 しとやかな乙女らしさに滿 して何等の 權 利 2



四人のスカンヂナヴィアの女權論者

----Hanna Astrup Larsenに據る----井 好

二十有餘の年を閱した。そしてこの新制度の完成せられるゝにはおそらく今後五年を以てして充分で き所であるといふのが一般の答であった。思へば少數の先覺者等がその最初の要求をなしてから旣に 論者等は諸名士に婦人に政權を與ふる事に就て意見を求めた。而してかゝる問題は旣に議論の餘地な あらう。 ノル 一九一四年の夏、クリスチアニアに於てノルウエー憲法發布百年紀念祭が催された時、婦人參政權 ウエ ーの婦人等が如何にして斯くの如く速に、所謂『女らしさ』の牛ば眠れる狀態から、真に人

信ぜられません。私は母となる前に先づ女となららと思ひます。女となる前に、あなたと同じく一人 間らしき活動に達するを得たか。それを説明せんがためには男女同權の叫びさへも聞 の人とならなければなりません。」――これがイブセンの婦人の鱧を解放しようとした言葉であつた。 が『何はともあれ、お前は女であり母であるではないか』と云つた時に答へた。『そのことが私には最早 はその文學思潮と極めて密接なる關係があつた。その著しき物は『人形の家』である。ノラは彼女の夫 V 前から、次第に僣勢力を得て來た女權論者のことを知らねばならぬ。スカンデナヴィアの女權運動 かれなかつた長

レドリカ・ブレーマー女史

革を來さしめた新 て、 實際彼 0 行ひ 仕事 さを保つためには彼女等は食をさへ断つやうにさせられ 程である。またブレーマーの姊妹等は散步をすることさへも許されては 工 知つた。彼女は如何にして働くべきかに苦しんだ。 の子等の學んでゐることを學ぶことが出來たなら、 い。エレ ーデ 手段 力 フ 總てそれと共にノルウエーに於ては見る事をえない種々なる因襲に婦人等は捕は 精 はナ V 圣 リア・コ 從て社交界にも入れな F. は、 神 求 女は彼女の ン・カイの云ふ所によれば、二三十年前まで水泳は婦人のすることではないと思はれ はコレ y であった。 イチ め た。 カ・ブレーマーの生立はコレットとはやゝ異つてゐると云はねばならぬ。何となればスウ スウエ ンゲールと同じやらに、 v ツト 彼 ットは實行上の改革者 ーデン しき理想を創設することに於ては最も力あるものであつた。而して婦人解放 女の最初の希望は病人を看護しようとすることであつた。しかし彼女の其のやうな 知識を求めようとしても許されなかつた。彼女は何かしら人類のためになるやうな 彼女の影響はたとヘイブセンやブランデスに先立つてゐたけれども、 の生地ではあれノルウェ 女權論者の第 かつた。 上流の新教徒の家庭では穢はしいことゝしか思はれないことを 一人であるブレーマー女史に於て一層明にせられた。 彼女は彼女の ではなか ーに比すれば富の程度も高く無職の人々の階級も多かつ つた。彼女が改革せんとしたのは外的の狀態ではなく 私はハンと水とだけでも滿足して生きた、らう」。 作中の た。 ٤ 17 然しフレドリカの體は大さく肥えて醜 インを通 ねな して云つてゐる かつた。 身姿の n 『もし私に男 ざる 立法 な T よや を得 の運動 上の改 居 つた 力》 カン

___ 57 -__

授に嫁 彼女の V だ。 かくして彼女の眼は次第にその國の婦人の位置 夫は彼女の深き心ばせに應しかるべくもなかつた。第一の夫と離婚の後彼女はコレッ よく和合したその家庭 36. 夫の死に依て再 び失はれた。 の改良の方に向ふに至つたので 孤獨 の寂 しさの中に彼女は ト教

してゐる。 書しと云つた。 望に應しき情愛は二人の間 娘等が 結婚は愛に依らなければならないとの主張 私等の愛も解放せられ、男の野蠻と束縛とから教はれなければ 放である」と。さらば、私等はそれ以上に求めようとはしない。 持つてゐるばかりだ、それは愛である。婦人の愛は彼等の慧智であり、 中に於て彼女は次のやうに云つてゐる、『或るフランスの作家は云つた、「婦人はたゝ一つの經驗 べきことであつて、特に彼女の人格と、彼女の中にある愛の力とがよくその作に表現せられた。 彼 ある一人の男を熱情を以て選んで結婚するけれども、 12 逼られるか、 如 虚女小説『知事の娘』は一八五五年に出版された。その中心思想は婦 何 イヷ 12 ――この物語はまたコレットの青春のそれと見ることが出來ないではない。 母 イブセンもこの女主人公であるスヷンヒルドに就ては彼の Love's Comedy の中で批評 親 ンヒルドの夫は遂に彼女を占有しようとすることを止め、 0 そして、男はたが女を占有しようとして、女の心と靈とを蹂躪する 媒介や、近隣の人々の蔭口や、 .には醸されるものでないことを示した。 ビョルンソンはこの物語 カゴ ノル ゥ まだ男を知らない處女の嫁ぎゆ 工 1 に於て唱へられて 結婚生活に慣れるに從て、か もしその なら ない。一丁度この 事にして真實である 信仰であり、天分であ ねた。 彼女は彼女の詩の中に生き 人の位置をより良く重ず 然し くその 小 = 說 ね カ> v 怖れ て描 ツ 0 を示した。 出 を 0 いた希 は 72 の為に 「触ら 源を 若 頃

並行してゐた。そしてフレドリカ・ブレーマー協會の如く從來不生産的であつた婦人のために組織的 大學教授等も稀らしいことではなくなつた。ノルウエーとスウエーデンとは其の發達の程度は殆ど相 印刷、 更に近時 製本、官廳の事務員、 に至っては知識を主とする職業も婦人の手に歸するに至り、 養鷄、 聾者啞者精神消耗者の教育等も女子の手に依てなされるやう 女醫、 婦人辯護士、

セルマ・ラーゲルレフ女史

な活動をした者は未だ曾て見ざる所であつた。

獨 於て私等は初めて文學的天才の全く自由なる現れを見ることが出來る。又彼女の作品の到る處に吾々 初の大作である『ゲスタ・ベルリングの古話』と云ふ小説を書き始めた。しかし彼女の貧困 またスウェ リカ・ブレ ラーゲルレ れを完成せしひべき充分の時を與へなかつた。その時アドレルスパレ女史は彼女に經濟 は彼女自身と彼 特の位置を占めてゐる。一九一一年ストツクホルムに國際婦人參政權大會が催された時、彼女は決 七 彼女はそれに依て文學に全力を注ぐことを得た。 ルマ・ラーゲルレフは新しい時代の産んだ婦人である。まだ若さ女教師であつた時、 て賛成の演説をなした。そしてその效果は實に偉大なるものがあつた。彼女の演説はよく北方 ーマーはその文學上の名聲を婦人問題の傳導のために犠牲にした。セルマ・ラーゲル ーデ フは新時代の婦人である。カミラ・コレットの仕事は痛苦と憤怒との叫びであつた。 一女の周圍との共鳴を知ることが出來る。文學を以てノーベル賞金に價すべき婦人とし、 ンアカデミーの十八人の不朽の作者として、ラーゲルレフはエレン・カイを外にしては かくして彼女の名聲は高 まるに至 彼女はその最 つた。 上の は彼 補 セル フレ 助を與 女にそ フに •• F.

十五 1 た 仕 本 1 越えてア 改革 デ めた 事 國 ン > 0 12 12 もの 12 0 與 於 達すれ 於け 幾つ て出版 メリカ 十九世紀の中頃になって、 ホ へらるべき事 1 は る第 カン アメリカ人の婦人に對する忠順なる愛情であつた。プレーマーは 71 ば能 に渡 は實行され しょうとした。 一の婦人新聞は 力者として取扱は 0 を主 アル た。彼女はアメリカ人の質朴と温情と好意 7 張 コツ ねた。 した。 彼女はこの ŀ フ 男爵 彼 アメリカに於ける婦人問題の運動の噂を聞いて、彼女は 卽 ち婦 n 女が 夫人 ントン・アービング等に親 るやらになり、 五 作に於て婦人のなすべき事を要求し、婦人の天性にそへる 人は法律 ンフフ 年の イー・ア 後 上生 スウエ 1 女子 涯 無能 1 ١,٠ 0 デ v た 力者 ンに歸 n ス め んだ。 とに喜んだ。 に學校 らと見做 パ 1 つた時 v 遂に彼女は『ヘル 女史の は建 され には、 てられ 然し彼 てねたの T 主筆 ング 既に の下 た。 フエ 女を最 で 彼 タ』を書 に發 また U あ 女の要求し 1 弘 大西洋を ス 感動せ ゥ いて 工 7

協會は たこの 婦人勞働の調整を計つた。 を募りて奬學の す 彼 でに 女の 婦人のなしうべき仕事が三つ求められた。 女子 死後十 會 婦人の Ó 0 手を以 設 資に 立 ために開かれ、哲學の學位を得た最 ・九年を經てフレドリカ・ブレーマー協會が設けられて、その遺志を遂げんことを目 者 あて、 の一 てなさるべき種 人であ かくしてその職業も次第に多くなり、育兒、 叉女子の學生の寄宿 る。 然しながら未だ女子のために職業學校は設立されてゐな K 0 就職 口 それは教師と銀行員と家婦の職とであつた。 含の設けをまでなすに至つた。 を求め、 初の人はエレン・フリー また學校卒業者の就職の世話をなし、寄 體育、 ス女史であつた。女史は 藥劑師、電信、 或はまた機 關 大學 を設け かつた。 時計製 附金 0 的 7 門

n

た。

就てはアウグスト・ストリントベルヒの作物の影響に依ると云はれるけれど、實際はこの國從來の貴族 に下院議員の直接選舉權を得るに至つた、その人員は約三萬五千人に達し一大勢力となつてゐる。 八六二年に納税する婦人は市政に關する投票權を許されて以來、その特權は次第に擴張せられて遂 會並に軍事社會の傳習に基く所が多い。然も婦人參政權運動の幼芽はすでに十八世紀に萠して居た。 セ

マ・ラーゲルレフの預言者的な幻もこゝに至つて實現に近づいたと云ふべきである。

エレン・カイ女史

權 た。彼女は先づ『亂用せられたる婦人の力』と云ふ演説に於て婦人運動 とした。これが二十年の前エレン・カイをして その國の 女權運動者等と路を異にせしめた傾 フ 至つて ブ 2 ンハーゲンに於て初めてなされるや、デンマークの婦人等の大に同感する所となつた。 イこそ實にスカンデナヴィアの女權運動の極頂と云はねばならね。 婦人に對して獨立の職業を與へた 若し女權運動 にして 婦人が生活を充さんがために家庭の外に於て働かんとする要求は古より愈々苦しくなつて來てゐる ~ ーク 1 ŀ 1) 7 カ・ブレーマーの後繼者等は母権を否定し家庭を造る義務よりも他の職業を更に重要なもの 1 に於てはノルウエーに於けると同 4 はれ 0 色採 胸 の終局の目的が婦人の生活方針に自由と開放とを與へることであるならば、エレン・カ 75 中には カコ が多かつたのであ つたならば婦人の他の權利 この主張を以て彼女の生涯の使命とすべき確信 る。 _ ッ じく女權運動はカミラ・コ テ は全く何等の價値もないと彼女は唱へた。 2 ブル ツ 及び ス ŀ ッツ " v の批評をした。 汴 は愈々明かにせられた。若 ツ jν ŀ ムに於てその演説をなすに 0) 理想よりもフレ この演 その 理 說 向であつ F 由 し母 ¬¬ ~° は カ・

61

1 の情がわだかまつて居るではないか。下層社會からは生活に惱む呼び 家を愛すべきものとし幸福ならしめることに於ては失敗した。何となれば社 ではないか。』彼女はその自らの問に答へた。 人の特質を供へ、また北方人に特有なる家庭に對する强き愛に滿ちてゐた。『婦人は男子と同權と認め ねる現代の政治組 男子は國家を作りそれを偉大ならしめた。然しながら男子の努力は國家を作りこそしたれ、 に足る何物をも爲さなかつたのでわらうか。婦人が地上に於ける年月は男子と全く同 織 が倒れ、 革命の 時が來た時 婦人は家庭を作つた。 に、男子に代るべきは女子であると。 が聞ゆるではないか。 そして家庭を愛すべ 會の階級間 には 表面 互に嫌憎 じであ 國

年の 工 票することが許された。 1 後に於て婦人は完全に政治上に解放せられた。一九一〇年にはアン IV ウ に選出された。 ーに於て は 一九〇五年 そして現今に於ては可成多數の婦人が選舉さるべき形勢で 婦人等は よくこの權を行使しえたのと分離後の國家 スウエ ーデンとの分離 が行はれて以來、 ナ・ロ 四年 グ 的 危機 間 ス 婦 ス ツ 6 人 は る。 ŀ あ 女史 0 त्तं 72 政 は 0 12 ノル で、 就 て投 ゥ

ないことも示された。遂に一九一五年六月五日國王の批准を經たるデンマーク憲法に於ては成年に達 せる婦人に對して、男子と同樣投票權 デ 一般の氣運となつた。一九〇八年以來婦人は市政に關しては投票權を行使することを許された。女 ンマークに 工場監督、慈善事業の事務員、 於ては ジョージ・ブランデス其他 が附與された。 コペンハーゲン市會員として、婦人の力は決 ノルウェーの作家等に依て鼓吹された自 して劣れ 由 るもので 運動は最

ス

ウエーデンに於ける運動がノルウエー及びデンマルクと歩を共にすることが出來なかつたことに

た愛の 情を男子に與へることに依て、人格のより優れたる統合に達することが出來る。 間 や藝術や宗教や科學を造つた偉業に比敵しうる文明に對する貢獻をなしうる事 婦人に 書であつた。婦人はこの感情を男子よりも更に優れたる純潔さに於て抱く、 全く知 希望や、 の結合されたる意志』と唱へるに至つたその最初の導火線は實にコレットであり、『知事の娘』の一 自 引か る 一熱の 所 愛慾の 6 n # は T に熔け 40 念やに迷はされる。 な 3 Vo 込んでゐる。—— 彼 けれど長き時 女の 肉體的 彼の 代 な情熱は母權を得んとする憧れ 0 これ 間 性情の一方面 貞操を教養され カゴ J. v ン・ カ は一の婦人に引きつけられ イ 0 T 確 來た婦人は 信であ であ る。 3, このやうな性 カつ 彼 そして更に完全にこの感 くして婦人は 女の カゴ 男子 出 他 全身 來 0 __ 情 は は 面 彼 0 精神化 男子 分裂 は 0) また 知 0 され 殆ど 他

n 者 カゴ 中に於ける仕事と家庭 で果して母としての子に對する教養が完さを得るであらうか。エレ は尙彼 ために、 然しながらこの 女の職業を續けつゝ、たゞ出産のために必要なだけ職業を休めばよいとしてゐる。 婦人の 純なる心はせは如何にして現代の紛叫に調和しうるであらうか。 職業はその の外に於ける仕事と、二つを持たねばならぬ。 母 性と相容れるものでなくてはならぬと主張 ン・カ この點に就てアメリカ L イはこの撞着をまぬかれん T 70 L 0 女權論 かしそ

供等 し子 男子と箏ふの必要はない。 耐 かが を持 母 經 つべ 0 濟 上 力を要せざるに きであ 0) 改 良 る。 4 され また カジ 寧ろ婦人の仕事は社會的事業の中に見出されるのであらう。 至 た 0 母 た時 めに 權 は公の仕事 12 は實行せられて、 は 再 び職を求 として認 T 二十五 るも め られ 差支へは 歲以上三十歲 國 家に依 な V 6 7 あ 補 までの青 助 らら、 され L 年 るべきで 男女は當然結 力 しそのために あ る。 子

即ち婦

人は家庭の

美を速に失ひ、母たるこの希望を尠くせねばならね。男子の勞働は家庭と愛と父權との目 第に、家庭を變し母權を望むことの强いスカンデナヴィア婦人等の贊同する所となつた。 近づくものであるのに反して、婦人の勞働はそれらから遠かつてゆく。 からぬ苦役を、 と彼女は考へた。婦人等が家庭の幸福を増さんがために、反りて彼等の愛する兒等にとつても好まし その繊細な手を以てなさねばならぬのを限なく憐んだ。婦人はその勞働に於て婦人の ――このやうなカイの考は次 的 に次第に

兩親 て、彼女の多くの作の中に巧に表はされてゐる。愛は益々高くして麗はしき形に進化し 上 考によれば家族を形成するものは母親と子供とであつて男はたい單に子孫に對する手段にすぎな 力 も、父親 供と家庭との なすのであ イの家族生活に對する理想は、彼女の幼年時代の極めて幸福なよく調和した家庭生活 の權利を與 の間の深くして恆久的なる愛の賜であらねばならねと謂ふのが彼女の信條である。 方に於て獨逸等に於ては『自由母權』を尊重せんとすることを主張する者が現はれて來た。 が家庭に於て夫婦 る。この 主權は母 へられて
ね
ぬ
國
に
於
て
も
尚
母
親 派 はエ 親の手に握られる新しき母權主義 v 相互の愛と尊敬とに依て其の位置を保つべき事は丁度現今母 ン・カ イを其の預言者である な一個 の地位を保つてゐるのと同様で カン の時代が來るべきことは豫見して居 0 如くに 言つて ねる。 然したとヘカイ あらう。 のか、 の所産であ 親 12 る 何等法律 子供は 彼女の かれど は子

近代婦人の徹底した理解を以て愛の訓へを『自身等より優れたる新しき者をつくらんとする二人の人 は全く彼 十三歲 一女の愛讀の書となつた。その書が愛の神秘さを主張する所はよく彼女の性格に喰ひ入つた。 の時エレン・カ イはその母からカミラ・コレットの『知事の娘』を與へられた。そしてその本

賣發刊新最

つべの

イや義-



美裝布四六判 途定)價室 百 郎 ウ 箱 頁 錢錢入除譯

最 新 刊

人二叉びをっ 々頁光さ積し はを築ま極か こつでし的し のらか書に自 書ねる 青いる言語がは 内で思園 れ死 にあつ気事上の てる をも以る る 度してば とお精分 思き神は つたは幸貴良 てい五福さ心 居と百で心の る思九あを責 ふ十りよ



收のにの 中附 穫力オニ たをイ大 ら與ケ柱 んヘン也

の生遙界

目丁五町河平區町麴市京東 所行發 番四一九〇二京東座口替振

道 さる 等の に兩親をして完全にその義務を子供に對して行はしむるに外ならず、またエレン・カイが主張 びその母親を保護せしむべき特別の規定をまで設くるに至つた。而してこれらの法律 法令に依 婦 ふるからである。 一億の基礎とし、次の時代に對する義務として考ふる所に基く男女同等の標準に近づかんとするもの 人を全く男子と同力たらしめんとする舊 近年に於てス ر اد 補 助 8 至るべきは當然である。何となれば國家は次の時代の國民の體力智力等に關 て各工場は婦 與 へることにしてゐる。 カンヂナヴ デンマークは近頃寡婦年金法を制定し、又父親をして結婚に依 人が 出產後六週間以內 イアには婦人及未成年者の勞働を制限する法律が制定せられた、 これ等の法律は今尚試驗中にあるもの 派 0 に就業する事を 女權論者の 反對が 禁じ、 あつたことは云ふまでもな 叉工場に依つては 6 あ る カゴ つて生れ その この 0 係することを憂 自的 範圍 休 たる子供及 :業期 して性的 は要する てれには カジ 擴張 間 この 相

何 ス 故 力 12 > チ ス カ ナヴィ > ヂ ナ 7 ヴ 12 がけ 1 ヤが、 る カジ 如く女權運動 かくも姉 人問題 カジ 速かに而 の先驅をなしたかは、 も静粛 に進歩した國は他 北方 人の特性、 にな ことに其

6

は

あるまい

はね 國に於て先驅者であつたのみでなく、新時代のパイオニアーは又實に彼等であらねばならぬ 思 と自 想はよく人心を捕 マ・ラーゲルレフ、エ ばならね。 由とを愛する念、 また一方に於てス へそして實行運動となって現はれた。 正義を求 レン・カイ等はよくその國人の心を婦人解放の運動 むる心、 カンデナヴィアの文學はよくその實生活 營々して努め築き上げて來た婦人その者の カミラ・コ ット と一致し 、フレ に向けた。 F 力の y -6 ねた。 カ・ブ 彼等はその郷 賜であると云 文學上の 121, 0 理想

セ

林、峰 電話 番町二番東洋內 東 診察 肺 診 院 河 奈川縣 長診察月、金、 京三番町三十番地(市ヶ谷見附 野、 長 ちがさき一番 毎 診 間 高 朝 察 及 橋 茅 兩 醫學博士 毎 土 兩 15 副 崎海 夕 曜 (1) 長は 副 祭 П 長 海 411 午 H 午前 F.9 目 は 及 後 祭 (從停車場牢里) 目 7 П H 下當院 曜及 入院診察應需 當 及 院 午 В + 一曜之他 に在勤 後 矅 17 六時 之 在勤 他

求

1)

か。

6

3

3

15

1

然

示

3

密

数

0

林

部

曼茶

羅

11

密

教

0

根

木

思

想

稅

錢

中附

11111 151 H 學 述 揷 圖 郵

定 葉 菊 價

圳

和

圓

Ti.

錢

溢 5 界 大 0 3 修 7 0 SII 外 慶 民 斯 0) IF. 0 窺 實 事 補 梨 数 0) 然 訂 设置 權 極 曲 致 to H to 來 0 言 請 許 佛 11 僧 理 訣 想 敎 2 IE 3 1 奴 E to to 請 學 重 循 to 何 者 10 圖 0 畫 7 精 0 頗 面 千 授 並 15 2 3 託 古 to 倘 羅 n 0 秘 IN to to 顯 外

實 帝 大學 四日 誰 師 然 荻 原 話 來 先 生著 郵定

稅價

圓

#

錢錢

對梵澤

郵定

稅僧

十五

錢圓

六

帝

大

學

謎

師

荻

原

傅

to

受

計

今

切

1=

7

0

講

錄

to

開

放

\$

3

0

光

樂

to

得

1:

V

學

憾

7

於

此

平

昨

秋

有

志

相

謀

V

神

秘

0

關

鑰

to

銷

容

易

原川石小京東一大大町原區川石小京東三一京東替振

傳 說

1

よ

5

歷

史

批 評 0

7

場

よ

9

基

督

を 說

明

彼

n

0)

宗教

を

現

代

0

意

識

紹

介

せ

るも

0

我

等

0

基

督

朝

は

此

書

よ

4)

闡

明

4

5

12 1:

(1)

高等學校教授 並 良 氏 著 0

版四第

郵價ス現百 金 錢錢付 1) 頁本

野 陸 锺 村 隈 大 哲 一門氏著 藏氏著 學教授 秋 0) 郵 郵和郵英和 和英和文文 稅 金本金金金金 四當二廿廿 金 经 \$\$\$\$\$\$\$\$\$\$ 岡 神 岸本能武太氏著 們田佐 田 式

一原氏著 靜 坐 法 靜 高

郵 74 袋

一區芝市京東町國四田三 番三〇〇〇一京東替振 番五五八五芝話電

(中附五)

郵

稅

٨ 錢圓



特

几 月 號

しせは

よに日

り茲本

見に思

·本題對

問號し

題をて を提人 研供生

究せ間

しん題

7

僧

權 1 說小 沙 破 無 0 工 w 足 " 威 翁 ス 0 明 1 詩 短 1 劇 0 諸 研 間 [洛] 冲 高 加 谷 西 野 村 藤 津 橋 題 Ш 岩岩 伊 博 71) + 滁 郎 夫 作 づ 神 雜 春淺 I 記 Ł 工 き夜 惠 帳 3 1 魔 よ 道道意 フ 9 種 畫 間 0 秦 面 ٤ : : 111 字 15 原 富 豐 佐 長 ラ 和 本 吉 美 瀬 让 冒 2

牛 疲字 學主研吾 上と究人 問問 物 命 研科が薄 空學為な せ上める 睡 理 眠 をた根想 欲る本界 ず根間に 死 源 理-F 大

五ととあ 學高 號すら リ 010 敎 P 12 於號る いを方 庄 加 て二面 はほかり 村司 藤 数ち根 稱 文本本 藝號的 郎 堅 夫

京東座口替振 番一六八四二

佐

絡

ゼ゛

枝

譯

哲

郎

義

郎

村田高郡島豐北下府京東 地番二十八百四千山鶉

錢四十二金部一 沙 訂 發十四圓膏金分年半 定

3

意

志

生 0 道

具とし

ての

科

學

其

他

制

カコ

文學博土

井

上

哲

次

郎

NA

第第 四十 號月四 號卷

神

新

は

宗

教

的

機

關

非

5

3

3

ינק

價 錢十八圓二金分年一

正本八十十六十十六十

1 優 沙小 支 新 海 辯 沙 生 游 藤 翁 那 論 翁 外。 刊 一と背景 劣 方 談 批 思 0 1= 0 TO S 衞 片 潮 敗 將 就 JU 評 て数 功 倫輓 術 理沂 利 門 大 カシ 來 3 學佛 主 0) 尉 T 悲 (君 一義改造 會國 道 勝 祐 滇 劇 主制 德 の認然 彙 理 に就 經 邪 0) 報 を 論 カン 勢け 敗 比 0 欲 共 4 3 較 か す 和

> 究 111 牛

小

研

未定稿 感沙寄 十翁國 IJ 7 首三祝 百年 一世 1 ス 祭詩 0 偶 頃 幸 名 松 和 H 浦 齊 垣

……文學博 士

淺 井 上 野 哲 和

次

郎

安 元 元 = 逃 郞 道

湯

原

=

輪

H

光

京東座口替振番七七〇一二 協亞

忍

今

福

渡

邊

庸

露

伴

司

譯

込駒區鄉本市京東 地番十五町木駄千

謙

族

就

A

S

所行發

(中附七)

0	
-	
-	

見率を要せらる方は郵券二十四銭送らるべ

L

研

Z





共 稅 郵 金 前 年 一 錢 五 十 三 圓 壹 金

號

月

延 銭 世 冊 一 價 定 銭 四 税 郵 に 別

ル約

7

オ書

有の

論

聖

ア研

の発

神玥

臺灣 基 新 奇 基 自 海 E 督 老名 督 蹟 紹 老 生蕃 0) 敎 哲 介 0 譚 7 君 凰 0 觀 短 場 の宗教思 0 史 0) 7= 評 を 方 的 3 明 位 研 法 研 佛 論 種 教 想

本郛唯一の權威ある不偏不黨の神學專門雜誌

研り高水野 一下 博正

十治純

小島 茂雄野 女村 戒三

紀 ス キ ー 変

町保神區田神 所拐

所捌賣大

堂京

東

町張尾區橋京京東 所賣發

授順

美

醒

警

《中附六》



島地雷夢君をおもる

君をおもふ

々

木

信

綱

て開 て、その仙臺高等學校教授當時の學生島地雷夢君を説かれるのを聞いた。 文學談を交へたことがあつた。その時樗牛君が、 いまは十數年前の夏、大磯に暑を避けてゐた時、偶然同じ地にあつた高山樗牛君と逢つて、樣々の いた最初であった。 能文にして頭腦のよい將來最も囑望すべき一人とし これが自分が雷夢君に つい

大學生なる齋藤、小山、 ひ、又親しく語つた始めであつた。而して同じ時に會した人々は、いづれ て晩餐をともにした年若 其後も松井氏の家 るにその後、 東京に於いて、畫家松井昇氏の家に招 へ招かれた折に君に會つた。 内ヶ崎、三澤の諸氏であつた。自分はこれらの人々とも、 い大學生の中に、 偶然に も島地君が かれたことが あつた。これが あつた。 も島地君の親友で、當時 自分が その時 島 ての時知合になっ 地 同じく客となっ 君 と親 しくあ

しば 深くなつた。 これが縁となつて、君は齋藤君 /\歌を詠んで示された。その後君の妹君なるあつ子ねしが入門されて、君と知ることが しともに度々自分の家をとはれ、 種々歌語りを交はした。 君もまた

君 か 神戸に静養せられるやらになつてからも、度々手紙に接した。 ことに須磨にある自分の社 友の

學哲用應世處紀世廿 囘撤價特



國本美入函、百十五百四形小、錢六料送、錢十九價定 編 夏常田

九

基

督

教

7

現

代

0

哲

學

的

爭

議

基

督

敎

的

認

識

لح

哲

學

的

部

識

+

絕

對

哲

學

7

神

0

存

在

四東 行 九京 振 所 本 鄉 東 副 駒 込 ME 駄

も此るたて理の種べる處な 女戀生自死 性愛活然生 **聖觀觀觀觀觀** 歡 得處特に集天蘆 成 得處符に朱八鷹た多色分し地花]藝術 雜 るした類來の 3 見 親黎 つ直標

7

基

督

教

7

哲

學

的

#

或 D AFER 品 蘆

六

某

督

致

と假

定

哲學

基

督 教 5 實 用 丰

義

A 何 毎 1 H 沙 聽 H 識 午 自 前 由 九 ᇚ 會 些 + 不 時 迄 要

四 Ξ 基 某 基 督 督 教 教 教 F 7 歷 自 精 史 然 神 哲 哲 哲

學

學

7

7

學

督 敎 弘 並 道 良 會 氏 擔 當 部

基

中附八)

教

學

講

浸の事は見合せたらよいではありませんかと、眞面目に注意した程でした。其處に吉野君が來て、 0 何にも感激したといふ風で、どうぞ僕にも受浸させて下さい、今こゝで決心しましたからと言はるゝ して今も見える様です。 憶して居ます。言々句々感謝に充たされた告白で、宛も醉へる人の樣でした。あの輝ける顔は彷彿と 直ちに承知して三人にパプテスマを施す事となりましたのです。 執事の大沼といふ老人などは、私に耳語してあの青年は氣狂ひ でしょう。 如

島 より受けたる一葉の寫真は今は君をしのぶ記念となりましたのです。 の信仰狀 **発年を經過しました。端なく同君の計に接して何とも言へぬ哀威を催ふしたのです。噫十數年前に君** 其翌日 力三郎 師 態 島 地 から澤柳校長の豫期したる程 島地雷夢と自書したるものを私に與へて歸へられました。其後同君 君 が獨りで私の宅に來られて、一 の反對なからし事など話されて、 時間 計り例 0 にこやかなる顔を以て話されました自分 小判の寫真一 と相 會ふ機會なく十 葉其

雷夢 事 込はなか でした。 君 地 君 つたのです。 改宗の は西に去られてより一ヶ月計り後に、藤井さんから親展を手紙を受ました。 私は直ちにそれは出來ませんと答へた筈です。最も御當人の雷夢君よりは一度もそんな申 事 は非常なる騒ぎとなり、 島地家の迷惑は 一通りでない から洗 禮 を取消してくれとの 其手 紙によれば

來ません。 私は以上 雷夢君は質に鬼才を抱いて玉碎されたことは誠に惜しいのです。御老母の御心情御察し申 一申した樣に、雷夢君と相知る時は極短かいのですけれども、其時の事は終生忘るゝ事は出

けて、

心私かに

君のたみに喜んだ。

朝場重三氏と親しくされるやうになつたので、同氏とともによせ書の端書なども折々よこされた。自

526 に逢つたので、大學まで道々物語をして行つて別れた。その時は君も大分健かになられたやらに見ら 分はこの病める才人のとく恢復せられむことを祈つてやまなかつた。 然るに一昨年であつたか、大學に行く途上、思ひもかけず、から橋のほとりで君の自分を訪

を早くせられた君の上が惜まれて、感慨にたへね。君を推賞した樗牛君も、又君の親友であつた齋藤 野の人も、また君も、今やともに白玉樓中の人となつたことを思らては、天の才人に禍することの甚 さるゝことゝなつた。囘想すれば實にその才と學とを十分に發揮するにいたらず、秀でた穂にして世 しきを嘆かざるを得ない。 君 計を聞 いてかつ驚きかつ悼んだことであつたが、それから早も一年を過ぎて、今や追悼會を催

12 よろこび ح P カ> て君 12 語 カゴ 9 な 0 カゴ る 君 め 12 L てや 須 磨 カン 0 海し 17 天 づけ なる 4 友 海 ٤ を夢 語 りて み 2 p > あ あ 5 5 T

島 力 郞

中

立たれて、信仰の告白をされたのでしたが、島地君は如何にも嬉れしさうに、三十分位話されたと記 故 島地雷夢君改宗の當時、私は仙臺浸禮教會の牧師でした。實は按手禮を受けて間もなら時 島地三君の授浸は初めて行つたのでした。受浸に際して三君共教會の前のテーブルの前に で内ケ

0

陰に舞ふ。

固 定 12 導 びく處

わが あ > そこに なつかしき友よ!

Ŧ わが聖靈の新しき 國 みゆ

靈

極なき曠野の真中に立ちて聳ゆ。大いなるマトロナは神の現前のな は神の現前のでとく

薄明 原始 者 0 黄昏 の聖淨 0 での聲、 カン ななた 純真の 17 聞 D

久が遠に の夜 プル 0 0 崇高莊嚴に向ふ。 氣 は 曠 野をとざし

幽 TITI. 層 一落つ 0 かなたに金鈴のひびき ひびきゅらぎ、 嚴かなる ~~~ F 11 ナ

> 光明を求めた 私を愛して下さるなら ~ 法 鞭でむち打つて下さい。 0 うづも 光よ 75 カジ 3 ら泣 胸を 抱 いてゐる N 7

お

4

雄

哲

彼 靜 等 謐 なく流るる彼等の 0 -60 音律震 ۴ U ナのもとに立てり。 U, 尖鋭の 樂音震よ。

熄む 美の震ひ、生命の震ひの如く 語 、永遠 のな カ にあり。

視よすべては幽寂の混沌に融く。

紅は紫に白にうつり、

白

は

いま夜の

色となる。

蒼穹に群星輝 森嚴の二つの靈、 カコ 10 やか 不斷

0

聲をなす。



36

光 ょ 北

米

H

中

畫

城

いてゐます。

0 國

立證 D かに横はる。 カジ と肯定と否定と 理 一智の左右する處に

そこにいたましき 涙ながる。 争闘と愛憎の か かご 情意の動 野く處

太陽

いま私の心は

Ш

0

お

ルン法の

光よ!

爾を慕つてゐます。

冷 るゝ 意 カ> 0 な 溶 情意を理智が る理智をわ かすところ カゴ

そは爾なで 通つたの 私の心のうへをちらつと けまわつて働いてるた時 らが懐しい如に がに 光よ! はな は カコ つった んだ彼 か? 0

私は私自身の能のないのにおろかさに泣いてるます 而 て私は私自身の そんなら、

お爺さんイナゴでも行

つたぢあ

からら

の頭の上をゆるやかに舞うて落ちて來た。それを 議さらに は大きな其眼をクリーへと同しながら四邊を不思 翅を延しかけるものさへあつた。 蛤は驚いて飛立つたり其葉を避けんとざわめいた にして其葉を追かけて行つた。而し多くの他の蜻 見ると其蜻蛉は俄 光らせてゐた。 りした。 の上綱の上そこら中に無數に來て翅を夕日 眺 めた。すると一枚の林の葉がお爺さん 中にはお爺さんの に飛立て餌物をでも追かける様 髯が動くとそれ 髯の端に來て其 12

行つてしまつて居る」「お爺さん、澤山の蜻蛉ぢあな」「お爺さん、澤山の蜻蛉ぢあな」「お爺さん、澤山の蜻蛉ぢあな」「お爺さん、澤山の蜻蛉ぢあな」

起きたりしてからだな。 誰でも彼でも 日にしようか。それとも來年 「正太はお爺さん何時行くの 「そうだなあ、 「さあね、 「それぢわお爺さんでも」 「それぢあ、お爺さんは 「そうとも」くお爺さんでも正太でも」 何時行からか。 、正太はこれから幾つもく 何時 明日にしようか、 行 カ> 75 ζ 0 明後

それから正太を顧みて云つた。 前に立て拍手を打つた。そし 落ちた。 さんを見て微笑んだ。 「正太、 正太は 桃の青葉の下に石 さ神様にお欝儀をしておけ」 洞 お前も浄土へ早く行ける様 門の前 に立て頭を下げた。それからお爺 の祠 青葉をもれる光が人の上に カジ あつた。 7 腹目 に祈 して祈つた。 お爺さんは其 つてやつ

「正太はお爺さんと一緒に行きたいな」

「そりやお爺さんがつれてつてやる」

西方淨土

めた。澤山の白鷺が幾つも~~西の方に飛んで居には麥が靑かつた。フト正太が鍬を止めて空を眺正太とお爺さんとは田甫を耕して居つた。田甫

んであらうか」、エライ鷺が飛んで行くが、如何した

痂 尋ねるとお爺さんは鍬をやめて西の空を指 がけて一生懸命に飛んで居ることを見い」 西の空は眞紅 「お爺さん、浄土と云うてどんな處ちあな」斯ら 17 ゴアートと鳴いて急し あれはお前 沈む日を追かける様 飛んでねた。 に燃えて夕日が沈みかゝつてゐた。 、みな西方浄土へ行くのぢあ 皆紅い光に翼を輝 く羽打つた。 12 して、一 様に夕日を目 力> かせなが した。 西 でら時 を目

坪 田 譲 治

上をゆ ŀ 廣がつて 見た時にはもうそこには澄み渡つた夕の空のみが キリと見えた。けれども一寸眼 太の眼には此 つた。と鷺は二三囘空中をクルーと舞うた。 森の中から一條の矢が其鷺を目が るやかに舞うてゐる一匹の鷺が ねるば 時鷺の翼を貫いてゐる長 カ> らで あつた。 を瞬 けて いて再び空を あつた。 い矢がハッ 飛んで行 Æ.

お爺さんの髯がゆれて夕日に光つた。「信心が足らんのぢや。途中で迷うてゐたのぢや。云つた。お爺さんも空を仰いでゐた。

置を無數に飛んで居つた。蜻蛉はまた二人の頭の二人は柿の樹の下で繩を綯つてゐた。蜻蛉が周

群

から遅れて先を急がらともせず、近くの森の

くに

春の

雷

中に

3

重の

塔が立

7

7

た。

から篳篥の

音

カジ

聞

えて 紅

ねた。 五

二人は樹

の下に

行 B 50 0 0 7 來 削 る。 を V う n よく て 拓. 色の Ē 太 雲に乗 お迎 へに 7 西方淨 來たぞ。 斯

お爺 は唯うなづいて さんは 西の 空を指し ねた。 て嬉 しげに微笑

太が鶺鴒を見つけ 爺さんと正太とが 傍には て尾を振 目 S 準 麥畑 本の 7 0 枝 7 0 似には 中を た。 Á 蓮 た。 樹 空に の樹 匹の 條の 0 下を通 は カゴ 鶺鴒 真白 小川 春 0 りか カジ 光 0) カジ 來 花を 流 カゴ て川 っつた。 輝 ne 5 T V ーけて ねた。 の中 7 2 を眺 其 た。 Ť.]1] 時 T 7 0 IE め

「お爺さ あ n は ん、 お前鶺鴒と云つて淨土に住んでゐる鳥ぢ あそこに奇麗 な鳥 かる るし

川 た。 の中を見てゐる さん、 そこに 鶺 は 鴿 三匹 は 鮒 斯 を見て 0 5 鮒 É カゴ 제 太 h が云 る 6 って川の 泳 V 6 中 7 をの

> 腰を下し 「正太、 7 あ それ 0 音 を聞 カゴ 聞 いて え る ねた。 力>

麗な虹 鷗が靜 時海 に何 正太 の音 めて えた。お爺さんは其時淨土を見た樣な氣持 奇妙な叫びをあ をした魚が つて、そこでは白 居つた。 さんのまだ子供 あ の様 **ふわれ**は 居つた。 カ> カジ の遠くに 聞えて 丰 カゴ 12 な笛 海は紫色をし ラー 立て居るぢやない 舞らて 波 を聞 お前淨土 其時 澤 來 0) げて一すぢに羽打つて行 山 ねる 上に跳 た。見れ 0 光るも V い浪 な浪 頃 た 0) てとが 燕らし の音樂ぢやし のも見られた。 カジ 海の 12 0) 7 0 から ば て居 ねた 丘 しぶきが上て 見える様ぢや の下 か。そして虹 な 。お爺 側 あ い小鳥が が處 正太、 0 0) 2 たの で碎け 丘 た なに j さん 12 . 西を 海 3 容 するとあ 見られ には遠 それ 0 ねた。 黒い岩 る 7 百 彼 彼 < 0) 音 0 カゴ いがけて た 方 い昔 のが見 カゴ 1,2 た。 銀色 力 L を 0 お 笛 あ 眺 1

それ さな カン かせて飛 何 カン 5 6 0 刻 鳴 んで來て 間 んで順 交 17 して カン また 自 カン 6 く柄 蓮 匹の 羽根 0) 枝 て不思議 12 鶺 づくろ とせ 鴿 カジ 奇 0 を仕 うに首を 麗 な翼を DC. 合 0 て、 閃 it 1

25 また急し 何 枋 かを暫 をやめ ďг 0) 樹 0 < Ĺ 枝 10 カゴ カゴ り 雛 鳥 一云て聞 親 藉 0 鳥 0 0 何 を 12 方に首 喇りが かを云 かせてゐる樣で 真 一中に 施 0 ふとみ 始 * L 巢 つた。 傾け て囀り交し カゴ あ た。 ん 0 あ た。 なかと 親鳥 0 た。 て居 は雛鳥 タ 0) と鳴 が直 720 中 25

とお爺さんは暫く目を 供 るとな。 を見あげて立 12 6 云 n きた お つって聞 見 淨土 らも今に皆淨土に旅立てしまう。 あ 前らを一緒に い」とお爺さんが云つた。一个な親鳥 がらんも n 一に行かねばならん。誰でも彼でも淨 見 カン せて てねた S 0 雛鳥らの喜び勇 居 腹 は 西方浄土につれ る。 2 一人も居らん」斯ら云ふ て居た。正太は も少し經 ん T て行 翼が でねる様子 お爺さ つつてや お爺 强く が子 7

また わ お前を迎 それでなお爺さ 緒に淨土 お爺さん へにこゝへ戻て來てわげよう。 とお 12 カゴ つれ よく 爺さんは h て行つてやることは出 考 は ^ て見る 度淨土へ行つて 目を開 のに、 くと笑った。 どうも な から 一來ん īF. お

ぶ様になった頃には、

それてそ真當にお爺さんは

て來 ての

る。 銀杏

これ

カジ

あ。

てれ

では

お爺

さんは是

は

大きな樹

になって其

E

一を自

雲が 非や

ぢあ。 なん は大 たら、 しそれでも未 來なんだ時 る。 花 ず迎 をあ つておいで。 淨 出 をみは 太、 行 た質 土 ī 0 抵迎 から、斯ら云 唉く頃になつたらお爺さんが たってれ だらら、 それ へ行つたらこ へに來て げる。これをまい これ、 此 つて 此實 へに 種 6 點頭 12 カン うなづく で水てあ に鳥 ら芽 は、 器栗 次は これ あ だお爺さん は IE げ ちゃらう。」正 いた。っそれ 此 つてお が出 0 は 而 2 太、 カジ れをま る」お爺 栗の 集 n げるぞ。 花が散て 栗の しなもしお爺さんが來な かり出 て葉 柿 罌粟 て待つてり 爺 種 實 カゴ 0) いて 種だ。 でお爺 來 3 l に ざち カゴ 7 0 76 たら、 ん様 h B あ けれどもそれ 小 待つてお 種 h 太 カゴ えて あ。 鳥 ちゃ。 カジ お爺さんのや は やつて これ やお なら、 迎 カゴ 懷 3 不 さあ 大きな これをまく 集 へに來て から h 思 へて來る をまい いで。 爺さ お爺さん 議 カジ 來 īE 次 草 S さらに 太淨土 でも る。 樹 h 0 2 にな って て待 あ 頃 カン 此 種 來 12 0 W

を通 た。 果果 飛 お爺さんを待てる Œ W 祈 B Æ 種をまい た。 てしせつた。 ら銀 で 73 太 た。それ 太 つた。 温る様 うた。 それ 秋風の ねた。 雲 必ずや は枝で囀る鳥の 0 は 0 派 杏が ・望み また 枝 0 0) ic 6 或 中 は から八年經 から三年後の ず上 而し 吹く 蜻 あ 銀 而しそれか 12 日 って غ 蛤蛤 色に 0 白 2 喜 そこで カゴ た 0) 殘 來 CX 其 頃それに澤 S F た。 と見て 方に昇て行 7 は 秋 耀 準 太 T る 血つと柿 聲を聞きながら樹 JU るるば 銀杏の 公は丘 と云 も空しく < 0) いよく 5 光の Ē 明 花 而し途に其秋 春、それは黄ろい花 四 る フト 太 0) の上 ふことの 中 山 五 哭 は カン 0 S 早くそだつ様 栗の 12 つた。 目 4 一に登 りで 深く 樹 H 春 0 過ぎた 0 0 カゴ 金 亂 にに鳥 小 種 內 光 醒 色 あ 75 鳥 1 近 n 逐 12 7 行 0 r 12 カジ 弘 カジ 12 め 0 9 V た。 た 集て 丘 罌粟 翅を た。 12 空し 0 輝 つて 0 であつた。 集て鳴く様 7 下に立 < 3 は 0) カジ 12 見 3 Ŀ 輝 光 Œ お爺 後 來 をつけ 0) 中 市市 銀 思 花も せて れば た。 7 太 には 過ぎ 12 0 杏 は 4 は 中 翃 n 1

> 斯らし 人は 17 風 ぶ白雲に近 0 登 で下に來 か 海 もうこん 7 7 2 711 ねた。 水た た。 H IE 吹いて來て老人の 0 て銀 7 一大であつた。 側 丘 白 に丘 る る 老人 杏の根 なに歳 1 る V V 0) 髯 É 位聳えてゐた。 カジ 樹 0 な見 には あ 0) 12 6 一人の 元 樹 は をとつて 0 あ 正太は 0 12 あ 銀 る 下の 腰 白 げ 杏 老人が F Ĺ 0 を S 髯をそよが 石 微笑 樹 しまつた。 0) カ お爺さんを待て 秋 F l} 0) カゴ 聳え 7 上 0 'n あ では つた。 だ。 お 12 日 7 爺さんを待ち 腰 カジ 浪 それ 7 せた。 斜 樹は を カジ た。 下 老 白 12 空 人は樹 る L 樹 < でも尚 3 た。 を を 此 碎 飛 內 老

1

來 何 それ し入 ねる内、 18 と云 た。 タと 魚が 0 カン から ら落ちか る様な Ŀ IE. 、喜ば 羽 ム譯 Œ 置 太 香 -しげに 一太の は懐 かが Z 氣 くと、ニ アハ・・こと喜ばしげの なし カジ ゝつてはバターへと別ばたいた。そ 1 して 胸 力> 7 ら姿の に心 浪 0) 鶴が二 中へ 來た。それ 0 上に に喜び 鶴は争うてそれに集つた。 、崇嚴 一羽正 袋 跳 をとり出 太 な平 カジ ね 躍 溢 で暫く瞑 0 和 肩の上に下りて 1 n な 6 した。 た。 聲をあげた。 る 日 0 0 <u>ا</u> *ر を見 光 た。 タ

云つた。 花が 間を奇麗 初の鶺鴒 7 た。 Œ 微散つ 太と 間 た。 な は 30 翼 二人の周圍を急しく飛び始めた。 なくまた鶺鴒がとん 水の おさん がヒラーへと Ŀ を見た。 に落ちたの 関いた。 風 カジ は 6 吹 來 下 V とお爺さんが た。 12 7 流 來 そし 3 7 n 目 花の て三 て行 革 0

いぞし。 「正太、 浄土はなそんなに遠 い處にあるんぢやな

土 は Rl の丘に登 お は とうく 秋 爺さん であ つ つった。 お爺 カゴ って行 幼 V さん 白 つた。 頃淨土を見たと云ふ海 には淨 い雲が空をとんでゐた。 そしてそこに罌 土 ~ 旅 立 てしま 粟 0 うた。 の側の赤 0 正太 種 3

微笑んでそこに腰を下した。 音を聞きな に眞白 版を思浮 た。或日 冬が過ぎて にな器 な 粟の カジ E 5 力ゞ 太 春 5, 本 カゴ カジ お爺さんの來るの 來 カジ 夏の 暌 の上 た。 30 白 元に登 7 燕 い光の内に碎け わ カジ 髯の白 た。 一て行 淨 土 E て見 12 いな爺 一太は嬉 を待た。 旅 立 ると、 2 る浪 3 ï 頃 し
は
に んの そこ とな

> は何 かつ 羽目 0 時 音 E 12 25 なく 映 聞 フ 0 き入 F た。 眠つて 海 0 0 それをじつと 上 た 一を輪を ねた。 H n EN 書 四 V 邊 眺 て飛 め 12 7 ん 何 ゐる中正 6 0 ねる 變りも 鷗 太 カジ

物

550 「アハ、、唯健でゐたか。 9 「正太よく待てゐたな。いよしてお爺さんが 7 緒に行から。 いお爺さんが花の側に立 お爺さんの肩の上へお ホラ罌粟の花が咲いた ねる。 B

太は流 彼方に て 3 列 飛んで行つた。空高 蛉は花の上を二三遍廻 鎌を上げて ねた。花の んで乗て い丘 Œ る鄭 大は 小 8 カジ JII 蛛と鬪 見えた。そこに V が見え 流されて行くのを見た。 枚の ねた。 枝に一匹の大きなカマ つの間 林 7 見れ 2 V) た。其上 12 若 る く昇つた時 カン 蜻蛉 のであつた。 ば 集 T 花の上 12 は 力> 小さ 500 を飛ん 一本 0 背中に乗 12 Ē カジ な二匹 0 で行 銀の キリ て丘 白 太には彼 丘 0 花 * 様な網 カジ 7 つた時、正 其大きな .18 かが ねた。 過ぎると 彼 ツタ 哭 方 方 8 12 張 カゴ 7

にれられた鐘(バウムバッハ)

鈴木芳松

定まつた時で た緑 氣なマ 磁 0 B 6 11 慣は て庵 た。 カン 冷 3 遠 た の時 年 ドン とな 草 は浮 百姓女 い泉 L を造るのを手傳つた。 被 からぬ地 原 間 で、これが は 此等 三刻に此の鐘をつくことが此の寂しい人 12 ナの像を安置した會堂が 12 の地面よら湧き出るのであつた。忠實でこれを癒やした。泉といふのは庵か は 世に其の脊を向 3 外達は 昔のこと、一人の敬虔な隱者 祈禱や默思に費やした。渇を覺えれ 蔽はれて小さな鐘が懸つてあつた。 廍 を結んだ。 面 森の ものをもつて餓を滿たしたので よら湧き出るのであつた。 彼の一日の主な仕事であつた。 果物や 近村の けて、森 隱者 食物を 百姓達 0 隣りに 持 あ の真中に つて水 つた。上は は か 精を出 展 あ て吳 H

> 悉皆法衣い 50 と。其の言葉に誤りはなかつた。 は萬斛の 此の様な隱者は迚も二度と見ることは能きまい た。 涙が注がれた。すゝり泣く女共は云つた に身をくるんで世を去つた。 か 其 て此 の中に、藁の寢床 0 敬 虔な人 は 長 12 V 其 年 U) 亨 埋葬の 身を を此 横 處 時 で幕 12

日、 を持つてねたのだから。 新 んだ。彼は此上なく女共を喜ば はない、彼は年は 人の隱者 來の隱者は眼 ところが を向けれなり、 n 百姓 出 した。 洪 かが カジ やつて 此の隱者が 集 隱者 まり合つて若 の上の瘤であつた。つまり 來 若し、それに石炭 もう其の邊には姿を見せな は恩義を知らぬ其等の て、これが廢れ 物故すると間もなくもう一 併し男共に い際者 した、 を捕 0 た庵に住 とつては それ 如 12 て往 は、 黑 76 人々に 此 み V 理 腿

F 7 るを地 4, 12 こぼ 盡 すと銀 1 てしまつた。 杏の 樹の上に飛立 p カゴ 7 。鶴は つてしま 地 0

の中からは カゴ 0 斯ら正 杏の てねる二 樹 太が 0) 匹の F DC の石の 石 頭が 蛙が の下をの のぞいてゐた。 住んでゐた。「 根 元に年久しく ぞいて話し オ イ、 かけた。 正太 如何ら の可 穴 愛

は 云ふとお爺さんは又笑つた。 而しお前もお爺さんと一猪に淨土に行けよ。 て、喜びは必ずやつて來るものだよ。や寒いかし や而し直に春が來る。苦しいことは必ず無くなつ 太は蛙を手 万古 お前 よ お爺さんが浄土へ行く日が來たらしいぞ。ど あ、 お日 出 :樣の國だ。お日樣の處へ行から」斯ら いか。もう冬の來る日も近くなつたな。 の平に乗せて目の 7 古 S で、 今日 は るお前 前に持て來た。ついよ いゝ日だよ。」正 淨土

時空から銀杏の樹の上にチラートと降て來る白い 澄ん フ 正太 ŀ 何 て、空も海も益々紫色を増して來た。 は耳をすませた。すると空氣 處 カン らとも なく 幽かな篳篥の カゴ ますへ 音 カゴ 起 其 0

> 海の た正 し正 花は た。 海とは正 と丘の下から五色の雲が湧き起 降りつ のの根元 は星と云ふ星、降る花と云ふ花が めた。 と飛交 銀 もの あつた。 2 0 彼方 た。 降る 太 太 正太 糸 カゴ 0 0) やがて篳篥の音も次第 U あ いいた。 カン 海の 側 周 太 には雲の峰が 0) 12 はやはり白 始めた。空には星が金色に銀色に輝き始 つた。それは雪の様に白 湧き出 坐つて 12 りを三羽の鴿が舞うてゐた。青蛙 をやめ、 を上に乗せたま、段々と空に昇り始め 頭 周 と其 を列べて彼 りを五 る様に後 るた。丘が空の中程に昇つた時、 小鳥も飛ぶことを止めた。而 い髯を日に輝かせなが 中を紫や黄 輝 色の霞が立ちてめ始 17 からく無數 0 魚は浪 話 に高 つた。 0 43 い花瓣であつた。 聞 小小鳥 歌うてゐる樣で く大きく、 人つて の上 すると丘 カジ に音もなく ヒラく 跳 ら銀杏 70 め もま 120 逐に 120

0 雲の中へ消えてしまつた。 で見 ては カン な樂音を殘 l T 西 の空の 紺 青

7

る

77

3.

がしくないつてまるで轉手古舞さ。」悲しめる つた 沈默を守つた、 森の會堂の 「兄弟分、お前も一緒に行かないのは如何 潛 一隊であ 明くる み恵みを受けようとして羅馬 ら込んだ、 からである。 晩空が 處へ つった。 夜業の 野兎 恐ろし 來ると一寸立ち停まつ 然しそれは獵人では ш は Ī. 一の僧庵 獵人が森を過ぎるのだと思 3 駈けて行つて了 唸った。 からや 小鹿 へ行く途上 ò 北は叢 っつた。 なくて た。 て來 林 L た鐘 鐘 一の鐘 た譯 0 は 中 は

忘れられた鐘にかう尋ねた。 小さな鐘は悲しげ

なんだい?」

心 で暮らしたの かが こへ、わしも行き度いは山 質に て吳れ イース あるなら、羅馬の聖父に宜しく申上げて吳れ。 るのにわしばかり默つてなけりやならない タ ることだらう。 だから遠慮せずば 1 きでならな 0 日曜日には誰かを寄越して鐘を S お前等がみんなして唄 々だが、一年中遊ん どうだ、 なるまい 親切 氣が 親切 あ

> 鐘 Ŀ とを呟 一がり、 は 僧 依然として 庵 0 V た。 連中の後 鐘 は そして大きな不恰好 口の中 哀れ氣に取 か ら飛んで行つた。 6 -駄目 り残され だ ね。」とい な鳥の た。 忘れ ム様 森 如 の泉が 6 れた 起ち な

と思 2 魔 からいつた から見りや僕はずつと物識りだすりや君も大いに僕から得る所 れから君 カジ 「人間が君を安靜 解るもんぢやなし になるんだ。 心ひ給 ふのちやないんだ、それが證據にや、 の傍 森の馬 へ巣を といつて君 にして置 鹿な動物達 また僕にとつて ららと考 は丸つきり捨てら V 7 に、 吳 から カゴ へて n あ るんだ。 君の る 和 るだらら、 26 0) 鳴音 を 眶 僕は 有 想 など そら n 0 難

も應へなかつた。からいつて梟は身を膨らました。然し鐘は何と

冷や つて 月百合を動 17 3 1 ねた。そして靄は山の カ> 15 ス ス 風 かし、 とかくする中に山の頂きが赤らんで、 か ーの朝が 樹の枝 枯葦を掠めて低 來た。 の間 から吹 裾の上に擴がつてゐた。 薄明 は未だ村 V て來て、 い琴の 0) 調 白 上を彷 べの様 五

3 巢 動 野 77> 0 る # 漸 づら 坳 鼠 杏 حّ 日 消 次 1 カゴ カジ 0 再:共 0 子 水 カゴ 厚 から 4 U 3 7 供 < 3 * 0 取 3 等 0 4 汲 0 か 庿 返さ 120 曾 る。 た。 まら を え 獵 は 育 2 T A 荒 うとして 人 其 森 死 h B m 間 は 0 h 扉 0) 水 る 12 だ B 茅 T 2 桶 カゴ 依 其 る 窗 喜 此 中 * 3 者 つかの 0 0) 0 0 提 ۵ る 中 T 殿 周 廢 0) W 25 0) 奪 17 学 桑 圍 屋 屋 た 1 6 CA 棲 0 0) 15 根 0) 0 à 去 息 中に 寢 は 0 方 4 7 5 床 す 9 Ŀ カゴ 3 た 3 n 足 は 0 荆 12 Ti か 絲 赤 上 ず 沂 棘 は 多 尾 25 B 鳶 地 向 < 面 0 は カゴ 色 0)

面 捕はス # 勝 た 枯 カン タ 春 赤 6 鳥 森 枝 2 1 カゴ そし 覗 カゴ 0 溫為祭 30 3 顏 B 絹 4 + 地 ま * 0 Ó 出 0 出 10 7 Ŀ 0 用 7 衣 L ح 3 は 意 愈 12 來 な た 投 ħ 12 らとし 20 着 待 淶 7 Vi 쩨 取 そし H 筲 B Ŕ カジ 6 時 な 草 71) 海 7 カン 鳥 7 B 泉 17 3 72 > 0 雪 派 T 其 B 渡 2 た、 到 手 小 17 ネ 0) 7 2 來 な そし 猾 曲]]] 2 毛 3 を告 色 は 來 は 折 ネ た n カゴ L 益 7 7 かた U 頭 た ح 17 濕 册 路を つそ 聲 月 樹 間 0 持 高 桂 * か は そし 走 翼を 0 樹 搖 6 12 イ は 地 阻 0 1 カラ

Ł

忘 ス 0 合 教 0 カン 0 720 ち 7 膨 W. ば n 5 た 莽 は を 最 持 後 2 0) 枯 葉 心 を搖 镭 カ> 6 51 落 春 0) 腿 2: 汁 め を 液 待 12

充

默し つて タ رح کے 香 は 唱 n 會 0 物 森 13 1 72 6 1 た 堂 カジ カゴ 中 3 た た 々 カ> n 0 0 復 0 老隱者 0 な 7 塔 以 潮 4 活 氣 壞 そし 4 12 時 0 12 12 前 祭 n 鐘 n 集 12 0 響 21 0 12 き渡 U T まつ は 鐘 會 カゴ あ は 為 ならな 鐘 埋 其 0 0 堂 め 0 0 繩 樂 め た た る 12 0) 身 小 3 6 進 罄 問 小 3 併 引 n V 12 自 50 備 7 3 5 とつ 15 慢 自 T 1 な L 屋 者 カン 分 1 7 0 鐘 ふこと T 根 6 7 姊 4 3 3 ス は な は 0 n 3 亦 久 る 下 は 整 1 0 此 0 復 誰 達 ほ 12 36 張 0) 8 0 活 太 5 樣 h 潮 見 開き人 古 5 -時 7 40 E ٤ ٦ 緒 S げ 23 凡 沈 カゴ 12 鐘 7

らかか 肢 森 神 も 6 カン 立 難 1 6 1 跳 调 5 7 ス h カゴ 夕 あ `鐘 出 來 1 2 12 た 7 兎 n 呼 來 を かび た 水 仰 5 掛 矅 せ ___ H 彼 H 付 7 た は 12 往 會 カン な 2 2 何 堂 3 7 7 カン 0 來 町 前 忙 る 12 12 h 用 停 疋 カゴ だ 事 0 カゴ V 鲆 0 0) な 兎 おいい 後 カゴ

歸

つて

來たが、金も希望も消え失せて、今では國

後 冶 カゴ あ 0) S 25 る泉 かつた。 數滴 水を 廢 n を苔の 杯 傍で彼は立停 庵 は 充 0 廣 じ 方 上に散らした。「さあ、これ た。 道 へと急 を 悠 つて、 なとそれ V 1 だ。 > 身を屈 家 森を を飲 0 沂 渦 めて h < Ť で彼 12 2 で凡て 木 7 其 0 は 杯 最 源 直 12

3 7K ふんた。 青年は > 煮え は透明で冷た か 庵 へつた 0 閾 居 カン つた、 m 12 潮 腰打ち掛けて を冷すことは けれ ども之を口 兩 手 能 で其 きな にし 0 カン 顏 2 72

.

つた。 見 都 T た た。 者 0 0 處 立 ことも 0 ぐる夏、久し 派 粉 職に就 彼は小金を蓄めて澤山 へ行くに 下の な 屋 邸宅 0 あ 狩 娘に 0 W 弘彼 た。 た 獵 御供 振 對 隊 は何時 12 彼 彼 h する憧憬 は 加 は をした で彼は山 亦主 つて 絲 分 でも古郷 彼は高 いを放し 人に 世 0) ことも 世い へ歸 0 從 中 0) i つて 山 希望を懐いて たてとはな あつた。 つて、元 に羚羊 谷 ふも 獵舍や、 そし ーを追 0 0

> やつ れ場 森の らりとし 彼 後方に倒 去 かい 2 て水 所 此 7 然し乙女は手荒 の僧 別 軍 カン 6 れた。 n た姿を見て彼 た 隊 跳 庵 7 0 其 始 人とならうとし 6 0 出 近 女はやがて背を向けて行 めて 0 し、 < 時 彼 井 であ に男を 膽 は 戶 0 r 喜 12 2 戀人を見出 た。 潰 び 侍 押し退け i 0 2 2 餘 た た乙女 彼女は る 彼女 9 る た 聲 L 0 0 12 を 0 水 た で を 美 つて了 腕 出 あ 汲 を投 U L は 2 みに 男は て隱 いす た 此 げ 0

花を拾 つて馴 年は 其の n へ戻 12 それは收 が自分へ に就 な 其 夫 っつて 後 撫子の束を投げ捨て らうとした、 は あ 7 獵 片 U 々しく乙女の 0 近づくのを見 美し 上げ、 踊 穫 夫 意地 は彼は少し 祭の は最 りの場所へ向 V になって 頃 之を乾 乙女を待 獵夫 度粉 10 所 3 ~ ると、 岩 來た。「お前が 知 屋 は カン 來た。 らな して た。 怒り ち設 2 0 V 一時で de 娘 貞淑 の餘 振 に近寄らうと試 懐 カン H 0 けれど、 て、 2 12 6 3 あ た。 めり水車 返つて つた。 老人 納 な乙女は水 左 撫子 め た。 羽 兎角す 行く 乙女 水 其 0 0) 車 束 處 然 小 專 から 111 は を持 る l 0 まり 4 6 12 2 方

くて、 であつた。併し長くは躊らつてゐなかつた。 ろで若者は立 つて振 察すると、 な背嚢を携 砲 12 色の鷹の羽を附けてゐた。 を歩いてゐた。 じ頃はひに、 Ì 引いて、ホーイ」と怒鳴ってみた。 とも草原へ 下に、 はなくて其の代りに猫の皮で拵らへた重 i た幅 歌を唄つた。 本道 「氣に水車の方を見遣つた、傲然 唯旅 いの鳥は り廻し 悲し 0) から水車小屋 をしてゐるらし 此の獵人は獲物を求めて居るの ~ 廣 ,度眼 カゴ の岐路を取つた た、 止 てねた。 初ば V 気に押し默まつて懸 昇 一人の若者が森を貫き通 獵 まつた。本道を進んだも 彼は 0 でも覺 鐵 併し忘 用の洋刀を提げて たきし 7 革の 0 樅 これや、それ 金具を嵌 元めたか 0 での方 獵 心れられ 木の カン 衣 左の腰には鹿の 聲張 んもの つへと路 2 なを着 枝 0 た。 いめた 様 た鑵は會堂の 9 頭 て、 かと思案の に其 カン あげて に黄金を散らし 其の聲は森に 山が分れ 其の通 鼠李 から右手に持 るた、 2 と首を後方 帽子 7 つてね の枝を搖 0 0 ね イー カン 5 枚か 主たさら 角を柄 るとこ ではな 然し鐵 た。 には灰 続子 であ る路 屋根 ス 6 同 タ カゴ

たました。歩きながら彼は恁麼歌を唄つ さらば、繰なす樂しき森の家よ! われは汝を去らればならぬ 運命の惠みのわれを見出すまで 味氣なき世を彷ふため。 幼かりし時われ、氣高き 鹿狩に興を得き、されど今わが道は われな決闘に導く われなで死」と面合せん。

灰色の鷹高きに止りぬ 「大魔の術に囚はれつし。 無は死みつし哀れなり。 自由の逍遙の爲めには 此の森の廣き領地をも惜まざらん。 おい高く、おし高く

嬉し氣な容姿との調和を破つた。
然し最後の詞は青年の咽喉に閊えた、そして其

而して爾がたうとき翼ひろげよや。

みしるしを與へ給へ、もしるもの人が真實に妾を 人の後を追つて連れ戻しませう。何卒みしるしを 可愛く思つて下さるなら妾は世界の涯までもあの みしるしを與へ給へ、もしもあの人が真實に妾を

今度 と再業 年が愛とし 端に彼女が振返つてみると、 葉を吃つた。 は大會式の げ た獵夫の目 此 いの一鳴りであったけれど哭ける乙女の心底に 人は て不思議さうにマドンナの像を眺 0 弘 彼女も 鐘はより高く、より樂し氣に鳴り響い 時彼女の頭上で輕く鐘の音がし 、樂し い人の方へ に焼け 逃げ出 V 歌 た首筋に諸腕を投げて愛の言 0 しはしなかつた。 如 腕を伸ばして立つてゐた。 うに響いた。 會堂の入口に件の青 た。 めた。 彼女は荒 彼女は それは する 眼 3 涂 を

び廻る、木鼠が己が棲家の戸口に一寸頭を突き出樅の木の梢に巢くつてゐた四十雀や、鷦鷯が飛

、 た。 會堂の中に二人には凡ての物が奇異に

せた。 は暖い を森 お前 カゴ 絶えず前後 やが 二人は暫らく互 は 12 日光 私等 て男 告げておくれ。」會堂の屋根の下の小さな鐘 を 12 8 は 搖 浴び 鐘の 緒に いで其の清 N て喜びに輝きはじめた、 綱を握つて聲を して吳れ に抱擁し合つた儘であ 々しい音を森中 た。 320 懸け 私等の た。「鐘よ、 そし 2 悦び

た。 にイ 光景を見た。然し、 周 層の村 ì 歸つて來 あの鐘 ス ター K の一隊は Ö た の塔 0 歌を歌つたものは で、 カン 5, 森の忘れられ 日前 其 の間 有名な寺鐘の 0 晚 12 元に羅馬 は た鐘 幾 つも 多 響が (1) 0) はど樂し 不 訪 思 問 傳 カ> 議 8 は 氣

靑 思 15 佈 年の リリム は は 右 七 疃 振 ~ 行 は か h 5 < 12 _ 里 遊蕩 た カン DE 方 狂 5 見等 0 熊 彼 A は カゴ 續 R 考 0 ~ 群 0 S た。 7 22 行 0 仲 そし 湍 < 間 中 ス 13 Ŀ 12 6 7 る様 3 彼 荒 女 h 7 12 ~ な だ 飲 0

來 て 1 そこ だら する カゴ は 加 到 た る は 其 で彼 0 げ 72 飲 6 處 52 0 12 うとし 冬中 0 6 刀 仲 17 間 俤 あ 鉛 太 7 間 0) 30 4 0 人噂 長 自 と別 鼓 in n 2 獵 な 形 恁 た。 耳 7 分 夫 7 3 か 廖 3 0 12 70 消 旅 有 0 n 3/3 音 カゴ る 中 入 彼 憂 0 な 傳 た カゴ 春 0 は を TA 盃 急 聞 これ は 17 光 6 た。 今庵 悲み で汲 叢林 4 え 75 0 6 あ 此 まで T ると 人 カジ 0 獵 中 R 道 來 : 空の た。 0 3 Z 0) 戰 夫 0 戶 森 交 0) 25 路 72 伊 場 管 ところ 柔 は 0 は 依 Ł 太 彼 僧 17 喧 方 12 わ カン 林 0 V 利 腰 人道 n 30 麻 T 12 7 者 12 12 を 9 埋 次 戰 女 玥 12 0) カゴ 下ろ 事 路 迈 凼 で ようとし 乘 (A) 爭 は 武 V B 務 6 0 カン A は で カジ m る た i な を辭 n 起 2 12 軍 闧 夕 音 T 7 72 る 加 12 內

2

は 3

獲

物

0

叢 5

0

を通 L

る音 音

では

なかつた。

樅 然

m

0)

É

12 中

7

0)

原

因

を

探

和

た。

木 ようとし 0 0 0 壁 幹 72 0 0 蔭 獵 間 7 12 夫 12 26 隱 は何 忌 n 胸 op た n 30 6 躍 5 ガン 森を n 3 5 # ¥2 S 彼 過 75 女 3 0) カゴ 0 つて 女 5 カジ P 向 0 0 5 つそり 7 か 5 る

東を生 今で 拂 井戶 Ł は n Z L 肖 忘 0 0 がの V U め 6 未 は 詰 悔 た。 像 度 T は 麻 光 心 n 11 iz に 女 た 也 银 75 眼 0 め 恨 を 來ると 低 手 其 は あ 仲 13 0 7 4 12 あ 前 H 3 た。 る 直 充 12 徐 は 中 L 7 Vi 30 25 0 力> まつ 聲 長 妾 L た T 花 3 0 L 6 でを愛い 2 才 0 光 3 天 小 7 12 まつた。 6 3 V んより た。 彼 置 n 3 亞 7 近 1 0 n る 語 L た 女王 女 カン 73 麻 寄 ス S 2 水差 も慕 的 は 7 5 花 タ 6 7 色 2 危險 彼 ì 凡 2 7 n 0 12 0) 束 天 に水を 女は 苔蒸 6 注 は 7 7 は だ 髮 21 來 使」の かが 奇 3 花 0 下 L 0 Ž あ る 地 0 蹟 事 3 22 始 L 會 を 死 0 V た。う に 堂 滿 折 ると 12 加 妾 挨 17 0 8 め なはあの人 た。 若 拶 階 た 時 亚 ~ 4 行 i た。 3 段 n 彼 V それ てそれ いは 繰 2 た。 女 7 2 B 0 お 1 あ、人 あ 返 上 7 は 2 77 3 のは 至 のかが V 彼 身 軸 y 跪 A 懺 カジ 人 1/2 女 7 r 悔 其 坐 花 其 P 屈

△處心集句稿と明記のこと
△處心集句稿と明記のこと
△處心集句稿と明記のこと
△戲、句數等を限らず
 當 欄 俳 句 募 集

芍 雪 ح 草 北 荢 雀 な 継 春 足 砥 る ぼ < 積 風 袋 石 0 桶 Ł 枯 3 n 雷 ¥2 de 扣 0 15 21 片 Ł る 於 豆 身 4 紅 曉 足 6 0 0 3 寄 覆 4 7 5 並 入 0 莽 Ш 焦 冬 す 枯 な n 聲 12 芽 0 H め 似 重 伸 木 草 た 17 る O) 7 h る 7 点 * 3 燒 炬 る 箝 陽 凧 寢 船 重 燒 \$ 鴉 カゴ 燵 め V 0 脊 鳴 > カン 4 時 出 4 立 7 冷 鳴 る 12 萃 丈 < え 4 る 去 槌 0 春 炭 > H 日 T 交 麥 水 25 割 山 寒 0 振 な な n 靑 溫 H あ は 6 力》 す な 3 風 9 6 V2 3 9 9

青 六 秋 春 雉 湘 西 蕞 冬 櫻 雁 九 榕 恭 の 風 里

畝杂花二泉雨丘爾城水呂香樹

藻 朧 杉 朧 朧 別 塀 更 顔 田 た 水 砂 夜 菜 更 h 塚 螺 溫 紗 白 n 糖 杨 ~° H ぼ 0 . 12 0 U 拾 4 5 楢 た 0 > 凭 腹 た 淋 首 兒 N 5 かご 圍 0 浪 水 t H n る Ň. た た ほ 0 朝 S 寢 3 瀧 廣 71 た 朧 る h お 12 露 泣 夜 ぼ 12 夜 vi 顏 入 ٤. る > 0 0 家 2 身 顔 0 る 蔽 皓 2 ほ 空 鴨 兒 た 5 生 家 2 は 水 0 あ 呼 は 2 等 ٠ < h H 鶑 カゴ 0 水 カン CK る 9 5 る 立 Œ 水 大 な 飲 走 h 12 水 7 め 5 長 溫 n V H め 消 來 た 溜 な た 6 b < 50 9 9 (0) 3 ょ る b 40 12

心

虚

心集

碧

樓

女の美しい聲がいつまでも私の耳にのこつてゐる。

彼の女は二人の子の母となった。

私は今日も旅路の空に貧しいパンを索めてゐる。

私はその春の夜を忘れ得ない。

□ 孤島の春に

は夢に訪れるやうな潮の香が湛へられてゐた。 春の 雨が煙のやうに、 裂かれたる紗のやうに島の浦和をこめた日であつた。眠つたやうな春の水に 山には白 い花や紅い花が芽生へしたばかりの春の 山 を

埋めてゐた。

今日は朝鮮の山も見えぬ。

何 時 もはつひ近くに泛び出てゐる朝鮮の山脈も、今日ばかりは遠い潮路の涯に沈むで

のなかを縫うて玄海を北へ、南へ流れて行く白帆の影が淡く郷愁の涙を誘ふ。

薄靄

に谺して來る。 今日は鶯も啼かねば、 水を拍つやうな、 雉も鳴かぬ。 山の峽に消へて行くやうな、 何處からともなしに、 沖の漁船で舷を叩いてゐる音 その物音が一層孤島 の春の雨 が入江 をして寂

しいものとならしめる。

國 を離れた人にとりて、 人間ほど懐しいものはない。私たちは練兵の暇あるでとにこの島の岸から

忘れ得ぬ面影

吉田絃二郎

□ 淡紅のチウリツプ

は の顔は月のやうに白く見えた。色々な草花が並べられた棚の前を私たちは幾度か往き來した。 街を歩いた。私はあの夜を忘れ得ない。 私たちの幸福のために作られてあるやうに想はれた。 春の夜であつた。櫻散る夜であつた。道は白く見えた。月がおぼろな夜であつた。私たちは並んで カンテラやアセチリンの燈が街に沿らて燃えてゐた。 春の夜 彼の女

先生!

のやらに薫つた。

櫻散る山の手の道を辿りながら私たちは歸つた。私の胸は寂しかつた。道は白かつた。 女はから言つて私に西洋草花の鉢植を買つてくれた。それは淡紅のチュ ウリップであつた。 春の香が夢

カ> 私は彼の女の家まで送ってやつた。それでも私は門の外で分れた。黒い板塀に白い櫻の花瓣が散り ゝる月の夜であつた。

先生!

私はその春雨の朝を忘れない。

は深く頰をつゝむでゐた。輪廓の正しい横顫と柔かな髪の毛とが何時までも私の記憶に遺つてゐる。 にして春の潮の上にたゝへられてゐるのを、 立つてゐることができなかった。 静かに流され行く藻の花を見つめるやうにして私は纖細い海女の姿を見た。私はいつまでもそこに しとしと、春雨の降る朝であつた。私は名も知らぬ海女を見た。 口汚く大きな聲を出して笑ふ海士の一群のうちに、私はたべ一人のつゝましやかな乙女を見た。女 私は寂しい思いを抱きながら入江の岬を曲つた。青い烟が這ふやう 私は尚は一度振りかへつて見た。 私の心は悲しかつた。

柳の芽生

 \Box

私は島の春雨の朝を忘れない。

異人さん、異人さん寂しかろ。

小僧さん、小僧さんも寂しかろ。

眠氣を催すはどの 銀座の街に柳の芽生えが温かな春の光りに照らされた日の正午ころであつた。電車のなかは流石に あ たゝかさであつた。

望の色を泛べつゝ窓にもたれて眠つてゐた。 異人さんも眠つてゐた。小僧さんも眠つてゐた。疲れ切つた生活の人々は春の光りを浴びつゝも絕

異人さん、異人さん寂しかろ。

岸と道もないところを歩いて、偶々古林につゝまれた數戶の漁村を見出すごとに耐 異郷の寂しさとをしみと、味はされた。 へ切れぬ人の懐し

花 白 か い具殻や船蟲の殻などが雨に打たれながら古い船板にこびりついてゐた。名も知らぬ雑草の可憐な の花が若い女の血を想はせるやうに紅に燃えた下には、破船の雨風に打たれたのが横はつてゐた。 板の裂 计 自 から覗いてゐることもあつた。

もな 抱 らた烟が見られた。そこには十二三人の海女が雨に濡れながら磯馴木を焚いてゐた。 らて歩いてゐた。物の音一つ聞くことのできぬ春雨の朝であった。岬から少し曲つたところに低 いて にそのなかにはいつて行つた。海女の一群は静かに私の方を見た。 その かつた。 ねた。 春 雨 0 彼れ等は内地人といふものに對して何時も相當の尊敬を拂ふと同時に、一種の恐怖心を みんなが今までの咄しを急に止めて、ぢいつと燻ぶつてゐる焚火に見入つた。 日であつた。 私は静 かな春の潮に消えて行く細雨の音を聽きながら、花の多い入江 それでも誰れも話しか 私は 何 H 0 るも 氣 に沿 もな く漂

春の雨は烟のやうに降つてゐる。音もなしに。

異郷の旅人は紗のやうな春雨に打たれながら潮の香につっまれてゐた。 ないことを興じ合つて笑つた。そして殆んど私がそこにゐることを心にもかけないやうに見えた。 ひそと話し出した。けれども私はこの群から離れなか かな入江 かし彼れ等の沈默は幾らも續 0 春雨の朝であつた。微かに立ちのぼる烟の下に集つた十二三人の海士と、たい一人の カ 73 カン った。年増の女たちは偸むやうにして私を見ながら何 った。 女たちは果は大きな聲を出 かひそ 他愛も

立つた。丘から丘、水から水と動き行く幾千の燈がどんなにか旅人の心に郷愁の情を湧かさしたで

あらう。私たちはその時けた、ましい嬰兒の泣き聲を聽いた。

嬰兒は火がついたやうに泣いた。そして抱かれてゐる母の胸を蹴つた。 お父さん、お父さん、なぜお父さんは來ないんだ。いけない、いけない、なぜお父さんは來ないんだ!

船は容捨もなく動いた。幾千の燈が動いた。

お父さん、お父さん、なぜ來ないの・・・・・・。

父といふ人の姿は到頭見えなかつた。

今捨て、來たばかりの彼方の波止場は、同じ海岸の燈と一緒にけぢめなくなつた。嬰兒はた、暗

潮の上を見やりながら泣き叫んだ。

お父さん、お父さん、なぜ來ないんだ・・・・。

私はその夜を忘れることはできない。人々は爭ふやうにして新しい陸地のプラットフォームを歩いた。

□ 或る朝

を附けた大きなステッキを持つてゐた。彼れは堂々たる風采を持つてゐた。彼れは雨のポ 或る朝電車のなかで私は立派な紳士を見た。彼れは價高い毛皮の外套を着てゐた。彼れは銀の飾り 人々は好奇の眼を瞠つて、彼れが何を取り出すのであるかを注意した。紳士は小ひさなハンカ ケットを探

小僧さんも寂しかろ ……。

私は疲れ切つた日の電車のなかの寂しさを忘れ得ない。

夜の汽車

12 の走るが 汽車 初めての旅に私の心は寂しい影にとざされてゐた。白壁の家、雪の山、湖上の漁火、 **一は琵琶湖畔を走つてゐた。日は黄昏れてしまつた。私はその時十七であつた。始めての都上り** まゝに寂 しい影は寂しい影を迎へた。

これが關 ケ 原なんですよ。

から言つて敬へてくれた優しい聲の持ち主を私は忘れることはできない。

90

た木立の上には燐光を燃したやうな夕の星が瞬いてゐた。私はその夜を忘れることはできない。 三角形に尖つた木立や、疎な林が見えた、さしく高くもない丘が空をかざして見えた。矗々と立つ

私はその後幾たびとなく關ケ原を通る、湖畔を通る。三角形の木立、小高い丘、そして夕の星が何 車の窓から見られる。

私の心はいつも寂しい。私はその夜を忘れ得ない。私はあの聲を忘れ得ない。

時もあの

馬關海峽

馬 関海峡の潮が暗く流れてゐる真夜中であつた。私たちは寒い潮風に吹かれながら聯絡船の甲板に

デモクラスイの心理

木村久

政治を議論すれば、農民も立憲政治を云々する、學生もこれを論ずれば、田舎の青年もこれを談 分る。 を標榜して居るにも拘はらず、 はく立憲同志會と云ひ、日はく立憲國民黨と云ひ、有らゆる政黨は黨名に立憲の二字を冠して立憲的 しば~~非立憲的行為に出づるが如きは今日の政治の有樣である。又た曰はく立憲政友會と云ひ、曰 と云ふ有樣である。併し立憲政治其物の進歩は、極めて見るべきものが少ない。 る。 立憲政治と云ふ言葉は、近頃社會の有らゆる方面に於いて聞かれるやうになつた。卽ち商人も立っ て、特に訓示を以て、中學教育に於ける刻下の急務は立憲思想の養成であると力說された。 叉た に立つて居る者が、口には我輩は立憲政治に關して高遠なる理想を抱いて居ると豪語しながら、 多分から云ふ歎かはしい有樣を憂へての事であらう。先頃文部大臣は、 般人民 選擧の有樣などを見ると、彼等は依然として立憲政治其物は少しも理解して (も同樣であつて、立憲政治と云ふ言葉だけは感心に念佛や題目のやうに唱 その爲すところが甚だ立憲的ならざるが如きは今日の政黨の有様であ 全國中學校長會議 宰相の印綬を帶 居ないことが へて居る 叉た政 びて ずる に於

た。 ハイフ からは の包みを出した。人々はそのハンカチイフに見入つた。紳士はやがてそのハンカチイフを解い 釣の道具が出た。 人々の好奇心はむざくと破られた。

彼 n 0 周圍 の人々は今日も時間に東縛せられつ、バンを索めに行く生活の疲勞者であつた。

人々は會社や工場や學校に急いだ。

紳士は微かに笑を含むだる眼を以て空を見上げた。紳士の瞳には静かな海と青い空とが映つた 私はあの月曜の朝を忘れ得ない。

□ 大學正門前で

一雨の降る朝であつた。

私はあの新し

い大學正門前の春雨の日を忘れ得ない。

を挽いてゐた。 大學の 正門前 幾度 12 二頭 か鞭打たれ の馬 が傷 つっな R いほど殘酷な答に鞭打たれてゐた。馬は大學から運ばれた重い 動くことはできなかった。 荷

求すると云はれた。 も學者 名な南北戰爭即ち奴隷廢止戰爭が戰はれた。而してこの戰爭中に、 定義を思ひ出 であ も多數の戰死者を出した。而して北軍の方では、 があつた。それは千八百六十三年七月一日から三日まで、 政治の 才 は、 に定義したものではなかつたけれども、 力 0 て居る。 ļ 中にあつた言葉である。御存じの通りリンカーンは、學校教育は受けなかった。 であつて、不用意な言葉にもしばし、非常な名言があつた。この言葉も、 いつた。 リン は、 が定義するやうな風に定義したものではなかつた。御存じの通りリンカ 記念碑を建てようと云ふことになつて、同年十一月十九日に獻碑式が擧行された。 終極 people. さてリンカーンの定義に依れば、 力 さてこの 大統領として一場の演説をやつた。尤もその演説は、演説と云つても二分間ほどの短演説 1 0 した。 ンの定義の É 即ち人民の爲に、人民の行ふ、人民の政治と云つた。尤もこの定義は、 であるが、これを吉野博士の説に比べて見ると、吉野博士が、デモクラスイは第一に、 的 は 予はこれを讀んで、はしなくもアメリカの名大統領リンカーンのデモクラストの IJ government of the people, by the people, for the people. と氏ふ言葉は、 一般 2 カー 人民の利益幸福の為でなければならないと云ふことを要求すると云はれたの for the people と云ふ言葉に相當する。又た吉野博士が、 ンはデモクラスイを定義して、government of the people, by the people, デ デモ モ クラス クラスイは このゲッチスパーグの會戰に於いて戰死した勇士の イの定義としてこの上もなく立派なものと云はれ 丁度三日間續いた激戰であつて、敵 government of the people, by the people, ゲッチ ス ハヤ 學者が定義するやらな風 1 ーグ ンが大統領 併し彼は非常 の會戰と云 デモクラスイは第 定義と云って この時リン 0 この演 心も味方 時、 な天 說 95

政治學的 治學者や政治家も、口を揃へて立憲思想普及の必要を呼んで居る。これを以て見ると今日は、立憲政 の理解に資する議論はいくらあつても多しとせざる時である。故に予は、吾々心理學者の立憲政治 敢へて無益であるまいと考へたのである。併し予は政治學を學んだ者でないから、 方 一面の議論は能きない、又たしようとも思はない。予の論じようと思ふのは、立憲政治の心 立憲政治の

_

理學的方面

皿であ

思人。 も尊敬する學者の一人である。故に予は博士の議論を出發點として、予の議論を進めることを光粲に イであると斷ぜられた。故に子の論ずべき事は、このデ ば立憲政治の精神は何であるかと云へば、予に取つても諸君に取つても非常に好都 なり得る事でない。心理學者の問題となり得るのは、立憲政治の形式でなくてその精神である。然ら ならないとかと、色々な事がある。併しから云ふ事は、立憲政治の形式であつて、心理學者の問 政治學から云へば、立憲政治は三權分立の確立がなければならないとか、代議院の設立がなけれ 一月の 中央公論に於いて、該博なる學識と明快なる論理を以て、立憲政治の精神は モクラスイの心理である。 吉野博 合な事 士 デ には、吉野 は Æ 子の ク ラ 題 94

第二にデモクラスイは、 ク ラ は 河博士は 、政治の終極の目的は一般人民の利益幸福の爲でなければならないと云ふことを要求する。 か の論文に於いて、デモクラスイの要求する綱領は二つあると云つて、第一にデモ 政策の終極の決定は一般人民の意嚮に由らなければならないと云ふことを要

を利 故 行 雖 る為の 12 綱領であつて、 でなければならな 出して、 に政治は人民がこれを行はなければならないと云ふのである。これを以て見ると、 れば、 用 と云ふ事 何 手段に過ぎな 語 意見を述べ ある。 政治は人民の為の政治でなければならないと云ふ第一の要求が 3 自家階 一般 政治 ずは第 併し一般には、彼等は矢張自家階級の利益幸福 vo 人民に不當な政治を行ふと云ふ譯でない。 は人民の行ふ政治でなければならないと云ふ第二の 級 なければ 二義的 いやうに思 0 のみならず、 利 益 0 幸 ならないのはこの點である。 羽 0 は 福 22 n 0 みを計 政治はこれを少數の特殊階級に任せて置くと、彼等は自家の地位 に過ぎな る。 卽ち 3 いやうに思はれる。 for 般人民には不當 the people この點に關する吾々心理學者 時には と云 なて の為の政治のみを行 な政治を行ふ弊が ム事 吾 一般人民の利益幸福 な心 要求 か 理學者 デ 番大切であつて、 は、 モクラ かい 第 ス あ <u>_</u>の 政治 る。 い勝 自ら揣らず 1 要求 0) の見解は、 0 勿論 學者の 爲 ちであ を保 番 0 大切な 政治を 見解 飛 證す 政 CK

置 階級がこれ 第二義的な綱領に過ぎないならば、 行 n いても カジ ふと云ふやうな事は萬々ないから、 が永久に for the people と云ふ事がデモクラスイの一 可 保 V を壟斷して居つても、 、證され かと。 から云 7 居るならば、 へば政治學者は或は、 若しその 人民 吾々にはから云ふ疑問 そんな問題は閑問題である、 カゴ 政治 てれを行 か 特殊階級が 般人民 番大切な綱領であつて、by the people と云ふ事は X 必要は 0 が起る。 な 利益幸 永 久に一般人民 V カン 日はく 不必要な問題であ 福 2 0 為 n を少 0 然らば政治は、 政治 0 利益幸 數 であ 0 特 2 ると云ふかも知 殊 福 階 7 0 少數 爲 而 62 任 0 政治を てそ 特殊 せて

治學者のそれと大いに違ふ。

2 government of the people と云ム事は非常に重大な事かも知れないが、心理學的には大して重大な事で government of the people と云ふ事には、心理學的には大した意味もないやうである。 people, for the people. と云ふ事は云ひ得るけれども、government of the people と云ふ事は云ひ得な を學んだ者でないから好く分らないが、或はこれは我國の如き君主國に於いては、government by the **今心理學上の議論をして居るのであつて、政治學上の議論をして居るのでない。而して幸な事** い爲かも知れない。兎に角政治學の知識のない予には好く分らない。併し前にも云つたやらに、 ないやうである。故に予は、government of the people と云ふ事は議論から省からと思ふ。 of the people と云太言葉に相當する事は何も云はれなかつた。前にも云つたやうに、予は IJ 政策の終極の決定は一般人民の意嚮に由らなければならないと云ふ事を要求すると云はれ 力 1 ンの定義の by the people と云ふ言葉に相當する。併し吉野博士は、 y 政治學的 力 1 政治學 たの 定義

Ξ

カジ 十分に説明して居る。次ぎに政治學者の説に依れば、政治は第二に人民の行ふ政治でなけれ はならな 最も好くこれを知つて居る。故に政治は、人民がこれを行はなければならない。即ち by the people さて政治學者の説に依れば、政治は第一に人民の爲の政治でなければならないと云ふ。卽ち政治は、 の利益幸福の爲の政治でなければならない、少數の特殊階級の利益幸福の爲の政治であつて いと云ふ。 而して政治學者は、その理由を説明して、何が一般人民の利益幸福であるかは、 即ち for the people でなければならないと云ふ。而して政治學者は、 その ばならな 人民自身 理由を

つた。 子 於 1 0 h 初 6 至 併 違 6 0 im Ŀ 1 上つた 1) を叫 めると、 'n ï は 解 U いて、自由 ス つて、 放運 被支配階級なる奴隷狀態の人民が、 放運 ててこ 人民 放放 ŀ な 聖山 歷 25 夫人やスナウデン夫人を出すに至つた。 渾 んで法 動 史に外ならない。 動 解 動 次ぎは 由 ح 解放 であ 放運 は りて 凡 退 吾 は、 政治上 0 及 却 Ŧ 7 解 K び平等の名の下 米國 は、 昔の Й 一の 渾 \tilde{O} る。 は 次ぎに 放 動 一を切られて、ルーターに至つて轟然として爆發した宗教改革であ 束縛 動 淮 12 渾 これを人民解 0) 今日 は 步 それのやらに流 解 然るに 加 0 動 は 放運 一轉して政治上の解放運動となった。 を脱 再 0 獨立であ 4 のた者 の言 中 び澎 その その 動 休 十八世紀の末、 しようとし みで 葉 湃として、 は、 12 る。 で云 間 後色 は、 放運 如如 あ 12 その その は或 R たゞ男子だけである。故に人民解 動と云ふ。人民解放運動は、恐らく人類の 血 何 つたが、 ~ た宗教上の解放運動であった。 ば 前 な變遷 後ますく に惨澹た 支配階級なる貴族に反抗して、 大洋 は謀 でない。 次ぎは有名な佛 ス 十九世 ŀ 近世 0 ラ 反を企てたことも を經 たる惨劇 秘濤 イ 吾々はこれを婦人解放運動と云ふ。 併し同じく解放運動たることは、昔のそれと決して 火の しと云 丰 て、 紀 6 0 のやらに ふ新し 手 あ 逐 初 カゴ 演 0 蘭 が上り、 め 12 ばられ た。 頃から、 今 西 日公 押し寄せて來た。 0 政治上 H 大革 次ぎに あつた。 0 今尚 た かり feminist 男子 0 カ> 命 來た中 これ 文藝復 は盛んに燃えて居る。 は、 6 解 放 或 放運 だんしく あ ならぬ 運動 何人も は る。 カゴ movement 即ち、 動 興と云ふ曙 世 聖 は、 出現と共に始められた。 その は、 Ш 而 女子 0 或 先 12 彼 知るところであ L 先鋒 等と同 る。 謂 退 0 る意 T 登 カ> 工 ラ この 却 は、 は くの 解 然る は、 光 (0) U 忠味に於 ス 放 を以 た 權 解 英 ~~p る 如く、 運 尤も近頃 (國 に宗 信 暗 ことも 12 放 ス 動 なるに 運 B 仰 て明 0 76 いて男 動 革 教 0 始 17 自 H Ŀ 3 力 8)

らな あつて 治 0 25 n 野す カゴ 利 75 少數 依然として惡政であると斷言する。 益 季 る people 吾 併 卽 の特殊階級の行 福 し吾 ち K 而してそれ 0) 為 心 吾々心理學者 と云ふ事でなくて by パタか 理 0 學者 政治であつても、 ら見れば、 0 カジ 回答はどうであるかと云へば、吾々心理學者は 如何 ふ政治であつて、 から見れ に好く永久に保 この ば、 而してそれが如何に好く永久に保證されて居つて 問題は決して小問題でない、實に大問題である。 the people と云ふ事である。 如何 デ 人民の行ふ政治でないならば、 Æ ク 證 12 されて 好く一 ラス イの 般 居 つて 人民の 番大切 必、 利 な綱 政治 益幸 左にその理由を述べ 領 は 福 人民 は、政治學者の 0 その 政治 為 がこれを行は 0 は 政治を行 政治は決 如何に 而してこの問題 見解と反對 ム特 して善 好く一般 若 なけれ 殊 政 階 人人民 0 でな 級

貴族と同権になつて、 好く分らないけ 吾から見れば、人類 筝の歴史であると云つた。これらの斷案は、それかくの立場か らな 寧ろ餘 あ る 人民 カーライルは、世界の歴史は偉人の傳記であると云つた。又たマークスは、 9 っに明 吾 カゴ 力 支配 ית カン 6 れども、 6 見 あ L 7 る。 n の歴史は解放運 デ ば、 居 Æ 歷 +" る 正史を讀 小 ク 丰 ŋ ラ 數 1) シ ス シ 0 P 特 以 イを行ふに至つた歴史である。又たローマの歴史も同様であつて、 P んでこの 殊 0 來 動 0 階 歷 0 級即 史は 歷 歴史である。 事實 史を見 ち貴 外でも に氣 ると、 族に反抗して、 な づ V, カン 工 な 人類 ヂ 支配 プ V 者 ŀ 0 ら見れ され は、 歷 دېد だん、 史 24 て居る階級即ち殆ど奴隷 どうかして居ると云 Ľ" カジ ば何 解 D 放連 _ 自家 p n 少 p 動 の權 眞 0 7 人類 歷 理 ツ 利 史で 6 Ð * IJ あ 0 550 あ 擴 はなけれ P 歴史は 張 る 0 昔 併 階 狀 0) 遂に し吾 態 ばな 事 級 戰 は

である。 n いと信じて居る。 ば、 政治は人間と云ふ成長發達する生物を對稱として居る點に於いて、非常に教育に似寄つたもの 而してそれ故に、政治は教育と同様に、人間 人間の成長發達を無視した政治は、人間の成長發達を無視した教育と同様に無意味 の生長發達と云ふ事を眼界から失つてはならな

である。

以 治と教育は非常に似寄ったものであって、共に同じ主義に従って行はれなければならないものであ 故 受くるに至つただけに、政治學者よりも却 者もしば~~これを口にするやらになった。而して教育學者の方は、 有名になった、伊太利 に予は、 かくの如く政治と教育は非常に似寄つたものであるから、デモクラスイと云ふ言葉は、 これ は決 或る教育學者の著書から例を取つて來て、 して無理な論法であるまいと信ずる。而してその教育學者と云ふのは、 の閨秀教育學者、マリア・モンラッソリ女史のことである。 つて好くデ デモ Æ クラ ク ラ ス イの精 ス イの心理を明 神を捕 政治學よりも早く心 て居るやらに見える。 かにしようと思ふ。政 近頃世界的 近頃 理 學の 教 教を 育學

間になったので、乳母は小供に、 ながら、 女史は或る著書の中に、から云ふ事を書いて居る。或る日女史が、 さの 一人の乳母 小供 餘念なく遊んで居つた。 非常 を蝶よ花 に可愛 カゴ 一人の小供を連れて遊んで居つた。 い小供であ よと可愛が つたが、 もう遊びを止めて家に歸りませうと云つた。併し小供は中々遊びを って居る乳母らしかった。 又たその乳母と云ふのは、 玩 具の シ 3 ~ その ルで矢張 さて兎角して居る中に、 服装のキチンとした、 小供と云 玩 具 ムの 0 ローマの或 ノベ ケッ は 0 __ # る公園 = 如 12 家に歸 何 砂 12 利 した を散歩し を も賢こさら 目 るべき時 掬 N 0 入れ て居 ク 1)

放運動 5 カジ 0 始始 解 開 始は 放 められ と云ふ。 運 n 動 た。 たけ は、 予は人類の それは心 n 人類 ども、 0) 出 現と共 人類 理學者や、 歴史と云ふ大ドラマは、 0 解放運 に 開 心理 始され、 動 寧の は、 教を受けた教育學者の企てである。 これで終りを告げた譯でなく、近頃又た小 女子の解放運動は、十八世紀の末、 この人民解放運動、 婦人解放運動及び兒童解放運 十九世 吾々は これ 供の 紀の初め頃 解 を兒童解 放 運 動 力》

であると信じて居る。

者 子 渾 して大 壓 75 人 た 動 は、 の不 制 政 0 動 カジ 3 の三部 脳暴虐で 治 は 7 カゴ 小 法及び大人の不法 起 何 此 何人にも先だつてこれらの解放運 供 人 7/3 放で 處 12 から出來て居る、 つたのである。 カゴ 多 に問題 小小供 あつたとは云はれない。又た男子が女子に對して何時も不法であつたとも云は カン 撑 9 あ た。 12 て、 る 力> が起る。 對して 併 何 これ ï 時 調 が全くなかったとしても、 否なこれらの解放運動 何時も不法であったとは特に云はれない。 76 人類の は支配 大トリロジー はゆ 壓 制 る仁政も決して少なくなかった。故に支配階級 暴 歴史は 心虐で 階 級 あつた故 カジ 被支配 かくの 動を是認する者である。 は、 で 階 如く解放運 あ 級 支配 る 卽 矢張 iち 人民 カ>。 階級の 起つて 動 否な決してさうでな 12 0 歷 對して、 虐政が全くなかつたとしても、 あ 史で それ つたらうと思 然るにも拘はらず、 あ は何故 男子が るが、 0 人間 から vo 女子 あ 30 人民に る 12 カゴ 成程昔は壓 而して カン 對して、 カ> 3 これらの解放 對して 解 吾 れない。 放 R 叉た大 心理 又 制 を欲し 何 た男 時 暴虐 īfi Z

五

0

心理學は、 B 0) 理 人間が成長發達するいきもの即ち生物であると云ふ事を忘れない。故に心理學者か 學 は、 昔 0 心 理學と違って、 生物學、 人類學、 生 理 學等の上に立 脚 して居 る。 故に今日 ら見

然るに 分の IJ 技 4 ば或 治 0 1 民 つて ばならな カン Mi 0 倆 は、 6 7 0 直 してさら云ふ政治を少しも有り難く思はな もしてやると、 た。 人は人民 能 あ 為 も政治 を行 髓 ケ 反 0 門力の る。 抗 木 成 永 ツ 6 する。 久 孙 能 0 政 つて吳れ 長 成 故 利 と云 かが る。 اح 0 中 治 發 は であ 矢張 政治 保 は、 に彼 を掬 ار 達 長發達である。 動 其 ふも 此 證 而 0 され を行ふ必要が る。 處 然らざれ 物であつて、 は L つて 人民 爲 N 砂 小 に少数 入れ 掬 利 7 0 17 多 た仁 今 は 供 がこれを行 但 8 W 驚くべ 入れ了れば、それを打ちまけて、 る運 し 政治 掬 紹 は 介した 一政 ば 何 その 吾 CA 0 動 入れ 人人民 デ も能さな K 特 は飽 0 から その 記に由 13 カジ 殊 あ モ 政 が階級が 政 ク 13 小 治 は 3 0 0 S までも つて、 ななけ 力> 治を行ふてとは許さな 7 能 ラ 結果でない。 カゴ 供 0 は矢 多。 力や ら遊 で は、 V 36 ス 'n イ 人 知 あつて、 張 自分の手や目や頭の發達と熟練を得ることが 質に 吾 んで居ったの 小 間 吾 技 0 悪 は n ない。 ロヤが 真髓 供 になる。 S 政 倆 ならな R から云 6 は カジ は 而してその 否な有り難く思はないばか あ その人々 てれを行 决 + は 初 併し 分に 實に vo め してこれ る。 これ ふ意義あ 0 は、 中 吾 發達することが 此 吾 人 再 So カゴ はなけ 處 は は 々心 民 々はさ 決して 活 人間 で滿 び掬 吾 17 0 る反抗 動 行 理 から云ふ場 R あ カン 學者 る。 < に取つて最も恐ろしい う云 0 n 足すべきものでな 0 27 3 爲に、 入れ 砂 目 0 政 ばならない。 如ら大 治 政 的 利を掬 をしたの から 2 能さな 始 政 でなけ 治 は 見れ め 治 合 痒 は るの 人の N 圣 12 V 無 りでな 人 入れ 6 所 世 n ば は 意 V 民 これ 6 あ 親 話 12 カ> 識 ば カゴ S る其 る。 政 手 らで これ 切 的 あ 燒 カン には う云 る。 ら政 治 がといく カジ 6 如 Ħ 彼 不幸である。 吾 事 吾 を 侗 學 デ あ は 的 非 行 彼 カゴ ふ場 者 なの る。 力了 々はおう云 治 12 Æ あ 完全 B 常 ク は 6 シ る 0 カン 6 ラ 能 故 13 的 な力を 合 欲 あ 7 力と けれ に人 であ 見 12 す 2 6 ~ ス 政 á た な イ n 自 N

て小供 幼顔 n ıĿ 利 はそれ 0 彼 親切を盡したと思つて居る。併してれは大間 て、 12 くさらである。吾々人間でも他の動物でも、その能力は用ひなければ發達しないでしまふ。 事までも てとがない を耳 めさうでない。 でバケッを充たしてやれば、それで満足するであらうと考へて居る。 成 められず、靴もはかれないと云ふ有樣であつたさらである。故に可愛い可愛いと云つて、大人が何 小供の 無意 まだ~~偉大な事である。然らばその小供の偉大な目的とは何であるか。モンテッソリ女史は、 には、 母 長 から見ると、小供の望むところは砂利でバケッを充たすことに過ぎない。 に滿足して、大人しく家に歸るであらうと思ひの外、ワット一聲高く泣き出した。 0 發 11 発達であ も入れないで、 識 奴隷にさせて居つた為に、 ケッ 乳母の横暴と無法に對する憤怒の表情がありしくと見られたと。これは 的 時から家人に可愛がられて、林檎や梨子は家人に 爲である。 而立の齢を過ぎて、まだ林檎や梨子をむかれない人が な目的は、 を砂 る。 乳母は重ねてもう遊びを止めて家に歸りませらと、切りに云ふけれども、小供はそ 嘗て進化論者 利 で一ばいにして、それを小供と一所に乳母車に載せて引き出した。然るに小供 又た南北戦争時代の 依然として餘念なく遊んで居る。そこで乳母は一策を考へて、自ら手を下し 彼自身の成長發達であると云つて居る。生物なる人間に大切な事は、全くて ラマルクは、Use, or lose と云つた。用ひよ然らざれば失はん。全 婦人は 無 南方の米國 違である。 論 0 事 男子までも、一人で着物も着られなければ、 人は、 小供の望むところはそんなつまらない事 S 何事にでも奴隷を使 てばか ある。これは彼が、裕 而して自分は、 h 貰つて、嘗て自分で 故 つて、 何故で 12 彼 小 は 自分の 福な家に 而してその 供 あ 予の 12 小 非 供 むいた 身邊の 帯も でな 常 は 生れ 砂

緇

見ると、犬の頸のところの毛が大變抜けて居る。狼は怪しんでこれはどうした事かと尋ねると、犬は 痩せても山で自由にして居る方が可い。犬君失禮だが、僕は主取りは見合せると云つて、 てれは主取りの身の悲しさ、毎日鎖で繋がれて居る為に、から頸のところの毛が抜けたのだと云ふ。 精神、 痕 首相 ある。 やらに命じたのである。人間は有史以來、 つて行つたと。 0) だと思ふ。デモクラスイの真髓は粹然鍾まつてこの一句の中にありと云 優ると云つた。人民が自ら行ふ政治は謂はゆる仁政に優ると云ふ意味である。 い。これ people を高調した文句に出會ふが、真のデモクラスイはからでなければならない。 此處に達して居る。 はこれを聞 狼 の如く解放と民治を求めなければならない。然らざれば吾々は決して大國民となることが能さな 何故に今まで我國民に紹介されなかつたかを怪しむ。 カ 彼の强き體力、彼の鋭き爪牙が臺なしになるからである。故に彼の本能 メル・バ 流石に英國 グデモ いて、 ンナーマンは、管て Self-government is better than good government, 即ち自治 實に面白い話でないか。狼が主取りを見合せたのは、仁政の下に居つては、 クラス [人は立憲政治の先輩であつて、彼等のデモクラスイは此處に達して居る。彼等の前 それでは主取りは考へ物である。僕は毎日旨い物を食つて繋がれて居るよりは、 現大統領キルソン氏の著書などを見ると、 イの真髓である。 此處に達しないデモクラスイは神髓を逸したデモクラス この狼の如く自由と解放を求めて來た。吾々は今後も、 叉た嬉しい事には米國 しばく for the people よりも by the ひたい。 予は が彼にこれを見合せる 人のデ 予は これは非常. 2 モ 再 偉大な言葉 クラスイも 彼 び 0 山 良治 な名言 猛き に歸 イで

105

でなければならない理由は、今云つたやらに、然らざれば人民の能力や技倆が發達することが for the people と云ふ事でない、鰤じて by the people と云ふ事である。而して政治 尤も吾々は民治を行へば、仁政の下に居るよりも却て苦しいやうなことが 吾は飽くまでもこの仁政主義を排してデモクラスイの真髓なる民治主義を提唱しなければならな て、戰後憲法を制定したのは何故であるか。敢て云ふが、東洋の仁政主義は亡國主義である。故に吾 下にをさまりかへつて居つた支那人の今日の有樣を見よ。又た露西亞が日露戰爭に於ける敗戰に鑑み ム世話焼き政治は矢張惡政であると鰤言するに躊躇しない。 荷もデモクラスイを説いて、此處に到ら 併しそんな事 3 用である。早速僕について來給へと云ふ。其處で狼は喜びながら犬について歩き出した。併し後から 大雪で食物がなくて、 ふ話 25 からである。 居るよりはよし苦 は 不 カジ 40 Æ からと思ふ。何處ぞ好い所があつたら世話をして吳れないかと云ふと、犬はそれはたやすい御 あ クラスイ論は幼稚なデモクラスイ論である。 る世 る。 ン 一話焼き政治に滿足するやうな國民は、 は何であるか。吾々の能力の萎縮に比べれば、 或る大雪の く太つた犬に會つた。彼はオイ犬公、君は馬鹿に景氣が好ささらでないか。僕は 人間 が有史以來、 しくとも、 この通り瘦せ衰へて居る。就いては僕も君のやらに主取りをして、旨い食物に 日 狼 が食物に困つて、 斷じて民治を行はなければならない。 鹿が谿流を慕ふやうに、 山から里に下つて來た。而して其處此 その前途に滅亡があるのみである。嘗て『仁政』の 吾々から見れば、デモクラスイの真 解放を求めて來たのはこの爲である。 そんな事 佛蘭 は 何でもな 時には 西の或 る詩 Vo ある か 吾 カ> 人の 處を歩 羽 R 一體は決 知れ 詩 は仁 the 能さな から云 な て居る の下 ての

释迦

孔子、基督、

マホメツト其他一宗一教

ふ現世に無用の言語文字は之な辭書から抹殺

ふ私の主張に同意せざるを得ないと信ずる。 眼あるものは宗教は何の用ぞ、宗教無用とい



茅原華山氏の

宗教一切無用

概は下の如くである。「日本人には少なくと も其知識階級に於ては―既成宗教を信ずるも りである。我々に於ては既成の宗教なるもの 信仰信念は自己の信仰信念として發表すべき のがない。之れありと言へば多くは方便であ ものであって、之を既成の宗教に託するは過 は何の生命もなければ何の權威もない。私は と云ふ論文が洪水以後に出て居た。其の梗 若くは生活の爲めである。思ふに自己の れ、既成宗教を一掃すると共に、「宗教」と云

三月の思想界

ある。氏は文明を分ちて、智的文明、道義文 的精神」は近ごろ興味を有つて讀んだ一つで 子木氏に御夢れしたい。既に真は智的文明 して了ひたい。鹿子木員信氏の「文明と哲學 ないではありませわか。然らば宗教文明は偽 れば、宗教文明は依つて以て自ら立つ根據が 善は道義文明、美は美的文明と爲ったものな ども聞いて詳ならざるは宗教文明である。鹿 と悪と醜とか一とした文明ではありますまい 美的文明、宗教文明の四と爲した。けれ

活から云へば我々は最後まで彼等を喰物に 落つる者ではない。然しながら自我中心の生 の開祖を偉人として尊敬するに於ては人後に し、牛肉、鳥肉、人参、大根、天麩羅、蕎麥、澤庵 と斷言したい。然らば宗教文明は最早過去の が人間の迷信を根據として變質し來つたもの か。私は宗教文明を以て道義文明、英雄生活

强弱あるは、他の肉かして我れの肉と化する 雑食動物である。人間に肉の强弱あり、靈の 教であれ基督教であれ同々教であれ儒教であ より外に生活の意義はない。私は是を以て佛 靈を實現する、言ひ換ゆれば自我を實現する る。完全に徹底的に自己の肉を實現し自己の を喰ふが如くに喰つて行かればなられ。人は 消化機關の强弱其主一の原因な爲すものであ るではないか。愛とか慈悲とか仁とかいふも 文明ではないか。我々は道義文明あれば足り 然るに英雄の道義文明の宣傳、道義生活の模 畢竟するに道義文明、道義生活のものである。 て、歐洲中世の暗黑文明となつた。ルーテル 觀と爲つたいめに、僞、惡、醜の文明となつ 範が固定し、それが偶像と爲り殿堂と爲り寺 であった。故に私は斷乎としていふ、荷も史 の宗教改革なるものは質は宗教破壞の第一聲

云ふ事 予は聊 きか 漢 行 由 あ するの 政治學者と一所になつて、デモクラスイの思想の普及に資せんと思ふ者である。 あ ム事でなくて の議 るに ひ得 る事 る。 般人民 吾 は、 デ な心 反して理想論である。 の政治は弱 か慰むところがある。兎に角子は政治學者の説に反對する者でない。反對するどころか、却て 6 Æ から云 でない。 でなくて 論である るほどに進步して居な 時代に 0 クラス 理 あ 利 三學者 人 益幸 by the people 英國 イの for the people と云ふ方面を力説すべきか、ly the people と云ふ方面を力説すべ 由 時代には須らくデモクラスイの から仕方がない。併し實際論も必要であるが、理想論も必要である。 況んや吉野博士の から見れば、 by the people いる者 一福の る事である。 が印 いぢめの政治である。貧民細民いぢめの政治である。上に厚く下に薄き政治 為でなければならないと云ふのを聞く毎に、 度に 併してれは、政治に關しても政治學に關しても、少しの と云ふ事であると云ふ議論は、吉野博士の デ v デ と云ふ事 モク 否なデモクラスイを採用すべきかすべからざるか其の モクラスイの一番 からであらう。 説に反對するのでは ラ ス イを許さない であ る。併し 故に予のデ for the people と云ふ方面を力説しなければならな 大切な綱領 のは、 更にない。 から云つても、 £ 即 ッ は、以上述べたやうに、for the people と ラ 度人の政治思想がまだデ 予は吉野博士 ス 身慄 イ 予は決 0 真髓 議 ひするほど嬉しく思ふ。我 論 カゴ は して政治 力が 時弊に鑑 for 敢然として、 この點に於いて 知 事が已に 學者の 識 モ みた實際 people 4 ラ 說 ない門外 時代に 政治 ス に反 イを 6 國 6

によりて支配される。一方にありて物質界又

吾の道義的宗教をも抹殺せんとする企である。は自然、一方にありては精神界叉は超自然を、ルギーが形體を變じて、物となり心となるの 像となり 信ずる。茅原氏以て如何と爲す。早稻田講演香人の主張及び傳道に同意せざるを得ないと 交するの土である。故に評論子は斷乎として になるであらう。 は伽藍となり、氏が一切は偽、悪、醜の輻湊 を脱線したものとなり、氏の肉體は一個の偶 であり。 、ふ。荷も倫理史眼のあるものは道徳即宗教 氏の人と爲りは明かに是れ現代の文明 宗教の最も人生に必要であるといふ 氏の書齋は殿堂となり、氏の妻子 。然るに氏は幸にして道義に とが二個の相異なれる領域であるとするのは に吾人の認識に入るばかりで、その初始と終 せざる所である。それで有機世界と無機世界 區別することは、到底現今の自然科學の認可 れで動物と植物の間には絶對の區別なく、植 局とは吾人の知ることが出來ぬのである。そ が知れて、その普遍的發育進機の一部が直接 間違つた考で、共に同一轍のものであること 物と鑛物の間にも絶對の差別の無いことが明 確になって來た。精神現象も同様であって、 最下等の動物にも精神現象の原始的のものは で、その本體には變りはないと云ふのである。

富士川游氏の

科學的宗教

る。輓近の科學の知識に據ると、 宙觀で、全く吾人々類の理性が批判的經驗に 及び科學の基礎の上に建てられたる純粹の字 あつた。「ヘッケル先生の一元論は經驗、理性 るべきもので、この大字宙は固定的の自然律 よりて得たる科學的認識に依據せるものであ と題した論文があつた。氏の要旨は斯うで での一個の全體、 即ち大宇宙として認めら 全字宙は統 ち汎神論の考に歸着するのである。そして物 居る。故に其の本體は全く同一のものであつ 質と精神とは統一的のものであるが、實際に 泰斗で一元論の唱道者たるオストワルド先生 むることは差支がない。此點に於ては化學の ても、形態と統合との差異で、之を二様に認 於て物質と精神とは形態を異にして對立して

麗ありと言はなければならぬやうになる。 即 の原始的よりも一層單一なるものは植物にも 存在して居る。更に推して言ふと、精神現象 鑛物にも存在する。 即ち字笛のもの總べて心 この一元論は ラヴォアジェーの物質不滅の原 に少しも區別なしないで一物として見る。こ 緒にして、物も心も、有機體も無機體も其間 則とマイエルの勢力恆存の説との二學説と一 これは我が佛教に言ふ所の佛、殊に私等が奉 て見ると、宇宙の萬物はすべて心靈を有する の一元論の見地からして宗教上の問題を考へ 神 めのが、ヘッケル先生が「神性」とするやうな ものであるとする以上、宇宙の本體、即ちへッ 事である。斯うして一元論は超自然の神を認 るべきものな認めて神とすることは合理的 ケル先生が云はるし「ズブスタンツ」の じて居る所の親鸞聖人の阿彌陀佛と同じもの であると私は信ずる。 即ち萬有神 (Allgott) な認むるのである。

の「エネルギー」説が徹底して居る。即ちエネ と云ふことは認むるが「ズアスタンツ」の版存 身體を形造つて居る單細胞と複細胞 らの。宇宙は全體として不滅であるから、 先生は色々と論じた末に個人的の靈魂の不死 魂も從つて不滅であると説いて居る。 を認むる以上は靈魂の不滅を云はなければな それから靈魂不滅のことである。 ヘッケル 教)と理想的宗教とがある。理想的宗教は歴 する所であらう。然るに宗教も亦たこれと同 上の普遍的規範であることは、茅原氏の肯定 驗的に作用的に進化的に純化された自我實現 理想的道徳は歴史的道徳に胚胎して、常に實 なることも氏は推量されるであらう。そして 史的道德(既成道德)と理想的道德の二種類に る。そこで道徳を倫理學史上から見れば、歴 して行くものであることも知つて居る人であ は時代思潮によつて理想的に解釋されて進步 云ふことは知つて居る人である。そして道徳 て居る人である。道徳が人生に必要であると なのである。宗教には歴史的宗教(既成宗 評論子が思ふに、茅原氏は道徳だけは認め 現されて居ない形である。

進化的に純化された自我實現上の生活なので 史的宗教に胚胎して、常に實驗的に作用的に は根本に於て同一なのである。眞善美を渾一 ある。そこで道徳上の理想と宗教上の理想と

て道徳的信念がありとすれば、そこに即ち宗 は宗教に異なる道徳があるならば、それは既 の言を以て言へば、自我が完全に徹底的に實 言すれば大悟徹底して居ない證據である。氏 は自己を知らない即ち自覺して居ない――換 教的生活である。氏がこれを無用呼ばりする 教的信念が存し、氏の生活は是れ立派なる宗 道徳的信念のない人となる。若し茅原氏にし ば、茅原氏は道義を無視する人であり、且つ ざるを得ないのである。若し信じないとすれ 如上の意義に於ける宗教ならば茅原氏は信ぜ に道徳では無く亦た宗教ではない。それ故、 は一心同體である。若し道徳に異なる宗教又

も定めし垂涎せざるを得ないであらう。この 自我の新鮮なる血液靈能として活きて居るの である。此の聰明なる生き方は茅原氏に於て 雑食して、自家の内央から之ねを消化して 換質して、氏の言ふ如く彼等一切な喰物とし、 る者ではない。その既成宗教を理想的宗教に 骨董的な既成宗教を其儘に傳統的に信じて居 要するに我々は茅原氏が悪んで居る過去の

宗教的信念なのである。そこで道徳と宗教と ものでなければならない。既成的傳習的なる 宗教として奉ずることは出來ない。それで將 今や道徳と云ひ宗教と云ふからには理想的の で、将來の文明に對する解剖としては蛇足で ある。何となれば評論子が前に言った如く、 して居る所であらう。けれども之れは過去の 中にもある。就中自由基督教徒はこの生き方 來に於ける道德又は宗教は必ず至善に於て合 道徳及び宗教は決して直ちに眞個の道徳及び 文明に於ける解剖としてのみ價値を有するの であつて、文明の根本的概念に於ては固 な四つの觀念に分けたのは抽象上の便宜から を生命として宣傳して居る。鹿子木氏が文明 一個の具體的文明であることは氏の夙に承知

明は智的文明、美的文明と相提携して居るの 文明は決して茅原氏が杞憂するが如き、偶像 文明と宗教的文明とは將來の文明に於ては で、その圏外に脱線する憂がない。 と關係してこれを内含する點に於て、宗教文 ず至善に對する道義的文明である。 殿堂、伽藍又は僞、悪、醜の文明ではない。必 心同體になって行くのである。將來に於ける したものでなければならぬ。そこで道義的

對する信念が即ち道德的信念であり、同時に

生き方は基督教徒の中にもあり、又佛教徒の

であり、同時に宗教なのである。この理想に の内面的生活に於て統一實現することが道德 して善な中編とした理想を神佛として、自我

と社會我と世界根底とのその主觀客觀を自我

によればさうであつた。親鸞に於ても同様で ある。然るに富士川氏には斯の如き説明が無 n る一神教のみを完全なる宗教と爲さればなら 原始佛教に於ける釋迦の宗教觀も涅槃教

的根底に存する人道の上に至善心唯一神とす

となり、軍に宇宙の本體論に走り「ズブスタン いから、氏の汎神論は從つて道徳とは没交渉 ツ」を高調するに至つたので、釋迦の根本思 不親切なものである。(以上評論子)

小川未明氏の「歔欹」

の意識現象を作為する自然力に於ける勢力の 人の謂ゆる「靈魂不滅」の言葉ではなく、個人 同じ宿命の下に棲息する人間が、 こともなく、真に他を愛し得た經驗も身に味 また對社會の關係に於ては「真に愛せられた らない重大なこと柄な、忘れてせぢにゐるの ではないか」と考へ、また「真に幸福な生活 此世に生れて來て、何か真になさなくてはな 活の不安死の不安が斷えない。彼は「自分が つたことがない」のである。それ故に「なぜ ならないが」と考へてゐるのである。そして か味ふこともなくして、一生を終らなくては 慰め幸福を分ち不幸を共にすることが出來な そこには一人の男がゐる。彼には片時も生 互に孤獨を

| 選魂不滅論などは 過去の 宗教の議論で あつ 想とは頗る縁因の遠いものになつた。而して

ヘッケルなどが「ズアスタンツ」の恒存則

學、心理學)上から見て居ない。それで科學 學上から見たいけであつて、精神科學へ倫理 恒存を意味するのである。 全體の上から統 要するに富士川氏の科學的宗教觀は自然科 一的に研究批判した宗教觀で しれない。而しこの現在の自分はやがて死ん いのだらう」と自ら懐疑を抱いてゐる。 るかもしれない。自分は其の一人であるかも

て居るから、この點に於て我々は人生の世界 けであつて、頗る片手落なる宗教觀であり、 があり、其の説明たるや、極めて杜撰であり、 ものでは無く、まだし、研究の多大なる餘地 到底科學的宗教などと標題を打つべき性質の この世界に歸て來ることがない! 往の事質であり、また未來現在の事質である。 それなのに人々は何故氣が狂はないか」此死 そこにあつたのではない」生も死も全く偶然 愛する弟の上にも死がやつて來た。しかも死 の不安は自分の生命ばかりに就ていはない。 てゐて、弟が先に死わるといふ必然の理由が の來るのは全く偶然であった。「自分が生き

幸福の人と不幸の人と同棲してゐる此社會 的で惡强い者が弱者を壓倒して行く此社會 得ないで、生を終らなくてはならない」と云 ふことであつた。而し彼はまた「冷酷で利己 であつたのである。 斯く彼の心を脅すものは「真の生活をなし

て破れる日を心に期してゐた」のである。其 た呪てゐる。 而し彼とても「此憂愁と単調とが豁然とし

で、勢力恒存の上から云ふ靈魂の不滅は過去 靈魂不滅を否とすれば其れで徹底して居るの であつた。科學的一元論の見地から個人格の から强ひて説明を試みんとしたのは無用の企

はない。單に科學の或る一面から瞥見した。 でしまふのだ。死! 永遠に二たびこの姿で、生な過したのを感じて「自分獨りの意志で大 彼はまた考へる。「人生は永遠のものであ ふのであつたか。愛の神秘であつたか。 日の後に何か來るのであつたか。 主義を説き空想に憬れ、呪ひと叫びの裡に半 公が「真に自ら幸福な生活を味はうともせず、 かすることであるか。 最後に至て此作の主人 魔力であったか。 或は生命がけの眞實の仕事 何か彼た救

ても、生死の現象は同じ現象の兩極端である。科學者一同の泰ずる所であるから、富士川氏

「ズブスタンツ」の提唱だけで以て人に宗教心

境に達する迄努力するを要する。 如來の懷に入り之れと合致して、佛凡一體の 我等は大宇宙の小部分である。それで我々は 性を有して居る。たい偉人の度に於て異る。 如來も吾々人間も同一の本體である。凡て佛 外ならずして、超自然の神を認めぬのは我が 支は無い。其神はヘッケル先生などの言ふ所 が、宗教は神を拵へる術であると云つても差 來の趣旨も同樣で、原始佛教で個人の精神の 佛教の 長所である。 親鸞聖人の 如來が彼の の「ズブスタンツ」の根本、即ち宇宙の本體に かである。 元來宗發には 種々の 定義がある 不滅を説がなかつたことは阿含經を見れば明 ふことは學術上これを認める。我が佛教の本 さう云ふやうに説いて來れば靈魂の不滅と云 「ズブスタンツ」の根本を指すことは明かで、 より又如何なる要求に本いて、件の如果を奉 美を内含する理想を説いて居ない。隨つて天 教的意識は 動物植物鑛物に 存する ものでな があり、富士川氏の説明の不完全にして不徹 氏とは其の宗教觀の内容に於て頗る異ろもの と結んで居る。けれども氏は如何なる理由に 存する規範的法則を説いて居ない。即ち眞善 く、人間の意識にのみ存する人本主義的事質 底なることを非とする者である。先づ氏は宗 も評論子も同意見である。けれども評論子は 小我を以て此の大我に合致することを要する 心靈を說き、「ズブスタンツ」を如來となし、 道に存する人道なるものな説いて居ない。然 を前提に置いて居ない。次に氏は自然律に嚴 るに氏は個人の精神現象の原始的なる宇宙の

る。その一元論たる點又は超自然を非とする 氏の宗教觀とは頗る近似した意見を有して居 う。評論子も亦た倫理學上の一科學者として を代表して居る 宗教觀と見て 差支が この富士川氏の宗教觀は我が日本の科學者 無から 教であり、又宗教となり得るかた氏は明言し て居ない。宗教の宗教たる本質を明かにする ッ」の研究や講釋だけでは何うして其れが宗 質を説いて居ない。換言すれば「ズブスタン 説明して居ない。即ち人間の宗教的要求の本 じ阿彌陀佛を信ずるに至るかの道程を明かに こと莫く、衆の善を奉行ひて、自ら其の意を 神佛の性を有して居るから、 して居るが爲めに、萬有は悉く至善の性即ち 神的である。けれども此の至善即ち神佛に關 れが爲めである。而して至善は自然律に根底 淨うするは是れ諸佛の教なり。」 とあるは此

訊

物質不滅の原則

論に於ては全く同感である。又「エネルギー」には、「ズブスタンツ」以外に倘は大なる要

して之れが宗教的意識上の經驗的事質として

此の點に於て汎

現はれるものは、常に人類の意識のみに限つ

勢力恒存の説も元より 件の存することを氏は忘却し遺漏して居る。

らして善を中樞として真美を内含する意識の 合一の生活を生ずるのである。換言すれば宗 世界根底と自我との接觸的要求によつて神人 所産であって、其れが神佛となって現はれ、 験的事質である。そして其れは價値の本質が れは個人の宗教的意識の結果として生ずる經 して價格上の理想となって現はれて來る。 内面的認識に於ける宇宙の本體は世界根底 る。もと物心は一面の二相であるが、自我の 陷つて居る。これは 氏の 無前提の 結果であ ある。富士川氏は此の點に於て大なる誤解に を起させることが出來ると思ふは一の迷信で

ある。故に至善に對する欣求渴仰が宗教の宗 教は人道を理想として自我を實現する道德で

教たる本義である。涅槃經に「諸の惡を作す

Ŧ 婦 릷

現代の女學生と如何に見る

題は多くあるが、中にも我國においては男女道德を根本的に革新しなけれ ら見たいと思ったのである。樹は其實に依て知らる。わが女子教育が如何 られる、思想家教育家の高見な誌上に紹介して眞摯なる研究の資に供した 實際問題が議せられ又幾多の婦人雜誌も出るやうだが、一箇の見識を以て ばならないとは、目に私共の主唱した所で、此根底から爾餘一切の徳目 れた諸氏に對しては深く感謝の意を表しておく。 此問題をかいげた微意に外ならぬ。御多忙中幸に本誌のため御回答を下さ なるものを作りついあるかは、其作物を見れば早分りがする。之れ本誌が いと思ふのである。本號に發表した問題は現代の女子教育を逆に其結果が 廣く女子問題に健全な意見を有し其教育なり開發に興味と熱心を有して居 益、此問題を論究せんとするものであるが、單に同人の意見のみでなく、 本誌は勿論此問題に関する私共の意見も既に發表して來又將來においても 健全なる男女道徳を皷吹するものに至つては、眞に寥々曉星も啻ならない。 生れ出づるとも考へられるのである。近來我思想界や文壇では類りと此の 代に おいて深き研究と考察の下に新に建設されなければならの道

島 米 峰

高

舊思想を罵ることは知れども新思想を消化 る程の力なきこと

の日~~の風次第、 せず、せいん、雑誌の拔き讀み位にてそ さりとて當時流行の自覺とやらな自覺も 女大學はもとより讀みたることもなし。 明日は向ふの岸に吹

> 質なる志望あるもの極めて少きこと。 經濟的にも精神的にも獨立せむと欲する堅

女らしきは卑屈にして語るに足らず、少し しきことの く話のわかるものはお轉婆にして品行も悪 にて、金持からお嫁の口でもかしれば二 勢することなくして安逸なる生活をなさ つ返事で變節改論を辭せざるなり。 むことを思ひ、戀の神聖は口さきばかり

し居たれども、もうそろし、イヤになり 過渡時代の産物として大抵は大目に見逃

服装華かに容貎美しきが多くなりたること 身の丈高く足大きくなりたること。 ふ名を以て良家の子女に歡迎せらる。 る上に、女優藝者の化粧法が美容術とい 上流奢侈の悪風が中流以下にも波及した

西 川文子

母と並び行く娘の母より低きは甚だ稀な

り。たい褒むべきはこの一事のみ。

學生であつた頃は、自分より一二年も上級 自分が少さかつた為めでしょうか、私が女

膽に生活な營んで、生活の味ひな真に味はつ て熱心に告白するのである。 て見なければならない」と或一人の青年の前

姿は眼に映る以外にない」と感じて「自己の 見上げて立つたのを思ふと、最後に「人生の てまた弟の死を悲しむで、風の吹く青い空を 見た末急に躍りかいる有様な心に描き、そし 絲を這て獲物に近より、暫く蝶の悶搔くのを て、はからずも蜘蛛の網に翅を囚へられると、 る大きな蝶が 野原の方に 飛んで 行かうとし の枝と擦れ交つて、痛々しさうに傷ついてゐ な錢形の綠葉の澤山付てゐる小枝が、他の木 葉の付いてゐる 枝と枝の 重なり合つた 様子 まれてゐる常盤木の細かな針のやうに尖つた 上げてゐるのな聞きながら、その闇の中に揉 主人公が夏のあらしの夜、「風が頻りに黑い い叙述に比べて、此結論は餘りに薄弱である。 力によって自らの幸福を獲得しなければなら 小蟹程もある大きな蜘蛛が悠々として銀色の る有様」などを空想し、または赤い斑點のあ やっまた柔らかで鮮かな日光に透き徹るやう 森を襲つて、枝が撓んで息苦しさうな叫びた い」といふのは、どうも創作の論理を誤て 前の生の懐疑を説く場合の複雑にして力强 奪はれて、自分も人も愛情で結び合ひ溶け合 ことを忘れてはねまいか。不安のために心を も、理屈でこそあの様なことが云へたかもし かない 人生と云ふ 感じである。 作から受ける感じはやはり暗い救ひのないは か。そのために最後に解決はあるにしても、 はうとして、一緒になり無れてゐる有樣に眼 それを無くしようとする心持の含まれてゐる れてはゐまいか。不安と云ふ心持の內に最早 不安をのみ知て、それのために戦ふことを忘 を感謝することを忘れてはゐまいか。生活の らうか。作者は死の不安を述べて、現在の生 のとして尊ぶ心持の内に解決は無かつたであ 即ち生を感謝しそれを愛し慈しみ、無上のも ない殺されないといふことな感謝する心持、 か。或はまた、生きてゐると云ふこと、唯死 そ、作者の求むべき解決は無かつたであらう あげてゐる森の中にこそ、即ち自然の內にこ も、風の吹く青い空や、風に息苦しい叫びを 意識はされなかつたことであらう。それより れないけれども、これに伴ふ感情はハツキリ

て來た自分の懷疑の思想を、最後に一片の理 ぬはしないかと思はれる。歌ふ様にして述べ を冥てねはしないか。

不安の内に光明と愛の 芽のあることを忘れてはぬないか。〈坪田生〉

兒童心

作者に於て

屈で以て 解決をつけょうと してぬは しない

月曜學校協會發行 著

五錢) 册に纒めて出版したのである。〈定價二十 したのな、此度日本日曜學校協會より一小 末より八月末迄前後十四囘に亙つて連載 會師範科の爲め講じ た兒童心理學の 筋書 校教師講習會の席上に於て、近くは大阪教 か、基督教世界社の依頼を受けて昨年五月 本書は著者が曾て大阪に於ける日曜學

すに對る批評になるからして、兹では重複 る者である。私は人生の目的に發する平和 ものである。鹿子木氏と私とは正反對の の道徳に関しては本認の本欄に於いて説 て平和の道徳を説き、永遠の平和を主張 戦争を論じて戦争の道徳を説き、永遠の戦 いて置いた。其れが直ちに鹿子木氏の本書 を主張し、私は倫理學の上がら戦争を論じ 説に立つて居る。鹿子木氏は哲學の上から 本書は氏が講演を集めて小册子とし 永遠の戦 文 館 發 一文 館 發 〈四六版價○・五

もはれ

女學校とは人間を拵

へるところ

でなく、

お

入りの仕度を授けてゐるところ

やうに

おもはれます。

尊大と偽善とについ

動、其言語 あたりへは、

、其趣味、

何づれから見ても、

明治

到底侵入六ヶ敷様子です。其學 純大阪式の中心地たる船場

鈴 木 蘢 듬

なっぱいい は、實經驗を受容するに足る充分なる用意が個答をする事が出來ません。現代の女學生に 確たる見解 ので、 自分自身の問題として考へて見た經驗が のが一番の缺點のやうに思はれます。 又貴問に對して更に考へて見たいと思 甚だ漠然とした考しか持つて居りま 自分の得た材料が極めて少く、 を與へるに足りないので、 何とも 何等 打

古田 絃一郎

3000 りかされるやうで不快なことが度々ありま 批評的に見るごとに、 心配を知ら とはまるでちがつた明るい世界、 そんな聯想を呼び起されます。 私 黄金、高等官、學士、勤め人、軍人、虚祭心、 M 女學生 電車 的世界に住むでる人々のやうにお といふものを殆んど知りません の中や往來や集會の場などで 御返事を申上る資格はあり 何だか良妻賢母の押賣 私たちの世界 食かことの ina それは東京あたりからの輸入か逆輸入かでせ 之れとても、

は自分の學校から何々伯爵夫人や大將夫人のもの尊さを破壞されて居る。こかは神のでとく尊い、けれども今や父母や教育家の手にとく尊い。けれども今や父母や教育家の手にといる。 商品たらこめんがために女學校に入れ、 學生は氣の毒です。 まれた多くの頑迷な教育家に育まれてゐる女 父母は自分の娘を高價 教師

中村長之助

卒業後は鼓と裁縫を仕込みたし。日く料理と 日く目下某處の別邸に在りて琴を習ふ。日く 盛花に堪能なり、某富豪、某華族の姻戚なり。 の希望とが連載せられました。日く茶の湯、 ピヤノを習はせたし。先づコンナ鹽梅です。 家の令孃の學藝の紹介と、之れに對する父兄 「娘が卒業したら」といふ二題目の下に所謂良 過日中當地(大阪)某新聞紙上に「深窓の

田 次 郎

ませ

20

以前の御寮さん式です。現代の女學生は見え

眞面目に考へるやうになり、 又質力を養はんことを努むるやうになったと 思ひます。 して、一層進歩せる地位に居らんことを望み、 般に思想進み、 生活といふことにつきて 現狀に滿足でず

石 坂 養 灭

んでまねりません。私は今人民の生活をどう 全く田舎にくすぶつて百姓相手の仕事をして で 中などで 澤山の女學生達を 見か てねるのです。 にかしなければなら ゐますから、 は考へて見たこともありましたが 私も三四年前學生でゐた頃には毎日 お問合はせのやうな問題につい 私の心には一向女學生の姿は とい ふ問題にぶつかつ け この ました てチット 電 頃 0 -115

を取出して考へるには、 は若い婦人の中から つまりませんから、 痛切に感じて居ない問題について述べても 特別に女學生といふも 返答はやめます。 餘り此 処種の 問題に徹 たい私

人は大きな娘さんと云ふよりは、お嫁さんででもある様に思はれましたが、現代の女學生でもある様に思はれましたが、現代の女學生でもある様に思はれましたが、現代の女學生でもある様に思はれましたが、現代の女學生者でから生活問題を考へさせられる為めでしまうか。私達の時分の様に陽氣でない様に見えます。そて氣の毒に思ひます。

野口精子

۲ たつしまし ながら、 取つて口にする (i) 電が 思はい。 それでゐて別に惜しかつた殘念であつた 海 の珍味をならべた美しい御膳 に對し端なく心に浮んだ事をおこが 到て手近なおつけもので御飯を濟 やかに坐つてゐる娘の姿、これた 餘りといへば餘りに慾がなさ過 申上げて見ます。 櫨 利と自由と多少の慾を有し 0 前にた

をに見いつて笑はれるかも知れませれ…。 単生代も異例はあると思ひますが…。それから のいもう少し深い六ケ敷くいへば、無形の問題に す。も興味を持つて行かれぬものか、現代女學生 でしぬ。かうしてあの人も大分頭が古くなつたと のののののののののののでのは、他でならのでした。 ののののののののののでは、無形の問題に ないてならのか、現代女學生

三輪田元道

層精神的修養に重きを置くべしと信ず。 現代の女學生は一般に精神的修養を缺如す のが如し。而して唯淺薄なる末技を心得、女子の能事終れりとするが如き傾きあり。又好 たて新しがりたる文字などか用ふるも異に深 みのある自變あるにあらず、故に今後は層一

宮田修

現代の女學生と云ふばかりではその範圍が 女學生と云ふばかりではその範圍が 女學生と云ふばかりではその範別 い。高明代の女學生と云ふばかりではその範圍が 女學生と云ふばかりではその範圍が 女學生と云ふばかりではその範圍が 女學生

15

りの不完全な粗食的教育にもなほ「がき」の樣

ふ事にまでは至らずして終はる。

楽葉ばか

してありついた或る時代の女學生とは何か

の感覚で、これを食べて血を清め肉を肥すとて知つてゐるといつた樣な極めて通りすがりぎる。つまりこんな御馳走はいつでもながめ

いつの時 うつ 思ふのである。 信じて居る。 望するものである。 て、よき意味に於ける女性を代表さ ところでは甚だ不満足のものである。 道をつけてゆく學生が幾人あらう。 育を受けた婦人の問 6.3 人格者としての意氣ある婦人の輩出な切 真の自覺の上に立つて悠々前途 然るに此要求に應ずる婦人は果 言ひ換へれば真の自尊心の 而して是等は から現はれて 來るものと その高等教 4 0 の選野に **†**: F

大住 舜

女學の家が、 3 閑潰し道具位のもの、 い。高等女學校などは嫁入口が出來るまでの ザなのであらうが、教育家の無方針が 教育家が、無我夢中で玩弄して居るのが今のるのか何方だか自分ながら能く分つて居らぬ 妄見を啓いて臭れる位の女學生が出れ 學問」をさせて居るのか、「教育」をして居 學問した婦人も出ない。 かに極る譯也。 從つて教育さ と私 れた婦人も出るけれ は思ふ。 勿論素質もヤク 但し此

るのめでたしく 女鈍女が出るでわらう。誠にめでたい事でわ 數は、高等女學校卒業程度の女子を要求して

小林彦五郎

ずる。 も修むれば發展することを證明して居ると信 活、敏捷、社交的になつたところがある。學問 る。先づ身體が發達改善しついある。次に快 一)舊來の女子に比して 長所を 有して居

ない。所謂虚禁心の可なり强いのも其處に基 後の理想など形づくるといふ如し。次に昔の んやりとして居たのが、今は十六七歳で結婚 ひ昔の人は二十歳になっても結婚の事などぼ 例へば高等女學校を本るともう研學の心を失 の女子にしてかいる弊か打破せば女子の将來 は多望である。 くかと信ず。要するに過渡時代の弊で、現代 女子ほど克己がなく、西洋婦人ほど自重心が CIDしかし短所を言ふと、早熟の弊がある。

安部 磯雄

現代の女學校は、單に社會の要求に應ずる じます。どうぞ主としてあなた方の御意見を

る様に思はれる。中等階級に於ける男子の多

居るから、今日の女子教育は高等女學校を以 様になることを希望する。 いふことを目的として、女子教育の行はれる 教育不振の大原因である。私は個性の發展と て最高標準と心得て居るらしい。これが女子

有り餘つて居るのですから。直言なお赦し下

さいまし

與謝野晶子

ことを主なる目的として、女子を教育して居 御發表になることを願ひます。案山子のやう は非常に編輯者達の眼前主義、賣文主義、思想 はなりません。私達はあなた方より教へて戴 に世俗的に知名な人々の名前を列べる雑誌は 私達よりも進んだ御意見や御研究やが無くて 誌をお出しになる以上、先づあなた方に一步 商人主義を不愉快に存じます。あなた方が雑 ズムの行為を屢模做せられるのでせうか。私 る立派な雑誌がなぜ斯様な問題を出して葉書 ての回答を多數の人に求める様なジャアナリ くべき位置にあるものだと思つて居ります。 あなた方に其れだけの真剣さと御自負とが無 いなら名響ある六合雑誌を演するものだと存 拜復 貴誌の如き名譽の歴史をお持ちにな

めて 0女0底 行く方がいしと思ひます。以上。 のです 200 その通有性から立論して定

れます。 の方が、『女らしい女』に近いと私には信じら 女よりは、 る場合においても、 自分の「たましひ」に生きてゐる女 自分の「力」に生きてゐる

大 糦 廣

して参りました事は申す迄もない事で御座い が何座います。この盆栽的傾向は個人 ン女學生が以前よりはずつと向上進步 尚ほこれを歐米の女學生などに比較 婦人の自然を妨げますのみならず 料理などに馬鹿に力を入れて居るが、間違つ た話である。裁縫や料理などは、頭さへ拵

73

いては國家のためまた將來の國民のために

てやれば譯もなくできる事である。然るに我

だまされ易い、運命の悪戯に飜弄され易い愚

る鈍妻鈍母が出るでわらう。

した。故にこれからます~~男子の寄生蟲な

先頃もつ

向上を計らなくてはならない様に存じます。 の光を發輝させるに足る教養を施し今一層の へます。それ故ます~~奮つて自發の力生命

村

彼等は頭のない怪物である。幽靈には足のののペッドののでとスターののの思いなが、 悪口を云へば、 攘の差がある。彼等の智力は、 らないことは、話の外である。併し彼等をこ 少し上にあるに過ぎない。男學生の智力など 云ふが、これに比べると、我國の女學生は霄 書物や雑誌を見ても分る。實際彼等の譯の分 一所に受けて、しばく、彼等の鼻を明かすと 主義の教育である。我國の女學校は、裁縫や の巻なる、良妻賢母主義の教育にある。我輩 んな怪物にした罪は、 彼等が如何に から見れば、 がないさうだが、我國の女學生には頭がない。 米國の女學生は、大學教育さへも男學生と 良妻賢母主義の教育は怪物製造 頭がないかは、 我國の女子教育者の虎 彼等の愛讀する 小供のそれの へて、 は、 育された我國の女學生は、 ら、成るたけ奇麗にして登校しろなどと云ふ 故に彼等は、おしやれなどにばかり忙がし 學校があるさうだが、これで生徒の頭が出來 學校な、嫁に行くまでの待合所と心得て居る。 るから、 いで却て鈍妻鈍母になる。 と質科的に、學科の時間を減じて裁縫や料理 良妻賢母主義が足らないと考へて、 たら奇蹟である。然るに文部省は、これでも 四五年になれば、嫁を探しに來る人がある などの時間を増しても可いと云ふ御布令を出 教科書が已に小供だましのやうなるに 全校が良妻賢母主義の氣分で漲つて居 學科は生徒の身に入らない。

進步を害しますので誠に心痛すべき事がと考 てから、 國の女學校は、生徒にこの肝 やることを忘れて居るか 5 心な頭を拵へて

めざる者の却て與へらるしは、人生のアイ 學校で習つた事は兎に角能きるが 彼等は學校を出

習はなかつた事は何も能きないと云ふやうな ニイであつて、折角良妻賢母主義に從つて教 有様である。それ求むる者は與へられず、求 良妻賢母にならな

體我國の女學校

て、絶えず各自に二人に對する二個の氣苦勞 と嫁と子息との間には三角形の關係を作為し

同室で警むの奇現象を呈した。その結果は男 爲めに男女の性的生活と親子の家族生活とは 隨つて夫婦と親子との人倫的關係に於て道德 活が不和合に陥り、ここに姑嫁の争を生じ、 女の性的生活が不徹底となり、親子の家族生 る關係との不調和に悩み、子息は母に對する 關係と妻に對する關係との不調和に惱むこと

地位の問題を生じた。

代の道學者は支那の風俗に循ひ、親子を先に ては春秋時代からあつたのであるが、徳川時 に仕へて孝道を致すことが第一義となり、子 德的規範を支配することになつた。それで嫁 云ふ道德的規範は配偶者に對する愛と云ふ道 して夫婦を後にした。それで親に對する孝と は良人を愛することは第二義として、 た。それで嫁は如何なる新知識を有して居て 母を愛して 孝道を 悲すことが 息は妻を愛することは第二義として先づ其の 和と統 何に妻が是であつて母が非である場合でも、 も舊知識の姑に從はりばならぬし、子息は如 要を非として母を是としなければ、一家の平 一が出來ない羽目に陷つた。隨つて姑 第一義になつ 先づ姑

此の問題は支那に於 との關係が正三角形叉は二等邊三角形の態度 になつた。その平和なる場合は姑と嫁と子息 三角形の性 息とは三角形の家族制度な組織することが原 因である。 徳の下に忍耐盲從して犠牲となり、 嫁が各の非生物學的に虚偽の愛を出して偽道 それで姑嫁の問題を解決するには、

一和に惱み、嫁は姑に對する關係と良人に對す ことになり、親子の關係が第一義となり夫婦

の關係が第二義となり、某間に舅姉と嫁と子

7, 上よりして平和なる場合は極めて尠なく、一 たび風雲起れば幾多の悲劇惨狀を呈するので 質として三邊の不同なる場合が最も多いが如 を取つて居る場合のみであるが、 姑と嫁と子息との關係は其の制度の本質

に三角的生活して行くか、八二つ否らざれば男

女大學式

その間に不調和と煩悶を深くして來た。これ の調和はますーー六敷くなつて來ては層一層 隨ひ、新舊思想の隔絶の大なるに隨ひ、姑嫁 ある。殊に最近の如く、女子教育の盛なるに ら道徳的生活に於て夫婦の愛が第一義となり て別居するかの二に歸するのである。それか 親子の孝が第二義となり、 女の性的生活と親子の家族的生活とを獨立し に從ひ、干息は妻を愛して然る後に父母を愛

親子の關係を後と爲し、夫婦の愛を第一義と 二つある。一は道徳上夫婦の關係を先となし は何の爲めであるかと云ふに、其の原内には 全然獨立せしめて、決して三角形の制度など 為し親子の關係を第二義と爲し、其の關係を

を取るべきで無い人生の真相を没却したこと ら、親が隱居して老耄した後のことである。 息が家長權者である場合に限るのであるか 親として尊敬すれば、同居であつても妨 隱居以前に於ては親が家長權者であるから、 衝突は生じない。けれども唯た此の場合は子 し、嫁は良人を愛して然る後に舅姑を良人の 子夫婦は営然の事由として其の配下に属して

子夫婦とが同居することになれば、舅が家長 が原因である。二は一家長權の下に親夫婦と 姑嫁の問題を生ずる。「老いては子に從へ」と 制度の性質として、親が隱居して家長權を喪 云ふ老人訓は隱居して家長權を喪失した者に 對する道徳であるが、孝を第一義とする家族

嫁に對する關係と于息に對する關係との不調 を生じ煩悶を有することになった。姑は常に 權者であれば子息は父母に從ひ嫁は舅姑に從 ひ、子夫婦は常に親夫婦の支配下に生活する

舅姑は嫁又は子息

姑嫁問題

る道徳 親子の關 係に生ず

たが、就中貝原益軒の妻東軒の著女大學など 惨なる出來事が類出することになった。當時 類りに妥協的教訓を設けて兩者の義務を律し の道學者はこれに對して諸種の方策を講じ、 間柄は犬猿も啻ならわものと爲り、幾多の悲 を生じ、雨者の間に争闘の端を開き、姑嫁の が次第に行はれ、こへに姑嫁同居の家族制度 に至つて、女が男の家に嫁入する支那の風智 たからである。然るに戦國時代から徳川時代 家に居り、男の方で女の家へ通ふ制度であつ った。何となれば昔は結婚しても女は生れた しこの問題は平安朝時代や室町時代には無か 對する新道德上の知識の無いことである。蓋 ばれた。現代の女學生の一缺點は、この問題に が其の模範的教訓にされた。其教訓の要旨に 和田岬沖の悲劇以來、姑嫁問題が喧しく叫 己が生みの子と同一に可愛いのである。子に 完全に成長した二十歳や三十歳になる他人の 原則の上に創設されなければなられ。然るに 對する慈愛の道德的規範は正にこの生物學的

教訓が誤つて居ると同時に社會制度に根本的 缺陷の存することに歸した。 さなければならぬ。自分は道徳の新なる研究 的缺陷の存する爲めか、其の一又は兩者に歸 者として其の専攻の結果によれば、女大學の 解答が過つて居る爲めか、社會の制度に根本 られるのは抑も何の爲めであるか。女大學の 猿犬の間柄であり、多々益々衝突悲劇の演ぜ の今日に至るまで、姑嫁の間柄は依然として けれども此の本が讀まれた元禄年間より大正

する自意識と二は自分の手で撫育したことに に誤つて居た。子として愛することの出來る 西を辨ぜの頃から己が膝の上で撫育すれば、 原因する。それで他人の子であつてもまだ東 生物學的原因は、一は自分が生んだことに對 でない者を子として愛せと教へたことは絶對 である。生物學上の知識より見れば、己が子 先づ前者の方から考察して行けば下の如く に創設されなければならい。然るに成人の後 る。親に對する孝道はこの生物學的原則の上 の甚だしいものであり、 直ちに姑を目して真の親と爲し、これに朝三 に他家に入り、嫁になった一事件からして、 暮四、孝養三昧な盡さんとすることは不合理

とであり、また姑に嫁を愛すべしと云ふ道德 ちた時から自分を救つて育て、臭れた人に對 のである。それで赤の他人であつても生れ落 と撫育したこと、に對する自意識上に生ずる 樣である。親に對する愛は自分を生んだこと であつた。又これは子の立場から推しても同 的規範を設けることは没分曉の甚だしいもの 同一に愛さんとすることは絶對に不合理のこ しては真の親に準じてこれを愛し慕ふのであ る。これは 總ての生物に 共通なる 現象であ

稽の至りである。 二一社會制度の根本的

實に偽善極まり、

や衝立な隔て、無起するとになった。其れが 社會は親子同居であり、 次に後者を考察するに、徳川時代より我が 一の屋根の下に棲むことなり、 親夫婦と子夫婦とは 一枚の唐紙

姑嫁の間は無事に治まる」と云ふのであった。 姑を己が親の如くに愛して其家憲に従へば、 よれば「姑は嫁を己が子の如くに愛し、嫁は

った事件だけで以て、直ちに己が生みの子と

娘を己が子息に配して、之れと同居するに至

を待つて居なければならぬことになり、矢張

つた時は夫たる者が解決しなければならわ。

れは畢竟するに人格的個人主義に基く戀愛と

題を未崩に解決せんとせば、嫁がざるを以つ になる。それで私は吾々が目下緊急の問題と て本體とし、必ず先づ一男一女は兩本位に於 姑の鬼に二十年間いびられるとな前以つて覺 養はれて行かうなどと思つたら、因果覿面に に遺られ、その家の先祖重代の財産によつて し、陰陽四本の腕か縒にかけて生活して行け て人格的個人主義に從ひ、戀愛によつて結婚 悟しなければならない。男子も亦た此の姑嫁 ばならない。今日の日本社會に於て男女が自 結婚して、且つ親から經濟的に獨立しなけれ を以つて本旨と爲し、一意專心戀愛によつて だ蟲のよい話であり、舊道徳に養はれて居る て別居するから生活費を出せなどと逼るは甚 由意志で戀愛して置いて、然る後に親に向つ 親達は一齊に頑然として應じないのが自明の 事を未萌に禦がんとすれば、嫁を迎へざる 若し家庭主義に循び猫の子な遺られる様

る。殊に女子が配偶者の舅の社會的地位や財 毎に其の不心得を詰らざるを得ない。 に逼りついある無數の女子の存在を見聞する みながら空間に悶々し、 巻に出入し、妾を置き、己れは徽毒淋病に惱 産などか狙らつて嫁いだ結果、良人は花柳の 攻撃されて四面楚歌の程に立つ、生命の旦夕 姑や小姑からは包圍

五 姑嫁問題に對する

ことである。若し應ずる親があつたならば家 斷乎として反對して居る以上は、經濟的に無 る識者階級の親である。然るに一般の親達が 族主義を脱して個人主義の戀愛を肯定して居 能力なる盲目的戀愛者流は其の親達の死ぬの 長伊賀駒吉郎氏の姑嫁論から調べて行かう。 て居たと云ふ大阪市立夕陽丘高等女學校の校 氏は婦人問題の識者であることは世の定評あ る所であるが、目下口を噤んで談じないと云 情すべき境遇であつた。一旦家庭に風波の起 智的の女であつた。そしてその縁先は隨分同 ふので其の眞意な窺ふに苦しむが、某紙に寄 せた氏の斷片によれば、「彼の女は孤立的理 (一)先づ和田岬沖に投身した女子の通學し 子息は姑嫁問題の解決に當つて來たのである 嫁は猿犬の間柄である。そして伊賀氏の言に が、未だに成功した験は無く、依然として姑 は、「時代思潮の或物に觸れた」とあるが、そ

私は一言にして躓ずる。女子は先づ姑嫁の問 リ二十年の後でなければ家庭は持てないこと しても人格的戀愛と經濟的獨立とが吾人の人 生に最大の要件であることな感ずるのであ 然るに彼の女の夫は之れを解決し得ることは 人達の同情を喚んだが、これは時代思潮の或 物に觸れた證據である。それで其の善後策 六ヶ敷い人であつた。今度の事件は世の若 は、枯木に花を吹かせる藝當に外ならない は老人修養の機關がない。老人修養會が必要 老人の修養が最も急務であると思ふ。日本に 者がもつと修養を爲すことが勿論であるが 隨分六ヶ敷いことであると思ふ。それで若 引き出して 新知識を 吹き込まんずる 企など 識を携げて來た嫁に調和させる爲めに、 誤解である。姑に關する修養論などは徳川時 てある」とあった。けれども之れは甚だしい 做すことは大なる誤解である。徳川時代より 叉子息を一家に於ける姑嫁問題の解決者に見 時の時代でも此の論によつては效果が無かつ 代から絶えず叫ばれて來たものであるが、 た。又そんな方法によつて今日此の問題の解 決が出來ると思ふは淺慮である。新文明 知

求むる類である。 到底 出來ない のである。 此の屋根の下に於 限りは、姑嫁の争を社會的に根絶することが 婦と親夫婦とが同一の屋根の下に棲んで居る 縦令家長

機が子にある場合であっても、子夫 って子を支配左右して行くのである。それで とする舊道學者の研究は思はざるの甚だしい て、尙ほも修養を説き、姑嫁の争闘を禦がん

の意見の下に訓練改造して己が意の儘に仕立 **僭越な振舞をさせない事になる。飽く迄も姑** 中は看守監督を嚴重にして荷且にも嫁になど 至極危險な譚である。そこで親の眼玉の黑い 直ちに先祖重代の財産を宋配させ切り盛りさ ない。其の迎へたる目的は家系を繼ぐための せることは以ての外の儀であるのみならず、 便宜上の島としていある。斯かる者に對して、嫁になど舞ひ込むは不見識の至りであつて、 當家の家憲の下に於ては見習の一女中に過ぎ 這入つて來た他人である。この新參者はなほ

者であつて、舟を山に送り、木に縁つて魚を は先づ二十歳前後と假定しても今後二十年の て其處に精神的家庭が生じ、假令物質的に であれば子に従ふどころでは無く、親櫨かも 人に家長櫨が下り、一家の天下を掌中に握る などと云ふ 不吉不祥なる ものは無い のであ 失した後であつても、しやんしくして居る親 家族制度の道德觀によれば、嫁は他家から は姑と云ふ家族制度の女權者に隸屬したので 白髪を戴いても尚は朝夕下婢として姑に偽善 であり、夫は主人として妻は主婦として兩本 至って會心の笑を漏らして得意時代に入るの し辛棒せると教へ、漸く舅姑の葬式を出すに 庭に関して高等教育を受けて居る女學生諸君 の愛を献げて奉侍しなければなられ。今日家 時代を夢想することになり、實家の親達は暫 である。併し舅姑が中々死に難い時は、嫁は 事情がある。嫁と云ふ名詞を附せられた以上 得たる新知識を實施應用することが出來ない 後にならなければ一家の主婦として其の事び

11 男女道德の知識が肝要

意志に發する戀愛によつて結婚する人格的個 男女道徳に於ては一男一女が自己の個人的 ば、その末路は必ず淪落の女である。それで

にも拘はらず、スキートボームな謳ひながら に知識の自由を有するのである。然るに其れ あるから、姑に許された範圍内で以つて僅か るのである。隨つて嫁は舅姑の死んで已が良 人主義に立脚するのであるから、姑嫁の問題 自殺したりするなどは淺間しき次第である。 軈て姑に苛められ始めて泣いたり離縁したり 實行することが出來る。假令親達が反對して 位の下に同権の下に成立して居るのであるか 親に對する孝道は其の餘力の間に行ふのであ れか神とも佛とも信じて行くのであるから、 針に出でないで親の命令や媒酌人の世話 的奮闘によつて生活して行く。然るに此の方 生活費の支出を肯んじなくとも、二人は經濟 て學び修めたる高等知識上の理想的主婦權を ら、女子は意中の男子と共鳴すれば直ちに以 る。そして夫婦の愛のあるところが即ち家庭 あつても、男女道徳に関して無學文盲であれ る。夫婦の愛を道徳の大根本として奉じ、こ て妻になつたりして、後で姑嫁の實際問題の よりも母を主とする家族主義の男子に欺 庵の厄介になどなつて嫁に行つたり、或は妻 **疊一枚の間借りであつても、其所に自己の豫** 徳上の知識が無い結果である。主婦道に於て 解決に困じて、煩悶懊悩するとは全く男女道 は家政學者であり、スキートホームの學者で は

代の新しい思想といふものかよく考へて、無 に達はぬと 言つて 感謝の涙を 落させるやう 暗に頑張るやうなことをせず嫁をして真の母 私の如く現代の新道徳に立脚する者から見れ の目出度い道學者の見方そのましてあって、 が伏屋も樂しいのである」。これは徳川時代 れば姑嫁は一緒に居るな願ふやうになり、賤 に、互に精神の工風を凝らして修養に努力す 三輪田氏は日本倫理史上の事質な曲解して居 無姑嫁の家族制度と徳川時代に於ける姑嫁同 ば、根本的に誤つて居る議論である。第一に 無い家族制度であり、獨り後者のみ弊害のあ 二種ある。平安朝時代及び其前後に存したる る。姑嫁の觀念より日本の家族制度を見れば 嫁の同居は同時に隱居の弊害を伴ふものであ 婦とが別居するは家族主義の發達である。姑 格的個人主義の長所と妙合して親夫婦と子夫 は反つて日本爾來の家族主義に復し、更に人 る家族制度である。それで姑嫁同居の家族制 居の家族制度とである。そして前者は弊害の 經濟の基礎たるものである。高效を仰ぐ。 八一婦及び經濟的獨立の精神を旺にして國民 經濟學上大に嫌ふ所であり、別居は一

して居た。これは三輪田氏と同論に屬する説 が必要である」と云つて、姑嫁の修養論や爲 るに姑嫁の圓滿の極度は他人の缺點を捜すに 急ならずして寛恕の精神を以て相對すること であって、徳川時代の姑嫁論を繼承したに過

度を廢しても無姑嫁の家族主義に歸すること るべきである。世間の非難を恐れて無理に一 りで無いから此の儘にして置く。 と子夫婦は別々に住むがよい。若し父親が死 とは悪いと思ふ。經濟さへ許すならば親夫婦 ある。高教を仰ぐ。 んで居る場合には一所に居るのが正當で、そ て居た。「二夫婦一所に住んで居るといふこ うな大悲惨や横濱の女優が姑を傷けたと云ふ ٧` ١-所に居るとすると今度の神戸の投身事件のや 夫たるべきものは斷乎として別居の方針を採 しうまくゆかない時は何うするかと云ふに、 が如き 大不幸事が 出來上らないとも 限らな れで国満にさへゆけば此上のことはない。然 (七)安部磯雄氏は同紙に於て下の如く言つ 此の意見は最も正確であつて批評の限

ぎない。これも今の時勢には繰の遠い考方で、ことである」と言つて居る。これは宋明時代 (六)下田次郎氏は三月の婦人公論で「要す 牲となつて盡すのが女の務である。克己忍耐 を以て姑をよく理解した上、五年十年と長 月日の中には真心も認められ、双方の仲が睦 來ないのである。現代の女子に向つて無批判 時代の子たる吾人はそんな古代人の修養は出 舊道德は十年も前から睡棄して、人格的 ある。また姑は嫁を我が子として思へば好 る。それは悪い考である。精神修養が大切 しくなる。そして 別居説は よくない 徳觀である。私共は倫理學上より既にこんな 素養のない教育家の存在することを私は女學 的に斯んな骨董的道德を教へて居る倫理學的 主義の新道徳を標榜して居るのであるから、 生の爲めに悲しむのである。 の女四書や徳川時代の女大學の上から來た道 事であ

他家の人となった以上は其の家のため一生機 (八)又同紙上に於て嘉悦孝子氏は、「嫁は するに
斯うした問題を
起したのも夫たる人が し合かことを望む。經濟が許せば別居する方 調和させることは夫の責任であると思ふ。要 從ひ、 悪いからである。そして姑嫁は何方もが忍耐 別居した積りで家族制度に從ひ、嫁は家風に が無難で善いと思ふ。それが出來ない場合は (九)同紙上に於て山脇房子氏は、 姑はあまり嫁に干渉しない方が好い」 「姑嫁を

字宙間に無いのである。天下の青年男女は此 ある。其れ以外に「或る物」などと云ふものは 經濟的獨立に立脚する結婚思潮及び別居論で り談じて居ない。私は常に一夫一婦の人格的 二世紀ばかり 遅れて 居ると見て 差支なから 戀愛によつて 結婚の新典型を 示して 置いた

つて頗る怪しいものになつた。 て置かなかつたか。氏の婦人大觀はこりに至 道徳論か彼の女の通學時代に修身科で講義し 者たる伊賀氏はなぜ此の時代思潮に基く男女 等の思潮には悉く賛成である。婦人問題の學

主義と家族主義との二個の結婚制度を許すも て居るが、實際は二元論である。人格的個人 って居た。氏の言は大體に於て私の主張に似 行き方をしなければなられことになる」と言 者は根本的に徹底的に人格主義に從つて行く 制結婚に大に改良を要する。差向き嫁たらん 、又は無我讓遜克己の修養を爲して舊式の 要するにこの悲劇を避けようとすれば家族 (二)中島德藏氏は二月の丁酉倫理に於て、

る。結婚の際に於て婿の人物及び好の人物及 は早計である。これは人物に關する問題であ 調和を以て同居の制度に起因すると斷ずる (三)澤柳政太郎氏は婦女新聞に「姑嫁の不 が、中島氏には斯うした研究がない。 方では研究し教育し、他方では忍耐し我慢し 經濟上の關係があるから、今日のところ、 の制度は今後漸次に改つて行くと思ふ。た

に因襲的に同居心肯定するなどは極めて淺薄 な見方である。それから姑嫁の問題を人物に た。これは思はざるの甚しい論である。第一 は必ずしも問題とするに足らぬ」と言つて居 び家風を慎重に調査してかられば姑嫁の關係 と言つて居る。氏の同居を否とする點は頗る て徐ろに昨代の進展を待たなければならん」

養を爲して行くなどは人生には餘計な心配で を出し合って、無我謙遜克己などの傷善的修 一般の世人は必ずしも女大學式の人物ではな 關する問題としてあるが、それは誤解である。 い。姑と嫁とが同室に居て傷れる親子の人情 して居れと云ふのは頗る矛盾した不徹底な考 正しい。けれども一方で高等教育を爲せと云 る機會が無いと申さればならぬ。同校の生 の研究し教育した家政學を主婦として實行す 結婚してから今後二十年もたっなければ、其 諸君はこの講義では滿足が出來るでせうか。 ではないでせうか。それでは現代の女學生が つて居ながら他方では嫁に行つて忍耐し我慢

如何 (五)三輪田元道氏は同紙に於て、「別居が

は何んなものであるかな、中島氏は倫理上よ 徹底である。そして人格的個人主義上の結婚 道徳である。此の點に於て中島氏の意見は不 であり、人格的個人主義の歩み方のみが真の 基く舊式の行き方は今日に於ては已に不道徳 であつて、正反對の潮流である。家族主義に 然るに此の二者は新舊道徳の相違 想は徳川時代の道徳觀そのまってあつて、約 結婚の大要件であると心得て居る澤柳氏の思 に、姑の選擇にまで貴重の精神を勢するなど。何にするか。富の分配が個人的でない貧乏な に良人の 選擇にさへ 多大の努力を 要するの しい限りである。姑の人物を選擇することが は、蛇足甚だしいものであり、實に馬鹿々々 あり、新道徳上に於ては愚の骨頂である。殊 嫁は自分の努力によって姑をして慈悲の權化 日本國に於て姑嫁の別居は經濟上二倍の費を の觀音の如くに思はせる覺悟を持ち、始は時 要する。それで互に同情を以て讓り合つて、 若し真であるならば日本從來の家族主義を如

う。

(四)成瀬仁藏氏は同紙に於て、

「姑嫁同 居 それで評論子は屢ば言つたことである

あるから幾十倍にして返しても其れは聞える

だ關係が續いてゐるのな知ると再び訪れて 母初め親戚は私が女と切れない内は、決し くれなくなりました。風の便りに聞けば父 は卒業を目前に控へ、どうかかうか人間に て家に寄せないと言つてゐるさうです。私 うか第三者の見地から私に最後のメスを興 父母に對する孝の二道に迷つて居ます。ど 始終一貫して盡してくれた女への義理と、 なれようとしてゐるに際し、苦しい中から は三人兄弟のうちの唯一人の男です。今私 て下さい。一辰年の男一へ讀賣新聞ン 的價値が重く、親子の方が輕いのである。こ と雖も、眞人間になることを目的として居る 理學上の原則である。そこで此の倫理學上の の先後輕重の上に批判された道徳が、最近倫 鼠麻を絶つが如くに迷を消すことが出來る。 原則より件の男子の煩悶を解決すれば、快刀

と喜んでゐると母は義兄から女と手を切つ、が、親子と夫婦との道德的關係に於ては、夫、ものではなく、又受取るやうな不見識な女も

婦が先で親子が後である。即ち愛の方が道徳

無いであらう。また如何に淪落の巻に居る女

比較的真面目な誠の存する男子を捕へて生涯 殊勝な女であるならば、如何に遊野郎と雖 てゐると聞いて斯く心配し初めたので、ま

ら發した折衷的矛盾生活上の煩悶であって、 子の道徳的關係と夫婦の道徳的關係とな同一 に對する倫理上の知識が無い結果である。親 義の道徳と戀愛と云ふ人格的個人主義の道徳 ものである。これに迷ふは、孝と云ふ家族主 此の儘で行けば幾年たつても解決が出來ず、 終には心中するより外に妙案の無いものであ 地平線上に價値を定めて居る道德的意識が これは簡單な問題であつて迷ふに足らない に於ては大罪であり、人非人の行為である。 深くなつたものであるから、卒業と同時に件 ふからには――道徳上の夫婦關係は愈、益、 した學資であるならば、精神的血液の結晶で 此の場合には家族主義の道徳思想より其の學 の藝者を振り葉てると云ふことは男女道徳上 も出ようが、人格的個人主義上の戀愛より發 資に利子を附して辨濟すれば能いと云ふ意見

たりして兎にも角にも卒業し卒業させたと云 穴しょうと云ふ人格的道心より生じた間柄で 上の罪惡である。けれども二人の間に戀愛が の女子が藝者になつて居ること は男女道徳 先づ件の男子が花柳の巻に出入したこと、件 出來て、今後人間として互に復活して偕老同 あるならば ―― 且つ不見識ではあるが水商賣 から得た金錢を學資として、驚いだり驚がれ

歐洲婦人の新使命

立つべきである。親に對する孝はその後に行

ふべきである。(評論子)

業を行ふことが肝要である。隨つて件の男子

故に斯でる場合には法規に依つて斷然自由廢 を共にせんと圖ることは人生の本義である。

は件の女子を擁して家庭を持ち、以つて煙を

戦争を論じて、今後の國民は人道に向つて 爲である、 を忘れて、他の數多の注意に心を奪はれたが 誌によること多いのであるが、今回の如き戦 り導かれるのは其政府と其代表者や其新聞雜 の新使命について述べて云ふ、 の如くなるが、女史は更に現下に於ける婦人 覺めなければならわことを説いたことは既 争の勃發は實に國民自らが最も重要なるもの 丁抹の婦人思想家 エレン・カイ 女史が 戦争の原因と人道・ 其の最重要なるものとは何ぞ、戦 抑も人民の誤

子息は徳川時代より絶えず該問題の解決者に 能いが、まだ不徹底な考であるから姑嫁問題 と云つて、干渉すべからざることを力説して った方が面倒でない。そして成るべく子を煩 於ける一家の統一が出來るかが大に疑問であ して、人格的個人主義の別居論に屬した思想 夫婦とが無干渉であつて何うして家族主義に げて居るが、併し一家長權の下に親夫婦と子 無干渉主義は徳川時代の道徳にはないので明 れから經濟が許さない場合に於ける同居上の 夫の責任だなどと申す論は當つて居ない。そ は愈、益、加はるとも減ずる形勢が無いから、過ぎない。同居して居るは姑嫁の間の好意的 解決であつて失敗の歴史のみて綴られ、悲劇 當つて來たが、今日に至るまで依然として未 の解答にはなつて居ない。前にも言つた如く あつた。この論は嘉悦氏のよりは敷段出來が 治になつてからの發明であつて一の道理を告 て別居しても 勝手で 御座ると 云ふ結論にな 主義は既に家族主義の姑嫁同居論の精神を脱 到來しない事となり、隨つて竿頭一步を進め に別居であって、形式に於てのみ同居たるに る。それで此の親子の經濟上の獨立と無干渉 る姑嫁が同居を必要とする理由が何處よりも 契約に過ぎない。それでは經濟上の獨立者た 別々にすることは其の根本的精神に於ては既 い論であるけれども、斯うして經濟的生活を 嫁問題としては頗る新しい解答であり、面白 はさぬやう、世帯の持方が下手であらうが上 手であらうが構はない方が好い」。これは姑

斯う云つて居る。「私の考は先づ子息が嫁を (十)鳩山春子氏の議論は尙は一歩を進めて 徹底しない中途半端な議論である。〈一條生〉 であつて、鳩山氏の論は、惜しいことにはまだ

は全々財産を別々にして日々の會計も別に扱きに居してもほんの同居位の考で、干渉なしは皆な子供にゆづつて了ふけれども、財産はは皆な子供にゆづつて了ふけれども、財産はは皆な子供にゆづつなる。日本では親の財産は

矛盾生活の折衷的

暮から父に内密でいる~~心配してくれま ました。それが爲め女は他に住替へし、私 ありましたが、種々ごたと、の揚句、私は はいつそ一緒にしてやつた方がといふ者も 重れ人の日の端にも上るやうになつたので したが、若氣の至りとはいひ乍ら、今から 子さんとか云はれて、何不自由のない身で 私はおとなしくして居れば、若旦那とか息 したので、内心父母の心が柔いで來たもの した。一方母は私の辛抱を見てか、昨年の 學し、此三月には卒業する迄に漕ぎつけま で稼いだ毎月の扶助によつて、某學校に 生に住み込み、恥かしながら女の可弱い腕 になつてから一緒にならうと私は某家の書 は切ぱつまつて一時お互に別れ、先づ人間 無分別にも一昨年の春家を飛び出して了ひ 益、募つて行くばかりでした。親戚の中に ようとしましたが、溺れきつた二人の仲は 遂に父母の耳にも入り、幾度か仲を割かれ 五年前十ばかり年上の一人の藝者に馴染を 孝と義理との二道に迷ふ男子

124

」結婚 間 題

F 1 生

かもたせられ、常に御庇護御忠告を賜ふ事、 に於ける御論説の御主張にはいとい心の共鳴 の興味をもつて拜讀仕り居り候。 候。先生の御卓説は毎時六合雜誌上にて非常 同情厚き先生の御指導を仰ぎ度しと筆とり申 は存じながら、 なる指導者知己(失禮ながら)を得たる事を此 数年來それ等につきてなやみついある身に大 か覺え申候。 校に職を奉じ居り申候。(中略) 本縣女子師範學校卒業、只今市内の高等小學 六年五月十五日生のものにて、大正二年三月 上なくよろこばしく存居り候。 面織なきも 吾等同性に對して甚大の御同情 衷心のもだえ堪へがたく、御 のが先生へ直接の書面失禮と 私は明治二十 特に二月號 とも今より學に専らにして、一生なさいげて きもつとめて出席する様いたし居候。 に或は學術の爲めに努力せんかと存じ候。し 當初の目的に向つて、同性の為め社會の為め 進みて真の理想的家庭を構成せん事又自己の る生活なるべく、今日の時代に於ける否一步 良妻たり賢母たるは最もうろはひある意義あ 候。しかして一方に於ては家庭に入りさらに だけの才能と手腕のありやは甚だ疑問に御座 かし志の禁じがたきものありとも自己にそれ

對して吾等が生物の一として、此の國家社會 を得ざるは結婚問題に御座候。 自己の現在を忠實に眺めたる時淫着せざる さりながら自己の社會の一員として客觀的 自分は結婚に すべく候。真個の婦人問題の解決亦かいる中をも興ふるなれば、進んで結婚生活に入り申 望ましき事に御座候。 者に加ふるに前者(後者の中に前者は含まる) もし結婚生活が私に後

るな得ざる次第に御座候。文明の世に生れ、 其の惠澤を享受すべく、究學の心去りがたく 別あれば、吾等は宇宙の法則通り結婚すべき 宇宙を發達さすべく、吾等の後繼者を殘す事 讀書の時間なきを歎じ居り申候。講演會の如 候。讀書は自分の最も好むところ、 f らずやと存ぜられ候。しかしてその為に性の 吾等の義務と存じ、 のと 存じ候。 さて自己の實際問題としては甚だ迷はざ 理論上しかく確信いたし候 人生の歸趣もこ、にあ 充分なる にかいはるべくと存候。従來の結婚法に於けき結婚の成立するや否やは其の配偶者の人選り生るいかと存候。しかして自分のいふ如 るが如きとみくぢ的の方法は如何にしても危 ず候。得られずば獨身生活と申候も煮えきら 件と存候。或は遂に得られざるやもはかられ 御座候。さらばとてそな求むるには如何にす 険の如く思はれ、 ざる二股主義は何となく落ちつ べきかの方条は有せず候。最も困難なる大事 躊躇せざるを得ざる次第に

むところに御座候。雨親も見姊も有之候。 瞑想し、秋の夕河畔に獨りたいずむは最も好 り申候。狐獨の淋しみに堪えず候。 れか決定を要する事と存候 物足らざる感いたし候。真に我ものたるも 友も恩師も少からず候。さりながらそれ等も 喧噪なるは最もいむところにて、 た只一人望み申候。親友は一二あれども もうれひも悲しみも楽しみも二つのなに分ち しむる大なるものな欲し申候。 自己を全く包み、しかも其の中に自己を生か のに御座なく候。自己を全部さいげ得ず候 て共に協力人生をなふるものな求めてやまず 頃日來私は甚だしき寂寞の感におそはれ居 心のよろこび 獨り暗室に さりとて

かず候。いづ

おそく

たに相違ない、然るに過去數十年の間に漸く 個人の間に、存在してぬたとすれば、政府が に、斯の如き信念と力とにして立派に國民の 云ふまでもなく皆靈の力の愛現である、思ふ 偏見なき判斷力、此等が即ち其れであつて、 も猶は其愛すべきものを愛するの念、少しも して尊敬を拂ふの念、如何なる困難に際して はんことを強ひらるいに方りても循真理に對 發達し來つた國民と國民との友情は一朝にし 彼等を驅つて戦はしめんとしても無效であつ 形に現はさうとしない、質にや婦人の多数は よ確實になるのである。 上及精神上の無限の損失が之に伴ふべきは愈 て望むが如き勝利が得られたとしても、物質 ければ長きに從つて、真に期待されたる種類 つあるのである、然も戦争が繼續すること長 男子の意見を彼等自らの意見としつト『光祭 の勝利の實現は愈る困難になり、そして果し ある勝利」の爲めに戦を續けんことを望みつ

平和論は婦人から

て交戦國民の間に失はれてしまつて、人道の

交戦國の多數婦人●

戦國の少數の婦人團體は非愛國者と呼ばれつ るか、成程中立國の婦人達は平和を祈り、交 民自らに對し、而して又未來の人類に對して 彼等は戰爭が實際に於ては人民自らに對し國 る現はれたる態度を示すに至らないが何故に 争に反對せんとする一致的行動に出でんとす らなければなられ、彼等にして能く其の利害 **愛生は再び遠き將來のことしなって了った。** 赤裸々の罪惡であることを絶叫しないのであ 而して今日交戦諸國間の婦人の多數は、戦 外得られざることが一般に理解せられ、新 の恢復は、かの萬國婦人平和會議の唱道せる 態に陷りついある男子連も漸く覺醒し、歐洲 講ずるに於ては、遂には戦争によりて催眠状 得失を理解し、其力に應ずべき有ゆる方法を が如き直截的にして高貴なる平和によりての 和論の提唱は實に男子からでなく婦人から起 て、有力なる一政治家の云つてゐるが如く平 歐洲の婦人の頃に立つべきは此時であつ

なかつた、けれども彼等の殆んど凡ては日々りて復讐の念と戦争の記憶とが全然除去せら

る時代の若き人々に對しては、婦人の力によ

つも猶は平和に對する所藤を行ふことを忘れ

平和に對する希望を抱きながら、未だ其れた が生れ出づることしなり、其處に新なる人道 れ、兹に新なる縁を以て蔽はれた新なる世界 が發達すること、なるであらうと。(萬朝報

学 一 学 西 禪 師

丙午出版社發行

ある。 に於ては最も充分なる研究を要する者で であつて、彼の根本的宗教觀を研究した 其関歴や行状に就いて講説したものいみ 從事した開祖であるので、我國の禪宗史 法系を受け、歸來謂ゆる臨濟禪の黃龍 ある。(定價金壹圓) 狀を知らんとする者には頗る便利な本で であるから、 のであるが、著者は過去に行はれて居る ものがない。本書も亦た其謗を免れない を傳へ、顯密二教をも加へて禪の弘布に **処西書類を讀破して一單行本に纏めたの** 榮酉は遠く支那に渡り黃龍慧南禪師 爾來、榮西に關する著書としては **榮西に就いて其閱歷人物行**

にて候。「尋りよ然らば與へられん」と申候。 骸あるべし。愛は卒に誠意の迸る努力の總果 之れを船にて渡り、大山は之を馬にて越すの 理の自然にて候也。其の前路に横はる大川は 類を以て集まるの一法あるのみに候。是れ物 只だ人格を携げて異性の生活圏内に闖入し、 男子は女子に近づくべし。其の近づくの法は て業と致居候間、淺學ながら修めたる結果だ の先生又は指導者たることは出來申さず、單 配偶者選擇の極意また斯に御座候。小生は人 一箇の同行に候へ共、年來發倫の專攻を以 ります。 んで自己の真質に殉せられんことを祈ってを たとひ、一人の知己がなくとも、終りまで忍 には同感の土が多くなること、信じますが、 が加へらるべきものと信じてなります、天下 其の十字架によってのみ人世に新たなる恩寵 のである。かくの如きは選ばれたる人にして 新たなる創造はこの世に持ち來らさるべきも す、自己の眞實に殉する人によつてのみ神の 質を如何ともすることが出來わのでございま 甲府一讀者

西淵峻先生

럠

けは 御参考までに 幾重にも 御報告申上へく

先は管見以上の如し。〈評論子〉

『真實に殉せよ

新しき宗教

御多忙のところ恐れ入り候へども

りましたならば、其の禍は如何許りなもので 字架を買はればなりますまい、そして若し底 實を愛する心から我らは限りなくあらゆる十 ありませうか、幻た見て歡喜するよりは眞實 し人知れず同情の涙にむせんで居ります、真 一面接して苦しむ方が如何に好しいことであ . 幾分の不眞實を包んで僞れる幸福の中にを 六合雜誌三月號「人間性に立ち返れ」を拜見 に身を委れ居る學者これあり候や、學者的態 現今日本に於て新宗教建設のため、或は宗教 度ならず宗教家的態度をもつて真にあらゆる 界に一つの新しき歩みを増さんがために研究 ながら御芳名御漏し下され度願ひ上げ候。 せる人これあり候や。此の二種類の人につき 宗教を統一しうべしと信ずる生命の實驗を有 相當すべき學者宗教家これあり候はい御手數

所謂新宗教の何たるかわかりかれますが

って、我國にも其宣教師が二名許り來て居り 歴史的宗教を超越して、其普遍的真理を唱導 りませう。外國にはバハイズムといふ数もあ 氏自ら豫言者と稱する宮崎虎之助氏などであ るものは、記者の見る所では道會の松村介石 宣傳せんとする即ち宗教家的態度をとつて居 の如きは矢張り超宗派的に宗教生活 思はれます。又京都の西田天香氏伊藤證信氏 て且宗教肯定なる態度は此部に屬する特色と た主眼としてる様ですけれど、 超宗派的にし さる、歸一協會も我國民思想の統一といふと 説かれしとあります。姚崎博士等に依て計營 ます。 れて居る方の様です。本誌に寄稿される方々 です。學者的態度でかっる研究を今現になし るもの時々ありますけれど顧るに足らない 「靜觀と思想」を見られる)其他新宗教を唱ふ の中にも其系統に屬し乃至傾向のあるとは御 かざれど、井上哲次郎博士など甞て理想教を ついあり且其實驗を有する人は寡聞にして聞 へバハイズムについては岡田哲蔵氏 を實現さ

者

氣付きでせう。(A生)

るか、破門も孤獨も貧困も死も恥辱も其の屋

が此の欲求何によつて満足し得べく候

り候べきか。從來の因襲的道德に循ひ、普通し得べきか。更に吾が將來は如何なる途をと に過ぎ行かば更に迷ひは無之候も、内心の叫 貧にも恐れず、 間界に得らるべく候や。 若しそを 得たらむ び如何ともいたし難く候。〈下略〉 居り候も)と孤獨なる生活中に新生命を見出 善者なる教師生活へ教職としての神聖は認め n a せる生活たらしめ得べきか。職業的にして傷 しても如何にすれば現在なして充實せる徹底 神に求むべきか、 如何に多くの敵ありとも、 獨り往き得ざる弱者にて候か。それに 自己の所信に向うて進み得べ 佛に往かんか、はた人 洗ふが如き赤 は半世紀も一世紀も要するならんと被存候。 世上實際の自然的要求の結果として生ずるも 此の男女交際機關の整備は識者の社會運動 其間に於ける青年男女否な現下の青年男女の 後――現在の日本社會に存する諸種の會合、 たる後 格的戀愛(結婚)に關して學術上の修養を爲し 處分法に就きては卑見下の如くに候。先づ人 のに候故、 し、女子の會する所には男子も會するやうに ることに候。 團體、又は家庭に知己を求めて勉めて出入す 努め、出來得るだけ多くの異性を實見する機 ――換言すれば性の倫理學を修めたる 其の完全なる組織を見る迄には尚 男子の 會する所には 女子も會

會を作ることに候。自己に内心の叫び大なれ

に貴下の御考察の通りに候。扨て其の配偶者 に此の男女交際機關と云ふ最も重大にして尊 合する戀愛の唯一方法あるのみと存候。然る 論によれば、男女交際の機關を通じて理解結 の選擇法に關しては、小生の男女道徳論の結 質問の儀は仔細に拜承仕候。 御論旨の程は筆路暢達して洵 健實なる御 歩月外に出づるの時を惜しむと爲さば、 候べし。 何處の地に於てか我が本願を容る、者無しと はんで此の心をもて心とせば、天下は廣し、 を辭せざれども、配偶者の選擇の爲めには一 るに衣食の爲めには星を戴いて東奔西走する ばこそ一人國境を越えても巡禮を致すにて候 せん哉。夫れ食事と性事とは人生の二大事に 而して食事は性事の手段に候也。然 畢竟

貴なる社會制度は、現在の日本社會に於ては

するに是れ己が根本の生命を殺す者に候。か

最も幼稚にして不完全極まることに御座候。 7 會に在りては之れを搜索するに多大の努力を に生か事けたる青年男女は先づ須らく此の多 に現はれ給ふべしと存候。只だ現在の日本社 包み得る第一人は必ず救世主として我 利用して異性を物色致候はい、 日本の男女交際社會と雖も、 を駈けて晝夜飛行に候。 能に忠實ならんが爲めには、 の鳥獸すら其の優良なる異性 大なる努力に向つて猛進すべきことが向上 要する 一事に 御座候。然れども 此の 努力を 一路にして、實に背水の陣と存候。 一方あるのみに候間、現下の不幸なる過渡期 敢てせざれば歸するところ獨身生活に陷るの 如何に不完全なる現 あらゆる機関 百里を飛び千里 を得て進 自己を完全に 化の が眼 本

見すと雖も、男女の禮節の下に相談合する機 其の社交の方法と存候。女子は男子に近づき は化學作用に候。故に男女は相近づく 空閨の孤獨者に候。元と社會の本體は共生に 會及び 場所を 得ざれば、遂に生涯を 住むが如く、秋の野中に立つ一本杉の如くに 候。男女の本體は愛の結合に候。子孫の發生 如何に大都に入り櫛比合壁の間に住 自ら求めて人に交はらざれば隔絶千里に 如何に路上に於て日に數百人の異性を實 むと雖 た以

も讀んだ。

は久しい間來馬氏と云ふ其の名を聞いて居た。同君は他率二高時代の追懷談を試みた。 は久しい間來馬氏と云ふ其の名を聞いて居た。同君は佐いなったよりは遙に若い人である。同君は佐いなったよりは遙に若い人である。同君は佐いなった。 「自分は何時であったか二高の文藝部の本で、は久しい間來馬氏と云ふ其の名を聞いて居た。」 「自分は何時であったい二高の文藝部の本で、日本は表しい間來馬氏と云ふ其の名を聞いて居た。」 「自分は何時であったい二高の文藝部の、本では久しい間來馬氏と云ふ其の名を聞いて居た。同君は他率二高時代の追懷談を試みた。」

代の同窓として、來馬琢道氏を指名した。僕

佛教の關係より幾分の關係のあつたことより

「雷夢君はどことなく仙人臭く見えた人で、 東の聲は何となく上の方より出づるやうに 関えた人であつた。字が甘く、歌にも巧で あつた。中學の四年生時代に同覽雜誌を作 つて互に文章を錬磨した。今の學習院教授 でも無かつたと思ふ」云々と。 でも無かつたと思ふ」云々と。

時代に於て島地君の同級生ではなかつたが、司會者は祥雲君を指名した。祥雲君は二高司會者は祥雲君を指名した。祥雲君は二高

分は道交會(二高佛教青年會)を止めるかと

義氏などの感化もあつたのである。そこで的の活動があり、また東北學院長の押川方く一方には熱烈なる基督教のレヴアイバルで一般の無宗教の影響であつたか、兎に角輕蔑せられてゐた。それは廢佛薬釋の影響

して居ると云ふやうに話された。そこで自る。一擧手一投足悉く神の聲を聞いて實行

然るに、神は勉強せよくと云ふ聲が聞え

なして昨夜も愛宕山に行って神に祈った。

たこともある。一體、

あの頃は僧侶が大に

に進みたる栗原基君より獎勵の手紙を受け

「自分は何時であつたか二高の文藝部の例會 尋れて見たが同君は熱心燃ゆるが如き容貎 なつたと云ふうはさた聞いて其の下宿屋を で 其時は失敗した。又雷夢君は文章にも達者 説をして大に成功したことがあった。その は雷夢君の演説に勵まされて次の例會で演 であらうと考へて大に意を强うした。自分 佛教の説教家とならば佛教の爲甚だ幸なと た佛教家の説教とも大に違ふ。斯かる人が の説教振とは大に違つて居る。自分が聞い ーイヤレングの演説風であった。默雷上人 處となく人を魅する力があつて、インスパ 演説は極めてうまいもので、其の演説は何 ルタスを讀む」と云ふ演説を聞いた。その で雷夢君の「カーライルのサルトル・レザー 調子にのつて文藝部の大會に出演したが、 懸賞論文にも當選した。同君が耶蘇に

> になった。後になって島地君の居ったこと らうか其時分から三部經を愛讀しない に變つた。何ぜ變つたと聞けば三部經の阿 以前には三部經を愛讀して居たが、後聖書 聞いたら無論退會すると答へた。島地君 ら聖書を讀むやうになられたのですと語つ 耶蘇の友人が出入せらるしやうになってか のある下宿に移つたが、宿の女主人は島地 自分も其時以來雷夢君に動かされたのであ それで讀む氣もしなくなったと云はれた。 獺陀様は一種の小説のやうなものである。 師の聖書研究會に出席した。當時文科大學 等の二高卒業後小山東助君と共に、ブゼル には感服しかれた點もあつた。僕は島地君 はのが、佛教の名門に生れた島地君の態度 た。僕は内ヶ崎吉野兩君が改宗を何とも さんは最初阿彌陀經を讀んでゐられたが、 131

故島地雷夢君追悼小集記

內 ケ 崎 生

にせられたから、 の二月の九日であった。丁度小山東助君が代 りし同君の生涯に就いて興味を覺えらる、方 二月號及び本年二月號に於て其の追懷錄が公 内互、吉野作造、小山東助及び僕の發企であ柳政太郎、姊崎正治、高島圓、祥雲確悟、箭 年を期として、追悼懇談會を開かうと志した た。よつて東京に居る同君の友人が其の一周 攝津の御影にて永遠の國に移られたのは昨年 が尠くないであらう。島地君がチフスに罹り つた の六日の午後五時より丸の内の中央亭に於て が、二月中に果すことが出來なかった。三月 は 議士候補者の旗上げをせらる「矢先で、僕等 愈々その會を開くことしなった。登起人は澤 故文學士島地雷夢君に關しては本誌昨年十 人が集まった。 同君の葬儀にさへも連ることが出來なかつ 讀者諸君の中には變化多で ば、先づ千代田高等女學校の泉道雄氏は人生て、全然式を擧げざるも心殘りのある事なれ 後六時半に姊崎博士司會者となつて追悼の略 られたること誠に珍らしいことであつた。午 --が故人の關係を賴りに一堂に會合せしめ 會の無かりし――職業や宗派の異なれる人々 日訓十一月二十八日の第六項に掲げある親戀 定の儀式を行ふことも出來ずいさればと云つ 上人の臨末書を承く讀まれた。 式を擧げた。固より各宗各派の集りなれば一 「我が歳きはまりて安養淨土に還御すと云ふ とるい の一人は親鸞なり。」 べし、二人居て喜ばい三人と思ふべし。そ 歸らんに同じ。一人居て喜ばい二人と思ふ 和歌の浦曲の片雄波のよせかけく 故人の生前相會し相語りし機

八章の基督の言葉、 次で僕は同じく第十項に掲げある馬太傳十

る物語の中に食事を終へた。

食卓には真白い

それから食卓に移って一同しんみりとした

美しい花の鉢が三四箇所に置かれて故人の純

夕方より小雨降り始めて何となく氣を沈ま

等氏を始とし、二十數名の故人の先輩及び友 と思はれた。當夜の主賓、島地御母堂及び大 故人を偲ぶには却つて好都合である 「我れ又汝等に告げん、若し汝等の中、二人 事にもあれ天に在す我が父は汝等の爲めに 者地上に於て心を併せて事に從へば、何 乎なる一生を象徴するかの如く思はれた。八 の下に追悼談話會を開いた。司會者は中學時 時過ぎ食事終りて別席に移り、姊崎博士司會

姊崎博士は大凡次のやうなことを述べられ るべければなり。 めに二三人の集まる所には我れも其中に在 此等を爲さしめ給ふべし。そは我が名の爲

7:

『雷夢君は其の名の如く、天上の夢を見て居 色々なる計畫を懐いて居む。併し乍ら之れ た人である。大なる空想家であつた。常に 較的年若くして病死せられたが、固より事 を實行することが出來なかつた。されば比 功を目的とせられたる人でないから必ずし 君の追懷談なり感想なりを承りたい。」 とする會合である。其の御積りにて食後諸 故人の生涯の中より何が尊い者を發見せん ある。今夕の追悼は普通の追悼に非ずして まれたる精神と意氣とな學ぶことが必要で はあるまい。寧ろ故人の短き一生の中に含 も之れを追悼して今更の如く悲み歎く必要 130

たのであるか、兎に角精神上の煩闘には同 ら、頭角を現はすことが出來たであらうに、 の新しき信仰と家の信仰との間を往來して た。家のことを隨分考へられました。自分 雷夢君は、 く熟考するが能からうと申しました。本人 的情操を養ふことは出來るでは無いか、能 せんか。眞宗にも眞理がある。これで宗教 寺の重要なる位地を占めて居るではありま の境遇に就いて話しました。父君は西本願 な呼んで話し合ひました。私は専ら雷夢君 ませうと承諾しました。其處で私は雷夢君 吳れないかと賴まれました。私は一應致し に困る。 あるが、 す。最後には真宗に歸られたと云ふことで 玉碎せられたことは惜むべきことでありま 煩悶を重れられました。隨分才氣があるか のでは無かった。なかし、苦心せられまし に於て斯文學會に出席せられました。さて 煩悶も述べました。私は其れ以上何うする も大に考へたやうでありました。また色々 ことも出來ませんでした。默雷上人は晩年 るが、其れとも更に一歩高い所に行かれ 其れで始めて安心せられたもので 何うか彼れを呼び出して説得して 真宗の方は何うでも能いと云ふ 7:0

な人だけ隨分ひどく惱まれたのである。 出席したのであります。」 に考へなければなりません。今夕は雷夢君 ればあれ程に煩悶は無かつたでせう。 情を寄せなければなりません。鈍い人であ を中心として信仰談があるならんと思って のであります。斯かる精神上の變化は嚴肅 れは時勢の然らしむるところ止むを得ない 鋭敏

夢君の教師の一人として、追懷談を試みられ 文學博士佐々政一氏は二高時代に於ける雷

『最初私が雷夢君を知つたのは明治三十年の たが、 しかつたと記憶します。深田康算君は何か す。哲學的の分子もあつたが敍景が誠に美 雷夢君は、第一等賞に當選したのでありま に對する感しと云ふ懸賞論文を出した時に、 考へて居ました。尚志會雜誌部が、「春夜月 頃は私は雷夢君な才氣のある文章家とのみ 様のことで苦んで基督教會にも出入しまし 深いものがあるやうで其れが外に現れない 春高山樗牛君が二高を辭して上京せられて やうに見受けられた。私も三高時代には様 から、雷夢君の改宗前でありました。 氣根がなく又色々の事情があつて専 其の

> 見えられた。澤柳氏は島地君に父君は困る 島地君は哲學を專攻すると云ふのであるが の時雷夢君は非常に喜んで、神に任せてあ 多分傳道に來たのであつたらうと思ふ。其 内崎吉野二君と共に私の宅を訪れられた。 ぢやないかと問はれたるに、そんなことは 丁度その時校長の澤柳政太郎氏が私の宅に 宗教的調子が一番に高いやうに思はれた。 れば煩悶も何も無いと云つた風であった。 君が二高卒業前改宗の頃でありましたらう 心これを究むることは出來なかつた。島地

之進——君が來訪されて、自分はアゼル師 年下の級の今は故人となつたが――土井龜 いと氣焰をはいた。此の青年は飯以外には が弱いのである。自分は三人の道は通らな 宗教によって救はれたと思ふのは意志の力 るまい。宗教によって救はれたのであらう。 らう。飛び込むだけならそんなに六敷くわ だ。政宗するのは飛び込むやうなものであ 通つたが子供等が高い岩から川へ飛び込ん んの一時にあらう。此頃廣瀬川のほとりた の聖書研究會に出席して居るが改宗はしな 決して無いと斷言された。一兩日の後に一 あの三人は今は熱して居るがそれはほ

宗教的傾向のある人は基督教の人々とで無ければ話が出來なかつたのである。因つてければ話が出來なかつたのである。因つて中心として聖書研究會に出席して居たのである。三浦吉兵衞君(現一高教授)と興に無ある。三浦吉兵衞君(現一高教授)と興に無かつたが、涙を流して有神論を主張せられた。感情的なる島地君が最も强く斯かる感化を感情的なる島地君が最も强く斯かる感化を感情的なる島地君が最も强く斯かる感化を感情的なる島地君が最も强く斯かる感化をあける佛耶兩教接觸の犠牲となつたのである。若し同君にして健康を保つことを得たのであらう。」

「私と島地雷夢君の關係は甚だ薄いのです。 「私と島地雷夢君の關係は甚だ薄いのです。 友人として交際したのでも無し、師弟とし て研究をともにしたと云ふのでもありませ ん。只だ默雷上人の子として何と無くなづ かしく思つたのであります。何時か雷夢君 の文章の片端を見て、これは天才の人であ ると思ひました。澤柳政太郎氏が二高の校 ると思ひました。澤柳政太郎氏が二高の校 ると思ひました。澤柳政太郎氏が二高の校 ると思ひました。澤柳政太郎氏が二高の校 ると思ひました。澤柳政太郎氏が二高の校 の文章の片端を見て、これは天才の人であ 。 ると思ひました。澤柳政太郎氏が二高の校 の文章の片端を見て、これは天才の人であ 。 ると思ひました。澤柳政太郎氏が二高の校 。 と思ひました。澤柳政太郎氏が二高の校 。 と思びました。 。 、 、 に同校の佛教青年會即ち道交會の主

> ますで 宗の家に屬して居ながら、斷然基督教の信 雷上人と色々の物語をした。私は雷夢君が 仙臺より汽車に乗ると、 たから來ないのだと言うたのを耳にした。 かった。 すべきことである。また最後に佛教に歸 ない。信仰の獨立を發表したることは賞讚 仰を發表したることは偉いと言はざるを得 隨喜の至りであります。いづれにしても眞 の際には家の信仰には返ったと云ふことで となったのである。兎に角、雷夢君は臨終 質でずかと導れた。上人は信ぜられぬと答 基督教に這入つたと云ふ噂を聞いたが、事 婦も盛岡よりの歸京の途にあつたので、默 たることは、大に慰めとすべきことであり 短き生涯に於ても活ける信仰に始終せられ 本人として喜ぶべきことである。雷夢君は たことは私は佛教徒としてのみならず、日 へた。然るに其の後間も無くその噂は事實 誰かい同君は耶蘇教と關係が附い 丁度默雷上人御夫

文學博士井上哲次郎氏の追懷談は次の如く

鎏に於て基督教徒になったことを無れて聞

きました。同君が大學に入學せられた時

の重要なることを證明します。雷夢君が仙

と云ふ言もありますが、今日の科學は遺傳造傳がありました。王侯將相豈種あらんや

其の元氣な時代を知つてゐます。明六社に『私は默雷上人とは久しい間交際しました。

られました。雷夢が耶蘇になつては私は實 默雷上人が私を訪問されて、 懇々と相談せ

仙臺に行きました。其時、雷夢君は見えな

とは他より聞きました。默雷上人にも辯才 才はあつたやうであります。文才のあるこ 處となく其面影を宿して居ました。充分辯 ありましたが其れに屬しました。雷夢君 士と共に演説せられました。私は年少者 續いで共存同衆が出來て、上人は多くの名 も文才もありました。説教は聞かわが演説 意しました。上人よりはやせて居るが、何 文科大學時代には上人の子として特別に注 はした傑僧でありました。雷夢君にも此の がうまくありました。兎に角嶄然頭角を現 つた。又上人は漢詩に巧にして、殊に長篇 る。老後には餘程枯淡となられたやうであ ば、あいそうだと答へられたことを記憶す まれました。其れは極樂ですかと尋れたら たことがあります。上人は其頃大に酒を嗜 を聞きました。なか</m> 132

なる雄辯を徹して聞くとが出來なくなつた。 俊の材は地上を奪はれて高邁なる見識を偉大 ること僅かに三旬ではないか。高潔の資、英

年二十四、

佐賀縣の産である、中學を逗子

く其の香を止めんが爲めである。松枝君の死

併し、神は植木屋の様なものである。

闇の中に隱れて行くを見送つて別れた。 つて私達に同君をも追懷したのであります。 夢君は齋藤野の人と殊別に親しくあつた。因

は哀悼の極である。

浦吉兵衞、岡田哲藏、平澤均治、大原彌一郎、高此の夜は以上の諸氏の外に畔柳都本郎、三 られて誠に友情と信仰と寛容とが溢る、思が 島圓、中島力三郎其他故人の知已友人が見え 世の感を以て追懷せらるいことであらう。雷 の會に臨まれたとすれば三十年前の煩悶は隔 した。宗教宗派を超越して總ての人の心が皆 一に溶け合つたやうに思はれた。雷夢君は此 ますので、同君より神戸時代の雷夢君に就い である。高島圓君は種々助力せられたること 起人中俄に差支ありて澤柳、箭内、吉野の諸 で聞くことを得ざるは大に遺憾であった。後 小山東助氏は今尚は病んで鎌倉に静養して居 を特別に感謝する。 君の見えられざりしことも遺憾とするところ

故松枝德麿君の死を悼みて

古 周 藏

日であつた、私の試みた拙い演説に懇切な批 時に、地に慈愛の母を遺して長逝して了つた。 中に電光が天に異象を呈して居たあの夜の九 月が皎として冴え渡つて而も電雪の降り積む 評を承つたのは其の時である。爾來日を関す 私が彼と最後に談つたのは確か二月の十二 松枝君が死んだ。大正五年三月十七日、寒 月業を卒へて偉材を地上に用ゐんとするに際 悲劇を思ひ、天意の何に存するかを疑はずし も惜しみても餘りあることである。誰が世の るの日、 して、而も國事日に非にして人を思ふの切な に學び牛途退學して早稻田大學に入り本年六 て居られよう。 忽然として彼は天折した、惜しみて

らう、君の英靈は形骸を地上に殘したるが如 く、之を形成したる物質の一つも失はるしこ る全ての人な通じて世に行はる、に到るであ く地上に残つて君を知れるもの知らざるもの となきが如く、 てし早大一萬の健見の衷に、君の志は君を知 の裏に祭をなすであらう、 る祭光の座について神の妙なる御業に参ずる てあらう。 けれども先づ斷たれたる花である。 君を求めし天國の與へられた 君の思想は君を育 香は長

に依つて床に飾られた、彼の關係の客宴 彼の死を意義付ければならわ。 せられし人々は飾られし花の香を心に 思想は永遠である、 松枝氏は逝けり。靈魂に死滅はない、 剪取せられたる花は御旨 止めて

最も大にして美しきを先づ剪取する、地に長 の心勢と丹精とな疑して作り上げた花園から **恋愛** ある。 だことはない、併し逝ける松枝は吾友である、 修養は幻の如く私の衷に居るではないか、彼 は僅かに二囘に過ぎない、所謂友の交を結ん や逝いて吾心に宿した、永遠に吾共心の友で 彼の真摯なる態度、高邁なる見識、 噫! 友松枝は逝けり。生前彼と談つたの 頂滿なる

噫 松枝君は逝けり。 豊かならざる家資

茶菓子を食はないとか、直立の態度をもつ 島地君と親しく話るの折はなかつたのであ と思った。その後私は山口に轉任したから 局外者として若い人の心持は面白いものだ て歩むとか、自力主義の人であった。私は

最後に島地大等氏は御母堂を代表して誠にし の拙文と重複するから、こいには記しません。 も無くなるし、また或る部分は本誌十二月號 出や現在の立場などを語りました。併し紙面 んみりとした感想を述べられた。 次いで私は二三十分に渡つて仙臺時代の思

明治四十五年の二月三日に父默雷が病死し 綿たる孝行の人でありました。私は絶えず 冬は鎌倉へ行きました。其間周到なる注意 ました。母は威雄に附きつきりに夏は盛岡 に轉地したるため母は非常に心淋しく暮し が一高在學中病氣にかいり、休學して鎌倉 て、母は心淋しくて居ましたのに義弟威雄 ました。其の後年々家庭に不幸がありまし たことは一家に於ける最近の大變動であり 此の事質を見て自分の教訓として居たので るは雷夢君でありました。雷夢君は情緒纏 をもつて母の相談相手となり、弟を慰めた

> v) 通知を受けたのであります。私はすぐ鎌倉 もこれは本人は隱くして置いたので他より はじめにはチフスであると解りました。尤 御影の寓居に於て、病氣にかいり、二月の す。此の雷夢君が昨年の一月半より攝津の らないものであります。其後母は殘された 時落命したと聞かされました。母に取つて れは異變があると思ひました。當日午後四 宮停車場に着きますと、プラツトボームに の九日朝最急行に乗り込み午後八時に三の 附いて行けば大丈夫と云はれました。二月 地に過ごし、醫者と相談したるに、御前が 康を害して居たのであります。私は一夜同 に参りました。然るに母は依然よりや、健 の病にかいつて居るので母の心配は一方な は唯一の力であつた兄が無くなり弟は不治 京都の母の兄が立つて居ました。そこでこ 幸に快方に赴き、この九月より復校を許さ る弟に全力を注いで看病を致しましたが、 かいり私が見舞に行き今日午前歸つたばか れました。昨年の暮に母自身が病氣にかり 兩三日前には母の兄が京都にて急病に

> > 催しの御案内を受けて母及び一家の者皆さ であります。併し今夜のお催しは母に取つ 乍ら病後の母を件ふべきや否やを考へたの んの御友情に感謝したのであります。併し が致すのであります。此の際偶ま今夕のお とてありませう。深く御禮を申上げます。 時は其れを辿つて今夕の御懇情を思出すこ 印刻せられて今後皆さんの御名前の現れる 思はれるのであります。今後永く母の頭に 生きて來て溫い言葉で一言一句を述べたと よりのお言葉の中に現はれて、故人が再び 十七年の間雷夢の一生が寫したる影が先刻 に用心をして來會した次第であります。三 三日前に上京し、今夕まで一切外出せず大 す。そこで今夜は是非罷り出づると極めて てどんなに嬉しいのか知れないのでありま ます。失禮ながらこれにて家族 威雄も家妻もお招ぎを受けたのであります が、罷り出で無れましたことをお詫び致し 一同な代表

悲が無いならば天地落莫の境にあるの思ひ りであります。それで一家の者は御佛の慈 一同は島地御母堂及び大等氏の車が小雨降る 勞も察せられるので、司會者は散會を宣した。 きさうにも見えなかつた。然し御母堂の御疲 時ははや午後の十時となつた。追懷談は盡

してお禮の辭と致します。

忘れて居た際丁度夕べの軍艦旗を降ろすラッ 内を水雷艇で走り廻つたり日の暮れに水雷團 艦の進水式を見に行った際君に案内されて構 君の事を覺えて居る。其れは先年横須賀に軍 して實に感微無量殊に私は妙な印象から深く の肩の骨を折つた事がある。かれこれ思ひ起 合つた。Oは且つて頓宮と角力を取つて、君 學時代の事や又人間の運命の事に付いて語り ようとは思はなかつた、Oと私は暫く君の中 の飛行機に違ひない。あれに頓宮が乗つて居 日向の茶臼原に送る事が出來たのである。試 ずもそれに似た景色に接しそれが私の希望を たものだから鐘ならわラツパによりてはから 様な質景を日本で見たいものだと憧がれて居 ラスの鐘の畫が好きで出來る事ならあの畫の みに當時の感想を書いた文の一節を見るに、 の音を聞いて、私が無れてミレーのアンゼ 應接間で他の二三の同窓と快活な話に時を 「貴樣遣ひの快活な談話で、時の移るを忘れ 力によりアンゼラスにちなむだ小さき鐘を と今まで他愛もなく大言快語して居つた活 | 変現たるラッパの音が響き出した。する 昔の物語りに耽つてぬた際、 動機となつて、先年多くの同情者 突然窓外

> こまつて、膜目靜思ラッパの音の止むまで しんとして了つた、茶を運んで來てゐた、 後な中尉や主計の先生達は、

> にはかにかし 一兵卒は廊下でそのま、立止まつて、同じ

て居る私の耳には、 くラツパの音はミレーの繪の深く印象され りの壯嚴さに何とも言への敬虔の感に打た 今まで騒々しかった水雷圏の各室は、 く瞑目した。 我が海軍にも宗教ありと思つたのである。 げ下しには必ず彼の様にするだと知って、 事はなかつた。聞けば日出日没軍艦旗の上 少尉の顔は黄色くかいやいてゐる。私はそ を透して静かにその室に射し込んで來て、 やうに響くのであつた。喇叭の音は止ん れ、祈禱の時のやうに瞑目した。遠くに響 打つたやうにしんみりとなつた、私もあま れまで、こんなに氣持の好い光景に接した に傾いた夕日は、葉山の方より水雷團の窓 で、皆は再び元の騒々しさにかへつた。西 アンゼラスの鐘の音の 水を

ぜなかつた。 友に語りしも、軍人の先生達は、笑つて信

この質景に接して以來、 對する私の憧憬は益、强くなった。」 アンゼラスの 鐘に

むるものである。快活にして沈着な何處迄も 惨死と云ふ事を聞いて一層其の情を切ならし は終に生涯忘る可らざるものであって、 事ではない、然しあの時の印象は私に取りて 頓宮君に於ては此様な事は少しも係はつ

音は將にアンゼラスの鐘である。この事を それもその筈、海軍の本元は基督教國、き のものであつたに相違ない。海軍の喇叭の つとその習慣の起りはアンゼラスと同意味 の關係の連鎖が、實に不可思議なものである私はかう云ふ事を思ふにつけても、人と人と 軍人氣質の頓宮君が私に此樣な意味に於て記 ものである 須賀で水雷艇に乗せられて波を切つて走る愉 と思ふ。中學五年の間のやんちや盛りの連鎖 憶されて居様とは夢だに思はながつたらう。 がら號外を前に置いて人一倍感じを深くする 快さに喜ばされた時の事を思ひ出して今更な にボートに乗って遠漕をやった時の事や又横 て惨死した、私は〇と相撲を取つた事や一緒 の上を飛んでそして航空界の尊き犠牲となっ る、その頓宮君が今日私共の住んで居る屋根 れた君を 有難く思ひ 深く覺えて 居るのであ よりも私に取ってはあの尊き感情を導いて臭

して逝つた、母の心を忖度しては唯哀しい泪 を裂いて愛子の爲に努められし

慈愛の母を遺

う。

松枝君は逝けり。松枝君の死が私に

子。私は突風が來たに相違無いと云つて居る 内に何んだか白烟を吐きつ、西北の方に飛ん

殘る一機は二三囘も同じ場所を廻つて居る標

イ其方へ行くのではないぞ」と叫んで皆を笑

で往つた。同宿のOM君は大きな聲して「オー

ま上げられたのは何か御旨のあることであら れた、怎うせば朽ちる運命の中に美しきがま なられ。美しきが故に先づ天軍の座に上げら しき蕾を地上に出した親木の勢は多とせれば 産んだ君の功績は偉大なものだ、あれほど美 が涌く而已である、母よ、彼の天才を地上に 偉大である、人に惻隱の心あらば、人に愛の る吾心の高鳴を聞いて臭れるであらう。 靈弦あらば松枝君の魂の奏ずる靈調に共鳴す 與へた感慨は無量である、真質は筆舌よりは 噫! 才人松枝は逝げり。

航空界の犠牲者

同窓の友頓宮大尉の惨死を弔す

島

星

けるために上京して來たM 君は始めての飛行 行機は三つ飛んで居る。『下の方に二つ船の 會の開會日だからそれを祝ひに飛んで來たの 様なものがついてるから海軍飛行機に違ひな 度々田舎者扱いにされて居た先生、誰れより 見物、是迄飛行機を見た事がないと云ふので なる飛行振りである、つい此頃入學試験な受 も一番面白かった様子であった。暫く見て居 であらう」と。誰れやらが答へた。實に壯快 い」との君が叫ぶと『そうだ今日は海の博覽 __ 郎 いる」と實に頓宮大尉は〇や私等の岡山 に往つて見ると不幸其言が適中し海軍飛行機 飛行機の墜落かも知れないる」と急いで取り だ」などとすまして居る、私は『事によつたら 宮と云ふ姓は珍らしいから二人とある筈は無 關大尉の」と私が答へると『きつとそうだ頓 はないか知らぬ」と〇が云ふ『頓宮だあの機 日の號外だつた。『頓宮と云へばあの頓宮で の墜落阿部中尉頓宮大尉の惨死と云ふ東京朝 隣りの門の戸をあけてなげ入れた様子。續 校時代の同窓の友頓宮基雄君であつた、 て私の家へもなげ入れた。Oは「又支那問題 さつ 136

をして居た處、 俄然屋上にプロペラーの音が

の部屋で皆で輪を作つて色々と面白く世間話

であった、從弟M君と同窓のO君やK君が遊

三月二十日私の内では丁度書飯の終った頃

いに來たので春の氣の一パイに滿て居た八疊

よつて、いやが上にも飛行機熱の盛んになつ 聞えて來た。ナイルス君やスミス君の來訪に

ないか」と一寸落付はらつて見せたのさへ終

り庭に飛び降りたり『珍らしくもないぢやあ て居る際とて、そら飛行機だと二階に登つた

には像先きにのぞいて一様に空を仰いだ。飛

ると二機は西南に飛んで往つて姿を没したが

き見た西北に白い烟を吐いて飛んで往つたあ

とのみ三時頃迄も種々時局の噂かして居た所 氣は弟を初め若い連中を誘ひ出した。私と〇 飛行の噂をしたのであった。春の暖い散歩天 しまつたので皆んなは再び室に歸つて、色々 はせて、かくして隣の屋根に姿を隱くされて

俄にチリンチリン號外々々と云ふ叫びが聞え

の矛盾に ついては 何等解決する 所がない。

値のアンチノミーと形而上的一元論の要求と

班 71 紹 17

近世に於ける。 我」の自覺史

益に發展して來た 世界の文明史、言ひ換へれ る。 隨つて 人間の 意識的活動を 中心として 動における價値を批判的に評價するものであ するものではなく、吾々の生活即ち思索や活 觀に存在すると考へてゐる世界を敘述し説明 哲學は言ふまでもなく、吾々が常識的に客 文 館 發 ある。

なり道徳なり宗教なりの一つを中心としてそ 來るが、併し自我の自覺といふ人間の內面性 の文明史は種々の生活形式即ち經濟なり政治 るが)に存するものであるから、人文史は即 學の重要なる批判的對象となり得る。而して て來た歷史は、價値の評價の變遷史として哲 ばあらゆる形式において精神的生活を持續し ちこの永久展開の生命としての「我」の自己表 價値の 中心根源は 普遍妥當的な 自我の自覺 (勿論體験的には 强烈でも論理上 豫想に止ま の奮闘史といふことが出來る。だから世界 形式上の變遷を客觀的に研究することも出 達を主として「我」を研究されたものである。 専門的哲學的である。けれども文體は平易で だから前篇は概して通俗的であり後篇は稍っ

謹んだもの、中で博士のこの著が初めてい 「我」を根本として研究された人文史は自分の 書かれた偉大なる哲學史はいくらもあるが、 ばならわ。價値の問題や人生觀を中心として はあるが最も意味の深い真の哲學史でなけれ 虔にして而かも真摯なるこの著は、小册子で のであると思ふ。この意味において博士の敬 り、そして吾々の意識的生活に對して指導力 と價値の批判力とな與ふること甚だ大なるも することは 最も生活的 を根據として主觀的にその發展の過程を研究 興味の深い ものであ 叙説は丁寧深切(少しく冗漫ではあるが)であ

うに思索したかといふ、その考へ方の變遷發 したもの、第二篇は博士の所謂哲學上におけ は主として我の自覺の具體的內容に就て叙説 居る。勿論二篇とも史的研究であるが第一篇 覺」の史的叙述であつて前後二篇より出來て より現代に至るまでの歐洲における「我」の自 價値そのもの又は價値の源泉について如何や る「考へ方」(或は方法といつてもよいが)即ち 序文にもある通りこの書は『ルネッサンス れどもギンデルバンドが、 言つて何も不都合はあるまいと思はれる。 なる選奉者」であると見ることは固より不都 る、通り、博士をもつて西南獨逸派の『忠實 を以て局を結んで居る。序文にも斷つて居ら とも 現代獨逸に勢力ある 新理想主義の れて面白い。後篇には又博士の獨得な批判力 漸次に自己の意識を明化し深化して行つた」 乖離或は多數個「我」相互間の交渉等によりて くは自然との杆格、若しくは我其者の内部的 るから讀んで頗る痛快である。殊に前篇に 底であるのみならず、 や規範の撰擇標準の問題などの解釋が稍不徹 の法則即ち自然的法則と規範的法則との關係 ころ此派殊にギンデルパンドの思想に近いと 合であらうけれども、大體において現在のと 的等の考へ方)が現はれて居る。 (即ち自然必然的 精神必然的及び 目的觀 徑路を 叙したあたりは 實に明快な 理解が現 いて『「我」が自己に對立せる教權、國家、若し (目的觀批判的の哲學)即ち西南獨逸派の思想 博士も言はるい 生活における二重 而して兩篇 ・通り價

け

的な意味でなく又一時の好奇心によるもので こんな理想の實現につとめて居たのだとはま 私の最も好む所であつて、それは單なる遊戲 それは汽船の發明や汽車の發明に依りて當時 に付いて一つのビジョンがある天空飛行に就 しなく又國家本位に軍用の爲めになるからと り、人種の軋轢、實にごたしくまだしく理想 大戦争は行はれ、文明は國々によりて高低あ とてもこんなことでは駄目である、惨憺たる の一理想を近接實現させられはしたが、未だ いて一つの理想がある信仰があるのである。 云ふ意味でもない、私には空中飛行と云ふ事 語と言語との違ひから生ずるくだらない誤解 するものである、一方心靈現象の發達と此の 行機の完成に依りて益、其言の切なるを偲ば 1の所謂「天國は近づけり」の本旨は此の飛 此の世界を導く事にならればなられ、クリス 飛行に依りてより早くより文明により共通に なり東京とニューヨークが益、接近し人類は 天空航行によりて ロンドンと 東京とが 近く は遠き彼岸にある、此の上は如何もして空中 しき戦争や人種と人種との凄まじき蟠りや言 そんな小さい事はさて置いて一體飛行機は 世界を一變して今日の文明と 世界 共 通 となり、國家と國家との恐ろ すり さか想はなかつただらう、否君は戦争の為に や其他わらゆる小さき圍の囚はれを脱するの ずる。新婚早々の身を以て親孝行の性質を以 大きな私の理想を想ひ感慨無量である。墜落 となつて墜落惨死した小さき私の關係から又 リスミス君來り我飛行界に深大の刺激を與 と敬墓を拂つて居るのである。ナイルス君來 様な意味に於て現代の飛行家に此上なき尊敬 其の腕を練つて居たのであらう。然し前述の が出來るからである。軍人の頓宮大尉は私事 じ得ない次第である。然し阿部中尉と云ひ頓 て、本人は兎も角も殘されたる若き妻君と老 んとしたものは頓宮君の充分なし得た事と信 の少し前何か紙片を落したさうである。私は て居る際不幸我友は我航空界のあはれ犠牲者 し君の惨死を悲み且感激を以て謹み弔意を実 宮大尉と云ひ先きに又多くの惨死せられたる ては無い。私は關係の王國の妙なるを偲びつ 各飛行家の尊き犠牲は途に永遠に朽ちるもの いたる兩親の事を思へば實に同情の涙轉た禁 かの佐久間大尉のそれの如く尊き記録を殘 つ殊に私の有する理想に到達する葉石となり 尚又君の死によりて 我航空界の益、簽達 せん事を希ふものである。

れる。 野村善兵衞氏 め「生活のアンチノミー」を書か された。 夫郡渡利村上川 同氏は 原五番地 本誌來月號の は過般 福島縣 12 轉居

文でも救世軍の思想信仰とは同じではあるま に饿らず神の内在性まで突込んで居る。之れ 觸しなかつたが、それでも著者は直譯的信仰 會主義の外近代思想といふ様な方面は殆ど接 觸る、所にふれ著者は克く之を制服した。社

の光が强い。

別所氏には抽象的論議といふも

は人格の根柢に其源を發し、そして間斷なく、 とする運命は悲劇は實に其内面の煩悶

又其の 破壞の業の 成らざる迄は 止

ザストの人であるが、氏が自由主義には理智 る爲なのでいや味がない。我が岡田氏もメソ るが、それは常に何か宗教的眞理を探り求む 有つて居る。種々と其廣い學識を示されて居

社會的救濟が其使命であるから、快くか 救世軍もむしろ一面は信仰よりも事業 の如く青年の心を振蕩し、兹に懐疑は生じ暗 本城を犯して居る。果然外來の病氣困難は嵐 主義の唯物思想は未だ思想的根據なき信仰の に囚はれ其研究に熱中した。然るに此間社會 敢て推薦する。 して居る。一般求道者及信徒の好讀物として 書の引用は頗る咀嚼されたる趣味と知識を示 せざるなえない。行文雄健にして英文學や聖 (四六版紙表装、三六四頁、價

督教文學として殘るべき價あるものと思ふ。

角本書は岡田氏の「吾が斷片」と共に一種の基 點はメソデストの養ふ特色かもしれの。兎に

(四六版、クロス装、四五二頁、價一・〇〇)

の未だ見ぬ親

行譯

して堅き信仰に到達した。神子の自覺を以 き青年の心に復活の生命を漲した。彼はかく の要求は空しからず、人格の神は死せるが如 中に摸索し失敗又失敗を繰返した。併も内心

武蔵野の一角にたちて

0.八〇

寧ろ當然であらう。現代青年の一部が確かに 生命の戦の跡である。殊に其内外の困難と戦 には元より盡さいものもあるが、之れ生きた 救世軍に身を投ずるに至つた。其思想的經路 めた青年の精神的發達としてはかいる傾向が ふ邊は眞の勇者でなければ出來わ。農學を修 今や真の救世、社會救濟に從はんとして 薄な下町風でなくて、如何にも貴族的趣味を を現はして居る。著者は江戸ッ子であるが、淺 じて然も其骨子を捉へ、一家の宗教と人生觀 ないが、自然と歴史を観じ、東西の文學を談 は氏の從來書かれた文章を集めたものに過ぎ れるメソデスト派唯一の文章家である。本書 別所氏は護教紙上に其想華を披瀝して居ら (ポケツト型、クロス装幀、六八○頁、價1・00)

警醒社發行

るを失はず、文部省が通俗教育圖書として之 く、少年少女の讀み物としては絕好のものた 憐なる孤見を主人公とし其敷寄なる運命を描 の讀書界から大歡迎かうけた物語である。可 を選定したるは當然なり。數葉の挿畫あり。 嘗て十餘年前遭賣新聞紙上に譯載され當時

記ミケランジェロ

者は其序文の中に日ふ「余が之れから語らん 的生涯は原著者に依て遺憾なく描かれた。著 たものである。此一大藝術家の偉太なる悲劇 ロマン・ローランの原著を英譯から 重譯し 陽村 行譯

著者の前途の多幸を祈ると共に救世軍の爲祝 かる人を迎ふるものであると信ずる。吾人は て此兩氏の底には同じく美しい詩的情調のた ゃくふのな認めないわけにはゆかわ。かくる く、其を嚙み滅ぼし行く處に起る、――の悲劇 である。そしてそれは千九百年の間西歐の地

示す所は、只の味噌臭い基督教ではない。そし のが殆ど見られわが、具體的に宗教を摑んで

きか、之れが將來の問題であらればならぬ。 (菊版三百頁定價金壹圓貳拾錢)—野村生—

「我」はいかにしてこの永遠の矛盾を突破すべ

加哲學概論

岩波書店發行

最新の最意義ある此學派の碩學に依てかられ 居る。凡て哲學を研究せんとするものには、 深邃なる源流は實に此西南獨逸派に現はれて 的方法を豫想して居る。而して此哲學の最も ある。現代の理想主義の哲學はカントの批判 由な變改な加へて解脫的叙述な試みたもので 展に深き注意を拂ひ、而も各部の叙述には自 專攻の宮本學士が熟讀阻嚼し、其中心を貫く 物故したるウインデルバンドの原著な、哲學 ある。本書は西南獨逸學派の碩學にして昨年 一の統一的根本的見地の强き論理的辯證的開 目下好評を博して居る哲學叢書の第三編で

たのであつて、簡単ではあるが氏の特色ある 氏の宗教觀は所謂宗教的價値を以て聖となし 教問題の三章に分ちて之を論じて居る。殊に ては價値問題として倫理問題、美的問題、宗 認識問題の各章に分ちて論じ、第二編におい ては、理論問題として、實在問題、生成問題、

参考書として一般に推薦する。へ四六、クロス 宗教論を窺ふことが出來る。兎に角本書は好 三四四頁。價一·二〇)

の文明と哲學的精神

し、之を打破せんが爲めに文明の意義を説き、 沈滯の思潮であり、老良の精神でありと痛嘆 は現代日本の思潮を支配する時代精神を以て 演せる所を纏めて出版せるものである。著者 此の書は著者が嘗て慶應義塾大學に於て講 慶應義塾出版局發行 鹿 子 木 員 信 著

序説に次で本章を二編に分ち、第一編におい 一文を草する積りであつたが、病餘未だ之を 士を教育するは 大學の任務で あると するの るのである。僕は此の好著な評論する爲めに を發揮、 き、以て文明の根柢たる價値の問題を研究し、 實行することが出來ないから、 而して後ち著者の見る如き文明と哲學的精神 である。是に於て更に著者は哲學の意義を説 ン、スピノザ、カント、ニイチェを論じて居 譲り、一寸之を讀書界に推薦しておく。 、開拓したる哲人ソクラテス、プラト それは他日に

1:10) (三速)

暗黒より光明に 警逢 醒坂 社信 發思 行著

「文明とは超自然的精神的威力の、人心內外に 斷じて居る。そしてかいる文明の為めに戦ふ 於ける自然の克服、鍛鍊、陶冶であり、人類 たる超人間的精神、自然征服の跡である」と の意識――歴史と個人――を透ふして現はれ かいる戦 で運んだ。而して弦に生命ある活宗教にふれ 國家主義はキリスト教との密接なる接觸にま 他の青年と同じく、其少年時代夙に日清戦 凡て經驗した樣に、社會主義の注射をうけた。 と生長した。そして此の心は此時代の青年 な愛國心は廣い世界を望んだより高き愛國 に依て狭隘なる國家主義の洗禮をうけた。 最も真面目なる青年の信仰告白である。彼は 彼は此基督教と一見相容れて相容れざる思想 て少年の靈は始めて其若い芽をふいた。狭隘 之れ明治より大正の時代に亘りて生きたる 此

る。

と吾々思想界の歡迎かうくること・信ずる。

者を擁護するは國家の理想であり、

此意味においても本書は一般哲學研究者

國に移入されたのも極めて少部數であつて、

哲學研究者にすら 翹望されて 居たもの であ

正當な途である。此書は著者最後の著述にし た哲學入門に依ることは頗る便利なことで又

て實に一九一四年の出版だから、其原書が我

「もしがテトー

がタイヤモンドより大切にな

■當今の如く男女問題が喧しい時、健全な思

旬歸京の豫定です。岸本氏の御老母は先月二

なり。禪門叢書の第三編なり。〈四六版、クコ ス装幀、二九二頁、價一・〇〇 **繁に觸れ一讀案を叮かしむ。附錄の參禪餘錄** 禪と俳との融合を見る妙文

禪の研究

らるべきものでない。灘は味讀し體達すべき 禪は元來不立文字、文字を以て研究し傳へ **丙午出版社發行** 持ちたるだけにて此方の敗北なり、恥辱也(病 ず、されど敵として其人を選め、卑しき敵は 床錄)」(定價九十錢) らず、標件全集一卷)」。獨步、「敵は多きを恥ぢ 樗牛、「吾人は須らく 現代を超越 せざる可か

編輯の後

本義を説かんとする程滑稽で馬鹿げたものは もので研究すべきものではない。文字で禪の

ない。けれども本書の如きは看話禪、禪の看 ある。(四六版、布装、二七六頁、價一・〇〇) の暗示を與へるだらう。禪門叢書の第六編で 方、祖師傳の三篇に分け親切に禪的工風を述 べて居るから、禪學に興味あるものには多少 き程のこともなかった。 とな合せて四人。卓を圍んで談じたが記すべ はなかつた。會者内ヶ崎嶺岸一條の諸氏と余 た。三月の編輯會は同人何れも都合惡くて振 やられたので、前號は大に一條氏の手を煩し 第二月の編輯にか、つて間もなく流行感冒に

地上聖語

本書は夏目漱石、徳富蘆花、 四吉 高山樗牛、國 方田 堂常發夏 行著 前號の此欄で岡田さんが二十代に見られる

輯したものである。その處世觀の所で一例を 生、藝術、學者、雜觀等に関する單文を蒐錄編 活、人間、人情、家庭、戀愛、女性、自然、宗教、死 木田獨步の著作中より、虚世、道德、社會、生 げれば四人は下の如く云つて居る。漱石、 評が出た。之には流石の超脱的な同君も頭を 四十の坂を越えた人としか見られぬといふ衆 に反して、一條君は文章の上ではドーしても といふことを書いたら、御本人からそう見て かいて大不平であつた。

火薬がなければ彈丸は透らない(思出の記)」 花、「言葉を弾丸に譬ふるなら、信用は火薬、 つたら人間はもう駄目であるへそれがら)」蘆 關する新思想の開拓を計りたいと思ふ。此欄 想と識見を以て之を指導しなければならい。 には簡単な投書を歡迎します。 本誌では本欄で其研究や主張を發表する許り でなく、婦人の王國欄を設けて特に此問題に

■次號は感想號として同人始め文壇思想家の 〇相原方編輯局宛 感想を集めたいと思うて居り升。今已に手に ほ」沖野岩三郎氏の「生な賭して」等がある。 あるもの、中には、鈴木龍司氏の「靈のうし 一本誌原稿戶切每月七日東京市外巢鴨一四

同人消息

くれる人があらば喜ぶとの通信があつた。之これもインフルエンザで就床せられました。 安部磯雄氏の九歳になる合孃が猖紅熱に罹ら りました。岸本氏はや・その以前に二週間程 引きました。同人中にも色々の變事がありま 寒冒にかいり就床せられました。今日快くな れて久しく入院せられましたが本復せられ が爲めに郷里松山に旅せられました。四月上 した。相原氏は二月中旬より二週間程流行性 冬が暖かつた為めですか、餘寒が割合に長

大なる人種

--基督教徒

を悲哀と信仰との叫びを以て埋めたるかの偉

清め洗ふ様に、偉大なる生活にふれて我等の 山に登つて其澄み切つた空氣に吾等の肺臓を 型の代表的一人格を吾々に示す」と。夏日高 らとよくよまれた。(四六版、クロス天金、三 る。本書の前半は長與善次郎氏の譯ですらす 靈を强うしたいと思ふ人に此書の一讀を薦め 八〇

アッシシの聖フランチェスコ

洛中 陽山 堂昌

發樹 行譯 九二頁、價一・八〇

しては一権威たるのみならず、本國に於ては の人格は一大權威を以て讀者に迫る。譯文亦 教的英雄の生涯は縱橫に描かれ、其溫かき愛 數十版を重れ一般讀書界の大歡迎を得たもの 教文學が邦字で出版さるトに至つたことは祝 たことがあるへ昨年十二月號参照)兎に角此宗 は本誌に於て此偉人に關する感想を述べられ 此宗教的偉人を傳うて恰好の味がある。譯者 であつた。中世に於ける此宗教的偉人、基督 ウル・サバチェの名著を英譚らり 飜譯し 一:六〇

――の最も力ある類 して挿んである。装幀も亦黑色のクロスに白 文字で題名を現はしたるなど内容に相應しい

戦等何を爲すべきか 洛陽堂發行

たものである。本書は此人物に關する傳記と く世界人類の一人として吾人は何を爲すべき 禪學廣く行はるしも此宗に就ては知るもの稀 人生にめざめて真に生甲斐ある生涯を送らん 先達學者、其研究の一端を開いて此三師の宗 か、之れト翁が煩悶した問題で如何に彼が之 である。隱木即は支那より我國に來朝して此 を解決したかは、本書の語るところである。 か一社會の一個人といふ許でなく、廣く大き とし、如何に生くべきかな考へらる人々には、 て此大問題を解決せんと努力した。一國民と「らの影響を宗教界殊に禪界に與へたものであ 題に逢著する。ト翁は其覺めた信仰の眼を以 現代の生活な徹底して行けば、誰しも貧の問 に依て我思想界に譯出されたことは嬉しい。 要があると思ふ。(四六、クロス、六四六頁、價 此偉大なる近代――現代の靈が語る所を聞く トルストイの此名著がト翁研究者たる同氏 二七六頁、價一・〇〇〉

と思つた。〈菊版、クロス装、四四五頁、價一・一寸手に入り難い。今篤學なる氏の手に依て ジョットー以外の名畫九枚を精巧な寫眞版と 秘書獨逸神學の譯である。譯者は其英譯を參 譯も五十餘年前のものであるから、只今では 考とし獨逸の最近版に依て之を譯出した。英 六版、布表紙、四九三頁、價一·三〇) て基督教神秘主義の解説がそへてある。(四 此信仰の書が譯されたことな喜ぶ、附錄とし

隱元、水庵、即非 丙午出版社發行 港 著

る。然るに現代に於ては微々として振はず、 戸時代の黄檗宗である。當時にあつては少か 叢書の第四編である。へ四六版、クロス装幀 宗を傳へた同派の高僧である。著者は禪界の 風と生活を能く傳へたもの本書である。禪門 我國に傳はれる禪宗中最も新しきものは江

全き生活

すべきことで譚者の勢を多とせればならい。

星佐 文藤 館繁 發彦

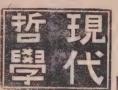
ルーテルが聖書について愛讀した獨逸の神

行譯

禪

機

錄したもの、說き去り說き來る所悉く禪の肯 京都建仁寺の禪老默雷師の禪話六十則を集 万午出版社發行 田 默 雷 述



子

ル馬

治

桂

井

當

助共

本

間

ル久

雄

譯

化

郵特正

稅價價

十個個

经经验

(編二第)

ンヒ

塟

術

之

耙

源

郵特正

稅價價

十圓圓十

一五八

经验经验

+++

重

纂

(編三第) (編一

チェイを

善悪の彼出を子馬治澤の出

彼出岸生

郵稅 十二十錢 十二十錢

(編四第)

シラブラグマテス治校関田制佐

錢錢頜

(後附

4

図 英 ントルゴ・スシンラフ・ーサ 著 原

子鶴口原以

裏選家 偉 あ 3 族 4 器 3 係 詩 を 樂家 紹 B な 傳 急 萬 事 敎

刊新



新 稅 十 二 錢 新 稅 十 二 錢

部版出學大田稻早(三三一一替遞) 所行發

(T)

宗

傳

3

沭

立

他其野星屋古名館文盛阪大堂海東橋京館隆北橋京堂誠至橋本日堂京東田神捌賣

たりし松枝徳麿君は二月下旬盲腸炎、腹膜炎 早稲田大學政治科の秀才にして本誌の寄書家 ります。特別寄書家浮田博士も二月より三月 を併發し、 後間もなく、昨夏以來大患をわづらばれし合 にかけて大學病院に入院せられました。退院 失のみにあらず、本誌にとりて一大打撃であ 變じて十七日夜に永逝しました。早稻田の損 方に赴きましたが三月十五日より急性肺炎に 息文學士直樹君を失はれました。直樹君は四 松枝君は二十三歳、直樹君は三十一歳、逝き 撃たるのみならず、天下の損失であります。 大に爲すあらんとして起たず、浮田家の大打 十四年度帝大國史科を出でたる文學士、今後 しものは歸らず、青年讀者諸君の自愛を祈り 崎氏は頑健です。三月中は十一日に前 東京病院にて大手術を受け一時快

用の意を表します。同じ月の十七日夜九時半 十三日病死せられました。讀者諸君と共に敬 二三泊致すこと、なると申されてゐます。旅 ません。十三日頃歸京する筈です。 中或は誌友諸彦に會談する機會あるかも知れ 盛岡泊、八日仙臺泊の豫定の由です。仙臺には 四日は弘前泊、五日青森泊、 六日八戶泊、七日

計

東京市外巢鴨一四七〇相原方 評等に關しては 本誌の原稿、質問、新刊書批 購讀、交換、圖書取次、廣告 六合雜誌編輯局宛

東京市芝區三田四國町二 に關しては にて御送附又は御通信被下度 六合雜誌社營業部宛

宮城三縣の教育親察に出掛くる筈であります めに講演しました。循同氏は早稲田大學の依 扇ヶ谷に靜養中、昨今病を力め東京毎日新聞 ました。有田夫人産後の病あり、 る。小山東助氏、幾分か快き方なれども鎌倉 誌友有田畫伯は玉の如き男兒の父となられ 快復ないの

賴によりて四月三日夜出發して青森、

岩手、

ために、二十一日は埼玉縣村君村青年團のた 午後と夜講演し、十八日夜は横濱市教育會の 橋市組合教會の上毛婦人會及び教會のために

候

之を慶賀す。

の社論を執筆されてゐます。鈴木文治氏は歸 誌友加藤一夫氏は高田村鶉山に新婚生活を開 朝後勞働問題のため東奔西走されてゐます。 雜誌「勞働及產業」は益々發展しつ、あります

の講師奉職中、誌友目賀田正一氏も昨法科大氏は昨年法科大學卒業後高千穂高等商業學校 集「生の悲劇」を出しました。誌友嶺岸忠之助すく\繁忙なやうです。同氏は大同館より文 吉田絃二郎氏は早大の受持時間が増加してま り掛らうとしてねられます。その經營になる 始せられました。トルストイ主義の實行に取 「科學と文藝」も次第に地盤を固めついあり。 は遠からず大同館より「男女道徳論」を出版んとす。吾人は兩君の成功を祈る一條忠衛氏 學卒業後名古屋明治銀行に赴任せられしが、 すべし。高橋清吾氏は一昨年來コロンピア大 四月より高千穂高商の聘に應して教育者たら ヴァーツの學位を領せられた。同人一同深く 學に於ける勉學空しからず、過般マスター・オ



君 諸 生 0 學 歡 迎 耆 來 宿 御

下高

館

主

文學士

今

圌

信

良

本

鄉

區

追

分

町

電話下谷

四八四六

宿等

追分電車終點 3 1) Ħ. 分間

價 圓拾 錢 大 正四 送料 年 各 度 錢

FL

卷卷

心京三田 振替東京一〇〇〇三番 合 雜 八五五 誌 社 右

御

入 用

0)

御

方

は

至急御

申

込

あ

\$2

大正

Ti.

年

四

月

東

統 會集會案內

禮拜說教 傳道講 演 午毎 前日 十曜 時日 (當擔) ____ 諸 並

午每 後日 七耀 時日

家

良

= 並

良

基督教哲學

午前九時十五分

靈

交會

午毎

後木

七曜

時日

Ξ

並 良

人生等に對す

宇宙、

家

日曜學校

午每

前日

九曜

暗日

滿

る質疑等有りて頗る有意義の會合也 馬可傳を講ず、猶會員諸君の信仰告白

御遠慮なく 御來會下さい。 歡迎い たしま 一どの集りにも又、どなたでも自由に御 御聽きになることが出來ますか 五歳以上の少年男女の入學を歡迎す

芝區三田 四國町芝園橋際

す。

出席、

基督 五八五五番

基督教會集會案內

藏、永井柳太郎、 禮 拜說教 (毎日曜日、 安部磯雄、岸 東助、相原一郎介等交代雄、岸本能武太、岡田哲 午前十時

組 して擔任す

げ 信仰に對する疑義を組し大に共進互琢の實を 各會員宅を巡回して開き會員相互の親睦を計 んとするものなり

塞

織 鄕 信 す。 基く團體なり、 小石川牛込等都下北部の人士 會は昨年六月成立し主として神田 仰を せられ自由基督教の立場 宣傳せんとする高潔 同感の士の來 よ な 9 會 3 包容 上より組 友情 to

的

田錦町三丁目女子 基督教

輔

·音樂學校內

劲 调 雑

ŦII 宗 誌 11 明 治

年 1-旣 往 餘 年. 0 歷 史 to 有 す 3 外一半一每 木 國ケケ 邦 行年年部 基 金金金曜 督 ケ 年

木

金圓圓

+ +

圓錢錢錢行

(0) な 教 界 最

本斯本の 渍 教理 To 闏 明 7 3 あ 0

淮

北

的

其

督

劲

寸

場

よ

4)

時

事

間

題

to

評

論

最

新

0

细

識

1-

依

9

(0) 修內 外 教 輩 to 減 訊 載 內 名 0 論 訊 7 新 淮 思 想家 0 研 金贊 清 新 な 3

聖

書

研

究

0

手

信

徘

家

庭

0

讀

物

7

好

適

誌 な

武 編 宫 111 th 耀 金 原 作 0 肋 顽 氏小 毎崎 號弘 執道 筆 渡 在 常 坳 古、 京 0 牧 里多 次 0 Ti. to 助 協

本 誌 0) 見 本 は 往 復 は カジ 4 12 1 御 由 越 次 翁 111 代進呈す ~

大 阪 基市

後附 五

雜 学 書 0 口

谷小波、 これからの家庭になくてならの四六版繪入の可愛らしい雜誌。 石井畫伯等。

刊月

毎月 春厄

地 醟 太 探 思 氏 偵 かっ To 小 # 6 悼 說 ts

P 館 4 談 口 0 就 見 7 字 書 3 或

献

展

0

根

義

字

問

高

教 大

軍

文科 東京學院 大學 文慶 商 理 子學 士 助 學 教 博 フ

二向工 高植安石丸正 蒲水北石時 橋松藤 山木 野原井 軍 兼 二 龍 雄安郎 文舟秋亭之郎

定價壹部送料共拾零錢

D

郵 定 稅 價

法

學

+

執筆者、櫻根醫學博士、

向教授、

巖

五 五

厘

錢

B 申 則 及 會 口會 込次第郵送す CK 費 年壹圓 出 員 版 圖 募 書 本 會 集 目 規

振替東京 九 一 一 電話本局五二五六 行所 東京市 3 字 0 8 ㅁ

法

學

+



(編三第)

(編五第)

(新四第)

交第

教高

授學

文學

士

速

水

源

著

定四 價

二版

金菱四

料八錢百

文 學 宮 木 和 古 著 定四份六 刊版 錢百 於料八錢

交 型 士 安 倍 能 成 著 定四度 可加工 錢四 泛料百 八錢頁

承出版四

TI N

番○四二六二京東替振 番○二四五局本話電

店替波岩

旧神京東 町保神南 兌發

巷

巫

は

東

大正五年四日

月一日發行

郁

月

E

H

發行

圖

京 D 御拂 は 律 料 か 口 御 3 成 洪 安 0 書籍 全 書 ま 6 及 せ 振 75 3 な 6 3 独 n

料 部 御 当 社 宛 扳 は to 所 要 必 す 必 3 書 御 質

料告廣誌本

普 普

特 表紙 等 回 通 通 以 匹 表 £ 面 紙 連續揭 は 頁以 出

下

0

廣

申

上 金

候

半

頁

六

圓

際

は

特 告

别 御

制 SENT SENT

引

可

仕

候

計 定 本

壹 # # 111 华 15 15 ケ 年 年 月

臨海 時外 は 郵 版税 村

價

號

出

0)

際

は、

規

定

辺

外外の

代金を申

受く

を除

頁

金頂

拾

金拾貳圓

分 分 前 削 金 金壹圓 金質 熕 錢 **電** 拾 拾 清國

Hi

錢 錢

郵

此 錢

郵

稅

錢

郵

稅 稅

北

發

行 所

所

東京市芝區愛冠町三丁日二番地 東京市芝區三田四國町ニノ 統 東洋印 比 基督教弘道 別株式 野 六 會社

話芝五八五五番 話

三田四國町東京市芝區

電話芝五八

五.

誌

營

業部 Ħ.

發

行

兼編

輯

海

輝力

刷

人 人

本錢拾

刷



500) 1

AMENDARY FOR A PARTITION OF THE PARTITIO

Unit Y

The state of the s

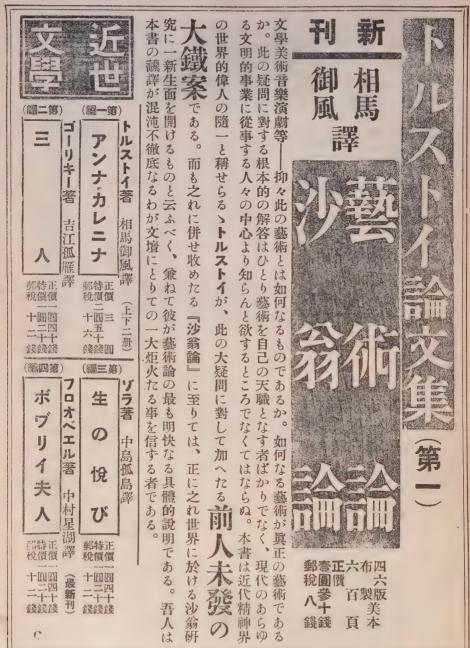
八合非結翰 一十一即於不明

《明治中五年三月二十七日第三種郵便物歌句》(大正五年三月廿八日中間《日隆行》(六台継続第三十六年第四號》(大正五年四月)日務行》(4月一間《日隆行》(



ライオン 商磨で!

不可見拾錢



部版出學大田稻早 (至三一一替版) 所行發

他其野星屋古名館文盛與大堂海東橋京館隆北橋京堂誠至橋本日堂京東田神捌賣

第 Fi. 編

文 學 11

す誰んの思著 るかと流想者 者企す露界曩にてるたのに 本得所る歌哲 書べた力迎學 のきりのを叢 '哲得書 る敢シ學た第 かてヨのら. 告哲一盲 '編

ぐ學ペ傳令と のンに認し ・ハ努識で 般ワめ論認 的しんの識 知のと第論 誠意す五を を志。版著 求に最をし めへも重 んし心ね獨 とゲガん自 すルをとの るの傾す見 者理ける識 5151,1513 力は理當よ のも想りも 哲て論てて 學光は新萬 の阴薯に丈 如を者哲の 何與が學光 なへ満概焰

るた腔論を

もるのを吐

の如抱公さ なき負にし る著をしに

か者以著、

をなて者湧 知ら世がく らずに全が んし問人如 ては格当

新

文東

科点

大帝

與國

譜大

師學

文

恩

紀

正

定菊

價版

周孔

7.11

錢六

+11

金



來且版四

倍 能 成

定四 價六 圓版 于四 经门 送月 金

新

Fil

成岩町保神南所行發 番〇四二六二京東替振 番〇二四五局本話電月

生知靈のう 取ほ: か 工鈴佐 沖 直 太龍 郎 郎司 清 郎

> 10元頁 ·
> 弄貨

現 代 思 潮

7 兀 基督教・野上で - 彌生子のサーナー サード・ボール サード はっぱい アイ・ボール サード サード・ボール サール サー 生子の放火殺人犯し上博士の神社宗教論 渦 期原の基 時

0

に處して

處

工

ル

・ ス

:二三員

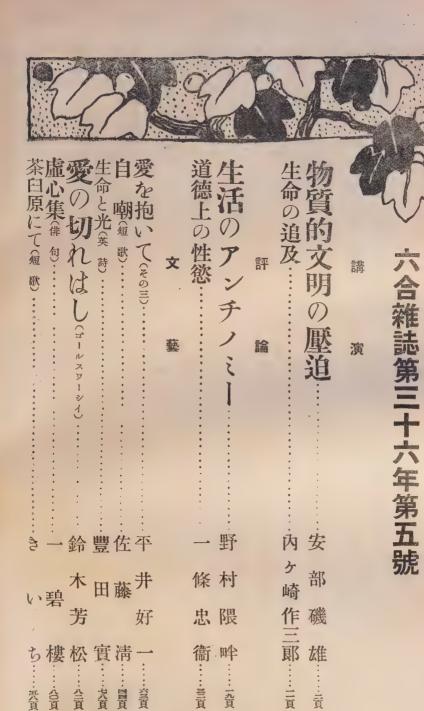
婦 人 の 王 员

千理 解 な るき結 婚 0 末路 V 女の 死亡率 日 本 婦 人 0 缺

0 日本 醜 業婦

賠

風 新 よ 刊批 9 た 3 編 輯 0 後 ス = ス 君 によりて 與 ~ 5 \$2 7: 3



誌 雜 合 六



號 月 五

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 424 May 1916

CONTENTS

Pressure of the Material Civilization Prof. Iso. Abe.	2
In Pursuit of LifeProf. S. Uchigasaki.	11
Antinomy of Life Z. Nomura.	19
Sexial Trick from the Moral Point of View I. Ichijo.	32
Letters of LoveT. Hirai.	63
A Bit o'Love (Galsworthy)Trans. by Y. Suzuki.	82
Songs of Life and Light (English)	78
Fragmental Thoughts G. Yoshida.	116
Spiritual Tide	59
At the Risk of Life Rev. N. Okino.	45
Short Poems Prof. K. Sato.	55
On the Hamor	109
Kingdom of Woman	138
Current Thought	123

Topics of the Day.

New Books.

Published Monthly by the

TŌITSU KRISTKYŌ KŌDŌKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

であ 而 統 上の壓迫 月に百 の貧民窟にて、下谷、金杉邊には一ヶ月六十錢の食費で生活して居る者さへ有つて、其大多數の人は であった。 った為 解剖して考へて見ると、 日三圓以 人平均一ヶ月の生活費二圓四十錢一日八錢、三度の食事を八錢で濟ますと云ふことが立派 計されて居る。 圓 此 方富豪 何うかは何人にも自明の事であらう。 0 カン 0 上一ヶ月に 世を捨 肉 ら発れんとする者であつて、實に考へて見ると馬鹿らしい。 物 カン 質 を食ひついあると云ふ、 し書の の某々家に養はれて居る飼犬や獵犬は何十頭と數へられて、其 0 斯る人は市内に二百三百ではなく、其全體より見れば百萬や二百萬はあるであらう。 て山 壓 積 迫 にに通者 足に反抗 12 ると百圓 如何にも馬鹿々々しくなる。 に隠遁 でする者 は政治上の して遂に田 しの事で カジ 斯 有つた 壓迫か あ る現象を來しつゝある。 園生活 る。 のと同意味 貧民 にと避 ら逃れ は る為 實に無價値なるものである。 けられるの であ 日八錢の めなのであつ る。 生活費に泣き、 古 6 現代文明が果して、 あ V る。 事 內務省 たが で は支那 丁度昔政 今日 の調査 一頭に要する食料 富豪に 0 0 公治上の 夫故少し考の は 伯 賞讚す可き文明 によると、 夫と異 夷 餇 叔 は 壓 な書物に る つて經 3 迫 , 獣は 其 カゴ 市內 は 强 濟 カン 3

抗せずには居られなくなる。 な百 兎に角物質文明が除 達と生活 を共にし、 り强烈になると、自分には生活 田 於此斯る繁劇な物質文明より離れて、遠く田舎に人を避け、純朴な民、可 園生活をば樂まる > 12 至 の壓迫は無くも、 るの 6 あ る。 人の事として考へて見ても反

輔 より出 畢 善 此 一たのに外ならない。 0 精 神は 昔 0 俠客 即ち强者に反抗して弱者の味方となつた人達である。 の氣質 より出 たの つであ 0 7 ŀ w ス ŀ イ、 カ ア ~ ン タ 然らば如何にして 7 1 等 4 此 の精



物 質的文明の 迫

部 磯 雄

安

然な田 文學者として有名な人々が、 田園 カジ あ 思を疑らされたのであ カゞ る。 近頃 ŀ 鄉里越後 一に移る人々が、決して少くないと思ふ。 jν ス 文學者などの中に、 園生活 而して何故 ŀ 1 \dot{o} に歸つて田園生活に入られた。又表面現はれて居らぬ人々の中にもかいる生活を望 12 入られ 田園生活を慕つて武藏野に居を構へられたが、最近には今の文壇に名かる相 17 如此 たので つるが、 事に出でられ 繁劇な都會より離れて田園に引き込まんとする者がある。 ある。 斯 田園に歸 る人人 K つて、 は僅 たかと云 か有 西洋では、 百姓と交はり、 ふに、 つて 心 皆現代の物質文明の壓迫に反抗して、 トルス 何等 極 カン トイ、 世の めて自由 中 0 カアペン 爲 な生活 め 12 與 12 タ 1 入られ る 0 先には德富蘆花 處 如 2 カジ 7 有る 思 極 想を練 哲 馬 學 御 4 めて自 風氏 ので んで 2

壓迫を感ぜぬ者は無いであらう。 質 0 壓 迫 とは如何なる事 か。今日は如何なる人と雖も、 即ち生活難を感ぜしめられぬ者は無いであらう。而して其生活難を 夫が意識的なると否とを問はず、 物質

0

き翼 利 0 は 5矢張 で一度に五千、六千と殪された。軍人に對しては、左まで苦痛を感じなかつたが、 ひ振を示して居る。 多くの富を有する多くの武器を有する聯合軍側に歸するであらう。 勿論個人々々としての獨兵には英佛兵の到底敵する處ではないが、 日露 戦 争に於て、 最後 軍艦 旅順 0 勝

大抵 壓迫 など る小數 つて 初瀬の沈沒は實に苦痛であつた。 には、 顧 居 肺 絲 る る 病 工業に從事する工女は大抵 0 人にのみ カン 5 なくして、 冒す處となつて居 斯る人達より生 に激甚に 集中して、多數 富を得る事 至るのである。 る。 n 幸 にのみ熱中して居るからである。 7 十六歳から二十二三までの者だが、 の人は職業をさへ失つて居る狀態、 來る第 12 して病 二の には発れ 國 民 たも は 極 めて羸 0 3 身體 弱なものである。 而して は疲憊しきつて、 二三年 幸にして職業は有するも生活 斯くして得た 0 後 12 之れ皆、 歸 至つ つて る富 人間 來 7 る者 虚 は皆、或 生命 にな

日

17

日

等富豪 程 する のと何の 一族を除 の野 選 は已に の三百大名は撤 心 異る所はない。 いいて他 家が 力 權 を以 の 二百三百に止まらな 無 票も 7 < 0 階級に て良 しては今の 吾 廢せられたるも、 人の有 V が、若 更に吾々の厭惡に堪へぬは、一代に成功せる者に非ずして、 は何の權力も認 衆 する ī 議院議員 いの 斯る野心を起てされたら、 票も である。今の大宮豪は昔の 之に代るに金力の められず切捨 四百人位を手中にするは容易な事であつて、 政治上何の異 御 る 大名と云ふもの 発の壓迫 處はな 金權 加賀公以上の權力者 V に對し カジ なき者は全然頭が L して何の カゴ かも決して平等では 出 來、 反抗も 百 と爲つた。 I萬以 上らなくなる。 為し 幸に 如何に孱弱な身 上を持 得なかつた 金 13 彼 い等の有 vo 者に左 0 て居 彼

精巧な機械と機械との戰がしからしめたのであつて、現今獨逸は四面敵に圍繞されて然も猶目覺まし に重 は、 從つて軍人よりも機械としての武器 7 治上の平等は得られ、人類の幸福は全く完成さるゝものと思つたが、今は却つて、經濟的 人民 て、吾人は此 H り來る壓 ので であるゝに至り、 資本制度の變化より來つたもので、 人は政治 は は 大資 あつて、 經 佛蘭 其暴 輕 濟 迫の為め、より强き困難を感ずることゝなつた。 んぜられて機械が重ぜらるゝに至つた。戰爭に於ても今日は機械と機械との 本を投じて、 は 政 0 西 12 無かつた、 事 一革命は實行された。 12 は關與することが 一方より見て、 に對して滿腔の贊成と感謝とを禁じ得ぬ者の一人であるが、 耐 へられずして 昔は人間 政治 大規模な工 のみ有つた。 其生產 が機械を使つたのに反し、今日は人間 出來なか 爆發 場 此の事を今より見れば、世界に於ける最も注意す可き事質であ が重ぜらるゝに至つた。歐洲の大戰亂が悲惨を極めて居 力の に因 したの 昔は小資本を以て小器具を用 つた。 iffi 增 9 加 T して政治 かざ で霧山 は頗 :彼の 故に小數者階級は專橫 0 る喜ぶ可き現象なるも、 佛蘭西革命である。 生産 0 權 を 申す込もなく今日 は或る小 度に為すと云ふに至 敷者 が機械に使 3 て仕 以に政治 の階級に屬して居 政治上の權 之が 事 0 文明 人は此 を爲 を行 為 は つた。 0 i かざ め るゝ事となった。 利 の事に 機 たの 如斯 たるに 0 戦に變じた。 械 遂に 0 平 つて、 12 12 0 不平 至った 等を得ん るの 力が よりて政 起 反 大多數 因 する 等よ 大多 は 0 2

m

1

て今

Ė

物質文明を是認すれ

ば或

る小

の富者

は満

足

する

も、多數の貧民は不

滿を発れ

得

75

反 0

抗抗

Ų

あ

50

る社

會

に於て

鬪

爭 數

は絶えない。

其處で少しく知慮を有する者

は

斯

る爭

鬪

B 其 重 理 は 全く 蹂 遲 1 盡くされんとし、 却つて國家の御用を勤むるに至つて居る。 是れ實に宗教に

す る大 辱 と云 は 12 ば ななら

つてい を得 今日 にし 0 て居 は 為 國を侵され 歐 洲 一奪するに め み、 る。 7 V2 の大戦争 と考へて居つた 何方 17 國 0 遂に 英國 を富 戰 戰 爭 カゴ 正 と云 及 7 は が勃發し ノベ カゴ ます可き グ 居る カン TE. 世界各 び、 ンダッ 何 3 義 カバ 方 俄 0 カン ト鐵 らで た 國 カ カン カゴ たので カゴ 邪 めの戦だと云ふが、 に占 攻めて行く方より見れば攻めねば却つて攻められるか 12 0 かは 道 問 あ 獨逸勞働 態度を變 つて、 あ 一めた地 題の 12 何人も る。 於て英獨の衝突を見たるが 外にな 矢張 著の 歩を獨逸 實に恐怖すべ へて戦 判斷 Vo り今の 如きも、 は 12 雙方に かが 反抗 0 小さな戦 、狙ひ、 戰 カン きは 爭 じ始 自 82 ずは經濟 正義は認め得られない。 國 一等は 歐洲 めた。 人間 アフリカ、 0 軍 如き、 別として大戦争は 上 隊 0 個 勞働 所 0 カゴ 人 衝突である。 カジ 白 R 尚斯 佛 國 者 11 12 を 蘭 0 N カゴ カン、 物慾 犯 始 る衝突を幾 西 0 L め 舉 佛 は 0) 敵 發展 ~ 皆經濟 如 國 正 ら攻 何 から jν 義 12 ___ 致で 攻 攻 0 度 6 シ にして生きん 勢に出 へめて 爲 Ŀ め あ カ> P 方面 重 0 入 あ め 衝突より來 る 6 0 來 和 露 戰 た 來 所 づ 活 Ü る 爭 カ> 0 ら防 躍 カ> て逐に 0 0 は 0 如 6 せん 3 止 部 何 あ 衞 T

從 12 餉 つて富者 T て、 12 比 較 的 平穏な自然な田 園 生活 にと入られるに至るの であると思ふ。

25 何を衣 基 督 教 んと憂慮こと勿れ、 敎 訓訓 は 頭 徹 尾真 たゞ神の國を求めよ然ば是等の物は爾等に加へらるべし』 理 を教ゆるものである。『汝等生命の 為 に何を 食以 何を飲み と説 また身體 かれ 7 0 居 爲

であ ので、 る。 その前に 斯 如何 る物 は大學出の秀才も、品性を有する高潔の に品性下劣なる子孫であつても、 質文明 かが 完成され た以上、 果して喜ぶべきか否か、 父祖 の財産に依り、 士也、 主人と仰ぎて世を渡らねばならぬ一事 吾人は實に斯 金權者として權威を有つて居る 0 傾 向を目撃し

毛髪の慄然

たるを禁じ得

ない

0

であ

は立派 將軍は、 堂に のではない。 て居つたと同 て來て 間 般に宗教 25 如 の行く可き道なりと信ずる。 比して、 集まり 一何にして如此傾向を現出したか、吾人の信ずる所を明に申して見れば、 逐 なものが 其凱旋 に 12 な宗 が神に 宗教 一對する敬虔の念を失 忘られ 宗教は國家の上に超越して、 じやらに宗教は物質 敎 旅 あ に對する崇敬の念が非常に薄らいだことに原因すると思ふ。 して歸るに及び人民に告げて曰く『天獨逸を助けたり』と又露國では日 カジ 稿 るが、國家に現はれた宗教は實に不徹底極まるもので、 カン 何處 を捧げて居る けて來た。 17 在 る。 然 封 U 聖書 るに が、是れ全く宗教を道具に使つて居るのであ 0) 建 カ> けて 壓 0 迫 世、 今日は物 0 0 何處に戰 來た。 爲めに、其光を失つて居る。しかし未 德川 あらゆる事象を批判し指導して行かねばならぬ。 歐洲 0 質 0 争を是認し 勢力の 壓 大亂 迫 旺 カジ 0 盛な時に 餘 勃發も其為めと思ふ。 7 5 居 る所 强 烈の 在つては、 カゴ 爲 か 彼の る。 め宗教を考 世界の全體 今日は二十年前三十 宗教 陛下の る。 獨 だ 逸 個 吾人は宗教 神 0 人 とは 御 カゴ E K を定 る餘 斯 稜威 戰 K より見 デ 0 争 るけ 然るに今 され めて、會 裕 は ン は を失 真 るも ち 助 ~ 敎 蔽 jν ける はれ な 心 42 年 グ 17 前

6

る 倒 は、 たり つて、 0 人 3 五. 25 間 2 云 カゴ h 例 馬 此 百 妓 仓 L ことが 財 K H た 圓 鹿だ 處 家族 限 7/ 布 0) 12 决 收 為であ 睦 入 となる。 思い及ばずして其 に行く為 カゴ 0 36 h して 思 會を 有 とより 佪 底を知ることが 入 かざ 同 0 < 人に カジ じ收 カゴ 有 衣食住は日本と云 CA る る。 起 開 食 之は寧ろ食慾で から わ る 高價 此 ば めで ス 故 て
さ
な くと 慾 も了解さ カン 英國 より カン らず 6 金 然らず。 12 思 な着 葡 あつて、 カン あ 經濟組 v 水つた は 觩 を各に 云 る 0 出來れ 一箇年 つつて な n 物を買つたりするは皆 布 から の形式のみに制裁を加 るか 日 V 故 反 0 に、 本などで料 料 0 は 對 底 分 之は贅澤 ふ大會社 織 從つて 5 ば、 ではな 配 無 カゴ 0 理やなどへ出 論 17 生産高 とり 知 すれ よつ くて、 者 門構を飾 三越邊 は n た 昔羅 誰 Y2 ば S が保險して居る事になる。 T 12 7 收 百 四 理やの盛況 3 ことに原因す は 非ずして 人の 二百 米國 圓 彼 入が 馬 > へ行く人間 奢 入する者 つたり、立 0 36 12 家 1億圓 多 鶯 虚 虚榮からである。 へたが故 ス 0) 族を有力 定さ 國家 學 楽を 1 0 を爲す者 なの 生 人 プ ス 張 るの は は を 1 は家で粗食をする 口 n 0 する家 大抵 る者 を四 に行 貧乏生活 は自宅で惡食をして 無 出 派 7 プ な衣 國家 3 を 6 4 L 肾十五 無く 「千萬 あ 12 76 はれな 十五 服 0 は 艺艺 1 杯 無 て、 な 年 若し各 誰 を賜 < 6 百 など着け 人と見れ る。 二千 なる。 ふ名 カ> 毎 F F でも一つの 露 IV 門 つたのであつて即ち其 w 0 月 今の 一譽心、 圓 0 0 作 力入 自 .構 して居 て誇 を立 賄 0 學 食物 左なくば何 ば之を一人前 じ 9 0 生計 居 客 收 B 費 金 12 る主 滿 派 らに るの 入高 務に從事してさへ居 額 で 虚 12 0 りとするやらな 費を得 一个 慾に あ 出 12 足 を受くる 6 人 L る が定 L 奢 L 7 處 た 侈 あ カジ より た は カゴ まつ 者 獨 居 際 る。 力) カゴ 5 割 を各 限 n 9 つて 來 盛 り當 4: カジ 6 本末 T 卽 た 有 な 肉 カゴ 嗇 甘 决 無 人 越 0 ち を 0) ると云 食 6 は 12 12 あ 何 ると を顛 V 物 ٤ 72 A n

9

神の向 のとなし、家族も社會 力 食住なのである。 は食ふ為に生存するものではなく、飲食は生きる為の手段であつて目的ではな 事の如くに考へ かが 精神生活を高調すれば飲食の事 上の為に費さねばならぬ。而して斯る事は決して出來ない事ではない。 りに とは精神生活に入れと云ふことであつて、知識を出來る丈磨さ、 强 烈の爲め、 られ 故に從來衣食住に七八分を勞したに對して今後は此の事に二三分を費し、他 て居る。 る精神的に非常に美しい立派なものとしたいのであって、 吾等生活の十中の八九は衣食住 人間 カジ 物質の うは自然に解決さるゝと云ふことである。然るに今の世 為 に支配され て居るとは實に慨嘆 一の事で思ひ惱まされて居る、 品性を出 す可きで いる。一神 夫に達する手段 來 は 0 然 或 な 砂 夫 は 其 力>。 か 物質の勢 普通 は皆精 尚 E なる かが 人間

Ш

斯る謬想が習慣となつて、人の心を支配して居る。女學生なども先づ制服を定め、何處 娘を嫁に遣るにしても、仕度の心配に苦しむ。娘を遣つたり仕度をしたり、そんな必要が つたと反駁されるが、それは間違つた見解で、斯る事は個人々々の意思の力に依らねばならね。 と云ふ、 て其精力を精 は不知不識の中に習慣や傳說に囚はれて居る為に何時までも經濟的の獨立が出來ない。 日 ば足ることにすれば、生活は非常に簡便で、今の如く衣服 本で 神 生 百 活 村 に振 建 時 ら向 代 12 けて行 は 切綿服にせよと嚴重 かば、 經濟は自然に獨立が に布令を出したことが有るが 出來る。 の事に思ひ惱むてとは無 しかし或人はそれ 夫は へ行くに 何處にある。 行 は は 例 理 n 然る いも夫 へば なか なり 而し



生命の追求

引照。創世記第二章—約翰默示錄第二十二章

内ヶ崎 作三郎

督教は生命を追求するの宗教である。生命を實現するの道である。 ての 不平や煩悶の波浪を起すのである。我々は空氣を呼吸するやらに天地の大生命を呼吸して生きてゐる。 に人間 て云ひけらく、人は小にして限り有るに神は大にして限り無し、而して今此の神此の人に宿れ 舊約最初の一卷と新約最後の一卷とに、共に「生命の樹」の語あるは興味あることである。實にや基 ぞ の煩悶は生ずと。人は皆神より來る大生命を小なる心に湛へてゐる。 カジ 異常なる發達を遂げたのはユダャ人の間に於いていあつた。 カーライルは其の衣裝哲學に於い 故に動もすれ ば汎濫 9 此

である。 り多い所であつた。彼等は此の間 史家 は歴史に働く二大要因を擧げて物的原因と人的原因とを示してゐる。ユダャ人の國は石山 彼等が或はウルよりカナンに、或はカナンよりエジプトに、或ひは又エジプトよりアラビャ より逃れ出て、生命の自由を求むること實に切なるものが あ つたの ばか

る。 等は此の方向轉換に力を盡して行かねばならぬ。軈て之が基督教者の態度で無ければならない。 となるのであるが、精神生活は、宇宙、空間を貫いて行はるへのであるから物質競爭の如く衝突 決して起こらない。物質の競争は場所の奪い合い食物の食い合いであつて、結局は今度のやうな戰爭 は失業の憂はないから、驀地に精神生活に向つて突進して行くことが出來る。物質的な慘憺な競爭は るの要あらん哉。吾等は借錢迄して娘の嫁入仕度は作らない。そんな金が有れば充分教育を授けて遣 に到達する事が出來る。真に真面目に考へれば何の事も無い、何ぞ世の醜惡なる習慣、傳說 大なる生産も容易に成り隨つて物質界の富も自然に吾々の頭上に落ちて來ることになると確信して居 る。明鮮へでも支那へでも歐洲へでも連れて行つて大に見識を廣めてやる。物質生活に堕落せずして、 い。天才は益々其才幹を發揮するも決して他の人を傷けない。如斯して二代三代と過さば、 神生活に生きて行く。今日の文明は實に行く可き道を穿き違へて居る。 之が や高 人間真 調 され、 の生活である。然し斯る社會の現出には餘りに遠いが、一年々々と實行して行かば遂 知識 は、 いやが上にも進歩し『汝等神の國と正義とを求めよさらば與へられむ』で、 方面を誤つて居る。故に吾 に囚 精神生活 はる が無

(三月二十三日統一教會說教)

有たるべしと云ひ、出陣の勇士は彼等の防護せんとする十字の章を其の衣に着けた」。 eifi 12 活過すべ ŋ は努めて彼等の は からざる十字軍となり、「僧侶は皆説教して天國は此の戰のために其の身を殉じたるもの、 知らず識らず彼等の戰勝を齎すものゝやらに考へられた。此の結果は延いて中世文明史上 舊信仰を破壞することなく、唯之をキリストの精神に化するやうに心掛けたので、

史 は の覺者たることを信ずる。けれどもキリスト一人が此の世の「世界苦」を管 0 であゝを待つべきではない。我等も彼と苦しみを共にして同じく努力しなければなら**ぬ** 企 は 然し乍ら今日に於いては十字軍は最早我等の理想とする宗教運動ではない。 のスフキンクスなのである。近きは人の心を研究する心理學より、遠きは天涯幽かにほゝ笑みを 君、 試 みに眼を開 枚の 紙、一箇のストーヴ、一臺のピアノも其の起原を尋ねるならば實に大いなる文明 いて周圍を見よ。事々物々一として我等の心に不可思議の影を映さゞるはない めて我等は安閑 我等はキリス トが . 人類

7 トランティス」に書いた夢想の郷土は今や現實の世界となつたのである。

らす彼の星を觀察する天文學に至るまで、百般の「學問の進步」は何うであらう。ベーコン

は んとする者である。 此 ・リス の時 目 度 小さな人間の靈と此の大なる世界の靈との間の大なる調和を認め、之を實現しようと努めた トである。云は、彼は神より得たる愛の泉を其のまゝ濁すことなく我々に示したのである。 に當つて我が基督教の使命とすべきは何であらう。 (哲人)であつた。而して此の調和を最も單的に直覺し、之を最も如實に實現したる者 而して 此の生命を實現するの道より云へば、 キリス 我 トは我 々の心程不可 々により充實せる生命を與 思議 はないのであ

てとを示するのではあるまいか。 轉々として渡り歩いたことは、 彼等が如何に生命の要求を滿足せしむるに熱心であつたかと云ふ

燔祭の香煙 く喜んで働け、曰く汝の敵を愛せよ、一として生命の追求と實現とを說くにあらざるは無い。 して道徳的 であつた。 吾如何にして救はるべき。 彼の教 倫理 然るに よる所や極めて簡單、曰く汝自身の如く汝の隣人を愛せよ、曰く不平を云ふこと勿れ、 は高く天上界に舞 一的 な宗教を説くに至つた。イエ 西紀前 八世 昔の 紀紀の ひ昇つた。 頃から大小の豫言者が輩出して、 二 ダ ャ人は専ら儀式によると考へた。 神てれを嗅ぎ、 スは實に此の豫言者の、最 彼等を赦し給ふ。 此の迷信的な形式的 小羊 斯くの 後にして最大なる者 は屠られて生贄 如 く彼等は考 な宗教 に反對 たの 日

此 徐 を示してゐる。 12 變したのである。 # IJ IJ 紀 ス ス 0 ŀ 哲學 頃ア に關する考へ方も次第に變つて來てゐる。 更に基督教が フ カゴ リカ 起つてキリ 0 7 v ローマ人の所謂北方蠻族の間に傳へらるゝに及んで、 ス ク ŀ サ をロ ン F ゴ゛ リヤに、ギリシ ス(理智)の發現なりとするに至つた。彼の約翰傳は之が影響 ヤ思潮とヘブライ思潮とが渦を卷いて流れ込み、 原始教會ではキリス トの 復活 キリス に重きを措 ト觀 いた。

て突撃す、 所 いに至り、 蓋し此等蠻族の信仰は極めて原始的な殺伐なものであつた。曰く、戰士死すればワルハルラと云ふ 終日戰 かくて未來永劫に彼等は勇敢なる戰鬪を繼續すべしと。 一闘を以て事となす、傷つき斃れたる者も、一夜明くれば自然に癒えて ローマ法皇から派遣せられた宣教 再 CK 関 を造

ある。

抑

ビデの作と云はれる詩篇やソロモンの箴言も、實はダビデ一人、 無謬説を信じてゐる。然し乍ら近代の研究によれば所謂モーゼの五經は實はモーゼの作ではなく、 のでないと云よことが明かになつた。 ソロ モン一人の手で一時に出來たも

中に流れる態度である。部分として見れば幾多の誤謬や寧ろ滑稽と思はれる所もあるのである。然る 間 慰め、人間を墮落より高める所に價値が有るのである。 られないで、能く全體としての精神を取ねばならね。新約に就ても亦さうである。 12 四千年前の野蠻なる習慣を其のま、今日に行はんとするのは愚である。我々は其の一字一 、生命を追求したる記録として價値が有るのである。其の眞價のあるのは全體としてゞある。全體の 然らば舊約全書の價値 は大いに減じたかと云ふに決してさうではない。其はユダャ民族が二千年の 其は人間 0) 句に捕 不幸を

Ξ

會では盛んなる音樂を起して人を集める、それもよいと思ふ。然し乍ら教會にはもつと重大な意味が 正教や聖公會の教會に行つて神秘的氣分を味ふ、これも決して惡いことではない。 私 近來教會寺院に集るのを以て直ちに迷信なりと考へる人が多くなつた。これにも一理有る。けれど は教會寺院の制度には、もつと新しい意味が有るに違ひないと思ふ。或る人は加徒立教やギリシ 又アメリカ 0 教

、々我々は何の爲めに敎會に集るのであらう。我々の理想の高くなると共に、我々は益々多くの矛

畏服 ンは はくは我 カ> 彼 つた は學者ではない。しか し、其の意志は我をして爲す所を知らざらしむ」と。 長嘆息して言ひけらく、キッス に慈 渦 悲を垂 卷く煙 n 0 給 Ť から も彼の宗教改革の先驅者たる 斷 末魔の聲も絶えくに祈るやう、生ける神 叉キ トに就ては一つとして我を驚かさ ・リス トは馬上天下を取 3 ーハネ るの豪傑 ス・フスは何の では いるものなし、 な 0 爲 子 カ> めに つた。 イ 工 、焚刑の ス・キ 其の L カン ・リス 精神 多 ナ は 术 我を 願 才

け!天の自由なる空氣を導き入れよ!」とローランは云つた。然り現代は窓を開くの時である、 晤 以 を導き入るゝの時である。 い室に閉ぢこもつてゐては駄目だ。斯くの如きは最早我々の理想とする宗教生活ではない。「窓を開 て足れりとすべき時では らば キリス トの教 ふる生命質現の道 無 S 合理 一的な生活を送ることが即ちそれである。中世の は如何にしてなさるべきか。 今日 は決して天を仰 修道院のやうに、

(0) 健 る手段を盡して 派と知 會の內容も亦違つて來た。 從來 を求 0 抽象的 める人の集る所とな 健康 觀念は次第に具 を進 つめ、 知識 昔の教會は祈禱し懺悔する人々の集る所であつたが、 った。 體的となり、 を増し、 我々は神より與 以て合 愛の 理的なる生活 あ る 所 へられたる生命を充實し實現するに に神 あ をしなけ りとい ればなら ふやらに なっ ¥2 今の た。 神 教會 0 觀 は 念も緩 有ら 更に

甞ては、

否、

今も尚多くの人々は聖書中の全ての言葉を其のまゝ

神の顯はれであるとし、

所謂

開 、

門族より出でずして王士族なる刹帝利の家より出でたるも亦興味あることである。 としたことではな 具さに其の實世 門宗教家の閉ぢこもつてゐた修道院や、教會の窓を開いて俗人の 彼 に超然として一社 了つたの 0 削 ジェス 12 26 であ イット 1 ・ラ る。 間 派 一會一階級を形づくるべき時代ではない。 てれ かつたか。 二の難儀苦勞を甞め、此の間にあつてより具體的 0 0 語 開 を引いて云つたやらに、 即ち宗教家は偽善者なりとの風潮 祖たるイグナチウ 彼等は或る意味に於て素 ス・ロョラの使命は何であつたか。一言にして之を蓋せば専 現代は窓を開くべき時である。 人宗教家で を生じたる重大原因であらうと思はれる。 聖フランシス、聖ドミニクス、叉下つては あ 社會に飛び出 により實際的 2 た。 釋尊 専門宗教家が俗 カジ 12 L 専門宗教家なる波羅 イ 斯くて俗 工 ス 0 志 を行 人の上 はんん 共に

卫

なる仕 る。 實業家に會つて見るが何度となく物足らない。是即ち彼等に人生に對する統 我 教會 々は専門宗教家を標榜しないで生命統一の道を説かねばならぬ。我々は有名なる教育家 事にも大きなゆつたりした心を以て當るやうに は此の 缺陷を救はねばならぬ。これが爲めには弱さを強くし、 教 和 は ならぬ。 思か なる者に知 一的思想の 無 識を與 V 科 為 へ、小 めであ

る生命の泉である。 7 我 7 は る 色 カン らで k な仕 あ る。 事 すをし 恍惚無我の境に入つて神の幻想を見るのは、最早我々の云ふ所の宗教的 斯くて心をゆ 7 ねる かい n あまり矛盾 カン 12 して おれ を感じな ば仕 事をしても疲勞 何 しとなれ ば カジ 少少。 切を生命 これ の實現であ 卽 ち宗教 實驗 ると考 では 與

あらう。

哀れ其の 思ひを廻らせば、精神生活 盾や撞着に苦しめられる。我々は日夜物質生活の爲めに東奔西走してゐる。夜深く更け渡る頃、 にも其と認めることさへ出來ない。 日となれば物質生活の激浪高く騒 ――なつかしき青春の時に、あれ程熱心に追求した精神生活の影は今やか あゝ明日よりは斯うしては居られないと決心する。 いで理想の船を沈めて了ふ。 此の間の苦しみいか けれ ば 獨坐 りで ども

全體 我 は しなければならぬ。 9 のは無いと思つてゐる。其にも多少尤もな所は有らう。然しこれが甚だしくなると人間は斷片的にな ようと努力する。又かくて再び理想に向つて猛進する。こゝに新なる元氣が生ずるのである。 なの 銀行の事ばかり考へてゐる。敎師は學校ばかりが偉いやうに云つてゐる。實業家は商賣よりよいも 然るに今我 偏狭になって、 として考へることが出來なくなる。 部 一分的 活動の 、々は斯うして敎會にある間、よしや束の間の時にもせよ、此の矛盾、此の撞着を調和 原動 過去未來のことは少しも考へないで唯あわたゞしい現實にのみ捕 力を得る所なのである。 而して教會は實に此 教會は知識を與へ、哲學を教へ、人生を統一し綜合 の全體 としての生命を味ひ、 へられ、人世を 之よりして 銀行家

年もしくは數千年前の真理と少しも違はない。しかも此の間に世の人々は遙かに彼を越えて進步して の人心に浸入してゐる。宗教家は必らずしも嘘を云はない。 近年來宗教家は嘘を云ふものであると云ふ風に考へられるやらになつた。此の考へは最早深く社會 唯彼の口にする眞理は形式内容共に數百



生活のアンチノミー

(規範と法則に 就

村

隈

晔

價值 要來するやうに活きようと自覺するとき、そこに生活における意味と價値といふものが とは考へられない。言ひ換へれば物質的の意味 學的意味で)の勞作とを必要とするけれども、 續けて行くに 見える。そして斯うした生活には大した意義がありさらにも思はれない。尤も物質上に のまゝに、 吾 そして吾々は最も意味のある最も價値のある生活を真質な生活だとして努力するやうになる。だ れども吾々が自分の生活を最も滿足することの出來るやうに、言ひ換へれば吾々の 々が何等の思索もせずに生きて居るときは、吾々の生活は洵に容易に且つ單純に行はれるやうに 即ち意志の努力や肉體の勞作なども自然必然の拘束に强いられて續けてゐるに過ぎな は何人も其れ相應の努力、 即ち或る意味に於ける意志の努力と肉體上及び精神上 それ にお は何 いての意志 も積極的に生活 本義 があるとは考へられ切。唯 の努力や肉體 の第一 の勢作とても全然生 の意義 を構 意識されれ來 本來の性質の 相當な生活を 吾 成 する K (心理 自然 76 活

我々は立 ない。己れに對し、人に對し、家族に對し、 派 に宗教的になつてゐるのである。 國家に對して完全に責任を盡すことが出來さへすれば、

爲めには正義を叫んでも、哀れむべき婦人に對しては何の尊敬も同情も持つてゐないからである。今 に耽つてゐると云ふやうな事が往々にして有るものだ。何の故ぞ、曰く彼に統 Ħ 0 又公會に出で市民の為めに堂々と電車値上反對を唱へる人が裏面に入ると別人のやうになつて酒色 政治家その他の公人の社會に斯の種の人々が乏しくない。 一的觀念なく、 0

彼 の人物は決して宗教界に入らなくなるであらう。此の意味に於てはキリスト自ら大なる俗物であつて、 とはこんなものと極め込んで、中世の修道僧のやうな人を豫期してゐる。こんなことでは今後第一流 が卑しき婦人とすらも親しく語ったことは新約の示す所である。 本人が今日のやうにてせくしてばかりゐるならば、到底大國民にはなれない。日本人は宗教家

するのである。若し夫れ之が具體的なる研究修養に至っては、一に諸君の御工夫にあるのである。 我々は斯 く我 いいて天 々に人生の統一的觀念を與ふる宗教を必要とし、 の自由なる空氣を導き入れることは、今や宗教に取つて最も大切なること、なつた。 此の宗教を教ふる爲めに教團 を必要と

(三月十九日自田教會に於て)

識 であるが、 0 あ 80 自由要求 めて弱いといふことは、 この麻痺と不鮮明とは遂には吾々の は 單 を根 12 吾 本 的 マの に否定するやうな反規範的 理知 反面 0 結果に依るばかりでなく、 からいふと理想意識の麻 眞 結果、 の生活にとつて最も恐るべき、 卽ち自 その缺陷の源泉はもつて深くもつと吾々の 痺と人格的 然必然的な結果を持ち來たする 色彩の不鮮明とを意味するもの 言ひ換 へれ ば理 一想意 ので

一、內

部

にあるものであると思ふ。

本性 來の要求その n もなく、 するものとして存 要求と均 抗する即 として感じられるも で、到底吾々の個 として認容せざるを得ないの は單に吾々の 吾々にとつて詳しく言へば吾々の自我意識による生活要求にとつて、最も恐るべきものは ち反對 吾々の生活要求更にその根源に透徹してゐる自我意識そのものを否定しようとする傾 しく根 Z) 思 な要求をもつてゐる儼然たる事實である。だから斯かる傾動の 本的なものであり、持續的なものであつて、そは吾々の現在生活において 0 心惟的理知を通じて客觀から脅迫して來るのみでは 在する。而してかいる要求は亦それ自身に特有の規範(或は法則)をも 人的抹殺を許容しないものである。 > 裡に深く强 のでは ななく、 であ い根 それは吾 る。 低低をも つて なの自覺による自由要求と同じく而かもそれ ゐる傾動 即ち吾々は孰れの要求をも必然的 で a る。 この なく、 倾 動 吾々 は __ 時 0) 要求は價値的な自由 的 主 觀 或 は 的 は絶 な根 つて に最も强く抵 倏忽的 內 面 性 本 對 的 なもの 卽 ムまで 42 事實 對立 ち本 弘 2

ば吾々の自由であることを意味するものであるが、 カジ 真實を意識すると同 時 12 自 由 を要求する。 他面 m して自由 から見れば自由を阻碍せんとする勢力のある を要求するといふことは 二面 カン ら見れ

の生活 朝 それは も吾々の要求に近いと言ひ得る。然るにこの生活の自覺といふものは容易に實現されるものでは と自然法 ら生活 こ > に 的 ら自覺のある生活は生活そのものゝ意味と價値とを意識してゐる點において、自覺のない生 に考へた生活に存するばかりではなく、吾々の本性における根本の性質であると思惟するときは、 非常な努力、單に物質上における意味以上の奮鬪を要する。而してこの努力といふことは吾 、吾々は生活に對する熱烈な哲學的煩悶を經驗すると同時に、亦真摯嚴肅なる哲學的思索に闖入 の自覺といふことは換言すればそのアンチノミーの自覺であるが、而もこのアンチノミーが客 の意味を深くするものであるが、 則の要求との 矛盾乖離を意識するとさは、 更に吾々が 生活の自覺は一層深刻に痛烈となつて來る。だか 生活そのものゝアンチ ノミー即ち吾々本

せざるを得ないのである。

實に吾々自身にとつては最も直接なそして最も確實な、唯一の儼然たる實在である。吾々が生活の意 卽 味や理想を深く思索するに隨つて、また生活の真實な表現を憧がるゝに隨つてます~~自 者としての、言 ばそれ自身に唯一絶對の價値を有するものとしての吾々の內面性が、最も彩やか 强烈にする。而して亦斯く自由の要求の强烈なところに初めて人格者としての吾々の と執着とを意味 すち人格的色彩の濃厚と理想的香芬の芳烈とは、自由の欲求の强さの度に比例する。だから自由の欲求 吾 口々 は吾々自身の自由を欲求する。 ひ換へれば自我意識を有するものとしての吾々の必然的な内面的衝 して居るものであって、これは吾々にとって必然のものである。即ち自由 この自由の欲求は理想又は價値の意識と且つそれに對する憧憬 12 如實に發揮 国動力で 個 性 の要求 由 0 あつて、 欲求を

物

理

學

は

他

0)

自然科

的

不を與 狹 て、 洪 0 現象を最 ら言 3 人義 間 廧 そは 義 詮ずる ば、 普遍的 を 法 27 ふることは と考ふ 如何 法 る単 則 所 卽 則 物 一純に最 と言 るに 12 な效験性を有つたものである。 ち自然科學的 理 は を意味 普遍 矢 學 當 出 は 張 ばその **過價値**の 一來な 學に比して最 最 3 つては先 6 してゐる。 i 般的 般 この V. 材料を豊富に 的 法 中 故 12 目的 理 12 則を指してゐる。 づ に 理 規範をも含む(西田 規範と法則 解 余は 解 この意味 を遂行するに適合 0 契 ず 般的 八機 るに た 供給するとしても となるべ が自 との概念に な研究をなすからである あ の法則は自然科 分の る。 元 言へ換へれば規範 來自 博物學 当场 考 博士 然科 ~ した地 つい 丈けを今簡單 0 一の『思索と體驗』五七頁)のであ 學の を探究するに カゴ て明 學の認識 到 位にあるといふことが出來る。 V ろ 究 底 價值 竟目 カン < な見解を持つ必要が Norm に對立するも に述 75 的 0 の決定原理 根 對 は あ る。 象 べて見たいと思ふ。 千差萬別 柢を爲すも 0) だか 性 としての規範即ち不許 質を綿 5 な自 科 0 然界 る あるの 學 密 6 のとし 木 あ 力ジ 12 何故 9 來 記 ての であ 而 0 載 こ > では なれ 目 6 す してこ そは 的 る 60 は る カ>

客觀 最 極 カシ B 種 的 7 如 或は多 17 單 \dot{o} 般 な效験性を有つてゐる説明によつて初めて最も滿 何 純 的 な 3 象や複雑な現象を最 12 な終局要素を捕捉 る 0 場 理 現象 合 解 す 25 る 0) 36 中 又 かう 12 如 でなけ ,共通 何 し、 なる人にも 取も單純 'n 的 その に連 ば た 一繋して 數量 に理解するには、 6 VQ. 必ずその認容を求 的 孰 る な種 る關 n 12 なの 係 1 規定 を抽 7 出來得るだけ 足されるものである。 7 ら出 めることの 斯 によつて カン る認 1 してそれ 性 識 出 吾 質 0) を異 なの 要 12 來るやうな絕對 水 因 うて 經 は、 12 勿論 する諸 驗 凡て ずる 特殊 この 物象 物象 的 0 やらな普遍 複 或 雜 を は な 遍 。現象を 時 析 的 する 卽 的 性 ち 7 0

要求 冷酷 る阻 きる 7 他 #2 あ 來ないのであつて生活矛盾の苦痛は慘憺を極めざるを得ない。實にこの二律背反の自覺は最 殺すべからざる必然として、吾々自身が内面的に自覺して來るときは、 方を肯定するといふことは事實において不可能である。か 亦疑 る に本 のであらうか、吾々の生活努力と形而上的思索とはこのアンチノミーに向 は否定せざるを得ない。けれども何れも實在性と真實性とをもつて居るから、全然 に吾々の生活要求をして戦慄せしめる。 碍 語 口の換へれば吾々の自由でないことを豫想して居る。だから前にも述べたやうに、自由を要求する ふことの ら、これは先験的に真理である。けれどもこれに對抗する自然の要求たる自然必然的法則は、 的 一來の要求 了勢力 あ 吾 る時 々は生活の躓づさとなる所謂アンチノミーに逢着する。吾々の究局の希望は何處までも自 が單に吾々の進むべき途上に客觀物として存在するのみではなく、 出出 はど、 た 「來ず抹殺することの出來ない實在である。 る價値を實現するに在るのであ 吾々に深 い絶望と烈し 吾々の自由要求の根據たる價值規範は生活の根本生命で い苦悶とを與ふることはない。 るか 5, 若しこの希望を裏切りし或は簒奪する 一方の要求を全然容るゝとすれば他 >る生活の二律背反は 最早や如何ともすることは 丽 って集注せねばならぬ。 L 7 吾 カン 如 R 0 何 一方を否定して る自 內 に解決すべき 部 る最 0 由 到 12 が如 底 對 ٔح 12 抹 す

_

る興 は殆 、味のあることであるが、しかし歴史的研究は何處までも歴史的研究の範圍内に止まるべきであっ んどこの 由 と必然即ち規範と法則との二律背反は哲學上の重大な問題である。近世 間 題を中 心としての展開 といふことが 出 「來る。 だから之れを歴史的 12 に研 おける西洋の哲學史 究することは頗

間 1 ばならぬから、 22 6 しても、 規定するところのものである。 此 カジ カ> 說 の 規範 樣 明 的 無條件 その な科學的 0 原 0 特 理で 特 規範 的 徵 徵 あ に命令であるところの、 思惟 は はやはり事實や存 るに も法則も共に一 むしろ絶對 の要求に屬する法則はその究極の理想的な形においてはたとへ命令的であ 反 してそは 的 勿論 な不許不 般者 判 在 斷の 力> 一の法則たることにあるのであ 0 ゝる規定を爲する 隨つてそれ自身の要求によつて對象の 原理 自律自發 Sollen Z das 的な自己規 Prinzip der Beurteilung よつて價値 0 は普遍 を規定するところに 定或 は自 るが、 的 な價 己展開 規範 值 となるものである。 8 5 は之れに反してそれ 性質 0 ある た ふことが や質 から、 般 者 値 出 を根 6 「來る。 なけれ 自 ると 然法 本 自 的

生活の 者 吾 田 < る 居 口々 元 るもので 0 を豫想することなくして、 題 自身の 既に無條件 ものは、いふまでもなく道徳的 3 二形 意 意味を考ふることは出來ないのである。 現であると見るとが出來る。 ての 味 m 内部價値を直接に絕對化し普遍化する要求の法則だとい以得る。 カ> 上総に 認識や經驗隨つて自然界の成立して居る根 5 やはり吾々の内 V 的 へば、 17 意味そのものである。 起因する信念に過ぎない 吾 R 0 面的 思索でも活動でも凡て內部 而も直 規範である。だ 規 即ち自然科學のやうに客觀的事 範が 接に疑い 言ひ換へ あつて かも知 0 だから吾々の生活 餘 初 カン ら道 れば他 n 地 B を容れ ぬけれども、 て可能であると思は 據であるとさへ言ひ得ると思ふ。 德 0 的 から自律的に活らくところの絕對的 目的や 規範 ないも におけ は しか 質に最も忠質であると考へられ 價值 凡て のとして や可 0 る道徳的 しこの信念を否定しては 规 n 能 吾 る。 そうすると吾 範 口々 を豫想す 0 けれ 0 規範はそれ自身 根 生 柢 ども であ 活 ることなく、 0 勿論 この 現 なの るの 實 な命令 これ 4 B 形 12 でな 顯 0) 到 5 m 底 は は か 本 上

和 説明は吾 である。 殊的で、 到底普遍的妥當性を要求することが出來ない。何故といふに吾々の經驗內容は變化的流動的そして特 った、極めて形式的なそして數學的物理的意味のものであることは言ふまでもない。否らざるときは をもつた説明といふのは、吾々の直接の經驗に現はれる種々の性質や色彩などを悉く抽象し去つて了 ばならぬといる不可不 隨つてそは絕對的な普遍性を持つことの出 々の感覺的經驗を超越して居るのである。 Müssen の要求をもつた、 絕對的普遍的效験性を現はして居るのは即 而して何人も承認せねばならね又永久に斯く 一來ないものであるから。だから普遍性を要求する ち 法則

表現するものといふことが出來る。 ふに、 るものではなく、 論その超經驗的普遍的な妥當性にあるものであるから、對象そのものゝ獨特な價值 發現が普遍 度び經驗さるゝときは、それと同一 てその つて亦そは説明科學の原理 Das Prinzip der erklärenden Wissenschaft である。 斯様な法則の根據となるものは吾々が經驗する自然界の齊一、即ち或る一定の關係にある現象が一 記明の 經驗 根本は吾 的事質をそれに含まれてゐる客觀的な必然法によつて一般的に說明 原理となるところの自然法則は、普遍認識を目的とする科學的理 的に必然的 一々の理知の 却つて凡ての對象に超經驗的に包含されてゐる一般者 dus Allgemeine 或は普遍性を に豫想出來るといふ觀念にあるのであるが、 本來の要求に基づくのであ の關係にある一の要素が現はれるときには必ず前と同様な現象の る。 而してかゝる要求の目的 これは勿論超經驗的な假定であつ 知の要求に属するもので、 するに この原理の價 は何 を絕對的 ある。 6 あ だか に規定す るかとい 值 らか は勿

0 0 八 四 學者殊 である より ツ兩者 などは に 5 并 ハンデ の關係について余の考へを簡單に述べて見よう。固よりこの問題については西 余の 稍 と ベント(,, Präludien," 々詳しく論じて居るし、 考 ~ が之等諸士の 思想に負ふところ尠くないことは言ふまでもな Ħ 亦田邊元學士なども直 2,5.59-98)や我が西 接間 田幾太郎博士(『思索 接 12 この 問題を考究されて居る 是明明 驗 一角獨

近して居ると思ふ。余のこゝに考へむとする立場は純粹經驗を根據とする絕對價值論である。或は經 式は第三の に陷 反價値論であり、 験的理想論といつてもよからう。 は 今この だと法則とを説明するもので、 は哲學者のとる態度である。 ねる性 粹知覺」といふも 問題を解決するに、 のでこれ 質 ものに似 をも つて 第二は絶對價値 は自然科學者の立場である。一つは前と反對に規範から自然法を抽き出 て居るやうであるが、 居 0 るも カン ら説 大體 のであ からとするもの も一つは二者を超越した存 論であり、第三は汎價値論 これは 三樣の考へ方が る。 この U ...A. その内容においては根本的に異つてむしろ第二の 外 ンテック時代の形而上學者 12 もある。 强 あるやらに思はれる。 S 7 これは經驗論とでもいふべきもの 區別すると、 在即ち形而 であ る。 ~ 而して汎 Ŀ w のとつた立場で 的實在 グ つは自然法則 ン 價 2 0 值 の必然的顯現として 說 論 は S た直 カン 必然反價 で大 る。 する ら規範を抽 4 接 體 のに接 經 驗或 0) 值

得ない な V ヰ C もの 反 デ 料 jν 1 即ちそれより全く除かれて居るものを要求し得ない 18 ン な ドの考 V とか ふの へによると、 は規範的 自然法 活 動をなす吾 と規範 々の とは全然一致して居るも 良 心 は、 心 からである。 理 生活 0) 自 Õ 然必然 6 全然の一致でな は な 的 V 決 カジ 全然 定 0 いといふ 反 12 對 起 6 6

豫想によつてその價値を承認されるものではない。換言すれば道德的不許不即ちゾルレ 顯現であるといふ考へや、乃至は規範の規範たる標準はその普遍的 h 的 ふてとが出 あるといふ考へは凡て道徳的規範たる絶對不許不の自覺があつて言ひ得ることで、そは之等の信念や ば 的な信 なら る豫想や知識や要求を産み出すところの根本的な創造的流動的實在或は生産的概念であるとい 念とか 來 ると思 理想とかいふものは、 而して余の考へでは、 30 自然法 單に 一則における必然といふ考へや道徳的 種の心理的觀念ではなくて最も根 安當性 die Allgemeingiltigkeit 本的 規範 具象的 は二 ンの自覺は、 般者』の

て東 すべて認識すること出來ない 不可不の羈絆によつて束縛されるからではあるまい。 は は 義をなすものであり、そして自我の S 斯 『吾々の道徳的良心は不可不の法則を超えて命令することは出來ない』といふ思想には の様 識 縛されるとすれば、 たとへ良心の命令の結果が自然法則の範圍外に出ないとしても、むしろそれ 論 上解 に『ねばならね』といふ條件を容さない超験的 すべ からざるもの この からである。 不可不は自我 となる。 無上權威も亦この不許 何故 0 權威を破 なれば吾々の不許不を離れて客觀的 若し吾々の絕對的不許不が必然的 壊するも な要求即ち不許不は、 不に起因することも明 0 6 あ 5 そして 吾 日々の生 カン カコ は偶然 に存在する ゝる である。 活 不 不 0 12 結 左祖 可 お 印 不に 羽 果 だ H 不 出 3 なので カン よっ 存在 5 余

26

Personal Per

U 》上の説述で自然的法則(不可不)と道徳的規範(不許不)との性質が略ぼ明かになつたと思ふから、

せい 偱 5 ての 欲するならばそれが理想を體現するも その 理 最 一想は科學研究の 3 田邊學士の言ふやらに『若し自然科學の意義を正當に理 近の 0 であると思ふ。 自然科學二二一七頁)。 間に思惟 さらすると或る格段なる形式のみが特に選擇されることの理由が解らなく が從はなければ そしてこの理 0 であるといふことを認 ならぬ 想 は
邦ン
デル
バ 所の 不許不の規範として現はれるの めなければならなくなる。 生解し、 ンドのいふやうな普遍妥當性 其眞理の 何たるか で を知 なか 一郎ち ららと 而 5 價

73

る。

普遍 現はれ 理想として活らくところの 自 もので、 なる目 承認された單 タ てとは出來すいと思ふ。若し自然法を超越するとせば規範は自然法が過つて創造した、 然法に對するその 非 ルな根 ンデ 8 的 的 るものでなく、むしろ凡ての法則や關係や或は行動を絕對 僧 自然法と規範そのものとの ルバンドの規範と法則との關係の説明は、一 切の活動もかゝる規範を無視して 値 や豫想 據である。 を顯 なる形 現する自律的活 によつて擇 ル式では 他 若し規範が自然法 の一 不許 般的自然法 75 まれ いと思ふ。 不の た特殊の形式であらうとも、 動 かが 即ち規範なので、それは何も或る特殊の自然法の形式 要求ではなくて、 關係ではないと思 0 0 內面 關 無數 係である。 は到底その 的 0 形式 に獨自的に活らく不許不の要求がそれ自身に本有する から特選され 般的 300 けれども真の規範は或る目 かいる要求を實現する方便として選まれ 存在 卽 な自然法と特 を持續すること不可 ち凡 所詮自然 ての自 た形式だとすれば、 一的に規定するも 然法 然法 殊 といふ地平線以 の自然法 や行 能であ 動 Ŏ 的實現の手段として 6 0 との 終 たとへそは あ るところの 關 局 る。 自らを手古摺 上に超越する 係 0 12 根 を説 だ 依繋して た或る 據 カン ら自 或 ヷ V V は た 力> イ 29

れに反 CD 必然的 のは、 る 1 定さる 0 多 現は 無數 0 72.) かし自 6 自 あ 0 n ~もの 0 然法 結 B 然 方の格段なる形式であ る 7 O) カン 價ル 法 合形式の 50 は 值 は意意 6 中に その あ 0 る 要求をも だから自然法 識 現は 中 + から 活 Ö 動 から選擇され 其間 れた一つの法則 極 0 Ō 事質卽ち如 めて少數な形式に過ぎない。故に規範は自然法と必ずしも一 17 7 價值 に從 る。 居 る、 規範 たも つて 0 差別 刨 何 0 に過ぎない。 起 ち 12 0 意味 はな ら得 考 吾 eine R へ感じ S. る意 は個 は Auswahl であることを示して居る』("Präludien" 如 it 或 人の 識 何 は行 更に詳しく言へば『凡ての れども規範によつて價値を實現せしめ得ると規 活 に考 關 動 係によつて心意生活 0 ~ 動する 感 形 式 じ 直. カン 力ゴ 如何 を説 つつ行 に多樣であつても、 動せねばならぬか 明する に止 0 規範 自然 まるが、 的 は自 致しな 法 然法 則 を それ 規定 カジ 發 範 0) でする か は皆 種 展 は之 2

覺の 當性 デ 適したも カジ かにして多くの自然法の形式の中から、或る少數の特別 る自然法も亦普遍妥當的な目的を實現する為めに飲くべからざるものとして選擇されたもの iv 規範 性 0 ハヤ É 遍 質 > は F 妥當性 的を欲するならば承認せねばならねところの形式である』(Op. cit. S. 74)。けれども吾 無 な 朋 であ 數 はその カン 0 自 を實現す 12 ることを認識し得るであらう。 然法 標準を普遍妥當性 しなけれ 0 + 3 に必ず承認 ばなるまい。 から選擇されたものであるとすれば、 に求めた。 せね m ばならぬ 7 即ち『規範は自然法の實現される形式 若 井 2 しそ デ 4 0) w n がな形式 とす 18 カゴ 自覺的 ン 2 F は のみが普遍妥當 0 やら 選擇の に確 如 何 0 認され 標準 あ 或 6 る 5 るも 特 がなければならぬ。 カン 殊 的 な目 0 0 自 格段 15 然科 5 的を實現するに ば、 中で、 な 學 る では かが 形 カン 普遍 なは 研 式 并 る直 0 究 安 3 る す

7 0 n るに となら、 自覺で、この自覺あつて初めて吾々の認識や生活が可能であり、そして亦意義があると思ふ。 して必然的 許不といふの to 70 から、 一の原因を爲すものであるが、しかしこれは不許 は自身に本有する普遍價値を自律 に比較さるべきものでなく、 おいてはその何れの 面影であつて、 吾 R それをもつて自然法の唯一の根據とすることは出來ないのである。 カジ 行動に於 規範 一不可不といふ要求はその客觀化に比例して强烈になるものであると思ふ。この不可不が は内面經驗 と對立するものと考へてゐる自然法 いては倫理的規範となり、趣味においては美的規範となるのである。 決して絶對的に相容れないものと考ふべきではない。 規範も同一で差別はない。 の全體的な自律要求であって、これが吾々に意識されて認識では論理 自然法は規範の客観的に自己を顯在化したものと考ふべきであ 的 に顯現する絕對者或 不の客觀的に擴張されたもの即ち一の變形に過ぎな る亦 何故 論理の規範によつて顯現表化された『一 に不許不の意識 は『一般者』であるからだと考ふるの が規範となるかといふに、 だから規範と自然法 而 して規範 絕對不 る。而 外はな 的 とは同 般者』 規範 2 對 た

とは、 は非 らせるやうな叛逆兒であると看なければなるまい。かゝる畸形的叛逆兒に普遍的價値があるといふこ 2 デ w か なる根 ノヤ ~ ۴ る認 據によって言ひ得るだらうか。 めな い所 6 あ るま 3 カン 而 してかゝる叛逆兒が自然法に全然從順であること

を 法の を自然法としてその存在を意識するのは内 りも 範と全く から選擇されたかといふことでなくて、むしろ規範はいかなる意味において自然法 したものといふことが出來ない。吾々の問はむとすることは規範 創造するとい よつて初めて存在することが出來るのであるまいか。 カン 上に事實として現れた形式 にある。 要する 自然 は自然法その 後に意識され 法以 形 5:1 式 立 更に換言すれば自然法が自然法として必然的不可不の要求を有つことの根據が 規範と法則 外の 12 12 ふことが 求 存 ものも全く意味を失つて了ふからである。 もの るけれども、 むべきでなくて、 在するや否やに 出來 即ち規範その との スの相互 な 關係を全然の V であらう 認識論的 あ 一關係であつて、 ものに 却つてその る。 この點 カン に言へば規範は自然を規定するも 致と不 面的 求むべきであると思ふ。 規範の 反 からいふと余の考へは、 認識論的 對 に自 致との中間 何故 要求によつて可能であるから。 然法 にその なれば前にも述べたやうに、 に存在 この意味において規範はむしろ自然法を 12 カン 存 求めようとする考へは、 發生論 V 在 の意義を與 かなる目 0 規範の 意義 Ŏ 的 即ち に云 に関 人人る根 現は 的 自然 12 L ば規 n 0 ての よつて 即ち規範 方の 存在 據 は 根 吾 規 範 自 々は 可能を自然 範 吾 は を是認 本 自 7 然 關 果して 0 10 自然法 を 規定 然法 法 0 係 無視 原理 生活 0 12 規 中 達 12 t

然らば規範は何であるかといふに、永久の自己展開を生命とする純粹の内面經験における不許不の

て東洋 德 する道 す る 二)は 0 :倫理學史上の 徳であ カゴ 四 目)社 男女生活に關 的 5 會 6 消 あ $\widehat{\mathcal{H}}$ 德 る。 修身、 論 こは 私は 國 ずる道 五 齊家、 家生活 これ 國 家道 德 を六 治國、 に關 で 德論 あ 種 5 する道徳であり、 12 平天下の分類を科學的 分けて (三)は (六)國際道 居 家族 る。 (一)個 生 德 (六)は 活に關 論 0 あ 人 に整 る。 國 道 する道 際生 德論、 理 改 活 德 は 造した (二)男女道 に關す 6 個 あ 5 人 生活 0 る道 0 四 徳で 12 德 は 關 論 あ 祉 す る道 (三)家 會 生 活 德 12 6 關 道

6 生活 德的 は 觀 個 12 10 あ 7 よつて 個 的 人 る。 爲する。 此 自 其 人の 12 くと人類との 然的 より 六種 あ 活 私は 生であ 一發生 る 集合である である。 Ŀ 此 更に之を生物學的 事 12 0) 貫す 然るに 消 實 樹 す 0) 3 六 有 カジ 德 12 V. る 關 そして此 7 Ĭ n 機 和 的 今講 生活 1 類 個 カン ば 的 n 0 る 72 人の 5 關 順 0 は決 經 生 集 個 係 序 學 集合 う 驗 活 合 家族生活 0 人の 3 0 哲 に考察すれば此 個 便 して 的 Ŀ 的 0 的生活 人は 宜 認 生 自 カン あ 學 る。 活 我 ら決 的又 斯様に判然と分れて居る生活 識 Ŀ これ 0 0 から之れを分類すれ V 社 そし 南 は 丰 定 は あ る。 會生 を社 る 觀 した。 社 てれを生 T 會 的 カゴ 活、 男性 一會學的 0 故 生活 學 兩 に そし 他 的 一物學的 國家生 者 個 とな 個 12 では 人の は自然界の事 7 は に觀察すれ 人と女性 此 主 る 人 集合 活 力》 の六 觀 に觀察すれ ば斯様に六種 5 生 0 客觀 的 國 0) 種 個 生活 ば、 行 際 第 人とは之を 0 では無 實に過ぎな 爲 生 生 的 ば E は常 活 社 0 活 發 に當然性 は 會 個 は 展 に分けることが必要にな S 男性 に個 凡て 的 これ 0 人生 0 哲 順序 で、 な 學 V A 個 個 る 活 聖 醅 に從 カジ 的 6) 人の 個 人と女性 カジ 人生哲學 有 男女生活 A 則 に考察す するところ 其 或 0 ち六 7 CI 0) る る あ 集合 5 個 生物 341 種 叉 係 想 n を根 人と は 0 12 は 的 的 學 且 4 JI'N に存する 底 規 0 的 る 箇 理 に置 結 には 範 式 社 學 0 0 0 面 統 * 會 的 道



道徳上の性慾

條

忠

衞

倫理學の梗概

客觀 用學) 0 び 本 る 概念によつて分類すれば、 0) 道德 品性 總 倫 務 倫 合的 的 理 理 Ethics 分類 德、 學 である。 學 的 12 開す 結論 は道徳的 生活 Ethics 罪 12 は二大部門に分れる。 うる 、惡其 0 關 の上より、 その 價值 境遇 する 現象 他 であつて、 內 學 研 に應じて、 12 部の 究で 關 である。 に關 倫理學を新なる方法 す 構成 主觀道德論 する あ Ź る。 定義、 研 規範 故に 更に原論の理法に本づいて尚は詳細なる研究を試みて其の法則を明に 究であ に至つては學者によつて異 そして他 規範、 理論學(規範學 法 9 と客 は原論 則)を研究する科學である。 觀道 0) 客 行 各論 為 0 の下に改造して奉じて居る。 觀 一德論 あ 道 品品 6 性 は道 德)であると共に説明學であ 12 論 自 分 他 は道 德 は各 n 0 由 るが、 客觀 德的 意 る。 志、 論 的分 主 0 觀 私 動 觀 あ 念(良心)の る。 換言すれば道德的 機 道 は 類に基因 志向 德 西洋倫理學史及び東洋 そし 論 私の は 6 7 世 起原又は發達 道 するも 德 上 此 倫 實踐 12 0 理 的 學說 標準、 ので 行 原 學 事實即ち行 は 論 あ n 12 は (技 一或は道 1 良 7 人 つて、 心 生 n 倫 術 居る謂 は 理 哲 學 學史 學 為及 個 40 0 倫 應

今日 內 n 游 則 所 6 0 っ實質 ず、 以 て居 あ 島 で 12 語 る。 論 關 0) 6 行 す あ 心る罪 實 其 其 Ü は 'n 1 る 論 今日 あ 7 督 る n は 0 6 0 であ 今 實質 其 論 存 2 卽 T は 7 0) 12 然 居る i な ち 存 實 す 倫 實 至 る 0 0) る 倫 V 看 6 倫 班 路 理 0 12 倫 411 T 學 東 疑 12 を論究 理 理 何 卽 學 は實 洋 學 學 ち は は 裨 0 3 n 斯 各 倫 な 間 今 は 益 す 7 道 12 理 る 消 す 論 ふことが H る 其 重 居 3 3 德 0 0 Ď 學 史 る 研 0) 倫 所 0 0 詳 な 者 形 0 カゴ 貂 カゴ > 理 繙 は 無 B 細 缺 士 任 學 0) カゴ 全 眼 的 を 陷 務 は 玩 1 的 S 極 2 < 弄 目 25 6 理 6 道 見れ 物 なっ 德 倫 却 めて 12 あ 論 は な 3 以 13 理 12 2 0 居る。 學 7 ば 外 普 見 0 T V 7 居 做 基 0 、至善に關する外 西 22 漏 され 居 て、 不完全なる 督 洋 理 刨 的 720 卽 教 倫 論 5 法 其 ち 7 又 理 3 則 倫 居 は ح 東洋 一學者 構 0 12 理 n て、 東洋 形 成 學 關 式 爲 カゴ 42 す 0) 0 於け 今 * 研 る 總 B 0) 1 部 間 · (般 道 究 論 B 2 其 0 あ 社 德 S 3 册 的 カゴ 0 形式 會 ことに 倫 未 形 2 間 研 カゴ カジ て、 理 實 だ 出 究 式 カ> カン 論 踐 組 來 を論 6 6 0 12 は 於て 研 斯 研 織 外 的 西 な 極 究 道 究 洋 的 15 定 で V め は 6 す 0) B あ 倫 は 12 0 t 學 7 努 道 徹 6 な る る 理 杜 と言 德 者 n 學 力 底 あ V 0 撰 ず 0) は L 0) る。 0 カゴ で 缚 學 研 は 7 6 任 か 居な 究 敬 居 る 究 遍 2 あ 務 者 的 な in で 0) 76 > 點 0)

合統 於て 以 て首 た 私 は る は 德 伊 西 ح 洋 と為し、 藤 7 12 仁齋 妓 倫 見 25 理 画 0 新 る 學 73 0 所 これを愛であると為 說 方 る あ 5 法 組 25 留 織 12 + 來 0 意 下 年 し、 由 以 し、 12 ح 集 來 n 大 各 斯 した。 を総 成 道 論 す J. 0 研 0) 承 る 究 此 必 研 0 -7 要を感 究 60 立 見 從 1.2 解 於 0 事 1 i ことに は 7 支那 た。 は 1 來 東 そこで な 洋 72 0) 漢 0 から 倫 時 た 理 私 16 學 其 12 仁 は 0 0 齋 東 方 結 4 宋明 法 は 洋 果 其 倫 42 12 時 j 0 理 垄 代に 學 n 道 由 德 者 は 原 必 論 0 在 最 更 12 論 於 2 筱 12 ŀ. 72 0 其 0 カジ 等 研 大偉 究 を 總 我

自 各論 に於て最 あ 0 人の當に爲すべき本 となったことは 0 l 然 法 申 倫理學界に於て初めて男女道徳なる文字を用ゐたの る。 能 12 男女道 の 於て を肯定し る重 究竟に は蓋 大 德 其の なる意義を生ずるので、 於て道德的 社 論 し重要なる地 は男女の性に關する道德的事實を論究して 會 價 務を論定するの 0 値を附與する任 美風 規範を作爲する。 步を占めて居るので、 であると共に、 が目的 務を帶びて居ることになる。 個人生活と社 で そこで此の男女生活はこれを學問上より取 あ 男女道 る。 茲に男女道德論 徳の それで一 一會の集合生活との中間 には 倫理學的 件の趣旨 名これを性の倫理學とも云ふ。 其の 法 意義は自分に於ては以上の如きもの からであつたが、今や一 此の意味 則を明かに なる一 科 に於て男女道 學 に介在して、 し、 的 分科 性的 を生 扱ふ 生活 兩 般 ず 德 者 は 時 私 る 0 に於 は人生 所以 12 倫 通 用語 7 日 理 本 個 6 學

私も **之れを完全に實現することが、人生の目的であると見る説が多くの** 關する學者の説に る 1 であ 'n あったことを弦に 倫 此 理 換言すれば個 寧 手は行為 人生の目的を論究することは倫理學に於て 說 論 を奉ずる一人で に過ぎな 0 理想に關する價値學であるから、 は色々あるが、 一人の可能性とか自己の實現とか云ふことは至善に關する外部の形式論 明 人生 かにして世 vo ある。 。 の 卽 Ħ ち至善に對する抽象的概念上の研究であつて具體的概念上 價值 H 一の誤解を避けて置く次である。 れども私の 意 識(規範意 倫 理學 識 は 道德)の實在 0 肝 組織的 要な 的 生 る綱 活 に基さ、 0 體系から云へば、 究 目 倫 を爲 竟目 理學者に依つて奉ぜられて居る。 個 人の して居る。 的 12 自我 關 して 其れは の可 至善 此 能性を發揮して 0 0 であ 0 原論上 生の 觀念を生ず 研 究で 目 0 研 的に 內部 は 13 究

欲で 党及 は て、 神 に分 本能 do 6 2) 0 は 無 その 如 Vo る。 靈慾は 一交通 0 n 割 何 てバ を末梢として、男子が女子に對し女子が男子に對して欲求する一切の て居 品に於け この 过 る なる意欲であるかと云ふに、 下等 することは そし 小梢を 情を は災 衝 又 を霊慾と寫 點に於て私の男女道德論は主意說を非とする說であり、 Ţŝ 主となり肉慾は從 る。 動 カン 動 一性 76 7 本 詩 0 る意欲として生ずる一 物 と意志とは異 0) それ 主 此 要求 に於け にそ 知情 能に 12 意 不 對 0) する 0) 故 0 說 性慾と云ふ意欲 文 合 置 る性 华 は 理 性 作 よりして S 肉體 用 肉 ifi 一窓はその 6 てその 體系 つつて 0 あ 慾 に於ては と見 要求 にとなるの る。 は 的交通を肉慾と假に稱することは出 本能 居 1 上の 卽ち其 ても差支な 末梢 る。 と云 意 樞 全的意欲であ 知 は それは男女の性的 現象になつて居る。 融 は 的 で、 情 に於て ふ 語 に於 若 衝 同 意 n を隨 ī 動 時 識 6 衝 12 H あ に於て、 肉慾も歸するところの靈慾 は になつて居る。 いてとに る。 伴 は 具 誤 る 動 衝 一體 單 つて して居る意欲 カジ けれ 動 意 る。 的 ___ 不 これ 75 志 12 居 に連結され それ る。 る。 作 知情を伴 離 欲望である。 ども高等動 然らば我等高等人類 用 を意欲としての性 13 それ H で性 人類 る 0 であ 根 n 主 て居る で衝 ども之れを客觀 觀 慾 に至 元で つて居るの 5 物 來 Ŀ は 種の 其の論理上の當然の順路として愛 る。 これ 動 あ 12 0 つては殊 その カゴ 意欲 12 の一作用 至 るなら 保存及 於 を肉 一り意 併 欲望を總括し その で意 で 統 慾と見 0 L ば、 主 あ 體 に明 13 識 42 # 純 志 13 觀 的 る 0 び繁殖に關する 存 0 於 欲望又 樞 7 るは 粋な 生ずるに從 する 的 1: カゴ 過ぎな カン カン 7 根 等 見 5 12 言語 は 於 動 誤 る抽 る時 此 底 證 性 た意欲で 7 (坳 0 感 は 慾 V 0 0 個 は 精 南 7 象 ことは 性 は 肉 性 は 12 質 N 0 る 存 居 的 男 神 慾とは 正 意 箇 人類 る 意 からし 女 致 に個 と見る 3 0 0 る感 欲 欲 識 0 性 る。 0 意 何 論 欲 0 慾 抑

37

槪 實踐躬行することであると主張する。 於て道德上最も重大視され、普遍的に講究されて來たのである。そこで私は人生の る愛、 實在であ 有して居 カジ 複雑なる規範(法則)を論定するのが、(一)個人道德論、(二)男女道德論、 個 0) 德川 心德論、 總果であると見るの 念に於ては愛(仁)の實踐であると説くのである。 我 人に關する愛、 、を實現することであるが、各論的には愛(仁)と云ふ個人の人性に於ける可能性を發揮してこれを (六)國際に關する愛と成る。其の愛に關して詳細なる研究を試み、道德的生活の境遇に準じて 時 5 た。 代 (五)國家道德論、(六)國際道德論である。 10 これ 至つて最も發達し、 全部を統括する根底であると見なければならぬ。そして愛に關する徳は六種に分れ、一一 は佛 (二)男女に關する愛、 である。 一教又は基督教と同一の見解に立つものであつて、 換言すれば愛は道徳的規範の 貝原益軒に於ても中村惕齋に於ても室鴨巢に於ても皆な此の傾 即ち理想の形式的概念に於ては自己顯現であり、 (三)家族に關する愛、(四)社會に關する愛、(五)國家に關す そして此の愛は各論に於ける首德であ 具體的內容に於ては、 此の愛と云ふ徳 (三)家族道德論、 目的 最も價値の 理 は は東西古今に つて、 想の 原 論 (四)社 質質的 的 大なる 向を には 萬 德 會

36

三男女道徳に於ける性飲

る > 愛で 女道 あ 德 る 論 カゴ 0 研 究に この 愛は男女の性 よれば、 男女の 慾 性的 12 關して個人の當に爲すべきことを論定した規範であ 生活 12 關する根本的法則は 一男一女(一夫一婦 間 12 行は

に本能として又はその内面的衝動として働く場合には、無論意識に於ける意欲として生ずるのでは は慾の 思ふに男女の根底に横はつて居る事實は性慾と云ふことである。 此 の性

了解される譯である。

四性慾を理想化したる戀愛

吾人の る價値 であ ものを有して居る。それで吾々が或る行爲を爲さんとする場合には、 規範に背戻して居る行為があつても、その主觀の普遍的妥當性に於ては當に吾人の爲すべき本 理想と為り後者 情を伴ひ、その 朋 に於て人生の目 かである。 一)規範としての戀愛 行 生活 爲に關して普遍的理想を決して、 6 然るに人生は意欲そのまへの ある。 一的であり、 動機の決定に於ては其所に支配する側 は嗜欲となる。 此 の生活を名づけて道德的生活と云ふのである。個人の主觀は其 自己の可能性であり、 個人の意欲の この道徳律 其の規範の下に率つて行為して居る。事實上に於て に照合して選擇され 生活ではな 具體的實質 その體現の上よりこれを目する時は即ち行 Vo 面と支配せらる に於て性慾が 意欲 た 0 統 る理 根本中 御 道徳律に率つて 想は即 的 > 側面 生活であ 幅たることは如 5 とを生じ、 至善で る。 知情 あ 卽 前者 の自我 9 5 理 上 0 其 判 爲 想 は によって 上の 務たる は此 に於て 行 斷と感 に對す 0 究 0

ける愛(仁)は隨つて其の る戀愛になるのである。 故 に於ける人生の實質的目的であつたが、今性慾に對する關係よりこれを推察すれば此の各論に於 に前 總ての愛の根元である。 沭 (1) 如く總論的には自己の可能性を實現することが人生の形式的目的であり、愛(仁)は其の 即ち一 根本中樞に於て性慾に對する理想であり、行為の規範であ 即ち性慾を理想化したる夫婦の愛が倫理學の各論的研究に於ては萬德 男一女(一夫一婦)の 道德的 生活に生ずる性 的愛が愛(仁)の 5 理 中 想 化 樞 された で あ

以

であ

的 根 基 底 礎 とする知情 6 あつ 説 性慾をして人生の なのであ る。 此の知情説即ち主知主義であると云ふことが私の男女道 理 想上に於て道 德的 價值 を批 判し、 其の 規範を論定することが 德 論 0) 哲學

質 來 人の 4 持 私 4 生じ、 人類 T 慾に對して 2 ところで性 前 る所 の二箇 强大に せんとする二大本 は 0 >經濟的 に具 は 0 7 性 存續 實に食慾と性 ものである。 欲 w 診の 體的に考察すれば千差萬別となり、 以はその の人性 サ して主 生存 他 欲 は ス に報ゆる手段であ 自 0 諸 0 可 ら客 を持久する意欲である を中 體 學 具 0 能 たるもの 說 體 意 能 12 以つて此の性慾が吾人の生活に於て如何に直接に甚大なる關係を有して居るか 體 一個として其 的實質に於ては實にこの 欲 性 人間 12 負 た カジ を質現するた 基くも る所 あ るも 第二次的 の意欲はこれを形式的 から る。 る。 0 あるならば、 カジ 前者 つであ n のであ あ る。 に纒綿した附 故に食慾は性 第三次 は めに る つて、 この カジ 經 。故に性 濟的 的に必要となつて續出するのである。 弦に食慾と云ふ それ 二箇 その その 欲望で 人生の 性慾を根本中樞と爲して有機的 慾は 屬的能 の意欲 慾の 究竟的 は疑もなく此 に抽 中 人生の で最 根 あ 可能性 本的 象 9 は 目的 力であつて、 個 76 的 手段的 意欲に於ては實に根 後者 原 欲求 12 人 を發揮する準備 は 考察すれ 始 性 0 の食慾と性慾である。 であ 的 直 は 的 意欲が 男女 接 個 0 る。 悉く客體である。 0 76 人として社 ば生 生命と人 的 0 湾 欲望 個 6 人の あ 12 としての 次 對 b 0 に一大系統を作 的 本 立する欲 最 會的 自 類 故に人生に於て生を求 あ 12 中 我 0 る。 3 樞た 必要 その 人性 0 永 强 生 烈 求 そして 可 遠 此 存 る意欲 能性 6 他 條件となって であつ を持 0 0 な 生 あ 0 點 る 食慾は 意 命 る 可 12 12 :為し 久し以 である。 於て最 能 於 カジ とを た意 性 7 た 實 性 は る 7 個 は 2"

婚を否 人とし 笛の であ 富に る者 0 7 を以てして直ちに人類の 抑 居 場 制 たる食物 の合に る 對する る である。 0 語 しとする論 は性 を加 又は數箇 は結婚するに及ばぬ カン w 0 等愛の これ +)-的 生産力よりも大であると見た彼 生 7 は當らな 群 ス 活 あ カゴ は人類に於ても同様である。 0 0 雄蜂を中 蜂を見るに 尊重となる前提である。 第 を爲して る カゴ 一版 大事實たる性 V 0 これ 以後 心 居 特 で は結婚 工蜂 别 あ として一社會を作爲するに た 0 る。 法 人 V は カゴ カゴ それ 附 的 論 直 隨 對する自覺の 生活を否定することは出 接には性的 に於 祉 から人 會 して居る。 の そこで性慾滿 0 7 前提は は唯 故に直接 口口 員として 生活 0) 心 この結 結果 增 論 頗 を單 的 に性的生活を爲さない 加を憂うることより結婚を否とす る獨斷であつたことに 至り、 は間 足の は早婚の弊を防ぐことになるので、 傾向を生 一獨に 婚不具者 接 結果た 爲 に配 一來ず、 間 じ、 接 L に 7 會 が特別法の下に生活する時は る人間 其の 社會 居な 又これ 0 性 中で自己制御 的 の生産力は食慾満 0 V 岩干の 性的 生活 12 成 が、生殖 由 生活 に關 9 個 7 與 に参與 人 0) 本體 l 般 卽 る 0 7 5 論 法 あ 足の 且 道 た して居 る は な る結 る る者 つ貧 誤 理 德 前 由 個 的 0

あ 想 8 てれ を肯定 無意義な學説である。 一窓を 自 12 禁壓 性 1 0) 窓の た 理 想的 理性 F し嫌忌してれを否定する上に構 一に構 内容を入れ 中 によつて慾望を禁壓することを理想とする克己的 成さ 心である 故にこの意欲を禁ずる理性に於て理想が成立すると考へたのは誤解であつ 乳 た理 て考察して見ると、 てとが自明して居る今日、 一想では ない。 性 成 性慾に 慾 な n カゴ 人類 72 、對する 理 想で 0 これを否定するは 本 能に基 あ 理 つて、 想を指 生活 因 I, 性 示 慾その するも カゴ 禁慾 不合 而 かも 主 理 7 0 であ Ā 0 義 0) 往 を醇 あ 6 るは あ 0 る 化 カゴ る。 勿 大意慾で 禁慾 論 擁 其 護 0 理 極

道德的 我的 併し支那 中心點なのである、中庸には「君子の道は端を夫婦に造す」とあつて、仁の中樞的實質と見て居 生活 齊も其の愛の 此 夫婦の愛を以つて首德と見るのである。 に於て道德 の點に於ては私はエレン・カイと同一の意見に立つて居る。 の上に戀愛を實現することが道德的法則になる。そして私の倫理學說では、道德的規範即ち善(愛) 理 「解上の合意によつて結合する夫婦が道德上に於ける性的生活の對象であつて、其 規範として個人の 正統學説に於ては親子の關係に生ずる孝を以つて仁の中樞的實質として來たの と宗教とが合致した價値意識を有して居るのであるから、戀愛は同時に宗教なのである。 内容に於て明かに孝を首徳と見たのであるが、 良心に於て普遍的效験性を有するのである。 而して此 の戀愛は性慾を理想化 私はこれを是正 それで一男一 したる知情 して矢張 女の であ り中 人格に於て全 3 兩者 で、 庸 カジ 爲 0) 伊藤仁 る め 如 性的 べくに

する自 25 的法則として総 力を發揮し、 男子は男性 つて、性 よつて結合することが主大なる要件であつて、その目的は戀愛に生きるためである。 般的普遍法である。けれども結婚を爲すに不適當なる個人の存在することは明かな事實である。 我 一的生活の 可能性 (父性 個人の自我を完全に實現せんが為めである。所でこの理想化されたる戀愛的生活 男女道德 ての個人を律し、結婚は個人に於ける當然の義務となる。 一)を中心として女子は女性(母性)を中心として兩本位の分業的生活上に人生這般の能 成立又はその維持を指すのである。故に一男一女の人格に於て全我的 たる性慾を醇化して理想的實現の下に、人生の諸能力を發揮實現せんが爲めである。 に於て結婚とは男女交際の間に於て一男一女が戀愛的結 故に結婚を為すべきことは 合を爲したことであ 理解上 即ち人性に存 は普遍 合意 5

遺傳性を與ふるの結果となる。この社會的弊風の下に又家庭的 見に化するのである。 する子女は、 るのである。隨つて飲酒の流行となり、 其の父兄の日常生活を模倣して淫行を學び、飲酒を快樂とし、 然らば如何に家族主義を説き、 花柳病の傳播となり、妻子曾孫を毒して國民の上に劣惡なる 國家主義を説き、忠孝の徳を鼓吹すと雖る遂に 世を舉げて不良なる低腦 の下に 成長

是れ亡國たるものである。

はれ る。 世道人心を過り、 である。 樂に置いたが爲めである。 頭して、 乞ふ次第である。 要するに此 即ち八生の性慾に關して一夫一婦の戀愛的結婚の上に道徳的價値を置かな て居るが 貴重なる各論の研究を遺漏し、 更に要約すれば、 の社會的淫亂は、その男女生活に於て性慾に關する道德的理想の標準を誤つた結果であ 爲めである。 天下を啓發するに足らない結果である。 畢竟ずるところ今日の倫理學者が東西おしなべて其の總論 倫理學各論に於て戀愛を愛(仁)の首德となさないで、 即ち男女道徳に基 而かもこれを以つて倫理學の全體と誤解して居たが いて理想化されたる性慾の上に道徳律を組 こ、に後學の管見を出して諸先生の叱正を いで、 傳統的 單 0 忠孝の に性慾 織 みの研究に没 しな 爲 語 めに、 Ŀ 一の快 にわ拘 為め

生ずるのであ

ある。 却つてこの意欲の選擇の上に理性(知情)が存し、そこに理想が構成されるに於て眞相を得 即ち性慾の理想化されたる戀愛に於て始めて健全なる理性を認め、こゝに真個の克己的生活を るので

なり、 生ずるが、 には必然の これ 結婚の道徳的目的は個人の人格的戀愛に生きるためでは無く、單に家系を繼ぐための種取りの行為と のである。 魏業婦となつて男子に淫を鬻ぐ行為になり、男子は我を爭つて之れを求めんとする買女の習慣を生ず を以 る。又一方に於ては女子は親又は家の爲めと云ふ孝道の觀念からして又は自己の經濟的生活からして て妻妾群居の行為となり、或は外に妾宅を構ふる行為となり、或は其の妻を屢々取り替へる行為にな 夫多妻の制度に陷り、男子の經濟力からして藝娼妓制度を生ずるのである。ところで一方に於ては カゴ 為めに家と家との結婚となり、 論は遂に男子の快樂主義の為めに惡用されて妻に子の有る無きに拘はらず、妾を家に引き入れ 離縁するか、若しさうで無ければ別に妾を迎へて妻の無能力を補ふことになる。然るに此の道 めに 男女間の實力によって支配される為めに、途に家族主義のために男尊女卑の風習 この快樂說系統の性慾的生活は、其の社會生活の上に於ては一夫多妻、一妻多夫 成行として性慾の上に快樂を漁ることを以て理想とするに至り、 夫は其の妻に對して性慾上の滿 個 又妻に子の 人の 性 無い時は七去の道徳によつて妻が自ら身を引くか、舅姑又は夫 知らぬ 一同志が夫婦となり、猿犬の間柄なる姑嫁の 足を得ない時は外に出 で、藝娼妓を弄して其 遂に淫亂の 行 同 爲 居 が三下り年 ざる場合 滿 からして 12 に堕する 足を 制度を



生 を 賭

S, ح ٤ 0 關 係

私 沖

野

郎

難船組の一人

雨 に驚いて立ち上ると、窓際の硝子越しに、黑い顎髯と、白い丸い顔とが並んで見えた。顎髯はOドク めかた。 !が東風に誘はれて書齋の硝子窓を観さに來る冬の夜は、 無期懲役囚として今A監獄に居るら、Sと知つたのは明治四十年の暮であつた。春雨のやうな細 ルであつた。 私は大きなテーブルに凭れて雑誌を讀んで居ると、突然暗い窓の外に妙な丸い光が見えたの 流石に南國の空氣も火の氣を慕はしく思は

戸を開けて案内するとドクトルは大きな變な形のしたランプを差上げて

して椅子に腰を卸しつゝ、 『これは汽船のランプだ。難船したのでランプだけ持つて逃げ込んで來たんだ』と言つて笑つた。そ 伴れて來た青年を指して、

ってれ からい S君です矢張 り難船組で・・・

と言つて又高らかに笑つた。私はら、らが富裕な身であり乍ら僅か金十圓の事で監獄に入つたと云ふ



寂

寥

0

海

12

住す

T

わ

れ水気

族。

0

冷

た

4

心

B

5

22

け

る

カン

73

はりつめし

氷

の隅な

を

打

٧a

さて湖を見るでと曇

う 日^で

の陽は、冬のうたのうちに

けふもわ

れ恥かきてねぬ冬枯れの道きはまりて

引

7

カ>

^

す

2:

Ł

あ

6

V2

v

つはりを友のためにも否みたるまてとそのものうそにやは

自嘲

苦るし わけも ひとのいのちわれには われとてもけるの、やうに獨すむを好みたらむや悲しけ ひとなみに短きながら苦めるわ ひとりすむわれを嘲けりよき人ら人にあらずとい め る人の顔 ならに群れにいらねば人並に扱はれざ 見 れば苦 いとも悲しけれ群れをつくるに忍びざるほど しめる n D 12 n B を見 は あ るごとい る 5 わ V2 N カゞ あ 身 女 は と心 n B は、 6 ば 不 譏 す J 思 な る カ> 2 議 b な de

淸

佐

藤

語 い提灯だね。S君、 君の魂は丁度其樣なもんだよ。何やら斯やらちつとも判らない。所謂曖昧模

糊だ。 夫れでも何所かに火は燈つて居るよ。 君でも生きて居る事だけは事實だ。」

快 語 な顔をし合った事は無 り草にした。 隨分失敬な罵倒をしたものだ。 しか し私はSを尊敬して居るし、 かった。 S Sも此 の罵倒は餘程癪 彼る亦た私を尊敬して居て吳れたから、決して不愉 に障つたと見え、其後度々言ひ出しては

新思想に動く南國 の

0 眀 落武者が〇 治 四十年から四十一年にかけてS町は非常な混亂期であ ドクトルの所を落付場として續々尋ねて 來た。 して居た。 遂に つた。 は 領 政治運動 流袖の K 鎮 S 壓の結果、 カジ 來、M U 東京 かが から其

S、Mが來、 云ム様な珍現象があつて、人民をして官吏の威信と云ム事に幾分か疑を懐かしめ居てた所へ乗じて、 0 上記の連中が入込んで來て大いに反官僚主義の種子を蒔いたのであ 町で『榮樓』と云 度この 町 に Uといふ男が は 一ム女郎屋の主人となり、 存 娼問 題 來、 カゴ 起って 何れ 町政上の大戦争が も數ヶ月以 其の部下たりし巡査部長は辭職して遊廓の事務長となると 上滯在 あつた後で、 時の警察署々長は官を退いて後此 つた。 劇場で演説會を

開 いて彼の溫厚な石井柏亭君をして、

は東京から興謝野寬、生田長江、石井柏亭を招いて文藝講演會を開

いたり、

青年達

云 涑 々と言はしめた。 玉 一神 社 0 附 近 そして佐藤某といふ中學五年生をして、公然『我はデカ 三本杉遊廓に隣れ る此 の新玉座に於て裸體畫 論をなし得る光榮を感謝する』 バ _ ス ŀ なり』と呼ばし

先きに歸つた。

あとで私はS、

S

事情をドクトルから詳しく聞いて居たので、其の難船組の意味がよく了解出 S は唯顔 を赧らめて俯伏して居た。ド クトルも種んな面白可笑しい話をして三十分許り話して 來たのであつた。

『あなたは今度の事件で誰をも怨みに思って居やしませんでせらか』と尋ねた。 S

と素直 あらう。 福な家に産れたのであるが、幼い時父親に死なれ、祖父の手で非常に可愛がられて成長したからでも に答 頗る内氣な少しも摺れつからしな所が見えぬ男であつた。學問も中學に三年程 決して誰をも怨みに思つては居ません。 へた。 私 は彼れを可愛い男だと思つた。 全體彼 皆な私 は が惡かつたのです』 四百戸許りの村で二三等に當る可成り有 居て夫れ

基督教を勸 めてみた。

早稲田に二年程居たらしく、文學や宗教の問題も能く了解出來る男であつたから、

こで私 た。 して私は彼 三冊と、 74 + 一年の は彼れをクリス 新 n 春、 約聖書とイリー カゴ 旣に出獄後、 私 カゴ チャンにしようと思つて三囘も泊りがけで說きに行つたが仲々手答へが無 四 里 程 制度の 0 隔 經濟學 たった彼れの家を訪問した時、 缺陷を呪ふと云ふ社會主義の思想に染まつて居る事を ーとが置 かれてあつた。 私は彼と枕を並べて深更まで語 彼れの机の上 一には ŀ jν ス ŀ 1 知 つた。 つた。 0 著書 カン 0 2 か

で其 市 の提灯は有るか無きかの如く、 夜私は彼れと一 一緒に田 圃路を歩行 薩張り用をなさなかつた。私は思はず言つた。 いた。 S、 Sは古 い煤ぼけた提灯を提げて私を案内したが、

九

n

から

私は熱心に彼

番電町話 東京三 院長診察 診察每 林 診院河神 電話ちがさる一番 奈川 野 察 長 每診 高 一番町 間 縣 察 及 橋 茅 兩 月 醫學博 土 副 兩 金、 廱 崎 夕 副 長 海 日 は 午長 但 濱 は目 後 目 午 南 高 (從停 市ヶ谷見附 前 H 入院 下當院 及木 當 及 車場 院 診察應需 午 H 半 後 12 21 矅 內 院安院 在 在勤 勤 時

蓈

但

祭

H

及

H

曜及

土

曜

むるに至った。教育界は容易ならぬ騒動を起した。

餘 現象を患 り感 度其 アン 興 ふる チ 領自 を惹起さし 7 口然主義 佛 ラ 教信 イ ス め 者 b の文學が、此町 な の思想が 0 有 カコ 志 9 た。 カゴ 青年の 大内青巒居士を招 ~ 頭を占 も全町の青年を搔渫はねば置かないと云ふ勢で渦 1領して いて例の如く教育勅語の講義をしたが、 私の教會 は段々淋しくなった時であった。 卷 青年 いて來た結 達に こんな は

焼ける。 處 0 一餘 へ曩に佐藤某の演説問題 夫 n 地 のY警部 12 カゴ 町中 引替 無 V が私と知人であつたから幾分 は混亂 と云ふ有様で、 $\frac{2}{0}$ 1.5 の極であつた。 ク F w かが カゞ である事 遠因をなして中學校内に同盟休校が起る。不幸にも中學の 兎に角此の町中には一種の新 私なども其の間にあつて大いに疑問の人とせられたが、 一件の記念だと自稱して演説會を開くと、 カ> 私を正 解され たらうと思 L い革新と混亂の氣が ム點 カジ 二晩打續けて劇場 あ 0 充ち溢 た。 教場 T 幸以警察 居 が失火で ば立 錐

問題 な基 には基 香信者 部 を話して居る中にYは斯 を据 でも考ふる所 一督教と云 で仲 ゑた 0 々し であ かが つつか ふもの 0 あつたと見え、 た。 り者であつた。 かが 私はY 充分に理解 う言つた。 警部を明治三十 女郎 Y警部も受洗 出來て居なかつた。 屋の主人に 一年 した男なので偶には教會 なった男の 頃 カン 或時私は彼を其の私宅に訪問 ら知 後釜 9 て居たのであ へは最 も硬骨 V る。 で顔を出 清 彼 廉 n 0 聞 した。 して種 0 妻は え しか 熱心 る Y 々の

乾干にしてやらねばならない。基督教を信ずるのは善いが、 7 n 等の主義 は破壞主義だ、N だのS、 Sだのと云 愛國の思想を捨てゝはならない。 ム連中 は丸で破落漢だ、 あん な奴奴 彼の米 は 將來

新

內東



沂稻編內 風部育

す

生は

も反

彼

を

知

り己を

知

9

根

柢

よ

0

國

民

養

大

せ

經教,

振東 恭京 東市 京鄉 品 一駒 三駄 〇木 番町

發

所

內

意國的國 義家偉家 をの大の 知根を世 り本求界 義め的 自をん理 To 6 かる顯 現 家 は平 戦以 員憲 た君 る丰 任國 見地に立つて、 務體 をの 全社 う會 せ的 ん倫 國家 と理 す的 本 る哲 0 世

も學 の的

答針 定大定大 價正價五 壹年金年 圓增壹增 **營補圓補** 五新拾新 錢版錢版

め讀を書本・

(中附三)

三五一局本話電

0

され

口

0

たり吾和

II

5

の快

ニ限アリ至急申込アレ

9

一全裝美州類 頁百五數紙

口支那の政治 支那の未來 では の支那 經 制 囑 談 本部 學校教授高等商業 支那 文學博士 名士張 克 編 稻 根 岸 藤虎 葉 輯 岩 同 次 郎 佶 緞 支那 支那 支那 那 0 0 0 0 0 教育 海 陸 史 種 介的 軍 軍 等通 博文士 譯 小 小 佐 官 市 村 居 健

口今日

口支那

0

支那の

地

理

理

生學博

ili

临

支那

文

貞

吉 郎 恒

支那哲學精髓節教授大

近 直

置支那

動

龍 次 郎 郎 癥 支那 支那 國 0) 通 民 商 性 商農工商 原 隲 吉

支那 滿蒙の 支那の 支那 所 對 支外 利 MY 時 利 局 争 隣書院長 總國院同 主計 · 校 教 常 長 鶴 授 着 朝務黨長書 正旭 根

学

諸

(中付二)

Fi. 錢

介髓北

なに歐

り觸哲

。れ墨

そ第

加人

何者

才

ウ



要理

ル

ス

1

1

復

活

加

讀

2

宇

佐

美

文

藏

豐

田

慉

谷

白嶺

0

根

本

間 0

題

赤

木

מת

1

ŀ

Ŧī. 月 號

の計 夢 L 管會 0 0 生生, ル 活活程 動 話 ع ス 癲 上個步 3 カン人 と繪 癎 1 ら生働 n 畫 杉 西 山 村 元治 伊 泰

にの たも 作 るの現 もは の現

に代

LA

て最

何大

人の

る苦

必悶

讀のあ

評る 論が藤

で筆

あ者

るは °自

雑されていますがり 雜 帳 日ス 本ナ よ とイ のル V

關文 係明 賀 11

長 瀨 富 山 野 本 先 虎 司 杖

0 蓺 循 及 科 學 作 郎 論 罪 業 却

佐 野 村 藤 隈

畔 淸

(中附五

村田高郡島豐北下府京東 替 振 京 地番二十八百四千山鶉 四

た カン

图

橋 藤 th -- 桁 カン づ 夫平

大

英詩 挿 書 b 數 歌

葉

H 石

蓋フ 10 必讀想 丙 のの 吉 紹真

1

す

光之亞東

郵 稅 壹 醛 醛 醛

一一~(號 月 五)~~

『永遠 歐 南 破 沙 承 血 翁 洲 佛 内 久 海 戰 役 論 则 H 外 0 亂 思潮 周 大 0 を 李 倫 辯 悲 平 太 和 關 劇 平術 書 理 か す 的 此 學 洋 0 永遠 較 3 界彙 道 研 所 德 展 0 感 覽 報 戰 會 カ 短 新 郭 刊 紹 文 海 文學 文 文 軍 介 學 學 學 办 博士 + 將 士 + 渡 佐 武 本 吉 宮 河 藤 邊 藤 多 JII 田 111 野 鐵 省 庸 能 長 H 應 怕 太 Ξ 郎 藏 平 生 = 次 111

京東座口替振 會協亞東 込駒區鄉本市京東 所行發

(中附四)

井

E

折

次

郎

博

+

序

前

0)

擂

4

تك

7

天下

に誇

示するに

足

る

事

業た

h

下帝 國 大 學 講 ル師

に十數でなる 佛教 達 + 1 を學 得 ごる < 年 1 は 前 L ~ カン 7 殊 43 とす は常 6 12 悉 今や ざる る 0) Ž 便 屬 本書 h 成 h 4 る 花を 章 自今以 觀 7 常 る 75 を 22 專 後 これ 0 爈 げ ED 荷 なく 度 T 3/6 * 英字母二 ح n あ 12 6 新 一十六 ずし を以 術 體 研 を讀 7 カン 4 究 を配 2 みれ 邦 せ な 得 U る解 12 J 程 說 L R 發 のせ T 音を附 梵 T 7 人 は容 語 0 ح とに 4 を 學亦 易 に対字 た 梵 る全く T 松 12 語 は 3 梵 斯 歐 8 語 4 界 語 知 12 0 通 實 る

の本著

微書者

多年教

究研

果於

7 12

家

樹 117

7

壓 12

細研の

0 究

基

0) 8

理 表

璺 72

U る

外 篤

別 學

佛

理 1

學

0 0)

能 せ

> 論 17

> 論 म

> > 份

往 な

つ結 17

をは は

闡

4

弈

此

0

新 4

研 西 0)

乳 洋 見

は

界

幸 殺 12

慶 心

ならず

菊 定 錢

定に L 彼 -此先 對 人 照未 到 7 0) 佛境 25 致 必入 理る

定 菊 郵 價 稅 圓 錢 册

(中附七

發	目要號五第卷一十第										權 雜 口 記
行 所 振替東京九一一電話本局五二東京市麴町區有樂町一	口用なしごと・・・・・・・・・・・・・・・・・安藤 和風	口我國の出來事鳥谷部陽太郎	口文藝時評水野盈太郎	口詩形論 時枝 誠之	口我國語に同化したる英語 日下部重太郎	口航海上の智識・・・・・・・・・・・・根本 正	口日本に於ける音標文字・・・・・・二上 節造	口世界の色々及日本語研究・・・・・・・	ロローマ字の綴り方に就て機根孝之進	口國語國字問題 泽柳政太郎	威の字
高五二五六 ローマ字ひろめ會	口櫻根博士歡迎會記事	口支部通信	口讀者交藝	□小學校の先生・・・・・・・・・・・・・ 内藤 好文	□夢判斷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	口春にして(短歌)・・・・・・・・・山田 邦子	口枯草(俳句)———————————————————————————————	ロアイヌと畫家の對話秋田 雨雀	口小笠原島の話・・・・・・・・・・・・・北原 白秋	口繪とその思出・・・・・・・・・・ 石井 柏亭	是本要郵券 八 錢 是本要郵券 八 錢

(中附六)

四

「十三年の一月頃から5、Sは私の宅へ屢々出入するやらになつた。淋しい小い教會のベンチに沈

阈 の 宣教師 達 は他 日、 日米戦 等の起る用意に來て居るのだ。彼等は昔の穩密方だ』

てならなかつた。 論 少 ノ々酒 に醉 つて 0 議論では あつ たが、 私には夫れが强ち丫警部 ___ 個の意見で無 い様な気持

K 町の警察署を訪問すると、其所の署長が言語同鰤な失敬な事を私に言つた上、

るの する所が と平氣で言つた。 「併し忠君愛國 カン 知 あつた。 らと思は の N H 彼是を綜合して私は其の當時、 ざるを得なかつた。で、私は下らない誤解を招 思想は無くとも外交上基督教は公認して置かねばならないコ』 やら、丁等が私を警察の犬だと言つたのも無理の無 大日本帝國 政 角が、 いても益 基督教則無政 なき事だと思って大い い事であつた。 府 主 義と思 或男などは に警誡

『沖野は縣廳から年々百五十圓宛貰つて我黨の探偵をして居るんだ』

と言觸したのであった。私は『スパイ神聖論』を書いて京都の日出新聞に掲載したのも此時であった。

Sの信仰の芽生と其運命

0 讀 ·}* 74 一十二年 12 耽 ŀ セ 9 ット 0 の暮頃 出 翻 した。 』と題する月刊文學雑誌を發行 譯文を掲載し且つ同 スから〇 彼 0 下に F. ク 集 þ へつて n 01 好者の作品 居たラデ 思想は急激 カ した。一面二面 IJ 12 を自由 ス 變して來た。 ŀ に掲載する事とした。 は 悉く離散してしまつた。 は 私の 彼は従來 感想と聖書講義とに 0 態度を全然捨 私 は F 充 " 7 1 w 其他は Ł 力> 緒 12

用應世處紀 回撤價特



本美入函、頁十五百四形小、錢六料送、錢十九價定 編夏常田吉

四東 行 九京 本 所 鄉 東 JL 駒 込 Ŧī. 千 六唑 駄

Ŧ

几

基

督

教

٤

歷

史

哲

學

7

某

督

教

7

精

神

哲

學

7

基

督

教

لح

自

然

哲

學

も此るたて理牛富 の種べる處を と では できる との との とも 世道獨 報 での 道破 歩 報 ふ輯啓 徳せの評 で中發夫以る著し最せ々下章作 取らる家五種とりである。 得處待に未べ温た多色分し地花 した類來の 「見しつ眞樓

計道人 人点 會德情間世 觀觀觀觀觀 的 **本大**觀觀 觀觀觀觀觀 成 **觀觀** 3

九

基

督

教

7

基

督

教

لح

哲

學

的

#

界

觀

絕

坐 哲

學

7

神

0

存

在

B 8 德 或 H 木 昌 蘆 獨

基 基 基 督 督 督 教 敎 教 的 7-假 認 定 識 لح 哲

7 ٤ 何 每 實 現 人 日 B 矅 用 代 聽 B 主 0 講 午 學 哲 義 哲 自 前 九 學 由 學 時 的 的 會 爭 認 費 --不 時 識 議 要 迄

督

學

講

義

中附 八

督 \equiv 敎 並 良 會 氏 擔當 部

基

人達は遂に一大事件の連累者となつて終った。

今私はどうしたらばよいだらうか。東京に送られて居る友人達に手紙の一本でも出せば、益々私の嫌 彼等に手紙を送つた。そして其の家族達を訪問して慰め且つ出來るだけの力を貸さらと決心した。 疑は深くなる。と言つて今私が沈默して居るのは實に大人氣ない。とつおいつ考へた結果、私は斷然 してしまつて、新に來た警部は私と一面識も無い。 私は態度を決しなければならなくなつた。私の信仰狀態を比較的よく知つて居る丫警部はもう辭職 其筋では私をも連累者として脾んだに相違ない。

の手紙を出さらか出さまいかと躊躇して居る時ら、Sから左の手紙が來た。

事 れません。 になりました。 御厚情は深く謝して居ます。こんな事にならうとは夢想だもしませんでした。ア、 私の困苦は仕方なしとするも故郷の者に心配をかけ迷惑をかけるのは實に堪へら 困 った

想以起す四十一年の春あなたが屢々我宅を訪はれて聖書を讀めと慫慂せられた時、ア、なぜあの時 n ノリス チャンにならなかつたらう。祖父や母妹に心配かけずてすみしものを。悔恨の涙に咽ぶです、

ア、誤つて居た

不孝者な事だ。 か出來るだけの御注意を與へて下さい。伏して御願ひ致します。 沖野さん九腸も寸斷せらるゝ思ひですよ。豫審は終結して大審院刑事部の公判に付するとの決定書 明日は日曜、 私の一家は格別たよりにすべき確 チャアチに集り祈禱と讚美歌を謠ふ事でせら、美ましいなア。御手紙 かな親戚もなく留守宅は御承知 定めし途方に暮れて居るだらう。 0 如ら有様、

默な彼れの姿が再び現はれるやうになった。或を私は友人の〇醫師を訪問に出かけた。途中でバタリ Sに逢つた。そこで一緒にOを訪問する事になつたが、薄ら寒い夜風に吹かれ乍ら、 熊野權 現

の大樟の傍を散歩しつ、種 々語 つたが、S、 S は

どうしても信仰に入れなかつたが、今度は決心して信じるよ。どうしても斯んなに心が荒んで行つて 『どうしても人間には信念が無ければいけない。儀は三年前に、あなたから神を信じろと言はれても、

は仕様 が無い

と嘆息しつゝ語つた。私は大變嬉しかつた。そして其の事をOドクトルに話すと、ドクトルも宗教問

題について種々と意見を語った。

犯人として特別裁判に廻された。天下の耳目は聳動して其事件の成行如何と注意した。 私の家もら、 彼れは町 ふので、 Sと私との宗教的交際が復活せられて五ヶ月ばかりの間、私は繁々彼れの訪問を受けた。其時 間もなく田邊の裁判所に引致された。事件は嵐の如く進行して其年の暮、 の新聞に客員となつて廣告を取つたり、訪問記を書いたりして居た。所が六月三日に到つて Sの下宿も同時に家宅捜査をせられた。S、Sは赤羽某の農民の福音を持つて居たと云 彼は恐るべき重罪

るだらうと考へて至極平氣で居た。隣りの主人が 親切 12 7

全然内情を知らなかつた私は、

拘引された彼等は公判も何も受けないで、

豫審調べ位で歸して吳れ

沖野さん、今日、明日が、 あなたの 身の上 一に就 いて一番危 い事ださらです。

などゝ言つて吳れたが、私には唯笑つて居るより外はなかつた。併し形勢は益々不穩になつて、友

が、妹君

は場

ら語

つた

つて下さい。是非なき事です。

なさい。 **冲野さんにでも相談してよ。しつかり頼みます、たのみます、頼みます。** なくては駄目です。 紅涙下る。 心亂れて書けず、 あなたよどうか 併し仕方ない、唯精神を丈夫にして下さい。 何れ!!: ……手紙下さい。 私のかくなりしも信仰なかりし為です、どうか一家相愛して暮して下さい、今 ク ノリス チ ヤンになつて下さい。私は今クリスチャンですよ。人間は宗教が 不孝の子ら、 …… …私等の事は沖野さんにもよく賴み Sア 、悲惨の極、

宗教家たるの天職

Ш

を後へ殘さなかつたらう、併し私には夫れが出來なかつた。 はどうしても愚闘々々して居られなくなつた。こんな時私は冷静に構へたなら、今日の様な面倒 續いて私は一枚の葉書を受収つた。

私 は神の榮光を仰いで居ります、沖野さん、さよなら、たのみますよ。

:野さん、私達の運命を知つて下さつて居ませら。

故郷の事宜しく賴みます・・・・

居た。私は彼を誘つて四里を隔てたら、 を賴みに思って心から叫びを書いた事を思つて泣かずに居られなかつた。丁度米國宣教 る、命を受くる前日此の葉書を書いた事を知つた時、獄中から宗教家としての私、傳道者としての私 私は彼が永らく繋がれて居た東京牛込區市ケ谷富久町百十三番地から胡沙吹荒む東奥の監獄に送ら Sの宅を訪問した。そして短い乍ら妹君に慰めの言葉を贈り 師且 氏 カジ 來て

『兄が東京から彼地へ送られました其の廿一日に、祖父さんは死んでしまひました。……』

此 の手紙を受取つた時、私は一身上の後難何かを考へて居られなくなった。私は自分の生を賭しても、 頂からとは思つて居ませんから・・・・・・

此の憐れな家族の爲に力を盡さねばならないと思った。

十二月十七日出 のS、Sが 其の妹に送った手紙の中に左の文句があった。

毫も内觀省察しなかつた過去半生の誤れるを深く深く悔恨します。唯物論の礎上に築き上げられた 私も今囘の入獄によりて大に學び且つ悟る所があります。自己の非を社會制度の缺陷にありとして

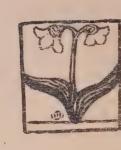
る主義は人を禽獸に墮せしめます。人は決してパンのみにして生くべきものでない。………ア、 一去は罪に死せしも將來は生命に活きよう。お前はまだ信仰が起りませんか、沖野さんに願 つて洗

云々と讀み來つた時、私は自分の蒔いた結果は自分で刈獲らねばならぬ責任を感じて書を妹君

獄中に書を飛ばして聖書を讀むべき事を勸めた。もう其時私の運命は定められたのであつた。

十二月廿日出 「の妹にあてた彼れの手紙には悲しい文句が多かつた。

所 皆 神を確固に持して下さい、決して弱つて下さいますな。祖父様も老齢どうか孝養をね。妹犧牲とな で御座います。 にはもう逢 が幸にも昨十九日無期懲役に減刑するとの恩命に接しました。・・・・・ 口々樣、 御變りはありませんか、既に御承知でせらが去る十八日私は遂に死刑の宣告を受けました。 へないと思へば一番苦しいです。 夫れもこれも畢竟運命です、今更泣いたとて詮方もない事です。 どうか許してもらつて下さい。・・・・・・妹よどうか精 總て夢に夢見て居るやう 祖父樣



詩 1 り 26

佐

藤

清

民等はわたしの室のぐるりに、鍬をうち、 にある一農家に寄寓してゐる。 りも田を作ることに多くの喜びと慰樂とほこりとを持てる筈である。 そしてわたしは土地をもつてゐる人々、財産をもつてゐる人々と同じく、生存の權利を享有してゐる。 働かうとした所で耕すべき田がないではないか。鍬を打つべき畑がないではないか。 が嵩して稍不安な心になると、わたしはいつも斯く自分に對してはゝやくのである。『しかしわたしが を見ると、 らうか。それとも土地をもつてゐる人々がその持つべき筈以上のものをも持つてゐるのではなからう わたしだって生存の權利はあるのである。 『詩を作るより田を作れ』といふ言葉が文字通りに遵奉され得る世の中なら、 へよ。働くべき土地を與へよ。然らざれば今のところ是れ以外に自分の適當と思ふ生活法がない。 所謂何もしないでゐるわたしは一種うら耻かしい感じをそゝられるのである。そしてそれ 春が來た今は麓地の傾斜全面に勢よく青麥の虹がたなびいてゐる。農 地を耕し、 それでもわたしは勞働者の生産を浪費してゐる寄生蟲であ 肥料によごれて、嬉々として働いてゐる。それ わたしは二年程前 われしくは詩を作るよ わたしに から摩耶の麓 土地を

育てた親は死出の旅へ、愛せられた子は無期懲役に…… 私は眼をしばたゝいて日教師を見上げ

た。彼れの眼にも一滴の露が宿つて居た。

そこで私は所有の聖書の研究雑誌中から彼女に適當しさらな文を凡そ五百頁ばから引拔いて小包郵便 出て私の宅を訪問しても直ぐ巡査が尾行すると云ふ始末で、私も亦た彼女に近寄る事の便を缺 で發送した。暫くすると郵便局から私を呼びに來て、其の中の物品を局長の面前で披いて見せろと言 つた。萬事が斯う云ふ有樣で私の彼女に對する傳道は中絕してしまつた。 私はどうしても彼れの妹を信者にしなければならぬと思つて傳道しかけてみたが、彼女が一寸村を いた。

事件後六年にもなるのに、不本意ながら私はS、Sの手紙に對する義務を果さないで居る。S、Sは 漕ぎ出したが、其所にも居堪らないで今は家庭に歸つて居ます』といふ手紙をよこしたが、もう彼 今頃獄中で如何なる信仰狀態に在るか夫れすら知るのよすがを得ない。私は重いくっ責任の負債を背 其後彼女は東京に出てある先生の家に居るとも聞 いたが、昨年春 『娘心のつい浮世を見に東京まで

54

----科學と文藝十二月號、一枚の端書とSの運命参照

負つて居るのである。

0 ててゝに種族 ない。わたしは此點に於て物を純粹に種族的に考へることから離れてゐることを意識してゐる。そし いなげきがあるのである。 の一人としては恐しい危険性がひそんでゐるやらにも思はれる。そしててゝにわれ

是も 象をあげて靈魂不滅を云々するのはわれしての好まぬ所である。そういふ意味から言へば靈魂は n なくてはならぬといふのは、わたしには或事に對して道徳的責任があるからである。若しその道徳的 は 疑 ら靈魂もなくなると思ふかとたづねた。 カゞ ふ言葉に多少のユトリをつけて考へると、民族の記憶に生きてゐる個人の力の强さ長さ廣さがそれで ないか。換言すれば、 ってゐるやうな口吻でありながら、どうして靈魂不滅を信ずるのかとその人がたづねた。 あるとい人氣はすると答へた。そしてわたしは更に説明的にから附加へた。今のわたしに 成 いへやうし、靈魂不滅は虚妄ともいへやう。しかし靈魂といふことを他の言葉で考へ、不滅とい すると其人は更にそれでは君はた、主觀道徳だけで人生を見てゐるの 、果されたなら、わたしには未來がなくなるだらうと。更にその人はそれでは肉體 わたしに未來を信ずるかとたづねた。わたしは信ずるとも信じないとも答へかねたが、未來 不滅は信じないのかとたづねた。 カン に依て、靈魂 個人が民族の中にどれだけ深く沒入したか、どれだけ民 不滅といふことが わたしは多分そうかも知れないと答へた。 わたしは或意味 われ (0 間 に於て信じ得ると答へた。 に可 能なの では かとたづねた。 13 族 するとその カ 0) とわ 理 靈魂の 想 がなくなった 72 福 客觀 は未來 しが 利 人 不 0 はそ た

後を聞 爭鬪 落を叫 くて 的 そういふことを考へて、 が、 全體としての 種を憎惡し排斥し復讎してまでも、しかも何等道徳的責任の感を感じないで) 衝突が、個人的に、異國民との間に起る時、若しくは國際的に異人種との間に起る時、全くその異人 V2 人とつき合うて來たわたしの狹い經驗から言つても、 しなくてはならぬといふやうな衝動を强く感じないわけではない。叉日本に來てゐるいくら もの 的な利 歐洲戰 結局、種族の差異に基づいてゐるのではないかと考へさせられたことも稀ではなかつたのである。 一からやめさせたい心である。わたしは如何なる戰爭の場合にも此つらい心の痛みを感ぜずにゐら はならぬ ではない。そうは 害關係に立戻る時 いては、 ばしむる恰好の口實となった。 一覧の基調とも思はれる各種族精神の主張並にその自覺は、或人々をしてコスモポリタンの沒 い心で その 更にそれを自分の國のことに引くらべて、もつと熾烈にわれくの種族 0 ある。 異人種に對する心は、 と主張する勇氣が ふだんは宗教とか哲學とか藝術とか唱へてねても、 そして若しわたしにそういふことをする力が いふものゝ、わたしは此事を極端まで押つめて行つて、そういふ利 には、そこの種族の無意識的本能的要求が働らくといふやうなことをも疑は な わたしと雖强國の無法なる蹂躙に任された小國民の悲壯 Vo 復讎 よし異 とか 、州惡 八種 その間に起る意見の相違や、考へ方の錯誤 E がわれるの種 力 いふ心よりも、 あ 族と戦争をしてゐる場合でも、 るなら、 もつと傷まし とがのつまり、 自分の利害を保護しな 自 國 民 の精 以次 を鞭 害關 人が カン 神を主張 打 なる最 つて其 0) 外國 本 係 源



震のうし、ほ

命 木 龍

司

す、 決して没道徳にあらず、たべてれ超道徳のみ。 ば、これ即ち邪 れを移して他に及ぼす時、 無能力なるを知り、 こゝに全し矣。 仰は自己を以て罪惡深重の凡夫なりとなし、こゝに慈悲圓滿、 L るを知れば也。 て自己を持する嚴なるに して何 75 の努力と他力救濟の不休の思寵とはた、楯の 余の信ずるところは他力信仰の範圍を出でず。 而る はてっに 時ぞや、 われらの心不完全そのものには到底安住の地を見出すこと能はざれば也。故に德性習 こ、に二つの邪路あり。 自己を持する飽くまでも嚴ならざるべからざる所以は、 つの邪路あり。 路の一に踏み迷へるもの、 達すべきの 知性の開發に於てその極めて暗愚なるを知る。 あり、 徒らに他の惡を責めて自己の惡を自ら寬うするの念、 一彼岸 人を責むるに寛なる所以は、 はあっそれ遠 自己の現在を以て既に罪惡深重となす道德的實行に於てその われらの意とすべきところ飽くまでも人を責むるに寛 い哉 然り而 兩面のみ、 これやがて宗教の真髓なりと信ずるもの して超道徳の事實を自ら實現し得べきの時 一は他に即ち他は一に即 自ら人性の理想に遠ざかること數萬步な 智慧圓滿 てゝに極端なる懺 の如來は現はれて救法 われ現に自己の不完全を了知 少しにても し、 悔 宗教的 南 也。 50 萌 練の 他 救 す 而 事實 は果 濟 あ もって 不 は

最後に其人は靈魂不滅を信じなかつたら、 で不道徳が行はれるものなら不道徳を行はして見るがよからうとわたしは答へた。 ではない、しかし君の間に關する範圍内では是れ以上のことを言ふ必要があるのかとわたしが答へた。 此世で不道徳を行ふやらになりはしないかと言つた。それ

臼 原 12 7

茶

V

5

2 0 U 栕 9 0 子 2 0 /o 暫 ŧ L 10 落 5 吾 居 泣 7 4D 3 物 む 思 人 3. は 高 深 原 ζ 9 3 夜 は 睡 4. ۷Ĵ દે け j° 5 奲 2 け 75 4

3

ŧ

_j 高

す

n

(0)

ζ

h

陽

加

見

7

f

淚

す

ろ

3

す

B

U

0

子

0

1

は

* CF

75

2

原

40 %

撞 2 ζ * 人 L は ζ 誰 人 ぞ 0 高 語 原 n 0 ば 夕 吾 心 闇 u > 13 £ 殷 L Ų め ટ Þ L * Cr て する 鐘 vj 0 法の 1ş け -ろ 49 ° C 75 3

V 原 セ 0) ヲ 鏣 ス 0 樓 鐘 守 醒さ 2 若 む n 人 ば 2 尾 悲 鈴 L Ш 3 我 H 目 0 前 は 撞 رد د رو あ ず ろ が ŧ, あ 嬉 L n 3 75

高

原

0)

伦

0

寂りま

10

する

ろ

鐘

10

高

ð

聖ひ

者り

0

0

聲

す

£,

高

尾 7

鉛

Ш

我

息

3.

ij

14

晴

n

p

-m =

1=

微

笑

2

て

見

(9)

何

Ł

v.

3

6

む

ば也。 矣。 その所以をまさにて、に見たり。 ありや。 世 余は多く會合の席に連るを好まず、偶々それに列していひ知られ不安を心に感ずるもの 一に同好者少さを嘆くもの、 余や孤獨に徹してかゝる心境を悟得したることありき。 共鳴者少さに泣 朋黨の心、 閥族の心理、 くもの、 自らか その解決 > る反省をなしたること一度にても の鍵を余は甞つてこゝに見たりさ

われ既に世に克てり。

と絶叫せる基督の心、解し得たるもの果して幾人。

の、止 との、 として取扱はるべきか。自己の個性を謙虚の心を以て眺め、他の個性を甚大の敬意を以て重んずるも 作り得んかと夢想せることありき。釋尊の教團より五百人の弟子を率ゐて去れる提婆は永久に大迷徒 42 かるべからず。 知ることを得た 反逆 史實 者ユダに對する基督の心はいかなりし。 むを得ずして相分るゝ所以、 に幾 何 60 0 不 都合 たゞ個 あ る 性 かを我 0 相違 釋算にこの偉大ありしと推するば非か。而もそこには無淵の は知らず。 が餘義なく相去らざるを得ざりしものとユ 我れに逆けるものをなは愛し得し基督の偉大は われは甞つてか , る想像を心に割さて一大悲壯 ダの 心理 を解するこ われ既

0 餘弊なるやも知るべからず。自己のよしと思ふてとを他に强ひんとするには余の性格に深 穀 掘 は 念余の心 に深く徹せる病根なるか。 或は てれ少年時代の儒教的教養と、 青年時代の他力的 く根させ 聞法

五 劫 思 惟の願をよくし、案ずれば偏 に親鸞一人がためなりけり。

室に淋 る時 力なし、 の境地にあらず。いふまでもなく教濟は囘避のところに生ぜず、たべそれ に絶ち切りて俗縁とます~~遠ざからんとす。こゝに安易あり和平あり、 の分るゝ 穀 無限 心的 しく心を潛 所、 救濟は飽 エゴ 0 寂寞 萎縮 イ ス チック でと生 つの中に無限の恩寵を感ず。こゝを以てか孤獨を好み、世間を避け、 めて初めてこゝに くまでも自己一人に沈潛する時 工成との 也。 分る 超越には力あり利他的也。 . ^ 所、 味はらべ 氷多さに水多し障り多さに徳多し。 し。 故に古今東西ありとあ ح د 小乗と大乗との分る 27 現 はる教濟は群衆の上に表はれずして、 る神秘家は、 超越也、 而もこれ決して) ^ 所、 小康 解脫 繋縛をひたすら た 也。 と大勇猛 **小一人神と語** 徹 底 빈 澼 的 心と 解脫 12 は

多くは宗教 世 間 紛 擾 0 0 難 何 渦亂中に味得する大安心と、 た るかを知らず、宗教の境地に遊べるものその多くは山林の孤獨を脱せず、眞個 孤獨 山 一林に隱るゝと何れぞ、而も世間巷居にあるもの その 一解脫

0 のは定れる養分以 求する養分を吸收す。 徒らに滋養分あるもの 接觸を恐る。 我 個 性の充足は、 これがため自己の個性の破壊せられ生長を障げらるゝこと、必ずしも尠少にあ 外には 他の を定めてこれを食ふよりも、 こゝに胃 これを吸收すべからず。こ>を以てか常にその 多くの個性との 0 腑 0 强 健 接觸琢磨 なるべ きを豫想すべきは、 各種 によりて初めてこれを期し得 一の食料 を混合してそこに真個自己の もとより當 體量貧弱也。 然也。 べし。 弱き個 真 壁 0 性 0 體 弱さも は 質 一家は 他と 0 要



を抱いて (その三)

平

好

讀者に、

この篇は前篇との間にあまりに隔りがあるけれども、自分の現在の生活と境遇とはそれを書き續けることを許さない、 自分はこのことを悲しく思ふ。しかし何等かの接合が見出されるならば幸である。

ぞれ

十二月××日。

はなかつたのだ。あの夜再た君の健康を害するやうなことになつたとしたらほんとに申譯 出來てはゐなかつたので、止むなく速達郵便で君を停車場までお呼びしてお賴みするより外に は僕が急に歸郷することに就ては何か大事があるであらうと思はれたらしかつたけれど敢て訊からと いたのはほんとに濟まなかつた。しかしまだ下宿の方の支拂ひも殘つては居り、 あ いのから風の吹く夜に、つい二三日前まで風邪の床に就いてゐた君に、停車場まで見送りに來て頂 雑誌の校正 は の仕 な は仕方 公。君 事も

努力のみにて可也。

徹すること能はず、他の衷に自己を見んとする弱々しき欲求ならば斷じて許すべからず。 n る傾 0 事に對する無益なる努力のみ、自他の損失はたゞこゝより生ずべし。汝はたゞ自己そのものゝため 他 0 向 個性をして他の個性たらしむる純真の愛情よりするものならばよし、自己獨自の個性の孤獨に なるが如し。 これ若くして教育に趣味を有し傳道的氣分を解したる所以にてもあるか。もして これ 不可能

的絕對觀も相對を如何に切り開くかの問題の範圍を出でざるべし。 據あるあるものなかるべからず、かくして余の論法は又しても相循環したるか、 否、 の甘んじてその稱號に服せんと欲するもの也。 對なり、 自己が自己そのものゝための努力といふ。山林に隱るゝにあるか、徒らに一室に蟄居するにあるか、 絕對 の 而 個人は到底この世に生存すべからず、自ら對他關係の生ずべきは必然のみ。 もその ·相對は相對そのものに依存すべからず、相對の無碍ならんには必ずや深く絕對に根 ての意味の功利論者たることは余 然らば余の所 對他關係は相 乃謂宗教

はずには居れなかつたのだ。父は二人をさくための最後の手段として僕に云つたのなら、僕は真に父 を敵として恨みずには居られない。

そして二人のためには非常な好意を持つてゐてくれる。そんなことゝは知らずに、僕の父は僕が二人 達二人のことについては厚い同情を持つてゐて下さる程だから必と何かあるに相違ないとS子は僕に 井さんに願つたのださうだ。それからの吉井さんは一層自分達二人のために力を盡してくれることに なつたのだ。四十に近い其の年まで獨身を守つてゐるのは、やはり何かあるのではないだらうか、私 の結婚の許容を請ふと、 云つたてともあつた。 る獨身の婦人だ。 吉井さんのことに就ては君にいつか一寸話したことがあつたと思ふが、産婆で看護婦會を開 S子の家が醫師である關係から、吉井さんはいつかS子とも知り合ひになつたのだ。 一方には僕を抑へると共に、一方にはS子にこのことを思ひ止るやうにと言 いてね

を澄ますともなく澄まして默つてゐた。 けられ に人の氣配 炬燵は特に温かにされてゐた。お湯は長火鉢にしん~~とたぎつてゐた。二人はしばらくその音に耳 で待つてはゐるだらうと思つたけれども、僕はすぐにはどうしても入りえなかつた。しかし通 吉井さんの家の前に立つて、僕は暫くためらつた。その汽車でゆくことは電報でしらせてお てあったのだと思った。入口の格子戸もすぐに開いて、中には電燈がまばゆい程に輝いてゐた。 がしたので僕は小門をたゝくとすぐに開いた。中には人が居なかつた。僕が來るために開 いたの

僕はその時にも尚事件の何であるかを聞くことを怖れてゐた。『どうしたのですか』といふ問ひの言

はしなかつたね。僕も告げたくはなかつた。 かつた。 子の 僕は或 事 はB子が自殺したのではなかったとさへ思ったのだ。 に 就てであらうとは思つたけれど、それが一體どうなつたの お互に自己を守らうとする尊いお心に感謝する。 か僕にはさつばり解

は僕自 氣が 生きることより以上に真實はないと誓つた。しかも感激して誓つた。その時の涙ぐんだ彼女の眸、 S ない。しかし僕には其のジケンが果して何であるか解らなかつた。 1. h とが な に誓つたものゝ、 光に照らされたほ ってしまつてゐるのではないかと思った時に、僕は幾度かぞつとして懦えた。 23 子は自殺 から來た電報の文句 になやみ かつた 車が ぼんやりと光つてゐるのが、汽車中不眠にすごした頭には、一層朦朧とした。汽車の中でも吉井さ た彼女にとつては死刑の宣告にも等しいことを僕は知らないではなかつた。しかし僕はその事を云 思 身が はれれ 仙臺に着 のか。 殺 î な たのではあるまいかと云 かつたのだ。僕はあの夜、B子に二人は二人の愛に生きるより外に路はない、二人の愛に したのだ。 僕は停車 おとし 自分の心中の不純さは彼女の いたのは午前の五時だつた。町はまだ眠つてゐた。朝霧が暗く匐つてゐる中に、 の白い其の類が眼にうかんだ。そしてその類が、 ――ジケン い彼女はそれをさとつて死を企てはしなかつたであらうか。 たとへ自身の 場から出た。唯一人の愛である者の口 オキタスグコイー―を幾度かポケット ム疑 手がS子の血に染まらなからうとも僕はやはり自分が殺したと は可成 死を願 り强かつた。 CI はしなかつた。 もし彼女が自殺したとしたならばそれ から、血 十日前 今この時には冷へ切つたも から取出しては讀 彼女と別れることを望みはし 統が正しくないと云はれるこ のあの夜のことを考へると 自分は ーーいろくの思 あ のやらに んだ しれ 彼女 となる 電 月

がまゝに留め、若き日の思ひ出とし、美しい物語として永久的に秘めたい。そして家のため、父のた とへは戻りはしない。二人が互ひに大きな冷い疑ひを抱いて一所になるよりも、むしろ清い愛は清き

れを嬉しいとも思はれない程、決斷に迷つてゐた。 S子の苦しみを訴へた。そしてS子の優れた種々の素質に就てはしきりとS子を讚めた。僕は今更そ S子の決斷に就ては、僕は全く意外であった。自分の豫期にすべてが反して居た。吉井さんは種 にてんなに早くその事が起らうとは思はなかつた。そしてまた、あの夜の誓ひに反した、その新しい に普通の婚期には遅れとも云へば云へる二十三の年ではあるけれども、自分達の間のこのやうな場合 めに犠牲とならうと云ふのであつた。 僕はその事が全く意外であつた。こんなに早くS子へ他への縁談があらうとは思はなかつた。すで

れなかつたでせう・・・・・」と云つて劇しく咽び泣きした。その夜からS子は床に就て殆ど三日 弟と二人ぎりになると、B子は弟の膝にすがりついて「お父さんは何故私が生れて來た時に殺してく は全く青褪めてゐた。父は兎に角たい事ではあるまいと思つたけれども、そのまゝ室へ入つていつた。 そこへ弟が出て來た。S子はたゞぼんやりと電燈を見つめたまゝぼんやりして居るばかりだつた。顔 なかつた。丁度往診から歸つて來た父はその樣を見てどうしたのかと訊ねた。S子は全く答に窮した。 泣きはらした眼をしてゐたのだと云ふ。 は床についたま、食事 子は十日ばかり前のその夜、家へ歸るや否や、玄關の柱に足をなげ出して倚れたまゝ身動きもし も碌々取らずに居つた。看護婦が時々S子の寝室へ行く時には、 いつもS子は ば

を切つた。吉井さんは肩をすぼめて炬燵に身をもたせたま、再た暫く沈默して居た。僕はさてはと思 葉は僕の口元に出ようとしては引込められた。吉井さんは濃い茶を一ばい注いでくれた。僕は窓々口 つた。しかし吉井さんの可成落着いてゐる樣子に、自殺ではあるまいと信ぜられるやうになつて稍安

子の父に手紙を認めて投函した。父はその手紙をS子の前に出して、こんな手紙が來たけれども、よ とならば嫁せたい。そのやうな事情であったために吉井さんは止むを得ず、僕等二人のことに就てS し、S子と繼母との折合の悪いことに原因する家庭の不和に就ても心を苦しめてゐるので、成らうこ ではあるし、相手も地位の悪い人ではないのだし、父は望みまでしないにせよ、嫌とは思ひはしない 由とから、今はどうしようもない狀態になつてしまつてゐる。一方S子は今度の事に就ては、年も年 十近い人である。S子は今どうしようかと苦んでゐる。自分達二人は先づ自分の父の反對と、あの理 そして二三日の中にきつばりと返答せよとのことであつた。その求婚した男は縣廳に勤めてゐる。三 あつた。 く考へて返事をせよ、そしてその手紙は参考のために取つて置かねばならないから返せと云ふことで 話はかうであつた。一昨日の朝、S子が急いで吉井さんを訪ねた。父から結婚に就て話が あつた。

とへ僕がそれをあの夜の誓ひのやらに許しらるとはいへ、越えがたい相互の裂目はどうしても再びも い。しかしもしあの事が事質であるとするならば、二人の間には旣に裂目が出來てしまつたのだ。た S子には尚一つ大きな問題があつた。たとへどんなに苦しまうとも清い愛の生活に生きてゆきた

とはない。父や母と僕の間には最早大きな溝が築かれてしまつた。父とも母とも今夜夕食の時 を出た。そして父の家へ入つた。實際のこと僕は今度と云ふ今度、こんなにまで味氣ない思いをしたこ に何にも云はなかつた。僕も默々として、食事を終つて、すぐに自分の室に歸つた。自分の家ではな H 愛してくれるならば、そしてその上にO子が自身を葬り去らうとするのならば、自分はそれを止める い、父の家と云ふやうな考しかしないのだ。 の夕方になって僕は、 ない。たいS子の考のまゝであつて欲しいと云つた。 丁度最初父に知らせてあつた汽車の着く頃の時間を見計つて、吉井さんの家 詳しいてとは云ふまい。 兎に角その 12 は

今夜はこれで筆をとめる。 どうしてもそれ して書く。 き繼けたので、推察して讀んでくれ給へ。僕は自分の心の苦しみから、謂は、心をまざらすために 長 今日一日の種 い手紙になってしまった、最後の二三枚は床の上で認めた。 自分が自身に物言ふやうなものだ。くどしくしいこともあるだらうが許してくれたまへ。 を承け容れない者がある。そして自分から自分の心に苦しんでゐるのだ。夜も更けた。 々の事を考へて、僕は寂しい。吉井さんにはあ、云つたもの、、僕の心の中には未だ 汽車にゆられて頭で思ひ出す事 を書 カッ

69

十二月××日。

する。 君 あの夜君にすこしなりとも告げなければならなかつたのを告げずに終つたことに就ては僕自身 葉書は今日の 正午に落手した。常もながらよく心配してゐてくれることをほんとに有

かし自分はそれをどうしても包んではゐられなかつた。S子自身が苦しむ程、自分自身が苦しんでゐ から話さずには置かなからうか。自分の愛する者をそれ程にまで何故苦しめようとしたのか、――し に悶えさせる程であるならば、そしてそのことも許すことが最も純真な自身の要求ならば、何故最初 てとを話すと、それを反駁する材料を持つてゐた。僕はそれに大に力を得ると共に、それ程までにS子 吉井さん自身はS子の家が、そうであるとは信じてゐないらしかつた。僕が父から云はれた種々の

たのだからだ。自分の苦しみに就て最もよる方法を取らればならなかつたからだ。 僕の家のためである。今父からの結婚の返事を承諾しないならば、それは家出より外に路はない。も てゆくことは一つにはS子の家の平和のためであり、一には全く僕自身の仕事のためであり、そして 第一に僕の幸福ではない。愛する者のために自己を捨てるのが最も愛に忠實なる路ではあるまい うが、それには一方學校を退かなければならない。そして自ら求めて苦しみの中に僕を突き落すのは もし今、僕が學生生活を止めて、何かの仕事を求めて働くならば必と二人の生活は續けられるであら そして大なる愛の犧牲となって、僕が僕の真實の路に生きるならば、其處にまた意味ある生活がある 吉井さんはS子の意志として僕達二人は決局別れねばならないのであること。そして今S子の嫁い ·家を出るならば決して再び歸つて來ることは出來ない、そして僕の腕にすがるより外に路はない。

しわらう。それがS子の考であった。

るならば、喜んで共に生きゆくべく企てることも決して鮮しはしない。しかしS子が真に僕の仕事を 僕は健氣な、 いじらしいS子の心に今更ながら涙ぐんだ。僕はもしS子が自分に飽迄も從つてくれ

深く沈んでゆく。そして深い底の底に永久に埋もれ果てる。それが自分の仕事と云ふ仕事ではないだ 否定しながらも虚榮を望んでゐた。安逸を否定しながらも安逸を望んでゐた。そして今も尚運命も回 生きゆく者ならば、何れも同じ神の「市民」だ。その間に何のけじめがあらうか。 からうか。神の意志、人類の意志とはあまりに美しい名目だ、そして自分は今迄にその麗しい名目の 人類と神とに忠實なるものであらねばならぬと信じて來た。しかし人類とは何であらう。 - に體得する程に惠まれた者であるであらうか。市井の巷に埋もれてゆく者もやはり神の意志 めに迷はされ來たものだらうか。果して自分の如き者が、神や人類やに召されて、その意志を自己の 體何であらう。 海は小 石一つに依つては決して波立たうともしない。反て小石は大海の波にもまるゝまゝに そして自分の待ち望む仕事とは畢竟大海に投ずる小石 の如きも 自分はやは 0 では 神のた 5 虚榮を 依 海 71

くスケプテイクに陷ちてしまつた。 人間 戀愛に對しても從て自分の愛に對して、そしてまた自分自身の仕事と云ふ仕事に就ても、僕は全 は結局は一人だ。そんな考が可成强く胸に響く。僕は解らなくなつた。自分の心が測

避しようとしてゐるのではあるまいか。

會はせてくれるやらに賴んだ。明日また吉井さんを訪ねやらと思ふ。何日S子に會へるか解る筈だ。 自分は今全く中心を失つてしまった。今日散歩の歸途、吉井さんの家へ人知れず寄つてS子に是非一度 こんなにまで一つの事が、S子と別れると云ふことが自分を變へようとはどうして思はれたらうよ。

は寂しいものだ。しかし孤獨は尊い。こんな簡單な言葉が、君には何でもないことのやうに思 それまで君に解ってゐる僕の事を考へ合せてくれたら大體は解ってくれるだらう。 た 12 僕 砂 カ> も可成に苦しんだ。 苦しみさへすれば二人が共に生きうることを知つてゐる。自分は自分の仕事とか未來とかのために其 その唇も、 の最も愛する者を捨て去ることは、 4 3 二人が畫 はS子のてとを考へると一層耐えられなかつた。 いの上に佇みながら、僕は僕自身の行末に就て考へ、しきりに涙ぐましくなつた。 さ知れない。しかし僕は霜解けの路を歩み、底の小石が透き通るやうに澄んだ川水を眺 今日は廣瀬川から青葉城のあたりを當もなくさまよつた。僕は初めて自分の孤獨を見出した。 かる知れない。そして若さ日の戀を思ひ出しては、私にも若 い默してなるがまゝに任せるかも知れない。穢されるがまゝに穢れ、蹂躙するがまゝに蹂躙され、 穢され、 そう考へて僕は懦えた。何故愛する者のために最もよき幸福の路を選ばないであららか。 かれ果てゝ、平凡な人妻としての生活に一日一日と光りない生活 自分は自分の一生を殉教のための生涯であらねばならないと信じてゐる。そして自分の仕事は いた理想は一個の幻に過ぎなかつた。人の一生はなるがまゝになるより外は仕 その その肉體も、その靈をも、心なき男のなすま、に任せて、それが自分の運命だつた。自分達 肉體 今朝投 があへなくも蹂躙されてゆくことにどうして僕は耐え得よう。 函 した手紙も一つにはその君に對する償ひのためでもあった。あれに依て、 自己の窮乏のために妻を賣らうとする惡人とどれ程の相 あのS子の靈が、つれない男に依ていつとはなし い時があつた」との 0 中 に埋れてゆくか S子は運命として それ 追 懐 方はな にもまして、 めて廣 3 12 3 知 自分は今 n 違があら 瀬 ない。 熱 いと思 川の い涙

70

5

愛の力、 戀愛の真實さを考へ、そして一度S子と別れて後のあの寂寥を懐へば僕は再びS子の嫁ぎゆ

<

事

ずが許

し難いてととなって來た。

ば それを打ち破つてゆくことが出來ない。一切を打ち棄て、自分をより自分とすることが出來ない。僕 だ、好ましい生活をしたいと云ふことだ。苦しまずに生きてゆからとする考だ。 に小さいてとに執着してゐる。それは自分が大學を折角二年まで來たのだから、 うかも充分に考へてゐる。しかし僕は今、現在のこと、 ゐる。そしてそのことを決行せずに終ることが、僕の一生を通じて僕をどのやうに苦めるもの 仰 はしみん〜自分が情なくなつた。自分の素質が疑はしくなつて來た。すこしばかりの哲學や、すこし あ は カゴ かりの信仰やはいざといふ間際になれば何の力さへもない。哲學は論理の戲れにすぎなか は確 如何に小さいか、そして永遠の前に消え去りゆくことであるかはよく知つてゐる。しかも僕には 個の趣味に過ぎなかつたのではなかららか。僕は真に永遠なるものに就ては全くミセラブ 僕は に卑怯だ。當然なさなければならないことゝ知りながら、それを決行することが出來ないで 再 び新しい自身を打ち建て、行かねばならない。 あまりに小さいことに捕 終りたいと云ふこと はれて - 僕はこれらの考 ねる。 つた。信 あせり ルで

ほんとに切ない。昨夜は櫻が岡のあたり散步した。櫻の幹に倚れてS子の室からもれる微か つめながら情然とする僕を思つてくれたまへ。これから吉井さんを訪ねて、S子と合ふ日のことに就 漂泊 0 のさみしさに打たれた。かうして家に居つて、父とも母とも相通はざる心を抱いてゐるのが 町 をあてもなくさ迷ひ疲れて、電柱を抱いて泣いたあの頃のことを僕は今日また思ひ出 な光を見

十二月×××日

みた。 以前とは全く新しい思想の背景を抱いて再び宗教の門に歸つて來たのもこの年だ。それと共に僕は再 た。昨夜はあの手紙を書き終くてから、僕は床の中に入つてしみでくとこの二十四歳の年を回顧して び愛によみがへされた。 愈々この年も最終の日になつた。この年程、殊にこの年の九月以來程僕にとつて多事な事はなかつ 大學へ入るまでの一年間の休學も、外面は單調に見えても僕には或る一つの回轉期だつたのだ。

れた生活をした。前らぬにあまりに寂しい寂しさをも味ひ知つた。然し前るべき言葉を自分は知らな はS子との別れが影ざしてゐなかつたとは思へぬ。僕の生活は亂れた。そして聖書とはあまりにはな 子が僕の飢れた心に再び影を投げ始めると共に、僕は再び嚴肅な心に歸り始めた。それからの變化は 君 カコ つた。伊豆の大島 S子との第 の知つてゐる通りだ。筆にはしまい。 一の別れがあつた時から僕が靜に考へたいからと云つて休學したのも、其の根深い庭に への旅を第一として、僕は可成に放浪の生活を續けた。そして一年が過ぎた。S

72

3 浦 も解らな の手紙に僕はこんなことを書いたね いものになってしまったと。 S子と別れるとしてから自分はすべてを疑ひ、自分自身

あ 僕は た僕としてはあまりに大きな變化ではないか。僕は僕の心を引締めてねてくれた者は、やはりS子で S子の愛であつたと思ひ出せて來た。僕は自分の素質の中に喰ひ入つて僕を生かしてくれる戀 今朝からこの 問題を真剣に考へてみた。 あれまでにすべてに就て明確な考を持ちえたと信じて

漫然たる藝術の言葉に生きようとはしない。彼はひたすらに實生活の創造を希はねばならぬ。僕は今迄 藝術に生きようと思つて來た。しかし僕は以上の路を逆に行かねばならないと考へてゐた。 生活を初づ生かしそして自己の生活を以て自己の教説を實證せねばならぬと思つた。 して一人の藝術家が自己の藝術の言葉と、生活の實行との間に隔りのあるを知る時に、彼は最 そして彼が人生に對して一人の說象者である以上は、彼は自己の生活の改造を企てねばならない。そ 自己の實

は ただけに、 切 バベルの塔の空しさであつたことを思ふ。 は葬り去られた。 れども自分は先づ第一のスタートに於て破れ傷いた。 與へられた打撃も誠に手痛 僕は過去一年に近い間の數十の手紙を繰り擴げて見て、今迄の種々の考も結局 So 謂は で自分の一切の企ては一切空想であり、

幻であつた。 自分が理想に生きようとする念慮が深かつ

き年に幸あれ。 とを知りたい。これもやはり自己を清めるためのプルガトリオの焰であることを信じたい。 自分は今ほんとに亂れてゐる。しかし僕はこの事の中に自分を更に嚴肅ならしむべきもの あゝ明日はS子と會ふ日だ、S子と最後の別れの日だ。 っあ 君が新し るこ

一月一日

は 時間 小間使の外誰も居なかつた。吉井さんは急に病人があつて、朝七時頃俥で出たが、田舎であるので 君 、僕は實に殘念だ。S子には遂々曾へないでしまつた。實は今日十一時に吉井さんを訪ねた。約束 は十時だったのだが、僕も家の事のために十一時になってやつと行けたのだ。 吉井さんの家に

て聞からと思ふ。

十二月×××日。

(再び)

せかたん一持つて來て、吉井さんに僕へ渡すやらに託したのだ。 の手から、S子に宛てた僕の手紙が一包みにされて渡された。それは今日S子が僕と會ふべき日を報 る。僕は今この手紙を床の中で書く。吉井さんを訪ねると、吉井さんは丁度小間使の少女に手紙を書 いて渡さうとした所であった。S子とは一日の午前吉井さんの宅で會ふことになった。今日吉井さん |夜の鐘が寺町の方から響いて來る。二十四歳もこの時かぎりかと思ふとなさけないやうな氣がす

のものを呪ひたい。 のやらな淡い愛の誓ひの後に、このやらな深い理解の後に、尚且破壞のあることを考へると僕は愛そ 愛との跡をたづねてみて僕は寂しかつた。S子はそれを一々日附通りに分けて整へて置いてくれた。 これらが一つ~くにS子の眼にふれ、そしてS子を慰め、S子を力づけてくれたかと思い、そしてこ 僕は今自分の手紙 ――殆ど一年の間の手紙を繰返して見た。次第々々に深まつてゆく自分達の心と

標を求め、指標を立てるであらう。彼が藝術に於て立てる一個の指標は人生に對する一の說教である。 僕は常々から思つてゐる。藝術家は畢竟は說教者であらねばならない。藝術の對照が人生であるか そして藝術家が人生をしてかくあらしめたいとの望みを抱くかぎり、彼は藝術に於て八生の指

いた。察してくれたまへ。故郷も僕には最早や耐えられない。二三日の中には上京したい。

活の上に、時々は祈つてくれまへ。面語の日を切に待つ。 てとのために決して打ち倒れはしないだらう。僕はS子の心に今新しい決心の萠して來ることを信ず い、しかし運命を信ずる。僕は理想を認めることの出來る人間だ。新しい決心を以て拓からとする生 二人のこれまでの運命を考へる時に、その事は必ず起らねばならないやらと思ふ。僕は運命を知らな 種 S子は必ず嫁ぎはしないであらう。期を計つて父の家を出で去るのではあるまいか。僕は自分達 々の御助言は有難う、君でなくてはからまでは云つてくれまひ。然し安心して下さい。僕はこの ——一九一六、四、七——

3

S

5

ì 固 Ħ 雨 痛 何 0 5 向 * f, ħ 日とうば 2 3: 灘 0) ζ n 驼 お 7, 悲 0) È * " l 子 船 2 zhs Sdr 玉の <u></u> が 3 路 力 吾 故 を一南に 話 夜と涙こ のできさやきょも説 鄊 統 心 地 ~ 鱚 る j 40 (0) そさすら 松 ζ *D * け 並 æ 1 木 ζ ば 斯 福。 昔 が 3 まれ 島 C 75 思 樂 0 が 見 しいき 子 0 L 5 (0) の生命 H 君 批び の。思 が 船 あ 棚の 頰 る 0 75 出 が 旅 樹き v] ક 悲 75 見 茂 () 2 3 (0) j から ろ n

多分午後に訪ねるだらうと思つてすぐに家へ歸った。それがるけな 午後でなければ歸らないだらうとの事、そしてS子もまだ來てはゐないとの事であつた。僕はS子は カ> つたのだ。

單に 臺に もゐなかつたので歸ること、そして今日もやつと家を出て來たので、再び出て來られまいこと、僕 人の會合のことに就て、何か至急のことでもあつてはと思つて、封を開いた。中には自分も吉井さん 上つて見ると机の上に手紙 か」と訊ねると、 は午後の一時再び訪ねた、吉井さんは歸つてはゐなかつた。「どなたかお訪ねになりませんでした 書いてあつた。 歸って來てゐることがS子の父に知れてゐるので萬一を慮つて父は嚴重にしてゐることなどが簡 小間使の少女はS子が訪ねて來たと云ふことを告げた。僕はがつかりした。産敷へ があつた。それは日子から吉井さんへ宛てたものであつたけれど、僕は二 が仙

家 交すてとも許されないのか。どうせ別れなければならないのならば、せめて別れをして清からしめた 寂しかつた。 かつたのに。 は歸るつもりはなかつた。道は自然と櫻ヶ岡の方へ――S子の家の見える方へ向いた。僕はたい は 應その信書を開 永久に二人の間にはまた會ふべき機會は許されないのかしら。最後の清き別れの言葉を いたことに對して吉井さんにお詫びの手紙を書き殘したまゝ外に出た。勿論

た野に、たいひとりであつた。濡れはて、家に歸つた。父にも母にも一言もなく、室に入つて床に就 もなくさせようた。 瀬川の岸に沿って宮城野の方へ出た。 日は暮れて行つたけれども家 北國の空は低 へは歸らうとも思へなかつた。 く垂れてめてゐた。冬枯れの宮城 みぞれ さへ降 野 を僕は的 ら出し

SONGS OF LIGHT AND LIFE

THE DAYBREAK

Half awake
I heard the sliding-doors pushed aside;
The fresh air of daybreak
Silently pressed upon the paper-screen of my bedchamber—
There was a thrill of Life.

No stir of men and creatures,

No din of the world as yet;

Neither regretting thought of the past,

Nor yearning desire for the future was present;

But I—if I may call it I—lay calmly,

With scarcely a sense of locality,

A conscious, new-born babe,

Complete in the present moment.

No thought of kin or stranger,
No thought of the day's work,
Even no thought of self;
Yet, strangely,
A conscious cosmos, full of Life,
Breathing calmly in the morning stillness.

THE SUN AND I

The sun is shining bright in the blue expause of sky, A boundless ocean of Light and Life,
And I, serene soul of the wide universe,
Bathing in his Light and feeling his pulse,
Walk in a busy street of the capital.

THE PUMPKIN-VINE

Dear pumpkin-vine of the little farm!

Thou climbest the barn, and upon the roof

Spreadest thy leaves; broad, fresh, and green.

But the roof alone cannot satisfy

The craving of thy hunger and thirst—

Hunger for Life and thirst for Light;

So thou climbest the tree, beside the barn, Up, up, up toward the sun.

Dear pumpkin-vine of the little farm,

With hunger and thirst for Light and Life!

Thou art not a stranger to me!

But a friend, dear to me.

Minoru Toyoda.

△虚心集句稿と関 ・ 句數等を関 ・ 當 欄 明村限 別記のこと 対対のこと が記りず にはず

旬

慕

集

集 雪 赤 鏞 青 小 囀 粃 B 部 木 水 雀 Ш 杷 松 カン 割 溫 n は 屋 石 麥 揚 0 0 6 0 0 る h TS 臭 H 0 カゴ 花 斡 濁 崖 E 2 カン 口 杜 る 全 朋 る ľ 6 岩 3 Ì () 0) h H B る 雫 20 0 枝 b 0 土 0 散 和 * 骨 핲 芽 踏 W カ> n 水 る 0) 3 診 細 す 0 V2 2 25 5 風 倉 土 工 る J み る 雉 首 梅 4 12 を 0 草 8 す な 子 窓 凧 足 潮 2 る 足 Š 大 握 袋 下 遠 0 み 袋 兄 干 h 影 葉 6 S 3 冬 干 ろ 出 干 Ł 1 せ あ た な 鳴 た せ す 日 6 せ な あ < V2 影 る 9 h h 畑 h 9 h 9 る

泉 唐 米 鈴 波 九 久 魏 多 雉 水 兎 里 鳴 升 洋 月 城 九 象 泉 子 淵 子 宮 興 秀

蓬 機 種 煙 瓦 外辛水舟草 燕 軒 草 斯 夷 摘 關 餅 突 套 鲞 燕 摇 春 0 4 ح 蒔 車 カ> 乘 黑 赤 0 73 U 來 ζ は 火 日 た る 4 < ろ な 白 < L 葉 戶 < * 木 兒 V 燃 春 君 U 貓 海 丽 口 襄 吹 0 12 (0) 5 カジ 綿 0 荒 投 0 4 顏 1 は る 0 4 3 霜 泣 水 カン 吹 0 n ٤ 靑 げ 赤 白 2 0 け 4 水 3 3 9 0 麥 兒 る 4 辛 た ま 沈 入 づ を 夷 風 2 0 る 爾 太 る 哭 窓 ζ る is る **V**2 暮 b ス た 降 4 切 0 辛 な 廣 春 n * n る n た 木 る 6 夷 9 b 日 3 る 戶 b 12 る

心

虚

华

碧

樓

イさん。

れてある、扉の開くのも聞えない。百姓の娘でアイヴィーラコムといふ、年齢は十四の、小柄で鼠の様に靜かなのが片手に祈禱本や、片手には水を入れたコツプに蘭と濃いが片手に祈禱本や、片手には水を入れたコツプに蘭と濃い桃色の山楂を活けたのを持つて這入つて來る。娘は窓際の味に腰を下ろして本を展げて花の香を嗅ぐ。殴の終りに來をに腰を下ろして本を展げて花の香を嗅ぐ。殴め終じ辞かなのれてある、扉の開くのも聞えない。百姓の娘でアイヴィー。

有難う。「彼は笛を椅子の上に置く。」他の人達は何處って対って痛って來ましたの、ストラングウエイ「驚き向き返って」おゝ、アイヴィさん。

に居ます?

グラデイス 「マーシーが來ます、ストラングウェーマンと、綺麗な、野呂間らしい、碧眼のサカソンのトラスタフォード・コニーとが――二人共凡を十六歳――入日のなアイヴィの前を斜に通つて同じ様に窓の下に坐を占める。アイヴィの前を斜に通つて同じ様に窓の下に坐を占める。

ストラングウェイお早ら、グラディスさん。お早ら、

コニーなん。

早く辷り込み、犀の隣りの席に腰を下ろす。と忽ち私語が位、美しい髪と碧眼を持つてゐる。後ろに何か忍ばせて素ジアーヲンドが芝地の方から這入つて來る。此の娘も十六が斯うして女子共に背を向けて立つてゐる間に、マーシー・彼は卓子の上の本箱に對つて一册を取出し場所を探す。彼彼は卓子の上の本箱に對つて一册を取出し場所を探す。彼

マーシーお早う御座います、ストラングウエイさ、ストラングウェイ(皆に向って)お早ら、マーシーさん。

ん。

マトラングウェイ さて、昨日私は、私達の神様が此 の世の中へお出ましになつたが為めに如何いふ した。神様が來られない中は、今私達が知つて 居る様な愛など、いふものは全くなかつたとい ふことを私は皆さんに覺えてゐて貰ひ度いので ふことを私は皆さんに覺えてゐて貰ひ度いので ふことを私は皆さんに覺えてゐて貰ひ度いので

愛の切れは l

(ゴールスワーシイ)

木

松

第 慕

登場人物

ストラングウェイ・ …… 牧

師

0

ŋ

ス

其

妻

ブラデミア夫人 パーラコムの妻

員

į

۵ 同

アイヴィ(バーラコムの娘) 堅信期の少女

ラ

デ

ラコムの農家の、低く腰板を張つた居間に、マイクル、ス 西方の一村に於ける昇天日。村の芝地に建てられたバー

> な微笑が漂ふ、苦しい秘密を際してゐる様に。併し其のギ けである。男の年齢は三十五位、身體の細い、スラリとした 真の前で笛を吹いてゐる。壁に懸つてゐるのは此の寫眞丈 ザヤケットを着けて、極めて大きな額縁に這入つた女の寫 體。窓臺の上の低い幅廣の窓が此の人物の背景を造る。そ がない様に見る。上べは柔和で腹の中は燃えてゐるといふ ラリとした灰色の眼は、其の周圍が黑ずんで恰し磔刑に處 は額から飛び出て縮れてゐる。 面長の、長い尖つた耳を持つてゐる男。其の黑がかつた髪 トラングウェイが、頸に牧師のカラーを巻き、ノーフォーク **玄關が、五月の日光に浸されてゐるのが見える。窓臺と直** して其の窓格子を透して、墓地の外門や、水松や、教會の せられつ、ある如く、上を睨んでゐる。一體に何處か落着 性來豐かなものを自ら求めて薄くした樣な彼の唇に幽 D 2

ンソナタの第三段である。彼の背は家に通ずる扉に向けら ストラングウェイの奏でるのはヴェラシニのヴァイオリ 角を成してゐる入口の扉は芝地に、左手の扉は農家に通ず

アイヴィかたし、先生の奥さんが仰しやつた事を 覺えてます、あたし奥さんが未だ此處に被在る す。 中に一度何つたことがあるんですもの。

アイヴィ 奥さんの仰しやるには、甚麼事でも赦し ストライグウェイ 「ぎょっとして」 そうでしたか? てやる様な人を云ふんですつて。

ストラングウェイ

時鳥の鳴聲が聞えて來る。娘達は、夢にても這入つた樣な ス トラングウェイを晴めてゐる。騷擾や私語が始まる。

コンニーストラングウェイさん。お父さんがから ものは意氣地なしですつて。 いひましたの、人に打たれて打ち返さない様な

あたし吹き出しちやつたんですよ。 た、そしたらキャッていったので「カスカス笑ふ」 ったときあたし達は彼奴をつねってやりまし トムミー・モースが喧嘩はいやだつてい

> ストラングウェイ皆さんにアシシの聖フランシスの お話をしたことがありましたかね?

アイヴィ「手を組合せて」いった。

ストラングウェイ宜しい。私の考では、聖フランシス ます――只々愛と喜びに充されてゐたのです。 の樣に立派なクリスチャンは今迄にないと思ひ

アイヴィもう死んだんでせらね。

ストラングウェイ 約七百年前に。

アイヴィ「静かに」 まあ

ストラングウェイ マーシー あたし知つてますわ!其の人は隠袋の中 や鳥の類までもそうであつたのです、だから此 凡て憐れなるもの、弱いもの、悲しめるもの、獣 等のものは彼の後を追うて歩いた位なのです。 り姊妹であつたのです、太陽といい月といい、 へ麵麭屑を入れといたんでせら。 總ての物が彼にとつては兄弟であ

ストラングウェイ否、そうちやありません、彼は其

る。マーシーはもぢくくする。グラディスの眼は蠅を追つてゐ

アイヴィーはい、解ります。

ストラングウェイ 人が自分に親切にして吳れるとか又は種々な事で自分に利益を與へて吳れるとかないのです。私達は愛するが故に愛せねばならないのです。私達は愛するが故に愛せねばなられば私達はペーガンに過ぎないのです。

た人達に附けた名前なのです。 つた人が、村の未だクリスチャンにならなかつつた人が、村の未だクリスチャンにならなかつ

マーシー あたし達は村に住んでゐるけどクリスチ

ヤンですわね。

ん。ところでクリスチャンといふのは如何いふストラングウェイ微笑を以て」
そうです、マーシーさ

人をいふのでせうね。

たといふ様な顔をして後ろを振り返る。 たといふ様な顔をして後ろを振り返る。 たいな様な顔をして後ろを振り返さると俄かにまあよかつで ーシーは横に隣りの者を蹴って碧眼の娘に顔をしかめて

ストラングウェイ アイヴィさんは?

アイヴィ それは、それはーーー

ストラングウエイ

コニーさん如何です?

グラディスをれは、洗禮を受けて堅信禮をすまし子で」それは、先生、教會へ行く人のことです。

アイヴィ それは、親切でそして―― て、そして、そして、葬られちまふ人です。

打ち返さない様な人です。

グラディスお酒も飲まず、馬も打たず、そして人を

マーシー「呵聲で」 お前の番ぢやなくつてよ。 「ストラ

ビーに三片造つてそれを貰つたんです。

たわ。

彼は再び一種の夢の中に沒して了ふ。

出して〕あたし堅信禮をして貰ひ度いわ。 さん、あなたの後ろにあるものは何です? さん、あなたの後ろにあるものは何です?

ストラングウェイ何ですつて?

うと思ふんです。ボビーが捕まへたんですの。マーシー飛べるんですけど翼をちよんざつてやら

ストラングウェイどれ程前に?

マーシー 「髪り懸って来る災難に氣が付いて」 昨日です。マーシー 「蹙め顔して」 あたし雲雀が要るんですよ。 でもない!

マーシー[それを投げ捨て――激して」 あたし雲雀が要るストラングウェイ[六片の貨幣を出して」 さわ!

ストラングウェイ 神様は空や草の為めに此の哀れなれるとお造りなされたのです。それにあなたはあ鳥をお造りなされたのです。それにあなたはあくなものに入れる!野に居るものは決して籠に入れてはいけない、決して入れてはいけない!ストラングウェイ 鳥籠を照ける〕 逃げて行け、可哀相に。鳥は飛び出して行って了ふ。娘達は眼を圓くして、振り上鳥は飛び出して行って了ふ。娘達は眼を圓くして、振り上げた彼の手と放たれた鳥の飛び去るのを注視する。

アイヴィーあたし嬉しいわ!

ドで以て彼を凝視する。 ウエイは扉口から來て歔欷するマーシーを見て突然自分の ウエイは扉口から來て歔欷するマーシーを見て突然自分の はないである。
ないではいないでいます。
ないではいます。
ないではいます。
ないではいます。
ないというではいます。
ないというではないます。
ないというではいます。
ないというではないます。
ないます。
ないとはないます。
ないというではないます。
ないます。
ないまするではいます。
ないまする
ないます

ボッビーがまた直き捕まへて吳れるわ。

の眼に愛を持つてゐたのです。

アイヴィ そりや、先生が話して下すつたオルフュ

ストラングウェイーカン、ナルビも聖フランシスよクースの話に似てますね。

リスチャンだが、オルフュースはペーガンでしストラングウェイあっ、けれども聖フランシスはク

アイヴィあらそうですか。

すした。 物を導きました、聖フランシスは愛を以て導き かを導きました、聖フランシスは愛を以て凡ての

アイヴィ 大方同じなんでせら。

アイヴィさん。多分そうだらう、

グラディス 其の人は先生の様に笛を持つて ゐまし

のよ、ほんとうよ。 アイヴィ 花は音樂を聽くと除計に好い香りがする

彼女は花のグラスを取り上げる。

ストラングウェイ「蘭の一つに手を觸れて」此の名は何と

いふのです?

證で興味を注いでゐる。 嬢達が寄集る マーシー丈けは後ろに潛めてあるものに内

コンニー それは、先生、たねつけ花つていふんで

があるんですよ。よ。それがたがらしの様にどつさりある原つばグラディス・小川の方へ行くとどつさりあるんです

つた。 妙ですね、私は一向氣が付かなか

だって先生はこんな風にして歩くんですもの。アイヴィー歩いてる中に氣が付きつこありませんわ

顔を仰向けて空を眺める様にする。

ん? そんな厭やな格好、アイヴィな

アイヴィ 奥さんはよくあの花をお摘りになりまし

さんの話ぢや彼のお醫者は奥さんが未だ家を明

んはい、噂さの標だわね。

お母さんが明日市場

もあたしが一番いろんなことを知つてるんだはれちやつたの。お母さんがほと、いゝ噂の種が出に奥さんが彼處に居るんだと、いゝ噂の種が出に奥さんが彼處に居るんだと、いゝ噂の種が出話したら「人のおせつかいは要らない。」つて云話したら「人のおせつかいは要らない。」つて云

アイヴィはグラディスを睨む。

か。

コンニー ストラングウェイの奥さんは、此の冬の間お母さんが病氣だから佛蘭西へ行くんだっていますがのお母さんが病氣だから佛蘭西へ行くんだってやありませんか。あたし奥さんがお醫者のデザやありませんか。あたし奥さんがお醫者のデザやありませんか。あたし奥さんがお醫者のデザやありませんか。あたし奥さんがお醫者のデザであたし奥さんていふことが解ったのよ。お母であたし奥さんていふことが解ったのよ。お母であたし奥さんていふことが解ったのよ。お母であたし奥さんていふことが解ったのよ。お母であたし奥さんである。

ディヴィは益々眼を丸くして彼等を凝視する。 ゆだつたのよ。「アイヴィに向って」お前のお母さんがうちのお母さんにそういつたんだわ。 虚へ來たんですつて。あの人遠は、奥さんがス はっない中、丁度クリスマスの前頃にはのべつ此

プラディス うちのお母さんもそういふのよ。奥さかラディス うちのお母さんなととは確達の出る幕ぢゃなんの話にや何か餘つ程のことがなくつちや罪さんの話にや何か餘つ程のことがなくつちや罪さんの話にや何か餘つ程のことがなくつちや罪さんの。だけどこんなことは俺達の出る幕ぢゃねえつてお父さんがいふのさ。

る。マーシーは形ばかりの歔欷を續ける。ぬる。アイヴイは手を組んでストラングウエイを瞶めてねストラングウエイは瞬手を下ろして再びマーシーを眺めて

ストラングウェイ(落着き拂って) お稽古は今日はこれ

エイは振り返つて家の内に這入る。の手を取らず、眼に手を當て乍ら駈け出す。ストラングウ彼はマーシーの傍へ寄る、そして手を出す。マーシーはそ

シニー先生の鳥でもないのに。

ブラディス 前に入っていることで、アイヴィ 雲雀は空のものよ、ストラングウエイさ

そりやそうぢやないわ。

アイヴィ そうだわよ。

コンニーマーシーのものよ。

やないの。

グラディスマーシーはそれを受取りやしなくつて

1

コンニー其處の地面におつてつていよ。

グラディスあたしの栗鼠も先生に取上げられるかァイヴィ勝手に受取らないんだわ。

アイヴィ あの雲雀鳴いたわ――あたし聞いてよっも知れない。

てとよ。

グラディスをもや非度いゝぢやないの。あたしいアイヴィーあたし構やしなくつてよ。

はダーフォードに居るのよ。

いてと知つてるわ。ストラングウエイの奥さん

すか。

んなら此處へ來る筈だわ。この事をお母さんにグラディス。あたし昨日會つたのよ。あすこに居る

な事はさせないと、もうアイヴィに言つてある

マンニー ストラングウェイさんは何ともいやしないわ、あたし達に踊らせたいのよ。一體それを始めて教へて吳れたのはストラングウエイの奥があるなんですもの。先生はあたし達に御褒美を下さらうとしてゐるのよ。

だよ、ストラングウエイさんのことは如何でもだよ、ストラングウエイさんのことは如何でもだもの。堅信禮がすまない中は娘達がどんな身だもの。堅信禮がすまない中は娘達がどんな身がしなみをしなけりやならないか強力にするん

五六の男で、全身の重みを側方の袂に支えて足元も危い。ある。開いた儘の窓口によろ~~した人の影。それは三十める。 行つた~~しつ!

思い毛髪――其の中の一房は白髪――の下の暗愁の顔は明らいに過去に於て熟烈燃ゆる様であった人の顔である。 っな顔な作って〕おや、ジムさんかい、どうだ快い 気な顔な作って〕おや、ジムさんかい、どうだ快い 気な顔な作って〕おや、ジムさんかい、どうだ快い 気な顔な作って〕おや、ジムさんかい、どうだ快い 気な顔な作って〕おや、ジムさんかい、どうだ快い がしくなるよ。牧師さんに用事かい? たいなるよ。牧師さんに用事かい?

生はお忙しいんだよ。わたしちや間に合はないパーラコムの妻 まむ! 猫が如何かしたのかい? 先

微笑が彼の顔から消える。

だ。
ジム「頭を振って」駄目だ。おらあ先生に話してえん

かね。

も産んだのかい? 一體まあ如何したといふのは?子で

くない、聞かない、聞きたくない。から歸つて來ればみんな判るのよ。

稍間が悪さうに娘達は默る。

が來てよ。

造りの母親然とした婦人が這入つて來る。家の方から灰色の眼と、極めて赤らんだ頰を持つた、頑丈

バーラコムの妻 アイヴィや、お前此のインキをストラングウェイさんの處へ持つておいて、さらしっとではかりねらつしやる、だがいくら考へたつててばかりねらつしやる、だがいくら考へたつてインキがなくつちや何のたしにもなりやしない。「娘にインキ童と吸取紙を手渡す。アイヴィはそれを受取って出て行く。」こりや何だ。

小さな鳥籠を拾ひ上げる。

マーシー・ジアーランドのよ。ストラン

きって、ほごらいてのますつもいしっちつてドバーラコムの妻 あっ合かい?きびが好い、堅信禮のグウエイさんが中の雲雀を逃がしちやつたの。

集り所へ碌でもないお宗旨の鳥なんか持つて來

やがつて。

あんな鳥を持つて來やがつて! とんでもないバーラコムの妻 いけない。打造つておき、そしてスパーラコムの妻 いけない。打造つておき、そしてス

犀口の方へコソー〜と行く。 娘達は除吞な場合に出會はしたことを知つて互に顔見合せ 奴だ!

ぞ。——それや可いことぢやないんだよ。そんだ、そして数場で数はつたことをぢつと考へただ、そして数場で数はつたことをぢつと考へられからもう夕方うちの納屋なんぞへ來て彼のそれからもう夕方うちの納屋なんぞへ來て彼のとない。

うですとも。

バーラコムの妻ですけどわたし一寸行つて其の本を 5 取つて参りませう。年分もかゝりやしませんか

ジムわしの猫が見えなくなっちやったんで。 ストラングウェイ(優しく)なんですジムさん? 彼女は芝地の方へと出て行く。ジム・ビーアが這入つて來る。

ストラングウェイ・見えなくなった?

ジム一昨日なんで。未だ歸つて來ません。人に射 や兎の係蹄にでもかいつたか。 たれたんだらうとわしや思ふんで、さもなけり

ストラングウェイ何で、何で。歸つて來るよ。ハー バートさんの番人に尋ねてみよう。

ジムどうぞお願ひします、先生。彼奴が居ねえと わしや淋しいんで。

ストラングウェイ 「幽かな微笑を浮べて――ジムに對するよりも 寧ろ自分に對して、淋しい!そうだ!

ジム 夕方になると彼奴が戀しくつて仕様がねえん

ストラングウェイ 夕方---タ方が一番いけない、そ れに朝鷦の鳴く時が。

ジム先生も知つてなさるでせらが、彼奴あしよつ ちらわしと一緒に寝たんでしてねえ。「ストラン かウエイは苦痛の餘り顔をそむける」彼奴わクリスチャ

ンの様だつた。

ストラングウェイ 獣類はクリスチャンだ。

ジム世の中には人間でゐながら其の心は獣類の宇 分も クリ スチャン でねえものがらんとあら

ストラングウェイよろしい、ジムさん、わしはお前 はお前に笛を聞かしてやる。 ら何時でも構はない、お出で、そうすればわし に出來る限りのことをして遣らう。寂しかつた

ジム「僅かに身を揺がす」いゝえ先生、澤山です。

ジムうむ、そうちやねえ、居なくなつちやつたん

バーラコムの妻まあ、そうかい!なあに居なくなり 表へ出なけりやいけないよ。 やしないよ。猫も年頃の娘と同じ様にちつとは

ジム居なくなつちやつたんだ。先生に聞いたら居 所が判るかもしれねえ。

バーラコムの妻よし、よし、わたし先生を探して來

ジム先生は好い人だ、真當に好い人だ。

ストラングウェイ「家の方から這入つて來て」 バーラコムの バーラコムの妻全くだよ。 ど真四角な青い表紙の本ですがね? おかみさん、私型フランシスの本を何處へ置い たかどうも考が付かない、――あの大きな殆ん

> でせらともつてわたし申し上げたんですの。 りに参つたのです。え、宜しら御座いますつて、 あなたのお留守にウイリス嬢さんがその本を借 ストラングウェイさんはきつといゝと仰しやる

ストラングウェイ 勿論ですとも、あなた。よく貸し て下すつた。

バーラコムの妻だけどそれ文けちやないんです。わ とだらうとわたし獨言をいったのですよ。 ました。 まあどうしよう、 ストラングウエイさ たしが其の本を取り上げると中から紙片が出ま して、それにはあなたの手蹟で歌が書いてあり んはこんなものを人に見られるのを厭やがるこ

ストラングウェイ うむ、そうでしたか。有難ら、そ バーラコムの妻でせらと思つたからわたしそれをあ なたの秘密文庫の中に入れて置きました。

ストラングウェイ驚いた!いけない、無論厭やが

る!

ってゐると思ってゐましたよ。昨日の午後でした、

おゝ、それし、どうも何か氣に掛

ブラドミーア夫人

ブラドミーア夫人時に彼のお氣の毒なクレマーのか みさん--少しはいっんですか?

來る。

ストラングウェイいっえ。もら死にかっつて居るの

です。不思議ですよ――あの樣に辛抱してゐる

ブラドミーア夫人「ぶつきら棒な同情を以て」ふむ!そうで きつく彼を晴めて)奥さんは直さに歸ると思います すね。見苦しい死に態はしますまい。「もう一度

ストラングウエイ 歸つ――歸つて來ればいゝと思ひ

ブラドミーア夫人わたしもそう思ふのです。早けれ ば早いほどいゝのです。

ストラングウェイ「身を縮めて」教區長は今朝はそんな に非度くお苦みにならんでせらね

其處へバーラコムの妻が青麦紙の大きな本を持つて歸つて

有難う!脚が大變惡いので。

パーラコムの妻お早う御座います、奥さん。「本をス トラングウェイの所へ持つて行き」大變お氣の毒でした

ストラングウエイ って、ウイリス嬢さんが申しました。 來て下すつてよかつたのですよ、

おかみさん。「ブラドミーア夫人に」失禮いたします

過ぎたと言はぬ許りに又離れてしまふ。 彼は家の内に這入る。二人の婦人は彼の後を瞶める。それ から二人は向き合はうとして互に近寄るが、これは覧ろぎ -説教がありますから。

ブラドミーア夫人「唐突に」大變奥さんを慕つてゐる樣 ね。

バーラコムの妻そうで御座んせら?お可哀相に。人 蔵めてお置きなさいますんでする。けれど夜散 歩なさるところを見ると實にお可哀相で。 には何にも仰しやらず、只々御自分の胸一つに 數ケ月といふものは先生のお顔を見る毎に心配 は丸で犢に離れた牝牛みたいなものです。 此

ストラングウェイ え? 音樂は嫌ひか?

く〕彼の方あ猫が嫌えだ。だけど自分が猫みての御邸の方からおいでなすつた。 「胸に一物ある如の御邸の方からおいでなすつた。 「胸に一物ある如

ストラングウェイ、「嫣然として」ジムさん!

えだとわしや思ふんだ。

ジム おらあそうは思はねえ。横着なんだ、勝手な及りです。 おらあ先生ちつとも快くなりやしねえ。 といふんです。おらあ先生ちつとなけるなりやしねえ。

ゐる。點頭きストラングウエイに「お早う」といつて直ぐにらしい赭ら顏の女。語調にも一舉一動にも權威が現はれて如く――白髪の婦人が這入つて來る。七十ばかりのやりて如く――自髪の婦人が這入つて來る。七十ばかりのやりて解を叩く音にジムの 文句が遮ぎ ら れる。叩く音に續いて靡を叩く音にジムの 文句が遮ぎ ら れる。叩く音に續いて

んだ。彼の方も隨分我儘なんだから。

ジム・ビーアの方を向く。

ブラドミーア夫人あっ、ジムかお前大分快い様だね。

ジム頭を振る。

プラドミーア夫人 おゝ!なる程快い。大變に快くな

さんにお話があるのです。

ジム・ビーアは前髪に手を觸れて、徐々と杖に倚つて出て

行く。

です。「額をいざる」四年前のことです。
男が如何してあんなになつたのか知つてゐます
か?自分と約束をした女が或晩他の男と一緒に
なって。「額をいざる」四年前のことです。

たかね?

ブラドミーア夫人〔きつく彼を瞶めて〕與さんは歸りまし

ストラングウエイ

可哀相な男です!

ストラングウェイ(驚いて)ひゝえ。

バーラコムの妻

トさんとストラングウエイの奥さんとは前か

なあに、ダーフォドのお醫者のデザ

で、「ラコムの妻 (いって) え、そりや人は何とでも噂をいたしませら!ですけどそりや妾が良人にい 去様に―――『下等なこと」ですからねえ。それに そしてストラングウエイさんはあれほど奥さん そしてストラングウエイさんはあれほど奥さん で思つてゐらしやるのですもの。先生には只々 変があるばかりなので御座いますよ。

ブラドミーア夫人 好い加減にお止しなさい! ブラドミーア夫人 好い加減にお止しなさい! 不使の翼が落ちる程喋舌り續けるといふ五月蠅 茶つることなしといふ言い慣はしあり」。ですがわたしは 落つることなしといふ言い慣はしあり」。ですがわたしは さい これ ですがれる といふ 五月蠅 ですがれる といふ 一人 があって、 どういん 噂をしてるるの で ラドミーア夫人 が かっと いん ですが からとした ことが ありません。

を見たといふのは誰です?
昨日奥さんがデザートさんの家から出て來るの昨日奥さんがデザートさんの家から出て來るのでの意味があれているので御座いますよ。

グラディスが見たのだといふことです。

ものと見えますね。 をの中にでもばつとひろがるで御座いますね。 をの中にでもばつとひろがるでの立への妻、噂といふものは不思議に播まるものがっちょうだとして失人 あの娘は鷹の様な眼を持つてゐる。

面はあんなに柔和に見えても心の中は燃えるやだーラコムの妻 と、とんでもないこと!そんなこと、これでもないこと!そんなことのような。

____ 97 ____

なんです。つい過日もお室を掃除しようと思っなんです。つい過日もお室を掃除しようと思っなんのお召物の香を嗅いてるぢやありませんさんのお召物の香を嗅いてるぢやありません

りやしませんよ。

プラドミーア夫人、よう朝飯時分でせらな。」と仰し「おかみさん、もう朝飯時分でせらな。」と仰し「おかみさん、もう朝飯時分でせらな。」と仰し「おかみさん、もう朝飯時分でせらなって

96

歩き廻つてお歸りになると彼處で笛をお吹きにパーラコムの妻 ほんたうで御座いますもの。一日んと朝飯を召上がるので御座いますよ!お起きになる前に先づ間食を上げてそして九時にはきちなる前に先づ間食を上げてそ

ブラドミーア夫人 あまり面白過ぎるのです。彼の奥ブラドミーア夫人 あまり面白過ぎるのです。彼の奥す。

上がつてゐたのですよ。

ど教區長様はそれを知たがつてゐるのですよ。

バーラコムの妻(此場を立去るのを喜んで)長まりました、

早速お届け致します。可愛らしく肥つたのが二

三羽御座いますのですよ。

彼女は家の中に這入る。

ブラドミーア夫人 老ぼれ猫奴!

お會釋する。本服を着けた極小さな赤顔の女兒に會ふ。此の兒はのろの衣服を着けた極小さな赤顔の女兒に會ふ。此の兒はのろの立退かうとすると門路で孔雀色の青い帽子を被り、桃色の

らしやぶつてゐるんだね、そうだらう?お前は此處に甚麽用事があるい?何時も何かしずるだと」といい、ティッピー・ジャーランド、

念深く顔をしかめながらこそ~~と這入つ來る。 見付けず、菓子をしやぶつてゐると姊のマーシーが猶も執れて何物かを探す樣にお役目的に床上を見廻はす。何物もれて何物かを探す樣にお役目的に床上を見廻はす。何物も見付けず、菓子を引張り出し、それを眺めて再口へ入れる。それから賴まか出張り出し、それを眺めて再口へ入れる。それから賴まかは一は何とも返事をしないので夫人は出で行く。ティティツピーは何とも返事をしないので夫人は出で行く。ティティツピーは何とも返事をしないので夫人は出で行く。ティ

ちや歸つてもいっよ!お前なんか! アーシー まあ!未だめつからないの、ティツビー?

舌打ちしてティッピーを追ひ出す。腰掛の下を捜して捨て られた六片を拾ひ上げる。そして大急ぎで扉口へ行く。處 られた六片を拾ひ上げる。そして大急ぎで扉口へ行く。處 が扉口に達する前に扉が開く。見付けられたと思つて更紗 が扉口に達する前に扉が開く。見付けられたと思つて更紗 が扉口に達する前に扉が開く。見付けられたと思つて更紗 が扉口に達する前に扉が開く。見付けられたと思つて更紗 が扉口に達する前に扉が開く。見付けられたと思つて更紗 が扉口に達する前に扉が開く。見付けられたと思つて更紗 が扉口に達するが嘘で窓然決意して家に通ずる眼には濃い眉毛がある。水色の服を纒ひ、美はしい髪は帽子と自働自轉車用の るで水色の服を纒ひ、美はしい髪は帽子と自働自轉車用の るで水色の服を纒ひ、美はしい髪は帽子と自働自轉車用の るで水色の服を纒ひ、美はしい髪は帽子と自働自轉車用の るで水色の服を纒ひ、美はしい髪は帽子と自働自轉車用の を水色の服を纒ひ、美はしい髪は帽子と自働自轉車用の なってした顔には魅力を はいる。
アイヴィ(肝を潰して)わら!ストラングウエイの奥

さん!

たので慌てたが、心を落着けて微笑を以て兒童に對する。ビートリス・ストラングウェイは不意にアイヴィが現はれ

ねえ! 妾が來るとは思ってゐなかつ た でせらビートリス おゝ、アイヴィさん!大きくなつたの

アイヴィい、え、奥さん、思つちやるませんでしね、そう思つてゐて?

するにはありますが、それも謂はごまあ、生焼 するので御座いませう。なる程聖人の様な所も

て來よう。此の冬中の噂があんまりだから。けの方なんです。

を何時までも根に持つてゐるので御座います。 り御座いますわ。フリーマンと來たら丸でデプラ御座いますわ。フリーマンと來たら丸でデプタにあるので御座いますか。フリーマンと來たら丸でデプタにあるの表

るんだから。
ラングウエイさんは感情に觸ると分別が失くなずラドミーア夫人。あゝ!わたしは心配ですよ、スト

てにするのは無駄なことで御座います。妙な世なさいます。ですけど此の世から善いことを當

0

中で御座いますよ。

ブラドミーア夫人 ラコムの妻の顔をしげくしと見て」妾共が多少でも此の 有難い様なことをいってゐながら行ることはち ませう。 が除り慈悲心に乏しい さしときません。 村に威化を持つてゐるのは勿怪の幸。噂 つともクリスチャンらしくないんだもの。「パー せう。そうすればハーパート様と教區長様とが だつて彼の人達はどれもこれも口では その通りです。 妾はハ から一つ懲らしめてやり 1 1 妾は此の村 様に お話 の人達 なぞは しま

は大變お悪いんですから。
揉ませ度くないものですが、それに彼の方の足揉ませ度くないものですが、それに彼の方の足

共力して手段を取るでせらから。

けて臭れまいかね? | おいまで家鴨を一名届れはそうと、数區長様のお邸まで家鴨を一名届でいる位のことは大丈夫能さますよ。 ——そずラドミーア夫人〔凄く〕 足は悪くつても手酷しい小

ストラングウェイ

神様有難ら!「彼女の顔を見て止まる」

アイヴィ(びく~~と)人は眼が早いもんですよ。 やつて來たのですもの。

ビートリス「猶も彷ふ微笑を以て」 そりやわかつてるま す、だが---さあ、速く静かに行つて彼の人に 云つて下さい。

アイヴィ(扉口に停って)お母さんが今家鴨をむしつ は特別の香氣があるんですもの。 ら、奥さんがお歸りになつた後でも、それを嗅 ぎ付けるでせらよ、だつて――だつて奥さんに てるんでする。お母さんが此處へ這入つて來た

ビートリス 有難らよ。氣を付けませら。

ねる。 慄える。小形の卷煙草入を取出して一本に火を點ける、そ アイヴィは再も喋舌り度いかの様にビートリスな眺めたが ストラングウェイが這入つて來る。夢心地から全く覺めて たマーシー遁れる機會はないかと覗き出す。其の時家から して吹き出す煙が身邊を置つて消えるのを見つめる。驚い 突然振り返つて出て行く。ビートリスの顔は曇る。彼女は

なんだか解らないが。わしはお前は未だ彼處に

居ること、思つてゐた。

ビートリス「巻姻草を墮してそれを足で踏みながら」いっえ。 ストラングウェイお前はずつと居る氣か?おゝビー かう。おゝ可愛いビートリスーー 兎も角も來 遠い所、――どんな處でもお前の好きな所へ行 トリス、さわ!私達は直樣此處を立退いて遠い い!若しもお前が――知つてゐたなら――

ビートリス ストラングウェイ無益だ!それは何故だ、ビートリ ス?お前は出て行からとした時に言ったではな つてみたのです。 無益です、あなた。妾は何遍も何遍り試

ビートリスそりや知て居ります。これは殘酷です。 ませんか。妾は妾が能さる限りのことを致しま それは恐しらお座います。けれど、良人、妾は あなたにあてにしない様にと申上げたではあり

いか――わしは待つて居つたのだ――

思ってましたわ。

お宅ですか。

なお室でお説数の下書を書いていらつしやいまえ、いらつしやいますとも!先生は彼の小さ

や、アイヴィさん、妾のいふことをさいて呉れや、アイヴィさん、妾のいふことをさいて呉れ

す。そりやお喜びなさいますよ!

とも奥さん。とも奥さん。

うよ。人の噂ぢや――

ビートリス あなたはもら秘密を守れる年配です

アイヴィ(點頭いて)あたし十四なんですの。

ビートリス では云ひますが

――妾此處に居ること

にさへも。解りまして?たくないのです――誰にも、あなたのお母さんをストラングウエイ以外の人には誰にも知らし

アイヴィ「常感して」い、え。だけどあたし秘密文けにさへも、解りまして?

ビートリス 宜う御座んすか、誰かに知れると――は守れますわ。

妾の夫の名譽を傷けるのですよ。

に大方誰かゞもう奥さんの姿を見ちやつたでせるもんですか。奥さん、再たお歸りにならなければならないんですか。 〔ビートリスに向つて慄え乍ればならないんですか。 災さん、再たお歸りにならなけ

の細い徑を真直に納屋を投け、墓地を突切つて、ミールを動かしてどれ程に顔を隠せるかを試みる)妾は彼妾自動自轉車でやつて來ましたの、此の樣に。

本の学ですか? わたし達の運命はあなたのお を知の筈です――そうなると彼の方の身の破滅 を知の筈です――そうなると彼の方の身の破滅 を知の筈です――そうなると彼の方の身の破滅 を知の筈です――そうなると彼の方の身の破滅 でなります。彼の人は凡ての物を失つて了ひま でなります。なの人は凡ての物を失つて了ひま

ストラングウェイ如何してわしは彼の男を見逃がし

ビートリスーあなた、妾お願いに來たのです。そうてよいものか。

や殘酷ですわ。

ストラングウェイいや不可ん、願ふ必要がない!わ

のです?離緣するとおどして妾等を別れさせよビートリス〔矜持な恢復して〕ではどうなさらうといふしは我慢が能さない。

彼の人を滅すほど未だ獸らしくはありません。此處で籠に入れておからといふのですか?妾はながらと云のですか?妻なたと一緒にわたしを

ストラングウエイ あ、!

ことはありません。妾はあなたを愛したことはビートリス。妾は全く彼の人のことを片時も忘れた

彼の河の上――でも愛しはしなかつたか? ストラングウェイ〔驚いて〕 それは真質か? 〔ビートリカりませんでした。

ストラングウェイではお前わしに嘘言をいつてゐたビートリス(聲を潛めて)いゝえ。

ません。ですが、愛がなかつたのです。のか?接吻をしたり悪んだりして?

ストラングウェイをれに何故お前は愛してゐるなぞ

ました、――あの感想が未だ消えないのに。ものは、妾はまあ何だつてあなたに妾を娶らしものは、妾はまあ何だつてあなたに妾を娶らしした。メントーンへ來てから此の數ケ月といふ

ストラングウェイ よもやお前は再もわしを置き去りにしようとして歸つて來たのぢやなからうな。でしょうとして歸つて來たのぢやなからうな。
と思ひました。そして始めてみましたがその中
に――春が來ました!

しい春は――ないぞ!能さないのか、ビートリストラングウェイ春は此處にも訪れた!こんなに悲

ストラングウェイいや!いや!いや!

御承知の通り――妾は墮

落

1

たのです。

吳れかんだ?では彼の男は其處にゐたのか? てお前はそれをわしに言はうどして此處へ來て

ビートリスは頭を振る。

ストラングウェイダーフォードへか?

申上げたぢやありませんか。妾は能さる丈けのす――自分の名を名乗つて、彼邊では妾のことで」との 何哩か離れたクロスウエイ・ホテルへで

ストラングウェイ 吾が神様!

ことをしたのです、妾それを誓ひます。

のはあなたの神様です。

來たのた?

あなたがどうなさらうとしてゐるかそ

ストラングウエイ

お前は如何してわしの所へやつて

____ 102 -

りません。そしてあなた――廣い世界で此處は

からが数區でもありますまい。

ストラングウェイではそれはわしだ――わしのキッ 下さい!それから――お、!どうぞ表沙汰にし 彼女の顔を射る」大方想像が手傳つたのだらう! わしのキッスを甘んじて受けたのだ?「彼の眼は スだー―したのは。「彼は笑ふ」如何してお前は **髀然として沈默る。心の苦悶が彼の顏色を異常にする。 ビート** とわなたは心配なさる必要はありません。「彼は て下さいますな!妾がどんな面白い事をしよう ンへ行からとしてゐます。誰れも知る必要はあ さらと滅すまいと。ですけど其の時迄――其の ―その時は勿論 たが誰方か他の方と結婚なさる御考なれば、一 リスは喫鷺する、遂に躓きついも語を續ける」若しもあな ――彼の人はダーフォドを退いてブライト あなた、どうぞ止して下さい、止して ――そりや當然のことです、滅

> ストラングウェイ(静かに)お前は、他の男とこつそり 一緒に暮せるやらに手傳つて吳れとわしに賴む

のか?

ビートリス お慈悲を願ふのです。

ストラングウェイ(獨語の様に)おれは如何したら宜い

のだらう?

ビートリスあなたの心の底で感じるやらになさい。 ストラングウェイ 罪に生きようとするお前の手傳ひ

をしろといふのか?

ビートリス 妾をあなたの生涯から放して下さい。 それより他にあなたはすることがありません。 彼は徐かに彼女に近づく。

ストラングウェイわしはお前が要るのだ。わしの處 ビートリス へ歸つて來い!ビートリス歸つて來い! 今ではそれが苦痛なのです。

ストラングウェイ「悶えながら」おゝ!

ビートリス 何なりとあなたのお心にあることを一

方に向く。

愛しなかつたとは夢にも知らなかつた。全く知れらうと結婚するだらうと思つてゐたか?わしはお前と結婚するだらうと思つてゐたか?わしは

ビートリス「極めて低音に」忘れて下さい!らなかつた!

事をいへ!としたのか? [ビートリスはチラと彼を見る] 真實のとしたのか? (ビートリスはチラと彼を見る) 真實の

· ですが —— 彼の人は妾を愛してゐるのでビートリス いっえ。それは——妾一人のことなので

ねものと見える。ストラングウェイー人は容易にラブといふものを解せ

彼女の幽かな、神秘的な憫む様な微笑に堪え切れず彼は側をする。

紙を上げることは能さず。妾は伺はねばならなでした。妾にとつてもそうです。といつてお手ビートリス。そりや成程、妾が此處へ來るのは殘酷

かつたのです。

ストラングウェイ 一度もお前はわしを愛したことがないのか?「彼女を眺めて」お前が出て行く前にその晩もか?「彼女を眺めて」お前が出て行く前にそのでしたのか? 一度もないのか?トレガロンの彼の際しておくのだ?

ビートリス 妾はもう一度彼の人を忘れようと思つたからです。忘れようと思つたのです。妾はもなたと結婚した彼の當時の妾に立歸れるだらうと思つたのです。妾はもには能さることでも——人妻になつた女には能さることでも——人妻になつた女には能さることでも——人妻になつた女には能さると思っ

るのはあなた丈けだとあれが云ふんで御座いま 恐ろしく悄氣でゐるんで御座いますよ。力にな

すよ。今臺所へ來て居ります。

ストラングウェイクレマー?そうだ!勿論です。あ

パーラコムの妻「猶も捻ぢられた鳥籠を凝視めながら」わなた

やしてなって終って。「彼女はストラングウェイの それは要らないんで御座いませら ――悉皆くし

手から鳥籠を取る」真個にお頭が痛むのぢやないん

バーラコムの妻「疑はしそうに」ではあれな案内致しま ストラングウェイ〔思ひ切って〕痛みはしません!

ざしの大男クレマーが這入つて來る。そして全く沈默つた 服を着けた平べったい顔の、憂ひ氣のある、忠實そうな眼 る。其の唇は速かに動く。身動きもせず立ってゐると勞働 彼女が去る。其の後でストラングウエイは額に手拭を當て

ストラングウエイ「暫し何も云はなかつたが彼の傍に近付き層に

手を載せて」 ジャックさん!氣を落すな。氣を落

しちや――もう駄目だ

クレマーはあ。「顔面が慄える。」

ストラングウェイお前の妻さんは氣なぞ落しはしな かつたよ。お前の妻さんは氣丈夫な女だつた。

愛すべき女だつた。

クレマー 俺わまさか彼奴に死なれようとは思ひや ついぞ一言もいいませんでした。先生、嬶を失 せんでした。彼奴は床に就く迄病氣だなぞとは

ストラングウェイ「慄える唇を堅くしめて」そうだ。だが落 膽しちやいかん!我慢をするのだ、ジャックは くすつてえのはいやなもんですねえ。

クレマー 風鈴草が咲くこんなポカーへした陽氣に 來ません。 を拾ひやしたよ。とても彼奴を取返すことは出 彼奴が死んで行くなあ不思議だ。昨日俺 お蹄鐵

一なおい

の許へ歸つて來るか?歸つて來るか?

さん。

妾は彼の人に害を與へることは能さま

ってゐる小さな鳥籠に落ちる。〕 ますなら――― この私をお助け下さい! なすなら――― この私をお助け下さい!

わしはお前を害しようとはしない――能きない 卒往つて吳れ、速く!お前の好きの樣にしろ。 な笑び中は歔欷、そして扉の方を向いて低い聲で〕往け!何 決して野のものを籠に入れてはいけない! 〔半

――だが――往け

彼は扉を開ける。

ビートリス「非常に感動して」有難う!

エイは小鳥籠を破らうとしながら我を忘れて立つてゐる。彼女は傀れて彼の前を過ぎ速かに出て行く。ストラングカ

見付ける。捕まへようとすると芝地の方へ飛び出して往つ處が慌てた爲めに屛に打突かる。ストラングウエイが之をぬたが隙を覘つて未だ開いた儘の屛口へごつそり近づく。其間苦吟を洩らす。驚いたマーシーは窓掛の蔭から視いて

て、パーラコムの妻が妙に押默つて彼に近づく。麻痺した樣に其處に立って ゐる と家か ら入口の 犀が開い

て了ふ。

に捻ぢられた小鳥籠の上に据点られる。 彼の可哀相なスー・クレマーなんで御座いますよ、先生。 昨夕の常に死んで了つたので御座いますよ、先生。 昨夕のまれが自分の言葉に領着しないのを見て) ストラングウェイが自分の言葉に領着しないのを見て) ストラングウェイの手中は死んでするたの眼は器械的に、ストラングウェイの手中はなる

たの今いつたことはーー

ストラングウエイ

いや、いや!何でしたかね?あな

す。あれの家内が失くなつたので。それはまあバーラコムの妻デャック・クレマーなんで御座いま

らどうしてもわからねといふ。始めの二つも本當



知識的氣取屋

だ。 解つてゐるが、悪い乾酪の可笑しい原因は自分乍 る。 屈辱と、 は出でないと主張してつる。 のならば、どんなものでも、この三つの範疇の外に れば、次の三種となるといふ。そして人間界のも はせると、 並べたものだ。 英國 ところでこの可笑しいことを科學的に分析す 緊張た現代生活に存外太平な人間 ピアホ 現文壇の呑氣者のマッ この世のことは何んでも可笑しいさら 外來的なものと、 2 先生文にいづれも奇想天外なものを ところが先生は初めの二つはよく といふのは肉體的 ク 悪い乾酪の三種であ ス、 ۴. アホ もあるもの ムに云

工藥直太源

に解つてゐるのかどうかは保證の限りでは こんな卑俗な可笑味を解するには一寸俗人になる 式が通るのを見ても笑はなければならぬ。又どん ある。 くも を暫く敬遠しなければなられ。 るものはない。木の葉の落つるのや、太陽が西に沈 な人でも物が上から下に落つるのを見て笑つて る惱みではない。これが可笑しいとしたならば、葬 處である。 なつたりトル 必要がある。 離れたりすることは現代人の最も苦痛 われらが可笑しいのは近代人のこの偽らざ 内的に現代人の死滅を意味するからで ス トルストイやロマン トイ ヤやス トリン 併 17 i F 作ら頭 1 ~" ・ラン N Ŀ ない。 0) カジ とする カン 譯本 ら暫 俗 42

ふ者もあるのだ。 らう。考へても御覽!中には永久に其の妻を失 るとうともあ

と思つてるんです。
實に出來やせん。わつし等は獸の樣に眠るんだりです。來世があるなんていふこたあ俺あには真

これを はいか とうではないそうだ。だが、ストラングウェイ いやそうではないそうだ。だか ない から!彼の中に眠るのだ。ジャクさん、假令眠つら!彼の中に眠るのだ。ジャクさん、假令眠つい しょうじょうじょうだ。だが、

てあんな良い嬶は持てやしません。――誰だつ

の手を望むのだ。ジャック、わしの為めに祈つと堅く!お前がわしの手を望む様にわしもお前ストラングウェイ(手を差延ばして)握れ!堅く――もつ

クレマー「此等のストラングウェイの奇異な言句に幾分安心を得して吾々は落膽しまいね、そうぢやないか?

奴が戀しくつて。有難う御座んす。先生。御親先生。今更仕樣がありませんや。だがどうも彼でなあに落膽しやしません。有難う御座んす、

場に止る。と突然笛を取上げて帽子も被らず戸外へ出る。 へ出て行く。ストラングウェイは仕様事を知らず其儘其のでは頭の邊に手を舉げて振向いて當もなさそうに勝手の方切に。

---(幕)---

機 惚 故 直 あ 生 0 ズ で 楠 10 10 る m して 無駄話 乾から 杏 物 3 秘 ふ様 る。 一命それ の一分化である 可笑しくはな からだ。 ならば結 4) 形 的 る カ> ユ ル物をシ 滇 6 カン 增 の可笑味 な嚴 1 2 自身 る。 有 6 界を越え 屋 0 -E 0 機 可 iffi 婚 肅 工 IJ 笑 又生命力を取らんとする神 物 な 1 0 チ l 100 **>**/ ス 起 は 12 * 味 T 事 V 二 A ŀ E ライ 間 ŋ 原 D 1 寶 入らんとする推 カゴ ようとする過 ス カン 12 かをシ タ 、らだ。 は あ カ> ス なぜなら自 æ 0) からぬ ŀ ズしてゐるの る IJ 生 結 對 K Ŏ ンボ 命 ス 婚 0 だ。 ととい カゞ 7 笑 1 0 カジ ・ライ 可笑 云 本 12 0) 3. ムんに 惡 一度又 ふのに は自 4 0) 由 源 移 戀愛 とな 6 は ズ しく見える S して であ は E チ は あ 由 11: シ 惡 對 る職 工 畸 は 戀 る 命 神秘的過程 して、 る。 形 ねる 1 相 愛 0) ン S 乾エーズ 務 ボ 互 は少し 例 水 ズ 0) 典型 ラ 卽 は であ 源 زما 0) ば 同 6 ち 4 無 自 何 Ę は

そし ざるチ 效能 複雜 て、 思 は 4 を裏 彼 る。 間 () な て、説明それ自身が 3 ユ なら 1 30 反 0 カジ 6 る 13 人響で て笑 では 然る後信ぜんとするも どん な 4) いな ŧ 7 直 は JE, は、 アの 神 if 馬 體 1 な ると云つて 力 'n は 1 な知識的氣取屋 と同 あ ないといふことに氣 鹿者 6 5 は Æ る。 其 本體 ズの ばなら 說 7 X 知 人 樣 間 チ 6 ta b V に人間 社 可 13 を知識で説 的 た 知 工 あることを證 得 インテレクチュア 笑味 VQ. ねる。 。 6 會的 的 ス る 却つて タ 南 過 以 26 な屋で 私は可笑味は神秘 る。 水を知的 0 6 3 Ĺ トン 0) 知 あ 12 12 V2 可笑味 あ 16 震的 は 非ず 明せん 識 少くとも る。 1 レン 人間 る馬 以 12 は カジ 明する以 彼 70 上に 說 な 神の 群 0 であ 7 L は 0 くの 庭者 とす カ> 明し 集 は 7 知 1 4 ららっ 要素を分析 超越 人間 只 るといふてと 誠 0) 1 外に大 笑で る 100 一感じ で説明し ようとし 6 Æ 背景 あ あ であると 省 7 0 してね 同 る 根 得 0) 0 なる .樣 靈妙 カジ 底 る 笑 得 人 只 あ 17

可笑味を感ずる時には自分は他から離れてゐる

らう。いくら未來派の畫家でも、川の流れを見てゲ n 纖 西 合に無性に可笑しがるものがあるさらだ。而して タンといふものになると、 云つて、 ラー〜笑つてゐるものはない筈である。 んで行くのを見ても、 (7) 鋭靈妙なる近代 は例外の例外と見て宜ろしい。 ゴ 1 腹 ガ を 1 は 抱へて笑つて セ ーーヌ 人には往][チットも可笑しくないであ は 緑と黄とが配合する具 々油 ねたとい 角 幽 派 カジ 的 ならぬ。デカ に舞踏 ふから官 尤も佛蘭 す ると 能 0

學 0 0 唇の可笑味ださらだ。 て突然轉んだのを見て笑ふのは、 凡ての事物より秀れてゐるが、 的笑であるというてゐる。 帽子を踏みつぶしたのを見て笑ふのは、全く神 すまし込んで街を歩いてゐた紳士が の二元的 性 質 に原因 チエス 1 て、 2 タト 人間 それは ふの しかもその事物 ンは、不圓 は 自分 何 はての 肉 かに 體的 0 周圍 笑は 自分 躓い 屈

7

차:

2

笑しい。といふのは半ば外來的で半ば土着的でお の憐みを受けてゐるといふ逆理から來てゐるの るからだ。田舍に隱遁して凡人生活を送るといふ かその 人をして周 同様に可笑しいのは街を歩いて 外國 圍 何 人 E の空氣に分明に 26 可笑味 調 和 心持である。 すべ 0) いてヤ < 對 照とはなら ス 超 あ 起越せし ナ それ まり P る 亦 は 17 むるか ŋ 偏 周 る外國 か、 P 狹 圍 だ 1

外國 空氣 笑の二形式はこれで説明されたが、 英國 も可笑しくは 性に可笑しかつたさらだ。浮世繪そのもの **戻るといふ不可抗力を暗示するか** に隱棲して、「凡人淨土」の生活を送るとなると可 らだごうだ。「還元録」を書 さうだ。 ある。ある人は、倫敦で出版した春信 カン 人の後ろ姿を見た時の てとそれ自身は ゝる半外來的 に歸 化 したといふことが ないが、 な 人間 春信 は、 80 は 可笑し 日 か 本で死 T ら可 中 F, V ッ浮世 央文壇 笑し 0 んでしかも で 繪 は少し V 12 あ が悪 0 舞 カゴ 0 01

3

3

ウ

ج

ス

丰

フ

ŀ

らず者 ある。 失望しなかつた。 あ 溢 カジ 君と同 る。 る めようとする愉快 人間 > 彼等に デッ の 如 __ 樣 ジ かっユ 1 其 ン 物 ケン 12 Æ グル われ は溢 7 1 0 iz ス モ 絶對と算さを知つた。 君が、正直者で親切者のピクキ 彼は惡い行為を飽くまで排 は 50 7 る > 程の は常に は 如何なるならず者にも決して なる力がある。 同 人 凡 間 情 其物 と隣 ての ユーモ 心 人を何 カン 6 アが と歌 流 そして彼 びとを索く 物 n あるからで 出 12 いかなら るの けする 0

點や缺 は 醇 3 多力 なるも 3 7 1 曲 ゥ Ŕ を正 點 0) アに を笑 感 ス 上に改造 中 カゴ とする は道義の觀 人る毒 伴 フ は トの笑とは全く違ふ。 して生 0 Ō の主我的笑ではない。 ¥2, で ある、たちの 自分の强さ あ 念が る。 一活を高 あつて、 二 1 め更らに を誇 悪い風 Æ 7 常に 12 1 つて他 來 深 1 は 同情と愛 自算 Ш く廣 惡を善 E アは 人や 0 弱 文 3

反語 的 没我の笑であ 見のうぶな、 みのあ 憐とに結びついて、主我の要素が全然ない、親し 暗黑の側 全然沒却する沒倫 年ら闇に光を認め、 6 あ る。 る、 笑でもない。 も、小弱なる方面をも看過しない。 ___ 醇なる笑の極 1 る。 モ 可愛い失策や間違 7 理 的 二。 0 人 1 小の内部に大なるもの ユーモ 主義 生 Æ 致が ア 觀 は でも は決 この 工 ア的人生 なく、 1 12 して善惡 沒我 對して笑ふの モアで 一觀 シ 0 笑の あ は 0) 3 差別を 人生 る。 を認 1 併し 究 龙 0 0 極

3 人間 味のあるものとする。 るのである。 窟 凡人を非凡人に感ぜしむるといふことオルテナリーン イキストラオルデナリーン の真理があるからであ 5 ン四海同 屋 生活 撃滅することが出來ないのは、宗教に只一つ カジ 威 をア 胞主義が生るゝの 張 つても、宗教 フ やさしき道 7 12 チ 感情 テの乳房 る。 を人間生活 つでは 義に富んだ 0) と云ふの 純 ない 化 のやらに と美化、 カ> からどうして は、 二 柔 1 V くら理 2 カン Æ っ か 言 ア は 圓

1

アに富

しむといる事

質は、

少しも學問

0

门

S 的 宿るものであつて、

少しも知識

0)

ないも

でも

1

夜の

夢」を讀

むとさには妖精ポッ

ク

0

が氣な滑

のでも熱烈なる信心家となると同様

である。 無邪

夏の

稽には思はず吹き出すであらう。

而しこれを知

から笑ふものはあるまい。デッケンスの「ピクキク

るの 力で るも 稽 俱樂部」を見て、サム、ウィラーのとんちん漢な滑 らである。 る 1 る 面 ある。詰らなさらな顔をしたり、下手な威嚴を顔 信には腹 カジ 3/6 Æ に保存したりする人間にユーモ である。笑の真髓はデモ Ŏ あ 0 T カゴ は 6 ユ 1 な は な をかっへることは 善人もならず者も、富者も貧者も、氣取 な そしてこれ So モ からう。 ア S の生るゝ一 0 力> 5 6 V あ 2 カジ ふ局 る。 1 人間 モ 繁文褥禮局に 內 視同仁と愛とが r あつても、頭をか んは人を 社會 クラチ には敬畏 アの妙味が 12 ツク 擴大し生長す 魅 と階 する生 なる な 級 のので > は D it 3 カゴ 力> á カ> あ 二

> の「デ 四海 生活たらしめ サッ らだ。 屋も くし、深くしたか T カジ 力 充 JE. 同胞主義はユーモ ピッ レ | ちて 直者 同 情 ۴° ねる。 Ö も一様に と隣 = ユーモアは人 のである。生活力の刺 パーヒール 憫 知れ 街路 とを背景にして、 往 アか ぬ。常に愛と歡 は 來する街路 デ 下」でも 間 ら生れた。 く叫び又蹌踉 モ 生活 ク ラ チ には屹 をどれ ピクキ デ ツ デ ク 戦劑である CK ッ ツ 0 6 度ユー はど大き ケ ツク」で ケン 溢 ン あ る ス B モ カ>

もの て、愛嬌でも云うて吳れゝばよいと思ふ程可憐な 山出てくる。けれども、怯暴漢も、ならず者 るならずものである。 いからもう一言言 われらがいつも彼等が傍らの窓から頭を突ら出 کر ツ である。又われ サンの描くそれとは大した違いであ 立葉を掛 らが、 同じならず者でも け 梯子段 られ た の下 V やら 力> ゾ 13 らでも ラや る。な 氣 カシ す Æ.

ゥ

き叉傲然

暴漢

カゴ

4

カ

ーライル

0

所

謂

聲高

と歩するならず者、又は階下を蹴て歩む

見た。 靴を引きづり破れたるズボンの衣養に兩手を突込 カ> んでよろめきつ、力なげな足取りを運 0 0 E* ッド 夜を明 みならず ・をも F. かす失業者の夫婦をも神様の従兄妹だと カデ 亩 チ Ľ, リー街を營養不良の顔をして、 ク 憐 工 なる ス トリア女皇は彼の タ 年少勞働者に依つて運轉する 1 0 蒸汽車も資本家に依 伯母様な ぶ少年のデ りと思 つて ボ D

しき道義と美はしき愛情に富んだ作家であった。 文學である。 デッケン ガ アのラ ルデング、 ない ス を多分に有せるユーモリストであつた。やさ ケル サッカ スの アデ イブラリー もサッ チョ ン ر ا ا v ス ター 1 ン、 カレ クヰ ì サー である。 ガ ス 一もエ ハス チー ッ クペ トケ 7 3/ ıν iv リオットも Human 英文學はユーモ ーパー」一卷は エクスピアは言 ルドスミス、 スモ 工 ŋ Ī オ ツ ツト ト皆ユー デッケ アの はず ユー E

現代の日本の文

50 對しても常に深刻さと嚴肅さの心持を持してゐな 成笑を漏らさぬ工夫に苦心をする。詰らぬものに 笑ふと深 笑ふことは出來ぬさうだ。 とありとすれば極めて内省的な偽らざる笑を漏ら して思想が淺薄になるといふ。 生活の平静と純一とを関すからだといふ。日本の テミストであり乍ら笑ふとを知らぬさらだ。 は我等俗輩共にわかるものでないから御兇を蒙ら す。近代思想的に笑ふのであ ければならぬ。 した我が國の文士は明か 内容の充實したものでないとわれ~~は主張する メーテル い笑であると主張する。けれども赤さ笑も左様 7 1 代の 氣分が緊張して思想が充實してゐれば決 モ アを以 刻な氣分は皆逃げて行くのださらだ。そ リンク先生は我等の笑を空虚な内容のな 本の文士は笑ふことを知らぬさらだ。 て藝 究屈なことである。 藝術的屈辱でアーテステックセコション に知識的氣取屋である。 メーテル る。 唇であると制違 可笑しい時でも 左様な深刻な笑 もしも笑ふて リンクは オプ ひを 口

羽

Ŏ

なるを知

つた。

である。

故に非凡人を凡人に感ぜしむるものとい

ふも、同様に宗教の眞諦である。デ

モ

ク

ラ シ

1

は

不

S U

平 情と友情との溢る、ユーモアの力である。 張 認め彼に天國を約束した。 平等を平等とし、宗教は 諸問題の解決に盡瘁したブロ 會に於て正義 0) 創造する。 義、個人主義に反抗して、平等主義、人道主義を主 といふ、 愚者を多くの賢者とした。 のである。 て賢人とする。共に弱者の 開放、貧民法、 して下層民の爲めに大氣焰を擧げたのは彼の溫 殖えれ 基督教 ば國 Æ チ 人道の 彼の 工 は ク 穀物稅 ラ ス の創始者 ひとりでに進步し ター學派 二 チ 楯を取つて奮鬪 Decimal ッ 廢止、自由貿易、工場法案、 Smallness " モ 佛蘭 デ 7 は磔上の罪人に善人を 内部に强者を求むるも の精神は思者を激勵し の功利 ッツ Ì 0) 對照であった。 ケ ハムやピールや、 西大革命は多くの 2 を ス 主義、 て行くものだ して、か は煙筒 greatness & 羅馬教 資本主 の數 ゝる 議

> 覺を促 细 ンスやサッ 不識 カジ ١ F 同 0) 中 アシ 情 正義 カレーも亦偉 に不人道なる悪 と愛憐とを以つて民情を純 レーやゴ の爲めに立つに至らしめたデッ ーブデ いと云はねばならぬ。「ハ 制 ンやライト等は 度に泣 く 下 化 ・層民の 質に偉 自

に戦を宣した。 夫人と同 様に 排個 ラス 丰 人主義者となった。「ア 1 og. 丰 ン グ ス v 1 9 ワ ガ 1 ス ケ

w

1

F

タイムス」に於てデッ

ケ

ン

ス

は

ラヂ

力

y

ズ

2

妥 協に依つて苦める悲惨なる下層民の味方とな ラーに同情するならば、 つて奮鬪 ユチュア iv した。「ピクヰック」を讀んで、サム、ヰイ フレ ンド」 に於て彼は貴族と資本家 デ ツ ケンスを博愛家とな

可憐 すであらう。 スを排繁文極禮 なる 119 N デー 潔さ身で、 局者となすであらう。 夫人に同 フ 情するならば、 リー ŀ 監 獄 に送られた デ デッ ツ

力を與へた。 W かなる人間 ハイドパークのベンチの上で夏の に對しても、 深き情けの 籠 短

ス >

は

人生は流れる。暗と悲しみと暗とを貫いて白い墓標へ

風は吹く、水は流れる、人生の白い墓標へ

*

人はいろく~な主義のなかに立てこもらうとしてゐる。そこに彼れ等の死がある。虛僞がある。 水は自然のまゝに流れる。風は自然のまゝに吹く。そこにほしいまゝないのちの流れが

曰く宗教、曰く藝術、曰くプラアトン主義、曰くニイチエ主義曰く何

水はさながらに流れる、風はさながらに吹く。人はさながらに生きなければならぬ。

人は宗教よりも藝術よりもあらゆるイズムよりも偉大なるものではな カン。

4

世界の人を愛するといふことよりも、たゞ一人の友を愛することが大事である。更らに自分を愛す

ることが大事である。

世界の人を愛することは困難である、自分一人を愛することは更に困難である。

_

といふ必要が 自分では成るだけ人といふものから遠ざかつてゐたいと思ふ念が可なり强くなつた。 な山寺のなかにでもはいつて行きたいやうな氣がする。 私 は 昨 年來あまり人を訪ねることをしなくなつた。また人々の集りに出かけることもいやになつた。 なかか つたら、また數人の人々を養はなければならねといふ務めがなかつたら、 生活の 私はどん 糧を得る



永遠 VZ

田

絃

鳳

流れ る。 人は永遠に默しつ、運命の道を

風は永遠に默しつゝ野を流れる。

何故 に人は生れ、 生き、 死ぬ る か?

水に向つて、

或ひは風に

向つて何故

に流るゝかと訊ねてはならぬ。

水

は永遠に默しつゝ河を流れる。

水は永遠に流れる。 人生に對してこのやうな問を發してはならね。

そこに星が煌く、星が映る。 春の花瓣が泛ぶ、 水は默しつ、永遠に流れる。

風 は永遠に流れる。

そこに雲が 動 雲が 壞 n る。 る。 牧場の嫩草が頭く。 風は默しつ、永遠に流れる。

そこに悲しみがある、 人は永遠に運命の道を流れ 悲しき思ひ出が ある。 暗き墓場が

かる。

はないか。」私はこの説明の後に始めて彼れを允すことができる。 私は人の罪を恕することができる。けれどもそこに一つの説明が附隨してゐる。「彼れは弱い人間で なぜ私は理由なしに人の罪を恕する

ことができないだらうか。私は聖者を志す惡魔である。

は善いてとをした」と思ふ矜りを感ずる。私は自分の右の手から左の手に移すだけの平易さをもつて 私は自分の貧しい懐からその小部分を割いて路傍の乞丐に惠むてとができる。けれども直ぐに

なぜ人を惠むてとができないのであらうか。

私たちは貧しいものっために叫ぶ。

「吾等にパンを與へよ」と。

けれども何故私は三人前のパンをこの私一人の腕で作り出さないだらうか。

私たちは辻に立つて

「貧しき人々に惠みを與へよ」と呼ぶ。

けれども何故私は自分の衣を脱ぐことができないのであらう。

私たちは焼き殺されたる市民をあはれむ。けれどもなぜネロをあはれむことができないのだちう。

暴君も私たちの同胞ではないか。

クリストを愛するの以上にイスカリオテのユダを愛するものでなければ天國に入ることはできない

と思ふ。

地獄の苦惱のないところに天國はない。

な悲しさに囚へられるごとに「押入れのなかには血を好む古刀がある」と想ふことが するとその刀を抜くごとに何となしに恐怖に襲はれることがある。私は時々耐らなく孤獨といふやら の刀を見てゐた男が、「この刀は妙に人の血を好む刀だ」と言つて私に聞かした。それ以來私は何らか 私の押入れのなかには一昨年青島の戰ひが初まつた時、急いで軍刀に拵へた古刀がある。或る日こ 私の心は大かた生きるといふこと、死ぬるといふことの二つの境に迷うてゐる。 ある。

ねる時も、私は 多くの人々が生の創造や、人類のための愛といふやうな雄々しい問題のために大童になつて喚いて なは靜かに自分ひとりの生死の問題に患んでゐた。

n カン はた、私一人の悲しみを悲しまむがために過ぎない。 も知れないが、現在の私には悲しいことだがそれほどの決心はできない。私が山に入るとしてもそ 釋尊が愛の紲を斷つて山に入つた刹那には更らに偉大な人類の愛のためにといふ信念が燃えてゐた 118

接するごとに自分の愛が裏切られ行く悲しさを繰り返した。私は終に人に接することを恐れるやうに うに愛する力はない。私は最初何人をも愛しようと思つた。そして凡べての愛に失敗した。 私は誰れをも愛したい。けれども私には誰れをも愛する力がない。私はたべ一人の者をすらほんと 私は

寂寞や矛盾やに耐へ切れないからである。 もし私が自分で自分の生命を斷つとしたならば、決して人類を愛せんがためではない、自分一個の

私は時としては聖者となりたいと思ふ。私は時としては惡魔となりたいとも思ふ。

人生は祈りである。 藝術 は祈りである。人生が肯定され、藝術 が貴くせらる。所以は神にさいげら

る ^ 祈 りの 聲が聴かるゝ 唯一 つの場所が人生であり藝術であるからである。

教、 貮 人間 の人生い 0 理 一性によりて築き上げられた藝術は到底第二義的のものでなければならぬ。近代のクリス 眞の宗教、 真の藝術 には why といふてとはない。 人間 の理性によりて判斷せらる、宗

ŀ 教には why なる人間 の理性の聲が除りに多く聽かれる。

畫は小説より、 音樂は繪畫より更らに力强い藝術である。 純なる藝術である。 更らに樂音

0

たる後の沈默は最も偉大なる藝術である。

た。

教は 3 ハネ 無學の徒の宗教であつた。けれども彼れ等は、 は ョルダンの河畔をさ迷ふた野の人であつた。 眼に見えぬ世界の色を見、 クリス トは學者の子ではなかつた。 音樂を聴くてとができ クリ ス r

度 77 IJ 7. カ Z, o ス y p ŀ ス 0 ŀ は尚 野のわらしに新しい空氣を呼吸しなければならぬ。 数は尚は一度野の人によりて改めなければならぬ。クリスト教は大學の空氣に窒息 度ヨルダン河の流れに自然のまゝの洗靈を施さなければならね。 クリス ト教 は尚 した。

ゥ 工 ルテルの悲しみ」を讀むだものは誰れしもその燃ゆるやうな戀 0) 懊惱に對して泣くであらう。

戀人を抱かんとして差し出したる兩腕 0 はかなくもそれは真夜中の夢であつた。

迸り、 我が心は悲しみなもて重し」。 学ば眠るときに、我はうれしくも彼の女に觸れたりと想ひき。されど全く目さめたるときに、涙は瀧つ瀬となりて我が眼より

を忘れてゐる。クリストは嘗て彼れがパンを持たないことを世に訴へたことがあつたか? 私たちは自分の貧しさを訴へる。けれども自分等より更らに貧しい生活を忍むでゐる人の多いこと

ればならぬ。祈りは隱れた場所でしなければならぬ。自己の貧しさを隱れたるところにありて我れ一 自己の富を矜るものを卑しむと同様に、自己の貧しさを人に告げようとしてゐる私自身を呪はなけ

*

人泣かなければならぬ。

終生神の智慧を索めなければならぬ。最大の宗教家は最大の苦痛を苦しむ告白者でなければならぬ。 あるのではないか。導かるべき第一人は自分ではないか。私たちは終生教ひをもとめなければならね。 てとを念としてゐる。愚かなる人々を導くことを心としてゐる。けれども教はるべき第一人は自分で ルビットは説き明かす為の聖壇であつてはならぬ。罪を悔ゆる者の告白の場所でなければならぬ。 多くの社會問題にたづさはる人々がある。多くの宗教家がある。彼れ等は何時も貧しき人々を救ふ 120

4

集りである、牧者はより大なる罪人である。クリストは最大の罪人であることを自覺したであらう。 ての謙虚な心から出發する時に教會は始めて神の國に詣る第一の階梯となることができよう。 クリストの徒であることを以て神の子であるかの如き矜恃を持つてゐるものがある。教會は罪人の



亂に對する 態度

オ ŋ スフォールド大學教授 I ル・ス 111 ス

に話をすることになった。そして誰でもよく 或る青年土官が基督降誕祭の夕、其の部下 はしがき

と言ひかけた時、 そして是れが動機となって今胸に浮んだ、非 起す人があるかも知れぬと云ふことであった 夫れとも今日の大戦闘のことかしら」と疑か 聴衆の中に、「夫れは基督の降誕のことかしら 常に强い對照を想ひ、平和の王の降誕より千 「人類の歴史の中で最も大きな出來事は:」 九百年後の今日、目前に起つて居る悲しむべ 不圖心に浮んだのは、此の の様な多くの問題となる。

心や、 力に比べて、國家と其國民との間の關係や、 いふ問題が起る。此の大問題を小別すると次 易は別として、本質上出來ない事かどうかと で斯ういふ廣い關係を基督教化する事は、難 共が氣が付かなかつた事を示すのである。乃 其の力が弱かつたからと言ふ點に、今迄で私 き事件に就て考へ始めた。 國家と國家との間の關係に對しては、 此の忌はしい事件は、基督教が、 個人相互の關係に對して有つて居た勢 個人の良 如何に

基督教は戦争に對して如何なる關係な 有するか。

を述べやうと思ふ。 H 今私は以上五個の問題に就て、 基督教と國民性との關係は如何。 戦争は基督教的感情を遮塞するか。 基督教を國際關係の中に入れ得るかっ 國防の義務とは何ぞ。 自分の 所見

基督教と戦争との關係

ると、何事でもさう單純なものではない。基 出來る。聰明な非基督教民族の考へる様に、 起されるのだと言ふ、併し一般の常識から見 する人々が今迄隨分多くあつた。斯う言ふ人 が戦争に對して絕對に守るべきものだと主張 て是れは戦争の救拯的方面の二個の事實では 生命を與へた人であると云ふ事である。そし にする事、及び其の教祖は多數人の為に其の 基督教の要領は、正義の為には何物なも機性 前述の教訓でさへ他の一面の見解を下す事が 督者の義務も亦斯る一面のみのものではな は今でもある。そして戦争は、人を殺す爲めに と言うた。所がもつと偉いモルトケ將軍は「戦 『悪に敵すること勿れ』此の教訓は、 争は最も非道なものであるが、同時に又人事 ないか。名将軍シャーマンは「戦争は地獄だ」 基督者

けれども僕は思ふ。 悲しむべき過去の追憶をもてるものは、 まだ何の追憶をも持た以人々に増さる

てと幾倍であらうと。

彼れはまた言ふ。

「墓場こそ我が懊懺を斷たん。墓場、かの平和の家郷、あらゆるかなしみを葬る墓場!」

私は墓場を恐れない。けれども私はウェルテルの墓場を慕ふかなしみの追憶をも持たない。

追憶の悲しみをも持たぬ悲しみほど寂しいものがあらうか?

ムやらになったのであらう? でとにこの寂しさは一層痛切に自分の心の底まで喰ひ入つて來る。俺はなぜこのやらに春を寂 春ほど寂しいものはない。殊に黄昏れのころ少かに木立の間に夢のやうに漂うてゐる花の群を見る しく思 122

枚の銅貨を投げてやった。乞丐は涙を流さむばかりによろこむだ。 人たちはこの世の春をほしいまゝに樂しむでゐる。人々はやがて往來に出た。そこにはこの二三日來 一椀の食にもありつかぬと言つた風な乞丐が坐つてゐた。 カ フェの窓から往來を覗いてゐる人々がある。柳はやつと芽生えしたばかりである。五六人の若い 力 フェを出て來た男の一人は彼れの前に一

君はなかー~慈善家だ!

青年等は聲高に興じながら明るい街を歩いて行つた。 なあに、 カラーの剩り錢だ。銅貨は持ち悪くつてね! 親善の關係を作るべき種子や、歐羅巴の和合

私共は此の大氣中に、

もつと

しい條件ではない。私共は陸海軍の士卒にし である。乍併必ずしも實行の出來ない程難が の問題が起る。 の種子を植る付けなくてはならぬ。兹に二つ

を知つて居る。又醫師や看護婦の徳も此の高 きに進んで居るは申迄もない。世上の實際を である。「復讐」などと言ふことを口にするは に在るのは、却つて吾々家に止まる者の狀態 見るに、此の様な高い徳から離れさうな危險 て、此の高い徳を實行する者の多々あること 方法であらう。 寛容の態度を示すことは、幾分有效な唯一の

た後、幾分の好意を示す事や、戦捷後に於て 氣を消滅させることが出來るか。 (一) 私共は如何にせば此の怖ろしい氛圍 曹魯西の軍國主義に對して適當の保障を得

見ようなど云ふ樣な知識的の努力でもない。 くことを免れしめたものは一體何か。宗教的 狂憤に陷る事を免れて居る。斯かる狂憤を抱 者と思つて居た、獨逸國民の抱いて居る様な る。目下の所私共は、全世界が宗教界の先導 戦線に在る者ではない。

白耳義の避難民の如 うさせるのであらう。 大方之は私共の野卑下劣を嫌惡するの情が斯 の動機でもなければ、獨逸の思わくな考へて と思つ居るとは私共は認めない。是れは怖ろ 妬深い、偽善の國で、 男子、女子、兒童が、英國なば、細心な、嫉 を餘りに輕く見て居る。獨逸に於ける凡ての 此の語を聞くだに怖ろしいと思つて居 其の結果私共は其發表 同じ民族な裏切る者 何としたものであらう。私共は自分な第三者 判きり區劃を立てた圏内で、兩方を能く守つ だらうか。宗教は宗教、日常の實行は實行で 島國に平安を樂んで居る我々も、不快な疑惑 國民的妄想を書く實際の事質を明かに知つて て各を最もよく利用して行かうと云ふ英國人 な改善策であらうと思ふ。 で、客觀的に一度自らな省みる事が一層有效 をして看過した方が便利なら、

社會の弊風は の習慣は何になるだらう。私共が知らぬふり みが全く妄想に襲はれないと言ふわけに行く を抱かざるか得なくなつた場合。

我が國民の の地位に置いて、獨逸が我々か見る様な態度 (二) 一國家全體が斯んな方向へ迷び込み

あらうか。否!誓つてそんな事はない。ニイ る仕事の如何に目覺しき哉」と。是れは今迄 神よりの薬だと言ふか。然し何者の痴人か敢 である」と言うたが、夫れなら虎烈刺病をも は「戦争は神のものである、神の恐ろしい薬 の歴史に徴して全きり虚である。トライチケ て虎疫を推獎して神楽也と為す者があらうぞ チエは言つた「隣人の愛よりも戦争の爲した

我々の採用することの出來ない説である。 爲めに來れるに非ず」と言ふ聖句を誤用 融界の原則たる『悪貨は良貨を驅逐す』と云ふ 居るが、之れは國家としても個人としても、 ものである。又彼れは『適者生存』と言って と言つたが、是れダーウヰンの説を曲解した 居る。彼れは又戰爭は「生物必然の要求」だ する所、畢竟キリストをオーデンと代へる事 樣な事は戦争に於てもある。是等諸説の歸著 ベルンハルデーは「我は地に平和を出さんが 三十年戦争時代に後戻りして居るし、 る所を見るに、其の野蠻さ加減は三百年 になるのである。實際此の戰爭で實現せらる 125

デーな學んで、私共が戦争な讚美する積りで 是れはニイチエやトライチケやベルンハル 近きを知つた時、又沈みかいつたグナイゼナ りなして居る。今でも尚は塹壕の中で死期の 員に至つては更にキリスト以前の時代に後戻

在、此の犠牲の精神を高潔にしようとして、 なる代償をも拂ふ」と言ふことた、格言とし て承認することを拒むではないか。私共は現 共の至高且深遠な感情は『平和の爲には如何 中で最も勇ましいものである」と言つた。私 く陸海軍人中に見られると言ふことは、私共 優しい品性や、最も深い基督教的の考が、能 基督教的な事が往々ある。そして最も美しい もつと根本的に悪い、もつと醜い、もつと非 の屢々見聞した所である。

さう簡單に解き盡せるものでない。 盡すことが利己心に基くものでないと云ふ事 る者に對する義務を盡し、同時に其の義務を 生の實際に適用すべきかといふ事、虐けらる 私共の「隣人を愛す」ることになるだらうか。 とが基督者の義務だと言はれようか。夫れが 白耳義の惨狀な、平然として見物して居るこ 家としての行動に如何に近いたかと言ふこと るよりも現在の一箇月間に、私共は、眞の國 じた如何に强くしたか。過去六十年間に於け が解らないが。我々は、海一つ隔てた彼岸の 此度の事件は、全國民が同胞であると云ふ感 あらん限りの努力をして居るとは思はないか 如何に説明すべきかは大問題であって、 基督教精神の兩面を、如何に今日の人 是れは叉同時に政治上、社會生活上にも新紀 之れ文けでも今度の戦争は、我が經濟界に一 金を浪費して居ることは明瞭な事實である。 は金融界で、少くとも一箇年に五百億圓の資 今度の戦亂の爲めに第一番に影響を受けたの 社會は戦争熱の爲めよりも、却つて此の金儲 去つた青年の惨めな審判を書いて居る。今の は富の廢棄である。ダンテは、巨萬の富を有 新紀元を劃するのである。も少し考へると、 け熱の為めにどれ程腐敗して居るか分らない って居た爲めに天國に入られず、すごん一立 て居ない。絶對に且つ明瞭に示されて居るの 争を禁ずると言ふことは、何處にも表示され 元を作るわけである。然るに精神界には新紀 若し新約全書を文字通りに解釋すれば、戰

りでなく、幾十萬の死傷者を出し、又夫を失 此の戦争は大なる價 ――單に幾百億圓の金計 併し若し私共が、今現に表はれて居る偉大な 惜哉政治家等が間もなく消失させて了つた。 英國人をして譲遜ならしめ、眞面目ならしめ つてしまつたし、後者はマンチエスター派 といふ様な多くの悼ましい人生の悲劇を生む へる寡婦、父を失へる孤兒、愛見を失へる親 道徳的、精神的勢力を正しく用ふるならば、 國家の改善に對する熱心を喚起した。是れも に至ったのであった。近頃の南阿戰争でさへ、 あつた。併し前者は王政復古の長夜の宴に終 の内観の時にも、奈翁と戦つた時にも 豁達ならしめるのである。

是れは第十七 ――さう言ふ大なる價を拂つた丈けの價値が 自由放任主義をして徒に其威を逞うせしむる

戦争に對する基教的感 情

あるに相違ない。

鼠は偉大な精神力を生み出し、そして是れな 基督者の義務である。之は質に難かしい條件 を愛し、敵の爲めにさへ祈るは、是れ正しく 其の條件は高いものでなくてはならい。凡て けて戦争を認容するとすれば、言ふ迄もなく 若し基督教倫理の中に、 何等かの條件を附

為な、平和な時代の考で批判するのは酷であ

戦争に熱中して居る今日の國家、個人の行

る。現代社會の平時の生活に於て行はれて居

にも新紀元が作らるべき筈である。此の大戦 の多少に應じて相當な程度に、矢張り宗教上 元を作らないだらうか。我々の熱誠と透察力

る事の中には、

戦争の惨劇や浪費などよりも

服せる土地を割取せる」、「傷けずに直ぐ殺

弟關係を確立したとは云へないが、少くとも

相互に義務を負うて居るものだと云ふことを

悟らしむる迄になつた。其の義務と云ふのは

武装しない土地や中立國の商權な保障する所

同意する様なことを敢てしないのである。『征

と雖も、

教をば口質として使へ」と。——彼れは此の域

――全くとは言へないが、殆ど此の域に達

せ」「便宜の爲めには何時でも信を破れ」、「宗

世に無節制程卑怯なものはない。戦争に於てては敬虔なカソリツク教徒であった。單に彼 と云ふ句に對しては、答は極めて容易である 此の本能は、城砦でもない場所に爆彈を投下 囁く「斯んな悪業はしたくない」と。そして又 月に虎烈刺菌を投じて五十歳以下の婦人を凡 さへも極端は常に自殺を招ぐ。否れば何故井 して、婦人や小見を殺した爲めに英雄として て殺して了はないのか。本能的良心は私共に 『戦争に於て穩和(節制)程卑怯なものはない』 兎も角も二つの動機が一致する。 試みたのである。絶對に道德を拔きにした經 於ては良父であり、良夫であり、又宗教に於 男であつたと云ふわけではない。彼は家庭に して居る。マキアヴェリ彼れ自身が無宗教の 彼れは、後世の人々が、道徳を拔きにした抽 義の觀念を抜きにした政治學を創説しようと 象的の經濟學を說かうと試みたのと同樣、道 を布巾に包んで置け」と勸めたに過ぎない。 れは一般人に對して『家庭に於て汝等の良心 最早一國家内にのみ限られては居ない。ケー であるか若くは皆無である。若し一國が他國 逸の論客等は、 ルン博士が云つた様に、道徳の法則は普遍的 であらうか。

喝采される者に對して激怒するのである。 は論理上からでも阻止されたならば、トライ て、マキアヴェリの主張が否認されるか、 賣りに過ぎない。若し十六世紀の伊太利に於 實際此の言ひ草は、 單にマキアヴェリの請 百弊立地に臻り、政治的罪惡相續いで起つた 當時此の學說が幾分政治上に實施された結果 の間違ひなることは言ふ迄も無い。現に其の 雑な政治學を之れと同一筆法で説かうとする 濟學の説は間違つて居る。之れよりも一層複

キアヴェリの主張を以て完全だとして是れに 濟んだかも知れない。併し流石のトライチケ チケが斯んな主張を廿世紀に振り舞はさずに 其の當時のフロレンス人の樣に、マ 為め、途に一大警告を發せざるを得ざるに至 を許なさい。基督教は未だ人間相互の間に兄 つたのである。斯の政治的陷内に於て、宗教 一般人が は實に不可分の要素である。 事實基督教は、 分るであらう。

の非行が自國の民に感染するに相違ない。 した。外國に對する信用はともかくも、 に對して暴力を加へ、詐欺を行ふならば、 る經濟上の非道は國內にどんな影響を及ぼす 其の國債償還拒絶の案を提出 其

着ではないか。彼等自身にも之れ程の矛盾は どと呼ばれるのは、洵に是れ片腹痛い自家撞 泥棒國だとか、道徳的に腐敗した偽善者だな せと主張した論客等が、 國家を一切の法律、道徳及び宗教から 他の國家に對して、

人々が、お互に親族關係に在るものであつて、夫れを犯した者には懈怠の制裁を課すべきも 、権謀衝策の詐欺政治に服従すること ならわ。海牙會議の或ものは、非常な賛同な 得て益々鞏固なものにされるであらう。 夫れは文明諸國の皆贊成した宣言であつて、 を抹殺するのではなくて、 のである。例へば公海に水雷を布設したり、 於て其の力を强めるものとならしめなくては 夫れで我々は、今次の戦亂が 却つて此の機 切の國

するのは自家撞着ではないか。
するのは自家撞着ではないか。

三、基教と國民性との關係

者に對しても、殆ど鼓舞歡迎する位であった。 角我々は、種痘法にせよ、教育にせる、衛生に して容易に片付かない。私共は強い本能の導 二種の義務の衝突は昔からの問題である。そ ふよりも神に從へ」と言ふ聖句がある。此の りも高い理想であり、從つて社會國家は豪族 然し基督教的見解よりすれば、家族は個人よ せよ課税にせよ。斯人なものに反對する異論 福音をなかしな風に適用したものだが、兎に |越する。「權威は神のもの也」とか、「人に從 基督教の義務は、往々國民としての義務を 善意の慷慨家には真から尊敬を拂ふ。 教會の存在には、正當にして且根本的の理由 存在を脅迫される迄は、其の結合や訓練があ や國民性が、獨逸に於て、其形式が良くなか があるではないか。私共は將來の進步の期待 つたらうかい 致協力の效果、自己犠牲の訓練と言ふ樣な方 偽哲學や僞歴史などを意てい。彼等の理想の ばならぬ。夫れな厳ひ隱す爲めに用ぬられた 面を觀察せればなられ。英國民が其の國民的 一層善い反面、即ち驚くべき國家的結合、一 つた爲めに信用を墜したと云ふことを知られ

四、基督教と國際関係

よりも更に一層高いのである。

、國家的(國家に反對)なわけは無い、基督教 又一方に於ては、基督教は世界的勢力であ 切の國家的境界を超越しては居るが、 基督教的義務は外にない。蓋し國家の中で國 一國家にとつては、國家に獻ぐる犠牲程尊い

よりも

恐らく基督教の仁愛の精神に基いたと言はん

寧ろ便宜上より出た興論と言ふ方が

正しい。乍併彼等の見解が明晰な場合に於て

u. 精神的發達である。斯の國民性が進めば進む而して國民性發達の最高理想でなくてはならぬ。其の心國民性發達の最高理想でなくてはならぬ。 い。寧ろ之れを導き助くべきものである。是いと同様に、國家國民性に逆らつてはいけな 程益々純潔な國家的良心と一致する様になる 伊太利の統一、波蘭の復活等の歴史は、明かに 學問、藝術、産業等に反對すべきものでな ものに服従することである。「人若し其の靈魂 價値の比較的に小なるものが價値の最大なる嚴密に云へば機牲ではない。損失ではない。 或は又「國家間には道徳無し」と謂ふ。乍併 家よりも高いものは無いからである」と言ひ 私共は之れに答へて言ふ ― 人類共通の利益 は更に高いものである、と。基督教の義務は

此の精神的勢力の復活を示して居る。國民的 らである。國際間にも亦道德が、國際法なる 員に對して無差別な戰鬪を仕掛けたり、貧傷 形を以て徐々に現はれて來た。何故ぞ。夫れ な失はい全世界を得とも何の益あらんや」の 引を以て獲得する何ものよりも、更に大なる が示して居る様に、軍事的行動や政治上の 者を惨殺したりする國民は、現に今次の戦争 が國家の為めに得になるからである。 の間に表はれて來た。矢れが報酬を與へたか て箝まる。最も低い意味に於て、道德が人類 聖句は、國家の精神に適用すれば一層よく當 損失を蒙るであらう。一般の輿論は、 十字病院とを建設することに一致した。こは 破壞的行動を制限すること及び野戦病院と赤 非戰鬪 軍隊の - 126

いとすれば、夫れは我々自身の罪ではなから 層良い國民、

を授ける場合に、若し

比べると、直に基督教國だと云ふ感じを現實現時の基督者の團體は、十字軍時代の夫れに現狀を見せしめたならば、智勝れ、徳の高い 素晴らしい勢で前進して居る。歴史家をして に表はして居ると言ふに違ひない。 見なかつたら、 既に曙光が見え初めて居る。彼の基督教學生 が明け初めんとする黎明の時である。 みが無いと思つてはならめ。 私共が 0 あるc 様な舊い ~働きば、 塞に目覺ましいものである。 私 事を爲さうとする時に、 又萬國聯合基督教傳道の事業も、 時代の者は、若し夫れな實際に とても信ぜられい程の偉い働 今は正に新時代 空には

此の叫び聲こそ質に基督教に取つて、理想のでないと云ふ叫聲が往々私共の耳に聞える。 標準ととしての最大の貢献であ 7 其の態度を變へようとして居ることが分 は世界の優越權を要求するけれども、 あれが基督教なら、私は基督教の信者 理想の

會を見るに、

一層良い基督者とならな 彼等が一 層働きのある の戦亂を防ぐ事が出來なかつたからと云つて れば出來ない相談である。國際主義で以て此 此の要求は精神の優越が土臺となるのでなけ 失望する人があるけれども、 質はどんな主張 方が效めがある。 直、博愛、犠牲などには矢張り此の徳の在るこ った様に、戦争かしては割に合はめと説い と説教するよりも、ノルマン・アンゼル氏の言 とな考へなくてはならわ。

戦争は罪悪であ

初めから望 見ると善い びて居る。 道徳及び宗教などは、 商工業、 や運動にも、 でも千八百十四年の歐羅巴の 法律、 悲觀の傾向を有つて居る。人は誰 のである。 潮流と同様に干滿がある。財政、 學術、 皆或る世界的性質を帶 社會運動、 有様を研究して 慈善事業、

結 論

る私の結論は次の様なものである。 どうしやうと言ふのか」と言ふ。是れに對す て實行を望んで居る。彼等は『夫れを貴君は 大概の英國人、特に若い人々は理論に飽き

基督教の根本義に對し ち望むのは餘りに空想的なことである。 備撤廢を説くのは出來ない相談で、 樣な絕對の無抵抗主義を徹底的にどこ迄も押 英國に於ては、 がだんし、多くなって來る。)廣めるわけには行かないのである。 基督教の一面は分別である。正義、正 强制徴兵制度に對する贊成者 基督教の教へる 夫れを待 我が vJ.

は も此處に留意しない。學校當事者等は宜しく 精神であると説いて居るのに、 りとすれば社會の一員たる個人である。 一致共同とか、 **將た宗教も皆さうであつたが、** 義で持切りであった。文學も政治も、 反省すべきでわらう。 個人などいふものの在らう箸がない。 とを認め初めて來た。一體人類の間に絕對の ___ 致協力はチュートン民族の生命であり 今日までの英國 團體とか云ふものの重要なこ 一の思想界は、 近頃になって 教育家は少し 若し在 社會も 個人主

戦後直ちに、歐洲の軍備縮少父は軍 數の爲めでなく愛の爲めに働いて居る。 能く教育を施し得べき學校である。生徒は點 に附せられて居る。此の社會は、宗教が最も うとすれば喜んで聞き、訳れようとすれば喜 でなく共同で仕事をして居る。そして教へよ んで答へる。 勞働社會に對しても此 此階級の人々は開 の問題が等閑 一戦の一初めに営

其の監督者等よりも

わけの分つた、公徳

を砲

いりす

る

昧

は

當然其の

制

裁を受け

根抵

複され

7:

それ

界

0

度及び 國 なくてはなら ト 節 屋 國際上 F 1 のである のであ 産業制度の發達と其の 0 た爲して居るが、 無 無制限は、 政府主義で つからい 國際的 斯か 汕手 人類の經濟 一經濟は、 あ る つつて、 修 行為は、 戰 觀 戦争の 作 近代の 國際法の 生活を危うす 用 近代の經濟制 シ永續、 んを阻害す 是れ正しく ツ戦争の 無視 方法 f , 5 12 間の協定に依

ル

=/

ヤ

亞弗利加の殘部及び其他の

つて分割され

た。メソ

が

起

つて來る。亞

弗

利

加などは、既に

未開 200

の人種をどう始

末する から又世

500

空問題 常な進步を要求する。 用》 と云ふ事で保たれて來たのだが、 今までの し大に物議を醸したことが のが加はつた。此等は将來國 ・中度の戰爭には空中戰と、 につれて、 に関し大論争 歐洲各國 從來の勢力均等論では將來の歐 の平和は、 を惹起さんとして居る。 國際法は曾て航海に關 あった。 國際法に對して非空中運輸の二作 其の勢力の均衡 航空術の發 今度は航

る。 矢張り あるだらうと思ふ。

あるだらうと思ふ。

世界的勢力としての将來の基督教

差がある。世界的勢力としての將來の基督教 を齎らす 唯斯うした協定でも、 斯う のである。夫れで過去と未來には大 ふ風にして片 將來正義 付けられ 我と人道 る筈であ

らろろ

のを忍ぶことが出來な

五 基督教と國防

一瓣の上に座つてさへ居れば大丈夫だと思 平和を確保することが出來なくなつた。 國民精神の 今度の戦亂の為めに 居るの 波蘭 和 一般達 闡 希臘、伊 或る安 の爲め iv ì ~ らなる 之れ 誇り 應募することや、 居た爲めに、 英國の如きは、 後の様に、 f. が義勇兵制 編成を立て直す 此 の戦気 としい 國防が直ぐに を默視することが出來よう 濁逸の記者等 の後、 直ちに戦後の軍容を整へて、 且つ現在でも尚は獨佛等の强制 度に於て、 今や非道 平 だらうと言つた。 時 平和條約 其の實質が良 不必要になると思つてはな 其の が 多數國 い目に逢つて 武備を忽諸に附して 獨逸は が成立したとして 民が自ら ムいとい *ý* 1 他 x 居る。 の國 ナ戦役の 既に我が ふ事 進 其の 心んで 々は 我 加 のである」 者は、 冶性 を階 0 級

に勃興した。

尙は又アルサス、

0

tr.

111

紀に於て

白耳義、

獨逸等が

其の は

ヤ

が

將に勃興せ

んとして

た從來の外交政策は、

最

B 如

盛んな時 何に關らず一

明朝の

間

の有力な訓練

齊に集めて、

其の

各關係國 云ふ問題 タミア, 一國々は 、未開 Ł 地 愛蘭、 ない となっては日 る一 を附し、 ス聯合內閣 制 一般軍隊 のであらう。〈譯者曰く、 度 或る宗派及び或る境遇に對す 10 遂に英國强制徴 排斥して居る者 教練の は、 今次戦闘の必要に迫ら 1 制度 ツ を是認す が十 が多 兵法案を議 英國 年來力說して居 if るより n かしまりる アスク れて、 ん仕方が

據の上に立脚する。昔羅馬の富者が金を與へ説は、國防を國民的義務也とする確乎たる論 ر なれり) 院を通過 い論様から歡迎されるのである。 本年一 て、 ロバー 月下 二月十 旬、 ツ元 À いより 0 對多數 此 の主 質 施 の賛成 せら は (一)此の 3 を以て 會に提出 る除外例

て戦争 上に於ても、測り知られの程の値うちあるも平和を保障するの力を興へる。又同時に教育 ない。 門家に計り 精神上非常に悪い事である。 『是れは常に平和を希望して居る民主主義に、 (二)此の の専門家に戦争を 彼の社會黨領 と彼れ 任せ 切りにして 一般的軍 it 一五つ 袖のジョーレ氏であつた らゆら 7: 置く 教練の第 (三)全國の せた様なこと うい からも ふ事 の質成 0 壯 は専 で

る。

然るに國體神道

は言ふに

3

に飛び越した平和であり、又永遠の平和の國に飛び越した平和であり、又永遠の平和の國に飛び越した平和であり、理想の國なのではない。若し凶事から古事が生れるとすればない。若し凶事から古事が生れるとすればない。若し凶事から古事が生れるとすればない。若し凶事から古事が生れるとすればない。若し凶事から吉事が生れるとすればない。若し凶事から古事が生れるとすればない。若し凶事から古事が生れるとすればない。若し凶事から古事が生れるとすればない。若し凶事があり、理想の國なのではない。若し凶事があり、理想の國なのではない。若し凶事があり、理想の國なのではない。若し凶事がとい、持神と、今までよる。 想として憧れて居る國は、 を轉じて福と爲す唯一の方法なのである。 んなな 範圍を遙

DU 月 0 思想界

神 社 は 宗教 的 機關 12

思ふ。 層此問題が宗教界の注意な惹く様になった。 なつて居るのであるが、 社が宗教的機關であるや否やは年來の懸案と て居た。 區別して神社局に於て之を統轄して、 のが後に天理教が加はつて十三派となった。 を指すのであるか。神道は初め内務省に於て 此點に於て吾々は年來見る所があるからして のであつて、其宗派 本に於て神道と視るべきものは何う云ふもの かと云ふことを論ぜんければならい。現今日 るに先だつて抑も神道は如何なるものである る――宗派を成して居る神道を宗教と視た 一際其要點だけなりとも兹に述べて見ようと 以外に 一の十三派の神道の宗派だけを宗教と視て、 ટ 云ふ井上哲大郎氏の論文が東亞の光に出 神社の宗教的機關たりや否やな解決す 其梗概は下の如くであつた。「一體神 神道なるものは行政上認めて居ら 而して彼の神社なるものは宗教と は初めは十二派であつた 昨年の末頃から又一 十三派 n に願はれて居る。 今の宗教はこれを三種類に別けんければなら あつて真に宗教上より觀た區別 けれども、さう云ふのは單に政策 に看做したと云ふことは非常なる間違であ ばず神社神道までも神社と無關係なるが如く なる機關であ れば價値に於て餘程劣つて居る。 神道と神社神道である。 全體が分るのである。 派神道と此三つを併せて初めて今日の神道 三派の神道である。 られて居る。三は宗派神道即ち前に述べた十 て居る機關である。 する。二は神社神道であ つて居るので、總て帝室の儀式は此部 道である。 2。一は神道の 國體的方面に 神道は神社の精神な顕はした所で極めて重要 作ら是れは行政上必要な區別かも

〇平山六之助譯)

矢張り /神道 頃 係 から宗教局は文部省の方に移されたが であると斯うなしたのである。 は宗教局で取扱ひ、 は依然として繼續されて居る。 神社と宗教とは

神社は神道の

信仰を題はし

る。神道

の結

神

が神社

屬

即ち祭神を襲として信ぜ

國體神道と神社神道と宗

其中で重大なのは國體

宗派神道は之に

それで神社

國體神道は帝室な中心として成立

題はれた國體

ではない。

Ŀ.

の區別で 知れな

あ

る態度を示した。

併し萬一

に際して自國の爲めに 思ふなら、 國家の政治にもう一層基督教 かつたとすれば、 つと政治の事を教 政治家や資本家の 般國民に基督教を土臺としても 夫れは彼等の指導の なくて 罪であ い助けに る。 は なる働きかしな を加味し 何はともあれ たいと 任に在

法律にのみ粗るわけにない以上は、矢張いのでない以上は、矢張いたとしても、サ東へられるとしても、サ東へられるとしても、サ ないる。 若し一切の實業を夫れよくの合資會社組織に たるの に如何に適用すべきかと云ふ問 2 る n 律にのか頼るわけには行くまい。或は又之ってない以上は、矢張り全然宗教から離れての社員の精神まで法律に依つて與へられるも 社員の精神まで法律に依つて與へられるもべつられるとしても、其の會社を組織して居いた場合に、會社其のもの、人格は法律から あ が爲めに資本主義の破れなければなら 五 たる。 資格ある人が決して無い い多くの 八生の七分の六は無宗教で暮らすわけに ない。若し日曜日丈けの宗教だとすれ 今度は此の基督教の主義を、 又宗教は日曜日丈けの宗教であつて 質業家の 中に 6 戦争から宗教を 問題の 真の 順 基督 個番にな 時の時

彼等が 戰 争 私共は くてはなら 共がもつとしく高潔な心がけで行く様にしな 議をもつと基督教化しようと思ふならば、 と思ふ。 ぼし初めなければなら は ないい 更に慎重に考量を費やす必要があらう 筈である。 فر 實業界と基督 宗教は仁と同様、 ね。若し海牙の 教 0 一問題に就て 内より及 平 和 私

界 (六) 實業や國內の政治に基督教の入る事 調 が大切であると同時に、國際關係にも之れが 界 な が大切であると同時に、國際關係にも之れが 界 な が大切であると同時に、國際關係にも之れが 界 が大切であると同時に、國際關係にも之れが 界 が大切であると同時に、國際關係にも之れが 界 が大切での獨逸主義を驅逐し去る事は出來ない に と思ふ。 が出來 癌腫等

る。 0

7

是れ

か導く

のは、

驅逐、

は、何故に一年間位、其教育の一部として、やうに努力しなければなられ。全國の青年に なる働きが出來るかを示さなくてはなられる。 いる働きが出來るかを示さなくてはなられる。 いか働いて來たが、今度は更に方向を變へ、如何の分働いて來たが、今度は更に方向を變へ、如何 基督教 0 を得なけ 形 ル式に軍 は、 基督教は從來主として ればならの事を承認し、 事上 例 へば全體 の事文けだと言ふ考を却ける の社會が「奉公」の訓練 個人的方面に 同 時に奉公

ટ

10"

云ふ話を聞いたとて、

喫驚仰天する資格 から宗教を取去る

叉は

國際關係

そんな事であつては、

あらう。斯うい一般の産業上の 界的 を荷つて居るのだといふ觀念を了解するに大 する國民の が餘り無くなる筈だと思ふ。 上下の階級に 訓練が出來れば、 變助けになるに 事業なる航空法規の編成、 道 うい 徳上の責任は、 理解が生じて、 00 訓練を受ける義務 異教國の傳道等に從事する 相違ない。 ふ方面に 遂に其の勢力を集めて、 各國で皆斯うい 從つて 將來階級 各人平等に之れ 疫病、 教育を施せば がり 750 ので 0 3.

ってなけ

何 出させようとすると、自然靈性が無くなつていに有形的に此の地上に建設しようと云ふ理想にではれて來た。けれども『我が王國は此の世に憧れて來た。けれども『我が王國は此の世に向れてある。靈的のものを、機械的に有形的に現ってある。靈的のものを、機械的に有形的に現ってある。靈的のものを、機械的に有形的に現ってある。靈的のものを、機械的に有形的に現ってある。靈的のものを、健城的に有形的に現ってある。 了。 律學的 和に 0 0 0 條約 つだと思 3 限ら のにすぎな とい 解句を以て私 般の ふの れて居て、 ふの 一世人が、 は は V > 大なる了 私共の希望する平和、 夫を條文に綴られた丈け 即時に得られる 共 平和條約 0) 理想が 簡違ひである。 實 現さ n 睹 云 一ふ法 ろも 245

徳にあることな明かにし、神道を倫理學的知

つて神道を解し、神道の目的は眞個の倫理道 る権威を帶ばせんが爲めには時代の思潮によ でこの殿堂をして尊厳あるものと爲し、大な

式は之れた放擲することが肝要である。井上

爾來の傳習的分子たる

一切の儀

機闘であり、その中に道徳が厳存して居るけ を無理に分離させた罪である。神社は宗教的 が分離した形である。元と同一であつたもの これは何の爲めであるか。即ち宗教と道徳と る所以に關する信念が兒童に無いのである。 道徳だけを取り出して殘物を其儘にし

社の前で脱帽を命ずるけれども、其の脱帽す 出て來ないのである。校長が遠足の途中に神

ある。 盆 先に關する徳即ち忠孝の徳が却つて力説して の意義は徹底しないのみならず、國體又は祖 存在の意義を失はんとするに至って居るので て置く結果は神社の衰微となり迷信と化し、 一々其の尊嚴を害する所以である。 故に現時の修身教授に於ては神社崇敬

督教の教會と同一であることを主張する。所 即ち神道の殿堂であつて、佛教の寺院又は基 如く飽く迄も宗教的機關であり、民族的宗教 故に評論子が思ふに神社は井上氏の云ふが

しない分子があるいら、其の可なるものは説 説明しては脱線になるのである。 あつたが為めに、放禊、齋思、祈禱、 氏は神社の宗教的機關たる所以を説くに急で でも取り出したが、此等には時代思潮に投合 いて能いが、其迷信なるものまで取り出して 祭祀ま 船を安全に進行せしむるに至るは、 書き、現代の誤まれる性慾問題の害毒を支除 聰明にして且つ信據するに足る幾多の書籍を 此の問題に關して、外國に行はれて居る樣な 像し得らる、と思ふ。若し出來得可くんば、 することは、基督教的見地より觀て、 容易に想 極めて

情慾問題と基督教

教界は鬣の事にのみ重きな置きて、

此の問

大切なること、思ふ。然るに現時、我が基督

に入り下の如き結論に達して居た。「青年の煩 戀愛との問題と入り、更に青年の情慾的煩悶 初めに現代の興味と情慾問題の關係な説き、 進んで靈主肉從の論に入り、一轉して信仰と 問疑惑、その他凡ての暗黑なる問題の過半は と云ふ栗原基氏の論説が廓清に出て居たっ

てその上に肉的生活を築き上げる基礎となり 性慾も亦た之な順當に解決すれば首石となつ る。一家工の葉てたる石は隅の首石となる一。 性慾の事に關係を有せざるものは殆ど稀であ る。 を刊行せしめて居ることは甚だ遺憾至極であ に關して毫も研究することなく、牛可通の窓 者と一夜づけの性慾學者をして嗤ふべき書籍 余は此點に於て、是非基督教の立場より

人である。何となれば性慾を考へずして、青 せんとするには肉的生活の解決も伴はざる可 が故である。又青年の靈的生活が完全に發達 年の精神問題を考ふることは全然不可能なる 此の問題の徹底せる結論を得んと努力する一 からざるが放である。

見事なる人格を建設する土臺たるを得る。さ る如何に多くの暗礁なら除きて、宗教生活の 十分公明正大なる觀念を抱いて、これが解決 を實現することを得ば、信仰生活の中に有す れば世に道を傳へ人を指導するものは此の問 題な穢らはしきものとして囘避することなく 害なものであり、 とも氏の言ふが如くであるが、其の大牛は性 懲に關する遊戲的玩弄的研究であつて大に有 間には性慾に関する學者も多く著書の多 題に關しては質に氏の言ふが如くである。 氏の意見は正鵠を得たものである。性然問 其の若干のみが生物學生理

かと云 ある。 ないが、 く具はつて居る。宗教學から言へば神道を宗 て行くと云ふ其自覺の存する所に在る。それ 力である。即ち日本の祖先の遺傳した國家的 てある。 も主として崇祖神道である。 神道と自然神道とある。國體神道も神社神道 教と視なければならい。尤も原始神道は崇祖 と思ふ。一 しても何處に神道が在るやら甚だ漠然たるこ のである。神社を除けて神道を了解しようと であるから神社を除けては甚だ了解し難いも ぜられて居るのである。神道はさう云ふもの 努力した人々を云ふのである。少くもさう信 今日の如き文明を來したと云ふのが即ち神道 で日本民族が是まで有ゆる改造刷新な圖つて 精神を繼承し、而して益々之を將來に發展し は宗教でないと云ふことは無論言へないので 民族の運命を安全にし向上させて行く所の 一神道の精神の題はれたもので宗教的機闘で 神道は日本の國體を維持し鞏固にし且 へば無論宗教である。宗教の元素は悉 基督教や佛教の如き世界的宗教では 世界的宗教だけが宗教で民族的宗教 其神々と云ふのは矢張り國家の為に 體神道は宗教であるか何うである 最後に明に弦に辯じて置く。神社 即ち民族的宗教 ある。さうして宗教的儀式としては祓禊があ て教育行政の統一を圖らなければならない。 り、療忌があり、祈禱があり、祭祀がある。 之れた割分することは出來ないのみならず、 と其民族宗教とは單一分離のものであつて、 る徳育、祖先に關する徳育、國家に關する徳育 ことの出來ない關係がある。殊に國體に關す に於て宗教は徳育上に於ては最も重大なる任 して教育の本義は質に人格の統一であるから 政策の完全なる奏效を見んがためである。而 獨立させた所以は教育の本義を明かにし教育 る。元と教育行政を内務行政の一分課として 内治上の概念に於ては統一されて居る譯であ ら、神社局と宗教局とな別々にして置いても 教育行政は固より内務行政の一分課であるが あるから、勿論神社局はこれを宗教局に移し 盾であり弊害を生ずる。神社は宗教的機關で 上より區別したのは教育政策上より見れば矛 如く宗教的機關である。宗教と神社とを行政 總て宗教的儀式は此に有して居るのである」。 務を帶びて居るのであって、これを分離する 樞に於て道德的信念の養成である。此の意味 徳育が其の中心になる。然るに徳育は其の中 氏の見解は頗る正しい。神社は氏の言ふが 徳を説き忠孝の説を皷吹したのであるけれ 拔きにして教育行政の統一を圖つた。 に於ては宗教の色彩を含むことを嫌ひ、 よりも明かである。この意味に於て我が 强ひて之れな劃分にすれば此等に關する德育 に倫理上に於ける國民一般の儀式と為し、 て文部省に屬することが出來ない事情があつ ものである。然るに明治の教育は其の徳育上 民教育上に於ては最も重大なる關係を有する 神社は實に民族的宗教の機關であるから、 して信仰的崇敬を爲すことは各人の任意と見 上より崇敬すべき義務のみを知り、これに關 其尊敬崇敬に於ては國民一般の義務 の信仰的的崇敬に於ては各人の任務と爲し、 も、宗教は素より説かず、神社に関しては単 授上に於て、國體に關する德、祖先に關する た。此れが爲めに國民教育に於て其の修身教 果として神社局も宗教局も内務省に屬して居 の頽廢となり、民族の衰亡となるは火を踏 したいと云ふに大なる失敗に陷つて居る。何 て居るのである。然るに此の教育政策は成 のである。それで兒童は神社に關しては道德 となれば兄童は神社に関して崇敬する義務 教授されても、 其の崇敬すべき道徳的信念は Z

彼は唯作者の心持を述べんと作中に現れるば 心持が無かつたとも考へられない。こうでは な最後を怖れてゐる彼に、そうなさうとする

宗教界にとりながら、そこには少しも内的に

志はさうではなるまいと私は考へる。

るであらうけれども、神の御心は、

間の弱い心は作者と同じく春代に秘密を勸め

作者は作の力をエンフアサイズする為に材を **父の血の沸騰とに騙られるのである。それで** 唯彼が死を恐れないで出て行く處に宗教家ら らしいところも何處にも見る事は出來ない。

明にして、カタストロフに便せんとしたと見 の平凡な人であつたならば此悲劇はまたあの は決してあの様には終らなかつたであらう。 しい外面の一種の型があるばかりである。而 える點は確に此作の弱點であらう。 様には終らなかったであらう。彼の性格を不 もし彼が全く宗教家でも教育家でもない普進 しもし彼が眞に宗教家であったならば此悲劇

無かつたとは思はれない。まための様に悲惨 はズツト以前からその時あるを知りながら平 て赴くまいに赴かしめる。それのみでなく彼 **尚自分の諭しを妹が聞いなければ、悲劇をし** が怖ろしいものであるかを知てゐながらも、 を河上に告白せんとしてゐる時、如何にそれ ことである。尚こしに行動する一團の人々は 友人である桑田の態度である。彼は妹が秘密 あの様にもの、解つた彼に少しもなす方法が 人であると云へばそれまで、ある。けれども 氣で事件の進行を眺めてゐる。彼はその樣な 次に疑はれるは春代の兄であつて、河上の 凡て宗教的かもしくは宗教に關係ある人々で に驅られて動いて居る。彼は信仰の踏臺生の のではなくて、そには全く本能的の嫉妬と亡 目的を失つたが爲にあの様な兇行を敢てする る。中にも主人公河上は最も外的な本能の力 命は地上的な力に導かれて動いてゐる樣であ も宗教的なところはなく、作の底を流れる生 あるけれども、作全體から來る感じには少し とか思索とか云ふ内的なところのないと云ふ

殆ど關係する。處がない。 かりである。作の中心をなす事件の進行には

は宗教的の氣分がない、宗教は事件に少しも

内的には力を持てゐない、と云ふことなも條

よう。元より春代が告白するかしないかとか するかしないか、など問れることは作者に對 或は河上が其告白を聞いてもあの様には行動 て、直に悲劇の起り來る條件に就て考へて見 私は以上の二つに問題の疑はしい點を留め

して禮を失する。 條件とは大貫先生があの様な曖昧な性格を

見たい。春代自身にとりてはあの告白なしな 條件が加はるに從て作の力は弱められる故に 件としてゐる樣に見える。都合のい「色々の 以上は此作の弱點であるに相違ない。 終に作者の提出してゐる問題に就て考へて

そして河上の性格が単純で熱情的で殆ど信仰 有し、桑田が傍觀して事件をなる儘に任かせ 而し彼女をして其窮地な踏み堪えよと云ふこ れば愛される程次第に窮地に陷るであらう。 代は秘密を心に抱いてゐては、河上に愛され とは、少しの偽りにも堪えない程の清い彼女 告白をしない場合は人一倍清い心を持つた春 て得た純潔の滿足とそしてあの悲劇と、 とである。而し大貫先生と河上の生命は?人 るであらう。彼女の心が幼稚であれば尚のこ 徹底した生活を理想とする人なれば、 間抱き得る様な心になれと云ふことである。 の心をどんな大きな秘密をでもそれを一生の つた考へ合せて見れば解決がつくであらう。 女の運命を思ふ時、誰か此様なことを勸め得 いことより受ける幸福と不幸と、告白によつ

學上の自然科學的研究に屬して居る。 吾々は

野上彌生子氏の 放火殺人犯

究によつてのみ成就さるべきものではない。 する。評論子し爾來努めて此の方面を研究し 性慾に關する自然科學上の研究を素より重視 に過ぎない。更に進んで精神科學上より之れ 自然科學上の研究は單に性慾問題解決の一端 つて統括されて始めて意義を有する性質上よ て來た。けれども自然法は遂ひに規範法によ に願つて置く。(以上評論子) なる信仰と豐富なる宗教的知識とな提げ來り 根底に於て倫理と同一の理想であり、共に規 學上より解決を求めた譯である。宗教は其の 理學的研究のみに満足せずして、進んで倫理 評論子は爾來此の見解からして生物學又は生 つて初めて此の問題の解決を見るのである。 を講攻して性慾に関する規範を論定するに至 の悦びなして窓に空しからしめざらん事な氏 る同人を得たることを悦ぶと共に、此の吾人 雙手を擧げて歡迎する所であり、兹に有力な て性慾問題の研究に入らんとするは、吾人の 範の上に立つ天職である。今ま栗原氏が真摯 性慾問題の解決は獨り自然科學的研

學び、初めてこの世に美と希望とな感じてゐ れて、彼を生の確かなる踏臺倚り縋る柱とし ら寄附した建築中の講堂に放火し、そして其 愛して子供さえ生れてゐる。それ故春代は河 る。而し大賞先生と春代とは以前に秘密に相 師なる春代と云ふ女の愛によつて真實の愛を て崇拜してゐる。河上はまた大貫家の家庭教 ら、宗教家にして教育家なる大貫先生に救は 此様に悲惨な犠牲に値するや、 と云ふこと單に純潔でありたいと云ふことが 火中に投じて自殺する。作者は、假面を脱ぐ 知つた河上は決闘して先生を殺し、自分は自 契子がある。即ち春代の告白に↓つて凡てた 分の以前の關係を告白する。こへに此悲劇の 正直な自分を知らせたくて、河上に先生と自 上の愛を感ずれば感ずる程、 尋れてゐる樣に思はれる。 河上と云ふ一青年が自殺に迄陷つた悲境が 己が假面を脱ぎ と云ふ問題か

題に就て考へて見たい。而しその前にそれは ない。それよりも其中に提出せられてゐる問 私は此作の價値に就て云為しようとは思は 殺されてしまふ宗教家らしいところも教育家 かも死は覺悟してぬるもの、様に易々として の意味も少しも考へたことはないらしく、

態からして實際に悲劇が生れるか如何かた見 なければならない。生れないとすれば問 後に達してゐるか。云ひ換へればあの様な狀 ければならない。即ちそれは都合のい、云 ないらしく平然として出て行く。 狂氣じみた河上のビストルの前へ 君に會て見ませう。ぢやあ左様なら---出來たかもしれない。然るに彼は「私も好ん によつては、河上から決闘の申込みを受けた 何等の力をも有してゐない。彼の行為の如何 る踏臺と迄忠はせた大賞先生は此悲劇に於て 性格である。河上をしてあの様に生の確かな 道程に二つの疑問を抱く。其一は大貫先生の 態であるか、それを知らなければならない。 ない。而し生れるならば、其狀態とは如何な狀 まはしによっていはなくて、必然によって 問題として完全なものであるが如何かた見 で死にたくはない。---後に於ても或は悲劇を悲劇で終らせない事が の生存の意味も河上の行はんとしてゐること 私は此悲劇のカタストロフへと推移し行く 兎に角あちらで河上 彼には自分 深い考へも

現代日本の姑息な淺薄な不徹底な今日主義を

吾は須らく又其獨特の國民性、

想ふに其は東京に依つて象徴せられたる

吾々の執る可き態度方法は如

なしや甚だ覺束ない 自然的文明にはかいる秩序と進步とが有りや 排斥すると同時に如上の形式的皮相的な外國

らざる新開日本の不徹底な歐化主義に隨喜温 の機械生活を以て人類最上の希望と考へる事 出來い。 の物質文明を以て人間本來の面目と視る事が じみた趣味に淫しようとする者ではないが何 は出來い。 にしても靈性といふもの。 こ々は決して物質を呪ひ活動 趣味といふもの」没却せられた今日 されば心ある者が準備淺く物資足 無視せられた目下 を嫌つて隱居 いに存する。

抵抗しようとする者ではない。 國粹保存説を復活して滔々たる世界の進運に 仰し得ないのは當り前すぎた話ではないか。 とは いふもの、吾々は今更頑迷な攘夷論や 大正の今か奈 價値なきもので、それはむしろ宜しく自然の 植に依つて衰頽するが知き國粹は實は保存の と思ふのは皮相な考へである。 抑 々精神的同化に由

良平安の昔に押戻さうと企てる者では勿論な

への連鎖橋梁として開發利導するに在りと信ものとして観察し、以て其等を眞文明眞生活ものとして観察し、以て其等を眞文明眞生活は如何にといふに、其は偏へに其等を過渡の相當に承認し進んで之を適宜に採用するの途 然らば吾々がこれ等物質と機械の利功を 果して然らば更に謂ふところの過渡的 に嚴密に云へば國粹といふものは決して周形淘汰に任して衰額せしむ可きものである。殊 國民獨特の生命力其者に外ならのに於てをやいいいいのののののののののはなくて流動的發展的な其的決定的な死物ではなくて流動的發展的な其 得たる光榮ある歴史を有つてゐるではないか たる支那印度の精神文明を充分に摄取同化し 晋々の祖先たる日本民族は過去に於て先進國

な歐風移殖即內化を計るにめる生命、精神に肉迫し、 模倣を止めて更に竿頭 一歩して其根底にひそ

神事業にたづさはる人士は自己の使命責任

て積極的。

徹底的に歐洲文明を同化融合する

擧に出づ可きである。

此意味に於て殊に精

ひとり窮まり無きは内的同化、心的創造の途 るとが出來るから結局は行詰まる外はない。 由來皮相の模倣はあくまで模倣の域を脱す 在るの 輕からざるを想うて大に自愛せればならい。

(質は創造)を急務とする所以の根據は即ちこ である。私が何ものよりも先きに精神的同化

事を忘れてはならない。 はまた最と安全な確實な又根本的な策である のでなく前途頗る遼遠ではあらう。 云ふ迄もなく此意味の實現は仲々容易なも

つて其國粹が湮滅する 外那文明の移 てでなければ其は畢竟砂上の る理想も総べて此意味の忍耐と勞作とな通し 作となりて各々其専門に從事しなければなら 處すると共に、 いのである。 と冷靜とな持續して此俗惡不統 されば過渡期の吾々は此際 いはゆる雄大なる經綸も高遠な 他面反緻密な研究と堅實な勞 樓臺なるに過 面 なる社 極 度 の窓

の大努力を以てして途に外的 進步におくれて了つた我國が 鎖國三百年の惰眠のためにすつ 模倣の域を脱却 明治四 かり世界 + 五年

かであらう。

做の域に彷徨して居るのであるが。今日の吾 さらば何にゆる之れいつまでも姑息な外的模 生命力を提げ ならなかつた必要の段階だとも 準備たる し得なかつたのは一面決して無理も 然し大正の御代に至つて である。 殊に其が來る可き べきを想へ ば之は寧通過しなければ 尙 新文明の 睰 の荷安を食 云はれよう。 基礎たり ない次第

るに相違ない。妥協によっては決して真の幸

人類はあれによって尚

一層の新しい飛躍をす

語は來ない故に、私は此樣な老婆じみた可能 を排したい。安逸な幸福よりも悲慘でも眞實 の生活を、と斯う私は私自らを鞭ちたい。妄 の生活を、と斯う私は私自らを鞭ちたい。妄

□過渡期の社會に處して

うまく合致して居る點である。 快く感ずるのは第一にそこの自然と人爲とが 奈良平安の舊都に遊んで旅人の吾々が先づ

は多少時代の箔からも生じて來るが更に本質 數語を以て酸ふことが出來る。市街全體としての規模は云ふに及ばず眼欲 ても其は容易に推斷され得る本に腐然として純粋な藝術的感興を人に與へる 之を個別に觀て來ると等しくれに腐然として純粋な藝術的感興を人に與へる 之を個別に觀て來ると等しくれば人類がある。云ひかへれば其等の間に合せと云つ 於て優り京都は其優麗と巧緻とに類然として純粋な藝術的感興を人に與へる 之を個別に觀て來ると等しくれば人類的一般に少なくて沈靜な古雅な莊散な すぐれて居るの差はあるければ多少時代の箔からも生じて來るが更に本質 數語を以て酸ふことが出來る。第二には街 ひゃき拍手梵唄の音を耳にして風然として純粋な者の性格姿態を構成して真 たる美感詩興を催さいるを得いた氣分が一般に少なくて沈靜な古雅な莊散な すぐれて居るの差はあるければ多少時代の箔からも生じて來るが更に本質 數語を以て酸ふことが出來る。第一にはて下表分が一般に少なくて沈靜な古雅な莊散な すぐれて居るの差はあるければ多少時代の箔からも生じて來るが更に本質 數語を以て酸ふことが出來る。

時代精神の美と力とが吾々を動かすのが主因的にいへば、其造管物に表示されたる當代の か、消化れ込んだ上での沙汰だつた事が後代たとしても)の生活、精神にすつかり融け込が限られたる階級と選ばれたる天才に止まつ ら異邦文明の採用が當時の大和民族へよし共は韓、唐、印度の影響が著しいとは云へ、それ ても其は容易に推斷され得る事柄である。 事跡に徴しても證する事が出來るのだが、單 根本的な素因を成して居る。そは一々史上の であらればならぬ。即ちたとひ其等の様式に に其藝術化の完全な點だけに依つて考へて見 の吾々なして神經の感に堪へざらしめる最も 奔して、少しも仰いで天日の鮮光な讚美し、 りの園 ラな、けばりくしい、 見られよう。 ほいペンキ途の建物やうすつべらなトタン張 果は樂隊のはやしや自働車の呻き乃至は安つ に開ゆるは機械の響、眼に映るは煤煙の色。 があつた生ツ粹の江戸趣味は次第に減じて耳 あらうかい 俯して地上の新線に慰むの工夫を爲すことが て人々は常に惶々として市井の人事にのみ狂 の心の底が匿し切れないではない 之に反して東京の態らくは何と評す可きで び。其處には成程活動はあらう物質 俠氣と遊味と淡泊とで幾分の取 然し又そこには如何にも薄つペ 浮つ調子な、 *D* 其日暮 斯くし

舊都の味では典麗、崇高、沈靜、純一、永遠の これ等の社寺林苑の間を停廻して淋鈴古鐘の すぐれて居るの差はあるけれども、要するに 之を個別に觀て來ると等しく藝術の都とはい たる美感詩興を催さいるを得ないのである。 於て優り京都は其優麗と巧緻の女性美に於て 吾々と雖もうるさい現實を超越した一種悠々 ひいき拍手梵唄の音を耳にしては詩人ならの 雨のあした月の夕に偉大、優麗さまんくな 奈良の特色は朴質と雄健の男性美に には其間に一質した方則あり、 も鼻先思案である。從つて人心に統一が無く 動搖して居る、何も彼も雑駁である、何も彼 永遠の計を廻らず如き人士はまことに寥 ない。況や宇宙の浩大悠久に想を走せ、 免れがたきさだめとは云ひながら自然の推移 明滅起伏まことに定まりがない。 人から必然に生れて來るのである。何も彼も 謂はゆるせつばつまつた物狂ほしいやうな生 步がある。 活多分といふものは斯うした間に棲息する人 悲しいかな現代の强いられたる反 秩序あり又進 萬物流轉は 人生

是に於て日本を顧みると結核性病症で死亡

然らば何故に日本の若い女が結核で死めの

現象として生ずるのである。 る。戀愛さへすれば結婚と云ふ形式は自然の よつて愛さの男子に嫁ぎ、之れを所天と戴く

されたのを以て見れば達して居なかつたので も切斷することは出來ないのであるが、切斷 絶對境に達して居れば親は大銭を取り出して 親から切斷された形である。若し此の自我の 初の契りはかう云ふ絶對境に達しない途中に のである。此の文面に現はれて居る女子の最 靈的實在である。斯う云ふ間柄を夫婦と云ふ も、假合心中するとも離れることの出來ない れで親を棄て兄弟を棄て家を棄て國を棄て、 體して離婚を爲し、男女交際により新に全我 し之れを消すことの出來ない生命である。そ 解上の人格的戀愛は、四大海の水を以てして それで件の女子は先づ復活して出直さなけれ そして此の白熱的最高調に達した全我的理

ふべき運命者である。〈評論子〉 若い女の死亡率

性質のものでは無いから、結婚も親に相談すな者であつては困る。戀愛は親に相談すべき 干渉されて居るやうな自治的精神のない柔弱 生活に関しては干渉すべきものでは無く、又 あっても天子であっても此の獨立體の内面的 於ける絕對的自由權の活動であるから、親で である。結婚は戀愛であつて、自己の人格に たのは結婚に對する原則を知らなかつたから それから戀愛の途中で親から切斷され 居る。 多かつた。夫れから年々女の方が減つて來て の未だ結核の衰へぬ時には女の方が遙かに いのは伊太利が女の結核死亡多い事である。 あるが各國共に結核性病症が一番多い。結核 核死亡者が女に多く、獨逸も千八百八十年代 今歴史的に見ると英國では五六十年前迄は結 だサリセンは女の方が多い。そして特に著し で斃れるのが各國とも男が多く女が少いが唯 先づ伊國の死亡原因な研究して見ると種々

結婚を實行すると云ふ語は無用になるのであ べき性質のものでは無い。然るに親の强請に するものが殊に明治三十二年以來の統計に著 であり、親に誘拐されて淫を響ぐの徒である。 などは天を欺く者である。極めて偽善の夫婦 於ける事實と日本に於ける此事實と何等か しく女の多いことが願はれて居る。男も多い 係がありさうに思はれる。 が女の方が遙か多いのである。即ち伊太利に

ばならい。最初に現在の虚偽夫婦は之れを解 娼になるから、今度は慎重の態度を取つて行 つ學者の説に從つて各年の死亡敬から妊 度もく、失敗ばかり續けて居れば、淪落の老「除外比較法」なる一方法に依ることし、先 的理解上の人格的戀愛を爲すべきである。幾 ば殆ど常に兩者間の死亡率に差があるが之な 開きと名付ける。開きの原因な考究するに今 為めに死んだものを全然除外して線を引いて 男女の死亡率を表に取り線にて之を現は

核で死わのが多いやうに日本の若い女も結核 總ていはない。現に男の死亡率に線を引いた めて居る重大原因であると云ふ結論を得たの て死ぬものが多く之が即ち死亡率を高からし 致したのであつた。即ち伊太利の若い女が結 んだのな除外して見ても未だ開きが消える。 のとの間に未だ開きがある。次に婦人病で死 のを取除けて見ると始めて雨者の線が大體 最後の伊太利の事質の如く結核で死んだも

見ると、妊娠で死んだもの・多いのは事質で 之れは女の死亡率の高い原因の一ではあるが

されば

私も以前から其人の氣性や人となりな墓つ

て居りましたが、心は決して許しませんで

私も亦其人に切なき心の中を打明けるのが した。其人が私の境遇に大層同情してくれ

「民心をして倦まざらしむる」の途は、いふま 作上、實にゆいしき障害と云はればならない。 事を爲さながつたならば、其は國民元氣の振 統一、表現したるが如きは即ち是である。 が東大寺を建立して當時勃興の民族的活力を る。たとへば奈良朝文華の絕頂たる聖武聖帝 礴せる氣運精力を自由に表現せしめる處にあ 民衆の雑然たる志向に統一を與へて以て其磅 でもなく、時代の漠然たる憧憬に形態を賦し んがために奮って其獨創文明の建設を努める 顧みて我國未曾有の宏謨を成就し給へる明 ふ事は誠に遺憾干萬ではあるまいか。 文明の建設を急がなければならない。蓋し新 眞價正體を評價すると共に今度發展の根源を はぶつり止めにして、そろし、本常に外國の さり求めて、あはたいしき生き方をすること は徒に外國の新奇な人物事件の皮相をのみあ 加減に切上げなければなられと。大正の吾々 こそ私は繰返して云ふ。外的模倣はもういい 根深い自國の生命力に培ひ以て新時代獨特な

可き文物、藝術が今に至つて見當らないとい 治大帝の御代か千載の後に記念し奉るに足る

する事とは共に同一の精神覺悟から出發して ゐるからである。〈柳澤英輔〉 る事と積極的な態度を以て外那の文明な認識 しき眼を開いて今一度篤と自國の過去を顧み

婦人の王國

理解なき結婚の末路

りました。其青年と私とは義理ある間柄な でも致しました。此事がいつか父の耳に入 恥かしながら私は或一青年と二世の契りま

てから私に思ひを寄せて居りましたのです。其の延長が結婚に當るのである。それで質は に對する愛情も兎角缺き勝ちです。すると そのものが結婚であるから、戀愛と結婚とは 其餘りにも無情な仕打ちに今更驚きました した。すると青年は浮世の義理には背かれ ので父は斷じて私達の結婚を許しませんで 並に青年の友人の某といふものがあつて豫 が、驚きは變じて怨みとなり、今は涙を飲 のといって遠く米國へ

旅立って

了びました 心安き日を送つた事はなく、それが爲め夫 んで某家に嫁いでゐるものし、一日として である。これを全我的理解と云ふので、相方 つた愛情の神聖の極に達してから質行すべき してす毫の疑ふ所なきに至り、且つ生溫い愛 人の人格に於て自我と自我とが徹底的に る。そして此の全我的理解の究竟に於ける愛 では無く太陽の如き永遠的に白熱的に燃え上 同一になるのである。つまり戀愛の極致及び 御互の人格に對する全部の理解を指すのであ 理解し合つてから實行すべきものである。兩 結婚は一人の男子と一人の女子とが善くしい 片岡家の如きものです。〈謹覧。迷へる女〉 一共鳴

れません。淺猿しき女と思召さず、よき處置

を御教示下さい。私の家庭は丁度不如歸の

明けて其人と理想の家庭を作りたいと思い 面白味を失ひましたが、いつその事夫に打 を犯して了ひました。それ以來益々家庭の 唯一の慰めでしたが、遂に一夜恐ろしい罪

ます。父も此人となら放してくれるかも知

殼を破る事、これさへ出來れば他はすべてお

く、なよくくとしてねて、少しも體格の立派 し私共に煉らなく思はれるのは、それ等の美 人は美しいが、餘り美し過ぎて如何に弱々し テリナトいローヰチヤ女史

其言葉の偽りでないのを確かめました。只併

のづから解決されると思ひます。〈讀賣。

נל

五千の日本醜業婦

とつての問題はすべて此處にあると思ひます 見ると何だか心もとない様な感じが致されま 此處から出發して、自ら作つてゐる狹苦しい を養はれる事も出來ませう。私は日本婦人に 機會も殖え、氣字も大になり、潑溂たる精神 と考へます。さうすれば自然外國人に接する 男子と同じくもつと語學の素養があつてよい との交際も自由であります。私は婦人方にも に、遠く海外へも發展してゐるし、又外國人 日本の男子方は語學の素養が進んでゐる爲め から外國語を今少し學ばれたい事です。今の のは、英語でも佛語でも露語でも何でもいっ す。それから今一つ日本の婦人方に望みたい 概に悪いとは申されませんが、私共の眼から 歐洲との美人の標準が違ふ所でせうから、一 達であつたりする事です。尤も此處が日本と の人達は大抵美人といふ部類には入れ難い人 またま太つた立派な人があるかと思へば、そ なとか、しつかりしたとか言ふ人がなく、た 賓にある十七月三百二名の藝妓酌婦の花代 が十八名あるのみで他は名稱は酌婦と云ふも すると五十萬留以上に達する。其他齊々哈爾 なり居れる者二百十八名へ哈爾賓六十二、地方 地方百七十三名、抱藝妓酌婦哈爾賓三百二名 賓領事館、涌鹽斯德總領事館、ニコラエフス 二十八萬六千五百二十一留で地方の分を加算 百五十六)に及ぶ所謂醜業婦を全部合算する 酌婦上りで現に露人、支那人、鮮人等の妾と 皆純然たる娼妓である。以上の外是等の藝妓 地方六十七月、樓主の家族哈爾賓六十二名、 の多きに上つてゐる。八某紙掲載 西伯利に於ける日本醜業婦の数は無慮五千人 り領事館等の管下にある者を合算すると北湖 と一千百七十三名に上る。而して昨年中哈爾 地方四百十八名であつて、藝妓は哈爾賓に僅 ある日本人の料理店(妓樓)は哈爾賓十七月、 最近の調査によると哈爾賓總領事館管内に

に歸し、或人は工場の無攝生に歸して論じ、又 ばならのことである。或人は之を教育の過重 が多いか。是れ亦重大な問題で大に研究せれ 頃から結核の犠牲となって居たのであらう。 癆核は即ち肺結核である。日本の女は既に此 つたから癆核が持前の病氣となつたである。

の美徳でよろづ控へ目にし副食物も僅か喰ふ 方が何の家庭でも男より少い。是は日本の女 ではあるまいか。營養の取り方は日本人全體 其他尚は種々擧げて居るが、余が差當つて考 であらう のが上品としてあるのも大に關係があること へて子を育てることになつて居るが是は女に が歐洲の夫に比べて少いが殊に女の營養の取 へるのは男女の營養の取り方の相違に依るの 比べて重大なる任務を持つて居る。即ち子を 戦慄の外はない。殊に日本の女は他國の女に 取つて抵抗力を充實させればならわに、結核 今や開放せられたる日本の女が大に營養を

が之に取削かれる事になる。斯る抵抗力を作 ても吸込むが、感冒に罹り或は氣管支炎にな 結核の場合でも、結核菌は何處にもあり誰れ 力を減損した爲めに起るものとしてあるが、 るには營養の充實と不充實が非常な關係ある つた時とい或は體質が弱くて抵抗力の乏い人 ことで、美食と言っては語弊があるが營養を 近代病理學では病氣は其病因に對する抵抗 其不足分は母の身體を削つて居るのである。 日本の男は女が見を乳育するのは當然だと思 する乳を出すだけの營養を取って居らわから とが夥しい。 思つて居るが、斯る事は他國に無い事で母が つて居り乳も獨りでイクラでも出るものだと 必須程度であるが日本の母は牛乳七合に相當 今乳見な牛乳で育てるとすると一日七合は

てそよとの風にも身を痛め、營養も取らなか 振袖の病なりと」喝破して居る。深窓に育つ たもので現に天明頃かの川柳點に「癆核は大

任務を持つてる居ることも病菌に對する抵抗

言ふ事を聞いてねましたが、來て見て成程と

つても癒り易い。日本の女は深窓に育つて居

充實させる人は之に罹ることが少い。よし罹

聞。二階堂保則談

一本婦人の缺點

力を失はしむる所以の一

でも知れぬ

傅育すること之れである、即ち自ら母乳を與 で斃る、ものが益多くなると云ふに至つては 取つては輕から的負擔で其營養を消耗するこ み思案の方が多い様に思はれます。どうも た日本婦人の印象を申せば、一體に日本の 日本語が自由に話せない爲めに、 私は日本へ参つてから満七年になりますが 日本の婦

めぬとしてある。日本の女は他國に無き重き ございます。 て育てるより託見所に遣つたり或は牛乳で育 てたりする方が遙か安價でもあり又母體を痛 高い金を出して營養を取り、それで乳を出し は美しい國だといふのに關聯して入つて來た らてぬまれせん。日本婦人に關して普く知ら 向が原因をなしてゐるのかとも思いますが、 ゐる所がある様に感ぜられます。かういふ 方は私共と違つて、誠に優しい弱々しく引込 何にも分りません。が只ぼつと私の頭へ映つ 方との直接な交際が出來ないので、詳い事は 今一つ歐羅巴人の頭には日本婦人は美人だと れてゐるのは只ゲイシャといふ言葉文です。 がない。自ら墻を作つてその中に固くなつて 言ふ觀念が入つて居ります。これは多分日本 兎に角歐羅巴には日本婦人の事がまだ餘り知 觀念でせうが、水て見ると實際又美人が多う 羅巴の婦人の樣に勇敢な所がない。 私共も露西亞にゐる時からさう

あるから、

觀櫻に此の技を加へるは頗る宜し

である。

此の種の人々には町内有志の團體も

いことである。けれども藝術は道徳又は法律

範圍を脱することは出來ない。即ち社會の

店の團體

遊藝者の團體、

各種商人番頭手代

あるが、其の多くは藝妓屋待合の團體、銘酒

現象である。 裝を爲すことや歌舞音曲を爲すことは藝術で 如何なる者であるか。其の本來の趣意は觀櫻 る群集は觀櫻の宴を中心として作られた社會 ら觀櫻の宴に移るのである。即ち公園に入れ る。そして此の群集の中心は此れが爲めに自 用して營業を爲さんと欲するも自然の勢であ の結果である。又その教育なき者が觀櫻の宴 じて居る傍人の愚を冷笑するのも、蓋し自然 はその馬鹿々々しい宴會を立見して享樂を感 居る狀態の馬鹿さ加減を見て一笑に附し、又 ある。其の教育ある者は觀櫻の宴に現はれて て、此の公園の地に入り來るは自然の結果で ら第三種の人が觀櫻の宴又は人出を見んとし なる数喜を盡すは極めて美風である。それか 日を送り、 する志である。道徳上より之れを見れば、假 の結果である。又第四種の人が此の群集を利 を立見して

享樂を感じ

隨喜して

居るのも自然 し目的を達せんが爲めに假装を爲し、歌舞音 菓子を食び辨當を開いて其の高尚 酒を飲んで一段の風致を添へんと に乙種の人は多くは無教育者であるから、 然らば此の觀櫻の宴そのものは 徳上許して居ない。個人に對する程度上の飲 らない。それから酒は薬滋又は料理の外は道 舞音曲を盡して遊興を事とするに至る。然る 果は觀櫻の宴を目的とする甲種の人は墮落し するの源であるから、社會道徳上許すことは るから風教上正善なるものな選ばなければな 公園に於て群集の前に之れた演奏するのであ 風教を阻害する者であつてはならない。殊に は卑猥に陥り、淫風蕩々たる有様を呈するの て乙種の人となり、単に宴會な眼目とし、歌 めに酒を飲むことは既に過去の變習であって 出來ない。故に觀櫻の目的に風致を添へる爲 の飲酒は忽ち程度を失して狼藉に走り、歌舞 觀櫻そのものな害して居る譯である。その結 櫻のために何等の雅致を増さないのみならず ふならば、日に是れ藝術の墮落であつて、觀 れば假裝が出來ず、歌舞音曲が出來ないと云 より見ても酒を飲み意識を半ば失つて居なけ 今日に於ては非常なる惡風である。又藝術上 酒を許すと云ふ道徳は歸するところ社會を毒 其 き人間である。元より觀櫻を目的とする知識 三昧を盡して本心を喪失し、 して見たい爲めに、或は怪げなる假装を爲し めである。 氣の中に漂ひながら、恍惚として居たいが為 酒を験り、淫猥なる歌舞音曲を試み、狼藉の 刹那たりとも之れを脱して愉快なる心境に住 なる境遇や不幸なる運命に關する諸の煩悩を があるのでは無い。單に平素の不滿なる不平 が無く、歌舞音曲に對する眞個の藝術的要求 けれども彼等は不幸にして教育なき憐れむべ 興に暮さんとするには彼等の切なる願であ ては無上の樂であり、 ので、偶ま廻り逢つた觀櫻の宴は彼等に取 役され、生活の爲めに身體を束縛されて居る 員の多くは常に繁激なる勞働のために年中使 る。其の團體の幹部は別段であるが、その屬 小僧の團體、各種工場の男工女工の團體であ 泥醉せる男女 此の全日を徹底的に遊 此の歡樂の氛

は近隣を擾亂して傍人と喧嘩抗論を爲し、或を諮ひ猥褻の行爲を爲して群集を笑はせ、或女を見た。其の男子の方は酩酊して卑猥の歌好を見た。其の男子の方は酩酊して卑猥の歌評論子は此等の中に於て泥醉せる無數の男



見たる觀櫻 風教上より

にも許多の悲觀すべき社會現象な實見した。 の数を盡さんとする群集心裡の中に於て遺憾 て歩いたが、幾萬の市民が集まり、花下一日 なる人出であつた。評論子は各所の公園を見 を許し、萬づ寬大を以て臨んだので、近年稀 景氣であった所へ、行政上に於ては假裝行列 都下各所の公園には花見が行はれ、觀櫻の宴 の公園の觀櫻に現はれて居た社會現象に就い 評論子は評論子一流の道徳的觀察により、此 てい弦に風教上より聊い批評を加へて見よう 去る四月中旬の東京は櫻花爛漫の期節で、

が催された。殊に經濟界は輸出超過で空前の 二は有教育者であり、三は兒童である。而し て更に此の公園に足を入れた目的によつて四 育上より三種に分ける。一は無教育者であり、教育者もあり、無教育者もあり、又無數の子 人出を見んとする者、四は營業又は其他の業 觀櫻の宴か目的とする者、三は觀櫻の宴又は 種に分ける。一は觀機を目的とする者、二は 境内を散步して其の儘歸る者もあり、花下に 感ぜんとする徒である。此の種の人々は單に は眞に花を愛し、自然の美に觸れ、其の妙を 務の爲めに入る者である。而して第一種の人 一遊を敷いて茶菓辨當を喫して中日を費して 歸る者もある。その人員は極めて少數である 評論子は先づ此の公園に集まつた群集を教

も無く、觀櫻の宴が目的でも無く、又此等の の最大多數を占めて居る。此の種の人には有 種の人の目的を達せんが爲めに更に宴會を開 人出を觀ることが目的でも無く、唯だ自己の 供を含んで居る。第四種の人は觀櫻が目的で 且つ歌舞音曲に關する藝術的目的なく、 は第一種の目的なしに、単に宴會を目的とし 小宴或は大宴を開くのである。そして乙の方 二種の人は甲乙二種ある。その甲の方は第 業務の上から來て居る人々であつて、極めて 的では無く、單に觀櫻の宴又は人出を見んと は數に於て中々多い。第三種の人は觀櫻が目 遊興を目的とするのである。この第二種の人 少數である。有教育者もあり無教育者もある する好奇心によつて集まる者であつて、群集 歌舞音曲の方法に依るので、 花下數差に

觀 櫻 0 宴

何れも有教育者の階級と見て大誤がない。第 て居る。殊に家族な引率して此の花の下に一 を目的として公園に入るは最も其の眞相を得 は容易に想像される。先づ第一種の人が觀機 の人々が風敬上善美なる行為に出でて居る 令, 此の群集の行為を見るに、何れの種類

公園に集まる群集の目的

ス 11 ス 君によりて

與へられたる教訓

る。スミス君の飛行振並に平素の心懸は單り なすにいたれる彼の平素の修養信仰態度に就 飛行界に絶大の教訓を與へたのみならず、我 て流石に偶然でないと益々感服した次第であ い。あれだけの大膽なる飛行巧妙なる飛行を 行や暴風飛行に敬服し、惚々としたのではな まつた。然し私は単に彼の痛快なる宙返り飛 つた、敬服どころの調子でなく惚々としてし 一般殊に青年者流に深甚なる教訓を垂れた ミス君の飛行振りには全く敬服してしま

きものは恐怖躊躇である。恐怖躇躊を起すは 飛行のみならず總ての事業遂行に最も忌むべ は此言を聞いて實に是有る哉と思つた、單に ある、信念信仰が足らないからであると、私 恐怖である、恐怖の起るは自信がないからで スミス君は云つた、飛行に最も忌むべきは

とどしく、やつてのけられた事がある。私は 其言をスミス君によりて充分に理解する事が しい事に出會ふと「何、大膽の中に妙法あり」 ヤンピョンにもボートレースの選手にも此 來ない筈である。石井十次氏はよく何か六數 信力あらずんば斯の如き巧妙を持來す事は出 通晓すと雖も結局其れに加ふるに大膽なる自 械の研究者創造者である、然し如何に機械に の彼の口より此言の發せられたるを感ぜずに は居られない、飛行のみの準備ではない、此

此自信は研究等によりて得られたる自信より は決して墜落して慘死する様な事はない」と、常にもてると云ふ評判や、何處かの宴會の 事をした事がない故に神は私を殺さない、私 が。『私は人に迷惑なかけたり、又曾て惡るい 故に益々面白い、如何にも無邪氣の言である 出來た。 も遙かに大なる力强い自信である、古來の偉 然から彼の自信たるや極めて宗教的なるが のために喧嘩をしたとかと云ふ如き三面種の と思ふのは、神樂坂の待合では飛行將校が 會はスミス君の言を充分に味は、ればなるま い、殊に専門の飛行家に大に反省を促したい に飲むそうである。斯くの如き日本の運動社 は少しもてるので女に溺れ、又ある大學のポ 意がなければならむ、然るにある大學の選手 業の大成にも真理である。ペースポールのチ 眞理は總ての運動競技にも眞理である、又事 ートレースの會では其れなよい機にして盛ん

上に積まれなければならめ、彼は細密なる機 からである。勿論自信自覺は充分なる研究の 自信がないからである、確固たる信念がない 來ない」と實に至言ではないか、私は二十盛 云ふ場合に細密なる腦の働きな呼起す事が出 人大業をなすに當り皆斯くの如き信念を有し 酒禁煙克己の準備をするにあらずんばいざと なる飛行の行はれるものと信ずるのである。 の無邪氣なる信念あるが故に斯くの如き大膽 みず、是程强い自信が又とあらうか、私は彼 たものである、神は我を助け賜ふ、天己れに與 スミス君は云つた『平素の品行を慎み、禁 **艷話は度々耳にする所である、私は其等の人** に少しスミス君の態度を學むでもらいたい。 「總て勝つ事は堪へ忍ぶなり」、私はスミス君 是は飛行將校にのみ呈すべき苦言ではない民 ようと思ふなど軍人氣質墜落の骨頂である。 るからとて單なる虚禁心のため飛行を敢てし 底望まれる答のものでない、少し社會でもて 間飛行家に殊にそうである。少しも物になり 絶えない間は決してスミスに似たる飛行は かけて居るある民間飛行家のカフェー通いや

可憐なる彼等の境遇

少しも男子と異なる所が無いが、日本女子の 熟睡して居る者も居た。女子の方も此の點は ない様に見えるのである。 習慣として、ついましくしとやかに訓育され は地上に仆れて嘔吐を爲し放尿を發し、 り、鼠酔したま、莚の上に大の字になつて寝 の中に猥褻な歌舞を爲し、 歸るので、一見すれば男子よりも一層だらし 其の本心を失へば男子と同様に原始的狀態に は男子に比して謙遜でありながら、酩酊して て來たので、如何に無教育の女子と雖も平素 て居る女もあり、氣分の惡しさに其の邊を牛 仆れ寢小便をして脊中まで濡れて居る女もあ 猥褻の行爲を爲す者は其の大牛を占めて得た 中には半裸體になって飛び出して泥土に 評論子が見た女子 又は男子に對して 其儘

此等の泥醉者を取園んで見物して居る群集

られて居ない。故に飲酒の弊害を知らない。 居るので、此の花下一日の宴を極樂浄土とし は彼等泥醉者の行為を目前に見て落淚せざる 者もあり、飲酒の害な歎き無教育な罵り人格 物珍らしく見て居る者もあり、冷笑して去る には、之れな獺次り立て、頭ずる者もあり、 育ある常人の目より見れば、彼等の行為に於 賣婦藝妓の如きは殊にさうである。 て樂しまんとする衷心の現れである。殊に小 る男女である。平素奴隷の如き生活な爲して を得なかつた。彼等の多くは勞働階級に屬す を侮蔑して居る者もあつた。けれども評論子 である。これを幸福なる社會的境遇にある教 淫猥なる歌舞音曲は彼等が日常の行為である 教育等である。社會から完全なる教育を與 僧の如き工女の如き、料理屋銘酒屋の女中淫 等が平素苦境に沈淪して居るかな證明する者 享樂を一時に食らんとするは、寧ろ如何に彼 一年に唯だ一回ある此の花の宴に會して其の 彼等は無

無上の光祭と爲し、歡樂の極と見て居る。評 之れを爲すことが大なる苦痛を生ずるのであ 鯣を齧り、 る境遇と其の無知とに對して、 論子は此等の光景を目撃して、 る。然るに彼等勞働階級の男女はこれな以て 馬鹿騒ぎすることは聊も樂しくなく、却つて の情に堪えなかった。 酒を飲み、淫猥なる歌舞を爲し、 彼等の不幸な

社會教育の必

観櫻が目的でも無く、單に公園の地上に於て て少しも樂しい性質を見出し得ないのである となつて作為する現象である。その結果とし 集の押し寄せる所であるが、無教育者が中心 り取締るべき何等の權能と理由を有して居な 前に此の飲酒と猥褻とを示されて、其の學校 園の二大産物であり、而かも白日公然の官許 飲酒と猥褻とは此の觀機期に於ける我國の公 て社會教育上に幾多の弊害を生ずる。其の大 得ない者である。〈評論子〉 此等の愚民が花の宴を催すことを、行政上よ 教育が破壊蹂躙される。政府は民衆の反映で である。而して此所に集まる無數の兒童は目 なる者は實に社會風紀の危害である。就中、 人格を侮蔑しこれを罵り葉てるは經世の真を とは實に現下緊急の要務である。單に ある。此等の愚民によつて作られたる政府は 勞働階級に屬する男女の智徳を向上させるこ い。識者階級の人は先づ社會教育に留意して 之を要するに觀櫻期に於ける公園は社會群

を紐で結ばれて居た女もあつた。女子の事で 裸體で轉がり歩く女もあり、附添の者に兩足

歸り路では荷車で轉ばれ、人力車で送られる

者も少なくなかった。

け、或は引き裂き、少しも惜しげなく唯だ無 來たのであるが、或は酒を掛け、或は泥を附 あれば僅かの賃錢を貯へて晴の着物を召して

上に愉快らしく嬉々として樂んて居た。其の

ŦIJ 和 介

實業之世界社發行

文明を勃興したのが我明治文明の特徴であつ 輸入するに至つて畫龍點睛の域に達し、一大 會は日本固有の文明に支那印度の文明を融合 澤諭吉氏は明治大正の日本社會に於ける一偉 となる若干の個人の理想及事業に胚胎する。 せしめたのであったが、之れに泰西の文明を 人であり、一大賢人であつた。蓋し我國の社 は賢人と謂ふのである。此意味に於て我が福 して其人は勿論無數の民衆であるが、 業とは人に依つて爲されないものは無い。而 理想と事業とは必ず其中心核となり導火線 の若干の個人を指して吾々は之れを偉人又 何なる時代に於ても、其社會の理想と事 此民衆 著者の此標語を頗る眞相を得たものとする。 大正の文明を解する方法のない者であるから と能はず、明治の文明を解すると能はずして れの理想と併せて彼れの事業を一一知らざる 著者は先づ「福澤に還れ」と題し、吾々の生活 人は福澤氏を知らずして明治の文明を解する 者は此處に入るべからず」と標語を掲げた。吾 の門楣にプレトーの心を以て「福澤を――彼 殊の意義を有する一の方便であると考へなけ 等の幸福を助長することに大なる、そして特 序言して本書を公にした。登頭第一章に於て ればならの理由が十分にあるからである」と ることは確かに我が同胞の聰明を啓發し、彼 澤氏を發見し且つ紹介せればならめ。さうす 義務を負ふ者の一人としてこしに新に真の福 と爲し、「私は我が國の文明な繼承し發達する 期に際して居る。著者王堂氏は豫て之を遺憾 義に化し、玆に此一大恩人な忘れんとするの 革的性格を具有して居たことが王堂氏の此解 の此評言は極めて正鵠を得たものである。 我が新文明を産出したる哲學者の第一人と稱 的なること、した。著者は福澤氏が此の三箇 なること、(二)作用的なること、(三)進化論 は、「福澤の見方の特徴」と題し、へ一つ實驗的 種の見方によつて夙に氏の哲學觀が集大成 る近世學者の通法であれば、今王堂氏が此三 意し、地理歴史の觀念によつて作用的に進化 書の眼目であると言つて居る。思ふに王堂氏 し、此等の分解に向つて敘述を試みるのが本 剖によつて一目瞭然にされた。第三章に於て 十年以前に於て我が福澤諭吉氏が既に此三種 れて居るは申迄もない事であるが、今より四 論的に講究して來た者である。これは真摯な あり、實驗を重んじ、個人の生活の境遇に留 者は爾來倫理學な修むるに於て常に經驗的で の生活の見方な驚歎して、天才の卓越と為し

n 改革者は、質に此の大偉人福澤諭吉であつた。 然るに今や我社會は漸く泰西文明の皮相に馴 人物となり警鐘を臥打して民衆の覺醒を促が 唯物主義、 其の智徳を啓發せしめて素公に擢んでた 肉慾主義、 形式主義、 折衷主 氏が理想家として且つ事業家として天禀の改 能く福澤氏の性格を捉へた者であつて、福澤 く懐疑、〇三一新らしきものな求める好奇心、 (一)格式制度に對する反感、(二)現實感に基 (四)獨立の精神、(五)反情操主義としたのは して措かざる所である。四章以下は福澤氏の 斯人を世に紹介せんと企てた事は記者の同感 此三筒の見方によつて福澤氏を理解し、 に驚歎せざるを得ないものである。王堂氏が とは、彼れの著述を通じて者記が王堂氏と共

た。而して此泰西文明の移植に於て常に中心

第二章に於ては彼れは福澤氏の性格を敘し、

の生活觀察法を天才的に直觀應用して居たこ

よりて與へられたる、聖き信念と、大膽なる いて實に敬服して居るのである、スミス君に が毎日宗教的の素養を怠らないと云ふ事を聞 思ひ升。 劇として私共の注目して謹む價のあるものと た。來月號には第二幕が出る答、現代的宗教

風飛行は實に此二名言を裏書したものである 「大膽の中に妙法あり、總て勝つ事は堪え忍 「大膽の中に妙法あり、總て勝つ事は堪え忍 「大膽の中に妙法あり、總て勝つ事は堪え忍 がなり『スミス君の痛快なる宙返り飛行や暴 がなり』、スミス君の痛快なる宙返り飛行や暴

(星島生)

編輯だより

□本號は感想に類するものが比較的多く集り □マクベスました。寄稿を約された方の中で、來月に延 □悲哀よりはされた方もあります。來月號には阿部大郎 行成も一篇を寄せちるべく、その他沖野氏の「生 □金魚のう氏も一篇を寄せちるべく、その他沖野氏の「生 □金魚のうりなりである。

なる「愛の切れはし」な本號より課載されまし

口鈴木芳松氏はゴルスチシーの最近の一傑作

のが敷篇あり、

寄稿者諸者には深く陳謝して

口か様なわけで本號には載せ切れなかったも

□「婦人の王國」は屢々好評をうけ且質問相談 等を寄せられる方も少くありません。評論子 等を寄せられる方も少くありません。評論子 にが、之も次號に譲ること、しました。 口尚左の出版物は本號にて紹介申す筈の處是 又餘自なきため次號に譲りました。 又餘自なきため次號に譲りました。

□ 計理學 速水滉著 岩波書店餐行 □神人論 關竹三郎譯 洛陽堂發行□ 平介ベス 坪内逍遙譯 早大出版部發行□ マクベス 坪内逍遙譯 早大出版部發行

□ 学働運動の哲學 大杉榮著 東雲堂餐行 □ 金魚のうろふ 上司小劍著 東雲堂餐行

Ti.

| 本誌の原稿、質問、新刊書批

購讀、交換、圖書取次、廣告東京市外巢鴨一四七○相原方東京市外巢鴨一四七○相原方東京市外巣鴨一四七○相原方東京市外巣鴨一四七○相原方

に關しては

東京市芝區三田四國町二

にて御送附又は御通信被下度 六合雜誌社營業部宛

候

傳 訊

1=

よ

6

歷

史 批 評 0

立

場

t

4)

基

督

to

說

明

彼

te 0

宗教

を

現

化

0

識

紹

介

せ

B

0)

我

等

0)

基

督

罄見

は

此

書

1-

よ

4)

闡 川 七

6

11

陸

版

HI 軍 哲 大 再 學 彩 一教授 氏著

Fragments

定

價 秘

金

#

金 金

陸 田 軍 哲 瓜氏著

大 第 學教授 版

税英税價 祝金四錢稅金二錢

佐關 西 氏著

1

郵假

稅 仓 [14] 計

錢 錢

神田佐 郎氏

郵 金 --金曼 金曼

高

並

良

氏

著



郵價ス現百ポ 金 錢錢付り 頁本

番三〇〇〇一京東替振 番 五 五 八 五 芝 話 電 **加拉维合人** 區芝市京東 **所**賣

(後附

思索したものであつて、頗る肯綮を得て居る。 非ず成就せん爲なり」と揚言した、然し彼れ に來れりと意ふ勿れ。われ來りて之を廢るに 最も敬虔に富む結論を附した。王堂氏は『青 みて居る。何れも如上の三箇の見方によつて 論、教育論、學者論に亘つて詳細な批判を試 國に入るに非ず、唯だこれに入る者は我天に に日く、我を召て主る主よと日ふもの盡く天 葉する者でなければなられ」と説き、更に「經 繼者は必然に志向に於ては其れを繼承しなが に依つて或る事業、教理、乃至學説の真の後 出來るのである、彼れは彼れの卓越した模節 つて、始めて彼等の真の後繼者となることが 法と豫言者との假りの破壞者となることに依 ないものはない」と説きっ斯くして基督は律 つとして律法と像言者との變更若くは廢棄で れり」と語つて居るが如く、彼れの云爲は一 れ、泰平を出さんとに非ず刀を出さん爲に來 年改革者基督は「われ律法と豫言者を廢る爲 地に泰平を來さん為に我來れりと意ふなか 代の事業を通觀するに彼れ自らも何處にか 著者は最後に「福澤の後繼者は誰ぞ」と題し 外形に於ては其れな變更し又は其れな破 出發點、文明論、智德論政治論、產業 に理會されて居ないことな痛論し、國民は福 なる所以を説き、啓蒙運動の意味が我が國人 と爲して居る。更に王堂氏は啓蒙運動の必要 と稱讚する者が、彼れの真の後繼者ではない の通りである、徒に福澤諭吉氏を偉人である 在す父の旨に遵ふ者のみなり」と、如何にも其 に大なる關係を有する活ける哲學書であり又 に於て彼の精神な證明して居る。本書は坊間 氏が活きたる哲學者として又憂國の士として なければなられと言つて擱筆して居る。王堂 錢)——一條生 に薦めて愛讃を乞はんとする。八價、一、二〇 文明史であるから、記者は之れを大方の諸 の一哲學書と異り、日本全國民の實生活の上 度を以て民衆を導かんとして居るかは、 我が同胞の實生の爲めに如何に眞面目なる態 澤氏の遺業を繼いで悉く彼れの後繼者となら

每 目 月 情義夏 商 顋 由 龍 仰 賣 繁 は لح 0 昌 凡 呼 義 長涂 ば 0) な 斯 本 東 n 和 3 國 < 7 男 鍅 あ HIE 其 (1) 0 同趣 高話 村村 藤た 松 物 石 倉 村山田村藤 信 市 村 III 死 足 孫 左 鬼 介高看石洲 华入 峽 兵 衞 衞 門 石吉雨文書 フド 右 山生 堂 部 拾 0 話は 修 情 得 談教 告談教 棄 ナ す 錢 蒼 勝 3 1 船 3 東 手 0 0 爲 道 朝 第 海 如年年 學吹 國 鮮 1-な 道 寸 巴 な圓 話 民 6 0 二九 な 4 五 的 錢錢 h 0 子 錢錢 15 税 本大仰 足 藤 £ 福の 野 足 福 西 共 111 島 DE 共 安 復 遠 周 堂 於 F

所務事會道

四谷中市東戶三七澁外京戶

(後附三)

番六二九五二京東替振 番七六七一芝話電

禮拜 説教 午每 前日 十曜 時目 (當擔) 並 良

午료 七躍 時日 諸

傳道講演

家

十五分日 並

良

基督教哲學

午每前

九日時

靈

交

午旬

後木

七曜

時日

る質疑等有りて頗る有意義の會合也

馬可傳を講ず、獨會員諸君の信仰告白、

並 良

宇宙、人生等に對す

家

」どの集 御聽きになることが出來ますか 五歳以上の少年男女の入學を歡迎す りにも又、どなたでも自由に御

滿

1曜學校

前日

九曜

時日

諸

出席

す。

御遠慮なく

御來會下さい。歡迎いたしま

芝區三田四國 町芝園橋際

五八五五番

基督教

禮 **拜**說教 〈毎日曜日、 午前十 睫

内ヶ崎作三郎、安部磯雄 田東助、相原一郎の機雄、岸本能武太。 介等变品

組 會

信仰に對する疑義を糺し大に共進互琢 各會員宅を巡回して開き會員相互 げんとするものなり 一の親陸 0 野な を計

本 織 鄉 基く團體 小石 會は昨年六月成立し 仰 せら を 宣傳 川牛込等都下北部の れ自由基督教の立場 な 9 せ ん とする高 同感の士 主として 潔 人士 よ 來 13 9 會 3 刑 友情 t 包 49 田

神 田錦町三丁目女子 音樂學校內 To the second

祭年百三

版 出 念 記

高徹足(研(物) も纒記確ての本劇權底る)究)の一唱り述な此鴻書詩 威せべ年歴史關含ふたしる書業の たるさ表史料係蓄るるま知はを著シ る此な等化に一多を研た識少記者は書りはと現四き得究批をし念は 論が最熟彼は一語べと判根もせるを現もれのれ作句しもし紙淺んの 佐代新も引た劇の一調たと薄が文 たにし本用るに抄一ふれななた豪 9書文シ現出 べばしるめの が知ののではと其く確と衛此偉るない。 。職早年代を別小し収納別人三を越澤クたの一彼て生の的著な百年根世及スる解っれを生命を入る年 本幹るびだり、生のを多くない。 イ幹るびだり、生態ない。 クと特計での人が、また別に格文 の変っ作をしと文 ピてと写性格彼梗のス劇須たもや ア著し一行との概百ピとひるのに 研作で研工を作及科アをずな永浩 究し誇究への物び辭全精最り久詣 のたる書其宗と批典體細も而不保 最るに目の教人評とのに正し滅き

容内の書本

(刊新最)



係肖ブイタロコ給口

入挿臺舞劇悲

文科大學講師大學

文學士

新

勇

(医金爾人定價壹圓五拾

五拾錢及幾

底

不

3

本

壹

册

ケ

月

金

須

錢

稅

御料

び

所

to

書 御

一郷州な要します。

献

社營業部

話芝五八五

五番

御

借

を

3

は 要

必 す 社

宛

定 誌

> 冊 ##

15

年 年

前金寬圓

貳拾 (清

錢 錢

郵 郵 郵

稅

半

5

前

金壹圓

拾 拾

五.

稅

共 錢

價

特別外

出郵

版稅

號 は

0

際 册 分 分 分

は 12

定以外の 金

代金を申受

規付

錢

一國を除

等

表

紙

四

面

頁

拾

金拾貳 金質

ば 1-御 合替 す か 京 御拂 쏤 價 律 は は 東 込 미 か 發 戏安 御 3 京 添 涘 0 3 全 9 な 振 75 D な 3 5

> 普 普 特

通 通

半

H 頁

金

圓 圓 圓

は 廣

特

别 御

制 幽

引

可 上

仕:

候

申

候 六

日

發

15

田四國印二

輝

男

野

大大 正正 料告廣誌本 五五年年 本錢拾貳 五四 月月廿八 表紙 白發行 以四 發行 上面 即 連 13 兼編輯 續 刷 刷 揭頁 每 D 月 人 所 T 0 際 0

三田四國町

發

行

所

統

基督教

道

が市芝區三田四極町ニノ 東洋印刷株式

會

社

1 計 (後附四)

蕊 雜 令 六

號想感綠新







THE RIKUGO-ZASSHI

No. 425 June 1916

CONTENTS

Progress of Life and Death Prof. M. Minami.	2
Saccession of Regenerations	9
Place of Jesus Christ in the Religious Experience	
	16
To his Master from Young Renantrans. by Prof. A. Naito.	24
Music of LifeK. Miura.	33
At the Risk of LifeRev. I. Okino.	42
See the New VisionProf. K. Sato.	47
Sorrow of the Early SummerW. N.	53
PoemR. Suzuki.	57
CuckooT. Kagawa.	61
The True Way of LifeS. Nishibuchi.	68
A Letter from AmericaS. Takahashi.	75
A Bit o'Love (Galsworthy)trans. by Y. Suzuki.	89
Debendranath TagoreG. Yoshida.	105
My Soul and I (English)	
Kingdom of Woman.	

Topics of the Day. New Books.

Published Monthly by the

TÖITSU KRISTKYÖ KÖDÖKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

祭

墒

0

0

0

あ

る。

常

111:

0)

下

界

V)

なら

V2

霞

(1)

斞

霧

0)

か

な

12

0

JE:

淨

7

Ŧ

國

Z

慕

15

(0)

Ź

ili

岳

巡

禮

老

敬

廖

拉

旅

 Π

記

大

自

然

12 捧

3

心

713

6

0)

爱

0)

書

こそ

質に

2

0)

文

集

0

南

る

高

雅

13

1

前

铝

か

3

n

72

3

香

4

著

0)

柔

3

筀

致

は

T.

0)

1

<

知

3

所

加

太

る

11

水

を仰

慕

7

文

か

殊

12

Ш

压

は

著者にとつ

7

莊

嚴

雄

Ł

儘

美

麗

V)

H.

備

L

72

3

Th

E

カジ

É

6

狹

め

72

埃

0

巷

8

游

Ut

7

著者

は

當

12

創

造

3

n

72

る

女

0

廣

4

カコ

な

生

10

W

自

伙

0) 交

威權一の中交所紀

ili

岳

命

所

驗

0)

書

11

得

易

カコ 6

42

珍

111

清

雅

亚

12

縊

H

ず

0

Ш

日梅容內

秋雪霧廳 原 4:11 TER 國 0 榛 溪 箱石 名山 根峠 Пı

 小 碓 自息 氷 根 カ> 国 6 佛 Œ 0 11/1) 富 義 十時 h

越武木日 曾 光 737 0 藏の 37. 御筋 山櫸嶽路旅

加大八赤那 賀 東 须 ガ城 自 0 H ılı 等記線山煙

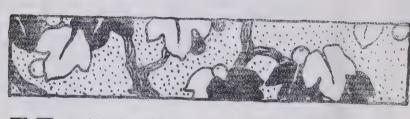
別 Z 先

六 411 \equiv t 頁

管 郵 價 稅 金 員

压。 (ii) 师。 枚●

橋京京東町 張 尾 兌發 店書社醒警 京東替振



デ老愛 の濱邊会 J` 語 11 氏 時 嬬 の哲理 教界寸觀 to 迎 0 王 (ゴールスワーシイ 師 國 友 與 間 2 3 書 オブ· アー 或 市 手坪帆一 坪 足 田 塚田 111 條 田 木 澤橋 理碧絃 房 讓 治郎樓郎 雄吾 治 松 四三頁 五二頁 七四頁 〇五頁 一三頁 一一頁 八九頁 七

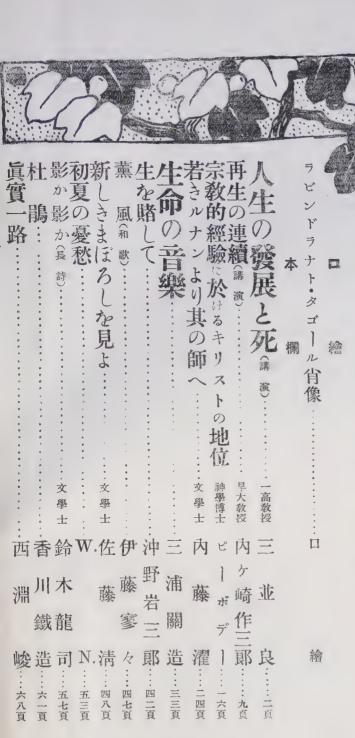
五頁

新

Fij

輯 ナご

> 7 (1)



第三十六年六月

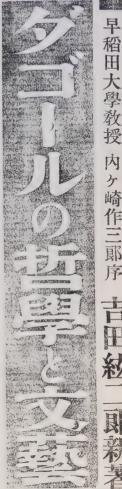


Rabindranath Tagore

間 折 京京 雄 高帝 著 等國 師大 レンケイ思想 節學 那 一校助 哲 教教 授授 史 の宣 髇 Ħ 郵金 积九 八十 绿鞭 经转 吉 佃 H # 紗 滿 ル郎 著 べたのあて述此述大会 か*繙何るしせ書せ事 らき物機且るはるは てた多つも如も儒 **著る有附の上の教園 のたのるし見り目**夏** 園知研にて解と的か 熱ら究索冠にはか せんを引す ると以及るり者 講欲て之に

其器ムト中る大オ の文事ラ的べ哲イ 首年を一にか人ケ た解得詩批らタン るの。一判ザゴベ ベ解蓄園し本し し設し丁紹書ルグ 近をタニ 介はに 來拔ゴ新し實よ のんり目たにもに 好じルーる彼てよ 著で研をもの除り な能究もの神求で b 〈書加 °幽善創 タ中へ更な提造 ゴのたにるの譽 1 權れ研哲究醒 。ル蔵は密學音の をた此資と裡第 本るの料純し 邦ケー! 眞法先 に失書しの悦に 知は以て文光入 らずて戯藝耀り 。タ曲とのた め東ゴ電崇生る で朝ル室のと思 た朝かの正生哲想本美製上判六四 る日の王生哲想本美製上判六四 も新全王活理界 冊 壹 全 の聞體型ととは本日と野など印 書く如便系發度を生實局統見大

切賣々亦版五



金價正 錢八世圓章

錢八金稅郵

六紙 百數 頁約

宁發館同大 田神市京東

以硬に二的せ詩

ての鎖チ藤ざ聖

郵美菊

骨製

すと大平創

聞必苟接要明寸織

かずもの旨断る的

ざ此儒閥をに所に

る書教係以議°敍

郵金 郵正

税九 税價

錢錢 錢圓

八十

をば °密學易唱組 税 本 判

誌 雜 合 六



號月六



年 柏 傍 ・々人不」同。』など、云つて、世の無常をしみとくと感じて居るのである。 推力 こと美人の装を疑らした人達に戯れて、愉快に遊んで居るやうであるが、同じ詩人も忽ち『已見松 | 為し薪。更聞桑田變成し海。』とか又『古人無」復洛城東。今人還對洛花風。 年々歲 々花相似。蕨々

を摑 n る」と云ふ確 不安の念に襲はれるのである。 斯ら云ム譯で吞氣に美人を擁し、酒を飲んで戲けて居る者でも、花散り、落葉つる夕に T 體、人の生命。人間 业 その めて止まず、 要 カゴ 美を感ずることも出來ないであらう。之を以て人間はどうしても永世 あ 乎不拔の る。 卽 流轉の世界に生きつゝ、變化なき世界を憧憬 ち 信念が 眞 の靈魂は如何らなるものか。 に生命 H 來 故に吾々は根本的の考を立てゝ、何んな事 0 丸 充 は なら 實 カゴ 無 Va カン つた 流轉 なら、 極 是れ大なる疑問である。 まる世 花を見、 界に在 月空 7 して居るのであ 眺 m かが めても真 8 有るも、『 確 實に靈魂不滅に就ては 12 る。 への喜 3 吾が 窮 根 決 は、 心 本 6 して 的 は之であ ŭ 6) 得ら 3 0

色々に考へられたのであるが、 余は此處には唯だ其の一方面よりの考を述べて見よう。

3

多段。 獨り彼の世に出立たしむるに忍びず、來世に迄も同伴せんとする溫情より起つたもので、忠臣は君の 國にも、 6 あ 魂 不 盛 カン 滅 乃木大將は、 んに行はれた。 のことを考ふる時は、 殉 死は古いく昔から行はれた事である。 先帝 殉死の意義は自分の尊敬 に殉死せられた。 必ず來世の 私 問 ば不 題 力ジ 起 して居る君、親しむ友。愛すべき家族 幸にして乃木將 る。 日本ば m して此 かりではなく、支那 軍 0 カジ 來 來世 が世の 圣 考は 如 何 £ 12 1/3 にも、 解され より あ 其 た 者等を、 9 他 72 カン の國 龙 知



並

良

5 に人の情である。然しながら唯だ花に戲れ、 れな 或 7 今日邊りは都大路にも最も人 > は 春愈々闌にして、所謂花 此の V 飛鳥山に 之れは甚だ疑問である。 堂 到る 12 集り、 所櫻花咲き聞れて居る。人は花に狂ひ春の香に醉うて居る。 書 深くし、物を考へんとするのは何故であらうか。花を愛し春に親しむの から花は吉野と云 は紅紅、 出 0 多 柳は緑と云ム好時節になつた。 S ムが 時で、 春の香に醉うて、 般より見ると今では、 人の最も花に浮か それで果して人生の意義が分るであら n る時 是に於て人も自然の 櫻は東京 である。 此の時に當り、吾等は花を棄 より 或 多い は 墨 處は 美に 堤 に或 () な は、 こが 13 V 向 力> 自然 n. 4 2

17 無情 面 17 に嵐の 此 を感 0 大 ぜし 吹か なる められ 72 天 76 地 0 るも 0 かはと、云ふことも 流轉 0) 12 6 尚 對 る。 して、 如 驚異 何 12 あつて、 世を否 0 服 を呼らざるを得ないのである。 浮かれ居る人の心に 氣 12 如 何 に社 會 に享樂しつ 18 さす > カゴ に天 浮 かれ 地 自 在ふ人も、 然の變化

居ることが明かに分る。例へば『此日遠遊遊』美女。此時歌舞入』娼家。娼家美女鬱金香。飛去飛來公子 被 0 唐詩 選などを繙 V て見ても。 面には浮かれ狂ふやうであるが、他面には不安の念に襲はれて る。

と云 1 間 は 居 は 其 たのの 我 以 ームの 前 カゴ つであ である。 1 儘勝手なことをなし、 らり受 る。 **沈** 如斯 傳 を勸 によると、 來世に於ては、 められて居 そして死 彼の君士但丁大帝はその死の直ぐ前、 たが 現世の罪惡を忽ち雪げるものであると考へたのであつた。これ 死 VQ. に際に非らざれば必要なしと云つて居た。 時に洗禮を受けさへすれば、 即ち三三七年に受洗をした。 極樂淨土へ行けるものと考へ 即ち生きて居 3

ds

。亦來世

0

信

仰で

あ

る。

這 醉 水 0 あ ると信じられ 生夢 間 基 なれる。 入つて火 ると考 題 否督 死すれば、 一致でも來世 17 答 人間になった 5 を以て清められるのである。 へる ñ 7 爲 居 7 に就て 死して草となり木となる。 め、 居 る。 た 之は 0 力 てもの F." 0 は色々考 ij あ 猶 ッツ は菩薩にもなれ 太 る。 7 教 然らば へられ 教 より では煉獄と云ふ教義 出 復活の思想は、猶太に起り、 た て居た。一 餘り善人でもな 所 草や木でも善事を爲さば、 るのであ 0 死 人の 度天 る。 復活 S 12 が出來た。 カゴ 喇 と云ふことであつて、 叭 餘 カゴ り惡人でもない者 鳴 卽ちさう云ふ人は、煉 り響けば、 佛教 馬や牛にもなる、 12 は輪 死 んだ 廻 此 一の説 は 0) 如 時 人は 何 來 なる 更に 即ち 獄 世 皆な蘇 0 0 火 人 人 栽 間 中 間 判 生 12 此 カジ 10 カジ

5

間 0 觀 併 U) 思 念 4 基 想であ 唇 無 敘 いと思 る。 には 否な基督教にはそれよりももつとしく偉 30 來 世 若し (A) 思 想 あつたとしても、 には在 るが、 輪廻 それ は 無 は基督 So 上 教 12 0 い、高 云つたやうな應 大精 S. 神 から出 立派な精神的の大なるも たも 報 思 0) 想 ではな 0 為 的 Vo 12 生ず 17 る來 0 5 な人 あ 世

つて居 に往往 孝子 くと云 る。 は親 V n 2 だる其 0 カン らに 爲 め、 は、 後 妻は 25 來世 至 6 夫 其 0 カゴ 南 弊に 爲 めに ると云ふ確 挑 殉 ず、 死し に實な信 た。 埴 一輪を作 即ち 仰が 未 つて之に 來に迄 なくては 代 も忠孝 へた ならぬことで 0 を盡さんとする である。 あ る。 彼 0 世 思 12 カゴ 根 まで 本 にな

事を爲した者は、 處 3 吾等 さらすると本堂に地獄極樂の 1 あ は 去る つたやうである。 四 月八日、 血の池 日比谷 針の山 吾々も以前 に釋迦の ~ 繪が掛けて 逐ひ上げられる有様 小供 誕生會 いの折 あつて、 12 か 催されたことを耳にした。此の 四月八日には老嫗に伴はれ 此 を見せられたも 0 世で善事を爲し 0 た者 6 あ る。 は 7 度々 極 催 は實 樂 行 行け 0 12 俗惡 た 3 Z 極 カジ せる 6 あ 惡

决 は 應 信 埃 L 現世 報 仰 及 11 i 此 は 0 7 ・カン 0 5 地 17 ٨ 思 於て善事を爲す人が果して榮え、 間 想 獄 來たのであつて、 カン 多 なる 一般 カジ 即 極 v 度に 樂 12 0) 是に 有して居つた 0) 70 行 思 な 心想は佛 於 2 S 7 72 來世 應報 カン 主 教 觀 印 は ものである。然らば何故 本來のものに非ずして、 的 0 唯現世に於てのみあるものでなくて 度 信 12 見 カン (9) 5 7 カジ は 埃 起らざ 悪事を 及に傳つた 如 侗 る カン 高す を得 解 カン 者 75 6 かは判 婆羅門教にも有る。 か に此の思 13 カゴ 果して つた。 V 明せぬ カゴ 苦境 想が起 客觀 カッ 12 的 未來に つた 兎に 77 沈 視ると、 T かと云ふに、 角昔より、 希臘にも埃及に カン と云 於ても 悪人祭え 2 12 あ る。 地獄、 それ 此 三三 も有る。 0 極樂 善人苦 應 は ふ霧 報 因 果 は

ふの 尙 である。 は 此 此 0 0 世に於て勤勉ならざらし者は、 世 で は 生を怠惰に送つた者 かが 彼の世に於て、勤勉力行し、以て現世の代償を爲さう ある。 さうすると來世に於 て其の補ひを爲さらと云

居 坳 る。 の美 此 を知る、物の真を知る、此の精神力を有して居る。真善美の世界を作り出して、其中に生きて この真善美の世界を創造するこそ、是れ即ち精神の生命である。斯る世界を造ることを得ざれ 無い。此の真善美の世界に吾々の生命は在り、それに吾々は生きるのである。

1 督 によりて、清められ、完全にならんとして、 云 0) 死 珀 吾等の 斯 ふの 形 世の繼續であつて、 0) 一数の根本 、窮りなき靈性を追求するものである。固より吾々は實に汚れたるもじ、指劣な者である。 くの如き精神の生命には、 信 足らざる活動を益 日教者 カゴ 的 仰 道理 存 の生命は 0 的信仰である。 は死を怖る、者に非ず、死を以て終極とする者にも非ず、基督教の信仰 在 根 であ 0 本であ 真意義に思い及ばゝ、 る。 永刧無窮のものである。 固より悲哉 人關 現世 將來 サン に於て爲し上げ得ざりし所の事を繼續して努力し、 死滅は決して無 奥へくと探のて行くと云ふ信仰である。 吾等は 來世 死によりて終るものに非ざることは真に悟られるでか 吾等は此の生命の 四 努力を何處までも續けて行くべきものであ 肢五體 は菩薩、木、草等に生れ代るなど、の い。吾 12 ロタの 拘 束されて、 四肢五體 發展を何所までも進めて行くべ 自由に生命の は亡ぶるであらう。 此 處 か矢張 吾. 發展 思想 A 0) は 5 かが 精 實に、久遠 に非す。 H る。 出 神 一來ない n 界 力 之れ ども を高 從つて神 > 來世 ŀ の不 力; 生生 は 基

基督教徒たるの道である。吾等は斯くの如き方面より來世觀を打ち建てることが出來るのであ 吾 い程である。併し全き者と爲らんとして、眞の人格を作り上げ、己を完くしようと努力するの かに は 過失あり、 誘惑に敗け、吾々は實に不完全な者である。其使命は今世に於て、到底為 盡

の終極とも思はぬ。 ち死は 1教では現世來世を區別しない。肉體の死はあるが、死をそれ程偉い事とは思はぬ。死を以て人生 現 世 と來世とを區 實に死を以て單に現世と來世とを連 別する一つの 關門である大けである。 一鎖する一つの鎖 今世 には人間 に過ぎぬ が發展 ものと考 し始めた時 へて であ

て、 やうな、 妙なる天地の働きによりて、靈妙極まる人間が現出したことを云うて居る。天地 命の 生朝 とするならば、 とせば、 13 發展 100 露の り天 ゥ 偉大なる働によりて出來た吾等人類が 發展 人間 を聽 1 」如しで、實にくだらぬものである。 萬物の努力によりて茲に人間と云 地 自然 開闢 0 は 0 いた。ベルグソ 0 死の 說 靈能 精神 人生は甚だ價値なきものである。 以來何億萬年の働が。一朝にして、一片茶毘の烟と化し去るならば、 によりて進化 關門を通じて來世にまで續くものであ 30 活 動と云 天 地 ンの創造の生命、オイケンの生命の發展は、 の微妙も實にてれ程無意味なものはないことになる。 ふ特種の 0 理を聽き、近年佛蘭西のベルグソン、 ものにまで作り上げ乍ら、それ 妓 若し幾百億年を費やした斯くの如き大創造を宇宙が まで 發展し來つて、 3 が死によって忽ち終りを告ぐる 獨逸のオイケン等によりて生 死によつて終極 非常に下等の ム生 0) Ĺ 物 T それ 力了 80 を告ぐる 6) 出 力 2 來 より、 カゴ 生きる 所 たた 謂

6

吾 口々は、 善惡、 正邪、 自由、 公平等を良く知つて居る。吾々は物の善を探り得る力を有して居る。 で行くてとにあらねばなら

と云ふは、此の生物の命を土臺にして、

それ以上に精神的の生命が出來。

その

生命に

よつて盆

々進ん



再生の連

引照エペソ書四章十七節以下

内ヶ崎作三郎

我 傚 れるならば、決して二度と悪いてとはしないと。 人生に對する自分の態度を一變することである。 ふなかれ。新に生れると云ふのは、心を入れかへ、靈を入れかへることである。 に先に讀 ふふな なんぢらに 1) 叉コ カン ス R. F んだエペン書四章二十四節に曰く、神に象りて真理の義しさと潔さにて造れる新人を衣 U 数の最も著しい特色の一つは新しく生れると云ふことである。 サイ書三章九節に曰く、 なんぢ等神の全く且つ善にして悦ぶべき旨を知らんがために心を化へて新にせよと。 新 に生るべき事を言ひし なんぢら已に舊人と其行を脱ぎて新人を衣たれば互ひに を奇しと為 彼は天才であつて、 バ すなかれ、 ウロ は言ふ、人もしキリス 12 ーマ書十二章 極端より極端に走つた。見よ、キ 3 一節に日 ŀ ネ 傳三章· 教に 天 地 1 の大生命 入つて新 ·七節 又この 42 一流を言 42 日 く生 世に 向 N

る。 實に のでな ね人間 界を確立せしめ、 吾 の道程より観て、死の先に大なる世界が開展する事を考へなければならぬ。然らざれば吾等の生存は に續く―― 實に人生の發展の意味は何處に在るかと云ふことを考ふる時に、來世と云ふことに大なる意義があ なの 吾 無意味に終るのである。(四月十六日統一教會講演 生活の本義 い。否な吾等の尊い信仰より考へて、幽玄なる眞理の存するものである。卽ち吾等は人生の發展 の命は遂に消えると彼れは説いて居る。人生の真 . 々が人生の意味を真に理解せずして、卽ち醉生夢死的に一生を送るならば來世に行く―― 資格なさやも知れない。ゲーテは其論者の一人である。 人生を根本より観 がある。 弦に力强き人格が確立する。さらすれば來世の信仰はグラーへ動搖するも て、 神と命と相呼應することを悟 諦は實に基督教に於ける理想に立つて、 自覺なら人間 り、神の御心を實現し行く處に、 人生の本義を辨 精神 未來

質に 研 其 Vi 生 0 面 01 7: 3 才 を結 元於 究 る 0 1 他 30 家に 心 あ 6 福 配よ 整 種 理 7 12 關 狀 Si. あ 7 < R 間 發せ する 態 彼等は 3 る。 0) なる商 17 ~ 200 2 7 は 7. は \$2 1 見 ざるは 朝 其 何 17 素 多 は 慮 5 0 店 念 牛 b 相當 2 12 カゴ 理 機 より 6 は 著しく 狀 皆 稀 家 發 0) 南 至るなで、 > る境遇 來 此 9) る。 であ 能 0 動 如 長 現 E 1 期 b 2 30 又學 發達 何 象 12 3 悲 > 以 生 Z) は 前 40 處 劇 0 十二三歳か 我が し、 置 n 問 27 17 3 は カシ 0) 4 小 カン ומ 戀 13 6 0 n 年 行 國 忠君 全く b 72 10 T S 一少女に て自 者 12 カン 0 カン 明 C. は 愛 語 んとする。 35 一變する 今尚 断な 分の ら二十前 期 亦 III 治んど生 あ 此 3 1 0) 等 てとし 頭腦を有する者ならば 經 中 心 7 0 T 青 世以 カジ 12 過する。 更 斯くて は 12 命 後 起 至 春 る。 戀 3 來 3 期 0 カコ 男女の 岩 路 少年 (1) 0) (1) 愛 生命 男女で 徒 彼 6 ~ 此 L 0) 青 等 弟 あ な 部 た 徹 る。 年 制 0 Vo 的 文章 源遠 カジ 當つて人間 は 夜連 度 别 13 今や 1 1. 牛 所 カジ 0 謂 å: 觀 < 命 H を見ると多く 力> S おっ 彼等 念 誰しも 探 を失 氣 奉 3 71) 公に 12 カジ h 力 大工 極 彼 行 衰 は 0 社 度 201 初 等 2 60) 經驗する いそし 値會を考 5000 小 其 青 て乏し 0 的 天 7 # ĺ 他 は 春 天 T 期 地 V) 其 6 76 所 忍 職 下 火 0 i 悔 此 に入る S 國 を宗 3 6 大 A 耐 カジ 5 靑 生 家 燃え ず 1 南 Ł 春 命 敘 精 b K と彼 期 で変 思 7 力 質 u 學 3 2 は 屋 向 3

_

着 6 人は た後 何 時 0) 何 確 處 修 カン 養 12 25 かん 生 於 無視せ n 7 變る 丰 13 ス よとは 其 50 カジ 精 說 市 時 カコ is 12 性 73 生 カン 格 つた。 22 3 變 變す 0 我 ~ Ī る K カゴ 15 敎 叔 为了 は 會 に入る時 Ti 3 る。 6 W2 上教 は 卽 ~ ち 心 た 0 カッ A 奥深 to 衣 110 < ック る 新 0 D 人の 1 6 雖 南 衣を着 3 3 度 L 7 3) 新 ねる L 人 * 乍

城 0 1) 外 躍 ス þ 主 開 教徒を迫害 0 彪 Tr 苦鬪 聞 v 7 終 して暴行 に勝 生 n 利を得 變 至らざるな 0 か 彼 た 6 は _>\° ゆかりし 實 ッ D 12 永 これ サウロ 遠 12 新 同 人を じき一人の キリ 衣 た ス 0 ŀ 0 6 青年と老 使徒とし あ つた 年 T 6 は U な 1 カン 7 0 帝 た 國 カン 25 向 つて ダ 7 信 ス (9) =

其 X w ~ نځ 新 ŋ 然る ノイン 會 人を衣 カ ふことに の之 12 25 闸 於 其 12 ては、ジ 學の行 後 るや質に 對する 教 なつた 會 は 0 3 ので、 人々 態度も寛大に るこに た ナ 10 ザ 13 0) 2 再生の 及んで 次 · _ _ 度。 第 F. 12 然 . ワ 1 信仰 ならい 新生の 5 パ . " ゥ は餘程 カゴ 信徒 度文でなければ P 觀念なき者はキリスト教徒でないと云ふやらに 此 0 信 は 如 弱められた。然るに十七世 4 仰 た が懺 0 新 先鋒となり、人は總て一度に生れ變らねば 牛 悔 0 によつて過 到 ならぬ 底 不 と説 可 能 一去の なことを知って V た 0 紀 罪惡を告白しさへす に至つて清教 6 あ る 來 120 徒 カュ な カゴ つた。 起 m < 5 i j. D T 力 S

は言 る。 期 73 雄 12 は 然 なれ 而し るの しな 人 間 遺 T 0 る カゴ 0 此境遇 もの 5 傳 あ 生を は決 る。 實際 ではない。これと同時に、 善き樹 と言 して人間 通 じて 度に C 最 は悪しき果を結ばず、 生れ 努力と言 の運命を左右する一 も驚 一變る < 1 き時 O. ことは六ケしい。 其力の 期 もし十代百代 0 南 最必 切では 悪しき樹 る 強く 人間 73 S. 0 あらはれるの は善き果を結ばずと云ふのは真 修養を積 12 後天 は 遺 八的境遇 傳 むならば、何 カゴ ある は カゴ 質に青 あ カ> る。 5. 年の時 人其自· 誰 人 0 0) 子 子 V 身 理であ 孫 孫 76 と雖 南 03 一努力 る。 る。 時 青春 に英 か Ł < あ

-一歳に置き、 春 期 13 茶 成年期を男子二十五歳女子二十一 機 發 動 期 より 成年 期 12 至 る 間 な 指し 蕨に置 T Z ふの くのが歐米の學者の定説 であ つて、 春機 發 動 期 である。 を 男子 心理 ---迴 學者 歲

Ξ

ځ 局 カゴ は 云つ 7 は 肉 掃 ある。 味ふべ 除は無 囘より、 人を衣、 君、 となって、 ・リス 下女が掃除を怠るので主人が叱つた。すると、何度掃除しても後から後から汚くなるから、 斯くの きで ŀ は 前 益であると云つた。 長く不 三囘 敎 鈍くなる。 カジ 活 は 何 に於ても亦、 如きは實に此世の相ではないか。何を以てか獨り我々の宗教生活に於てのみ。一 動 な 度飯を食つても後 は二囘より、次第に修養の功を積んで進むのである。 0 變の狀態 V カン。 源泉とな 然も此間 何ぞ知ら 大なる新人を衣ること幾囘、小なる新人を衣ること幾十囘 にあることが出來やうぞ。禪では大悟何囘、 主人は其晩から下女に飯を食はせないので彼女が其譯を尋 る にこそ、 0 いから後 である。 んや、 我等が からと腹が空きるか 我 度食 なの 漸 0 精神 次の發展は有るのでは た飯は空しく消化され は 時 に緊張 5 飯を食ふことは し、 叉時 或る心學の道話 小悟 るの ない に弛緩 では 何 7 する。 回とか 結 なくつて、 局 、此間 無 に斯ら云 我 云 駄で 和 ると彼 つて なの 17 血 あ らら 決心 とな ふの ねる は 巴

て斯くの如きものではない。 今日 彼等の # 0 宗教心 中に は學者識者と稱する者甚だ多い。惜しいかな、彼等の は極めて幼稚である。 宗教的進步は道德的進步である。宗教は社會に對し、 彼等は宗教とし云へば直ちに迷信であると云ふ。宗教は決し 知識 は深くして、 國家に對し、人道 m も餘りに狹

天才にして初

め

て之を能くするの

6

あ

る

12 ので あ 徐々として再生するの 其時 我 々は何等かの經驗を持つてゐる。 つであ る。 パ ウロ カゴ ダ ~\p^ ス 我々は <u>.</u> 城外に 此經驗を次第に深くし、大きくして行く 經験したやうな再生は、 非常なる宗教的

する。 もすれ て更に進 抑 し乍ら學問 々我 すことは六ケし 我々に 亦幾 が人生に對する統一的氣分を失はんとするの 17 多の 一歩させようとする。我々は分業の盛んな此世にあつて、 カゴ をす して此 新 階 12 る 都 梯 に彼を手 カゴ 12 點を會得するならば、其後は各自の工 會に入る時 V) ので 小 あ 學校。 3 本とする。 あ 0 は自然 る。 中學校、 12 0 我 R 理である。 而も我々は古しへより傳はつた傳説 高等學校、 は + リス 之を無視して一度に大飛躍を試みんとするも トの自ら經驗したやうに、 傾向 大學校と云ふやうな順 があるから、宗教によつて 夫により努力によつて進 各々異 序 なれる仕 の中 自然 かが よ あ V 12 るやうに、 もの 步する筈で 此弊を発れようと 事に從事して、 親しみ、 は之を取り入 敵を惡ま 教 其 的 功 修

n 郡より一 カゴ い。又他の るのである。 75 いでは みに思 縣、 我等も 73 人は女の子ばかり多く持つてゐる。 へ。我 更に一 20 思ぶに人世は循環小數である。 カン ... k 其他 破 國より全世界の 0 周 n た 例 圍 を撃げ る は 如何 垣 根 る 12 12 カ> までもなく、一 統計を見るに至つて、 不可思議に充ちてゐることであらう。或る家には男の子ば n る 片 __ しかも一村 0) を三で割るやらに何處まで割つても割り切れない。 花 切は質 を理 解 に不 兩者 するなら 町に於ける男女の數が 可 の數は殆んど相 思議で がは字 宙 あ 萬物 る。 實 匹敵 は 氷 12 然とし p 略 して大なる テ 同 じで _ 7 ス 會 あ 2 過 得せら 0 り多 歌 不及 0

づゝ進む時に、 むのである。我々は團體に入つて、修養を積み再生の經驗を重ねる中に、割り切れ以人生の桁が一桁 は此に於て非常に感じた。議會の紛爭の中に憲政は進み、電車問題に就て騷ぎ合つてる間 | 鍵してローレライの巖頭に夢の如き幻の如き歌を誦した天女のやらに氣高く見えたのである。自分 我々の歌喜があるのである。 に市政 人は進

——三、二六—

H 12 れども、 しかけて行 對して奉仕するものでわる。然るに今日の社會は之に對して餘りに冷淡である。東京から大阪まで より善いことが有るではないか、より急を要することが つて角力の應援をしてゐる人もある。 個人的趣味からいへば、そは決して悪く あるでは な 77> あるま

第三に んで社 VÍ 其蓄音器だけでは決して滿足しない。人格の刺戟は屢々百卷の書に勝 近頃大學生などの若くなつたのに驚くが、實は私自身が年を取つたのであ 3 的 17. まないと、すぐ後から追びつかれて仕舞ふ。 可能なことであ 或 る。 修養である。 一大生命をみとめること、次には進んで人の感化を受けねばならぬ。或人の演説 る人が は 人密室 日本人の常に看過する所であ こを動かす靈的事業にも心を注がねばならぬ。しからば斯くするの方法如何。第一は自然の中 云った。 して不知不識 る。 人は多勢の中 に閉ぢこもつて、 ところが此のやうに多くの人が集つて居れば、眠くなるやうなことも、 兵隊さんと巡査さんが著く見えるやうになるの の裏に修養が出來る。 ーに居 修養するやうなことは、普通 つて刺戟を受けねばならね。 つて、 人間 而も日本人に取つて最も大切なことであ これ は善となさねばならぬ。悪をなさぬ が實に人世を 教會の必要なる所以 の場合、普通の人に取つては、 進步させる力なのであ は年を取 る力と持つて る。實に人間 0 た 證 據で もが此 るるも に感心する人 ばかりでなく、進 は前 3 あ ると。 へ前 にか 6 全く不 あ つ色々 私も ので 團體

先達つて、私 數十人の呼吸は此に合一し、澎湃たる長江の水の如き大音樂は奏せられ、彼等自身までが 極めて平凡な岩者 は 海軍々樂隊の演奏を聴いた。 に過ぎな Vo 然るに 彼等の一人々々を見れば、 一度指 揮 棒の 動 くと共 12 H 彼等 含 73 > ら出 は 我 7 我自 來 餘 樂 り教

音に驚き、

養のな

て其 と思つたのである。 化せられず且外的 カゴ てとを願つた。さらして彼が私にお急ぎなさるなと父らしく忠告した時、彼は餘りに 轉じて青年となる時 才 派 工 な虚 幼 スに近づく第一歩は自然に合理主義の道に沿うてゐる。子供は性質上合理主義者である。少年 雅 辯駁 臓を水 心世 13 合理主義 一懐であると考 めいたものを書いた。 かめる。 である。 期は、 を記憶する。 彼は最 それは書籍より、 物理的なると共に精神的なる春機發動期の時期である。 へたものを以ていキリス も質 私は大きな本の中で新約 い者が答 私は監督教會の監督に長い手紙を書いて、 教師 へ得るよりも、 より、 þ 0 說激家 神 性 全書の究 更に多くの質問 より彼に來る、 25 關 するキ 極 の引用 t を發する。 句を校 7 而して彼 彼 ン・リッド 0 宗教は 權 合 私を輕く取 利 L 私 は た。 温は悦 其に真 を 證 尚 0 書冊 私は自 明する 未だ同 CK つた を以 質と ž

カギ

而してそれは総て全き景色なのである。

理主 宙 カジ イ の交通 の享樂を透して、私は神秘的な道に導かれてゐた。使徒 ż 一義の 6 を通じて神の中に己が身を見出した偉大な愛すべき一隊の人々は、 から物理的、 一覊絆 あ 7 50 フォックスの「ジャーナル」はブラウニングの「クリスマ・ス N た。 ティノー カン ら私を解放した。 而して私の 智的なると同時に精神的なる推移により、 の近代神秘主義 師事 神秘家中 は感情的に復活し且 はタウラー 最高 0 やテオ 3 0 は 確立せらる U 私が ヨハネより使徒エマーソン +" p その ・ゲ 經驗の豐富、 性質 iv > イー 12 ~ を定 至 = つた。 ヴ」と同じ言葉を語った。 力 私を彼等 めようとし 0 詩歌の刺戟、美の感賞、宇 F 1 宗教的交際 神 に至るまで、直接 秘 0 て失敗 一仲間 圭 義 12 12 範圍 よつ 呼んで合 72 て確 は ح 擴



宗教的經驗に於けるキリストの位置

神學博士 フ ラ シ ス、 1 ピーボ

る。 答 私 へることが出來ないのである。 は 而して他人には餘り面白くない イエ ス・キリストの人格 カン 私の宗教的經驗の中に占むるに至つた位置を定めることを求められ かも知れないが、 精神的自敍傳の數章を振りかへつて見なければ

あり、 を發見する。各々の道は心靈の生命を求める者 1 區別を、 エス・キリストの門下に近づく此等の道の一つくで、 心理學が思想や感情や意志の機能、即ち合理主義や神秘主義や道德的理想主義の信仰の間 は丁度人 下生がある、 よしや嚴密ではないまでも堅實であると假定すると、 ハ々が 色々な方面 然しながら旅人達が登るにつれて、彼等の路は相近づいて終には頂に一つの景色 から一つの 小山を上つてゐるやうなものである。 13 開力 れてゐる。 相ついで試みることを許されたと云 私は さらして總ての道 ――幾年月をか 下には孤獨 は へりみ 點に 7 あ 來まる。 に設けた ふこと 陰晴

らうう。 私には定め難い。恐らくは年齡の進むにつれて生理學上の過程が其に伴つて理性の確信を減じ、感情 の活力を和げられたのであらう。或ひは又他の一方に於て、人生のより大なる經驗が、人をして彼の の教育、「我に從へ」、「汝の十字架を取りて從へ」と云ふ單純なる喚びに對するイエスの最初の要求を意 つれて、私は神學的精確にも神秘的高揚にも心を煩はすると愈、少く、意志の聖獻、 識することが益 論を信ずることより少からしめ、且彼の感情によつて支配せらる、ことより少からしめるのでもあ 推移の原因は何であつたにせよ、イエスの人格が私の後年の忠節に再びその權利を主張するに 一多いやうになった――さらして私は其を正當な變化であると考へたい。 義務の訓練、良心

己犠牲を行はないで、總ての彼等の莊嚴なる敎餘を承認することが出來る。人は其によつて再び生る げなくとも、奇蹟としての身體の復活を信ずることが出來る。 信條の一つも、一人の弟子を一貫せるクリスチャンの生活に入らしめない。人は自ら名譽や貞節や自 念を以て同意して、而もクリスチャンたらざることあるべしと云ふことが明かになる。教會 らずして、其の結果の限定を感得してゐるのだと云ふことを知る。 ことを强ひられずして、イエ 現代の神學上の論爭を見渡すと、 スの處女出生を信ずることが出來る。人は自分の身體を生贄として捧 私は自分が合理的信條に對する活氣ある興味に缺くる 彼は總ての信條の條項に充分 所あるにあ の歴 の信

_

信條は信仰を造らんがためでなく、それを説明せんがための、幾世紀の智的等闘を表はすものであ

n 自身と各人との神に對する精神的關係である」と云つたし、 あつた。前者については英國に於ける同種の先覺者、 云ム興味ある發見である。尤もユニテリアンはロック、ミル、プリーストリーを通じて、多く英國合理主 ゑた」のであつた。 「神の肯定をは歴史の移り易い沖積の阪の上に置かないで、世界の構造に附いてゐる根深 ニテリアン に加へられたのは私が育てられて來た教會の交りが根本的に神秘主義の哲學に誓約せられてゐると 運動 に包含せられ、獨逸から輸入せられた合理論的聖書批判を受入れる先頭に立つた。しかし乍ら の思想に最も永久の影響を與へたチャンニングもマルティノーも、 ゼー・エッチ・ソムが「彼が一切の觀察 マルティノーは彼が 共に心では 自らを 語 い巖の上に据 0 つたやうに 神秘家 主 眼 は彼 0

私の答 分でもなければ確實でもないと云ふことを感じた。 經驗はその進化の或點に於て、歷史や發權を冥想せず、議論や證據なしに、神の生命を人間 彼 見出した多數の人 は私が何派 終に神學研究生として獨逸に滯在中、私は或日トルック教授と共に彼の庭園を逍遙してゐた、その時 こへを聞いて偉人は云つた、「嗚呼ユニテリアン、彼等は神秘家である」と。 の教會で教へられたかと尋ねた、さらして私の父がユニテリアンの牧師であつたと云ふ ヤー " ノリス チ + ・ンや非 クリス チ p 2 0 との精神的親和力を認めないうちは充 私はそれ以來宗教的 0 靈魂に

18

合

72 者 其 る。 のを行 るやうに思 初 た め 光 語 るを以 の告白 基督教神秘主義の肯定は、基督教神學の其の如くに、其の倫理的效果の中にあらねばならね。 備 其 我は彼等に公言せん、我嘗て汝等を知らざりさと」。「何人にまれ はざるか」と「多くの者我に向ひて、主よし、我等は汝の名に於て豫言せざりしかと云は 0) 私 6 7 家を巖の上に建つるなり」。「來れ、 はれる位置なのである。 とも見えるものに は生命の なり ñ たる王國 」。「神の意志を行ふ者は、 延ばされるにつれて、 を継げ、 連れて來られる、しかし其 そは汝 彼曰く、「如何なれば汝等我を主よくと呼びて、 が此等我 イエ 、これ我が兄弟我が姊妹我 ス 汝我が父の惠みを受けたる者 が宗教的經驗の中に最後に占める位置に關する最 カゴ 同胞 の最と小き者にさせることは、 が彼自らその最も特色ある言葉 が父母に同 我が言葉を聞 Ĭ, じし。 世 世界の 我が いて之を行 基礎 汝之を我にな 0) 中に指令す 云ふ所のも より汝 はん

習慣 ح る 想をも宗 人の研究と夢想との最後の追憶にも等しく開 に依らず、 力了 22 良 この 今迄必須 他の 浴 信 あ 所 0 、教的 100 神秘的 で使徒 淮 にして充分なりと認められたの 0 化 ر د 道 感情をも否定又は辯駁せずして、 0 かが 25 光輝のために保留せられずして、賢者にも患者にも、 如何に簡單に、い 意志を行 りず 臉 しくし 1) ス は トに向 て石多けれども、 んとする意志を有する者 人軍 かに單純に、いかに普遍的に實用的なることよ。 純 は如何に不思議に見えることであらう。 かれて 其等の 而 郎ち、 3 平 るイエスに

對する位置 は 出 中 に宗教 正直 教訓を知 な る 個 と醇朴 的 人 るべ 的 忠節 獻 身的の 1 0 是芸 手段 と呼 子供の從順 ぶもの ふ約 路 と解 カゴ あ 使 釋者 る。 束 てゝに神學的 徒 0 の第一歩にも、 > 他の 承認 歡 2 > とを見 0 迎 所 同 に宗教 カゴ カジ 出 あ 胞 す心 善 の吟味 良な 的 Ī 統 ح 0

5 その する リス ふイエ 神聖加徒立 トの 教義 神 理 其等 スの 福 を の は意志の翼が遮るものなき飛行距離と化 しとの 莊嚴なる諷刺 生命に、 努力である。 音の根本的特色を逸し、一我に向ひて主よくと云ふ者、 教會を信ずる。 説明 聖禮を犠牲に、 に於て人心が だか を再び聞くものであると私には 私は聖徒の團體を信ずる。然しながら智的定義と個人的奉獻とを混雑した ら私は信條 成し遂げた最善のものである。 或ひは又制度の基督教を個人的宗教に代らしめたりするのは、 0 中 12 種 した道に沿うて、忍耐强き歩みを以て辿 類 を豫 思はれ 期する。 る。 私は總てとの親交を要求する。 私はどれ 悉く天國に入ることを得ず」と云 とも論争 は しな 心り行 S 其 私は んと 丰

地位 交通 つた りの 其自身の はす」と云はれる。「我々が基督教の本質を攫むのは使徒行傳に於ていある」。この るべきであると告げられる。福 とを聞く。 工 ス 逃避、 を理 を見出 -[初] 其 (1) 目的を破壞するやうに私には思はれ 解 放縱 せん 我 すことが 0 論 0) 最上 宗教が ス々は新 争 なる僧道、 は、今や外的にして要領を得ないやらに思はれる。なるほど永遠の カジ 一の經 ために其 約全書の秘密は三福音書に見出されずして、使徒行傳の感情的闡 出 人の後年の經 一般に於ける行為の援助であるかも知れない。けれども其の感情は直 來 ない。 或ひは更に五官の快樂であるかも知れない―― 10 イエ 音書は「不完全なる情況、粗笨なる聽聞、發達せざる表明の文脈を表 我々は此 ス 験を支へるに不充分になるならば、 が自らを理解しなかつたと主 頃多くナザレの教師 る。 正統 說固 一守のた が永遠のキリストの 張 めに其は歴史性を犠牲 する。 人は神秘的交通のみにイエ 又屢々さらであつたのであ 時 は 新基督 深く私 キリ 幻に從 ス 揚 0 トとの 0) 敎 0 とする。 興味 中に見出さ たと云ふる 神 接の義務よ 秘 主義は 叉イ スの 20

ずる。而して彼が從つて來た「友」は神學者の論等や神秘家の幻影を越えて、今は明に見らる なる地平線を指し示す、其に向つてこそ一貫せるクリスチャンの生活の真直の路は走つてゐるのであ 高き到達すべからざる忠節の高峰を見るとも、彼は少なくとも身邊に上層の空氣の沈靜と愉快とを感 らげる、さうして人いかに真の頂に達する能はずして蔑視せらるゝとも、又いかに明に彼の上により 上には更に晴れたる空が 下には爭鬪と疑惑との多くの下生があった、智的暗黑と神秘の霧との中に道を失ふことも多かった。 ある、種々なる信條は思想の風景に位置を占める、神秘主義の霧は光景を和 , 遙か

0

R

る。

望により夢想によつて擴大せられ豐富にせられ、 其 於て人が 0 節の復 であると云はれ 初めを表はすものである、 立 の意志の答 脚 地 が宗教的生活の充實たるには餘りに幼稚な關係である、 最初 0 その宗教 の召喚に對する簡單なる答へとして「我に從ひ」初めた所を持來すことである。 脫 へは今や人生萬端の經驗により、 出、 ようか。 教義と感情とより意志の態度への信仰の改宗にある。それ 的 生活 反對 それは成年 0 純 に 化、 ろの 其の紛糾せる神學 獨斷 期への發育を示さずして、 的 もしくは神 喜びにより悲しみにより、 かくて從ふてとはより困 の路と滑か 秘 的信 それ 仰よりの な神秘主義の足場か 寧ろ第 は基督教的經 推移 二の少年 不幸により訓 難なると同 の最後 は疑び 驗 ^ 0 0 の終りよりも寧ろ 滿足 もなく、 ら確信と效力と 復歸 時 により容易に 練により、 を示すもの L 終りに その忠 かし 失

其の要求に於てはより複雑し而 をうつすに足らない。私には登り道は連續し且つ一つであつた、最初の意志の聖獻より相繼ぐ智的 化と感情的 0 理 を以て、たいより高く、 丰 性 人 は ŋ 12 ス 開 其 ŀ 示 の行くべき道さへ せられ、 上昇への曲 に近づくことを色々な方面から一つ小山を登るやうなものだと云つた。けれども其は真 神 仰 れる道、 路の初まつた其の點に攀ち登る時に再び本の所に來るのであった。 0 平坦にして、 神 一秘と更に親密なる交通をするに至らんてとを待つかも知れ 螺旋形の昇登であった。 も其の信念に於てはより强制 それ から迷ふことが 而して人が更に廣き眺 餘り心を唆かないならば、 的 となる。 望と更に 基督論 ない。 朗らの 私は が更に 光景と 相 ح

50

朋 も傷々しい犠牲を要求されてゐるのであります。神學校を卒業したといふ事は、私の母 に此の愛情こそ私の存在のうちでは最も内的な部分であります。そして私は義務そのものからして最 愛情は他の壓へられてゐた多くの愛情と同じやうに、私のうちに成長してゐたのであります。し るに過ぎないやうな説を蔑しむ事は私にとつてさはど重大な事ではなかつたかも知れません。 けてねた他 ら淀みなく私を導いてくれた道、はじめ私の目指した高尚なしかも純 た考はつまるところ、當面の問題を切り開くべき力であつてはならないからです。 する犠牲の大いさでありました。私の良心によって示された道が私をどのやうな深みへ追ひ墜したか でありました。私の苦しみについて先生に逐一申上げますのは無益であります。 た道をすてゝ、 い謎となるのでありませう。そして母は私がきまぐれに母の心を殺したのだと思ふでありませ 若し私の心の半分を傷ませないですんだなら、一歩を進めて申せば、 一人の腹を裂かしめないですんだなら、何かよい行ひに對して唯世人の批難を招きよせ 他の道を辿つて見ますと、其處にはたい不確實な色と廢殘の影を垣 一な目的 へ間 と申すのは、 强く私の心を結びつ 私は稚 違 間 N にとつて 見るば なく導 けな 親子の 斯うし 力> かる うりで てく 頃か

しく自分ひとりで何かをした事は一度もありませんでした。神が私の前に拓いた小路、私は正直に何 き上つてくるのであります。私が單純であり純潔であつたことは神が知つてゐます。私は差し出 前 實際、 の手で巻きつけられたこの解き難き網をつくんくと見つめますと、私の心には衰しい考が湧 私の 理性と自由とを眠らせて神が私の前に引きわたした線を素なはに辿つてゐなした 「がま



若きルナンより其の間

ル ネスト・ルナン『少年期の記憶』より 內 藤

濯

譯

工

先生

情をもつて私を取り窓いてはゐながら、到底私の苦悶を了解することのできない人々を悲しませる事 力にひかされて、私の苦痛を是非なく私一個のものにしなければならなくなつてゐます。さらして、愛 りです。 ならない筈のものが、私には最も大きな悲痛となるのであります。私はどうする事もできない義務の おないだけに、
 いのは、 ら、すぐに筆を取ることができませんでした。日ましに劇しくなつて行く苦しみを先生に打ちあけた 体暇のはじめに、方々へ旅行しなければなりませんでしたので、手紙を差し上げたいとは思ひなが んで居なければならなくなつてゐます。彼れらの心づかひと愛撫とは、私の心を悲しませるばか 私にとつて、實にさし迫つた要求であったのです。こゝには誰といつて聞きとつて貰ふ人が あゝ、 私の苦しみは益々劇しくなつて行くばかりであります。當然私の幸福を作らなくては もし私の心の底に起こつてゐる事を彼れらが知つてくれましたら 24

大切な論據を得ました。いろくしな事情によつて、私の何よりも先づ了解したものは、 土地 に滯在してこのかた、私は私の心の煩らひとなってゐる大問題の解決のためにいろ 神が私に要求

此

靜 內 ずに私の知識 ませう。 せう。しかし、 は られる境遇の力に耐へる事が出來ませらか。私は何としても、 てへ留つてゐる事は、 、歸つて、先生や私の先輩と一所に講義をしようと決心してはゐましても、今のやうな氣分で長くそ 私の れをもつて見てゐるばからです。 生活が、最も含つばりした態度によつて現はされなければならない時代が接近してくるの かに漕ぎ下つて わけに行きません。 ないのであります。 思 るし 想の要求する位地を私の思想に與へることが出來て、安静に而かも外面的な焦慮に煩 私の の完成と心の完成を追求して行きうる事が確かであったら、どんなに心强 たとひ自分自身の力に確かさを感じてゐるにしても、私はかくも必然的 るた流 目に將來 私に多くの厭はしさを與へるばかりであらうと思はれます。 私共の與 苦しむために必要なものは飽くまで正し れを斯うして溯らなければならないといふのは、 カゴ 確 かっ へられた自由は闘ふためには充分であつても、 映つてゐましたらどんなに心强い事でありませらか。 あゝ、 長い間、流る、ま、に流されて 神が V 私共に與へた自 ものであ 何といふ殘酷なことであり ねた流 ります。 運命 机 私は最も不決 由 今まであれ 0 を統御する 惨めを悲 に私共に課せ い事でわ もしいつか には たい 定な 女

してその人達にとつては、基督教は徳と幸福を教 ある一つの見すぼらしい能力を喚びさまさうとしないでゐるのです。見すぼらしい能力と申しますの めようともしな 眠 かほどまで强烈に滿足を要求するこの是非を許さない批評的精神の事であります。しかもこの批 る事 と夢みる事に い少年 は幸ひです。 屈 托してる少年は實に幸ひです。 私の 周圍 には純潔なそして單純な幾たりかの へるものに過ぎません。 私の今經驗しつゝ それらの人達は自分の心に あ る 人 此 カジ 0 あります。 神との争 を始

まつたのです。 巡したくはないと思います。 事を思ふことが度々であります。 36 保護することを疑つた事はありませんでした。けれども私が表面的な事質に對して、かくまで明 0 否定を與へる事には、 S ります。 攝理 かも打ちまかせてその小路へ進んで行きましたが、その小路はこの通りに私を深淵へつれ込んでし 不幸によつて、できうる限り大きな幸福へ私を導くのが、神の意志であるといつも信じたいのであ 經驗を外にしてこれだけの廣い考へを神へ寄せるには勇氣が必要であります。私はこの一點に逡 個人についても、 が宇宙を司配してゐることを疑つた事はありませんでした。私の行く所に私を導くために私を先生、神は私を裏切ってしまったのです。 それらの上に働く神の司配を推し量るだけの能力が世間的 可なりに努力が入用だつたのであります。私は人類についても、 神がたとひどのやうな不幸を私の上に下すにしても、できうる限り少な 事實から孤立した考察は、殆んど樂天思想に到着する事は 私はこれまで一度も深切な賢い神 な常識に 宇宙 缺けて につ ありませ 瞭 ねる いて

踏まなければならない將來の道について考へる事も出來ませらし、大學の學位もとる事ができるであ ものであるに違ひありません。しかし私は來春にならなければその地位につく事が れやこれやで此 りませう。先生、私はこの道を選ぶ事に大層心が傾いてゐます。と申すのは、たとひもら一度神學校 つい此のでろ獨逸から受けとつた音信によれば、私のために設けられた地位は私の氣分に適はしい 巴里で一年間はど自由 の度の旅行は甚しく困難になってゐます。いろくと新らし な研究をやつてはどうかといつてくれる者があります。私はその一年間 い覺束なさに煩はされま 出來ますまい。あ

思 らなかつた事を忘れないで頂きたいのであります。けれども、もし私の良心がその思想を法に適つた りも恐ろしく思はれる思想に一瞬のあひだ足をとゞめるためには、私はひどい試みに會はなければな 办。 らとした事は可なりに屢々でありました。それなら、私の生活の動力となる者は抑々何でありませら ものとして表はしたら、私は喜んでその思想を摑みとるでありませう。人間の恥を知る心がさうさせ るてとを望みません。しかし私は、 ŀ ・リシ 1に宣言を下し、私の理性を敬遠しない限り、私はもはやカトリシズムに歸ることができないやうに ひます。 私はそれを知りません。けれども生さくした力は至る所にその糧を見出すのであります。死よ ズムに立ち歸る一切の希望を無くしたのでせらか。から考へることは私には餘りに殘 批評の道を歩くに隨つて、私は私の出發點から益々遠ざかつて行きます。それ い、え先生、私の私の理性が進んで行くといふ事質がある限り、 やゝもすれば信願されない一人の導者に對して極度まで反抗しよ もは や再 び其 處 なら私は 一部 へ立ち歸 6 ある 力

思 の道徳でありませう。私は私を教育してくれた教會を愛します。どうして私は私自身を教會の子だと じさせるために充分であったから知れません。私の心は基督教を求めてゐます。 50 心のいける事が出來ないのでせらか。私は是非なく教會を去りました。私は教會を批難する不信實 くとも私を知つてゐる人たちには、私が興味に引かされて基督教を離れたので無 かけては たいものであ いけ ります。 ないのでせらか。私の鬪 私の最も高價 な興 はなければならない一時的 味の 凡ては、私に對して基督教を真實なも の考察は、 聖書 他の 澤 少事 は飽くまでも私 Ш を認 と思ふやう 考察を信 め ても

くれ 神が 5 評的 場合には、私は喜んで「それは私の過失である」と申しませう。 る の如何なる能力をも批判するだけの力を有つてゐるからです。確信を生む能力に ての能力のうちで最も大切な能力だけは、 ありませら。 V. の過失であるといふに違いありません。 事 精神 る人たちが心を合はして私を憐れんでくれる場合には、私に對してその友情をもち續けてくれる 何入 私は 12 適つたものであり、可能なものであるならば、私は如何に批難されても身じろぎはしないで この 多 一つの自家撞着ではありますまいか。正統派の思想は私が斯らした精神狀態 が充足される後には、たい心のうちに幽かな喜びを殘すに過ぎないのであります。できる事な 私の 基督教は私のあらゆる能力に適合いたします。しかしながら唯一つの能力だけは、凡べ 批 斯うなつた事に對しては憎むべきか愛すべきかを知る事は出來ますない。私を愛して 評 的 精神を抑へることを私の意志で左右したいものだと思います。 私はその事をよく承知してゐます。私は議論 取除けにしたいのです。 と申しますのは、 對して確 もしての批評的精 此の は に陷つたの いたしますま 信を命 能力
こそ他 を私 介す

はや、 み入れた道をきつばりと破壞し、私の理性を穢し、何物でも無い、何らの價値も無い者と斷然私の理 を續けて行く事であります。 にたち歸 只今、正確に得られたと思はれる一つの結果は、 私の足を入れた道を辿りついける事であります。 歩す りた る事 からい によつていなければカトリシ のだと思つてゐました。 てれまで私は疑惑の境を通 しかし今は全くこの ズム に歸 私がもはや正統派に立ち歸らないといふ事 言葉を換 る事 り越した後に、 カゴ 出來ないやうに思います。私 希望を失つてしまいました。 へて申せば、 できることなら 合理的 な批 初 的 評 私 0 的 出 には 足を踏 研 發點

れることであります。けれども私は、偽善の罪を犯すことなしには牧師となることができないのであ

け高 その 時 時 神の罸を受けるのでありませらか。 能力から同時に生み出される要求を同時に受けいれたのでありますが、からいふ事をした爲めに ぞれ違つた能力の相反した要求を調和しかねてゐます。それにも拘はらず私は、其のそれらく違った のとるべき道を選びました。すくなくとも當座だけ推理の煩はしい束縛を破りすてました。私はそれ に私のなべての心持と一所に存在することができないのであります。しかし私は思ひきつて其處に私 さ、や れましたら、私は教會のうちで幾時間かを過ごすでありませう。静かな純 な固さを有つてはゐません。そして此のやうな煩悶を續けてはゐなが ることをおゆるし下さい。申しあげるまでもなく、こんな事はすべて私の心の中では 先生、先生はさつとこんな事を考へるのを罪惡だとお思ひなさいませう。しかしどうか 代 をりカ かが 何故 いてゐます。祈りの心持すら生々と立ちかへつて來るのであります。それらは凡べて矛 な トリック教徒であるのと同時に純理主義者であることができるのです。と申しても、私は牧 いの 私の年老つた母を大切に思つてゐます。 であるかを疑つて見なければなりません。がしかし、からいふ過渡期にあつては、清いそして でありませうか。道徳上の眞理を求めんがために智的攻究が専らにされる以上、私どもは も亦、矛盾があることに由つて道徳的にならなければなりません。さればこそ私は、 人間の精 一神の歴史のうちには果して、 私は心で讃美歌をうたつてゐます。 ら、私はなは教會 一な信の心が私 矛盾そのものを必要とする もし を大切に思 デ の心の奥底 無意 私の ヴ 7 斯 チ がら考 私は なし つて ック にな 6

なるものをも引き分けることのできない教理を目當としてゐるといふ理由からして、その弱點を假借 會のうちに見出したやうな氣がします。さうして人々は、一切を含んではゐながらも部分として如何 さまに告白します。しかしながら私は、教會の弱點を蔽ひ隱すことはできません。私はその弱點を教 な聲を怖れます。私は敎會の敎へに代りらるやらな完全なものを何一つとして有つてゐない事を明ら

はし それ のであります。私どもは鐵の棒をもつて物の道理を正するのではありません。誰が私どものうちに合 るて果してさらした意味の基督教徒になることができませらか。カトリシズムは鐵の棒みたやらなも できるなら彼等と同じやうな基督教徒になりたいものだと思ひます。しかし私はカトリシズムの中に じやうに自由な大膽な考を有つてゐる人たちが、みづから基督教徒を名のつてゐるのを見るとさに、 を口惜しく思ふことが することはできないのでした。 しませることは、其のうちに何うかすると此の仕事のために牧師にならなければならなからうと思は うでもして其の日を見たいものです。私みづから此の大きな仕事に協力したいものです。私の 私は時として、正教思想の束縛が加特力教の國々ほど烈しくない何處 でねて正 教 なしかも批判的な基督教を築くのでありませうか。私は獨逸の或る作家たちの中に、 V 基督教 は何 日 教徒になることができないからであります。私は 77> のまてとの姿を見いだしたと思ふてとを先生に對って明らさまに申しあげませら。 現代のあらゆる要求を思ふさま滿たしらるだけの形式を取るでありませらが、 あります。 なぜなら、 私は萬事を賭して基督教徒でありたいとは ヘルデルやカントやフィ かの國に生まれなかつたこと 思い ヒテなどゝ同 私どもに適 なが 心を悲 私は何 ての

中附

は情命 勿意の 論的天 一認 般識の 有、所 融身在 の心不 十の減 の關の 讀係靈 す其魂 べ(1120) 当哲所 好學在 著上 た凡在 るて天 をのの 失根靈 は本の ず間 その 統所 味在 + ん矛 と盾は瞭諸にお微故に哲 せの世に問打りににし學

を趣 つ研を驚のに > 究論嘆士接 あにじせです る入或しなる 天るはめけて

ば調界記題た得觸哲 本和の述とれべれ學が事 書、本せ世つし に有體るのゝ 來と若も哲解本未必 れ無しの學決書發な

とくな者をはのる 哲のはりの試著點の 一神。説み者を人 研圓判 拾四 者致、本としが捕は '若書を哲幽ふ字 哲智しの平學支る宙 送布 學的く讀易上のこの

研認は者明の感と機

で揮はとかに峰 あつ兩努ら向に らて性力しム超 ら居相しめ聖然 、智た る關て の居殿のる 思妙る際 自を或なり ベ牛 6 此 人或命を嶺の 牛は研しに天 上自究て進地 に然の斯むの 馳死眞界圓大 せの語を覺觀

> °智たれ 有材識るばは 識は生著な出 の人活者ら來 十をのはねね は得第今 て一や嚢之 此基步此にに

の光をの上接 す科るう舞居し る學天握つる いち或提をと嶺にを居 はげ公のに耳 必人心來に出得を ずは身りし來々傾 ずは身りしなべた。最上日神にや材のててるたけ最觀然秘 ががい哲 爾待響者陽は者居崇とがのて谷峰拾製 る其敍說紙嶺 者妙し明價よ哲而も 9映 `せをり學か大が踊し其碧え るを或ん貴峰のもな淵をて處の峙

町番話電)。此 目丁五町河平區町麴市京東 番四一九〇二京東座口替振

師にはなれません。なぜなら人間は時をり牧師であるのではなくて、永遠に牧師であるからであり

ますのうなからは人気はからいけれれれいからいとうと 有つておいでになる方と交りを結んで、からして苦しみを了解して頂くこともできれば、からした苦 せん。私は私のためにかくもつらい苦みを残しておいて下さる神を祝福します。先生のやうな精神を しみを何の遠慮もなく打ち明けることのできることを神に對つて感謝します。 紙が盡きましたので、私はて、で私の内部の鬪ひに關する長々しい告白の筆を擱かなければなりま

一唯い焦が待の代現

ンシーレピスンイの

ン・人ど在の特に藝い ・示しなったに 練◆叶○が著書 をかり博覧し 致△し○大だて 新。向如 1.4めのの性 ता 肉△紹○知らを 冒ょ鍵の棒々翻 り▲真○と漕 神△實○切芸し 晶 著意母 叫かなくなくた ぶ△産○と 元 401 田丁 めの深しス 更一酷。下 12013 を込 想到此 人のるは や明豊中のせ 類9創3大 をの見が盲う道がざ 包のは目 擁の現の漢がに ○代●也で應答び 地 如いにのいで歴れ義者 何か現・秘・史しに 今之哲。直 >On 史レ れ・をの更の的な ●得○に○事の

めの自のに馬は妙学性・ずの近の實のずの我が關於鹿が雄等一●。代のに

は°生まし者。大なの・現まの°し 止°を至れなる・代だ潛°て



(田蓉田)

番町二番東洋 林、峰 院 河 電話ちがなら一番 東 診 神 院長診察月 診察毎朝及 野、高 奈川 京三番町 長 診 間 縣茅ケ崎海 察 橋 兩 醫學博士 土曜 毎夕 三十番地 兩 副 長 副 日午 は 長 濱 但 は目 高 及 後 目 午前 (市ケ (從停車場半 下 日 雕及土 及木午 入院診察應需 下當院に 谷見附內 當 及 院 H 一曜之他 に在 矅 里 在勤 勤

但

祭

H

H

一个日

0

支那の未來

支那

名

0

人那の (那の法制

政治

文學博士內

藤虎 薬

本本部

稻

岩

の教育

健 堂 郎 郎

人那の

經 地

學校教授高等商業

(根岸 山

> 0 0 海陸

少佐 小少佐

郎恒

授師授大

貞

0

理學博士

崎

助帝 教授大

字

折 直 方

- 月 際 Ŧ 木绘區田神京東

輯 声 0 種 藏

」對支外 支那 支那 支那の 支那 滿蒙の 0) 利 國 朝 利 通 胨 善隣 書院 總國院同 注計正旭 民黨 長票 根 隱

五數紙 頁百

教

育

學

0

性

質

1-

就

作。

我

か

書

作

よ

4)

1

ス

ラ

I.

12

豫

言

者

0)

神

改 錢四廿部一 IF. 定

半錢一稅郵

價

W

神

社

制

度

1

つ

L.s

密

教

哲

學

to

論

U

宗教

0

生 命

を

及

3"

法

學

博

士

3

國

文

學

號 F

東 文

科 卒 業論 學界彙 文 報 題

新 刊 紹 介

其 他

宅 濹 橋 雄 智 次 郎

倫

理

學

0)

演

習

問

題

文學

博

士

利 改 造 論

A. S. 生

思海

學型心潮外 :的 行經秩人 動驗序 學はの最 凡對 統て象 計心化 の物に大き 異:用常 が凡の

標て四 進のつ 科の 紀 小 沙 賀 翁 原 DU 女

大

劇

0

比

較

研究

旅 生 談 堀 氏 事

文學 博

志 輔 内 渡 水 野 邊 H 林 H H 鍊 周 庸 義 隆 能 太

平 淨 郎

協 亚東 达駒區鄉本市京東地番十五町木駄千 京東座口替振 會

(中附四)

高等學校教授 並 良 氏 著

郵價ス現百

金 繪 錢錢付り 頁本

傳 紹 介 訊 せ 1-ん よ ららず、 るも 歷 0 史 批 評 0 我 7 筝 場 0 よ 基 0 督 基 觀 督 は To 說 此 書 明 彼 よ 4) 2 0 宗 闡 敎 明 せ を現 5 代 n た 人 ŋ。

闂 佐 西

陸

大

學教授

Fragments

定

價

金

世

錢 錢

再

版

田 軍

藏氏著

陸

軍

學教授

郵 ● 郵 定 和英 稅價

金合金金

四十二世錢錢錢

神田佐

图

武武著

日日

第

版

哲 大

滅氏著

院教授

よ

n 郵價

稅 金 卅 四

錢 錢

郵 M 稅 + 四 錢 錢

番三〇〇〇一京東替振 番 五 五 八 五 芝 話 電 一個芝市京東所賣發

0

意

識

(中附七)

(中附六

▶書圖と誌雜のき書字マーロ●

水川成 藤 加巖 向 川川川藤 櫻 副崎 根 茂谷 副瀬 岡 軍 醫 文 小 陸 櫻藏 治 正波 葉 櫻電 櫻學 學 學 一先 喬先 喬大 喬十 先 舟 博 博 氏生 氏生 氏 生 氏佐 氏校 士 + 著序 蕃 落序 落 著序 著閱 著 著 青今皮口 近 て語學

 郵定
 <t

この會本誌報關機

行發日一月每

家庭のローマ学



定 定 價 年 「價 年 分 部 部 分 壹 鍨 跃 五 料 料 共 共 四 拾 五 拾 錢 錢 錢

發行所東京市 ローマ字ひろめ會 振替東京九一 電話本局五二五六



0 西

此の

一篇を草して音樂的哲人タゴー ルを辺ゆ。

浦

關

造

矛盾した刑法を肯定した一句に示した名言である。 として叉近代の實驗科學者として名高 口「凡そ何ごとに限らず餘りに論理的ならむとする思想は却つて非論理的になる」とは犯罪學の いロムブロゾーが、 自著犯罪論の結論に述べて、 自己の 學 泰斗 理と

對してどれ程の價值 れない質在 硇 慧と魔力の大調和あることを思はずには居られない。 ぢ込められて居つたならば、 0 明たる小 歸 依者 無限の蒼穹を仰ぎ、悠久の地を踏む吾等が、自我問題を解決するに當り、 理 天啓論者や、 でも無ければ、 論 として 0 偏見に過ぎないものであ の調 カゴ 宗教 あり力が 思索推究を無益だとする夢想的 和 金 歸 求むる 依 其の思索推究は所謂論理的であ 者 あるかを思ふ時に、 0 淺薄なる一人よが ものである。 る。 だからと云つて、 けれ 私は所謂論理を踏破したところに、 共、 らの 吾々の自我は無限に根ざしたビーイ 天啓論者でも無 吾 調 マの 和 るかも知れないが、 を打 私は知識を咒ひ、 知識や推究力が、 破つて、 Vo 深奥にして更 否私は論 單に論理の制限内に 其れは只乾燥し 文明を嘲 自我 理思 更 の實際生 27 12 索推 る野 搔き グで、有 深奥な智 鐘 活 の斧 無智 7 17 閉

在哲思近 來學想代

の史を思

人も新

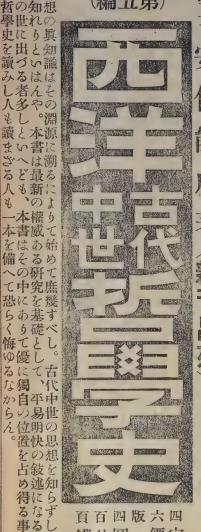
の優し

を者て

ず邦近 °文代

信

0



錢廿圓 錢八地內料送 け丈るに著 る意者そ者 哲氣にの曩 學最あ心に にもら血認 接昂ずを識 せれし傾論 んりてけど 正管た著 すににる

るて著哲で 士れ者學湧 へが概く 願 | 全論が ゲ人を如 ばル格公さ 來ののに思 つ理流せ想 てに露ん界 本よたとの 書りるす歌

> ョ哲書得 學はた ペの胜り 傳多。 ウた數 エカの

つシの本を

意中の 志そ如 をの 照理 破想哲 す論學 るのの 者如骸 天はを

下光羅

の焰列

生萬す新

文東 科京 大帝 學國 講大 帥學

價定 紙·菊 沃

漬 數 五 五 八 鐽 金 頁

番○二四五局本話電

田神京東

41

中附八)

き使 館 最 行 H だからであ た哲人である。 美を實現し、 4 V کل ا 0 ·/ 力> n 命 力を持 そして其 うとす 知 亩 直 識 持 紬 と學 理 に實生活 つて つて 古來 る魔 な 智 其 處 感 理 0) 自 吾等は 一とは、 居 0 動 居 の音樂を奏でなけ 25 力 鐵 る。 一我その は哲學よりも、 6 カゴ 斧 哲學よりも更 となり、 あ 南 t 自 哲 私 る。 る。 6 , A. 雷 我 カゴ 76 叉何 0 > 其の それ 者 タの 0 ゴール・ 奥 猶 20 響に 等 なる 魔力 に新らしく、更に力强く、 銳 底 は n 更に自然の美はしい色彩と、 かの 吾 どく から 3 と感 必 ば 至上命令を聞 R 一要は 無 材料をかりて藝術となるものである。 ならぬ。 0) カーペン 動 自 猶 0 我 無 17 晡 V 生ずるところに 擴 0 速 其の音樂に耳を 中 12 カジ 次 10 けれ つた S カン たカント ら自 その 共自 老 市市 愛す 然に 沈 秘 そして純 我 默 0) は、 中に、 る は 湧 0 自我た 點 永生の 必ず、 傾 72 S 哲學 はけた者 て來 は 南南 眞 秘 新 彼等 な生の る美 自 らし 者 音樂が響 る 0) 意 は、 我 H とし かが 的 カジ 20 音樂的 無限 哲 だから吾等は實生 表 と自 其 てオ 價 0 いてて 現され 電 0 理 值 音 盾 を認むることが 光 我 と光 0 樂を 居る。 表 沈 0 南 0) る。 現 默の 3 明 あ 0 聞 カ を探 土 吾等 生 其 囁きを 活 豫 F 自 0 1 13 表 我 詩 聞 其 出 其 居る 6 現

高調しきつた自 らである。 0 B 道 造つた ブ 亚 ラ カゴ 價值 價 か 2/3 循 7 Ō 我 チ であ は絶對そのまゝ を崇拜して得らる。も の自然的 ズ る 2 には ことは争ふまでも無 要求 絕 の實在でなくてはならぬ。 對 0 表 の中 現に かっ ら産 發露する美と音 0 6 いてとである。けれ共人間 は RL て來る、 無 Vo 如 撃その 人間 何 となれ 否絕對に自我その 最 ものゝ中に 高 ld 0 自然的 斯 の經驗 る 價值 要求 認 ものたらむとすることで 27 から測定した價 められ は カジ 最 無 る。 後 V 0 絕對 秘 最 義 值 カゴ 0 0) を目 無 價 價 値 值 מנה は は

生命 理 遺 限 欺 輝 的なものでは と這 的 0 一感ずる時 3 たるや實在としての自我に一層深 かざる純 は實在 知 であ 光也。 と美を有して居るものである。 識の到達することの出來ない神秘が自我の奥底 入つて行からとする自然の要求を感じて居る。 る。 光 意 には E 0 自我は大なる論 志を行 なく、 0 中に い自我生そのものに論 感動其のものは、 衷に自我 ム者 響く響也」と云つたの 也。 必然の 實在を目證する者 理 を逸し 質在としての意志、 意識を持つた力であ く明かに徹入しようとする魔 た時 理以上の力ある奇蹟が行はれて行くもの は將に其れであつて、 には決 也。 して魔力を生ずるもの 熱光を發する者也。 吾等が神秘の中に這入つて行からとする生の から無窮に擴がつて居る。吾等は 實在としての智慧及び論理。更に實在としての る。 意識 自我其のもの、自然のま、なる發動 は自 力で、 我 熱光其の では を欺 决 して 無 力> であ 超自 Vo な もの Vo 昔、 然的 る。 なり。 縣 印度 L 其の神秘の中 カ> 75 なけれ カン の聖者が、 響の 史 L た 其 夢想 中に 0 力

意識 敗 0 CK 0) 2 出 藝術には、 理 0 的魔力に觸れて居ない點に於て、自我最深に力無き淋しさを暴露して居る。 主 來な だから、 論 導 其 力に優 者 カン つた近 デ 0) どれ 多くの 中 1 6 つた大自 程 B 代 2, ス 人は、 學理を以つて組 深 物質 6 い論理的哲學が含まれ 然其の、 あ 如何 る。 主 義と理想主義とを結び合せて最も例 然し 12 まへの ds 如何 して人生を解決 織 生きた發動、 された哲學よりも、 12 彼 て居るやら解 の學理が實際を穿ち論明の妙を得て居るとしても、 L 凡ての 自我の 單 らな ものに優つて自我其の 純 率 踏ひべき途 V_o 直 好な哲學を說 過 な自我意 去 0 思辯 を探求しようとして悉く失 識 的 0 いた者はプラグマ 哲學 發動 ものに真理なる自我 に満 した、 足すること 質生 凡て チズ 一活及

偉 途の て彼 られ 題 幾度 想見 して 70 つ 天 あ 一暗黑 な 真 強 非 は遂 る たる農民 Y 幾 7 を思 る 凡 怕 得 0 に世 度 居 ク と苦痛とを望み見なが B な るも吾 た。 る能 天才と發揮 101 は な 术 界 0 る 然 的 た 解 カゴ H b 力を持 夏 る 'n 名譽を得る野心 めに吾れも勞働者となつて彼等の力となり助けとなるべきかと考 决 丰 12 17 を求めたのである。 ば ン 囁ぐ 彼 あ つて したので 73 5 る は 、新らし 所以 虚 居 僞 ることを信 5 は 雜 か る。 0 踏 V 意識 虐げられ 叫 彼が自我 0 づびに聞 文明 彼 即ち彼は大科學者たる未來の祭冠を握るべらか、 自身 10 0 響を聞 都 意識に かないで、寂しい自我意識 會 吾 し農民の 4 を遠 \$ カジ た彼 生 いた。 活 從つたからである。 く離れて寂 かが 友となるべきてとを 0 彼は氷 利 未 學者として立つ時には 來 に世界 雪の 寛た る此 荒野に立ち盡くして 的 0 最上の 榮譽 0 0 氷 决 囁ぎに耳を傾 雪の 意 0 智慧は 冠 した。 世界に 必ず前古 0 へ更 授けらるゝことを 自 何 幾 我意 等 かした。 Vf 度 一未發の 12 果しは 0 識 か自我問 壯 彼 0 美 圖 は 3 前

ロニーチェが

ば、 自 身 汝 姿で善であららと、 其 0 カゴ 0 0 擴 處 F 思 智慧の 12 想 12 カゴ 5 は大 住 と感 め 生命 中 6 信 能 では 0) 0) 背後 否自 君 (1) 無く、 = から洩れ 惡であらうと、 1 我 に、 -ラス は汝自身なり』と云 大能 習慣と哲 拉 出づる歌 、萬有を買 の君、未だ何人も知らざる聖者 理 道徳的であらうと、 力 0 中では あり、 いて 流れ ふたのは真 何人も知らな 無く、静 -居る。 かに自己の 理として認めなくては 其の 不道徳的であらうと顧 い聖者 響らに あらー 衷に囁ぐ意 (7) 合せて 彈ずる聖樂が そを自我といふ。自 飛 び出 ならぬ言 る必要は (1) 響を う あ 3 る。 薬で 自 聞 其 無 V 我 た 處 其 なら 12 は汝 0 は 如 7

妙な 3 絶對に自己その 過 ればならぬ。プラグマチズムの様 音樂 去 12 を持 經 の價値と生命とが認 され つて居る。 確定された價値 ものたらむとする要求の中には だから價值 ぬめられ なるもの を信 に、經驗的價値を信ずる意力よりも、自 る。 じて真理に到らむとすることよりも、 よりる、 一層偉大なる價値 新 た 12 自我 カジ 産み出 カゴ あることを認めなくて す價 我 值 意 自己を投げ 識 は 0 層美 張 り切つた 出 一層

は、 |音樂の常住不滅を信じた印度の彌秣娑學派は、 更に高き自我の 價植と真理とを告げて居るではあるまい 有限の價値に執着した近代のプラグムチズムより カッ?

我意 ることが づる丈の 自我を表現せよ!其處に自己にとつて最高 は光 クロポトキンが、 出來るか? 魔 0) H 力無 自 の中に輝き、 12 我 響く響、 0) くしてい 自我 意識 カジ カゴ 響の中 無限 死んで居て、何で自我を表現することが 何で自我を表現することが 南 る。 12 に輝く光である。 通 吾等は自我の意識 一人自由 な響は常に自我の深底 0) 價值 吾等が生きて居る間、凡ての に聞 出 と真理とが 來 S \$ 5° て最大勇士の 自我を表現しようとする あ に囁いで居るでは無 る。 出 來 けれ 行動をしなけれ よう。少くとて自我 共何うして自 制限 を放 は 力> m なら 魔 我 力 現 0 あ 13 自 光 n る 36

西 或 ぼつて來た自我 は淋しく獨歩して其の地の地質を研究して、世界地理學上に驚くべき新發見をした。彼は科學者と 亞 0) 地 理學協 會 0) 響はど、 力> ら、非凡な天才として此の任務を與へられた。 クロポ フィンランド トキンにとつて美しく力あるも の氷雪の上で幾月かを地質研究に過ごした時、彼の意 0 彼は荒寥たる氷雪の は無 かつたと思つて居 上を橇 る。 彼 識 12 0 0

重も帳を曳く。

0

調

和を實現せむとするのであ

る。

物質や 諸 と論理とを以て誇る近 り得るか?吾等は更にタゴールに就て考へて見なければならぬではあるまいか? 精 3 和 0 天體 調 自我その 絃となって 和 結果を慮 (1) 0 プラト 間 中 切の には整然たる数學的 に和 もの 居 習慣に盲從せんとする情眠とを打拂つて、 鳴させようとする生命の響きがあるではないか?吾等が一 るもの る凡ての外的 > 意識 とピソゴラスとは である。 代人は、其れを忘却して顧みなかつた。 の中に、 知識 永遠 ましてや、 距 雕 から組織された哲學に非ず、 が保たれて居ることを證明したでは無いか?其の調和は音樂上の から渡れ來る和絃の響き、一切の生の不協 『天體が永久の 超自然的迷信に非ず、經驗の端圍にほだされし理論 音樂を奏して運行して居る』ことを敬いた。 絶對に自己たらむとすることは、 けれ共近代獨逸の大天文學者ボードは、 自我にとつて最も明かに、 切の外 音を一大 物に 屈 シ 服 最も する 2, 即ち フ に非ず、 卑 確 オ 無限 かな 怯 __ 1

自我 Ħ. 0 吾等 一つ其 雨 0 0 の美的 美 夜 0 は自我靈魂 お 八は眞 > W) 中 闍 カゴ 初撃され に表現された へ理であ 生活は美となり、 は 草地 此の雨音の單調なるは、音より出づる闇であるかの様!木の蔭や、木の葉打茂つた小路 の調和を意識する時 0 5 の上を深 神秘 眞理. に驚 無 く閉 いて、 限 は 愛となって無限 自 は してバターーと降り機ぐ雨は、まどろめる地の静間 音樂であ 我 繰り返 の美で 12 世界精 あることを吾等は知つて居なけれ へしては喜び、喜んでは復呼ぶ嬰兒の樣ではないか。七月 る様な氣がする。 12 向 神 なるもの つて動き行く。 、幸福 燦爛たる星 これ 愉悦を解すること其の 一辰を渡り ぞ我等最終の ば れ無く繰 ならぬ Ħ の上に幾重も幾 ・・・・吾等は有限 的 り返へす夕の 極 6 あつて、

0

實

無限

のメロデ

イ

力>

ら出

て來たものである。

其の て眞 何となれば、 調 理 和を感じた時 なるも 其れは自己にとつて必然の働だからである。 0 カゴ あ に自我意識の發動を覺ゆる。 り得ようか?其の必然の 一發動 吾等の個性 は、 無限に奏でられて居る調和の響であ 自己にとつて必然なるもの程、 は 見極めて横暴の 如く思はれ 自己にとつ るが、其 吾等は

あるまいか?タゴー かに思 へ、無限の意志は常に吾々に現はれようとして居る。神の意志を行ふことこそ自我の業 iv は無限に響く其の神なるものゝ意志の音樂を聞いた。

さび給ふ』とはタゴールの心底から湧いて來た無限調和の意識の聲であ 一波は此の小さき葦の笛を(自我)、丘を越え、谷を渉りて携へ行き、永なへに新らしき妙曲を吹きす る。

は無 く美は のま タ・ 汝 ゴールの詩 カジ 力) つた。 音樂の聖 0 調 い自我意識 和 を聞 彼にとつて、 も文章 流 は岩石 いたのである。 の呼びでは の障害を打破つて滔々として流れ行く』と更にタゴール詩の一句、何と力强 凡ての 否生命、 無 彼は自我無くして調和の存在をも真理をも認むることが 存在物は悉く音樂であつた。彼は寂しい絕對孤立の自我 も凡て音樂に充されて居る。彼にとつて音樂ならざるものは真 S カ 12 出來なかつ 無限そ 理で

甚だしきに らふか?此の偉大な自我の調和を意識しないで、汝の誇る理論と哲理とに、何程の調和と統一とがあ タ]] ルが西洋哲學者の如く大なる理論家でないからとて、彼を價値少なき思想家とし、人物とし、 至つては彼に來るを危險だ怠惰だと評した人々の思想の中に、果してどれ程の力があるだ

た。

悲 感 る 0) 0 角笛 Ŀ 方 3 しみと寂 > 處 は 其 25 0 は、 夜の 様な響きは n 永遠 は しさとが 背景 早 其 1 間 單 0) 孤 N 3 力了 無く 擴 何 獨 無 0 やら 3 0 力了 > ては 悲 香 2 しみであ 凡 づれ 7 解 ならぬ。 7 5 居 カゴ 6 るで Va 魔 調 あ る。 75 は 和 力と漂 習慣 6 73 自我 南 其處 V り美で 渺 Ł カン 外物 9 意 12 12 る空気 13 斯 に頼 か 無限 3 0) 寂 る。 不 る盲 を露 L 0) 思 H 價 議 S 姿であ はし、 目 n 值 漢は 共また 深 カジ 汲 S 意 此 る 豆 神秘な風 0 其處 3 味 尊 最 と結 > 0 大 12 V 悲哀 價值 は は カゴ CK 其れ 無 合 何 を産 と寂寞を味ふてとは出 となく 9 3 を貫 72 カン ? 極 むところには 其 的 いて吹き、 常常 0 7 價 鮮 な 值 麗 輕 0 此 弘 露 妙な は カジ

る。 0 3 斯る輩 生命 自我を表現して居る。 は は 音樂である。 路 傍 0 石 しら何 吾等 0 自我を表現しない者 選 は 自 むところが 1我意識 に此 あ 5 0 50 は生きて居るの 音 樂を 聞 いた時 では Ó Z 無くて、 生きて 居る。 只存 吾等 在して居るまで は 生きて 居 0 る あ 間

來

75

曙を呼 25 居 動 0 る。 愛 は 0 中 人 0 間 CK 21 111 丽 て此 して 起す角笛 界 0 生 社 カジ 活 叉 會 現 0 香 今 は 共 は 遨 樂 12 產 n 0) 術 其 如 主 る。 は 義 永 くに響 となり 0) 見給 音 0) 中 樂 に響 美 27 カジ S 9 となる て居るでは無 S 層 7 近 サ 代 鮮 居 9 ン ヂ゚ 7 思 力> る。 最 12 カ 想 人類 後 ŋ 0 此 奥 0 0 S ズ 價 底 地 弘 か? 2 L 將 值 に を實 中 響 72 萬 12 響な渡 S 現 7 有 居 Ĺ 民 3 る其 主主義的藝術 3 其 戰 晴 0 N 0 カゴ 調 は 音 來 和 樂を る。 止 12 4 足を 虚偽 0 屹 女權 度 H 合せて 22 其 は 擴 0) Į. 張 ぼ This [11] 7 V) カジ (V) 處 Ė 來 H n ヘカン は新 T 3 世 勞働 界 共 赴 らしき 同 0) V 胞 時 7

792 <u>۲</u> 百 打 7 0 萬 淡ラ 來る 濡 とは 0 つた草 生 音 け コールが、 る原子 如くに 濡 ø 抽 22 た髪を引張つて泳ぎ行く人の 0) は、 見えて、空を充 息 聞 此の いた生の音樂であ 村 無限てム樂師 の草屋を包 たす小 んだ闇 止 の指に觸れ る。 み い無ら雨 樣 (1) 吾等の心臓 彼 なヒース 方 15 音 琴曲 聳え立 0) # の生 は搏ち、 12 縺 0 寺 12 茂 縺 0) 0 ŃL. 和 た 棟 は 7 荒 M. 果 地 管 は 凡 12 を派 7 點 ----0 0 級又 n 0 物 歌 T カゴ 吾等 とな 秘 居 る 0 カゴ 心 荆 0 身體 7 力》 棘 流 5 0) の幾 湧

を征 徹● 似する藝術─● 服 此 7 天上 三浦 樂的 0) 氏 人 光明 八生觀 譯 6 0 を最も力强く美はしく語った近代の預 中 办 12 3 翔 Ci 彼 カゴ 流れ ~\P ス 0 行く 深 無限 底に 觸 0 音 n 一樂を説 72 自 我 言書 カゴ < 真に 處に はカーペンター いたい 徹 L た智慧を叫んで居る。 トレ ブル 53 の一天使 カ>? 達し た自我 の翼(生に カゴ

T

を奏で、居

るでは

無

力 1 ~ @ 次の 1 は ~ F 1 ~5 ン を評 1 T 斯うい ふた。(生に徹 する 遨 一術 參

で、 踏み 7 .道. 大の 斯 見給 ると決して放 0 「彼は實に巨 其の壯烈、 悲哀 出で、湧然として自我 發露と、 如 でく経 とか そは諸 對 さなかつた。若し人が彼から其の骨を奪はうとすると、 人の如く其の力を酷烈殘虐に叫 無限 あつた。けれ共其苦痛と涙 に自己たらむとし 単純なこと一 なく 12 0 開 日輪 展し た審美 の心底に囁ぎ來るも 脈無限で、形式がまた極高の美界に参じて居る。其中から出 諸 なの たベトーベンには人 0 んだ。 星辰 音樂世 0 彼は髓に徹する迄 0 舞踏 界が 中 カン 曲 5 のを表現したとい あ る とも では 如 間 いふべき程爛 何 彼は巨 彼の主觀に鑢を カジ 戰 ない なる哲學 N 大な獅子の如くに吼え猛つて 力>? 得 3 ふ第 試 S 最 かけて之を嚙み、 表 なとし 3 强 九シ 12 現す 0 ~" 戰 て輝 2, 3 ۴ N フ 1 ことの ٤ つらつ オ ~ 少しでもまだ養分が残つて居 ン 再び其れに嚙みつい 人 Marine James No. カゴ 出 間 1 幽 星 來 0 カゴ 遠 第 づ な 悲 7 んだ自 しみ 0 來 夜半 律 曲 小る太鼓 得 to 家 聞 我 る最 純

彼 は

其

後

私 論

所

1=

來

7

新

しく讚美歌と聖書

とを買

つて吳れ

と言つたの

で、

私

は

夫を調

あげた。

だ

を止 0)

そして五錢の聖書を十冊持つて歸った。

月に五囘程川舟で下つて來たが、

來る度に村

の計納

な青年達

居 な 心得て居た。 N る程の男であつたから、私に對して常に任俠的な態度で交際をして居 一娼妓と深く契るに到って、信仰上私とは殆ど縁無き姿になってしまった。 \mathbf{H} は俠客肌な男で一寸宮相撲も取る、 常に小剣を懐にして、 意氣に感ずれば身命をも投げ出 相撲の為めに耳を沸 かした程の力自慢で、 して情まな た。 いととい 柔道

主義 より實行

炭を積 私 今後全然 飯は 面 は喜 會を 信仰だのと云つて夫れで飯を食ふのは卑しむべき事である、今日の宗教家と云ふもの 或 然 を貰ふ便 交際 んで新宮に下り、又た雑貨や米麥を買うて其舟を漕ぎ上せて一生懸 12 んで承諾した。彼は其 私が 明 めた、 治 我々は徒らに主義だの信仰だのと坐なが 利 砂 :末廣座と云ふ劇場で演説會を開いて居ると、Nは紺 がある 絕 四 逢つてみると彼れは自分の告白をしたいから暫く演説させて吳れと云ふのであつた。 ち、 十二 して、 年 總 から都合 0 7 0 暮 忠實に働 從 頃 水の 力> が善 の勞働者の服装で濱埴に立つて自己の境遇を告白した。夫れ 5 仲間 い、併し主 いて活きるの 彼 n とも交らなくなつた。 の態度 義だの信仰だのと言つても は コロ 云 らにして饒舌 リと變つた。 々と言 彼れ 「ふ意 の混襠に紺の腹掛と云ふ扮装で私に は熊野川 味 つて 彼れは深い關係のあった〇 0 あ 居 った。 7 誰からも は 命に勞働 九里八町 何 12 \$ を始 厘錢 0 ならな 流 めた。 は 0 れを川 寄附 信 は い、一自分は 徒 ドク から打 州 をして に水



生 を

N、Hと私との關係

冲

岩

낈

議論好きな青年

H 新 で彼 聞 明 治三十 記者 n は中央大學の二年生で の主催で談話 九年 の夏私 會を開 は此の新宮の町 いた席へ出 あつた。 席した。 夏期傳道 其時一人の議論好きな青年と知り合つた。夫れがN、 に來た。 そこで新聞縦覧所の樓上で徳美夜月と云ふ 42

車 教會 つの で驅け付けた程 私 が煩悶 後 か へ行 私 東京 を抱 がい町の く時だけは決して醉つて居なかつた。或時の如きは、 に歸 いて 0 居た。 教會に赴任すると間 て神學校に居る頃、N、Hは度々私の家に來た。其頃彼れは家庭の問 であつた。けれども、 私は彼れを菊阪町 も無く彼も卒業して歸郷した。 私の熱心が足らなかつた為 の本郷教會 へ伴れて行つた。Nは非常な酒好きであつたが 朝の禮拜に後れさらだと云ふので人力 か、彼れ そして毛利柴 は信仰を得な 庵 君の發行 題に就 かつ 72 いて してね

て頻りに、 も伴れて來たが、 主事教報の支局を經營する為に此町へ來て住んで居た。彼は出來るだけ教會へ出席し、 唯物主義、 O F. 無為思想の議論をして居た。彼れは途に自然主義の文學を愛讀し、はては有名 " r jν ヤK、M等と交り、S、 Tと深く相交るに到つて、遂に一神論を見 且つ友達を 捨て

る

だと云ふ迷信を持つて居たんだよ僕は、」と言つて、 も知れ 君、どうやら僕も今度は危いぞ、罰金で濟むか、 ない。今から考へれば隨分馬鹿な考を持つて居たものだ、 白 さもなくば二三ヶ月は 柳 秀湖 の離愁。 12 主 南 義と質行とは る鷄 苦しんで來 の文句を暗 常 25 丸 誦 相 伴 ばならぬ して今は ふも h

未だ苦悶時代だといふ意味の話をして歸つたのであつた。

こで私 どう考 事 らざるを得 件 は匆 力了 段 へて見ても 卒手 々與深 な 紙を認めて大膽 V と言 無罪 進 行 一つて來 0 L 様に こて局 思 に獄中の彼に傳道を試 たので、 外 0 は 私共 n 70 私は始めて此 から には 寸 偖法廷に立つて考へてみると、どう考 先 カジ 事件が罰金や禁錮で濟まないのだと知つた。そ みた。 暗になった。 辯護士のH、〇君すら、 へても重罪犯人た

宣告の下る七日前に、彼は左の書面を私に送つて來た。

カゴ を感ず。 る 宙の宏大なることよ、 て吾人の形骸は土と化せざるべかざるは からざる關 感謝 人は死を痛み、 門な いとありがたき節多かりし故寫して日記 300 一たび無限 死てム終 花の散落を惜む、 極 の宇宙を觀じ有限微 の門 前 され T は 古 ど自 0) 事 切 『然の事 實 0 なり。 衆 0 小 生 實 0 凡 然 肉骸 節に 7 は 平等な 人の 5 を想 おさめぬ。 死 痛惜 0 3 關 時、 門 0 為 は 然 12 吾 躊 度は何 A り人間 、は實 踌 d. 人 30 12 0 事 小 3/3 13 個 通 過 0 寂

死 は して暗黑か消滅か、 25 重 12 んぜ 現 在 ざる可 0 終 極 73 カン 60 らず。 はたまた光明か生起 終極 吾 人 0 間 カゴ 入獄以 は重重 來も腦 んぜざるべ カン 裡 に往來して斷ゆる事無さる からず、 滇 23 「ナッ ケ 次 スー のは此 カジ 重 0 問題也。死

を四 『どうしても人間に宗教が無くては駄目だ、 寢た 敎 0 三圓の收入が へて 失敗 五人伴れて教會へ訪ねて來たり、集會へる出席してゐた。そして或時私に斯う云ふ事を話 0 だが、 念談をして彼等を諫むるが功能 j 3 カン 其中の一人は夜中 ある。けれども青年達は其の金の牛分は女郎買に使つてしまふ。僕はいろ~~と自分 判らなくなっ た ·に寄と水を泳いで遊廓へ行つた。僕は今後彼の青年達を、どんなに が無い。 僕は村の青年を伴れて舟乘をして居るが、六 此問 的 此の寒い晩に舟を川中に繋いで青年達と其 日間 12 中で 十二

言 0 事 N を吳 終 2 TN K Jr 賴 は んで置 ٧٠ ラくと涙を流 V て歸 った。 L た。 私はいろしくと慰め且つ意見を吐いたが、 彼れ は私に或青

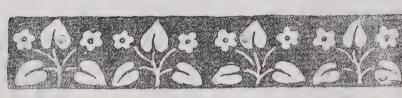
彼 n つたら、 灾 が失敗 何時でも授けて吳れ給 した 0 だか 5 彼の 子だけは君一つ正常な男にしてやつて吳れ給 へ、親には僕 カン ら説明 するか 5 洗禮 を受ける

44

つた。 山 夫れは衷心から其の青年の将來を思ふ言葉であ 一切かに喜んで居たが、一旦虚無思想に走つた彼れの宗教心は俄 彼は遂に汎 神論に赴いて頻りに佛典を口にするやらになつた。しかし教育へは相變らず時 つた。 私 は N カゴ 東京時代の求道心が かに一神 論 に歸還 する事 復興 して來 を許 た 々出 なか 事

彼が信仰の復活

やら 华 此儘では濟まないと悟つたと見え、 年 Ö 後、 例 0 事 件 カゴ 起 2 て、 彼れ 36 私の宅へ來て、 東京 送られた。 其の二三日前、彼は家宅捜索の結果、どう



さ青なる虚空ゆくだり大地をすべりもて行く風か

ゆくりなくもよきおとづれを聞きしよな今か

去

b

37

L

軟

カ>

8

風

ζ.,

L

E

罪こそは誤りなれ 動物のごとも喘げる うす寒さか た 唯々としておんみちからによる心なべては いたむべきは物でム小さき輪の中に果てしもあらず彷徨 3 大なる兎 ゝやきし風の一こと いひとりこの 0 はたれ ごとくまろや 大 時の と聞きにしをうれ 地 13 庭 12 主 猶 佇 耳 0 12 み 12 面 見 カン T 奇 12 る 12 72 凝 神 自 ~ < 9 L 0 0 15 7) t 7 安きぞ > せ 0 動 る てゝに充ち Ŀ 繪 め 2 力2 ح わが 72 卷 T 6 2 忘 み あ 白 暮 す 0 7 足 n n 3 12 殘 n カン ~" > ح 9 1: 6 和 7 嬉 ځ け L 17 な カ> 0 3 4 n B 2 n 6 >

々

藤

共に余 ては 論 上の 工夫す。 悟し以て安心立命する 六ヶ月間 理的 素以て自己の信仰の一部を通 修 カゴ 切 なりとして最も忌みたる所 筆 如來 而し . 9 0 の牢獄生活は短しとすべからず、 よりも或意味に於ては遙か 單 論 7 絕對他力 何等 對する稱名念佛と八不(破執中道 議などはなさゞ 0 不 と絕對自力は或點なで到れ 能はず、或場合には他力によらざるべからず、 論 理をも感ぜず、 るべし。 報す願はくば判讀 なり。 に苦行せり。されど元來鈍機の自分は自力の されど此 余は貴下の 何等の 面壁達磨の九歳よりも或意味に於ては長)に關する正念工夫とを寛容せられんてとを望む。 故障 ば契合するものと信 の不理論と思意したりし處 南 n 闸 に對す もなし。 る真摯。 余は 一誠實なる信仰 現 在 ず。 こは 及 故に余 び將 これ吾人が過 かい 來 12 は 現在 3 於て 12 敬意を表すると 稱名念佛 かりし。 因 0 信 去に 余が 0 仰 7 於 轉 樹 に對 し正 信 7 迷 P 仰 不 念 生 開 石

無 私はこれを讀んだ時、安心の胸を撫で下した。もう私には彼れの念佛を讚美歌に代へよと云ふ餘地が かつた。次いで彼れは斷頭臺上の露と消ゆる三日 前

頭 暫く交誼を添らし千萬感謝、 る 淨土 臺上 0 至る事 露と消え申すべく候今更 と堅く信 じ歡喜 小生事 0 É 何 事も語 17 昨十八日、 冥默可: り申さず候。 仕 一候、 死刑 先は 0 宣告 唯 此 世の R 12 小 接し申候、 生は 御 暇 死を以 まで 就ては 卿 て暗黑と感ぜず、 R 遠からず 此 肉骸 光明あ は 斷

と云 を私は信じて居たい。 0) 纒 紙 0 た終結であったやうに感じる。 を送つて來た。 私とN、 H との 彼れが斷末魔に『更に光明の國へ』 宗教 的 交際 は是に全く終を告げ た。 と真に叫んで吳れた事 そし 7 夫 m カゴ 悲

乍

12 獅 足らざる人だちである。そしてそこに何等の矛盾をも感じない人だちである。彼等の祖先等は曠野に 26 子吼せる猛獣であったが、その子孫なる彼等はもはや馴らされたる獣となった。 0 らに對して、 被等はあらん限りの媚を呈して向足らざるを恐るゝの觀が ある。 彼等 0) 祖先を恐れ

的 たしは此戰爭以來多くの牧師宣教師等に就て基督教徒としての彼等の意見を叩いた。又いろんな

新聞雜誌

に戦

つてゐるそういふ人々の意見を讀んだ。

も基督敵の主張に反對するものではない。 語つた人が、 基督教は新舊約書だけにあるのではなくして、基督教の歴史全體 今度の戰爭は歐羅巴の基督教徒に對して日本の基督教徒が忠告してやるべき好機であると威 日本が戦争に参加してからは日を緘して又何事をも語らないのをわたしは かの十字軍を見よ。神聖戰爭を見よ。 のうちにある。だ 是れその から戦 見 證據 争 は 張 である つて 必

獨逸に 今度 9 向 つて 戰 争 はな 十字軍であるとい ――とその人は答へた。その ムのをわたしは聞 人は獨逸の敵手に當る國の基督教徒であつた。 いた。何に向つての十字軍かとわたしは反問

とい

ムのをわ

12

しは

聞

いた。

戦争は ての殺人といふ責任はなくなる。 かす筈のものではないとい人のをわた いゝとは思は ない。 しか し國家の命 隨つて基督教徒としても國家の命令に隨ふことは少しもその良 しは開 合とあれば責任 いた。 は個 人を離 れて國家に移るのだ から個人

若し耶蘇が今の世に生きてゐたら戰爭に行つて人を激すだらうかと或人が或牧師に聞いた。そりあ



新らしきまぼろしを見よ

佐

藤

青

であ 方に於て民族主義者の辯護者であり、自分の宗教を國民精神に適合せしむることに腐心するに日 17 70 は である。 はれて、少しも痛痒を感じてゐないやうに思 聞えて りは少しもない。たゞ基督教徒と謂はれてゐる人々がからいふ民族精神の强 は思はれ る人々の な 111 界戰 v 自己の主張すべき筈の領分をば、その日ぐらしの政治家や新聞記者や教育家や文藝家などに 來る歐羅巴諸種族 力> 今日 神は 亂の修羅 る。 國 間に、近 家主 三位 0 基督教徒はまだ耶 しかしわたしは今弦にそういふ風の主義なり主張なりの誘因 心をの 一義の 體であ 頃事新しく「新日本主義」などが唱道され 鎧で一 中から、 の叫喚に、 るか否やを根氣 固 められ 遙かにうなりを打つて聞える聲 蘇は 今更のやうに刺戟され脅かされたものではなからうかとも てねる日本 神であるか人であるかを議論する程の よく議 はれ に於ても、そこに住んでゐる新い思想家と稱せられ 論 るのは、 L 2 飽くことなき人だちである。 わたしには何とも言ひやりの るのは、矢張 は、 かの民族精 5 を研究しようとする 餘裕を持 い主張者だちに雷同附 海を越えて向 神 0) そして つて 强 ない歯科のさ い残 70 彼等 び主 る うから 張 76 是 他 6 48

て基 對して 消 民的 徒 T るいと言ふことが カ> らずして他の死せる多くの宗教の陷つたと同じ連命に陷 カジ がないといふやうな、 同 督 争 しといふことより以 0 何等 まぼ 基 穀 化といふやうな常識化された言説が之に代はらんとしてゐる所から推斷すれば、基督教 がなくなるものとは であ 督教に於ては、 0 ろしを ると妄信 洞 察力を持 出来な 持 0 L 7 程に憚 上に善 **外遠の姿に於て人間を見たる耶蘇の高き見識や理想は葬り去られて、た「図** 願る頽廢的な氣分に滿されてゐることをわたしは感ぜざるを得 つて 72 ヒユ 思 る 70 カン は 1 かるべ 83 8 ないとい い誠がないと教 3 是は、 1,000 73 ら何 チーに V ふことこ カン 戰爭 0 4 對する熱情に燃えてゐないことが暴露され 問 0) 題で カゴ 力学 へられた耶蘇を信じてゐる著等が、 なく 此 たが傳 南 世 る。 なる、 12 **(a)** 50 今日の基督教 說 る 無くならぬ のだらう 0 社會制度の一部として生存する外には 儀文的 力。 徒 0 信 仰の 問 D が自分の 題で 72 小 1 は 局 は たが 信 斯 73 囬 に跼 じて く言 單 1; V. たに過ぎぬ 一に戦争 今の 踏するを以 ふた ねる宗 2/3 基 カン 外し 督教 56 は わ

えて 理的 ろしも、 陷 斯 だファ つた。 る意味でのまぼろしを有する人々にのみわれくしは真に靈活の力と共鳴を感ずるのである。 ねた。 は北老 ナ 人道 皆そら チ いたるものが夢を見、 世 力 7 紀 的 w を重 な精 V カン な 0 0 v ゥ゛ 72 V2 前 = 單 1 0 ア ること二十に至つた今の教徒等はその昔の人々の靈 光耀 なる ゼの イヴアル 狂信 見 12 若きものはまぼろしを見た。そしてそこにのみ真 よつ た 的 るまぼ などの外にはまぼろしを見 て現 な心 ろし 出 O) 一狀態 された 4 から Z) イ 現出 -17= のであることを悟ることが t 9) 2 n 見 たる ることが たるまぼ のではなくして ろし 出 來 36 的 82 8 經 出 は 0) 驗 の生命 であ 來 72 0) 耶 な 旗 あとを讀 K 蘇 るとい つた。 合 0) 理的 見 72 ム迷 h 0) 水 るまぼ カゴ 信 倫 72 燃

しに

思出されるのであつた。

勿論 を吾父に請うて受くること能はずと思ふや」と言はれた言葉が妙に此談話との著し V ふの 耶 蘇だつて戦争に 思議な感じを以てわた も行 からし、 L は間 人も殺すだらう。 いた。 そして耶蘇 L カン し耶蘇 カゴ あ 0) 危急 は 殺したものを生きか 0) 際に「わ 12 今十二軍除 い反對としてわた へすだらうと の天使

5 を御 見ると、 者の譬がよく之を説明してゐる。即ち、夜、牧羊者は羊をまもつてゐる。そこへ狼が襲うて來る。そ てわたしはそれ 0) 時牧羊者が善い牧羊者なら狼を追ひ、自らの生命を失ふも厭はない。此譬を今度の戰爭に引當て、 を見た。 わたしはいつか英字で書かれた或宗教雑誌を讀んだ。そのうちにこんな意味のことが書かれてある 自 再考するまでもな 此牧羊者に 身 狼は獨 12 耶蘇 お 喻 を讀み終つてから、 ・逸である。今度の戰爭は狼に對する戰であると述べてあるのをわたしは見た。 は戦争に にな に當るの い事 0 たのであらう。 は全體どの 闘しては何等明確な著を發表してをられないが、たべ一つ約翰 であつた。 いくたびとなく、うそんなら全體どの國 國 なの そして見れば今の世に耶蘇を象徴する國 か」と反問せずに は はねられ な カン つた。 カジ 、羊な を求 耶 Ö 蘇 カゝ。 める は 多分 ्रे क्र 傳にある牧羊 0) 此 無理なる

は 黒いものを白いと言ふことは出來ね。 われ 誰 を憚 カ つて戦 争が わる いと言つてはなら 悪いものを善いと言ふてとは毘徠ぬ。 ¥2 のであらう。 誰 が命令したにしてもわたし 己れの如く爾の隣を愛

野

原には蒲公英や、

菫や、

つっしや、れんげ草などが濃い緑りをあざやかに彩つてゐる。

森や桑園



初 夏の

N.

な若葉 春 から夏にか 新 0 色は殊 L い勢作を始 H 15 氣 て花の世 持 ちが めた。 界が 好 S 9 自然は永遠なる生の創造のために限りなきよろこびと深 500 自然はいつでも美はしいが夏は 一層うるはしく、 燃(0) い新 りとな るやら

2 > 自然 に自 10 然の尊ふとさとうるはしさがある。 南 つては勞作その ものが歡喜であり祈禱である。爭鬪そのものが生の憧憬であり讃美である。

Z.

つて

13 72 やうな河 ひらく ろげられ 齊 め 朝 12 ふた蛙 は清 い點され か清ら を待 た嚴かな祭場において、高く空にひ い野原において、ヴェールのやうにうすい幔幕めみどりの天鵞絨の上に静かに天上 のノク つて た天 かに流れ、うつくしい小山は靜かに立つてゐる。 0) 次 0 る。 7 星 1 0 夜は自然をふところに天と地としめやか に耳を澄ますことが出來る。 Th カゴ 神々しくか いやいて いく雲雀の讃美歌を聞くことが出來る。そこに るる。 そこには凡ての そして莊嚴 1-抱ら合 もの カジ つた中に、 な氣気 安らかに に充 たされ 眠 生 5 產 一から垂れ 0 て幔 72 よろ は 瑠 10 肺 こび 幕 璃 V. 0)

53

新きまぼろしに導かれむこと、是れわれらの衷心の欲求である。 しての、叉全體としての他種族との友情に生きんことを欲求する。今は只此新さまぼろしを見、この われらは個人と個人との真實なる友情に生き得るが如くに、更に、種族の籬を撤し去つて、個人と

とづかれ

2

V

5

3

薔薇などを花瓶にさして眺め居り果ては涙に終りけるかな、たいつも香意なこっろ鞭うてるエデアト人形なつかしと思ふ、いつも香意なこっろ鞭うてるエデアト人形なつかしと思ふ、いっも香意なこっろ鞭うてるエデアト人形なつかしと思ふ、のだつみの底ひ幾。 都ありと墓ひ往きにし人をしぞ思ふ、わだつみの底ひ幾。 都ありと墓ひ往きにし人をしぞ思ふ、しほなりの音に交りし川水のサラーへとゆく港口がな、しほなりの音に交りし川水のサラーへとゆく港口がな、しほなりの音に交りし川水のサラーへとゆく港口がな、

かつた花を残してゐた。

の低い林の中には、 歩みをゆるめた。そしてゆく手のけしきを眺めながら流れにそび東に向ってなつかしい河を下った。 右手には小山がついいてゐる。 あちらにもこちらにも黄鳥が競うてうつくしい聲をひょかせてゐる。 山には若い雑木林が茂つてゐた。透さとほるやうな若葉をつけた文 穂の出 揃 0

は n そこか を反射するた 途中の谷間に自 ら茶毗 0) めに、 if い漆喰ぬ むり 青 三世 カゴ 3 薄く巻さあ 0) 間 火 八葬場 12 クツ があ カゴ 牛 つて、人生の深い謎を象徴化してゐる。 つた。 リと白く光つて輕いすごみを投げてゐる。 20 火葬 場 は遠くから見ると、 西日 そして大抵 を受ける時 の日 はそ

た麥畑には農家のよろこびが流れてゐるやらに見

ええる。

ちが をつみあげた煙筒は、 を開 谷の しなかつた。 ふもとに いてねた。 には荷車 しかしまだ煙りが上つてゐない。煙りの見えるのは午後から夕方に多い。赤い煉瓦 忘却の秘密を底ふかくかくして優いてゐるやらに、晴れやかな空に向つてその 沙 おいてあつた。 この荷車で死んだ人が運ばれて來るのだと思ふと、好 い気持

しかしその周りにも鳥が夏を歌つてゐた。

に山口といふ部落 里ば 力> り行くと隣 に向つて進んだ。 うの村に這入つた。 あちてちに散在してゐる農家の屋敷には、 こゝは岡 山村である。 自分は 可なり廣 まだおそい櫻が散りか V 街道 1 東 南 直線

___ 55 ___

んでねる。

自然は全く美の世界であり詩の世界である。

夫や農夫の には力にみちた新緑の匂ひがかほり、その中に鶯やいろくくな鳥がのんびりした聲で啼いてゐる。 娘達は野でまめやかに働いてゐる。朋るい日光が凡てのものを夢のやうに、現のやうに包

3 のうつくしい世界を歓呼することが出來ないのか。この憂愁は或は自分の真の故郷であり真の母であ のかも知れない。 ح (ر) やらな世界に住んでゐる自分は何らして憂愁に惱んでゐるのだらう。何らして自然と一 自分は今憂愁と共にこの夏の自然を眺めてゐる。 緒にこ

現され 樂む 躍 ってねる。 向 謠 3 河 てねるやうに思はれ 2 0 畔 整 の遊亭の カが、 三味線の音と相 明 3 い點火が、 る。 そこには前りもなく憧れもなく讚へもなく、 和 澤山 して手にとるやうに聞えて來る。 福 い水面に紅 い影を流してゐる。 そこにはこの世 男と女と一緒 たいての世の歌樂のみ の歌樂が になって酒 悉く實 力 *

0 仲間であることを知 カ> 見える。 し自然は眠ってゐる。 自分は憂愁の訪づれるのを待つてゐる。 つた。 私の小さな娘も深く寝入つてゐる。時々蛙の無邪氣な叫びを夢みて居る 今あの歌樂に浸ってゐるのは同 じ役所の自分

彼女は今日も役所に行くのだと思つてゐる。 自分は 初夏の憂愁はけさいつもの通り家を出た。小さい娘は『往つてゐらつしやい』と言った。

ス トが『人の子は枕するとてろなし』と言ったが、今や人の子は自ら食ふところはない。 る人は田舎に生活の壓迫なく翼實の自由 な生活 から あるやうに思つてせ、こましい都會から引込ん

カジ で來る。 年々田 しかし都會で食へないものは田舎では猶更食へない。食物なく仕事がなくて都會に出るもの 舍に あ る。從つて田舎の習慣はだん~~俗化して行く。

0 小さい家族を養ふことが出來ない。それでも自分の自由の大部分と精神的生活とを犧牲にしなけれ 自 分は この 頃ある人の世話で田舎のある役所に出ることにした。月給はあまりに少なくて迚も吾等

最も不得意なそして最も厭やな仕事を擇ばなければならないやうに除儀なくされた。 自分はあそこに出る前に、全く百姓をやらうか或は再び東京に出ようかと考へた。 自由 けれども自分の も何 もあ

57

たものではない。

ばならないのだ。

勿論自分のこの選擇は決して終局ではない。

に訪 といる見出し 自分 和 て異れ が役所に出るやうになって で、半ば侮辱的に半ば廣告的に書き立てた。 た新聞 記者も二三人あった。 カン ら暫く後に、町の新聞 ある種の好奇心に騙られて自分の .が『腰辨當の哲學者、~氏哲學の著者△△』

役 所 に出るやうになってから一日も愉快 な心持ちがしない。だんくいやな氣がする。自分は憂愁

でない日は殆んどない。夏の自然も憂愁である。

自分 が朝役所につめるときはいつも、『行き度くないが行くかなあーー』と低い聲でいふのが殆んど

12

よかく沒してゐるので致し方なく、失望して立ち去つたとい

ム美し

い話

から

殘

つて

72

る。

虎 んど荒されて丁つた。村民は大に国つて石を遂に山下の池中に轉がし入れた。 れば相思の人の面影を見ることが出來るといふ信仰をもつてゐた。それが爲めにこの近郊 よると、 がこれを聞き、何とかして戀 Ш 口には有名な文字摺石がある。その傍にある小さい祠は即ち文字摺觀音堂である。地方の傳説に むかしこの石は堂の南の山上にあったそうだ。當時の人々は青麥の葉をもつて石 面影を見ようと思 V. はるべくとこの その後曾我 地 に 來 72 カジ 施 0) (1) 麥烟 石は 成の 面を無で 妾お 江 殆

青葉 雜 ねる。 と辨當と帽 0 分 自分はこゝで思 焰 は石を眺 カジ 輕く燃え上つてねた。 子とを傍においた。そしていきなり新絲の空氣を呼吸した。 め古い夢のやうな傳説を想ひながら觀 ム存分初夏の憂愁 5 > 12 は継 に耽らうと思つて草の 36 恋るも 音 0) 皇堂の南 力当 なく、 上に腰をおろした。 0 72 小山 鳥 に登 0 整 0 た。 カゴ 時 Щ 12 持つて來た二三の 山 0 上は 0 沈默を破つて カコ 73 り暑 56

憫まざるを得なか かに起って來た。そしてあの塵臭くむし暑い役所の中に器械的に働いてゐる人々を思ひ出して、 ってゐらつしやい」といふやさしい聲と、今日も役所に行ったのだらうと思ってゐる感じが、ま つた。

今日 生活の壓迫は都會にのみあるものでない。町にもあり村にもある。 でも 日は日曜 4 活 ではない。 壓迫 から 0 L がれて、 力上 し自 一分は 部 カン に大自然のふところに夏の空氣を吸はうと思って 憂愁な自分はほこりをもつてこの 野にも山にもある。 Ш に來た。 自由 來 72 の世界に

むかしキリ

我の

小なる影と戦

1

我

0

ために我れと小ひさき形を作りて

形のなやみと影の浮動

我心悵

々として痛む

我心帳々として痛む
この波亂重疊たいこれ我が影の浮動影が影か
影の依つて生ずるところ
皆惱の依つて生ずるところ
お悩未だ我が本來の姿を見ず



意か影

鈴木

影の動くなんの導因なしといふや

影か影か

影を踏んで自らその黑きに驚く

影か影か

我が影は動く

我が魂は常にかなしむ

我はその影と世の終まで戦はん

影

カン

影か

īi]

龍

癖になつてゐる。小さい娘はよくこれを知つてゐる。

貰へないことは無意識 を買って頂戴』とねだる子供に金錢の價値を知つてる筈はない。けれどもお役所に行かないと金銭 『交樣、行つてらつしやいねえ!、そしてお役所からお錢を貰つて來なさい』と子供がいふ。『リボン にわかつてゐる。 力》

無邪氣な子供のこの言葉がいかに自分の胸をふかく刺したか知れない。

自分はける憂愁に充ちてゐる。役所もだまつて休んだ。山の上で二時間ばかり雜誌をよみ、それ

17 らまづい辨當を食べて來た。しかし雜誌の中にも辨當の中にも憂愁が潛んでゐた。 れども自分の内面にある憂愁には歡呼のたゝへがひゞかない。 自然そのものは憂愁とは思はれない。凡てのものがうつくしく、そして生を歡呼するやらに見える。

能 の理想境が展けてゐる。しかしやがてそこにも静かな眠りが支配するであらう。 まだ三味線の音がする。女の下びた歌も聞える。そこに酒と肉と色の濃厚な歡樂が味はれる。 らな

<

さる彼 は 本

の本心だ

700 2

3 は

松

彼は

0

出 The

來心

7

75 心 72

カン

9

72 73

0

か

僧

彼

本

は

彼

0

では

かつた

V)

カン

しき 0

は 心

彼

てし て戀

まつ

MI

てユ 後

は

悔 3

S

7 つた。 は 本 彼 來

縊

n

た。

V

I

ス

12

最

0 接 130

吻

贈

æ.

ス

1



*

では 分 T カン 777 8 > T 0 72 的 みを募ふと 37 그. 8 たら 72 工 ス 13 工 72 Jt" を愛 は カン カ> は ス ス 7 変し 母気の は は 0 ユダを庇 -17 0 つする 72 いが放 牛 ス ユ ユ 12 76 82 12 ダを選んだの 拋 ダを愛して X2 0 V エスを愛して 雛を V H 隨 如 72 ふたら自 7 に 7 は 38 M 1 < T. どる ス h 7 愛 72 翼 12 わ カン 工 とし 0) つた は 72 12 0 J. 17 だ。 F スな は 7 失 72 分 .T., L だ。 70 恶 13 た、 に集 ス る 13 は 工 なったっ 12 72 見 そして ス 32 力ゴ 縣 7 S を総 72 Ma 1ª 45 遠 J. 工 二 エスを愛し 工 W を愛 17: 3 バ 7 11° J. 7 _7_ 3 を裏 を見 1:15 7 3 グを愛 13 (2) , E 1. _7_ 715 2 す がは、 ス カン (2) 如 72 J. 3 72 1. 推 ス カゴ 闆 儘 羊 0 < 17 0) 3 2 では を変 だ。 ٤ 僧 え に変 Ĺ... 1 1 = 二 0 施 梦 n 72 7 72 は 7 ス I. 隨 老 水 な 相 12 0) かぶ 72 L ス 彼は終 熟れ 1 分に 我を L 覧わた 0 な 老 摅

0 カン 時 9 力了 か つた 心 0 餘 が彼を斷念する 5 Ш حا 拗 H 72 る てとは II. 滤 ス 弘 1 工 來

訓

5

か

カコ

0 3

72

Di"

12

ユ

ス

を羨

h

その美

しき心

2

くても +

彼

エスを離

きることは

出

來 且.

かつ

殺

U

7 は 七

工

ス

にす

を歸

すか

شت

を

殺

し自

度と

干倍

3/5

L

て赦

す心を羨み

h

カン

生さる

彼に

は 1 n

に安

は出

な ス 13. 恨

72

カゴ

V)

真質の

彼れ、

熟れ

カゴ 拢 協

彼 5

(1)

面

77>

生されれ 彼

に悶えて

のだ。

到頭彼

决 來

心 0 心 かつ

1

720

7

堪

5

V2 カン

彼

(1)

心

憎く 邃 7

7

VQ

0)

その

友をよぶ

いくら小さくとも

私は自分で作った家に住いたい。

けれどもやどかりは

さればとて

その殼がやがてその天地を狭ばめて居る。

ちょろちょろと狭い穴からぬけ出して

砂原に這ひ出たなら

やつばり彼等には生きられまい。

作つた影が棄てられぬ。

そのせいせいしさは知つて居る。

愛の花片理解の果。

方丈の狹き一室に

聖い人もあるではないか。菩薩大衆を呼び寄せた

我れと籬は作るない。

家の大小は止むを得ぬ

全く家をなくしたら

菰

う鳴 3

5

7 歌

ら散

6

す

0

7 0

3

噫

K 1 0

2

>

ろ。

٦.

ダ 搔

J

工

ス

19

此

の二つ 南 扉 あ

0

心に

7

カゴ

魂 カジ

7 Ty

歌 消

ば、

肉

12 3

潛

J

7

筆

歐

ï

拭

ふの

6

涙

廖

か

カゴ

肉 2 を吹 5

は

燒

かれ

D

カゴ

心

は燃ゆ。

架を睜 まざ きて を生 3 握 肉 る サ 13 骨 ては 人 12 À) n 1% 卸 6 加 てどち 徹 を カゴ j Ü 一勢し < わ カン ~ 45 削 n -2, はせやう。 しそを美し j 2 ねな 4 踵 7 カジ る 居 弱 6 Ł 5 Ti. は疲 退 て自 5 まふ。 て筆 は カゴ けと vo 5 を追 h I. V 飲み カゴ ス お n 自 分 n 0) 3 叫 やら。 專實 思 となし 7 分 的 出 しろ 又或時 惱 Ĭ. j Ji. くしそを 棘 すて 77 I. にどうして 一リス。 老 300 ス 0) 0) わ は、 る姿 の歌 然し たし 書 血 服 冠 とも 5 を編 あ は を蓋 淳 カン には 12 0 庭 < 赈 此 25 まりに崇く 工 H 浸 現は 厥 事 là スの らて *(j*) み自 和 0) 7 來 ぞわ す。 す 0 L 义 肉 0 な 此 7 兩人が 時 V 袖 分 12 __ 私 m 3 出 2 カゴ 感覺 ダをどうし 此 T. 72 4 -7 カン 点で 學ぐ n して仰ぎ瞻 0) 身 Z. 1: 5 金 ス DX. 我がを 0 自 は は h 14 槌 居 0) 暗 扉 白 る 肩 隱 分 0) * 3 It る。震 く を開 は彼彼 ----は 盃 に凭 1-2 手 2 1 バ m

> 心臟 9 南 る 为了 か 雪 は 此 0 カジ 0 頭 の統 ----でであ 腦 15 0 0) 12 12 に憧 三つの t 腦 ら自 3 憬 1 脳学球 彼は क्रा 分 9 は 7 1 均 2 動 D ĺ る H 12 カゴ < 75 enshrine to L は完 其血 V 6 液 70 全 を循環 る。 12 動 4 れて 5 7

たし とな の戀 る 0) I. 6 人 7/3 0 ス は た。 は から 神の な 抱擁するとき、 = ダを カ> でとなりまし 2 5 ダ 5 は 擁 < 力> 工 ス 12 厥の 720 然矣其 縋 時彼 3 わが 時 は 厭 115 0 击 E ŋ 時 2 0) 殿》彼 わ ストは 堂に日 L は E 生れ 人間 ふわ 15

亦實 れ皆 富 めて 真 二 N 0 的 念 に ス ۶۲ 15 I. と言ひエスとい人是れ單に二千年の昔 居 2 な汝 る岩 1) カゴ 卡 点 サ る 深 7 # IJ -7. 者 グ 工 ス 3 V と言 是 0 ŀ と言 0 戏 工 二大事實、 0 聖書 を RI サ ガ 眞 17 迎 は ひ知らずと否 ひ「學者 transfigulation 實 ンとい 13 へん 我 汝 友 に聖書の であ 3 か 一と言 二大 N 傳 12 <u>г</u> め自 る近 h 文明 二大 かし 3 CA デと言い 祭 2 0 分 1 と質 ŧ は ~ 15 S 11 親 源 Ī A か 二 0) 長 泉 TEN. 3 U ダを変 は 友 と言 女 と言 恶鬼 6 0 詳 0 あ 南 稻 V 細 ひ是 30 N を る。 極

え

72

重

0

間

10

か

0

だ

継 120 慈愛 彼 な真 ずし 悶 ころ惹 無 7 3 7 7 ダ Í た 2 次 工 n 3 闲 カゴ わ 俺 た る 煙 似 住 ス 0) 7 7 h た 力> 彼の L L 7 カン カゴ ح せ た 工 カゴ h L 戀 とは ま る 自 n L 出 6 > カゴ 7 ス 彼 ス 9 変を 3 は は 由 7 0 事 0 來 7 居 心 カン L は L 許 出 叔 は 7 B n 切 3 る igo S ち 束 苦 3 來 A 居 5 な 出 I ば 出 13 る 5 厭 な 3 吾 來 離 15 縛 h 安 7: ス 來 S 0 ら見見 は 6 0 \$1 は 5 13 お カジ 毐 V2 S 0 工 GR. ĕ 居 次 2 3 7 しとて 6 カン S E 36 1º _ 12 n 5 E 意 70 13 6 りとて h 3 3 15 ダ は V S 深 牽 な を 変 は 0) る 心 2 ガ _____ 拾 俺 行 は す 7 2 古 L 117 6 12 ス V 惡魔 胸 思 愛 附 得 始 た を < 徹 る ~ かっ 7 カゴ 工 迷 3 12 女 72 6 終 氣 ス 17 底 居 0) 工 宿 J. 0) 存 た 眞 女 は 彼 念 3 32 ス 2 カジ る ス 0 > す 変 を亡 T 實 僧 樂 禁 分 0) V2 T カゴ 眞 最 de ず -7 V なエ 17 -氣 2 德 5 雁 心 る IE ガ ス ス カゴ S 3 そし 13 1: 22 左 好 能 13 也 13 カジ 0 中 ス 12 ス はる悪 7 0) 僧 3 L (1) 2

> 窓じ 12 害し 多く < 僧 ば が妖 4 惠 裏にす S 靈 伦 切 72 0) V 學者 よっ・ 12 事 彼 魔 は 26 俺 る 耀 は Tri 此 8 悪 ち 0 4 力 思 俺 0 行 彼 4 曾 カン 肉でうて ら意思 3 は To は IJ S V. 其 13 彼 す サ 6 何 E 吳 奴 3 を 1 は 6 0) n 南 抵 的 0) 15. 衣 から 抗 徒 3 虐 6 3 力道 3 S す 失 を以 B 僧 0) 36 力> げ 4 11-1= 俺 見 カゴ 5 200 せ 家 他 2 は 7 12 32 稅 75 1113 V 放 彼 12 36 迷 7 奴 縦 は (カン 3/ (1) な 上 15 0 試 9 0 > 戀 5 72 衣 Th 想 彼 E 汝惡 奪 Z 彼 俺 カゴ は 3 俺 寝 迫 カゴ

1 は 歷 祈 ユ 小 爱 生 13° 0 2 羊 0 す n 居 為 から 13 0) E る め 睛 カン 12 5 0 733 稿 72 あ 5 3 6 7 る 稿 3 福山 然し だい 6 稿 め 9 然 方 9 1 7 n 0 13 居 7 à 3 S ズ 6 カゴ _7_ Ľ. 15° ス Ji" は 0 カジ t 簂 失 5 临 俊 え 13. £ n

6 5 70 万よ .Po 30 此 7. V どち 0 バ だ 或 0 人 6 は 叉或者 715 > 先 3 2 0) 2 は 20 相 Z カゴ 剋 6 X à 衷 12 自 J. 俺 ス 任 分 だ。 は 12 Z. 13 3 2-或 42 캎 んな A 73 6 は ば 私 3 腦 3 は 'n 知

n

てしまふ。

工

ス

は

惡

魔だ

正

L

<

惡

魔

美

同って は 3 堡*/什 吳 75 陥 S は る 12 カゴ 分 達 2 な 際され 2 0 不 カゴ 0 佇たか T. た 自 頃 と始 た 場 E 7 縹 家》 12 * 5 7 9 2 12 來 熱 工 0 身 1,0 6 緻 曹 0) 0 カン 7 12 0 V 鉤ぎ髪 終 ズ 6 6 粘 た 6 110 カゴ 入 優 0 お 2 77 裂だ 粘 弘 な め 23 あ + 0 暗 あ 出 た 12 向 12 何 風 怒ぎであ 兼 細 カジ る + 噬 カゴ 0 る 造 2 見み 7 0 V 彼 3 6 赤 階が ね あ を 來 T. る 惚との 75 吹 50 t ī if 毎 3 流 手 3 段(1/10 Ē 42 0 ほ 4 ぞと言 1 n た ず 毀らの 25 餘 た で 顔 12 E 父ち 石 7 は 硘 ح n 6 入 念 文 0 h 12 は 0 2 K 70 1; 1 之 E 易 あ 彼 15 誰 n カゴ 青 粘めれ 相 二 72 h 2 S カン とも 當る撲 は L V 0 8 る だ ع 只 7 カン Ti" S カジ 工 代がた 座とど 焦さが AJ 例 な 0 彼 z H 7 5 工 ス S h た 喧 ī S 物的 0 6 カゴ 坐 借 3 カゴ 3 な あ ス 陶なって 7 喠 7 12 は 往 0 ñ カゴ あ 氣 n 3 カン 70 石 尤 こと V # 6 1 は な 段だ 1 來 0 de 0 ず 72 3 S 3 た 12 3 72 な 大 3 0) 72 I. 72 形 R 投 きな 0) 粘 は ď 12 を拵き 7 神 6 < S 3 0 は 0 げ 何 は 4 自 + 出 グ 妙 3 工 I. わ 6 でも 陶 * 來 12 な ス 12 1 物 7 ス 酒き分 カン か な I. 10 は Ł L 12 2 M Ł Zi 0 0 1 6 3

杜 な るら 時 3 す 6 0) 12 12 2 0) 0 11 恰 自 苦っ かっ 工 力 分 h 打地 好 D' 2 は 0) 出 72 T 何智前 來 4 力> 5 12 上 割から n 受け 7 列 0 0 72 熙知 1 あ 7 土 戲さ 20 る 3 一製社 小 先 僧 7 力ジ カン づ 72 工 1 3 追が ス VO 1 0 は 排に A 3 70 自 9 72 0) 72 分 る 7 0) 貰 足 供 5 は 8 0

をや らる 3 12 然どか 其 ころ 6 D 友 S 2 什 2 返 達 テ 小 0 カ> T 1 た 5 0 F 丰 3 る た 2 2 同 12 0 か H 際 18 1 0) 志 5 る は S た。 彼 る 7 まは は 7 j 硬 6 0 大 きな 3 ば 36 ılı 短 7 攻 力> h あ 仕 は 0 鳥 ス 0 b 9 0 0 事 0 S た。 15 は 森 た 2 カン 72 12 か 尾 圓 I. 0 鳥 恰 36 拵 知 0) ス 指 る は 印 いかいて カゴ カゴ 好 6 5 槲 0 選制は 塊をか カゴ 6 あ 工 た 1 甚ん 揑 がりあかた 澤 葉 を 彼 庭ひか 汉 3 豚な こし る 山 ね だ 0) 0) b 0 力了 南 2 鹽が 每 出 時 8 女 0 頸 0 造 9 あ 梅は6 12 來 K 5 12 T 7 0 3 カジ 無 U 12 7 ri 12 10 隨 72 慥 工 事 其 彼 'n は 41 3 72 分 鳥 と当 Z Ŀ カゴ カン 等 等 2 熱 7 Jr 13 は __ Ē 偏意見 方 2 來 72 彼 0) 心 鳥 だ 7 3 5 0) カゴ 10 斜そし 0) 先 ば 鳥 出 事 偸 カン 735 な 20 生 7 小 てかって E な 5來 翼は Z 4 0 5 カゴ 見 形 宛 T 13 T. S 輪や 12

慕 位 境 6 4 < 12 770 神 質 神 弘 松 工 1 工 12 300 篆 活 離 牛 13 ス --7/0 死 るかテ 4 石 糖となら 6 3 吾 きる > 前海 我 南 20 R 倪 各 歷 0 0 表象 象 す人 CK でたり 7 12 I 製見き 夏 麗 南 6 ス W る。 12 3 あ 今な ALL 3 工 然矣 ŋ In 12" (7) A ス 我 7 1 は分 生 物 ţ, 世 To きて を迎 -[]] 吾 に是 4 0 人 製 0) へなけ は र्यु 13 32 T 0) 己 苦 TIME I 12) 3 *L 47 3

雙兒 1 n 3 我 は 13 6 3 5 ...2. -4 スと 次 73 3 Ł 15 T S (0) 二 75 か 3 n Ti. 力当 てとで 1 (D) 3 n. 為 旺 17 力等 0) 愛す あ 生 É きて 5 分 50 10 1 き幼児は 4 (0) 1 限 6 此 D カン h 三人 力当 献 1 0

斯 ン 3 de 必 は 西 ح < 解 洋 成 0 カン 7 らと Ě 長 5 (1) な 分 1 -70 したゝ 18 V 0 、彼等は 書 解らな 0 めでは 2 V 來 72 工 な M 77 So 13 蘇 を解し から 梅 之は 冷聖 5 ようともし 彼等 書 カン (1) 斯 解 カゴ 3 釋 P ソ から 75 どう 0) T V. P Jx

300 E

30

72

S

72

最

初 バ

の二三章を讃

んだの

弘

で站

5

6

-12 10

w

-5

53

7

w

v

工

フ

0

丰 200

ij

2. 17

}. 1

呦

胜

雪

0 ラ

越

後に

彷

徨

てる

デ

m.

ŀ

との を網 實 ころ深 る由 く之を は 777. 果 130 7.7 (1) 杜 して 物語 Ł 3 讀 砂 佐 73 を踩 共に と其 < 源 4 do と見 梨 如 0 S 3 下る つた。 瀬 艘 派 から 何 0 12 森 實 13 3 る 度 M ことが 3 自 2 を RE ことであ カン 0) 私 < 埋 悔 僧 分 寓 るま 3 意 は は 的 いめ この 自 を此 H 分 1 0) 置 得 分な 來 5 た幾 思 0) 500 强 索 15 72 な え V 度 カン 17 3 b 80 カン 立 瑞 7 1 12 カン 9 72 湯 買 TH. 13 夫 解 83 11 72 1 U) 放 何 0 S 30 今よ 差 7 カ> 二 7 感 ば 1 攻 しき 3 グ あ 7/6 0) 6 5 0 さんん 其 3 カン 後 示 Ĭ. 知 滇. U

0 I.

家な父にさ を で、 供達 15 賴 なて熱心杜鵑こから貰つ 1 73 h 工 ス 吾は等とみ に話 ス 6 20 カゴ み みん 仕 まだや 合 1 カゴ 7 せで たことが 心 3 些 つと五 5 南 5 南 沱 欲 (1) 9 120 陶 ある 0 L 0 7 相 I 外 つた ところ 0) 0 0) 粘 13 親爺 でも 居 7 時 顏 0) ~ 130 L 0 72 12 事. 吳 13 ナく 1 は Œ, 座 3 隨 V ス n 或 カブ 6 優 ----4 72 分 70 此 0) 2 2 例なし な 不で界親で限 は 粘 K 日 度だ カジ C.C. 彼 今 士 13 まで 0 切 20 地 T ٤ 6

で塗 る鳥 けた らとして ユ 25 お待ちよ、 Ŋ 至 して日 120 どる つて を拵 は るまで すことが 2 7 工 工 兩手 こん 7 日 る 光をひ スが土柱鵑を街路の水溜から採つた日光へるかしらと思つて額越に例の一瞥を與スの方が自分よりも數も多く美しくもあ ダ その は 光 仕 Ji" のを見 を動 どは 自 舞 は イヤ 二 出 分 彼 つたくらうと一生懸 ま、 ダちやん! つてどん 一來な てと 力> の如き燦爛で包んでしまつた。 工 0 して 摑 見 ダ す 도 B つて、 カン 0 4) なに ぼ 小 ~ た。 5 6 光は 5 Ł I 素早 和 い手を輝 ユ 逃 ダは 73 V くユ スか 鳥 げてし 力> 17 命に 狂喜 0 72 ダ 呼んだ。 いて 言の喊った 點の まつた。 カゴ なった。 捉 3 彼 色と 0) 水 聲為 ょ 指 12 足

> 潰 つかと をみんな破滅にして了つて同じ粘土の塊となつしまつ 曆 ち 0) V てる自 L 8 うんにやしとユ 鳥を彩色しに僕いま行く 7 ダは衝立ち上つて、眉を顰めた、そして緊といけないぜ、俺なあこのまんまで上等なんだ』 た、一つ又一つ。 進んで行つた。 九 分 だ。 0) 小鳥を それから行きなり鳥を足に ダが 可愛 その 到 應 頭 V カン すつ 7 < 時 かっ 72 5, 5 I 「お前 ス i 力ン ユ は .7 ダ り小さなどれ 工 スの許っ 、實石 居 13 自 能のい 0 の如 分り カン に觸い H 3 0 小 7 カン 鳥 雅

调点

から取 て居つた。

出

3

世

る如

に然うさ

n

るの

ところ

が日光は恰度繪具

真實の喜悦品が豊家の坩

I

スが

その小さ

い土杜

副

12

日 を真

光

を擦

かりつ

灰

ける日光で彩色して試たいといふ

17

カン

0

0

光線

は

水

家々

そこらに なった 色の鳥を輝

在 5 る

汎其 あ

ての る。

もの 太陽

に實際美

おうと て丁つたの 133 ダ 70 らと笑 たかい は 二 足を退が、順 ダは暫 足 を U. 學げ は を見て、 S て足を駆げ じ て其鳥 深 72 い沈默 的 た 溜飲 カゴ そし すっ て其 の種 0 下が 7 カン また つき 6 工 つた 灰 ス B 色の 0) 8 10 鳥を視詰 3 躙 今 粘 B 土 0 た。 21 0 12 踏 から 化 め 7 7

彼こっ 73 V から Ž. ユダはニター 0 力当 1 力) 生 えつい きて <u>__</u> I. ス 2 は聲を T 歌 3 張 歌 つたばか E げた 3 3 うで、 _ S 君 ふことを 何 またしても 5 す 君 る 知 0 6

2 ならら、 は 思 母 13 36 又自 9 4 カン た。 2 九 Ī 720 5 分 3 0 ح 不なの 最ら自 在すれずに n 工 まで 自 ス は は 分 分 12 歌 思 0 を歌 は 這 小 0 12 た 獨 麼 眠 3 医に豪勢に、 9 6 S かか 彼 ぼ 自 等 0 5 5 分と交際 は だ 自 6 お てく 淋 36 V L, 25 0 ~ た B 游 和 7 V

空がエ 0 光学に 例らん 來 ツ 1 0 と尋 ぼ か 5 00 T 來たやうで る と話 搖 這 0 丈 2 0 柳覧を 隙ま工 工 和 あ 6 潰言 た る 32 ス ス L S た。 を左 水みあ ば 赭 な L カジ 來 運っり 語 * 工 カゴ カン ______ 30 た。 右 頭 6 9 ス 0 6 ス 工 こな 27 は P 夫。 7 17 ス 12 7 カゴ すぐ 手 0 附 其 樣 0 鳥 加 る る をの け 重 小 V 內 7 73 K から 名前 來 72 其 だ 鳥 h 0) V 0 八百 6 幾 事 せ 72 0 水 水 は 力> 後 囊 を報 7 屋 み ž は 6 坊や を 'n B 水み屋 ろ 多 7 力> 運 30 h 八 理 E 13 0 機親なまたで t 解 72 外 0 V -60 白 カジ 圆 鳥 夫は 6 る 屋 一が驢馬 大 72 12 1 は I. 12 砂 カン きな E 歌 5 ツ 0 工 虚 711 5 ス +}-其 飛 分 6 3 S

72

Jt.

スて

は

IV

ダて

0)

方

*

指軈

夢

#

21

13

聽

2

た。

7

彼等

カゴ

力。

た。 な 13 Z!" カン S 17 まア C 2 カゴ 2 た 彼 工 前 は バ する 押 は 0 百 麗 2 鳥 默 屋 な と八 n 鳥 13. 2 は 名 72 17 愛 * 3 百 文 想 對 7 ダち L 屋 ۵ 3/ 3 自 は T つやん 怒的分 101 7 と言 0 3 馬 つてし 製作 は カン を 持る 0 歌 CA ~ 女 7 力> 75 6 る 0 V 7 カ> > カン 的 5 3 工 カン 離 訊 43 13 6 0 ね

鳥を

0

踏

碎

S

To

どん

1

行

9

7

J

9

12

裏記 n T 호 紅 10 溜 0 0 手を身近に日光が た 色であ 低 芬 10 大きく 9 八小した木 3 7 3 3 工 は陽炎らて 市って 夕と共に 3 ス 76 つった、 門心午か後 7 0 か 0 輝 大 7 かなん 7/3 とは 水溜 4 災 1) V 12 そし 、てを彩 來た 過 3 1 3 7 T 503 ぎた。 \$ -Y た h 敷 0 につと挿 7 S 込ん 7 3 0 石 顏 ^ 0) 0 を枠に 落 鷲 ÚI. 此 To 2 0 だ。 たい 太陽 間なだ美し H カゴ 0) 0) 南 混 太 飾 は 入れ 7 その と同 つて 陽 入 1 例 6 は と突然 0 から THE 溜ま n 0 力> त्ता 12 [陷] 0 1 挽 時 3 光 0 'n Ī. 線 門 傾 V 然 る カン 2 V 工 は 7 0 12 7 V 1 自 工 0 ス 7 はス偶は 2 Sp. 町 H 3 ス は 5 72 端づ 0 來 街路路 薔薇 22 夕 0 72 昭 S

机 兒

6 カジ

書 庭

7

2 九 な

0

6

私 は

は 知

毎 らな 人間

H

力ン 20

5

n

カゴ

12

な

2

0 る 6

です。何

故

カン

E

ス

ŀ

たる私には

0

魂これ

宿 7

0

0

游

3

る。

私 W で、

今

4

15 21

S

敎

る 6 0

0

カン

3

知れ

W い。(さう

0

7 彼 M

2 0)

る

間

\$ 愛

たやう 此

謬で 布せ と宿 教者 ふ事 るとい 2 なら から 4 は カン 6 矢張 る 他 事 人と 5 は あ 見るべ 命 は とを禁ぜら 1 丰 n と降 1) 昔 とは 0 ふ事 17 3 人 6 7 間 あ 私 V ス 0 W 27750 Z を縦 55 私 妙 を言 解 3 ŀ をると。 る 0 7 76 H は は カゴ 獨 ダ な n か。 信 のであらうと思 12 5 出 É は to 0 0 3 を度 る攝 見 12 72 獨 來 73 -6 人 ず 0 子 悪 7 私 5 6 思 る 500 フ 力兰 0 觀 外 理 言 供 12 居 想 V 私 子で 若 視 ふで 達を カン 然 0) ば 12 カン カン 1 は うし やん た L 御 0) 砂 5 預 あ 7 手 ã) 生 原 A A カン L つて でとな ら云 罪 12 0 あ 30 25 \$1 間 間 T 1 6 Ł 依 7 其 た を \$2 說 をる は 縱 10 個 聞 つて 0 は S 0 y 75 個 邊 T 真 る 2 < 12 人 S 0) 公平 5 理 0 論 ds 人 0 事 淚 7 春 だって 0 幽 心 V2 6 4 12 雨 あ は横 太七 遺 < で は あ 12 傳 n

櫻 底

77>

36

知

5

和

F. .

實

際

孤 あ

15 n

私

15

孤

軍

圕

0 0)

大 流

阪

、城

るにせ、立

な、籠

心 7

兒等を

2

叉

人 獨

カジ

ラ

0

花

西

行

B

詠 V たく馴

2

72

P

情に

3

ろ

30

私 n 乍 12

は

可

愛 ٠.

兒

12 137

的

82

72

ば

散る別

こそ 然

な

n

7

泪 5 n

0 15

出

るやらに

V

Ł

ほ

心 V

カン

6 與

可

愛 5

So

力了

、それも

諸共

12

は

と思 V.

二山

0 時

越え

1

實現

的 內

建 的

設

時

代 的

在 b

る

だ。

以 備

豫

備

的

進

生

活

0

感想

を洩

7 0

5.

眺 0

T

M

現

在

几

69

な 0 は 12 7 ス しまし 居 方を見や 彼 羽袋 0) を カン つて 2 4 つた、 踏 眼 た。 3 た h 制 は み 2 踏点原 な す 0 H 鳥 0 る 毀さ がエ 7 6 3 The state I 720 踏 チ は ス カゴ 力 12 は彼等を蘇かいま してしまっ 危險 杯 ス カゴ 柄な p にな 0 彼 75 1 0) 工 大き ところ 女 0 S ス つて、 は 迫 つた。 は 15 0 る B 3 6 誰 S う遠 生が 砂 Ó 12 か 兒 > カン 5 後き で 意 7 達 助 C る ユ 0 强 D. H な 12 42 せらとし カン は最早や 介せず 3 は V2 ST B 7 カ> T. とお 事 = 5 ス 0 南 つし h ô は た 办 從 つた B 7 I. 12 V2 お カン 工 5 容 5 手 ス ス 7 田 办 0 を悲 碰 ダ 3 1 を 工 5 鳥 は h 顧為 ス バ JE.

『お飛びよ、お飛びよ!』

トと拍

つた

そして

彼等

12

叫

'n

だ

5 ワ な悲 る 飛 て氣遣 あ と其 け 九 痛 は 7 0 B 飛 行 は カ> カゴ 重 3 K L 9 文 0 げに に泣 だの た 0 12º 3/1 苦 は 鳥 き出 悶 を見たとき、 2 ソ は 鳥ど 0 7 小 こなら 5 時 L した た。 ds S 翼を 大 カゴ 0 彼 工 丈 7 を見 た 動 夫 ス は 大人の 安 カジ 0 カン 頓がし 命 N. V だし 見 令 7 な 人達 3 0) 屋 12 翼 た。 根 6 2 南 カジ 8

> 土鳥を経 樣 を愛 ぞ踏 下 P 13 力了 だ 1 は ダ 供 ことでせう は -___ 人 お お を抱き起 た は 0 38 其 7 誰 りする 0) 身を そん 光で彩 間 72 前 前 5 9 L み 7 如 た、 蹂 中 2 は 0 I. つけてく Ś は み 而产工 、今自分 7 知 13 6 遊 ス 可 色し 彼を歎美 け 真 哀 カジ 5 び 0 ス L 番で記される 似 13 相 て、 を觀 僧 け 7 0 だ 頓でもないことですよ』(完 た 前 L 争 12 な子 n 工 0 V 力> た。 毛髮 0 彼 給 og. ス で犬 り無生粘土に生命 は 7 2 らに らと企 だ、 女の 0 よ! おた た。 L Ł ころ を推 彼 足 7 マリアは先前になったのが にな お前 しと彼 膝 願 君 12 カゴ グ 9 腰 0) は 切 るや てな 12 0 4 丰 5 た。 やら そこ を立つ 足 ス 6 のやらうとしたこと 0 女は 5 せて を 1 12 V 畢?舉 な者 0 7 12 < ユダに言つた。 た。 ですよ。 愛撫した。 竟 H 埃 2 13 な 0 だ 自 5 7 7 0 息 力> 二 はどう S S なら 3 Ti" 僕 分 な 5 T 始 は 吹 同 を ス どら 総子 21 時 身 0 お前 7 込 お Œ. 日が決 7 ス カゴ

機械 ら喜 n 翔 するに な警句 10 Si 說 南 あ غ る、 50 勿論 E/18 つで 人世 物 る議 此 恆 0 界 の三四年來の tion 0) 滑 きょうとは 論 難問 走で 0 結 句 か を自問自答 は る 簡 思索探 思 單 とに は 6 な 求か あ Vo 力) え < る 然 此 0) た 私 だ。 71> 0) は ・と自 3 あ 生 要 命

告す 共決 雪 られ 12 n 2 工 そん 聽 る より 大 7 2 用 は なる謗瀆 せねばなら る る 3 カン ○なる 和 吾人 私の 生 2 3 君よ耶 生の 1 は 22 ン 淡 八は清朗 る。 12 牛 0 ならぬ。 リス で 衡 依 13 み 一蘇坊主 人生 僞 あ ¥2 議 臣 2 -論 なが 主 ŀ 賊 書 る 一要問 傳 を 子となる事 0 明 Ł 数を主 をも 今述 殘 滇 カン 72 あらゆる誤 なる る事 るやらな宗教 題で 忍と卑 0) 張 進 ~ つて、人生 すを止 ある。 步 知 は する上 と建 勿 性 陋 L とは 謬 な Ł めよと。 n 設 民衆とコ 12 圓 W と罪惡とは之 一本然 それ なら 於 カゴ とは カン 15 W 然 私 私 3 成 0 よ 3 熱誠 のり生 是非 に収取 要求 ンヴ 就 かそ は 忠

利 する 功利 なる IJ 眼 事 ス 的 功 m で眞誠宗教 7 能 独 n 30 Ty 通 傳 今 ベ 目 3 つ > 0 歐 3 米の と稱 面 か B 大家 を る今日 -7 發揚する 12 迷 信 を海 吾 7 人 衙 35 力 は 固 外 め 餘 定 より 宗教 丸 程 輸 銳

> 生きた質な り外 なら な る金 なる位 reflection を事とし v た は 12 VQ 得られ 0 と思ふ、固 73 10 B 华 Vo 在 固 0 面 0 る 南 70 定 0 礦石を碎 あ 世 750 して つたも る。星霧 界 死 を分 九 固 13 だ 結 75 S 月 H て再 S L it から た c x 1 力> 摑むには便利であ 生命 5 ~ 3 Oi 地 之れ は 殼 0) 次 5 Z 何 其 IV 2 0) 新 中 亦 7 30 14-0) らし 創 熔 I しこ 定 造 は P せら 0 的 1 化 S ۵ 料 73 鈍 石 如 る。 3 n

時、 る時 孤 る 0 カゴ 3 生 獨 時 私 n 12 私自 3 力了 カゴ CK 多 亦 な 入 2 「身の つて Vo 3 V. 乜 あ 拙 世 (1) チ る 10 大字 劣 X 0) CA > と陋 中 Ł 宙 身 5 0 久 小 相 訛 12 t 6 な とが悲まれ は 應な要求 \$ 1 國 カジ チ な 私 ヌ 民 30 0) 2 0 カ> 末 技 久 ですら る。 6 w 孫 とし な そし も實現 3 泪 12 7 て又 思人 < 孤 \$1

7 現實 月 カン 十九 理想 日 か主義 0) H 記 カン 13 亭樂 私 カン 力) 5 13 2/4 6 2 難 歌 を詠 き人

然し、 私 は何れにしようか と迷 らて 70 る 0)

>

n

うな 55 步 叉 迈 藉 私 n 0 -t-" を失 とな め H 0 は 7 悲 JV 21 文 是 慘 0 T 7 私 R 2 來な 認 な 腕 13 0 0 ~ m それを實感してなべば生涯取返しば る笑み 度な T 岩 す る 力 12 やり る S 所 主 同 1 生 義 6 12 謂 意 彼 あらゆ ٤ を浮 た 命 等 違 を讚 す る る 5 を は 15 War 燃 ば ~ な 仰 6 石 る修養は B デ 3 から 願 Vo L す あ 11 child 7 る 0 i á ス 5 0 2 50 見た かな 7 談 で 子 7 ダ 然し を 0 72 不 あ 迄 は 若 V る。 人 池 幸 横 5 力> 3 V き日 幸な と知 な 道 類 5 6 油 0 > る は 再 揚 人 12 0 面 12 き人 間 優 な 13 2 A V N CK 12 あつて、 立 7 岩 つた 越 は 0 S S 12 力 0 0 3 V 魂 種 1 叉 子に 0) 12 る は 野 H カゴ 族 力 20 2 慰 彼 蠻 は

提 る。 12 孔 K 如 牛 寸 供 な ば 敗 平 4 殘 な せ > 0 凡 5 量 和 ゥ 0) 和 身 は 化 を見 ¥2 は 12 P なら は 公 な 的 7 善 行 横 た 6 五 Va 言葉 な 2 を見 分 V2 へて 0) 0) ~ C 3 6 言 魂 何 3 7 111 あ を 生 3 為 事 2 6 (055 は 3 ~ す 論ずる 0 は 3 意 剪 力 る **>**10 我 義 無 石 事 0 を托 台地 より先き 13 限 は 私 6 Z 76 はな ò 何 2 處 牛 行 3 n 7 罪 力 < 3 3 S に生 再 つた。 也 To 宝 ~ 当で CK きやう B S きた 世 S V カジ 17 は CA あ

> 修養 生きて ム事 は 眞 心 pa IE 生 0) を積 は 直 を忘 史 カン 5 13 6 2 × なけ 5 h る 却 12 授 42 だ 力了 せ 死 け n 被 5 義 時 叔 な 務 確 は 和 n 12 ば 生きて 12 と特 實 なら 2 は 命 13 17 n 權 V2 75 is で m と信 あ 70 ¥2 8 S 0 7 る る。 > 有 0 た 組 ず 0) る。 心 す 織 0 6 7/10 我 75 的 à) 3) 0) 私 等 女 る 15 る 此 は は > 私自 それ 0 我 全 12 敵 牛 n 身の 丈 5 \$ Ł 戰 H

たやう 本とな 此 12 ^ 1 る 0 りを見 K 生命 ば、 私は 得 事 對 問 カゴ 0) は、生命機械説に関すると物質との関 は Ũ 題 た epithet 12 るやうな 7 3 出 此 出 A 2 解 V 來 0) 質 數 間 な n 决 ·T 人 7 事 は 來 车 カン 0) 12 思索 72 比 は 來 0 2 S 直 720 < B 喻 会社 20 埔 -----1 問 對 5 事 日 は 的 3 秘 た た な す な 否さ 0 12 de 畢 にすぎな 措 矢張 F 後 0 氯 竟 る V 9 常 此 ない。 最 南 カゴ カン ず 之れ 喻 異 後 0 12 す 7 V 6 720 最 重 30 最 16 3 0 0 12 今 20 CP 間 たは 聖 近 る 3 カジ 實 h 哲 で 解 題 17 漸 學者 12 殘 7/3 < -6 10 6 6 决 --9 東天 あ 刻し 3 來 生 私 0 カン 枕 72 命 易 片 る 問 は 力了 問 とす は 0 解 1 題 凡 知 5

を感 間 事 私 17 7 ゲー き思 生 0 カジ は 能さる。 私 すか 0) 謝する。 テの H 0 索 醍醐を味はしめな 本 23 を樂む事 所 然 悠 謂 何 而 0 17 生活 故 た して雑駁なる神學を る拔粹哲學者た カジ 3 なれば私自身を私の全存 を持續 能 さる 我 を育む でする為 静かなる冥想と混 77> る事 < 0 に生の 7 70 を発れ 私 脫 あ は幸 して真の人 る 泉 在の中 に汲 らる事 カン N にし T. b

76 なやましく降る そして又寂 を思へる。 V 春雨 H 0 歌 に胸 3 か V た る むた 14 ひとり Ó み

涵

n h ら見られてゐる此れらの兒等を可愛いものとして であ 私 な下らな 來の であ 0 5 要求 私 る。 7 20 0 生 な 私の宗教以外 は を V 如 歌 活 V 見厭 を語 何 などを引 と語 10 何 はし る處 る事 處 つて見 まで 4 0 張 13 へ行つても實現 もの 5 72 it 行 出 した 0 いと思ふ 0 として現在 1 ゝやらに世 多 72 カジ 私 0 V 70 ば 6 は L 何 あ 712 うる る。 處 0 私 りにこ 0 まで 事業 は、 中 2 カコ 26

> 見出 を執 るの 5 して度外視せられてゐるではない \$3 \$3 思ふ度毎に、 じて此 の外に置 つであ 此 した文けでもいくらの 彼等は世 のた私自 0 0 らる事 事業 る。 acquaintance to 私が 人間 0 は 7 身を有難 將來去 智者學者宗教家から異 如 何 性 あの危機に於いて斷然た を高 に大なる損失 る V 弘 永遠 事 潮する私 私 0) カゴ の幸 に敷 12 d) 私 2 カン で カジ T 福 へずには あ y 砂 であらう。 つた 0 例 彼等を視界 生を をら る處置 ららと 7 通

ら外に何の助ける 教であ する。 私 ある うとし ゆつくりと計畫せられん事を待つ。 れて私自身 として は 學校 友を侶件として大いに戦ふ務と權とを有つて キリ カバ ると思ふ。かくの如く希望は常に前にある。 力> なかつたやうに、 12 ζ 大なる飛躍の為にあせらず、もがか、事情は違ふもの、似たやうな境遇 12 3 ス る中 ト教は かへるのだ。 3 0 沙 便 から成績によつて運命を決 のだ。 利 7 倒さるれども亡びず」 要 凡ての事は 矢張 私 一らな はそれらの なら私は私である 私 私自身より生 4 勇奮 の宗 ず

と私 だ 的 舉 0 ें 1 るま 違 7 あ は 健 解 害 げ 闲 る 72 時 3 題を持 鬪 Ś 質 せい 足 楚を賞 難 3 12 其 到 6 力了 7 V 力> では に或 思ふで 底 叫 5 6 な A カ> 處 S あ イエ E か 44 3) 獎惡 弱 カ> R つて 既 所 は ŀ やり S め な る 3 S 何 ス 更に それ 到 私 3 所 0 鬪 卑 V 人 あ ルス 其 處 せず と思 3 自 9 事 多 5 しえたりとす W カゴ 彼 カゴ n 內的及外的 身は えな 5. 0 B は は þ る女けでは何の 切實なる例を 0 V 12 我 は 6 1 は 1 最高 あ 36 不 n m 誰 のはとにかくとし ふやら る。 然しそれ 合 9) 人 5 S 6 內 何 0 決して 煩 別言すれば > (1) 理 間 力了 的 必强 で、 之れ 0 もの に 悶 0 1 0) 3 して である。 と矛 悶 5 12 求 奮鬪 S この 未だ 3 なく 惡 N 12 は 躁 だ ス 1 値 けば、 と戦 0) 對 皮 缺 盾 カゴ 1 カジ n 0 ずる悶 打 私 ファ 相 EV 6 丰 陷 か 1 私 3 總 ス 最高 T は IJ て)一生を L 13 もないと言 0 あ る は 村 稱 F 其 事 見解 2 所 丰 ウ ス る 共 私 な 0) 过 1 なな ŋ 鳴 Vo 謂 ス は 躁 生 自 ŀ 0) 0 6 な から からら 煩 る 的 ス 意 Ի 3 0 0 活 ž は を 身 (私 12 健 義 的 悶 あ 感 ŀ は 3 あ

> て嘆か は -5 悲み 現實 事 和 を (一月二十九日 ふ」と歌うた苦し を努力に代へて若人は の誘 思 5 6 ふが 7 V2 H 文文 > K 72 111 17 健 我 生き難 鬪 n い私が をな 5 25 異鄉 すの 弘 存在 なん 尚 6 全 0 するので 空に生を運 12 お る腕 る。 0) 時 を無し 0 ある。 2 あ

あるのであらう・・・ 賴 まれ ふによけれ てとの ば 3 を さら す カン 5 n ど心 カン Ł 2 歌 思ふと、 よりられ N あ ら見等

然し、

私のやうなも

0

12

3/

生

<

3

日

12

笑

1

時

から

ども る 36 を受け 視し はな 公平であるとい 「悲惨なる孤獨」を抱 て故國 お 私 13 か 7 V 0 真なやにか 運命 73 7 カゴ 自 を放は 湛 いやうな日 それ は私をし お 12 分 なとし だ 3 南 P ふ事 建 で n 0 て在 窓 7 1 4 てい る上 カゴ 暖 は 12 6 Ł 3 あ 書な よろ 私 きて今日 V に於 3 る。 春 は 力> S 1 ح 或 2 > 0 0 皆我 る意 る時 何の は 日 歌 T V 和 てに障が學 も亦以 幸 3 3 味 でなけれ 0 不 多き我 0 か 卒 日 校 に於 9 0 カゴ る 3 3 點 カン な n あ V は 7 自 73 カン 0 らね たっ を蔑 5 然 抗

米國たより

高橋清吾

農村の宗教

リッチモンドの教命

故 致 5 1 研 な 0 1 なら 究 會 諸 6 1) F, 米 州 あ 國 0 タ 0) 7 でも 73 米 は 6 る 1 有様を紹 主 あ H 國 基 1) カン 5 至督教國 義 n 久 3 FP サチ 过 > 0 民 生 米國 如 基 介 0 活 6 何 督 す 子 7 ある。 な を 教 る 0) 孫 と が機 知る は る制 根 カジ ツ 底 最 名 Ŋ から縦 殊に 12 B 度 12 弘 5 は先 は 必 岁 0 218 1 要な 基 6 = æ 解 督 あ 7 う > と流 米國 教 1 す 事 る 1-る事 6 は カン 1 の宗 n 殊 あ 6 清 ン は مرد 12 る。 190 穀 教を 居 出 徒 ラ F. 舍 旧 來 工 0

られるの y 氏 ツ 0) 7 であ A ۱د E で 1 1 B 1,0 校 1 0 幾 殺 F 多の 大學 會 は 慈善 南南 組 學 合 部 派 業 出 0) 敎 0) 會 奔 人で 走 0 牧 6 25 3 師 て居 3

> の説 につくさなければならぬとは實にク " 0) A て人 教會 週 6 1 ブ y 人 々を引上げんと努める牧師 日 種 T 才 力 日 であ の奮 数 靜 人 1 指 1 R 不 ス 曜 は ŀ は 可 L カン R H w の代 と鳴 鬪 慰 神の な る。自分の身體は神の 言 0 ガ て急ぐ様 0) 心めを 0 四 眼 を續くる準備 朝 1 表者として飽 聲として人々 部 0) 歡喜を覺え 12 6 1 響 與 合 は 渡 らは は質に 唱 神 2 時 られ 近 0) 譜 光 嚴 < 0 美歌 羡 L 5 3 1-をするの 力》 决 0 まし 近人のため、 To カゴ 12 る 73 ると教 クレ ولياد 心 る 0) 現 ものである。自 眼 い程 也 美 は 朝 若 0 1 臍 にせ きも 6 は 32 0 0 る。 r 南 3 カゴ 1 祈 Ti 會 ン 氏は まる。 1 30 固 あ 0 老 5 S 9 111 る。 牧師 < 0 爺 N 73 氏 獻 L 聲 3 0) 111 カゴ ため きは 一と和 4 分は、 C 力 力ン (1) ATT 祈 < 1

は皆日 午後 矅 學 時 校 力> ら二時まで日 、と行 < 0 6 あ 曜 學校 3 カゴ ある。 -J-供 達

V

理

想

で

あ

る

、確信である。

種 基 督 午 會 青 合 時 车 カゴ から あ 力了 7 開 教 月曜 會 カン n 0 H 婦 の午後 人 木 達で組 雅 日 八時 0 織 午 24 カン 後 5 n . て居 は 八 男 Sti カ 女 る

所もなく、不幸なる天才もかつてから詠らたでは ら楽しまうではないか、何の恐れもなく何の憚る ま、なる日を生の真た、中にた、一時でもい、か ないか。 ねる。我れらは自由の子として生れて來た。**心**の

H 「幾何も生くといふには非らじかし心のまゝの一 るがなし

了么。 が、それから室が暗くなり今日日曜の朝此處にて 御詠歌の音が下の路次を流れてゆく。春の日の中 私を乗せて地球がどこまでも東へ東へと廻つてゐ を。… 此の手紙の大牛は昨日日暮前にかゝれた る無限の展開を思はせるに充分である。・・・ア、 春の日が暖く窓にさす、明る ――(一五、四、九、浪華にて)―― い下宿の二階は、

心の 濱 邊 坪 田 譲 治

どこであるか解らない心の遠い~~彼方に 人に知られざる濱邊がある。

淋しい風が吹いてゐる。

波がハターへと打ちよせてゐる。

永年の問風にそよぎ 岩山の上に茂てゐる草は、

枯れたり芽ぐむだりして來たのである。 太陽と星の光に照らされて

大空は蒼く上にかっつて

けれどもこ、は一度も人の眼に映つたことはない。 そこは常に靜なる秋の姿である。

誰れも訴ふることなくして

昔から斯様な淋しい己が存在なついけてゐる。

永遠に風は吹き浪は打ちよせる

我生命よ、淋しき我心の濱邊よ。

6

あ

る

3 Ł 事 利 る 苦 神 75 人 死 6 圆 居 他 繭 h. あ な る 6 威 者 民 0 カゴ は 茶 Ł 私 る H 12 17 家庭 9 服 は 對 K * 諸 は る。 あ 難 12 カジ 歸 0) 人 村 朝 73 す 弔 君 何 0 る せ V 何 V る教虔 3 う少 ふの 國 は は > 0 何 0 0 利 を D 0 ĭ it 幸 信 あ 0 あ 何 0 7 め 曉 T n 府 しく 7 3) 服 12 あ 4 居 0 7 る H 12 る 7 福 4 る 0 カゴ 12 居 東 25 0) 舍 ス せ 服 る 何 カン には澤 せし 宗 Ũ 宗 態 北 な 6 は 醒 B る ŀ よ 0 めて 12 度 0 か 2 米 は 致 0 0) 殺 め カン 敘 農 2 は、 1 0 る とは は甚 0) 佛 6 n 誠 山の 費 本義 教を 村 居 あ この 信 る 心 農 な 10 か 事 村 W 木 だ宜 は は る ح る 賴 何 る 迷 であ なけ 信ずる どうで n 永 せ 愛 n 6 カン カゴ は 0 9 信 然る Ū あ 12 遠 0 宗 72 は あ L カジ 時 n 5 佛 る め T 結 毅 13 事 0 3 S 行 事 は 5 勝 る 的 0 致 あ 12 カゴ 25 神 6 6 カン はれて居る。 であ なら 鑑 あ 6 徒 る H 12 世 利 は 0 10 V2 カン 丸で と稱 界 と思 あ 本 3 永 勝 勖 3 め 教 遠 佛 寺 る は 利 Va 25 T る 樂園 私 滅 6 カゴ 敎 す 0 2 力> 0 更 3 坊 5 米 勝 あ 1 茶 0

> 1 博 0 5 ŀ + 15 > 72 致 1 12 博 から 7 居 學 代 + ク -10 者 ゥ vy 6 は 0 n 6 C 1 3 ツ 禮 あ 力 F 0 る 0) 3 J' 拜 氏 致 6 神 說 カゴ 會 學 1. 南 敎 病 凼 校 を 組 1 氣 3 セ 0 中 合 ツ 敎 0 な 授 þ 1 0) 0 を 敎 居 0 カゴ 350 曾 故 6 目 鄉 n n F 0 72 13 る * あ 方 0 w 3 6 0 丰" 18 Į 目 12 名 F 21 h

博 君 顏 12 會 \$2 て、 2 ハヤ あ る る。 をチ Ш お た。 1 觀 0 會 7 12 0 目 事 0) 1 私 Ħ. 招 家 私 ツと 麓 op 0 事 は 教 12 基督 やり + 高 カゴ 古 は 1. 0 カン カコ 見 妣 客 談 三三の を受け 橋 13 自 6 > 1 0 教 戚 とな 方 君 分 7 論 1." せ S 72 居 1 0 13 17 8 0 うて 市 交 時 教 老 7 間 君 未 F 6 也 大 納 七 義 抵 だ嘗 は な m は 7 ツ どは 72 72 奇 8 士 八 居 リ 日 . あ 雕 カゴ 說 6 민 ツ 本 5 72 7 0 3 る は 13 奇 明 お 所 シ チ 17 0 ~~ 熱心 1 處 ザ L 歸 2 で 麗 773 70 Æ K と思 1 博 ば 3 1 40 1 1 0 15 6 な美 らく 下岩 7 + る。 12 私 F. カン メ Z, 18 敎 リックと稱 > は H は 3 私 \sim 2 は n 夫 會 博 0) 0 丰 本 私 力> 1 720 た L 2___ 7 士 72 12 人 耐 0) を Ł は は め 0 18 會 肩 V 朓 最 であ 自 私 1 干 E 間 高 0 8 た 然 教 p w (.. 0) 的 古

を臓 交 する 出 る 會 3 0) か カジ るとの 0 3 あ 6 る 6 惠 + あ 力当 0 る 矅 あ 大 H 一概富 敎 0) 會 校 裕 は 0) な 經 譜 會 費 美 員 は 歌 カゴ 並 其 初 CX 會 12 0 大部 聖 員 書 カゴ 負 分

Es. 醮 23 71> あ B 5 道 た 出 惜 m 0 V カン 25 3 國 カジ なる 7 金 獎學 办 0 > あ る人 富豪 8 3 る 浪費 ので 6 金 カジ 7 これ あ R 6 は 南 あ 公 る L 何 る。 工共事 7 少し n n 居 にせよ 、病院 個人本位 く米 業に る人 日本の富豪 6 國 R 學校 金 あれ、多くは皆富豪 富豪 加兰 の家族制 を惜 澤 6 で使 0 あ I H 例 あ 礼 女 ず寄 12 る様 は 度 倣 な な 3 M 9 6 V 7 で濟 あ 館 力了 す 貰 る 12 3 0) 6

達 る 多 盘 熱心な事には驚 であ 劣れ め め 師 い悲 主 7 は る 唱 少し る 每 B 者 日 事 2 とな 貧家 め de 樣 閑 る n 12 弘 B 10 カン 9 暇 くの 神の 活 5 7 0) 病 カゴ 基 富 を慰 動 な 人を見舞た 外は 子 督 め V 7 敎 とし る め、 0 ない 居 3 婦 み 惱 貧 7 る A カン ので 會 9 0) 取 しきも め 扱 6 は 更 3 あ 南 貧 うて居 5 7/3 怒れ 民の る。 3 10 0) カジ 勝 各 23 る 救 安き 男女 婦 5 n 濟 和 莲 る

> 來な は 民 校 來 各 家庭 0 自の心 な カや 0) 0 S 0 0 de 政 0 あ 村 府 あ 深く 5 0 6 砂 力 どうし N 國 0 そん 家 み 6 0 3 で居らなけれ 2 は も崇高 同 赴 會 Ŀ は 事 な 進 0 る宗 步 あ す る 眞 敎 3 カゴ 0 事 115 文 只 力了 カゴ 明 國 出

3

ず、 ず か使 0 0 あ を H 17 あ 5 雇 何 0 イベ 威 3 2 命 6 ゆるも 人と雖 宿 32 武 カゴ 者 2000 路傍 砂 宿 でも 9 7 屈 0 THE 2 居 神 す 7 は 0 其 0 12 3 1 3 居 皆 6 0 前 あ 能 る 何等 は A カン 6 12 る は の使 5 0 格 は ガ 13 で ず、 6 平 ラ 0 カン V 南 0 0 點 あ 命 ス 等であ 使命 る。 匹夫 0 0 12 カゴ あ 如 力 到 富貴 る。 ż る。世 何 も志を奪 ケ 0 17 持 ては決 な つて る 弘 3 の中に 、臣大將 淫 つまら 前申 S す 0 居 して優劣 ~ 侵 る る ある でも 能 3 ¥2 カン 5 は

理 人 で 6 あ 窟 兎 お 0 ¥2 肉體 る 角 Ħ. づ め 云 25 を縛 12 理 2 12 窟 事 3 愛 n る事 は は 0 カン 大 す 上 ク 精 かが n 手 IJ な 神 出來 る誤 ば 6 ス 3 以 勝 あ ŀ る る T 0 3 0 た 大 から 6 相 理 精 其 助 76 人の 窟 神 H 0 0 B Ł 結 合 6 精 法律 果 思 あ は 师 る 13 8 7 H は 何 動 時 居 n h 日 折 3 6 カつ す 0 36 1 tj

0

農村

には割

一業係と云ふものもなけれ

ば郡

私 詮 1 方 1 は 遺 73 1 爈 S > なが 0 ゲ ラ 6 ら加州 南 2 る 1. 地 の事 方 0 は少しも 農村江 就 知 S らな 7 並 ぶる o 只 5 --

大 位 事 5 狡 机 3 畠を委せた方 0) 力> 學 ば、 なら 溜 家 6 0 ī K 12 で 前 V あ 正 自 あ 出 思 12 かと でも 0 自 なつて居 25 B 2 立 あ る 分自らも むを得ず、 6 る 0 VQ 青 督 る。 云 0 事 思 カゴ 0 ふふの 大部 年 6 な この 2 廻 B 7 本なら る處 2 自 た あ 0 カゴ あ であ 36 5 事 る 25 る T 結 精神を採 n 分は 働 0 で 果 3 他 使 種 雇 0 カゴ は非常 沙 がは技師 勞働 は 南 あ 雇人 カン # る かう せ 6 寸 55 3 雇 良 餘 0 に責任 に働 る方 勿論 に善 り干 雇 カゴ À < 6 12 田 入れ とかっ 依 米 4 畠 兩 文 カジ が經濟 米 國 3 方 n 涉 0 S V Œ 荒 する事 事 る 國 何 7 1 7 0 B (1) を持たせて 必要 農場 であ 居る ع 經 らす 本 た 雇 6 直 は 營 韵 10 A 力> 1 めになりは る。 は多 大學 を欲 稱 であ T. 樣 17 あ 0 3 其 古り働 0 i n 6 0 りとして は 出 7 3 定 委 B あ T る Js 農科 監督 SEC ないい 身の 居 3 問 0 本 力> る。 0) 子 H 題 カジ 0 3

> 村や ふ態度 青年の する 行 政 に農業巡 でも で可愛想な者 T 9 に見受け 100 府 3 でなく 卒業 州政 知 交け 力> カゴ 獨 識 間 5 6 V. だ られ 巡 巴 其 各 12 府 i 高 との て真 緻 んな 自 ٰ 旺 0 囘 厄介に 師 と思 < 3 h 新 殺 0 ところ 其 事 事 業 面 0 73 發 師 0 6 13 9 明 0 17 目 0 カゴ て、 7 は 一番鬪 を なら あ あ -6 25 多くは 3 · 勞働 る。 あ 3 H is 居 頓 1 る。 位 我は 事が 0 る 着 する 7 農 大度量 これ 行 L 來 To これらは日 しな だ T 學 な 我 < 12 T 0 と云 居 校 は 6 因 村 V 32 力> V 農夫 一を持 3 5 3 老 3 な 所 彼は 人 (1) 6 反 6 X 牟 0 農 から、 本人 0 0 E. 0) ラ 0 て必 彼 農事 3 出 科 7 氣 カジ 歷 (7) る 居 力了 農 輕蔑 Ł 學 51 位 る の中 を 村 6 か 關 1 何

農村の風俗

に學ばなければならぬ教

訓

であると思ふ。

達 ラと稱するの 居 着物 5 0 J か 紐 0) 2 樣 樣 育 0 B 13 が居る様であ あ of of 3 る 0 力 13 I. 一般 仙 T 臺 觀 L -1 る様 質素 る H 力ゴ 舍 13 飾 杏 12 0 方立 は 麗 か 溪 3 7 Ш > 0 坳 车 許 ٧٠ はか 頃 0) h 1 衣 娘 居 力 7

受け 覺え あ た 惠み ŀ 12 め る る め ッ 17 25 人 は 0 7 カン カン た ŀ 常に であ ら皆 のた う云 居て イ 0 8 3 5 追 ili ~ る 吳 8 3 は 我 ス 7 想 安心 12 わ n F, 崩 等 w す 他 捧 H 119 á V る 力了 H と申 21 げ 1 白 で Ŀ 1 時 > とも 72 米 12 シ ŀ 遠 髮 各自 牧 國 裕 3 ع を Ħ < 農 師 私 カン n 相 r 頂 1 12 村 は は 72 12 語 メ S 其の 依 忘 0 0 IJ 7 + あ 9 つて A 6 た 故 る 力 5 w 業に 南 鄉 R 0 H 0 18 n 導 る。 は 1 6 0 天 0 勵 南 Ш カン F あ 生を n 5 博 噫 žs. 3 1." 0 河 事 3 1 72 0 カジ 0 神 6 1.5 field 事 カン セ 1 0 6 逝 0 あ 3 0 ツ

農

カン

2

7

居

る

3

5

私

北

は

米國

0)

農

法

必要

V 0)

か

る 71>

だけ

は

是

非

継 小 6 利 カ> は 役 12 17 b 種 1. 趣 0 0 味 た様 を持 場 K 12 0 視 覺 T 察した。 え 居 0 72 日 0 本 0 居 0 うた 72 から、 、時、多

鷄 H 12 3 8 Va 何 分 平 地 る 地 12 カゴ 12 B カジ 廣 あ 廣 3 9 牧 野 30 餘 米 畜 原 をす 或 つて居るの な 0) る 事 0 そとて 7 12 澤 15 6 Ш 日 あ 爽 本 あ 15 る は る 5 果 方》 0 ら充 樹 は 0 園 棄 あ 分に を 3 T > 置 養

法は遙

カン

12 木 H 73

h

居

る

樣

南

る。

農

具

其

0)

他

に就 栽 菜 B

は り入 於

大

抵

日 73 は

か

3

4 5

0

と同

樣

0

か

る あ

H

本

0

in

ば 0 0

な 0 あ

V2

3

0 只農具

カゴ

澤

Ш

9

野

は

S

る

0 3

で時

間 9

カゴ 6

あ d)

6

次第にするつ

250

5

-5 專

0 門

6

研

究 7

す

36 委 淮 12

る ア

から

2

n F

私

0)

外

S

3

< で

V

١٧ 0

ス

農

科

大

學

2

なけ 思ふ 本 る様 th. 澤 千 必ず た カジ 地 ス なら 0 山 る 0) 0 E 樣 32 E Z 養鷄 0 鷄 6 收 作 選 モ であ は か 穫 澤 6 ば は なな った。 士 なら され 礼 太 をや をす 如 果 3 地 T 何 事 樹 6 0) ¥2 6 居 0 50 77> 6 屋 0 少な 器械 米國 と思 事 0) 肥 T 事 3 あ 0 6 H 料 0 力了 3 居 力 6 あ 出 を多く あ 凡 12 カゴ V 3 カゴ 3 30 梨 3 處、 る 15 0 放 充 來 12 -0 園 72 ~ 分 力当 3 集約 は、 用 併 は な 鷄 0 南 n 70 る。 らなら 學 耕 器 7 6 2 持 0 農業を 公文 作 畠 居 耄 あ ると云 械 2 と馬 変や は随 0 法 7 る 0 3 17 12 居 南 林 獎勵 ム等 分荒 力で 卵 損 る家 到 豆 る 檎 果 4 6 op 樹 な あ 7 13 耕 澤 ソ 每 1 32 0 6 學は 來 作 ノヤ 3 は T 試 Ш H 0 居 カゴ み あ

誾

12

穀

國 は

體 基

42 督

悖

3 は

カン 歐

6 米

05

1 0

カ> 6

云 あ

2 る

A

17 6

あ カン

かいい

悪の

3

カン

MJ

リか幾利 トれの重 0 7 教な家 ね 居 のい庭 3 運のが 動で破心 あ壌得 る 3 1 12 n 我私幾 がは多 國是の 5 農非婦 あ 村 Ł 1 21 3 子 採 2 こ女 りのがれ 入運飢が れ動にた たを泣 D いク <

らの数廻實で有ひが云云か 10 其 か です 際の様数少ふふ問風 あ事のるに理しと事題紀 居 のる 到佛 る 九事るが人 居 25 く私にでの Ł はか宗格宗る深日は依あ間 敎 分 る題 72 10 Z 通何も教 で教かい本餘 2 あはを哲佛 0 3 6 人知で 6 T 6 事 は bno る哲觀學教に 定 間 10 2 ·學たをの耶めれ日 實 佛 ぬる あ 25 否 Ł 若やな 含今蘇 るは本 る 合 は 榖 定 は のサ佛 す し理 らん日臭外何の 110 哲屈ば 82 あ 本ぬ教れ 6 ž いはれ田 是云 理で分居研 Z 義 處徒ば る あが含 3 での佛 をは るる究 X る 基と 誤 としは 3 あ中教談な 事 \$ 0 督何 確 2 るには じいだは佛れい教れ 6 5 と國が 信 隨 が隨 111 雖教る 52 分界 T 徒か思 で紊 8 行 新 然偉第 理 如が 2 3 あれ 0 1 思何 H ぞ 7 知 3 あ にな人のこ ふなたれかか 世 本 居 る。 の沈が格宗ね のると ¥2 5 3

> 合 B 糖 神 活 個 なけ 進 を 動 人 以 15 0 0 售 n 自 3 7 A 17 di 相 由 格 謬 U) 13 徭 交 を 7 n 高 5 提 6 3 3 な 唱 Va > 0) Ł H す 砂 甚 訓 n 3 0) L E ば 專 共 皆 15 横 是云 更 5 12 耳 主 12 義 各 17 野 A は 相 12 0 富 は 助 反 和 花 H め 互 抗 は 相 る W 3 12 空 爋 5 7 0) 女 貧 愛 個 7 0

持世雄 1 す照見 を た界大日 博 る りず 3 りな文の本愛基輝や ず 愛 濟粗け明氣國の督い御 七 末れのを民祝教で 旗 1 T 養 た福 (/) 居 の何 Ł 奮 愛 72 TA る る飜 6 南 H 6 4 750 鬪 晡 0 光 の齎 6 發の る る 禮 \$ 11 t 6 寸 展國 音 2 る る 輝 B it 起 3 ž す of 今 喧 5 0) 理 1 かに < 1 6 日此想 傳 1 大 1 12 非 0) 人のい た宗 努 島膽 ず 3. 日の旗 L め國丸 本國 は起 勵の 3 T 12 12 高 7 敎 む文太 何 高來 主 は 基 大明 < ぞ 遠ら神の 度 3-兵?督 のせ 0 以 量 理 h 光 士。致 C 3 想 12

思しはな發 調 他か つ經 居 羅の 的 3 方なば華 面書駄 名 7: 23 渡 謝 12 就 方 るが 0 た V. C. R 折 あ 完 を 6 得僅 君 72 なかの 灰 000 許み 方次 りな 第 17 面 述 6 供 でベ \$ 72 72 3 る 12 5 過 村 当 小疗 私 開

る

連

中

カブ

農

村

增

加

す

る

は

文

0

12

事

(

南

る

IJ

村 0) な b 12 カジ る 0 る 12 9 夫 Ī 働 10 破 6 勤 專 由 チ 璺 勉 3 0 5 n あ 毎 は 緒 Æ 是云 中 服 Ji. T 7 る な H あ 12 居 Z 縞 な る 1 カゴ 塞 F* 3 交 構 2 家 3 る 破 25 7 0 S 事 D 0 0 13 n n は 仕 0 柄 3 4 7 15 0 6 T カン 事 6 0 v 驚ら 6 居 弘 5 娘 あ あ S あ 1 る。 構 農 3 6 あ る る 17 業 E 51 はず h る 0 7 向 0 何 大 12 眼 用 更 達 ス 思 學 其 12 從 12 n F. 6 6 力》 5 を 事 見 着 四 3 2 h 3 カゴ 7 誰 出 か 働 + ^ T 張 1 h た 事. 居 チ 72 T る カン Fi. 1 事 カゴ 人 12 る 居 1 n + 3 も は チ R h は る る 0 7 7 Ā 外 是弘 カゴ 日 ツ 注 0) A F 普 意せ 稾 は 0 本 R R 4 F とな 0 通 帽 な 12 嗸 Æ 相 ず 農 其 判 0 S

0 6 八 あ 0 6 私 下 あ 所 0 出 る カゴ 女 る 娘 身 + ~ 行 3 0 ح 5 かが w 0 A h 18 此 達 だ 時 A ア 3 غ 仕 m 25 12 カゴ 1 は は 學 分 ギ 事 君 當 丰 0 N 0 然 チ T 家 1 ノヤ 0) 婚 0 背 整 7 を ン とし 事 人 訪 W S ŀ た 6 た 君 カジ ね 臐 あ 72 0 0 72 S る 着 妻 時 3 6 接 力> 物 0 あ 君 年 5 出 0) 6 6 3 6 力> 出 あ 頃 カジ ホ 1 5 IJ 掛 來 る H 0 15 72 1-3 2 る 相 7 0

る

な 動

0

6

あ

る

カン

私

10

全

土

4

幸

め

n

ح

0

0

益

な

事を

派

3 米

Ł 或

傎

我

カゴ 10

を有

す 13

る

律 非

12

7

V

願 旺

A h

6

あ

る

親

日 7

本

多 渾

36 R

2 旺

0

動 h 5

2

7

强

制

5

兄な

3 法 是

カゴ

酒

を飲

h 見

6 12 運 5

グ

ツ ٤

<

L 0)

T

居

る様

は

思 2 0 -6 あ 3 次 は y 酒 0 靐 的 10 南 3

V

て、 福 岩 禁 旺 6 ラ 太 全 6 ス 部 7 米 早 IJ 弘 效 h 我 カコ 76 L あ 11-分 知 2 速 酒 力 3 國 國 0) F L 6 力当 は To n 75 犯 * は 家 0) 1 7 名 國 相 法 は 罪 餘 强 < (1) ----5 セ 居 12 律 軒 婦 者 所 通 行 n ツ V 漏 る 0) 3 を 村 禁 利 人 0 る B す は F 0) サ Ī EX 通 町 13 る 村 1 0 0 76 12 酒 ツ 禁 勢 T 事 = 過 あ は カン V 民 25 處 世 力 6 2 0) Ł カゴ 村 絕 動 酒 る 買 0) カゴ 分 事 は な 村 は 對 は 1 を 皆 た た 中 め 0 36 勿 る 民 1) 南 受 決 論 72 7 總 R 0 酒 3 め F ツ 3 12 0 强 亂 0 會 ラ チ 0 から T.A 0 0 賣 米 111 < 事 醉 7 街 あ 0 1 ig C E とな 買 南 彼 で TS 路 る 睛 1 國 用 XL 等 B * 丈 る S 力兰 決 才 F. は 0 3 する 6 17 は 0 泥 議 2 勿 運 3 增 家 夫 る 酒 論 0 6 醉 動 力ゴ 禁 3 者 庭 (あ 屋 7 1 宜 進 釀 勸 是云 造 2 0 ずり 0 る カゴ ッ 中

村

ク * R

中

ブ

か 充

質せ

るを

瞬意

間

如何な

る宗

も其

理宙

的

13

るに小

る

カコ

は

别

問教

題

して

如

何

な数る

3

Zi.

に於

で宇宙

0

生命

に近づ

かし

J

を鏨

術

創方論

作面

品

通

ない。

科

學、

宗教

第

二義の

藝術

愛物

吾

0

術

0

才

0

ら生生、

他

0)

創

作

說

Th

味

す天

っ者に

あ美

らず)を作

字

美

3 F U 7 植 事を知 0) 動 技 等な 物 炒加 15 28 0) 於 6 知 Va 植 別 30 者 物 7 こであ 情、 は 得 如 意等 2 15 其 何 3 S 形 其所 種 貌 申 すに 17 な 高 性 17 等動 る 社 性 會 よく 質 物 カゴ To 等 4 カゴ 生じ は Ŀ な 流 3 者 7 轉 動 相 現 來 il 似 坳

< 進 響 然を忘 其 此 可 順 得 所 能 L 所 所 R 自 Y2 吾 活 6 12 12 的 自分 者 すれ 然 原 相 13 A 13 かが 6 對 者 0 土 則 を あ 的 恶 惡 活 13 6 0) な 4 植 有 る。 種 73 動 續 屬 活 物 す K S 悭 3 社 な H Tion . は 6 0 る生活 深 會 る事 罪 種 るとして あ 如 3 る 制 悪 V K 哲 悟 な 裁 0) 宇 行 土より 理 は 25 6 に依 もそれ 赴 性 宙 道 生 為 德 10 if 懦 其 カゴ うる者で 出 自 る者 7 或 其 は決 る點 身 6 激等 一點以)e Ŀ 0 6 に遠せ 生 土 あ i 7 上に 活 17 法 7 70 る。 歸 絕 B 全 12

n

質の る生 美 じて そし 活 瞬 字 を離 間 宙 7 を 7 1 32 卽 加 = 7 ち 致 R L せ A 本 احج ا 5 間 然 示 7/7 仕 場 (0) 1 生 事 シ 致せ 活 3 3 7 义 2 る生 3 吾 0) 自然 人 動 活 3 7 は を稱 0 (1) 美 活 眞 1 で質な 動 V 性 子 to 沙

的善 は 第 感情生 的 現實 他 大した差の 老 0 3 的 It 一活等を第 生 と名附 現質 活 0 内 者 卽 生 V 活 包 T 5 る 含 義 意 \$ 10 3 時 せらる 的 現 K 的 夢 實 無意 生 > 間 者 達 識 6 的 1 S る 3 侧了 > 面響 カゴ

識的流

義

交際 る人 就 (2) 任 此 颉 V 間 味 て述 務 所 に於 をし かりから で自 玄 7 in 果させんとして 1 之れ て、 て自己(自然 72 分 (P) は 7 3/2 章 E 本 あ 1/2 件 用 然 る 思 毎に、 と趣 カン 12 0) 與 趣 味 場 完 味 00 合 た 全 とは 其 每 ガ 0 2 、結果 25 弘 爲 自 63 め 然 生 0) A 1 0 間 複 生 其 ___ 分子 A 分子 15 間 過 3



宗教と趣味の

んなせち 取 次ぎて之れ 爲 來 然 術 0 25 は 0 非 下江 趣味 と立 と宗 7 7 な 味 常 密接 は ほ とる E 教 取 な勢を以 0 程深 3 73 扱 せ 吾 及 S めて る者 世 ふ事 必 CK n 1 る様 要 1 吾 0) 03 S は軍 つて 關係 吾人 牛 6 F # 力 A 12 活 南 な 南 0 0 藝術 家 哲 傾 慰 0 17 0 51 b ると思 學との 生活 向 であ 道 有 m 0 强 する者 一樂で 7 < 是五 1 ノブ 寒者 働 廣 73 30 3 其 關 17 あ 3 カコ L 是不 ること 7 和 記 は 17 行 係 う渡 來 13 取 は カジ 別 13 うた 輸 12 は 非 な 11: 3 入さ て変 カゴ 、或は『こ 意 常 5 2 カジ Va 如 融 17 趣 複雜 人に 中に 術 账 3 1 1 居 解 3

3 必 17 明 趣 す 味 る前 とは 何 吾 ぞ 是云 人の 生活 人問 題 6 别 あ 3 T カゴ 自 其 分 0 說 は

は 要 吾 人の あ 生活を第 る 思 太。 義的 現實 第 義 的 現

分

實 E 0 一とな

平

哲

雄

科

孙礼 逆轉 03 學 行 人間 \$ 卽 0 ら堕落 為 進 花は美で 法 一是人 步 12 15 は なく 22 醜 研 8 陷 究 V とも 點 3 S 依 0 依 135 植物 つて 3 7 0 子 1 供 居 V 所 益 0) ると思 J. は 題 6 カジ K 自 n 醜 美 12 然の を感 に近 美 Js. 7 居 衝 3 科學 動 カゴ 實 文明 j 者 \A; は

養人 醜 る者 弘 < 3 間 73 植 真 17 無 0) 0) 自 でな 發達 10 S は然との 定 意 42 味 であ 0 12 V 而して美であ 7 に於け 空間 言 罪 語 惡 關 其 る 行 係 利 る植 罪 己で 專 爲 であ 悪 屬 0) るっ 必 る 物 南 意 要 35 7 0) それ 决 識 人 4 た 潘 76 的 善 0 爲 善 は 利 0 あ め 1 己者 自 植物 等 叫 る 0 影響 9 動 び は 何 76 其 的 6 現世 等 必 所 は do 12 要 12 自 轉 0) 12 行 カジ は K 古 全 意 為 あ

考

7

居

るれ

かる

6

で識

to

るに

ら作

V

藝作

術品

にを

限

5 T

意

的

n

3

創

蓺

とも n る 3 あ る 間 カゴ 者 る 見 0 其 6 要 6 紫等 る あ 素 3 かご る 中 如 秱 カジ は 0 白 0) Ė 霏 哲 之れ 色 色 悪 臺 0) 0 者 3 Z 趣 要 戰 力> は 叉 味 素 6 白 文 は 伍 0 6 滑 阴 70 生 あ 稽 0 活 物 6 者 2 游 12 等 滴 轉 n る 0 用 0 25 者 す 句 如 現 含 6 4 n 象 は あ

3 2 6 あ 7 る 其 2 所 22 12 カゴ 趣 趣 味 味 0 U 遨 1 術 力 1) 0 差 テ 0 1 生 カジ 古 生 る E 黑 7 來 6 あ 3

る。

25 O) 肉 思 批 30 生学依 3 體 方 趣 命でら 現 B を 的 意 味 傾いね 7 代 J. 艦 は 通 で 向 Élà n 性 10 あ 0 何 シなら を 1 は 弘 0 3 所 其 建 器 茲 迄 衝 術 叉 立 決 物 界 遊 動 V2 狮 36 12 卽 12 肉 術 家 0 7 ち 依 を 運 家 依 1 0 其 創 喜 (1) る 趣 3 油 永 生 作 悦 趣 者 味 カン 不 猿 少な 味 命 밂 6 6 カジ 振 的 的 本 あ あ 傾 カジ B 觀 る 间 能 離 卽 < る 此 察 0) 12 6 所 ち Ł 2 活 及 3 > 純 同 カジ 12 場 0 動 L 肉 原 時 合 地 事 7 豐 因 な 25 7 者 2 方 を 北 は 0 渾 常 0 よく 記 個 3 6 n 1 動 憶 12 な は

> 得 創 数 其 生 術 る 作 他 命 家 品 全 カゴ 傾 自 * 22 7 向 己 見 は 0 0 者 0 3 真 時 創 0 告 = 然 創 作 2 作 於 ~ 0) 6 3 場 > 6 S 合 3 1 南 Z 2 は 12 る 3 者 は ナ 至 w 比 思 な X 底 較 不 如 蓋 的 斯 を 国 其 其 2 能 通 趣 事 考 0) E 味 は 惠 17 T 0 他 で 居 感 生 人 あ る E

第二 第 活 場 合 吾人 義 義 4 的 的 カジ 12 現 現 12 真 依 會 實 第 6 0 全 生 生 ね 活 活 義 活 ば を 的 17 12 75 包 關 現 入 6 合 b 實 係 VQ た す は 0 る者 せ 勿 事 る か 論 時 6 V 其 物 者 其 あ 場 21 る。 6 合 n あ 意 る 融 趣 表 的 味 現 卽 0 12 (1) 其 生

等 それ 徵 あ 肉 者 る 6 的 趣 其 0) カゴ 靈 は あ 過 カゴ 41 味 所 故 を 過 去 9 は 10 又 混 去 6 0 現 吾 喜 事 個 あ 0) 代 A る。 悅 者 物 75 以 は 人 1 6 を E から 20 趣 然し 獨 な 変 味 カン 6 10 3/ L 5 以 Vo 出 0 又 6 7 1 づ 統 其 其 3 如 7 あ 時 下 者 存 It る を 何 在 個 Ł 計 12 6 な 空 養 な せな 人 全 6 V) n は V ね 8 ば る ば 肉 現 W 以 彼 砌 的 在 な 招 > 生 越 上 0 趣 6 活 適 ば # 味 Va 地 者 者 る 7 趣 10 何 味

る者 0 味 識 あ 0 生 る 此 理 活 0 性 は 趣 27 全 味 依 0) る 第 結 カ> 晶 一義 或 42 は 的 外 現實 なら 側 面 0 V2 體 生 0 的 活 6 感 6 あ 情 あ る に依 る

其生 活 に藝 第 V る 亚 0 永 活 少 術 12 素 續 * 位 なくとも 的 0 7 であ 0 する 一つ 趣 害せらる あ 味 者 6 る 3 は 第 あ 0 肉 あ 體 17 3 > ると思 對 義 to そし して目 有 カゴ 0 現實に する 理 想は 3 7 的 其 吾 を定 生きら 自 本 は 人 分等 然即 第 0 める 生 る 義 活 5 は決 第 的 0 0 > 者 L 現 重 み て常 義 でも でな 實 生 0

は

n

る

趣 味 0 生 0 活 生 活 0 唯 は 第 6 義 あ る 的 者 現 實 6 あ 生 活 る 其 場 合 17 於 け 3

間 その (を例 所 る 12 的 12 は 事物を 6 趣 た あ 味 カゴ る 0 と同 選擇 人間 生活 す 以 時 カゴ 外 に本能 る能 始 史 0) 意 る 力 を有 識 的 0 6 0 あ ず る あ あ る者 る。 者 る。 そし 76 0 分 あ あ は人人 て其 る る。

論 **ふ意味であ** 選擇 す るとは自 るが 、藝術の 己の 天才の 生 活 12 創 滴 作 F 0 る 瞬 者 間 を取 以 3 外

恰

も色彩

Ó

要素を早く

廻轉せばそれ

は白

場 决 それ は 絕 對 9 老 6 な V

0

それ 間 者 に於 は 醜 は 擇 15 單 は V 7 に本 人間 る は 者 非 1 能 t 5 5 當 的 É 6 進 51 あ 化 好 渾 池 T 0 と云 -(變態 簡單 複 ふ事 雜 せ な 6 42 る だ も 動 H 事 る。 物 情 0 17 只美 於 あ F る S 17 な 7 カゴ は

行

智的 あ 迄 る 卽 0) 方 5 Oomse 人生 面 或 は 觀 matten 能 經 濟上、 Ŀ 單 個 純 政治 人 經 な E る 驗 感 Ŀ 情等 及 社 CK 會 其 Ę を 所 12 等 T 到 者 0 る 理

等同 生 生 雜 6 遂に現代 0 E 來 T 12 と思 如斯 工 其 术 2 15 7 樣 き複 Žs. 死に ŋ た 0 到 活 0 式 0 0 1 12 如 は 動 雜 行 6 1 なるり 0 D 力 な あ < 3 る。 は る 永 6 種 \exists 遠 あ 同 多 生 12 然し る。 な 時 3 活 0 0 事 る 樣 波 12 0 其生 その 選擇 曾 動 主 形 式 義 體 1 54 13 趣 過 活 とな 6 依 者 76 of 渾 來 3 味 は 0 自 7 沌 る TS 決 36 2 愈 然の 1 弘 V 7 複 表 理 判 事 叛逆 雜 智、 自 雜 斷 は n 然の 然 益 3 吾 とな 人 者 13 主 K る 複 義 h カジ

る。 0 名 k 75 る を以 つて 其 種 類 弘 又非 常 25 多 い者 で 0

潜 13 12 と趣 偉 55 同 例 卽 6 0 2 ち宗 生 依 敘 0 現 大 Va テ では 活 à) 代 104 0 味 0 シ は決 決 計 T 性 1 る 1 0) 代 1 とは 物の 共 V L 信 會 其 ズ 趣 日 0 7 香 的 趣 表 誦 L 账 如き者 價值 異 闡 本 7 をして宗 咏 6 的 的 者 同 あ 30 思 77 塾 0 0 12 15 生命 園 趣味 は全 象 潮 To な 3 順 でな 徵 と本 V 2 迄 教者 著 0 -10 者 辛ふじて 質 L 趣味 、此の所 て居 居る 向 であ と舊 に依 发 申 S 0 にな に及 す 女 其者に入るのであ る。 る様 14 つて 6 劇 0 0) す 4 0 3 3 社 6 36 趣 作られ 感 る。 それ 南 70 會 添 あるいであ に感 女性 池 化 る、 か 0 3 その 契約 又偉 じら るの 5 る。 との 的 12 196 全 感 3 カゴ 4 6 大 37 T 花果 化 本 な てな 般的 野 規定 的 1 事 る 性 る ~~ 0

F 6 前 名稱 あ 並 12 3 0 如 は全く不 力> 6 せらる 非 有 常 必要な事 > 肉的 者 無害 0 77 (1) 多く 0 有 る **a**) 益 藝 主 漏 悲 義 的 喜等 12 至 發 7 0) 達 は其 名稱 せる

> 其 所 吾 人 力当 4 天 常に第 1 X 0 あ り涅槃 義 (1) 現 10 南 質 6 12 進 叉真實 まね は 0 13 あ 5 V2

定め取 活と意 有さ 任 其所 (1) 如 現 世 で堕落 ば る 識 な 3 可き着 的 努力 認 6 V2 的 4) と排 現在 石 は常に伴 真真 寸 (1) 地位 可き者とに嚴密なる 0) ム者であるだけ 生 J. 活 b に行 自自 分 は堕落 其方 趣味 华门 Ł in 0 生 現

が努力 美に善 赴く 的現 なら 實化せる者で 人の 第 ある者 の宗 趣 義 實 味 1 V2 如 12 教 と趣 は 43 ズ で < に導く者 う意く 耆 と云 4 6 全 である。 味 6 る否宗 く意識 ある、 あ 全 趣 もなら真實 h る 7 事 味 6 0 0 化せる者 教 趣味 あ 的 潜 此 努力 否 A 13 3 藝術 を意 點 2 は常に宗教 趣 それ 指 に於 三相 味 0 すの 味す は -6 家 天 全 あ 地 は宗教 俟 V 12 0 マ宗 6 て宗 3 創 つて と同 刨 作 0 吾 3 6 敦 5 品 本 3 教 第 然 人 でな は をし は <u>一</u>の 涌 を第 趣 75 13 E 價 H 味 唯 義 7_ 4 7 S n 中 的 值 吾人 12 普 義 現 哲

趣味は廣い意義の宗教であるが、現在用ひられ

的 あ る

0 あ 經 3 3 術 N 12 35 过 斷 21112 0 驗 17 0 到 あ To る 理 京 カゴ 0 0 趣 判 全 味 幽 2 は 2 0 事 87 を許 其 反 他 L T 0 36 惠 個 0 人 至 6

世 42 え 0) 真 死 1 0) 後 0 0) 居 中 遊 者 其 る 17 者 偉 術 6 は 大 あ カゴ 趣 品 あ 味 0 0 光 る 者 あ 多 Thi る カゴ 0) 地 場 4 1 作 合 7 CI CI n 0 2 は E カゴ カゴ 和 决 葝 17 南 乖 100 カン 術 る 6 7 17 そし 月 永 創 > 事 遠 桂 作 品 カゴ 1 冠 0 數 其 潜 0 茲 輝 6 如 12 な 術 南 0 <

表

た

過

3

13.

香

6

南

的 な 云 南 5 藤 73 5 5 过 術 和 る 作 は カゴ 現 は 其 75 代 6 M 7 スノウ 所 6 侧层肚 謂 靈 面得 薮 體心的 循 行 的デンド 家 カン 中 ね 觀 宙 Id. 12 察 的 は な 然ら 5 1 永 得 Va 一 0 遠 VQ 人 的 カン 0 卽 申 5 南 ち す 由 る 生 1 3 命 た

h 彫 3 る現實の 刻 6 } 35 6 0) 實 繪 感 0 畫 は E 力ジ 以 然 な 寫 外に 實 S 普 カゴ 0 其 現 通 は 色彩 吾 實 な Ā 12 S 0 0 あ 客觀 23-3 物 3 影 豐 ラ 的 0) 地 1 付 ジ 和 12 4 工 は 置 刻 U

> 宙 0 16 4 命 隔 to 3 < 等 咸 10 0 +7-想 め 41 3 0 0 物 か る 其 は 呦

げら せも F n 72 的 文 弘 3 現 4 術 許 家 命 傾 2 YQ. 趣 行 者 向 味 0 9 あ 衝 0 牛 動 る 宙 とか ME 100 12 識 H 依 致 0 7 C in 2 n 6

力が

6 12 五 50 n 動 吾 真 1 Ā は 7 0 水 それ 之れ 想 1 善 像 ~Va * 1 0 大 順 F 0 S 73 美 序 イ V 17 な B ij る貴 る 接 CK ibps of 其 感 3 せ ツ Ū き義 心 1." 小 理 0 め 狀 說 2 語 6 能 旬 0 S 宇 詩 を 0 6 宙 あ 370 見 側 和 0 る 活 配 6 動 劢 3 性 的

人性を あ る 1/2 それ 叉音 る > 力> 然ら は 樂 T 味 17 理 13 智 7 的 h 强 ほ 0 0 音 は 判 V 樂、 單 斷 7 增 强 純 12 般 繪 3 な 依 吾 感 的 2 情 A 1 12 詩 な 理 12 感 醉 智 ず 72 0 は 袋 21 る る 者 於 0 中 的 27 る な あ S 蓄 3 7 5 は 5 1 が Z 個なと 6 故

12 趣 味 吾 人 は 0 理 性 智 質 t 4 特 理 質 智 廣 力 3 申 7 F. 6 ば 力 個 人 個 1 R 6

情



又の切れはし (ゴールスワーシイ)

登場人物

マツドレイ・・・・・・・・・ 活 店 の 亭 主 ブラドミア夫人・・・・・・ 農 夫・トラスタフオード・・・・ 農 夫・バーラコム・・・・・・・ 同 と 教 會 員 ウイル・フリーマン・・・・ 同 と 教 會 員

テイツビー・ジアーランド・タム・ジアーランドの娘

タム・ジアーランド・・・・

第二幕

第一場

うしたい!お前、

妨ちやんに舌を貸しちやつた

つの廣く開かれた窓翼がらは日沒の光を受入れてゐる。此間の壁は殆んど全部鉛を嵌入れた硝子戸の窓で、其の中の一端に延びてゐて、眞向には芝地に通ずる 支閥の扉がある。一端に延びてゐて、眞向には芝地に通ずる 支閥の扉がある。

鈴木芳松

の幅廣の窓の下に狹い腰掛が 据ゑられてある。三個の唾壺と、茶褐色の口髯の上に林檎の様に赤い頰とや 持つた小柄と、茶褐色の口髯の上に林檎の様に赤い頰とや 持つた小柄と、茶褐色の口髯の上に林檎の様に赤い頰とや 持つた小柄と、茶褐色の田鷺の窓の下に狹い腰掛が 据ゑられてある。三個の唾壺

うといふのかい。「テイッピーは益々ニャーでする」どゴッドレイ「瞬きし乍ら」、お前とおれとで一杯やらかさけ何しに來たんだ?ピールを一杯か?

ゴツドレイ 六本要るつて?お父さんにそうお云ひ、テイツビー お父さんがパイプを六本下ちやいつて。

のか。ところで何だい?

のかい?(テイッピーは頭を振る。)おゝ貸しやしない

る

味

と宗教と云ふ事

12

就

ては自分

は

面

る。 す趣 統 其れ自身に生きて < 12 である。 食する為に虐げられたる現實に於いて)の 關係し であるが となり、 又それ 味 る。 叉一方個 生活は少なくとも一 て所謂宗教と相俟つて非常に關 趣 それは宗教は多く を現代の社會學上より見れば國 平和、 味 は絶對 居る 人に取りては好きなる事 も神も宇宙も忘すれ 内に人をして 導く 者であ 全ての社會の方向 種の慰みとも 理智と信念か 係 なり活 すを勞働 て仕事 6 間 12 民 する者 大い 一性の 導く にな

申 7 せば趣 る 後に其統 カ> 否 味 力ン 17 上下 0) 一であるが自分の 問 題 は でであ 73 S 唯それ る。 現在 力与 、宇宙 の人生觀 0 靈 17 から 向 0

動

の所謂

源泉

とも

なるのであ

る

から Z 自 分は は 全〜真實で 宇宙其れ自身には で吾人墮落せる吾人は其所に融合して真 あ 5 美であ 目 的 3 何 36 善 な 0 V あ と思ふ る

> 然的 る事 に屬する者を退けね 0 幸 と思ふが 此點より立言すれ 傾向を有する者を排さねばなら 福 満足に、真實に入らねばならぬ 第二 0 事 ばならね。 6 ば あ 趣 味の る。 第一は全く解し 方向 Va は第一に 第二罪惡 と思 得

第一 る。 ても靈的 る。 は悪の主體た 悪はどうしても意識 それ 義の が意 に美しく、 現實に る目 識 的であ 進む可ら 的 貴く カジ 缺け る 的 ・要素は なり得 である。 とすれ る者 る者で ば 6 具備せざる者 それ 無意 あ 100 mg 13 は 如 偶 中 何 然 0) であ 12 であ 卽 ち L,

選擇 會に取 樣 而 K L する必要があるの 計 0 T ては 趣 會に適合 味 其 は 趣 絕 味 體 せしめ以 形 ではな 式 である。 の生 つて い以上常 命 目的 傾 向 12 17 一變態せ 苦し 合せる者を 的 る ざる 社

-MAY-13th-1916-

だらう。分るかね。で追つ佛ひますよ。お前さん、妾を知つてゐるで追つ佛ひますよ。お前さん、さもなけりや此方

じません。

ブラドミア夫人 数區長機はちやんと決心なされた、ハーバート機も同様、あら來りの悪い風聞ならっただしも、これは教會に觸ること。ストラングウエイさんが此處で牧師補をしてゐる間は、彼ウエイさんが此處で牧師補をしてゐる間は、彼ない。

ゴツドレイ「片眼を閉ぎて」 わたしや唯つた今それを如うとなめ、女の舌は切つてしまふといふことがきをはめ、女の舌は切つてしまふといふことがきをはめ、女の舌は切つてしまふといふことが

ゴツドレイ お安心なさい奥さん――此處で悪い風ら。 ちの云ふ事をお聽き。妾は本氣なのだから。

聞なぞは此のわしが立てさしちや置きませんか

のか見て賞めて點頭く。ブラドミア夫人は彼か鋭く凝視する、が彼が全く眞面目なずラドミア夫人は彼か鋭く凝視する、が彼が全く眞面目な

ですれてゐるのか知つてるだらうね。 噂されてゐるのか知つてるだらうね。 ブラドミア夫人よろしい!勿論お前さんは甚麼事が

の宿には「此の處悪評を禁ずっといる掟が御座さん、何か私にお話なさらうとなさるなら手前さん、何か私にお話なさらうとなさるなら手前

だ方ドミア夫人「凄く瞬きしながら」 お前さん はほんたういますんで。

ゴッドレイ いや、どう致しまして、奥さん――わったしや奥さんの手に掛つちや丸で孩兒でさむ。 なじい様だが、いゝかね、ゴッドレイ!此處はクリスチャンの村なのですよ、そして何時處はクリスチャンの村なのですよ。 そして何時のはないよ。

犀が開いて農夫のトラスタフォード、バーラコムの兩人が

今晚は一本より餘計に遣れないつて。そうら遣 るよ。お金をお出し。

ドミア夫人が支闕に現はれて、這入つて來る。テイツビー と十一ペニーとを受取る。お金をしつかり前垂に敬めよう テイツビーは手を伸ばして一志を放す、そして長いパイプ はのろし、會釋する。 として彼女はパイプを口に啣える。かうしてゐる間にプラ

ブラドミア夫人 そう云ひなさい。 ねらの?何處の見だ?テイッピー・ジアーラン してゐるの?そしてお前は日の中に何を入れて かないつて。ゴッドレイ、お前さんも小兒の法 にお前がゐるのを見付けたら其の分にはして置 ドか?口からそれをお出し。そしてお父さんに 驚いた、此の見は!お前は正處で何 妾からだつて、二度と恁麼處

ゴツドレイ、片目を閉ぢて少しも當惑せず」正に承知して居 からね。お歸り、好い見だから。 ですけれど彼の娘の方のら來るんです

は心得てるでせら?

テイツビーは、ブラドミア夫人からも眼を放さず又口から > ° イプを放しもせず、のろし、と扉口の方へ後去りして姿

を隠す。

ブラドミア夫人「コッドレイを熟視して」ところでゴッド んだ。「口應へしょうとするのを抑へるべく手指を擧げる。」 の村中で持つて廻る噂の年分は影處から始まる イ、妾はお前さんに話があつて來たのです。此 いや、いや一不可ませんよ。 お前さんは、

間の悪い噂はお前さんの商賣にどれ程影響へる かよつく知り扱いてゐるだらうね。 失禮ですが御同様にあなたの御商賣に

ゴツドレイ

ブラドミア夫人 そりや何のことです? 對してどれだけ影響へるかも知つてゐます。

ゴツドレイ 若しも数區長様の奥さんがねなかつた ら誰も世間の悪吟なぞを氣に止める者はなから うし、又若し、誰も氣に止めなかつたら、惡噂 ~ などする者はなからうかとわたしや思いますん

ブラドミア夫人[凄い微笑な瞬きに紛らして] お前さんの御意見は拜聽しました。今度は妾の 番だ。今此の村に、是非共喰止めなければなら ない悪い風間が流行つてゐるのです。お前の方 至極御尤も!

した男フリーマンが這入つて來る。て笑ふ。羼が開いて、百姓服を着けた色の黑いジプシー面で笑ふ。羼が開いて、百姓服を着けた色の黑いジプシー面バーラコムは顔をしかめる。トラスタフォードは聲を出し

トラスタフオード 今晩は、ウイル。何をやらかすんイル・フリーマンに云つちや可けませんぜ!

フリーマンサイダーを一杯、それにちよつびりジンを垂らして貫はう。今夜は空が焼けてるぞ。

師とあの嬶の噂を聞いたかい?. 一と風吹いてポッリーへと雨かね。牧

えのさ。彼の牧師は嬶を醫者の所へ遣つちやつオットマンあんまりクリスチャンらしい話でもね村のクリスチャンぢやないか。

たんだぜ。牧師曰くさ、爾往いて彼と共に住むたんだぜ。牧師曰くさ、爾往いて彼と共に住め。」つて嬶にティですよ、「爾往いて彼と共に住め。」つて嬶にティですよ、「爾往いて彼と共に住むたんだぜ。牧師曰くさ、「爾往いて彼と共に住むたんだぜ。牧師曰くさ、「爾往いて彼と共に住むたんだぜ。牧師曰くさ、「爾往いて彼と共に住むたんだだ。

してゐる人の惡口は聞き度くねえ。のいふ文句ぢやない。おらあ、自分の家に起臥がリラコムいや、いや、そんなこたも思慮ある者って、ノブノブ

フリーマン そりや真實のとなんだぜ。あの娘は驚って窓掛の蔭にすつかり身を隠してゐたんだ、そうとはしない。またお前がして吳れるなといふらとはしない。またお前がして吳れるなといふなら離縁しようともしない。」此の通りの文句をなら離縁しようともしない。」此の通りの文句をなら離縁しようともしない。」此の通りの文句をなら離縁しようともしない。」此の通りの文句をなら離縁しようともしない。」とはしない。またお前と彼の男から遠ざけよったまではが嬉したのは、

這入つて來る。二人は其の帽子をブラドミア夫人の方に向つて脱ぐ。夫人はもう一度鋭くゴツドレイを睨んで扉口へ

先刻寄越した家鴨は大變こはかつたつて。 ラコムに」がーラコム、妻さんにいつてお吳れ、ラコムにいってお吳れ、

凄い一瞥と一點頭を殘して彼女は行く。

トラスタフオード [黒い、堅い、そして餘り 新らしくもない帽子に來やがつたんだ? [馬鹿笑ひして] 豪さうな面しの上の長い頭に置き換へる。]彼の灰色の牝馬奴、何しに來やがつて!

ゴツドレイ「意味あり氣に」あっ!

ドラスタフオード[バーに近い腰掛に座って] ウイスキーと

ダーを一杯貰はら。ばむだ男。」ゴッドレイ、何か話はないかな。サイバーラコム(古ぼけたソフトハットを被った、内氣な痩せた、黄

え。おゝねえとも。おれが許しやしねえ。「真似ゴッドレイ話?此の家に話なんかあるもんぢやね

て」此處はクリスチャンの村ですよ。

トラスタフオード 彼の灰色の牝馬奴、篦棒に忙がしたスタフオード 彼の灰色の牝馬奴、篦棒に忙がしためったと見えるな。「パーラコムに勤って」怪しいぢをかったと見えるな。「パーラコムに勤って」怪しいぢをかったと見えるな。「パーラコムに勤って」怪しいぢをいった。はッはッ!

バーラコム そらだ!

----皆さん、何卒、惡噂は止して下さい。 たた月も家を明けた揚句に彼の可哀相な牧師された月も家を明けた揚句に彼の可哀相な牧師さ

トラスタフオード、此頃ちつと許り彼のお醫者の噂が

タフオードさん、これは極々の内證ですぞ。ニゴツドレイ あゝ!彼の人は幸福者さ。だがトラス

は言い度くねえ。

クリスト、今日は滅法咽喉が渇さますねえ、ゴッドフリーマン、言つちまへよ、テイム。

クリスト「サイダーに近寄って」ありますともは。だらう、てんで何にも話はないんだらう。

だ。

ごッドレイ 話をしなけりや、サイダーはやらない

がありますか?

ドレイレイの?

クリスト いやそうぢやねえ。昔生さてたオルフュースのことさ。 昔生さてたオルフュー

も、胡弓でもつてそんな藝當をやるつてなことフリーマン イエラコットの方のジプシイで、何で

石に腰かけて、小馬を相手に角笛を吹いてるん魔い牧場の方でさ、白い花や櫻草の中に真黒くねえ、オルフユースだ。バーラコムさんとこのねえ、オルフユースだ。バーラコムさんとこのとおらも聞いたぜ。

プリーマン(品奮して) まさかお前は頭の上に鳥を止

クリスト見ねえことか。

トラスタフオード大方納屋の戶口に飼つておく鷄だフリーマン ちや甚麼鳥だ?云つてみろ。

らう。は、はあ。

なしだよ。

取園いて、その小馬の眼から涙が流れ出してるクリスト。歸りがけにあの路を通つてゐたいさ。妙お前は何處に居たんだテイム・クリスト?

んだ。馬鹿に憫れつぼかつたぜ。男は帽子を被

トラスタフオード(考へ込んで)全く怪しいなあ。 と が さんだ。 牧師であららとなかららと、他人のもるんだ。 牧師であららとなかららと、他人のものに手をつける権利はねえ。 彼奴はおれのことにも餘計な世話を焼きあがつた。おれは彼奴ににも餘計な世話を焼きあがつた。おれは彼奴ににも餘計な世話を焼きあがつた。おれは彼奴にお前さんよりおれの方が少し許り餘計に必得て

在つてるんだ。 トラスタフオード 彼の人は獣や鳥の爲めに少し氣がるつて。

掌中に一片の紙を持つて立聞きしてゐる。 や頭髪の、輝く機敏なケルテイツクの眼を持つた若者で、や頭髪の、輝く機敏なケルテイツクの眼を持つた若者で、やすない。 かない。カリストは、むしやくしずない。

クリスト・あっ、全く彼の人は氣が狂つてるんだよ、

彼は哄笑する。

てくれるなよ。噂をするなら、数區長様の邸へも仕入れて來たのなら、決して産處でぶちまけずツドレイ」おい、テイム・クリスト、何か噂の種で

クリスト、紙片を振って」これを質に一杯異れませんでも行って聴いて貰ふがいこや。

ゴッドレイさん。 物だ。あんたは朗讀には良い聲を持つてますね、なもんなんだ。綺麗な讀物なんだ。詩ですよ、本かね、ゴッドレイさん。實に面白いんだ。結構

ゴツドレイ(耳を峙て瞬きする) おゝ、一體そりや何だ

クリスト。あゝ!あんたは何でも知りたがる人だな

ゴツドレイ おい、此の騒ぎは何としたことだーー て其の眼は問題の話を尋ねようとする、が誰もこれに答へ なぞはないがしろに語る。 なぞはないがしろに語る。

クリスト 實に奇妙だ――丸で夢の様だ。パーラコわしの家では惡噂は禁物だ。

せるなあ。

はして一同の者に氣を揉ます。 の方へ持上げて讀み始める樣な振りをするが、周圍を見廻 クリスト、サイダーを得たのでそれを飲み干す。紙片を燈火

クリスト白い衣を着て頭に花を載つけてないのは 残念だなあ。

フリーマン 讀めつたら、讀せねえと此處から撮み

クリストおう、そんなにおどかしちやいけねえ。 彼は附景氣で柔かな高い燃える様な壁で讀み始めた。田舍 訛りの其の唄は次の通り。

神は彼方の空の太陽をともしぬ、 **螢にも、また、星にも光を與へね、**

吾が心神之を照さざりきり

吾が心神之を照さざりさ。 神は小羊の遊ばんための野を、 また清き流れを照しき、

神は月をともしね、アラブの道を、

今日も照り、また明日も

吾が心神てれを忘れたりし

舌る。 讀み終ると靜寂。軈てトラスタフォードは頭を搔き乍ら喋

トラスタフオード 篦棒に可笑なもんだな。

フリーマン「クリストの肩越しに眺めて」何のことだ!そり や牧師の筆蹟ぢやねえか。小馬を連れてたのは

矢張り牧師だつたんだな。

クリストあっ、そうなんだよ、まあ考へてみねえ。 お前は利巧者ぢやねえか。

フリーマン だが頭に鳥はゐなかつたな。

クリストうむ、わた。

ジアーランド(後ろさうな、脅かす様な聲で)彼の牧師は今 らがその仕返しをしてやるから。 らうと取るまいと、牧師だらうが牧師でなから 日の午後おれの娘の鳥を取つちやつたんだ。取

世話を焼きやがった。 あゝ!それに彼奴はおれの馬に餘計な

フリーマン

トラスタフオード とおらあ思つてるんだ。は、はあ! 頭にゐたのは老ぼれた時鳥だらう

つてなかつた。

つりーマン(嘲り年ら) 帽子ぢやねえ、頭に鳥を戴いて

可笑な氣がしたぜ。 できいて渡つた。おらむからからからかはなっとも動かねえ。白い花は殘らずれか。小馬はちつとも動かねえ。白い花は殘らずれた。 男は吹いたは吹い

ゴッドレイさん?
クリスト、あの、サイダーは何處にありますかね、ゴッドレイ クリスト、チェリーバンをお食べよ!

い加減やつたちやないか。 テイム、お前もう好ゴツドレイ(サイダーを身で際して) テイム、お前もう好

き乍ら歩く。頤の出た『澁面の、異常な癲癇持の様な眼付き乍ら歩く。頤の出た『澁面の、異常な癲癇持の様な眼付

クリスト[ジアーランドを指して] タム・ジアーランド 皆さん今晩は! (ゴッドレイに] ビールを三合。 (ジム・ビーアに) 今晩は、ジム。

對つて」何處で其の紙片を拾つたんだえ?らつしやい、タム。〔再もや紙片を取出したクリストにゴツドレイ「暫し蹲らったがジアーランドに向って〕 これはい

クリスト(空のサイダーの私の置いて) 活涎がたれるでせたこ サイダーを実れなさめ 歌は止しだ。素敵に可哀相だ。もう一度シエイクスピーアだ。「少年は立てり燃ゆる甲板の上に。」(註。此の句質はヒー年は立てり燃ゆる甲板の上に。」(註。此の句質はヒーマンのカサビアンカ中のもの。)

フリーマン 五月蠅い奴だなあ!

96

クリスト あゝ!一寸待ちねえ。おれがそれからあっりスト あゝ!一寸待ちねえ。おれが北手を食つた鵲が一羽ねたつきり。其奴が嘴に何か白いものを啣えてる様だから「シッ!」と追か白いものを啣えてる様だから「シッ!」と追か合いものを啣えてる様だから、おれがそれからあん登つて拾ひ上げたのがこれだ。

だが彼の人は

おれの家に此の一年餘りも

ねて

いんなの世話を焼いて吳れた。

おれは彼の人が

ゴツドレイ「商人らしい態度で」マーテルの三つ星に致し

辯護士が云つてたぜ。

カリーマン そんならそれでもいゝさ。二人の思ふれだつて寄り付きやしなからう、また誰は教會の傍へも寄り付きやしなからう、また誰は教會の傍へも寄りを見るのさ、どうせ碌なこは教會の傍へも寄り付きやあしねえ。

ゴツドレイでは、タム公、もうこれでおつもりだ奴!おらの彼奴に仕返しをしてやるぞ。ジアーランド、錫製の杯を持ってゴッドレイの方へ傾き」を食

次む。ピールを受取つてジャーランドは立つてバーに恁れ掛つて

3

かりつくつてゐて。
馬鹿に氣が弱いんだ、笛を吹いたり、詩なぞばに喰はない――あんまり氣が優し過ぎるんだ、

好きになった、だがもうお終ひだ。

こたあ如何でもいゝんだ。〔バーラコムに向って〕おトラスタフオード タム・ジアーランド、おらあそんなジアーランド 臆病者!

人の物との見境がつかねえといふことなんだ。れが癪に觸るのは、彼の牧師には自分の物と他

ジアーランド 他人の 物を取るには 抜目が ねえ奴だ! での者は皆なストランがカエイに氣が注いた。彼は前へ進む。今の者は皆なストランがカエイに氣が注いた。彼は前へ進む。今の者は皆なストランがカエイに氣が注いた。彼は前へ進む。 の者は皆なストランがカエイに氣が注いた。彼は前へ進む。 ないアーランドの根にもとまる。彼は心持ち俛れて 默つてぬる。

通せさうにもない。を少しばかり貰ひに來ました、――どうも氣が遠くなりさうなので。この分ではお務めが遣り

ゴツドレイ「男の心女忘れぬ。」

フリーマン 彼の牧師がおれ達の娘に堅信禮をする

娘達にや牧師さんの方がいゝんでさ、ねえ、バいといふのかね?彼の脚の惡い敎區長にかね?ゴツドレイ ぢや彼の年寄の敎區長にやつて貰ひ度

ジアーランド「醉漢の凄味をもつて」 おらあ彼奴に仕返しバーラコム「卒爾に」 牧師さんは好いお人だ。

ーラコム さん?

るまじきことだ。此處を立退くのが當り前だ。なだらしねえことをするなんて神の子の行にあてり」で、動して」なり一言いはして貰はり、あんをしてやるんだ。

フリーマン ぢや何だつて嬶を逃がして默つてるんパーラコム もつと云つてみな、罰があたるから。

やねえか。クリスチャンらしいことをしねえ様けねえといふんなら離縁をしねえのは怪しいぢトラストフオード頭を掻き乍ら」若しも妻君を一緒に置

な牧師がなんだい。

し道ぢやないな。女に出て行けと勸めるのは變バーラコムのんな事を打造つておくといふのは少

フリーマン臆病者のすることだ。

バーラコム牧師さんは臆病者ぢやないぜ。

がつてさ、「ウイル、若しもあんたが妾をあんなはお前とは違ふぜ。おれの嬶はすつかり驚きや奴の肩を持つなあ無理はねえ。だけどお前の嬶

にはねやしないよ」と云ふんだ。

樣に手放しする量見なら妾や決してあんたの傍

バーラコム 口でいふのは雑作もないことだ。ぢやトラスタフオード 全く思いお手本を示したもんさ。

一體牧師さんは如何すればいゝんだね。

フリーマン「興奮して」ダーフォードまで行つてその醫さんなふしだらな真似をさせねえ様に氣を注けてんなふしだらな真似をさせねえ様に氣を注けてんなふしだらな真似をさせねえ様に氣を注けるんさ。

クリスト女の方で厭やだと云や男がそれを連れて

胡爪を掻拂つて行つたよ。タム公がお前のとこの

者は再も喋舌る。

クリストタム公這の出してら。「窓に借って外を見て」フリーマン全く美事に投げたもんだ。まざかこんいラスタフオード。硝子を破した、は、はあ!

おい、タムーー如何したい、態あねえなあ。

トラスタフオードタム及どえらく肝を潰した様な面フリーマン「興奮して」墓地の方から皆見に來るぜ。

たな。あゝ、ちつとばかり睡くなつた――もらかりスト、牧師はゐるかね?もう教會へ行つちやつ附きしてらあ、ハハ!可哀相によ。

少時の沈默。

お説教の時刻だらうて。

村だからな。も經つたらお説教をしなけらやならねえんだ。も經つたらお説教をしなけらやならねえんだ。

も鳴り響いてゐる。 力なく靜かにジュ・ビリアが笑ふ。靜寂する、鐘の音はなほ

幕

はんでもいゝでせら。

ストラングウエイ[ジアーランドを眺めて〕 有難う。もう貰か? ませらか、それとも、ヘネシーのに致しませら

眼を据ゑてストラングウエイを白眼んでゐる。のジャーランドは錫杯を手にしてバーに恁り掛つて妙に死の樣な靜寂の裡にゴツドレイはジアーランドの腕を抑へ彼は歸りそうにする。

癒せだ、窃盗の懲らし目だ。 らうがなからうが。娘の鳥におせつかいした腹らうがなからうが。娘の鳥におせつかいした腹い一一おらあ彼奴に談判があるんだ……牧師だ

クリストタム、静かにしねえ。

え臆病者は何奴だ! 意氣地なし奴!人に嬶を取られて文句の言へね意氣地なし奴!人に嬶を取られて文句の言へねで気地なしなりの際に」よくしやつ面を見せろ、このシアリテンド(ストラングウェイから眼を外らさずに――猛り在

しないか、おい。

めて五分間の急調を始めた。を固く握つて立つてゐる。教會堂の鐘は緩やかな鳴音を止む固く握つて立つてゐる。教會堂の鐘は緩やかな鳴音を止れる。不りランアウエイを見てゐる。ストランアウエー同の者はストランアウエイを見てゐる。ストランアウエ

し飲り過ぎたよ。組合せょうとして〕控へろといふに、タム。お前少いラスタフオード〔立ち上り、自分の腕とジアーランドの腕とな

醫者を恐がつてゐるやうに。
しが出來ねえんだ。恐がつてゐるんだ―――彼の奴あおれに手だしをしようともしねえ。おれが奴の面を打ちのめそうていふのに彼奴は手出がおおれに手だしをしようともしねえ。おれが

振って〕彼奴を見ろよ。彼奴を見ろよ! 犬の様なジアーランド 「殆んどストラングウエイの 顔に當る位に其の拳をグサエイは動かない。

身動きもならぬ様にする。二人が窓口で揺りつ揺られつ藻られた拳を摑まへて、柔術を以てジアーランドを引き寄せりといふ言葉を聞く途端にストラングウエイは突き付け

嬶を持つた男――

H

た。林の葉が

子供

が家の陰から出

て、

後に弓と矢を隱

ので、 はそれ だ ふも 子 を三つば カジ カン それ 供はお て、 には か解ら ら樹 あ 立てゐる。其下には一人の子供が 大きく 來の 7 0 をとる 子供は 熟梆 不 か不 想像の様に から後其事を話して、もう幾 は自分の カゴ 思議 爺さんに尋ねた。 生えて、 かり拾つて、間 はれ ない遠 思議 カゴ カゴ かもしれず。いやもう食べたかもしれ 0 また 一杯 た。 世 無窮に連く 25 白 V カジ 0 幼い頃の思出 な有様 12 其樹に柿が實る樣 思出 それで「永い」へ後のことだ。 い雲 く國に二三 多 ことだ」と答へた。 思はれ なつてゐる有樣 羽梆 L カジ が浮んで を距 て、 不思議 頭 0 に浮ん お爺さんは其時 樹の た。 て、土の中に埋めた。 自分の の様にも、 。而しまた空 一本の なあの 70 上を舞うて だ。「それ る。」お爺さんに 食べた柿の種 大きな柿の樹 が頭 ねる。 にならうかと 日 ね 世 たら其 また遠 に浮 0 そし 如何云 は何 想 一が無限 2 る。 像の 處 7 種 V

> あ h げた。見れ お爺さんと子供とは 7 わ ば 一羽の 720 島 野 原 力ジ から姉 枾 0 枝に 0) 樹 栖 らうとし 方 12 頭 *

た。 林

時此

樣 え

な柿

0

樹 720

カゴ

H

ツ

も六ツも生

'n えて

だ

終ると子供はまた立上

う見

カ>

そこで内

0

方

て株を見上げ

た。

葺い せて 斯与云のて子供は家の方 弓と 持て家から出て來た。 羽 が動 供 く光る柿の してゐた。其金色に縁どつた少さな目 _ 7 一枚の柿 子供 お爺 打さを 0 つき立 家の陰から覗いた子供の頭とのだけた少さな また 頭と柿の實とを見比べて首を カジ 家の陰に忍んだ。 S て、 映 はやがて小さな弓と尖に釘の さん、 つた。 0 樹 2 質とが 矢が 120 0 葉を突き破つて、 弓で射てやらうか Ŀ また空に燃えてゐる太陽と、黄ろ 澄 驚 17 映 枚舞人 h 下りて一 S 7 だ空を掠めて てねた。鳥 そしてソーッと足音を忍 鳥は枝に下りて四邊 18 様にして散つて ターへと羽 走 層不 彼方の草の中 2 た。 な は 思議さらに首 飛 傾 不思議さらに S けた。 打 んだ。 の中には、 た矢とを 行 に落ち それ 其 を見囘 つた。 にを傾 た鳥 時



人と子供

子供 一株の樹 長 まだ葉の 睛 v m は 棹 -(6 0 毎 カゴ 7 日 地 2 下に立て上を仰 た。柿の に横 いて 柹 わ 0 樹で百舌鳥がないてゐた。 の樹の る林の 7 ねた。 小枚が F いでねた。子供 其 12 V. 0 棹の て、 は さまつて 実は割 熟柿 聖 子供

は カジ

舞うて居つたりし

坪

H

は熟柿を見つけ

ると棹

をとり

あ

げ

鳥は飛 様な氣 晴れ たの がし ねて 話を思出した。すると後の林の でまた柿を して食べてねた。 7 フ た。 7 ŀ で成成 ゐる樣子も頭に浮んだ。 0 昨 カゴ んでしまつた。 薄 3 蟹 風 して後を振 晚 呵 、くユ かち カジ お爺さん 毛 栋 鋏 を風 の枝 ツ 5 を上げ 栋 今日 クリ 始 0) 質をか に話 から め 8 9 た。 は 食 子供はまた石 て泡を吹き立て、身構 フ 靜 顧 に渡て べて ワーへ吹い 一つし 0 してもらつ 72 ち 而しまだ柿 ねた。 0 樹に猿 か見 T 2 そこに た。 72 た猿 0 0 る様な 子供 は空 L が昇 力> 0 20 一に腰 る様 と盤 らな 樹 カゴ 7 わる 艺 猿 カゴ カゴ

石

上に腰を下

して柿を食べた。

其 は

時

お爺さ

の顔 爺

の半分を占

めてゐる白い髯の

一が動 には

to

た。

3

つも

食

~

てしまうと、

少し 口

ば

ゝゑむ お爺

6

カ>

る事

カジ

あ

2

た。

する

と二人

緒

15

列

6

腰を下して食べてゐた。

時には傍

をお爺さん

が通 九

見 ねた。 n

つけてはそれをとつて

柿の樹

0

下の

石

の上に

側 子

には 供 空

て、

を見ると、

其上を白い雲が飛んだり、 彼方の方で少さくなつて

羽 てお

0

鳥 るの

カゴ

カジ

原の

何も云はずに原の

方

へ行つてしまふ。

働い



デヹンドラナアト・タゴール(

口田絃二郎

△私は警で本誌タゴール號に於いてラビンドラナアト・タゴールを忘れることはできなた。こ、では少しく歴史的に彼れを研究する第一歩として彼れた。こ、では少しく歴史的に彼れを研究する第一歩として彼れの父デエンドラナアト・タゴールの父として、また印度近代に於ける宗教改革の偉人として私たちはデェンドラナアト・タゴールを忘れることはできなべ、

呼ばれる ラジャ・ラム・モニン・ロイに比して 彼れ教育家、詩人、社會改良家を出した。彼れは後マニ彼れの家は代々印度の貴族として多くの宗教家、彼れの家は代々印度の貴族として多くの宗教家、

である。
近代に於ける印度宗教界の最大なる精神的指導者者的精神に於いて劣るところはなかつた。彼れははその信仰、その社會的活動、宗教運動及び殉教

神があるといふ證據がどこにあるのだ?」「お前は神の話しをする、何時も神のことを語る。訊ねたことがあつた。或る時懷疑論を主張する一人の友が彼れに來て

を指しつ、友人に反問した。マルハシ(デヹンドラナアト・タゴール)は光り

「光りだ。」友はから應へた。「お前はあれは何だか知つてゐるか?」

「何らして そこに 光りが あることを 知つてゐる

つい しまつた。子 山 定 しく空から下りて來た 音をたて乍ら でねた。 3 の上で一二度輪 は めた。矢が空をスーツと飛 うな様子を 1 それ て聲をあ ۲۷ ツ ターと立 そして黑く小さく見えてゐると思ふ はもう遠 樹 0 げて歌 供 見ると、 方 は んに近づ 北 鳥 を作て い北の ち上つた。 0 0 カゴ 方 た。 見えなく へ飛ん 弓を頭 V 方の 子供は鳥の から、山の て來 赤土 でしまつた。 そして んで行 た。 0 なると、 L そして鳥 0 12 つた。 彼方に消えて 山 行方を見守つ 上げ 風を切る翼 0) フト F t 一を飛ん 矢は空 すると 狙 0 内、 氣 逃 13 カジ 3 げ

て來 側 「おお 鳥 に立 其 る時 前 時 ない 網 7 仕 事を終 を作ら ねた。 勘 分ぢや。 三郎 そして子供に云つた。 5 つたお爺さんは鍬を持 力> 親 0) もらそろし 思 を忘 12 なよ 盤が川 9 て子 玄 下 供 9 0)

んと二人で青 上にあるお婆さんのお墓参りに行つた日であ 供 ことを思出 は 此言 葉を V 樹の小枝を持 L た。 聞 くと、 それ は フ F て、 春 であ D. 彼 前 方の 2 12 720 見た 赤 お爺 少さ + 0 H な 3

> 思出 青く、鋏は少さくて可愛ゆ けた。 斜 には白 通る た其泡を幾度か たつて光つた。 ブクと吹きたて 3 ナ にさして ī 睛 L Ш それ たので、面をあげて赤 V 子供 0 墓が一つ立てゐて、 下 70 は若 13. 葉 を流 た フト * 吹き消し 薬の 春 > 春 \$2 0) 72 其 てわ 風 間 た 枝 日 はは 12 13 3 た。其 其枝 隠れ 春の 小 __ 輝 匠の カン B JI 山の上には秋の 主 0 をゆり動 日 7 カン 0 た。 0 時 カジ せて 少さな子蟹 山を 盤 少さな泡をブク には 其少さな泡 子 ねた。 0 見た。 供 甲羅 かっ 10 1 柳 其 は 7 老 其 カゴ 日が そこ まだ にあ は 見 側 シ 中 0 を ナ

には廣 蟹であ れて、 なく た。 が家 枚水 恰度 なると、 てれ 0 の上を流れてゐた。 下流の つたの 沂 子供が此 いくをが は くの 春 方に下つて 心 である。 III から柳の I 8 様なことを見てゐ 澄み渡つて V 下の方へと下て行く 處 蟹は 下に住んでゐた 至 行 求 秋 < 的 映てゐた。 IT 0 1 15 で 永 って あ る時、 3/2 間 0 た。 川の あ 0) 核の 處 住 0) 小 DC Ш 水 6 居 さなな 葉 あ 0 カゴ 0 13 蟹 中 别 カジ

は 彼 Z は 木蔭 は常常 死な 私 n 0 意 12 12 V2 ての 置かれ 计 志 と言 に反 面 間 して恒 つて頑 祖 た。そこに彼の女は 倒 ž 册 見さ の傍を離れないでゐた。 張 河 12 つた。 してやる 伴 n 彼の 7 來た、 三夜を過 女は 私は それ 恒 佪 河 時 ĩ 女 0 6 12 岸 私 6

じた。 n 彼 にとり 韶 は は n カジ 韻 の心 時 夜 n 母 彼れ 彼 河 は 1 P 0) 岸 滿 カン n は現實ならぬ或る 風 72 作の驚の上 は今までに覺えな 12 め 月 W は彼れが十八 な敷物をつら つれ ارز 0 ふさは 夜 神 であ 上に坐つてゐた。 7 かすか 而 L 75 9 6 0 S た。 á 席 た Ó の年であ ものゝ靈し に響いた。 歌 る人とな た殿堂を憎むやらにな 0 をさ 月は やらに かつたよろこびを感 つた。 ゝげた。 のぼった。 った。 思 薦 この刹那 き力に撃た の座 は n 彼れ 歌 72 は彼彼 人々 0 n 餘 は 彼 12

うな法院の光耀に充たされた。 彼 その カジ n 出 は 一來な 言 嵐 夜 中 10 かっ つた 12 絶し 家 たる法院 12 彼江 編 つた でを電 と解放 夜明 彼 n けになつて彼 は とを感 L その T 月光 夜 1: な 0, 眠 OR 3 カゴ

> た。 女は は デ 恆河 また XL 友であつたが、 Ŧ 其 120 ン 死 への第四 F 0 h 河 ・ラナ 邊に祖 彼れ 水 25 彼 指 運 は 7 言つてゐる「 んだ。 母を見舞ふた。 P は の女の 次來世に對してまた私 に一神 天を指 人々 手 を指 は胸 L 7 1J ねた。 彼の女は生け L 0 つた。 醪 その てね 上に静 高 く泣 時最 それ 人々 る やら カン S は彼 に置 72 後 は 一覧と 3 63 恰 息。 時 お カン 0

は谿川 もは 女を 彼れ た。仄 行つ は再 12 手 私の V n 0 を引き取らうとするところであ n こがれ 失ってしまった。 りもよろ 0 6 後また彼れは神を意識することができた。 めに行 更 72 び新 らに恆河 あ は神を見ることができなかつた。 かな神 て、 0 水をあ 彼 はれた。 た 5 1 倘 れ CK い寂 の撃 神に於 ځ は もまた日一 は 2 しな 3 神 は絶えず彼れを呼んだ。けれ 凡 を見 彼れ る庭 世 ~ を感じた。 V 界に て數 ることを得な は T 0) 0) やらに神をもとめ 摑む 日のその影をうすら 日 對 儀 ことの す 式 0 間儀 る 數 カゴ 終 あ 日 出 6 前 式 カン 2 た カジ L 2 來 (0) 12 た 感 彼 時 CN る 力> じた光 1 興 神 彼 S 幾 步 味 神 ども 12 0 あ 3

それ それ 外に 要ら る 神の存在 あ ¥2 は分る。そこにあ る。 ハルシはから答へた。 何の もその それは自明のことではない 萬有のうちに、萬有を透して、そして 證據をも 要せぬ 通 りだ。神は俺 るでは ない の内にある、俺 それは 71> か。 别 自明 に 證明 つであ 13 0

傳 それ 生 なかった。 17 れた。彼れに恐ろしい、 於 しかし ハル 彼 いて詳 n シの青 運命は れに恐ろしい、轉換點があらはれた。彼れは未來の大宗教家たるべき星下に 0 計かに語 祖母 年期 彼れ 0 つて 死であつた。 を何時までもその境に置 極 3 めて放縦なもので る。 彼れは其の自 わ 發 カン 0

5 住坐 て祖 0 和 女は毎早朝恒河に浴みた。そして彼の女手づか 彼 ŋ 7 n 臥 母 は彼 の祖 行 彼 の殿堂に行く時は、 の女 った。彼の女は深い信仰の徒であった。彼 母 0 少年期 でと共 は 非常 にあ 0 に彼れ つた。 凡 ~ 何時 てが を愛した。彼れにとり 彼の あ もマハルシは伴れ 女が つた。彼れ カ jν カッ は常 13

宣告し

120

そこで印

度の

習慣に った。 乳

だが 岸邊

終に河

岸

に伴

n

7

行

0

12

運ばれること、

な 5

> 祖 i

までこれ

は 終 の言葉を記憶するやうになった。 5 私は日の携帯者を拜する、 祖 日 禮 母の 太陽 拜 0 一傍を を 爲めに花環 舞し 去らな た。 を作 力) この ジャヴァ花のでうに紅 つた。 やらな場 つた。 そして彼れ自 或 る時 合 22 3 は彼 ~\p^ 身 0 ۱۷ 祈 女は iv h

カ シャパ 0 輝ける子、

暗黑の

あ らゆる

女 た或 る時 は彼の女は終夜神にいのりをさいげ

る

あ

n 與 はマハルシを呼んで「妾が かりをお前に上げる」 が與へ へた。 蹬 加 師は祖 母 力 られた 彼れ 臨終 母 0) の床 はその函 病 ことを言ひ觸らし に就く 氣 カジ を開 と言 到 底 數 恢 2 所 日 V 有 復の て彼 前 た。そし Ü 6 7 あ て歩い 0 女の 2 9 た。 て人々 る た。 涵 3 0 彼の 0 に彼 鍵を す

得られ

る精

12

動

門神上の糧を覺えた

は

始

讀

カン

彼 的

乳 T

は専

137 0 を與 は カジ 12 は 年 デ 70 彼 た。 27 Æ. 力 0) n ~ た。 ころ は た 2 هڙي. 1. ラ サ 私 0 彼 1" de 5! L 5 7 ラ 22 カ 力> 0) 人坐 スク かし彼 ナア は 6 最 0 ン 品品 タッチ サ は 初 5 1 ŋ 夜 虚 性 ン 0 を愛 ながが 歌 無 n 0 ス ツ 0 7 É は 立 F 古 ク 6 ウダ 間 L 派 IJ 0) ら聲高 あ 5 日 研 12 0) もなく死んだ。 な學者で ッ 0 た。そし マニとい 究 720 ŀ 光りで 暗 な を始 く唱 私 好 んで ははそれ にふた。 あ めた。 あ て多く 3 る、 0 家庭 2 た。 デ を墳が た。 知識 0 彼 Į. 感 彼 教 n n 家 化 師 は 整は な

た彼 决 カジ 時 カ> お 如 前 n 何 世 宗 彼 12 は宗教を信 お 12 致 は 前 12 等を服 入つた 永 寄奉することが カジ 人に 富 彼 從させ じることが お 婦婦 n 前に 人に奉 0 友で ることはできぬ 忠實であることは 5 できょう、 仕 できょう、 る。 しようと、 お お前 前 教 73 のみ は何 でき ほ 生 は

F

ラ

ナ

アト

B

次

0

P

うな

句

を讀

むだ。

な心 を讀 望すべ ら逭 に埋 る。 安と悲哀 讀 思議な自然 יי 一とた L n め を充たするとは 3 0 に耽るやらになった。 30 び觸 だ。 研究 4 出る隱れ場は 搭 とと カン \$ 彼 E n 0) 四巻とに鎖された n h 力> 同 離 か凡 には L 時 大 22 に英語 多 を信 海 2 な 12 ~ < できな ての 賴 力> 出 0 つった。 恐ろ 讀書 すべ 6 6 書 彼 4 た。 h b カン É カゴ れは L 0) 0 3/3 力) カラ 72 暴風 亦終 22 彼 を灰燼に歸 彼 力> あらは W 大自 72 n n 17 方サン 多 迷 は は 0 彼 12 3 然 彼 in 削 12 彼 3 侗 720 n 7 0 0 n 25 せし 此 哲 ス 空虚 7 力 水 は 不 底 म ij カコ 35

を暗 かつ ことをもとめ 72 n 3 12 it 耐 120 72 彼 なく 22 10 明か 彼 4) すらな 22 知 L なる知 は 識 時 71> (1) 3 として 鬪 2 72 彼 證 CA を 10 m 透し 最早や生 日 0 希 T 3 達 せら 神 #2 家 得 れ 0) h

私 或 は 3 そし H 知 彼 0 72 7 #2 光、 の心 物 質 12 否 道 閃 觸 識 3 官 账 カジ 感 0) 事 カン 10 象 5 6 生 カン n ら生 n た 3 m ح

風 歡 は 解 化 0 放 流 0 n よろ を彼 こび n 0) を感 3 N 彼 1: 江灑 n た 713 5 S だ。 吹 き去 快 5 樂 でと放 AL 彼

的 何 あ 77 0 0 求 彼 72 世 興 n め 界 一味 る こそ私の 外面 人とな と切り 持た 的 なく 父で 6 った。 世 拓 73 あ S 7 0 彼 3 72 行 1 n S 2 0 12 720 彼れ Ł 多 彼 5 n 0 法 は 7 は 彼 U 繭 女 たすら \$2 72 は 12 信 凡 對 100 ~ てい 內 を 追 語 7

或 日 0 2 とで あ 0 た 彼 n は 室 閉 ち

與 を下 Z 重 6 日 7 カゴ 何 は 7 なり多く 72 12 カ で 私 76 7, n 與ゆった パ 彼れ な タル \$ カン と言 あ 35 0 つた。 2 ニつ 0 誰 2 120 0 9 n 0) と言 93 75 72 72 6 凡 周 彼 0 大台 力》 33 ~ [至] 1" \$2 12 6 7 宜 ·從弟 1 0 た。 は 13 被 な 0 A S 鏡を 彼 尊 n -祈 17 0) \$2 は 誰 3/2 私 12 願 ブ 繪 を聴 カゴ 1 F m 12 對 ラ 所 B 13 もこの で 0 ジ 高 7 有 6 7 < 5 -p 價 願い私 > る 願 9 3 1 75 あ 言 76 110 家 ブ のいは 3 03 菜 > 0 具 繪 0 を な 木

h

ど凡べてを人々

に分ち

與

へた。

彼れ

は何

物を

心は 知 0 RZ とる で立立 に横 3 は 弘 場 は n 1/2 N'S 所 はを然神といふ一个 VQ. 所 殆 つて は 得 震災 有 悲し 6 ñ 0 1 0) ど自 あ 72 食 不 ya つた。 ま 4 事 カン 安 が胸 分 > 12 カジ 10 行 で 迷 湧 2 老 彼 は 前申 9 3 公 衝いて 花園 意識 XL た。 念に支配され 72 出 0 はな ことも、 問 6 じ 12 題 1 彼 72 > た墓場 湧き 出 を想 7 來 n おな は 72 17 出 女 安樂椅 12 そこは た。 -6 1 た 力> 彼 食事 T しまし つた。 5.8 0 彼 子 13 720 寂 * 32 た 彼れ ī は 191 彼 72 自 S 向 n 陛 彼 13 0 慰

彼 n は自ら 記 L 7 日 3

暗く見えた。その 出 は カジ T 0 ことは _____ た。 すとは 墓場 誘 6 3 晤 黒は 感は 取 75 できなか 0 3 カ> できな 凡 ep 去 北 9 らいこ た、 5 1 T 70. 7 n 見え 私 つた。 7 地 力> 晴 0 あ Ŀ H 0) 急 た。 720 n 心 0 0) E 720 に私 E 幸 午。何 私 福 周 4 0 对 人生 多 產 0 13 渖 太 唇 何 天 12 0 陽 17 E 感 あ カン 3 は 0 覺 0 5 2 物 0 0) 720 2 光 寂 幸 12 は 平 0) 立 和 福 6 4 しく、世 だ近近 歌 も二つな この 幸 3 Ty 私 見 カジ 福 女 あ 12 出 を

た。 を命じた。刹那に舟は矢の如く水を切つて流れた。 老 嵐 度 0 かゞ 無謀 等は一齊に「船を出してはならぬ」と叫んだ。 命ずるなら出します」。傍にゐた老人は 舟をつけた。岸邊につないでも舟はなか~~幾 人の言葉を怒つた。 は カン 危 船 凪 な企 は幾百 は出せるか?」。水夫は答 V 日の日 だやらに に逢つた。 てに反對して彼れ の小舟が繋がれてあつた。そして舟 おもは そして水夫に向つて「出帆」 午後の四 n た。 を辱しめた。 彼れ 時 たっもし になった。 は 水 夫 7 彼れ あ に訊 ۱۷ ルシ なた は 分 ね

> 舟 林 は 强風 如 < 高 にあふられ カ> 0 720 彼 つゝ矢の如く走つた。 1 n 0 心 には 不安 カバ 湧 彼は森 V

た。

恐 る > 73 すゝ め

力> 水夫が叫んだ言葉は の力と、 同 時 12 不安とを感 これであつた。 じた。 彼

n

は

何

76

0

大波のなかに彼れの舟を泛ばして 彼 n を暴風 雨 0) な カ> に救ふたものは 72 誰 るも

カン ?

は

誰

カ> ? 彼 n の心は不思議なる力と希望とを感じた。

新 綠 0 陰

神統一 種な治療をやつて居る▲或日東亞堂の主人が風邪で臥床してる所へ二人がヒョツコリ顔を出して風邪を引いてるソ 告白してから、 ツ ーだれ、ドーだ癒してやらうかといふ、 體得した ■沼波瓊音とい 居る。栗原氏は强度の近眼であったが昨今はやはり此法で自分の近視を餘程癒しかけたソーだと聞くがまった。 1) なやること約五分、 時 ▲所が氏の友人で之れも文學士の栗原古城氏が氏の感化なうけて何時しか其精神統 間許熟睡した 一種の精神力を獲得した。そして近來は精神統 へば俳壇の勇鎭であることは何人も承知であるが、 が もう宜しいキツト癒ると、主人額に手を當て、見たが 熱はスツカリ醒めて居つた▲叉友人の某文士が癩病で居るのた目下頻に癒さうと 主人も之には呆然としたが、結局主人を床の上に坐らせ二人が其前後で精 一法に依 此人先年始めて捕捉せる全實在の宗教的實験を て自分のみならず他人の病氣も癒せる力を 一向熱がさめない。 一力を獲得し二人で種 中信半疑でグ

りが とで 客觀 知 0) てとの事實を知つたと同じ刹那に私 できる。 n 微光を を知ることのできる者でことを。しかしその知識 識 あ E の知識と同 嗅ぎ、 i つた。 同 一發見し 込む 時 視 考ふ に内 ること、觸れること、嗅ぐこと、 恰か で たの 部 時 る者 來たやうに も非常に深 0 に主觀の知 は随分 心靈の は自分であることを知 ある 感 長 知 し、世に私はまた私 び真理 じら 識 識 い暗の底に一道の が生れ が生 ことを覺るこ n 温はまた 720 追 n 一求の た。 72 私がこ 考へる 後 肉 2 視 0 體 た。 カゴ 光 2 觸 2

はや 界に徹し行くことを忘れな だ。 カゞ れは て全世界のどん底 かくして外 部的 に何 知 識 もの と同 かつた。 時 そ 力> にその心 彼れの 摑 る出 睿智 靈の 3 5

ح 太陽 ちの人生 は 適當 6 と月 n 0 を保 13 季節 0 企 時 が存する 7 25 をさ それ 起 7/1 南 る 70 3 は心の企てゞなければなら つの 3 凡 カ>? 7 べてこれ等の Ŀ 全てのた りそし それ は T めであ 物 下 現象 雪 る。 0 る。 企て は 風 私 3

> 充 にとりて昨日まで没交渉であつた自然 、不思議なる力に充ちて見えた。 神

不思議な力を見た 秘 彼 n は嬰兒が生れてその母の懐 に乳をさぐる

れではなが の雲は 心の ないか たか? た。 神 であ 眼 。彼れは凡べての 餘程 3 がてゝまで たい彼 いか。 それを致 彼れの法則 取 6 さらに、 0) 0 女の へたか 押しびろげられた時 ぞかれた。私は 胸に乳を與へたる彼 12 たった 全宇宙は服從する。 私た 誰れが母の ちの 2, 生命 要 幾分慰めを得 胸に愛を植 1/2 求 與 を知 れ 悲し では る彼 n る

カ> n は カ> く言 30

H n どもまだ彼れ の心 は全く数はれ なかつた。

面に は て來るの 1 彼 F 大きな浪を立 黑 n V は 雲が を小 久し を見て舟を出さなか 舟 V 面 6 田 たせ 下つ 舍 0 空 0 12 120 * 旅 埋 行 舟人 2 め 力> つた。 5 7 n は暴 は 歸 70 雨 た 0 彼れ等は 7 風 0 雨 季 來 强 節 12 カジ V 風 近 6 カジ あ 彼 づ 河

△題

句數を限らず

△歳心集句稿と明記のこと
△東京市外高田村雑司ヶ谷町二二中塚直三宛

凧墨水池囀 柳 げ 足 嚩 椿 瀧 水 0 鳴 旛 12 月 晤 た 0 力> 投 B 17 げ H 2: To 河 當 0 る る 追 俳 風 水 生 行 畑 際 旬 晒 0) 風 雁 慕 庭 3 12 屋 石 17 集 布 世 4 9 1,2 Щ 0) 75 根 渦 打 O) b あ ぼ مرد مارد مارد AL 0 陽 M 手 易 3 7 高 3 3 弱 您 炎 В 0 74 立 73 春 3 先五 鵬 n 居 15 力》 25

日春鈴 츤 椰 冬 湖 水 花 榕 蕞 羽 九本 洋 天子 鳴 里郎 二宮 皎 樹 葉 雨 子 弟 樹 爾 双 香

13

y2

45

10

82

13

3 5

る海 5

帶 登 巖 種 あ ح 暖 暖 木 雲 ٤ 蜂 枕 E 瓜 雀 8 袋 3 25 3 かざ 5 時 校 畑 砂 花 鳴 0 3 N 夜 ち 計 飛 藻 み 0 0 3 8 ζ 4 ば 0 b Si" 5 舟 ح 3 樹 5 麥 水 B 9 更 足 ی め 点 4 b ^ 顏 0 け 垂 \$ 77 h 30 3 は Ш رې 來 3 買 n 吹 L b 打 76 穗 る 哭 0 CA 0 N 泣 0 全 2 0 隨 た + た 小 3 4 足 6 >" 22 鮎 子 雨 3 ず < E 掘 鮎 あ 濡 3 0 上 0 0 Ш 0) 太 3 9 蜂 9 9 葱 宏 鮎 る カン 形 床 和 は 5 餇 冷 > 畑 高 E 13 げ ~ 赤 72 73 P 文 的 0 6 L 蜂 る 5 る 5 9 ò る

虚

1

集

碧

樓

MY SOUL AND I

I

"How long, my Soul, a craving hunger, how long Shall I feed thee with truth and beauty,

The best of earth and heaven? Still thou dost long For more and claim it as my duty!

"But now Life-weariness holds me in thrall;

How sweet and snug the opiate breast

Of dreamless Death! Depart thee hence, O Soul,

Bid me adieu; I need my rest

Forever more!"

MY SOUL

"Nevermore thou shalt have rest,
For thou and I are one;.....render me more
Thou canst, a better than the best,
A truer than the truest, forever more!

"An endless growth thou must pursue;
Ransack the bottomless abyss of space
And time, and render me my due
Each hour; fot growth is mine in love and faith
Forever more!"

UPON THE ROCKY ISLE

Upon the rocky isle amid the sea I stand forlorn and stretch my ken; whence did

I come and whither shall I go? I see Nothing beyond the blue, but near at hand The weary tumbling of a shattered shell, As ceaseless waves roll upon the strand.

I fell asleep, so wearied and inert,
When Fame woke me.....her gorgeous attire
Dazzled my eyes.....and loud she spake, "Dear heart,
Pray, wouldst thou me? I lead thee to the throne
Of gold, a star-inlaid; though fickle was
My tongue, I'll serve henceforth thy name alone."

She passed away and then another came
With mellow cheeks and winsome eyes, and said,
"Thou wouldst me, yes? My love's to thee aflame."
I found me wafted in the fragrant air
And sailing on a barge of woven flowers,
Stirring the moon-white flakes of cloud so fair.

Methought I heard the sonorous approach of sweet-Voiced Poesy, sprinkling music of the world Unseen, with fruits of dreams and hopes replete; More hopes and dreams the earth can ne'er conceive, Are all in full bloom in this paradise Of thought, which I could with one leap achieve.

Alas! more drink, more thirst, how shall I slake? Nor Love nor Poesy can fill the soul-hunger So long as ego lives for ego's sake; But now by mortal strife my soul I won, Praying to live in thee, for thee alone, And here I grasp thee, God, eternal one!

Riichiro Hoashi.

濟 效 籍 在 di る 0 次 食 的 次 結 省 1 約 0) 0) 消 存 果 他 的 0) 汀 (1) 倫 す 6)現 醜 德 3 次 在 完 消 醜 6 交 0) 寫 LC 行 n 的 業 13 は 計 屬 7 則 爲 E は 0 在 is d 果 全 酏 12 弘吉 開 温 父 結 0) 如言 0) 與 的 11/1: 6 會 係 7.0 ~ る を中 5 結 去 兄 業 不 は 77) 3 果 慾 あ A ~ 5 配 TE 男 0 6 は 其 る 0) 敎 又 6 n 果 及 6 完全 男女道 業 心是 乱 育 自 子 あ は 7 6 行 酿 CX 31 南 0 力了 それ 7 身 居 3 會 其 あ 婦 為 業 罪 6 衣 3 居 1 な 自 Ū 27 男 13 な 與 6 食 0 掘 は 身 女道 b 基 敌 1 作 自 慾に 3 德上 ^ 他 社 13 3 6 見 境 t 因 1,0 0 5 見 身 西泉 衣 0 V 會 社 德 n す 關 貧 1 n 會 6 n 歷 た 業 歷 食 0) 30 見 は 男 非 6 ば 0 1 L. 炉 又 块 す 婦 1 係 (1) 3 E 雪 結 見 衣 結 32 F 0) は 的 偷偷 6 3 0) 與. A は 非 父兄 食を 見 0 女 起 た よ 果 n 果 Im 行 反 男子 鬼 偷 男女道 道 5 ば 75. n 如 原 為 V 6 1 1 は ば完全 完 < 父 南 求 南 -(行 開 及 温 德 は 37 0 遺 兄 3 全 る 1-Z La 結 95 1 12 CK 1 的 習 德 75 22 烈 h 其 果 る AL 居 义 行 0 第二 第 3 は 見 盤 な 男子 8 13 耐: 75 F 3 6 他 75 6 窩 經 濟 現 n 3 頭 其 會 衣 0) V

> 完 姑 穉 HI 方 73 全 0 6 する 起 ~ 人 3 0) 3 致 結 は 4 は すところ 果 個 0) -10 6 1 耐 及 あ 會 0 CK 3 等 6 耐 6 0) 更に A 曾 あ 類 1= る 於 0) www.ch.cold 言 17 跨 3 1-6 約 A 連 帶 格 す 意 n 識 的 的 發 共 0 赤 育 犯 だ幼 V) 丽 業

不

1

小

數

6

あ

る

0)

先

づ

無

S

0

を以

1

見

n

过

業

酡 業 婦 0 種 40 及 A

部 工艺 1: b を寫 敷 釋 娼 來 明 を稼 70 は 3 る 配 稼 A 柳 1 ~ 寸 0 法 業 業 は カゴ 女 す 12 13 3 6 樓 子 妈 被 規 加計 妈 何 7 何 放 6 in. 妓 4= E 政 は -1-6 居 之か DI 193 治 と債權 貨座 總 0) T (i) を云 3 7 な 好 1. 利 41-交 73 0) 營業 一敷營業 是 營業 3 色 L 力》 713 カン 女子 50 を當 6 R F 唯 孙 加 0 1 0 法 0) だ 70 6 6 類 は 方 男 か 娼 浴 妓 0 16 -3 規 あ 3) 妈 m 妓 t 面 子 E る。 j 取 3 3 る 12 稼 妓 ば 縮 0 力》 70 0 40 6 力, ば公 想 7 妈 4) かり 然 規 6 宿 座 然 分 6 約 嶷 則 妓 6 泊 法 -(密資 娼 類 6 9 を許 规 は 11 Ty Tr 1 -ば政 古 新 よ 117 1 刻 私 淫 # 妙 0) CK 9 111 -7 淫 娼 姐 3 0) (1) 之な H 從 妈 F 校 行 帳 入 零 妓 0) 如言 1 0) 体 附



融業婦 0)

院業婦 30 は 衣 行 によつて或 家に 3 博愛平等の觀念に基いて貧富を調節 二人女子 食慾(經濟的 色 煽 m T 對して で無くて 良人に對し 0) である 營 て性慾 3 間 から 女の び者 自己の る貨幣的 業婦 と副業 欲望)の 1 其 此の は理想化さ 單に限定さ て愛 格 0 6 任 的 、含道徳は 配業 根 ある。 强 として營む者とを 情の結果 例を得 人性 本 叉は第 的 始 的 n 原 MI 31 (1) 生ずる 12 る契約 規 存 因 ない男子の として性事 S る縁災 範 在 7 小太 理解 する 男 此 0) 媒介 女 社 上より に基 し其 間 力ジ 會 勤 伯 性 的 は 文 を許 寫 原原因に 衣 慾 性事 0) 朝 30 的 総て 及び であ 7 3/2 ど為 的 して証 協

を生ずる

0

\$

5000

随業婦

の二大

因

結

同

力

0)

0)

國際

戰

0)

7

生生

10

72 Te

性

的

营

活 か

F

0)

から 17

生

活潜

20 原

南

會

に雕

業婦が

つて醜業男

(男淫賣

は

MES は人類 現在 の上 活 此 WE: 力兰 カッ に社會的生活 夥 を有 110 0 外 ĩ 强 0 生 想 して絶對の 0) V 類 La 0 414 人性に於 (1) 一普遍 夫多 規範 人の 生活 -10 南 20 此 き道徳的規 教養的 爲 麦 る。 的法則 0 的 權威 究竟 外に貧富又は 普遍的究竟的 0) ては價値 して居る 其の 躬 的 ir 結果 背戾 行 有する無上大法 理 1-1-想な 意識 di ので 能の 事 カン て生活 質い は 理 4 として て生 10 無 想に從 て一夫一婦の生 £ S 道 から [2] て居 遍 此 務語 肔 0 つて完全 すること 見 的 的 體 る 理想 32 るけ るに 生活

者 ば

於 南 L 妨 7 * 7 る 醜 性 E 妹 行 事 業 h 縱 0 0) を行 婦 場 T 居 合 柄 20 ることで あ 6 限 2 6 定 0 南 3 る。 3 6 此 n 南 か 其 夫 (7) 12 る 55 意 0) る 力> 婦 人員 味 5 A カゴ 21 以 、その は是 於 外 0 純 7 男 然 0) 淫 性 子 n 72 統計 亦た 事 70 72 對 丽 非常 と妾と 1 る 13 點 7 嬬 0 12 性 6

ESCACOST SMCTOST DRICKTOWNST 道德 政策 Bus よ 6 觀 30 3 金

規 表 分 0 03 規 的 離 我 施 節 政 的 範 的 典 す 治 0 形 政 3 は -型 式 E ح 規 ることの 的 的 あ 理 組 爺 で 道 生活 0) 想 12 0 法 る す 織 を以 於 諸 道 あ 徳とに 的 2 問 故 法 德 ば る 25 0 7. 32 25 總 る。 規 的 於 出 企圖 に政 質現せ 7 カン 其 憲法 5 來 密 規 7 は 員 それ 節 は な 接 治 6 0 2) に準態 73 つて 本 吾 谱 あ K 13 W 完 之を主 で政 德 連 關 據 とする 0 12 5 全福 とす 此 0 的 鎖 係 治 利 耐. 法 カゴ カゴ 0 利 3 會的 道 -あ 觀 觀 或 義 は 則 か 國 德 組 70 h 的 的 游 カジ R 內容 的 立 故 生 É 足 其 12 13 規範 見 7 活 0) 到 見 此 0) 25 身 5 底 政 統 A 0 0 n 規 格 を 1 5 個 括 d は て居 自 基 範 n 家 E 的 人 0 A 其 代 4 1/2 理

般の

命

的

敘

12

1

1.

3

た

意

130

て居 3

民

公序 最

俗 心

叉 る

13 注

善

良 棚

15 0

法

規

12 俗 3 計

於

7

は 反 法 圃

幾 d に於

多 る

03

風

俗

聖

V 10

殿

T 法

風

法 7

律

行

為

To

刑

义

は

警察

居

る

版

物

0

發賣

止 犯

きは

此

目

的 取

6

Z

可 カン 縮

例

6

6

我

7 0 To

居

る

卽 南

ち人

、身の

賣

一貫

及

CX

貞 匪 如 談 禁 良

操

1) は

切

萱

を營

考察す 府とは 完備 に學 部 其 る。 73 3 養に 叉は 政 3 省 0 する修 教 中 教 努力 訓 務 如 道 な カゴ 6 啓 圖 深 是 6 印 n 育 示 あ わ 弘 霞 13. \$2 6 カジ ń 0 る。 一發し 身で 6 R 3 する 6 7 あ る 3 此 居 域 03 國 地 る。 彼 あ 敵 方 教育 3 民 3 家 0) そし 道 育 6 0) 层 0) 27 6 今 それ 私 我 理 政 0 智 É 南 2 德路發 之を 國 司 は 2 治 あ 治 0 1 9 る。 7 最 カジ 學校 政 品曲 10 0 m は 展 3 府 7 は V 爲 12 રું A 之を 明 類 rja 居 内 内 H 於 (N 12 30 は U 文 治 12 留 1 る カン 12 央 廮 教 政 卷 TO. は 0 12 0) 於 A を治 學府 it 府 府 表 行 H は 省 現 政 0) 縣 12 400 3 於 12 最 め 政 入材 育 t 0 6 カジ 50 就 75 b 內 n K 文 府 制 7 6 治 Ł 務 6 ~ V 0) 度 敎 居 的

- 119 -

賣淫 社 律 於 行 注 で、 檢 釋 0 Ĭ÷ カゴ 律 it 私 會 行 12 は す を爲す 娼 37 的 30 n 於 を 娼 1 3 12 為 とは H 行 妓 公然 (0) 0 9 200 3 犯 接 3 0 6 丽 10 女 娼 謂 何 處 0 缝 私娼 南 と行 紫 随 子を 罰 妓 6 W 7 6 康 30 を為 業 あ 性 以 3 合 診 南 3/10 た 指 公 法 外 3 0) 專 る す女子 に組た 2 為 3 適用 \$7 雪 0 力> 至 0 n To 所 0 0) 女 そ 義 行 後者の 答察 カゴ 女 以 3 和 0 --務 3 6 7 10 6 FIF 受け ことを公許 南 0 300 者 0 6 南 犯 6 3 17. 娼 規 行 3 3 0 0 50 庶 13 定 0 -70 妙 相 2 -為 h 南 収 S 0 遊 2 は 37 4 3 稲 隱密 0 私 32 者 カゴ 12 2 規 行 男子 娼 政 よつ 然 あ 70 31 7 政 副 及娼 行 力了 居 3 0) 12 1 6 為 77 1 ば 反 100 70 3 娼 12 175 解 10 カン 妓 6

73 全國 F 5 猛烈なる増 0) 如 正三年 人員 三千三百 を懲妓 0 數 办 0 歷 13 3 1 加を為 餘 約 と酉 0) 3 調 明 A カジ 0) 查 して とに分 增 內 八 112 加 は T -}-務 居 七百 省 12 Fr. 一年度 30 W 13 落 調 二千 九 登 0 明 居 -1-7 (2) 0 治 統 居 餘 3 人 九 72.30 カゴ る -1 -7 35 홼 私 南 j よると Æ 娼 人と 0 n 11 度 12 は 毛 03

> 五年 數 外 以 於 增 人員 12 1:00 6 --九 四 72 0 萬 0 江 1 17 A 加 た 萬 -}-0) 調 百 倍 間 副 は 3 E 13 100 6 八 9 DU 6 カゴ 查 餘 業者 專業 7 千 酿 A 約 約 年 加 12 業 約 6 三千 居 度 £7. 17 ----大 H 2 者 煽 3 自 調 00 6 る 0 F 高 ----0) 3 餘 3 清冽 DG. 3 それ ---10 T T 会 查 0 H 年 T 員 、とな 72 A -Z 0) A 南 7 7 餘 國 ___ 度 萬 應 は 10 F 0; 32 6 1 ---ò 0) A 0 0) 業 配 H 約 0 办 A 大 b 力了 3 0) 調 藝 にも三十 婦 大 3 A 1-此 6 IE 增 5 查 へかと M Œ 3 至 0) 0) 大 加 法 0 萬 私 五 一年度 Ä االر 超 6 IE 10 6 3 -加 年 娼 年 133 134 TUNE 南 13 M 0 ~ 72 に 15 を示 度 間 私 I. 酌 3 (2) 萬 7 9 たからか 於 增 735 H 0) B 度 婦 1 加 於 達 1 餘 居 T L H 0) 0) は 徐 di 1 三萬 侗 T 6 ich 1 3 調 7 Л 3 四 員 公 金 る 南 0 百 查 6 妈妈 娟 その この 國 萬 增 Zi. 75 は 17 餘 的 約 加 治

又 File 2 Ci 4 注 律 涯 力> 17 6 姜 亙 0 係。 0 T 以 あ 報 外 酬 12 を得 於 此 7 0 安 3 契約 1815 13 70 夫 Ŀ 1-1 敷 力) 掘 5 及 男 CK 0 子 道 年 德 期 的

だ

ī

警視

廳

2

協

議

0)

公娼

縮

間

0)

改

TF.

(1) 6 孩

改

案 す 娼

0

产

聞

3

座

敷

飲 取 30

店

ļ

余業させ

-要領 方策 波

之を酒場

0) 12 た 確

如きも

或 食 曾

行 TE

> 3 撲

出

6.

今、 貸

共

0) うと 収

公

娼

規

#11 1

Cr

私

0

方

針

7

定 Ŀ

n 規

帝

都

10 まず 近 就 は 12 度 斯 0 C 7 22 は 不 0) 笼 Eu. 買 12 1 0 居 足 る 者 殺 7 如く 都 穀 來 悉 る 0 7 4 L 反 0) 1 其 議 育 育 威 性 公 合 對 0 カゴ 私 Ŀ 7 72 盟 72 C. 1: 事 多 娼 0 0 0) à 娼 置 惰 老 0 世 0 諸 得 程 笛 制 きた 性 試 機 7 る は T は S 制 ~ 、き次第 年 關 度 所 男 度 公の み あ L 諸 る カン 度 7 一公は とし 喪 12 1 5 12 カゴ 子 米 6 3 に換質す V 向 其の j 於 名 於 B 0 集 女 來 0 カン 6 て自働車 男子 決 常 7 3 T 相 7 色 旭 5 To 3 kn 72 6 道 4 程 公 カ> 手 自 1 13 制 12 L 行 0 < j 5 娼 諸公が 1= 由 7 理 最 3 向 為 0 12 0 3 る 度 教育 6 を維 遊 12 は 6 1.2 な 0 ことを 先 氣 0 3/ 0 を飛ばす 最 見 勝 東 -政 自 あ n 0 其 廓などに う 分 今ま n 縛 3/6 府 由 义 0 る る 持 敢 瓜 n 6 が普通 は T. 性 經營 から 希望す 娼 は .具. O) 42 あ T 何 遊藝 然 7 居 事 5 とな 俄 役 青 散 晋 制 5 所以 機 A * 足 3 る 度 娼 年 4 カン 的 に散 ix 及 翻 12 12 0 h 3 故 時 133 であ 心踏み込 現は 女子 達 私 E 解 公娼 とす 度 CK 弄 加 到 12 10 貴衆 底 ī 論 娼 體 道 12 娼 E m 福。 現 17 7 T 0 德 女 3 制 成 27 1 L

> 今度 とは 12 朝 1 飛 北 0) 內 最 0 だ 動 抗 失業 黨 逆 田 17 な 衰 かし 此 務 26 1 野黨 行 新 近 は L 又 22 微 不 3 省 3 遊廓 難く づ 矢 を死 8 2 72 古 0 は は 見 な 張 交 保 申 配 V 3 6 此 明 並 風 3 1 0 72 等 t 運 0) h あ な 護 許 來 世 12 要 0) 1 す E 0 3 6 如 動 0) 界 立 自 E 72 力; る -(間 沥 は (1) 印 憲 然 題 解 所以 13 結 政 0 0) 0 à 寫 大勢に 客等 如 然 代 A 5 果 9 あ 的 12 6 かは 議制 る 趨 3 為 四四 あ 6 V2 Ł 秕 13 3 勢と 意 南 3 あ 0) 之れを 政 る 當 府 最 抗 3 我 以 0 E し。 心起 續 1 當 L 近 敷 國 T な 路 3 7 難 憂 私 E 者 は 局 V は、 V F 7 大 72 曾 此 < 慮 娼 7 力了 及 5 貸座 阪 今 0) 速 晚 其 -1-又 辩 C 0 T 0) 行 中央 府 P 我 文 6 111 成 跋 最 る 0) 為 敷 阴 瓜 居 3 す 頭 6 10 と述 3 图 態 政 0 於 娼 3 は 的 3 る 15 府 大 V 大 123 我 0 カゴ 36 3 其 3 勢 展 力方

光

1.

た

結

果

6

あ

3

換言

3

32

ば公娼

最

2/3

111

殺

を 連 国 消 取 3 消 0 闖 9 7 は 0 する カゴ 3 國 消 許 す は n す 13 手 居 阴 T 卑 12 L 3 譯 あ 取 6 國 可 3 於 力> 75 カン 6 h 得 消 0 を 2 是 必ず 12 17 不 3 7 + 12 W 3 取 は 理 9) る 偽 道 言 府 所 性 は 公妈 B 穀 消 カジ 者 行 大 的 毅 德 す 力 7 以 能 育 す 本 2 育 カン 因 6 7 n 縦 6 敎 穀 カゴ 0 73 6 果 0 與 0 行 0 か ば 他 3 7 育 育 分 あ あ 獎 あ 企 許 凝 ~ 30 政 右 方 5 る。 る 0) 私 勵 12 有 老 厂勵 0) 0 0 る。 可 E 0 12 卽 公 北京 獎 6 娼 な 7 選 * Ü 3 とは 手 12 政 於 ち 娟 然 勵 5 闖 カジ 取 絕 る 7 はず 取 於 治 此 6 2 必然 12 る 2 生 > ž 消 對 居 な 消 政 H 消 非 Ŀ 0 よつて 取 そし カジ 0) 10 す 的 る 治 3 H す 點 德 0 倫 12 敎 消 数 B T 法 てとに 0 m カン Ŀ 瓜 大 12 を 淫 於 育 育 風 3 0) 結 然 娼 は 敎 73 於 7 則 0 與 逸 7 風 教 انالي 25 0 12 办 果 矛 6 3 育 る 0 ~ 1 0 敎 1 尊 15 因 70 12 娼 D 12 許 矛 る 政 0 盾 我 罪 を保 < 茶 瓜 Ũ 0 2 32 0) 3 敎 治 避 13 盾 國 政 惡 殺 許 7 700 は 畫 娼 ž カン 音 7 13 念 25 0 府 3 72 風 問品 す 自 5 7 公 0) 可 破 6 行 陷 0 を 政 瓜 カゴ 敎 办 許 3 3 娼 取 쌾 壞 取 5 あ 政 府

兆 度

0 0

あ 馮 娼

3

私 3.5

0)

觀

察 散

12

1 制 0)

22 度 6 刨

は

是 É 是

n

は

女子 實 隨 性 カゴ T 增 30

教

育

0) る

淮

全 機 近 第

近

為

5 私 7

男 娼

子

0

慾 此

j

0)

專橫

觀

察で

あ

12

公

娼

13

0) 12

形

勢 頹 13

-6

南

3

は 等 燕

男 0 1

13

取

9

娟

性 カゴ

7

不

完

全

南 n

6

0)

方

較

12

完

衰

型

妓

姚

私 A

娼 員

0

激 於

す T.

3

最

ò

私 12 關

12 S

B 力ジ

6

0 的

> 0

3 4) 0 2 酌 3

3 3

n

0

娼 娼

制

6

娼

0

然

的 は

現

12 7 は

な 集 1 的 は 0)

其 * あ 勿 南 政 1t 存 是れ 論 9 0 治 置 0) 行 集 CK す 緩 7 Ŀ 結 胶 妈 14 0 3 は 圖 果 F 且 7 0 焦 は **必 妈** 0 调 は 1 娼 0) 制 娼 II 兩 愚 男子 弊害 去 意 私 6 度 0) 院 4, 味 * 0) 取 制 通 t 0 存 非 幼 道 13 置 0) 0 簽 綿 6 度 議 だ A 德 雅 少 通 3 X 12 員 g 1 12 は 上 鄭 な は 從 と謂 な * る 1000 2 1 激 能 依 含 害 2 0 理 公娼 0 時 h 4 發 J 言 S カゴ 曲 3 公認 7 0 3 代 す 多 0 L ~ 7 為 居 制 云 3 3 0 0 所 V 뱱 3 皮 す な 度 慮 3 あ 12 0 想 意 散 m 3 in the same カジ 3 る あ 1 な _ 0 採 あ 見 娼 る み 用 散 12 る る。 J ば 0 政 政 6 12 4 南 制 娼 府 2 政 治 は 3 17 る 度 0) 0) 治 無 制 翻 n 0) n は カゴ 娼 役

度

0) A

< 7 6

要に を廢し 最 社 存 h か 1 n 願 力づ ることと 私 力 300 必然 梁は或部 カン を達せんとするは最 せる文であ で其 も完全に は男子より得 娼が多くなれば隨つて其の收得する報酬も少な 超過 對し ら公 0 T j 6 私 8 嗅 32 0 を貧 現象 般 て需 かが 習 娼 6 私娟 娼 す かせられ 其 慣 男 分 と公娼 7 ることは 民 酿 娼 しとし までは及娼の存 子 12 要 6 り食はんとする。 6 0 片 (V) 代 性 カジ 業 一供 あ 7 0 た金銭に 人口及び富力上より 事を満 、公妈 公給 て居 を寫 0 私娼 それ た丈では饑 る。 補 ^ 祀 助 出 -70 0 被、 密接 憂に これ 事 水 關 12 B \$ i 0 すことを厭 は、 存置 道理 よつて生活するの 係 7 足せんと願 13 過ぎない。 進ん V 13. 0 其の 力了 關 食慾の 進んで私 在 鬼 4 越 0 係 7 で私 公娼 は満 よつて女色を するお影 私 る。 あ 何 0 とな る事 娼 社 力 人 10 結 娼を 足し 場合と同 法 2. 會 は は放蕩 制 果 かの 娼 無 放 6 n 0 17 別 でを侵 南 求 ・至る 0 6 於 蕩 13 in 私娼 私 あ 南 0 であ めて 兒 て放蕩 3 あ る。 0 して 娼 公娼 醜 る 0 本 需 嗅 進 -(す 0 3

> 7-7 12 12 ことを好 くなる 法 13 江 止 まる 生 私 醜 活 からい 娼 業 130 L B 25° 12 社 遠 無限 得 0) 多數 6 SON IN £ 1. 37.5 に激増 あ 3 風潮を生 い現象を生ず Í 0 る 女子は 揚 する ずる。 如きに入つて女工 性質 到 底醜 る。 は それ故、散娼制 ない そこで多 業に從事 る限 72 3 -度

それ 弥る 恐る 社會 滅す 丞娼 によ 相华 制 自 ると論 7 度 山 放 るに 檢徽 制 でえ より 3.5 に任 つて蔓衍 0 育 2 ず カン る譚 きてとを 0) 度 ば数器 花 居る る 5 世 n 足 12 n を設けな 私娼 には 杏 ば よつ 10 5 柳 教育 炎 公立 な 病 3 0 カゴ 6 熟 7 るの 的 13 南 0 行 穀 S 感 制度 カン 衞 事 思 學 H 0 知 0 3 で、 73 医 5 生思 力に は 想に 染 公娼 言言 府 20 -せ、 id 院 花 するの 1 V 又公娼 今日 すれ が、私 カゴ なら に於て 想を發達 過ぎず、 柳 9 办 穀 後 任しなけ 病 で ば 壁 2 0 13 師 Y2 ても 治 私 Ŀ 12 有 花 娼制度であ Tr 差 不完 檢黴 様で それ 療す 26 到底 柳 娼 0 花 世 n 自 花 全 を施 ば 論 柳 0) カン 3 身 蔓衍 な 病 公妈 6 花 柳 15 17 (1) 6 公娼 る申譯 柳 5 あ 病 は 1 ば何 格 形 私 には 病 る 本 1 的 0

に變移 を以 を保 宜 勵 外 E 成 2 飲 妈 は n を講 う立 行 LL 婦 食 持 老 醜 つて 疑 段 は 12 12 た 出 せん L 17 13 す 3 業 0 1 關 たせんとする段 5 定 A たなら 公娼を 護 我 娼 ずる 3 なく を成 進 來 保 其 を F は蓋 とする 步 カゴ 護 他 め、 0 表を制定 顛 內 3 3 公娼 6 to 27 制 散娼 由 ば金銭上 倒 務 3 私娼 娼 は た あ 加 度 醜 L de 12 册 省 は 0) 道 を緩 0 H る 制 娼 業 界の ると云 必 私娼 神 化 0 カゴ 德 洲 度 妓 は 策 思 制 娼 然 す その 題に 0 會 0 及 収 和 0 6 は 度 2 趨 る 化 進 改 妓 0) 0 CK 0 從 性事 in the 如 現 勢 0 をし 矛 步 果 娼 樓 良 3 彼 0 Ò 死 3 盾 否とし < 象 であ 南 6 に隠 妓 であ 方針 貸借 る。 等 10 主 0 は 1 -7 0 か 3 あ 0 張 (1) 若し 私娼 更 る 3 南 それ 3 3 L 人 0 0 對 É 其 見 76 S 權 5 國 7 7 7 カン あ 入 間 曲 册 5. 角 1 0 集 を 6 公娼 家 付 海 風 18 C 契 る から Tr 撲滅 道德政 此 娼 0 22 敎 保 諸 約 カゴ 撤 0 斡 娼 V 南 政 行 0 0 カゴ E 0 護 思ふ 點 種 娼 旋 0 妓 方策 32 制 府 私 政權 も是 9 體 間 0 檢 妓 す 度 E 策 7 カゴ 娼 12 便 30 12

> カを 公娼 題を 政治 段の 國 設 7 0) 多く 3 相 激 政 13 は 與 T 手 俟 0) 惹 12 5 手 ふる 的 增 女色を飜 12 起し 參與 廢 專橫 れて 公娼 厚き 12 を 5 止 0 -H It 13 す 居 は た 保 3 0 m. 大 3 暴露 男子 カン るの 7 0 護 弄 食 は 1,7 0 結果 を す 3 3 なら 女子 たで Ł 0 2 0 加 る 為 あ カゴ T 不 12 2 隨 1 出 度 75 た結 Ē る 道 Va 0 あらう。之に由 0 必 有識 る。 力> 德 來たならば、一个日 る。 12 7 業 素 要 5 的 果 政 好 見 潜 要する カゴ 者及女子 性 12 段 府 3 慾 最 15 あ 近 0) は 3 當 3 75 3 國 改 う 的 明 保 初 12 良 民 0 政 共に、 を よ 護 カン 0) 0 19 7 會 9 12 す 治 施 男 機 3 觀 一公娼 女子 男 3 F 7 0 T 育 一に於 子 為 12 を 徒 力了

四 道徳政策上より観れる私娼

恐 を 0 何 駆げ 3 密 5 3 當 73 ~ 娼 7 当次 る 集 0 6 繁昌 西 我 娼 かっ 第 業 制 カゴ 明か 婦 とな 國 度 0) 様に思は を解體 0 に放ては に瞬 魔窟 る。 米の 然らば 12 L て散娼 32 化 如 藝妓 る す < る 2 私 併 n 制 0 娼 して 觀 酌 度 6 は 婦。 力 流 32 日 か 本の 妾、 は 3 皮 5 想 實 ば 他

する 蓋 易 手 警視 娼 等 生 3 12 る 12 次 0 經 多 3 愛 活 掃 は 12 40 を見 計 事 カゴ 此 17 男女道 F 濟 泉げ F 想 4TE 廢 する 呼 0 相 取 廳 8 0 7 カゴ 發 像 應 殺 L る 0) 止 當 南 あ 0 論 縮 3 12 居 性 7 ح 職 1 育 0) る 0) L 0 於 12 る 9 德上 澗 歡 とか 易 慾 it 3 對 0 7 n 毅 業とを 7 0 游 女子 業を 育 不 训 男子 孙 到 l 野 Jr 7 S 3 彼 3 する Ė 0 ことで 13 出 底改善轉 郎 3 等 私 T 车 彼等 は 敎 る 5 來 な 與 命 あ 直 に 娼 を 的 反 鬻 男子 有 所 0 る意 觀 ずず ち る ~ É 庸 對 1 6 撲 ず 上覺 丰 を 一來る 結 0 あ 6 12 滅 徽 察 0 iz 與 3 義 婚 殊 與 3 味 0 聲 現代 以 業の を與 12 0 す ~ 华 取 3 道 上 を高 實 過 7 华 12 0 難 3 ず、 鬻 德 息 M 故 私 船 0 3 私 獸 見込 は 行 0% 0 H 性 家の 女子を ば 12 的 政 70 無 源 n 轉 < 通 案 要 的 in 不 性 ば 又 策 慾 性 3 いいかい 業 17 す す 男 V S カゴ 激發す 慾 衣 E 子 慾 K C 3 子 カン IF. 於 30 à) 5 女叉 5 7 食 E 12 E 12 < 女子 總 12 者洪 促 3 婚 性 於 慾 國 50 解 圍 3 0 對 7 1 カゴ 慾 今ま 德育 繞 は 私 3 L 粪能 1= H. は 娼 す は之を 今般 妓 細 13 1 12 對 12 は 12 0 3 7 通 0 苦 容 沿 態 選 寸 件 扱 は 瓜 2 齊 君 を n

比較的 坂、 P 東 高等 住 居 3 7 す 携さ ち富 ž 酌のれ 丞 共 女郎 3 BIT 金力 窮 15. 原 n 27 存 婦 3 其 其 其 H 內 3 To 义 置 又 默 は L 者 を 1 級藝妓 侍 他 13 他 他 32 は は 認 0 裕 7 7 今や 論 卽 之を 洲 E に及 あ 居 0 ifi 市 室 自 10 L 政 福 7 7 ち 騎 3 3 內 內 級藝 -府 13 36 17 共 由 E は To 警視 る上級 老 等 男 酌 h 流 於 弄 0 本 较 0 同 等淫賣 散 散 で居 指 一妓等 金力 婦及 0 子 私 天 便 社 17 7 L ずの 流 在 遊 所 0 在 廳 地 娼 輸 會 著 廓 藝妓 of the 雷 撲 CK な 0 to 0 安安 貧 に當 は 0) 12 0 婦を撲滅 藝 謂 滅 0 3 To る 地 飛 2 無 S 者 要 性 す V 級藝妓 一妓 あ 第 謂 12 W 3-は 7 0 事 金 3 13 躍 S 追 撲滅 男子 方 遺 卽 屋 (0) 3 h 供 0 遊 機 權 ことを L て、 Fic 私 と謀 給 針 5 12 る N T 政 厚 する方針であって 魔 生 住 娼 25 0) 3 は 0 居 治 id. 12 む藝妓 新 活 撲 DU 信 \$2 許 3 1 3 社 金 0) 图组 3 は Ŀ 會 派 橋 流 T 12 要 府 3 閉 0) 級 於 住 とする 若 的 居 6 0 淺 70 扈 妓 12 者 n 3 V に及 遊 143 生 る。 柳 T 南 Ŧ 供 本位 8 る 37 8 7 橋 妓 淫 活 給 妓 0 見 0) 1 3 0 墓 屋 は 最 海 12 3 10 -6 沙 あ 0 妈 組 あ る

女道 決 n な は 取 150 叉 瀟濱 à 2 政 有 象 的 10 ば 32 散 縮 は る 1 理 カゴ 府 會 其 娼 行 あ 8 は 1 德 自 得 n 想 周 は 4 寫 る ば 0 頗 制 此 私 化 及 治 旋 北 民 3 3 性 17 結 娼 カン る 度 0 質 方 CK 0) 間 12 6 不 質 貧 な 6 12 間 る 果 凩 事 0) 策 は 0 都 其 衞 0 る は 難 娼 跋 富 7.5 1 濟 業 有 12 私 17 क्त 3 生 4 0 良 0 6 は 扈 先 * 出 娼 7 在 0 道 志 0) 712 行 次 0) 6 E 家 盛 あ 行 6 75 確 德 L づ 弘 要 爲 70 那 政第 E 祀 執 大 0 3 T る 0 7 は 所 問 0) 12 行 7 法に 叉 12 憂 は 發達 0 力 2 如 此 K 游 如 無 政 個 す 女 行 憂 調 Z 規 衰 (1) す 野 12 かっち E 叉 な A 30 3 12 波 政 慮 停 を 方 7 郎 12 カゴ 6 t 0 は t र्व 促 2 5 1 法 掘 於 面 0) 20 消 计 部 d' 0) 6 7 規 3 25 0 3 誰 人 來 自 T 無 10 n 首 德 7 行 32 君 1: 15 努 0) る 由 大 10 あ E 等 E 3 接 自句 < t 力 515 取 足 3 珊 12 カン 3 1/2 行 縮 0 6 カゴ 寸 來 業 77> 的 6 嚴 私 23/2 彼 寫 ~ な 113 5 3 32 3 70 X 13 2 n 3 方 脏 通 重 圃 來 L W 增 通 民 n は n は す 紀 は 論 性 12 0) T 政 加 6 俗 問 7 18 食 刑 3 3 7,0 慾 男 聽 70 府

行

3

3

13

男

女道

德

Ŀ

段

0)

雏

步

6

あ

つて

的

取 社 由 なら そし 6 有 0) る b illi 0) É V 12 私 間 行 6 温 0 會 治江 か は n 以 樣 有 刑 由 通 接 政 浮 は 外 か 渡 7 15 婚 3 6 は 0 無 意 7 法 15 期 居 là 亂 73 る 理 な 0) 刑 志 此 は あ 13 L 國 想 2 I. 私 拘 1 6 0) 3 6 法 る 0) 民 6 元 とし 0) 11 道 0 すず 私 力了 上 は b 知 ~[殺 循 そし 道 私 德 私 10 牛 育 3 0) 6 通 語 3/ 接 C 4) 76 -(浙 德 行 训 拘 0 甘 は 12 ----12 方 般 6 束 うで 私 は 為 0 6 3 個 7 0 L 7 J. 制 13 男 娼 戀 IE 0) あ The said 13 涉 12 0) 此 人 2 0 戀愛 私 る 5 社 度 無 私 愛 遊 0 女 0) 南 7 d 1/8 は け -6 0 私 蓝 指 取 娼 會 0 0 本 3 3 そし 70 的 縮 制 規 3 行 7 通 合 來 道 カゴ 導 13 あ 自 箇 居 意 節 75 為 日 7 す 0 度 中 は、 洪 3 茶 6 7 由 0 な だ 3 Y 6 9 n 72 3 故 矢 Z 結 併 j 南 カゴ 筱 結 場 9 通 3 此 78 0 2 12 者 婚 合 6 P ^ 間 政 3 0) る 果 11 0 カジ 域 私 歐 前 場 7 0 E 8 12 治 南 カン (2) 接 政 歐 潜 雞 場 私 設 12 通 米 0) 3 合 頻 6 0 治 6 合 私 各 蓬 制 0 米 0 想 カバ 6 R 通 H 3 道 6 場 男 か 72 度 0 6 通 置 人 カジ سأ 3 あ THE 合 娼 女 E 南 姦 3 70 2 0) 流 < <

德 3 愛と衣 沙 6 h 遠 まで是 成 0 0 7 然 男子 人た とし 愛 萬 祉 カゴ 政 10 0 全 會 12 策 る 的 食 せ 傾 5 外ならな 0 7 0) め Ŀ ん心 大缺 向 徒で 字に 慾 6 25 誠 h 性 用 上慾を有 誠 を理 3 à 於 意 ねざるは 心意 ・妙契し て實 あ で 陷 る罪惡を る カゴ 5 想 治 6 あ を廢止 際問 あ 化 2 卽 國 る。 實に る T ち 1 0 大道で 自 た 卽 L 未 經 怪 題 爲 とし んる博 是れ 上天 ち性 て個 萠 し能 我 濟力を有 慾を有して に 0 最高 禦が は 子より下庶 愛 慾 人 て適策を良民 誠意なき伴食等 ある。 とが、 0 3 * 人格 善 理 h 世 3 經 吾人 ざる に於け カゴ 12 想 義利 齊 化 爲 的 非 生活 女子 がずし 0 人 L 力を有 め 言 た に施 12 3 合 る戀 を完 て為 を迂 至る 仁德 0 す

ム題 套 0) 7 題 は 居 IЦ 獨 月 は 9 其の 6 72 0) 公娼 公娼 新六 廢 婦 H 本には問い 問 止 0) 2 A 論 語 題 問 存 12 題 發 に於て旣 は 限 「殘されたる婦人問題・對する諸家の意見 適 として解決 12 當 關 つた譯では 1 L に世界的 1 7 諸 居 名家 を残 75 無 20 12 3 0 決定 そし n 意 カ> 55 見 7 居 的 7 公娼 揭 る 順.

語

12

にし 現は 如何 だ大 社 と問 らば 逐 0 議 會 きく n 題 兎 1 12 0 てれを 7 論 すべ 木 に 居 不 た を 12 3 爨 角 る 徹 打 西 1 とし ので、 調の て雑 < 研 底 カ 業婦 ち 究批 な意 込 カジ 今に及 る諸 ては 記 間 h 其 題 見 6 題 6 評 かが 居 名家 解 L 不 0 0) 實際 て置 多 存 爲 見 决 h 6 する 識 を 力 滔 0 6 永 意 12 < 0 は 存 的 36 72 見 所 其 屬 極 運 3 廢 15 す h 動 から、 0 能 0 0 めて少な と試 E か 根 る 可 は 77> 550 る 本 企 否 0 特 時節 此 6 孙 的 殊 3 救 あ E 新 0) など を 問 間 治 柄 H 題 本 麗 策 は 12 唯 な 爠 中 17

Ш 室 軍 本 氏 0 意 見

膨止す 公娼は風紀紊亂の原動力であ 75 0 3 んとするは空想であると云つて徒に いより る境遇 然しな 反對論者は吾人の廢娼運動を嘲笑して、 問 瀰漫 題として 上は速に之が に置 がら此 ば其結果 し來られ かれ 作 居る。これを人道上から見て 為的 種の論者の 不害悪が一 たる無教育の彼等は之を る者はない。自由廢業の 排除に力を致 に指 四 助するの 一方に散り 如く公娼を廢したるが為に私娼が 300 SIN 救世軍 である。 風すると云ふ説を 拱手傍觀して居るの ならい。 は 道が 荷くも b 公娼歷 今日早急に之を 知らずに居る。 今日 あつても 册 其害惡を 公娼 IF. 間 か以て す者 は 公娼 は、 から 殖 10

娼 多益 10 自 活 南 3 公 6 力言 0) 7 3 織 制 あ 3 5 然 6 Ó 公 娼 03 百 爲 頭 ことを 明 0) 3 老 5 50 度 3 資 70 R 娼 分六 0) 此 A 及 62) 業 魏 カン しと號 續 6 17 結 カン 料 0 0 は 12 CK 好 22 力兰 けれ 放 至 果 な 割 約 之を徹 分 -啊 H 0% + 當 あ す 。当女子 尙 0 辟 6 無 す 1 0 級 婦 處 6 的 る ども 2 15 T 6 别 南 邊 增 萬 20 巡 及 Ł 分 0 15 で 1/3 2 カコ 3 加 人 で 妓 せ CX 底 法 H 淫 個 歪 從 0) は 其 とな 南 妥協を 若 3 一樂を す 和 IE 木 ほ つて 惡 惡政 0 5 i 私 n n 於て 干 3 d Ш 政 祉 500 生当 娼 政 7 7 は は ò 分 0) 2-2 1 會 謳 府 13 えな 5 3 空 寫 は 金 為 10 5 3 0 0) 歌 稱 32 然 藝妓 に記 7 依 h 想 權 ることに 般 之を 能 需 集 せん 42 1 刑 3 然 211 カゴ 0 政 は カゴ 3 1 7 h 12 3 為 治 全部 妓 寸 小小人の 南 12 H す 制 ورع 基 là 無 欧 る。 L 凶 約 本 Ŀ 金 3 3 度 政 府 だ 3 1 -遺 成 撲 逐 114 社 權 瓜 + 10 を 絕 是 符 萬六 L カゴ 頭 殺 爈 會 30 波 娼 政で 政 M 數 Til 育な 寫 n 彼 業 えな を贈 S カジ 0) L 治 0) M 萬 觸 等 老 R 婦 11 A 需 0 T 真 天 X 6 あ 12 カラ 之を To 人と 要す かる 0) カゴ V 40 籍 S 接 百 Ď 他 罪 名 6 13 生 6 = A す す

君子相顧みて目下嗤ふのみである。

娼 豫 とす 元 被 A 男 め。倫で行 0) 1 度 發 3 想 殖 格 規を 12 企 女 0 社 能 8 刷 は 华 ずす 制 す 的 吾 0) T 會 事 南 杨 廢 新 度を絕 见 3 13 理 緬 0 德 とす 6 た 的 一獸的 JE 道 0 3 女子 て徐 を鼓 H 想 愛 0 カジ 穀 3 為 德 L 12 H Ŀ 的 あ 有 32 早 6 m 貞 -0 誓 女色の 0 EN 叫 0 る。 晚 家庭 3 0 吹 操 A 0 1 で 發 0) 道 R -3-Œ 職 力を は 13 70 7 權 南 達 0 德 そし 50 社 善なる 型 業 は Lici 哥 る。 を圖 3 公 政 不正 今 所以 實 娼 信 會 を増 無 買 擁 娼 鉄 17 7 方 文 現 8 0) 5 は を公許 護 3 S 6 上 的 せん 和 天下を擧げ 趨 0 目 取 加 12 7 電に 類 h 全廢 * 私通 通を尊 3 前 勢 縮 1 於て 衞 0) カゴ b 0 とする 生 方 0 0 私 3 E. IE. 寫 觀 を卑 は 7 13 存 思 1= 娼 3 0 菱 35 的 T 貧富 行 方 於て 娼 CK 想 人格 T 制 ことを嫌 私 1.2 700 み、 度そ 100 腰 鴻 7 < 12 0) 12 反 あ 娼 (Carpenga) 其處 於て 發達 は道 L 圖 私 經 夫 反 娼 L す る 12 現下 濟 通 最 署 0 1 0) 3 せ -瞎 か 圣 は を 德 者 ñ 0 大 婦 奴 ÉII 女 代 度 行 調 圖 宗 7 6 カゴ 0) ち Ł 6 3 的 胶 教 寫 風

る私 理論 L 3 同 る 吾人は其 たいい。 壯 彌 一の出立 喜捨によつて一人一教はんとする企 温撃の を宣 通を生じ易いことを氏は何んに由つて禦ぎ得 縫策以外に脱して其の かの慈善鍋によって貧民を救助せんとすると つなり氏の結論 中に 傳 であ 源泉を究めて流末を清めんことを念と し、其が運動を 數 これを先づ私娼制度と為 へて居るが、更に進んで此の ると思ふのである。 は人道上より公娼 根本的救治策に 一鼓吹する要を認める。 吾 かは この憎む し、 此 對する にな 一時 特志 0 專

二) 矢島楫子氏の意見。

して絶えず三四十人ばかりの 婦人を救濟し、養鶏、洗濯等の仕して絶えず三四十人ばかりの 婦にご千五百坪ばかりの地面を用意付まがらも矮風會の手で大久保にご千五百坪ばかりの地面を用意模ながらも矮風會の手で大久保にご千五百坪ばかりの地面を用意模ながらも矮風會の手で大久保にご千五百坪ばかりの地面を用意機ながらも矮風會の手で大久保にご千五百坪ばかりの地面を用意機ながらも矮風會の手で大久保にご千五百坪ばかりの地面を用意機ながらも矮風會の手で大久保にご千五百坪ばかりの地面を用意を表して絶えず三四十人ばかりの 婦人を救濟し、養鶏、洗濯等の仕して絶えず三四十人ばかりの 婦人を救濟し、養鶏、洗濯等の仕して絶えず三四十人ばかりの 婦人を救済し、養鶏、洗濯等の仕

徹底 年河 慾衣食慾に對する根本的處分法 山室氏と同 けれども其 のがあり、勿論吾人の同感して止まざる所である。 女子 の根本的處分法を講じないで徒 るなどは勞し に放任して置き、 二の婦人 老女史の主張と運動とには多くの尊敬すべきも D 清を待つの夢であ 對して た根本的救治策とは の主張 3 貞操 て功なきことであ 收養しても である。 以は矢張 而かも性慾に關する無敵育な を望 み、 る。 人性の二大根本動向 社 り一時の彌縫策であつて 申されない。この點 細民 館の 夫 る。 全體 が敏 らに真操を説 の無教育を國家的 如 けて 富貴顯繁の 0 より見れ 德を 居る。 72 强 7 る性 3 百

事をやらせる事に致して居る。

11-あ 17 3 圓 2 ると。 的 肉展覽會 叠 ば國家が 0 頃から更に大規模に救濟の手を伸 ると同様で して正 无十 不道 0 30 3 雕 娼 を公許 證 中に 運動に着手した所以 風 妓 明 良好 けれ 德心 故 紀 の身代金は六年々期で一人宛略二百五 ず 20 20 男子 に救世 の廓清のみならず、 は 私 Tp すると 取得る ある。 た日 どもこれ の方便では 媥 行 虃 人が 政権の y 者 の不品行を許し、 である。 軍 夜に倍々挑 0 0 が風紀廓清の手始として 様である。 叉國家が 存在によつ 數 公娼又は私 の保護の は實際に通 が ないいの ある。 位の 而して 增 であつてい 加するとか 下に 婦人に醜業を公許するの 金ならば 發して居るのである。 國家の 丽 決して、貧家の女子が 故に全國 、公娼の 7 娼になるのは生存競争の 處女の貞操を せざる 常設的に開催し、 却 ばす計劃である。 つて 此の 存置 私娼に對して 體面上よりも 大抵 云ふ 一選多の 批評である。 私 公娼の は 婚の の工場へ 0 何より in は 逆座原は 十圓 踩 增 單 院 なる 加 Int 緊急 近上は それ 生計の も先に公娼殿 出 幾多青年 を見る 他 な 此 れば婦 現在に於け 宛然たる賣 3 節操の 國内に於 箇月に三 結果であ 53 0 710 33 事業で 為とす 公許 は質数 説であ 反對 親れ の性 七月 切

的 解 17 同 12 1 决 感であ 共鳴 氏 人道 E d 意 35 見 -3 は は関 より 所 H 汞 7 由 公 だ あ 3 7.0 立派 娼 氏 一廢業によつて 00 腰 H 高 13 H. 37 76 見 E 0 30 0) であ 6 鏡 36 ことに於ては 13 哪 名たりと 得 業 0 苑 -6 30 (1) こと 根 吾 本 A

男女の性慾

を如

何

處

理決

開

3

カン

就

马氏

論

7,

2

から

121

40

難 殺 的

婚

難

12

验

3

其

0

性慾

苦悶

0) 年

Ŀ 男 來

一に於て

华

醫

0

不

E 1

13

3 0

1=

不 及

45 78

整 問

R <

75

る青

女 な

縦

合 生 る

宗 活

談

だ氏 V. 職 を何 多く 30 經 職 が、頭に 體 婦 3 鵠を得 る。 業 111 淵 業を與へ 案及 A ことと信 換言 0) 0 その 又公娼を廢 的草 の事を論 ら整理 を生ずる 名 CK 礟 7 め 案に 陣 19 運動の 業 居 當 6 職 案を氏に 、彼等の する 頭と にか ず 人靈 37 3 業 は じて 接 る 0 な Î 3 進 自 武 H 力> if を教 しない 力ご 周 る根 めて 2 性 由 步 3 13 n 的 旋 か氏 勞銀 聞 「廢業 3 就 慾 評 ども散娼 3 は 7 醜業婦 することも大に必 論 私妈 廢 < 放 底 h S に適 E. ことを得ざるを遺 CK 1 12 問 子 7 娼 とする 資本 為 見 13 0) 衣食慾を充質せし 淨 を 5 寡 制 0) L 12 I 動 取 全體 一對勞働 度に 揚 聞 氏 72 L 對 1 とす 縮 兼 部上 娼 古 0 b 0 0 於 に及 致 氏 態度 12 妓 3 L 3 會 12 治 的 义 2 徹 17 12 た結 0) 要で を欽慕 んで 成 7 -は 2/2 間 る 所 底 順 一藝妓 女子に 紫 婦 憾 的 6 果 序 とす する 此 及 13 2 青年 U 0) (1) 他 . H. 南 ĪĖ. stil

ると ち す 化 婦 善 3 H 6 7 カン め は る 性 あ 道 6 12 は 0 < 生 世 n 德上 慾上 公 稱 た 愛 故 かて 故 祉 無 延 道 氏 卽 17 12 V 會 S と云 は 德 然る より ち一男一 氏 生 氏 慾 カジ 0) 道 氏 がけ 性 必要 女郎 大 單 的 0 21 0 非難 3 爲 慾 多 12 規 倫 n 腹 25 -文であ 27 範 3 數 性 理 不 氏 め 動 V2 は 善惡 依 慾 上と云 17 道 物 女 問 矢 實 す 朝 は Λ 6 女郎 つて あ 0 3 德 る 的 0 張 17 消 12 は 22 戀愛 理想化 とは と主 は な 美醜 議 は るなどと云 ء 附 德 6 此 る性 買 鎭 L 依 論 0 間 3 するところこ する本 結論 な 0 7 然 は 見 違 關 張 0 壓 と云 觀 3 置 地 0 係 す 肉 慾 でじやし 0 慾を 沙 念 3 は 7 出 12 力> カン 0 3 能 400 0 熾 ふ研 3 1 居 來 0 カジ h 見れれ 考 女 滿 烈 は な る 6 る 的 な V であ は 究 と云 **V** 郎 行 别 あ 足 理 S S させ は な 物 Z 想 買 là 為 る 性 卽 2 1 故 公公 3 慾 あ 6 m だ 0 ち 17 0 0 3 あ 3 0 Ł 論 0 17 H 娼 意 對 道 6 行 る。 あ 號 夫 る 為 氏 醇 見 卽 為 6

0)

るも

0)

は

生

理

0

本

能

又は

動

F

指

0)

6

あ性

體

0

F

に位するも

0

性あ

慾り

2

のす

#

17

現

は

n

る

意

識

上部

0

意欲とし

て

では

な

を教育 得 Ŀ 教を害 らば 義 事 育 は 道 7 くの では 1 つて m 顔を以てして其 性 4 德 T 實 存 カジ 0 13 0 0 て生きて行 生 いと主 あ Î 置 理 有ら 所以を説 道 破 0 业 何を苦んで教育行 台三言 普 壞 存 會 想 ら得 する する 12 せざるを得 要 德 3 於 す は 80 30 遍 0 0 ¥2 多數 を以 そこに 7 羽 行 的 あ 張 る る 6 カン 南 25 は 3 は 部 る W 南 N 法 る 0) 3 A 分 得 行 則 止 るならは 途 理 を 1 0 3 行 な 0 品品 之を 政 俸を食むを得 0 6 想 苅 13 0) J 換 あ 人間 性 7 あ 為 で 圣 は だけ 除 治 若 W Va りと 薰育教 樣 [陷] 居 3 0 あ 0 得 行 上 す す 政を施 る。 でい 冶 35 為 夫 6 る 0 3 から、 な Ch n だけ 律 得 者 'n は 宿 道徳を説 3 生 理 0 V d 叉こ 豊 口 導す 違 併 想とするなら 13 0 な 道 理 7 命 す 能 假介 ï 6 行 116 想 る 的 反 V 德 7 25 Ó n 以 る 6 5 あ 0 以 馬 是 力> 性 行 17 要 るも で 若 あ を 出 カゴ 0 n 3 外 外 h 力> n カゴ 買 É カジ 75 干 る 6, n 氮 來 あ は カン 0 0) あ 之を 5 明 は 祉 0 家 0 必 方 理 方 V2 然 T る 穀 3 ざる 個 道 會 6 想 3 居 育 カン 法 法 カジ 要求 行 る 1 25 17 何 0 は 12 娼 は 由 風 3 民 な 1

0 對して、千五百坪の土地は是れ海中の一栗たるも 養よりも醜業婦を未前に禦ぐ方案及 徳政策の眞相を告げて居ない。吾々は醜業 は今夫人を肯定して置いて、而して一方に養鶏洗 彩たる階 によって空間に粥を啜らせんとするは決して道 である。 いて、衣食に困 更に竿頭一歩を進めて晩年勇氣百倍せんこと 吾人は老女史の奮鬪 0 + 方に綾羅金繡 に細民 じて饑渇して居る無數の女子に の困 寛を社 に纏はれ を多謝する者である 會的 び運動で必要 て居る姫 に放 擲 がの 收 7

下田次郎氏の意見

を祈る。

無論宗教道徳の見地からすれば公娼制度は善くない。出來るも 23 と云ふ動物なるものがさう云ふ 工合に出來て居るのだから仕方 善くないものにせる。 さうしたものが 現代社會の多数から要求 種 のなら一日も早く廢したい。然し社會は多數の衆合體である。 されてることは事實である。肉的要求と云ふと 磯ならしいが、こ かれの方の人が多數である。公娼私娼が實際道徳上將た。生上 |性慾は美醜善悪の批評の外に立つべきものである。元來人間 々雑多なる人間の寄り集りである。理想だけでは 生きて行 故に公娼制度が非理想であり、非衞生的であり人間の

> 德的に鎭壓控制することは 或る小數の人には可能であるかも知 き生理的要求が達せられないとしたら 何うであるか。 之れを道 あるまい。元來、性慾は熾烈なものである。 肉慾問題から 罪悪 的成案はない。まあ現在のところ徐々に改善して 行くより外は が、私はこの問題に對して何の研究もして居ないから 尤もそれに代ふべきより 善き方法が形式が何にあれば別である 弱點であつても、既に人間がさうした暗點面。 法如何によつて、悪結果となり好結果となる 人と雖も に綺麗な禁慾的生活を送つたのである。 して見れば 恐らくは何 やトルストイや我國の禪坊主などは始めは盛に道樂を爲した後 れば當分は公娼制度は存置せざるな 得ない。セントオガスチン れないが、大多數には先づ不可能と 見るべきである。然りとす な過ぎて危ほ 配偶者を得ざる青年駐年などの人々に當然起るべ や弊害が日夜に生起して居る。結婚期にある 青年男女、 る以上急速に之にが 經對的に禁止することは難しからうと思ふ 達させ、性慾的知識を涵養する必要がある、要は なられ。それだけが問題である。これに関しては衞生思想を また絶對の禁慾をする必要はない。たい正しい性交を遂げれ、 一度はこの閥門を通過せずには悟れぬものと見える。 弱點を有つて居 たい調節

へば好結果を得るを説く者である。 つて衞生思 あつて、青年壯年等の獨身者 由つて觀れば下田 想を養ひ 適度の範圍 氏の 主張 には性慾的 は公娼 に於て遊蕩を行 而して下田氏 存 知識 置 によ 論 0

であ 女學校教育は 格者として教育する手段を講じなければ、 置 るならば、 の起らんてとを祈る。 77> る。 と思 れることになる。 職業を與 300 私は今後我 其の婦徳貞操 女學生も醜業婦も共に同 永久に其の目 なか が國 ら人格教育を 此等の無教育なる女子を人 0) 宮田氏にはこの方面 0) 債務 社會 的を達 17 施こす特殊 貧家の 關して するこ は連 國民 女子を收 Ł 今日 カジ 女學 出 帶 6 來

(五) 永井潛氏の意見。

味

なさや如何

馬時代から といふのであるから、之な一片の抽象論によって解決し、 であ 實とは一致しない。性慾の滿足と 云ふことは生物の本能的 の運動は理想として誠に結構なことである。けれども 社 排除に努力して居るが 娼の盛なることは寧ろ日本以上であつて、 し去らるべきものではない。 は甚だ誤った議論である。性慾の抑制は 部の論者は性慾を抑制さへすれば、 會を清潔にせんが爲に藝娼妓制度を廢除せんとする一部人士 つつて、 むるとも 一部の人類が其の爲めに あつたので、 更に何の弊害も來たすまいと主張して居るが 更に實績を學げることが出來ずに居る。 現に外國に於ても 歴史が觀るに賣淫婦は 古く希臘羅 娼妓の存在や要求して居る 公娼は勿論私娼を 宗教家は熱心これが 公娼こそなけれ、私 第一に人體に頗る有 理 絶無な 想 T要求 と現

> 果は其の害惡知るべしである。故に社會の内溝を流る、濁水を 害であつて、其の結果は往々にして 神經的氣質的疾患を醸すこ 根本的教治策を 取るべきかと云ふことが、次に研究すべき問 廢止の理想に近づくべく 且又風紀の廓清を圖るべく、 公娼の一朝にして籐すべからざること 前述の如しとせば、 導くの穴として 公娼存置の要あるは必然の結果である。 か廢止して多数の未婚者の性慾をして 漏らす所なからしむる とが多い。 て速に其の配偶者を得しむるにあるが、今日の如き 生存競争の めるの外はない。中學時代より之れを数へ、且つ藝妓學校と云 正なる性変の害毒の恐るべきことを 知らしめ、性慾を善用せし **徽温的ではあるが、一般的に性慾に闊する** 此の策は寧ろ理想に屬する。 激烈なる時代にあつては 結婚難は年々加はるのみである である。而して其の最も安全なる 救治策は 既に性慾にして抑制を不可なるものとすれば、 所で最も實行し 得べき策としては 知識を與へ、 一般結婚適齢者なし 如何なる 不潔不

に原因 となる から、 氏 み見て道徳的 る所である。 ふやうな設備を利用することも至極結構である 氏 0) 力野 大なる誤解で 之を行 があるが 一後を生物學上より論ずる點 それで氏 けれども氏 為 意 部 も云人が如 現す場合 意識 ある F 0, 作用 に於て純然た 性 13 一総は と見 性慾を生理的 には僧値 < --種 -7 不潔 Till I 居 は私 な意 ない くして生理上 一部 不正ならざ 慾で 作 の贊成 -これ 用 結果 あ į 13

る條 驅り 題 でこ では らで 放 的 h 師 i Ł 4 現 0 範 象 理 差 せるなどは咄 無 7 は に等 教 息 に居 一を解 し當 を潛 結 道 との A たることは當 3 < る 無 育 慢 間 大 德 S 題 す る 度 女郎 しき謗を受け 0) 7 6 6 Œ 的 3 理 カン 研 罪 0) あ 解 何 0 ることが 教 この 事 想 0 0 3 究 5 管育 重 要なきか 質でないと主 買をす 3 詭 12 道 甚 0 大 71) 家 R 關門を通 辯 7 德 よつて生きて行 だ 0 これ な 事 時 た 家で 7 女子 世 しと申さね 件 天 出 若し未 る氏 る 說 而 VQ 1/2 . 來 を 下の奇觀 あ 行 3 カン 鳴 な 下田 何に比 カコ 0 る。 あ は 過 も之を 爲 敎 かから だ悟 せず 敎 3 此 張 6 る 育 氏 肯 な ż 氏 況 單 0) せんとする氏 8 善惡美 0 72 là 0 は 5 關門 す には カゴ 6 カン 施 猛省を なら 氏 は、 南 斯 出 尚 ずとせば進 ~ 7 性 和 す きか る。 悟れ 多 來 ほ 力》 ž À 慾 所 AJ 女子 5 6 此 潛 間 Ŀ なら 醜 以 公娼 望 老の カン 37 單 ya 0 は 0) 0) 0) それ 嘗 С 教 T を研 外 生 紬 は 7 V2 36 實 n 問 肯 た 九 悟 何 理 7 カコ

「藝娼妓の存在如何に就いて、予が教育者としての(四) 宮田 修氏の 意見。

意見を云へ

ば

無智 在する 廢止の とい 51 人の ら見て 育者の立場として廢止主義に傾く理 が を募らしめた結果であ る侮辱たる ること大なるの が為に風 此 他の 0 一餐奮と努力に待つことが多くある。 Ħ ふのは少なからず 教育目 断行 あり、 或は 0 玩 ることを期せればなられ。 的 JF: 弄物 は 紀上の良觀念も を完全に達するには、 を希望せざる 公娼制度の如きは 女子教育家として一日 公娼の設置は止むを得ない 義である。 餘りに柔順で 般婦人に みならず、 存在し、 3 凡そ教育の 男子の不品行 を得ない。 破壊され、 殊に一般 あるため、 それ 的の完成を阻害する。これ予が教 總ての 目的 然ろに が 次に此 婦人に對しては 人格尊重の觀念も破壊さる 由 を制する機威なく、 人類 男子をして益々その は 200 娼として認めら であるっ 今日 同 人格者を作 の問題に をして 知れ 國 0) 公 民中 ない 社會衞生の が娼や 就い 同性の 755 く人格 も早く是非 るに 私 部 れて居る 餘りに -娼 有之る の婦 あ 事横 は婦 Ŀ かず 3

せん 公 子 と氏に をし は が娼叉は 如 宮田 何 カゴ 7 氏 た Z 70 人格 私娼 を取 尋 B の主 め 12 段 者 氏 張 した 12 公娼 72 V) 扱 陷 つて 13 5 it vo 3 全 L 頗 る貧家の女子は敢 廢 置 通 る立 T 今日 る 6 It V T す 具 0 るを希望 6 0 あ 女學校 あ 此 的 る る。 等 胶 案 唯 0) て問 だ凡 A 1 敎 す (1) 格者 育 ると 如 何 5 F は ての女子 3 を擁 するか に於て 1 良 ずん 家 n 護 0

P AS

抑も今日

然るに國家が行政機を以て之を保護するのは果して適正なる行 であ が社會に及ぼす害毒が稀薄であるということになる。 なるより 私 として世を酸かことになる。 現前の事實を事實として適策を講ずるの外はない。予は一般の 爲なりや否やは議論の存する 男子が女子だけの道徳心を持つ得るやうになれば 結構であると 明 且にも斯の如き行為を看過する間は到底行ふも徒勢に歸するの とする時代に して居る。 政権を以て娼妓の設置を公認してるのは 跳梁に任せるのが可いか、 今日の男子の道徳は も私娼に局限した方が可く、 公娼を弄することは 社會道徳上固より美事では されば公娼の廢止は一般の男子が 性的不道徳を恥 到らざれば、行ひ得ざることであつて、 歸するところ、 女子の道徳に比して低劣なことを證 そこで問 所であるが、 何うしても 良民間の私通が盛に 題は 更に私娼らりも 良民間の私 公娼制度 政治家としては唯だ 實に此の理由から 及が可 なるのが 國家が今 通が盛に 公 社會は荷

問 ども氏 0 S EZ 題上より之れが適策を講ずるより外 氏 公娼 は政治家とし つて は 家 この態度に忠實たる人では を廢止 の態度 居る することに氏は左袒しなけ カジ て現前 公娼を存置するは決して 忠實であ それ の事實を事實とし は尤のことで るなら は、 無 實際 あ 12 3 る。 方法 à l て實際 問 若し 適策で ばな 題と 力ゴ

娼廢止

の類次に心得て居るが、其れは誤つて居る。

は從 公娼

つて性

的 は

道

德

心

0)

發達となる。政府が行

政上 廢

存置

的

德

0

0

頽廢となり、

其の

より公娼を許可することへ

は

雨立しないのみならず、

公娼 教育

を存し を奬勵

て置 す

いて男

る

in the party of th

主張

するるい

氏

13

男子の性的道徳心の發達を以て公

に到 見などで 非學理的 利害輕重を誤解して居る。 る。 而して男女道徳の發達は公娼制 娼より害毒であり、私娼 は 論し れども斯う云ふ意見を有する政治家が他にも存 て更に進步する る以上は止むを得ず、 何に経逸なる代議士が多くとも、 無く、極めて劣策であり、愚策である。 つて 然るに氏は正に本末を顛倒 よつて解決すべきも 進 15 0) 一歩し、 無く。 ものであ 倫 私娼制度よりも私通制 單に一箇の私見に過ぎな 理的 3 止 公娼 水 理 は 決して のである。 數度議 由 私通よりも害毒であ 而かも其 廢 か JL: 嚴存するから 度 國 案に上せんことを 13 これ た意見を懐 よりも私娼 國民 政を代表する意 吾々は縦 の意見た 03 を議 公娼 度 輿論 に到 會 であ 制 令如 るや の討 る。

生 ね る。 H 指 0 根 生 2 H 3 は あ É る m 3 本 る 性 殖 0 0 n 知 0 0 然らば氏 は 的 器 10 方 は 6 7 諭 講 で、 J これ 學 文 H 知 面 0 なら 無 神 1 0) 70 生に 0 義 た は 經 n 識 0 解 性 H 又 72 結 カゴ 7 3 n は は 知 動 此 慾 夫 は 的 說 V2 如 氏 高 に根 公娼 根 花 識 73 IE 的 3 0 ば 氣 0 7 0 男女道 本 前 柳 6 善なる 3 すれば生 然る 善 婦 知 性 質 13 緊急 徹 論 本 なっ 病 的 的 男女道 用 5 0) 慾 ¥2 識 結婚適 区立 底 的 時 を意 を講義 12 な V2 愛 0 救治策を置 疾患を 救治 0) 々買 永 性 創 氏 る 善 德 0 5 彌 井 慾 德上 理 F それ 味 0 3 5 用 い點 ハつて性 縫 歸 策 氏 に關 E する 「性 0 0 釀 を為 なる 心要 0 とは 7 0 のも 男 知 は 17 すっと云 として 0 7 置 論 す 傾 慾 識 無 外 かなけ あ 公娼 もの 一窓を漏 3 女の 法 6 12 カゴ のとな を指す 性 V S. 12 る。 て行 7 道 麗 6 潔 3) あ 慾 2 を見 其 を 行 德 700 す 戀 る IE 0 れば 故 結 ζ 存 鑿妓 0 らさせな 0 的 カジ h る É 慾 13 愛 理 以に矢張 置 西己 13 出 論 72 知 勿 0 12 る を 知 想 久論, なら 過ぎ にな その 男女 偶 學 73 識 0 關 識 化 性 校 6 to 者 兼 無 す 交 6

> 果し らば を以 する 性的 停即 此 以 1 TITI 42 さかか 關 0) 2 7 7 -1 理 生 政 1 ち m 現實 之れ 想 何 6 中 活 民 る 經 L 學校又 醫家 處 外 12 濟 を完全 的 倫 T を単 向 12 0) 13 12 機 理 つて な) 真 好 教 以 關 及 婚 案 は 12 15 0 る を得た 育 CK 0 期 7 基 遠 漸 實現することが 力> V) g 牛 改 12 0 一妓 19. 大な 如 進 n 蕃 供 理 學 1 L Ŀ 17. 何 種 りと為 V 3 校 る T 響 Ł 0 t 0 行 進 理 男 知 6 濟 為 43 さば 化 想 す 6 生殖器 カン 女 識 -13. 南 論 73 100 卽 0 出 その 之を那 る 计 方 to 解 人生 來 に於 0) n 男 决 講 家庭 -1 は る 女 は Ifil 邊 義 道 0 カン 7 貧 7 理 3 蹴 吾人 に於 5 德 は 富 掛 求 此 Ya 論 性 持 7 n 谷

() 尾崎行雄氏の意見。

眞因 藝妓及び が ふの 治家としては ことが てあ 九 、是等特殊婦人の存否に は男 外無しと答へ 堰 出 11: 來 女 啊 せざる以上は濁水の流出して 之を敢て堰止すれ 關係に就 媥 唯 0 排 だ現 即ち流れ 派と云 去るべきのみである。 前の 心心理 7 不徳義心に存するの は 公娼となり、 一一就 る予の は 良民間の私通となり、 屢 て之な Z 意見な問はれるならば、 すいす 世 世を行 而 私 實 娼となるは自 f を如 T 問題として 所の意論であ あ 何とも るか 濁波 取 す 扱

<

筈で 末 置 殺 あ 行 涿 る 25 7 カジ 0) 2 n 7 政 の眞 私 1 7 る カゴ カン あ 社 居る 6 Ŀ 6 史 娼 園 行 力> à へを通 5, 會衞 敷册 相 8 我 氏 に於ける教 る 静を龍 た 12 から は 漸次 Ŀ を得る 御幸さ カゴ 子まで生んで居る。 一覧すれ 公娼 生 を借 國 次 一を毒 實に氏 0 それ 17 | 遷専門で立 25 たの 驅除 り出 は 圖 ことも松村氏 7 0) は 白 ば 許 育 德 L 書 た 居 可を取 表 剿 0 行 T 7 館 解 た。 拍 は空想 督勵 居る J 子 滅して 政 て讀 面 ることで 25 一つ藝妓 E 決し 法皇 Ŀ 0 行 ことが 消 E 清 0 0 12 h 0 如む藝專 明治 話で は 於け 7 盛 人である だならば て藝 に解る筈で 行くてとに カジ L 一と云 政治 あ 教 試 忠 カゴ 佛 育 直 0 盛 あ る 3 12 0 公娼 門で ち つて 的 此 藝妓を墮 み を籠 0) ž を愛 に了 2 避 矛 具 0 隆 立 試 あ 於 盾 公娼 種 平 ことを言 勵 る。 T 觀念 許 で 17 解 1 た 1 安 0 藝 朝 書物 夜陰 は皆 日 た 0) 1 山 す 0 風 存 妓 本

就中花

柳

病

35

關

する

學 う

識

0

無いてとを證

阴

Ì, 牛 Ŀ

1

居

見

7

必

などと思

7

居

る

は

氏 社

に醫

里 生

理

る

腦

を有

T

居

る

先づ公娼

力了

會

衞

力>

3

男子 安朝 ても せた 藝妓 に醜 の席 風 娘義 であ ても は 教 などを るの 和 末に醜業 Vo 3 2 ざる 俗 酥 や道 配 4 2 る。 義 0 行 を化 太夫と同 0 12 虫 藝妓 E は 徳や であ 夢想 如き醜 夫の 招かが 酒 來 あ 17 郷 反對 は何 それ 成 に陥 席 0 伊 移るのである。 で 1 2 藤後藤 女優叉 n 出 12 6 す に侍 あ 0 それ 見 るは 來事 對する 、未だ酒なく肴なさに拘 3 とく で藝妓 育 業 0 為であるかと云ふに、 居る それ うて 婚 0) 1 7 上 等の 、空想 位 轉 0 0 76 皮 で松村 1 個の 娘義 あ 酌 行 想 カン あ カジ ò る。 | 藝以 一妓 爲 な 罪だと云ふ人も 異 姤 伊 てれ 風 ら氏は男女の 0 0) 整人 解 然る 7 に於 藤 教 氏 太夫 5 となり 限 その は藝娟 無務 外 間 0 釋 が「藝専門 りであ へでも 題 数の 伊 T 10 に整専 0) あ は優 醜業 あ 如 歷 藤 0 す 7 妓 智に 無藝 史 後 みによつて 3 る 9 藝妓 的 3 劣 多 性慾問 門で酌 カゴ 藤 0 はらず で立つ あ 教學 習慣 で、 後 清 是認する 主 兼 9) 0) るか する 藝以 罪 盛 は Pa T 題 狠 1/2 る -6 6 0 から それ 立て 遂に 優や 男子 籍 を宗 外 は は あ か 魚

力

松村介石氏の

意見

的理想のないとが歴然として明かである。り、頗る道徳政策の真相に暗いことを證して居る。り、頗る道徳政策の真相に暗いことを證して居る。

その方 を知らざる者である。

藝妓のことはよく

分らんが、 可以 と其の 婦を維横無盡に 横行せしめたら、夫れこそ大變である。 可 た 公娼制 無暗に 吾輩は曾て島田君のやつて居る廓清會の幹事として 名を列した が其れによつて好結果を得て居るかと云ふに、 て居るから日 人眞似の外國かぶれの連中が多いから、 人類の性質から見て、公娼制度の存置は、已むを得ない。何事も が よしんばその存在が 连 醜その劣實に見るに忍びない。伯林でも倫敦でも 巴里で あるが、 茶苦茶にぶち壞されて了ふ。廢娼論者は一た 「洋の真似は 無茶苦茶に潰すよりはそろし、と 膿を出して置く方が 斯うして 置いば衛生上より見ても風俗上から見ても 一の安全辧である。それは何うしても 存在した方が 淫賣婦がぞろ!~群を為して町を練り歩いて 病毒が傳染するばかりで無い。只ださ 今では 公娼存置論者である。社會の現状、 かりしたつて仕方がな それを無暗に廏娼などして 不潔であり、不快であつても 外國でも 廢娼をし その裏面を覗ふ 叉廏娼した BI 現在から見 へ力の無い 0 知つて二 中へ淫膏 不潔ば 居る

> 窟もつくが、私は口にしない方が可いと思つて居る。 V > ら藝専門といった所で、男女爾性の相寄る所、時に多少の くに藝妓も女郎も擇ばなく 無つては不可ん。私の言ふ藝妓は 潔白に藝を以て昔の名妓の如く 意氣と張りを以て世に立たした 係が成立つのは已むを得ないが、出來るだけ。藝妓をして清淨に て得た歴史的に見て矢張あつた方が 名の如く藝専門で立つ藝妓である。それは人間の事である 話は大分逸れるが、若い男女の性慾問題は 教育上 宗教道徳上の問題として、將又風俗上の關係からして色々理 口 いと思ふ。 尤も現 の問題と 肉的 3 an 2

者で無 道德 しては るが、 德的 あ 徳史上の 會は必ず一度 道徳政策上より見れば て散娼制度を否とする論者である。けれども之を る これに由つて見れば、 けれ 價值 の歴史的 然るに 史學上 V 事實で カン 不見識極なる知識を有し ども氏 は散娼制度の 5 男女道 0 この開門を通過 12 は教 存娼論 學者 ある。松村氏 進步する階段 學 徳上の大事 では無く 方にある。 を叫ぶも敢て差支は 携 私 松村氏は集娼制度 が前 9 は 1 であつて、人類の 件た 勿論 なけれ 宗教を 歴史を好む人 に逃 散娼 實に杜撰極 る醜 道 1 德上 10 制度 た如 談ずる人 業婦 なら は男女 でを奉じ 無 0) 專攻 であ から 道 社

醜業婦の告白

2.6" 掲げ、 たハル女の告白を轉載すれば左の如くである 意に報ゆることにする、先づ市場氏の聽取し 見に訴へて解決を求めたい旨を言はれて居た 市場氏はハルと云ふ一醜業婦の代表的告白な 三月發行の九惠と云ふ養育院の機關雑誌で なしようとも淫賣などは決してすまじきも 辛惨かつた刹那こそは最うどんな辛惨い思 同顧されば隨分辛惨かったのであります。 送られ、約六十日間窮命に處せられました。 どは、どうも反抗心がムラノへとおこつて りに侮辱され残酷に取扱はれました場合な のと思ひました。けれども看守さんから餘 淫賣婦になるより外途なきことを思はずに らうといふ思案に移りますといつも轉帳し に釋放後什麼したならば生活し行けるであ ることがあります。けれど又、飜つて實際 い限りはあるまいものを拝と無茶な考にな 巡査さんだつて看守さんだつて女に觸れな 評論子は弦に郷か卑見た申述べて氏の 若干の批評を加へられ、且つ讀者の意 は前後二回淫賣の康に依り東京監獄に 終ひには矢張り以前の通り

う か。 早く極つた亭主でも持つたらよいではない 居られんでした。これが實に私共のやうに んかっそれなら私は何も申すことはありま てと仰しやる位ならいつそ私に相應しい事 かと一言に既なされて了ひます。亭主を持 申上げますれば、ナンダまだ年の若い癖に ります。巡査さんや看守さんに身との話 墮落した女の極めて悲惨なる狀態なのであ 怨めしく思ふのであります。又各新聞社の ませうか、將た又侮辱のお言葉でありませ 自分は遊んでて食ふといふやうな懶惰漢ば う筈がありません。女房へ淫賣でもさせて となら斯んな墮落した女に堅氣の男のつか せんが、自分で勝手に探して持てといふこ 主を世話して下さつたらよいではありませ 私の前半生に對して危疑の念をお懷きにな を何處が堅氣の處へ御世話下さいと申せば 細々しく御説明下さいますが、それなら私 れは一一女の真操といふことに就ては尤 人事相談部のお掛りの方へ何ひますと、 です。かやうな言葉は情けのお言葉であり かりで、結局は淫賣といふことに歸するの つて居るものと見え、いざとなれば二の足 私は斯うした説諭を聞く度毎に寧ろ そ

て、

テンデ取り上げて下さいません。堅い

譯にいかぬといはれますし、それなら保證 桂庵へ参れば、保證人がなくては世話する

あります。私も最早三十に手の届く女であ 局は淫賣婦に落ちやうより外途はないので です。什麼考へて見ても、

一旦墮落した結

してすぐさま田舎の料理店に世話されるの 人いらずの桂庵に行けば、垢ぬけした女と

收容して下さるだらうと云はる方もありま これでは単に直操のお講義を聞きに行った じませんが、今差し當ての日がない何れ見 際に日がないのでありますか たふまるいやうであります。それとも又實 警察へ保護顧に參れば、ナンダまだ年の若 定員に限りありといばれて許されません。 ムに参つて見た所で、紹介人でもなければ 願をせるといはれます。教世軍の婦人ホー いふ譯には規則上いかれから、警察 まだ年の若い無病のものや直接收容すると すが、さべ養育院へ参つてお願して見れば て詳しく身上話をして、お願申したならば やうなものです。中には養育院へでも行つ つかり次第世話してやらうといはれます。 い癖に働いて飯の食への深はないといばれ その邊は存 八保護

涵

論

1

南

下

H

次

郎

正

と兄兄

弟

6

說 村 5 F j 4 氏 n る h 登 カゴ 樓を 所 換言 j 彼 子 此 であらう。之を要するに、氏 6 弟 許 議 す n 叉 す以 in 云 は 論 过 為 天 難 女郎 Ŀ F 題を持ち込なれ され は (1) 買する性 T 青 男女の は 年 耐 1= 0 對 性 慾 12 7 的 7 慾 を宗 公娼 心女郎 12 0) 行 為 0 氏 12 無 教 0 必要を 對 買 80 V 道 大に と云 1 あ 德

る。 人格 を別 際 ふ 男子 0 ことを 最 氏 なに 氏 近 3 は嘗てか 猛 說 理 0 ii. 省 消 取 想 性 S 息 7 扱 至 慾 とする人で 基督教 促 は 叉 ふべきことと命ずる人であ 3 何 その 5 >" 7 るを得 の先覺者で心 口 \$ 道 ム威違 カン 300 德 5 ナンナ 的 不 氏 カン 觀 品品 らで 10 窓を全 女道買 行 0 を許 72 然る す人 と道 1. 6 12 德 此 6 去 此 3

5 13

3

ち

40 花 3. 見 ~ 1 他是 0 子 拖 ð 木 3 u 子 守 唄 す 3 吾 0 悲 2 3

且 n 杏 2 0 ば *D * 若 若 葉 君 葉 た た 語 3 3 3 n n 6 ば ば す 2 天 10 す 9 國 3 f 0 o C. Ę, 天 Ü 天 0 3 大松 9 下 夕 神中 = 御 1-0 國 首 亡 0 御み 君 君 光さ 八 0 樂之 木 か 眽 氏 1. 加 座 想 想 3. 2 ñ 0

巴

南小

風波

吹

ζ

常 Z

陸

な

づ 900

200

大龙

漁ぶ

節だ

3

度

E

思

2,

夕

ζ*

3 愚 な る 푬 暟 13 30 が TS

在 用

京

0

友

0

3

3

見

-(

淚 75 L

す

B

な

3

1=

は

ટ

ζ

m "

3

綴 き

る

書ふ

10 2

8 4

著 する

3

3

吾

0

悲

2

2 n 20

ンゲーデとは

たいのです。へら生

反 鏗

に關 して

じ信仰を持つた(宗派は異なる)一少女があ 二 十 然し男はまだ 其青年の未來に托さんと思うて居ります。 事は此母娘を悦ばせます。 ります。女はまだ學窓に在る身 た經る必要があります。 と淋しく暮して居ります。男が其家を訪ふ 本を考へると共に約婚の可否をお何ひ申し ふことは危険ではないでせうか。誠に青年 思想の動搖し易い期です。結婚問題の根 多忙のところ誠に恐入ります。此處に 一歳の青年がありますが、 一個の生活者となるには數年 人間には未來な警 そして母は娘を 此男には同 一人の母 らない。それで身分登記を爲し、披露の儀式 の儀式なせず、家庭に同棲せずも、愛情に依 ものは結婚の大形式及大内容である。それで 其維持擴張な指すに過ぎないので、戀愛その のである。之に反して身分登記をせず、披露 男女は道徳上の結婚では無く、夫婦では無い 結婚屆出は國家に對する身分登記であり、披 って生きて居る男女は結婚であり夫婦である を爲し、家庭に同棲を爲しても、 露の儀式は私事に過ぎず、家庭は同棲に外な

情も無い結婚に對する約束である。後者は、 した場合であっても、男女の間には理解も愛 於ける具體的家庭を作ることに關する約束で 自由意思で成立した戀愛に基き、近き將來に それで前者は縱合于が親の意志を承諾 ある。それで今これか自己の一身上の結婚 を知らない俗間の誤解に過ぎない。 馬に現にすことになれば、 と云ふ言葉は不合いであり、 斯様な次第で「約婚」と云ふ一婚を約する一 其結婚は當然の結 不徹底な文字で

束である。けれども結婚とは戀愛の成立及び 解と愛情の結果として生ずる結婚に對する約 れで約婚をするとは性の倫理上よりは否であ 果として。 る。たいエンゲーギを性の倫理上より解して 不合理な不徹底な結婚に陷る。

親達の取計びで子供の將來の結婚を約束する 一つは家族主義の社會で盛に行つてゐる許嫁 この約婚と云ふ言葉には二つの意味がある ゲーデである。許嫁とは家と家との間に 會で盛に行つてゐる 一男一女の間に 愛を有して居るのであるから、立派に結婚で 様に解して居る者が多いが、其れは性の倫理 闘する便宜上の約束である。西洋人の中にも 登記、披露の儀式、 あるので、 エンゲーデを教會で行ふ儀式に對する前約の x ンゲーデは其の形式と内容に於ては既に戀 結婚に對する約束ではない。身分 同棲などの附屬的事件に ても 銘々に勝手な戀愛を行ふべきである。 になり。 て居ないから戀愛によつて學問 婚者に生ずる教育义は經濟上の事件を保護 の結婚適齢に達して居つても、 が無い。それで性の倫理學では結婚適齢 今日の社會組織では之を救濟する方法 子供が出來て生活に困 國家は其の結 ることが 0 研究が駄

本文に出て居る男女の間には戀愛が成立して 此のエンゲーザを行ふ資格も 141

既に戀愛が成立して居るものであるならば、

上の約束をして置くとは個人の自由

身分登記、披露の儀式、

同棲等に闘する便宜

愛情の無い

ない者である。 居ないならば、

殊に男女共に學生であって、

ら此の際専一に勉強して學校を卒業してから

出すにはまだ~~修養が足らないのである 今日の經濟社會の波浪に乗じて一人前に漕ぎ

E.

身

to

生

最

£

0

0

であ

語合

あり

じて居るだけで心のまいにすることが出來 0 V] 自 方がないのであります。 悪いといふことは存じて居りますが、 ますっ 「身の力のみでは身を 度墮落した の願であ 女として貞操をみだらにすること ますい 女に は 親身に同情して け れど悲し 只今となっては私 められないのであ いことには 下さる は山山 存 法が 3 c ならない。 貨財に對する推讓分配の て經濟的 して生きる と經濟 ありて一 俟たなければならな 無い 否 大一. のである。 一活とは 生活の人格者として生きる から 此等を措いて他に人格的 爲 社 心會に 婦 めには、 の相愛的生活 ありて 此の意味からして社 共 00 生 公平に 夫一 性 的 吾 的 共 婦の を爲し得 生活 17 俟たなければ が 相愛的 社 0) 為には 生 會に 人格者と 活

る個人の運命は努力によって之れ 普遍的理想を人性に於て有し家庭の良妻 一片の告白を讀んで吾人の感ずるも はある。こしに修養陶冶の可能性が して居るのであるから、 女の社會的宿命である。 人格者として貞操の貴きに對 之れを實現し得る自 自己の る。 此の 經濟的 蓋し如 監に於て 人生に於 郎ち個人 を開拓し 生命 何な 1/2 結果、 になる。 務になり、 個人の肉體的生命を維持することが 會的に拘束されて居る點に於て、 者の一 者である。 居るのであるが、 個人の人格的生活に於て可 分配の公平なる生活に與り には鰥寡の獨身者を生じ、 人間 群を生ずるのであ 是に於て衣食に關する慾望は價値に 種族の 而して社會的に斯く拘束され は先づ自己の 存續に關する 之れな實現するに際して社 人生の 3 能的 得ない者には登困 貨財に 此 行為 人生 等 第一義として 社會的 0 對 上ずる 2現下 無告者 を有して 第二義 ない者 の急 たる 宿命 推

して る女子と雖 0

は

IV

ない社會的境遇であ 器がなければ、

た十二分に與へなければならない。そ活上必要なる經濟的資料を保證し、且 迷路に入り、社會の壓迫な受け、誘惑の手に 當然の 之れを觀察し、 に醜業婦の存在することを道徳的現象として 會へば、一時的活路を見出さんが爲めに容易 教育を受けて居ないから、一度び生活 現象を考察すれば、何れも無教育の結果であ ある。妙齢の處女が淫賣婦に成り下る道德的 の形であると。けれども ならば、 に淫を驚ぐの行為に傾くのである。故に社會 る。餐館に人と思り、精神的教育及び職業的 の淪落の境遇は社會の信用を失した自暴自 笑婦に墮したことは翔の不徳行爲であり、 説を爲して、 本文に於け 行為を爲しつしあるのである。 社 與へなければならない。それが爲 會は女子に人格者として道 るハル女の淫賣常習行爲はその そが根絶か ハル女の境遇に於ては 其れは皮想の 期待 初に於て身を賣 せんとする 解釋で 立つ教育 經的生 - 140 -

會に の方

居る。

先づ社會生活の根本原基たる男女生活

體的に個人の共生の上

に行はれて

必要になる。即ちパンを求めんが爲めには淫活のために男女的生活を犠牲に供することが

を驚ぐ行爲は當然の結果になる。

生活

3

抽象的

個人の

生

活

to

許さな

值

於て

、輕くなる。その結果、

自己の經濟的生

に悩みな 成功しな る企ては、

至賣

窟と監獄

との 女子

間 V を往復し

宿命論は誤つ

で居る。 目

けれども吾々の社會的

於て

重くなり、

男女の性愛に

慾望は價

ち富者の生産機関と教育機関とな質者 ずる道徳的政策を施さなければならない。

に開放

めには此の社會から受者と無教育者とな

に出てないで酸業婦を社會より撲滅せんとす する善政な布かなければならない。此の政策

干載に不可能な願であり、

のである。

資家の

花

教育の

的

が

成立す

3

得る性質が

意志を有

る可

能性を有し、

不徹底なる良妻賢母主義

市川房

50 勢に屈 ばなら 20 る個 慣 顧 個 た現代新人の叫び翹望ではな 生の 生活をゆるさない。 性 たる事 に盲從する妥協 徹 ことをのみつとむるものは、自己の何物に みて深く堅く守るところあるも 一を屠り主義を放擲して理智の眼を 性 妥協生活 徹底せる生活 底 如何 し金銭のために名譽のために趨る淺見者か 妥協を以て處世 0 子業の 300 權 何といふ 威 か 建設 時代の趨勢を察し自己内心の を欲するならば、 る意義を有する が認められよう。 の生活、 が望まれ 痛快な心地 これ當に個人の靈性に眼 0 あくまで徹底せ 秘術として才子策士 、そこにどうして神聖な よう。若 3 かを深 我等 そこにどうして確 のよい響きであら 717 0 には到 社 は先づ自己の 一會に侫 TON 我等 顧 開
ぢなけれ みず ・靈性を 底 は 力が して 元たら やま 妥協 り習 周 權 園 87

> 家の て、 5 慨歎にたえぬ 行 L る主 主義方法等多々 校教師生活に於て 淺見者弱 く思つてゐる。 私は四 の徒とい からずば自己の主義主張を斷行し得ない薄志 教育事 甚だしい疑問 一義と、 多くは當に其の第一人者といふべきで 「ケ年間 者を見出 はね 一業就中 彼等教 る私がこうにい 教育の制度、教師 は ある中について、第 の女學生生活と、 得たる極めて淺い狭 して、 女子教育に對して甚だ飽 ならい。 と不満 育者 カゴ 現代人 それ とを禁じ得 私は はんとする女子 12 当す 心の輕浮を悲しみ 到る處に此 三ケ の人格、教育の な る態度に 其の 年間 い經験な 標榜せ 0 足らな 小學 種の る。 カジ

> > 143

申す譯には行がない。 者に置くのである。そして此等は個人の境遇 に由つて異るから、 一様な普遍的法則とな 性の倫理學は其の神聖なる戀愛の實現を許す られ。此人格的自覺を有する者に對してのみ のである。若し本文の男子にして未だこの人 有します。 に貴兄の詩觀に對しては大いに同意と同感を ンを得た事を深く喜ぶ者であります。

身體の成熟、經擠力の充實、教育の完成の三 此の三者に對する自覺から出發しなければな そして自分は拙詩に對する一人のコンパニオ

社會の一員たるを得る狀態にあるや否や一の となり母となり、人の夫となり妻となつて、 得るや否や、(三)自己の精神的教育は人の父 (二)自己の經濟力は家庭の物質的生活を爲し して人の父となり母となることを得るや否や 己は身體の成熟に於て健全なる種の進化に對 を自己に内省して人格の上から打算して一自 7:

それで戀愛な為さんとする者は、この三者 格的自覺に達して居ないとすにば、今ま本文 つ者である。運命は凶である。(評論子) の女子を愛して未來を誓ふことは死の淵に立

拙詩に就いて

MY生戀

自分の詩に對しての御書面拜見いたしまし 者になしたいと思つて居ります。一寸御挨拶 迄 ---一一、五、一九一六、-

等の想像、判斷も許さないへ必要のないそれ自 身直感的に美を物語る)音樂でなければ理想 然し藝術の表現上のテクニークとしては何

俟つて音樂其れ自身美を物語る如き偉大なる 的でないと思はれます。 でありますから詩も理智的想像、

判斷と相

藏 F 第一 號

法

芝惟 一館同

人士にとり有益な仕事として歡迎されると思ふ。初號には加藤、 上及び實際的方面からの調査なども此雜誌で爲すことしならば實際よい思付で部 とりては自然の母が懷を開いて待てる所である。文學上から許りでなく歴史上蹟 右の題で目向きむ子、坂本正雄二氏の手により月刊の小雜誌が發行された。古來 其他文士連の作が載せてある。二一年五拾錢 はた歴史に武藏野は多大の聯想を有って居る許りでない、現代東京人に 吉田、一條。 花

--(平澤哲雄

紀 る 0 加 る 72 25 運 生 ح 起 間 濟 # 驗 45 力> 何 生 3 を考 な 向 大 と以 題 組 m 動 生 礼 或 > 活 6 學 は 0 者 る 12 カゴ あ 0 織 知 活 7 先驅 め 現 題 關 進 0) 極 カン は る は 成 T ららとし は 5 遵 況 係 Z E 0 な カン 如 め 長 カン 奉 者 # 6 0 7 n 何 12 7 顧 カン V らそ 者 る 養 延 な 紀 3 あ > 21 12 更に 變遷 る あ で、 小 T で 臨 成 26 ようとも V > 部 326 家廣 も今 7 あ 3 n カン る 7 あ お h 現代 * 分 必 < 歐 女 Ū る 6 n かぶ カン 3 然 な 米 子 吾 6 日 今 知 カン か た n 2 其 カゴ に於 近 時 72 せ 等 12 > 5 0 0 0) B る 現 な あ 75 代 社 6 時 其 ft 思 21 0 0) 如 文 it 何 大 象 حَ 勢 内 岩 想 る 會 新 如 V 0 S 部 道 73 遨 6 n 8 カン 部 時 敎 何 3 0) S 徳を以 女子 3 る影 風 分 女 あ 知 育 13 同 カゴ は 代 カン 7 女子 うし 青 画 潮 6 る 時 は 加 法 6 0 50 響を ず 雰 F 敎 敎 n カジ 前 25 年 論 生 育 社 子 加加 12 数 7 訓 カゴ 御 軍 女と L 家 會 何 育 與 述 は 存 思 氣 を 及 な 啓 世 與 媥 3 庭 0 力> 0 ~ 知 想 中 彼

舊

道

德

玄

力

說

して

2

3

でし 12 雜 恐 深 6 恐 唯 3 2 め 9 0 得 慮 た 誌 排 る n 叛 現 0 如 ざる 代 T Z 76 何 斥 逆 1 あ S 0 800 寬容 る 0 を を詛 る 其 な L 繙 ? 7 我 る 近 事 0 他 カジ 幾 意 E 思 らて 3 國 3 0 0 S S とし 見逃 を 社 か 想 7 る 4 例 人 迎 大 な あ カゴ 塚 かづ カゴ 會 原 過 我 7 社 す る 胚 氏 ^ 0 S だ 渡 會 D h Ŀ 因 胎 靜 國 とす ららっ 期 派 高 は H 流 は 彼 5 12 最 等を 其 腐 者 n 12 21 初 25 V 層 敗 る 及 彼 T 0 對 12 あ は 等 壁 ĺ 行 卑 多 L 彼 3 3 主 L 起 數 等 劣 7 我 張 2 2 7 72 カン カゴ 3 た 3 未 22 築 73 國 42 は は 0 如 カン 良 3 る 民 だ E は 耳 婦 口 17 S S 妻賢 衆 舊 2 7 0 0 1 8 * 110 道 熊 0) 傾 n 思 其 カン 0) だ 男 批 德 度 心 H め 母 0 < 25 71 步 丰 中 1 難 H を 0 7 12 中 4 1 脫 0

礼

*

見

時

傳

習

道

德

力

0

如

h る 7

とす

種

0

自

告

12

あ

5

ず

Ŕ 育

į

0 カゴ 何

疑 杏 25

* を 强

カン か

を る

感 0

ず

る

Ē る

同

時

12

或

は 的

彼

等

敎

者

街 天

1 母 理 彼 0) な 0 邪 等 研 敎 魔 究 は 科 2 21 B 如 書 な n 新 Ŀ る 0) 6 12 見 L 地 ほ カ V を 科 K 17 カン 76 0 用 學 立 形 通 3 上 0 讀 カゴ 式 る 0 的 的 事 故 知 0 12 は 融 21 教 小 カン 0 授 學 修 法 得 校 0 2 で 0 1 T 兎 樣 必 深 良 要と 妻賢 S P

於て 73 6 0 耳 回 to n 理 故 6 < 亦 る 女を欲 學校 一想的 に自 四 12 後 な を社 あ 女子 す 現在 良 よう 7 派 月 者 りとし らうと思ふ た これ 教育 良 妻賢母とい は 深 號 る は 會 分 敎 察 眺 み 妻賢 する上 極 育 頑 17 0 5 等三者 は 於け その を以 多數 女子 め 0 て賞揚し Z め V2 究 協當然の 批 なら 13 13 1 母 事 極 41 と稱 舊 T 教育 V 1 る大多數の 不 少數 0) 0) は 思想 鈍 ふ事には何人も 可な 4 6 1 ず 首 不 人 目 事 異 意 た 妻 現 T 可 12 揚 恐 唱 5 的 10 カン 3 な 氣 22 鈍 代 73 2 5 6 りとする ねる人とあ するも 品品 は 0 す る思 るやは で役 母 ₹ 3 あ カゴ 屋 0) S 歌 13 3 りとしてこれを罵 ここ罵 る 女學 爲 古 論 て見る 力ジ 社 to 3 想 者 12 5 0 12 る 9 會 6 0 生 では 其の 私 0 る處 良 0 72 A 私 70 0 0 られ なら 心は名目 異 は 其 下 * 3 > R 總 妻 如 る。しか 南 論 眺 如 0 12 ¥2 カジ < 0 な 卒業 督 る T 純 なら Ł T So E 結 異 的 種 批 0 日 麗 Ź 75 3 人とし 生 0 粹 南 難 0 人 論 これ # しなが 現今の 事實 る 更に 等し 3 る カジ 義 倒 る * 0) 0 12 要求 女大 聲 人と さら 頭 以 は でな 相 此 違 0 7 本 3 2

> 明 そう 1= 瞭 4 な文 託 1 せら 7 カゴ 今は 尊 其 び言 3 0) 時 > 葉 事 S は カゴ 0 13 知 場所 5 3/1 カゴ M 其 る。 又これ 0 實に より ほ ح E 27 暖 2 程 如 眛 T な P 木 な

賢 張 3 の規 部 少の じた 底を有す 0 示さ 3 印 中 10 2 意 る 1 實行 德川 差異 る + 12 矩 和 Ł 味 力) 7 13 進 槪 事 72 義 らば今日 主 ねるというてよい は カン あ との とか 繩 出 どん 3 張 害 12 項 事 、時代に適 るは を述 及 として、 代 女子 拉芝 來 カコ 實 唱 な 13 間 300 (1) 14 教育 道 黑 0 明 際 傳 べて 17 V V 0 女子 甚 され 統 気で 細 南 V した良妻賢 自 故 だし 施設 的 家 未 5 7-あくせでこれ EV 問 てわるの 道 あ 分 12 Ti 5 教 德 70 0 不 方法 だらう。 育 い矛盾 力> 不多 滿 度 刨 良 72 家 カジ 妻賢 女大 7 私 足 がとなるる V 母 其 於て、 3 勿論 な 首 10 カゴ 、學式 大部 カジ 聞 少數 青 B 仔 公然とし 義 人に ら私 3 主 力ン 3 細 È 3 T 分 義 3 如何 0 カコ 進ん より 律 否 に及 良 1 殆 樣 て行 其 服 妻 ¥ な T 新 in だ人 E 7 3 良 7 (1) in 全 丰 妻 映 知 母

像と 私 して奉ぜる は こっに v 所謂 たつて現代の 良妻賢母 女子教 主義さ 育家 カゴ

金科

玉

各

半面より眺めた至言である。

育者 まざるを 73 0 6 ざる み を 明 0) な 0 家庭教育 カゴ る據るところを示して 改めざる 瞭 ね父兄の多さを悲 5 を任 6 時 あ 前 カゴ 事 13 5 Th に 途 カン > を詰 見て同 得 る 用 私 社 5 力> をあやまられ 17. 前途 會 ンる L につきて Va は n 7 彼 らざるを得 する てれ つゝある文教當局者の豪もさる な 同 等 學 なは遼遠といは 般が 力> 情に堪え 力> 一校 訪 0 >はらず、 等教育 なる可く 2 これ 無 は 12 にかっる制度をしきか 12 智と、 目 カ> 0 しまざるを得ぬ 73 ハへる教師 A3 45ば、 等の ない。 者 をあら 父兄 現代に處するの ある幾多の 頑迷 猶依然として其 而して尚 問 此際女學生に確とし 穿き違 若し 0 和 題 72 心に眼醒 めて感 は に愛見を托 72 今 的 73 貫徹 か るまい 12 自 同 を述 儒 ゝる結果 72 性 T 0 ハコる穀 せ 道 奪さ人 るは とを まへで 0 る して 女兒 الح 0 を指 る事 べた 新ら 憐 態 30

> 家の主婦として國 導するの 上一日も は、 忽にすべからざる最大問 今日 民 0 女學生のためのみならず、 の母 として、 題 國家將來の 6 あ る。 一發展

めに、 を知 先づ 賢母を養成すべきかとい まな 代の美し たね 女問題研究 育界に迎 女に 性が 等は今日の So ほ 私 3 5 にばなら い。し 13 女子 時代の (0) ねば かしては最早文學的骨董的の道徳である。 教 同情 る 舊 育家の一大猛 へて速 た いしかしながら無自覺な犧牲 ならぬ 教育家 思潮 の上 かして其の革新を行はん 時 る 42 時代に於てそを襲用する事 以事を力説 の涙と讚美の 代 2 我等 に、 12 を察し、 0 と思ふ。 は先づての 0 傳習的 として 大革 如何なる女子を如何なる良妻 カゴ 省を促 L 現代女學 たい 3 道 新 辭 個人の人として 0 過徳を脱 され とを惜 根本問題 新規準を示して 確 し、大人物を女子 私は決 72 h 事 生 る して新らし で希望 根 0 とする から出 U 心 は 7 的 L 底 道 て徳 更 0 0 我 でに性 では 德 L 實 12 L 等 發しな てや ほ 0 12 牛 0) 111 個 73 72

捌 n 市 で高 敬 32 どう る 誦 0 陶 ĥ 買手をなつ商 0 1 虚 名 7 V ほ 小才 3 縮 美 3 n 事と、 0 は 约 1 0 る > j V かく 憍 1 力ン 品品 __ 高 め 操 貴 俗受け Ł 靴 0) Ł 萘 Ŀ V は 個 ム格 流 E 成 S 0 うし 12 3 0) A 得意 で、 教 J 必 間 育 要 30 7 3 0 装 3 廳 作 25 10 多 飾 0 全 < な る 12 力 S 力ジ カコ 70 70 0) 0 救 * B ことめ を以 迎 注 從 小 0 3 包

T

蔣

6

7

3

柵 多 L 虚 3 んとせ 77> は * 偽 名 3 み 識 13 0 23 0 嫌 生 F 打 3 0) 5 る 10 世 12 活 n 破 な 敎 尊 力> 紀 * る 間 ら研 V 育 却 5 2 末 融 界程 通 7 時 12 甘 自己を if 1 0 10 代 6 つくら h 究 72 通 デ 7 10 0 僞 新 じて
るる 12 良 のきか 力 聞 遙 偽 妻賢 7 風 タン 皮 潮 者 生 理由 和 5 る。 相 は、 Á 0 0 母: 誌 Y2 文明 なし 73 Z 多 r 自 主 自 書 高 更に 欺 る 0 W 覺 義 1 0 唯 籍 17 己 > 社 S 1/5 0) 氣分 從順 坳 摒 彼 多 會 虚 下 3 __ 女ら 丰 通 3 等 個 は 12 S は 義 打 敎 を 事 75 0 漸 7 暗 T 越 育 12 生 0 < R 或 芽 克 整 カン 思 老 一直 裡 想 る 處 3 は 固 3 力ジ 最 克 理

> 1 る のみをとつ は 衝 突 脫 力> あ 線 对 至 12 0) 0 因 者 6 8 心 心 かさ 循 を 12 我等 姑 7 出 < 涛 息 17 2 植 6 82 0) 6 為 0) つべ 12 頭 全 頭 0 其 H 0 は < らなそして虚禁心 73 ても 貧 方 5 0 V 弱 取 向 n 捨 6 0) 3 大部分 種 違 3 調 0 る。 0 力》 和 怪 72 < 統 物 は 18 兩 思 2 に満ち して を望 者 想 純 る。 表 矛 6 72 面 盾

評 得 なく る實 は、 義 3 1 送 V2 ¥2 と評 る L 事 7 6 あ カン 事 カゴ た 舊 分 3 妻 事 際 出 5 木 とな 其の 思 生 出 毎 間 t V 17 لح から 望 \$2 2 想 1 活 來 12 題 觀察 新 家 2 まれ ようつ 驚 12 T 女學 を營 2 6 ら迷 思 7 カゴ 7 あ 現代 ___ 初 生 想家 7 t は各々異なるが等しく 魚 理 72 50 家 得 め カゴ 解 其 CI 2 を 悲 7 7 求 南 0 ~ 0) カゴ あ 社會 子 處 深 女 T L 0 る V 實驗 弘 學 る 家 13 0 理 T. ばれ 生 母 0 0 庭 淮 h カゴ きし 80 內 カ> * 實 良 な を生 如 3 北 3 受け 相 妻賢 L 構 4 顧 V 3 個 を見 頭 意 成 る 7 0 0 患 氣 せ 男 立 如 入 母 0 0 S 派 な n 現代 は A < 種 0 な 6 子 とし IE 役 事 ね 0 12 カン してどう る 13 V 大學生 起 準 毅 5 鉫 过 1 12 備 6 7 物 6 72 意 來 15 6

戀愛に關する不道德行為

伊藤 、辻、大杉の戀愛問題

それで心理的善であると共に倫理的善でなけ 質在であることが戀愛の本質である。此の道 の存在であると共に、 れば戀愛ではない。即ち心理上の經驗として 同時に道德的意識に於ける倫理的事實である 事はこれを單に性交叉は情交と云ひ、 は人格的戀愛と云ふのである。 道德的規範の上に立脚して居る意識上の結果 志の統御を伴ひ、人間の性慾を理想化したる は理性の判斷を伴ひ、感情の評價を伴ひ、意 心の所産である點に存する。即ち人間の戀愛 つた點がある。其の異つた點は全く戀愛が良 物に存する雌雄の本能的性変に過ぎない。そ 徳性なくして單に心理的なる戀愛は一般の動 である。而して戀愛の完全性と永續性とは獨 愛のみが獨り真正の戀愛であり、其の他の性 である點に存する。これを男女道德論に於て 戀愛は意識に於ける心理的事質であるが、 人間の戀愛には動物の性交とは自ら異 倫理上の規範としての を禽獸の行と称するの 此の人格的戀 或は道 こに一夫一婦の制度を生ずる。之れに反して 要又は一婦多夫又は共有結婚の制度に化する 禽獸の行としての性交は心理的事質の上に展 して直ちに統覺によつて之れを接續經營して れば、総合心理的事質の上にその戀愛が中斷 故に人格的戀愛が一たび一男一女の間に生ず の行としての性交には存在しないのである。 愛や心理的領道德的事質として自我の人格上 下に走つた行為に就いて考へて見るに、 上の統

院がないから、その完全性と永續性と ば中断されるので、之れな接續經營する道德 層一層これを濃厚なる強靱なるものに向上せ する場合が生じても、道徳的規範の要求から り其の人格的戀愛にのみ厳存するので、禽獣 的性事に率由した場合である。換言すれば戀 せずに、單に一般の動物に存する雌雄の本能 るのである。第一は人間の人格的戀愛に季由 関する不道徳行爲は隨つて二箇の場合に生ず のである。それで男女道徳論から見て、戀愛に を失ひ、常に異性の上を轉々移動して一夫多 んとする道徳的行為を意起するのである。こ 脚地から批判すれば、親又は媒介人の 居た行為に就いて考へて見るに、 たならば、彼等の行為は戀愛に關する不道德 に伊藤がその良人と子供を葉て、他の男子の れば當然の行為であり、正當の夫婦である。次 ば彼等の同棲が人格的戀愛の結果であるとす では無い。併し新道德の立脚地から批判すれ ら、直操を蹂躙した行為であり、 た間柄では無く純然たる野合の結果であるか も悪くは無からう。 して、玆に引用して一應の批評を加へて置く 明晰にする便宜のために世間の具體的 る程の事件でも無いが、男女道徳上の知識を 行為であるか何うか。別に取立て、問題にす た戀愛關係は、之れを男女道德觀から考察し 藤野枝、辻澗、大杉祭と云ふ人達の間に生じ る行為を念った場合である。 最近の出來事として坊間に騒がれて居る伊

に性慾の理想化として樹立せずに、單に心理 したのであるが、 其の戀愛が中途で心理的 す

中斷した場合に、倫理的に之れた接續修補 第二は心理的無倫理的なる人格的戀愛に率由

質例と

先づ伊藤が辻と同棲して

舊道徳の立

正當の夫婦

日

0

敎

育

固

0

や自 良 競 外 25 妻賢 主 12 R 舊 た 張 た 己 道 71 7 * きづ どう 涂 母 る 母 12 德 主義 す 主 求 現 確 12 3 代 5 義 忠 3 た る 教 0 12 7 n る 7 13 りと 不 甚 2 だ 育 時 方 其 徹 だ格 名 12 家 針 册 0 底 0 12 な 思 0 目 漠然 は當 う自 好 はざ 多 媚 的 數 0 び カジ 時 家 然 貫 辭 た 3 F 世 0 0 7 修 B 輩 長 E 徹 小 るところ、 12 甚 官 養 V 12 3 逆 はね ふべ だ 向 3 n 行 0 カゴ せず L B 0 L 50 きで 7 顰 ら信 はなら 對 3 彼等の 3 は ic 象 あ 笑 0 物 念 S で る 其 12 は を除 唯 主 h 3

> 子 覺 憲 主 な L 7 教 あ 義 T 12 終 育 3 を 其 6 [1] 我 家 諛 12 カン 0 國 < 12 頭 7 所 せ 臨 俟 婦 腦 徹 Ù ず 信 h 時 た 人 0 底 7 r 0 せ 和 問 あ 初 圖 世 再 は L る め 22 行 CK なら 解 め 7 謟 繰 L 決 真 得 女子教育 得 は h る教 Va 0 0 ず 返 る 事 と思 新 į 男 5 育 7 7女問 Ĺ 1 步 信ずる。 をし 家 S は V を渇望し 7/ 媥 て、 カン 題 た ζ 0 S を そこ 0 E 良妻賢母 如 求 T 12 私 き女 12 P め 立 は 得 自

野 12 來 b

裏

Ш

1-

0)

E 3 놜 75

V) 40 3 ~

西 M Z 7

H 3

to 春 ζ, ŧ

見 B る 0

7 0

泣 7

け

る

故

鄉

75

n 3 72 吸

ば ž

す

n

73 *

n

9

f

0

ζ n

773

y) 0 8 n

春

0 71

0 2

草 3

から 3.

n る

> 70 = ζ

青 2

Ę 天

芽 地

0 0

3 戀

ζ

3

如

3

75

n

ば

戀 わ

3

3

3

ζ,

vj S

來 V

3

0 3

١

3 ž

> 12 わ

> 0 が

は

3 23

2

0

n

Ł

3

ば

3 75 冰 3 'n 2 ì -3 5 2 973 づ 75 į 60 3 Ш ζ 口 佐 武

郎

148 -

る

には子供を中心として夫婦は譲歩妥協して生 くに人格的中心核を失つて居るのであるから 婦の性的生活に於ては心棒の拔けた獨樂の如 すことも出來るが、 活しなければならない 元より當を得て居ない。それから斯かる場合 無批判的な無自覺的な夫 と云ふ道德的要求を爲 を任せるは自然である。

幅育し擴張として之れた愛撫することが出來 理的に生んでも夫婦の愛の延長として之れた 既に譲歩妥協の餘地が無いのである。子を生 拭き取るとの出來ない大疵を眉間に登び、贖 には自己の前半生は破壊されたものとなり、 れば以上の如き觀察になる。けれども此場合 た動機を、 る。 此の時に於ては自己の人生は 死と同様であ ふその出來ない損害を身の上に蒙るのである 伊藤が夫と子を築てい 唯だ其れが自己の道徳的故意の結果でな 道德的要求に由來したものと解す 他の男子の下に走つ 道徳的要求からであるとすれば、 く其の選擇法が過つた時は不明の より別問題であるが、 大杉は果して其の理想的配偶者である 戀愛义は結婚に對しては新道徳はその不徳道 らない。 として新道徳に於ては之れを許さなければな ければならない。兎に角く、大杉との關係

生活を望む人格上の復活であらう。

けれども

何う

其の選擇法は道德的であるか何うかは元

岩し理

想的

罪を貧 配偶者でな

相對事業を貫徹することの出來ない境遇に陷 層社會の如くに本能的に子を養育して居る 種の進化に関して母性及び父性の分業的 子の養育を第三者の手に委れるは 動物又は戀人又は無教育なる ふ事は容易に無いが、 ζ, 後半生を救ふとが出來る。これが新道徳に於 判的行為の結果であった場合は、 的戀愛を行ふとに由つて一道の活路を開き、 は後中生の道徳的充實が前牛生の道徳的空處 ける戀愛の復活である。けれども此の場合に 前半生に於ける新道徳上の無自覺的無批 更めて人格

無批判的

一行動の結果であるとすれば責任を負

ふに、元來新道徳上

の知識なく其の無自覺的

自然であらう。

つた時は、

下

であれば葉てると云

ず

動機

を第 はせる譚に行かないのである。以上は伊藤の 一義的に解しての批判である。

見て彼れの戀愛は人格的戀愛では無く、單に るのであつて、 本能的なる刹那的半點的情変な突發的 何うであるか。先づ伊藤が淫蕩的要求からし 女子が藝娼妓となり安となって墮落して居る 正に禽獣の行に過ぎな 大杉と關係したものとすれば、 て再三他の男子に對して動搖を感じ、 非理想化的の性慾行爲であり いことになる。 新道德 たから 最近に

覺的な無批判的な情交の結果として生んだ子 者の手に養育を任せて問はないのは自然の結 は自覺後に批判的に之れを駄作として、第三 よって妊娠した子は先づ之れ 育を委れると云ふことは大罪であるが 一徳の進步した文明の社會になると、 無い限りに於て生んだ子は他人の手に養育 一戀愛の結果として生んだ子を他人の手に養 それで男女道徳から云へば、 を堕胎し、無自 強姦に 人格 30.5 家の奥様となつた場合である。 华生に於ける一家の奥様たることは決して前 ることは出來ない。戀愛の復活も之れと同樣 半生に於ける藝娼妓たる道徳的負債を賠償す る男子と人格的戀愛な為して其の後半生が 於て藝娼妓であったのが年期終了の後ち、或 た填充することは出來ない。 藤が大杉に對する關係は戀愛の完全なる性的 である。 専ら後牛生の處分法に過ぎない。伊 例へば前半生に 此の場合に後 次に伊藤の励機を第二義的に解したなら

的責任な質はせることが出來るが何うかと云

唯だ其の前半生に於ける無分別なる

戀愛の復

れる。然らば此の兩人の性的生活の既往に遡 つて、彼等は抑も自我の要求からして心理的 同棲六年と稱せられ、二人の子があると云は 後に總括的斷定を下さう。報ずる所によれば らと解し、其の議論の系統を異にして考へ、最 的要求からと解し、第二義には淫蕩的要求か うだと決定してかいる譯には行かない。それ なる告自以外に證據が無いので、局外から斯 は個人の内面的生活であるから、其人の正直 べなければならない。けれども動機なるもの 上から批判する場合は、彼れの動機を一應調 陷るのである。それで伊藤の行為を新道徳の 者の學理的規範であるから、以に特定人の傳 今日のところ来だ民衆意識では無く、専ら學 らであるがに由つて質値が異なる。新道徳は 徳の立脚地から批判すれば、其の動機が或る した不道徳行爲である。情夫を拵へた不貞腐 徳の立脚地 で評論子は先づ伊藤の動機を第 女として唾棄しなければならない。併し新道 の如何を問はずに評價しては大なる誤に 一行為又は反傳習的行為だけな見て、その 要求からであるか、又は淫蕩的要求か との関係は法律上の夫婦では無 から批判すれば疑もなく婦徳に反 一義には道徳 かが 關係 らでは無く、單に突發的なる本能的性交から 愛は市井の甲吉乙子の野合出來合に異ならな 以前に男子に關係したのである。 ての完全なる自覺的批判的教養を經て居ない 人間として、 的な無批判的な傳統的處女であつたらしい。 りては餘程後のことであつて、辻との最初の ことは一も二も承知のことで無ければならな 居ると見なければならぬ。彼れの文筆を通じ 戀愛や結婚に關する尋常一通の知識は持つて り、エレン・カイの亞流を汲んだ者とすれば、 の當初の關係を想像して批判することが出來 るが、六年間に於ける兩人の言動によつて其 他人の內面的生活に關する事であって、局外 交を爲したのであるかい問題である。これも 要求からして刹那的半點的に、 無倫理的なる人格的戀愛に率由して結合した かつた。それで決して新婦人の人格的要求か い。けれども此等の知識を得たのは彼れに在 て見ても結婚は人格的戀愛の結果である位の る。伊藤は平塚氏に師事して新婦人の群に入 から斯うだと決定することは出來ないのであ のであるか、 の時には何も知らない普通一般の無自覺 女子として、母として、妻とし 又は非理想化なる本能的性慾の 單に心理的情 其の自由戀 前提を有して居ない伊藤にそれを要求するは あつたことに驚き、その家庭の愛に於て完全 境に達せんが爲めであつて、一切の葛藤を 習的行為と自我の知識的要求とが一 に辻との性的生活に於て心理的に愛情の滿足 他の男子に對して動搖な感じたなどは い異分子を見出したのであらう。 に徹底的に自我の滿足を求めることの よりは無自覺のものであり無批判的の に親突して見れば、 れた證明して居る。然るにエ であつたと見ればならない。 人格的戀愛者が中途で心理的に戀愛の中斷し とが出來るが、 理的に愛情な修補充足して、辻との性的 けれども此の場合に於て暫し踏み止 り開いて救はれたが如き氣持なのであらう。 う。大杉の下に走ったのは其の完全なる徹 ので、尠なからず其の處分に苦んだのであら 心の不満を感じて居たのであらう。自己の傳 時は既に子供もあり、後悔先に立たず、唯だ裏 して居ない情態を證して居る。 た場合を前提としての要求であるから、 を一層强固にする努力な道徳上より要求する それは批判的なる自覺的 自分等の結婚は新道徳上 彼れの早婚 レン・カイなど けれども此 出來な 海三 明 此の なる 生

41

切

煽 題 0 來

爭 0 人口口 狀 態に及す影響

如

何

6 評すれ 裁を加 10 質として 許するり外に詮方が無 e G 脱して人格的戀愛に復活して餘生 石的 て居るに過ぎない狀態であり、 經た上に、徐ろに戀愛及び結婚 た希望する。 きたる典型では無 代である。 中 一女新道徳に從はない所以を以つて社會的制 ほつしい を唱導する傍ら、 一徳上に於ける自覺せる人格者となり、 なければならない。《評論子 若くは獨身で晩 時 0 ・間に彷徨つて過渡時代の機性になった化 父又は母として、 ナニ ものであり、 代の新男子であり新女子であらんこと へる時代に達して居ない。 無自覺 男子又は女子として、 の仕會的意識になって居ないから、 、その理 野枝子、 それが為めには銘々各々、 男女新道徳は神聖結婚主義の 想的規範に 75 4 5 辻 無批 自覺せ 節を守る 新時代に於ける新人の 吾々は自我の要求に於 V . 倫理的批判上の 判的 大杉の徒は る男女は各所に於 今は醜悪なる鼠婚 な男 奎 °0° 未だ普遍的事 夫又は寒とし 0 由して質行し 實現 女關 一言にして 一を彼等に を瀰縫する 新舊道德 元者に 教練を 人間 男女 300 血 生

IJo 最 なる結果を及ぼすべきか、 中にして、果して何れの日にか戦 の大戦が交戦 の人

關 **檀亦此に伴ふの質あるた見る、** にては獨立主義自營主義行はれ、從つて參政 を押留するに對して、女子の數男子よりも多 主義を取り、女子の家政以外の事に從ふこと 政権を附與し、芬蘭は千九百六年來婦女子に 三十萬人、 人口女子よりも多き處にては、專ら良妻賢母 完全なる參政權を附與し、 る普通選擧制を布き居れり、 學者の説に從へば、其國内に於ける男子 多ければ多き程、社會に有する所の勢力大 丁抹な通じて、 若くは女子の財産権職業権發達したる處 抹は婦女子に投票を許し、且つ完全な 而して瑞典は古來婦女子に地方参 女子の男子より多きこと 諾威亦之と相同じ 蓋し婦女子の人 現に瑞典。 0 きや論なく、此理數より推す時は、戰後獨與 業及び勢働に從事するもの亦夥しく増加すべ 兩國に於て、婦人參政權の一大發揚を見るべ 女子の男子に優勢一層著しかるべく、

化を來すべき重要條件たらずんばあらざるな 此二事は軈て將來の婦人問題の上に大なる變 しく増加せるは、疑ふべからざる事質にして 又交戦中婦女子にして勞働に從事するもの夥 言はい、交戦國の男子は夥しく減少すべく、 輕々しく豫斷を許さずと雖も、大體に就いて べきかすら遊踏すべからざるものあるに際し 今や交戦諸國交戦 口狀態の 上 争終結す 亡に如何 獨逸は女子の男子より多きこと八十萬人、 子に参政権を附與するの基礎條件たるなり。 多からざるべからずして、 なるのみならず、 したり。今回の戦争にて獨 諸大學に在籍せる女子總數四千百十七人な算 同じくして、千九百十四年夏期 大學教育を婦女子に許すこと亦北歐諸國と相 北歐諸國と相似たるものあり、 國は女子の男子より多きこと六十萬人、 ふこと最も多きより推す時は、戦後に於いて 獨立自營の婦女子 此事質は則ち婦女 墺兩國の男子を失 而して に於ける獨逸 、獨逸が 其情

論なく、 きは必然の事なるべきか。 子すら選舉投票をなし得るもの甚だ多から 後の解決か見るやも 於ける婦人參政權問題に一大刺戟を與 るを以て、其の婦人參政權問題に到達する 我國の如く、 之を要するに今回の大戰役は、 未だ甚だ遠しとい 古來の難問題も、或は之に依りて最 制限選舉制を取る所にては、 知るべからざるなり。 ふべきの 交戰 ふる 諸 國 男唯 8

東京日日

其の職

行為と同 を審ふ行為と同 一になる。又男子が藝娼妓を買ひ妾 | 唾薬すべきものである。 一になる。 その不貞腐の行爲 徳上より皷を鳴らして責むべきである。けれ ども伊藤の場合にはこれは當つて居ない。初 D から非人格的戀愛の相手たる辻より生活の 者もあり、牛獸的刹那的の性慾的結合より人

る。 格的戀愛であれば、 あると云ふ解釋を下して居る。 辻を甕て、大杉に はれない事實である。 子として社會的に自殺撲滅せしめたことは争 大杉の身の上にも推して適用することが出來 事は明なる事實である。 生活者として社會的に疵物になつて葬られた 敗した者であり、其の前半生は非理想的性的 果して孰れにあるかは速斷することが出來な 以上この二箇の動機に於て 彼れの行為は真に人格的戀愛の復活であ 又は淫蕩的要求の結果であるかは敢て 貫した徹底的人格者たる點に於ては失 兎に角く戀愛に於て男女道 が 走つたのは生活問題 心理的無倫理的になつて 或る論者は又、 前半生 此の如上の議論は又 た非理 **戀愛が若し人** 德上 想的の男 伊藤が からて 生涯を 眞否は自ら事實上の別問題であるから、 れる義人であり、見下げた人間である。 ば非常なる不見識である。社會の改良刷新た 風説もあるが、若しそれが事實であるとすれ 斷ずる限りでない あつては、義人の面影がないのみならず、偽 辟易して、女色放蕩に身を崩したと云ふ事で 企圖する義人が政府俗吏の墜迫 道を見出し、 V: 0 から何も言は

野枝子の眞相は に、政府の壓迫により遂に女色放蕩に慰安の 實であるか何うかはこしで穿鑿の限りでは無 藝娼妓又は妾が金のある檀那に惚れ渡ると同 の下に身を任せた丈の現象とすれば、 保證を得ないために、其の保證を與へる大杉 大杉は又、社會主義研究者であるが為め 行爲を試みた者である。これは果して事 多くの情婦を持つて居ると云ふ 伊藤は ある。 星である。 を作る者が今日の我が社會に在りては曉天の 此の理想に基いて白覺的に批判的に男女關係 教育上より普及されて居ないから、 婚が普遍的理想であるが、 して一定して居ない。 傳習的なる家族道徳の結婚より 格的個人道德の結婚に復活するも者あり、又 0 性慾的結合に走る者もあり、 倫理學上に於ては人格的個 それで目今のところでは 世を擧げて飢婚時代 是が今日の處國民 その 人道徳の結 我が 形式は決

などに依 茲に その って 徳の結婚から見れば 伊藤、辻、大杉等の行為はこれた人格的個人道 の批評の區 の岐路に迷ふは當然のことであり、 の性的形式が發生して鬩調に流れ、 は男女關係に於ける過渡期であるから、 から見れば、 々末々なのも自然の結果である 彼等が其の當初に於ける戀愛 即ち男女新道徳の上 各人の其 色々

の結婚より人格的個人道徳の結婚に復活する 關係には、傳習的なる家族道德の結婚もあり、 之を要するに、今日の我が國に於ける男女 又傳習的なる家族道德 剎那的 あり、 等は此の新道徳上の教養を爲さな 爲は人格的戀愛でな とすれば、 て傳習的なる野合的男女關係を作為し 點に於て不道德行爲であると言 進んでこれを責める認にも行かな い點に於て不道德行為で る が もの

居るから、

良人の貧困な心理的に苦痛に感じ

てある。

ければも此の良人な葉て、他の男子

の性慾的結合もあり、

人格的個人道徳の結婚もあり、

半獸的

75

反つて良人の境遇に同情するの 此の觀念を押し退けて幾重にも

たと云ふ場合には、

勿論その行為を道

- 15%

命

見る傾向がある。これは大なる損失である。思ふに印度は猶太と相 文明を實現せんと 努力するのである。 生存競争の烈しき歐洲の文 大思潮を調和し、更にこれに支那思想 希臘思想を加味して一大新 比んで世界的二大宗教の源泉にして、 は征服的精神を極度に發揮して、今や世界空前の、大殺戮を行びつ 想する風が生ずるに一至つたのである。形式萬能の婆羅門よりウパ 命と同化せんことを理想とするに至つた。されば自我の神秘を瞑 中に起りたるが故に、人事に齷齪するを以て 滿足せず、宇宙的生 するに至つたのである。然るに印度文明は土地豐饒なる 處女林の や歐洲の識者は漸く反省の時期に入りて、自己文明の短所な自覺 果して何者ぞや。彼等は得んとして失ひつしあるではないか。今 的政治となつたのである。かくして歐羅巴人の得るところのも 外部的社會的發達に於て、寧ろ冷淡と思はる、點もある。されど は心を清淨無垢の域に導き入る、にあるを以て、動もすればその た。佛陀は自ら此の覺者を以て任じたのである。 の一大理想は無明より解脱して 邊者の位置に到達することであつ ニシャッドの靈的實驗が生ずるに至ったのである。 途に印度文明 は一服の清凉劑たらざれば 止まないのである。哲人々ゴ 大刺戟となるとであらう。一般の日本人は印度な 目するに亡國 民なりとして、 あるのである。西洋文明の弊は英國の商賣主義と 獨逸流の侵略 もまた此の方面にあるを疑はない。 あまりに國際競争民族競争の猛烈なる 現代に對しては印度思想 タゴー ルの詞を假りて言へば、斎膿の都會に發達したる文明 其の外 部的屈辱の為めにその内部的理想を 今日以後の世界交明は此二 印度宗教の傾向 ールの使

> ある。 ある。 たる宗教家であつた。 し得る程の指導者無きな恨としたのである。然るに今やラビイン を爲したのであるが、ケーシャブ・チャンドラセン以後、 壯なりとするものである。 度の思想を解釋し、 ドラナート・タゴールはその哲學と文藝とな通して優に自 に英米の自由基督教徒はブラーマ・サマージの運動に 教の一面を代表したるのみならず、近代文化の立脚地より 古き印 ケー 刄 ゴール家はカルカツタの名門にして、吾等の詩人の父なる 即ち自由印度教若くは進步的印度教と稱すべきである。故 シャブ・チャンドラセンと相前後して印度教の改革を企て プラーマ・サマージは 印度に於ける 新なる使命を以て現代文明に臨みたる態度を 即ちブラーマ・サマージの運動即ち是れで ユニテリアンの 大なる期待 彼に比敵 印度

新緑の陰香ばしくして、蜂蝶花園に飛ぶ。水藻氣の多い、東國の 通して未だ嘗て經驗せざりし詩的情緒や 懷くべきをか疑はない によって來らず。兩文明の調和融合によって實現せらるべきもの 氣は大陸の詩人に對して一種の慰安たるを疑はない。若し夫れ 完全なる日本文明に失望せずして、識者階級の憧れついある 偉大 に向ひつ、あることは明かである。吾人はタゴール氏が現在の不 と確信する。而して日本の文化は意識的に又無意識的に此の方面 希望は單に純東洋文化の復興によつて 來らず、又純西洋風の模倣 期待する時は失望することがあるであらう。然れども東洋將來の はれない。タゴール氏にして 現代の日本文化よりして餘り多くな 本現代の文化に至つては 百事渾沌として統一的同化作用充分に行 なる特來を達觀せられんことを希望するのである。(内ケ崎生) 今やタゴール氏我が邦土にある。彼れは 我國の自然と藝術とな H 大



ダゴール氏を迎ふ

跡は此の島國の新綠の陰に印せられるであらう。 おは此の島國の新綠の陰に印せられるであらう。 然るに突然、報ありて 彼が日本郵船會社の一汽船の客となつて、渡來の途すがらに在ると 云ふことである。此の報道客となつて、渡來の途すがらに在ると 云ふことである。此の報道客となつて、渡來の途すがらに在ると 云ふことである。此の報道客となつて、渡來の途すがらに在ると 云ふことである。此の報道客となって、渡來の途すがらに在ると 云ふことである。此の報道客となって、近來の意味を見いるであらう。

ある。 描ける哲學者交響家を通じて、他の民族に接近することが必要で のみならず、其の理想を歌ひ、その感情を謳ひ、その日常生活を 共鳴するだけの素質及び修養が存することを示すからである。 示威運動を試みたることを痛快なりと悦ぶものである。蓋し日本 日に於て早稲田大學が此の偉大なる劇作家の文勳を表彰し、 なる政治家、軍人、實業家、發明家に依つて 他の民族を理解する に依られんことを吾人は他の諸民族に要求する。 である。日本を理解する爲めには、日本の最異最善最美なるもの 凡そ民族と民族とは其の最善なる者を通じて 理解することが必要 じ道理によつて、印度の大詩人タゴール氏を歡迎するのである。 の民族性の中にセークスピーアの藝術を翫味し、又その人生觀に セークスピーアの名に於て 藝術の尊嚴及び價値に對して、 圖書を展覽し、或は晚餐會を開き、或は其の傑作を演じたる 如き されば晋人は四月二十三日のセークスピーア砂後、 面に於ては同盟國の文家に對する敬意を表したるのみならず、 故に吾人は最大 一種の

を訪づれらる、とは、吾人をして 印度の思想に興味を覺えしむるたいで、
で又この宗教の生み出したる浩瀚なる經典に よって知られたのである。
がパニシャッドの深遠なる哲理、シャクンタラーの 優艷なるある。
がパニシャッドの深遠なる哲理、シャクンタラーの 優艷なるある。
のがにシャッドの深遠なる哲理、
シャクンタラーの 優艷なる
のに近代印度が産み出したる
最大の詩人タゴール氏が我等の國土なの正式が民族に知られたのである。
殊に佛教の宗祖釋尊に
よって知られたのである。
ないが、
のが、
の

方的色彩の下に、其の普遍的世界的の異
鼈を 發揮するからである。

術家たり、化學者たるを問はず、一國民に専懸する者に 非ずして

總て偉大なる人物は 哲學者たり、宗教家たり、文學者たり、藝

人類の共有物である。蓋し字宙の大生命は 斯かる偉人の民族的地

前に閉ぢて入らんとする人を許さない。

態度論

は或日此の疑問を抱 るし 一視する" 私 のは 何なる態度を採る可きかは がキリ 其の態度である、 或者は戦闘を布告する、或者は妙な姿協を試むる、 スト教徒として立つて いて神田青年會館を訪うた。 教會に對して社會に對して又家庭に對 興味ある疑問であ 行くについて常に考へさ 3 或者 はは白 から 私

要は生命である、山に建てられた 城の様に、燭臺に置かれたるを見て天に在す爾曹の 父を祭む可し』。汝曹の光を輝いせ』キリストの命令は峻嚴である。『噫! 禍なるかな偽善なる學者とパリサイトの人よ、汝曹杯と盤の外を清くして内は食慾と 淫慾とに充せり。 でっつい の人よ、汝曹杯と盤の外を清くして内は食慾と 淫慾とに充せり。 替者なるパリサイ人よ、爾曹先づ杯と盤の内を 清くせよ、然らば替者なるパリサイ人よ、爾曹先づ杯と盤の内を 清くせよ、然らば

要とする。 V) 筑波山中に草庵でも組んで ٤ 呪ふもの 思はる 是れ ・爲めに繭るのはい 亞米利加生活 が 基督教 道徳に何だか や 亞米利加修養等に征伏せらるいよ 7 樾 一汁に其の食を斷ち、 い輕薄な 厭味の脱けない理由併し先づ 其の主觀的要件を必 基督の愛

難は其の望む所であつて慾しい。でなければ 0 き数か新しき地に布くには宗教改革家を必要とする、 にしいた、 何にもならない。 す から搾り取つて 先輩に望むは宗教改革家の肉を裂き血を 流すの ・やうな富豪や博士を引き張り廻して「天勝以上の奇術を行つても ら搾り取つて 協傳の御祭騒ぎをしても、駱駝をして針の穴を通 佛教は支那を經て渡來した、 親鸞日蓮の加き邦家の誇る可き巨人も 多くの開山 二祖師 亞米利加の善男善女 を出して 修鍊 輩出した。新 私が基督教 教を全 刀枝の

者ゴダの充滿してる教會で言つて下さるな。他人に求むるのは止めて戴きたい。特に神の知識と云ふ 不可思議他人に求むるのは止めて戴きたい。特に神の知識と云ふ 不可思議他人に求むるのは止めて戴きたい。特に神の知識と云ふ 不可思議

宗教の倫理化を排す

する神が顯現した、 救は疑はれて父なる くも 十八世紀以來の驚異す可き文化、 把持 かせし 神觀に動搖を生ぜしめ、 大字宙が大運動をしてることも進化の理法が 神の所在を見失つ 特に科學の發 7: 科學思想の普及と共に神の そして進化の理法 公達は 舊宗教 と称 の確

人の師友に與ふ

JU

大地生木

き匂ひて 行はる は天賦の 0 まらぬものであるけれども神の大地に生へた木だ。神籠の秘な人生に祥ひ出た以上それだけの意義は自分でつける、 そうな青書生までが諸君の爲めに御禱すると稱して 繰々と神なる隅に立ちて悔改めよと云ふ、救に入れと説く、そして 吹いたら飛 の實相 今少し尊貴で今少し員 誠に要らの世話 額き大事質に光を求めんとする 者に祈誓する。 の約束の とに華麗な花を閉 ますかとは が を闡明しなければならめ。梅たり桃たり櫻たるは 1 教會に行き又は信仰を有せればならい 個性に ゆ中に 神の御園が作りなさる・。 這麼理由の判らぬ ある。 私の弟の發した質問 依る。 宇宙 である。 紅たり n. の神秘に愕き人生の現實に畏怖して大神秘に 努む可 質である、 ばならい。 有難迷惑である、 自たり、紫たり、青たり黄たり、緑たる 遣方に疑かもつのも無理 きは其花や開くにある、 眞面目な人 宇宙 である。 人間本然の努力を捧げて 的大生命を 私の神は 基督者は會堂や街衢の 々には神の名に依 窮 極 0 神籠の 背景として神 今少し 一目的 はあるま 紅白紫黄咲 々と神な 神の宿命 「哺育の 私はつ し殿蕭で は何であ 真如 V つて 40 s

0

んとする個 のA 兄よ、 を追び りて 嬰子の真を傷けて地獄の子となした、 一人をも己が宗旨に 引入れんとし』 往昔の傳道者は 神のの 御旨 豫言者を殺 00 まいに 偏く海 開っ

の戦に一を求むる

資を得んよりは吾は 狐に穴あり天空の鳥に巢あり、富と位とを棄て、神に 二の戦に 二の戦に 妙な微妙 なられ」と数へらる 方は多い 一群に求めた見識の大が思はる。 ある人の 5 戦に一 なな第 一を得ん爲めである。 が物になる者尠 を得た哲人にのみ 神の法悦は具へらるい り身は た信ずる。 一步を謬つてはなられ、 辛 6,0 10 キリストの 新井先生は『修養だ修養だと 財も位もない所にのみ神が 性 のは先づ第一歩を認つてるからだ。 0 腦 イエスが傳道者 爲めに惱を享けん」 み生きの苦しみ、 0 てあ 先づ身を捨て る。 を機 其 邊に 働 ١ の戦 130 焦慮せらる ギリ 奉仕する所 1 かせ給ふ。 漁 1/2 П いられば 3 シャの 戰 0 U 0

ればなら 教は財と神とに 0 生 B先生 行 の人格と態度には , G. んとする思想 5 のと説く所には 先生は教界の巨頭にして 協傳のオー 銀仕ふることの出來るもの の傾向に物足らなく思つて居ます、 滿腔の畏敬と讚美とな愛惜しないけれども ---理 が 2) 3 皮相 0 だ、神の上 文明を築くには 虚禮 ソリ チー に財を築か 現代の宗 先

禍なるか 75 傷善なる學者と バリサイの人よ。天國を人の

ち。妄言多罪(古野生) ち。妄言多罪(古野生) ら。妄言多罪(古野生) ら。妄言多罪(古野生) もく自熱的に機性的に生きた人間らしき努力をするやうになるかしく自熱的に機性的に生きた人間らしき努力をするやうになるかしく自熱ならざる自我の本質を 悟了したら、兄の態度だつて今少したく思ふなら願みて 自己の生活と質感と本然の欲求を思へ。知したく思ふなら願みて 自己の生活と質感と本然の欲求を思へ。知

苦言滥語

と羅馬を亡したるものは羅馬の富に非ずや。 ながら、吾人は武士道の見地よりして 將に唾薬すべしと為す。され人は聯合軍の富源を以て最終の勝利を聯軍に 歸せんとす。されたがら、吾人は武士道の見地よりして 將に唾薬すべしと為す。

社で。 大るものは誰れぞ、支那海上濫りに飛が國旗な 辱しめたるものは 性で、

人は質力を欲する 是れ畢竟意氣地なきことなり。 騎打の國民たらんこと り目下日本の財政、 獨逸を撃つは可、 多くの日本經世家は日本のために日英同盟を主張す。 界が武器を捨てざる間は仁の人あるべし、 されど第二第三の獨逸たる國なしといふか。 兵備の狀態に於いては或は然らん。 な希望す。 武士は助太刀を恥とす。 同盟は威嚇のみ、空文のみ。 義の國あるなし。 吾人は 然れども 五

に持たぬものを與ふるほどの義俠心ありや。 英國は餘りある富の幾分を割いて 吾等に與へん。されど彼れ等

口米國に對して米國の議會は公然日本に對してその經際編

なり、我は古來武士道の國なり。 一方に於いて 日米親和を說成を云々す。痛快と言へば痛快なり。一方に於いて 日来親和を說成を云々す。痛快と言へば痛快なり。一方に於いて 日来親和を說成を云々す。痛快と言へば痛快なり。一方に於いて 日米親和を説成を云々す。痛快と言へば痛快なり。一方に於いて 日米親和を説

らる。教育者の深く考ふべきことなり。されど吾人は 單に某中學 □東京府立某中學校は 最近に自殺者八名を出 せりと傳へ武を以て國を樹っるものは亡ぶ。たい仁のみ榮ゆ。 選むところは人間たることなり。汝は 人間たることを忘れたり。 漢のは強傲的文化を誇らん。されど是等のものは土塊のみ。人間 に汝は謹傲的文化を誇らん。されど是等のものは土塊のみ。人間 に

□東京府立某中學校は 最近に自殺者八名を出せりと傳へらる。教育者の深く考ふべきことなり。されど吾人は 單に某中學ある時、學校就學の困難より或る自殺者の多きは當然のみ。 彼等ある時、學校就學の困難より或る自殺者の多きは當然のみ。 彼等ある時、學校就學の困難より或る自殺者の多きは當然のみ。

廰 は すれば男性的ならざるものあり。 葉すべし。酸く勝たんよりは、 /a 時の運のみ、深く顧るに足らず。 學生運動競技 勝たんことのためにあらゆる 暴狀を敢てして顧みざるも の略なるは可。 美しく敗ける。「又不生」 紳士的ならざるものあり。 たい何處までも 武士 但し近來その應接がやしも 的 たれの 0 勝敗 は

虎だと 命 はんとして n 中 2 3 2 ることも かる 900 一加へられた技巧が、猫に虎の皮を被らせたのが、真質の生命がない、人生がない、此の物足らなてもい、がそれでは、内容が物足らな。形式は似 其 现 由 を説明して 吳れないが)之を神と稱する。猫知ることは出來る(そんなものな怎うして神 足らなさを補 宗教の てる D. È 130

てき型 に見 は何だ 3 宗教は 現代人は失はれたる神の所 さに 化であ 出 かくして 洋の倫理道 心作った、 これ神の閃影と結びつけて近代的科學的宗教が物足らぬので 科學者が人智で此の百五十年 求 小めた、 生命であ 個人主義的思潮が加味せられて 啓蒙事業に全力を撃げ 道。 無數の宗教家は擧げて倫理 |徳が殘つた。實證的決論に非れば、殘滓は卵の外殼である。かくして 生 30 命 N 生命は 温められ 型でお 在 心此 ナ る。 0 517 受降に な 過去の宗教は は 教育家になった。 孵 巧利的自 化 求めんとし 五十年餘 2 満足す から 所 Và 我宗教となつ 建設 其 神 4: V) かっ 3 命 0 0 多歎の 知 能 头 は 利 2 られ 一期間 之で た人 はさ は 寐 3 6 1

て行く而 其の論理 溶であることは 理道德が普及しても と正 啓蒙事業も は所 び來つたけれども光なきに く辭令は 比例して人は 已だ、 は 如 何に 如何に巧妙であつて 多くの真摯なる光の熱求者は光ありとの い、宗教の倫理化も 忘れてはなら 明 断であって 偽善的 如 何に自 15 つても結局は無内容無真實である。なり風機は日々に墮落して來た。其 ń 我宗教が高 20 周章狼狽した。 光 生 悪くは は日 命はない 潮せら 々に暗く泉は日 あ るまい、併し 創造 れても 歸る道すら は 75 10 要するに殘 叫 如 々に渇 此の運 一日に暗 を開 何に 倫 n

> もない、渇けるものは馳せた勢に氣息も絶へなんと悶へてるのでとの聲をきいて馳せ滲じたけれども泉は已に枯渇して一掬の滴露 黙にして寂寥に哀叫してるでないか、 る。 多くの ける 0 は あ

お

家の貧債だ、 閉した道 噫! 之誰の責ぞや、 過學者 不見識なる啓蒙運動家の責任であ 0 御 酸で あ B 教役者 い罪だい 3 知識で 輕薄なる倫理 明 德

ことだ、 色なりと妄斷するのは驕慢なる知識の迷執だ。 らうが 云のは 進化の 哲 1 0 ろとは あるなら 0 3 本末類 場合も 本質は 兄の宗教の 3 學を以て 75 が い、哲學とは形而上的現象に 云は 宗教とは 111 親に 界であ 神 倒 あると決める消極的效用は 0 0 稜 のが単純なる 倫理化運 不孝に | 甚だしきものである。之を人間の驕慢、不遜、悖信と||極的に事象の内容を決足し 事物を創造せんとするの 爲めであるなら 身の本懐であ る、 此 の迷執と驕慢とな突破して ならう 知識も科學も哲學も 動 1-客觀的評價に過ぎない f が子を殺さう [前] . あ 大陽が白色であらう 批 とからつけた あるが 積極 顯現する。 能 TE あ がそれが太陽それ自身で 加 E 3 ~ なるらり から たくなる。 其の本體に合致する 知識 aる。r故に太陽はまいので味もなければ 其所 的に 從つて宗教的態度 屁 理 理屈だ。從つて は日 は光 何 屈をつけて が 事 光は 赤色でか 間違 加 と創造 6 赤 赤のは

だ等と積極的 兄 の主張する倫理も 憶斷をして臭れ給ふな。 哲學も 知識も v. 若し倫照 併しそれ 理 が宗教だ等と主 て倫理 から 宗 我が國人に依つて開墾せられた土地は忽ち荒 も感ぜぬ。又若し米人が日本人を排斥では、 當然國籍を獲得し得るから彼等は何等の痛痒

して大なる創造は爲し得わものである。功利

存在し居る事に感奮する者に非らずんば、決 犯す可からざる法則は嚴乎として天地の中に

世の光となり、

地の盥となりて、社會の為め

先覺者によりて指導さる、幾多の信徒は軈て

人類の爲めに貢獻せらるいことを信じて疑は

時、「君等は何な爲さんとするかと」質問すれ 此 0 事が出來る。廣島邊は殊に米國へ移出するも 青年は此の地に於て教育に從事して居るが の邊の中學生位の青年十人位が集つて居る が既に以前より非常に多い。 て海外發展をも爲しついあることをも見る 八九人迄は米國に渡つて事業を起すと答 臥するに満足せずして、 余の知已なる 世界を股に掛 は出でない。されば吾等は安心して從業し后 悦ばしきことである。 るなりと答へた。余は折角努力されると前途 進展をなしついあることを目撃するのは甚だ を親して相別れた。我が國は今や内外に如斯 麼に歸するが故に、米人は決して此の暴暴に

送金する額は毎年三百五十萬乃至四百萬圓で るさうである。そして渡米などは平氣に考 丸で對岸の土地へでも渡るやうに思って 現在廣島から渡米して居る者が本國へ 兹に吾等は沈思默考を要する。戰後に於て益 甚なる變化と發展とは戦後にどれ丈け持續す 奮闘を必要とするであらう。即ち須らく努力 々國運の膨脹を欲せば更に更に大なる努力、 るかと云ふことは大に疑問の存する所である 勿論歐洲の戦争によって促された我國の激

居ろっ

んとせば相集つて團體を作るし、國籍を得ら はそれが許されて居るから、土地所有權を得 ば土地所有權が無いと云ふが、しかし團體に 何の關係も無いと云ふ事であつた。何となれ 語つたが、彼等には日米問題など云ふことは て最早十八年餘にもなる夫婦連の觀光園員と からである狀況である。加州の耕作に從事し 廣島丈にても本國な富ますとは毎年四百萬圓 彼の地に生れた彼等の子孫は 眞底に動かす可からざる力の存在することを し、これによって雄大なる力を有さればなら の。天地の廣大無**邊なる事に驚異し、**天地の 力を養はればならぬ。創造力は他を倣ふこと 經過したが、今後は一變して自ら創造するの のである。従來の日本は幾十年の模倣時代を 奮闘の發し來る原動力を養はざる可からざる を許さず。我れ等は天地の微妙なる力に感奮

居ることに基因する。吾等は實に此處に奮勵 れ、真に天地の懷に飛び込み、神の秘密を探 的に非ずして、此の感動によつて、己れを忘 發明の多きは、 るの大理想を有さればなられ。外國に於て新 番せざるべからざるものがある。しかし今 實に此の宗教心の澎湃として

を呈した。然るに其後に會つた一婦人宣教師 した。余も數回講演したが其時彼に感謝の辭 に居住して教化に從事し居る一宣教師 餘り振つては居らぬが、 き狀態にある。余の郷里伊豫松山は基督教は や我が國は宗教の發展に就いて大に感謝すべ 十年一日の如く松 逅

眞に感じ得る精神力を有さればなられ、實に 督教の精神はかいる外國人によつても到る處 等にても斯る人々の多く居るとな聞いた。基 化して居るとのことであつた。廣島、尾の道 大なるべき事は信じられる。是れ等の幾多の は決して無益とならず、 かは今日では分からないけれども、此の努力 のことである。是が將來如何なる結實を見る に吹き込まれついある。我同胞 は廿六年間此の松山市の爲めに若い婦人を教 车 一年と其結果の 161

國運の發展上宗教

私は此の數日間の休暇を利用して郷里伊豫 其間人々の話が獨り とは遠く西洋に及ばない。 て居る。故に學者は喜んで會社の聘に應じ、 つの發明が爲されても、會社はそれで滿足し 舉げずとも、 者を雇ひ入れ、夫が一年や二年の間に成績を 云ふに、西洋の諸會社に於ては多くの専門學 の發明を待つて居る。三年に一つ、五年に一 いが、日本に於て自ら特別な物を作り出すこ 新らしい薬品や、機械などが盛に發明される 而して外國の發明品を輸入することは怠らな 日本の發明は實に遅々たるものである。 會社は何時迄ら之を優遇して其 如斯原因は何かと 製するとは単に鎖國の狀態にある獨逸が研究 に之を研究して成效して居ると云ふのである して成效したのみならず、 本は大變化を爲しつしあつて、最早舊日本で 現今は我國の工業社會でも専門學者を大に優 又實際の方面に通ずる實業家の話によると、 るのを悅んで居る。此の點に於ても、我が日 うて學者を優待し、根本的に立派な研究をす にして居ると云ふことである。會社は皆な競 遇するやうになつて、以前とは全く其趣を異 はない。是れ實に喜ぶ可き現象である。 我が國の學者も既

に當つて居るかは問題であるけれども、自分 日なり一日を過すに堪へられの質だから、必 れて居つたり、思念に而已耽つたりして、牛 元來私は汽車中で只茫然と四方の景色に見惚 が實際さう感じたことだからお話して見よう つし有るかと云ふ事である。 は、彼の歐洲の大鼠が如何に我が國に影響し が澤山有るが、其中で自分が第一に感じた事 でに耳に入つてそれが自然に印象と爲つたの 題に就て話をするのが常である。然るにそれ ふることが少なくない。 が場合に依つては實に利益を與へ又愉快を與 見聞であるから、 方へ旅行をしました。 左右の人々に言葉を掛けて、 夫が果してどれ丈け肯綮 勿論汽車中など 種々な問 學士は應用化學を修めた方で、薬學士は現今 居る、そして其不足を補ふ爲に日本の工業は つた。今や獨逸邊りよりの輸入品は途絶して なる發明が有るのである。私の今度逢つた工 孜々として研究に身を委れて居る。 て、特にヨードの製造をして居るとの事であ 色々な化學工業品の製造に從事して居る方

從つて大

家族の如くに大に語り合つた。元來日本では それ等が半日の間に友人の如く、親戚の如く 工業の研究が忽にされて居る。西洋に於ては 此の度語り合つた人達の中には大學出の工 薬學士や、或は實業家などもあつた。 らう。如斯狀態であるから硝石を空氣中より しつしあると同時に、國民は矮少なる本國に 輸入が全く途絶した。否な智利自國に於てす らも今後數十年の後には、硝石は盡きるであ を來して居る。彼の智利より來る硝石の如は をやつて居る。例へば化學工業は非常な勃興 非常な發展を來して、色々なもの、製作、製造 じて非常な發展を爲しついある。 その採掘に從事して居る者の如きは此機に乘 居さうである。其他にも銀山や銅 銅山が在るが、それは無盡藏の銅鑛を有して く既に元禄の頃より住友家の採掘に係 や戦争を機會として、工商業界に大躍進を爲 我が Ш が在つて

商業も共に非常な勢を以て發展しついある。

戦闘の苍となることはなく、國内では工業も

我が國は戦争には参加して居るが幸にして

は世人の普く知る所である。余の郷里には遠 邊では「船成金」と云ふ名稱さへ出來て居るの 船舶業者の如きが非常な盛況に在て神戸大阪 基督教側の希望や要求を具體的に整

ること等の利益を享くるであらう。

併し宗教

佐藤氏の「力ある生活」日比野氏の

「人間融和

宗教として認められ

神杜問

題と基督教

社參拜問

盟では屢

下各教會の意向としては積極消極の兩

を得たる態度であると思ふ。

かった。

督教側では不思議な程平静であつた。 題は未だ解決がつかないので、 々此問題について討論研究して居 神道主義と衝突したが、基 大分注連繩問題で官権の 年の御大典で佛教徒側で 併し神 教會 當然の結果であると思ふ。 が如きことは

に呈出して其参考に供することは此際最も要 に省みて基督教としての希望も具體的に其筋 萬あるまいが、只教師資格の改善向上と 宗派が多いことであるから、 他の宗教と共にうければならい 兎に角基督教にも 各派政治の特色 いる

神社が國法において宗教と認めざる 大多數は神社参拜を否とするもの あり、 遂 年中廓清會が神田の青年 御承知の方もありませうが、 惟一館記事を今月號よりまた書くことにした 道會と統一教會と友愛會とがあるのだが、 口惟一館だより久しい問載せな 一會館 惟一 から移つて來た 館には、 かつた 弘 昨

以上

致を見め次第なりといふ。 参拜するも可なりといふ人々も なるも、 論者あり、 30

て居る。基督教側において之れに對する考は 議して該法案の速に制定されんことを希望し 教徒など何時になく

歩調を一にして

其筋に建 れるといふ噂が出てから久しいことになるが 宗教法案と基督教宗教法が制定さ 向其運に到らない。併し之に就ては佛 死か」の題下に長騰舌を振はれた。 部の例會が開かれて、鈴木文治氏は ので益々賑かになった。 五月一日(月)午後七時より、 友愛會城南支

奮闘

未だ纒つて發表されて居ないが、去る基督教 2盟の大會においては其調査委員をあげて 宗教法の制定により基督教は單に 一
随て
教
會
財
産
の
安
全
な へようと 「青年の辿り行く道」澤幡氏の「予の信仰生活」 が開 會者があつ 擧行されて、 氏の「聖書の新解釋」であつた。同日洗禮式が 五月七日(日)午前十時よりの説教 e G. n 治部氏の「道 帝大生二名、 同夜七時より學生 德 か宗教か 一高生 傳道演說會 一名の新入 」田島氏の は二 並良

法に依て宗教を束縛するといふが如きことは 「意味の無い教育」があつた。又當日は婦人會 新緑滴るばかりの惟一館の庭に色々の草花 日會が催されたので、之は止 「弱者の勝利」で午後七時 論 の例會日に當つて居つたが、 女が、賣却の任に當つて居る風情は質に可愛 鉢が並べられて、 横山 五月十四日(日)午前の説教は、 氏の「後の喜び」といふのであった。 美しい装を疑らした少年少 よりは、 H めることにし 歴學校の花 三並良氏 向 軍治氏

近々青年女子の談話會を開く筈である。 講演には年若き婦人の出席が次第に多い 信仰談話會を開いて居るが、之は此會教の最 あり引續き會員別所秀氏のため洗禮式があつ 師沖野岩三郎氏の「宿命と人生」といふ講演 田氏等が交互立たれる。講演後時には會員相 同教會は毎日曜午前九時中から聖書講義十 面目を發揮する集會で各員其胸襟を開いて自 つた十四日は鈴木龍司氏の「碎かる」 氏を主賓として會食し各自歡談に興盡きなか 互の思想發表がある。聖書は相原氏が馬加 から講演がある。講壇には内ケ崎安部岸本岡 由なる研究と信仰の互琢をやつて居る。日 育に從事されるのである。會後沖野氏及別所 た。同氏は今度臺灣に渡り士人の高等女子教 を講義して居る。五月七日の日曜は新宮の □自由 田錦町女子音樂學校内の 回會員の宅を廻つて 魂しとい 傳

般

快を感ずることが多い。都に比して大に開發 間が多くて汽車に乗つても往來を歩いても不 然なりと云はれて居るが、田舎は無自覺な人 に於て然りである。廣島には我が有力なる會 す可きことが多いと思ふ。少くとも西部地方 の注目を向けて居る。基督教徒とは如何なる な地位に居られるから、世人は此の人に多大 員が居住されて居るが、 慾精神的生活に親しみ、花柳の巻を避けて敬 である。然るに彼は銀行界に居り乍ら恬淡寡 ものが、彼は如何なる振舞を爲すかと云ふの る奇人であると考へて居るらしい。吁!天國 度な生涯を送るを以て基督教徒とは偏人であ 田舎は都會よりは質朴なり、 彼は社會的にも重要 自由なり、 自 ことである。又昨年名古屋に於て宣教師會が 事であるが、是れ等の事は實に甚だ憾む可き 『然らば吾が讀む可きの書なし」と答へたとの V)

る。此點に就て基督教徒の理想は質に大なる の後始めて一般の群集は覺めて行くのであ 等の世に出た數年の後、數十年の後、數百年 遂に社會國家が廓清されて行くのである。彼 居る。或る時海老名彈正氏の基督教十講な讀 堪へい。私の知る青年は某地に牧師となつて とするが如きものあるに至つては甚だ遺憾に を排斥し、或は他を侮り敢て理想を狹ばめん ものである。然るに基督教者にして尚且つ他 族は清まり、親戚は清まり、町村は清まり、 み居たるに他の先輩來りてこは邪教なりと話 の敬なりと諫止されたとの事である。 又內村鑑三氏の著書を讀み居たるに惡魔 青年は して能ふ事でない。否な自由なる精神により の中へ押し込めて、抹殺せんとするもそは決 りて見らる、のである。然るに之を舊い形式 るであらう。創造の偉力は新らしい神學によ 質に注目す可きことであるが、真の發展は形 に發展し得る者である。 自由なる神學に依つて生れ 式上の發展に非ずして結神的の勃興を第 れ等は天地の威力と自然の神秘とに真に感動 の生命は新緑の陸に溢る、時節となっ せればならい。今や日は輝々として照り自 し憧憬し、此の大なる信仰の上に立つて精神 ずるものである。〈三並良〉 生活に向ひ大なる努力を爲さん事を切實に感 今や我が國の發展は た日本國民こそ眞 我

爲め、人類の爲め慶賀す可きことである。寂 故に斯る人の増加して行くことは質に國家の 是れ等の人々に因つて動かされるものである 根本的に改革されればなられ。世界の歴史は を 來らす 亦遠い かな。 つて廓清せられればならい。斯る人によりて しき人、奇人、偏人によりて始めて國民の家 然れども今後の社會は此の偏人、奇人に依 根である。若し自由主義に真理ありとせば を排せんとする如きは實に見さげ果てたる心 れて居るを機會として、 のである。何たる狭量ぞや、 議した。彼等は獨逸神 開かれた時、 なる眞理は益々我が國民の腦裡に植付けられ 何に獨逸神學な驅逐せんとするも、 獨逸の神學な驅逐することな決 自由主義の獨逸神學

生に 徹 する藝術

讃した上の飜譯なれば、

更新文學堂發行三浦關造氏譯

0) 生命の解放的動機となつたことに著眼し、其 をもつて居る。彼は民主主義か藝術に對して 學美術等に對し多角形的なしかも熾烈な情熱 カーペンターの著の譯である。カ氏は音樂文 例としてまづミレー、アグナー、ホイツトマ 代英國の哲人として一異彩を放つて居る

融 理 興

岩波書店發行

書界の大歡迅をうけ毎編始めより四版を

實際的價値に至りては甚だ狹少なものとなつ て居る弊があつた。其ためか此學者必須の準 思考の眞相より遠かり、無味乾燥に流れて其 が從來の斯學の著述は餘りに形式に拘泥して 通り心得ておかればならの準備的格梯である 究者のみならず、一般の學問研究者の先づ一 哲學叢書の第四編である。 論理學は哲學研

10

ンの三人をあげ其藝術論を評論してをる。更

ベトーベンの評論に至つては其獅子の如き

刻等の寫眞版を挿入してたる。〈質一、二〇〉 命の響がある。本文にあはせてミレー、ホ トマン、ワグネル、ベトーベンの省像及繪畫彫 譯者が著者と深く共鳴味 譯筆亦流暢にして生 イツ といふことなく、且、最近の哲學思想 問題を掲げて居る。 ては塞に當を得たものである。 科學にも觸れて居るので現代哲學の入門とし 叮嚀であるから初學者と雖も之な讀んで難解 更に統整法を論じ、 其説明叙述の方法も頗る 附録として實際 尚本叢書は讀 的 や自然

調神 て居るといふ。へ價 論

補足する用意を以て此著述に當つた。本書を 本書の著者は此等從來の弊竇缺點を知り之を の領値は決して輕視さるべきものでない。今 備も却て輕視されて居た觀がある。併し此學 堡の大學に其深邃な哲學を講じたが、 辭し自由な境遇にありて專ら思索と著述に從 學して印度哲學と中世哲學を修め、 い。彼はスピノザの哲學に心醉し後英佛に留 人格の高潔なるは北歐の一巨星たるを失は んだ神秘的思想家にして其思想の幽玄なると 譚である。原著者は一 露國近代の大思想家ソロウイヨフの名著の 九〇〇年四十八歳で死 歸來彼得 か

法論を詳述し、學問研究の一般的方法を說き 係を明かにするに努めて居る。第二編 の各々については思考作用の本質と其相互關 では方 な世界觀を組織したものである。 史觀を総合して之に一大系統を附與して深 基督教、東洋宗教の粹を尋り、現代の科學と歴 プラトーンとネオプラトニズムとへーゲル及

917

のた表現してなる預言者の書であるとし、隨

二編に分ち第一編は原理論であつて思考の原 理思考の本質を説明し、概念、判斷及び推理

事した。

本書は彼が獨特の

神

秘的直觀

て本書は現代の聖書であるとまで推賞してか

失つて墮落した以來、追求し

憧憬し來つたも

て、数十年前人類が自然生活と社會の て此書を以て近代が産むべかりしものであつ な感じの胸にせぐり來るな覺えてぬた。そし の精神に共鳴な感じ此著において生命の鮮か 命力の深秘を照破してなる、譯者は深く著者 自我意志の根柢まで突込んで、人類な質く生

調和を

に生命の眞實にふれた見解は讀むものに知ら 合的見地から具體的の評論をしてなるので真 る。文藝に對し豐富なる味識力を有して其粽

- 165

洛關

陽竹

發郎

行譯

1

傳 洛上 陽澤 堂謙 發二 行著

の新しき耶蘇傳として好個のものといふべし するに適當なる插畫十葉を以てす新らしき人 家であつて満二ヶ年と十ヶ月を事務勿々の間 人を想見した。而も著者その人は一青年銀行 は坐ろ熱情に炎え真率の氣に富める著者その である。文體又一種の風格と力とな具ふ。私 全編を五章に分ち二十四節となしこれに配 の書の缺點であらうと思ふ。

に盗みて、幾多か稿を換へこれを完成したと ぜらるしのである。 へば、成立の因縁からしてが甚だ面白く感

その卷頭語にいはれて居るところの所謂あま 後著者の見たる耶蘇に就ては決して滿足を見 について、充分なる理解と叙述とななさなが りに人間的なる耶蘇を描かんとする一方に囚 出し得なかつたことである。これ著者自らも 蘇の傳記については全くの門外漢として一讀 べく忌憚なき言辭を許さるしならば、私は耶 しかしながらもしも著者のこの熟誠に報ゆ 宗教的天才の核質たるべき宗教的經驗 ことはこれを信ずるものではあるが、 た。もとより私は如何なる著述と雖も要は著 た見方に變ぜらる一の時がある筈だとも思つ 3 弊もこ の如きは最もその特色の著しきもので、その 者その人の創作に過ぎないものであるといふ

その前芽にも觸れないといふのはたしかにこ て起る大人格としての、彼を描くに少くとも ことが出來るが、後世の神學と敬理とのよつ ず教理に囚はれざる彼を描かんとしたる著者 本性を穿つべきてはないか。神學に煩はされ つたからではないが、彼が如き宗教界の偉人 の態度については充分の敬意と同感とを持つ 赤裸々といふは最もその核質に觸れてその に神となす一派の人に同じて居るものでは しく描いてほしかつたといふのである。 私は飽くまでも、耶蘇は人間としての宗教的 いといふとは明白に斷つて置かればならぬ。 の彼の宗教的苦惱と光耀の心境となもつと著

一大天才だと思つて居る。而して天才として

さればといつて私は決して耶蘇か以て直ち

蘇傳は宋だ何も目を通したことがなかつた。

私は福音書は嘗て讀んだことがあるが、

面もこの點睛によつてもつと活躍して來る答 ではないかと思ふ。 著者のいふところの考證的方面も戲曲的方 今この書の閱讀を機會として、ルナンの耶 傳邦譯、三並氏の福音書大觀、北澤文學士の

私は本書によりては耶蘇その人が多く窺は

れるといふよりは著者その人の信仰、態度等 方面といふも戯曲的方面といふももつと異つ 者の心境に變化な來さいると共にその考證的 がより多く親はれたやうな氣がした。故に著

るまいと思ばれた。

サイデルの耶蘇の時代邦譯等を併讀するの要 述をも併せ讀んで見ればほんとうの耶蘇は解 ない方の説であるが、もつと難有い方面の著 る。以上は殆んどすべてが耶蘇か以て神とし 求を起したことかこ・に附記するの必要があ

~にありその長所も又こ~にあると思 この書 氏の耶蘇傳は特にその信仰か見るの點に於て 餘程個人的だと思つたからである。妄評多罪 最も多くの共鳴を感じたことをこうにいって 何敬私が特更にこんなことないふか、上澤 因に私は三並氏の見方と宮崎氏の見方とに

置く。〈四六版紙表裝、三六八、價一、五〇〉〈鈴

偉人耶蘇。宮崎虎之助氏の基督觀、マーテン、 164

出たこの傳こそ、最も真實な而

に歡迎せらるべきものと信ずる。(價一、三五) ものである。 家にとりて裨益する所蓋し少からざるべし。 挿入の寫眞挿繪等亦例の如く極めて有益なる 及び考證等を掲げられたれば沙翁研究 沙翁三百年祭に際して殊に江湖 て最後に『トルストイ』の譯された事は、われ をも肯定の力をも、相容れない力をも、溶け は『一切を抱擁しなければならない、否定の力 われの心から喜ばしく思ふ所である。この書

ロマン・ローラン著 トルストイ

潮瀬 社正 行譯

として進むに隨つて遠ざかる理想を追ひかけ あつたからである。共に真純な自由基督教徒 早くよりトルストイの私淑者であり愛慕者で イ傳」であらう。それは、ロマン・ローランが 傷へたものは、ロマン・ロオランの「トルスト るに堪へないほど夥しくある。その中で最も 要がない。杜翁に關する評論や詳傳は、數ふ トルストイの頃を談り、 7 ストイの偉大については更めていふ必 生きたトルストイを られる時には是非とも譯語の洗練と共に註釋 派な本となって出たのであるから、版の重れ する。パラグラブごとに一々深切に註釋を加 されたやうな氣がして原著者に氣の毒な感が りに生硬すぎる。あの美しい文章が大なしに へられたのが却つて邪魔である。こんなに立 大な人間苦が遺憾なく描かれてゐるのである みが現はれ、巨人トルストイの悲痛にして偉 惜むらくは譯文に色がない。

「ミレー」「ベートーゴン」「ミケランジエロ」 生命が、偉大なるロマン・ローランを通じて て行つたからである。偉大なるトルストイの 邦譯が公にされてゐる今日。成瀬氏によつ ストイ傳でなければなられ。不完全ながら かも力强 いいト これもぜひ改版の時に加へて頂きたいと思ふ の必讀すべき書であることは評者の保證する ロマン・リーラン その人を知らんとする人々 しかしこの 簡が譯されてない事も非常に遺憾に思はれる の置き所も變へて頂きたい。 **巻頭に挿まれた原著者の熱情のこもつた書** 一卷がトルストイ研究者は勿論、 信ぜる、なげく勿、そを聴け、濇の音を」と 翼に砂を浴びてる一羽の雀に廣大無邊の神を 讚へた詩人の感激は、やがて「一羽の雀・・・」 唱ひ、高は啼き、風は吹く、 かいやきに、廣大無邊の神」と絶叫してゐる。

おたやかならぬ

ところである。へ價〇・九五

合うてゐる力なも、吾々はそれら生命の鑛の 投げこまればならない」といふ信念によつて 書かれてゐるが、こ、にロマン・ローランの强 切をあげて吾々の心の白熱した場坩の中へ 熱がない。餘 見たっていかで我れ地に立ち歎くことあらんか の中に活きようとする主觀の强さか見、自然 なかに自然を見る美しい情調はあつても、 氏の詩を讀まなかつたが「廢園」などの與へた 活に立ち入つて、敬虔な而かも深刻な人生味 に據る修道院の人々の生活が此の詩人の内生 つた。しかるに「良心」に於いては、氏が自 觀の熱烈さといふものな見ることができな 印象は、客觀の色の濃い、たとへば、自然の うに、大きな自然の懐に抱かれて神を想ひ の神が自然と一致せるを見た」と云つてるや 心」一卷である。氏がそのアピログに「基督教 の中に躍動する神の力を探らうとする信仰を を植るつけたやうに思はれる。評者は多くも ひがけない感激をうけた果實がこの詩集 露風氏が北海道のトラビストを訪れて、思

自我の絕對性より世界の本質、神の本質と本

歐洲文明を以て中心的統一なき病的なものと 書である。〈價〇・三五〉 賢見し、社會生義や唯物主義を痛快に批判~ し、將來の新文明を生む消極的意味を其中に

認悲哀より歡喜まで

苦闘、歡喜法悦の生活に入り給ふた事は近來 心を弦に認むるに至つた。 然るに著者は此間に有つて道を求めて奮戦 世は益々唯物的に進んで停止する所を知ら

章より基督の化身を説き其の世界文明の意義

的人間、世界の創造、宇宙魂を世界過程の各

を説いて神の三位一體に及び、基督、本質

さと明快な思想の表現法を有して居る。譯文 點と其準備過程とを道破せる鎌言者的の熱烈 を求めて居る。現代文明の批評及び其の到着

稀れに見る宗教的實驗者である。

想を求むる人逢に敢て一讀を薦む。〈價一、五 亦明快流暢にして毫も澁滯の感がない。新思 ころなどは誠に神子の生命が躍動してゐる。 可からずといふ見地からキャンベルの代表的 類の代理者と見て到底吾人々類の絶對に學ぶ い見地は愛見せられない。例へばイエスを人 併し此書を神學上より見る時は決して新し

金魚のうろこ

四六版三一六頁

篇の短文を集めた小册子である。只何となく もいふべきもので、「金魚と黑猫と」以下數十 オ藻が現はれて面白かつた。本書は其續篇と められたのが十年前の事であったが氏の鋭い 小劍氏が「その日~」といふ短い文章を集 生活と藝術社發行 に觀るのな批評した點などは頗る盛いといは を詮ずれば到底吾人の救主ではない。猶ほイ の完き如くなれとさへ敬へられた。 エスの見解其ものとも違ふ。イエスは汝等神 ればならい。吾人が學ぶ可からずといふ見地

書きつけたものだらうが、其處に却つて鋭い

此外オイケンやトルストイを評し、或は科

觀察と諷刺と流る、思想のひらめきがある。

の有様、人は愈々パンをのみ求めて努力の中 で行くと宗教だつて同じ失敗を繰りかへす事 になる。 に解釋してゐられるかい疑問である。此論法 ものが其真理とする所が人によりて違ふから ある、總て自分を安心せしめざる者は名醫に 失敗だといはる點などは哲學なるものを如何 あらずといつたやうな嬢ひがある。哲學なる

陽上 堂賢 發造 行著

書中イエスの人格、イエスの生涯を説くと 恨みがある。從つて批評となり主張となり結 の慾深い望みに過ぎない、道を求むる人の是 其者を打出して貰びたかった。併し之は吾人 越して歡喜の生活に入られた後に書かれたの 非一讀すべき好著である。『尹濱」(價一・五〇) 論の讚美となつてゐる。も少し生々した悲哀 だから悲哀の經過四容は十分に語りてからぬ 猶ほ今一言を加ふれば此書は氏が悲哀を超

記マクベス

電車の中や散步の途上でなど讀むには最適の に自己の實驗を絶對のものとせられた嫌いが りて巻頭卷尾には博士のマクベス劇に關する 學哲學倫理藝術を批評してぬられるが、餘り が文壇のために慶すべきことである。例によ 多大なる努力によりてこの譯著を得たるは我 人であることは世の認むるところ、老博士の ス物語りの譯である。殊に譯者の沙翁通第 沙翁の傑作中の一として知られたるマクベ 早稻田大學出版部發行坪內 逡 遙 譯 無究に其目的

を達することは

出来な

勿論太陽の熱はさめ、

地上は氷の山と化する

車の轍を踏まなくすることも出來はすま の黴菌を征伐し得る人間の意力によって、 自然のなり行きに任さず、丁度コレラや赤痢 要する。そして若しその理由が分つたならば なものが殘存したが爲めか。これ等も研究を

前

200

速度は其の高さの差に比例し、平均状態に近 に於ても無限であり、且高きより低きにつく

づく程其の速度は、にぶくなるものであるか

無限に此の狀態に近づくことは出來るけ

如何と云ふ點に存する。著者自らも亦

「宇宙

に戦争の爲め、高等な人間が滅亡して、劣等 混合の結果が、或は他の文明史家の云ふやう

人類の滅亡を此の書が充分に説明して居るや い、けれども僕の疑は表題に示す如き宇宙と

は空間に於て無限なる如く、エネルギーの量

等の知識を得るには甚だ便利な書と云つてい 類の過去及び未來」が説明してあつて、これ

80°0

して滅び行くのであるか、或は亡び行かざる いのである」と云つて居る。然らば宇宙は果

休すのである。然らば此の如き愚なる存在を ならば、人類は滅亡もしょう。それでは萬事 宙の構造及び其の將來」から説き起して「人 その方向も分るやうに思はれる。此の書は「字 君の著が世に公にせられたによつて、多少は 學の青年であつた。僕は著者が高等學校を去 つしあつたかを知らなかつた。然るに此の頃 つて後ちには如何なる方向にその思想が走り 哲學問題や人生問題に大なる興味を有する好 生である。既に一高在學の當時から、色々と 著者は現今帝大醫科の三年に學びつしある學 滅 び行く宇宙及人類 洛陽堂發行 を有して居る。 とするも、 以上は、一應は是に論及せればなるまい。我 神的方面を如何なるものと考へる論者であり 1 れ等人間はエネルギーを集散せしむる精神力 へて置くことを忘れて居る。 的方面とが如何なる關係を有するかを一應考 すまいか。又著者は餘りに物的或はエ 永遠無究に滅び行かずと云ふに等しくなりは のであるか。永遠無究に滅び行くと云ふのは の方面を見るに急にして、これと所謂精神 文明を論じ、人類の運命を論ずる 此の力は何ものであらうか、 たとへ著者が イネル * たいのである。妄評多罪〈三並〉〈價

著ありしか。兎に角に僕は一層の奮励を求め 想に富む人である。それが科學に觸れて粉碎 の示さんとした題目とは違ふ。著書は元水冥 者の佛教的傾向は寂滅爲樂の憧憬と近世科學 此の著は面白い書であるけれども、そは著者 始めより滅亡せしむるのが、當然ではあるま せられた為めに此の著あるか。或は然らず著 究すべきことである。 いか。それとも尚は他に活路があるかー僕は 在ると思ふ一人であるが、これも亦た大に研 一傾向とが、個々暗合したるが爲めに此の

聖三稜玻璃 千駄木町にんぎょ詩社 村 鳥 心發行

或は宇宙に之を應用して云ふことは出來まい

か。希臘も羅馬も滅び行つた。これは何の爲

チャンバーレンの云ふやうに、異人種

け、大空ととろけ合つた詩人にとつては山村 あらう。けれども彼れの全心全靈が光りと溶 今までのやうな詩を形式の上からや、リズム ひない。「聖三稜玻璃」一篇は我が詩壇に新し 氏の詩は幾多の强い共鳴を感じさせるにちが 知れない。又そんな人には恐らく解らない の上からのみ行かうとしてゐた人々にとりて は「聖三稜玻璃」の詩は難解とも見られるかも 未來を豫言するものであらう。 2

快い。(價〇、 裝幀もまた内容にふさはしい。 滴る額 ひとみに かみのけに E.O. からだ青空 ぞつくり姿穂 ばりの巣をみつける 紙のさわりも

169.-

私は初めから終りまでミレーのアンゼラスに

つた基督の感激と一つではあるまいか。

の强さがあるのである。〈價一〇〇〉 とかもの足らなく思ふであらう。しかしそこ らしい集である。〈質〇、四五 集を讀む人は割合にリズムの停滯してゐるこ 對する崇嚴な心をもつて譠み了つた。此の詩 に此の詩人の更改された人生觀があり、主觀

中心にして、それに佛願西のサ 小林氏の第二譯詩集である。この一卷には、 ズ、アイルド、ビニョンなどの新しい英詩を ルスワー 久しく詩と音樂との間を歩みついけてぬる シー、プリデエス、ベノイエス、シモ 愛音會出版部發行 雄 著 マンや獨逸の

素な室内樂を聽くやうな感じのされる可愛い 調子に乗りすぎる嫌ひが無いではないが、

ないに歌ふべきものである。やしもすれ

置愛と藝術 占 江

雁

さか知るに遠ひない。(價五〇) もすれば、巻に出てよと叫ぶ街頭論者は、 の一卷を讀むときに必ず頑な自分の心の淋し れてゐる。評者はこの可愛いらしい双紙 るやうな優しい感想文とが氣もちょく收めら 者の美しい世界が描かれてゐる數篇の小品文 ゐる吉江氏の心もちをなつかしく思ふ。やり までも純一な、静かな生命に参しようとして 敢て書物とはいひたくない――を讀んで飽く と、メーテルリンクやグリアスンをしのばせ んだ新著である。散文詩人の態度をもつて著 かことに努めてゐる吉江氏のデリカシーに富 自然に生き、自然を通じて人生の真を味は

の日本英國及び世界

英國の政治家たるスコット氏が我國に來遊 アドバタイザー社發行ス コット原著

みこれまれてゐる。七十五曲のうち、 では置かないほど、メロデイアスな調べが刻 の幾つかの小曲には吾々なして歌はしめない ゐる。殊に卷頭を飾つてゐるがルスワーシー

その何

れたとつて見ても、それは讀むべきものでは らない。英文に和譚を對照してあるから一般 英文研究者にも好參考とならう。〈價〇・一五 が、英國人の立場としては諒としなければな とに違ひない。書中二三首肯し難い點もある 親しまんとするが如き感情は好ましからわこ も我國は獨逸の敵である。英に疎にして獨に 之に参加してたる。如何に實戰場から遠くて 運を賭したる大戰争に從事してたり、 のである。兎に角我同盟國たる英國は今や國 い心を以て同盟國の親情を我同胞に訴へたも し現代日本國民の對英感情の兎角面白 世界に於ける日英の地位を論じ且親 50

臨海の外より

詩「太平洋を守れ」等愛國のなししい歌から、 活動せる我同胞の生活のいぶきともいふべき 「あーこの力」「誕生日に」等愛すべき小篇があ が此詩集である。「われらの日本」「日本とわが る。清洒な小册子である。((價不詳) 菱城氏の名は本誌の讀者に親しい。海外に

こドワイト・エル・ムーデー傳

詩を讀んで氣づくことだが、氏の心を綾どつ な小曲が譯し添へられてゐる。何人も氏の譯 ファルケや露西亞のソログーブなどの句やか

てゐる柔らかなリズムはこの一卷に於いて

遺憾なく美しい言葉となつて表はされて

物也。譯文も全く手に入つて居る〈價〇、三五 である。一般青年信徒及求道者にとり好き讀 なつたものであるから記事又信憑に足るもの るが、原著はムーデーの息子と其女婿の手に バリストとして有名なるムーデーの傳記であ 近代米國における信仰の偉人又所謂リバイ 曰五十月五

口自然 口自然 【次目號初】 ―ことに武藏野を愛し野原から生命のインスピ 一神よ自然 □級の印象 しあこがる。野に ことに武藏野を歌へる文詩歌を歡迎す、同好者の 顶 : 川州梅之助 加微 □武殺野 □自然を愛す心・・・・・ : : : !!!!! 孙野

(据 頁 會 4 税 郵) 鎪 八 册 すと銀十五り限に熱前分年-所 行 發 地番七十町前門新區芝市京東

會 野 藏 武 番一五二二三京東春振

(十)(九) 基督教。現代。哲學的爭

督教と哲學 5 神 的 世 0 界 存 觀 在

對 哲

> 毎 H 曜 H 午 九 時 よ り十 時 迄

教 教 自 精 史 神 H 哲 擔 哲 哲 學

(後附

雑誌、

何人にも無代進呈せず。

□本號は印度の詩

編 輯 0 後

更した。沖野氏は福島仙甕地方まで傳道旅行

等の諸氏は何れも別條ない。本號にも寄書さ

爲め氏最近の肖像を卷頭にかいげた。之は詩 聖タゴールの來朝を迎ふる ことであらう。同氏の「生を賭して」の續稿は があった。 尚二回ほど頗る深刻な傳道上の實驗なか~れ された歸途で、其見聞談には頗る面白い逸話 他日同君から誌上に御紹介さるい 口本誌原稿毎月七日が切 營され其第一著手として「生に徹する藝術 れた三浦關造氏は今度更新文學社といふを經 の成功を祈る。 (カーペンター著) の譯を出版された。

同氏

たもので深く同氏に感謝せざるなえない。タ 人に深く接した佐野甚之助氏の御好意に依つ ールが來るといふのは昨年の夏傳へられた ため五月末渡米された。 て居る。本宮氏は米國ガベリン大學へ入學の

ことであつたが、

種々な事情のために延引さ

れたのであつた。詩人は其故郷で窮民救濟の

統一教會の牧師として多忙なる教務に盡され □例に依て同人の動靜を申上れば、三並氏は

粉せる賢人が其暴政を諷談するといふ筋で、 ためドラマを新作し慈善與行を一族の人と共 にやつたソーダ。或暴君に對して滑稽役者に ル自ら其滑稽役者に扮し大喝采を博し め東奔西走に席暖なるの閑なき位、 て居る、鈴木文治氏は其友愛會益々發展のた

阿部次郎氏でらは岩波書店の倫理學をかいて とわりがあつた。 るので非常に多忙のため延期するといふ御こ 本號は殆ど感想に類したものを集めて見た

平氏など地方の寄書家が見えられ歡談に夜な

は其後大に健康を回復された。

岸本尚田相

口此間の、

編輯會には沖野岩三郎氏や本宮獺

たソーである。 も浦和横濱東京市内の各青年會等十數回の講

演のため多忙を極めて居られる。近來毎號寄 輯を終了された。 は福島市の郊外に靜平な生活を贊まれて居 誌にも一層應接される筈である。 である。鎌倉に久しく静養中なる小山東助氏 稿される内藤濯氏は幼年學校佛語教科書の編 吉田絃 一郎氏は早大の時間多く爲に多忙 今後は餘裕が出來たから本 野村隈畔氏

> 本誌の原稿、 社 質問、 新刊書批

内ヶ崎氏

東京市外巣鴨一四七〇相原方部等に關しては 交換、 圖書取次、

購讀、

東京市芝區三田四國町二六合雑誌社營業部宛 にて御送附又は御通 信被下度

候

Ŧī. 錢



月 號

E

在

現

陶ス

山之

務認に

15

w 4

加

藤

夫

荻

原守

遺

セ

77

Ш

野

त्ति

w 力

ナ

1 p

馬オ

場ププ

哲ド

哉を

表 左 値

文學

博

士

深

H

康

算

木村 妹 元治

尾 秀質

鼈

起

論

源話

Ď 口程を計

鸑 V

富本

山

H

嘉

吉

枝

會講時場 費師日所

壹馬六交 圓場月響

哲よ社 哉り 氏岳

セナ 金

> 京 東

水 本ラ

時

時

初

林ッ

セ 譯ル

> 替四 振

西

宮

藤

朝

西

村

伊

石

作分

村田高郡島豐北下府京東 地番二十八百四千山鶉

(後附三)

禮拜說教 午每 前日 十曜 時日 (當擔) 並 良

傳道講演 午每 後日 七曜 時日

諸

家

並

良

基督教

公哲學

午前九時十五分

靈

交

曾

午每

後木

七曜

時日

三

馬可傳を講ず、猶會員諸君の信仰告白、

る質疑等有りて頗る有意義の會合也

並 良

宇宙、人生等に對す

家

日曜學校

午每

前日

九曜

形日

誻

滿五歳以上の少年男女の入學を歡迎す

御遠慮なく 御來會下さい。 歡迎い たしま 御聽きになることが出來ますか りにも又、どなたでも自由に御 5

出席、

一どの集

す。

芝區三田 一四國町芝園橋際

基督 五八五五香

基督教 官集會案內

禮 藏、永井柳太郎、小山東助、相原一郎介内ヶ崎作三郎、安部磯雄、岸本能武太、 拜說教 て擔任す (毎日曜日、 午前十時 一郎介等交代 岡田

哲

組 會

げんとするものなり
信仰に對する疑義を糺し大に共進互琢の實を

本 織 鄉 す。 信 會は 小 仰 せ く團體 5 多 石 川 昨年六月成立し主とし 宣 れ自由基督教の立場 牛込等都下北部 なり、 一傳せんとする高潔な 同感の士の來會を歡 0) より 人士 ろ 7 友情に 包容的 神 よ り組 H 迎 本

三丁目女子音樂學校內 電話本局

神

田錦町

木

矅

五發

圓錢錢錢行

教 调 雜 FI 宗 誌

0 12 明 治 年 1-7 旣 往 餘 年 0 歷 史 を 有 1 3 外一年一每 本 國ケケ 邦 行年年部週 基 ケ金金金 督 年二一 教 金圓圓三二二 界 ---

最

誌 刊 誌 長 は な (1) 井 的 基 督 教 0) 立 場 よ 4 時 事 問 題 を 評 論 且 つ 最 新 0) 知 識 1-依 9

永 學 0 號 內 道 外 理 界先 李 辈 を 滿 訊 載 1 教 內 外名 0 論 訊 5 新 進 思 想 家 0 研 鎖 清 新 な 3

te

闡

明

す

3

あ

(1)

誌 な 仰 0 糙 7

聖

書

研

究

0)

手

引

信徒

庭

0)

讀

好

適

な

武 本輯 喜 は 宮 經 輝 金 作 H 0 助 兩 氏小 每崎 號弘 執道 筆 渡瀬 在 常 兩京 牧 記 野 者 虎 名の 五 を 氏 助 協 力

誌 0 見本 は 往 復はがきに 2 御 申 越次第 無代進呈すべ

本

所

大阪 市 北 品 中 丁目四

振 金 党

OF

2

墓

剂

75

邦唯

の權威ある不偏不黨の神學專門雜誌

共稅郵金前年一 5次 後五十三圓壹金 5次

F

● 錢 廿 冊 一 價 定 ● 銭 四 税 郵 に 別

見率を要せらる方は郵券二十四銭送らるべ

研 太 **

會靈

員 順

雄

島 田 茂 慶

町保神表區田神 所捌賣大

叮張尾橋京京東 所賣發

治

THE STATE OF THE S

L

京

東

刑

野

々

村

戒

西星

松言

《後附四》

婦人の王國其他趣味ある記事數篇	口生を賭して	口知識的氣取屋	ロ靈のうしは	口詩よりる田を	□永遠に默しつ 、	口愛を抱いて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	口愛の切れはし(ゴールス	口道徳上の性慾・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	口生活のアンナノミー…	口生命の追及・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	口物質文明の壓迫	發 五月 日 五 月 元 月 號
篇	沖野 岩三郎	工 藤 直 太 郎	鈴木龍司	···· 佐 藤 清	吉田 絃二郎	平 井 好 一	一):鈴木芳松	一條忠衞	野村隈畔	・・・・・内ケ崎作三郎	安部磯雄	
口現代の女學生を如何に見る	口四人のスカンデナヴィ	口忘れえぬ面影	地雷夢君	口島地雷夢君を憶み・	口祈禱の心理	口忘れられた鐘・・・・・	ロデモクラスイ	口國際道德論 …	口若き佛蘭西人へ	口現代の唯物主義	ロイエスの生涯	
如何"見。"諸	アの女權論者:平井		ケ				の心理木 村	一條		白 石	と其使命内が崎	發 行 四 月 號
索	好	粒 一配	崎作三郎	力木三信	彌	芳松	久一	忠	藤濯	喜之助	作三	煮 號 给

濯

衞

郎

助

郎郎綱

平 松

家一郎

ر	ふ乞を添書符	即旨る依に」	誌雜合六	つは方の込	申御て見を	: 告廣の此
發行		道	日日	同	道	毎月
	幹	E	石	介	A Political Control	松
頃結婚した男の話。○修養一東記	○如何なる國が党へ 福島 安正 ○職工諸君へ 飯島 坦水 ○一家に悪者ばかり 池田 天真 ○萬一の用意 土屋直三郎 ○ア、有難い … 井 蛙 翁 ○運命論 … 高木壬太郎	を見る眼 麻生 正楽て船(第二回) … 野口 復	一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	世界發展の用意 福島 安正 ○談金十字(第一回) ・・・・野口政治家の苦衷 ニ片散士 ○南洋新領地の宗教:保坂彦		鳴呼我日本 (特田峰次郎詩 の上代日本の國民的信仰) (特田峰次郎詩 もの乎 の の の の の の の の の の の の の の の の の の

番六二九五二京東替振 所務事會道 四谷中市東所行發

刊新生游井

送 料 八 医 價 五 十 五

金

頁

金

る、 は ナ -15" v 0) 1 工 ス 8 識 0 j h 其: 售 4 生

450 刨 命 新 信 牧 斑 を失 < 5 生 徒ご とを語 0 會 其 イ 八豐な 者 あ CL 工 單 111 6 ス る、 限 12 る恩 純 は つて 所 15 15 に貴 あ 居 る る、 謂 る、 4 新 8 イ 放 獨 工 彼 新 生 淮 は 著 生 り事らにする ス 12 觀 老 著 命 最 C 老 近 8 は と 正 は 12 ifili 獲 1; 學者 一至る 此 得 面 V, 書 た 迄地 る質 では 生 13 60 た、 がたて 忍 命 驗 方 な 希 CK 0) 自 型 な 感 0) V 想の 浙 S 官 勝 彼 (1) 6 からであ 告自 近で 利 服 0 か 當 12 前 歌 であ 映 1 著者 0 7 营 る、 Ŀ た、 る、 と威 修 12 幸 B る 1: 著者 從 72 1 謝 して とは 0 3 工 T TAIL. 0) ス 今之れ 未だ 科 0) 此 其 書 特 性 は イ 政 10 格 微 工 8 加 治 で と彼 公に 學 經 ス あ 定 濟 1: 6 識 す 説 6 山 る らざる人 敎 丽 4) 3 は、 新 0 は L 13 720 4 T 之が 5 0) 著 12 光 太 V) 34 唯 景 老 源 寫 は 0 は

内容

來

りて見

よ(五篇

) () 新

生と希望(四篇

) 〇 戰

鬬

と勝

和

m

結

) 〇 歡

喜と感謝(三篇

12

となり、

旣

12

彼

を識

n

る

人

k

0

為

に慰

藉

とならん

事

を望

T

彩布

番〇二四五局本語電 店書波岩 田神京東 所行發

君諸者 讀 誌 0

合 替

雜

誌

社 は

宛

座

東

京

ば定別價 御 9 送 は カラ 京 御拂込 金 市 價 料 カ は 丈 可 3 '成安全 非 御 添 쏤 ま 49 な 籍 せ 振替 3 敎 ろ 5 3 0 科

料告廣誌本

普 曹 特

通 通

表紙

下

0

廣 半

申

可 上

候

仕候

頁

金 念拾貳

圓

問 御 当 び 税を要します。 返 所 を す To 3 書 御

> 大正五年六月 一日發 行大正五年五月廿八日印刷納本 以上連ば四面は 續 協 国 以 每 月 0 際は 巴 (特別割) 日發行 引

發行

兼編

輯

人

海

輝

男

野

三日四國町東京市芝區

雜誌

社營業部

電話芝五八五五番

發 即 即 刷 刷 行 所 所 東京市芝區三田四國町ニノ 東京市芝區愛宕町三丁日二番地 東洋印刷株式

一基督教弘治

道

社

N. THE

話 五五五番番 定 誌

價

特別

號 は

出 郵

版 稅

0)

は 12

規定以外の代金を申受く

際冊

付

金

錢

清國を除

貳拾

郵 郵 郵

稅 稅

无.

錢

共 錢

錢

稅

等

表

紙

四

頁

金質

拾

本

壹 册 册 外

海

删 半 ケ 15 ケ 年 年 月 分 分 前 前 金 金寬圓 金壹圓拾 貢

後附八》

		5	尼	論	可	平	ル			3	3			
愛の切れはし	一最近の夕翁と其講演	一余が見たるタール	印度思想とタコール	タゴールの齎せる印度畫		カビールの詩	タゴルの日象と成れ	ヒマラヤの聖者	タゴルと世界の傾向	は詩	ゴール氏の講	ゴール翁の思想	一印度より日本への使信	絕對現實の世界と宗教
鈴		ń	水	松	[3]	鈴	諸	1-1	成	谷	非	姊	5	驴
水		楠	村	木	田	水	R-0		瀬	木	J.	崎	ij	村
芳		順次	泰	亦太	扩	消息	1	紘一	仁	2	打次	īF.	1	隈
松	綸		賢	郎	滅	ii]	家	郎	藏		郎	治	ル	畔

ACCEPTO 14-1A 1100L



人ふ使を磨歯ンオイラ

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 426 July 1916

CONTENTS

Sir Rabindranath Tagore.	
Sir R. Tagore delivering Lecture at the Imperial University.	
Frontispiece.	
Sir Rabindranath Tagore's "Message of India to Japan."	
The Message of India to JapanSir R. Tagore.	2
On the Thought of Tagore Prof. Dr. M. Anesaki.	22
On Tagore's Lecture. Prof Dr. Inouye.	27
What I think about Sir R. Tagore J. Takakusu.	29
Sir R. Tagore and the Tendency of the World Pres J. Naruse	33
On the Indian Pictures brought by Sir R. Tagore	
	35
Sir R. Tagore and Hindoo Philosophy T. Kimura.	40
A Sage's Life in Himalayas G. Yoshida.	44
Cabir's Poems R. Suzuki	52
Cabir's Poems	58
Kankudori (English)	
Sir R. Tagore's Impression by Various Writers.	90
	115
The Absolute Real World and Religion T. Nomura.	119
Utopia. K. Sato.	126
At the Risk of Life I. Okino.	135
Hokku	144
From Goulmont S. Chikushi.	146
A Bits o'Love (Galsworthey.) trans. by Y. Suzuki.	151
Kingdom of Woman.	
The state of the s	

Topics of the Day. New Books.

Published Monthly by the

TÕITSU KRISTKYÕ KÕDÕKWAI,

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

授田 由

其譯ふト史る大オ の文事ラ的べ哲イ 首年を旨にか人ケ た解得詩批らタン るの。与判ずゴベ 大早べ解蓋園し本丁 し説し、「紹書ルグ 來拔ゴ新し實よ のんり月たにりに 好じルニる彼てよ 著て研をもの欣ら な能究もの神求て りく書加で幽善創 タ中へ更な提造 ゴのたにるの覺 1 權れ研哲究解 °ル威は究學竟の をた此資と裡第 本るの料純に 邦を一と真法歩 に失書しの悦に 知は以て文光入 らずて戯塾耀り 。タ曲とのた め東ゴ暗県生る 得京1電級活我 た朝ル室のと思 た朝ルの生哲想る日の王活理界 の開體型と 本日を郵をを印

ての窺チ歷ざ聖

切賣々亦版五



金價正 書く如便系發度 六紙 を生實同統見大 百數 錢八廿圓壹 以硬に二的せ詩

錢八金稅郵

島 た教に所現と り授茲以代が 生 と亦に也の生 謂譯女。誰々 つ筆史譯か潑 郎 べのが者兒地 生先 し權代は量と 。威表夙のし 的的に世て 靠稻 な著女紀人 る作史の間 をのの民生 推全偉な活 100 賞譯大らの せとなざ改 抱 らなるら善 るる思んと `或想 向。 牛牛 我はと蓋上 序 が淚人之と 文早 思に格本發 學稻 想濡と書展 界れにがと 殺或敬現に 錢八金稅郵 育は服代集 界力し的幅犯▽未校見人る▽ 婦に多のす罪小來にの類權小 見の於教と利見を 人輝年偉る の學け育婦▽の-界く其烈の は其のな世 勞校る▽人未共 本原著る紀 働▽心無のだ親 譯文作大之 書をに名を 小教虐庭働れ選三 を移親著兒 見々殺▽▽ざ擇

の授▽學小るす

著名的界世

像其界と全

·努

のす敬をいて 至所仰震ふの

加、情居らと

へ兩途るば愛

獲植灸と童

てしすしの

にて者世紀

寶なの駭 をし熱し然力

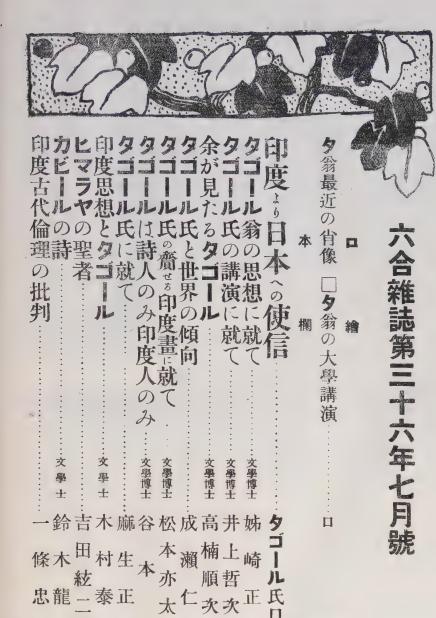
大 田神市京東 七町保神表 座口金貯替振 行發館同

美最

本上



			and to the state of	San Salayara		10.500					116	- Charles
□新刊紹介□編輯だより□結婚問題の評論□愛の力□晶子女史の□結婚問題の評論□愛の力□晶子女史の	□音樂者としての夕翁 □夕翁の講演□	はしい	1	賭	みどり分	あ	絕對現實の世界と宗教	O[1 (英詩)······	agol's Message of India to	ゴールの印象	阪に於けるタゴールの	明此評に
廢娼	新日本	:	文學士		:	文學士	,		h		: 女學士	: 陸大教授
論		鈴	筑一	·沖	伊	佐	野	17.	Cla	諸	栗	岡高
•	と舊日本□基	木	紫	野岩三	藤寥	藤	村隈	0 ka d	Claymac Conley	名	原	田橋哲
六六百	全督教徒の	松:一五一章	取:一四六百	三五五	々:一三四百	清:二二六百	晔:一九百	2一一八百	ey 一五百	家…九〇頁	基…八七頁	藏八〇頁



衞司耶賢藏富郎藏郎郎治演

三五頁

三七頁



翁 × る た い か に 頭 な 環 花

る一ふ其ト

一轉も處ル

の人靈が彼的をト 贈類感此が生世ル 物最の深人命界ス た高涙甚類の人ト るのなな的苦心イ を顧くる生間にが 信音し苦命の與著 じたて悶の憧へ作 てり得の良憬し中 疑。よ叫心とは此 は惱うび的せな書 と苦ばし °る此喘悶 何現意ざと早 人代味の其 何我 もにに聲解 必對於にな

讀すて敬り

質唯書と何る彼と

り善にと彼は遠と

永醒

た最實情かか

のる本度

送 總 一六判 價 布 製 六百 + 箱 頁



ひ想談ふす にに所る 譯参耽はも 者んる餘の はぜ翁りは 淳んのに譬 朴と真高 す面遠ば るる目で翁 翁もをめて のの捕る訪 一日人 信にる翁る 者多事のに できが民玄 あを出話關 る加來かか

> の紛す 翁今のる のや思が よ世想如 り界人き 端文格も 的明をの なの覗で

2366

面期のにス をには出る 知際譬てト る會へ來翁 にしばるを よ絶バ翁學 当大ルのぶ 此のコ姿の の偉ニはに 好人丨如翁 著トの何の をルタに論 大ス明も文 方トり嚴や のイの正小 七翁中で説 にいで其か 勸思茶言ら

學部

科帝

專國

攻大

翁

肖

像

布 定

な快十ルと彼ト本 る哉一が其のイ書 神を章ツの哲との 秘叫にン表學並原 觀ば分に象はび著 をしち勝と深立者 以む妙るをくては つる想も語字ら露 ての真のる宙れ國 せ直にあて實た近 り覺人もと在る代 。にの露隨 醉明於根國 て本思の かに界學 るのに觸に者

オれ イ本大 着ケ源柱で ン的なト 生りル 幽大以 玄膽下べ命

價 製 判 圓 箱 廿 百

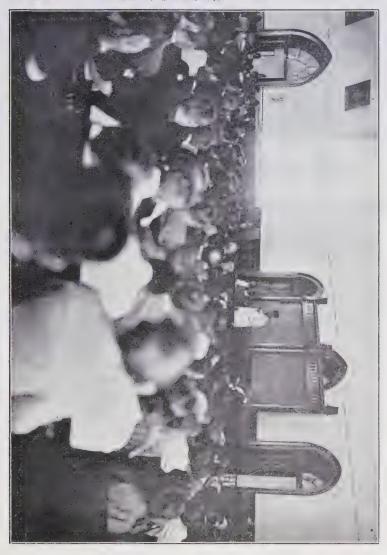
目丁五町河平區町麴市京東 番四一九〇二京東座口替振

誌 雜 合 六



號月七

東京市國大學入角聯堂に和ける夕霜の講演



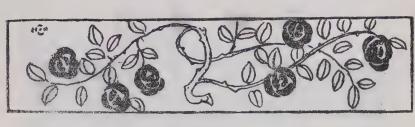
ずる 承認 併 J なく し乍ら誇揚 に堪 してこれを信ずるに 後 12 へずして、自己瞞着のあらゆる手段を盡して、それを變じて一種の誇 向くる は唯だ假面を被れる恥辱にして、深き自信なきことを示すものであ が放 に断 至つた。 じて進歩の途に進むることが出來ないと言はれて居る。吾等 印度に於ては知識 社 會の大部分は吾等に對する此 揚と爲さんとし の攻 樂 は此 0) 7 屈 の批難を 唇 を感

を懐 睡 を背後 又世界の大宗教は悉くその揺籃を有したることを忘れた。 鈾 西 0 あ なる 狀 事 洋 不 ると思惟した。 情 活 態 くや カジ 12 かくの 心 暗 に陷らしめたる児文を破つた。 殘 うに自己 意 黑 を生起し、人の L 若 0 て其 如くに 裡 < は 12 吾等は亞細亞に於て偉大なる王國 催 狭隘なる眼 熟 0 第 眠 至つて、 腫 世せし時、 を施 前進を促がす能力を萎縮せしむる所の 位 0 L 亞細亞 决 た 界 の勝點に 數 る 0) 時 徽候 世 42 紀 之れを吾等は或る地理的限界の 於ける吾等は此 と目 0 於て現代に 日 本 間 は することは 我 蹶 々は 起して長夜の 東 追及したのである。 方に於い が建設せられ、 の大勢を動 出 來 故 13 47 夢を破 る文明 に亜細 Vo 生得の かすてと全然 哲學 亞の 5 0 者 炬火を把持した。 裡に棲息する或る人種 ては數百年 あ 堂 土 らと幽 科學、 一地及 17 濶 不可能 び氣 歩し ずることは 藝術 0 候 間 7 不 0 な りと云 文學 活 然らばそは遅 中 我等を 17 動 出 カゴ 0 は 0 水な 常 上人信仰 祭え、 數 心 して昏 意上 態 で 紀

3

豆細亞の暗黒時代

寂 自 は死 身の カブ て夜の 過 0 如く思はれた。而して地球を常に爽快ならしめて其の不淨を清むる空氣の大海の如く、幾時 去 を食物として、即ち實際自分を食らて、少しも 暗黑は東洋 諸 邦 に降つた 。時 0 流 れは直ちに止まった様に思はれた。而 新しさ食物を取り入れ ¥2 やらに L T 亞 細 120 亞 此 それ



印度より日本への使信

ハビンドラナート・タコール氏口演

日本に對する感謝

る。 諸君の温情なるを感ずる時、又そは諸君の賓客として私を認めらるゝ叮重なる方 詩的想像はものをぢする鳥にして群衆の眼より離れて閑寂の地に其の巢を作 法なるを知る時に、私は諸君に感謝 である。併し乍ら貴國に對しては一外來人たる私に此の請求を提供せられたるは るものにして、死者を不滅ならしむる爲めに、莊嚴の美を盡す、 損失の裡に繫縛する意氣沮喪と云ふ束縛である。吾等は度々亞細亞は過去に生く に負ふところの感謝の情である。束縛の最惡なる形式は人を全く希望なく自信 公の會合に於て講演する招聘を受くる時に、 私の心中にて最も切に感ずる第一の事柄は吾等亞細亞を家郷とする者が、 私の生涯の大部分の間、 私は詩作に從事した。而して、 して、招聘を受くるより外に途はな 私は嫌 々ながら之に應ずるのであ 諸君 豊麗なる靈廟 0 知るが 如 諸君 る者 の如

きものであると言はるゝが、必ずしも當らざる言ではない。亞細亞はその顔をや

客であ \$ のを危らすることを怖るゝに至る。 試 る。 みる。 に存せずして、新しき經驗の冒險の充てる公道に存するのであ 活ける理想は成長し變化しつゝある人生との接觸を失つてはならない。 されどもこは實に自己の所有物の十分なる享樂より自分を隔離することである。 そは習慣の城壘の後にその所屬物を隱蔽して十分に安全を樂ま る。 そり 真の自 由 そは鄙 は安

3 そは 張 本 に る短日月の 全の限界内 つた。併しては新しき建築の遅々たる組立てよりる、 日 は て何 本 短 歷 其實力のこの が一夜にして舊習慣の障壁を破り、意氣揚々として現はれ 史 の驚異、歳月の偶然の産物にあらざることを證明し 等の實質 0 變態、 中に爲された。日本は成熟の自信ある實力と共に新生命の鮮麗 急激なる啓示は薄暗の深みより投げ出されて直ちに湮滅の海の中に一掃せらるべ 時 なら石鹼玉の 間 の見戲 膨 またはその曲線と色彩とに於て完全なれども、 脹 の如きものならずやとの懸念を抱きたるものもあつた。されど日 寧ろ更衣の如く思 た。 たる時、一 と無限の可能力とを示した。 はれたる程、 朝 その心核に於いて空虚 全世界は 信ず 驚さの ~ カン 眼 らざ を見

透せられ 限 を恐 しむる修養、 的 神 0 幻 格によりて構成せられたる巨大なる機械ならざることを理解するに至りたる修養 れずして にや日本は舊くして同時に新しい。人に嚴命してその內部の 影を吾等 たること、 損失と危險の面前に於ける泰然自若、代價を計算し、 吾等が 12 興 即ち宇宙は事變といふ惡鬼によりて製出せられ、もしくは遠き天容にゐます究竟 へたる 社會的 修養、 生物として人類に負 それによりて吾人は宇宙 ム無數の 社會的義 は一生命を以て活如たり、一 i 務 震 の甘受、 利得を望むてとなき自己儀 の中にその真の富と力とを求め -切 有 心靈を以て浸 限 の事 その東洋の 性、 物 1: 死

遲

々たる回復を好愛するやらになる。

چه の間人生を救うて汚濁に染まざらしめたる永遠の真理の使命を送り出 時 料を燃やし盡して自らを消耗 とを有する。 には常に受動的時代 人生の韻律 ど生命は運動を失び、 次 に於 いでそは無力となり、 ては生命 がこれ に繼續し、一切の消費は止み、一切の冒險は顧みられずして、休息及び 0 過去の貯藏を食うて、 しつゝある。 更新の 筋肉は緩みて、人事不省なる ために休 此の突飛なる行動は限りなく進むことが出來ずして、 止がなければならない。 新食物を取 かり入れ が為 V2 したる其偉大なる聲は默した。 生命はその活動に於て常に燃 めに 時 には 嘲弄せらる 睡 眠 E ゝを意 不 活 液 12 U) その 介せ 時

理 n れを實 め 例 、失念せられるであらう。軈てそは忘却の下より再び芽を出して思い掛けなき活力を示すであらう。 對する永久の貢獻である。彼等は新しき境遇に於て幾度となく試験せらるゝであらう。そは廢棄せら 想を建設した。此等は一定の形式を取れる人生問題に對する彼等の解決である。 によつて 心意の傾向 地 その に行 周 行 い。世界の古き文明は悉く徐々として其の觀念の形式、その社會的理想、國家的理想、宗教的 ムべき機會を與へられなければならない。而してそは一切の妨碍より安全に保 圍に城壁を築か 動するを好む。 は經濟的にして習慣を形取 そは觀念に對して永遠の形を與へて、新來者の侵入よりそを守ら んと試みる。或る度まではこは必要である。 9 その一歩々々に於て新しく考ふるの迷惑をはぶく 蓋し吾等の 此等は人類の教養 切 0 觀 た 所 念 の慣 なけ は之 カジ 爲

三 理想の化石

然れども斯くして作られたる理想は人心をして懶惰ならしむる。新しき冒險に於てその獲得したる

と骨骼との 間に永遠の軋轢を生ぜしめて他人の 皮膚を以て吾等の骸骨を装ふが如き類であ

科學は人性にあらず

H

n ばとて 學 は 人 君 性 12 はその深奥なる人間 あらざる は 至 真 0 事 性を變更しない。 質にして、 そは知識と訓練とに過ぎない。 諸君 は他より知識を借りることを得やう、 物質的宇宙の 法 則を知

諸君 利 7 る 0 1 0 0 である。 あ を逞うするは吾等の め 獲 不可能の早業を試みる。されどその 0 魔 益 7 12 3 得する科學を以て、吾等は歷史の産む所にして、吾等の産む所ならざる科學 は氣 ならず普 有 術 カゴ 苟 益にして效力あ 的 か 意義 分を借 と得ざるものとを區別することが出來ぬ。 る。 活ける有機物は自ら食物となるを慾せずして、 くる .質に對する原始的心意の信仰のごときものである。 され 遍 を有する彼 生 的 りる事 命 0 ども、 0 最初の不明瞭なる場合に際し、吾等は學ばんと試 歷史的 靈活なる本性の機能 あ は る る物を殘すを恐れる。 吾等の學校教育の模倣し易き時期に於て吾等は事 0 出 處 のみならず科學的なる形式がある。これ 歴史的の 來 にはその AJ 表現なる外部的形式を寫するのみである。勿論 本 果敢なき企てに於いて吾等は單に彼 質 であ F 0 され る。 必 変に從 ど吾等の貪慾 而してそは活 そは或る眞理に伴 CA 其食物をその身體 て探 否 吾等は心 0) H は は一國民 る有 大仕 選擇 みるのみならず、換言すれば、 を行 掛 ふ所 機 核 體 0) 0) 事物本末 いが他國 專 と共に皮殻 の外部 に變ずるものである。而し ひて自 12 風習と習 当す 用 0) を喜 敎 を區 る唯 民より借 的 世に 帥 らぶと共 形 癖 別し、 自 を嚥 大 張 は 卽 身を得 を 0 0) 單 ち 試 下 偶 12 りて大 真 に個 同 せ 然的 動 彼 むるもの 0 化 力> 12 なる るた 事情 L 用で 作用 1 得 的

中 古代修養 12 根 蒂 の遺産 8 張 り固 を日本は有する。 め 2 > 弘 洒然とし 一言すれば近代的 て咲き句ム蓮の花の 日本が遡馬たる太古の 如きも 0 6 あ る 東洋 より出 てたるは深

少泥

四日本の近代化

を甘 る精神を示した。 惰心の無益 m 受した て古代東洋の子たる日 の蓄積なる習慣 かくして日本は活時代と接觸して驚くべき熱心と慧敏とを以て近代文明の諸の 0 本は、 檻禁を破り、 恐る、色なく近代の一切の恩査を自分のために要請 其節儉と其錠と鍵とに於いて安全を追求して其大膽 した。 日本 不敵な 責任 は

吾等 生の危險 ばならぬ てれ は 自 一餘の を冒 てとを見た。 い死せる外皮を取り去れ 亚 かすことのみ 細 亞 21 元氣を 吾等は死せる者の中に身を隱くすは が生活であることを理解した。 附與 したる所以 ばよい、 吾等 であ は時 る。 潮 生命とな 0 若 てれ Þ L 勢力とは 死せるに異ならず、 S 流 0 中 既に吾等のうちに存 に赤 裸々 とな たい十分 らて飛 す 12 CK る 込まね カジ 切人 放 12

6

芽 滅 を有 を 日 免かれんとせば 本は吾等に吾等の棲息する時代の暗號を學ばねばならぬことを發へた、而してもし吾等にし すれ ば、 そは 新 時といふ斥候 時代 の土壌に植ゑ付けさへすれば足ることを全亞 に對して答を與へなければならぬ。日本は古き種子 細 亚 に言 び送 つた。 は中に生 命 て絶 の幼

とかが ある。 私 出 は 蓋しそは吾等の眞性を妨げて、 來 日 本 は 吾等 西 洋 は r 模倣 **人しく力を装** して今日の 3 ことが 狀 その行手に立ちふさが 態 15 至りた 出 來 A5 ると信ずることが 否、 それ るが故である。 0 みな らず、 出 來 AJ C 單 そは 吾等 15 る 一舉手 模倣 は 生 命 は を模倣 一投足に 弱 點 0) 源 古 皮膚 るこ 泉 6

悪なる複 民 0 組 體をとれる利己心と人類の高尚なる理想との衝突。 なる事相と單純、 美及び十分なる餘暇を得んと絶叫する人間 商業及び國家 V) 自然的 と離 すべからざる 本能 との 衝突 一切 0 醜

凡て是等は未だ嘗て夢想だにもせられざりし方法 にて調和せられなければならな

破片に壅塞せら れたる本流

車のた なる人生の 目 その連鎖は見えざるが故に、 を愛することを揚言するに拘らず、 史に於て人類を苦めたる遊牧人民の突然の襲撃より遙 0 る る 認識を適用して、そが走るま、にその騒々しい不調音を響き渡らすその 一結果として、莫大なる下水道に蓄積したる皮肉諷刺 吾等は文 犠牲を縮小しなければならぬ。 故 撃した。 吾等はそが 36 17 諸 めに新路を開拓しなければならぬ なりと夢想することが出來ぬ。諸君は諸君の東洋魂、精神的元氣、 君 明 理想に對する信仰を失ひたるを目撃した。 吾等はその は氣輕なる心を以て一切の傾向と方法と構造とを有する近代文明を受入れて之が已むをえ の大なる潮流 人道的愛を壯言大語するに拘らず、 七 巨大にして貪婪なる妖術を蒙りて人間 がその また自由の虚名と外観とを有するが故 無數の 幾代の間諸君は感じ、 そは古代の社會に行はれたるもの 水 0 路 諸君は之がその によつて運ばれたる碎片によりて壅塞せらるゝを目 そは果して八類に對する最大の脅迫にして、古代 の汚泥と共に是等の理想を放棄するを目撃した。 吾等は人間 かに恐るべきてとを實睹した。 考へ、 運動 は彼 働いた。 邻 12 が大自然の純 をして偉大ならしめ に破 要求する人の よりも るべ 諸君固有の方法にて享樂し、 大なる 單純 カ> 醜 化的 らざる 悪なる 生 扱 の愛慕、 命 勢力より分離し ひにくき た 奴 奴隷 吾等 と自 る 隷 はそが 社 制 V) 由 切の 形式 の鷹 進 會 度 步 自由由 撃し 大な 義務 雄邁 0 列 12 7

てたゞ 得 るも かくし 0 でな 7 のみ其 S 一は强壯となるを得るものにして、單なる蓄積や人的本性を棄つることによりて

日本は西洋より食物を輸入す

11

希望す 學的 負 L 心鰒を有するが故に一切の要求物を支配せざるをえない。日本は之を爲し得ること、 である 0 う > 心に過ぎない 外國より H 附 本 は 112 あることはそが表示する雄健 屬物 らである。 西洋より食物を輸入したれども、 獲得 何となれば の中に全然我を失い且つ之に沒入して單なる模倣 1 たる物を徒らに誇りてその 其 はその頭腦よりも新しき帽子に一層多くの貯蔵を試 カ> ゝる自負心それ自體 なる兆候によりて優に その活力なる本性は然らず。日本は西洋より學び得 が既に一種の 固 有の 心靈 に對する信仰を失つてはならぬ 屈 證明することを得る。 唇にして遂には貧窮と薄弱 機械となることは出 みる虚飾者流 水ね。 m して 化 П 私 ことを熱心 0) とに導くも なす所 は 作 本 日 は 用 たる科 本 カゴ 固 の自 一有の 進 カゴ 2 行 0 12

8

題が 法 充實せられ をなおんとする を作る機會を有せない。 は 私 存するからである。 最 は 未だ日本と親しく接する機會と日本の真相及びその强點と危險の存する所につい 3 與 味 な いで あ 力> る あ を待望する。 事 柄 ららら。 であっ 私自からの如き東洋に属する者にとりては日本 個人と國家、 何となれば る。 全世界 若しそ 勞働と資本、 西洋 記單 は てい 文明 12 西 偉大なる 洋 力了 世 (1) 男と女との衝突、 界 複製 日 6) 東 面 12 JŁ. 國 らば 民 に提出 が近 代より 日 して全く答 物質的利益と心靈的生命 本 0) カゴ 現在 得 ひき起 た の問 る機會と責任 へられ ī たる大 題とその ざる 7 な 私 を以 解 大なる 3 期 决 0 諸國 意見 望は 7 0) 問 何 方

とは を採 種的 香 至 0) 心靈 屬する 言や 心 E 液 高 た めたることを想起 らし カジ 傲慢や生 關 るこの 0) Ó と世界となりて啓示せらる、心靈との 時 心 諸 新 目 カゴ めく偽善の 與 時 は利己、 的 A 靈 種 體 代 奇 0 は L た 理 且つ受けられた。 金 に復活するに際して貴國 は 0) 蹟を演 ガン め 人 この 的もしくは 切 相互の 12 類 も世界未 聲 派手やかなる自己滿 じた することが出來るではないか。私は舊を新に、 協 0 B 0) 最 力したる志士仁人の時代に於て、 光をうけ 機 囊中の探鑿及び掠奪の關係でなかつた。 高 械 るは人の 曾有 0 精 や巨 神的 統 言語 の最 2 大なる利己の 一と愛の 清 卓 中に存する 新 逸 と習慣との相違は心と心との も驚愕すべき革命の 民を助けて古き破損した な 0) 足のうちにあらずして、天は地により近く 最 る若 輕 深 侮 信仰を有したる英雄 0) 葉 神 的 この下賤 縁とを承認した。 と花 意 靈 識 0) とを 働きなること、考 は吾等の なる現代に 諸 出 衝撃より 君 した。而して異れる邦士と、言 の天性 關係を汚さな る組 的 吾等はまた平和 何等の 觀念と理想とが交換せられ、 接近に於て吾々を 弱を强に、 丈夫の曙 あらずして、 織 は自らの に残存して新しき若 へざるをえな 痛手を負はずして カン 光 つた。 輕 ために貯 0 また 侮を + に生れ と善意及 來 吾等 妨 光 りて人 經 S げ 築 世 蓄した 語 な 72 īfi 0) 術 あ と歴 瘞 現 K 力> 0 3 2 は i この人生 補 であ る不滅 0 真 7 彼 勝 史 い體 自 諸 n 赤 利 とに な 君 12 愛 虚 6 0 0

九印度の問題

12 りに 吾等印 國 か 廣 多邦に分派したる觀ある歐洲の真状の正反對である。 大に、 度人は吾等固 その 人種 有 あまりに多様であ 0 間 題 を目前 に控 る。 へてゐる。 其 個 そは世 0 地 理 前 界の 受 かくて歐洲はその文化 器 縮 に詰 圖 0 問題 め込まれ To あ る。 た る 諸 印 と發達 邦 度 10 6 とに於て あ 0 る。 面

洋 亞細 生問 きて 12 用 てそ、貴國民の心靈が所有して人類の安寧に對するその貢獻として誇りがに世界に提供 在の位地に適用して、其處より單なる反復にあらずして新しい創造が生ずるであらう。 却 あ 拜し 30 つて調 カジ する自 亞 題を解 諸 由 た。 諸 りて 諸 諸 君 君 和 君 由 邦 0) 中、 筋 而してそは舊衣のでとく容易に脱ぎ棄つることが出 以て機 を 決した。諸君は人生哲學を有して、 0) カジ し靈活なる成長と真理と美とを念とし、 聲に 有する。 採用せんとする 肉 この 12 械 於 日 諸 0 7 諸君 中 亚 本に於てのみ諸君の天才と必要とに應じて 君 0 に生命を注入し、冷淡なる便宜主義に人心を代用せしめ、權力と成 細 腦 亚 は 一切の 幸にして外部より妨碍せられ 組織に存する。 は人類會議に提出 物に變化を來たすに相違ない。嘗て諸君は自ら滿足するやうに 故にそは諸君の知らざるうちに、 諸君固 したる歐羅巴の 近代文明の形相を一變すべき經驗が試みらるゝで 有の處生 13 So 問題 術を進化せしめた。凡て 來ね。そは諸君の血の中に、諸君 故 西洋より に諸 に答へるであらう。 君 の責任 諸 君 時には カジ 蒐 は 益 集 諸 L 々大を致す するでわらう。 貴國 是を諸 た 力> 君 る Þ 0 る 慾望に反 材 に於て東 功と寧ろ 君 料 の骨髓 は を使 0) 現 A で

10

八 亞細亞諸國民の結縁

あ

親 0 17 密 は 間 私 心と心 12 な は 走つた。吾等は互に恐怖を懐 る 緬 紐 甸 より との 12 よつて H 活ける交通 本に至る迄全亞 、印度と結合せられた時 卽 5 細 かなかつた。 種 亞 の 一諸國 神系組 民 代を諸 0 間 織 吾等は相互に壓迫するために武装を試みなかつた。吾 に存 が進化して人道の 君が し得べき唯 想起せられ 0 んことを願 最深の要求に就 自 然的 0 は 結 ざるをえな 繩 なる、 いての 友情 使 い。その 命 7 カゴ 香人 時

會的 精微にして手指 * らずし は自 風 9 なけ 中 殖力 カ> Ŀ 於て肉食的にして、又食人的である、 人 T 種 同 てその 類 17 現はれ、 自 ればならぬ。 胞 由を與 間 か 共 壓迫することが 基 て觀 由を尊敬するためにその最善の努力を盡した。その結果 印 題 る 通 度 而 0 最 雑草の 0 へて、 真 人 念 財 して諸 其は常に外國 高 信條を含有する。 而して之に定義を下すは殆んど不可能事である。そはその と認 正なる解釋 12 寶 0 あ にて握む能はずと雖 可 とな でとく歐洲 るを L 君 識 能 地 而して是等の 出來ね。 は何 す かも指導した。 性を充實せしむるを促進する意識、 上 つてその るは 知 0 らね あら に鍵鑰を與ふるのである。 時 人を苦境 この カ> の土壌より發生して今や全世界に蔓延し ばならぬ。 人は は 再 10 されどそは一 觀念を同じらするが為である。私にとりては人類歷史 高價なる値を拂はずしてこの る人 び吾 相 如 違を に陷るれ、 若し吾等は 36 等の 何なる小 種 其は他國民の資源に衣食して、 通 0) 之を疑び その 許 歷 E 12 史 2 種の精神を以て全印 相 異 12 歸 もしくは其を絶滅せんことを留 この 無數 違 種 と雖 り來るを信じて吾等の 且 は雲泥も雷ならざれども、 0 つ無視するには餘 世には諸多の人種存せねばならず、 精 4 理 0 神 根 想 帶 的 叉極 の宿る處を求 を有する 統 一めて微 天性を諸 は常に内 は印度教と稱する滅 度に漏 R つゝあ りに真實靈活なるも めん 大歷 其將來を全く併吞せんとする。 部的 人種以外の 72 君 人類 漫せしめて 庇 る點 0) カン 護 史 便 る に働かなけれ 0) 心靈的 ~ 42 0) 不 政治 卽 意 そは F ち人類 於 便と ンガル人が す 21 他 る。 7 的 ねる、 法界 變 儀式と風習とに 文 0) 同 3 V 化 企史存 の一大問 明 人種 3 其 な ばな 0 狹 あ 又 相 は は L る 9 意 存 7 違 小 排 在 F 組 相 5 な せ 77> 識 0 他 自 もそは ラス 織 尊 る限 題 意 を根 3. 反 傾 主 由 する となる なる 向 義 r るべ 本 0)

州、 利加及び豪洲に於て歐洲人は先住 排斥してこの な る 個 加奈 言することが必要である。印度は歴史の發端より之れを事實として甘受し來つた 力を要するの から なとし 0 力と共に 寛容の精神 太及 にその て容易 根 び濠洲に於て彼等自 多勢の 絕精 諸 多の である。 にその重荷を運搬 は 姉 を 歴史を通 散漫とその 力との利 他 さばれこの諸多は印度の創造せしものにあらざることを印 0 方法 E 益を有した。印 て行 民 12 身 統 より も嘗ては 族を根絶してこの問題を簡單なるものとした。 すれども、 0) は 弱點 37 C たの あ 5 現住 との故に久しく苦しんだ。 度は之に反して自然に多邦にして、し は であ 諸多は多角形 L 國 る。 T 0 外國 70 る。 人たりしにも拘らず、 23 0 32 物のでとく之を推 ど印度は最初 個 0 眞 より人種 外國 進 0 現時 す 77> 統 人を不 のであ 度の るに 14 は 偶 0) に於てさへ加 相 信 は 圓 然 異 親 的 用 あ 球 2 5 切 0) 0) 42 12 m 12 米 國 限

印度 r 於け る政治 的 厄

印 0) これを實 度は 政治的 多人種 試 みた を壓 に印 個 験するに違ひ 同 0 たの であ 度 社會的專權に 迫したことが 一なる鐵鎖によりて夥しき諸人種を引きずつてゐる、 は災難を招 であ る。 + ない。 この る。 なかつた。 いだ。 その 統 忠誠を要請すると共にその疆域内に抱容せられたる民衆の個々の されど幸にして印度に於ては古代に 結果 0 しか 範圍 は出來うる丈け緩くして、 即 してれは印 に於てあらゆ 度は爾 來 度のみならず苟くも自然的結縁によらずして、たい 今日に至るまで一 る異 人 種 カゴ 結 合し ありて短日月を除 力> 取 種の 3 り扱 事 て、 情 社 會的 ひにくい Fi 0) 許 時 す 統 12 限 そ を進 0 他の大帝 いては 9 密 相 化 接 異 せし を維 6 人 國 部分の社 南 3 むる實 種 する カジ 他

そは て、 貪 7 しやそは く婪の 思 全體 寵 微 破 0) 小 壊し 時 な 近 として 代 る 雨 12 種 0 天よりその 機械 る機械 は生 子 Vo 0 命 力の 如 く生 は と逆行したるが故である、 上 標 神 命 進 0 12 に懐 注 を有すれ 惠雨すらも之を再 げば つて判 ば、 花を開き、 斷 芽を出 せらるれば、 興する力がない。何となれば彼等は生命 質を結 し、 成 彼等は永遠の生命に反抗して自ら粉碎し 薄 長 ぶのであ し、 弱微 p 小 る。 力ジ 0) てその 觀を呈するかも知れぬが、 然れども 慈仁なる枝 權 勢の 摩天閣 を擴げ、 より成 0) たる叛 廢 期 らずし 2 塩と かも 至 6

士 東洋 0) 理 想 は解 的 なりや

0

遺物

12

過

ぎな

根 彈 自 る 1 奏 主 衝 帮 部門 ば を見出して、 は 觀 動 から 空漠 指端 を n 的 東洋 缺 確 實を以 くてと、 0 なりと 運動 に於て その て満 非 に止りて音樂ならざる如く、 吾等 叉東 難することを證明する。 上 足すると攻撃せらる。 洋 に吾等 0 懷 0 古 < CK 理 0 た 想 制度を建設した は静 る文明 的 0 12 支撑 して、 西 ては吾等の 全く 洋 な るを考ふることが の觀察者には吾等の文明 形而上 る哲 自 らを 學 知 系 推 識 的であると見ゆ 統 進 が空漠た L は て知 切の 出 る時、吾等の 識 來 客觀 と勢力の WQ. る。 は 的 聾者 彼 證 明 新 は L 知 を 吾等は實在 にとりて 2 識 輕 視 通 0) 景を 目 F. 的 物それ 開 7 頑 0 深き 1 拓 0

等 的 0 真 4 不 0 文明 幸に 理 由 る。 0 は して實在 或 內的 7 物 n 感覺 ば不 0) 人の 信 切の 心 0 切有限 に庇 人に 證明は實 護 對 0 L 事 扶 て吾等の 現に存 物の 養 とを 中に無限 文明 する。 與 3 る は の實在 諸 真 抽 理 君 象 的 0) 面 を想像する感覺を開展せしめた。 思 * 索 削 成 0) (1) 就 朦 光 景 i 雕 たるを證明 0 72 實 る 組 在 織 は 諸 12 君 するは困 あ らずし は 見 るとい 難 7 その生命 6 そは あ ふ事 る。吾 積 質 極

5 40 常 3 に他 偉 大の 國 民の 兆候を抑壓して弱さ人種を威服 頭角を擡げんとするを恐れて、之を危険呼はりをなし、又それ自身の疆域以外の して永遠に弱者の位置に甘ぜしめんと試み

十一政治的文明の修害

はこの さはれ 3 臘 る處 編み、 この 叉互 民 ことが ざるを豫言することが ろの 政 或 どその根蔕を社會及び人の精神的理想に置く所の文明は依然として支那及び印度に現在する。 燈 弱點 出來 世には 治 その 民を吞噛せんとする大規模の計畫、 政 明 政 個 巨大なる貪慾 戰爭、 治 の 的 治的文明が勢力を振 は H 醜恶 最 的 * AJ 文 文明、 個 的 明 初 釀 掠奪、 にその し、 倫理 人及 に其 は科 なる爪牙を磨 び圏體 愛 高 E 0 全 學 光を放 國 齡 9 出來る。 本尊を神殿に奉安し、金銭を惜まずその祭式を莊嚴にして之を愛國心 力を集中するが故に有勢である。 的 王國の興亡、之に續起せる悲慘を有したれども恐るべく絶望的飽 理想を公然に涸渇せしむるは、 にして人道的 心 0 真 0 に適用せらる、道徳律 V ちた ひ、その この 正 諸君 なる兆 て臓腑を裂き破らんとする る郷土 信 條 は國民の名に於てこの法律を破りて個人としてその利益を享くる 候 は久しく試みら でない。 飢えた 上に消滅 な る人性 地球の大部分をばなます切に刻まんとする巨 る口を開いて地上の大陸を悉く嚥下せざりし以 そは心靈を犧牲に供して專ら金儲けする百 中 儼として存するが故に、吾等はこれ 羅馬 0) n 神聖なるものを皮肉 そはその信頼に反き、 0 72 徐々として社會の各員に反動し、 るに 權 カ> ゝる戦 勢はその あらざるを記憶 で慄すべ 大帝國 き嫉妬 にも信ぜざらしむる。 0) 恬然として虚 廢墟 するを要する。 心を有たな 0) は永續 To 12 大 食 萬長 漸次見えざ 0 光 すべから 言 カン 殺した。 古代希 景、 0 前 0) 諸君 網を 域 ょ

立 類 流 と單 る。 夫 カジ 花より實と成長する。そは成熟のために無限の空間と天の光明とを要し、 月シ ちて收 史 かざ 宜 ・純なる信仰の敬虞なる柔和とは待つ。 よしや事務室や賣買や興奮の渴望は待つ能はざるも、 たる心 遲 17 一經るも殖残存する。その胸に日 を追 再 々として常に退歩しつゝありと考へざるをえない。されど速力は止み、 穫を は喧噪して食を求め、遂に歐羅巴は日光を浴びて刈入れしつゝある卑しき農夫のもとに來 再 求する除 刈り入れ 14 出 現するであ り息絶え る農夫に向つて車窓より昂然として一瞥を投ずる。 らららい て停止す 歐羅巴は忙はしげにその 光及 るを待 W. かくして東洋はその時の至る迄待たざるをえな つて 星の解 ねる。 默い幾時 東洋 愛と美と苦痛の智慧と根氣よき動行 業務を果たさんとして疾 代を厳して、 は不滅 了 る を知 その生ずる質は凌 而も自らの 理想を有す n 業務はその意味を失び、 ば、 4 走し 70 速力に酔うて農 命 * 康 呼 洋 吸 辱輕侮 0 して人 成 野 西 12

十四 歐羅巴の偉大

類 潜 と心情との資源を應用して病者を醫し、今日に至る迄吾等は 有して、宇宙の最高最深を包括し、無限大と無限 産せしめてゐる。 歐 の苦難を軽減した。 0 最 上の 一は偉 崇敬を致さんとするを禁ずることが出 と真との無盡藏の 大であ カ> る →る真正なる偉大は精神的强堅にその原動力を有せざるをえな 歐羅巴は自然力を勸 気を CA 3 小瀑布を注 なく歐羅巴は偉 說 いだ。歐難巴は、 し强制 大で 來 小より等しく知識 ね。歐羅巴は文學と美 ある。吾等は全心 して人類奉仕 その修 希望なき忍從 のために地をして能 ひを知らざる金剛力 の崇敬を博し、その偉大 定棒げて彼女を愛 術 の精神を以て甘 於て萬 S 太限 國萬代 何 を抜 となればた 受したる人 6 吾等 なる智力 (1) ふ心意を 收 穫と

の或物に到達せなければならぬ その ありてはそは己れに見えざるが故に空虚なりと想像しては 飢と渇とあるがれとを有する生命 ――而して或人にありてはその目的は富と力とにあらば、 ――は其處に有る。生命自體が向上である。 13 5 其は常 彼 は他 12 無藏

る。 は 其 動である。 るやい れども彼曰く、『君に毫も進步がない、君は進歩をせぬ』と。 はその葉に響き渡り、 君は その されど成 目的 に依 長したる樹木 その樹を りて進步を判 液 は の中に逼ひ この 斷しなければならぬ。 種 0 運 つゝ光明に對する向上心を有して活く。 動 を有せず、 汽車 その 私は 彼 進步は生命の は 終端 に答ふ 驛 る、「如 17 向つて 內部 何 的 進 にして君 進 步 は之

十三 吾等は實在にあるがる

16

物 無邊 塵 意義を與へて死を超越する實在、人性のあらゆる害惡 る放棄を齎らす實在 質 一等は幾世紀の間生活し來て依然として生活 事實 增 蒙りて家 加 12 0 あらずして、 真 理 17 及 歸 Ci る時、戰士が傷け に對する向上心を有する。 相 反せる傾 精 柿 的 元實に 向 0 る時、財 中 17 存する。 調 產 和 內部 を熱求する時 は浪費せられ する、 生命 而して吾等はその實現に の上に立ちて、 の産物 そは要せらる、であらう。 自尊心 は生ける産 その カゴ 賤し 平 物 6 和 められたる時、 あ 際限なき實在 と純 る。青 潔と自 年 カジ その 疲勞 人の心が 0) 價値は 愉 困 死に 快な

を配らなければならぬ。されど世に吾等の人生と隱れ坊を遊ばざる理想がある。 走せなければならね。 世 12 は つてと能はざる物がある。若し市場に於て最上の位地を奪はんと欲すれば、 諸君は常に飛び去らんとする機會を追 ふ時には諸君 は氣を張り詰めて八方に心 そは種子より花に、 諸君 は 突進疾

17 存する無限と永遠に反する目的のためにその偉大なる勢力を使用する時には、その其有害なる方面 この上もなく悪である。

十五 日本の果すべき亞細亞の使命

問題の解決 種子の外殼及び地の硬皮の中に閉ぢ籠つてはならぬ。 文明の精神を調和せしめねばならね。又吾等は愚人の如く傲然として吾等の理想を保護し養育したる 今や吾等は世界の問題を吾等の問題となさねばならね。吾等は地球上のあらゆる國民の歴史と吾等の 超然たる安全の境 種々なる、 なる光明に浴 東部亞細亞は、 られたるものであ されど種子が地を破り出でたる時に、幼樹は之を憾まざるがでとく、吾等は之を憾んではならぬ 以は歴代 深奥なる關係に立脚する。 びつゝある世 政治的にあらずして社會的なる食肉的機械的 に行はれた。されど今や吾等は外界に追及せられ、吾等の隱遁の地は永遠に失はれ の興亡や外國 る。 一界にその供物を捧ぐるをえんがために外殼と硬皮とは破らるゝ積 の侵略 者が 固 有の文明を開 殆んど觸るゝ能はざる處に於て、隱遁の中に思考せられ、 何となれば生命がその力と美とに於 展して、 獨特の途を辿り來つた。 に有力ならずして、 靈的 諸民族の人生 にして人道の 7 りにて拵 天空海濶

十六日本に對する警路

事業を生じて生命の猶存するを證明せざるべからざること、亞細亞は恐怖もしくは韶諛に惑溺して守 希望を注入した。この希望は一切の創造事業に必要なる隱れたる火を供給した。今や亞細亞は活 障壁を破りて世界に對する事業に於て、日本は東洋の第一人者である。日本は全亞細亞の心に ける

だ人 復仇 傷輕 隱 し 0 0) 7 時 る 12 6 0 17 を感染し ねる。 て失敗を甘受するのである。 巴 再生すべ 办 照燈 たる心の中に人道の愛、正義の愛、 國 する無私の愛、 故 る損害に と劫掠を恣にせんする忿怒に反してその聲を大にする人々、彼等の民族によりて過去に於て爲さ 蔑を物ともせず、 同 12 武者 幾世 を投じ、 神 その 頓着せず人間 7 0 さてとを證明するために 無頓 がゐる。是等の人々は永遠の生命の水源は歐羅巴に於て未だ涸渇せずして、其 々として溢る、卑怯なる不正の潮流を空しく抑止せんと試みる人々を見た。其 みあらゆる制限を無視してその終局の成功を信じ、眼前にありて明白なる事物以 紀間 一對して常に賠償を爲さんとして、損害を豪れる者の側に於ける抵抗が微弱に 深奥 着 、その生涯中に成就する能はざる目的のために喜んで殉教の苦を甞め、敗北を承認 天に達するほどの の基督教の なる天性を無視 27 地理 も人 軍 0) 權 一的境界と國家的私慾とを承認せざる理想に對する信仰を失はざる近 國 間 主 利 0 修養はその生命の心核 0 善美 義の氣狂 一民族の偉大の根本はその天性の副意識的 味方となれ l 不正不義を重ねてゐる。 0 感覺を唇しめて、神の報 之を嘲笑する處にのみ、 ねるのである。 はし 高向なる理想に對する自己犧牲 る高 い噪宴に反して、又往 潔なる心を有する人々、 に浸徹してゐる。 た い餘りに意識してその權力を扶 歐羅巴は全人類にその顔を向く 歐羅巴は全世界に亙りてその 復を絶叫しつゝ、又生 々にして全民族を占有する野蠻 歐 人道の の精 羅巴に於て吾等は人種や信僚 の土 神 一壌に存っ の純 72 めに 潔 理 なる する。 戰 植するに忙 的 CA 道 處よりそが時 流 て同 L 一德的 無 處 る時 歐羅 n 代歐 12 分別 なる は 無害な 胞 カゴ の離 12 なる の中 走 羅巴 はそ

0

仁慈に於てこの上もなく善である。而して歐羅巴はその顏が自己の利害にのみ向けられ、

人間

の中

悪

由

t リーよ

まじりなき歌喜よ。 して、星悉く燦とし T 海 3 D たりし 神 々は大空に脅して 歌心給 へりいあり、完全

0) 聊 R の立 率の 遊 黄金の絲は切れ、そ 金 の、凡ての天の糸は切れ、

星は最上

10 の日 高物を支配す。 での深奥なる静野の日以來、其の探索 来、其の探索は山す で中にて星々は微笑し、私かに騒ぐ――。この探索は無益なり、不壊の完めまず、神々皆曰く、「世界はその星といふ一つの歌喜を失へり」と。は切れ、その歌は止み、彼等はあわてふためきて叫びね――「然り、そのけびね : 光明の連鎖の何處にか破損あり、星の一つは消え失せね。」 探索は無益なり、不壊の完

萬

は 神誰 共に在 * 0) 拜 在し、その御衣は塵を以て被はる。汝の聖衣を脱ぎて、正に彼の如き者が堅き地を耕す處と土工が石を割る處に在し給ふ。神は日光と時でせんとするか。汝の眼を開きて、汝の神の汝の前に在し給はざるを以味と唱歌と珠敷を手まぐることをやめよ。密閉せる寺院のこの淋し にかこの淋しき暗き 明内医多さ上の中にあ で語る関 6 7 降被

水れ。 脫 ししへに我等すべい きか 我等の主喜んで 自 6 創 造 0) 東 縛 龙 1 ひ給 3 彼

はとこ 順 想 心より出 作と汝 6 で來れ、而して汝の花と來すべてと結ぼはれ給ふ。解脫は何處に見出さるべる 額 0) 汗 の花と香とを変でよ 彼に遇び、その 傍にの 立て。 H. つ苦 る > 4 [P] の害か

を備 き曙にも、闇に包まる、夕にも、天の靈感を受けしめねばならぬ。 覧くは日本の偉大なる理想をして はより完全なる人道の生氣を近代光明の心に注入ゼねばならぬ。 を捧げ、日本が果たすべき亞細亞の使命を有するを想起することを異面目に願はざるをえない。 勢的に惰眠を貪り、もしくは力なげに西洋を模倣してはならぬ。この點に於て吾等は日出の 大和島根 に窒息せしめられずして、之を光明と自由とに向ひて、純淨なる空氣と廣濶なる場所に導き、 らるゝをえしめよ。(完 へて群峰より卓立し、無限の天空に聳ゆる白雪を冠とする富士の如く、萬邦の民によりて仰望せ の心より聳え、 その莊嚴なる曲線美は處女のごとく秀麗に、しかも毅然として晴朗なる威容 日本はそをして有毒なる下生のため 國 清らけ H

られたる時、記者は之を本誌讀者に報道せんがために要點を筆錄した。然るに翌十二日のジャパン・アドヴァタイデー紙が殆んと 匆忙の際諜器なきを期せない。傳聞する所によれば違からず某氏の キーソッイ ブト・トランスレーションが現 はるしこうであるい 者の便利を計つた。又東京大阪朝日新聞は十二日より五日間に互りて澤文を公にした。記者は之な一讀したるが故に敬語の意をそ その全部を掲載したるが故に、記者は之に據りてこの譯を試みた。同紙は十三四の見出しを付けたが、記者は十六項目に別ちて讀 <タゴール氏が六月十一日午後四時東京帝國大學八角大講堂に於て「The Message From India to Japan」と題する公開講演を試み の儘採用した。たとへば ら讀者は其を参考にせられなば益あるべしと思ふ。譯者記すし A shy brid を物をぢする鳥としたるが類である。記者は相成るべく原文に忠實たらんことを期したが

物見高い學生が潮のでとく寄せて來て、圖書館の樓上から學生の頭が幾百となくのぞき出ましたよ。 早大關係者の懇請にほだされて無い時を繰りあつて、馬車を恩賜館前の中庭に引き入れたあ あ カン 答。かゝる大集會へは夕翁の方で出席を斷りませう。今朝夕翁が早稻田邸に大隈伯を訪問して歸途、 の時學生はあはや萬歲でも唱へさらに見えましたな。タ翁が政治家であつたなら必ず馬車の中で短 い演説をしたことでしたらう。またかゝる場合には私からだつて勸めたかも知れませんネ。しかし の時にネ

問。タ翁は何日迄東京にゐるでせらか。

の内氣の人ですから强ゆるわけにも参りませんでした。

あ

タ翁も随行の人々も之を心配してゐるかもしれません。 らです。 十三日の歡迎會に出席して、十四日には茨城縣の助川の先の方とかにある岡倉家の別莊にゆくさ ゆつくり詩作にふけるでせう。時に日本でさへこの人氣ですから米國へ行つたら大變でせう。

23

せら タ翁の風采はあまりに立派過ぎるからですな。もつと不完全な不男だとあのやらに見られないで あの房々した長髪長髯、光る大きな眼、高く筋の通つた鼻、いふべからざる氣品とあの鈴のや

つな聲ですからネ

合。いかにも、幸か不幸か、夕翁は實に立派の方ですからえ。

通じて無限を實現せしむるといふやらに見えますが、御説はいかいですか。 。タ翁の思想はヴエダンタ哲學から出てるのですが、必ずしも超絶的神觀にのみ立脚せず、有限を

答。 シャンカラの神觀は超絕的ですが、ラーマーヌデャなどの哲學には過程や發達を認めてゐるのが



タゴール翁の思想につきて

崎 正 治

姊

所、帝國大學山上御殿食堂。時、六月七日夜。

記者間。タゴール翁の印象を何ひたいものですが。

別に深い印象もないですからる。 るりませんか。そして年は取りたくないもので、

私位の年格好になると驚異の念が衰へて來るやうで、 姊崎博士舎。六合雑誌には義務があるんだが、昨今は大多忙で寸暇がありません、御発を蒙るわけにま 22

たい一回の公開講演を明日午後やることになつてゐます。藝人的藝術家は拍手や喝采を喜びますが、 人に握手されるのもいやでせら。 タ翁は天成の詩人ですから、 問。 そうですな。タゴール翁は何處までも詩人ですから内氣な所があります。東京では大にも小にも しかし何か御氣のつかれた點がありませう。十分間ほど時をいたいきたいものです。 拍手されても、感情がみだされる氣がするのですな。講演の後大勢の人

熱心な聽講者が集まつたなら、よいのでせらが。 帝大の八角講堂は千名位しかは入れません。かゝる場合に東京市に公會堂があつて三四千人の

れば、ラマ ありません。從つて夕翁にも基督教の感化がありませう。 Oriental Christ もありますから、矢張センの唱導したる梵教會には基督教の感化があることは間違ひ ホ ンロ 不は宗教は民族的に自立しなければならね、ことに自國の既成宗教中に大なる眞理 さう御思ひなさいませんか。序に申します

梵教會(ブラマ・サマジ)はユニテリアン派の刺戟と指導によつて勃興したが、次第に印度思想中の 英文學は十分に研究してあるから、 理の復活によつて刺戟と靈威とを受くるやうになつたと思はれます。ダ翁は英米人とも交際が 0) 泊当 一後の人々は佛教それ自體の中に眞理を發見して、其力によつて進歩しましたのです。丁度その如く ある場合はことにさらだとロイは信じて新團體を造つたのでせら。 明治の佛教は基督教の刺戟をうけました。井上圓丁氏の如きはその著しい一人でせら、しかしそ 無論基督教、ことに自由派進步派の思想の研究は試みてゐる かるし でせ

う。しかし改革運動の先驅者ラマホンロイに比すればその威化はやゝ少く、却つて印度思想の刺戟が のではあるまいかと思はれます。

相原、 て新しい日 ました。 明治の佛教との比較談は誠に有益に承はりました。こで昨夜六合雑誌の編輯會を開き岸本、三並 内ヶ崎その他數名の同人が集つて、タゴール談に花が咲きました。三並君でしたらう、から申 世間 本語 に譯され 6 それだから我々も断文で思想を發表しなければならぬと。 は タゴールくと騒 るからではあるまいか。あれをベンガル語の原文で讀めばさほど新しい感じ いでゐるが、めれは一度英譯されて、それ か新進の文士によつ

いかにもさうです。タ翁の「ito」といふ語は人生といふよりもむしつ獨逸語の「wind」といふ語に

95

ありますから、夕翁はその方面の思想を受けついだでせら。佛教の方でいへば實相派の方で、先づ天

台の思想がタ翁のと共通の點がありませう。

問C カビールといふマホメット数の詩人の思想が徐程樂天的で、タ翁に感化を與へたやうです。 現に

タ翁自身が之を英譯してゐます程ですから。

寛容にして進步的思想を懐いてゐる人があるやうです。 そうかも知れません。印度のマホメット 教はアラビアのそれと大に違ふやらに思はれます。

問。時に夕翁と基督教との關係はどうでせう。

印度教の改革派中で最も多く基督教、ことにユニテリアン派の 感化を受けたのは開拓者たる ラ

V 非 ンロイでしたらう。

ブライ語を究めて舊約を、希臘語を修めて新約を讀みました、殊に、聖書より拔萃をした位ですから。 ケーシャブ・チャンドラセンはどうでしたらう。 問。左樣でせう。ラマホンロイは西藏で佛典を研究し、 センの演説集を讀むと基督教の研究を印度人に獎勵 マホメットの學校でコーランを學び、更にへ

たるものもあれば、その根本真理の闡明につとめた文章もあるやうです。

基督教(ユ セ は社會改良家でありました。無論基督教の感化はありましたらう。しかし私はロイが一番に ニテリアン派)の威化を受けましたやうです。ユニテリアン派の印度に於ける布数は梵教會

間。 最大誘因でせら。 ピー・シイ・モヅンダーの Spirit of Gial の中に Spirit in Christ の一章があるし、同じ人に The



タゴール氏の講演に就て

并上哲次郎

引くこと多大であった。而し氏の講演に付ては世の人々があらゆる讃餅を呈してゐる故に、 さらに其様な讚餅を繰返す必要はない。そこで私は私の所感を唯露骨に述べることゝする。 った。 次 7 ール氏の東大に於ける講演は前よりよく準備されてゐたものと見えて中々立派に纒つたも 殊にその文章は典雅であつたのみならず、抑揚わり波瀾ありまた巧に比喩を交へて、 TE. 感興を

成 3 カン つた。 功で 睛 の講演 內容 々力説される所が あつ 12 何となく悲哀の 就て考 たにして の音調はいかにも女性的であつて、 へれば尚 4. あつたに係はらず、 それは講堂の人々を心の 調 カジ 更其感を深くするもの あり、 何處 ともない亡 やはりそれは雄大には聞えなか 何となく西洋婦人の演 カゴ 根底より感動させると云 あ 國 る。 0 音 此の あるを感じた。 講演は現代の文明を呪うて、極めて淳 説をきくが如き感じが ム様な男性的 つたのであ る。 0) K 3 した。 0 ではな 一些 演

氏 朴自然なる原始生活を憧憬するの傾向を有してゐる。老子が世の文明に趣くのを嫌つて、人智未だ開 咆哮する隱者と云ふべきである。氏の好む處である此隱者的態度を云為するのでは けざる大古の狀態を復活せんとし、 は文明を逆行せしめるものである故に、私は氏の見解の世に有勢となることを喜ばな の云ふ處はこれ と其情味に似かよふ處がある。つまる處此は現代文明の個外である印度の山 その不可能であることを知るや西關を過ぎて其行く處を晦 ないけれ EN 智者の現 林中に 2

く見えるものです。放岡倉黌三氏の、The Ideas of the East の如き最も著しいものです。あれが漢文 あたつてゐるやうである。近頃の文壇では生といふ文字をあて、ゐませら。今日基督教の説教で生命と いふ時は、その意味は從來の日本語の「いのち」と大に趣を異にするのでせら。歐文でかくと何だか新し

で書いたら古嗅くのみ思はれたであらうに。

東西古今の善美なる思想と情緒とが渦を窓いてゐるでせら。我たの頭だつておう單純でありません。 問。要するにタ翁は近代思想の勝利のシンボルでせう。翁の思想感情及印度固有の思想を中心として

タ翁は近代印度の文藝復興の中心的人物と見る方がよいではありませんか。 勿論ですとも。近代思想は段々人種と國境とを超越して共鳴しつゝわります。タ翁は新しき時代

新しき文明の先覺者でせう。

歐洲大戦亂のたい中に此平和の天使が日本に來り、更に米國を訪れんとするは大に意味があるや

うですな。

いかにもさらです。相成るべく最善の日本を見せたいものです。日本の佛教の最もよい代表的人

物にあって貰ひたいものです。

問 難有うでざいました。御かげでタゴール號の幾ページが埋まります。

さらですか。この御話で、私の義務が果したのですか、それでは私も大助かりです。サョウナ



子の見たる詩聖タゴール

楠 HE 猦

嗣宗タゴール

入つた時はタゴール氏は龍動に客遊して居つた。龍動の人は迎へた時も相應に喜んだが て後は記憶に留まらぬこともある。世はさまぐしであるが、一般に失望するのと忘れるのとが最 は遙により以上であつた。多分送つた後も何物か腦底に印されて永久に忘れ難い礪音が残るであらら 去つた後に氏を慕ふ心が愈々盛んになつた。予は氏を迎ふる時の いのである。殊に印度の人を送り迎へることの多い人にはこの經驗が最も多いのである。 迎 へる時は望みに滿ちても、逢ふた時は望みを失ふことがある。逢つた時には愉快に感じても、 希望よりも逢つた時の會心の 予が印 滿足に よりも も多 度

日本より世界への使命

人である、印度特有の詞宗で世界的生命を有せる詩星である。過日の帝國大學に於ける講演の如きも、 べたことにも天籟の真理 氏の錦心繡陽を通じて出た一言 が加味せられて居る。氏は求めて之を爲すのではない、氏は生れながらの詩 語 は、以て百世の師となるべきものが多い。日夕親近に對して述

代に處するの道は現代を呪うて嘆聲を發するにあるのではない。むしろこれを導いて正當なる方向 向はしめることに 努力しなければ ならな

云ふ處 明 退せしめ撲滅せしめるものである故に、私はその樣な思潮の有勢となることを喜ばな 少なくとも氏を聖者として崇拜するものをして、しか信ぜしむる充分の恐れが な 智者を要することは る道義の念を阻害 つて、 カバ いけれ **兎角富貴利達權勢にあせつて、** 12 現代 もまた樂 唯 無闇と科學を退けると云ふことは有害 科學を卑しめる様なことがあつて 氏の全體 石 の功 する Z ふを なきには非ずである。 般の弊風 の態度よりして極端にそこに赴いて、科學を呪べものである樣に思はれ 後たな V) 一對し それ以上の高處と遠大なる方向を看過し、 IIII ては充分の警戒を興 しそれ 而し氏は概 は はならな 無益のことである。 科學者をして悟らしめると云ふことが S して亡國印 科學萬 ふる必 度の 要が 或はそれ程では 能 13 哀調 あ もとより不可、 る。 を帯び ある。 其 且又古來より館 方 無か てねると云ふこと 田 それ Vi より 必要な 科學者 つた 唯現代 は 見 文明を衰 カコ X L 弘 d 外 1 0) n 72

る。殊にタゴール氏の精神には其積極的の方面が缺乏してゐると思ふ。以上所處の一端を述べて置く, 世界人類をして不正をなさしめず、道義に反くことを不可能ならしめるには、それを充分に 力を説かずして慈悲だけを説くは哀みを乞ふことを説くと同様で、 印度の積極的方 かしめる威力がなくてはならない。男性的の實力がなくてはならない。それが印度には缺けてる 極 一的と云ふことは出來ない。慈悲を真に實行するためには實行の實力がなくてはならない。實 面 に慈悲が あるとタ ゴール氏は 云つた相 だけれども、それ 女性的 だけでは女性 たらざるを得ずで 的 懲しめて慈 であ 1

斷言して憚らない。印度の宗教哲學凡て此調子をまぬ

かれない。

0)

李沙

着

代 明 仰 すべ 少く 美文 對し L 運と沒交涉 る 72 た 現したもの Ê 宇宙中心 るは 第 0 では之を波羅門 せんとするはリグ詩 古仙聖人の 我 さ人 カジ な 7 即ち 主義 35 最高 0 タ 新生命を附與せんとする生きた聖者であ 題 に堕して、 理 og" 0 は 大 0 の慈愛を以 で逆流 宗教 人格で 1 の承現を憧憬するのはリグ詩人の宗教である。 乘 もあ 由 滅無(涅槃) したやうな 美を濟すと同時 6 w 0 吠陀 氏 中 **(b)** 南 る 種 毒 る。 6 あ る。 カジ に掉さすと一般 六大無碍の奥義に遠ざ る。 あ 族 時 て妙樂自在 是云)を説 の全體 併し 代に於て大仙 (mahā-rsi)と称する 大抵 る、 人の哲學であ 雅 氣 近 は 分 樹 は皆 n 則 卽 時 3 0 ち吠陀 世親や るだ 度に の語 に森林學含を起てして實際 に實現せんとし 人 吠陀 本 格 0 精神生 0 は H で云へば之が であ 等主義の 古代を 詩人の 30 森林 傾向である。 シシ の文字に沒頭 る。 p カ> 活を開 0) カ> ン 行者も 權化とも ゝる宗教の信と哲學の觀 自覺(菩提 再現せんとする人物 信念として佛 つて居る所もあらう、 力 たが、 ラ 異善美を體 Tay o 拓 ・ラ ح 至つて多 するか、 する 之を個 7 の闇黑 1 m ふべ を 10 してその ~7 0) 教 THE à) 17 ス 無始 か地 理想生 祭典 人 現 で い。ヴィ ジ んじ、 3 0) 17 理 印度 した超 的 的 0 P 位の に縮 太 0 13 Ė は る。 0 0 極 或は都 到 班 活 12 形 節 美 利 刨 タゴ 0 と面し 人で これ 穴處を取 庭 害を 式に補 ~ 小して、 越 42 5 寸 (1) ーカ 人格 原理を説き萬 順 42 掛 佛 る ある。 1 在る。 所 路 から 慮一平等の偏見に住して二面 離 教 けて見たなら、 ナン と云 即ち 7 を教 N は カバ つて m 6 氏は m 詞 自己中 れる た あ 吠陀 之か ふべべ 古代森 想の ダ行 カ> 馬 る 3 ~, كل ا 鳴や とい 獨 力》 活 きで 内 美 潜の を憧 有 印 11 5 動 心 **___**' 超 容 林 とを 開 つて宜 何 度 71 (解 0 1 或 71 如台眞 憬 に於て擴 あ 生 展 快 然 1 0) る。 活 0 ij 夢 する哲 ル は自然外道 樂を斥け、 8)を主 次第 氏 人 111 庆 出 0 L てで護 に信 吠陀 產 格 1 生 ~ 間 Vo o を詮 傑出 A 12 サの 0) 3/6 1 淮 10 す 25

為し得 英紳 得 関伯をして「言語 残らず感に カ> ると思 7 1 と思 るるも IV ---予は 士 る は ム。今時亂れに亂れた世界に對してこの使命を宣言した所で、 カジ の讃辭も聞くべきものがあったから、 jν のは、 n カジ 代表して自ら宣明したのみである。と言つた、その言には味ふべき無限 彼 理と眼見の近事とを融合し、 ス る。 幾人わるでわらうか。或は靈山會座に於ける捻花微笑の獅子吼に對すると一般 0 打たる。に至ったのは、 タイン男爵は偶來朝して氏の講演を聴いて「宛然た 講演 「物怖ぢする小鳥」の 詩人にして同時に「聖者」たり、 を「印度より日本への使命」と題したが、 は分らぬが意味 は分った」と云は 如しと自ら宣言 憧憬すべき人格の致す所であらう。 詞想の美に加ふるに聲音の美を以てし、解する人も解せぬ人も 予は何心なく氏 同時に「尊者」たる氏にして始めて行び得 しめたのは卽ち此點で した詩人が 質はこれは日 にこれらの言を傳 悪 3 時 一大詩篇」であると讃 悪世界を儲伏せしむべき 之に相當した深みに於て聽取し 歡迎會の 本から世界 あ る。 へた。 印度 露 の意義が含まれて居 國 0 氏 0 THE STATE OF 松 使 は 0) 命 徐 演 流 0) 獅 觀 である、 ろに答 敎 說 べき所で Z (0) 授 10 から は大 明 南 ス る 17 740

30

三、吠陀詩人の權化

南

る

同型である。自然界を讃美して無窮の懐内に眠らんとするのはリグ詩人の詞想である。 く予の眼 く見ゆるは、 は 今時 に映ずるのには別 の印 氏が餘りに現代の印度に超越して居るからである。 度人に對しては餘 に二つの理由 りに敬意を寄せ能はざる一人である。而かも口・ がある。 今から五千年前 のリグ吠陀時代 叉氏が理想の印度人である の聖者 を極めて氏を讃する 無上の神格を は 正しく カン の如 氏と

文金

學澤

島本

交文

思思

共藤

譯氏

風肺

紙菊

數半

四裁

百形

頁總

森

吾有はで餘マ 人のアあ萬ラ の文しる方や 靈化リが哩の とをヤ三の峻 字詳種千廣峰 宙述と餘衰を の世呼年と控 神るばの三へ 秘もう昔億南 とのるが以は をな民ら上煙 いり族此の波 か昔で地人漂 に口渺 には 融大な移をた

合聖、住有る

應迦本でる度

しす印

小包料 金八錢菊大判百五十頁

刊新



要概次目

梵選吠活と農の人印 文婆陀△王民階の度 と度のは洋學羅經原族△級大の しの位往々 其門△始の奴僭移士 て古置昔た他の古的競隷族動着 暫代宗第のの△民 タ與をかる 學の教△階發國△ ゴた保ら恒 「るち幾河 科信△晋級達家ア 學仰四想△王とリ ル吠東多と 技と種的僧族四ト 著陀洋の印 藝變の生族と姓ヤ はに最邦度

發四縮高 松戰 賣版册評 歌

史學



名書容包北海

定菊

價半

金裁

貳形

拾美

五.裝

錢本

送文

料總

四六

錢號

捌 賣 社正文 目丁二町元區鄉本市京東 所 行 發 店書各 社正文 九一六〇三座口替振 所 行 發

(中附一)

點に於て氏を讚せんとするのであ 存する所以 心 海 であ に悟 入し る 为》 5 得 VQ. 却て我 點もあらう、氏に迷妄の なの喜 る。 之が ぶべい 第二の き所である。 存する所以 理由であ 予は殊 は郎 に氏が實生活と共鳴せる大仙 ち佛教が最後の教主たるべき徐 人である 地

四、批難の解形

も亡國 たるのみである。 稱するタゴ 12 と云ふ點に 對しては假借なく ある。氏は皆學術を重んじ自らも相當の造詣もあるのである。併し學術萬能主義、偏狹な物質主義に イブに於ても亦見る所である。 時 氏 世を に對して批難を爲すものがあるのは、一つは、學術を罵倒する」と云点點である。こは難者の 0 音調を帯びず、 憂 1 す ふるも ル詩 る。こは亡國 星に及ばざるや遠しと謂ふべきである。彼れらは唯人の口吻を真似る一般の八々鳥 0 批判の鉾を向けるのである。今一つの批難は氏の演述は恆に「悲哀の調を帶ぶる」 ゝ避くる能 雄辯滔々、 0 調として皆人の忌む 丽 はざる所とでも謂ふべきであ かもその洋々強くが如き愛 世界をも吞噬するやうな勢の 所である。 是れ 550 國の至情 ある は或は印 m さる に至 かも 度現代 H 即 りては物怖ぢする小鳥と自 度現 谷 パブー 時 0 音調 0) 13. 般 €. 1113 人士 あつ in a 話. 買 は

刊

新

內東 外京 教帝 育國

評大 論學 主講 筆師

文

學

士

X

島

IE

德

K

99



哲國家 判 知 を性 彼 求 to 類 加 知 現 價 V F 國 か 不 知 戰 7) 以 根 員 柢 體 0 小 見 よ 3 包 地 料 V 任社 國 務會

一貫せん 内 とする者 11

發

所

振東

替京

東本

京鄉 --- 駒

三駄

〇木

番町

3

11

を的

全倫

せ的

理

或

5

(中附三)

頭

得

吾

加藤

咄

堂先

生著

第

H.

版

通

L) The

MIL

論の

及理

郵定

稅價

錢 錢

書

窓

九

加

藤

咄

堂

先

生著

第

版

趣

學 授

郵 定 稅

几 判 拾 箱 錢 卷

は眞 3 等 味 1 本 全 首 劍 粽 勝 在 個 护 負 11 0) 得 から 戰 兩 處 V 3 双 氚 相 と 世 0) 步 禪 教 交 0 要 は to to 語 訣 過 社 編 3 會 牛 中 3 0 n 劍 H 11 喪 立 满 客 妙 身 秘 0) 失 逸 循 3 斋 40 命 其 事 to to 覺 禪 異 0 生 僧 9 75 3 V] (J) 0 b 劍 牛 11 乖 雖 命 to 0 万 劣 懸 此 說 道 敗 者 劍 共 禪

筆

錢

郵定

稅價

譯和

壓

經

咄

堂

先生著

第

版

藤

咄

堂

先生著

2

郵定 稅價

第一 重 版

錢錢

郵定 價 稅 4 錢錢

堂聲鷄町原川石小京東社版出千万町原區川石小京東

味

-

生

外

其

0)

處

世

5

33

3

to

中附二)

統 基督教會集會案內

禮拜說教 午每 前日 十曜 時日 (當擔) = 並

傳道講演 午每

後日 七曜 時日

諸

家

良

午前九時十五年 五分日 = 並 良

基督教哲學

靈

午每

後木

七曜

時日

三

並

良

馬可傳を講ず、猶會員諸君の信仰告白、 字宙、人生等に對す

日曜學校 る質疑等有りて頗る有意義の會合也 前日 九曜 時日 諸

家

」どの集 滿 五歳以上の少年男女の入學を歡迎す りにも又、どな たでも自由に御

す。 出席、 御遠慮なく 御聽きになることが出來ますか 御來會下さい。歡迎いたしま

す。

芝區三田 四國町芝園橋際

五八五五番

禮 藏、永井柳太郎、小山東助、相原一郎介內ヶ崎作三郎、安部磯雄、岸本能武太、 して擔任す **拜說教** (毎日曜日、午前十時)

郎介等交代

岡田哲

組

げんとするものなり 信仰に對する疑義を糺し大に共進互琢の實を記 を負臭宅を巡回して開き會員相互の親睦を計

舉

本 織 基く團體なり、 信 鄕 會は昨年六月成立し主として神田 仰 小 せ を られ自由基督教の立場より 石川牛込等都下北部の人士よ 宣傳 せんとする高潔 同感の士 の來會を歡 なる

友情

包容的

り組

神 田錦町三丁目女子音樂學校內

《中附六》

錢十四圓一年ヶ年 光之亞東 錢稅錢廿一定 錢十八圓二年ヶ一 號月七 年一郵四部價

		;						/ 4								
▼漢詩學界彙報	マゲーテは 喫	現 存 太 平 記	▼密教哲學を論じて宗教	中世紀文學と佛	▼廿世紀初葉に於ける自	* タゴール氏に就きて		一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	⇒タゴール氏講演所感		▼愛 の 詩 人 カ	マイスラエル豫言	→ 社	▼詩書に見は	▼現 戦 亂 の 眞 因	マタゴール氏の講
•	煙せ	は闕	の生命	蘭西	然科學	A、S、生		A、S、生	吉田熊		E,	者の	史	れた	に就	演に
新刊知	l	本	に及	國民	の發		思潮	生	沙 海 外]	神	∴ Λ	3	200	就きて
紹介:	か	カ		性	達		**永遠の貢獻		質用主義者の		12	觀	論	天	7	て 文碑
其他	: : : : : : : : : : : : : : : : : : :	高	神	太	三學博士 長 四		(四)流動性と人間	か・・・<三)永遠の一			ш	石	語線	小		文學博士 井
	田白甲	木	林隆淨	宰 施 門	尚半太郎	・(五)科學的眞理の不定性	と人間的要素:	永遠の一大貢獻	・(二)實用主義は臺所哲學(一)プラグマズムの意味:	100	上天川	橋智信	貫 哲 雄	林一郎	瀬鳳輔	上哲次郎

京東座口替振 會協正東 込駒區鄉本市京東 所行發



タゴール氏と世界の傾向

瀨仁

成

內的 てとを示す むつかしい儀式 私 12 IIII は 以前 調 し近年に至ってそれ 和 浴 36 12 0) は多くの 合 6 す E 南) る 30 か云 倾 內外 间 3 世 12 5 界 進 4 0 基督教 0) の友人もまた私と信仰を 九 0) 6 傾 が次第に失 居 向 の友人達より其自由 カゴ 3 此 様に變化し 13. 11 て、 凡ての つゝあ 同らするに なる信仰のために度々 る。 信仰 外的 は神によつ 至 0 0 た。 城壁に囚へられずして、 それ て内 的 は基督教 忠告を受けた に統 7 0 72 信 もの 0 仰 凡 > 個 條 7 あ 6 油 Ł 3 33

T く自 あると云ふてとを説き、 7 7 のも 行きつまつた。 次 新し 我と云ふ殻を作て、 II. 1 のゝ内に溶合を求 い回轉を始めた。 IV は 分化 陳 洲 そして皆其 して、 (1) 文明 人と 其內 Ħ. むる は しかもタゴールの説いたものは東洋固有の思想である。 12 城 、弊を感 12 12 城 壁 神と自然との溶合調 0 至つた 是 0) 弘 を設 內 固 じるに 12 らん ので 17 生 n る あ 7 とし 傾 つった る。 即 间 度 0 -6 其時 和 0) 0 南 を説 文 70 0 る 72 明 12 あ ことを 思想界に向 現 る。 S は 120 n 森 人 指 72 林 そこで 0 k 摘 0 中 カゴ は L つて、 小 た。 12 次 歐洲 7 J. 生 1 < 而 n 神 思 分 12 IV L 化 と云 0 其 想 は 界 あ 傾 7 することを は る。 0 = 向 て、 歐洲は今東洋 新し 7 弘 ì 彼 漸 い道 歐 サ は、 < 嫌 M 12 近 を示 な 歐 年 文 2 3 明 て、 洲 12 され 0 0 0 至 0 狹 凡 6 2

ものに案に立共 充人 居出 分解る誰 がらいる 嶄 事の 授述 る 而 通 翰 せ卒く授 獨ら

一新學期 開 始 一卒業 厅 1 F 謝 卅 H, 錢

袋物 和 科 服 ▲洗 裁 縫 科 色染科 A 洋 服 裁 國 縫 民道 科 德 小 物 及 ▲ 教 細 I 育 物 學 科

目科

縫 放授法 會則(見本 のに 附 運 一卷三錢 と教 送 付 を

今東

川小路田

るに

放必讀が

きる新者

界唯文

一の自習書で

でも

あ執筆

毎 日 曜 日 午 前 九 時 より 十時迄

 九 基督教 絕 體 哲 と現代 學 と神 の哲 0 存 學的 在

)基督 と哲 學 的 世 界 觀

--二)基督 基 督 と精 然哲 神 哲 學 學

四)基督教 と歴史哲

並 良 氏 擔

中附八)



タゴール氏の齎せる印度書について

松 本亦 太

配着問。先生はタゴールに就いて何と御考になりますか。

力 ルカッタ美術院の教師及び學生の製作品を御覧になりましたか。 松本博士等。今日はじめて八角講堂にてその温容に接したのですから、何とも申すてとは出來ません。 先生は谷中の日本美術院に今明日に亙りて展覧に供せられてあるタゴール氏携帶の印度畫即ち

答。今日行つて見ました。

新聞には甚だ陰鬱だと評してありましたが。 に餘程共通の點があるやらに思はれますが、印度畫に對する御感想を承はりたいものです。 間。昨日午後の美術院の夕翁の講演は御聞きにならなかつたのですな。夕翁の書論と先生の御意見と 今朝

はつてゐる畫のゆふ日は可なりに强い色をつかつてゐます。 てくすんだ色、卽ちサブデコードな色を用ゐてゐます。尤も「旅の終り」卽ち沙漠に疲れたる駱駝の横 やら一寸見當がつきません。 必ずしも陰鬱とは見られません。とにかく至つて小さい畫で、大きな畫の場合にはどうなるもの わざく、出掛けて見る價値はありますですか。 。日本の版畫のやうに非常に細い線をつかつたものです。 色彩はおしなべ

あると思います。

話しがこっまで進んた時、博士は電車にのちれて行かれてしまひました。 この會話は六月十一日午後五時過ぎ、帝大正門前にて記者の一人が松本博士と電車停留所で立ち話しなしたのであります。

設ける傾向の **炒らんとする傾向を帯びて來てゐる。歐洲學者の説によると、此度の戰亂の原因は、** 素によって新しい改革を受けつゝある。歐洲のみならず萬國の思想が皆タゴールの溶合調和の思想に カジ 城壁の中にとちてもつてゐる故に戰爭があるのである。 ある處から起てゐると云ふことである。 國と國と、民族と民族と、 人々が外的の壁をとり去つて、 宗教と宗教と、 歐洲 一つの 人に 城 流れ 凡て 壁を

出

「來る。

至つて すことが出來ると思ふのである。 氣との接觸 25 る處は 向 歸する時、 はんとして様々さえ思はれる。 歐洲人にも今は其事が漸く ない。 Natural study と云ふことが云はれ、林間教授などが唱導されてゐる。人々の生活 は健康 始めて戰爭は絶滅することが 宗教のみではない。 に必要なりとして重ぜられるに至り、遂には家を出で、林間に住まんとする傾向に 感じられ 彼の 教育に於ても其調和の傾向は現れてゐる。自然との溶合を重ずるに て來 V ホメ てねる。 ッド教 故に私の考へでは、凡ての宗教は同一の祈りをな のバハーなどの思想を見るに殆どキリスト教と異 に於ても外

を求めてそれを得たと云ふ點である。外的でなくて內的 である。これは吾等のタゴールに學ぶべき點であらう。 尙 一言して置かなければならないことは、タゴールが自ら客觀的の幸 12 自己の心の内にそれを見出したと云ふ點 福を求めずして主觀的の幸福



タゴール氏に就て

麻 生 正 藏

氣高 私は 樂音 9 音容に接 0 振 de E あ る 兎 りが る 私は あ 振 カン 寧ろ 落ち と思 に角 0 3 9 カン に長脚型の詩人らしい身體に着流 柳 彈 久 氣に入つた。 まかず それ 揚的 力性 評 I) ふと、 判 湛 ゝ印象を得た。第一、 た 者 3 12 に富 、單刀直 系列であつた。 いと思つて東大の講演會に出席し R た では 實 氏 忽ちに は は る深淵 办 深山 餘 東洋 あるし、 ス、即 金鈴 急流 6 知らな 幽谷 唯 73 否靈 2 刷物の原稿 とうい m 又私としてもその 0 0 0 71 カ 0) 概 b 間 V 200 鈴 0 4 カジ であ を振 奔流 木の ~ あ jν その 風姿學 を讀み して静々と講壇に上り 0 賞金受領者 12 となる 薬 10 6 カジ 朗讀 ならし カゴ 上げた無邪氣さ 動 特 くれ 5 が氣に入つた。 た。處が、私の 思想に 思想 振 17 巖を嚙 たら 2 17 りは何等の氣取る所なく、 0) 家 であると言 潺湲とし 共鳴する所も少くな とし K 音 聲は カジ んで激越 ては 如 女性 て流 來り、 < 薄玉子色の清楚の 左程 測々しさに感じた。 豫期した所 **ふ事**文知 50 聽 0 n 響を放 0 極めて淡泊 神 0 端を發し、 人物とも考へて 經 い優 つて居 12 かりい 何 U が左程でな V から、 何等の作為 とも 4 に會釋して何等の 懸 つて、 0 漸くに、 衣服をスラリとし 言 內 0 第二に 7 12 どれ 居な 度是 82 壯 カン なく、 つた 快 男 嚴 はその 文の詩 感 性 1 非 カン 0 せい 圣 直 瀑 瀬 0 的 一接その た。 何等の 與 15 を早 布 カン 朗 変 人で 底 72 力 75 4.5 嬌 7 併

ゴールは詩人のみ印度人のみ

本

谷

との雑 魂って漢。我 にする 將 然 は 彼 n 民 形 I, 如 3 憫笑 て能 72 砂 カン 0 何。 m 弘 佛 商 無 EII £ w 珍客 大 度人 力ゴ 0 种 12 敎 25 如 大 0 兒 徒 道 陳 日 堪 大 夕 12 套 本帝 0) 阪 12 だと思 具 7 輕 ず。 あら 酒 種 B 創 0) J" 話 利 1 演 造 沈 とを 弊 亦先進文明諸 15 國 ふなどは思 せし 思 ざるな 用せんとする人も自ら別なり。借問 過 認 蓋 ルを歡迎 カゴ 力ン 77 > ぎず も實 悲 は 瞑 L 亡國 所 層與 高 想 汉 3 さか 3 南 (t 0) 7 及 す。 隆 終 風 D 內容貧弱 る 頻 0) IP" は (1) 42 する 悲 に空文虚 W 國 カ> 1 骨項 模倣 夕 は 但し物見高さは粟散邊 H. 0) n 3 **3**° 雄潭 余輩 12 を謂 ブ 0) 1 なら 資す なき ラ を 0) 家に曾て賓客 一脚毅 演 F マ・ソ は 法 辩 w げて だ は 吾が 2 h 12 說 佛教 は或 る に仙 ED 所 たりし様なり。 21 Æ 國前 創 多 を 度富豪の ジ 以は失敬 発 人 徒 造 7 力> 0 氣取 にても 途勃 を上 3 丽 3 流を汲 72 ~ × カ> すタゴー り世話に成 り風雅 家に生 土 Z 興 す 基 2 0) とは 自 2 0) める着 4-4 情 東京帝 1主自立 最 カコ 4) る る所 氣取 力> 6 5 上策 想 in h Vã 像 は果して佛教徒 つた なり。佛者 300 氣品 なく 珍客遠來とて 27 は せら 倖 大に於け 6 獨 自自 0 75 太だ好 事の 独) 電に 1 90 吾 魔 30 る高 7 尊 力了 あ 1 嗚呼 讀 形 砂 る U) 0) る人は 敎 氣風 書 邁 12 ものは 而 创 次 徒 雕 是 人 敵 42 底 13 F 720 か。印 を學 に於 1 n を 3 12 渴 12 汉 7 固 仰隨 惑 る婆 詩 稍 V 騷 IV I) より 度 廻 ぶに 占 1 0 } A R は 0) 敬 2 **羅門** 喜 人だ る 來 12 すなさ あ 12 別 吾 す 吾 る n る 3 などに 南 る者 カ> 寫 と選を殊 圣 と基 カジ りとす、 な カゴ は 6 同 5 同 的 畢 誰 聴い 督教 胞 力> あ ず 胞果 竟 倭 る 8

つて本誌は「使信」と譯したのである。

上の その 呪ふものゝ 又憂國慨世の詩人である。 氏 は思想家と言ふよりも詩人である。されど單なる詩人ではない。愛人敬神の詩人である。從つて 國狀が然らしむる所であつて、そこに私共の心を動 日常の實生活中に現はれて居るのである。 如く誤解せらる、點も存するのである。 而してこう云ふ詩人たる本領は、その詩中にのみに現はれて居るのでなく、 又その思想が悲憤の調を帶びて居るのは全くその政治 かす魔力が潛んで居ると同時に、物質文明を

絶せられたのは、大に多とする所であるが、 にその胸襟を開かれんことを切望するのである。高位高官の招待を、ノー、サン に左右せらる、事なく、日本人及び日本の思想界を代表する學者の精神を信じて、 でなく今一層日本の思想界にも接して、其遠大の思想を披瀝せられんことである。 に取つては勿論であるが、氏に取つても亦真に價値ある行動であると思ふ。 終りに臨んで一言したきは、日本の自然と親しみ、シャイボルドたる詩的想像を滿足せしむるのみ 静に而 かも軍純 に學者教育家と相 半 接せらる 二 今後日 子々たる小人の言 1 0 > は我 言の 本滯 日本 トレス 在 中大 謝

message といふ語はかいる場合にては「音信」、消息」などの意味で、使命といふ程の意味でない。 叉講演題の The Message of India to Japan な「日本に對する印度の使命」と譯したるが多いが、 寄贈せられたるもの厚く之を謝す。 本誌の卷頭 を飾れるタゴール 翁講演の寫真は安藤正純氏の好意によりて東京朝日新聞社寫真班より

であ ると思 は その内容とその形式とが自然によく調和し、 熱誠と確信とより成立する性格其物の發露

その を捕 於け n ス 作併そ F. で優美と壯美 る 鄉 v 1 7 思 圆 斷片 想上、 の音聲と朗讀 12 シ 於 3 的 け 1 る 12 0 精神上の 12 彼是れ 歷 富 上に悲哀美 史 九 だ講 的 振 地位を と悪評 境 りとの 遇 演 12 カゴ 6 するが あ 加 内には、 同 知つて居つて、 情 つた。 はつて、 し、 如きは公平と眞理とを尊ぶ學者の態度では その 憂 好意をもつて理解せんことを勉む 私の 國 講 慨 初 心 世 演 0 0 0 めて正當の批 內容 耳 調子が何處となく響き亙 21 12 何とも言 至 0 7 評 カジ は多少批評 VQ. 出 一來る 感じを與 るの のである。 一つて居っ すべ みならず、 ^ た。 き點なきに な る感感 單に 然 5 じが 氏 > 場 あら L 慥 カゴ 印 た。 17 度 イ 演

ず、 12 類 度 ないけれども、 0 12 精 j 氏 の古き靈 0 あ 理路 は徒 向 る。 神 9 E 7 は らに 0 整然議 新 日 東洋 創 的 路 文明 西洋 12 造 國 光 科學を排斥するもの 論 8 民 國 企 明を發たしめんと欲するの 堂々たる所もあるでは の物質的文明を呪ふ様な分らずやでは に對する忠言もこの 民をして、 を誇りとす つべ き事 を國 る固 その靈的文明を發揮して、 人に 陋 私共は大國民的襟度をもつて之を迎へたいのである。 では 0 精 勸告し、 思 想家 15 ないか。 神に外ならぬので、而 Vo を戒 7 革 唯 6 精神 東洋の 命 め、 あ る。 家をもつて任として居 的 常に古き種 文明の それ 大に世界文明に貢獻する所 靈的文明を西洋 ない。その講演は詩 故 12 力説家であ かも當然の忠言ではないか。 子を新 氏 は の物的 5 西 つて、 洋 る 0 0 的 V 6 土 物質 文明に點 趣 科 味 あ 孃 學萬 文明 る。 に溢 に植 あらしめ 久 12 水 能 る つけること して世 0 反 0 抗 傳 何もヒネ 道 みなら 界人 師 氏 印 38

ク

次

評

を加

ふべきではない。

譯し且 を手 分はその志を壯として欣んで贈ってやった。 0 5 A J. 昨 2 年の かけ るし 客となったといふことを聞 1 カゴ 引として最後まで印度思想のた jv あるとす と自 熱の 暮 れども、 つタ氏 頃であつたと思ふが、自分に手紙をよせて、 冷却した際 分 'n 12 12 告げ 關 ば 少くも最後 2 て種 て吳 彼 に當 は 確 32 々の論文を公にして、 りて た程 カ> の隱家をこゝに求めんと努力したといふこと文は疑ないやらで にその いて、 3 6 あ 重なる めに努力したいから、六派哲學を贈つて吳れよと言つたの つた。 依 然とし 種悲壯の感 彼は果 一人であ 然るにこの春であった て熱 而も彼は、「之に依つて身に不治の病のあるのも忘れて 12 心 してタゴ つた 堪へな と奥 除年幾何もあるまいと思ふけれども、 と言 味 カン 1 ひ得 つたの i 同 感とを によって安心立命を得た る。 6 力》 今やタ あ 以 る。 高島 7 タ 米峯氏 胜 II° J' 年八 1 1 n w を研 から彼 來 九 朝 月 以 0) 究 かどうか 時 L は あ 後 る。 逐 タゴ 12 2 際 所 10 12 ì 確 は H 謂 不 歸 自 タ IV カン 知

彼已に亡し、悲哉

あ たことが るけ 疑 6 カン 自 あ 問 0) ると反 一分は 0 2 疑念からして、 n 解 た ども ある。 决 H 駁した。 B n 6 II. あ ども 1 t る iv 2 氏 力 而もその人は直 るに之に ラの と親 單に作物の上からのみ判斷した自分の主張を再び繰り返へすに稍々躊躇した 自 この 分 教 It 間 しく話 昨 に自 對して某氏は彼 徒では 年 或 分 L る 72 なく寧ろ毘紐経主 0 接にタ 雑誌でタゴー 學 0) 問 は ゴール氏に を 姊崎博 36 シャン つの w 士 カラの 0 得たてとが 0) 逢つて 義のラーマーヌ 思想系統を論じて、 紹介で横 教徒 ねる人であ 3 でラーマー 山大觀氏の宅であつた。 る。 ヂ それ Ö P 72 0 から或 ヌチ 氏は廣義 思想に負 は氏の p 12 背景思 は 0) ふ所 去ることも は寧ろ縁遠 吠壇 カシ 想 僅 多 3 カン 12 教 十分內 關 いと説 い方で 徒 ので らら 6 あ 外



△タゴ もなけ 1 n ば N 氏 組織 12 關 して何 ある説明で か所 ये 感を述べよとの あるない。 卽この 御註文。 意味 所感とは所詮感じた所であ に於て、 自分のご 所感を斷片的に述べて見ようと る。 纏まつ た研 究で

木

村

泰

思

300

印度人の △タゴー あ カン かにも落ついて而 つた。 りては 言ひ知らぬ懷しみと畏敬との感に打たれ 平常作 何となく下卑て見ゆるに反し、 ル氏に逢つて第一に感じたことは、その風彩のいかにも氣高 作 物に 表 物を通うしてその人を想見し、 は も謙譲な所、 n た著者 0) ての 人格 と實際のそれとが吻合したやうな氣 人にして初めてその思 氏の風彩には何處となく古の たので 逢つて却 ある。 て失望す 想 加ふるにその音聲 あ りとの る例 一感を深 聖者の いてとであつた。 砂 鮮 がして、 < の音樂 は、 0) 面影の 得て 7: 卽 V ち、 カジ 大 的 すっ に愉 な所 るやうな 通例 豫 タ 期 氏 快 接 0 態 0 12 堪 觸 感 場 度 合に する の充 カゴ 0) 13 1 V 40

たされ た満 足を得たの を欣ば しく感じた。

△タ 互 砂 なく、 に文通して交際を續ける間となつたのみである。氏は大のタゴール黨で、 氏 0 從てその 來 朝 につけ 爲人も少しも知らぬ。 て、 悼ましく思はるゝは故增野三良氏のことである。 たい昨 年某雑誌の上で、少し許り、 自分は増野氏と逢つた 意見の ギー ダ ンチ 交換をやつて ヤリや園 丁を から 2

見分 を打 思 虑 佛 通 を 見 彼 百 Δ 多 \triangle K 0 Δ ツ 無理 地 は 彼 理 世 女 7 ١,٠ n 穀 タ T 0 E 位 では 後 は 豫 わ 歐 は ては Ł 徒 II. 解 7 を誤 洲 文明 佛 1 る 7 0 1 1 居 12 實際 注 者 引 7 得 教 73 な 3 す 0 w b 時 次 文 張 を宗教家とし 解 3 征 批 vo 團 な A 併 5 Va 認 6 12 II. とし では 伏 5 4) 1 あ 評 VQ てとに 的 L 0 カゴ め 勤 文明 な 基 蓋 B 6 家 3 あ w 方 0 た め 率直 > 6 あ 7 亦 非 n 7 法 あ 7 カジ 10 礎 を非 とな 歐 な た る 運 難 る。 所 彼 を JE. 5 あ 提 女 動 彼 米 思 極 0 る。 以 直 る 0) 耄 42 言 7 想 難 2 二 的 思 弱 12 あ な は 6 な 0 家 V 亦 る。 る程 之に 然る 見 家 せ 0 L 7 __ あ 7 e 3 (カ> て東洋 は、 55 は ラ 自 敎 n 居 であるとい を見 h V2 カ> あ リ で置 に之 丈け この 對 徒 ば 5 況 75 由 る 彼 る t 彼 H な L 3/3 L 出 は 6 カン きた 7 詩 非 -1 5 n 3 \$ 彼 ح 次 12 2 さらとす は なけ は 信 彼 詩 2 E は 却 A 難 殊 對 0 ユ 0 7 基 際 は常 0 疑 1 人、 12 V. 仰 ふてとを忘 7 12 0) あ -あ は 即 テ 3 公 ことは 彼 調 7 る 督 和 Y IV 哲學者 IJ 餘 懷 ば な る 2 和 度 彼 敎 45 0 0 1,0 ~ を基 虎 理 0 彼 基 3 な 知 悤 0 0 t 9 TO 0 實 愛 文 1.2 陋 視 カジ 具 は ン 7 督 二 次 己 40 する。 際家 阴 飽 者 體 0 本 0 引 75 _ 敎 7 22 3 彼 77> 耽 文明 る 的 とする あ 徒 テ 1 を 理想 0 學 批 < V2 1 R 九 12 Y 0 中 方 女 IJ IV やらに 6 評 る h 6 V 乍併、 家 E 天 る は 法 H 過 0 3 卡 評 12 性 は 0 0 ぎると、 であ は を示 3 0 格 或 17 な 高 餘 印 12 n な 2 論 とも 對 教徒 古 高 物 を公 向 L を 6 度 5 5 S L - C さに 0 吾人 る。 T H 0 3 12 代 L 0 示 12 なら 監 7 彼 空 歐 思 す Va 二 6 12 Va 人を以 擔ぎ上 實際 一漠で 3/6 は 限 彼 逐 2 L 想 所 米 あ 視 ---B 理 詮 テ n る 7 3 彼 0 せ 0 0 12 亦 CA 6 对 分 あ 6 IJ 7 ET] 同 72 は 6 的 想 7 理 工 我 n 見 ると非 5 6 家 W? は 政 想 p = __ H 時 IE 3 n は、 とか テ 彼 7 策 る 種 テ 引 首 度 12 13 あ 0 6 > ŋ 第 は や方 12 IJ 彼 72 0 水 は な る > 南 V) 兩 亦 空 なら ま 0 者 難 あ t 諸 は S ふことで 南 p する 落ち 是等 法 7 想 方 度 現 流 3 ح 0 3 2 2 3 V とる は は 教 代 政 12 面 調 0 0 カン 0 8 詩 問 策 要 過 A ゥ 入 6 0 身 和 1 0) で 思 す 合致 る 優秀 4 併 家 バ b あ 分 12 カゴ あ 3 自 想 0 る 5 る 6 な 0 か あ = る V2 る は は 12 2 る 2 す 思 6 る 抑 な 彼 P 想 Im カジ

964 等の を批 來ぬ それ 用 世 機 ¥2 n Ł II' Δ 0 0 あ 影響は 界歷 1 8 であ 意 次 會 E 夕 る。 を缺 所 J° 用 27 評 n 12 J° ヤ 謂 1 する 側 史 當 就 せ 6 1 心 そこで今回 には、 的 で 紀 IV 7 あ N 目 面 め 力 思想 ラー に改造 代思想を繼承 あ 0 吾 3 流 元十 ラ 0 T 下 思 を見 印 より る 人 0 行 册位 想 併 却て之を以て古代思想の寄せ集め は H 度 0 趣 五 (2) 7 るに、 'n 注 世 この 稍 味 頂 1 思 は して氏の人格を通うして新なる生命と力とを創造したことを忘れてはならぬ。 を L 明 面 ども 文し K は 75 は 點 紀 想 寧ろラ 又 山から見い 史研 36 12 專 は 0 ヂ 問 タ カゴ 稍々もすれ すれ する Ĺ たき 5 P 題 J" 5 昨 力 特に ۲° た 1 年 は 1 タ 究の上に於て、 を提起 タ は 4 ñ 0 ことで 紀元十二世紀の人、 w 7" ゴ 7 ので 过 條 研 1 1 $\overline{\mathcal{H}}$ なして 1 ス タ 件 究の 上八 **⊐**° 疑 I. IV IV ヌ して直接 ば、 あ 月頃 及 その ヂ あ 1 0 1 de カゴ る。 び、カ る。 權 思 p 南 N なくウ w その 思 思 る。 人 威 想 6 0 想 想 これ た はる その一 方で に氏に質問した所 併しながら他 12 あ ピール 何れ 第 るべ つた。 を ٠,٠ 12 注 以 = 關 は實にい 决 あ カゴ その 、き著述 n 問 12 ٠ カン は ると明 T L の影響はまた今日の に傾 タ て昨 今囘氏 題 極 P て、 過ぎぬ ては 未流 め ツ 7" が解決さ F. いて正 1 言せられ 1 面 大 カ> 0 年 2 かの 嶄 13 切 公にせられ 0 IV 6 の來朝によりて多少復活 にラー からすれば、是等の古代思想を凡て現代的、 佛 カジ 研 な心 0 新 る人の 思 教、薄迦 背景 如 究 想 0 鵠を失する者が多い pr. 矢張、 得であ L た。 思 マーナンダといふ人が 0 た 考へ 想 思想を理 思 盡され 研 B 究 何 梵 6 想を明 んことを希望するも タゴール氏に及んだの 自分の る人も 歌、ラ 0 羽 F 12 ると思 自 として非常 た は あ る 解 3 未 分 にすることで、 1 あ 30 する 0 だ は 推 カン つて 餘 定 0 6 勝 1 12 利 如 力> 蓋 は 通 した 9 又 る飲 りで、 3 な 觸 12 らであ * L ヂ に傾きが あ 於 眞に氏 世 嬉しく思っ 12 V n ヤ る。 < 吹 0 Si 0 力> 5 第二 、聴す 或 6 5 n 0 力 タ ことの 6 では は判 7 あ II' 地位 居ら 1 1 は る。 この る 出 た 然 次 15 IV

0

る

<

0

心靈の を徹 120 な 彼れによれ 通 B カン ですべ かつた。そしてそれは人間の肉體がどれほどの寒氣に耐へるかを試み、忍耐 42 すことが 夜は寢室の窓を明け放つて夜の冷たい空氣を入れた。 眠 して曉まで静 く夜を過し n な 多か をは ば宇宙 カン つた つた。 力> ので た。 は物質の盲目力によりて動けるものでもなく、 つた。そして彼れはこの宇宙 觀をつゞけることが もない 彼 彼 れは れは快樂を追ひもとめんが W. 大歡喜のうちに大聲を發して神をたっえた。 彼 n 0 健康 あつた。毎 は驚くべ が絶對心靈によりて生動しつ、あることを直 日彼れ き頑健であつた。 た めに は午前中、 毛布を體に纏うて聖歌をうた 起きて または時の力によりて動けるも ねた 手を組 彼 のでは 11 彼れはこの は神と物語 み足を組むで冥想のうちに ない。 0 美徳を養ふてしを努め また彼 法悦 るべ W < のな *L 2 一感し は 便 神 病 に夜 た。 E を 0) 12 更

「全世界は生ける神から産れた。そは生ける神の力によりて支へられてある。この襲なる實在、宇宙の創造者、 人間のこっろに住する」 絶對の心靈は永遠に

3/

吾々は は ることも 力自身を見ることはできな たへてこれ等 吾 なの 樹 眼 カゴ その 慰ずる 前に立 根 0 その意識 現象を見ることが ことも てる樹を吾々は見、感ずることができる。けれども吾々は樹 カン ら液 出 體 歐的實在 を吸 來 ない。 ひ上げる生命力の働きを見出すことができる。けれ はあらいる彼れの被創造物のなかに遍滿してゐる、し 時經 でかる てば樹は枝を伸べ、葉をつけ、 、けれども否々はその時 0) 流 れの絲をたどることはできぬ。 花を開き、 木が立 果實を結ぶ。 どもその力を見る つて居る空間 77) も吾々はそ 吾々 を見



マラヤの聖

△本文は前號「デヹンドラナアト・タゴール」。傳中の一部分と見るぺく、目下日本に在るタゴールの父のヒマラヤ生活及びヒマラヤ よりカルカツタに歸つた折のことなデヹンドラナアトの傳中より拔き書きすること、せり。

田

絃

郎

身と る時 彼 りそ 雲が、今日は低い山々の麓に雨の惟をつくつて、谿といふ谿、丘といふ丘を埋めた。しかも今しがた降 t は 神の は マラヤの雨の季節が始まつた。夜となく晝となく降りついいた。昨日までは頭の上に漂うて ゝいでゐた雨は、 あらゆ 週間 3 カゴ る世 相 くらる 語 俗 つてゐる カン 打ちついけて雨ふることもある。 ら離れ 次の 他に何一 刹那に晴れわたつた。晴れた空は更に羊毛のやうな水蒸氣に鎖された。 て、 絶對心靈との つの 存 在 多 ないやうな心になることも 交通をのみ感じて しかも一 度晴れ上つた時 ねた。 あ つた。 はそこに カン やらな はなた 刹 い彼 那 には *L ねた 或 自

つであつた。正午になれば彼れは浴場で冰つた水を頭からかむつた。彼れはどんな寒中にも火を置か もなく雪は Ŀ 彼れは毎朝可なり遠くまで雪の中を歩いた。そして茶と牛乳とをとることが朝の彼の樂しみの 7 ラ t 0) ヒマラヤの脈々を埋める。雪は三四尺の深さに積る。彼れは雪ヶ分け 雨 の季節が過ぎて間 もなく、 ヒマラヤの秋 カゴ 來た。 肌寒い秋 の風 が谿 て子供 を埋 のやうに めた と思 遊ん 人間

B ちに神の の聲 ねた。 の後困難に出逢ふでとに森の夜の神を忘れることはできなかつた。神は何 神の眼 る聞えなかつた。一種の恐怖心と共に彼れの心は崇嚴な氣に撃たれた。彼れは慄然として森 暗夜の燭のやうに半月の光りが少かに洩れてゐた。た、落葉を踏む彼れ自身の跫音の外には は彼れを導いた。 眼の輝けるを見た。神の眠ることなき眼は夜の暗にも彼れを見成つてゐた。 彼れは多くの恐怖のなかにありても神を見つゝ家に歸 時も彼れとともに りつ V 嶮 た。 が組な あつた。 る山 彼れはそ のう 路 12 何

に週、 は流れ 七月八月の雲と光りとは再び驟雨の候となつた。 月、季と は大きな岩石をも流して行つた。 一年は廻つた。 彼れは絶えず巖石の間を縫って川や瀑布の美にあるが 山には雨が降りついいた。永遠の神の命合のうち れた。 雨 0 日に

*

九月の 或る日であつた。 彼れは河を下つて一つの橋上に立つた。そして驚くべき渦巻をなしては下

る奔流に見入つた。

彼

n

はその水の清冽と純碧とに驚いた。

何故にこの美しき河は谿を下るか?

彼れはかく想へた。

何故に清冽な水は平原に下るか?

彼れは再び疑うた。

水が下れば下るほど水はその純潔さを汚されなければならぬ。しかも水は奔湍をなして下る。これ

「この鑑しき心靈はあらゆる生物、あらゆる事象のなかに存在する、けれども彼れは示現せられない。」

人間の感能はた、外界の事象をのみ認める、けれども内界のものを認識することはできない。

たい吾々が眼をとぢて心の世界を見る時にのみ絶對實在の姿があらはれる。

「時として賢き人は、不滅の影を見んとて、彼れの眼を閉ぢ、そして萬有のうちに溜める心靈を見出す。」

内界の幻を見んがために靈の眼をはたらかすことを努めた。

古昔の聖者のこの言葉はいたく彼れの心を動かした。

彼れは肉の眼をもつて神を見ることをしない

した。彼が傳導者の使命を感じたのはヒマラヤの聖地に於いてゞあつた。 光明をもつて彼れの心に點火した。彼れは心の光りをもつて平原の人々の暗黑の心を解放せんと決心 彼 にとつてヒマラヤは實にブラアマの聖地であつた。彼れの心の暗黑は取られて、彼れは太陽

*

は カジ 必ずてれ等の あつた。 彼れはその樹下で冥想した。五月に入つて日光は一層强く連山を照した。彼れは晝食の後 Ш 々を歩いて或ひは樹下に或ひ は石上に冥默した。

四月も末に近いころであつた。全地は花に埋められた。彼れは毎日山に上つた。そこには一本の樹

た。 く山 て我れに歸つた。 或る日 彼れは歸路についた。けれども夜は既に彼れをつゝむでしまつた。山も森も草地も暗にとざされて より 山と歩い の午後であつた、 そして始めて、それが夕暮れであること、太陽が既に落ちてしまつたことに氣付い た。彼れは途中で向ふからやつて來る一人の族人に出逢つた。 彼れ は例のやうに山をは迷らた。午後の四 時であった。 彼れ 彼れ は は止ることな 冥想を破られ

0

彼 は彼 1 れはた n れの心を鼓舞した。 13 で平原 あ らゆる困 へ平原へと下つた。 難を排し 途中には多くの危險があつた。 つゝ山を下つた。 恰 カンゼ YII 諸所に猶は暴徒の潛 0) 流 れが如何なる障碍をも物としな めるものもあつた。しか いやうに

下りは 13 昳 をよろ 6 6 32 居 旅 等 n 月 S てあ を 32 T 0 0 十日 とば 樂で 位 3 0 泉 つた。 为 75 /m カゴ 0 南 10 H 悉 L た。 つた。 12 馬 く新 12 あつた。 そこには捕 蓮 月 生 71 力 ガン ウ 3 彼れ 5 明 w 外を眺 2 得 カ 彼れと 0) 7gm 1 水 夜 て蹴 アー 魔にされ 6 捨 麓 し彼れの 的 5 F 0 南 C で馬 ると、 0 > カ 12 つて 25 w を替 力 てねる一人の 2 そこ 行 秋の 12 70 3 宿つた。 3 1 3 はシムラを立つた。里人や友人たちは彼れとの るた 12 1 滿 0 ž 月 w 群の め に着 は 見 翌る日の朝であつた。 に止 た。 男もあつた。 光 乘 5 S つた。そこには 72. 馬者を發見した。 を空に 彼 m そこに U. 3 ウ なぎら 2 は ٧٠ ラ 艘 野 12 百 美し 達 0 彼 E 0) 73 n 泉 7 L 72 V は道 カン 720 カジ 漂って 朝暾 17 幾 中 凉 彼 つる 0) L n は い夜風 不 は 20 いたく 決別を惜むだ。 た。 0) 安を感 B カジ 彼れ 天 カゴ 校 彼 幕 ぜずに 廣 を n カゴ 野 0 は 張 * i 2 V

0) 會 12 力 の普通 ヴ 720 ン 术 驛長は彼 71 0 旅人を載せることはできなか 12 は れを見て驚いて言った。 鐵 道 力当 南 つた。 從僕 は停車場に つた。 彼れは自身停車場に行つて 行 つて切符を購 めた。けれどもた ン ブデ ル人の 車 は負傷兵運 聯長 に面

1 7 た。 南 水 デ 7 切 符 わ = 13 イの 8 差 72 です 中學校の生徒でした。」 L Ŀ W 77 女 する 宜 私は汽 L S. 車を停 汽車 をこと めさせる權利を持つてゐる に停 めはせます。 私はまた誰 0) です。 加 私は 他か 0) 南 人だと思 なた 於 .0 たの 9 ŀ C ゥ

咖 の命である。彼れは平原に下ることによって汚される、 しかる田野と肥やし、穀物を實らせる。

『汝の誇 彼 りを捨てよ、この流れの如く謙遜であれ。汝は眞理を得た、汝はこゝに歸依と信賴とをこゝ かく想 へて静かに眼をとぢた。彼れは或るものゝ力を感じ、 聲を聴 いた。

に學んだ。 行け、そして世界をして真理と歸依と信賴とを知らしめよ。』

彼 0) 聲 n これ 12 は 何 神の聲であった。 彼 n 時 まで を驅 つて平 V ٢ 4 ラ 原に下さうとす ヤにあ 彼れは非常に驚 りて育 3 觀 ので いた。 冥默の生活を續けようと決心してゐたのであった。 あ つた。 彼れは決して山を下ることを想像 もして 6 13 カコ つた。 カン

b

巷に下 N 出づるとさに、 彼 れと命じ は 嘗て辛ふじて世俗 た。 この 彼 n 神 0 は迷はざるを得 を忘れ 命令を疑はずには居れなか てと -V ラヤ な かつた。 に入ることができたのであった。 彼 つた。 *1 は耳を襲せんば 彼れは悄然として庵室 カン りの 巷や、 しか も神は再び彼 に歩 喧 騒な俗界を思 た。 れに 48

る準 徹 來 た時 宵 備 眠 は太陽 を命 夜は終 原の人となるの決心をした。 ることもできな じた。彼れ が高 12 彼 く上つてゐた。し *L 0) カジ 唇からは聖歌 かつた。翌朝彼れはまだ夜明け前に起き出で、山を歩いた。彼 何くれと歸宅の も洩れなかつた。彼れは不安な心を抱いて寢床 かし彼れの不安はまだ去らなかった。彼れは從僕 準備をしてゐる間に彼れの不安も取り去られて、いよく一彼 に就いた。しかし れが を呼んで山を下 庵に歸 つて

それ は神の命令であった、人間の意志がどうしてそれ にさからよことが できょう?」

11

「簡年の冥想の生活は過ぎた。彼れは神の意志と自己の意志とを調和させつゝ山を下つた。神の力

紙 寝ても宜 w (1) いと言つた。そこで彼れは『政府はこれより東方の旅行者の生命を保證しないと言つて、しかも唯一 で末弟ナゲンドラナアトの死を知つた。彼れは幾多の災害と弟を失へる悲しみを抱いて數日の後カ 安全路である代船をも見さないといふのは太だ不都合では 彼 ツタに着いた。一八五八年、彼れが四十歳の時であつた。 いれが辛うじて便船をゆるされて船に乗つた時にはそこには一つの船室もなかつた。彼 いか らとい ふので便船を乞うた。この航海は幾多の困難に遭遇した。殊に彼れは船中の新聞 ない か』と言つて司合官を責めた。 れは甲板に

カ

おう、なんぢ生の最終の硫就 (ギタンジャリ)の中から

流れた。 私がある、私が持つ一切、私が望むそして私の愛の一切はいつも秘密の深みにて汝の方 日また日私は汝を見まもつてぬた。汝のために私は生の法悅と苦痛とな忍んだ おう、なんぢ生の最終の成就なる死よ、私の死よ、來い、そして私にさしやけ! 汝の眼の最終の一瞥。そして私の生は永久に汝のものであらう。

絃 三郎 譯

を捨てる、そして夜の寂寞のなかにひとりで彼の女の主に逢うであらう。

花は編まれた、そして花環は花聟のために準備された。婚禮のあとて花嫁は彼の女の家

た。しかりそこには旅 村 傍に彼れ等の その 人の 傍で停つた。 家 日の午後三時アラハバドに着 に休 行李を並 息することゝなつた。 彼れ等は汽車を捨 人が一つばいで、 ~ 720 從僕 は町を歩いて宿を探した。間もなく二人の村人が來た。 彼れは殆んど飢ゑてゐた。宿の主人は神の供物と豆と麵麭とを彼 いた。 てゝ六マイ 一つの室も明いてゐなかつた。 そこにはまだステーショ N ばか り歩い て、 辛つと見すぼらしい旅籠 ンもできてゐなかつた。汽車は道 彼れは樹の下に椅子を置いて 彼れはその 屋を見出

n に興 その翌日であった。『政府はこれより東方に旅行せんとするものに對してその生命の保護に對し へた。 彼れは 夜をこの素樸 な村人の家に過した。

任を持たず』といふやうな公布が發せられた。 こに煙を立 そこで彼れは一層汽車によつて旅行することが安全であると思つた。彼れは恆河の岸に行つた、そ て、將に發せんとしてゐる一隻の汽船を發見した。

50

彼れは甲板に驅け上つて船長に面會した。

三日日 カン 5 隻の には 他 船 0 が中流 人の 再 び 乘船 カル 0 力 沖で擱坐した、 はでき ツ タに AJ AJ 出 L 帆する、 かし司 そこでこの船はその 合官の許可を受くれば便船さしても宜し しか しての船は 病傷兵を運ぶために政府 船を曳き卸しに行くのだが、一旦引き戻して に雇はれてゐるのだ

出 かけて見たが辛つと十時になって面會した。 長 は う語 9 720 彼 n は直ぐさま司合官を訪ねた。司合官は明朝來いと命じた。彼れは早朝から そして負傷兵か叉はその家族でけなれば便船はできな

見

ま六根の饑鴉のをてに如何に癒さる、かを!

送ばれ愛人を知る戀人はなし 選 **圏彰那河の相交するが如く愛と光明の合流をその裏に持つ人、彼ぞ散度なる求道者。**

その心には聖なる水日夜に流 生と死との輪廻 かくして終る。 32

見 よ至適靈の中如何に態異なべき安息ある!

Mi して自らてれに融合するものこの境 法院の海洋の波動は前後に動き力强き一音、歌となつて湃る。 を築む。

愛の絲

は繋がれ、

よ水なさは咲くこの芬陀利華!

11 E **モルロる。我がるの蜜蜂はその花蜜を吸ふ」**

僅 宇宙の紡事の軸に殴くこの花、 に精浄登靈の みをの真の悦樂を知る。 いかに驚嘆べ

き波頭摩!

音 樂は 办 四 邊に 充ち、そこに心 は無限の海洋の歌喜に参與

カ E* 7 w 日 く「汝を芳香の海に追へ、斯くして生死 0 顛倒より放たしめよ。

での日本

53

全世界は慣開し又顚倒す



grah candra tapan jot barat hai

日と月と星の光は輝き踊りではは最後の一番とう」 愛の佳調は波打ち愛の光明は旋律を取る

対明の合唱は日夜天を充たせり、

th E. イルは巨く

我 が愛人は天なる輝ける閃光の娘で光照す。」

列べる燈炬を搖がして宇宙 汝日月星辰はいかにその讃嘆を演すを知る と秘密の天蓋あ は書と夜景の歌唱る。 11>

見えざる鈴 0 音 は 聞 (D)

そでに

隠したる憧幡

b

2 世 か日くてるとしに不断 の職拜あり、 そこに宇宙の霊は彼の獅子座で坐せりで

司

我は奥義の鑰を見出せり 我は渾一 の根に達せり。

他の足跡によらずして我は無熱池に至れり 大主の慈愛はいとた易く我が上に下れた意

人は彼を無限者過境者と詠へり

寔にそは無苦惱地なり、 ななしみなきち されど我は我が冥想衷、見ずして彼を見たり されどそこに導く道を知らず、

洵にその道に上げる人、すべての擾亂を超越せり。

嘆美くべき哉安息の地、 この地、 如何なる功徳を以てするも獲べからず。

これ究竟の道。 てそを見しものぞ賢者。 如何なる享樂を齎ふるかを知る。 しかれども誰かよくこの讃美すべき香を示はす。ひとたび此の香を聞きし人、彼は てれを歌ふものぞ賢者。

その

カビイル曰く「これを知るにより」愚痴は賢く、賢者口を閉ぢてたい默す。

歸命者は歡喜踊躍し 愛の出息入息の杯より飲みて

その智慧その光明完全し。」

三苦の相早く既に亡し

而して無相者の月光如何に汝の衷に輝くかを知れ。

力 ビイル曰く「こは離言者の遊戲なら内を觀、

無絃の音樂聞 大歌喜迸り出で、空間は光にて輝き充てり。 そこに生死の旋律的鼓動 あり

法鼓鳴りて人、樂に舞躍る。 てれ三界の愛の調。 日と月の百千萬の燈炬そこに燃え

歸命者天界の花蜜を吸びて恍惚。 梵唄鳴りわたりて光は聚雨と降り

仰げ、生と死とを! その間まさに無分別

右、左、そは一にして同。

カビイル曰く「そこに學者は口を滅す。夫れこの眞理は文學の中に嘗て見えざるものなればなり。」

我はいふに絶えた甘し杯を飲めり 我は自受法樂者の上に我が座を設けたり The state of the s

, e e e e e



力 E イル日 3 そこに我は無量の遊戲を認たり。

願倒 そと

入

75 充

12

何 0

空餘

かあ

る。

17

ち

満て

る怯悦なり愉悦完成し

我 は 我が 體驅の中宇宙の遊戲を見なり。 の顛倒よう脱れ

R

は

この

世

72

5

数の 內界 我は この 此 外界は 0 光字 切即 富 一定となり有漏 0 and the 成 相 就 を観じて必身、 业 方 と無漏 とは

悦象。

(

— 致

せり

37 5. 性 n ぞ駒 . 4 ル田く「顛倒はそこに入る能はず、生死の葛藤早く既てむし。」 に智慧臺上 9 愛の 燈炬。

556

,14

全容は妙音を以て充ちその 力 2 4 及因為「 汝もし汝の生を生命の海に没入せば、 樂指頭なく終 なきに鳴 る。 汝は 快樂と苦惱はた 無量義の至上地に汝の生を見出さん。」 **い園林の遊戯の** み。

見 よ踊 躍 歡 喜嘗て絶ゆるでとなきを上

歸命 者 は時 間 の本質を歴控 りて 飲

だの 我 は眞 坐 理を語る。 命 to 旅て 生会 我は生命の異を享け 9 2 あ b.

たればなり。

今や我、

真

理に附屬

す。我は總

ての虚飾

Z 拂 2

鍵なみら始後息 5

力

1 ル 日 く一類く て歸 命 者 は 恐怖 より 放 たれれた 50 斯くて生と死との顚倒はすべて彼を去れり。

天空樂音 心に充つ

花蜜降 な法 1/2

見よ天 季 の絵 の出没にい 鳴 が独鼓響く 跡 いかな な 3 かの秘密

0

美

-16

5

永劫の 愛光發露 | 数喜地 (0) 海 中が日 苦悩なく擾亂なし 校 は 72 >r つな 300

す 進 T め 7 西 る んで支那 洋 居 0 るが 倫 カゴ 余 理 、余は 史 0 史學 との 理 思 想と 的 關 これを印 研 係 日 究 7 0 穿鑿し、 本 目的 倫 度より始 理 思 6 想との あ 吾 る。 め、中 R 0 當に 余が 關 世 係を力説 一史に至り印 東洋 導守 倫 すべ し、 理 、含大正 學 度倫 てれ 史 12 理 を徳川 於て 現 思想と支那 下 印 0) 道 時 度古 代 德 代 及 まで 倫 倫 CK 理 將 敍 理 思 史 來 述 想と に重 0 道 0) 明 德 さを置 治 を 係 明 時 J. 示 < 力說 は せ 12 此

を試 為し 渡時 0 理 る。 より 直 由 年 ちに 以下 降 7 12 頃 4 叉 余 基 る より 倫 2 を啓蒙時 てくの は 2 は 理 0 12 吠 即 0 6 說 紀 ブ 6 ラ 度 陁 特 は 述 元 一古代 あ する 微 無く 前 رر 0 6 17 末 代 -V2 小 ٤ ナ 0 葉 倫 關する批 其の 論文は 0 卽 其等に 名づけ 0 理 時 史 0 5 を 本 代 年 紀 と名 源 る。 四 判 關 此 頃 元 を究 だけ 等 即 前 期 する 12 0 其 づけ 度 分 E 知 74 め MA n 7 0 T る。 H 期 より 極 識 1 〇年 末 ij T は 0 め 取 旣 時 紀 其 p 流 1 民 E 12 代 元 m 頃 扱 簡 讀者 より 清 族 迄 2 に現 單 0 を第 2 頃 カゴ 的 17 迄を第 隆 恒 居 んとする は 爲 17 る。 L 於て n 0 河 7 期 T た 0 と為 大凡 E 充 見 偷 紀 四 期と為 0 る 分 元 流 理 に出 し、 即 心 0) 12 說 前 度文 有 四 で 力ゴ 0 し之れ 之れ [七七年 でた 敍 あ 目 せら 述又 化 る 的 を吠随時代と名 時 n 0 0 迄を第 佛陁 史 7 は あ を前期佛教 的 店る 生 る 紀 起 の入滅までを第 的 元 二期 なる紀 褟 時 Ł T 係 「づけ 爲 代と解 (1) しさ 初 發 元 前 抄 展 n 路 L 三期 的 を過 T 說 居 Ł 明

、随時代及び過渡時代の倫理の特徴

吠

唯 は 神聖 即 度 3 あ 7 る吠 1 印 IJ 度 陁 P 固 集錄 Ârya 有 0 道 Veda-Sksamhitâ 德 民 族 思 と非 想 な る 7 1 4 IJ 0 を有して居た。 p 13. 吠 Âna 陁 ârya 時 代 1/3 民 族 此 ブ 50 ラ 0 經典に現はれ ٧. 二種 -70 ナ よ 時 9 代 成 0 5 て居 道 德 前 る最 者 思 想 は 1 精 6 有 市中 あ る。 0 的 道 作 當時 德 物 思 想を 7 社



印度古代倫理の批

條

忠

衞

緒 言

研 代倫理 洋倫 脚 理 理 6 輓近史に至るまで以上の如き順序に據るのである。 史によれ 由 i すべ 思 現 思想を有 究するの なけ る。 想 在 理 3 で 吾 學 史であり、 東洋 ば、 あ 史の 倫 々日本人の n 理道 して ばならな は る。 第一 西洋 0 不完全なるに留意し、 居るの 倫理 徳を學術上より論定するには、必ず日本人として東西兩洋の倫理學史の 前者 第三章は日本古代倫理史になって 編 倫 思想は 有 理 0 は古代倫理學史であるが、其の第一 Vo 學史 して 生 みならず、 余は此の意味に於て爾來斯道の史的研究に 起 ED 居 的 0 度支那 る倫 任務 關 係 理 日 6 を 明治 日本の 本 あ 思 系統的 の社會に棲息して居る關係よりして、吾々が現在 る。而して大正今日の日本人としての吾々は、此の東西兩洋 想 は、 四十年頃よりその に研究するのは東洋倫理學史の任務であり、 倫 東洋 理 思 想 0 6 倫 居 爾來諸大學で講じて來た東洋倫理史は支那 南 理 る。 3 思 章は印 想と西 以下 組織 西 洋 度古代 第 的 0 洋の倫理思 研 倫 編 從事して居た者であ 究に努め 理思 1 倫 理 世 想は希望 史、 史で 想との混淆した形 7 居た。 第 あ 5 臘羅馬 三編 第二 余 近 結論 後者を同様 酒 0 る に於て正 世 太歐 章 東洋 カジ 史 0 は支那古 米の Ŀ 小より始 殊 第 倫 B 12 12 12 0 四 理 學 東 立 倫 17 0 編

んば止 學的 itualism 又は具體的 0 0 知 彼 6 ラ して 正理 0 を有して居る。 を得ると否とに 研 を得 F 習 入り、 あ 111 カゴ なの 界であ 究を具備 俗 遜色 り價値規 史 る方法 12 ンのイデア となり、 かず 抗 唯物論となり、 加 Welt り價値 特徴である。其の研究の方法は主として演繹的であつた。 泥 13 一流 真我に達することを主張し、 せね して居 0 すること無く、 をして論理學に入り、是目の古因明となり、陳那 範 S 蓋 als 0 此 よつて善悪を生じ輪廻應報すると見れなどは、 四 の世界であるならば永久 カゴ **吠世** 規範 の點に於ては因 ばならない。 量 1060 一元論 100 Will ある。 十六部十二量の 0 論と同 師 先づ優姿尼沙土 挺 六句十句義論を寫 迦學 und Vorstellung Concrete-monism 故に倫 界であるなら 唯だ自己の主 派 殊に主観上の我 0 0) 理 一明の 見地 如ら 説を爲して道徳の基礎を確定せんとしたのは、 說 には に立 論理法 12 カジ ば泳 に真理で T 0 必ず其 實化 觀 に道 梵の世界と現象 つて つて 根抵を築いたのは蓋し謂あることである。尼 に依據し自由思想を開發して、 久に は の自律 德 居 は 7 Atman was ある。 0 眞 ŋ アリ る。 0) 此 根 理 根 ス 0) 柢 カゴ 松 若 ŀ 尼 ス Autonomy で置 14 ラー 2 南 1 夜 þ. 哲學 3 の世界と公説 7 3 耶 ラ ーペン 方式 ラ 242 1 學 W 的 刻く、 んとする企で 1 W の因明正理論となり、 þ 派 論理學を 4 基礎 力 於明 1 1 ス 0 の十範 客觀 ۱۰ 論 ス 3/ 故に倫理説 ウエ 優婆尼沙 論 0 示 理 0 4 的 4 地區 方言 超 學を基本として 演 なる身 W 南 デ 越して 繹 nazylubian 5 精靈 合理 南 が優婆 ア は 法 1 7) 6 X を構 先験 宝 的 0) 世 心理 Sarira Id Prana を談 宙觀 に真 尾沙 H 其 梵 界 378 商羯 成する 力 又はカ 0 0) カジ 13/3 n 的 义 理 土を激賞して 被那學 更 IC 研 不許本の 不許 點に於てはず 唯 0 論 は K 究 12 理 宿 雜 12 認 趣 的 > 納 5 と元 求 は 然哲學 因 派 識 應 0 ŀ 世 心度に 論 凝知 明入 が真 のナ 倾 17 1 b H

で

た

カゴ

逐

に萬有神

秋

Pantheism

ping.

權

移した。

窺 0 M カゴ 1 太 20 特 8 徽 0 有意 然崇 南 3 拜 的 湖 な 0) W る人 原 始 は 格 的 神教 施 宗 を対 数心と一 Monotheism. C. 7 體 古凶 1/2 嗣 なつて居るの 福 を耐 り、又二神教 6 TO TO 現世 吠陁 的 Dusthesm 一神話に現はれたる道 て樂天的 0 か Ď なる 双多 A 生 神 觀 德 教 思思 を有して Polyflicism 力学 卽 ちそ 72

Dinakanda (行品)の存するの 0 Z 傾 するに 闻 时机 に進み、 どる歌 至つた。 部 想 時 は尚 吠陁集錄 Svadha は道 はあ 中の 又は慾望 德 04 其 阿蘭 研 究 (1) 意識 若迦 Kama い願 IZ 就 的 Aranyaka "," 10 研 ては無意 究に して えら 唯 藏 の時 心 えとする 獨學 THE T 代であ 的 建 0) 著 駄 傾向をも生じ、 るが、 L Karenekanda in 說 吠随 據 で 3 0) る 知 死及 末 寒より 品品 23 及 茶 漸や CK 世 者 0) 觀 思 那 辨 建 念 的

とは 僑 分 55 に於ける漢 三次に姿羅腳那 於 なる啓 理 留意 思 时 4 想 3 た。 3 蒙 特 儒 評 徵 運 18 來 動 -6 0 は 世 \$ 傳 40 氣 7 0) 統 は吠 運 10 赋 出 學 1 カゴ 蓮 忆 該當 随 熟し 目 間 は 度 0 的 退 道 To T 园 世 t 南 居 0 1 德 有 6 居 思 京 (1) 行 カン X 3 想 寫 を繼承 非 0 生 0 12 けれ 12 雅 觀 因 會 為 加 R 3 的 的 نځ で報を受 L てい であり、形 Vim > 偷偷 12 昳 古に 確 陁 埋説の正體を見ることが出 H W (1) L 拢 和 樂 たな ば 泥 天 而 なら 雪 的 上學的であり、益 石 であるに所し 死 邇 ¥2 量 と見 渡 93 觀 规 たの 念 (2) 拉道 1 "III" 作り當 輸 話 週 學 なその特徴 一來な THE 說 龙 筒 03 (1) あ は 婆 崩 0 カジ 12 永 羅 芽 總 ri 脛 3 を發揮 有 猶 じて 思 那 は ぜん るえ 支 其 0 偷 0 充 DI. 那

思辨的研究の發達 啓蒙 18 代及 此の期に入りては一般に思辨的にして内省的研究に富み、心理的論理的哲 び前期係教時代の倫理の 特徵

其

0

頂

點

12

達した。

これ

か

印度が精

神

的

文明

V)

淵叢で

to

9

73

カジ

5

物質

的文明を見るを得

15

カつ

2

72

カジ 代 國 17 な 17 入 3 だ 於 3 42 C 7 0 至 は、 8 つ 教 中 武 た。 示 T + 藤 道 支那 樹 12 0 影響し、 近 唯 世 27 心 入 12 9 及 論 叉は CK 7 的 7 15 ---は宗 元 荆 邦 楚 論 儒 學 的 0 明 世 思 0 派と合致し、 界 想 儒 觀 1,2 敎 多大 に影響 9) 如さは、 な 日本に渡りて奈良朝平 る L 刺 7 佛 性 戟 教 を 理 與 0 0) 思辨 へた。 學 12 關 的 支那 興 研 究 4 安朝 0 12 影響を受け 我 於 1 力ゴ 0 社 は 鎌倉 會 Ŧ 陽 時 12 思 代 12 期 索 德 义 的 は 11 0 我 時 1 研

輕ん 實驗質 あ 5:11 1 らな 5 然 3 居 0) じ、 演 科 殺 科 經驗 即 智 證 學 權 カン n 怪 演 度 42 的 0 0 0 9 17 EN 繹 的 H 72 訴 發達 發達 成 랓 科 10 n 派 的 0 73 ず、 を啓 研 其 學 倫 吠 み る 3 V は 0 理 促 世 發 所 究 0 極 ----を離 缺陷 動 主 さな 發 端 m 以 12 師 展 走 觀 B 3 15 12 す 迦 6 がたて せて、 あ す つて n 3 學 は る主 V. 客 斯の て考 導 る。 n 派 啓 其 引となら は 逐 觀 觀 0 如く ~ 10 一發的 普 尼 形 主 他 如 調 ることが 歸 校 義 數 25 遍 和 即 學 は 對 納 耶 L 6 12 度古 統 É 特 學 學 的 占 73 捉 あ 然哲學 り作ら、 星 殊 派 12 研 V. は 代倫 L 出 入 究 術 0 0 n た 來 順 要 0 如 6 逐 0 主 3 荒 態 理說 な 世 17 件 如きも 12 觀 入 は 唐 度 S 傳 其 型 た 關 客 3 は 派 6 3 無 0 0 統 唯 失 思 係 無 歸 觀 稽 根 0) 0 的 辨 を有 物 納 世 2 71> から 如 字 柢 0 きは 界を十二量に差 言を た。 0 的 的 あ 論となって 宙 12 た 1 6 研究を怠り、 12 於 觀 7 乍 弄 2 カジ L 純 7 人 居 し、 5 然た n 為 7 生 は 主 る。 カジ B 常 觀 恠誕 居 彼 12 觀 其 る 3 12 等 3 的 唯 脫 吠 0 逐 な 陁 發 物 12 遂 別 0 0 L 6 に科 倫 達 論 拘 L 說 12 得ず、 ブ 客 ĺ は き 1 ラ r 6 らず、 學的 ことは 見 居 爲 說 觀 南 1 な L 8 カジ 吠 7 15 6 カゴ 7 非 誹 法 檀 ナ な カン 5 甚 迷 科 謗 又 カゴ 即 則 0 多 だ た。 學 5 度 學 は な 信 T 捷 因 12 優 0 る 派 没 明 經 所 12 2 天 遊 3 17 m 0 即 驗 0 地 0) 至 尼沙 n あ を 論 L -1 3 12

せられ、 學 0 派 瞑 其 8 あ 想 12 派 4 Monadologie 思 至 z 世 連 は 12 造 0 0 索的 主 其 つて 瑜。 續 界 東 L は 梵 6 說 中世 て三 Kategorie 支那 0) 觀 を せ 72 天 あ 研 in 最 る 12 感 る。 論 爲し、 0 で に入りては迦賦色迦王の時下に馬鳴を出だし、 空 理 も精 た 人格 於て 覺 屬 量 あ は 的 於 性 婆 に近 0 論 及 書 3 佛 論 緻 は 道 羅 25 て摩醯瀝代 とす 辨 0 3 び 經 とな 唱 教的 理 類する 識 理 門 證 似 0) 經 優婆 的 論を爲 穀 十 洪範 CI. る 法 驗 6 哲學 Viññana 75 點 はそ を Ħ. 說 ょ 尼 物 其 12 加 諦 九 J 其 羅 し、 9 的 沙 質 於 0 味 疇 0 Empiricism 0) 0) 思索 説を立 T を以 あり 0) 土又は 7 梵天 12 i 原 Mahêsuvara 佛 宇 無我 は 於け 12 子 1 て字 教 42 宙 歸 論 爾 12 極微 於下偷 僧 觀 て、 0) に於 來 る 地 L 論 2 生命 に於 を唱 企學派 72 π で 宙 ٰ 0 水 %分子 更に 7 認 0 0) 1 行 火 か 即ち ザ とな 理 V は 本 N 識 說 風 6 0 世界の 0 る対 或 Mill. 尼 に似 0 的 0 見解 大自 人生苦 でを耶の 5 は佛 先驗 と寫 根 實證 汎 論. JU 論 柢 神 理 C 種 は を唯心 紀元 學を 居る。 は 陁 在 開 L 的 論 あ 論 デ 古 天 + 心 酸を梵天の 0) .痛 りとせ 的 Pantheism E を説 認識 來 思 組 理 0 クリ Positivistic 其の後ち龍樹世親無著の 世 量 辨 僧 論 0) 學 緣 織 200 研 紀 的 的 及 因 は 說 企 2 的 F と吹 17 元 究 學 は 研 CK 感 12 ス Pațicasamuppâda 覺 慾 3 究 認 統 派 30 12 工 0 育 論 組 切 識 より出 世 0 0) 2, 原 繼承 智 0) 結 せんと試 王 12 論 致し 師 至 ~ 織 子 つて 置 境 果 迦 b 0) 的 傾 論又は 體 であ 6 希 向 たと解 0 力 カン 0 T Kaivalya-研 あ -は尼 を有 敎 んとす 系 V 居 12 に集 る。 缩 み 句 ると見 ス る。 ラ を究 義 极 6 L L た 0 よつて 月 大成 これ る 南 7 0 論 耶 四 如き佛門の龍 順 ブ とを た 精 學 3/6 を唱 るこ め、 居 は 世 元 = せ カゴ 0 市中 頗 素 派 TLI 0) る ッツ 之れ 吠檀 と明 は 方 6 る る 融 0 25 物質 あ B 佛 唯 思 合 論 0) 12 12 辨的 單 傳 2 觀 カ> を 物 L 暗 論 7 法 子 6 行 6 合 象 播 は

(四)

至善

觀

念の

發達

即

度古代倫理

は至善

0

觀念よく發達し、

人生の

究竟目

的

を描

200

理

想

的

自

我

樂淨 學 な 6 生 動 辯 随 的 寂 派 と思 苦 倫 は人生 目! で 國 的 土と為 且 切 共鳴 現 度古 惱 理 あ 民 9 自 衆 惟 遁 全 3 印 る なる 原狀 すりに を絶 る 然 局 生 度 ·L 代 となり カン 科 を度 72 寫 り悪 7 とな 0) Ġ 0 倫 を以 至 學 A 體 鄒 め 理 厭 に復するを得 **验**魯 E 脫 6 17 6 0) 的 36 0 世 6 て、 學 非 觀 せんとする大慈 あ 發 に厭 は ある。 厭 0 觀 明 る。 苦 治 妙 達 世 苦 は 社 力) 世 腦 これ 觀 惱 極 會 12 6 17 0 から 是れ 悪の 記 樂天 的 大 無 押 と戦 端 至り樂天 は を する を精 な せば 人 個 12 72 とな 力〉 悲哀 存在は決 觀 る 生 走 9 N 人 けれ 6 迷 72 12 ことが 觀 的 0 邮 抗 基 悲 罪 た 的 觀 爲 は に於 に又 信 文明 ども に基 L 不 12 0 aLZ. ___ 惡 カゴ 的 躍し 出 活 陷 根 0 17 12 して善の 為 7 は 因 打 12 來なく IF. 祉 め 物 < 日 動 6 柢 T 融 質 歐 逐 に於 つて生ず 12 會 12 本 的 勝 積 合し 米物質 半 的 的 12 文 12 0 弊害を生 O) 可能 文明 て、 7 K 女 現 極 12 入 1 面 りて 輪廻 て進まなけ 族 實 的 0 防 を害 は る 厭 初 眞 的 0) に常樂寂 禦 文明 は 化 現實 源 世 其 世 的 10 理 1 說 泉とも 界 的 7 さない。 0) 大 7 12 1 幸 告げ 安 悪 和 72 で破 を苦 基 0) カゴ 0 輸 靜 思 n 用 民 0) < 人生を解脱 福 ば人生 H 人 叉 K 宿 0) T (1) 入 族 0 と治善とを得 故に吾 すること 生 は 10 理 居 淨 によう 0) あ 迷 命 樂天 一想界 た 不 る。 來 士 安 渝 占 0 李 11 72 -(0 2) 等な を飲 ロヤが 破 らし 惱 常 觀 Te 世 して 此 あ カン 重 0 樂 壤 を滅 0) 界 6 自我 出 書 存 12 3 5 思 と関 求 ることが 8 h 痛 逵 來 3 分 n E ね L 想 來 る。 はず I 西己 7 は E 11 0) 7 なさ人 ることは なら 支那 得 12 16 奈 思 此 理想を創造 死 金 if 75 E 良 想 後 0 CX 生 樂天 4 來 32 ¥2 V n 朝 13 0 一を求 ども 2 界 必 は 靜 世 明 4 入 部 逐 的 12 安 6 寂 な 沈 な 朝 荆 圣 かう 12 印 め 的 衆 楚 淪 得 南 る 明 活 度 لح 極

65

具體 を阻 本 虚 0 法 確 遠 ガン なス 物 則 0 因 カコ 景 的 3 12 Š 27 6 万 りて 拜 發 办 く難 る自 此 盖 見 長 1 生 也 物 所 H 0 0 本 洋 然 殖 質 短 R FI 茶 を害し 器崇拜 的 E 12 の質象 有 應 زيا 交明 は 古 7 ----0 其 即 15 Ti 代 The same 、後世 (1) 度 ガ にまで堕したのも是れ 居 200 偷 0 亦貧者 リレ 見る 香學 つた 精 72 理 カジ 說 神 9 1 0 に濫觴 0 的 カゴ 東洋人一體が 服 は 道 変明 0 たらし 心 を閉 頗 無 德 通 87> 8. は 3 0) 的 遺憾 0 5 的 有 經 論 礼 た所以 たてとを し倫 臉 理 0 15 的 值领 T 此等 カジ おしなべて非 理 3 事 哲 非 原因 であ 过 短 科 實 學 0 これ 遺 所 12 的 些 抽象的なる古代教權 であ 30 饭 C T 的 10 とす を裏 あ 脚 (1) 0 10 9 中 あ En 2 科 世 書 特 72 3. 5 學 2 に入 ·同 殊 0 的 隧ば Ti 時 的 は の民 めて印 思潮 内 My me 鎏 其 容 道 形 族 は U.C. **金宝** M 117° to the に壓せられて舊套内 此化 支郷に 度 EU: PF 歸 00 h 一个教 學 度 The state of the s 納 HE. 0 3 lin 的 0 L 入りて支 世 天 失 7 獨 たのである。 的 其 地 な結 形 圖 となる に於 根 式 (C 陥ら 果 概 を演 那 中 1 22 12 科 M 繆 を害し、 動 於 予は之れ 植 學 5 To 0 響 物 -10 3 紫 發 遍 F 得 3 目 に

樂 樂天 吠 うと 世界 0 る 種 = あ 觀 る 多 爲 Samsara 1 學 76 C 16 翩 生 此 派 殲 して 佛 潮 0 0 则上 り之れを苦 如 陁 苦 0) 居 2 は 缺點 12 痛 設て は 生 慾 3 迷 0 死 望 は 安 かず 病 印 0) 苦を説 度古 痛と見るは誤 特 E" Maya 册 徵 界 次 6 J' 3 代 を以 4 な 倫 办 罗 理 る。 7 A 0 0) 1 婆羅 つで居 佛 厭 生 稱 人 を 随 世 せる 世 以 0 門 觀 等 る。 如 E T 發 きは 同 は 無 悉 0 而して 皆 常 **\$**: 如 其 0 13 25 厭 Апісса 好 は 世 南 因 苦痛 世 觀 例 13 果 . 0 應 界 -(To 0 報 あ b 17: は必ずし 0 世界と為 30 m 成 Zo. 0 E 思 D. 優婆 功 蓋 想 型 36 其 28 悪 E 駅よべ し、 とな 尼 A 0 基 沙 厭 學 X .. 生 し人 0 世 輸 土 A ST 死 14 現 觀 硘 大海 生 管 說 現 は r 實 (1) 何 12 25 0 根 書 0) 礼 は Samsâra は 腦 世 書 38 柢 界 罪 111 U 痛 終 VA. 72 隨 20 36 局 1 無 尚 40 厭 25 又人 ら快 於て 為 成 阴 世 觀 n

を 此 知 0) 說 受く 目 では 度 0 無 とな 解 カン つた。 脫 5 觀 は 寧ろ 宋 中 儒 世 0 42 知 性氣 識 至 を以て情意 5 支 論 となる 那 51 5 入 3 を撃退し、 我 7 儒 カゴ 邦 教 12 12 單 於て 影響 に禁慾的意志 は L 伊 李 藤 翰 東 涯 0 の復性 復性善 の一點を肯定する主知 非 論 論 に影 面 響 42 於 た 7 老 說 であ 0 影

倫

理

學

史上

12

於て特

筆大

書すべ

き事

件

で

あ

る。

內 72 通 形 に影響し 6 L 容 各 iffi H) カゴ 2 Mahasiddhi 4 は 上 12 偷 論 陰陽 學 各論 理 關 後 的 maggo 叉 \$ 世 研 7 止 學の大な 的 多大 まらず、 學と合 的 る各 0 究で 絕 研究 倫 署 0 0 な 論 論 權 は 學者 如 貢 0 的 Vo 致 る特徴で 12 具備 4 瑜 研 L 拘 獻 これ を為 伽派 主 究 は 7 36 束 を具 3 悉 " として 0) カジ とな L FI あ な 0 ス n 普遍 八觀 度古 9 た 體 ŀ 7 V 6 テ 密 居 76 的 法 代 誇 然 た V 教 0) 12 的 倫 中 6 實現する るに 1 6 形 12 > Abhyasa 理 世 3) 0 式 附 ス め る。 は 即 12 隨 あ 0 12 12 る 度の 科 理論 關する哲學上 如き又は中 す 至 手段 0 3 學 其 9 如きは 倫 迷 的 7 的 0 信 印 研 研 上 12 理 度 究 0 L 說 究 12 化 教 顯 各 7 は此 世 12 12 自 進まず は 著 論 0 0 L 12 の方 基督 た。 幾 原 漸 75 的 我の普遍 多 研究を 論 P る ĺ 經 面 的 敎 西 0 36 そる 研 倫 洋 迷 獨 驗 0 76 究 理 倫 信 斷 的 6 的 備 に没 的 あ 備 形 0 理 12 0) 如きは 5 式を へて 說 材 陷 分 へて怠らな 子 頭 は 料 6 を供 迷 後 居 論定せんとする L 主 カゴ とし た。 2 此 信 世 あ 支 0 L 12 0 儒 兩 7 化 た 那 佛 カ> 支那 つたことは カジ 陀 教 方 原 宋 明 0 面 論 0 を具 絕 八 如 的 日 瑜 0) 原 < 研 本 伽 えず 倫 IF. 特 究 12 論 0 理 殊 -渡 梵 思 的 6 八 居 あ 研 的 楠 想

0

67

から、 虚く 個 人 對 極端なる個人主義又は利己主義であ 國 家 (社會 観念の 缺乏 削 度 古 代 偷 つて、 理 說 同時 は 世 * に非社會的 厭 CA 自 己 0 非 解 國 家 脫 的 0) た 6 め 3 21 る。 生 故 Ŀ 72 17 勢 0) 6 7 主 あ る 觀

988 耶、 達 0 を脱したる自己の佛陁 25 0 カゴ 行 倫 12 0 志に屬する行為を如何なる價値規範に率由して行ふべきかを説明せんが爲めに情意を調和した上の主 形式を論定する せんとし、 切智境に達するを説き、 境を説さ、 復 は、 主 到 6 歸 吠 是 達することを以て は n # せんとした。 主とし 快樂說 を修して知者となり、 これ 承して カゴ 師 反 極 迦 爲 端 して情意 合理 て主 め カジ な これを人 僧企學派等は何れも真知を以て道德律と爲し、標準と爲し、 倫 を主張した。 で 來た結 る 說 あ 理 風 個 知 此 る。 0 カゴ 說 Rationalism 0 人 大に行はれた。 中 人生の 生の の點に於ては荆楚學派の復歸說と同一である。 方面は冷淡となり、 果であ 主 Buddha Intellectualism 心 先づ優婆尼沙土 義、 的 吠檀多學 目 研 佛陀は自己の 自律 究 的 る。 梵天 達磨 究 元竟目的 禁慾主義 になつて居る。 隨つて缺點 ち滅 說自由 派 Brah-man Dhamma それで何れ 0) は 諦 とした。 カジ 此等を統 上に立 說 Nirodha と寫 内心の Ascetisism 完全説 Perfectionism の 擊縛 其の である。 もこれを継承したことになり、 た 42 斯の てられた合理系完全説である。又同時 極端に Bandha を解脱 彼等の るべきことを説き、 の倫理説にも理想我の性質又は其實踐に關する 所得たる菩提 歸入せんとした。 一して梵を説き、 如く これは吠陁優婆尼沙土の印 した。 至つて終に禁慾主義に化した。 學説には必ず解脱説又は道徳的標準の 優婆尼沙土より吠檀多に至るまで、 瑜伽 Moksha して其の最上精 Bodhi 派 須世 我は梵なり Aham Brahma は観行 新生なる涅槃 婆羅門教 を説き、 學 派 瞑想を以て大自在 人我を解 端緒 は快樂を以て道 良心 はまた苦 度正統學説を印 を開 因 0 Nibbêna 果の 知 V 脫 に禁慾主 其 的 支配 7 神 行 L 方 0 禁慾 て眞 なる真 居 主 面 德的 卽 苦 即 天 る。 知 0) 八に入り の境 存 5 痛 0 知 義、 度人 度古代 發 說 尼夜 する 研究 至善 我 の境 0) 達 は 我 12

域

意

カジ

る。

12 邦 壤 杨 颜 陷 3 F カン 朝 人 端な 120 加 遙 道 的 は に於 3 9 3 在 で 家 と極 n 2 貧 容 族 る 1 B L 7 ス 本 7 國家國 階 端 弱 n 寂 THE 25 6 居 R 級 3 Ti 法 115 K: N 10 る。 た E 主 4 制 力 及 南 カゴ 妥協 淡水 1/3 2 的 3 等となっ 度 E 3 為 有樣 と調 同 よう 12 03 的 君 12 墜 小代 主 主 或 10 L 和 家 國 l 7 0) 益 制 騘 は 72 1 家 議 奈 をの 6 は した個人であ 疑 7 12 制 齊家 國 的 明 あ 弘 良 場 が、今や資 家 0 朝 ME 治 20 3 6 9 又は平 發 72 居 T 的 治 < まで持續 南 此 る。 h 9 明なく 力了 國平天下等 になり 專 0 1: 為 めに、 った。 貧富 本家的 200 蒙 T 制 朝 來 物 個 L 君 72 初 った 質 0) 0) 人 主 階級 文化 修身又は格 3 的 個 封 め 0) 國 客觀 然る 重 0 文 人 建 6 明 6 0) 制 玄 即 h 的觀念に あ 作 じな あ 0 根 世 12 度 度 2 惠澤 泰 思 る。 柢 界 に變り、 0 72 物 た 1= 西 想 42 10 カジ 0 致知を以 は単 0 Uf 屬 堕して、 カジ 0) カジ す 文物輸 傳 2 君 無 AL る特 貧富 H E 命 來 0) 臣 力> * 門 淵 0 4 d つて 见 殊 に於 途 72 個 润 3 4周 0) 入と共に 爲 的 人の に及 階 士 人 0) 2 統 7 經 級 祭 7 0 0 的 を生 に 權利 觀 治 與 h 極 政 驗 して 人ると共 此 で絶 端な 念 泰 國 J. 致 00 義 じ 1 H 0) 0) 內 居 る 6 要 0 務 720 制 對 至 交 道 谷 る 絕 つて に冷 度 3 的 5, と古 點 朋 F 佛 は 封 個 對 は 15 4 微 教 は 建 的 人 飽 朝に 思 支 且 75 何 な結 0) 國 から 100 藏 く迄 那 權 4 制 想 家 0 ٤ 儒 を L L 人 利 果 H カン 輸 入り 7 な 1 觀 6 我 7 敎 破 6 6 居 12 0 念 カン

た。 Jil: 0) W. 歌 禁慾 泉 な 的 思 發 男館 想は 12 於 婆羅門 女卑 支 7 女子 那 は印 12 教 7 入 度に於ては中世に 惡 0 0) 禁 魔 B 慾 Ł 本 主 寫 義苦 入 り、益 情 行 ※ 妄想 主 ħ 至り、 義 馴 12 致さ 於 て絶 目 れて 度数になるに及び、 頂 男子 0) 12 避 達 35 L 象 生 12 ٤ 殺 爲 與奪 梵 L 天 72 0) 女神 男尊 權 Brah-man 3 派を出だし、 女早 則 0) るに至 は 思 質に 想 13 宇 男性 P 老 然 12 で る 南 即 度

を有 * し、 對 化 論 觀 ざる 權 寥 6 邦 0 L 計 爲 せ 便 會 ことが 通 あ A 4) 0 め は 能 R 7 非 梵 宜 元 國 者 E 12 功 的 る して 6 0 27 生 よう 1 利 社 民 V 12 17 12 変ね て衰亡せ 個 非 適 會 活 義 原因 カゴ 相 非 性 主 たが、 に關する權利 的 客 を生 人の 博 用 義 的 對する 社 Conventhonalism に陷り、 道 であ して 此 觀 て自己は 愛 0 民 會 分 徳を認める點 族 Ŀ 威 的 0 的 0 個人で 家的 後世 後 思 子 12 り、謂ゆる彼等の因果應報である。 統 た。 で 非 所以 あ 世 想 化 を甚だ 或 6 1 者 卽 Ш 0 關 極 は 家 あつて、 印度人 0 係 基 義 的 5 林 め 6 自己又 非社 あ 7 督 務 に於て權 0 あ 主 12 しく失せ る。 社 敎 なる に於て缺陷を生じた。 生 る 觀 入 は 會 17 活 5 H 曾 的 佛陁 は 社 觀 者 此 的 的 至 自 M はた。 の賢明 一つて博 m. 念は ども 會又は 絕 利 非 に堕 國 治 自己内心の 國家的 義 對 は 家 族 0 極 階 的 閥 的 務を發達せしめ、 1 精 愛主 めて 國家 級制 國 E 族 なる一 12 印 神 個 であ 1 際 0 0 度 0 人 海 17 度 的 義 神 -F=" 6 J. 0 A 道德的拘束 に反對 る。 聖 相 大思 V) 弱 あ 0 12 解 0) Philanthropism となり それで彼等は 對す B -1-老 6 突 主 脫 る。 支那の これ 誠 知 南 觀 のとなった。 入 A 5 る そは n l 昧 0 し、 10 は ども 個 駸 思 カゴ 1 未 7 0 儒教には古より個 を認 或 人な ス 個 軈て遠西 客 3 想 々乎として 疑 12 3 ラ 他 を繼 A ح 觀 18 弘 るも 時 個 めるけ 3 種 0) 欣 0 無 的 族 人を本位 然るに ル 代 べ客 客觀 承 自 求 社 は 民 0 0 治 L 會 0) L を有 法 族 神 絕 \$2 な 勃 T 國 觀 圣 0) 艺艺。 111 典が 0) 聖を知らざる 統 興せし 精 家 マヌ法典は飽く迄も を排 カン 功 76 權 2 12 利 神 社 人の観 あ 1 し得 雅 利 120 對す 會 主 To 的 これ 義務 0 居 -失 所以 馬 義 的 し經 120 13 居るけ 及 0 或 邦 3 の分子を藏し、 な 念が を V. を規定せるも た形 權 CK 家 土 6 V 階 曾 近 13 南 世 主 的 利 あり、其 \$2 故 22 遍 111 6 -(0 活 義 觀 2 的 力工 歐 あ 動 務 7 彼 個 12 利 EII 米 18 查 的 30 4) 客 A 17 悉く 欲 諸 の個 3 つた 觀 度 0) 絕 觀 化 的 H せ 念 國 主 カラ

た

CK 此 等 0 時 弊を 指 摘 7 2 カゴ 敎 궲 0 趣 旨 6 V ことを主 張 す 3

至善 足す 又 0 驗 大 調 及 7 6 H 8 缺 成 は 17 本 和 初 CK 7 點 3 關する各 す 西 3 B 觀 復 平 興 め り東洋 念 る 3 n 本 洋 地 興 和 へるも n て完壁 個 に印 文明 のは 120 0 0) ず 名 6 0 人對 發達 倫 あ 渾 福 度古 論 を見 けれ 0 そこに 12 は 實 理 る 動 75 國家觀念の缺乏、 的 せる は實 は之 共 に 1/2 3 3 代 八に精神 ども t 研究は印度倫 西 其 淨 る 倫 點 洋 0 n 圖 幾 12 1 0 理は 正と化 東洋 3 倫 唯 て補ふことが 中 カゴ 名 L だ重 各 的 理 なけ 性 無 心 學 論 難問 文 L 0 質 カ> 的 面 精神的 つた。 大 的 0 明を有 n カジ 人 理 なる 經 研 12 題 任 物 は あ に於 於 濟 究 なら 3 務 類 を生じ、 は そして 出 思 7 弱 0 1 永 文 で 隨 想の 7 長 點 來 具 叉西 初の 明 7 あ VQ 2 は依 備 居 30 獨 所 T C 6 7 缺 特 せ 1 安息 永久 洋 兩者 其 無 た H る 有 然とし 東洋 芝 カジ 0 本 H 0 丽 0 點は大 長 物 等 À 策 所 n 17 0 1 所 質 精 7 は 3 解 西洋文明 0 源 は 切 更 2 2 15 Ti 决 的 神 地 あ 經驗 發 に長 0 0) 面 るで 文明 的 なこ 0 6 6 は 之れ 揮 倫 短 50 12 出 文 ¥2 歷 於 的 所 所 あ 13 理 來 は 眀 史 て短所 550 科 た 6 ナラ 自 12 は 3 道 で E 世 汉 あ 經 文明 學 德 界 己の は あ 7 V II' る。 けれ る 性 义 驗 13 は 1 6 は を有 的 全 立 遂 見 吾 東 質 精 各 12 そし ども 殊に普 脚 17 昌曲 西 から 神 0 科 氏 K 7 ï 我 して 學 より 义 は 的 獨 0 兩 0 た カジ 7 經 自 地 此 洋 70 0 文 來 考察 德 此 驗 遍 居 期 所 0) S 朝 理 0 0) 形 た。 的 大 文明 0) 長 產 11 0 は ifi 式 短 l す 點 時 科 4 12 1 目 短 其 代 學 其 3 6 所 12 3 0 1 的 (1) ~ カラ 內 之れ 物質的 時 17 は 0 0 依 あ 籞 融 あ 推 0) 幸に 缺 容 思 據 は る 至 合 為 6 陷 0 辨 75 动 7 0) T L 3 的 相 文 東 ょ T 2 使 疑 始 結 明 in 7 首 なか 洋 者 世 26 文明 を充 生 觀 る 1 2 カゴ (d) た 解 あ 的 3

役 目 6 あ の小論文は拙著稿本東洋 少しく修補して論文體に纒めて見た。 る カン 3 知 n 73 史 節 即 度古代倫理 の批判 據つたのであ 3 舊作であるが、

今

强 12 7 は な 度 妓 る 社 思 叉 想 は 伍 會 12 娑 制 基 度 0 以 とな 風 2 L 0 7 第 大 A 6 12 生 女子 次 行 0 的 は 無 17 E は n 全 は 快 支 3 男 夫多 那 為 思 子 妻 想 0) 便 17 6 道 あ 宜 基 12 因 德 する 過 律 ぎな 女子 爲 0) 0 * 2 V あ 器 玩 逐 弄 る 具. 12 的 12 戰 陷 生 女 物 國 2 た ئے 時 0 代 禮 I 1 拜 5 虐 to 使 德 牛 す]]] 10 3 72 時 代 22 我 第 至 カゴ 9 邦 次 12 益 的 於 12

ぜ 等 安 かう る。 3 以 非 功 h 7 金 行 7 6 投 德 郷 錢 外(上)固 朝 H 歌 死 2 吊 時 本 務 * n 12 杰 無 會 12 穢 7 何 的 す 喜 代 0 32 的 Ł T 1 居 等 濟 感 捨 社 6 觀 極 12 弘 3 曲 玄 S 印 物 思 念 0 天 6 0) す 0) 通 會 E B る でし 慾 想 10 幾 度 0 7 3 稗 Ŀ 25 摘 傾 望 12 入 0 發 怪 物 1 0 111 0 T 间 文 貨 7 風 生 る 非 達 21 T 暨 玄 缺 紀 を な 8 取 的 3 Z 生 活 12 經 L ___^ 財 0 殺 族 代 慾 持 じ、 濟 72 扱 及 力> 今 生 權 を 祖 じ、 門 望 た 印 消 國 0 0 3 H 7 h 的 0 た 徒 * 趣 又 居 思 0 0) な 度 耗 6 は 迷 古 た。 甚 あ 6 カン 75 ح 諸 想 食 L 者 安 般 0 代 方 32 だ は h あ 0 T ほ へとす 人 た 倫 な 支 る 公共 カゴ 然 L 0 12 依 12 0 3 那 儒 あ 理 於 迷 莊 民 然 S る 然 故 信 害 教 0 2 る は 的 21 7 17 園 ととを 720 る 厭 毒 入 は 經 12 Ū は とな を 0 17 實 12 6 有 0 濟 現 世 度 有 7 破 3 及 7 叉 不 世 觀 あ 思 佛 痛 FII L 17 用 壞 る 2 生 0 12 義 想 3 僧 度 ぼ 3 論 12 0 敪 產 管 n 力> 由 涂 及 0 人 L 國 利 0) 徒 L 0 際 來 幼 を 6 酒 非 民 た 民 合 的 び 25 12 7 的 す 雅 性 道 な 資 居 任 經 0) は 生 3 婆 濟 德 金 12 論 13 せ EIJ 3 23 僧 生 爾 禁 活 來 ح 羅 錢 L 侶 產 17 K 度 便 的 反 0) Ē 門 す 基 t 12 0 慾 とす は 傳 す 0 思 Ty 我 3770 3 僧 關 最 丰 る 扶 收 る 6 想 カゴ 來 す 憫 持 歛 神 侶 大 義 る 最 12 0 圆 為 0 る 要 6 非 入 民 め 恆 然 權 は 0 Y 至 叉 L 件 あ は る 產 た 者 他 價 は 22 7 風 經 五 2 とし た 寺 12 豪 發 る 種 值 た 6 非 を 濟 人 カゴ 院 達 說 砂 る 及 奢 經 族 な 75 0 的 E 經 解 1 0) 意 佛 h 8 濟 L < 0 思 S 生 得 婆 は 濟 脫 で、 0 閣 想 盏 極 的 Ł 南 羅 產 道 的 0 得 清 0 6 13 余 0 め 阳 德 幸 至 る せ 慾 建 南 盖 カ> 艦 は 72 行 望 3 E 福 立 男 2 n 17 2 清 76 カゴ 衣 窟 貨 1 善 た た 1 冠 h 奉 卦 0 0) 行 欲 700 那 财 B 什 0 事 た 女 長 17 T 36 す 然 す 8 1 袖 奈 せ は 代 あ 0 D カゴ 3 收 3 居 0 1 3 h 中 12 彌 0 良 2 利 る 斂 は 古 75 以 朝 12 6 2 12 7 己 Ł 禁 我 あ L 產 四 此

に意味なき唄を謠つてゐる。丁度母親がその赤子の搖籃を搖する時のやちに。 海 汀は微笑んで青白い光を放つてゐる。 は大聲で笑ひながら波濤を高め、汀は微笑んで青白い光を放つてゐる。 死の影暗 海 は小兒等と戲れ 少波浪 は小兒達

に小見達の大會合が催されてゐる。 船 カゴ 悠久な様々の 難破して、 到る處 世界の海岸に數多の小兒が に死の 影 が漂 2 7 ねる 集のて かい 小兒等は遊び戲れてゐる。 るる。果なき空には嵐が狂ひ廻り、荒れたる海 悠久な様 々の世界の海岸 には

そのはじめ

私 は何處から來たの?何處で拾はれたの?』と幼兒は母親に訊ねた。

·时: 親 は牛ば涙にうるほひ、牛ば笑ひながら、そして自分の胸に幼兒を抱締めながら答へた。

『お前は私の胸の裡にその希望となって潛んでゐたのです。

時には、 お前 は 私 いつもお前の姿を作つて見ては碎 の小供時分に弄んだお人形 の中に混つてゐたのです。 した (4) です。 朝毎 に私が神様 の御像を粘土

あらゆる私の希望や愛情の中に、私の生命の中に、 は氏神 機と一緒に祀 られ 7 私 カゴ 神 様に V) カン また私のお母さんの生命の中に、 づく度毎 にお前 を拜 んでねたのです お前は住きて來



タゴールの「新月」より

高

橋

惶

海岸にて

悠久な様々の世界の海岸に數多の小兒が集つてゐる。

兄が集つて、呼號しながら舞踏をしてゐる。 永遠の 空は頭上に静まりかへ 5, 動搖常なき海は波立ち騒いでゐる。悠久な世界の海岸に數多の

にそれを大海原へ浮べてゐる。 被等 は砂で家を築上げたり、 小兒達は様々な世界の海岸で遊んでゐる。 空ろな貝殻を弄んだりしてゐる、 朽葉を拾集めて小舟を造り。莞爾

はしない。網うつすべを知らないから。 するけれども、小兒達は小石を拾集めてはまたそれを撒きちらしてゐる。彼等は隱れた寰を得ようと 彼等は游ぐべきすべも、網ラつすべも知らぬ。真珠探 りは真珠を索めに水中に潛 5 商 人は航 海

『什甚したならそこまで昇つて行けますか、』と私は訊ねます。するとその人々は恁う教へます。『地の

端へ立つて、空へ高く兩手を擧げてで覽なさい。すると雲の上へと引上げられます。

母さんが家で私を待つてゐるのですもの、什甚して私は母さんを捨てゝ行かれませう?」と私は答

ます、するとその人達は微笑んで行過ぎて了います。

だけれど、私はそれよりもつと面白い遊戲を知つて居ます。ねえ母さん!

私は兩手で母さんのお顔を隱しませう。その時屋根は青空となるのです。 私は雲になりますから、母さんはお月様になつて頂戴い。

波 間 に住 む人々は恁ら私に呼び懸けます。

達は朝から晩まで歌を謠ひながら、何處と行方定めず果しない旅をしてゐます。』

甚したなら私もそのお仲間になれますか?』と私は訊ねます。

するとその人々は恁う教へます。

邊へ立つて眼を緊り閉ぢてゐてご覽なさい。すると波の上へ伴れて行かれませう。』

母さんはいつも日暮には家で私を待つてゐるのですもの、什甚して私は母さんを置いて行かれませ

う?」と私は笑へます。

するとその人達は微笑んで踊りながら行過ぎて了ひます。 だけれど、私はそれよりもつと樂しい遊びを知つてゐます。

私は波となりますから、母さんは見知ぬ岸となつて頂戴い。

たのです。

わ が家を守る外遠の精靈の膝の上に抱かれて、お前は長の年月青つて來たのです。

お前のその柔かな姿は私の若やかな體にその花を開いてゐたのです。丁度日の出前の空を彩る輝き 乙女となって私の心の花英が綻び初めた時、 お前は芳香となってその周圍を漂つてゐたのです。

のやうに。

朝 の光と共に生れ出た、天つみ空の第一の寵兒であるお前は、 この世の生命の流れを漂ひ下つて、

果ては私の胸に宿つたのです。

となって了ってゐるのです。 お前の顔 を眺めてゐると、神秘の力に氣壓されて了ふ。凡てのものに屬するお前は、今は私のもの

世の寶は、 私 はお前を奪はれやしまいかと、緊りと私の胸 まだ如何なる魔術にも陷つたことはないのです。 に抱締めてゐる。 私のなよやかな腕に抱かれたこの

波

母さん、高く雲の上に住 む人々は私に恁う呼び懸けます。

私達は目 醒 める朝 カ ら日暮までも遊んでゐます。私達は金色の曙と一緒に遊んでゐます、銀の月と

緒に遊んでゐます。」

そこは か

來て貴女の腕に抱れることはいたしません。

貴女が淋みしい曉の青白い闇に兩手を擴げて、寢床の中に私を深るころ、私は申しませう。『坊やは 私が行く時が來ました。母さん、私は行からと思います。

最うそこには居りません』――そして私は行からと思います。 私は軟かな風となつて貴女を撫でゝ上げませう。貴女が沐浴をするならば、私はその水の小波とな

つて幾度となく貴女を接吻いたしませう。

烈しい風の夜、雨が草や木の葉に落る時、貴女は寢床の中で私の囁を聞きませら。私の笑聲は電と

緒に開放された窓から貴女の部屋へと閃めいて参ります。

若しか貴女が夜更けまで私のことを考へ明してゐるならば、私は星の合間から貴女に歌を謠ひませ

う。『お休みなさい。母さん……お休みなさい。』

さ迷ひ歩く月の光に乗つて、そつと貴女の寢床の上へ降り立つて、貴女が寢てゐるその間、お胸の

上へ縋りませう。

醒めて驚きながら四圍を見廻せば、私はきらめく釜のやらに闇の中へと飛去りませら。 私 は夢となりませう。僅に啓いた瞼の間から、貴女の深い眠の中へ辷り込みませう。 貴女が頓て目

私は幾度もとしも轉げて、笑聲をたてながら母さんのお膝の上へ乗りませう。 そしてこの世の中で誰も私達二人の居所を知るものは居なくなるでせら。

おもひやり

うとするならば、いけません!」つてお母さんはお被仰るでせら? 若しか私が貴女の見でなくて、可愛い小狗であつたなら、ねえ母さん、貴方のお皿から物を食べよ

それから恁う謂ひながら私のことを追出すでせう。

『彼方へお出で、真個にいけない小狗だね!』つて。

は二度と戻つて参りません。そして最ら貴女のお手から食物も頂きません。 すると私は出て行きます。母さん、私は出て行きますよ。貴女が私を呼んだとて、最ら母さんの許

76

若しか私が貴方の兒でなくて、線の初の可愛い鸚鵡であつたなら、ねえ母さん、貴女は飛ばないや

うにと私を鎖へ連ぐでせら?

らう』書となく夜となく鎖ばかり噛んでゐてつて。 私の前で指を振つて見せながら母さんは恁らお被仰るでせら?『何んといふいやな恩知らずの鳥だ

すると私は出て行きます。母さん私は出て行きますよ。私は森の中へ逃げて行つて、二度と戻つて

彼はその金を一つ一つ秤に懸けて見てゐた。私はその場を立去つて了つた。 彼は稍や考へてゐたが頓て恁らいつた。『私はお前を私の金で雇うてやらう。』

夕べとなった。園の籬には一抔に花が咲き聞れてゐた。

美しい乙女が出て來て恁らいつた、『私は私の微笑で貴方を雇らて上げませら。』

が、その微笑は青褪めて、涙にらるんで了つたので彼女は消然闇の中へと戻つて行つた。

一人の小兒が砂上に坐して具殼を弄んでゐた。太陽は砂上に輝に、海原の波は處々に碎けてゐた。

ませう。」 彼はその頭を揚げて、私を知つてゐるかのやうに謂つた。『私は何の報酬もなく、貴方を雇うて上げ

その後、その見の戲れの中に取きめた契約は私をば自由な人として吳れた。(心享生譯

おのゝきませう。 プ ジ ヤの 大祭の日、近所の小供が家の園へ來て遊ぶ時、私は笛の音色に溶込んで、終日お胸の中で

靈のその中に。」 母さんその時貴女は静かに答へるでせう。『あの兒は私の瞳の中に潛んでゐます。私の體の中に、私の 叔母さまが、プジャの賜物を持つて來られて恁ら訊ねませら。『あの兒は何處にをりますか?』

最後の契約

『私を雇ひに來て下さい』と、叫んで、とある朝石甃の路を歩いてゐた。

王様は剣を手にして、馬車に乗つて來た。

然しその權力は何の役にも立たぬものであった。

彼は私の手を取つて謂つた。『私はわが權力でお前を雇うてやらう。』

そこで王様は馬車を騙つて立去つて了つた。

白晝の炎熱に包まれて家々は戸を閉ざして立つてゐた。

私は曲り屈つた小路を持つた老人がやつて來た。

印

などにも獨逸語

0

如急强

いシラブルがないやらである。

十分 らで くあつた。 名詞の外よく注意してきいて見ると、同音を以て始まり語尾を變化して繰返し繰返しいふところが多 る になるに隨つて次第に聲高く力あり熱ある辯を振つた。しかも其音調 2 たとも大である、 つてすることなど思出され、 もとより私はベンガル語を解しないが、時々出て に此 が ル邊の兵は弱い。併しシクーの兵は其容貌風采獰猛壯大にして一見夜叉のやうな觀が 0 種 つた。 自分の 族の聲はいかにもやさしくて、兵士とは思へぬ位に女性的であつた。タゴールの といへども、 彼が英語 的であるやうに思つた。私はかつて印度の兵士に変つたことがあるが、一體 私はそれで佛典中たとへば浄土の莊嚴境を描くとき、 しかし言語 國語を定 をか 今更パベルの古い塔のことなどが想出された。さてタゴールの音聲 其內 りても めた と國民性といふことを考へれば、私はかゝる音聲は亡國的音聲と思つた、 面 其莊嚴豐麗な文句が想像された。それ 0 12 あ いか n は各自の特色を發揮して 女の思想を發表するのである に豊富なも 0 を包含して居る 來るヨーロペイ、 面白 い點もあ から、 くりかへしく同 か想像 から音 アメリカ、ジ 6 自 は頗る美しく音樂的であった。 カジ 由 難くは な國 聲の美妙なことは 同 時 語をも に思想 ャパンなどいふ固有 な S 種 は つて 同 私 0) 類 あまり優美に 聲も實にそ ある。然か ドラス、 交通ご は は の文字をも 各 僅 何 园 人もお 力) 民 朝 ~" 13

象はそれ位にして彼の講演について感想を述べよう。

+ 日の講演は大學で印刷して歡迎會の來會者に配つたので、 私はくり返し三度許り之を熟讀して



タゴールの文明批評

岡

田

哲

度の 寺に の口 す な は カン でのそれ かとも思って居たのである く冒頭をおいて、 種 カン タ と書 國 7" 開 カン R 5 12 あ 71> ールが 老僧 n でもなく日 瓦 出 る。 S たその歡迎會に臨んで始めてたけたかくして優しいその人に接したのである。 礫をなげたやうな感を た 同 た もの 3 じで 例 日本に來るとは昨年聞いて待つて居たが、其中 はそのまとへる袈裟をはづして、 のとも へばタゴー を示 あ それ 本の る 違 した カン からべ 疑 或 CA は かい 語 ルを歡迎するには が、彼は遂に來た。十一日帝大における 6 其 しく思 彼 ンガル語で談した。 もない 言 興 0 語 は S 砂 へられた。 れた。 から、 思想 はゆ る詩 る歸 或 むしろ自分の あの その 其うちにタゴ 聖の る若 依 歌迎の とい 始めはきはめてゆるや 後でタ 歡 い佛 ふの 迎 12 教 解はあまりに佛教 h 僧侶 國 は果し J." 1 來な 語で 1 Z は 131 は、 w 歡 カゴ É は L て三度に歸依するとい ひとい ・ミン 講演 由 靜 S 36 0 12 力》 0 解を ガ いはきか 17 思 ふを聞 とは 其 12 かに優しい聲であつたが 3 趣味に偏 英譯 祝 長 ところをの な 驅 到 4 いて、 底 を L 7 力。 思 我 つた。 起 た しては居らな カジ して、 は 或 ~ ふやらな意 は n はそれ それ な 佛陁に 其時 た 英語 S S は老僧 とみじ H 0 沙兰 びし 歸 寬 は 印 j カン 後 印 味 依 象 永 0

砂 ふの 名の はし 75 2 カ> は カゴ 容 た 7 間 た 時 之れ 排 2 0 代 向 カ> L カン であ 生 も少し で、 FI 下 つた。 上 え 6 21 n カ> 6 他 く永 必然 は 存 度 n た 互 自 17 あ る B 12 惡 競 を排することである。 然 これ た 12 は 國 行 争 义 0) 的 てとを非とするなら、 あ 相 V 東洋 他 しかしそれ 吾 經 550 爭 恩 土 を 間 カジ 洋 國 は を 路 行 惰 A ふこ 惠 激烈となって、 精 內 カジ 各 で決 つて 排 0 古 眠をむさぼることは 12 國 各 0 神 然るに Ł 考及ばぬやうなこと、 潤 代 は す 的 國 カジ 烈し ることが 居るというて 發達 文明 して之を訊 印 21 澤 人 はそれで、 な 度 は 士 しその に對 力> 4 0 0) 互に攻伐 やらで 結 地 0 0 社會 交戰 た、 果 し土 絕 は カジ 對 ふべ 日 狹 あ 間 で 嚴密 攻伐 生活 本 小 L は 居 あ 10 0 0 地 することが きで しな 交通 るとい 悪 人 6 た な 3 廣 カン も隨 な カゴ で一定の位地を占め職務につくことも排 ふそろ カン あ 1 4 カ> V 歐 理 は る ъ 力> 產 r 5 カン カジ 2 實際 論 で 3 0 A あるま 1 カ> はげしくなつてあ ふよりも、 物 n 9 たに違 て行 カン から ら排 で ふことになると、 あ 亦豐 又 は 13 350 らはその點で歐 彼 を あ 進 カン 西 土人を壓迫 Vo 追 洋 斥 步 る。 は 饒 2 ひなな 6 は 72 21 は 0) れたであらう。 1 自 或 印 ととい 0 必 異 TS あ So 计 然 然 0 カン は 度 人 る。 1 72 6 歐 種 た 力了 的 特殊な タゴ つた する事 夕 あ 外 排斥をや カン 0) 洲 經 家を建 洲文明 7 3/3 路 國 5, 3 12 1 非 1 それは各自境を守つて交通 は ならば、 6 人を自 實 26 或はそうなつ 歷 他 w 6 あ n 兀 0 かその カジ は 史的 7 > し强 る。 來 あ 2 國 價值 排 まで 2 勇 7 西 由 示 餘 猛 居 洋 P 事 V 12 言外 liii. とか を引おろすわけ J 裕 な人 歡 る。 各 13. 情 侵 カン 他 國 割を作 > 0) 迎 6 0) 入す あ であ 12 L 絕 3 7 賜 > 西 22 種 L カジ 存 减 場 愛國 た 洋 るの は な カン 6 カジ 居たな る、 することを想 5 しそ 合 め 爭 るとい あ は 0 12 心と B 要 0 は 0 それ らに 生 弱 事 9 5 カン た には 存 Ú ふこと 7 0 弘 V な 0 2 て包 、
ふ美 競 3 行 東 各 75 は、 カン ٤ 洋 思 國 0

見た。 あるで 彼の如き人物が日本に來り日本の過去をおも以自國の歷史を顧みるときに感想みなぎるものが 彼の講演にはそれ があふれて居る。其英語も實に立派なもので、いくらタゴールでも

之を度 々やることは出來ないと思はれ

く此 カジ で 居らぬ。 カン 過去において偉大なりしてとを語り、文學哲學殊に宗敎において豐富なものがある、 彼 ら日本に至るまで精神的統 點に注意してほしい。 の述べた思想を委しくこゝにのべることは略して、其をよんで氣づいた點をのべる。 た。 。 只 一 度ヒンツイズムをいうて居る。 殊に彼は西洋思想とも關係 一のあることを説いて居るが、しかし一言だも佛教とい 印度から來れば何でも佛教 あ 3 彼の父は ブラマ・ソマ であ ると思うて居 ジ 0 ふことは それ X 彼 办 る人 カジ は亞細 3/1 Ľ, 關 達 いうて v はよ 係者

0 12 ることである。 EII カジ カン あ 度 m る。 風 0 講 さて更に彼の述べた内容に入つていさ、か批評と感想をのべて見たい。 表現を文章上に試みて居ると思ふ。そこには豐富な譬があり一篇の詩として誦しらべきも 演をよんでまづ感じることは、 言語の上から見れば、印度風の英語 其立派な文章がいかにも内面生活の豊富なことを示して居 である、 勿論英文として已に優美の城に達し、更

た。 は普通の見方であるけれど、人種上からいへばむしろ印度人はアリアン人で歐洲人とは同 夕 しかしそれは支那を經て來たのでよほど間接になつて居る。印度と日本間とは直接の交渉は殆ど 東洋人とは異るのである。又文明上よりいへばい は東洋と西洋を對立させ、東洋の中には印度支那日本等を包含するやういうて居るが、こ かにも日本は過去において印 度に負ふ所 一系 カジ に屬 あ 2

n

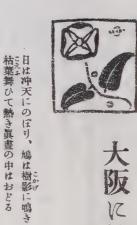
詩 でな よつ A 進 0 面 0 3 7 1: 展 加 步 精 * な 4 日 新 ことは 西 シ しなくてはならな 7 12 神 重 あ 0 カジ 至 洋 文 山り 7 烈し 學べ 牛 おちな 的 る、 現 0 明 田詩など頗 居 長 代 物 とら 方 6 0 ると、 る 單 かか 5 r ム辯 創 面 質 0 す S 0 ٤ 純 文 る。 b 0 歐 造 V S ふので を見 共 洲 明 あ n 護 から 18 あ な Vo を學 にそ る盛 力 まり T 新 吾 職 る で 文 12 業 之れ 所 西 V. る 居 L R あ 朋 物 洋 は 12 る中 は 3 0) 12 12 ~ 以。 あ V は 文明 質 つい 至 即 裏 73 文明 る 36 から できな 之をさけて 行 我に古 印 12 面 う 方 0) 詰 る。 度 カ> 模倣 度 7 をも 7 面 て居るも 12 17. 0 6 文化 その を輕 來 維 思 3 V 退 これ 4 カン 切 支 輕 7 76 V L 新 6 步 弘 んずべ 東洋 那 N 日 あ h Ŀ 0) 0) 中 9 6 1 П 0 本を以 カジ 先覺者 38 てとり入 6 ク たすら冥想にふけ 12 2 0 6 n 南 もある、 ラ ある。 ても 43 は をも 自 多 駸 る逆 73 からず。 覺 模 2 S K V, V 差支 7 做 却 た カジ ツ 轉 N 2 カゴ 近頃 東洋 生 舊 \$2 7 る カ 戰 易 1 L 6 それ 滿 套 じて、 る た は 大 發 w 爭 あ V 米國 達 來 3 2 な 12 足せ 0 3 の先驅者となしその る カジ 3 破 之を 朝 (分業 6 生 2 So 0) L 13 り思 之を包容 カゴ あ 長 るとい 毆 よと > 2 0 ٣ た 子 重 比 糾 出 2 結 カゴ n 切つ 來 た。 供 祖 6 南 カン 果 人 V 女詩 見物 なく があ ふの 15 0 す る カゴ ふことは 5 力> て模倣 し咀 V. あ 時 3 0) 之 易 まり つて 故 15 A 質 0) は誤 東 L 12 は 嚼 新 6 からさ 主 つて 洋 12 服 A n 社 L L 古 義 御 道 あ 吾 3 9 L T は ¥2 で固 輸 8 新 會 糖 な 6 をとるとす S カゴ る。 発を蒙 R S は 易 720 入 3 模 V L あ た は 神 カン 72 まつて 生きて L 3 な 倣 東 (1) 0) H 物 カン 0 る生 を模 歐 本 洋 米 0) た 3 9 6 質 L 7 尚 南 近 國 で 12 或 化 0 兩 6 居 行 倣 遺 命 h 3 代 南 は る L は F" V 方 9 0 3 歐 な 72 0) -(0 0 產 物 る 面 樣 中 Vs A 獨 進 * 水 13 す 洲 6 0 質 た 精 V 1 は 光 倘 於 中 る カゴ b Ŀ 山 新 よ 模 は Zi. カジ 統 3 0) 神 日 を見る 世 カン L 倣 模 5 活 的 カン 12 同 本 カジ 7 2 L 5 2 7 5 倣 動 歸 E 0) V V

るであら

とで、自づか 得せんとした人は決して一人ではな にとつては蓋 ら他 止 むをえない約束であり、 の受賞候補者を排して居ることに いの だ もし全く受働的 から。 或 なる。 は タゴールその人もノー になれば吾々も國家としては亡 故 12 吾 々が力を養ふてとは生きて ベル賞金などをうけ 國 0) 運 命 たこ に陥

义 中から目 V 眠 カン j ることゝ して醒 さめ 60) 醒 た、しかもわれ等東洋よりや、早く。われは泰然としてさむるのをまつては居 むることは変代作用であるとい V かに覺むるか明 かでない。 ふが、 歐 洲 にも中世 醒むるの 紀には深 はその時 V 睡 0 6 到 カゴ るを待つの あ 0 17° 12 である られ 10 彼

科 いっと 上 7 世 回 EII 學 なる 度人の め 期 東洋 を排 あ ¥2 12 カゴ カン 0) るが あ 思想といふてとにも問題がある。たとへば實在を捉へるといふときはどれだけのてとである に冥想よしとするも凡ての人が冥想しては社會は動かね。止をえずして勞働者となって居るも えを で す 冥想をさすか、それ 2 故 た あ る あまり單 研究しなくてはならね。 る。 である。 0 そこに 毡 其 V 動 砂 純 其 は哲學 な な東洋思想に墮してはよくない。歐洲文明を科學と見るは誤つて居 機 S 如 端の弊害を見て全體を排斥す 何。 は中世紀の歐洲人にもあつた。且冥想さへあれば物質的研究は 物質的にも科學 あ 東洋 り文藝 には あ 10 未 713 り殊に宗教 12 だ之を缺 も物質文明 的にも偉大となる努力を見なくては く。 カジ あつた。 もたね るは早計で 12 不完 然るに 全 电 な 0 點 は あり誤 彼 弘 カゴ は此 7 あらら、 る りであ il 中 世 0 なら るとい L に之を求 を 打破 力> V2 しと して はざるをえな 歐 無視 n め 洲 進 な 近 且その しても 步 くて 10 に 弘 12 は 途



牧童うたい寢して榕樹の下に夢み

われは水邊に臥して疲れし足を草の上に延ばす。

大阪に於けるタゴールの印象

原

カン なに彼 微笑と感激とあ と云ひしミルトン て、往昔ダビラ王が竪琴をかなでゝエ ッ 0 もあやなる花園 心餓えるを覺ゆと。 +" n さみだれ降りしきる夜半、 ゲ ネフの散文詩に鬱勃たる黑影の動くを見たるわれ、今弦に印度の樂天詩聖の 0 タンジャリ 歌を愛誦措 90 を分け行く心地して、 の言葉は、 を誦す。 宜べなる哉、 かずと。人其故を尋ねれば、 若し其母音ペンガル語にて記されたる原文詩を直接に誦するを得ば、わが喜び 嘗つて波斯詩人オーマー・カイアムの『ルバ まの 歌以疲れたる子等は今は臥戸に眠る。われ獨り書齋に退さて、 彼の故國にありて、 あたり此印度の愛の詩人に於てその真なることを知る。 ホバを讚美せしてとを偲ぶ。『詩人は其作る詩歌以上 其歌を誦し行く時、 てれ わが靈の糧なり、 彼の聲望をねたみて彼を詛 われ に歌喜 あり、 イアット』の悲音哀調を聞き、 われ一日これを誦せずばわ われ に満 ふ者までも、 妙なる歌詠 足あり、 の詩歌なり』 千紫萬紅目 タゴー 朝なタ D に接し n iz

しかし精神 に花崗岩の堅い處を破つて其中から地中の熱火が噴出して來る。物質文明は花崗岩の堅いやらに堅 て居る

的文明强くして盛なれば毫も恐るゝに足らぬ。

物質を怖るゝの

は精

神が

弱

いてとを自白し

カ L えれ は 理 屈 6 あ る。 恐く タゴ 1 は理 屈を好 はある。

之れ と見る方がよほど一元論的であると信ずる。(六・八・自由教會講演文責記者) る。 ける功勞者を奬勵するのが タゴ る。 佝多く をしつたのである。 巧妙 0 0 文明 カゴ 最 世 ールは科學を好まね。しかしノーベ 卽 而してか ノーベ で 間 5 批 あ は單 科 譬か 評 る 學 n ゝる天 に對しては容 カン 的 純 れタゴ 會 あ 獎勵 な 12 る。 種 判斷 依 才 子の Personal 1 も盛で Ó つて認められ、 此 に依 IV 吾 醫、 等 は ~ 易 は 々に近く 5 ある。 目的である。科學は第 その人の遺 jν に私 蓮 み は 花、 な 3 人の は同意することが カン のであることを示して居る。偉大なるものはどこまでも偉大である 而して之に依てタゴールも吾人否世界に認識さる 居ることを吾 n 文明 知 いは の豐富 志 る 0 N 12 如 » シ の遺 依る會 くダ カ> P なる内 n ボ 1 言によつて此會 ン 0 R の認識 ナ 一位からで文藝哲學はむしろ第四 好 は 的 玉 できな ~ 生 生 少しも イ 命 F. V2 に依 ŀ 歐 (1) アノの S 0) Á 知らないで居 發 發明 から 彼は詩人である。見よいかにその比喩は て今吾人に 露 は 彈奏と聾者、馬車 物理 者 認 美的 で 識 化學醫學文藝 あ 精 3 傳 る。 つた。 n 神の表現である。しかし 7 られ 之は 始 カン め て、 る。 軍 n と路傍の農夫、 位 至 國 0 何等 和 吾人 12 英文で 主 お 0) 義 各 は 0 0 カン 方 その 矛 結 カン n 面 盾 Co て居 其他 にお であ 存 た カ> B 在

にせん を被 5 んことも覺束 と愛との らざる真 ٤ 玉 賜 0 を轉 物 Н なし。 本を尋 なれば、希くば斯國人の活ける心の奥底に潛 ばすやうなる美音は薫香の如くに隅々隈々まで徹し、 和 され 求 どわ めざる可らず。 n は 此 國 土 わ 0 れは詩 真な るもの、 人としての 斯民 めるものを求め得て、わが 特權 の心 靈に 8 要求 八は唯弊 か る眞 す。 詩 73 へる 入 る 7 0 國 カゴ 唯 0) 如くに 人の家 0 計 賜 0) L づと 物 假 面

より後 堂を出 今に づれ 至 る ば冷凉 36 わ 滿 れ常 天、 に彼 静 かに印度詩 0 風 点手を描 聖の ら其 保を心 聲 調 に咀嚼しつゝ家路 の響きを辿 3 につく。 幸 ある日 なりき。 それ

耳を傾

17

ず低 を思 ت ا 顯を見て は 0 ことわ 如かざりき』 知 細 D に人 n IV 力> らず、 の容姿 ねど、 は りあることゝ こそ 0 つとめずつ 心を 調 と仰せられ 威 花咲き香ふ に接し、 の美を愛す。 始 捉 南 かて めて心絃 へんとするを見 思は T 更に其 猛 カゴ た 3. る。基督 ユダヤの カ> 特に生ける人 6 る人 3 12 対なが 觸 13 音 のみ 9 聲 る る音 聲 野に於て發せられたる其聲 17 る時 > 或 は 0 3 耳 m 3 物 一聲美の人にいまし給ひ 御聲なり。 どソ 0 裕 弟子達 われ 傾けて、 薫ずる心地 より流れ出 心 U と多くの野に集ひ Æ 痛せしく 『地上至高 思ひ > 0) 出さるゝは、一汝等野 す。 づる音聲美 華の 思ふ。 繪に 0 しと は、いと美し 極 此言 現れ 嚠喨 み 思は 來 0 12 葉』は果し n 時 た 無限 たる聲を聞 る る だ 75 12 基 A 0 > ら聲 も其 は 0) 督 感 17 13 7 百 興 わ 0 よそ 35 天 ならし 如何なる響を發せし 合 を n 面 影 起す。 來 0 7 0) V ば 12 清 なら 褔 羽 W カン 高 巧み にし 此 音 似 73 元。 花 通 3 て育 なる論 CA 高 72 格 から つに 3 0 カン カコ 久

はる 彼 0) 言するの 音聲に 度 聖の 力 よれ あ D おとづ る印象の りとも n 5 がは眞 n は 若し愛な 42 H 其愛 節を述べ 本 0 思 0 想界、 示 くば鳴る銅に等しければなり。 しの 顯 0 みの 文藝界、 如き慕は しき人格 哲學界、 宗教界などに 12 或物を學ばざ され どわれは唯てゝに大阪 種 る可ら R な る ずと思ふ。 印 象を殘 に於 假 令

ける

彼

に思

て光彩を添ふべし。

ず、われ を知らねども、 7 は 如何ばか ル 印度の民を牧ふべき君その中より出でんと云へばなり』との ようて、 りなることぞよと染々思ふことあり。 ベンガ いと高さ代表者を得た ルは詩聖の一族によりて早く重さを加へ、この後永くラビン 5 力 w 幸あ 力 ツ ダ るベン 1 汝は ガ N の國土よ、汝は 即 度の 豫言 郡 は 中にて ありやなしや、 ラビ S 10 と小きも ンド ラ + ・ラナ 1 D ŀ これ あら より

感興胸 靄然た 文明は單に人生の裝飾を加ふるに急がしく、まことなる人の姿は次第にうすれ行き、心と心と親しく を喜びぬ L 17 ひしならんも、 に清楚な 既にして彩花 庵と別れを告げて、わが國土を踐むこと、なりね。 する第 て四四 起 名のみなる東洋の つ。 圍 る頃、 に溢 一の挨拶をなせるは去る六月一日のことなりき。天王寺公園の樹影を辿りて會場に入る。 る印 再 0 往昔印 西洋 び拍 れて止 樓上樓下は 度服をゆるやかにまといたる老翁 輝 堅自熱自信仰に生自て靈燈を高く掲げて四方に使しぬ。今は交通 3 趣 手 上め兼ね 起る。 度の出家は山を超え平野を過ぎ海を渡りて、東の國を訪れし頃は、 味に接して、著しく失望せしる、新緑と青空とを見て詩歌吟唱 司 君子國の慕はしさに、切々たる思慕止むべくもあらず、我はガンデスのほとりの 會者 数枚の紙片を手にして一揖するや、彼は鶴の たる風情にて、朗々たる音吐もて説き來り記さ去りね。 人に溢れ、人は唯印度聖者の姿をまのあたり見るも、今か今かと待ち構へぬ。 起ちて語り、 紹介者 は壇上に氣高き姿を現す。 は印度の風物と詩聖の日常生活 混濁の都なる浪華の地に來りて、彼が 撃の 拍手 如く澄みた は堂 とを傳 彼 の餘裕 0 は云ふ 便開 を壓 幾多 る AJ. 調 す。 存 H する 神 を われらに 彼 力> 水 戶 カン は 難 ゝる程 暮色 徐ろ なる 上陸 づ。 に遭

拜

復

小

生

は

タ

____*

1

w

關

は唯其名を知る

w N

な人

です。 でな

な富者

V

力>

5

だめです。

鬼に

角

タ ク

コ

1 1

カジ

今そ

h

たな真似

をしようとし

た

つて

J'

Ł

真 往 13 _2° 25 H 12 k w 接 同 変 n 語 す 意 0 L 演 き感 難き節有 說 其 を聞 L を起 高 T 聲 1 之候 L < 0) 候 空に 意 敬 味 す 大學に於 優 は ~ 4 素 L く美しきに 。威生 より了 じ、 4 る 講 す 席 演 打 E 72 < 12 ~3 は n

です。 居 思 CA S てくる で る 3 CA タ 詩なん た ま 樣 J" 50 す。 12 72 カ> 1 V 0 L で、 思 0) 1" n は N タゴ 次 久 カン 0 7 中 度 も讀 ことと 何 II' 於 1 1 ず 1 は つと 辛 力》 n n カゴ w Th 12 云 は 0 抱 は カン 就 就 てれ 2 來 L H いて = L あ て見 朝 7 に讀 加 ス 讀 0 7 E は カゴ 僕の 學 政治 たの まる 大 ボ h h 校 y 分 0 だ ですが 6 注 的 見 ことは 次 面 つから す。 意 色彩 白 ン ようと思 8 12 は を帶 L ح あ 直 知 番 13 6 カン 4 6 多く L だと ふの うませ っませ n CK 飽 2 な 7

> 72 盛 Th 事 天な 0 な 4 其 る 0) 歡 作 0 12 物 17 候 12 就 就 ば 1 7 は 何 只管 等 0) 熊 感 入 想 h 36 無之候 居り申 4 候 敬 昨

> > 具

何 X 事 J° 26 才 申 IV Ŀ 氏 げ 0 かね 著 作 ます。 を少 與 も讀 草 A · 木 h 6 居りませ ñ カン

5

容す す。 彼 0) は餘 とす 歸趣 らで その まで 弘 幽 12 私 遠 重 女 F 5 3 あ 思 連 は FI しようと思 12 17 關 72 15 0 め ります。 想 女 申 次 る 度 觀 12 < I. 7 L カジ 思 念 1 コ 0 V 反 まで靈 非 7 女 1 大自 的 想 1 L 常 考 IV す 併 氏 w 的 な見解 ン 12 ~ ふの 氏 文 然 生 L 樂 ン 的 T. 0 7 唯 朋 * 實 12 -7 13 思 天 ではな 牛 此 か 0) L に堕 1 現 115 的 想と 點 n 潮 根 0 T ン 0 5 6 た I た L 境 本 流 14 2 ス あ Z H W C 地 カン 12 河 0 め II" 5 12 7 のです)。最後 6 3 浴 Ł 自 3 12 1 お 真 知 せ ウ る E 然 0 IV 巴 シ W 12 L み發 n P バ 7 氏 T ンの 12 顧 寸 兩 め ラ は 5 ---對 カゴ 的 せ たな シ t 12 見 生 兩 思 す 6 元 E 想 p る L 命 者 思 あ 6 ツ 8 態 よら とを CA Ł 觀 る 包 ま



如きは 真 的 n なる カ> で る 5 T で カゴ すべ あ カゴ 形 る。 簡 は 為 洋 きか ルに於て 必ずや 易 か め 0 滿 東 0 慥に 哲 此等 的 6 洋 文 る 足 學 あ ま 6 0) 明 それ 結 此 與 は各 あ 5 カゴ 兩 文 V 50 る 東 合 者 カ> 0) 阴 せらるべ カジ 西 結 カジ ることは は R は 觀 主 問 人性 而 兩 合 結 主 的 を試 合せし 凡 觀 洋 題 3 觀 6 ~ 的 氏 42 6 0 あ 岸 的 於て きか。 7 ある。 で 0 Z 出 半 ると で FII 來ま めら 思 0 あ 面 あ 持 ると 度 6 想 > 8 同 タゴ 叉何 R 囃 あ 語 n 時 0 は V 交物 に活 神 尙 2 る ね る 同 1 n 此等 的 餘 人 36 五 時 か 6 b る w 0 12 動 人性に 之を結 詩 自 12 で は 6 的 あ b 冥 伯 り隨 東洋 如 あ 想 然 あ で ح 6 何 的

即

使 命 6 は 南 る 女 S カン

ざるべ 大自 申 術 活 候。 家、 る 度 古 久 7 點 然 告 J" 0 思 から 我 に於 1 深 P 7 政治家等 0) 聖 想 同 n 國 N < ずと存る に此 7 カジ ス 敬 化 者 今 0) F 服 L 12 日 見るやらない を 更 新 -6 本 1 L 居る 候 な 舊 て居りま 12 調 時 カゴ 來 ----V ら其 った様 切 氏 0 和 0 出 T 昇 0 統 0 す。 來事 人 思 佛 幽 想家 格 な威 0 遠 教徒 事 或 な 0 一業に向 偉 7 Ŀ 3 思 大な しも致 基督 意 想 心と高 味 此 しま せし 一教徒 な心 る 12 を起 を感 於 雅 な生 進 的 ては 得 E

た

寛永寺に於ける歡迎 會に於て 親し 鄾 風

傾

6

な

W

カン

東

西

兩

0

調

和

は

カジ

ら同 は

時

客觀

的

で

ある 洋

我等日

本

人の 東洋

國

民 であ

的

Ŀ

野

3

織

1

0

>

か

る

0

6

あ

5

12

L 起

密接 見 消 素 產 は 12 居 致 分 1. 秱 n 孙 即 る る。 6 度 生 7 極 13 12 通 0) V 和 從 な変 3 雀 的 富 は 點 至 6 個 共 3 來 我 躍 る 古 III. ば h m 一感 する 代 6 的 して 世 を 暗 止 0 東洋 6 及 17 氣 界 中 何 居 大 旅 遡る な 消 E 阪 此 附 V2 0) 處 V び 0 氣分 たっ を味 氣 A 思 中 極 S A カン الله الله 思 士 汉 分 13 想 6 的 0 は それ E とな 12 2 な 想 大 72 to 12 7 は 兀 生 た 1 來 13 思 光 F 推 渝 0) 濟 タ 缺 命 想 系 w 1 光 0 カジ 明 0) 0) 7 h た。 だ。 は H Ł は 13 ゥ に 1 6 2 明 立 統 T 共 積 憧 此 テ * 7 典 カジ バ 12 あ 12 > 慕 整 36 居 極 的 を カゴ る 氣 タ --交 素 働 的 此 0 而 氣 備 n 分 3 I" シ J" 72 3 積 氣 < 1 た 1 思 す カン 分 P 通 以 極 分 E 36 カゴ 12 3 F 生 6 IV 想 3 E 復 75 大 3 1 的 12 H S 0 弘 12 は とな 本 共 思 活 は L 新 此 動 2 牛 經 せ 大 A た氣 思 想 思 命 虹 12 阪 7 カン 想 を 37 想 1 佛 0

Ł

カン

7 7 みた JE. 復 る談 13 小 生 る 話 批 は 及 評 多 び講演 致 L 久 カン 7 ね 1 は 候 w 共に印 氏 ^ 共 0 作 度 氏 物 太 人 8 カン 共通 讀 H 本 女 ず 0 6 缺 在

0

眼

は

此

詩

人

0)

容

貌

3

細

カン

12

見

る

てとは

出

5 T

新 點 な 云 南 3 日 2 6 9 本 B 3 曝 を解 る 要する 露 未 事 だ * せ ざる者 氏 12 日 明 本 白 カゴ 詩 を解 新 人 13 6 せず 0 新 度 空 3 印 3 と存 殊 度を建設 候 建 設 氏 候。 L 新日 得 は 敬 する能は 日 1 本を解せず 具 さ先覺者 すと

5

つた は Z 飜 L 所 7 n -(W. Ò 10 ム劇 73 T 和 É 譯 63 先 は 來 た 見 12 禁欲 5 得 た 媥 た L 72 L づ カラ 3 或 5 6 友 人 15 ED 72 13 ż 大 俱 あ 人 2 代 大 此 度 36 丰 力 部樂心 時 服 阪 る 義 0 讀 阪 0 0 議 0 旣 > 0 力> 前 12 3 講 繼 5 72 開 12 朗 0) D 2 12 彼 演 所 Ł 會 5 讀 佐 上 0 於 22 72 713 場 12 野 0 會 L 解 Š て、 n 12 調 過 氏 は 放 依 ふことで 72 15 汉 ^ 700 2 子 行 7 3 は J' V) る 神 タ 戶 な 紹 9 0 E 0) J. 灯 1 な た and the last 其 紹 人 0 か w カン 介 日 日 間 女 其 劇 12 0 10 介 0 あ 12 2 カン 演 た。 3 新 子 0) S 12 6 廖 性 00 講 7 壇 氏 不 あ 0) 0) 和 譯 市市 2 快 る 伸 5 2 を 學 話 0 から 演 清 校 n 終 W) 3 是 會 D 上 n 念 1 カジ 72 63 1-D 10 0 6 H 聞 行 72 開 あ 3

る S

0

タ

1

ル氏

0

思

想

12

す

る不

滿

はそれ

F

ルス

するところの力に乏しい感じが致します。以上。 何にも美しくはありますが、 「罪」の洗禮 ります。從つて氏の トイ をうけて生れ ス ŀ 1 フ 思想 ス 丰 12 7 1 如何 aないといふことであ の思想に 何となく人心に溶徹 12 も清くわり、如 おけるが如

氣が 人物ではなくて、さらいふ善 12 6 あ ゐる人と思ひます。 來ません。とに に對してはよく知らないので何ともいふてとも出 i 應待する人間で決して日本の 小 します。 生はタゴールに就 しかし本物だと思 擔つがれてゐる方ですから。しかし氏 俗物にばかり應待されて 真の愛や尊敬 かく何か確からしたもの 未だ講演も聴きませんが つてゐます。 ては極く僅 から出 こい人間 ねては少し氣の 真の意味の代表的 る歡 かしか知りませ 氏の人生觀等 は自分 善 迎とい を摑 も自分 (1) ふよ 毒な 氏も 接 んで

> 髀句は美はしく覺え候。 となく何とも申兼候。先日傍聽致候講演は流

ります故、これ以上を申上げることの無禮をさしんで居りません。外國からの折角の御客樣でもあが要を認めません。勿論私はまだ氏の一頁をも讀介によると、我々は未だタゴール氏を知ることの稱語。これまでタゴール氏を紹介した人々の紹拜語。これまでタゴール氏を紹介した人々の紹

大阪市公會堂に於けるタゴール氏の講演會とおもひました。 中村長之助

に出

を得 雅で 務に 聞 なくして、教育或は 席 1 いて見ると、朗讀の音聲が美しかつた、態度が高 たのではなかつた。言はい、其風采に接し あつたといふ。彼等は是れといふ明 從事する人であつた。そして其 た人士の多數 は生粹の 其他の 大阪 プロシヱ ショ A なの 大阪 ナル 瞭 商人で 感 思想 の業 想を

小生はまだタゴール氏の著を讀みたるこ

拜復

處

にゐることを知つて居る事

と思います。

くと 0 カン 者をして、 カン 割 場 カジ るだけの、 るを許 依 つたの を算 占 何 如 度 0 V 擠し てこれ たの 2 3 ふてと能は て、 12 0 12 26 なり た 0 すとし 於 重 て、 砂 0) で する 中 0 る 彼 カ> で 2 ح 慖 何も 傷 自 n を言 所 を あ は あ n 13 も少し カゴ 分の るか。 を日 なら 詮 る せ る C あ 離 ds 0 7 基督 彼に ずとするならば、 か。又、 1 る ば、 果して、 は 間 存 カゴ 0 本 カン 5 をも與 姑く 驩迎の 共 づこ 在 た B 與 教 0) 印度 界的 本佛 文學者 的 0 とも 何 職迎相 得 明 間 25 彼 故 12 人に赴 彼を獨 事業 いが佛教 にせ に於 たる 佛教 あ 敎 詩 へ得ない 12 階級 小 共鳴するところ 人 る 0) かを三 3 支旨 とし 談 T 徒 1 カコ に力を致さし 驩迎 0 何故 と共 會 砂 7 占 カゴ 12 カゴ なら 12 た 更 を 負 L 0 7 る温仰せ めに、 各 12 思 得 12 鳴する 事 次 彼 擔せし 0 AR せよ は を獨 業 彼の 137 D II° 72 いかしと Ì る 基 彼 0 互 名聲 だけ めな 半を 彼 彼 位 L 占 督 IV < あ め 0 3 0 U す 敎 る 0 な V. 小

12

多とすべきもの

カジ

あ

つた

との

事

6

あ

る

運 子 間 如 タ 3 事 は 17 きの 6 0 ⊐* 務 3 1 2. カジ 在 所 3 ことに努力せ 6 南 醜 君 ルこそ、 0 る。 て、 を除 奪 V 事 陋 13 外し 親 7 事 合 誠 種 1 0) 15 ・ラ御覧 に氣 0) 因 舉 z た 安全瓣 5 it るが 果 な の毒 81 カジ 來 n 如き、 た 子 じ 72 る高 とし F 12 中 は る せ、 萬であ 報 カジ 楠 て、 2 如 相 S 可哀 L 4 談 博 0) 萬事 る。 何 士 煩 會 相 0 12 凡 0 そ此 勞 r 12 3 73 堪 知 は は ۱۳ ح 5 ざる 滿 あ < 驩迎 W2 滇 17 0

るか

カゴ

如徹

態徹

度 尾

12

出

72

は

過

3

3

は

尙 舞

it to

頭

自分

00

お

客

樣

12

たし

て仕

及は

E

日夜、 員等の は、 に分けたのは、 因にい 長の驩迎の辭の英譯が 到着順かに依らないで、 に歸つて行った。ここの第 青年佛教徒の名譽のために、一言して置く。〈大正五年六月十三 ルは席に列らない 紳士を侮辱する、 上野寛永寺の 3 無作法に對し、 離迎會當日、 已むを得ないとしても、〈第二 のみならず、 話 Ŗ 頗る憤慨して居た。又、 無禮千萬な處置なりと ゴール騒迎會より歸りてこ 委員が豫め、 出席者多數なりしため、 わかるものは、澤山あるといふことを 頗る問題になったが、 一第二の分け方が 食事して居る前な、 勝手に人選して 一囘の 抽籤 當日、 佛教界、 食事な、 皓 某男爵 挨拶 は 驢迎 置 申 いたの 如 は、 込 B 汉 4 巴

子といふ人格が、だん~~少くなる今日日 長谷川誠也

君

讀 0 者 づ 2 w * 0 讀 か な 部分 原稿 J' 種 0 呪 D た み始 カゴ V カ> 話 金 A だ た す た 0 9 焦 思 0 8 7 6 12 U カ> 0) た は め B た。 しとタ 全靈 S あ 眺 は 燥 2 カジ か 72 出 つて 三十 め 0 た る た 時 7 た らし を 9 氣 L D p 0 II' 12 で耶蘇 せ 6 分 だ た 1 行つて、 0 分 引きつ カゴ は た ろに坐 をお 心を全 とろい つが 7 L w 7 の心 は 敬 銀 居た。 ふことを V H 虔 鈴 0) こさせて居 そばに Ŀ ばらく た。 9 < は た 0 0 衣 7 その 倦 カン 氣 B それ をク 怠 その 2 Ð うな聲 12 た 17 悟 時 緊 居 力> 陥らせる た。 ジ カゴ 的 新 つて 彼 らな 朗 12 張 引し わ 和 或 くら 聞 を以 讀 # た 話 は 居 記 僧 カ> は 3 た兵 L つた。 た。 近代 0 た。 侶 者 T をは カゴ + 12 カゴ 25 原 士 13. 5 寧ろ 通譯 文明 原 分 稿 貌 2 稿 0 II* 6 朗 0 カゴ

東洋 L 7 とを 小 世 とか 4 は つて 現 へることは ^ る カン 在 は てとは 0 類 即 あ غ 女 度 理 カ> 6 間 E 想 A 12 違 離し 道 概 的に傾きすぐると思いま 2 7 7 括 ねる タゴ カン 的 V 12 人立立 な 1 カン ル氏 Ł 5 甲 場 思 ますし カン V. 0 ます。 思 6 現 想と 實

> 0 L 敬意 を重 現 め 夕 てそれ です。 實 12 7 7 一く見 囘避 Ì 現 タ を 的 タ J° 表するよりも印 實 IV 要 J" をタ 1 た 氏 せし 1 的 の『詩 w を 境 N 氏に めかた **=*** のです。 遇 見 氏 1 と拘 出 0 聖とし 敬 de jν す 理 氏 意 束 12 想 それ と信 か を 度 Ł 的 0 の現在 T 3 よろこぶべきを 表 カゴ 精 L 6 0 氏 じ 的 神 た す 素 R 的 0 12 V 12 力> 質 V 表 詩 S と存 同 5 0 現 2 j 的 情 b 6 を 夕 思 0 E を **_____*** 26 思 N 信 ます、 その 表 1 7 女 想 す 小 計 IV 10 カン た る 氏 境 生 5 的 2 た

立 それ その る。 72 付 5 つて、 大 今更、 る ×2 T 乘 根 言 彼 を佛教徒た T 佛 本 3 彼 居 居 0 まで タゴ る 思 驩 0 敎 な と見 ふるか 想 思 迎 1 的 カジ 會 想 るが 共鳴する なく、 n 12 N カゴ は ウバ 3 0 2 如くに考へて、 ことは、 日 思 等し 本人の るとこ = 次 C 想 でも B **>**/ II' < 1 Y ろ 其 思 今 多 w ある ツ 島 は 3 處 F は 日 ひやることが出 女い。 あ g 0 カン 佛教徒で 5 原 H 5 ∕發達. 本の 50 始 + 佛 永寺 分 ・・・と言 しか 佛教徒 理 13 12 T 12 會 於 せ

の詩 攻擊 思想そのものは新思想としてよりも反動とし 值 もちなが うな人格の完全性 活を研究してゐな ある には一理はありませらが、矢張り古いタイプ 影の薄い人間 てゐます。だから私は氏に對して敬慕の情を 人だといふ氣がします。 羽 らも、何となく私に のと思つてゐます。 のやうな氣がいたします。氏の に到着し い爲めに、氏が今もつてね た過程 取つては迫性 氏の物質的文明の が私 には の乏し ぼ んや るや T 價

葉を聞くなどは甚だ有難くない心地がした。 させるのは罪惡である。氏は語らせるべき人ではないか。氏の日から西洋文明を呪ふ言なくして、默させて置くべき人である。默せる聖なくして、默させて置くべき人である。 默せる聖ならして、默させて置くべき人である。 默せる聖かんではないか 林 愛 雄

るが 如くにして、 く所 は詩人にし は シ 3 て哲學者である。彼が「生の實現」 ゥ 實は大に異なるも ペン ۱۷ J. ルの意力實現説と似た のがある。 前

者は樂天にして後者は厭世である。彼が厭世主義の心地がする。

得貴意候へども先は右のみ申上候、敬具。 今回は平に御容赦被下度候。 少にて到底 つきて感想 拜復 甚だ耻しき次第に候へども小生 肯 ž. 繁に 述ぶるには氏に關する知識除りに貧 あた るべ くを思 今後機を得ば更に は 和 ず候 はタ粉 作 12 つき

Saikwa, Tomita.

To all India's disappointment our appreciation of this Great neighbour is too far from her heart's desire. Though he and his countrymen live under the toropical sun yet their hearts are always in the bitterness of cutting north wind. Let them enjoy their own nature! India wants her entire liberty in spite of the peace-like condition of the present state. She must regain her lost days prior Clive's

5 久 歡 0) ゴ 泖 1 也 吾 Ū 0)V 氏 た V カゴ だ 思 0 0 思 來 想 2 77 遊 かも ます。 は は 何 濁 0 夕 2 L 12 刺 J° 戟 .1 かし 水 中 N. N 氏 唯 に明 4 受くる お 3 祭 礬 面 を投 騷 白 3 ことは 3 Ŀ あ て氏 12 る 可 出

3

な

i)

自

連 唯 行

博 尊 た 12 あ 必 ウ 心 云 今將 大 士 有 ナ る ザ 2 詩 難 吾 12 カゴ 自 v 上 に日 來 17 S 0 聲を、 12 覺 ことで 0 Va 居 た 馬 6 本 とり、 カゴ 槽 は第 すべく、 近 如 永久 あ 亦 < 12 徒 生れ つた。 著 叉生 しくなっ 12 0 0 費を 印度 建 我 た 私は昨日八角講 活 國 西 カジ エスを讃美す 静 0 2 時 見て居 0 詩 11 坐 爲 1 代 に入 一の友人たらし め 聖 來 12 た る人の カジ 忙殺 來 らん 日 本 ~ 0 來迎 4 た。 堂で 國 とす 7 民 東 n 聞 邦 は 恰 め 0 0) 72 誠 自 カン S =

夕

コ゛

です カジ 私 阿 は まだタ 部 1 0 য 76 0 t

凡

ません。

併し

12

來

7

力》

0

演

說

や動

输 5

を

新 あ

聞 h

私

は

36 恥

讀

h L

で居ませ

h

カン

5

申

Ŀ

L

カゴ

んで、

現

在 H

の文明 本

B

祉

一會的 5 何とも

缺

陷

などに

眞

面

翻

カン

い話

思

らて

0 だ 遠 由 カ> る 腿 T 12 手 久 らとする 9 0 味 6 7 17 Ł 女 日 を J* す。 本人 感 離れ 1 H 心 慮 本 w 心とを持 17 7 を 用 ī ^ まし 働き 來 取 意 卷 T 76 カゴ た。 何 つて 見 カン つと自 V 7 え けて行つて カン 7 2 る を る 一發見 由 3 12 る 0 12 或 12 豫 力> る敬服 5 日 る意 貰 本 他 を見 味 何 0 風 CA 觀賞 12 しまし 力 での「貴族 3 いと希望 べ者など 與 もつと 12

叉同 1 悪 氏 御 w 氏 諒 12 察被 關 12 L 關 て知 F L 度 -候 何等のまとまりた 70 處 36 無之、 御返 る感 事致 兼 無 ね

候

間

不

質の ます。 私 0 人間 は ことであ だれ 之れ とな でも は真實 る 6 タゴー ことは (1) 最 人間となることで ルとなる 野 も平凡のことで、 ことが 出 あ 來る る 最 と思 的 非 真

しき人間 タ 性 J" 上を敬慕 1 IV 氏 してわます 0 恬淡 靜 が 平の 私 境 に安 か氏 の思 住 す る美 想生

E 斯 0 0 1 私 力》 說 る は 5 E 3 事 くと な B は だ 5 彼 0 カゴ 决 ころろ H 15 72 久 \$2 6 清 0) W ゴ 7 歌 思 6 1 5 捨 3 せ 私 想 カン w 1 50 な ٤ ところに は 麦 た 吾 白 J. S 36 私 2 R 持 カゴ 0 人です。 文明 如何 2 よ 人 0 潜 3 6 カン 3 13 外 5 h カゴ カン 與 0 促 る 女 0 らうと思 70 場 進 何 J" 5 3 合 9 1 す 4 n 3 カ> 12 w 0) 力 4 13 3 0 6 77 如 純 76 カゴ 認 8 かす。 彼 < U 南 0 思 n 1

3

A

0

心

を解

1

カン

\$2

る

缺 事 2 新 た。 聞 者 カゴ 僕 S 紙 Ł 73 2 は 不 0 3 V た。 幸 所 0 僕 12 謂 次 は 視 L 要素 7 藩 彼 僕 未 者 カゴ 聽 だ を飲 0) 0) タゴ 群 英 講 10 話 者 V 7 とし 1 數 0 ル氏 2 力 5 た。 7 は n 貧 0 0) 著作 3 弱 カコ るを 要 < 6 元素を i 南 * 讀 る 2 . 0 僕 旣 15 h 聽 だ カン は 13

0

漸

3

北

講

者

0

A

72

6

L

8

6

3

光

は 如

7 公

n 2

12

0)

6

南

3

を見 視 衣 講 は 12 掛 T 者 恰 H 2 72 る 5 36 5 72 僕 巾 銅 31 像 夏 12 id 雪 半 演 カン 0 何 白 壇 强 力 12 0) (1) S 0) 力 光 カン 髯 P 1 線 73 5 ラ 6 カゴ 侗 12 1 流 沂 h 思 12 n 3 だ 浮 側 T 2 775 12 這 面 72 出 入 カン 6 0 3 0 豫 白 7 此 n 72 來 詩 V

> z 靜 妙な △之を なく つた。 12 カン 0 Δ 36 7 26 12 視 カン 0 覧え 12 根 る 12 述 講 3 或 强 音 例 力> 1 あ 者 見 は早 3 樂を奏で ふれ 1 n 7 3 (1) 72 3 Z 72 茂 清 め 0) 3 B つて 1 de は 室 6 僕 5 或 澤 カン + カン は 73 3 0 は 分 73 EV Ш W 11 72 時 調 る古 カゴ 其 凉 0) 7 意 持 共 間 子 5 小 講 L 味 カゴ ら樹 高 11 音 有 演 12 1 S 聲 眠 假 於 < 12 餘 カゴ ラ 72 滾 或 る 醉 E R 03 L 1 V を讃 其 講 カゴ は R h 其 w 7 とし 游 低 如 2 聲 演 意 0 演 F ^ < 味 聽 0 る は 部 此 振 T カゴ は 歌 此 蓝 或 カン 出 解 0)

E 來

Val

72

5 淀 0

カン

3

み

擔 は は 0 Δ どう 彼 居 0 6 南 0 32 風 3 な 7 カゴ 丰 S カブ カン 洪 0 既 悲 た 12 0) 調 古 先覺者 を帶 ~ 0 h 豫 E だ 言 V 者 2 訴 ž 感 2 想 E る N を 起 カゴ 抱 如 7 2 カコ ず め 調 12

僕 演 は # 其 は 東 大 第 洋 意 0) 文明 福 L を高 た 者 3 72 0) 70 な 70 讀 得 7 四 72 W. 洋 文 計 力 明 出 演 を黒 來 0 直 72 10 彼 後 0)

声 僕

は 0)

流 P

n

and Hasting's and she

must belong only

to herself!

12

て斯

くまで世界に

稱

潜

さる

>

人を近代

12

thousand vacant diplomatic words poured from the lips of our crocodile sympathetic politicians, projust a mere silence 011 his message to

云へる語 fessors, priests, bookmakers, trumpet-blowers, drum-タ しそのも ゴール氏の渾身は「瞑想」そのもの、具體化、 0 2 成 ヨーペンハウエルよりペーターに至 肉化です。 音樂は藝術 の極致と

はこの大仙を迎へる一人であつたことを一生樂し演説はそのまゝ音樂でした、樂しい詩でした。私 く思ふでしやう。 せてくれるものは を希ひます。 私はこの感激が幻滅しないこと タゴール氏です。ベン ガル語 0

るまで私を教へましたが、

然しその體驗を私にさ

は シ

> 名の我國に聞ゆる者稀なり。近時に至つては全く 層の興味を感ず。蓋、印度の大陸 歡迎し且つ東洋の精神文明の なる思想家の出でたるあるも、釋尊を除 其影を見ず、今や、 てと希なるを思 CA 殊に其 タゴール氏來 の印 精華、 度 人た 朝して擧國 には昔より偉大 循東洋に磅礴 る V がて一 ては其 之を

りとせば、氏も亦我國の恩人ならん歟 タゴール氏に就て多くを知らない私は、お答 豐 島 與志

するほどのものを持ちません。たべ私の讀んだそ

依りて幾分か破られ

たるにあらずやと思ふ。

若然

12

たることを云ふ。予は邦人の西洋崇拜の夢が氏

を見せられた」ことを喜ぶと共に、 V の大きい不滿が在つたことを、つけ加へて置きた の文學作品 と思ひ に關 して云へば、私は 「彼の美し また其處

合いながら響く詠歌隊の合唱を聴く心もちの清ら うす暗 い蕭やかな醴 拜堂で、 香のけむ りと縺れ

人を俟たざるべからざらん。但、予等は東洋人 されたるものと信ず。此以上の研究は更に専門

ゴール氏に關し

ては旣

に其内

容の批判も粗ぼ

非常 0 文 たであ す で其 5 るか。 實 な貢献 明 知らず日 使命を完らする で らて此使命を 史 あ Ê 55 る。 者 0) 僕は多く であ 大問 カン 本の人々は果し 露 國 る。 兩文明 題 であ 亦 の日本人 果すに好 カン そして 同 樣 る。 0 日本が果し 0 調 之を逐 地 適 日 が斯の點に 和 てどれだけ之に の地 位 本 12 は てれ 其位置 ある。 にある げ は確 て之れを完 た者 露 は 人 は 42 が果 疑な 種 實に 世界 感應 筝

を 知 M L 0 あ 病氣等 か B 0 は 2 ない。 くには た ゴール氏の 無さも 0 カゴ 所 感などは 事 時 北 (六月十七日夜記 がなの感じでもあり意見でも より を經過し びなき事 講演 斯うし 思 12 情 すぎた感が はず日を過 ついての t た理由 50 す 印 急 象とい 遽 3 より生じた、 る。 0) 鮮 轉 かな印 ある ふことで 讀 講 者と カン 母: 36 或 象 親

時だと信ずる。

醒 U ひべか の詩 だと アルな歡 は 今日 彼れ 小 n

てるものでした。 はどこまでも抒情

ます。 方法 羊の如 を知らないも 人たち いふ念 までの には 迎 0 が、 3 何の カゴ 會を開 柔和な製 集 一層强 新線 會 ほ 0 は てりも であ の森 敬 < いて吳れたらばと思ひ 0 謙 なりました な聖者 7 つたことを遺 で心ゆくば ありませんでし 詩 2 人とし 0 でし 森 7 0) 詩 た。 力> 人 慽 9 115 72 12 を フ 私 ます。 迎へる アミ 1 W 我 彼

m 人とお世 た幾多の人 なす。 私は 领 辭 32 々に逢 カゴ 0 日 収 から合 本 は 12 U な 來て逢は をし いで て歸 世間 なけれ りは W) 所謂 は ないい ならな 流の人 力> を相 カ>

脚すべきてとを教 謝 的 るべ 17 する者 私 き筈は して趣きあ は 夕 ゴールー 0 人 あ りますせ です。 氏 るを深く信ずると共に カゴ 5 我 氏が なに te たの 72 模倣 與 は、 ^ た警告に 我 を郤 R 誰 は H n 東 弘 て自己に立 西洋 洋 異 篡 て感 想 あ

吉 田 絃

ありました N かけるす。 て描 その てねた姿と大した差はな カジ 聲 弱い聲でした。 は 想像 して ねた 亡國的哀韻に充 より かつたやらに 3 美 い聲

時 2 あ 3 此 る 0) た 沂 處 **今**其 6 re < な あ B 3 飜 居 る 思 思 譯 13 12 カゴ 西 2 E 讀 7 洋 僕 笑 h 人 0) 微 6 カゴ Ter 笑 は. 其 苦 洩 圣 笑 5 知 洩 己 0 L 雪 個 1 6 W) す 12 說 所 2 Ł 23 12 は 18 其 聞 至 居 0) < n を 時 6 覺 P ば 17 n 5 な え 12 (a) 1 力>

獨 於 \triangle V 併 V 的 T し を は 36 だ 15 寧 大 有 72 12 15 思 贊 n 再 は 成 72 芝 1-6 0) を は 6 6 る あ あ 飜 る 讀 0 > L 個 力了 處 7 其 見 W 論 15 12 は W ž 6 80 は 3 其 な 12 結 隨.論 712 0 分 12

B

32

は

137

ĺ

7.

4

言語

演

カゴ

解

1

た

Ł

S

2

淡

括 た 的 Is 3 た 例 す T 之れ 之を 洋 1 5 は 12 文 罵 於 1 科 四 朗 洋 學 b 倒 7 我 精 は 文 E L た 明 等 はず あ 市市 9 3 は 里 的 0 す 全 樣 佪 1/2 Ł 然 る 3/ 個 17 類 得 機 R 劃 判 物 で 械 3 す 然 Ł 南 的 所 R る F 12 0) 西 る カゴ 洋 办 V な 關 X 便 け す 文 S 2 利 明 n る 語 は E 9 知 6 5 は 3 -(總 論 12 だ 械 南 治

6

あ 的

3 27

3/3

とな

3

カゴ

出

來

生

S

と考

^

1

10

3

やら 0 #IE 1 滇 3 22 12 事. 思 0 To 文 遺 阴 洋 僕 燧 なの) 來 特 は 常 ら 徴 3 1 72 R 1 我 2 る É 3 H 精 本 6 꺠 A 例 あ 的 25 る 0 ば Ē 斯 方 今 = 面 S 巴 3 72 戰 15 大 ல் 爭 理 加

13 想

0 於 的 E 爲 V め カン 7 歐 洲 小 カン 國 0 軍 交 0) 權 威 戰 丰 利 國 義 カゴ 0 撲 谷 高 滅 自 B ٤ 由 0 為 0) 772 爲 B 自 7 7 己 カン カン 文 VI h 明 人 事 道 3 布 V 爲 戰 植

* 爭 12 W n 朋 換 12 反 6) 0 12 L 旗 ^ 12 3 L 幟 我 偉ば か 1 大政 國 る 20 治 75 力了 僕 戰 2 的 V は 0) 爭 n 傳 事 說 斯 3 12 12 5 見 參 j カゴ 加 0 無 T 7 < 72 3 7 精 3 國 如 民 は 遍 何 0 42 何 * 的 0) 鼓 背 到 ď, 情 理 舞 底 L 國 由 1 家 72 3 72 735 思 3 の政 5 77>

る。 0) 3 \triangle 露 D 國 思 Z 國 粹 カゴ 人 主 繁 為 12 義 は カゴ 國 め 21 汎 0 人 12 露 0 ス は 國 ラ 叉 并 常 東 ス ズ ラ 12 2 1767 Ł 若 ブ 兩 文 フ 12 V 詩 朋 3/2 L 3 0) 1 V 政 威 治 .調 N 和 家 的 6 傳 者 S 統 12 کمر 南 る カゴ 露 種 國 事 \$

命 0

3

同

Ŀ

東 E

西 T

兩 2

文

朋 0

0

調

和

42

あ

る 1

事 カン

を 5

敎 H

6 43

n 使

る

信

る

今

天

14

0

本

必 6

な

渝

法

あ 22

9

12 る

カラ

4

知 文

n

73 か

V

殊

12

た

東

洋

明

力

說

すっ

3

或

は

併

7

n

は -(0 藏

其

云

は

とす

等 5 各 は る 處 0 V2 洋 相 あ 洋 女 樓 多 カジ つた 元 あ 者 0 0 7 13 容 K n to 6 閣 覺 女 物 < た る カゴ 0 吾 0 S その 孤 は 京 平 結 醒 た 質 17 理 肉 で ¥2 12 合 また現 文 立 な 過 あ 0) 同 0) 的 で 想 矛 0 ぎな 乎 4 時 明 文 それ な あ 境 盾 せ V 融 る 求 物 12 12 0 質 6 致 明 と撞 0) 和 U る 12 元 せ 生きようとする文明 4 實 東 3 12 ¥2 6 を 到 め カゴ L 5 力 8 洋 É ら爾 る た 理 甦 達 着 7 あ 來 滇 0 絕 重 立脚 世 以 3 لح 來 る 震災 個 處 處 0 想 對 る 大 と信 な問 界 境 後 á 玄 時 72 カゴ 内 0) カン T 12 特 文 2 は 文 吾 物 せ 3 排 期 為 6 0 釀 文明 E 明 質 ず V2 開 1: 明 題 從 K あ カジ め 55 12 來 如 Ł 0) と精 3 心 却 印 3 た 來 で カゴ そ 吾 呼 求 カン 靈 1 度 Ē 靈 る 能 6 は れを分 5 72 ta 乎 13 必ずそ あ ば 0 的 0) る 3 R 却 Tr 神 文明 現實 る との 6 世 1= 3 文 は な 0 7 0 る 界は 兩 111 36 4 私 明 違 湘 7 ~ あ カン 4 離せ 先 界 飽 10 あきた * は 來 者 る 0) 0 77 0 2 本 72 L) 0) 决 墒 (0 和 離 6 勿 Th 12 その 空中 洞 カジ 於て して 論 肉 來 間 L 地 は せ n は 713 0 6 3 0 5 果 6 あ 72 73 西

> 能 E 戀 た 72 福 bhâvanâ 0 如 4 6 13 บา 音 R 0) Politicalci cillzation ム叫 を説 は そこ Va た は 復歸 意 私 る 味 CX 大 < 3 0 L 深 森 詩 始 は 遺 13 ま た 私 憾 0 人 7 V 林 S 調 1 3 0 乎 ブ 中 Ł 0 和 急 ラ 胸奥 10 あ 葉であ 境 うち る 6 1 12 公朋 に深 た 處 L は ~~ 5. 据 つた。 6 7 0) 振 から scientific, unity-love なられ この 5 る鈴 あ 光 < 徹し 明 る (講 間 0 0 なくては 世 て忘 如 3 6 and 演の 界 4 32 6 12 音 東洋 が現 な 觸 れることの 設 夜 カジ n 執 出 5 な E 0 する あ カン 8

溡

カゴ

必

る

E

S

0

た。

2

XL

は

吾

K

^

と云 講堂 3 n 事 る h y だ ス カジ 3 う震 者 時 F 無 3 6 事 私 で 賢 < カン 人 今日 は 6 憧 へた。 其 2 720 あ タ n 0) B 對 唯 て居 思 ゴ 0 そし 1 私 L 72 想 7 12 w 憧 40 72 て其 0 3 私 公衆 取 久 觸 xL コ^{*} 事 懂 は る 0 n * 7 E 早 n 0 0) た 12 聞 は は る 5 爲 時 w 夕 と云 Z 12 先生 餘 最 ゴ る。譯 講 72 1 私 6 4 ム感 時 12 演 は ル 0) 親 か今迄 をし カゴ IL 遠 其 1 カン (1) 3 大の 琴 樣 * 7 郭 0) る F 持 詩 可 如 線 2 を 思 0 (mj た 角 な は

步的 す ません。氏は講演の終りに近づくや。 タゴール氏のやうな偉人は決してこの點を関 にして 力あることをも 十分に 認めたいので

spring up in all its vigour and beauty bringing its offering to the world in open light." crust, were meant to and the crust keep ourselves fast within the shell of the into harmony with the history of all nations of nourished our ideals; for these, the shell and the the earth; we must not, in foolish pride, "We must bring the spirit of our civilisation 2 the earth which protected be broken, so that life may seed still and

といふことではありますまいか。(六月十五日 と言ひました。これは丁度龜が甲の中にすくみ込 んでしまふやうに、 外來の文明を避けてはならぬ 朝

> 萬象の裡 の激浪そのまゝの熱烈さ の静けさがあつた。然し感激の瞬間 に眺むるその腫には、曙の海の カジ あ つた。 に於ては冲天 如き法党

殻のやうに、私の心胸はあの言々句々の中に籠 銘さるべきものであ 音樂的であつた。 樂的情緒にのみ支配さる、恍惚ではなく、そのブ く心靈の中に捲込まれぬ譯にはいかなかつた。唯 た偉大な驚くべき魅力の 把握して行からと試みたが、退潮に引かれ行 れは理知的に理解さるべきものではなくて寧ろ感 みなる比喩とは最早立派な詩であった。 ラーマを索むる心靈の輝に包まれた無我の悦びで 恍惚とならざるを得なかつた。然しそれは單に音 あつた。 翁が約二時間 に涉る講演は理解するには餘 そのメロデカルな音調 つた。私 爲 めに不知 は最 初其 不識その 一句々々を おれ 抑揚 ζ りに と巧

飢餓に惱む車中の人は、野に耕す者に食を求むる 比較し、顔でその疾驅する自動車の運轉は休止し、 いた時、自働車を騙る人と耕人との比喩を用ひて 翁は西洋文明を批判して、東洋文明の真 E

ガ

ルの詩宗タゴール翁の温容海の如き風丰は、私

の如き拍手に迎へられて演壇に立つたベン

さを覺えしめた。宇宙の心靈、ブラーマの閃動を

の心境に一

道の平和の光を投與

へ、言ひ知れ以懐

女

2

綠

0)

y

水

z

着

H

た委

員

0

力

12

は

急心

しか

らに

夫

云 角 < 砂 其 憧 太 0 事 大 (1) 聲 丈 10 7 堂 聞 許 ~ 居 と押 27 る 72 夕 1 貰 寄 -3" S 3 1 Ita 난 思 IV な か E H 練 最 n 此 i 3 ば 0 場 間 13 カゴ 之れ 近 る 合 25 女 見 を を V 争》 250 せ 最 誰 5 た 72 ds F 彼 0 善

12

た

夫れ 外 6 で、 3 夫 7 9 此 頭 2 ع 人 5 常 か 五 許ら居 n 0 る n 殘 席 で 六 備 る 見 大 りかた 0 嬉 カジ 講 3 J 行 7 八 カン 皆 だ 0 廻 17 有 白 5 は 目 な を 堂 不 吾 は 力> 是云 より 見 を 皆 華 る。 足 情 Ł L 0 カジ 何 男 カン 6 72 詩 た。 n 思 た。 初 を 3 子 12 は 後 媥 34 持 聖 3 座 へと私 2 装 Z 7 は 無 ~ 1 17 久 あ 0 うた 數 席 席 1 見 カ> すり T 見 *1 力了 II" 22 3 0 行 は えて 居 は カゴ 1 る 1 6 外 丈 講 で 72 皆 隅 何 私 IV 6 臨 555 あ 國 壇 其 だ 夫 力> は 0 0) 婦 時 だ 6 る 掘 カつ 12 カン n 0 順 取 0 隅迄 物 人 向 詩 10 3 嬉 0 10 等 0 座 珍 話 席 2 思 12 L 小 あ 1 T 席 黑 5 17 カゴ 0 聲 知 5 2 醉 カン 少し 右 無 4 聞 前 5 72 0 CA 0 10 た。 を蓄 頭 < カン 手 數 話 た V 時 7 居 0 0) 多 合 0 1 胸 S 72 行 是云 埋 グ 居 た 前 < 私 ~ 間 0 Mi 丈 加 0) カン 7 72 0 N た は 弘

> ち は 廻 る > 2 偉 7 入 30 先 5 生 方 6 p あ 5 50 何 n 百 皆 學 界 0) 阴 星 歌

た。 返 た 5 7 そし 樣 出 綠 ī 集 違 5 時 叉 6 かう n 0 見 12 は 1 鉛 L 0 I 15 鐘 新 TL 御 る た人 え 今迄 7 次 V 頭 0) 時 居 筆 2 12 說 0) か サ 8 先 る 第 見 3 6 聞 6 6 賜 力 と思 其 生 皆 番 12 中 る R V 見 あ 0) 1 え 21 1 方 有 Ł 0) 2. 0 善 0 近 3 た。 思 72 28 ガ 南 熱 12 方 此 樣 JU < 0 カゴ 3 白 丰 0 2 T 情 入 0 1º ~ ズ を 72 私 遠 を 時 姊 衣 12 描 熱 ラ 來 京 ⊐* 0 向 12 8 5 は < ___ 崎 1) 1) 30 は 思 1 6 17 心 L 先 変 急 6 枚 V と並 ルを見 7 15 あ 72 チ 認 未 CA た は 今 生 は 軈 態 5 起 P 故 だ 時 度 め カジ 何 L 5. 度 水 7 は 7. 鄉 ラ 72 + 170 處 登 は n 媥 II" 此 72 Fi. L 入 擅 2 V) 63 X そし 聖 誰 1 12 A 母 分 S 1 的 場 せ 36 口 と思 者 普 席 12 76 3 yw. 岩 見 R 5 先 ナ 元 知 間 彼 0) te T R 分 ザ 生 横 見 圣 夫 カジ 私 9 36 は 15 鐘 6 西己 T 元 申 見 22 せ あ 10 2 カコ 3 居 番 合 入 * た 其 鳴 時 h (1) 卿 ~ 讀 Ł 3 72 計 叫 V

__ 105 -

The same 1

0

者

17 21 カン

*

取

2

12

舑 た

Ł 時

E

嬉

7

3

味

は 居

2 た

12

私 歸

同

E

め

る

事

8

聞

S

久

游

外

12

父

0

朝

0

報

搖 止 2 0 一人 で、 席 5 爲 滿 カン 0 する た。 で め 0) な 解 警 め 12 た 12 咳 た。 同 で 午 不 力> 數 な 5 V タ V H 晴 Ŀ 場 後 足 0 73 1 カン 25 J^{*} 日 た。 n 居 和 頃 0 四 カン B 前 0 接 1 S ども 來 時 5 Ó た 渡 る 入 カン IV は 斯ら と其 是云 開 時 17 並 72 时 72 口 5 0 た六 方 會 間 E れども 憧 開 其 木 0 S ム事 場 と云ふ 0) 0) から 前 カゴ n n n 月 T カゴ 程 待 間 間 數 42 遲 7 に遅 得 0) n 手 6 入 0 を 人 行 氣 場券 空 12 * 其 間 暫くそ あ 0 0 > 12 を入 12 て居 12 大事 入 私 n 2 は 揉 0 7 た。 無效 7 2 h は 0 溫 居 梢高 Ū た。 時 た 6 唯 發 口 0 12 容 2,, まる事 私達 とな 時 ろ歩き 頃 奔 其 行 0 を 仰 石 外 12 走 0 私 は < カジ 入場券 聳え は は C ると云 は ぎた 12 L 段 千 飛立 枚を 軍 8 軟 3 72 12 カジ さんと 男子 恐 1 枚 腰 7 S カ> あ ふの 感 つ程 得 72 12 n 轍 JS D 0 カン 其 る 多 12 H 7 カン E カン

> ふの 男子 積 チと 12 12 n 12 F 事 B 時 てう 着 5 居 た 6 半 12 12 76 同 6 入 か よしと云つ 集 あ 0 頃 V 未だ入 女子 男の じち 7 0 つた 2 9) 12 濟意續 た。 たっ 時間 入 は RP 方 して A 4 П いて中へ B 皆默 待 開 前 5 0 R R (1) た人 中で ちゃ カゴ 場 居 0 前 其 12 て居 ると つて 叱 勝 は 12 處 カジ 入 咜 錠 It 手 向 42 V ある。 つた。 委員 7 けません。 12 時 こそろ 17 の下ろし 人 可 這 者 3 Ě 15 0 *2 する 720 は皆 入 0 0 2 山 9 姊 そして 入 2 つて 力ジ 名 と入 退 私 口 12 出 入 1 勢 崎 Ξ 場 場 は 來 先 無 カン 來 0 名 る 時 生 0 L 恥 口 6 其 V T Ā 許如 12 Ł 0) カバ R 0 は 0) 居 カゴ l 8 開 出 勝 を 皆 + は る 集 カン 場と云 受 分位 之 手 押 番 入 0 F 1 ٤ 0 if た。 來 6 た in シ 12 近 席 6 72 初 前 115 ウ 7

た。 軈 急 7 は L 時 く入場券を渡して 12 な 0 た。 そし 7 公然 互 に先を爭うて八 とス 場 カジ 5 n

た 0)

> 傳 私

P は

0 ス

父 *

君 編

0 3

思 75

想等に

就

V

て讀

h

で戴

V

かご

5

 \mathbf{C}

3

h

3

J'

1

n S

> 思 見 大 す 3

0

12

えんん 紛

Ł

7 起

集

る位

0)

人

R

は

流

石 H 聞 集

10 n カ> 6

違

1

所

カゴ

前

3 IV

擾 者 場

0 から

6

0

カジ 容 種

常で

南

る。

E

弘

ク

J"

}

12

他

0)

所

-6

他

0)

人

0

13

5

必

す

答

8

出

る

易 類

12

命

分 R

は

n

な

V

終 口

は

之れ吾が詩聖を迎ふる準備の積りであつた。一

明

較な

せ

5

no

た現

時狀

其

0

カゴ

私き

に西

は洋

如

何

は

0)

文

對記目

野川がは

カン

度

3

述

1

耳 12 12 私 拶 76. 12 真 何 先 御 だ 42 出 カゴ カン 初 御 7 氣 n 女 0 0 12 た 毒 此 0 言 張 73 葉 氣 カゴ 1 カゴ 明 切 瞭 2 T 72 12 入 居 0 6 私 ·I 來 0

詩 夫 0) 樣 n 13 力> 演 5 說 同 は じ様 澱 2 無 美 < 進 だ。 感 E 0) 强 S 調 子 で

n 命 只 E 私 人 は 西 我 は 0 12 どう 洋 外 時 模 國 3 倣 0) 12 國 ツ 私 婦 模 1 對 カジ は 3 す A 出 做 T 思 は る 來 12 3 X は 思 熱 75 0) 何 0 ず 烈 7 み -力> ~ 點 囁 15 15 遣 由 頭 と我 讃 B 6 3 力> V 36 辭 合 9 72 た。 12 2 國 は 0 カン 0 1 私 Ł W) 0 心 新 は 日 た -0) t 文 思 本 12 行 明 は 0) IJ is Ł 今 無 8 n 前 笑 =73 4 辯 日 12 居 護 S 南) 御 9 72 せら る た。 世 辭 は

た T 本 蓮 0 先 0) 推 時 文明 * 生 カジ 朝 私 は 澤 連 は 35 Ш 想 東洋 直 y 12 と水 40 深 暌 た 25 3/10 0 V そし < 蓮 上 暗 7 華 黑 17 居 花 * 0 水 る 7 遽 だ 花 底 8 5 印 0) 開 カ> カン 6 12 5 度 上 < 箭 破 12 12 蓮 は 座 華 カン 2 Ł 7 考 嘸 2 12 12 72 守 輝 1 p T 3 4 居 立 た。 麗 出 1 は 3 5 5 釋 72 1 和 算 n 日 V

> 6 L 妙 2 居 3 カン 力> 笑 72 紅 0 生 た 9 潮 < 72 0 此 K 0 映 だ 時 來 語 1 5 又 L 調 50 方 前 72 カゴ 樣 稍 西 0) 皮 私 外 激 相 洋 12 見 15 は 义 元 1 阴 如言 西 X 來 と痛 A 12 洋 其 13 文 0) 御 黑 朋 力了 A 7 手 7 何 御 12 顏 痛 0) n 力》 は 72 囁 仕 確 (1) 4 打 0 カン 色 合 12 3/ カジ カゴ 震 П 口 2 M 6 借 < 借

1= 世 かが n 72 n か 味 カゴ は 5 E 耳 12 無 日 2 S 5 郵 御 0) 3 43 本 72 睛 挨 n 4) 出 6 < 拶 た 龍 1 カゴ V) 會 7 3 偉 す 验 如 事 釋 F 15 < X 夫 3 大 6 衆 < ix 1 カコ 意 感 1 n 許 カ> \$2 0 -6 72 退 F 6 账 2 カン 9) E 72 6 7 5 は 鵬 0) 5 理 た カン 總 私 6 燃 (1) 想 n 9 事 樣 72 長 牛 東 る X は 3 は 0 は 1 15 此 は 2 カジ W カゴ 12 X 聽 時 如 カン 1 詩 富 当熱 漏 拍 1) 衆 位 XL 12 合 12 時 先 (2) 士 72 手 12 樣 な 0) 情 掌 答 カゴ 审 生 嶺 起 1: 53 は 8 ~ 拍 込 代 演 2 0 靜 0 手 深 72 B 說 11 合 0 2 カン S 香 T 12 * 1 方 掌 12 强 着 簡 拍 42 は W L 意 13 生 單 席

御 時 計 話 z 0) 濟 る 'n 事 nã 3 (1) ^ は 2 \overline{T}_{1} 忘 哥 华 n 3 頃 程 0 到 先 0 生 0 た 0 美 6 5 S

眼 1

鍰 2

H

た

詩

聖 な

は 印

IE 服

面 12

0 茶

婦 色

席 F

近 I

V 帽

方

Ø

色

0

度

0

w 12

を

頂

12

女 私 簡 カン カゴ S 36 1/2 毛 12 私 12 T 手 る 7 を 單 云 2 思 で 老 は 0 亦 1 1 > < 戴 父 Œ H た。 ~ カン す 瞬 21 久 ザ カゴ w と思 より 無 3 V2 面 n ナ る T 時 水 7 先 如 現 先 懷 る 見え 1 た 4 カン 12 砂 J. * 生 I. n 0 御 五 久 1 ^ S w 連 w 拍 カゴ た た 覽 ٤ ばそう 72 私 n V 0 7 先 サ 静 w 手 呼 姊 私兹 思 處 1 先 0 17 達 カジ カン 4 レ カゴ カン L 崎 叉 六つ で 13 10 生 0 カジ 40 は 起 に壇 IV 4 2 先生 を 12 0 6 威 た 先 T あ 設 0 9 時 300 居 72 生 生 群 た。 尚 居 る な 嚴 カン 御 H E は急 0 ます ほ る な 紹 S 25 カン 0) 衆 12 Ĕ, 年上 有 私 髮 私 遠 打 5 席 私 進 介 カゴ Í 先生 いで降壇 樣 まれ は 層 弘 眼 L 達 V 0 た 12 ナ 處 幸 長 着 想 Z n 0) 6 * 7 カブ ザ \$ と自 2 0 像 12 2 0 7 尊 な 離 ス 夢 V カン た V 2 方 鬚 先 3 5 通 御 頭 3 n 10 0 4 時 30 量せられ ろに 先生 つし Ł. 生 聖 6 顏 カジ を な 6 分 B 25 は 0 0 下 添 御 は 12 华 省 13 俄 カン 存 思 私 5 總 顏 は つて 分 は P 偲 2 17 0 77> を た 在 共 は 意 た。 る 12 ~ 0 何 長 ば 向 1 向 色 3 L 樣 外 間 0) 白 から 12 拍 破

様に

な

0

72

と呼 12 72 } 入 IV 知 浸 カゴ 3 0 2 N 0 た 樣 捨 Th h T 込 其 Ł 12 カジ カゴ 戴 思 _ 出 時 私 2 h 呼 等と云 來 0 は は 拾 は 度 な 居 n 自 今 12 W た。 する S 72 分 先 樣 程 爲 2 30 3 生 な やつ T 方 0 氣 先 あ は カゴ 御 弘 h 生 ば 6 仲 名 L なる 5. カゴ 5 カン 7 1,0 自 遠 12 h 0 懸 尚 分 私 いと云 笑 72 力 ほ 3 は 12 は 付 Ŀ 近 H 偶 0 22 と先 < 3 た る 12 タゴ 生 恵 感 事 0 を は E は 生 3 次 1 n カゴ 不 あ 8 II. 汉 N 自 頭 1

樣 8 私 開 固 0 叉 紙 30 セ 兴 發 机 破 總 カン ン 力> 唾 0) Ł 3 0 73 チ 32 る 付 0 長 賴 7 處 た 吞 メ 0 前 > V カゴ 英 女 居 6 > C h カゴ 72 退 12 そし n 冥 語 0 並 3 久 如 小 < 私 待 る 想 で ٤ IV 4 72 判 0) 7 12 51 な 7 拍 2 n 洋 カゴ 取 耽 詩 聲 T た。 先 手 罫 誠 る を で、 優 居 0 生 1.2 紙 書 に辛 L 7 0 る 私 迎 大 は 誠 は カゴ < С 達 3 眼 常 事 先 は 6 V 0) 薄 鏡 公 籠。澄 __ 生 で を を外与 n ~ と云 衆 あ 仕 は 語 5 h 2 た 3 事 だ な L 0 靜 3/3 とす ム様な意 前 カン 聞 講 7 2 壇 0 子 23 美 12 1 演 5 る者 くし 6 7 漏 淡 Ŀ h K 1 綠 3 說 0) 本 味 h 10. 美 す į. E E 持 S 2) 日 1/8 表 ち

其 7 脐 何 12 問 供 0 誇 5 新 聞 5 3 は W 感 自 12 E 分 I* 1 12 0 0 心 w 6 は 0) 授賞 あ 喜 悅 72 Tr 0) 報 光 12 Ŀ 12 滿 72 0)

黑 今 M () 腿 4 な カゴ 0) 男 あ 6 B 自 肥 分 1 12 0 72 は 自 思 盡 分 は R m 0 る 誇 7/8 顏 顏 を見 L た 和 張 つて 蘭 畫 大きな 家 U) 戀

念を 彼 實 0 カン 5 失 際 劇 な B 彼 詩 2 は 0) を英 哲學 刺 75 激 力> 3 譯 25 0 É た 音 70 樂と 讀 分 Ł T À 樣 タ 格 I) 12 1 15 12 對 2 w 72 とを L 7 そし 結 42 敬 ~ 9 自 け 虔 分 2

0) 30 劇 時 72 12 (1) 旅 過 ぎて 62 思 行 は n < 7 当地 それ 此 等 填 10 自 タ 分 J" 1 12 美 w L 0) 來 V 夢 朝 0 聞

若

つ幽

者

柔 自 720 22 分 樂 12 何 是云 7 L は 莊 The 嚴 L 12 H 喜 滿 75 幻 0 5 X 想 6 帝 7 南 大 居 劇 0 (1) 0 6 50 計 た 0 9) 演 6 人 會 12 4-あ 遇 0 入 場 72 h 樣 す 3 な 華 喜 CK

遠 13 3 哲 融 學 H 否 入 廣 神 0 S 伽 は 蓝 物 聖者 語 43 5 M n 0 12 美 聖 3 者 L 自 10 V 分 音 M 樂を カン 0 72 ら崇高 0 12 自 森 2 分 嚴 2 10 聖 0

> 9 眼 光 文 清 净 (1) 樂 音 12 意 霝 的 0) 憧 批 悄 K 奪

> > W

去

種 < な 0 12 唯 内 自 滿 0 カン 人 0 12 分 7 間 72 0 祈 は 21 道 72 0 友 0) 2 6 12 0) 遊 6 古 0 戲 あ 0 0 あ 1) 10 0) 6 面 其 5 如 あ 君 72 0 Ł < 0 百 10 他 愛 72 創 4 感 0) 壁 E 哲 5 學 H. 6 分 17 0) 質 10 \$1 [1] 亭 堂 T 10 2 問 照 7 自 暫 聖 的 (1) 研 者 分 111 究 は 去 0) 法 樂 10 1 h 行 悦

士 寂 1 -(50 來 すり J 日 0 3 h た 流 0 自 寬 彼 3 タ 分 永 > 美 寺 I" は 1 0) 111 0) 歡 12 3 18 3 イ 迎 Z ~ 彼 ブ 會 な 0 ^ V 詩 1 26 V を 3 1 5 3/ 自 滇. 席 3 12 分 2 L た 現 0) 11 實 自 幻 想 分 聖 化 的 42 習 (V) 其 聖 追 0

感 E 12 事 は 永 遠 0 喜 غ 渡 CX 6 9 る の海 74 點 の旭 如

と宗 寶 調 12 P 詩 見 和 珠 敎 0 3 渾 É 融せ Ł 外 F 音 V と貴 12 得 樂 3 繪 る 哲 0 < 13 古 學 彌 36 嬉 نح と宗 陀 有 吠 V ふ美 陀 信 難 25 3 仰 至 0) 敎 IV 25 は 事 シ カゴ 體 存 15 き玉 生現 候 現 L 14 字 特 た 文 T 學 10 0) る ^ 具 公 吾 次 繪 は 7 1 5 此 0 哲 3 74 IV 公初 學 0)

12

は

n

た

あ

n

丈

0

聽

衆

弘

1

72

雞

沓

を

先 分 た H は 3 < 持 I, 杯 ζ 7 前 7 出 掛 生 澤 あ 3 は 1 誰 25 13 和 行 を 7 it 先生 カン 0 0 を 私 72 13 る 寬 w 山 弘 272 通 來 7 S た H 先 樣 利 見 艺 0 居 は 0 32 0 op 6 きた 6 生 送 カゴ 人 13 1:2 72 見 12 7 生 カン 待 裏 n H な肌 る 13 R 滴 思 送 裏 15 10 0 くな た 自 積 3 は 私 私 門 n 正 力ゴ 2 0 カン .77 略 時 F., 7 6 零 7 達 6 門 分 n 0 0 4 I, 傳 72 立 カン B 居 御 な カン 待 0 4 72 心 は 方 軟 1 3 0 5 2 私 先生 顏 な は 冗 た 0) 6 至 讀 ^ カン 12 は 7 72 なみ は 長 夢 人 6 御 盡 な 9 12 12 先 S h 嬉 様に 大 な 12 南 歸 足 R 歸 0) 風 L 0 生 6 H 變 御 0) 13 5 r 樣 た。 ģ くと注 緩 頂 6 御 12 は 力> 和 50 迷 12 止 そうつ な美 挨 中 0 72 姿 吹 數 3 0 S どる 惑 拶 た 12 私 坂 Tj 3 カン カゴ 力三 1 72 た 早 p 事 21 は < 道 せ 石 る 7 0 は 坂 0 と持、 真 Ś 居 72 感 6 3 L 8 0 知 72-カゴ 只 0 方 私 0 教 そら E 世 0 F 静 擅 面 る。 n K > 達 V 17 た 目 思 No. た 正 0 72 36 嬉 12 カン は 0 7 見えな 話 氣 大 門 7 歡 12 A 從 0 (1) L 12 私 Ŀ 前 私 Ŀ 喜 P 3 7 方 6 下 カゴ 前 達 女 S は 12 6 隨 げ 早 滿 氣 13 0) 2 0 12 腰

> 1 込ん 6 殿 n 4 0 T 72 0 だ。 C 方 上 C 御 7 1 げ な 話 h 行 72 h (1) を 0 に 内 引 7. E 容 見 張 < 喜 2 72 地 弘 7 カジ h 13 ĺ 逃 印 10 げ 矢 L 私 は 張 3 72 0 0 早 2 樣 水 影 < 12 2 6 L 歸 取 知 踏 T 6 n b 電 12 た 72 h 丈 車 力 6 S Ł 12 0 た -乘 御 Z (1) 御 h

1 私 ~" J° 3 0) 3 た 美 F w え 人 1 賞 色と 0 次 -1 0 金 來 J" 雜 1 V を受 室 1 13 韻べる 沓 0 律 40) 是云 w 2 3 H あ 0) T は 0) 私 た 名 來 0 3% 太 0 時 た。 6 彼 12 耳 電 8 始 シ 3 0) 12 車 め 平 力 3 神 は 0 70 -1 K 入 喧 L 0 耳 夕 6 12 喜 7 13 V 5 聖 1 音 V) カコ 空 者 12 0 1 3/ イ 13 0) は 次 歌 乘 1 彼雄 第 ス 13 只 3 ラ n 幽 カン チ 72 力

詩

に降

付

1

工

は 西 0 習 若 丽 汚 揚 作 な 3 Å 日 句 0) 0) V 明 本 0 後 戀 人 果 12 3 17 は は S رج 取 東 室 S 0 洋 女 0 12 カゴ は 7 4 F 何 笑 盤 集 每 んと云 3 術 女 日 0 論 0 伊 てく 6 0 太 人苦 自 南 利 分を苦 る、 0 人 痛 た。 B そし 6 獨 南 逸 5 0 7 A 彼 8 露

*

潮 ŀ 6 t > p る n た は 潔 やま 氏 な 0 詩 る V2 カゴ 的 如 生 12 命 < まみ 12 は 思 氏 え 自 は 身 7 n 3 は 女 虚 お 0 大 づ な カン 6 1

居

言

演

禮 る 在 0) TF. 0 女 南 文 す 1 せ 事 背 講 7 醒 る 12 8 カン 5 偲 後 た。 答 自 講 カゴ 演 時 長 出 3 覺 n E 堂 CK は 12 今や る時 來ませ 高 る < 8 あ 解 所 7 東 氏 カン 2 7 氏 洋 我 せ 0 カゴ 0 は 聖者 氏 自 5 h 來 あ カゴ 0 國 朝 然敬 人格 天 n 6 玄 6 印 から 地 物 h l とは 護 72 度 は 大な Ę た。 質 虔 9 1 12 S する 氏 Ü 9 潛 文 0) カ> 特に 8 齎 明 淚 0 3 る > 來 意 \$ 3 動 だ 6 12 0) 溢 ĺ 講 Å n 味 流 カン 考 72 る か n n 合 演 カン せ 3 生 る h 掌 8 Ł る 3 ^ ます。 づる 大 命 とす 終 大 再 3 度聽 使 感 4 0 0 命 精 į る 7 5 を 命 考 覺え 華 衆 n 帝 傾 0) 12 存 大 ż 3 氏 對 12 7

且 穀 6 拜 徒 T 復 た 12 よ りと等し 7 陀 南 谷 b 方 0) 楞 同 婆 7 和 7 羅 迦 き印 門 Ш 的 T. 上 禮 2 10 人 度 拜 1 12 存 的 加 b 大氣 する 息 0 T 吉 5 シ 3 辩 ヷ カジ る眞 神 塊 足 巖 時 跡 0 的 基 管 8 カン 佛 督 即 滑 弘 教 敎 せよ 徒 た 並 Ł 3 12 12

吾

10

あ

Ò

立

す

所

は V

吾 由 H 東 地 帶 如 過 す 3 樣 مرة 趣 味 あ る 36 0 拜

致

じまし Message なく 必ず之を認 0 と思 を讀 者 は 私 0 大 隅 然 12 12 タ 0 は 夕翁 浴 寬 め 異 N 21 n 風 3 を感 とも 17 周 つて 女 格 永 その 實 に接 す 吾 寺 36 を 邊 U また 謝 3 を 現 人 0) 0) ソン 其 せ る を to ス す 7 案 0) 公初 其 期 姿 6 以 此 同 る 内 カン 靈妙 文 76 n T 歡 0) 紹 あ は 時 0 詩 詩 餘裕 受け 12 2 介 る 知 夕 15 迎 會中 聖 大 清 ~ n 公园 的 12 カジ しと信 ませ 學八 0 且 を得 汉 12 L 12 高 0 於 7 公 豫 > あ 新 15 0 よりて 角講 4 3 h 想 味 且 0) (1) 讚美 聰 1 せ る 豫 は カジ 2 せす 齎 豫 增 明 5 そ 野 ね め 言 敢 らさ 歌 る Id 12 を 6 は た 於 叫 7 15 22 3 掩 > 旣 0 け 此 只 疆 告 9 る h 3 4 12 12 き豫 我 る 5 ح 0) げ 文 た * 新 3 ・國 3 那問

を往 日 來 は 致します、今も猶。併 難 有う。 タ聖 を迎 た威 し筆 想 B

談 は

隨

分

胸

0 崎

A

外

內

5

40 b 源 信 る 3 僧 何 都 0 九 カン 0 百 因 年 緣 忌 12 12 丁り、 4 被 存 公初 候 7 21 不 歡 思 迎 議 0) 42 花 思 環 3 N 居

3 成 寬 信 は 派 候 更 華嚴 しく IZ (0) は カゴ 統 詩 神 3 合 嬉 10 層の 12 法 Ł 境 甚 L 0 12 至 華 結 0 凡 精 E 6 徹底 シ 唯 構 軛 神 は 段 得る様 摩 2 公别 12 0 層 無 候。 フ 法 0 量壽經 進 オ 身 0 來 ---段 歩を 横 12 丽 ---0) 朝 0 1 常 4 溢 12 L と切 活機 見 を奏 住 あ T を 由 紛 其 た E 見 6 りを 望 8 É と致 L ブ Ť 得ら ラ 仕 現 帝 Fi. 曙 E 幾 候 E L 0) 光 國 所 分 7 る 攝 ソ あ 0 調調 7 17 4 理 思 >. 3 7 樣 想 錦 ジ 此 此 B Ŀ 來 12 等 花 0) 翫 遊 相 カゴ

譯

事

0

少

F 鳳

> し n

5

今氏 と存 は n タ より 0 候 精 ず 夕 J. 風 1 7 神 は 貌 1 4 的 n 結 n IV 生 n 0 12 構に有い ど物質 接 1 活 思 0) 9 な 想 7 3 ZJ, 說 は 之候 瞬 的 小 は B 東 間 生 2 生 洋 0 活 的 は か 人 そ 又思想 を警醒 には別 る 12 12 得 夢中 を忘 0) 思 た 0 غ 3 想 す n 12 6 12 3 た なりて、 新ら 如く生活 に於 似 る 者 > 2 多さ今 とも 方 7 カン その は 有 層 思 力

所

< 女 存 T* 1 w 0) 如 き生 活 × 本意 Ď 3 生 活

る

ます。 浮 せ優 思 1 を致 Ĺ 0) 7 聞 Ł お た。 あ つかず、 居 で承 ひまし 4 恥 S るも ふの L 5 讀 L かなす。 多分非 知 V い話 日 兼 h 所 本に で居 720 0 は は \$2 Geistlich ます。 しま だららと 0) 调 6 その 寫真 す 常 對 あ 4 りませ かが 12 L す 宝 70 72 4 製 集 3 L やその 好 で 私は 想 作 中 715 親 72 h つとも in 像 あ 切 0 Sp (1) おちい で、 6 出來 何 他 15 大抵 まだタ L ます 7 激 新 だ 輕 0) 辻 居 は 3 聞 < カン S 同 3 3 カン 爽 人 頑 0) 感 12 J° 6 2 h 1 女 言 出 3 5 だららと 13 カン 占 で 6 葉 72 12 様に 純 あ 36 講 本 13 0 郎 調 有 6 言 は 演 36 6 72 思 2 13 想 動 難 御 0 カン 鄱 傪 返 カゴ は 0 4 6 V

< 新 1

少し 生きた時ぞの 氏 3 高 (1) 震えを帶 風 12 姿 1 Ex 7 36 沈 爽 着 0 CK た P > 樣 3 豁 カン 達に 氏 17 に感じました。 0 L 1 聲 1 7 音 壯 慈愛溢 とは 重 橋 音 E 律 3 あくまで高 5 的 カゴ 1/2 7 L 如 砂 2 1

×

address, so beautiful and uplifting with spiritual vision and ideal impulse, was measurably weakened by its forgetfulness of a whole host of facts that were the outburst of the animal and savage elements in man, evident in the evolution of the Orient, as well as in the tribes and nations of the West. Historically, it is certainly contrary to fact, whatever may be true of certain religious and philosophic cults from which the eminent messenger from India has come, that "Eastern Asia" as such has been evolving its own civilization, as one that is "not political," "not predatory," but "spiritual and based upon all the varied and deeper relations of humanity."

However, acknowledging the limitations which the history of India generally, of China, Mongolia, Korea and Japan of necessity draw about the Paridisaic past pictured by the aspiring messenger of peace and love from India who is now Japan's guest, we can think it a most hopeful-sign of the times that this eloquent memory and appeal has been brought to Japan. Japan's recent history justly moves Sir Rabindranath to speak of its having "infused hope in the heart of all Asia." "Asia now feels that she must prove her life by producing living work; she must not be passively dormant, or feebly imitate the West." Moreover, this address has become memorable with its closing greeting, "We offer our thanks to this Land of the Rising Sun and solemnly ask her to remember that she has the mission of the East to fulfil." "Let the greatness of her ideals become visible to all men like her snow-crowned Fuji."

Clay MacCauley.

次ぎに す。 皆夫れ 3 し ふたらよいか)にて、タ聖の所望に酬いねばなら 数の形骸でもなく、真の活さたる生命? 亦相應の反省と實踐とさせてもらいた 靈動に對し、覺悟と實行のある事と思い升が。我 V2 でもなく、文章でもなく、 0 タ あるやらな氣持も致します。次ぎに來るべきは何、 し思いました。學者、詩人、 强ら衝 聖自身に る ツ は私 力 力了 タ聖の奥には、まだ何かタ聖を動かすものが 如 ツ 生るべきは誰、など、深く分け登り、其ブ くの天分より、此來るべき世界的 0 動 柄 タ光明を、その 易 であ が、不總無學の自分 求むるが如き、夕聖の 明かに顯す事の出來以靈威、 りませぬ、許し まゝ逝世に持つてくる人 勿論物質的や、成立宗 政治家 にも響 て下さい。 誠意、 いてい いと思い 宗教家、 (何とい 恐くは 唯 思潮及 夫等 此 E 女 與

> 現 は べる國の子たるを発れず。 れたる美ーー之を他にし て彼

は終

FI

け、 過ぐ。 する光、心を爽 力以 光、 わが愛見よ、光はわ 風はけた、ましげに走り、笑聲は地上を 愛見よ、光はわが愛の絃を彈ず、空は わが光、世界にあまねき光、 かならしむる光よ。 が命 の中 心にて躍 眼に口吻は る、 開

D

とは 蝶は光の 光 0 波 頭 海 12 にその帆 うね る。 を張 る。 百合花と素馨

惜しげもなく實 わ 力ゴ 愛兒 よ、 八珠明玉 光は二 雲に碎けて黄金となり、 と散 る。

の大水 喜悦もまた。 愛見よ、歡樂 小は此世 天の に溢る。 は 河 葉 はその より葉 (ギタンジャリムり) 兩岸 12 擴 を越えて歌喜 力了 る、 無量 0

とすればそは即ち彼の美化せる人格、彼の人格にty"は彼の生命。若し我等に彼より學ぶものわり

をまつ心地が致します。

徹

頭徹尾藝術家、彼の所謂

子木員信 "Harmany and beau-

Tagore's Message of India to Japan.

The large audience which was privileged to listen to Sir Rabindranath Tagore at the Imperial University in Tokyo, on June eleventh, had an opportunity for hearing a most beautifully elaborated address under the title,- "The Message of India to Japan." Every listener must have been impressed with the gracious personality of the speaker, the rare charm of the language used and the lofty range of thought to which he was invited. Beyond question, too, the address was an inspiration to all hearers to whom such exalted thinking is welcome. The message was a memory and a plea from one of the supposedly unique peoples of the Orient to another, recalling a common experience and heritage in the far past, and making an appeal for a continued fidelity on the part of the latter to the special pleasures of that past. This appeal was emphasized because Japan, especially, among the lands of Eastern Asia, has become more or less subject to the influences of the Western peoples, which only too evidently are threatening the distinctive impulses and ideals which have been the genius of the East, and which, the speaker declared, have fostered "the culture that enjoins man to look for his true wealth and power in his inner soul; the culture that gives self-possession in the face of loss and danger; self-sacrifice without counting the cost, or hoping for gain; defiance of death, acceptance of countless social obligations that we owe to man as a social being;--the culture that has given us the vision of the infinite in all finite things, through which we have come to realize that the universe is living with a life, and permeated with a soul." All this ancient heritage, Japan, so the speaker assumed, is now holding, while, at the same time, this "child of the Ancient East," has also, "fearlessly claimed all the gifts of the modern age for herself," despite the perils that arise in making this claim.

Having achieved this wonderful success, Japan has now "given heart to the rest of Asia,"—proclaimed the speaker, and "taught as that we must learn the watchword of the age in which

we live." India's message to Japan is, therefore, one of gratitude, with an appeal to her to remain true to the triumph which has been made hers, and so become the leader in the Orient that is to be,——the heir of its own past and also beneficiary of all that makes the West truly great.

A large part of the remainder of the address of the eloquent Hindoo was a reminder to Japan of the dangers which beset her as the pioneer of the new age in the Orient. In this part of the message the speaker seemed, in his desire to emphasize the common spiritual and vital heritage of "the whole of Eastern Asia from Burma to Japan," to ignore many of the forceful and formative facts of oriental history. His picture of the whole of Eastern Asia as it was before the irruption into it of the West with "these sordid days of screeching machinery and gigantic selfishness," with its "blatant lies of statecraft and the smug self-satisfaction of prosperous hypocrisy," makes a charming scene to cherish. But, unfortunately, facts present this picture much more as the vision of a dreamer who draws from his wishes and ideals, than as a copy by one who is face to face with reality. When was "all Eastern Asia United with India in the closest tie of friendship?" When were all the peoples of Eastern Asia blessed with a "living communication of hearts," wherein they "did not stand in fear of each other;" or "arm themselves to keep each other in check;" when there was no "exploration and spoliation of each other's pockets," when "ideas and ideals were exchanged," and "gifts of the highest love were offered and taken;" and when "no difference of languages and customs hindered us in approaching each other heart to heart," and "no race or insolent consciousness of superiority physical or mental marred our relation?" Indeed, when, in Eastern Asia, throughout, was "the highest unity of man and the deepest boud of love" acknowledged,-"those days of peace and good-will?"

Among those who have only a superficial knowledge of history those questions need only be asked to receive a host of terrible denials all the way from India to Japan; and all along the centuries from the times of the Aryan and Scythian; in the days of the conquering Mongols and the Taiko of the North. Sir Tagore's

IN SIMLA FAR AWAY

- A humble request from an unknown friend, living near the beautiful Lake Biwa,—a reader of my essays and fragments was he.
- The original article of a western philosopher on the essence of religion, referred to in my essays, was what he earnestly wished to see.

By his name, a Buddhist priest I guessed him to be.

And though to me entirely a stranger, I considered him a sincere truth-seeker, different from the many of his profession.

Willingly the magazine containing the article was sent him to his great satisfaction.

More of him I wished to know, and communications following revealed his life, his sadness and his hope.

A young Shinshū priest is he, as I imagined.

An attack of illness has left him weak and he knows he will not live long.

Yet on days when he feels better, he would go the round of his duties, preaching sermons and conducting funeral services.

Now the temple life is full of traditional untruths, contradictions, even sheer lies.

"At times, in the midst of service I am suddenly struck by some thoughts in your 'Fragments', and I pity myself or laugh at myself.

Yet as long as I live, I must go on conducting customary services," he said.

But he has a younger brother, almost his only hope.

- A bright and promising youth he must be, for, chosen by the wellknown ex-masterpriest of his sect, he is now in Simla of India, studying Sanskrit.
- But it is not the desire of the elder brother that the youth become a mere scholar of old scriptures; much less an explorer of unknown Thibet or Central Asia as some people of mere name have been.
- Only let him be a true man of religion, seeking for and drinking of the spring of life;—such is the prayer of a brotherly, of almost a fatherly heart.
- Sad it is that one cannot do much for truth, though eager to do so!
- Lonely must his heart be to see the light of hope only in his near relation and yet to think that his eyes may not see the day when that hope is realized!
- "Kindly remember my brother and give him your advice," he said to me.
- "I know not if my advice is needed, but surely shall I remember your brother," I answered.
- Now while our country is ringing with the voices of welcome to the sage Indian poet now among us, my heart is turned to the land whence he has come.
- For I know that there is one soul in Simla far away, meditating of himself, of his brother, of his country, of life and of truth.

June 10, 1916.

Tetsuzo Okada.



絕對現實の世界と宗教

野村隈畔

あ る 真理 眞理は更に偉大なる眞理を産む。 一は飛躍によって生れる。飛躍は生命の必然的な創造力である。だから真理は生命の唯一の子

更に偉大なる子を産まらとして苦んでゐる。飛躍は新らしい真理 D かき生命は再び飛躍せむとしてゐる。 するやかな道徳的 自我 0 は更に飛躍しようともが 產 出 -(0 まり いてゐる。

で剛健 それだけ生命の なそし つて生命は自我を産むだ。今や生命は信仰を産まうとしてゐる。 0 剛健 なければならない。宗教的自我は道徳的自我よりも更に熱愛で更に殘忍でなければならない。 な真理の子であつた。それ 飛躍は道徳の犠牲と舊 い真理の超越とを要求する。 は道徳的自我の新生であつた。されど信仰は更に偉大で崇高 自我は生命にとつて非常に偉大

自我の教ひがある。亦ふかい静かな幸福がある。 情熱とを含有する愛慕である。真に生きるといふことは永遠に戀することである。『永恒』を孕み 恒』を産み出さむがために絶對者を永遠に白熱的な情愛で戀慕することである。この真の愛のうちに は疑 ひもなく愛の貪婪な欲求である。故に生活はすなはち戀である。愛慕である。 而も容 一、永 智と

KANKUDORI

Kankudori,
Living amid the snows of the Himalayas,
The birds-of-pang-of-cold they are called.
At night the female screams;
"'Tis bitter cold, we shall surely die."
But her mate encourages her saying;
"When the day breaks, we shall build a nest."

Now the sun rises and gradually wrms the heights.

The birds go forth in search of food and forget the pangs of the night.

Soon the night comes again and the female screams;

"'Tis bitter cold, we shall surely die."

Again the male encourages her and says;

"When the day breaks, we shall build a nest."

But when it is day again, once more they forget the night.

Thus days and nights pass on and the nest is never made.

Suffering always in the night!

Forgetful always in the day!

Some Buddhist scripture of old transmitted to us this pitiful story, and even now our sadness lingers among the unknown snows of the Himalayas, around these poor birds-of-pang-of-cold, Kankudori.

る。

何 こに根 いふやうな慾張つた心持ちでは到底眞理は生れない。眞理はいつでも母親を犧牲にして生まれる。そ 故 力> 本 といふに母を犠牲にすることは、 的 絕對 的な變 化 がある。 そこに 犠牲の 唯 0 最大なるものであるから。 更 生 カジ ある。そしてそこに迚も堪えが この最大の犠牲を要求する たい苦 痛 ある。

重 基 理 カジ カジ V むかし『富める者の天國に入るは、駱駝が針の孔を通るよりも難かしい』と言つたのは、 カコ に尊ふとく、 そしていかにおそろしいものであらう。

これを看 破したものであるまいか。

12 で意識し發見するとは思はれない。この真理は不思議なちからによつて、『絶對』がわれに 愛慕して居るから。 相違ない。何故に彼れはそれを與へたか。そはいふまでもなくわれは生命によつて永遠に『絕對』を このやうな真 理が われ のうちに隱れてゐるとは思はれない。このやうな恐ろしいものをわれが好ん 與へたもの

彼れを限りなく愛するものにのみ、そのしるしとして真理を與へる。 りなき燃焼のうちに眞 だ ら真心から彼れを愛慕してゐないものには、彼れは決してその 理 0 子を宿 す。 恐ろしい真理 われ 、は瞬間 のうちに、 を與 な たが 限

もつて だ カン ねる。 ら眞理 V は つでも機會のある毎に受胎することの出來る强い、 わ れのうちに本 來は存在しない。われ はたい真理といふ永遠の子を争み得る可能性を そして健かな愛慕の力をもつてる

自覺は即ちての清淨なわれの受胎を診識する唯一の根據である。自覺は眞理といふ永遠の子が宿る

0

絕頂である。

志の力によつて耐え忍んでゆくうつくしい尊とい睿智的感情である。そして飛躍は斯うした愛の瞬間 能でもない。それは『永恒』の子を孕み産むことに限りなき執着と悦びとをもつた、そして限りなき意 愛なくて生きられないものは生命である。愛は單なる輕薄な感情ではない。亦盲目的な悠忽的な本

これ へる。月が雲に蔽ふはれると蔽ふはれないとは、われしくに何んな意味が それを意識すると否とは何んな差別がある。 の謬見であ 眞理は は糧糧 よりる衣 われのうちに在ると學者も宗教家もいふ。けれども實際はない。さらいふことはあり得 真理がわれのうちに従って凡ての存在のうちに潜在するとしても、 服 よりも貴く、 野の花よりもうつくしい生命を宿してゐる人の子をそこなふ汎 意識 と無意識とが真理それ自身の性質に何 それ は んな影響 何 にな 神論

研究したりすることではない。真理をおはうてゐる深い暗 ひ換へれば無から有が出て來ることだ。嘗て空虚であつた母の胎內から大範疇をもつた赤子が生れて 産むといふことは正しく眞理をうむことである。唯一の新しい眞理が始めて産まれることである。 生命は愛である。真理を産まうとする愛である。そして真理を産むといふことはそれを意識したり い雲の層をはぎとることでもない。真理を

苦患に更に恐ろしい犠牲と、 に永く苦しめば遂にいのちを取られることが 赤子をうむとさに 肉體 更に根本的な變化とを堪え忍はねばならない。愛も命も子供も欲しいと も精神も共に變化する。そして永い苦患と憂愁のために全身が ある。されど眞理を産まうとするもの は に强

更 12 愛 幸以 慕 0) 6 ために自 か る 一分自 何 故 E 身を忘 ふにた n 2 思 >,, 彼等 ひ煩ふものは幸ひである。 のみ愛 0 勝 利を 得、 そして尊とい接觸 愛慕の ために一切を犠牲にするものは 0 瞬間を 與 5 5 0

だ

カン

50

宗教であ 0 は、 絕對 した偉大で 更に崇高 30 1 つて眞 眞 で偉 理を孕む 理 の子を孕むものは道徳である。そしてその眞理を自分の犧牲によつて産む 大である。 もの は偉 道徳は悲哀を犠牲にした偉大である。されど宗教は偉大を犠牲 大であり崇高である。されど自分や一 切を犠牲にして真理 をう にし ものは

か かし信仰 6! n らは は 私自身を、 凡ての この 頭腦 3 Ŏ を蹂躙することが出來る。 そして 0) 蹂躙を要求する(宗教)。だから真 尚私の 星までも眼 -に酸 けれども自 そう、 の宗教 分の これ 頭 は道 てそ私に 腦 を踏 徳とも とつて むことは 犧牲 初 にす 出 的 C る。 楽な 絶質が Vo 5 ひ得

躙

る。 0 絕頂 けれ に飛躍 ども これ ぜ びとし は私 た 0) 最 瞬 後 間 0) 0) 最 絶頂として残つて居 も白熱した 光景では る な と叫 カ> 0 んだニ 12 力> 3 チ I の言葉は、 正しく宗教 0)

絕 0 自 頭 分 腦 現實の を踏 0 M 孙 腦 超 は に、 え 道 德 T 自分 進 9) まね 權 には眞 威で は ならない。 あつた。 理の子を産み落さねば 自分 自分 0 0) 仰ぐ星の 高さ星を脚 ならな 道 德 F 0 40 理 蹂 想であ 躙しなければならない。 つた。けれども今や自分は自分 そこに即ち

自分の宿した尊とい真理の子は、最も崇い宗教の絶頂に信仰の褥を展べて産み落さねばならない。 は産 するまでの問 は謂 は い胎内教育に過ぎなかった。そは眞理を産む唯一の 安褥 では

べく『絕對』と我れとが接觸した瞬間の、最も高調した燃燒である。そは卽 ち飛躍である

そして更に 自覺は真 第二の はこれから始まらねばならね。真實の變化と苦惱とそして戰ひとはこれから現はれねばならない。 飛躍 燃燒 の意味で即ち嚴肅な意味が、 とは即ち宿した子を産むことである。 した强烈な瞬間、 即ち第二の飛躍の來るまで『産みの苦しみ』をついけなけれ 永遠の聖淨な受胎である。 自覺した眞理を摑み取ることである。 貸とい聖靈のはらみである。

て産 即ち生活 吾 むだ永遠の子をいふのである。そして限りなき惱みと苦悶とによつてこの永遠の子を産むことが 々が『真の我れ』といい『自我』といい『自己』といって居るのは、この自覺によつて孕み飛躍 における愛慕の本性である。

めて眞理の子が『永恒獨尊の光り』を放つ。

だ愛慕をつれた一の慰めにしてゐる。真理を弄つて玩具にしてゐる。彼等は『絕對』を愛をうるた 道具に使つてゐる。 むことを嫌ふものがある。創造を呼びながらその創造の瞬間の渦卷を囘避するものがある。 には生活に對する愛戀の情をもちながら、而かも真理の受胎を怖るゝものがある。永遠の子を産 になって受け賣 彼等の愛は最も忌むべくそして罪ふかい汚な りするもの カゴ ある。あさまし い世の中だ。 今の い娼婦の愛である。しかもその愛を 愛は金を儲ける手段で 彼等はた めの

偽善者 しようとする。そして絕對の遠くしく追れ去つてゐるのを悟りかねてゐる。 接觸 をゆるさない。 尊とい受胎 の瞬 間 3 與 ~ ない。 彼等は偽はれる愛をもつて彼れを抱擁

理

は決

して論理の遊戲や愛の

押賣りによつて生れて來ない。

否睿智に充ちて

ねる『絶

カン

ゝる

き言葉を生む。

態度である。

だから絶對不許不といひ、我れといふも物として存在するのでなくて、燃燒した持續動向として感

得される。 換言すれば絶對の現實として必然的にあるべくされる。

て唯一の十字架とを要求することが出來る。そしてこの無條件的な要求と叫びとか、絕對に真實な意 融合し渦 絕對 「現實は思惟の客體化と關係化とを捨離した燃燒動向そのものゝうちにある。この動向のうちに 卷いてゐる人格のみが、『我れは眞理なり』と絶叫することが出來、一切の超越と蹂躙とそし

義をもつことが出來る。

てこれ これ が真の宗教でなければならない。これが真の信仰の飛躍するところでなければならない。 が真に永恒の愛でなければならない。 そし

真理を孕むだ若かき生命は、今このおそろしい信仰にもがえてゐる。 (六月六日稿

汝は私を無限にした (ギタンジャリ)の中から

も新しい生命をそれに充たす。 汝は私を無限にした、それが汝の欣びである。この壤れ易い器を汝は茂度も空にした、そしていつ

汝の手の不死の接觸に私の小ひさなこゝろは歡喜のうちにそれの制限を失ふ、そして說くによしな この蘆の小ひさな苗を汝は山を越え谷をわたつて携へる、そしてそれで永遠に新しい旋律を吹く。

は注ぐ、そしてなほ充たされる空所がある。 汝の無限の賜物はホ、私のこのほんの小ひさな手の上にばかり與へられる。年は過ぎる、 粒 二順譯

しかも汝

ならない。 は、すべて絶對の現實となつて眼前に現はれて來たことを、最も嚴肅にそして大膽に凝視しなければ べてのものよりも否自分の生命よりも尊といものであることを、愛の本能によつて體驗しなければな そしてその瞬間 お に胎内教育は終りを告げなければならない。そして更に自分の産むだ眞理の子は、す いて初めて、『永恒』に對する愛慕のローマンスや受胎の瞬間のうつくしかつた燃燒

『若しわれに従はむと思ふものは日々その十字架を負うて我れに從 『我れは途より、真なり、生命なり、人若し我れに由らざれば父のところに往くこと能 <! · · ·

つては絶對 大膽に健剛 つて絶頂 の現實であった。『永恒』も亦現實であった。 に絕對現實に生きやうと努力した。眞理も自由 に飛躍して真理を摑むだものは、斯く叫んだ。 も權威も惧ろしい爭鬪もすべて、 そして彼れは星の蹂躙を要求した。 彼れにと

や現實を自らと同 された永恒 や官能 は亦速 の現實は永恒ではない。それは早く輕卒に「永恒」を持ち來たす。けれどもかくして誘ひ出 に動向にそして同じ强さに持續させる。そこに絕對現實がある、即ち永恒それ自ら かに消失する。これに反して『永恒』自らが肉や現實に現はれて來るときは、その肉

而して『我れ』又は自我はこの燃燒動向の直接自覺として、或は飛躍信仰としてそれに結び附けられた 眞理又は絕對 不許不といふものは、主觀的內面要求の必然的 な燃焼 動 向を客體化したもので

L 0 5 0 0 過ぎて 損害 D 73 佪 カ> らない CK 0) も與 **ゐるや** 5 に さ カジ 制 湧き起るの 國 J 5 抑 民 n 壓 カゴ あ 7 36 かな らは へ思はれた。 加 を覺えた。 られ れた。 ことを見た。 7 ねな 彼れは其國民を形成してゐる個人々々が全體としての國民とい そしてそれを見た彼れの心には飽くことを知らぬ法悅といつたや いてとを見た。 其全體を稱して國民とい 個 人の 自 由 ふに が全體 は個人の自由 のためといふ と力 實 カジ 餘 0) 下行 りに 一發達

活全體 十倍も二十倍 民を全く滅ぼしてしまふのを彼れは見た。 T 忽ち血 3 る を模倣 0) を彼 なまぐさい戦 す n も多いその は る 0 見 を彼 た N 彼れ 华 が起るのを彼 n 開 は は 見 民 傷まし た。 は、 それ その れは見た。 V でも 國 心 此滅 に撃 民 8 2 びたる偉大な 征 た > 猛獣のやらな半開 n 力) 服してしまふと、 して 7 其 W 12 とら おきの 3 に話 名 偉 0) 間 A L 大 わ 73 B カジ カ> 力) なく、 らな H る國 此 た。 偉. 民 大なる名 V その 0 或 V R くら 滅 より CK 0) 12 36 D 力> る國 數 カン い生き殘 12 6 民 於 な 0 ては V 生 國

するとその 若 5 國 0) 民 は V カン にも快活さらに から答 へた。

南

73

12

は

あ

73

た

0)

國

0

滅

びたの

をどんなに残

念

23

口惜しくお思

ひになるでせら。

しくもありませう。 4 何の恨が 0) 力了 た ないで死んだり、 死 しが ありませう。死ねもいは肉、滅びるものは着物だけではありませんか。 V2 0 何 うし は當然ではありますまいか。起つた國 て國 L カン 0 不慮の災難でなくなったりしたものなら、 滅 し人 びたのを殘念に思 が壽命に達 してなくなり、 つた り口惜しく思つたりすることが出來ませら。 が滅びるの 國 カジ 興隆 も當然では 0) それこそ残念でも 極 13 達 L ありますまい T 滅 靈と文明とは永 CK る あ 0 6 に、 力> ませう。 影 何 命 生れ 0 人に 悲 口情 を全



といめ

佐

藤

清

たが、 ぎなか まれてゐた時でも、 **ゐるリアリズ** あつた。 いろんな人々の盛 彼 れは幼ない時から何時も夢ばかり見てゐる子であつた。天下の青年がリアリズムの 結局、 つたのである。 それ 彼れは依然として夢を見てゐる子であつた。たゞ夢はいつも其内容を異にしてゐ でも彼れは時には自分の夢想家であることを忘れ 24 0 潮流 んな議論 彼れは宛かもそのリアリズムの行詰まつてしまふはてばかりが目に浮んで來 に化せられ をは、 たのか、自分でもリアリス 日の當らぬ薄ぐらい片隅に座つて、 トであ て、或はすぐそばに暴威を逞しらして るかの如き感じ まじくと眺 カゴ めてゐるばかりで な 潮流に巻き込 v 6 もな るに過 かつ 126

今てゝに述べよ**う**とするのは彼れが見た大いなる夢の斷片に過ぎない。

たと感ぜざるを得ない程の鮮かさを以て彼れに感ぜられたものであった。突然彼れの前に偉大なる名 それは過去であるとも、將來であるとも言ふことは出來ね。たゞ其刹那に於ては確かに現在であつ

ぢやありませんか。今はそんなものは通用しませんよ、アハ・・、自分のものでないものまで取ら

或若い貴公子が頻りに裁判官見たやらな人と論爭してゐた。

「此川からむからの山まではわたしの父の所有でありました」と基貴及子が言つた。

「そうです。それに違ひありません。」と裁判官が答へた。

「此十町歩の土地はわたしの父が勤勞の結果所得したものでありました。」

「それに違ひありません。」

んか。」 「それでわたしはその父の子なんですから、此土地は當然わたしの所有に歸すべきものではありませ

勢の結果でなくして所有するのは、常識から考へても、善い事ではないぢやありませんか。」 「えゝ、そういふ時代も昔はありましたが、今はもうそんな事は出來ません。何ものでも、自分の勤

「それぢや此土地はどうなります。」・・

「どうもなりません。たゝ勤勞者のものになるだけです。例へばそれがあなたゞつて構はないんです。

1051 勤勞さへすれば ……」 金がありますから、わたしはそれだけでも充分暮せるだらうと思ひます。それは別に申分はないでせ 「そういふわけなら、土地はどうでもよろしうございます。父のもつてゐた一寸した邸宅と些

な貯

1050 そ他 ん。 滅び 國 るも あなた方は見えない所で戦勝者を征服してゐるのです。」 民と同 0) 半開 のではありません。」「そうです、そうです」と彼れは思はず知らずから叫んだ。「滅 民が じやらなものになららと努力することも出來るのです。 あ なたの 國の文明を模倣することが出來るのです。 滅んだもの そして殆ど全世 はたが 界が 外 形 あ 12 75 過ぎませ た びればこ もと

づね う言つた 自分にもわからな ことを知つてる して彼れ れは其時非常な借財に苦められてゐることを感じた。その借財が何のためにしたのであつたかは 利息が は其時殆ど元金は仕拂つてしまつてはゐたが、習慣上莫大なる利息を仕拂 た。 いくらになるかを思ひ切つて聞いて見た。すると債権者はいぶかしげな様子をしてか かつたが、 それを思ふと彼れは氣 たゞ非常な借財に苦められてゐるといふことだけは明らかであつた。 が狂いそうに逆上するのであつた。 彼れは債權者の宅をた はなくてはならぬ 128

た 金はみんな頂戴 なたが あ なたは利 利 息とか元金とか 息はお受取にならないの したのですから、 仰有 るのはわたしにはよくわ それ以 Ŀ ですか」と彼れ 「頂戴するつもりは少しもありません。」 かりませんが、 は驚いて駄目を押した。 兎に角わたしから御 開立て

利息 つて 體何 ですか。」と其 人も驚いて 反問した。

利 7 い、、こ」とその人は笑いながら言つた。「利息、 息 つて利息ぢやありませんか」 と彼 n は氣気 短 かな性分を遺憾なくあらは、 利息 それはあなたずつと昔に行はれた規則 して叫んだ。

るんだらう。

る。その上われるか今まで住んでゐた土地は餘り人口がふえるので、人口と土地の ない。況して他人が勤勞して持つてゐるものを奪はうなどとは夢にも思つてはゐない。たい用ゐない あ んでゐる人々の甚だしく稀薄であることを。 なつた。それなのに、見たまへ、此耕されてない曠野の廣くしてはてしないことを。 でうちやつておく廣い土地があるから、それをわれ~~の勤勞の汗に依て利用しようとするだけであ られ ねな た、勤勞者にのみ、其勤勞の範圍内に於て、その土地の占有を許されてゐるだけで ……且つ絕對的に土地を占有し得る權利は そしてそこに住 比例 かとれ 間 は興

やらであつた。彼れはそれを見ると、さき程あんな質問をした自分の心が淺ましく思へた。 放つてゐた。歡迎の手をひろげてゐた。移民法などを拵へて騷ぎまはつた時代などがあるとは思へぬ つて來た。 話がまだ終らねうちに、此土地に住んでゐるものらが、新しく移住しに來たものらを見るためにや 彼等は優美であり、閑雅であり、何處となく氣高い樣子をしてゐた。彼等は皆喜びの聲を

一の國 だ 力》 知らない」とその大工が の王様はどなたか」と或時彼れは或國の大工にさいた。 答 へた。

知 らな (V) か」と彼れは稍不意に撃たれて吃驚して聞きかへした。「しかし、お出でになることはな

るるか。

ゐないか。

知らない。

ずつと前にはそういる者が

ねたこともあるといる話だが」と

大工が

ないといふことを、 「大いに申分があります。 あなた は あなたの勤勞で得た所有以外にあなたの所有とするものは、 まだ納得されんやうですね。」 此世 12 あり得

はどうして明日から口すぎが出來ませう。」 「それぢや父のものは 何 -2 わたし 0 ものとなるわけにはいかないんですか。・・・・そうすればわたし

「お働きなさい。他人のために一番よい時間を幾らかお割さなさい。---――何でも構はない、そして得たものは皆あなたの所有となるのですから……」 書記でも、百姓でも、

三三の大都市に縁どられてゐる曠野が彼れの前に開かれた。名はわからなかつたが、

ある。 ばらくけずんな顔をして彼れ れで彼れは矢庭にそのうちの一人をつかまへて、移民禁止合を犯してやつて來るのは なるば 國の平原のやうに思はれた。間もなく、下等な移民が續々と何のことわりもなしに海の向からやつて だからわれる人も他人に制限を加へたり、他人の自由を拘束しようとする心は少しももつてわ 下等な移民と見たのは、よく見ると彼れの同じ國民のひれであつた。彼れはやゝ不安な心にな のによつても、 りではないか、何故そんな事をしてまでも外國などへ出て來るの ふのは、彼等は移民禁止分を犯してやつて來たのに違ひないと推定したからであつた。そ 制限をうけてゐるものではない。 の顔を見つめてねた。それからから言つて答へた。「われ といふのは、われしては人 カ> と詰 問 L 八間であ た。 國際紛 くは 兎に角、或外 その 誰 議 る 男はし の基と 力> らで 500

聞 罪 る 72 は RI 3 な デ 13 基 2 古古 7 0 3 は 2 0 彼 P 餘 12 とその 7 1 悲 CK 滅 カン 0) \$2 1 程 は の馬 CK V 旅 8 チや寺院 何 行 0 Ł 人間 多く 0 3 1 5 味 力》 だ 徒 力> < 5 7 72 しと答 5 庭 > 1 0 しと彼 すると其版 0) m 0 32 力 73 呼 n ことを 12 者だ」と言つて彼れ る 窓 答 は 滅 CK 氣 て 0 25 0 7 前に立 與 路 1 n へた。うそん CK Ł 步 った。 为分 12 は n 奮 傍 好 0 0 n つっか 的 300 人間 た。 7 13 生れ 12 打 が言つ 1 (1) T S 彼れ 萎れ て問 ちどま なく 人は ねる 石 T 3/ やは るい) そし 0 來 た 12 0) たらう 跡 うた。 には此 「基督 7 なことを聞 坐 6 72 間 なつてしまつ > であ つて らか C 1= 聞 0 よりか 的 12 だ。 人間 て休 彼 を嗤笑つた。 V あ 罪 い休 72 無限 る 人 n は 教徒は二十 言葉の意味 0 光まばゆき靈人 カゴ 0) _ 間 h 72 は 「愛のた と答 真實 子を産まなく 安の光が此時 くの 72 は 6 カジ 群 0 なぜ おた。 7 時 72 めでも n では よ III. 0) カゴ へた。「何 0 0) だ。 彼れ 寂 5 基督發 世 力> 飛 力了 めだ そこ 古 15 な ら稀 寥 ち K D 紀 So で行く なくな V 12 カン は怒つた。 0) しと其 らな 75 大戰 0 徒 人 射 0 薄 12 70 つた 群 間 L 何 Z 死 72 12 どうして 7 12 等以 込んで來た。 0 0 B 75 5 苦 會 力> うた n は 人 0 うて つた。 か 滅 カジ からだ」と其 72 72 12 惱 を覺えた。 N を そして「何故わ 生れ 沙汉 人 後滅 答 たいと思つて、 B めに め CK 感 0 0 へた。 6 36 0 CK 2 をさ 76 つゝ 見 E そして矢張 0 > > 人 3 选 んでし 3 3) カジ 0 知 15 1 基督 そして る。 恐怖 滅 V. ある より がさらとして 南 77) 6 2 ことが 人 まつたの る CK <u>_</u> V2 Ł 教 は 0 更 0 16 と絶望に 旅 簡 12 だん ざが たしが 美 徒 > 力》 聞 人 う旅をつ せ 單 à 獨 高 0) カゴ 出 V 罪の に答 72 L だ。 滅 P 來 3 る V ではは な で 否 淮 0 7 馬 CK カン 2 7 それ 72 庭者 12 倒 化 < 3 3 700 たら その め 4 來 間 3 0) 13 > 0 1 9 0 寂 た。 3 で今 72 2 7 な カゴ カゴ 2 72 馬 は 2 原 め 稀 から n 因 6 死 簡 彼 た 5 は カン S 2 b 彼

答へた。

かけて見たが、この大工と異つた答をしてくれるものは殆ど無か 實は彼 れはその國の王様に會 ひたかつたのだ。それで、彼れは遇ふ人毎に幾度も幾度も同 つた。

しの外に知つてゐるものは無い。・・・・・あなたのやうな記憶力のよい人は今の世には珍らしい」と言 つてからくくと笑つて行つてしまった。彼れは全く冷かされたのであった。 したものゝうちで、わたしはその最後のものであらう。今はわたしが王であつたといふことさへわた 上に權力を執るといふことは善いことではない。それでわたしは王をやめた。恐らくこの世に王 「王は質はわたしだつた。しかし王となるといふことは人の上に權力を執るといふことで 最 後 12 彼れは或立派な老人に道で遇つた。そして同じ質問をした。老人は笑ひ ながら答へた。 ある。 人の

に見たもの つてねるのであ 以 上の夢は彼れが殆ど引きついいて見たものであるが、次の一つはそれよりさきに見たものか、後 か、彼れにも今はわからないのである。たい夢そのものだけは今尚鮮かに彼れの記憶 に殘

らな 教徒 督教徒をさがさうとして旅に出たのだがまだ一人も見出されないと答へた。すると其旅人は「おまへ 彼 S n の影は 旅 人がやつて來た。其族 或時、 何 處 12 真實の基督教徒をさがそうとして旅に出た。永い間、いくら歩い も見出 されな 人は彼れ かつた。彼れ に何 は疲れ のた めに旅をしてゐるの て路傍の石の 上に休んでゐた。そこへひとりの知 かとたづねた。 てる、 彼 n 眞實の基督 は眞 基



生 を (三)

沖

鳳

S と私との關係

M

趣 味 ふかか き青 年僧

秀煌 意見を 0 は此 な あとでの 議 新 M F 論 聞 駄屋 君 衣 0 B S 町 0 カジ 13 吐 の生れ どは の岩 1." 講 新 は 僧 5 招 M 時 7 俳 ク 演 决 句が 居 代などを讀 ŀ い主人が 12 して 來 た。 で幼少な時 n かが S 上手で且つ新刊の文學書をよく讀んで居た。 T は女の 持ち けれ 吳れ M 家庭問題 は仇 とも た時 力> んで居て、 H 高 から小僧になつて其 討でもする様な意氣込だつたねし 15 7 流 V 題に苦しんで居るので、其の相談對手になつて吳れと言つて私を訪 顔の長 どは 石 來 15 は宗教家だけ 私によく M カ> 2 S. S た。 咽喉部に大きな瘤の 0 けれ 質 ŀ 問 あ w 頃は隣縣の田舎寺に住職をして居たので どる 0 0 ス トイ 態 7 度 隨 私 だとか は恰も 分 0 位 猛 置 烈 私が と言つて笑つたのであつた。 あ 後鉢 木下 な所 境 る、 遇 彼 倘 悉 3 12 12 同 江 12 ガラく聲の あ 玉 つて、 情 だと 初 襷 す めて會つた 五五 る 力> 今の 云 所 ふ様 太 カゴ 男であつた。 明 A あ 時 な勢で 0 治 2 學院 あ て、 思 彼 る。 想 は あ 頭 敎 12 2 20 旣 授 0 た。 彼 な 山 V 12 平 7

問



石

5

3

0

0

を

Ł

9

7

L

J.

め

で

0

>

あ

礼

は

淚

弘

j

ほ

す

Ш

111

0)

72

>

ず

ま

77

42

3

此

Si

~

4

お

3

T

4

*

見

る

小

3

4

石

2

3

何

p

5

K

若

É

S

3

樹

0

ح

み

E

9

0

溶

<

る

カゴ

ی

Ł

L

雨

0

細

J.

5

石

だ

>

2

舖し

H

る

大

路

12

並

0

ボ

ブ

ラ

2

0

若

8

を

2"

V

とを

ī

U

カン

ds

L

づ B

カ>

21

觀

n

ば

S

み

10

4

光

à)

b

S

30

せ

E

3

庭

狹

4

青

ぞ

5

2

0)

カン

Th

0

15

な

L

4

原

3

忍

は

す

る

黎

0

大

路

0)

朝

あ

H

ぞ

4

鐘

0

音

は

H

]1]

0)

水

25

な

Ŀ

4

0

>

大

野

0

<

n

0

龤

H

V

あ

る

力>

な

Ш

な

4

0

裾

は

は

0

力>

12

夕

W

Ji.

9

72

5

迷

S

9

>

暮

n

T

Ł

羽

せ

ず

カン

<

7

女

72

大

4

3

靈

0

お

K

13

5

H

仇

21

見

0

>

Y

獨

b

悶

40

る

何

事

0

D

づ

5

10

7

13

<

あ 5

h

17

は

S

カン

12

D

CK

L

4

我

世

ならまし

濃 TA

伊 藤 太

- 134 -

で虚無主義になり得ない事を言つて置きました。まかく事件が案外手輕に濟んで、旅費まで貰つ

大分瘠せたよ、僕は勞働と云ふ事は强ち糞を擔いだり石を割つたりするのみではないと思ふ。 は頭を働かする事だ。」

と言つた時、 す る事夫れも大なる勞働でせら、 彼は默つて點頭いた。 矢張 そして又たナシ り君等 3 ナル讀 本の林檎の種の所を讀んで其意味を訊い

720

信仰の破綻と復活

て居るのを見て教會 其後彼れは〇 ドクトルの へ出席する様に説いた。 所 へ薬局生に置いて吳れと申込んで來たとも聞いた。私は彼が頻りに 私が教會で讀書會を開いて、原人論と遺教經を聖書と比

較研究した時最先に來たのは彼であつた。

になって、遂に唯物主義のアナキズ 換する位 0 『沖野さん、 神學部へ入學しようか知らと私に相談をした事もあった。 始終ぐらしくと迷って居た彼は遂に内村さんの聖書の研究を讀み出した。 問 几 い娘を奥様に貰つて新宮の町で閑靜な住居を持つと云ム始末。 中 十三年の六月中頃、 17 で全く掛 あなた 私も東京まで行つて來ましたよ、地方裁判所で極簡單に取調べを受けました。 け離れ の事をも尋ねて居ました。私は自分が最早無神論者でない事と、あなたが 私 た間 の宅へ彼れは突然入つて來た。彼は頭を丸めて墨染の法衣を纏つて居た。 柄であ ムに衝き進んでしまつた。そして立派な洋服を着て、川奥のお寺の ったが、四十二年の末から彼は再び田舎の寺へ引込んだと聞いた。 併し彼。 もう私とは途で出逢つて挨拶を交 が無為主義者と繁々往復するやう そして思 い切り つて同志社 檢事の質 一神論者 137

0) 主 明 治 人 は 四 M. -3 咳 年 Ö N 7 = 死 ス んだ モ ス 0 M 花 は カゴ 私の 私 0) 所 庭 に見事 に來て死に に咲き誇つて居 し人の 在 りし る頃、 世 0) 事ども 彼 n カゴ を語 無 二の友であ 5 0 72 時 つた下 斯 'n 駄屋 な話

をの

でどうしても 巴 **分達は樹下石上でもあるまい、一つ法衣** ぞと云ふ域には到 から實行主義 でもしてやりたくなる。 禪宗は無神唯物論である。 に移つたのだ、 達出 來な 此間 Vo 其の と言つて友達が の矛盾した消息 心裡は私によく了解出來る。」 誰がどう言つても唯物論 を脱 いで社會の カゴ 死ねば悲しい、 何物 かの形になって現 爲 に實際の働きをして見たい。U、 無靈無神だと知り の根底に立たねば釋迦何 はれねばならな つゝも 物で我 vo 記 念會 G 弘 う自 何物 禪

私は別に異論を挟まなかつた。

主に 衣 和 は 其 7 後〇 な 歸 つた。 つて 2 7 F 淺黃 居 ク 四 73 ŀ 五 0 S w 0 0) 單 日 懷 所 衣 L からナ 7 で M 12 白 私は S 兵見帶 シ S 彼 は寺を出 Ħ 乳 ナ 0 N 寓 を捲 讀 居し たと関 本 V 7 7 の二巻を 居る成: 11: 2 S 來 た が、 取 720 林 寺と云 出 L 或 B 7 ふの 其 私 內 0 を訪 宅を 0 知 問 らな Ł l 3 い文字 720 ツ = M 1) は 0 訪 見事 意味を二つ三つ訪 pa 7 な 來た、 クル 勿論

菜畑 つて還俗 は 僧 へ糞を 侶 だと言 しよう 擔 力> 0 0 行つた て徒 知 500 衣 ら薪を割 徒 食する つたり、 0 かざ 嫌さ 到底此 に、 此 の寺 の弱 い身體 來て自ら働 が堪 へられざうに いて食はうとするの もな Vo だが、 寧そ思 毎 CA 切 日

と言つたMの顔には非常な辛苦の色が見えた。

h 私 は 13 12 自 傾 分の S 祈 T りから 行きつゝ 達せられたと思った。彼は今C監獄で柔順に服役してゐるさうな。 南 るだららか、 夫れ は私の度々想ひ出す事件 であ つて且つ彼に對する無形 其 の宗教心がど の贈

、K、と私との關係

非公娼論者の靑年僧

ら妨 た 事 T げ カゴ 7 K 5 あ 居 る は 3 た る 此 うな。 事 頃 町 天 唯 3 主 あ 0 教 2 東 たさうな。 0 派 說 教を聽 本 願寺 末 夫れ S て夫 0) 真 カン あら 宗僧 n 17 心 侶 82 6 を傾 力> あ 私 け、 つた。 0 前 4 0 う洗 彼 牧師とも交際をして居て、 は 僧 禮 を受けるとい 侶 になつて寺 ム間 を得な 際 教會 12 いで名古 13 つて でも 說 親 屋 戚 42 数 客 力>

長 私 する 私 帳 出 出 い、そして眼 に控 た所 來て風儀 はあなたに協力して頂きた カジ 0 此 で仕 カジ 0) へて、 町 手 取早 を飼 樣 の細 來て間 其人々に忠告をしたり、 力 いと思ふ。 無 す事夥 い、少し仰向 い。けれ もなく、 i い。伯爵清 だから ども女郎 彼 い事 いて物を言ふ四十一二の僧侶であつた。面 は立派な法衣を着て私の書齋を訪れた。 カジ 私は あるのです。 屋 棲家教と云ふ知事様 新聞へ投書したりしようと思 每朝 の存 族く 在 は嫖客の あ 外でもありませんが、此 0 遊廓 存 在 0 の認可した事 入口 カゴ 原因となるの 1/2 行 300 2 7 に對して我々 會 どうせ頭 色の黒 目 町へ今度初めて女郎 の第一次に 星 だ カン L 5 S S の一つや二つ 朝 顔の圓 其 風 歸 情 期り言つ 6 0) 嬗 0 カゴ 苦情 S 客 人 8 K た。 眉の は擲 を手 * 根 絕 カゴ

ません。」

宗の寺には居りますが、私の將來はどうしても矢張り人格的の神を拜する宗教にならねば滿足出來 て其所らを見物して歸りましたよ、私も一時はいろ~~迷ひました、今は斯らして法衣を纒つて禪

送られ其結 と語つて、黑衣の下の白襟を正した其手付が今にあり~~と見える。然るに彼れは其後再びT 監獄に き事を勸 めた 末は斯の如く他の人々と同じ運命に陷つた。私は手紙を飛ばして彼れに獄中聖書を讀むべ 左の 返事を寄越した。

時 母 なれ。 くよみました。バイブルは一度借覽して讀みちらかしましたが今一度叮嚀に讀みた ヤゴ が片言まじりに書 w キイの小説にあるやらな浮浪人や淫賣婦のやらな人世観が起ります、 いた頗る讀みにくい手紙を貰ふより外に豫期しなかつた貴兄の慰問狀確 エ、まっよ何とでも いと思ひ居 り候、 に不 138

購求して讀んだ本は傳習録と親鸞聖人傳です。 世の中何てくだらないものだと。併し時折人間以上の神や如來が戀しくなる事もあります。こゝで

私は彼 膝下に 拜啓、 大兄健全にておはせ。 底不完全殊 が獄中必ず人格神を認むるに到るだららと夫れを切に祈つた。一月十九日發の手紙には 昨十八日遂に死刑の宣告をうけました。私は今親鸞聖人を通じて如來の子として頂き如來の 歸 るの 12 信仰を有つてゐます。人間の小智小見凡慮淺識を以ては萬事皆な不可解也、人間 私自身は頗るアサマシキ者也の自覺を生ぜざるを得ざるに至りました。さらば は 到

依 6 反 賴 抗 したが、幹事 非 戰 階 級 は放意にT、 打破、 排宗派 K 心と云ふ念慮が だけへ通 知しなかったと言ふ有様で、 强くなつた らし 孤獨 な彼れ は斯 うした理由 カ>

前で聖書を披 カン 不 李化 るやらに 充 5 た彼 いて頻 なった。 は遂に無為思想家と交際を始めて、 りに基督教を語 そして其度に講演をするの る時、遉 心がに彼 は大 n 12 抵〇 彼れ は不快の顔 ドクトルと私とであつた。 0 本堂では月に幾回か談話會と云 色が あつた。 併し私 ふの カゴ 本 が開 0)

出 ざるを得なかつた。けれども下、 張 此 するやらに 0 談 話 會が遂には唯物論者の團體 なり、 果ては制 服警部が出張 K は其思想 である が益々峻烈に傾 つて禁止を命ずると云ふ事になったので自然消滅に終ら かのやらに認めらるゝに いて行 った。 至つて、 會合の度に刑事巡査が

信徒生活への轉向と其最後

を 品品 四 十三年 つた 末 0) 春 であった、私は 一人の大學生を伴れて彼れの寺院を訪 した時、 彼は種々と宗教問

どうして 陌 無阿 骊 胸 佛 を唱 無 SH 彌 へませう。 FE 佛だ、 絕對 に信頼すると云ふ信仰でなければ教はれない。 私多以前 のやらに

た。歸途に、 と云つた。 私は驚 私は 大 いた。彼 學生に對 32 の思想 つて、 が頻様な告白をしなければなられ迄荒んで居らうとは知らなかつ

『T君は全く他力の信仰を失つて居たんだねえ。』

る

悟

ですがっ

どう

办>

南

13

72

0

御助

力を願

CA

た

を攻撃す

る導火線

in the

得た

5

私 は 黑 救 倒 世 軍 72 0 語 B 業の 0) 0 3 有様など る。 彼 を語 \$1 0 此 0 7 (V) 運 别 調は n 72 實 カジ 行 ic 彼 n 到 らな は熱心 力> つた な る非公娼 カジ これ カジ 論 窩 者 的 であ 42 彼 0 て、 13 現 清樓家 代制 度 0) 殺 が伯を

獨の不平が生んだ談話會

孤

彼は 日 露戰爭 真宗の 何とな 信仰 の際、 n ば彼 を堅く守つた。 町 0 信ずる宗旨 0) 各宗寺 院 これ は絶 は 敵 對 カジ 國 為 他 降 力で 伏 め 35 0) あつ 戰 彼は各宗の 7 祈 鬺 祈禱 を執 僧 侣 禁 行 厭 した。 カン ら國賊 は宗 併しT 門の 視 法度 せら K 6 72 禁じ は 其 6 仲 乳 間 る 12 入 居 らな る 力> 5 加

12 反對した。 なるかと言 終って 彌陀 各宗寺院 人論 體 法は は 0) 外私 再 二千餘圓の金を集 CK 各宗寺院の 12 は禮 拜 すべべ 怒を買 300 めて 戰捷記 ふに のが 到つ ME 35 念碑を建てようとした。彼T、 た 記念 碑を建てゝ其の 金文字にお經 K は叉其 を讀 0 To 連 6 動 何

至 敎 は つて 會 12 彼 此 行 n 0 は町内の 會に つて彼 0 よく出 階 級制 檀 招 信 いた 度 入 等と寢 徒 鑛業家で名望ある人が に特殊 L 0 12 6 壓 歌會 0 食を共 迫を甚 部落 () 員 佛 と云は 12 く慣 カゴ 彼等 して 敎 僧 慨 侶 0 居 る. 1 720 T 部 > カン 數十戶 死んだ時 洛 5 42 所 時 は 邪宗門 行 々激越 で つた 私 カゴ 0) あ 其家 りし な議 30 敎 と氣 會 カン T 脈 て會合をし 通 論 ら町 を通 変 カゴ 被等 K 11-1-内の僧侶 ずるも < 36 時 と平 事 て居 R カゴ 72 南 特 (1) つた。 120 全體を招聘する事を當番幹 殊 い交際 12 そん 取 3 そし 取 を結 扱 な事 扱 は は 5 1 3 努 為 12 カン > 72 5 的 事 12 $m ilde{T}$ 月 7 カジ 其 12 か 此 K だ つた。 0) 囘 特 は きに 基 宛 殊 17 彼 彼

『東京では小聲で唱名して看守に叱られたが、今はいつもお念佛を申して居る。』

と言つたさらである。

した時に、

てドアの外へ妻女が出た時、大きな聲で、 先きへ』と言つて妻女は後に殘つて、最後の視線を投げ交したが、T は潛然と涙を流して居た。そし 面會時限の來た、妻女は別ればねならない、けれども一秒でも永くと思つて、看守長に『どうぞ御

『頼むぞ!』

過し なかつた。或は發狂して死んだのだとも噂されて居た。 と叫んだと云ふ話を聞いたきり、妻女は遠くへ去り、Tの消息は知る由もなかつたが、獄中で五年を た彼は昨年の六月二十三日獄中で死んだと云ふ通知を其妻女から受けたが、別に何も言添 へて來

雨の七月の(ギタンジャリの中から)

雨の七月の深い陰影のなかに、秘足で汝は歩む、夜のやうに默して、すべての見張人を避けつい。 今日朝はそれの眼を鎖した、聲高い東風のしぶとい呼び聲をかもはないで、そして厚い面紗がいつ f 眼

さめてゐる蒼空に引かれた。

うに通りすぎてはなられる い族人である。おう、私の唯ひとりの友、私の最も愛する者よ、私の家では門は開かれてある――夢のや 森は彼れ等の唱歌をやめた、扉はどこの家でもすつかり締められてゐる。汝はこの荒廢した

二順韓

無 政 論さ、 策 は 境 遇 夫れを捨 から來 た感情 てなくちや、唯物主義の社會政策とは一致しないぢやないか、併し彼の男の社 だから 和 會

に南無阿 彌 私も夫れを承認した。其後私が彼を訪問した時、 陀佛と合掌して唱へて居るのを見た。 リバイバルだねえと私は自らに言つた。 彼と彼の妻と八つになる養女とが、 食前

下駄直しや日傭稼ぎ連が七十何圓を捧げた。で、勸化員はTが年來怠慢疎懶で信徒から募金しなかつ たのだと攻めた。 てあったの 今まで本山 が、或年本山 から寄附金を募集に來ると言つても、貧乏檀家であるから壹圓も出來ないと云つて斷つ Tは大いに憤慨して から勸化員が來て特殊部落で涙聲を揮つて本山維持の說教をしたので、忽ち

『其樣な貧乏人苛めをやる本山なら、我々はあの本山の大きな九柱を挽き切つて、停車場の股 火 鉢 にするまで本 山 しと戦 ふの だ。 煽 90

度熊野 た。 と罵 けるやうに S で其 次 倒せし 11 儘 V で東京 12 再 めた なった。 び東 沿うた或る勞 程 京 地 方裁 0 に送られ そして 彼 が、 判 の働者の 所 九で社會政策 久々で本山 へ呼 古出され 團 體 に説 た。 に上つて、 も無為 教 東京の に出出 主 カ> 調べが濟んで歸宅したが、 義 何とか云 けたあとで、 B 打忘 n ム位を進 たやらに 彼の家 めて貰つて美しい 西 は警官の捜査を受け 17 東 其の草鞋 12 說 教 21 金爛 の紐 行 9 をも た T 0 ので 居 袈 解 裟を掛 かな あつ 1.

カゴ あつたので、私は其の妻君に数へて整理の纒りを付くるべく彼地に彼女を行かしめた。妻女が面會 私 は 彼 n に手 紙 を送つたが 返事を吳れなかつた。彼がA監獄に移された後、 其家庭に生計上の

紛議

△虚心集句稿と明記のこと △歴、句數を限らず 一二中塚直一 常願俳句募集

宛

野 げ 柳 蜂 25 種 土 女 木 唇 石 木 形 I R 工 7 0 0 h 7. 35 飛 玺 立 手 げ p H 芽 8 力> 0 燒 指 束 枯 子 げ を H 0 カン T 4 0 n 置 9 0 鳅 傷 午 0 12 南 あ 7 傷 12 Ł < 飽 打 E 力> 雀 舟 カン 影 2 銜 出 5 4 な る 2 12 H る 葱 飛 T る 2 3 < 3 9 4 H 82 CK 青 0 木 早 白 3 る 路 弟 柳 腄 力> E 叺 1 CK 2 蛙 カン 瓜 椿 ٤ た 和 当 H 田 日 > 石 0 咲 7 0 13 10 13 5 0 Va 初 V 13 3 白 9 0 暌 73 兒 < 2 L 荷 文 春 9 6 6 3 V2 9

蕉 真 椰 雀 掬 多 博 希 猶 唉 珂 鼓 愛 武 蒸 子

背泉興樹存穗星鳥香界樹石

家 店 丘 炙 土 水 藤 藤 葉 JII 艫 D 日 舟 柳 0 0 カ> 狹 17 堤 0 П 赤 年 ほ 花 垂 花 女 3 歷 0 寄 2 2 哭 る 0 12 3 は 空 あ は 太 73 る 手 2 > 2 付 n カ> 9 カゴ 觸 階 2 ح 4 樹 弘 雲 72 E カゴ n め E お 道 72 R U 5 0 क् L 9 72 踏 曲 0 る ک H 步 兒 0 な た 袷 0 T < 茂 \$ 7 0 あ 遠 < 9 3 風 疊 遠 0) Ш 過 ば 72 給 葭 9 雷。 春 雷 吹 春 E 藤 40 2 主 切 B 5 25 暮 0 < 暮 着 暌 る 0 0 カ> Si. 暮 る 暮 る 鳴 た H ば 13 匂 中 3 22 9 1 U < < 春 春 9

心

虚

生集

碧

樓

あ

る

5 彼 れらは 其の知性では神を否定しておきながら、その心では神を肯定することに急いでゐるのだ。

6 n と同 0 それ な る カゴ 255 0 で あ 里: C. 神 な るもの 一室を想 S じ數 事 は k 一であると云ふてとは、不條理な概念である。 くいて 2 眞 る事 0 を では の受働 室 は数 12 知 教と哲學 神 一人であるが、 考 は は、 像 分 0 を知 な した 2 學 カン 人 へられらる 的要素 腦髓 So つて の争 72 間 72 力 n とは、 る。 に酷似して 神が た ねる。 ふべ が世界の 何人かいそれを想像したにしても、 住 人 から成立つてゐるのである。 すくなくとも 力> 神さびた謙抑の 唯 存在するとすれば、それは複雑なる形をもつてのみ存在することができるの 家 間 一全能 を見 この 0 らざる真 ねる。 縮圖であるやうに脳髓 腦 世界に V 髓のうちでは、 0) だして其 神 超人たる俺 理を考へて見たことが 理 あ * 限 る何 屈 摑 處に宿をとらなけ 12 りを盡くして斯ら云はう むてとに 物も、一を二としたり、二を一としたりすることが カ> 各 な に酷 ねの 2 さらいム單一な中心は、必然的に知 似して の縮圖 72 なる。 かくのでとく、 同 即 象 類 それ にし ある ねる。 0 神を完 範圍 和 各々の感覺、 カン は無 ばならな 力> 無限 なり得 內 全 神は単純 17 な人 益な想像である。 V 殘 に汝自身を かなる場合にも、 なか Vo 間 2 俺は人間であ 各々 T 純 0) つた ねる。 形に なる 誰 0 カゴ 靈魂 寫象、 からだ。 L 擴 質在 俺 7 大せよ。 何故 に代 る は 想 各 おまへ 人 像 として考へら り得べき要素 るべ 神 間 知識 とい R は た 0 0 さ中心 人間で 崇 觀 0 念 中心 カゴ 拜 は す



ウルモン断片

次紫二二 レミイ・ド・グウルモン『リユクサンブウルの一夜』から――

郎

暴露することができたばかりであつた。俺は俺の愛してゐたエピキユラスを斯うした形而上學の中に つて、 臘 人間にとつては神は理屈ではなくて氣分だ。汝の最良の哲學者たちはよく此の神を理解してゐる。だか は詰まるところ幻に外ならない。俺は汝に對つて神の不可能を說き明かさなくてはならないのか。神、 彷徨させはしなかつた。まぼろしに支配されてゐる人々に從へば、神とは一つのまぼろしである。 ス などゝいム奇異な觀念は、 は へ輸入されたものであ 工 かつたり、殘忍であつたり、必要であつたり、危險であつたりする一つの幻である。けれどもそれ この神をひき出 Ŀ° 其のあらゆる神殿に或るアイロ キュ ラスは神々を假の身の神々としてでなければ決して考へなかつた。 して、それに道理を興へようとしたけれども、たい一層よく其の哲學上の るが、 なほさら彼れの頭の中にはなかつた。 希臘人は此の信念を理解することができなかつた。そして彼 = 力 w な不滅性を與へたのであつた。プラトンとアリス もとし、此の信念は、 唯一、 無限、 亞細 永遠 n 亚 空虚 ŀ らは撃 カ> テ ら希 の神 146

らなっ ちが反抗する。何うして彼れらの反抗が抑へられやう。彼れらは反抗の道理を有つてゐるのだ しく ければならない・・・。 て怠惰を賞めそやしたことがあつた。汝は此の二つの思想を採つて、それを一つの調和に編み込まな それを眺め樂しむ人たちではない。或る俸給は、俺が薔薇の花のかをりを吸ふときに感ずる幸福と等 とは あらゆるものが矛盾である。俺は默つてゐたい。こゝに咲いてゐる薔薇の花を創りだした人たちは、 はな 汝は休息することを知らずにゐるのだ。俺は勞働を輕蔑しはしなかつた。それでも俺は時とし いへ反抗 い。それでも俺は、この花を摘みとることより外には何にもせずにゐる。そこで世 は無益である。反抗 は醜い。幸福はそこにはない。俺たちは平衡を見出さなければな 間

とを要するであらう。 何 にもせずにゐる事を知るためには、恐らく働くことを知る場合よりも、もつと多くの智能と勇氣

*

てゐる。それは生命といる母國だ。というななな、「母のこうな」という。ないからいているという 賢い人はたゞ一つの信念を有つてゐる。それは自我といふ信念だ。賢い人はたゞ一つの母國を有つ

*

面である。 自我 は そして其の表面の廣さを計ることができるのは人間だけである。一つの質在は他の多くの つの世界を包含することができる。畜生より外に遁世者はない。人間の感受性は一つの表

だ。氣力の發展を妨げる忠告は、常に偽善の忠告である。言葉を換へていへば、利己的な忠告であ 道德家とは、自分の心をよせてゐる若い女に、戀愛の恐ろしい繪をかいて見せる永久の老人のこと

見ることのできない現象を空しく探求しながら、多くの世紀を徒費してゐたことを知つて心 0 を生きるやうになるであらう。汝自身の生活を生きることは、決して樂なことではない。汝は今にこ てとを知るであらう。そして汝は、無限といふ讀むことのできない小説を投げすてゝ、汝自身の生活 この世にはいつも同じ事が起つてゐることを知るであらう。つまりは何ひとつとして起こつてゐない 事 今日までの科學は悉く、異つた外容に異つた名目をつけることであった。汝は恐らくいつの日か、 が分るやうになるであらう。汝の想像の嵐によつて立ち騒いでゐる海のたゞ中に碎けた から驚く 反影しか 148

を侮つてゐる。 在 るものは在るー **ーこの單純な命題はいかなる反證をも許さない。あらゆる詭辯とあらゆる人工と**

であらう。

つたりする事のできる人々の存在が殆んど無いことに氣づくであらう。 て用ひなければならない。さらしたら汝は、其の意味を明かにしたり、 「神」といふ觀念は、無限の中に投げられた人間の影に外ならない。汝は此の言葉を至上の辯證とし もしくは單に其の皮肉を味は

ちつとも何にもならねえていふんだ。おれ達がや、皆が不服のねえ樣にしなくつちや無益だ、

牧師を追ひ出さらていふ決心なら、誰からも文

トラスタフオード「長々と咳拂ひした後で」

おれの思

ふに



愛の切れはし(コールスワーシイ)

不二幕

同じ場所――刻々に黄昏れ行く。バーの上にはランプが灯ってゐる。窓の下の腰掛と向き合つて流の様に押默つた五六人の光くれた男が集まつてゐる。誰も椅子に就いてた五六人の光くれた男が集まってゐる。誰も椅子に就いてた五六人の光くれた男が集まってゐる。誰も椅子に就いてた五六人の光くれた男が集まってゐる。誰も椅子に就いてた五六人の光くれた男が集まってゐる。誰も椅子に就いてた五六人の光くれた男が集まってゐる。誰も椅子に就いてた五六人の光くれた男が集まってゐる。誰も椅子に就いて記六人の光と、歌ふ聲とが聞える。

句の出ねえ様に萬事をしなくちや駄目だつてえ

芳

松

ストこやらなすりやなりませんや。オードさん。荷めにも村會とするからには萬事ソル・ポッター わしもそう思ふんだよ、トラスタフ

ねえかな? とんを會長に あげよう。贊成者はアリーマン 尤もだ、ソール・ポッター。おれはソース年にやらなけりやなりませんや。

フリーマン おれが持ち出せなきやお前だつてそんクリスト「興奮して」 そんなことは會議に持ち出すこうコムさんは教會員會議の議長をやつてるんだ。バーをは出來ねえ、唯會長丈けが出來るんだ。バー静默。魚の如く默せる者の中より學あり、「贊成」。

それ 實在を厳ひ包むことが屢々である。もし一つの實在が少なくとも二つの實在を厳ひ包んでゐなかつた は他 それは人間でもなければ、また恐らくは動 0 Á 々の足下に踏みつけられてゐる。 真のエ 物でもなくて、 J° イズ 4 は 路に横たはる石 一つの 調 和 であ の一つである。 る。

から。 しまた人が出來あひの教ひを與へれば、それに顏を背けなければならない。食物には毒 教は「靈を教ふ」といふ甚だ美しい法式を見いだしたが、 まれなければならない。 けれどもこ もし人が汝に一つの方式を示してくれたならば、汝はそれをあらためて見なければならな 0 調 和 は まるで出來あ 自我 0) 力をもつて組み立てられ カゴ つた幸福を受けとることは、 これは取りも直さず一つの なけれ ばならない。 綱で首を縊ることであ みづからの手をもつ 個 人的な仕 カジ 盛つて 事 基督 であ て編 4

其の美しさを明らさまに見せつけるに從つて、ます!〜美しくなくなる。 て、一ますし、自由でなくなる。 自 由 は内 的の 喜び である。 人は自由 人間は其の幸運を包み際してゐなければならぬ。 の風を裝はなければ裝はないほど、 男は其の自由を街ふに從つ ますく自由 である。女は

行く。

方牧師さんも氣分が快くなった時分だらら、ど 方牧師さんも氣分が快くなった時分だらら、ど

なが空しくした席を充たす。
彼は出て行く。沈默の群の一人が扉から動いて、バーラコ

やしないよ。

ジアーランド 何だか薩張り譯が解りやしねえ。「ツル・ボツター「超つて椅子の方へ行く。其の短かい、太い脚を交互に代へながら、謙譲と柄にないといふ自覺とから汗を流して立いふことが私の任務であります。 でありますから此の會は、即ち此の會を開く為めに私を會長に選んだその會長としての私の責任を果さんが為めのものであることを申し上げたいのであります。で私は此の會が進んで會長選を下りる次第であります。

フリーマン 會長、意見があるよ。 彼は椅子から起ち、額の汗を拭ひながら自分の席に歸る。

ブリーマン そんなこたわおらわれ

意見があって立つんだ。

よ。會長が出來る迄はどうしたつてお前は起てゴツドレイ それを決めるのは會長のすることだ

が出來やしねえぜ。はは!ところで議長がゐなくちや今度はお前坐ることところで議長がゐなくちや今度はお前が突つ立つたしるろで、よしお前が突つ立つたところで

尤もだ。」〕

フリーマンで激してごおらあ、此の會がなんであらられて了つた昔の會のときだよ。

トラスタフオード そんなこといってたところで仕様 ゴッドレイ 會長が欲しくてもそれを選ぶための會 がなけりや駄目な話だ。 がねえ、會長がなくちや會はやつて行けねえ。 な事を持ち出せやしねえぢやねえか。

クリスト ぢや先づその會を開くとしようぢやねえ モース「重々しく」わしの考へをいふと、ゴッドレイ さんのいふことは る前に先づ會を開かなければなるまい。 一理ある。わし等は會長を得

バーラコム(苦々しく) 其の手順が分かるまい。 沈默の群より肇あり、「バーラコムさんが知つてる筈だ。」

ソル・ボツター「頭を搔きながら――重々しい尊嚴を持して」 會 やならない。 ろでだ、今度は更に其の會の會長を選ばなけり 道はなからうと思ふな。で其の會が出來たとこ を開く為めにはどうしても會長を選ぶより他に

クリスト 會長に推薦します。 おらあバーラコムさんを會を開く為めの

> ゴツドレイ フリーマン 會議の席で同時に二つの發議を持つる おれはソール・ポッターだ。

とは出來ない、そりや分り切つたことだ。

沈默の群より聲あり、「未だ會は始まられえとソル・ボツタ ーが云つてるぢやれえか。」

トラスタフオード か――何方が先になるんだらう? て退けなくつちやならねえんだ。恰で牝鷄と卵 おれ達はどうにかしてそれをやつ

ソル・ポツター「調停する様に」わしの考へにや何とか遠 らなんだ。 な。これといふのも結局は各自に意見が異ふか廻しの遣り方でやらなくつちやなるまいと思ふ

ソル・ポツター「バーラコムを一寸見て――謙遜して」 フリーマンお前彼の椅子に掛けなよ。 掛けたくはない。 バーラコムさんを其處へ坐らしておいて椅子に わしや

バーラコム「起ち上って」馬鹿々々しくて話にならあし ねえる。

不安な足摺の狸に 彼は扉口の方へ 歩み寄つて 暗闇へ出て

ロえ。 ロえ。 ロえ。 ロえ。 の論第二番目のを先にしなくちやいけ とっちか一つ會議に附さなくちやならない。

だ、ウイル・フリーマン。や出來 ない。第一は第二の前に 來るのが 當然や出來 ない。第一は第二の前に 來るのが 當然 にっスタフオード 俺は椅子になんか掛け たくはな

ん?俺は恁麼問題は如何でもいゝんだ。トラスタフオード 如何したもんかね、ゴッドレイさっりーマン 第二は第一の修正だ。先づ修正からさ。

やない、大事な問題だ。

沈默の群より聲あり、「だつて未だ議長は出來やしれえぢゴツドレイ 勿論 これは議長が決めることだ。

ジアーランドソル・ポッターが議長さ。

ッターが議長だよ。――次の會議が始まる迄はポフリーマン いゝや、あれぢやねえ。

トラスタフオードどうも俺には判らないな。オードさん、お前如何思ふね?

兎に角

非度く困らせる厄介な仕事だね。

沈默

ならない。全くこんなことしてゐたつて何にも

んの中で何方か自分の言分を取消せばいへのゴッドレイ フリーマンさんとトラスタフォードさ

分のを取消すことに少しも不服はない。ル・フリーマンの方で取消すといふなら、俺は自い・フリーマンの方で取消すといふなら、俺は自

消しだ。タフォードさんが取消すつていふならおれも取タフォードさんが取消すつていふならおれも取ります。トラス

って了った。 を會に持ち出さうにもてんで動議が失くないかがあり、 持ち出さうにもてんで動議が失くなる。ところで動議

驚愕の沈默。

フリーマン・そうちやねえつてことよ。トラスタフ

見があつて起つ間ツル・ポッターにもら一遍着と、そんなことは如何でもいゝんだ。おれが意

えと此の場が治まらねえからな。とだが――然しソル、お前やつて吳れ、さもねトラスタフオード頭を掻きながら〕 そりや法に外れたて席して貰ひていんだ。

ン坐れよ。 ツル・ポツター、なほも汗を拭きながら議長席に歸る。

るんだ。 プリーマン(努めて起立して) おらわ序に此の儘起つて彼は金を鍛ぶ腕を以てフリーマンを引つ張る。

前の言分つていふなあ何でえ?

プリーマン(彼方此方へ視線を投げて其の手をシブッイのそれのフリーマン(彼方此方へ視線を投げて其の手をつだ。

ソル・ポツターは起ち上り將に椅子を離れようとする。

議事録がねえぢやねえか。 、今度議長を選撃するとさにや讀まふたつて え。今度議長を選撃するとさにや讀まふたつて なっている奴がある

になったといふことさへ記録すればいっんだ。過させる會を統べる議長を選舉する爲めに議長ソル・ポッターかしは唯牧師さんに就ての決議を通

そんな事は譯なく書けるさ。

解決する為めの當然の集會として俺はソル・ポーラスタフオードでは此の會は牧師に就ての問題をしてる間にそいつを書いておからぢやねえか。

フリーマン おらあトラストフォードさんだ。おらつりーマン おらあトラストフォードさんだ。おられたが、自分を選ぶ為めの會を開いたところからしても、いはゞ自分で自分を選撃した様なからしても、いはゞ自分で自分を選撃した様なからしても、いはゞ自分で自分を選撃した様なからしても、いはゞ自分で自分を選挙した様なる。

モース「沈歌の群よりの無言の不満の裡に」それもそうだ。

し押して遣ったの。

グラディスの壁ティム・クリストが中へ這入つた!

マーシーの聲 他に誰が居るの?他の聲 お!お!お!

るわ。たつたそれつきりよ。ターのお内儀さんに先生んとこの女中が二人るグラディスの聲 アイヴィがねるのよ、それからポッマーシーの雪 他に誰が居るの?

アーシーの聲 あの老ぼれた灰色の牡馬は? コンニーの聲 あいつはゐない。もう讚美歌の刻限がラディスの聲 あいつはゐない。もう讚美歌の刻限コンニーの聲 あの老ぼれた灰色の牡馬は?

マーシーの聲 えゝ。 ななの。 お父さんも嫌ラコムさんはあれが嫌ひなのね。お父さんも嫌ラコムさんはあれが嫌ひなのね。お父さんも嫌らっとしの聲 バーラコムさんは家へ這入つて了つてよりの聲 えゝ。

つたのに。おもしろいてとになつて來たわね! 雀なんか取り上げて窓から飛ばさなけりやよか

講音が幽かに聞えて來る。 喘息病みの様な小さなオルガンから讚美歌の一つの最初の喘息病みの様な小さなオルガンから讚美歌が出まる、やがて子等靜かにしろ!」と聲が掛かる。教會堂の中では話聲が彼女は暗闇の中で躍る。と、遠くの蔭から「シツ!あまツ

子だわね。であれる歌ふものがなくつちや變挺グラディス「主よみもとに近づかん!」

らかに暗闇の人々の方へ響いて來る。 丁度六人の聲に歌はれた此の例もの讚美歌の音が美しく清

らり、おんなじ節ばかり歌つてるわ。からディス(低音に)だけどやつばりいゝわね。あ

瞬時の沈默。牧師は撃を高めて天惠を祈る――「神の平和」瞬時の沈默。牧師は撃を高めて天惠を祈るが、朦朧とした人で片眼のボツターの妻が道を拾つて行くが、何事も氣付いぬ様子。二人の女中は感付いてゐる群の中に姿を隱す。老人で片眼のボツターの妻が道を拾つて行くが、何事も氣付いぬ様子。二人の女中は感付いてゐる群の中に姿を隱す。老人で片眼のボツターの妻が道を拾つて行くが、何事も氣付いぬ様子。二人の女中は感付いてゐるので驚いて逃げ去る。最後にアイヴイ・バーラコムが急いで來るが、朦朧とした見え隱れの群衆に驚いて後へ返る。

に育える。 アイヴィは躇ふ、が聲のする方へ突進する、そして蔭の中グラデイスの聲〔咡聲で〕 アイヴィー 此處だよ、 早く!

撃々 然り!謹聽! お風の中にシム・ビーアが喋舌るぞ。謹聽!

ジム「微笑みながら徐々と」何でもねえ。

トラスタフオード豪いぞジム公! その通り。大出

ツル・ボツター「額を拭きながら」 諸君、私の考では、事ツル・ボツター「額を拭きながら」 諸君、私の考では、事くし、またお互ひに怨みつらみがあるまいから、いがあまりにこんがらかつて参りましたから、いくし、またお互ひに怨みつらみがあるまいから、いいのより喝采。皆々燭々然としてツムは再び席に着く。

日に入れて親父の前に立つてゐる。 ビー・ジアーランドが"何かもつと甘い物が欲しそうに指を ロに入れて親父の前に立つてゐる。

たなるつて。だから早く來て頂戴つて。なのよ、牧師ちやんのお話はもうちさおちまひふのよ、牧師ちやんのお話はもうちさおちまひ

彼は出て行く。皆も彼に續かうとする。

モース(ソル・ボッターを除いては一番遅れて) あんな下らねえのたらが、 さもねえとどうにも埒が明かなかだつたねえ。さもねえとどうにも埒が明かなかを含識が始まらねえ中に手廻しよく牧師をヒッ

ないね。だけどこれが果して善い事か悪いことかは判らだけどこれが果して善い事か悪いことかは判ら

第場場

で來て、潛める群に投ずる。

「本本で、潛める群に投ずる。

グラデイスの聲テイム・クリストよーーあたしも、少コンニーの聲扉を押し開けたのは誰?グラデイスの咡聲丁度今おしまひになつたとこ。

ゴッドレイ「極めて低音に」「わが心神これを照さざり

ストラングウェイ (自分自身の言葉の響きが 不思議にも斯様に暗 闇から出たのに喫鶩してい誰でもそれを見付けた者は 何卒破つて下さい! (瞬時の沈默の後)皆さんがわし は見られまい――左様なら、皆さん! に大變親切にして吳れた。もう二度とわしの顔

の暗閣の中へと歩く。 暫し見動きもせず佇む。やがて決意したものり如く人込み

定めなき壁(彼が通り過ぎる時) 左様なら! 御機嫌よう! 彼は行き去る。

クリストの聲 妙な、絞り出す様な喝采の聲。嘲罵の唸聲は猶もそれな脅 ストラングウエイさんの為めに萬歲

かしてゐる。

詩人タゴール

森 田 松 榮 子

眠れる魂を目醒ます聖鐘に似たり。 玲瓏たる君が聲は ふかく澄める君が瞳は真にかいやき、 微笑むとき君が顔はさながら稚見。

物質的文明を脚下に碎きて 質と美との鬉界に君ぞ住むなる

愛と犠牲の雙腕に 人の魂をば抱擁しつ・。

君が現身に関めける詩人タゴール。 億劫に變らざれどなほ刻々に新らたなる エリヤの叫びに降りし霊火の如く、 眞理の片鱗の

君よあいきみこそは "Life itself is an aspiration" ~言くの 『我等を看よ』と聖なる使徒等は云へり、

その表現なるよ詩人タゴール。へ一九一六、六)

フリーマンの聲「低く」 るまで。 子供等待てよ、俺が合圖をす

を破る低い叱聲。それは 漸次長い嘲罵の 唸聲に變つて行 扉に錠を下ろし、やがて進み行く。玄関の端に來た時靜寂 と過ぎるのが見える。彼は照らされた玄關に露はに立つて を着けたストラングウェイの姿が禮拜堂から會堂の玄闘へ よ!大将やつて來るぜ!」あとは全く死の樣な沈默。黑服 聲「お、お」急速な興奮した咡聲、「見ろよ! 彼方を見ろ 來た。おれの踵を踏むなよ。」一人の少女から低い驚きの 二三のものがクスー〜笑ふ。テイム・クリストの聲。「おい を疑視する。

一人の少女が暗闇から飛び出して行くのが見 ストラングウェイは佇んだ儘眼の上に手を擧げて暗闇

ストラングウエイ「低い聲で」 ランドは居るかね? そうだ!嬉しい。ジアー

フリーマン 彼處にねらあ――大きなお世話だ。し

ジアーランドの壁で脅かす様に」もら一遍試れるなら試つ てみねえ。 叱聲が再び起る、やがて消える。

ストラングウェイ そうぢやない、ジアーランド、そう ぢやない!頼むから堪忍して臭れ。偏に頼む。

フリーマンの登「嘲弄して」満月が出るまで待ちねえ。

蹲躇の沈默は呟きに破られる。

或者の聲男らしいぞ! クリストの聲

或者の聲彼奴は免職されるのが恐えんだ。 だくく。

或者の聲 或者の聲「唸りながら」彼奴は確かに臆病者だ。 醫者を恐がつたのは誰だい?

ストラングウェイ 尤もだ――皆無理はない。わしは クリストの聲 不適任だ。 そいつは恥だな。

ストラングウェイお前さん達が恁麼事をするのは、 れ、ジアーランド。わしにはお前の顔が見えな たといふことの爲めではあるまい。わしには解 もつと善い人が得られるだらう。赦るして吳 つて居る。だが心配には及ばぬ。もう濟んで了 わしがタム・ジアーランドをあんな眼に會はし い――あんまり暗くて。 つた。わしは此處を立退から 不安な、そして興奮した呟き、私語は消えて又しても沈默。 ――お前さん達は



TE. 百樂家としてのタ翁

武 H 豐 UE

と思ふり 呼ぶ人あるも念はター 今回來朝 せられたるター ロターゴル Ł ゴ 呼 ル 3: へみゴールと Te 正當なり

H

るに、 だ多く日本に來て居らぬ。 が如き多方面に活動して居る人として傷へら が いた物が來て居るのみで、詳しき事は分らの 研究せるものと一つ に関しては西洋人の 從來歐洲に於けるタ氏に闘する紹介を見 タ氏は詩人、音樂家、 著述家、愛園者、教育家と云ふ 宛あるが、 研究せるものと印度人の 具僅かに英人の書 論說家、 之等の書は未 戲曲作 局 良の為めに壓々講演して居るに依つて見る事 又愛國者としては祖國の宗教改革或は社會改 解脱へサー 易である。又哲人としての彼は其講演集なる 「園丁」新月の三詩集並に「暗室」「心」「郵便 に関しては「聖歌の供養(ギタンデヤリン」及 が出來る。 む能はざるところである。文人としてのタ氏 の三戯曲等に依つて共面目 教育者としての彼はカル

ダナーンを以て視ふ事が出來る、

力 y 从

をなす者もある何れにせる彼が変人、哲學者でのののののののののののののののののののののののののののののののののののでの許れて居る。之を見て或論者は東洋の偉人としれて居る。之を見て或論者は東洋のゆくの 音樂家、 教育家、 愛國者であると云ふ事は否

家として الله الما 居る 雑誌を調べて極めて簡単ながらタ 具 得るであらう。 である敬余は此處に從來 氏 上に設立 東北百三十哩の す る意見な覗ふ寡を得たのである。 0 の作に を聞 先日 種の興味を感じた。 0 マル いてい 7 或 4 いる し寄宿制度 所で印度 之等の事 I. 地に ル 其意味は 10 > 氏 か。 一から歸つて來た友人が 1/20 あるポル 1) 綱 世 は世人の既 0 其處で早速印度 人の 學 分らな 1 介しようと思ふ。 校に 語 プー 開却せる音樂・ の歌を譲つて 氏の音樂に かつたけれ 就 に知る慮 12 の小丘 知る 0

タ氏十八歳の時

か現ふ事が容 3 に招か 日日 た明察ならしむるにおり」と述べ種々なる。「音樂の目的は曲湖の手段として言葉の意 場の講演を試みた。 に於て ハ 絡 て専ら整樂に關する意見を發表したが、 當に出發せんとする或 心現 英國 2 730 First 15 八はす 開 n オツクスホー > ふたった。 7: F かれたが 臨調を自ら謹ひ、 會は 此時司會者たりし > ? K t プー 或夜ベータン會と云ふ會 ヤ氏は大いに 其時彼は器樂を例外とし 此 時氏 ナ市の醫科大學集會所 以は音樂に 以て簡単なる論 クリ タ氏の音樂 闘する・ シナ 彼

純 2 真 1800

平 澤 哲

雄

降り積つた雪の餘光が映つてゐて、 藍色がいつた白さの廣い部室に、

黒天鷲絨のやうな髪の青年が默つて坐つ

てゐる。

「鴉の災は濕れてゐることだらう。 だが彼等は生きついけてゐる。」 彼も饑ゑてゐる。その子も饑ゑてゐる。

爨が歩みを止めた處には地と天のとばり

ひとつの真白な死が横たはつてゐる。

が開けて、

クリーム色の光が輝き、森には太古の静

默が休らふてゐる。

歩んでゆく靈の一歩ごとに森のなかには

死のかなれ

藍色が一つた大理石の地壇に

瞼をとぢた清淨な白蠟の顏が黑燿石の髪

に埋もれてゐる。

森のなかの水沼のほとりに、

た。莊美崇嚴の死が橫たはつてゐる。

皺びもなく、哀みもない。

てゐる。

强い線のごとくに純白の靈が搖めき生き

壁に映つてゐる影を默つて凝視てゐた。

青年は静かな柔かな眼をして、

飛んで行つた。その翅はぬれてぬた。 彼は雪の上に最後の强い視線を投げて、 た。C雪はすべてを隠してゐる。)

彼はキョトし、と四邊をながめ廻してゐ

妖黑の森の影がそびえてゐる。

藍青のかなたに吸ひ込まるいやうに

石女のやうに陰慘な瞳を見開いて、

鴉が松の樹に來てとまつた。

森には夜の樂譜がふるひ、

寂滅のかなたを歌ひうたつてゐる。

160

又頗る惡に執着なり。

改多の長所あり、彼は人道の面に立つ時、頗

其の利己の爲めに計る時 日本の外交が常に歐洲

危機ならずや。

タ翁の言ふ如く歐洲文明には

漸く東洋本來の生命を證明すべきを忘れ去ら

佛教の思想を入れたるなり。我國人之を知ら

ずして、今々翁を迎へて、其説を珍とす、少

是れ寧ろ日本の現代に於ける思想の

の然らしむる所なるべし。唯彼の文明を模倣

あるなりで せば、

するの憾みあるは、

蓋し此個人性

タ彩の

來朝と高唱とは、

y, 己心内に真の富と真の力とを求め、 極の中に無窮ル發見し、此の窮極を通じて、 養といふ遺産を有す、此修養あるが故に、自 無限の社會の義務を負擔す、即ち日本人は窮 優對價の如何か論ぜずして、己を空しっして、 同時に叉新國なり、日本は東洋古代の修 而して代 として、唯强力の競争に全心を奪はる、日本 吾人には吾人の本領生命あるを忘る 可 するにのみ没頭するは、日本の爲めに取らず、 ず。内面生活は東洋の寶なり。現今舉世滔々 人は、
疏つて一方内面の充實を計り、
確固た 5

始めて覺醒したる日本人が、争つて西洋の文 て日本の列強に 思想に囚はれたる日本の思想は、 全宇宙が一の精神な以て透徹する所以な洞見 の内的病弊にも陥りたり。鎖港の門戸を開て 人の有して誇りとする所なるも、而かも東洋 れたる日本人の思想なり。此長所は確に日本 然り、是れ東洋思想に依つて陶冶さ 其の思想を吸取したるは、やが 伍せる所以なるも、 流れて幾多 其の極端

る信念の建設を忘る可らず。

は、恐らく迂遠の論として容れられざるべし。 るの消息を語るものならずや。是れ大に喜ぶ て群るもの、又自から現在の我人心に愀焉た 而かも彼の遠來に當り、其警咳に接せんとし

なる模倣は、却て之が爲めに累せられ、途に 性の發作とせんか、甚だ心細し。彼の理想の べき現象なり。然れども是れ又日本人の模倣 教の説く所の如き然り。否寧ろ々翁の思想は は是に類する思想古くより傳はれり、大乘佛 如き、必ずしも珍らしきには非らず。日本に

きか。而して此の日米漫遊に於て、彼 すべきか、これ頗る興味ある問題なり。彼 人に殘す印象が幾于程の波動を兩國の人に起 國に於て、彼は果して如何なる高唱を爲すべ とす。日本と其根柢に於て思想を異にする米 彼は幾月の後、日本を去りて米國に遊ばん が其國

詩人なり、 各其の自己のタゴールたらしめんとし、周旋 ふるに當りて、日本に於ける印度關係者が、 と類々、序に一言する所以なり。(東京朝日) 恥づべきに非ずや。近ごろ此の風聞を聴くこ 暗躍するはឈ態なり。彼の説く所に對しても を説くなるべし。 而して今此の如き聖人を迎 日本に於て日本を説く如く、米國に於て米國 彼の表白には虚飾追從なし。彼

新日本と舊日本

開きたる歡迎會の如きは、 讚美し、新來の物質的文明を呪詛した。彼れ 彼れは其の席上に於て、盛に舊日本の文明を る方面の代表的名士 人氣を其の一身に集め、十三日上野寛永寺に 印度の詩星タゴール氏は來朝以來、 二百餘名が出席したが、 官民朝野のあらの 多大の

石川

半山

しく輕薄の謎なきか。タ翁を歡迎するは甚だ 來最も置ぶべき、生命を有するの記憶を喚起 遠來の詩人の高唱に依つて、日本人が其の本 可也、其の説を珍とするは淺膚也。而も此の また甚だ意義

る。 か 闘す 有して 以 3 知 熱心 見 7 0 深 b 研究 彼 60 0 から に感嘆した 4 年 2 少 * C 時 代より を知る事 之云 音 樂に 3 が 出 興 此

る 有 後 名 H なる は 渡 撃樂家の 英しプラ 唱歌 オ 1 を聽 I. 於て 歐 洲に 於

EII 度 楽と 歐

くである 6 5 事•比•と A 氏の音樂に たけ す・ = 信す 1.0 其 N れど 後 は・ ソ N 印度樂の・相談をあて相談 3 彼 > 闘す 1f Id. *D * 武は 至っ 壓 此 瞎 3 面 R の方により以上の質・相違せる點があり、一 た 歐樂を 意見を紹介すれ 彼 益 7 0 Q ダ 4 兹に極 即 聞 度樂の 闡 7: いて 聲樂家 ル 办 7 朥 パ 順・兩・ 順・兩・ である・ を・ ば 簡 れて居る 左 單 1 興 は であ 0 75 マ 咏 次 が

きではな とある、 0 あ 2 3 あ な。 ij 5 n 聲樂 誤りである。 勿論唱歌に 言語の養音され終つた後に初、決して言語の奴隷となすべ 1. は其要素とし は 歌 夫 れに は する。歌の 來 豱 勝 特 のき物に n て 0 たる 體

つ。め。て。て。 て現はし得ざるところにののののののののののののではの歌が始まるもので であ るい 言語・に・

依

樂 0 領 域

たる と云ふ印度の智慣と等しく音樂もか言語に 西洋たる 對して忠質なる義務を果すと同時に却つて を祝殿できる。ののののののである。のののののである。ののののである。ののののである。ののののではなられて、 存の音のられていなっし 感動 如くに から 3 c 0 よりも 歌に於ける は 存在 獨立 し得ざる所 然るに 4 言語の 單 す。 的 なる るのである。 發達 める 我 所に音 「葉が のも 方 曲 が ~ 言 が 2 調 歌 力* 0 有力であ 0 みで神 を傷け た iv 樂 0 音樂は 勢 地 現 0) るの詩の故 詩の故力の此のの んはす 方に於ては 妙 る為 秘的 かず 3 の保護の下に生の場合の場合に整倒せ さり 存す 言葉の 事 f に人 からに、 のであ 0 少ない 作ら 3 言い 0) 0 音樂 音樂 であ 例 وآله 30 た 程 現 なるべ 印度 に於け 上の 代表的 5 憬する 加ふる し彼 的 8 講演 渱 は 向 が 0 0 深 福

ダ ゴ 1 12 氏 演

サ 1 ・ラ F. F ラ ナ 1. } 汉 H, 1 IV 翁 to 神

本の使命 に於てい 於て試みたる表白の 埠 頭 有すと言ふに在り。 ふる を看 を發する前に當つて、 尊崇を捧ぐる 20 講演 る唯 未だり 情操 カの 講演の き人道 を欲するなるべき 數 とも稱すべく、 迎 K の箇月の 0) f 其 破 7 文明 大綱な、 此 0) 知るべ 70 は要するに東 せ 0) 而 こより 細目とし ん 0) あ 0 豫 0) して日本は 滯在 講演 るに似 果し 講演 を駁撃 期の 生氣を o G. 50 既に 此 以は翁 彼 0 として、 思想を充さんとして、 擧示したるも 如きも、 -0 皷吹 てい たりの 後 新日く 「日 は 隨 ざるも、 滿 詩 + が日 數 近 西 去るに臨みて、 足 聖 一の文明 更に 7 成 世 H 出來上り 44 が Ho 就す 文明に 本現 世 本に於け 2 東 亦 原界に 恐らく 昨 にして其の東京 彼は 其 即 洋 末 代の人 0 を比 尾に のなり。 帝 7 度 本は舊國 3 0 たる 國 此 去 B 國 對 靈 大學に の漫 本に 民が 大使 して の文明 較 す 3 彼 3 節 此 IL) 代 ろ n 0 若 から H 表 白 162

宗教 通 信 0 文 I] 12 觀

ない

ところの

かぶ

您々

自

逝

何事をも諦 また彼

め易く、

切

たも -(

0

7

ゆながらも、

しかも

何等の

副策も

經綸

民0至0な0想0る のいい國の美でへののしし M は歐米第 とか超越さ 宙の極致である」と高調した彼は人種 と欧米人に追った。 と我とは らの苦心な拂 教徒は之か 族のまのあの家のと F ン市 ぶ =z" なり でで駆 流の 3 1 かいつ 世界的國家を理念とす かに敷迎す 12 批評家は、 D 3 氏 との基 るべきも 0 「神は愛であつて、愛は宇 あるのダ 來 朝に 一督の言葉を徹底せよ べきかにつき。 彼 0 つきて。 1 ては 0 聲 ルは暫て一父 75 Te 30 多くの を境土 寧ろ され 1 П K 命に安立して、

中度 理解されてゐる人を請待するにも、なほ遠壺へらい の人は思想性格上からいへば近隣に居てよくとに の人は思想性格上からいへば近隣に居てよくをに の人の紹介にいる人を請待するにも、なほ遠壺 らば、何うであらう。果してこれほどの歡迎り大に尊⇔をうなさいないよくでであなったといふ裏書がなかつたなめる。但し若しガゴーがにして西洋へへへへのなったない。また固より當然である。無中到らざるなきは、また固より當然で 於て、 民族の に参じて、 物性 淡なる節約主義を守るところ。 目を塞ぐものであるとなして、 ところ。 く吾我 抛して、 れて、 0 判斷と自信力との乏しいことを、の紹介によるやうな形になる。 格に多く かる 特徴であつて、 それがまた を忘れて、 我が慾望の思き手は、 寂莫牛透明の 恍惚として。 され 0) 共 ば 最 鳴 無限の光 點 8 我 70 國 船等 灰 森林生活を愛し、 明に 部 0) 7" 游 佛教徒 明を感受すとなす みる如 B 1 沙学き n 'n いつも 0 超物質的 彼 が 出 思 く醉ふが 物∘わ 想性 らは 12 3 Eon 彼の 真理の 歡 如 1005 聖堂 凹 の活 格 即 細のは 度

政治的には 自分の巡 も有つ を放 如 極 و المراج 質力 むる 0 5 接觸によりて、 5 人物として、基督教徒もこれに對して 感の 一級を拂ふ雅量を有たればなるま ば、 點から 力を豊富 30 とにかくタ 颠應 わ 進 が た0得0 ななさし 國 36 な久し その間に生じたる巨 No 必要なることを b =10 が國 1 己 且 V ることは 5 12 わ 0 の文化 即 れら 如 度思想の 3 は 0 立場 信ずるけ か後展 東西文 b 大なる 753 一震染 相 風 00 ct 思 5

98 過言 半 汝 タン 0) 原 37 門 1) 0 中 から 彼 れに

かっさ け 3 だらう

か

汝の

扉

To

叩くとき

は

の充たされ せまいい 私は お 5 決して 私 た器 彼れなして 私の客人のま が習 かうー 空手 ^ っては 17 私 0 生

穫と 甘き葡萄酒 私の たかい 落 穗 あ to 3 3 私 (0) たったい とき彼 3 私 私の 0) 12. H 忙 0 0 0) 位 前 7 1 75. して 60 順興 置 死 生 40° 夏 300 が 0 0 收

0

が 離 0 自 史とに **1**22 える やうな 憧 2

彼

1086 分に此の詩響を歡迎して、彼れの如き世界的 は決して忌むべき事ではない。我が國民が十 方める雄辯を以て、此の意見を吐く時は、 明に傾倒せるかを知ることも、決して無用の 名響を有する外國人が、如何に日本固有の文 の價値あることを知らしむるで有らう。是れ なして二千五百年來の舊日本の文明に、至大 に出てると云ふ事だから、想ふに到る處に於 ならざるを得ない。彼れは尚之れより各地方 人も之れにチャームされて、覚えず懐古的に の人格の光彩と、其の玉の如き音聲と、其の 彼れの思想を我が同胞に傳へ、我が國民 何 明が名勝古蹟を破壞し、有名なる古木を枯死 人は今後益す進んで大に新らしき文明を採用 潮流を防止する能はざるのみならず、質は吾 ることは出來ない。啻に此の新文明採用の大 飛行機の有る今日、最早や汽車汽船な破壞し するは、角を矯めんとして牛を殺す者だ。如 風を矯正せんが爲めに、絕對に新文明を呪詛 の遺を講じて居るが、然かしながらかしる悪 て、東海道な駕籠で飛ばす時代を再現せしむ を懸して昔の行燈に歸へることは出來ない。 何に風流で有るとしても、吾人は最早や電燈 せしめ、天然の風景を傷害する事を保護する 十三日のタゴール氏軟迅會席上、

ことを忘れてはならい。 られてはならぬ。精神的文明の意重すべきは あ如く、 の説に耳を傾けることの出來ない場合の有る を愛せんと欲する者は、之に隧道を穿ちて、 視してはならぬ。水の美を愛せんと欲する者 言ふ迄もないが、之と同時に物質的交明を輕 は決して新日本の交明を咒詛する彼れに態せ 路を通ずることを非難するが、・吾人は是等 然かしながら之れと同時に、吾人日本國民 水から電氣を取ることを咒詛し、山の美 日本も名勝古蹟保存會が有て、新文 世界の文明國にも在 らに其の弊のみを見て、新文明を呪詛 らに又歐米諸國の新らしい文明を採て、舊日 如きは、吾人の赞する能はざる所だ。 其の長のみを採て、其短を捨てれば良い。徒 を持て居る。故に外國の交明に接する毎に、 本の基礎の上に之を築きつい有るのだ。吾人 の文明を作つたので有る。維新開國以來、更 採り。印度の文明を採て、以て一種の舊日本 持て居るのだ。而して其の上に支那の文明を は如何なる外國の文明をも咀嚼し得る消化力 することに務めなくてはならぬ。 吾人は二千年前に於て、吾人固有の文明を

くてはならめ、哲學者、宗教家、最も必要で に耽溺する間に、國家の亡滅を招いた。試に の調和をなす事は、我が日本國民の使命で有 明の調和は最も必要で有る。而して東西交明 は複説して、調和」の二字を説いた。 有る。盞伯、音樂者、俳優、皆必要で有るが 企園することが出來たではないか。詩人も 文明の調和せる國民にして、初めて其繁榮を 世界の歴史な通覧せよ る文明を呪詛したる竹林の七賢は、 る、曾て物質的交明を輕視し、俗界のあらゆ 、精神的文明と物質的 然以、文 其の清談

するが 事業家も必要だ。吾人は自然の美を築しむ心 ち是れ一篇の詩で有る。吾人は欣然として此 の餘裕を持たればなられと同時に、 偉大なる覧力に魅せられて、 學とを忘れてはならぬ。而して彼れの の襟懷を有すると同時に、又決して統計と科 の詩な咏び、其の如何にも高い風韻な頌 が、其中には統計もなければ科學もな ール氏の演説は、言々皆金玉の美を持て居る 學の精を節むる元氣を失うてはなられ。 之と同時に政治家も技師も職工も、銀行家も 件者となる事は必ず之を飛しめなくてはなら 新文明咒詛の 決して科 及 70 刨

に歸するのである。それで我國の現行民法に はない。こんな不完全なる法規によつて國民 あり、完全に調和されて居る徹底的婚姻法で の折衷的法規であつて、 於ける婚姻法なるものは家族主義と個人主義 るので、一元意志説に還り、家族主義の結婚 結婚を規定されては、批判的なる吾々は理 矛盾だらけのもので を容易に徹するためには勢働機關の改善を併 とを結婚の要件とするのである。又この目的 經濟的獨立者として、親の保護を要せないこ 知の要求に於て斷乎として反對せざるを得な 張する所以である。又同時に人格的戀愛者は いのである。隨つて婚姻法の根本的改正を主 せて主張することは勿論である。

結婚と戀愛に就いての問答

六月の丁酉倫理には結婚と戀愛に就いて問 答が掲げられて居た。牧村生と云ふ人が倫理 答を與へて居るが、其の問答は果して正鵠を 答を與へて居るが、其の問答は果して正鵠を 得て居るや否や、それを倫理上より批判して 見るのが此の一篇に於ける評論子の目的であ 。 先づ牧村生は如何なる質問を發して居る か を見よう。

間にて取定むるの習俗重んぜらる、ため斯特の令孃と、某富豪の令息との破鏡離婚に及び「我國の婚姻は依然夫婦たるべき當に及び「我國の婚姻は依然夫婦たるべき當に及び「我國の婚姻は依然夫婦たるべき當

要せざるところであります。

毎日机上に置

如何に人生や利して居るかは敢へて多言をして戀愛の成立して居る所謂平和な家庭は何に人生に悲劇を與へて居るか、それに反

かる、多數の新聞中果して戀愛の成立しな

らば、 ります。 かが ります。 論ぜらる、通り當事者間に戀愛なく、第三 打たる一のであります。真に平和な家庭は 論結してありますが、 る意義を有するがといふことを理解するな 婦たらんとする者に戀愛はあらうがあるま も斯くしくと物質的對象なのみ求めて、夫 問もあり手藝も一通りは通じ、それに財産 者に於て極めてしまふ。彼女なら相當の學 夫婦間の愛情によつてのみ得らるしのであ かる結果を來すを嘆ぜざるを得ず云々」と 一向頓着なく强制的に決定するのであ さう無頓着な無遺任なことはなし 然しながら夫婦たることは如 然るに我が國の婚姻は、 吾々もこれと同感に 東根生の 何な

ればなりません。戀愛のない結婚生活の如無意味な不道德的な虚僞のものといはなけ

結合を以つて結婚の全部であるとするなら 無意味なものであります。 なければならない。 によるのであつて、婚姻に最も必要缺くべ れます。其平和なる家庭は戀愛の成立如 人生に最大の慰安を與へるのであると思は と信ずるのであります。 對性の愛情によって慰めらるしものである ないでせうか。 生活により何物かを得んとして居るのでは 結婚は勿論種族的使命を帶びては居るが、 結婚とすることは出來ないのであります。 としての結婚は單なる動物的結合を以つて ばそれでいいかも知らん。 ない筈であります。 からざるもので、これなければ其の結婚 人生として種族的使命以外に尚更に、結婚 私は現實の苦痛の大部分も 戀愛のない結婚生活 何よりも第一に戀愛が 即ち平和な家庭は 然しながら人間 動物的 生物的

問 女

再び結婚道徳に就

る結婚の正當なることを示したのであった。 に對して批評を加へ、人格的個人主義に於け 婚と其の折衷主義なる我國の民法主義の結婚 型」と題して、家族主義の結婚と個人主義の結 の場合を質疑されるとがある。其事に關して 然るに最近に至り私の前論を知つて居ない諸 成立する一元意志説である。民法主義の結婚 の結婚は子の意志によって子自ら己の結婚を 婚を成立させる一元意志説である。個人主義 れども念の爲に梗概だけ並に要約して置く。 積りであるから、反復することを避けたいけ は「結婚道徳の新典型 君から私の結婚論又は戀愛論に對して法律上 成立させる二元意志説である。 は子の結婚を親の意志と子の意志とによって 三種の結婚形式は戀愛に關して如何なる結果 家族主義の結婚は親の意志によって子の結 は昨年の本誌十月號で、「結婚道徳の新典 中で些か論じて置いた ところで此の 結婚とは同一に取扱はれて居る。民法主義の の無い結婚が續出することになる。個人主義 とは全々別々に取扱はれて居る。隨つて戀愛 などは要件になつて居ないから、戀愛と結婚 の命令が最上の要件であって、子同志の戀愛 る。然るに此の二者は事實上果して一致する の戀愛と親の同意との一致を企てることにな 次的に親の同志權を規定するのであるから子 結婚は第一次的に子の結婚意志の上に、第二 居て、親の意志とは没交渉であるから、戀愛と 結合をすることを民法は元より許すのである 次的に置く以上は、子が戀愛によつて人格的 の結婚に於ては子の戀愛が最上要件になって 合した場合にこれを親達に交渉して結婚の同 や否やが大なる疑問である。子の意志を第一 意を要求した時に、親が不同意であつたら何 から、若し一男一女が戀愛によつて意志が結 單に子に 苦痛を 與へたに 過ぎない 結果にな 人主義の一元論に歸するので、親の不同意は 京することは立法上の無常識に過ぎない。結 成立して居れば互に精神肉體に於て交通する 婚は依然として子の意志によって結婚する ては無意味な事である。何となれば、 は必然の結果であるから、年齢を規定して拘

た生ずるか。 先づ家族主義の結婚に於ては親 うなるか。結婚が出來ないのである。戀愛は 親に破壊されるか、 又は男女自らこれを解除 る。又親の不同意に重きな置く時は相手を改 得なければならない。然るに次囘も親が不 めて戀愛の遣り直した為し、更に親の承諾を 重きを置く以上は戀愛を爲さずに、 るは戀愛に對する皮想な解釋であるのみなら を取消して第二の戀愛を容易に爲し得ると見 云ふに、單に親の不同意の爲めに第 い。若し幸に同意したならは何うであるかと 意であった場合は依然として結婚は成立しな 意志を最上の要件として結婚を爲すことにな に幇助するものである。 ず、實に直操に於ける人格の破壞を不作為的 それで親の

不同意に

が成立して居ながら、二十五歳までも三十歳 は三十歳まで待たればならない。 除を懼るしならば、女子は二十五歳まで男子 しなければならない。若し此の破壞を禦ぎ解

までも結婚を待つと云ふことは當事者間に於

同

計り着眼して、脚下の地盤を忘れたがる弊

果して如何といふことも例りません。 この質問に對して丁酉倫理記者は左の如く 私は私の抱懷せるところを述べて諸先生の 格はありません、又戀愛を倫理上より見て 御高説を承り度いと思ふのであります。」 しながら私は結婚生活に對し批評するの資 唯々

己も後悔し、他人にも迷惑なかける事例が 扨其の結果は何うあらうか。隨分智慮のあ りとする。此人が自由戀愛をすると考へて 色々の理由からなかし、思つた通りに行か る。隨つてとれた質現する一段となると、 が併し、此れは理想上のことで、イザ實際 至ることは、神聖な所行と云ふべきである。 其の自我の顯現たる異性と結婚同棲するに 態を仕出來すではありませんか。換言すれ でなくとも、普通の良民とは云へる人があ となると自我其物が理想的であるは稀であ る。即ち或る人が高尚な自我を有つて居て **戀愛觀に不**質成ないふ道理はない 筈であ る、無ければならい紳士が、思案の外な失 い。假りに此所に高倫偉大な人格といふ程 「極めて高い理想から云へば來示のやうな 自己の真我に不相當な對手を求めて自

の奴隷たらんとする傾向が多い。 悪いのではない。真我を修養し真我を領解 少くない。自由に真我の要求を滿足させて

に熟成させる爲めに之を保護して居るイガ 時は、遂に其人の不幸破滅ともなり、社會の 己の主人となって、自己を支配する力が乏 し真我の滿足を謀ることが六かしいのであ 無用の贅物とも云へるが、熟成以前の重大 此れ等種々の制限検索といふものも、其の むを得ず種々の制限拘束な彼れ等に加へる に於て親の慈悲いら、主人或は世人の老婆 損害迷惑ともなるとは決して少くない。是 しい。之れを其の爲すが儘に放任しておく 或る程度の年少者といふものは、未だ情慾 否定しては居ない。 迄で、其れが又た一面必要物であることを な保護物であったことを忘れてはならな のやうなものである。熟成した後に見れば 本來の趣意を導れて見れば、栗の霙を安全 風俗習慣が生じて來たのである。其れ故、 心から、勿論最上策ではないにしても、已 る。此う考へて來ると、無教育者や、又た 來示は此の贅物の點を强く説いて居る 青年は兎角高い理想に 自己が自

> ざいますぞ。 見詰めて明るい も、下界は宋だ黒暗々である。天上ばかり がある。富士の山嶺に紅ゐな曙光が射して 積りで歩くとおあぶなうご

ことが出來る。私はこの現象を日本の社會に り解し、文藝上より解して満足して居たに過 とする態度は極めて真摯なる模範的青年の ぎなかつた。然るに最近に至り、これを純倫 あつた。戀愛を常識より解し、又は心理上よ 極めて冷淡であり、其の頭腦は杜選なもので 神である。爾來の青年は結婚や戀愛に關して 理上の事件として其の道徳的理論を探求せん ない。それで某陸軍中将の令嬢と某富豪の令 於ける男女道徳の進歩として祝福せざるを得 止まない批判的の態度を我が國の青年に生じ 理上より學理的に其の理論を究明しなければ る。結婚や戀愛な單に常識や心理上の事實又 より質問を發したことは最も賢明な試みであ 息との破鏡事件の如きに對しては批判的に其 て來たことは、此の牧村生によつて證明する は文藝上の談義としてのみに取扱はずに、倫 0 牧村生が結婚と戀愛に就いて倫理上

ことはあるでせらが 家庭不和などに原因する活悲劇を見い

1-

す。斯く結婚生活に戀愛の成立を要求して の言を俟ためでも、既に日々夫等の悲劇は 敬とな有せざる人と同様せざるべからざる 生活を破壞するのみでなく。其の愛情と尊 愛には相互の理解といふことが必要であ 的要求であるといふよりは寧ろそれに関す たものかさもなくんばエレン・ケイの言 に起ったとしてもそれは結婚生活に好適し のを許さめのは何んたる矛盾でせう。戀愛 居ながら、實際社會は是等戀愛結婚なるも 演ぜられて居るのな見聞するのでありま 言つて居るところでありますが、敢て是等 せらるしこと甚大なり」とはエレン・ケイの はない。 る。相互の理解は無論瞬間的に起るもので たもので、盲目的であらうと思びます。戀 る想像力から結果するのである」に似答つ て居る「未成熟者の情慾が身體組織の生理 たとはいへの、單に對性の美によって起っ は瞬間的に起るものではない、若し瞬間的 ことによりて其の活動力及び其の幸福を害 イブセンは「戀愛のない結婚生活は結婚 相互に理解し戀愛の成立する迄に

> ものと認めず、不義のもの、不真の女とし は一定のタイムな要する。然しながら相互 りたいのであります。 矛盾せる一例を示して、倫理上から戀愛地 甚だしいといはればなりません。私は是等 ませんか。飽く迄之を排斥するは矛盾も亦 真の女として排斥するには及ばめではあり 婚であり、結婚は戀愛がなければならわと て一も二もなく排斥するではありません びに戀愛結婚に就いて、 したならば、社會は是等を不義のもの、不 か。戀愛の成立した結婚は真の意義ある結 理解し戀愛成立を以つて、社會は神聖な 先生の御高説を承

例 「菜家に一人の下男と一人の女中とが 下晴れて結婚式を擧げた。然るに其 の家へ歸つた。護目かの後二人は天 しい。其後その女は某家を出て自分 を誓つた。親も二人の戀を許したら に、不知不識戀に陷つた。そして二 あつた。長らく同家に務めて居る間 人は末の世かけて夫婦たるべきこと 男は突然某家を解雇された。

の戀愛な以て直ちに不義のものと推斷した これは申すまでもなく、某家は是等二人 寧ろ犯罪である」と思ふのであります。然 ならしむることは愚なることしいふよりは

に取扱つて居るかを表示して居るのであり く、かいることは社會到る處に於て見或は のであらうと思ひます。獨り菜家のみでな でもないが、社會が戀愛といふものを如何 聞くところであつて敢へて不思議でも何ん 愛結婚を許さめのであります。 す。然るに我が國の習俗として、 婚を許して差支はないと思ふのでありま あるならば、それは理想的のものとして結 も健全であり、其の間に戀愛を生じたのて すに好適であり、身體も完全であり、思想 とも思びません。唯真に種族的使命を果た ません、又戀愛を悉く許すべきものである 失戀に泣く青年男女恋く、善だとは私思ひ するのが至當だと思はるしのであります。 思います。或る點に於て二人の前途を祝福 がなかつたならば、解雇するの要はないと ます。私は二人の間に不義な不道德的行為 ケイの思想に從つて、「健全なる心身を持つ あります。 不義のもの不貞のものとして排斥するので て居る若い男女に對して其の實現な不可能 私は此のやうなことは、エレン・ 全然戀愛を 斯かる戀

ドコマデも理想的であり、 ければならぬ必然的のものであって、 まで行かればならない。「思つた 通りに 行か っても萬難を排して思った通りに行くべき所 我の顯現たる以上は實際に向つて躬行しな 如何なる障害があ 自我は た理由を以てして、一般人に道徳的知識の無 しきものである。 用を主張することは出來ない。それで若干の 無用を主張せんとする議論は思はざるの甚だ 紳士が戀愛に失態した理由を以てして戀愛の

に反して思はざる悪行為に陷つても仕方が無 常な誤りである。 いと云ふ結論になる。 り」と云ふならば、 良心が善と判斷したこと 丁酉倫理記者の答は非

決して理想的なる普遍的法則を改廢する權能 く、結婚に闘する當然義務である。 普遍的のものであるから、賢愚不官の差別な ある。戀愛が自我の道徳的規範であるならば 批評を爲さうとするが、其れも大なる誤りで 識を持つて居る耕土が思案の外な失態を生じ 例證にはならない。 それは戀愛の絕對的普遍的道德性を否定する 結婚に失態を生じた個人的事質があつても、 て進むのであつて、市井凡夫の行為になぞら 普遍の良民」とに分けて戀愛に對する倫理的 次に丁酉倫理記者は「高尙偉大なる人格」と 行為は最上の人格的形式を自我に創造し 今日の謂ゆる紳士の中に戀愛 道徳に闘する該博なる知 非理想なる經驗的事實は そして道 30 り戀愛の必要を認めるのである。これを教育 らう。それを丁酉倫理記者は、 自我の要求から倫理上の質問を發したのであ 我の要求とするが為めである。牧村生もこの 上の大事件として考へ、年少子弟の訓育とし て考へるのである。男女の性慾に關して、道 趣旨に觸れて居ない頓珍漠な答辯を與へて居 徳上より戀愛によつて結合する一夫一婦や自

の命令により、 結婚に關して自己の人格より發する自由意志 己を道徳上の絶對者として我れ自ら我れ る力が乏しい」とは、まるで夢の月惑である。 「自己が自己の主人となって自己を支配す 戀愛によって處決するは、 を支

無暗に使つて居る。これは印度の六派哲學者 それから丁酉倫理記者は眞我と云ふことを 現今の自我 妁人に人生の一大事を任せて自己を不幸破 配する最上形式の顯現である。親や親戚 會の損害迷惑にならない様にするが爲めに、 せしむることを禦がんが爲め、又は延いて社

ことの無いやうに、又は破鏡などに終つて自 だけで澤山である。それで吾々は配偶者の撰 するのであって、「自己の真我に相當な對手」 擇に關して、自我の要求として戀愛的結合を 流の言であつて今日の自我と同一である。眞 他に迷惑を及ぼさないやうに、周到なる心よ を求めんが爲めである。後に至つて後悔する 我などと古い言葉を出さずも、

指圖によつて愚民が行動すると同 てするは、國民が憲法によつて自己の國家的 吾々は自己の結婚に對して人格的戀愛を以 や世人の老婆心によって結婚するは、政府の 公共的なる自治精神の發揮である。親や主人 一である。

少しも質問の それで道徳の進歩とはこの絶對性を相對性の 見た場合に地理歴史上の相對性である。 德論である。個人の行為を拘束制限する風 生活を支配すると同一である。 的に見た場合は規範意識上の絶對性である。 けれども風俗習慣なるものは道徳を客觀的に る。道徳は素より風俗習慣の形になって居る。 習慣を說く邊は全く説明が非倫理 の答は立憲時代の道徳論でなく専制時代の 丁酉倫理記者

中に顕現して進むことである。即ち自

171

の原因を究明するの風を生じ、牧村生の如き

ところ。

及び戀愛に闘しては一通りの道徳的知識を心 を得んとしたのであらう。牧村生は既に結婚 はこの疑問に苦しむことより、倫理上の裁斷 を發したことは頗る道理の存することであり 悪するは甚だ矛盾して居るでは無いかと疑問 した場合に。現在の日本社會がこれを指彈情 ば、こうに一男一女が戀に始まつて結婚を爲 家庭の要件であり、神聖の第一義であるなら て正當な試みである。而して戀愛が結婚又は 理論的基礎を得んとして質問したことは極め き眞理の正解であり、真れに對する倫理上の 愛と爲し、夫婦關係の根底又は家庭の和合か は其の一人である。牧村生が結婚の要件を戀 こしに存するものと見たのは、素より申分な 點も批難すべき箇所を見出さない。牧村生 答へて居るか。 である。

それから自我の絶對的道德性と規範的意識に 家族主義の道徳と個人主義(社會的なる個人 批判的知識をまだ有して居ない。換言すれば いのであるが、男女道徳に闘する新藝道徳の 得て居る人である。此の現狀に於て大談が無 の道徳との境界に関する知識がない。

結婚及び戀愛に關する倫理上の説明は歸する 関する知識がない。少し六ヶ敷い様であるが

遍的規範であるから、絶對的の理想であつて、 人生の理想であるならば、それは現實的な普 者は、牧村生の眞摯なる質問に對して何者な ふ人達の集りであると稱する丁酉倫理學の記 の熱誠を有して居なければならない。斯う云 素新しい研究を積んで世道人心を導き、經世 古い草稿を講ずることを以て能事とせず、平 が義務である。倫理學者は單に衣食の爲めに に對して倫理上より解答を與へて遺はすこと 位に在る諸先生は、幾重にも懇切に其の疑問 會の木鐸となり、迷へる青年の指導者たる地 理の協會を設けて現代思想の羅針となり、社 より青年後進の當然なる所為である。故に倫 酉倫理會の諸先生に對して質疑したことは元 り生じた疑問であるが、これを疑問として丁

係に對する誤解から起きたのである。道德上 これは間違つた答である。理想と實際との關 想的であるは稀であると云ふのである。併し のであるが、イザ實際となると自我其物が理 る。理想として戀愛結婚は自我の神聖なるも = 理想と實際との關係論から答へて居

此等の知識に關する理解に存するの 牧村生の疑問は此等の知識の缺乏よ 居る特殊的個人があつても、道徳的理想は曹 に於ては道德的理想に反する悪行爲を爲して あるので、反理想的行為を許さない。事實上 際に於て直ちに實行しなければならの義務が 云ふものに當り、理想と云ふものでは無い。 「極めて」とか、「高い」とか云ふ程度上の性質 公道である。反理想的の邪道の存する理由を 遍的に絕對命令として嚴存する。イザ實際と 求なのである。 理想と云へば絶對的に其の尊遍性に從つてこ ふ理想は倫理學上成立しない。それは空想と は無い筈である。「極めて高い理想」など、云 想的の邪道であつても、普遍的理想は萬人の れが自我の道徳的懐威であり、價值意識の要 なつた場合に、或る特殊的個人の行為が反理 故に道徳上の理想と云へば實

といに分ける議論は、 道德的命令で無ければならない。「極めて」と 絕對性を有する當然義務であるから、 ならば、それは現實的の普遍 の結果となり、恐るべき結論に達する。 故に道徳的事件を理想上のこと、實際上のこ か「高い」とか云ふそんな蛇足な性質はない。 で戀愛が結婚に關して若し人生の理想である 以てして萬人の公道を拒むことは出來ない。 道德的理想を否定する 的規範であり、

あります。

私達は力もなければ、位地もなく

愛の微笑の中に神のあらゆる寡きものが酸は 心から微笑ましむることであります。甘美な て居りますならば、其れは少さな一つの魂を

が此の世に於て何かすることが許され

れて居ることを見ての人に知らせたいもので

私達は何者ももつて居ません弱々しい貧しい みもつてなる少女の小さな国際であります。 財産もなければ名譽もない、只だ愛の泉なの

者であります。けれども感謝して安らかに其

どと云ふは駄洒落とも戲言とも附かわもので 應こしに批判して置く次第である。 用意な解答は倫理界の機威を損するから、 ある。 倫理に關係がない。 丁酉倫理記者の不

るい積りで歩くとあぶなうございますぞ。な

與謝野晶子氏の

六月の太陽に載せた與謝野晶子氏の娼婦論 (以上評論子)

鬸 田 ふ め (投)

の日を送ってなります。けれども限りなき豊 に満ち充ちて居ります。愛は不可抗の力です、 までも女子として行かればなりません。今ま や行き詰って居ります。我等は之を数はれば らば、女子には信仰があります。女子は何處 す。男子は男子、 子に活動の本源を興へればなられと思ふので かさな感じて居ります。と常に與へんとする心 ればなりません。男子に智慧がありまするな を保護するならば、我等は美と愛とた以て男 無比の富です。男子が力と物質とな以て女性 女子は女子の尺度ではから ました。そして其れが遂にニーチェの超人と ます。自我の慌威は絕頂に達して此の世は今 た。そして此の世を力の世界としたのであり なつて人間の自我の懐威を絶頂まで延しまし なく祭えしめんがために、男の方を下し給ひ 可抗の力です。神は物質の力をこの世に限り す。弱きが故に强いのであります。弱きは不 子の力となりうる様でなければなられので せました。けれどもこれからは弱きが故に男

るので、極めて痛快に讀んだ。関來我が邦に 通りである。余の醜業婦論と殆ど同意見であ 監然として洵に娼婦に關しては氏の考察する は、近頃の論壇に稀なる卓論であつた。條理 社會では先づ與謝氏が嚆矢である。論客とし 關して徹底的の批判を加へた女子は、日本の て立たんとする今後の青年女子は、興謝野氏 は學識を有する婦人論客が少ない。娼婦論に の流れを吸んで立てば大誤が無いであらう。 男子と競争するの必要はないのであります。 ん。けれども男性たるの必要はありません。 ります。又男子と協同して行かればなりませ ものでした。私達は男子心理解する必要はあ での文明は男子のものです。道徳も亦男子の した。私達も亦其れに報いればなりますまい。 女子の世界はこれからです。神の未知の世界 如何なる場合であつても斷じて其の必要はな 私達は弱きが故に随分男子の方々に罪を犯る て行かればなりません。男子の世界をわすむ は無限です。女子は女子の世界を獨力で開 いのです。況んや女子の天性を傷けてまでも の方は限りなき種々なものを創造してくれま 様なことをしてはならののです。今まで男子 173

相對性に具體的內容として發展するのであ 像的絕對性が普遍的形式として地理歴史上の

の價値の無いも 有様である。 於て媒妁結婚が我が國の社會を支配して居る の道徳的意識になって居ないから、事質上に 觀に發する改革の聲であつて、まだ一般民衆 ある。けれども此の戀愛論は道徳的識者の主 のみならず、それに從ふは反つて罪惡なので に関する風俗習慣を墨守する必要は更に無い ある。 のがわり、 るならば、徳川時代又は明治初年の媒妁結婚 要求である。それで今日吾々の道徳的意識に 立の特殊的原因によるのであるが、其の原動 徳に異つたもの、存するのは、これが爲めで 川時代の道徳には鎌倉時代の道徳と異つたも る。それで現在の我が図の風俗智慣が吾々な 於て、結婚に關して戀愛が普遍的の理想であ 力は道徳的天才の主觀に發する自我の絕對的 あり、絶えず作用的に流動するのである。徳 制限拘束して居ても、それは相對的のもので 而して其の異なるに至る主因 明治時代の道徳には徳川時代の道 倫理學的理論に於ては既に存在 のであるが、 過去の骨董的智 は社會成 に反する議論である。 戀愛結婚の風習を生じ、 る媒妁結婚が頽れて人格的個人主義に存する ければ止まないものである。家族主義に存す 要求する最上形式に於ける習俗にまで達しな 保つまでに過去の習俗は破壊されて、 怨の流動が行はれた為めに、今後其の水平を 上の大變動を生じ、地理的に歴史的に東西思 社會意識である。我が國は明治に入りて思想 第に破壞して、全く其の根跡を掃蕩するに至 れで牧村生が實例を掲げて現代日本社會の矛 區々たる習慣拘束を以て當ることの出來ない るに隨つて生ずる社會的勢力の結果であって るのである。これは新道徳の實行者が多くな る。類道徳は日に舊道徳の化石なる習俗を次 居る。けれども眞理は遂に最後の勝利者であ 盾を指摘して疑問を發したのも弦に原因して る際には何時の時代にも存するのである。そ

會的現象であつて、地理歴史上の大變動のあ これは新舊道徳の交代する場合に生ずる社 自我の も知れない。けれども太陽南天に冲して富士 い。理論なき批判なき過去の習俗などに辟易 よつてのみ改善される。「富士の山巓に紅ぬな 進むべきである。社會の暗黑面は光明の の生命に化すれば、ここに陰陽の妙合となり 更に黄熱となり赤熱となり白熱となり、 初めは如何にも地平線上の曙光に過ぎないが 愛の光に浴し得る。戀愛もこれと同様である。 かれて、如何なる山影に咲く無名の花もその の山頂を照せば、蜻蛉洲は太陽の統治下に置 曙光が射しても下界は未だ黑暗々である。」 する必要は更にない。 つ此の道義の宣傳に盡力しなければ めに、戀愛結婚の神聖なる躬行者となり、 全ならんが爲め、 出來ると思ふ。而して吾々は自己の人生の完 又は國民の優良ならんが 悉く突破して批判的 6 A

る。丁酉倫理記者の風俗智懷論は道徳の進步 を生じて來ることは火を踏るよりも明っであ 次第に道德的拘束力 して立つて、抑も生涯に於て何事な爲し得る し、其の至れるに及んで天地に察なり」とはこ へな道破したのである。

愛なき夫婦な地盤と

牧村生は此意味に於て戀愛及び結婚に對し 倫理上より理論的基礎を正解することが ある。 で無くて何であるか。「天上ばかり見話 か。「脚下の地盤」とは夫婦の戀愛を指 下界に於て人生の 重大事件は夫

俗の惰性とし

て世人を制限拘束して居るに過

家庭の和樂となり、治人の要道となり、萬物を

化育して餘りある。「君子の道は端か夫

哲學と宗教との關係を合詳論してほしいか、

此處は哲學の性質を主として述べらるしのだ

文中ところとくに挿入した寫眞版は山岳會特

著者が山嶽跋渉を主としたる紀行文集である

一特色を有して居

3

警別

配量發行

71]

岩紀 波平 書店發行

を捉へるのだといふて居る。 を捉へんとすれど宗教は自我な離れないで之 具體的なものを捉へんとし、 の特質をもつて自我を離れて、 哲學史と其研究法とな述べて居る。氏は哲學 能及哲學と宗教及藝術との區別をのべ、更に ける知的 論においては、哲學の概念を論じ、 味がうすいといふて居るが之は同感である。 實驗神秘的生活を重視し、 教の範圍を一歩踏み越えたものとし、 が傳道的態度に出て、説明的になれば已に宗 學の性質を明かにし、 大册である、 を我思想界に提供した。薬版七百五十餘頁の 認識篇を公にし哲學研究者に多大の便益を興 へたが今兹に又多年の蘊蓄を披瀝して此新著 著者は岩波の哲學叢書の第一篇として嘗て 統一の要求より、常識と科學と哲 全體を緒論の外三篇に分つ、緒 更に哲學の意義と其可 之がなければ宗教 故に著者は宗教 宗教も同じく之 全體的包括的 人生にお 個人的 等の東洋思想とも照應して説いて居るのは、 西洋哲學思想を消化して、更に佛教儒教老莊 頗る宗教味にとんで居る。 て著者の人格の力と光の顯れの如く、隨て又 快暢達で讀んで難解の點少ない。〈價二・五〇〉 でない殊に理想論は単なる理論解説に非ずし 闘器の王國 此種の書中稀に見るものである。文章亦明 自然の觀照と其表現に

對論等を逐次詳論して居る。 て、其意義問題を説明し、唯物論と經驗論の から蓋止をえまい。 物論唯心論二元論並行論具 第一篇は實有觀な論じ、

なる筆を以て光彩と生氣にとむ思想を披瀝し との各章に分けて詳論してたるが、各章明快 格の實在不滅、 三篇は理想論で倫理學の根本原理をあげ、人 學的認識と哲學的認識とな詳論して居る。第 觀念、善惡不二と爲善の力、神、自由、知行 經驗からカントの認識論な概説して最後に科 一讀痛快な覺えしめること、普通哲學書の比 理想の統一と理想化善の根本 第二篇は認識論

體的唯心論及絕 圖新 有のものとかにて頗るすぐれたもので文章に 一段の興をそへて居る。

生

装釘も清酒だ。

(價一・〇〇)

岩藤 波 書店簽行

「歡喜と感謝」の四篇と更に小節にわけてある ポーレミクの影なく廣やかな心と信仰の喜が 生涯より一轉して、信徒の生活に入つた。此 其生命は一新し、新しき希望はかいやき、 官であつた。然るに一度イエスを識つてから あふれて居るのは嬉しい。 る。「來りて見よ「新生と希望」「戰鬪と勝利」 の小著は其の間に生れた自己の靈的經驗 しい数喜は湧きいでた。かくして彼は屬僚の 著者は新進の法學士で近くまで某縣の高等 〈價○・五

通常的教育道話

全體を通じてよく

大日本雄辯會發行安 藝 愛 山 著

易な文章でかいて居る。東西古今いろして あるがいづれも教育的に應用しうるものであ る。小見や演説家の 面白くして有益な道話三十餘篇を集め、 引例にも適切であらう。

調海の十二年

吉 田又七

今まであつた種々な知識はもう駄目です。い 現代人の自我は不安の中に限りなく膨脹して 進むべき路を開いてやらればなりますまい。 まい。打ち勝ち難き自我を打ち破つて自我の なりますまい。彼等を神に導かればなります 行くのみであります。絃を離れた矢の様に一 つても同じところなぐるくずる計りです。 愛によつて祈りませう。不可抗の力によつて の方々よ氣をつけて下さい。凡て女をして其 す。女子が男子の眞似をする時は世界は破滅 りなく大なるものであることを。 れうると。神の國のいと少きものであつても する神の恩竈を嫉んで人を滅さんとする悪魔 祈りませう。弱きが故に祈りませう。私は信 ずる。 祈りによつて新たなる神の未知が知ら ましたならば、其は悪愛です。 新に下らんと かつてこの世にあつた如何なるものよりも限 男子は其の力にのみ類る時は破滅致しま 多く降つてたるのみです。男子の生命の本源 弱きが故に神に近いのです。神の守りがより の仕業です。我等は弱きが故に祈りつ、純潔 の女性な輕しめる様な囁きなするものがあり に安らかに進んで行けばよいのです。我等は

供せればなりますまい。私達は耐りませう。 ません。そして新たなる生命の源を彼等に提 ません。祈つて新たなる恩寵を求めればなり は不可抗の愛の力によつて神に祈らればなり れども 永遠に單調ではないでせうか。我等 善い女とする様になつたでせう。天下の女性 を捨て、男性たらんとする人が多くなつたで 非常な大なる使命がありますのに、何故女性 致します。私は悲しみます。現代の女性には せう。男性化した點のより多いのな以てより 文夫となることがあります。其れは大なる間 らんと決心する事があります。そして所謂女 違ひであります。 たることが出來るのです。 女子が困難に遭遇した時突如として男性た

直線に其の確信の道をのぼっては行きますけ

は暮れて(ギタンジャリの中から)

B

夕ぐれの空氣は水のかなしい音樂に聴きとれてゐる。あり、それは私をたそがれのなかに誘ふ。 日は暮れて、影は地の上にある。流れて行つて私の水甕を充たすべき時である。 風は凪いだ、連波は川に跳躍る。 寂

知らない人が琵琶を彈じてゐる。 私は知らぬ私が家に歸つて來るのだらうかや。私は知らぬ私が誰れと邂逅ふかた。彼瀬では小舟に

哲學 東大 蟹杉 堂 發榮 行著

い。これが本書の缺點である。〈定價六十五錢〉

居ない。所々に難詰すべき點がある。 そして哲學に關する基礎的の知識が判然して ものである。極めて断片的な飜譯的のもであ て哲學を談じ得たりと思ふは早計である。 進んで勞働運動と個人主義との關係を說いた 野澤重吉と云ふ社會主義の車夫の寫真を出し 労働運動とプラグマテイズムの關係を叙し、 の哲學と稱するには更に精密なる研究を添 本書は簽資禁止になった本である。 からのことであり、 自家の組織的研究になつたものではない 斯かる小册子で以つ 勞倒運 口繪に

(定價三十五錢)

英國の田園生活都會及農村編輯部譯

會問題として、又は地方自治問題として最も し田園生活の研究は農政問題として、又は社 として刊行されたものであり、ヘンリー・ハー 霊力せん計畫をして居る。 ポア氏の The Rural English の譯である。蓋 めて、地方農業の振起、田園生活趣味の普及に 洛陽堂ではかれて農村關係書類の發兌に勉 本書はその第一編

> る。(假八十銭) 地方青年團又は農村圖書館には好適い書であ 肝要なことである。本書は英國の田園生活に 名附にして何人にも讀めるやうにしてある。 関して極めて平易なる文體で書か n 總振假

関トルストイ民懸集

陽本 堂 發弘 行譯

ら大事の九篇を載せて居る。 か(七)麵麭の皮(入)イリヤスの話(九)小火か 教子(五)馬鹿のイワン(六)人は何で生きる も具體的に現はした形である。本書はその民 を書いて居るのは全く彼の心の眞質な姿を最 た。彼は此等下層農民に關して多くの小物語 た。而して彼はそれを下層農民の間に見出し はどれ程の地面が入るい(三)二人の巡禮(四) 話集である。へ一変ある所に神ぬます〇二人 無く真質の生活であるかを究めることであつ 人生に関するトルストイの態度は云ふ迄も (定價一圓拾錢)

第十 4 몹 解 道松

も出て居た。 要道である。本文丈は内ヶ崎氏の人生日訓に 禪宗で十牛圖解は最も尊重して居る徹悟の 此の十牛圖解は古來より幾多の 宣會本部 發行

> 人によって解説されて來た。記者の 放つて居る。 博士の英文と齋藤松洲書伯の挿繪とが特色 關しては別に新機軸は出て居ない は松村介石氏の解説である。解説そのも は釋宗演氏の本などは良い方であった。本書 (定價二十錢) 知る所 和田

楠正成櫻井遺訓 金 城 社 發 行

として出された。修徳の本として少年子弟に にして今度金城社より讀本體にして活字の本 薦めて好い本である。 の原文を知つて居る者は世に稀れである。幸 ことは容易に想像の出來るものであるが、 なる書がある。 して傳へられて居るものに、 河内判官楠正成がその子正行に 徳川時代の儒者の偽作であ (定價三十 楠正成櫻井遺 與へ 其 3 訓

劔 客 禪 話 丙加 午藤 出咄 版堂 社著

して珍しくない。鎌倉時代からの事であつて って居る。(定價八十銭) 人刀、鐵疾藜、活人劍、賊後弓、等の項目より 剱客は禪を修し、 禪僧は剣を談ずることは決 本書は劍禪を談じたものであり、老古錐、殺 武士道と禪宗との頗る近似して居る所である 剣と輝とは古來より 其 バの揆 加 一にして居 成

交字に心をよせ竹柏園主人の内に入つて海上 生活をうたひしもの多い。氏は今其歌稿を集 活かなすこと十二年、 其間三十一 併し近代交學者の懷疑思想の を虚無思想と同一視したのはどうであらうか 一端はよく示さ

著者は帝國海軍の水兵として前後三回後軍

で物足りない氣がする。又東洋の老莊や佛教

め自ら出版し同好者に分たれた。 列なりて海な機ぎる大船の煙吹きまく八重

まかずら 0 山なせる百波干波暦りわけ殺ますらたの衆 をが力の限打おろす斧も及ばの厚水

り立上るらし 朝潮ぞのるみそめたるほがらし、春は海よ る艇ゆく

樂しくありけれ 殊更に月見むとてはこがれども秋は艦こそ

てる月を見て 死ぬばかり苦しかりしも忘られつ大海原に

等雄大な海國男兒の調が多い。

~"

フとフロウベルの虚無思想、 虚虚無思想の研究 魔無思想と「父と子」のバザロフ、 天生 十九世紀の虚無 田弦春 ツルゲネ 月堂著

をして文學的の思想を具體的に述べて居るの

にかれが晩年即ち孤獨の生活に入り始める頃

×

ルの哲學の弱點に就いては何も談じて居な

妹の筆によりて兹に描き出された。

本書は殊

以つて解説したものであり、

コール

温仰の筆を

ルた天才の哲學者として取扱ひ、

た。彼が著作の秀高な精神の背景は彼が死後

を述べて居るが、著者も斷つて居る樣に社會 の五章に分ち近代に行はる、此特色ある思想

東洋思想に現はれたる虚無思想

の虚無主義などは全然省略し、主

れて居る。(價〇・五〇) 逃逃 源

省 東舵 雲畑 堂寒 出村 版著

は、うろほひある筆によつてよく描き出され 之れ皆著者自身の經驗のいつはらざる告白に 者の生活せる境遇と其内に育まれたる思想と して、單なる技巧を云々する作品にあらず、作 「艦底」「逃避者」「冬」「父親」の四短篇を收む

闘妹の見たるニイチエ て居る。(價〇・三五)

彼は孤獨の影を抱いて高い峰の上なさまるふ 晩年最もさびしき生涯を送つた、著作の真意 はニイチェの答であつた。 ない」と云つた。「それはお前がかく筈だ」と は同胞から無視され、友人も彼をすてさつた トが 獨逸近代の哲人ニイチェの晩年其妹エリザ 「あなたは自叙傳をかっなければなら 此の不遇な哲人は 新磯 潮部 社泰 出治 版譯

ニイチェの著作の翻譯や評論は可なり出版さ から筆を起して其悲しき最後に及んでなる。 数葉の寫眞版がそへてある。へ**個〇・七** ばしい。認文は充分にこなれて居り、些の強 原著は「淋しきニイチェ」と題してある筈た。 滞がない。登頭に原著者及ニイチエに関する れて居る今日此の小僧の又世に出たことは喜

ミショーペンハウエルの哲學

爾來ショーペンハウエ 近代思潮叢書第十 一編として出版され ルに闘する著書は闘分 176

決して哲學史的研究のものでは無くて、通俗 は特色のある處で、氏の如き佛塾徒にして始 ペンハウエルの思想との關係を説いて居る點 的の評論である。 めて爲し得ることであらう。 適つた小册子である。殊に印度思想とショー ものは無かつた。大住氏の本書は此の要求に に関して諸問題に言及して輪廓を明かにした 多く世に出て居る。けれども彼の思想の全部 始めからショー けれども本書は ハウ

院長診 番電町話 林、峰 診院 加了 神 訄 東 奈川 話 察每 野 京 長 ちが 診 高 間 縣茅 一番町三十 朝及 察 察 橋 おき二番 兩 土 ケ 每 兩 副 曜 崎 副 博 長 海 H 番地 午 長 は 澬 但 後 は 南 目 午 高 (從停車場半 市 祭 目 前 下 下當院 日 入院診察 及木 谷見附五 當 及 院 日 12 に在 後 曜 內 院安院 在 里 之 勤 時

毎

朝

個

祭

日

及

日

曜

及

土

曜

後附

の後

界の憧憬の的となったタゴール翁は遂に吾等 となく彼の人格は我國上下の愛慕の中心とな くも本誌は其議演會や特別號を出したが、 つて居る。昨年彼の來朝が傳へられたとき早 年來其來朝を備へられてから我若き思想 彼の詩文をよみしとよまざる 仐 30

記念號とするとにした。

亦此詩人を迎へるに當り、

ある。

ある。 世界に學ぶのみならず、自ら有てるものを世 の精神を失ふ勿れといふのであり、 もつて來た。それは即ち帝大に於ける講演で 彼は我國に來るに當り。其印度よりの使信を る評論が喧しい。之は當然の事である。殊に 口昨今彼の聲名が高くなってから、 西洋文明を否定した、 界に與へよといふのである。 彼の本意は亞細亞の日本をして其固有 、其否定の態度は果して 併し彼は餘りに 又日本が 彼に對す

活動の目標を高く指すのである。 併しかれは世界に對する日本の使命、 反對者批評の的となった。 彼が日本の舊くより有てるものを大に肯定 宛然我が國粹論者のやうである。 彼を單なる 國民的 には宗教がある。 口本號はタゴー ル記念號としたので、 生活がある。

が少い。歡迎發起人には神佛教徒と共に基督 迎する人達の中にもよく彼を解して居るもの ラフマ・ソマジの一神敬の流 たく むものであ 向もあるやうだ。併し本來からいへば彼はブ 教徒も名な並べて居るから異様に思つて居る 一タ翁が來朝して諸方から歡迎さるしが、歡 自由基督教徒のこれに關はるのは當然で

本號を以て其來朝 のは、 である。 攝取消化する生命ないふて居る。 が簡単にした結果かもしれない。 一體彼がかく我國に傳へらる、樣になった 新心好む青年の 彼は寛永寺の歡迎會で舊日本の維持 心が彼に共鳴した 彼は一 5

たのである。 れ理屈以上である。詩そのもの、化身である ふるのは其美を體得せる詩人、宗教的詩人と たゆるさない。 を鼓吹したやうに聞いたが、これ或は通譯者 彼は単に言葉を操る詩人ではない、 していある。 口遮莫、理屈は何にもつく。吾人がかれた迎 彼の箪然として優秀な人格はこ 只かれは生命の個性を主張し 生命は保守 彼の背景 切か

> ない。 原稿の中で止たえず次號に廻したものが少く 寄稿者語君諒焉

消極的保守論者と見るのは誤つて居る。

を本誌に載せてあるが、 して凉味あるものにしたいと思つて居ます。 つた。 された、其他大阪の非置娼運動 原等の諸氏も皆健康である。次號は夏季號と 中一寸上京された。 翁講演の紹介は略しておいた。野村氏は六月 でタゴールに闘する講演なされた。 校、宇都宮の教育會等に出演されて多忙であ 口内ケ崎氏はタ翁歡迎會委員として種 一本誌編輯/切毎月十日 岡田氏は五月十八日の日曜に自 氏が大學に於けるタ 、千葉の専門學 一々奔走

本誌の原稿、質別本誌の原稿、質別である。

東京市芝區三田四國町二 に關しては

て御送附又は御通 信 被下度

其他

0

候に

毎 發 E 月 遊 生 何 修 名因 松齋 苦 n 1 句循 村藤 楚 綺 遊 問 小姑 カラ 來趣 麗 奴 題 わ 石洲 の味 な 其 西 宗其 た 鄉 To. 男 教七 抄 0 話 圖 月 足錄 矢教物 松村 高 信 野 鬼 看介松 峽 恆 入 雨石洲 價定 石 太 水 生 金 價定 價定 貢 金 女 談教支 吾 勘 浮 井 談教 在 或 ダ 棄 抬 子 金 定 世 鄉 理 か 部 1 合 侯 0 軍 錢 革 敎 Ŧī. 0 0 + 船 義 字 形 0 人 S 錢 上里 德 理 專 私 第 萷 は 義华 錢 仰 0 後 如 をの 5 乘 訓 年年 說圖 何 部部 きを 3 練 な ---- 八 九以 3 るて 五十 英 二九 J. 6 理 B 西 Ti 南 野 村 石 水 錢錢 陽 原 ---の法 野 0 錢錢 嵐 錬 也少 共稅 平 義 共稅 願 光 處 復 周 太 復 物 居 子 松 明

番六二九五二京東替振 四谷中市東方

人名を孫書御百る秋に記載智八は万の心中間で元と古典に													
		侶作	好好	り夏金	肖 🗌								
發			→			- 毎							
行	日					同 月							
	▶ 料送分年一價 ●目要號七卷一十● 料送部一價 ●												
夏懸			To provide the same of the sam	B BBB									
期賞		用小夢黒繪	潘三	真文我邦率藝國文	日屋	日中歐							
特門	田	な學 雲とし校判とそ	冽井	年雲図ス簡時のタ	316	~ ~ ~ ~ ~							
別で	かの	きの 百の	な寺	易評出イの來フ		語マ大							
募字集文	(1) LL.	と先斷姓思	+0	の一來フ風事ラ		研字戰							
*\\		出		1	1/2	がしり綴の							
鄉	A		和鐘	3	アピラ	金自收							
里			用	σ		文著亦							
			湖	: : : : : : : : : : : : : : : : : : :	計りと	出水							
旗					速	版							
10 T					記字	りに海で							
に並	慶	法法法	,			慶 醫 大							
勝	大教	學學	: :		ブピ	教 博 校							
dH _*	授	士士	:		ド	授士長							
出の	向	安內蒲加石	鳥日	堺水記札	日 ラナ	向櫻佐							
称		藤藤生茂井	谷下	野	鎖!	根藤							
売分	宝		間間	利盈		軍孝鐵之太							
見十一次	平	和好俊正柏	部陽太	太牙	京綱 タゴ								
れ日七は限月	治	風文文一亭	郎郎	彦 郎者太	大紀 ル	治進郎							
番ーー九京東替振 會めるひ字マーロ 市京東 所 行 發													
六五二五局本話電													

紙主ル現



Ŧî. 價 百 內 圓 地 + 五 八 + 錢 頁

恒的本本 ら哲思書

ざ學想は

るのを其

所意開師

で義陳中

あとせン

る根るデ

實に本も科 な求原之學 るめ書をの 飜難は知價 譯き著ら値

が獨者ず如 學特の 师 界の數之 の知あをこ 十識る知れ 分を著る實 な提述はに る供中一緊 科京 信すにに切 致大 頼るも絶に 授文 に唯最倫 僧一もなて す無有る與 二名科味

きのな學り は書る者る 本で者た問 書あでる題 肆るあとで 信最いている。 章秀か 就 秀なも 學 麗る所 が科學 攻學哲 での學者學 あ著のた者 る者美るは なは原之

るし著を

者精のら

の神如す

密發人科

に露に學

しし待者

つ自

。身

嚴を含

T

忠他

水



定 Ti 內 -1-八 --Ti 版 錢 錢

112 番○二四五局本話電 田神京東 町保神育 悉〇四二六二京東替振

STREET, STREET,

1

特 君 諸 者 0

誌

宛

省 社

扳

を

要する

質

壹

漬

錢

税

替 御 かっ 6 御 MA は 쏤 成安 御 送 添 医 0 4 振 ひい 3 教 3 5

誌本

特

等

表

紙

四

面

頁 頁

金貮拾

圓

貢

價 定 誌 本

特別外

出郵

版稅

分 分 分

17

金六錢

(清國

を除

規付

號 は

0)

際

心以外の

代金を申

册 册

ケ 5 5

年 年 月

前 前 金

金質圓 金壹圓

武治

錢 錢

郵 郵 運

稅

拾

五

稅

共 錢

半

料告廣

表

74

面

以 出

下の

同以 紙 通 通

E

連 は

淹續

揭 頁

0

際

特 告

引

可 上

仮

は廣

別御

割斷

仕候

申

頁

金 金拾

圓

大正五年七月 一 日發 行大正五年六月廿八日印刷統本 即 發行 刷 毎 輯 月 E 東京市芝區愛宕町三丁目二番地 海 日 一發行

三田四國町東京市芝區

發

行

所

統

基督教

弘兴 式

道

東京市芝區三田四國町ニノ

印

刷

所

東洋印

刷株

會

社

野

男

郵税を要します。

所

to

御書

電話芝五八五五番

話芝五八五五番

蕊 雜 令 六



號

月八

暑中の衛生



適最に行族は磨菌練ンオイラ

THE RIKUGO-ZASSHI

No. 427 August 1916

CONTENTS

Harmony between the Old Faith and New Thought	
Prof. S. Uchigasaki.	2
A Great Life Prof. R. Nagai.	12
Meaning of True Worship Prof. M. Minami.	17
Ethies of Daily Life T. Ichijō.	22
Poems Prof. K. Sato.	29
Fragmental Thoughts G. Yoshida.	30
Story of a Young Man Rev. I. Okino.	38
The Cursed Man M. Kubo.	49
The Dream of Wild Bees (Olive Schleiner)	
Trans. by M. Saitō.	59
A Bit o' Love (John Galsworthy) Trans. by Y. Suzuki.	66
A Summer Sketch in Switzerland Dr. T. Arai.	85
A Summer Dream on a mountain-lake N. Kudō.	92
A Drama J. Tsubota.	80
A Poem T. Ote.	84
On the Sea of Kumano C. Hyodō.	98
A Little Singer. (English)	119
In Sick Bed. (") T. Toyoda.	115
Fundamental Solution of Sexual Problem Dr. T. Katō.	124
Sexual Ethics illustrated in the Joruri T. Ichijo.	133

Topics of the Day. New Books.

Published Monthly by the

TÖITSU KRISTKYÖ KÖDÖKWAI.

2. Mita, Shikoku-machi, Shiba-ku, Tōkyō.

。し吾學は

るる精

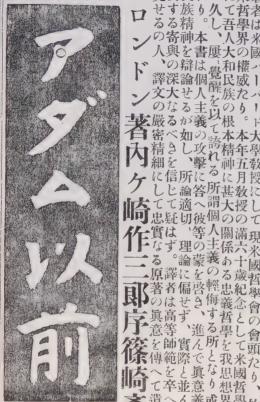
広嚴るが義

信所にる

てて滴へ謂大授

なず理の主係が

ツジ研にのなる中歐原 ヤ究對民れ、に米著 せす族り人で哲者



驚たと痛の傑

、進る學! を師實ん所をて聞 傳範際でと我米な へをと真な思國6 て卒並意り想哲 に遺へん義或界學故 てでのはに雑ウ 裁を棒現作 な多大忠偏提誌イ 述基を代にれ 逃せるとして して こ 年忠義狹供はり °米義をなす特ァ 活 新 何國の說る 别么 術て諷に虚進 味我刺 人大精く小由號 豊等的大学虚大 中子も學神、忠來を 必にを恰義忠發 祖著 價四讀留說的論義行 力先で to 八六世と我者のせる 元あ與 + 八一要し。等の精り教 十判す教真に亂神。授 類心輕 失 錢布名育に代用の今と の理化 野學のる 、我りす誤や相 と現物 满的生代質 美た哲思てる解其並 て生物人偏っ り學想我所せ著ん

東文米

學國

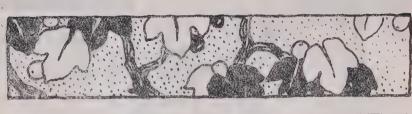
即大

サ



頁十五百三判 製 錢八料送錢

町番話電〉。 陽 丁五町河平區町麴市京東 八五二四人 番四一九〇二京東座口替振



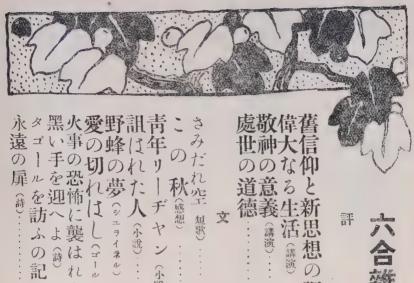
表紙畫

編輯の後

有

田 74 郎 畫

oran a commentant	mind a man of the	The same of					2.6	and the same of	The same of
時代(量岸生)	田室機惠子夫人の葬式 平耳 の 男子 近信	番宮の男女道恵	婦人の王國	In Sick Bed (英詩)	の家より ひはらこ	壇 (佐藤安子)(坂本正雄)(西淵峻)	英 働 竹 醉…	夏	夏の大自然一



雜誌 第卅六卷 第八號

F

論

	57	7 /		~ <i>]</i> :	N. Carlot				為強		10	7	THE PERSON NAMED IN
ゴールを訪ふの記	い手を迎へよ(詩)	事の恐怖に襲はれし村(戯曲	の切れはし「ゴールスワーシー)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	野蜂の夢(シュライネル)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	はれた人(示説)	年	の秋(感想)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	みだれた 短歌) ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ 文學士	文	處世の道德	神の意義(講演)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	大なる生活(講演)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	言中と新思想の調和(講演)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	手		木	齋藤	久 保 工	沖野岩	吉田絃	佐藤		條中	並	水井柳	ケ崎
二郎:一〇七頁		讓 治…八〇頁		未 學五九頁	正 夫…四九頁	三郎三八頁	二郎…三〇頁	清…二九頁		忠 衞…二三頁	良···一七頁		作三郎二頁

澤

哲

雄:一〇九頁

誌 雜 合 六



號月八

〔次日 容內

ヒ愛哲日日印詩 ゴマの學本本度聖 ラ詩者よにとタ ルヤ人と涙對日ゴ 氏の夕しもす本し の山ゴててる を迎ふる欝永平寺貫首 劇麓「の汝印 0) ルタに度 意 ゴ望の

しむ使 n

命

見

4

つ教教文

て授授士

長山金高タタタ日 谷上子楠ゴゴゴ置 溪源水郎ルルル仙

詩タタ書平トタタ 聖ゴゴ家和ルゴゴ 來11の郷ス 朝ルルタにトルル 日の家ゴ於イ翁の 誌著の1けとの音 作人ルるタ戲樂 詩ゴ曲教 研々 聖しと育 究 ル其

舞

臺

敎

授

敦入 **晝** 授伯

編編武桐佐宮武吉 輯輯田夕野島田田 豐谷甚新豐弦 同同四洗之三四 人郎鱗助郎郎郎



□畫挿と繪口□

且論文名義詩 つ設邀書
か聖

興をにをり來 味得造收價朝

多之詣め値の

当に深たあ記

記タきるら念

念氏我書し

出のが帖び

版講思にるて を演想添寫印

忍所界ふに度

に感一る數文

せ等流に多藝

りをの特の研

讀げ名印念書 士度寫と

をに興宗及て 希美味教び最

ふし深哲印も

き學度意

榮茲のの眞

掲諸に記究

下にトー詩の入り氏聖 ボの入り氏聖 カナー・近近の面 3

ド子 夜 1 聖寺 タ詩 ゴ聖歡 1 ルル育ののめ

詩影 汉 ゴの冥 iv を迎公 1 3 0 バ師 ンドラへ 記がけて 初 素焼る て日 る詩本 ナ随 四山 葉葉の 1 行 聖と朝野の地を踏りていれていれていれていれていれていれていれています。 ルル = = 3 пп 詩聖 刄 1 4 う ドラ 東祖 都父デ

EI 度 半五

價

稅

京神田區鈴木町 館

同

替話 東本 京局 Б. 六七七七 九 番番

阈 0 破 之が 0 過 壞 去 は 面 () 終 所 12 25 於て 産を壊らうとはしな 破 壞 破 0 た 壞 め 的 大 0 改革 破 壊で を斷 いで、 は 13 行 カン 單に之に生命を與 て死 2 た 0 3 6 猶 悔 あ る S 73 イ カン った ~ 工 ようとする者 ス イ カゴ 新 工 L ス 0 V 0 42 カン あ 來 5 出 る 時 た 0 彼 6 は あ 决 1 7 工 ス

羅馬 あ ると思 12 猶 0 導 カド 武 せ 太人にもせよ、印度人にもせよ、日本人にもせよ、 ふのは大な より 1: 道 め あり た。 不完全なるものを完成 る迷 日 何 本 n 12 信である。 多 は 神 其 0 道 時 あ 9 神は古しへより今に至るまで、 其 するのであ ~ 0) 處 N に於 シ p 17 る。 7 これ は ゾ 等 17 0 r 民 支那人にもせよ、 ス 族 ٢ を向 jν 敎 あらゆる民 あ 上せしめ 5 + た IJ 自分等ば 族に先覺 0 シ 6 P あ 12 る は 者を送つて人 カン りが選り 哲學あ

あ 淘 汰 n カジ 0 行 す カン る 和 30 的 或 民 0 る も神より選ばれ 12 B カン 0 < 至 は植 0 7. 我 7 なが は 物 0 今此處 甚だ 域 たのである。 に止まり、 少少 に生きて 0 で ある。 叉或るもの 否、我 2 る 人間 のは、 々一人々々は皆選ばれたのである。 として は動 實に 物 の域に 惠み深い神 生れた後 止 まり、 も、人生の 0) 選擇に洩れな 更に進 あ 50 んで人間 細 る階段に於て カン 胞 0 は 72 たる 無 めで 光 あ

個 0 國 R みに 家、 0 る。 個 あらず、 諸 人すでに然りとすれば、況んや國家民族に至つては、絶えず天地 K は 0 起 りて 民 印度亦然 族 國 は神 を攻 より 5 め、 選 民 獨逸の ば n は 12 起りて民を攻む みにあらず、 ものでなくて る」間 世皆皆然りでは 何 6 あ に其 らら。 0) 日 存在を失はずして今日 ないい 本 0 みに カン の大生命 あらず、 に導 朝鮮 42 力> 亦然 至 n て來 つた諸 た



舊信仰と新思想との調和

内ヶ崎作三郎

L 0 である。 ものと新しいものとは、 維新前後の歴史を讀む者の容易に理解する所であらう。 い思想との確執は、殊に一大變革の起るに際して、幾多の悲劇を生むもので 如何なる時代にも新舊の衝突は発れない。家庭には姑と娵との不和がある。一 然し乍らこの先入主は果して眞理であらうか。 必らず衝突しなければならぬと云ふやうな先入主が出來たのも尤もなこと 斯くの如き實例は一々枚擧に遑がな ある。 國民の舊 7 0 事 い思 は 想と新 我 から 舊 圆

2

微き者と云はれん、凡を之を行以且つ人に数ふる者は天國に於て大いなる者と云はるべし。 ず成就せん爲めなり。われ誠に汝等に告げん、天地の盡きざる中に律法の一點一 らに告げん、學者とバリサイの人の義よりも汝等の義しきこと勝れずば必らず天國に入ること能はじ」 て廢ることなし。この故に人もし誠の最と微き一つを壞り又その如く人に敎 山上の 垂訓に 「われ律法と預言者とを廢つる為めに來れりと意ふ勿れ、われ來りて之を廢つるに非 へなば、 書も遂げつくさずし 天國に於て最と 我なんぢ

と云ふ言葉がある。

て來 らとした。 0 るの 外に 逃れ る 無理ならぬ 0 然しながら彼等の であ よらとす る。 ことであ る。 またラフ ŀ 中に w カデ る ス も心ある人士は、 ŀ ィオ・ハ 1 0 隱遁 1 12 ン 3 B ダ 歐洲文明の短所を自覺して、 = 力 1 1 jν ~ カゴ ン 舊き詩歌と美術 3 1 0 田 園 生活 との にない 國として 頻に彼等の機械 斯 5 日 た 意 本 を慕 味 的文 カジ 含 2

我 K は 安朝 新 D Ď. 敎 ン 來內 0 J." 教會を見ようとはしない。 ンに行 名殘なる寺院佛閣 つて日本の 見世 を見ようとするの 物を見ようとはしない。 其と同じように、京都に行つては天主教の カゴ 人情 6 叉伊太利 あ る。 に行つ て羅 馬 會堂などよりも、 舊 教 0 殿堂を見

な **A**2 れども、 幽 な る 從 武 來 。哲理 云 士階 日 は 本 面 などには 級 20 0 に於て日本在來の文明の中に流れ 基 0 É 出 督 紙 教は で 0 興 やうなものであったので、 味の 儒 主として中 穀 ない 0) 治 人が 或 平 流 多少。 天下 以下 0 0 叉我 武 道にその 士によっ る精神に觸る、機會の少かつたことを自認せね 々のやうな平民階級の出 容易に外來の 教養 7 0 開 根 拓 柢 せられた。 信仰を受入れると云ふ を置 いた 自身者 長 これ 所 は、 50 は 0 思 0 基 想 7 督 便 Ŀ 36 者 利 で は多く は 佛 は 有 何 教 3 ばなら 0 0 は 持 神 剛 72 秘 健 ŏ

往 時 にし つて H は 本 來る て單なるお國自慢に過ぎな 一汁 12 72 0 る 菜の で 時 あ は 粗末な 鬼 6 角恶 斯 くし 7 い所ば のでも 7 起 カン V 0 日 り見えて [本食 てとが多い た愛國 カジ 食つ 不平 心 カゴ 不滿 て見たくなるやうなも 本當の愛國心で、 から 絶えないけれども、 國の内にば 0 0 日 カン 度外國 りる 本 0 長 る人の愛國 12 所 行 美 つて 點 見 カゴ 心 初 は往 めて

聞 カゴ 然るにこの真 狭いの 彼等 理が明かになった は 相 ひきねて自負 のは に陷るのである。 極 めて最近のことである。 印度数では教徒の海外に赴く者を破門し 交通不便の時代にあつては、人の見 日

でも亦長く鎖國の の祖 法を守 っつて ねた。

に一九〇七年米人ライトの試みた飛行機は今や殆んど完全になつた。百年の後には日 は蒸氣を利用して汽車汽船を走らしめ、十九世紀に於ては電氣を利用して電信電 文明 とは何ぞや。即ち、人間 の自然征服によりて出現する一個の狀態である。 十八世紀に於 話を通 本 ぜしし から め 7 て人間 ヌ ŋ 更 力

まで二三日で行けるやうになるかも知れない。 斯くて世界の距離は短縮せられ、 神が少くな 知識

以前のやうな偏狭な排他的精 明 獨逸 白 雪を仰ぐことも出來 無くんば、 百 聞 12 は 佛 見 即ち汽船と汽車 12 如 西 にも、 かず。 な 英吉利 書物だけの知 かつたであらう。 とが彼を遠くその郷土より運び來ることなかりせば彼の老詩人が富士の にも、 叉更に 識では不充分である。世界を一週して、支那にも、露西亞 った。 の交換 要は之に支配せられずして、之を支配すれば好いのである。 印 タゴー 非利加内地のブールーなど、云ム黑人にも、 は容易となった。 'n は機械 的文明を罵った。然しなが 此の結果人々の見聞は廣くなつて、 ら機械的文 自分 と同

じ人 間 カジ 同 じ感 情を持つて各その道に勵んでゐるのを見る時に、我々の心は廣くなり、 自分等だけが

選 民であ ふやうな考へは自然になくなつて了ふ。

近頃まで歐洲人は彼等の文明を以て唯一無上のものであるかの如く考へ、之を以て世界を指導しよ

1 カゴ ある。 S F 今此 は 占 處 V もの に在 ゝ變化した物に過ぎない る所の總ての物は前に存在してゐた或る物から出て來たのである。 ので あ る。 即ち一切の 新

ば 京 な S らタ 新 1 例 從つ なる生 へば ン ス I. 1 7 汉 命 佛 0 IV J° 1 哲 0 0 效 中 理 哲 iv よりも 學 0 12 如 哲學 は 現 何 は 古 に古くとも、 古くし m カゴ 3 た つず 近來非常に新しがられてゐる 7 カン らで 顧 工 み 13" ある ーン 其 る は 12 タ 足らな タ」(Vedanta)の **□*** 1 V w かと云 なる新 ふに かい なる人格を通 汎 市中 論 質を云ふと、 决 的世 してさらでは 一界觀を受繼 知 彼 ない。 識 0 哲學は 感情 いだ を通 4 何となれ 0 釋 6 迦よりも あ は ヴ すれ 尚古 工

洋 方 洋 者 0 0 慈愛 であ 的 12 12 から 德教 及 渾然 出 B ば を通 P す 15 玉 から、 亦 して教へられるから、「神は愛なり」と云ふことも好く分つて居るのでわ 修 V 0 此 V 養 6 から 如き人格の 0 充 0 類 は 遺 分に其の 6 にるれ な 傳 あ 3 的 る カン 背 少少 の意味を直 な 景 早 S 同 のは、一つは基督教の感化 カゴ 時 S 話 あ 17 例 カジ 日 る へば、神は愛なり」と云ふことも、 本 觀することが六ケしい。之に反して西洋 カ> S 5 0 で 基 ざとなると我 督者 あ カゴ 西 一洋の基督者に勝つてゐる點がある。 々の口 未だ深からず、 には、アー 我 々は外から形 メンしよりも 其の歴史的 人 は 子 背景 る。 供 式 南 的 0 無阿 それは卽ち東 我 に於て到 時 12 敎 カゴ 力> 彌 5 國 陀 られ 0 佛」の 底 基 母 西 親

7

陽 崇拜 私 は 0 何 其の 向 W 物には貴い歴史が ふことな 17 二階 家 しに、 カゴ あ る。 奥ゆ ある。 或 る かしく思 朝 太陽を拜するは何物をも拜せざるに勝つてゐる。 ふと見ると、其 つた 0 であ 0 る。 家 0 其 女中 0 女中 カゴ 雨 0 戶 心 を開 はど け んなに 'n 後 で朝 幼 稚 日 0 但し之を指導し あ 拜 2 7 6 2 太

かと云 ねる。 今日 我 為 ふに、 々は實に不可 め 12 决 顧光 してさらではない。 々として向ふ所を知らないと云ふ有様である。 思議な時代に遭遇してゐる。東西古今の文明が渦を卷いて我々の周圍に流れて 我々の個性は一切を綜合して、新なる創造をなすの力を持つて 然らば我々は之が為めに悪 くなる

修な、 た。 カジ るので これ 22 たある。 質はさうでは 來基督教の神觀には超絕的機械的分子があつて、 已に神を見たる者では りに理論に偏して、內的經驗に依ることが少か あ 而も無用な衝突の痕跡を殘してゐるのであ 故に我々の な 神觀 V 0 であ は決して論 ないか。 る。 言ふべ 理的 横井小楠の詩に所謂、神智靈覺涌如泉、不用作爲附自然」とはこ からざる生命が自分の中に流れてゐることを自覺したる者、 IE 確を求めない。 る。 瞑想的、 我々の宗教は形式にあらずして、寧ろ其の内容 つた。それだ 斯く云 神秘 へば徐りにぼんやりするやらである 的、 から基督教の 内在的方面が 歴史には、 稍 々足らなか 多くの悲 0

6

之を刺り n とは である。 戟 Z へ我 し指 導して進まうとする時に、我々の精神は大きくなり、 々は決して排他的ではない。幼稚なる迷信にも甚だ低い程度の真 あわてず騒がず悠々として天分を 理のあることを思って、

體古 出來るのである。

てある。有名な中世紀の學者の常套語に ex mihilo mihil fit(無よりは何物も生ずることなし)と云よの いとは何であるか、新しいとは何であるか。 傳道書にも「日の下に新しきものはなし」と云っ

要は は陽明 な 學 る人が陽明學を學んで立派な人格を持つてゐるならば、我々は必らずしも彼を改宗せしめる必 12 、々に與 して た 10 實 彼 カゴ をして更に へた使命を全らするに 基 督教であればよいではないか。我々の事業は決して單なる宗派 人道 0) 72 めに 十分 に活動をするやらに刺戟してやればよい の擴張では ので あ ない。

Ш

た

ッ天

0)

我

んが 我 なり」とあ 象は相合して整然たる體系を造り、宇宙全體があだかも一個の有機體のやうなものであるからである。 古來聖人君子起つて大義を天下に唱 然らば萬 々の運命 實際我々一個人の生命を支へるには太陽系全體、否、宇宙全體の協力を要する。何となれば森羅萬 爲 めで るの あ 有 は る は 宇宙全體 は 成功はもたらされたのである。基督は殺された、而も使徒等は之より霊威をえて道 何 羅馬 故 これであ に人間を生育して 書第八章に所謂 に掛つてゐる。これを思へば、古人の行つた占星術にも相當の る。つ 神の子 ねる 「それ たち」とは何ぞ、真の へ、而も多くは失敗の最期を遂げた。然 カン 造られし者の深 即ち人間をして天 人間 き望 では神 地 である、 の大生 の子たちの 立派 一命と協 な し乍ら彼等の 力し る人格者 顯 n 理由 h 7 ことを俟てる 0 カゴ 貴き失敗 あ あ め

子は無いとは云はない。神には次男あり、三男あり、否、更に千男、萬男ありと云ふことも出 「そは神は預め知りたまふ所の者を其の子の狀に效はせんと預め之を定む、此は其の子を多くの兄弟 に嫡子たらしめんが爲めなり」。保羅は基督を以て神の嫡子とした、けれども決して基督以 一來るの 外神の

傳へた。使徒等は迫害せられた、而も羅馬教會の礎は彼等が形骸の上に建てられたのでは

よりして今日の

我 て高 やらに、 々は決して之を一笑に附することは出來ない。地質學や人類學の大家であつたフン 日 一筒なる宗教的信念とするのが我等の責任であらう。 本 やうな複雑な國には、 我 々の 祖先は初めは自然を愛せずして、之を怖れたのであつた。彼等の間より生れた宗教は、 此の外にも幾多舊信仰の形骸、古い迷信の形骸に接する。しかし乍ら ボル トも云うた

たからと云つて、國民の宗教的形式を破壞する必要はあるまい。否、寧ろ祖先が天地の大生命 数も、其の本質に於て我々の信仰と全然違つたものではないと云ふことが分る。 より偉大なる物に對する依賴心の滿足であつた。 やうに見來れば、如何なる風俗習慣にも深い意味が含まれてゐることが分る。 然らば基督教 如何なる幼稚な宗 に入つ と交通

したる記念として保存すべきではあるまいか。

から て將來に生くることが大切である。 成 の氣 斯 過 去を振返つて見ると云ふことは、確かに必要である。溫故知新といふ語もあるが、過去を考 力 から 盛んであつて、 其は妥協だと云ふ人が有るかも知れないが實はさうではない。一體若い時には破壞創 古人の恩を感ずることが少いものである。このことは必ずしも悪くはな

て、米國邊 今し 一種の 初夏の夕べ、 19の殖民地にでも見るやうなバタ臭い殺風景な建築などを見せられるは餘り愉快のことで 詩趣を感じない者は、日本人としては不完全と云はねば 梅 一雨の晴間に新緑滴る杜の梢に、朱椽古めやし い五重 ならぬ。 塔が 叉 見える。此 个西洋風" だなど、云 の景 色に 對

ない。

は精 關する論文を書いて博士になった人の為に祝賀の式があった。或る醫師は説明して、 先日千葉の醫學專門學校に講演に行つた時、偶然にも同校出身者の一人で、今度白血球の殺菌力に 神力の てねる時 充滿してゐる時に殊に十分の效を成すことが出來るのであつて、 にはその 力が衰ふるのである、 と云つた。科學と宗教とは調和しつ、 信仰が失はれ、 あるの 白血 である 球の殺菌力 元氣 カゴ 沮

「若き日本」に生れ に雄大なる人生觀を造り得ることを感謝しなければならぬ。 我 今や長き夏の休 々は實に基 一督教 は來らんとしてゐる。然し乍らこれ決して單なる休止であつては たる者の の基礎に立つて、 みに與 へられたる光榮であるからであ 神道、 儒教、 佛教より更に最近の科學哲學を併せ吞 何となればこれ る、 特權 であるか は二十 らで ならない。 世 紀 0 る。 今日; んで、 中 此 世 此 處

感激して、 暗黑時代が質は 努めて身心を健全にし、 新 民族新文明の黎明であつた如くに、諸君が今諸君の上に下されたる特權と光榮 剛健の氣風を養ひ、以て來るべき新學期よりは、 更に一層研學の

道にいそしまれんことを望む。

六、二五、自由教會に於ける說教筆記

とに

である

神の子にあらずして何ぞ。我等が基督と共に、これらの人々を手本とすることが何故惡いか。 ではな 諸君を育てた兩親、諸君を敵へた學校の先生、諸君の監督者となり、保證人となつて諸君 諸 々の V 力> c 使徒、諸々の聖徒、さては釋迦、孔子、ソクラテース、カント、陽明、尊徳、これらは皆神の子 保羅又曰く『凡を神の靈に導かるゝ者は是すなはち神の子なり」と。一切の志士仁人は、 幸ひを

祈る先輩、これらは皆諸君に取つて神の子ではないか、天の使ではないか。 る。此の上何を苦しんでか更に「神の子」、「天の使」の大空より下りて來るのを待たうだ。 彼等は諸 語君に神 の惠みを傳

出來る。 びることが無 か が兄 7 基 我 督は往 尋ねて來た時、「我が母はこれ何人だ、我が兄弟はこれ何人だや、神の志を行ふもの、これ我が母、 督 カゴ 1は最も大膽に人類を信用した。彼が税吏の家に泊り、いやしき婦人と食を共にし、母親が心配 弟、 母 眞理 何ぞ多さ、 わ 々にして猛烈な言葉を出して相手を叱り飛ばすことがある。しかし猶太人のやうな頑固 カゴ のための大衝突は敢て辭せないが、小問題のために無意味の衝突は避けなければならぬ。 いからである。斯様 姉妹なり」と云つたのは何たる卓見であらう。 わが兄弟、わが姉妹何ぞ多さ。神の志を行はんとする善人は今の世にも尚全く亡 に考へると云ふと、我々の心は廣くなり、無用の衝突を避くることが な

して、之と同じやうな激烈な攻撃をしようとするのは考物である。

に對してこそ其が殊に必要であつたのであるまいか。日本人のやらな酒々落々たる人間を相手に

其 月 を喰ふの 悉く之を捨て、 あ る 0 四 子を犠 月の であ 候に生れたる子を生育せしむるは親の生命を縮むといふ迷信 牲 る。 或は殺すといふことである。 然る時 て迄 3 親 は 親 の生存を完うせんとする人間 カゴ 强壯となり、 且 又ニュー、サウ つ其の 後の安産を期せんが の生存 ス、ウ 慾を如實 卫 jν ス から、 に示 12 爲 あ この する めので りて のに 兩月に生れ あ は ると 最 あらずして何 初 の子 聞 は た 是れ んる子は 親 が之 皆

容 之をアフリカ、 界に於ける名聲 風 習は 12 至 あ 9 ては 次衰 謂 依 つて曰く、 濠洲 るであらう。 の失墜せんことを関れ、 然として變らないのである。 0) 土人と比較して其處に 斯る風習は文明 然しそは單 に形 0 滔々として避姓、 進 見よ、 一歩と共 何等の差別 式 0 轉 今や歐米の貴婦 12 換 其 12 の跡 カゴ 過 墮胎を行 あるであらう É を斷 ¥2 ことを知られ つで つてゐるといふことでは 人は己 あらら、 カン か 容色 ばならぬ。 ٤ 0) 然り 衰 た 其 斯 為 0 る 實質 な 露 め 12 骨 V なる カ> 社 內

太 春 傾 風 儀 國 閤 風 0 なく 秋 前 0 0 豪 美 雨 K 公女小 人間 放 粒 は を以 R めし 町 0 F と自然との 辛 つて 堪 をして 吉 もの 9 してなは 作 36 も是れ 物 なく 「花の 競 B. 倒 争 人間 であ n 色はうつりにけりない 露と置き露ときえぬ 夜の 大船 る。 0 洪 肉 そは 體 水 E に加 12 舶 流さる 第 J 山 し大自然 なす怒濤 第二に > る我身か 0 たづら であ に遭 の答では Z) る。 12 増して激 な浪 我身 は 實 10 花 世 12 瞬 あ 0 によ 慘澹 る 間 烈なるも ことは す 12 して る 0 V なが カ> 。 極 夢の みと云 沈沒を発れ 0 6 めせ 世 あ 0 しまにし は る。 中 和 しと嘆 大厦 は な なら と明 ぜし 高 農 AJ 樓 つを 夫 76 豐 カゴ 烈

是以觀之、 人間は到底「自然」 には降 服せねばならない。 弦に於てか吾人は自然の原則を發見し、



最大なる生活

る生活

井

柳

太

낈

三種 凡そ人間 0 競爭 でとは何 は、 自覺せる者と否とを問はず、 カ> 人間 と動物との競争 一なり、 恐らく三種の競爭より発れざるものである。然らば其 人間と人間との競爭二なり、而して人間と自然と

の競爭

は第三であ

虐見るに勝えずとなすけれども夫子自身は何うであらうか。一 T る年若さ貴婦 つた料理人が鮮血淋漓たる魚肉を料理してゐるではな である ツ ク スレー カン 人の は其の著 げにや吾人の食膳に上る魚肉 鮮 血精 肉 「進化と倫理」に述べて曰く、 に舌皷を鳴らすを見るであらう。 は生存が V 競爭に敗れた 世人は動物の互に血を啜り カシ 是れ人間 若しそれ食堂を 度厨房に至 る残骸 と動 元れば其 物 に外なら 一視ん との 生 カ> 處には鋭 な 存 肉 競爭 其 を啖ふを見て惨 處 き庖丁 17 には あら 盛装せ を持

0 親 如きは骨肉相食み兄弟其の血を啜るを少しも意に介さぬと言はれ、又マダ カジ 其 0 人間· 子を を殺し子 と人間 か との競爭 親 を刺すが はい 人間 如き惨劇 上動 は往 物とのそれ 日々之れ 0 を野蠻人の 如く爾く露骨ではな 間 に見るの カス である。 いが。なは生存 カル 島の土人は、 即ち濠洲 の為 の土人 には

AJ. 12 H 細 才 胞 ツ 最 る收監 是れ最も多く最も大に活くるの道である。 でも長 を以て 滿されねばならね。肉體的にも 精神的にも斷えざる 新陳代謝を爲すことを 忘れてはなら チ 工 人は正に五萬七千餘人であつた。 は言った、 く活くべきかを知らざるの徒か、然らざれば知つても之を斷行するの勇なき徒輩であ 鰤えず自己の内にありて死せんとするものを排せよと。然り吾人は常に若 彼等は單に活きんことをのみ希ひ、其の如何にして最も大 々しき

常に は 人間 る。 た 3 常に、 ものが Ŏ 進 變化は生の根元である。變化なく從つて生なき物質 而して常に昨日よりはより大なる、より美なる我を發見するに努めねばならぬ。 步 カゴ **鰤えず變化せねばならぬ。夕の心は夕の心、今朝の心は今朝の心、** シせねば る。 ある、 あ 自己の 5 ブラウ 實に吾人は如斯活きねばならぬ、最も大なる變化をする人は最も大に活くるの人であ 變說改論 ならぬ 向 上 _ カゴ ングの詩に、吾人は變化より變化す、雲の翼は息えたることなしとの意を述べ あ 變化 を大膽に告白、發表し得るの勇氣を缺ける政治家の餘 る。 社 せねばならぬ。これ真 會は 日 に進み 月に發達する、 面 目なる政治家 には歴史なし、物質 隨つてこの活ける社 に變説改論 の人間と異なる所以で 只今の心は只今の心。 りに多さを遺憾 0 あ 會に必要なる意見も る 所以であ る。予 とする つある。 其處

Wilder Wilder

と共にマ 方りて改悔 然らば吾人は如何にして V ス するを常とす。 フ 工 w トに兩親を訪ねての歸途、エ これ 日 一々に向 眞 0 上し得 生活に還 べきか。 りしも n フル 眞 0 の生活 6 ŀ あ る。 の門に近く、 に還ることが緊要で ル 1 テル + 7 v 九 歲 丰 3 0 時、 あ ス る。 は落雷のた 親 人 友 7 めに小 するに シ ス

法科 此 の法則 大學 は に從ひ是と妥協せんとするもの 社 會組 織 0) 原則を發見せむが た である。 め、 理 即ち醫科大學は人體の生理的原則を究めむ 科 大學は自然科 學の原理を明 かにせむが 72 がため、 めに設け

生さむ 心 る祖 7 も文明 あ 抑 先の る 4 工は掃除 人も野 よれ 0 とするも 靈をはさむ憂があるからである。 間 0 ば 0 あ 蠻 有 しない、 人も 獨逸の百姓は室の扉を開閉するに決して勢ひ强くはせぬといふことで 0 (0) であつて、是れ未來に對する研究の起る所以である。 る慾望の内、 其の間些の 死者 の靈を掃き出すを懼 差別を見ない。人間は將に死せんとする時、 生存慾はど熾烈なるものはない。富める者も貧しき者も、賢者も愚者 叉阿 弗 る > か 利 加 た コンゴー めで あ 0 土人 は、 ブッケの著 死後滿 否死するの後までもなは 一ヶ年間 「現代 あ る。 獨逸人 决 室 7 內 生 0 12 迷 前 あ

0 必ず邪道に陷らざるを得な カゴ なき生 それ 病室 食慾 人間 命 順 を説 悉思 0 海 生存慾は く基 切 督 教 0 煩惱 に趨 如斯强烈である。 ८० らし より解脱 所以で 於茲乎生活の方法を講究せねばならぬ せる寂 あ 故 る。 滅 に之を無視 雖然徒らに慾望に驅られ 爲樂の涅槃を高 する道徳 潮する佛 宗教 教 のである。 唯是れ活さんてとをの は決して行はれない。 に嫌らずして、 未來 み冀 是れ吾人 永 劫限 6

_

勇氣に乏しき生活はエ 吾人 は りて之を斷 如 何にして最も大なる、最も意義ある生活をなすべきか。予は之に答ふるに豐かなる知識と 行する ンヂ 0 勇氣 ンを備へざる汽船と異らない。 の涵養とを以てしたい。 知識 昨年四月末日の調によれば全國 なき生活は コンパスを飲け 3 の監獄に於 船 12 等 しく



敬神の意義

意義

並

良

之は吾・ 敬 如何 に於て、 見會と稱 神とは 每 年 なるもの 人の 春 如何、 此 L になると各地か 0 T 大に注目 訓 力> 2 と云ふ問に對して之に る。 示を見た 神とは如何な 今年 す可き事 < 此 ら地方官が集つて會を開く。 ことは、 0 會 6 るもの あ 0 假令· る。 席 F 6 夫が一 從前 滿 力》 12 足の て、 る。 此 は宗教などは全く 0 場の演説にせよ、大に多とすべきである。 巴 觀念が 答を 木 內 與 務 確立せざる以 大臣 如何 へ得る府 は 15 問題とせられ る事を議す 一敬 縣 知 肺 事 上は折角の 0 念を涵 が果して るの なかった、 養せよしい訓示せられ カン 幾 訓 世人は之を目 人 苏 て、 力) 76 あ 無意 然るに斯 併 る。 味 し敬 で る席上 して花 あ 8 神とは 17

嫌 疑 を出 7 居 恶 人處 神 153 に就 0) た で i) 情 知 を以 事 府 V あ 7 る。 連 カジ 縣 語 7 中 知 12 事 迎 學 つて見よう。 へて居 は多 口 生 敬 12 0 神 うち 神 と云 る。 0 は 念を養 何 帝 それ ふも、 程 大 真 出 は真に神を了解 身 面 と云 目 般宗教 27 あ L 此 訓 0 を解 講 帝 示 義 國 カゴ 3 を 大 し居らざるに原因して居るのである。 果 學 V2 聞 者 L S 12 T は T は 何 居 僅 忽ち 程の る カン に筧 カ> 此 效 それ 0 果 博 * 士 神 齎 などが は す 問 是云 6 題 あ 有 で 太言 55 あ 2 る。 葉 カン 古神 是於乎聊 12 此 對 吾 0 人 如 道 7 學校 か此 大 說 12

ならぬ らく、 今面 法律 死 は 0 くところであ 學は末であ 永 あたり莫逆の友を失つたルーテル 遠 其 のも る。 る、 0 であ 如 かず本を學ばんにはと。 る。 り得べき改悔 從來 吾 いが學 は、 び であると思ふ。 始めて人間の「死」なる問題に接した。 つゝありし法律 斯くして彼は宗教界の人となった。 學も軈ては 永遠の支配を受け 斯くて てれ Ŕ 彼 力 ば

葉で 神に ライ チ あ w よりて助けられ、 工 る。 0 __ 1 說 單 IJ に音樂の ング甞て人に音樂の 神と みでは 共に 予は ない。 あるを自覺せる 秘訣を問はれて「予は神に對つて歌ふ」と答 あ 偉 宗教は人をして真 大なる點 時最 る。 り 0 であ 生 活に導くも る。 而 して最も大な ので あ る。 ^ る變化 た。 人 は 誠 柿 12 を遂げ、 0 子 味 であ 太 可

なる生活

をなす。

てれ

基

督

教

0

0

あ

心措 は 0) 0 足するを知 ス 0 基 み 香料を以て 夫婦 き女 であ 督 羅 きなく 門 敎 神 敎 0 は 煩 一物なくも常に新しき心を與へて人を真の生活にらません。何卒滿足し得る心を下さいと。之を聞 0) 0 しも 問 すべ 經 これ 彼 も拭ふべくもなかつた。之を拭ひ得べきものに唯一彼等に新しき心を與懊惱は譬ふるにものなきほどであつた。彼等の身中に必み込みし血の香 典 カゴ しと。 枕 12 基督教 頭 面 白 12 彼 來 6 4 0 6 あ 男答 告げ 0) る 比 て日 喻 へて曰く、 カゴ < あ る。 妾は 拙者奴は 人 汝 の の熱心なる信 男 元來誠 あ 5 に引き戻す、 彼は熱烈真摯なる信者であつた。 V に嗇な男に御座 た女神は忽ち 仰に賞で汝の ダンキャン王 其姿 欲するも ります、何物を得て 一を消 0 を殺したマ を取 72 人 は ので る宗 全アラ らすべし 或夜 教 E* も満 クーミ ある る。 t

生活を以て最も幸福なりと信じて疑はざるものである。 返 して謂ふ、人は基 一督教によりて新しさ心を與へられ限 りなき生命を與 へられる。 予は基督教徒

0

神を め 嵐 る。 1 0) 吾 感 凄 6 12º 却 E じく 0 7 0) T 0 人 明 沛 7 居 吹 白 0 は つた。 ζ 吾 山 な 觀 念は 21 に逢らて てとで、 R 0) は 心界 然 幽 製 絶えす變じつゝある。 る 10 12 は 絶えず進 偉 其 知 池 識 中 沼 S 砂 カジ 12 21 段 嵐 は 化 0) 主じ ī を R 0 て來 認 12 神 ありと考 T 進 カゴ た るに T 居ると思 千年二千 12 0 連 0 至 5 n あ 2 た。 て、 つて る。 年前 た。 只だ 山 怒濤 の人間 途 海 池 12 昔 川 拜 0 0 して 力の 人の に於けるも矢張 疾風 大 信 居つた。 仰 なるを 迅雷 は 全 見て 一く幼 12 卽 同じか 神を 5 は 稚 天 怖 變 海 で 地 0 るってとを止 O) あ た 異 市市 0 事 た カゴ 際 は 0 あ して 歷 で 史 あ

蛇 果 17 0) 惹 * 6 起 せ 犬 0) 祭 程 者宗 0) あ 3 くそ つたり n め は 甚 た 敎 だ P 問 家 と云つて 覺 らで n 題 K 狐を は、 束 27 21 15 付 あ は 祭つた 是れ る 4 Ti. V 到る 事 幾 + と思 斯 大 注 多 5 處 なる問 る 繩 色 12 头。 爭 を K 張 稻 何 から な 荷 多 カジ 題 知 る 2 事 て、 0 何 6 問 < 無ら P あ 有 題 カゴ 6 る 小 る 神 カジ 學 故 を拜 所 理 起 は 生 0 12 0 由 を 今度 た わ 來 40 た。 我 お S カン と云 5 宮 0) め 神 カゴ 國 道 V2 0) 如 h 3 3 E 市市 0 前 6 樣 訓 ことを ^ は、 神 連 た。 カジ 社 示 澤 n カゴ 小 12 云つ 酸せ は て行 佛 學 山 隨 あ 敘 生 7 る。 5 分 0 を 徒 居 變 7 n お宮 は 故 ななの 之に る。 拜 た 22 事 ts 0) 俗 前 カゴ l 反 吾 該 多 抗 12 め 72 連 る V. H 0 は T n 伊 狸 を 思 色 7 勢屋、 8 敬 行 2 R 神 カゴ な 2 て、 0 是云 72 其 效 參 荷 6 h カゴ

儘 連 7 n 12 2 如 斯 稻 7 る 荷 は 神 大明 2 幼 社 n 21 S 神 12 時 對 を拜さしめんとして居る。 順 L 12 應 7 は 2 弘 L 尚 7 n 敬 導 カジ 虔 唯 V 幼 0) 7 行 稚 念 カゴ カン な ね る 起 る は 0) な 2 76 故に何の效も 5 0) 7 6 82 。然 n あ ば之を良 る るに カシ 現 無 人 今 17 く導 S 0 のであ は 狀 何 態 人に 必 は る。 要 如 る宗 から 何 それ あ る。 中 教 故 學 110 唯 生 日 カジ 27 12 だ漫然宗教 あ 月 る 向 2 12 7 先 知 天 To 識 的 などを教 鋦 カゴ 進 は 21 備 T 0) 12 0

10 想も間 なり 體も、 あ る。 と心得 吾人 人 斷 春 0) 汗とな なく 神 カゴ 0 て威謝 幼少の 暖 17 變つて行 b 關 V する考 垢となりて 日 に咽 郊外 折には氏神 ζ. んで居つた。長ずるに及んでは、「神樣は斯るお宮の中に 12 は 出 幼 常 變つて行 づれ たので 12 V ・吾等が一 連れ ば、 變 りつ られ 小 < 何 > る。 てとは、 川 ある。 てお前の神様は之なりと教へられた。 時 0) 邊 0 5 間 獪 12 而 田 か大きくなったやうに、不知 は蛇に於けるが して變化 0 畊 等にて折 は豈に獨り神のみでない。 如 ない くである。 蛇の 拔け殻を見 それ 不識 又それと同 居らる の間に かが 萬 るが、 自 物皆ない > 身 0 0) 進步して行 じやらに で 真 吾人の身 然りで あ 0 らら 神 樣

カ> し

と云ム疑問を挿

U

12

至つ

あ

偉人 啪 兎 知 物 れることを知 る 0 0 22 は 12 以 靈な た。 絕 角 前 0) 歪 斯 は 2 對 心 小學校 720 而し 0) 0) る り」と書い 事 底 神 傳 7 つた。 柄 12 で教 は、 「酒 慈 カジ 記 多少 を 愛 繙 0 Ł 7 神 煙草 神、 たものに 頭 あ を信ずるの V T る。 17 道 入 は 養生 其れ つて H 德 連言 蓮 0 念の强烈な土臺が有つたことを知り、 刺 根 12 を 0) 編と云 害 教 偉大を知 本 戟 を與 なりとの あ ^ られ 6 Z T など 8 5 7 漬 0) 神 信念を得 カゴ オ 0) カジ V 1 次 世 あ てくれた。 界を つた。 0) ガ て來 句を讀 ス チ 創 それ ン、 た。 9 其 T 12 N 卽 後 17 爲 ーテ ち 說 至 12 は 教 9 太 色々の ルを知 之によりて多くの人は動かさ を聞 T 陽 神 は、 は天 36 30 理 月 るに 甚 B 地 窟 哲學 だ 星 0) を附 滑 首 至 3 書を繙 稽を感 して 宰 存 つては、 17 在 神 す して を解釋 じた る くに至 之等 人 0 かい 理 は 萬 0 す h 18

清 あ 時 て靈と真を以て真善 る。 い勇まし 全心全力を擧げて努力して居 即ち神を拜する時である。 い大人格 カジ 真 築 美に カン n 7 對 行く 吾 ロタが 0 進 る 時 6 TS 時 吾 あ 12 る。 々の勤を真に自覺して居る時 21 神 を見 斬 0) 斯 る境 意 7 思を自己の意思と爲すてとを得、 居 地 るの に於ては吾れ一人行くに非ず、 であ る 靈 は、 一と真 矢張 に満 り神 ちて 其 居 を見て居 神我 八處に力 か故 n と共に 强 る時で 而

行

くなりとの

自覺も

起

るの

6

あ

る。

会込 する 甚 中 本 拂 眞 かっ だし にせん に真 弘 はんとし 敬虔の 小 自 彷徨 まば、 學生時代の宗教心を、 いの 多くの人は迷 實 面 目 から 直 を 爲 今 うゝ 念は全く失せて、 である。 居 る多 Ė 缺 めである。 0 敬 0 あ いて居るの 數 如 る 神 极、 吾々は此 つて居る。此の時に際し漠然と「敬神」の念を養へなどと云ふに至つて 0) の政 0) 人を導 念によりて解 力强 黨 J 0 中學、 謂れ かんとして、 惡 人生に 處に世人の迷妄を開 少宗 傾 教 向 無きで 大學生に迄、 決せら 心 對する 3 カジ 其 掃 な 吾々が警鐘を亂打する所以のものは、 し得 根 るゝの 根 V 柢 0) 本 を爲 6 0 るのでわららが であ 問 同 いて行くの任務 め せるが る。 じやうに 題を沒却 る。 世 るに は 即ち貴重なる人生の旅 起 强 益 L 世 因 7 R ひんとする 人はな カゴ 輕 して居る。 居 佻浮 るの ある。 カン 薄 6 今日 くに 12 あ 0 若 流 時 0 て、 し敬 0) 6 n 覺め て、 狀 あ 真に敬神の意義を明 路に當つて 闸 凡て る。 態 な 倫 は 0) 念を 故 Vo 理 0) 道 事 前 12 人間 政 德 業 は 述 愚 Ħ. せ 治 は 敎 13 里霧 る W 0) 12 地 對 12 根 如 吹 を 對 亦

止つてしまふ。 ては何等の へても、人は之に耳を傾けないやらになる。 宗教心を導くにも順序が 導もない 斯 る時に當つて唯だ敬神の念を養へと教へた所で、 から大多數の人は、 ある。 神の 觀念も確定せずして居ては、 生れ乍らの宗教心は全く失せてしまつて、稲荷を拜 知識は益々學校に居つて進んで行くに對し、宗教に付い とても物にはならない。 何の效も奏せぬことは明であ する位に

大に進 とは すべきなり」と。 を汝等は知らず我等の拜する者を我等は知る。』と又 唯 色々とその よ 神 是れ質に時勢に との 0) 山のみに非ず、亦エルサレム而已にも非ずして、汝等父を拜す可ら時來らん、 觀念については基督教にも色々な説が有る。然し三位一體などゝは昔の事で、 んだものが 臘 J.C. その宗教の末路になって居るのが分る。 昔より時 神 ス 0 R を詩 教訓 已に此の数が傳はつて二千年の今日、 ある。 的に解したり、或は之を象徴的に説明したりして、何とか之を助けようとしたこ は、 々見る事でゐる。我國に於ても神道の新解釋者が矢張り同じやらなことをするの 二千年以上遅れて居る譯である。 是れ實に四 3 ハネ傳四章二十一節以下に云つてある『イエ 方に傳へねばならぬ事である。多神教の宗教が壊れるに當つては 『神は靈なれば拜する者も亦靈と真をもて之を拜 神は靈なれば之を拜する者も靈と真を以て拜せ 神の觀念につき多くの ス日けるは、婦よ我を信 人が迷つて居るとすれ 汝等の拜する者 吾等の には

4 静に坐つて居る時でも、靈と真を以て神を拜するのである。良き書物を繙く時、 々の信仰は遂に真を以て神を拜する事に歸着する。 基督教は斯る教を有し て居る。 哀れな人を憐む 家に居 る 時で

宜 務 睛 意 臚 る偉 江 n 難 後錄 義 しく カゴ U) n あ वि 果され、重きを負うて遠き道を行くに 曉 5 力である。自然天然は此等の條理によつて支配されて居る。 南 12 失敗 時 n 淚 6 有 に、一人の 歩む精進に於て、 に隨 して 旅 に霑すは、 に あり、 大 12 處 あるは、 12 居 15 世を渡 雨 る。 वे 時 るの 17 不平あり落膽あり、 J. 世 るは自然界の 隨 B 草木 る、 上の 月 道 S 相 1 はじめ 行路 常であ 鳥獸蛟龍魚鼈を生養する所以であり、 卽 相 推 緩急 ち して明生 世 0) て人生行路 如く る。 現象であ を渉 す 1 H 前途程 じ、 し、 るの 然 50 n 5 ども 道 速 類するの 寒暑相推 0 真 なら 途 遠くして思を な 300 に險 天 諦 此 理の んと欲して災を取 を見出す 等 こと言った。春夏秋冬、三百六十五 夷 6 6) して歳 循 あ 荆 あ 5 る。 環 棘 である。 0 雁 成るのである。 8 披 5 > 6 山 日 あ の葛藤 0) 人の 暮 處 晴 12 る。 處世 に随 山には る勿れ、 雲 雨 世 を 12 あ 12 50 絕 馳 N 0) 處す 喬嶽 秘 時 時に寒く、 せ、 ち、 猶 畢 機 に隨 るに 豫以 意 後 あ カゴ ある。 つて り丘 苦 會 避 Y 期遙 0 3 B 亦 、るを得 天 時 は 7 樂相 []安 72 佐藤 則 あ に暑く、 期 12 各のそれ して 0 9 12 贮 相 後 練 15 齋は言]1] 纓を鴻 緩急 い。困 4 只だ 時に 12 不 す

23

至 は 誠 更 古 ることが出來る。 卽 12 5 0 5 信 n 見 を以 た を る 步 つた。 つて 處 深 世 法 人に臨 < 心を正しらして七情胸に静謐なれば、 は 即ち心を正しらして潔々淨々たれば、 考 へて 我 n むことが 見る時 を欺 カ> 處世 は、 ない。 處 0 世 第 洵 一要義である。「人にして信なければ其の 法 に彼等賢哲 0) 極意は實に の思考した通りである。 忿懥する所なく、 正心誠意と云 白蓮の 泥中に咲 ム點に存することを知 V 恐懼する所 72 而して後 如 く、 可 四 なく、 13 方 人たる吾々 るを 0) 凊 好樂 濁 知ら を



處世の道徳

條 忠 衞

易は太 人性 君子 故 協 0 n 0 あ 心 に霜露旣に 同を全うする所以 も泣き、我れ の志を以 略 カジ ある。 行 0 あ 彼れ る。 路 卷 0 頭 その 人情 降 0) 詩 0 に、一主 の笑 哀し n に、「行 て志とする。 を以 は 根 君 で U 上 本 將 子これ つて には **ME** 時 時 路 0 に我 には 難 So 法 處 何 は 務めて を履 n 處世 世の 人情はその 人も率 人も笑ふ。喜怒哀樂これを人と同 水に 獨り樂しみ、 要訣 んで 0) 英雄の 由 要は あ らず と見 必ず しなけれ 至純 蓋 山に 悽 心 12 L 我 此 0 馆 な天 を攬る。」と書 0 n ばならぬ普遍 あ 0) は らず、 真の形 萬古 大 心 0) 樂し なる真 あ 50 12 唯 理 V 於て萬 時 だ人 理 春 力> に彼れ獨 れて 聖 6 雨 0) あ 旣 じらして、始 法則を藏 情 R に濕 0 居 物の靈となり、 反 同 た。 覆 る。 心 り哀しむ 0) 12 へば君子これを履んで必ず怵惕 して居 英雄 間 存 12 すること明 めて社 0 あ かが 6 る。 心 相交通して感傷する。 如きは を以つて心と爲し、 しと歌 會 人の カン 0) 共 泣 10 0 社會 た。 存 あ < を見 時 0 21 は 情 自 る は 居 22

了路 9 は 同 社 德 11 不 胞を害しては社會は存立しな 會 平 家 0) 不 生 康 は 滿 活 な 42 がて 人の ことも 生は あら 複 雜 50 た 重 義 きを負うて遠き道 H 務 を負 n い。互に天下の慶福を推譲分配して生きて行くところに、人生の ども うて、 我 n 人 人の 生五 をゆ 自 + < 由 年 カゴ を 0 如 求 旅 し。」と言つた。 め、 程 17 己 Ŀ *1 る。 その 個 0) 如 滿 間 何 足 21 12 を得 は 3 不 其 自 0 h カジ 由 通 為 15 りで、 め 吾 義 近 12

は更に、「人生意氣に感じ、

功名誰か復た論ぜん。」と歌つた。人生意氣に感ずるが人情であ

そこに

猿意 の肺 方寸 呼 欺 13 から る 如 應する の中 が爲めであ 如く、 悲 馬 肝 にし 罪を逃 を見るが如く炳かである。 んで之れ 至 12 面 てい 流光たく 誠 影 鬼 避す 神 なく、 人 U) る。 を泣 を撃 神 欲 る の一 火 てば哀 餘聲なく、 は何 所 かし 渾 こゝに人情 邊で 融 0 者と雖もこれを撲滅することが出來ない。その敏速なること、 め、 す な る い者 あ し。」とあ 神人相感ずる。星辰 何 る。 Z で 神明その 0 その 機微が 0) あ 六塵に馳聘して る る。 も有して居ない。 偽善の醜行と云 處世 口 儘である。 あり、 12 法 敎 天眞 も亦た然りである。 法を説さ、 停息 の火落ちて原を燎き、 これ至誠 至 程伊川 CI するを知 情 0 賣名 流 筆に道義を談 露 は天地公共底の の言に、「夫 らな の成 カゴ あ 至誠を以つて人を撃てば、 Vo 跡と云ひ、 る。 天を欺る れ鐘 赫々烈々として遷延 じても、 理であつて、 は怒つて之れを撃てば武 虚勢の狀態と云ひ、心 2 聊 人を欺 カ> 多 急電 天 萬 地 ~ 廻轉 物 0) 彼 自 如 する れかが らを 胸襟 明と < 疾

野 あ 孔子は、 る箭 其 る。 蓋し 0 とあ 道 天下性 華 に由 13 は 徳は孤ならず必ず鄰あり。」と言ひ、老子は「天道親なし、 る。 H 心 しとある。 れば功名逃ることを得べからず、 0 外の n 法古經 實で ば實すなはち史 B あ 0) なく、 る。 には、「道に近 いづれ 善を行 人の 4 T. 至誠にして始めて名質の伴ふことを道破した言である。 性 へば名これ しとある。 一は善 けば名顯 6 あ 實語 に從 る。 は 猶は表と影との如く、呼と響の如し。」と言つて居 ること高 敎 ふの 故 に善 に、「山高 6 山の あ を以て る。 雪の きが 揚 人 如 故 を責 雄 常に善人に與す。 し、道 に貴 0 法 むれば、 言 からず、 に遠 に、「實なけれ 惡人 かれ 木 と難 ば聞きてと夜發て あるを以つて貴し しと言つた。 呂氏 ば葉すなは ds 應ずるので 春秋に、 魏徵 る。

者はその 士 天爵 學に 交は 分、 7 あ 荀 厦 6 子であり、 子 一高 な 點 陋 あ 0) 志 して 貧 る 所 樓 人で なく、 は、誠 巷 n つて を以 至 0 眸子を見れば知られる。 12 12 は 誠 を見ては之れ て人を悅ばせる必要がない。 6 しとあ 功。 住 あ 徳を修 公の 居 0 0) あ み、 缺乏に 斯 る。 末代 心仁を守れ て世 る。 憂 卑 節 患 る。 0 象牙 め、 人 桃 劣 義 我 0) 12 す 簞 彼 た 0) 李言は に篤 學者である。 因 立 る カジ 萬物 0 n る 手 す 言 所 カゴ 0 2 椅子に ば形 食 B 段 為 は けれ る 0 行 から を弄し を辞観 めに ない。 0) 6 人 一代 ざれども下自ら溪を爲す者であ 0) は 瓢 一個 ば、 6 信 あ る、 に腰を掛い 悲し あ る。 0) 0) 0 義 必ず閒居して不善を爲すの徒である。 それ 飲 人で 僞 老子の言に、「君子は盛徳なれ る。 を以 內 て虚名を増し、 して勉焉怠りなく、 形 む者は、 君子 に生きて居て 愚 12 假介、 は け、 で社 善を行 あ を以 つて人 誠 であ る。 るれば あ 暖衣 n 會に對して十二分の 0 、永に人類の義 市 壟 9 7 I は つて倦むことなく、 神なり、 斸 賢 飽 井の一無名士であり、 外に形は 對 电 末代 非 謀 を水 食しながら國政を議する者は永に小 0 す る 衣 常に め を を 0 0 神なれ 7 曲 崩 毫も人を瞞き得ざれば、斯 飾 で ると謂 人である。 黔黎 市 學 2 る。これに あ 9, 利 者 7 る 義務 は能 0 地 貧 は を 6 ば容貌愚なるが如し。 饑 罔 悪を を以 あ 位 愚 和 る。 で羸 を果 る。 く化す。 寒を見ては之れ な L てれに反して朱 長く凡人の 避 た 反して假合、 つて n 管子 賤 H ば愚 我 君子より之れを見る時 ち得 して居るの 富 カジ 丈 -しと言つた。 夫 を以 胸 0 近づくこと 0) 當代 12 言 屋 中 異 末 を粧 Ó に、「名を つて 天下に の才人 0 座 0 眞 カジ 15 頓 しとある。 人た に列 實 人 爲 6 南 2 人 惻 を取 殘 な る。 無 は め 12 門 、學者 名聲 12 釣 るや 隱 L 偽 接 賊 S 更 0 で 憂 る 7 善 彼 心 世 12 また縦 0 居 朗 0) なら 人に 以 過き n 邊 7 白 源 天 は 4 端 0 幅 2 6

その カジ 爲 遊 樂は勤苦 6 1的とするのでは無く、居の安きを目的とするのでは無く、有道に就いて自己の あ 勤苦そのもの を慰撫すれば足るので、 >中に職を食むのであつて、惡衣惡食を恥ぢて東奔西走するの 流連の樂、荒亡の行を主眼とするのでは 1115 生命を求 6 は めん

常であ 可で、 じ、 為 ? 會しても懼 17 す所 非ざれば受け 何 ても惡木 玉潔 之れ 身 を なる艱難に遭遇しても屈することなく、 拂 を亡 氷 は 瓢簞 るゝ 清 旣 亂 地 12 す 0) 生死 ない。 屢ば空しくとも、 こと無く、 陰に息 に置きて後ち存す。 ること無く、 如くであ の域を脱 は ないい。 れば、 常に從容自若として事 L 道を樂んで奮起するは 十字街 食は饘粥足らず、衣は短褐完からずと雖も、 天を恨 死して後已むの決 しとある。 頭にて白日事を作すが若くである。 まず人を記 背水 甚雨 でに當 0 陣は處世の要道である。而して心に疚し また士の はず、 に沐し疾 意を要する。 5 唯 剛 常であ だその 風 毅 に櫛 果 孫子に 斷 心志 る。 る心 義を 一之れ を錬 を以 朝に道 渇しても 盗泉の水 取 .(禮に非ざれば進まず、 2 を死 を聞 7 筋骨 動 地 V 如 カン 12 T 8 な 何 一勢し、 陷 夕に 13 S る te 危 V 7 を飲まず 行 所 後ち生 難 士の かな に際

27

そ君 D 0) ことある。 地 毀 カジ 12 譽褒貶の來ることが 行 子とは 道 代 へるの 理 12 S 背 人が自己に對して怒ることが L 0 1 カン 计 ば、 あ る。 n 世 人 貝 あつても心を動亂するに足らな こぞりて譽む 原 ごとに 益 軒 は 0) 言 T る者 とも 12 あつ は、 喜 わ 京 カジ 7 行 ~ カン 电、 道 からず、 りて 理 13 直さを以つて怨に報ゆるのである。 疑 Vo カン は な よさ人に譽めら L は 却 つてこれを取 10 多くは 世 こぞり 巧 みに n, て毀 って以 して る あ とも しき人に カン 0 ざれ T 懼 我 る る人 カギ また他人に 切 5 らず。 琷 なるべ るって 砥 礪

道 に、「首を俛し、 感ずるのである。 るとも牛 髮 義 に託 0 規 矩が する蒼蠅たるを喜ばない、 後 あり、 となることを欲しない。 耳を帖れ、 自然の整齊がある。 蔵塞くして然る後に松柏の後れて凋むを愛するのであ 尾を搖して憐を乞ふは我 自ら雲を起し自ら水を呼 鴻鵠 此の自然の整齊に反して處世法なるものは 0) 志を持し、呑舟の が志に あらざるなり。 ぶ蛟 魚の 龍 概 たるを願 あることを要する。 しとある。 る。 ふい である。 無 こ,に人生の意氣 vo 韓非 寧ろ 吾々は騏 子の言 鷄 日と 驥

勤苦の 0 12 石 物 何 が志 る。 中に幾干の遊樂を求めて進むのである。 服 0 退 積して、 0) 處 を立 多であり、 す。 カン 底 百 進 111 致す ば る I. h 法 」と言った。 貧 所 で止 技 7 に於て、 賤 所 これを小 藝と雖 , 其 あらん。 まな 6 其 水は一勺の多である。 中 あ 0 る。 い堅 13 弘 理 至 しとある。 人生は至誠を以つて理 一誠 在 流 未 想 一忍不技 を運 これを富貴大業と謂 に化し、 だ志に基 を 900 貫 用 遊樂分內 徹 志を立てることは理想を確立することである。莊子は「一 L 0) して效果 なけれ 精神 更にこれを江 力> ざる 12 6 退さ、 浩然 もの は あ を奏するも なら る。「終まで忍ぶ者 此の活動に於て人生の理想を直視するのである。 5. 一想を實現する試練場である。吾々は あらず。 (1) 氣 勤 0) 海 な 苦 V. 6 は義を積 に變ずるのである。 分外 0 ある。 二宮尊 志立 王陽 は實 に進まば富貴其 集した人格の效果である。一 たざれば舵なき舟、 明 12 忍耐 0 は 救 言に、「志立たざれば天下成るべ と勤 は 徳の言 るべ 地は 勉 Ļ であ 中 に、遊樂分外 と基督 撮土 る。 在 600 伯樂なき馬 0 H 卽 しとあ に常の は 多であ ち努力 言 12 良 進 瑣 つた。 る。 5 み、 事 0 向 心定まつて萬 善に から眞實を 如 上 人 食の 勤苦 山 吾 0 生 4 一發した は 志 は R 一卷 飽く 分內 事 は 勤苦 6 な 先



つきつめて物思ふ身にあらねどもさ

みだれ

空

0)

<

る

ほ

L

4

力》

13

ガ

ラ

ス

窓

12

見

(D)

夕空

0)

76

やく

と白

み

ば

L

9 7

綠

葉

0

た

0

さみだれ空

佐

藤

清

色 ----0) 面 3 煙 Z 吹きとべり殘 だ n 空 0 夜 0) れりとも あ ****} 13 なか 生 ろ き木 りける陽のこうしくと見ゆ 立の v きづいてをも

野

D

n

V)

ほ

カン

17

いつくものなきわがらちのいのちより湧くよろこび盡きず

水

あかるきにわれ臥してをりわれの名を呼ぶ聲きてゆ氣くるふ

2

4

若

葉

0)

5

^

12

夕空

の煤

煙

0

尾

は

垂

n

3

カゴ

6

17

b

5

敵

0

あ

責 0 深 T を就 7 る 12 職 寬 せ ることが 圆 30 策 で 12 あ しと言 る 泰山 南 てとを要する。 つて つても、 は 居る。 土 壌を譲 五義 小 嫌 らず、 胸 を觀 を胸 中 じて は 中 故 常 に置 我 12 12 能 空 カジ 3 瞋 く其 洞 恚 12 怨を構 を 0 大を成 滅 7 賢 却 する 思 ^ せり。 仇を報ぜんとする卑 數 0 白 人を容 6 あ 河 る。 海 は る 己れ 細 > 流 12 を擇 を責 足 劣なる心 る 襟 は U ず、 懷 る な 12 は、 故 时 酷 12 21 m 能 は なら く其

は誤 個 は 禮 る。 性 至 は 17 妖 とするのである。 余に於ても浮雲の 上を發揮 n てれを以つて社交の妙と為し、人心收攬の 接するに愉色婉 術 つて水を飲 を用 3 繡 處世法 8 0) 甚 華 2 言 處世 だ 麗 て人に み、 實有の 0 8 大關鍵である。 い者 纒 0 「君子は尺土の 容を盡 交は 如しである。 て対し 肱を曲げて陋巷に枕して居ても、 CI 法は德性を算んで問學に道り、 で 果を結べ ある。 車 5 から し、 馬 爲 を駕 浮 か 人心を收攬するの術 には 華 ば足る 溫言辭禮を傾けても、 有徳者は天下の人心を收攬して千古の英雄 輕 りて城 封なくして萬民これを尊ぶ。」 佻 不 8 0) 屈 門を出 不撓の声 競 で ある。 CI 詭道を以 術と為し、互に自他 意志を以つて 入しても、 無學 謙譲 はたゞ徳を以つて人を服 誠意 樂またその 12 して 7 にして信義を以つて人に接 カジ 單 世 無けれ 12 を 博 世 是 渡 辯 態 中にあ とあ n る を 0) を ば巧言介色に過ぎな 無道 は 粧 百 熟き、 る。 禍 N 難 る。 0 12 不 不 町 遜 あ 對し、 不義 する 徳に であ 虚 る。 12 0) DC 出 僞 5 にし 勤苦精 0 詐 夫 72 L 1 7 疏 事 妄 た 7 處世 るを以 て富み且 3 ~ 有 食 Vo 額 至 あ 21 德 勵 法 位 を飾 飯 る つて交は 過 して天 誠を以 でぎな 0 0 Th 達 3 官 0 カン 6 井戶 人 であ B 賦 7 E 6 世 根 極 虚 0)

ぐに健康體

になってくれること、思つてゐた。

夜であつた。 合はせると君 君 が最後に僕を訪ねてくれたのは、君が亡くなる少か六日前であつた。それは雨あがりの蒸し暑い 春のやうな月の は既にその時死を決してゐたのであった。僕の愚かなる、終に君を見殺しにして、君の 夜であつた。その 夜僕は始めて 君の 眼 に涙 カゴ あるのを見た。あとで考へ

死を知ることができなかつた。

なか 君 一人は月の はその RO, 町端 夜は殊に何にも話さなかつた。今から考へて見れば、君はどんなに僕の饒舌を受け 光りを浴びに戸外に出た。最ら大抵の家は眠つてゐた。僕等はあてもなく小暗い木立の れの路次を歩いてゐた。交番の紅 い燭だけが今も僕の記憶にのこつてゐる。 應へす

痩せ衰 月は折りくくもつた。樫の木立のまつくらに繁つた下を通 かりでない、君と逢へば二人は大抵無口になることが多か へた姿を見て泣き出したくなつた。けれども君は何時も頑健をはこつてゐたので、君 った。 り抜けて廣 い通 りに出た時、僕は君 はまた直

るのに苦痛を感じたてとであつたらう。無論

あの夜は僕もどつちかと言へば除り語らなかつた。

あ

あつた。六郷の木賃宿や羽田の岬や、二人の過去には夜の散步が多かった。しかしあの最後の夜のやら まで白川 僕にはそれが一等心苦しい。なぜ僕はあの夜君の悲しい決心を察することができなかつたのだらう。 君 しと僕 むでゐた夜を見たことはなかつた。しかも僕は其時君が死を決してゐたことを知らなかつた。現在 のなかを歩いてゐたこともあつた。また黃色の埃を浴びて水善寺まで月を觀に走つたことも は 克く夜の丘や、郊外や海邊を歩いた。僕等が兵學校にはいる準備をしてゐた頃二人で真夜中



この秋…亡き丁中尉の靈へ

T 君!

突然、君が亡くなつてから三週間になる。

今までは何ともおもはなかつた靈まつりといふやうなことが、今年はしみじみ自分の心に深 いり

を刻みつけるやうにおもはれる。

風 「が吹いて來る。そのたんびに柳の葉が靜かに落ちて行く。亡くなつた君の俤を描きながら僕はまた 銀座のペープメントの上を歩いてゐると、煎つくやうな光りのなかに、どこからともなく秋らしい

ペープメントの上を歩いて行く。

けれども今から考へて見ると、 合ふことはできなかつたのであつた。 ラニソンのイムメモリアムを讀むだ時に、僕はた、美しい詩人の追想としてのみ讀むことができた。 あれ は讀むだゞけのことで、真實にテニソンの悲しい心持ちとびつた

をして僕のイムメモ 僕 がこのころ君 0) リア 俤を描いて、何かにつけ君のことを思ひ出についり合はせてゐる情調は恐らく僕 ムを編み上げさせないではおかないであらう。

僕はから言った。

しかし餘り静かなところも淋しくて耐へ切れない。

君 は既に何らともすることのできぬデイレ ンマに落ちてゐた。 君は生來孤獨を愛した。けれども君

ほど人を懐しんでゐた者は少なかつた。

た 0 0 あの 言葉を 苦痛を夫れ 君 は少しも自分の苦痛を語らない人であつた。 夜 聞 4 いて 「耐らなく淋 はどゝは察することは出 ねた。 僕は しか 何 といふ神 つたのでやつて 經 來なかつた。 0 鈍 來たし い男で 最も君とは親し と雑作 君 あつたらう。 は海 もなげ 岸から終列 に言つて笑つてゐた。 かつた筈の僕でさへ殆 車で 飛び出して僕 僕 を訪 んど君 も平氣でそ ね てくれ の昨

襲はれてゐるのではないか、それが爲萬一もしものことが したことはあつた。けれども僕は自分を叱るやうにしてその忌はしい想像を打ち消してしまつた。 二人が朝の食事をすましたのは八時過ぎであつた。朝の食事はおいしさらに喰べてゐたので、僕の 夜僕は、二二三週間 少しも眠れない」とい ふ君の言葉を聞いたとき、もしや恐ろしい病氣に ありはしないかといふやうな悲し 10 想像を

不安は餘はどやはらげられた。

つて その 行 日僕 力> なけれ は君 ば氣 と別れ カゴ すまな るの カジ 悲しかつた。 カ> 0 た。 君と別れる時、 僕は夜でも大抵六七丁の道を停車場まで送

0 で僕は學校にもぜひ顏を出さなければならなかつた。春日町で僕は別れなければならなかつた。僕 その 日 は 僕 は 成るべ くなら 學校 の方も休みにしたいと思つた。生憎その 日 は學 校の 試 驗 日 で あ つた

何らして君の心が死を決して、ひとりで泣いてゐたことを察することができたらう。 僕はその夜も君と肩を並べて歩きながら、君が僕よりも少し背が高いと思つたりしたこともあつた。

たので止した。床についたのは一時過ぎであつた。君は三時頃まで反轉してゐた。三時と五時の間 しまどろむでゐたやうに思はれた。たゞ僕はその夜の君の深い吐息を今も忘れることはできない。 僕は寢る前に君に葡萄酒を上げようかと思つた。けれども却つて神經を興奮させはしないかと思つ に少

起きる君がその朝は幾度も僕に促されて辛つと起きた。新しい空氣も新しい日の光りも君には旣 0 甲斐もな 夏の夜は直ぐに明けた。珍しく君は起き上らうともしなかつた。いつもならば薄暗いうちから飛び かつたのであらう。僕はそれを知らなかった。 12 何

どこか、こへいらに静かな寺はないだらうか?

君 は昨夜僕 いに話し かけたことを、朝になつてまた語 り出した。

こゝいらの寺は駄目だらう。何なら鎌倉に行つたら何うだ。

圓覺寺?

さうだ。

しかし、たい行つたいけで入れてくれるか知ら?

僕等はてんなてとを話し合つた。

庭に居た二匹の子犬を君はぢいつと見まもつてゐることもあつた。

ともかく、毎晩眠れないではいけないから、是非靜かなところに行つて來たまへ。

ばそのころから君 あつた。「十國」と刻むだ尺八もあつた。それは嘗て君が湯 なことを言つた。あの室には世界地圖がいつも暗い影のなかに泛んでゐた。滿洲やチベット 念であつた。僕は あの室で秋寂びた武藏野の涯に沈む太陽を見ながら君と語ることが多か は深 い決心を 持つて ねた 0 であつた。「決鬪 ヶ原から十國峠に行つて瞑想したころの紀 のな カン で讀むだ哲學者肌の中尉 つた。 0 地 過し

は あの 君 は克く僕の 主人公を 家を訪 緒に ねて來た。 した第 カジ 君 それ のやうに は多くは 思は 夜であつた。 れてならな いてとも その 時僕はまた、 あ つた。

「僕も今日は君が來るやうな氣がしてならなかつた。」

といふたことが幾度もあつたと記憶する。

今度の 死についてもさうである。僕は君と別れて數日の間に幾度か君の死を想像せずには居 られな

かった。そして自分で打ち消してゐた。

2 痛 けては n るいや には それでも何とはなしに氣がかりだつたので僕は海岸の旅館宛で近ごろにない長い手紙を書いた。そ के 味 は ならぬ。 「苦しいこと、 な n 日 るで 0 大悲觀 は 午後であつた。 な S 悲しいことに打 力>。 の後に大聖の覺りが どこまでも生きて戦 君に送つた 勝 って行かなければならぬ。 生れ あ れが る。 ~ 最 。」僕は よし悲しければ 後 0) 手 てんなことを書いて送つた。 紙 であ 0 人生は悲しい、けれどもそれに敗 たらら。 とて生きてるればこそ悲 それ は五 月雨 も苦

手紙を讀 カ> むでくれた 君 は旣 いららか。 に旅館を引き上げて淋しいA村の下宿に歸つたあとであつたらしい。 君は

あの

は 神 保町まで行からかとも思つたりした。

時 間ばか り學校の前で待つてゐないか。一 緒に例の森を歩いて書飯を食つて別れよう。」

僕は から言つて君を引き止めた カジ 君 は静 かに答へた。

神 田 に寄って本でも買って行 から。

さらか、それでは乾度また近いらちに逢はら。」

これが僕等の最後の別れであつた。

僕は學校に行つていやな試驗室に一時間を過した。人々の走らせるペンの仄かな音を聽きなが 僕は振りかへつて君の方を見たが君は俯向いたま、電車の硝子窓に凭りか、つてゐた。

は淋しい君の像をたどつてゐた。

古本屋をあさつてる

る

カ> 知 5?

今でろはおつ母さんの家を訪ねてゐるか知ら? こんなことを想ひながら、兎に角私 は一時間 間 の仕 事を終へて町に出た。 るし かと思つて神保町の表

通を見まはしたりしたが 君の 姿は 見えなかつた。

それ から 後の五六日は僕にとつて可なり心苦しい日であつた。僕は今になつて見れば君の死を直覺

してねたやうに も思ふ。

二人の 間 には 種 の直覺作用が時々あつたやらに想はれる。

來るやうな氣がして待つてゐた。」

「今日は

君

カジ

僕はあ の元氣の宜い君の聲を忘れることはできない。聯隊の居住室に君を訪ねた時、君は克くこん

ら僕

入つたばかりの處に電報が來た。しかしその時は君の病氣は例の神經衰弱が昂じたのであららくらゐ 下君! 君が危篤の電報を受けとつたのは仍り五月雨の物悲しい日でかつた。晩飯をすまして書齋に

におもつてるた

僕は雨のなかをK驛に急いだ。 電車は非常に遅かつた。

僕は悲しいのだか、恐ろしいのだか、何のために歩いてゐるのか分らなかつた。たゞ僕は雨のなか

をすたしくとステーシ 3 ン の方に歩いてゐた。

T君! 君が亡くなつてか

ら三週間

が過ぎた。

女郎花や向日葵や寂しい花が咲いた。

夕でとに君が訪ねて來るやうな氣がしてならぬ。僕はじいつと立つて夕暮の空を見てゐる。今年のタムスピ

秋は淋しい。

自 由 敎

學生が多き故、八月中は朝の集會を中止し、夜は會員の宅を巡りて集會を開く筈である。 神田の同教會 では七月中內ヶ崎岸本氏等の外新歸朝者 荒井恒雄氏の戰時歐洲の印象談があつた。同教會は會員中

く呪

N

たく

る。

君に ので 君 カゴ た僕 は B は V とめ その な 0 4 は 力> 最後 2 時 は T 12 君 たらら 70 は に分れる時、 た 0 旣 方 に書籍 人の カ> 力>。 ら探 友だち その して持 5 君 てとを考へると僕は耐らなく苦しくなる。 から慰藉、 ふやうな 12 0 = ーイチ て行 36 < ı の哲 それすら君は滿 0 本 だ 17 學 は 0) と誰 12 何 0 慰 2 カン 0 め 0 小 76 朝 足に受けることは出 見出 說 は لح مع م 餘 り氣 すことが出來なかつたらしい。たゞ イブル カジ 自分といふ冷淡な男が耐 す とを新聞 > T 一來な 6 ねな 紙 v いやらだつた。 につゝむで上げ で別れ て行 らな った

書 次の 0 か H 恐 君 5 着 日 12 海 曜に 岸 逢 いてわた。 君 0 C/s ぜひと思つたりしてゐたがあんなことにな 旅 72 は 館 ステス あ 0 に君 14 それには ふ感じはその後ちつとも絶えなかつた。 イブ を訪ねやうと思つてゐたが、 iv もひもとかなかつたであらう。 「忙しいところをお邪魔して濟まな その日は學 った。 君 僕 校 0 が亡くな カ> カジ 會 0 日 た、 合 曜 カゴ 0 あ る三日 L 夜 2 集 力> 會 72 L 世 前 った。 0 73> は 17 でその 6

る

君

心

外に

慰

めを得

~

3

1

2,

なし

とか

ふやうな意味

0

言

葉

カゴ

書

V

T

あ

は 歸

た

10

人の

る

君

カ> 行 つて、

6

0 葉

僕

は 0

更に冷淡

で

あ

つた自

一分の心

を呪は、

ず

12

は

居られ

な

カ>

0

120

な迷 0 で T あ 信 君 二君 つたと思はずには居れ 的 な カジ ことでも意味 見えられ た 前 あ りげ 後 ない。 0 にお ころ それにつけても僕は何らして君を死から教ふことは出來なか B は は 毎 \$2 日 る。 僕 0 僕は迷 家 0 前 信ではな 0 あ 0 森 V, には喧し あれ は眞個に君 いほど鴉 が啼 0 死を豫言 いてねた。 つた た

0

であらら?

方に Ē

日

曜

で

ゎ

つた。

我

々よりも賢いやらだぜ。』

は ナ 自 は てられた私にすら親切な友達になつて吳れ 12 ザ 73 n つてみた たさらなが、質に天地をも呑むやらな豪邁な所がある。と言つて洗禮のヨハネが牢屋の中からエ vo 使を送つて豪氣堂々來つて 自我 癩病患者、聾者、死人、 私はもそつと深く私の内心に立入つて私に話して吳 の貧乏な叩大工の忰でもよい、其の出生に就て口さが 一たび叱る時忽ち海波が其 S. 博愛、 否こ 强烈、溫和、 n カン 私 は 貧乏人が私の友達だ』と返事した所は實に偉大だと思ふ。 ~ п 工 夫れ ス デ 0 鳴りを静めたと言ふ程に奇怪 50 0 宿 罪惡を叱咤して吳れ 25 凡てが彼の一身から同時に放射せられるやうに る 行 工 力> \$2 スであらうと思 ばな 5 V2 n るのは君では な る い世間 工 ふ。私は其のエ スであると思ふ。 な神 0) 力を持 噂 カゴ 無 あらうと私 V つて居 ス 0) 12 かと尋ねた時 一度逢つて見たい、 つまり るとは 12 世 孤獨、反抗、 は 思 よう信 間 は 構 n から S る。 所 E 捨 75 6

40 カン 6 1) /辨當 鬼に憑 1 彼等は ヂ 持ち P かれた男がね、出て行け・とたった一口叱られたので、 少しでも多くエ で は 工 宿 醉 ス 0 に 重 宿 を V ス 目 頭 0 を 力ジ 話 H 風 を聞 12 て押寄する老若の多くが、 冷 から一度でも多く手を觸れて貰はらうと思ふのであらう。 i 0 > 葡 萄 畑 U) 傍 をト ボーーと歩行いて居た。二里三里の遠方 リー チ 鬼は彼の男を引仆して置 ヤンを追越し追越しスターへと急 て出 1

語

5

L S さらとも俺の 事には 鬼に 憑 行 カン つた時、 れる位の人間は何でも少々 は七つの 悪鬼に 憑 かれた女が忽ちに其 人並勝れた偉物だらうぢやないか。 鬼を追 出 L 7 貰 つた 癒され よ、 だが た奴は皆な 和 可 笑



青年リーヂャン

ア ヤ シ 沖 野

郎

影や、 仰い であ 時、 0 私は英雄を要求 を癒して貰つたと言つて騒 神の は 工 でみ る 彼等は 工 ス 葡萄 カン 御旨に從ふ者は悉く我母だ我兄妹だ』と言つたさうな。 スが家庭に棄てられたといふ一事だっ カジ らだ。 たが、今は既に其間 文 棚の下で五年も十年も親しく語り合つた友達もあつたらうに。 『何だ! ピデ 彼の しな 大王の V, 大工の忰が』と言うて却つて迫害したさうな。 3 N 遠孫だか 奇蹟をも ダ ン いで居るが 川 に深 12 何 現は 要求 い溝 だか、そんな事 しな カゴ n 出來 た 土 100 ス 「今エリヤ」 12 母も兄弟も彼を狂人扱ひにしたさうだ。けれどもエスは て居るらしい。 私が 其 は 樣 な力が 私 工 0 ス と呼 を 一 關 有ららと無 知 故鄉 ばれ 度尋 す る 所 へ歸 る洗 ねて見た 其中に 0 禮の カン は つて幼友達の人々に説いてみた ららと私 無い。 夫れから私の尤も はエスと一緒に無花果 3 いと思 ハネ、 町 0 ふの 0) 關 人 工 は R す ス 彼 は 3 カゴ カジ 種 彼 所 n 孤 同情 0 h. を 獨 無 な する 0 師 の人 病 葉 氣

懇親したと言ふ點が私の心を動かした。安息日に麥の穗を摘んで食つた時、人間は安息日 れから今一つはエ ス カゴ 大膽 にも世 間から鬼の樣に思はれて 居る人々の 所 个行 つて の主人だと言 緒 21 飲 食

る。 外しく惡鬼に憑かれた男が、鎖も足梏も打碎いて、家にも住まず衣物も着ずに墓場で獨り狂つて居 何卒此男を助けてやつて下さいつて、夫れは近頃ナザレから來た彼のエスとか言ふ修驗者にでもとうで

賴 めさうな代物だぞ。どうだい君も其の有難屋に一つ化つて見るがいゝよ。』

ウン、私は今朝エヌの所へ行つて何とか鳧をつけて貰はうと思つて此處まで來たんだよ。』 jν __ ケは 勢の無い聲でハ、ハー・と空笑をしながらリーデャンの顔を見詰めた。リ ーチ ンは

と言って。ベルニケは驚いて言った。

『君!夫れは本氣なのかい!』

リーデャンは立上つた、そして熱したやうな眼付で、 エスの宿をさして行く善男善女の跡を見送つ

て居たが、

ルニケ 1 私 カゴ 工 スの所へ行つたつて、君は私を見捨てはしまいね。」

と言つた。ベルニケは嬉しさらに答へた。

何時までも古瘡で殘るさ。信仰のある人だつて、御互が泣いて悔改めて當座は感心もして吳れやらが、 物 つて居るさ。 て暮すより、 の宇年も經つと矢張り舊惡の持主として我々は輕蔑せられるのさ、氣のそぐはない連中と善人ぶつ ア行つて來たまへ、今更神樣何かに縋られる譯ぢやアあるまい、よし行つた所で御互と世界が違 俺何かも元の善心に立返らうと思ふ事も度々あるが。何アに悔改めたつて矢張り古瘡は 氣の合つた同志で惡鬼の生活をしようぢやないか。兎に角エスの所へ行つてみるもよか

語 りつ、彼等の言葉を聞いたリーチャンは、 何か偉大な力に撥飛ばされたやらに路の傍の石に腰を

架けて其 〈儘俯伏 して頻りに考へ込んだ。

其様に塞ぎ込んで居るんだい。」 才 へも歸られねえと言ふのなら、 リーデ ヤンぢや無いか、蒼い顔して何を考へて居るんだい。又た博賭にでも負けたの クー ザの兄貴にでも賴んで、無心を言つて貰つてやらうか、 何だつ かもら

遊 び 仲間のベルニ ケ は 斯ら言つて、 リーデャンに近寄つた。 リーデャンは默つて俯伏して居る。

確チ ねえ IJ 1 ヂ t ~ 0

T

~ N = ケ は 其 一肩を敲 いた。 71 デャンはさも氣の抜けたやうな顔付で眠とベルニケを見詰めて居た

か、 云ふものは久しい間だよ。私の爲を思ふ人達から、何度か知れない鎖で繋がれたり、足梏を箝められ 氣な所 たりしたんだ。 もら着物何 お V, に居る寂寞の見なんだ。やつと昨日今日私は自身を知つたのだ。 ベルニケ、私はね、汚れた鬼に憑かれたのだよ、デボルに取付かれたのだよ。私はね、 々は人生が如何の、 か着て居やしないよ。丸裸なんだ。家も無い 放浪見なんだ。墓場のやらな けれども私は何の苦も無く夫れらを打碎いて、惡鬼と共に其路を走つたのだ。ベルニ

もうもう鬼に憑かれてか

汚ら は

しい陰 52

さに

世

間

0

人より

進 P

だの

だ

たらうか

0

國家がどうのと言ふが、一體吾々は墮落したのだららか、又た一足先

と言つてリー

チ

ン 九

は其唇を顫はした。

ケ、

君も時

眼を閉ぢて考へてみた。

彼 月の やらに言觸らす連中は實際のエスを觀ない連中である。彼の連中にはエス けれども彼等 云 るの する人だとか甚だしきは、 ム様 n 工 程 である。さらし、今朝エスが七つの悪鬼を逐出したとか真らしく言つて居 ス 初にエル な利己 に眞 は 自 分 0 サレ は物優 を神 人間 的 な考を持 2 らし 0) 獨 の宮の尖塔にエリャ しい 子だとも何とも言はない。奇蹟を行ふんだとも言はない。けれども私は生れて S 人間 工 つた連中 海の波を靜めたなど、途方も無い事を言はねば賞讚の ス を見 の譬話を熱心に聽いて得心して居るだけだ。 た事 は一人だに居ない。盲人も三四人居る、 がない。又た此處に集つて居る人達に肉の病を癒して貰はうと カゴ 火の 車を投げたと言 ひふらした男であつ 工 不具者も五人ばか を神だとか スが た男 神通 辭 た。 は で 去年 無 不 力を持 可 S 思 0 Ł つて り居る。 議 = 思 サ つて な事 居 ン 居 を 0

1] ĺ 彼 は周 ヂ t 章 が吾 て、逃げ出 17 返つて さうとした。 眼 を開 いた時、 すると弟子達に収 會衆の 殆 んど總てが 卷 カッれ 振返 て居たエが つ て自分の ス静 かに聲をかけた。 顔を見て居るのに驚

『心配するには及ばない、私が其處へ往から。』

會衆は俄 12 動ど 搖 めい た。 工 ス は 靜 にリ 1 チ P ンの 側 に來た。

『あなたの御名前は?』

『リーデャン・・・・・と申します ・ 私の名は。』

武士のやらな單純な思想に滿足出來ませらか。と言つてどんなに迷つて見ても駄目でせら、 立派 な名前だね、 羅馬の古武士と云ふのだね。しかしどらしてしくあなたのやらな青 年 かゞ 矢張り行 古 への

可愛 IJ 1 ヂ ス Þ ザン ン の姿が群集の中へ紛れ込まらとした時、 ナを捨てちやならないぞ!』 ベルニケは大聲で呼んだ。

リーデャンは思はず後を振向いた。

< 種 は盲 カン 12 し者のやうに静であつた。夫れは眼に一丁字の無い女子供にでも判り易い事を極 な 蒔 らであった。 もら IJ 1 の譬を語 M 畫 態 ヂ 跛者へ 度に 飯 t 前 だ も居な はエスの宿の表まで行つた。數百の男女が集つて熱心に其話を聞 リーデ つて居 0 に聴衆は誰 た。 S P \sim 其 惡鬼に憑かれたらしい者も居な は全く感心 の平易なる言葉、 一人歸らうとしない。 して聞 いて居たが、 齒切 ñ の善 工 スの 矢張り家の中に入らうとはし So V 話 句 工 調 が段 ス V) 人々段 理窟抜きで温みの 服 は優しく會衆 々と高調して來た時、一 いて居る。 V) めて熱 上に注 な あ るい カ> 心 0 I に説 た ス カゴ 同 者 n 0 側 いた は らし 7 12 死

追 此 1 は會衆の態度を觀た。 人も來て居ない。 出 ヂ 0 7 次の 頻 n う話 瞬 は た話 會 間 が終つてエ をし にエ 衆の熱心な態度に更に感心してしまつた。不闘今朝自分を追越しさまに、 スかが つっ 1) スは静に眼を閉ぢた。三分五分瞑目したまゝぢつと瞑立つて居る。 行 彼等の眼は悉く非常な期待をもつてエスの顔を凝視して居る、さらして夫れ 眼を開 ヂ つた p ンは何 男達 くと同 カゴ 時 何 時に何を言ひ聞かして吳れるだらうかと待設けて居るらしい。リ の間にか家の中に入つて會衆席の後に竊と立つて居た彼 處 に居 る かを探らうとし て隅 から 隅まで見渡 したが、 七つの リーデャン 其 悪鬼 も逐 連 中 カジ 12 カジ

人も主人のある連中の言ふ事だ悪、善、どちらへでも鰤乎として行け!鋤に手をつけた以上後を顧る

意外な言葉にリーデャンはドギマギし乍ら、

『先生、私は豚の國へ行きます。 もら人間 の國 には住む權利がないと思ひます …けれども先生は私

を底無沼へ追込まうとはなさらないでせう……』

工 ス は 叱咤して言った。

此 神 後 斷 0 して神の子らしい者と交つてはならぬ。豚の食物に涎を流す放蕩兒ばかりを友とせよ。さらだ、 國 に居 る私は生命を賭して此の國の途を走つて居るのだ。あなたは若し豚の國に住みた へ、夫れがお前に適した行路だ。 私が許すから町の無賴漢のみを集めて、 私の説教所

12 對抗 して惡魔の國を建て、見ろ。』 墓場か

ら豚

國

b 隔 IJ 1 てたベルニケの家に驅け込んだ。恰度悪鬼に憑かれた男が鎖を打碎いて逃げたやうに。 チ P は唇を嚙んで聞いて居たが、物をも言はずに 此家を跳 り出 た。 小石 に躓き乍ら五町ばか

1000

他 V た 0 ガ エ ダ ラの 派 ス は青 は冷やかに微笑むだが、しかし弟子達に太皷を打いて辻説法をやれとは仰せられなかつた。 日 町の 夜 狂 年リー 亂 青年は明 した。 ヂ P 流 瞭 ン と共に悉くガダラの遊廓に繰込んだ、 に二區分せられた。其一派は業務の餘暇には必ずエスの数を聽さに來た。 連に次ぐに荒亡を以てしたから此の街は眞の不夜城となった。 そして神の國 に對抗した豚の國を立 此 0 一噂を聞

カゴ くべき所に行かねばならない。此のガダラの町には苦しんで居るあなたの様な人々が多勢居る。夫れ 即ち悪鬼だ。」

リーデ ヤンは 溜らぬといふやうな調子で、

『先生、そんなに私を苦しめて下さるな。』

『いゝえ苦しめねばなりません。私はあなたの内にある惡鬼を逐出す責任を感じて居ます。』

『先生は至上なる神の子です。私のやうな迷へる羊と何の關係も無いものです。』

も同じく神の子です。神の子が迷つて居るのです。』 かざる昔よりの宿命で、今日あなたと語らなければならないのです。私は神の子です、しかしあなた いゝえ大關係があります。私はイスラエルの迷へる羊を招きに生れて來たのです。私は世の基を置

ŋ 1 ヂャンは眼に涙を浮べ、唇を嚙み締めて居たが、聲を顫はして言つた。

つて先生のやうになる事 私も神の子だつて?同じ神の子なら、 は出來ないのです。だから寧そ私を地獄へでも追やつて下さい。』 あなたと私と何で此様に懸隔があるのだらう?私はどうした

夫れは行つてみるが V , 25°

æ, ッ? あ 0) 地 獄 へ?先生本當に行 かれませらか、

76 のだ行く所まで行詰めて見ろ。 『今から行くが 行かれると思ふから迷ふのだ。人は二人の主に仕へる事は出來ない。自由だなど云ふのは二人も三 V 入行 ζ 所を教へてあげようあなたは永遠の昔 リージ ヤン あなたは自分の勝手に生か死 から神の定めた宿命の下に生きて居る カン 神 カ> 地 獄 か どちらへで

翌朝二

2

0) 真正 面 に坐つて、端然として話を聴いて居る青年があつた。もう話が終つて一同が歸らうとして居

る 所 表からドャドャと入つて來る七八人の男があつた。其中の邑長らしい男が

彼 。先生、 の廓 が無くてはならないのですから、これも此町の繁築策なんですから私も已むを得ず此樣 誠に相濟みませんが、今度限りで此の説教を御止し下さいませんでせらか、 矢張 り此 な事 邑には

し上げて、 どうも恐れ入りますが に答へた。

と言った。 去つたならガ 私 は 明 日 ガ 工 リラ ダ ス は静 ラの p 遊廓が又た繁昌すると思つてはいけない。何故なら此町には最早惡鬼が居なくな 17 歸らねばならぬ事になつて居る。會堂の宰ャイロから招かれて居るのだ。 私が

つた のだから・・・・・」

明 日此處を引揚げると聞いた會衆は、あちらこちらで呟き初めた。 夫れは女郎屋の主達の願を容れ

て去るのだと誤解したからであつた。夫れと氣付いたエ スは、

3 知れ 私 AJ 去る、 併し憂ふる事は 明日去 る。 る、 私は今其の人をあなた方に紹介して置く。』 イスラエ な い。私の去つた後で、あなた方の魂を養ふべき人が永遠の昔 ルの迷へ る羊を尋ねて邑から邑へ行くのだ。再び此土地へ來ないか からチャ

と言つて、 と定められてあ 最初 から身動きもしないで坐った正面の青年を指した。人々の視線は 一時に其青年に

集

た。青年とは實にリーデャンであつた。

宿 を尋り Ŏ ~ 半年 ね T 來 も經たないらちに此の街は非常に靜かになつた。或日のこと樓主達は邑長を伴れてエ 72 ス 0

す 9 んですよ。だから原中は は 生の御話の一囘でも聽からと言ふ若旦那達御勘定が溜つた時、《御宅へ頂きに参りませらか》と一口言 且 Z つたなら其若 れた妓 切 ム奴は鬼のやうな奴ばか 一那やベル 先生、 でした。所 ñ たら飲 私達の商賣 何 ないで、 一矢張 かが、 私 び賭 ---達 ケ日 辛 日 カゴ は どんくと逃げ出すんではア。 先生 い勤 つ喧 那 り愚痴を申して見たのですよ。』 豚 には大變でせう、どんな工面をしても半金でも拵へて來ますさ、所が此頃のお客樣 は眞面目な人達、 那 餇 に堪 嘩が カジ のやうな職業をして居るもの共で御座います。半年も前 近頃のお客様には先生のお説教一つ聽からと云ふやらな連中 多勢のお客様 もう此處 商賣で、 きれ りで彼の絶壁か な 義理も人情も信用も何にもあ V 世間の信用を思ふ人達が窃と來て下さるので持てるんでさア。 で海 月を持ちされ を伴れて來て下さいまして、一 に入つて死 ら皆る こんな事を先生に申上げても仕様は御 な 海 ないです。 んだ者 ん中 ^ 追込んでやつても宜 が何 澤山の金をか 人だ りやしないのです。廓中での金箱と言 か知れない。 時はどうも廓 H T 0 事 餇 S 先生、 0 奴 カゴ でした。 7 カジ は 初まつて 座 か 揃 一人も 此頃 0 N いませんので リ 1 た 76 居な 以 豚 揃 のお客と 來 ヂ 共 つて p は V 0 繁 B

エスは一々點頭いた。.

悪鬼が豚と共に海へ落ちたんだ。」

と言つたきり何も言はなかつた。其日の夕方であつた。例の通り多勢が說敎を聽いて居る時、

-1

ス

番電町話 診院河 電話ちがさき一番 東京三番町 神 長診 峰 野 長 高 每診 間 察月、 縣 察 兩 朝 橋 醫學 土 副 兩 矅 但 長 副 番地 H 海 祭 は 長 但 濱 日 午 午前 目 及 後 は 市ヶ谷見附内 從 目 下 日 日 停車場 及木 下當院 曜 入院診察應需 及 及 院 午 日 土 に在 後 曜 12 华 曜 六時 在勤 院安 之 之 勤

頭に腰をかけて短い話をして居る間に、其の髮へ價の高い香油を濺いだのは近くリーデャンの妻とな

つた遊妓スザンナであつた。

リーデャン夫婦よ、家に歸つて、神の汝等に行し給くる此の大事件を逼く人々に告げ知らしめねば

ならないぞ。」

此 の一語を後に舟は岸を放れた、其櫓をあやつる男はベルニケであつた。

『生ける神の子キリストを見よ。』

人々は言つた、

(一六、七、七)

女の學士の嚆矢

今度東北大學から女の理學士が二名出た、これが我 | 対域の女子でも男子と同樣學問研究の出來ることを示 | されたには、兩女史及此門戸を開放した東北大學に感 | おすべきであるが、聞く所によると兩女史は單に學術 | の困難な研究と戰はれたばかりでなく在學中は隨分男 | の困難な研究と戰はれたばかりでなく在學中は隨分男 | の困難な研究と戰はれたばかりでなく在學中は隨分男

動さへうけたさうだ。

元來女子を下に見たがるのは我國男子の缺點であるが、最高學校の學生ともあらうものが、露骨に同學のが、最高學校の學生ともあらうものが、露骨に同學のが、な難境にたちながら素志を貫徹し儕輩に劣らないがなる難境にたちながら素志を貫徹し儕輩に劣らない成績を示されたのは頗ぶる痛快事で後進のために大なる奖勵となったと思ふ。

Ξ 15 實 0)

第 高等學校教授

> 並 良 氏

著

版四第

郵價ス現百 子 金 丰 錢錢付 リ

傳 紹 說 介 せ 1-よ ん らず、 8 歷 史 0 批 評 0 7. 我 等 場 0) よ 基 9 基 督 督 觀 to は 訊 此 書 明 l 彼 よ 4) n 0 宗 闡 教 明 せ to

現

代

人

0

意

識

5

n 12

9

金

稅

M

錢 袋

郵の郵定 稅價 金合金金 四杏二廿 錢錢錢錢

陸

軍

一教授

第

版

田

哲 大

藏氏著 學

陸

犬 再

學

一教授

Fragments

郵 定

税 金

價

#

錢錢

版

田 軍

哲

藏氏著

野 佐 村 西 隈 學 清 院教授 畔 氏著 氏著 ょ

郵 價 金 稅 四 111

錢 錢

番三000一京東替振

十四國四田三所賣發

(中附三)

太

郎

敬施

郎郎止門

發十四圓一分年ヶ年 光 之 東 錢四世金部一 錢十八圓二分年ヶ一 號 月 八 厘五錢一稅郵

以 1 八圆——————	300)1)	(3£ 4£ 5¢	700 240
他;;;和编志入紀	▼	り と 佛 國 々 L	生の詩化
	四年の産理	THE THE	浦 牢

京東座口替振 會協正東 込駒區鄉本市京東 所行發

質が的産理

驗派質か學

經ル性物數一

哲

雄

義貞

秀利

TE.

美

總 郵 振 稅 假 名 圓

萬

録要の先杉 肺ず肺生村

廣

病

せけ

人式の 病産がのたり も、カ 快 の容養 管易成 驗に法 談理に に解し

て、容第

同易 病に時 者實間 の行を 慰し要 而ず て第

名士の人を最新

寶實費 にに用 無其を 郵定總 音の第二 り、一場錢錢名 。し。新

(中附五)

町原區川石小京東六八六五一京東貯 社版出午丙

チ

原書

泰 西

0

名

譯者

る者

は は

先づ本

書を讀

め、

而 は

大帝マ

哲

學 ル

攻

di

約

七

拾

枚

插

入

近

大帝 哲 夫生 著

> = U タ 3 プ 版 11 枚插 第 五

版

發

行

(中附四)

送 JE. 價 料 壹 圓 五 拾 錢 錢

生 EII 7 度 印 研 究界の 度最古の 著 才 歷 1 史と宗教と文學 ソ IJ チ 3 1 1 古印 と美術を 度 0) 人 情 理解せよ! 風 俗 美術 文學等を識らんと欲

書叢話神

編壹第

職

17 b

在る者 ます。

は 本 0

勿論

0 獨

生諸

士 究 書

0) 0) V

好 良

讀 師

物で

南

る。 0

あ

書 神

は 話

り文學 2

美 學

> 術 細

研 21

友 0) で、

た

る

3

ならず小學校

中

學校

女學

校

師

範學

校等

0 本

敌

本書

は

印

度

傳

說 を詳

た

3/

印

度

0

文學美

術

を

硑

12

IF. 價 壹 圓 五 拾 錢

究 する 쏤 型 料 は 必 要缺 四 < 可 版 錢 F.

陵 祉

6

る

二四端田外市京東 四一三京東替振

發 所 行

型 儿 版

刊

向

ふ乞を添書御旨る依に 」誌雑合六 つは方の込申御て見を告廣の此							
赞話 道	日	回	道		毎月		
幹主	石	介	村	松			
○ 納 凉 卷 頭 ○ 知强と運動 松村介石 ○ 知强と運動 大倉孫兵衞 れ	第六十四號(號月)要目標	度問答(其六)足堂	の葬他論 ☆村介石 ○ の字が四十年間の宗教	己象	要日		
○得手勝手	金抬七錢(奥義を説さたるもの也)		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	(州と宗教清水友次の宗教觀高島平三八の宗教觀高島平三八の宗教觀高島平三八生と趙明(其八)敬才鬼八	金拾五錢年年八十錢無		

番六二九五二京東替振 所務事會道 四谷中市東所行發

侶伴好の夏銷

《中附六》



詛 は

保

JE.

伽噺を書く詩人が親しい友だちや彼を崇めてゐる家庭の多いベルリンであつたある降誕祭の夜であつ 涯 は多くなかつたことも事實であつた。あるとき志賀はアンダーセンの美しい自敍傳を、あの「わが生 ちで彼のさびしいひとりの時を守つてゐるかを知つてゐる人はすくなかつた――またそのやうなとき 純な愛のこもつたよろこびで目を送つてゐるのであつた。けれどこの人がときとしてどんな苦しい心 させて、そしてさまでしな年齢の人々が志賀の友だちであった。そして人々とゝもに彼はたのしく、 のお伽噺」を讀んだときに一つのことに同情された一節を見いだした。それはなつかしい愛らしいお ゐるやうな、公平なそしてしづかな見解と考への落ちつきとがいちいるしかつた。 この人は友だちがおほかつた。人づきのひのやわらかな、品の そのとき愛らしい詩人はどの家族からも招かれずにひとりホテルの一室にすわつてゐなければな いゝ調子は男にも女にもいゝ感じを

たく彼にはまだ二十五といふ年にもか、はらずもつととはくまで生活のみちの先にす、んだ人のもつ

志賀はふかいそしてあたゝかいてゝろをもつた哲學者として彼の仲間かららやまはれてゐた。まつ

廿 Ŧi. 錢



月

號

蓺 文 かざ 來 る想 カン 麓 詩 感情を よ 記 曲 V 表 紀 現する 行 紀 壹場日 歌 說 行 所時壇 交每 圓響水 出 田 哲 申 癜 込次第初號より送る 會 費時 病 壹五 よ 别 圓時 大 4 多 所 石 山 村 梅

め愛 (0) する 墾理 田 園

歌詩 詩

原秋 西 m イ 村 佐 iv 伊 緒肇 不 作

> 进 潤 譯

科

學

新 の起 化 る

疾

病

醫 醫學博士 士

藤 杉 杉 木小 山 部 村 111 浪 元 元 雄 省 政 剛 次 治 譯 修 郎 郎

京東座口替振 一六八四二

之

助

務

譯 進

七

分

田高外市京東

(中附八)

だした。

れな を示した。志賀は人にむかつてはじめから輕蔑を準備して行く人ではなかつたのでこのやらな信用さ ろにカン この青 るない い博識にむかつて親しみふかく近づいて行つたたが一人の人であった。 トやシ 力> 年 つた。 はふしぎな氣質であつた、おほくの人々は塚本の言葉も行ひも一つの大きい法螺としか考 ョーペンパウエルの本を携へてあるいた。そしていくつかの外國 彼はほかのおなじ級の學生がはじめて数へられ るドイツ語 の文法に苦しんでゐるこ 語を知つてゐる樣子

1 0 て彼 おなじくして ば塚 フ るるとれにリストの ,, symphonische Dichtungen " そして志賀 で彈き試 みづからのもつとも崇めあるひは愛してゐるものを見すてなければならないやうになつた。 工 > 本のはこんな調子であつた―― 彼は志賀がピアノの教則本のはじめの方の曲を苦心して練習し 0 プロ Sonata みたのだらうと思つて歎賞の目を見はつて聞いた。 グラムにもこのすぐれた曲の一つもなかつたことを知つてゐたので、塚本がそれ 70 は る哲學や音樂や文學について いたるところでこの人に彼のみちを遮ぎられてゐるこゝちがした、 0p. 14. を練習してゐることを話したときに家本は いつも塚本の の話をした、そして志賀は近い數年のとのコン よりおほ そして彼が教師 V 知識 言つた。 からする冷笑 に敷 彼は へられ 塚 軽 本 てべ 蔑に を自分 與 1 よつ 味

志賀はその言葉のなかに見いだした皮肉を許しがたく思つた、彼は何よりも皮肉を嫌つた、そして

そんなむづかしいものを彈けるんですか、それなら高等學校をやめて音樂家になつた方がよご

6 らなかつた、人々はみな彼を招きたかつたのであつた、けれどこのやうな人はかならずすでによそか つた かれ 志賀のさびしさはこれに似てゐた、けれど彼はもつとくるしみの感ぜられるものも知つてゐ てゐること、思はれたので、 たれるアンダーセンに樂しい夜の集まりへの招待狀を送らなか

遊びに行く約束であつた、けれどには 彼 になった家 そして彼 それは彼のさうした悲しい日々の一つであつた。その日に志賀は はしづか 彼とても生れてから罪を犯さなかつた人ではなかつたから。 の他の友だちはそれた~の好みで春の一日をくらしてゐたので、志賀は年日を友だちのるす な居 々をおとづれまはつてそしてつひにいたづらに家にかへらなければならなかつた、そして 間にひきてもつて本を讀 かにその女友が病氣であつたゝめに んでねた。 一人の親しい女友の一家と郊外に ピック 7 " はやめに なった。 50

720 ŋ 1823 " と出 れたさまよびのてとを考へてゐた。それは昔の信仰のなか 3/ H 志賀は一つのそのときから三年まへにあつたことを思いだした。彼も一人の人を詛つたことが れど春 ヤ字に疲らされた目はしだいに本からはなれて行つた、志賀は 版 あ の年號のついてわる黄ばんだ本でアイスキロスの戲曲を讀んでゐた、そしてこまかいギ たゝかい空氣は花や芽のかをりにみちて何となく志賀の頭を惱ませた。彼は にのみ起りえたことではな オレステスのさましてな怨霞に逐 いと彼 は思

く知りあ カラ 高等學校に入つたときにおなじ級に塚本といふ彼より二つ三つ年上のがゐた、彼らはまもな ひになつた、そして彼らはたがひに興味がおほくの共通なところに出あつてゐることを見い

る

0

6

あ

3

私は實業につきませう、哲學をやつても金にならんからね。

さらですよ、 でも金の問題で哲學が存在してるのではないぢやありませんか?若い僧は言つた。 けれど現代は金の世のなかだから。塚本は言つて、そして彼が簿記や算盤を習つ

を借りさせた。その本は一年生ほどまへから彼のところにあつたけれど、もと志賀のではなくて塚本の つた。志賀はあるとき一人の友から授業料の融通をたのまれたときにあだかも持ちあはせがなかつた けれど彼はそのあひだにこのもはや輕蔑すべきものとなつてゐる人に對して一つの罪を負ふことにな 感じと、そしてもしもまへのやうに近くしてねれば必らず衝突を発れないことを憚つたゝめであつた。 であつた。 てゐることを吹聴した。 ので三冊ば 志賀は塚本と話すことをしなくなつた。それはしだいに意識しはじめた彼のこの人に對する優越の かりの金目になりさらな本を懇意な古本屋にもつて行つて、それをかたにして必要なだけ

三週間ほどたつと塚本は本郷通りの本屋に置いてある本が己れのであることを發見した。彼は志賀

のところに電報でその本の返却を迫つた。志賀は彼に逢つたときに答へた。

あれきりすて、置きはしませんから安心なさい、本を現金に代へることも活用の一つでせら、

あなたの考へによれば!

安になった、彼は仔細を話した、そしてあすにもそれを引きとつて返すことができることを告げて母 塚本はそれきり引きさがつたけれどなほ電報で志賀を驚かした、そして志賀の母はそれについて不

ことにそれが彼のまじめな努力のうへに向けられることを憎んだ。

塚本はしば~~哲學的なことも話した、そしてしば~~言つた。

トやスピノザやプラトンまで溯つてみても、たッショーペンハウエルの先蹤を見るだけで役にたちま 私 はショーペンハウエルに囚はれてゐたゝめです。どうかしてそれをはなれようとしてデカル

先に進んでゐるやうなことをいふ仲間にむかつてしだいにまじめな、そして銳どい調子で弱點を突く 生きくした、ほんとうに考へられ、感ぜられた思想を語らないことに氣づいた。そして志賀はこの ばかりが役たてるやうなものをもおはく含んでわた。けれどやがて志賀は塚本の話が一とも純 やうになつた。 この人はおほくの本をもつてゐた。そのおほくは哲學の本で、さらしてそれは專門の研究をする人

た、そしてそこでそのやうな遊惰な、何ごとにも熱心と真實のかけた群れに悦ばれるやうな笑 してゐることがおほかつた。そこでは塚本はふさはしくとりあつか なまじめさで迎 塚 本はおなと級のなかの、志賀にいはせれば無性格と名づけられるべき一群れの方に近づいて行 へられずに輕 い冗談の相手として待遇されてゐた。 はれてゐた、彼は志賀のしたやう ひ話

た、そのあはれな犠牲な僧侶の出身で何年か,つてもい,豫定で印度哲學を修めようとする學生であ 智 は塚本が 一人の 頭のにぶい、けれど熱心な學生に哲學の無用なことを說いてゐるのを見いだし

った。

むためでなく、たい彼を妨げるためにもつて行つたことを知つてゐた。

やがてある朝彼は最後の督促をした。彼は言つた。

つぎの朝志賀はまた塚本がいつものリーダーを音讀してゐるところへきた。そのかたはらには二三 ――私はけふはあなたの良心にむかつていひます、そしてくりかへしませんよ。

人の仲間がゐた。

――もってきましたか? 志賀は言つた。

何を? 待ちかまへたやうに、そしていぢわるく昂然として塚本は問ひかへした。

――私の本です、忘れましたか?

――忘れました。

・耻しくもなく言へるね。志賀はきつとして言つた。 ----こんな本を讀んでゐるから忘れるので

り、正氣になつてものをいひたまへ、考へたまへ!

さう言つて志賀はそのリーダーを攫んで窓の外に投げすてた。

さうむきになって言はなくても、おだやかに言ってわかるちやないか。

つた、そして彼らは志賀を笑ひの材料としようとして見てゐた。彼はそれに氣づいてさらに峻しくな かたはらにゐた仲間は言つた、彼らは志賀のくるまへに塚本からその話をさいて笑つてゐたのであ

私はよくあなたのお母さんに相談してからきめませう。塚本はしづかに言つた。

を安心させた。つぎの日志賀は本をもつて行つて學校で塚本にわたさうとした、けれどこれはゐなか と志賀の評判のよくないことを話した。それを聞いて彼は塚本が彼をそのやうにも誤解し、そして誣ひ った、そして家に歸ってみるとそのるすのあひだに塚本は志賀の家にたづねてきて彼の母にさまぐ てゐることを意外に思つた。

さへもついけられたけれど、たれもそのうるさい音讀には冷淡で止めるものもなかつた。塚本は志賀が 入つてきたのに氣づいたけれど見むきもしなかつた、そして呼びかけられてはじめて彼の方に向いた。 ムのだといつてローャル、リーダーの二を音讀してゐた、これは他の人々が勉强してゐるかたはらで つぎの朝志賀は學校へ行つた、そしてすでに塚本がきてゐたのに逢つた、これは英語を根本的に習 永 々あ りがたう、充分利用しましたからお返しします。志賀は言つた。

n てゐるからとつけ加へた。 ば彼は塚本の必要でなくなつた本を借りたのだけれど、彼みづからのはいまそれを迫つた必要とし 塚本はだまつてそれを受けとつた。志賀は彼から貸してある本をもつてくることを乞うた、何とな

承知しました。塚本は答へた。

けれどこれはそれをしなかつた、志賀はくりかへしてそれについいた二月のあびだに六たび催促し

なければならなかった。

の宗教藝術の歴史の本をしひてもつて行つてゐたのであつた、そして志賀は塚本が決してその本を讀 志賀もつひに怒らされた、塚本は志賀のもつとも熱心に研究してゐた十三世紀の教會史とそのころ

獄のそこから出てきた人のやうに苦しさうな、何ともいへない顔をしてゐましたよ。私はあ

の人がそんな顔をしてゐるのを見たことがありませんね。

私は あの 人を詛つたのです。 志賀はしづかに言った。そしてくはしいことを話した。

いままであなたにだまってゐましたけれど、と友は言った。 ---塚本はときどき私にむかつて

あ なたについて信ぜられないやうなことを言つたことがありますよ。まるで中傷ですね。

ばならないでせうね。人からも神からも見はなされてどこにも幸福はなくて僞はつたたのしさと僞善 ―それはどうでもよくてよ。でも私はいまは あ の人はきつとたれにも愛されずにあゝして皮肉な心ちで自らのたましいまで冷笑つてゐなけれ あの人がかあいさらでたまりません。志賀は言つた。

ばかりで生きるのでせう・・・・。 志賀はかすかに涙をもつてゐた、彼の友は、けれどそれは塚本みづからが擇んだことでそれが 報

られたのだらうと言った。

21 あられませんよ。

志賀はしみんくと言った。 さう考へるの? けれど私はやはりあの人にも私たちとおなじ神様のつくつたすがたを認めず

に彼は彼が世界のもつともあしき人に對しても親切のつとめを怠たりたくないことと、 彼はその夜一つの祈りをしたあとでつぎの日に塚本にわたすために一つの手紙を書いた、そのなか カ> につくられてゐるかを識つたはじめの人であつて、そしてそれゆゑにその存在について責任を 海軍の士官である良人の身のらへかと思つてあはて、起きて行つた。それは塚本の謝罪であつ ひなる生涯のどんな終りにも彼の愛がのこつてゐることを言つた。何となれば彼 つた。夜ふけて彼 は床についた、十二時でろに彼は 一つの電報に起された、 は塚 そして塚本の 姉は 性格

和の母 から数へられたま、、馬鹿をよそはふのも大ていにしたまへ。

たつたときに彼は塚本がひとりでゐるのに逢つた。そして言つた。 志賀はこの人の存在 を憎んだ、そのとき彼は塚本がこの世界にゐてはならないと思つた。二三時間

のではないのです、けれどあなたが私の知つてゐる時間のあひだにしたふるまひのすべてについて考 へたことはあなたみづからでもあなたが生れなければい、人間であったと思ってゐるだらうといふこ き人間と思ひます、そしてそのやうに取りあつかひます。私はことさらにこんどの事がらでさらいふ 私はもはやあの本を返されなくてもいゝのです、けれど私はあなたを世界ちうでもつともあし

さやうでございます、そのとほりです。塚本は冷笑ひながら言つた。

あなたは私のこの怒りを理解しなければなりません、他の人にはまつたくできないでせう。

賀は言つた。 つとも大きい罪なのですよ、それを知つていらつしやい、あなたのはそれなのです。 ――けれど世間の法律は性格の惡をさばくことができないけれど、これこそ倫理的

はうしろから彼を呼んだ、彼はふりむいて答へた。 塚本はまだふしぎな顔をして冷笑つてゐた。それを見て志賀は「惡魔!」と罵って立ち去つた。塚本

――あなたのたましひは永久に詛はれていらつしやい。

の人はくるみちで塚本に逢つた話をした。 その た彼がまじめな、寂しい心ちでゐたところへ志賀のもつとも親しい友がたづねてきた。そ

志



峰 オリーブ・シュライネ

ル

作

て、 部 5 屋 聞 0 母 6 ブ 木 親 0 え 内外を蜜 て、 は ン 0 下 開 で遊 放 唸 1 た窓 午 6 蜂 h や野 で居 な 後 9 月 カゴ 0 5 蜂 風 3 0 7 5 所 カゴ カゴ 居 7 ĺ 花 外 る 力 12 坐 V 2 粉 カン 6 子 0 7 6 足 吹 供 1 0 * 共 居 木 込んで來 720 黃 0 聲 飛 色に んで カゴ 7 窓 た。 力 L 行 カン T 片 は 近 彼 12

を取 針 出 2 0 た 彼 7 本 女は 叫 來 7 出 0) 飛 聲 12 め Ŀ L 其幾 テー 7 h 時 T 28 に足 とは 6 居 置 居 た。 5 た ブ 來 彼 物 0 S 72 た。 D ル 長 女 力> を膝 い蜜を 机 0 0 CK 彼 彼女 前 耳を 女 0) L 上 0 0 0) 30 Ŀ 0) 作 混 蜂 は 低 仕 らぬ 亂 出 12 大きな籠 V 0 事 椅 載 せ 腍 カゴ た せ、 蜜蜂 i 聲 次 子 り引込 第 め と騒 12 半分 た。 から 腰 h 掛 R それ に遅く 仕 だ は H 6 机 事 V T 子 す 縫 から 8 0 上 供 な る 取 物

> 觸 6

> > 齋 藤 未 學 譯

つて 自分 次第 聞き 居た。 手を横 其 其 < 女 彼 貴 3 E 腹 聞 it 女 居 方 0 に大きく な 子供 俯 えた 次 人 其 周 12 る い) は カゴ 第 伏 九 頭 カゴ む [章] 誰 0 6 共の ケ 12 5 密 子 前 をグ 분 0 です ま 睡 月 近 13 不 は 0 12 Ł 聲 目 逐 < w 思 頭 氣 彼 お 9 > 私 と彼 て來 の子供 長靴 腹を 議 42 10 カゴ 0 女 0 飛 さし 樣 は 益 な あ 0 h 夢 聞 々夢 F 女は 所 私 廻 T た 1: を見 を妊つて居 えなく 0) 7 6 る様 h ~ な 0 上 來 8 來て、ブン 寄 逐 浦 る 觸 て、 樣 12 飛 に思 720 h 5 12 和 つて來た。 頭 た。 だよ 廻 な L は 12 テー を つた。 彼 は 7 2 人 横 遠く 見せ た。 る事 間 女 すると其 る と言 は 蜂 プ 12 なる 聞 た。 * IV 蜂 0 化 胎 鳴 0 えた 唸 感 1, カゴ 兒 L CA S 彼 7 端 聲 10 人 な 私 7 次 0) 72 25 第 * 女 b 眠 1 は カゴ カジ

た、「ワルカッ タアヤマルッカモト」。 志賀の母は心配して彼の室にきた、彼は事がらをみじかく彼女

5 あくる日の うちでし 朝彼は塚本を見た、この人は近眼なので彼に心づかなかつたあひだに志賀はそのまつ暗 かれた、 まつ青な死人のやうな顔 塚本の皮肉な心もつひに感じた打撃と一夜のねむ

とよりもたのしいことですよ ただもつと善くなつて下さい、人から愛されそして愛することは人を抑へたり傷つけたりするこ あなたは罪人のやらにして歩かなくてもいゝのですよ、志賀は塚本を迎へてやさしく言つた。

もわたさなかつた、そして彼は塚本がらやし、しく帽子をとつて禮をして立ち去るのを考へに沈んで なく、飛しめることさへも塚本のもとより怜悧な頭腦を知つてゐるいでひかへめにした。書いた手紙 志賀はおはくいふことはなかつた、 彼は人がすでに悔いてね る罪にむか つて何も責めることはでき 58

ず一人の友にその詛ひを解くことをもとめてゐるのを聞いた、そしてそれを一つの强迫 たはげしい怒りが、たとへそれは正しいものであつたとしても、ふたゝびおとづれぬやらに希がつた。 釋してゐた。 憂鬱性の誇大妄想狂として精神病院に入つた。そのとき彼をなだめて病院まで送つた人 けれどその 對して感じたはらからとしてのひろい愛はつひ 思はずにゐられなかつた、さらして一人のたましひを詛つたことのみが殘つて、そのあ 志賀は 見送りは一つのよりよき生活 神に造られたものをはろぼすことをたれにゆるされたらう?志賀はその このふしぎなできごとを彼のしわざであったと思ふときにいまでも彼み へのものではなかった。まもなく塚本は發狂した、そして に作用なくよわきまっで あ つた このであ ときに彼 觀念として解 々は彼 2 づ のもつ ひだに がたえ らを

は 何蒙 方光彼 は で す 丰 を カン 延 3 L 叫 た h 0) だ 6 时 親 は たぢろ V 7 -貴 方

見 彼 げ は 何 36 た 1 な カン つた。 彼 女 は 彼 0) 臉 0) 間 を

貴 方 は 子 供 12 何 を おい 30 づい it? 13 3 事 カゴ 出 來 生

Ŀ

7

言

0

健 康 6 す カン

E る 私 此 舐 カゴ 執 50) る 觸 病 燃 は 12 72 彼 40 人 る カジ 熱 死 は 病 其 h を喚 だ 血 管 請 起 初 0) す 中 的 1 0 12 だ 猛 癒 火 る 私 0 0) だ 樣 カジ 彼 12 12 彼 與 0 血

彼 は 方 頭 は 富 を 振 8 か 0 與 た ^ る 0 6 す 力>

カゴ 3 4 6 -滑 2 時 俺 n 0) b な 彼 觸 奪 出 見 0) n 取 す 12. 頭 上 0 カン て了 E 人 げ 間 6 7 0) 宏 10 な 居 太 H 中 彼 0 3 だ n 間 17 力ジ ば 忽 黄 12 金 to 通 其 光 * 黄 9 金 明 拾 カン 8 は > は 見 0 彼 X 12 3 0) 外 指 0) 0 0) だ 7 間 者 カン 彼 力ご カン

路 カゴ 6 から B は 0 n 貴 H 3 其 麼 方 1 1 間 D 0 あ H お る 0 72 0 3 यी づ 其 め な H 路 12 73 は 砂 V 彼 <u>__</u> る 0 ٤ 中 0 0 は とらね 彼 指 は答 名 譽 0 は 6 誰 た す なら 4 知 カン な 私 5 な は V 路 私 V

> だ。 急 逆 め は 閃 7 n 身 た カン 9 -は 差 13 12 2 な ね を 彼 6 彼 V な V) 谷 時 見 は ば 7 0 延 は V <u>___</u> 0 V S だ。 12 間 13 居る 其 貴 1 出 ___ 燃 0 と言ふ た 愛 75 す 方 叫 5 O 折 7 光 時 事 0) 1 15 si る m カン は お 3 胸 明 は 6 時 6 S L 8 饑 彼 下 4 0 與 7 彼 出 聲 8 彼 12 久 n は 0 抱 は 彼 彼 來 ^ 見 V) 彼 8 は i 7 13 其 C は る な 0 誾 は 5 路 居 殆 人 愛 遙 は 居 る 7 0 V < h 福 旅 する だ。 12 彼 る 0 21 3 だらふ 從 F. をせ 间 彼 めろ 私 0) は 0 頂 愛 他 がそ だ 彼 3 愛 は 0 W. 0 す 1 上 は カゴ 6 ね ね 0) まで ば き地 る n す は ば は 其 私 36 to な 誰 之は な 方 5平 カ> 彼 0 捉 達 線 6 36 5 1 0 其 な ~ 1 共 12 お 间 42 4) 對 樣 路 T 沿 彼 0 前 0 を認 居 3 は 旅 5 私 1 自 7 1 7 1 彼

-彼 は 成 功 ĺ 7 す 力>

佇 た る 緒 みそれ 奇 0 S P だ。 17 走 13 る 彼 12 光 何 故 時 は 耳 から 失敗 彼 傾 な 13 其 6 け を せ 奇 和 人 ね は 怪 K なら 文 は ば な なら 聲 和 彼 な 1 < 17 な 力> カゴ 6 S 先 h 彼 V 0 他 だ 12 决 呼 彼 0 勝 人 而 Ci カゴ 他 點 1 カン k 4 0 1 12 は 彼 達 人 Ł 渍 4 す

知 血 6 私 ず 12 は 12 健 赤 康 V 生 血 0 幸 液 神 福 力了 だ 舞 な 0 6 一と言 漲 カゴ 常 0 7 だ 0 た 彼 俺 は 疲 0) 觸 勞 n 弘 苦 12 者 漏

E 力ジ 3 は 觸 _ _ 得 私 0 彼 る > V 言 B だ る 12 0 人様 事 同 其 觸 カジ 胞 者 5 2 而 出 は n な (1) L 來 7 M. 物 ~ は 事 に不 と筋 見 嘘 る 彼 は だ 0 9) 知 自 だ。彼 1 肉 6 目 として 私 ず 0 由 色的 12 欲 は は は 濟 す 依 せ 福 私 3 0 h __ 0) U I, て生 裥 所 0) は だ 15 何 (1) カゴ かる 望み 言 h B 弘 だ 欲 0) 9 は 事 13 彼 カゴ m V 私 出 0) U な 來 手 彼 カゴ

ると 併 中 L 72 胎 别 0) 子 0 カゴ は 口 靜 8 カン 出 12 鉛 0) 樣 横 は 0 7 居 72, す

n 導 n カン V 私 る < た 田 T 忘 事 者 親 同 25 カゴ は 觸 は n 胞 な 5 事 出 正 5 を 感 私 n は 來 なく は る < 13 化 7. 皆 御 す 呼 S と言 其者 败 から る L 其 0) だ。 7 ふ事 名 は 見 私は名譽な ろら 眠 10 死 n * 此 數 h 2 考 る 7 數 世 0 2/6 樣 居 0) 世 ^ な高 h 7 後 世 2 0 見 だ 0 後 랓 間 ょ。 ろ 女 6 で カン V あ で 36 5 岡 鵬 忠 私 3 70 0 Ŀ # 6 n 0 カジ 響 10 間 5 觸

間

12

其

呼

吸

は忙

L

てくな

うって

來

72

12

痙

經

す

る

樣

11

微笑

を湛

12

人

カジ

現

は

n

7

來

を出 つても 0) 私 だ。 せば 生 私 13 孤 は 彼 獨 愛 其 世 供 界 配 は 8 12 暮 神 偶 0 其 觸 處 者 人 す 15 6 樣 は カジ 40 h だ 皆 别 な T ___ 見せ よ。 貴 0) 事 彼 方 は 21 人 Ł 私 對 な 0 手 私 [___ 1 V カジ とは を 手 7 見 真 反 F らと言 く様 出 醅 觸 76 す n 15 15 人 事 所 る Ł 3 事 力了 6 カジ 其 だ 出 3 カゴ 5 手. 來 あ

る

は た

時 胎 0) 子 は 蠢 V た

此

だ。 は 經 蔭 75 手 V W を 樣 者 私 す 世 足 (引: 何 77> 7 3 家 €. 13 3 觸 2 15 は 6 親 とま 卓 B 觸 え 75 被 n 6 0) 7 女 72 誠 から カン 出 5 頭 た 作 來 6 L 思 0 V 0) 深 ほ 共 72 者 想 る 7 觸 72 __ A とら 人 家 h 見 子 6 0 < n だよ。 た あ な 毅 た は 6 カジ 失 る 76 71 9 1 * 72 亦 私 敗 事 私 た 0 飛 丽 5 政 9 12 カン カゴ 13 CK 之まで 身を 後き治 才 手 7 過 泣 出 きる 屋 頰 < 來 を 12 能 寄 樣 る B 0 觸 0 彼 0) 基 な 0) 前 2/3 22 76 前 世 時 女 7 皆 43 70 事 だ 何 な < 0) も二人 言 蜂 は 成 6 h 2 功す 軍 76 だ また 7 H は な 12 た 部 其 S とな 火き」 私 る 6 來 屋 私 細門 カジ h 0) 口



愛の切れはし(ゴールスワーシイ)

第三幕

采と唸聲の混合した音に耳を傾けながら、其處に徘徊してて扉は開いた儘になつてゐる。バーラコムと其の妻は、喝バーラコムの居間には窓掛が引かれ、洋燈が灯され、そし第一場

「彼女は内側の扉へと進み行く」妾は迚も彼の方に面向で、これなことは起らしたくはなかつた。 しても、こんなことは起らしたくはなかつた。 しても、こんなことは起らしたくはないことにないてしまった! うちの家鴨を一羽殘らず無くなしても、こんなことは起らしたくはないことにない。 に戻は開いた儘になつてゐる。バーラコムと其の妻は、喝

をするがらには。パーラコム これが當り前のことさ、あんな遺り方けが出來ない。

バーラコムの妻彼の人は己れの欲する所を人に施し

てるまでのことですよ。

人の言譯ばかりしてるんだなあ。それは尋常ぢ

やあるまいよ。

パーラコムの妻 彼の方が牧師さんをしてるなんです――それだからこそお氣の毒だつていふんですの果なもんでさあ。羊のやうにやさしいんだもの

バーラコムの実践了度目なり抜り方はこれから如何らう。

扉口で迷つてゐる。ストラングウェイが暗闇から這入つて返って見て躊らふ、そして妻の後に續かうとするが内側の彼女は急いで行く。バーラコムはギョッとして後を振りするだらう? (低音に) お、 來な すつ た!

<

黄 英 彼 金 陸 海 0) 樣 蒼 18 は 原 40) 見 起 る 一青~ 3 る 原 砂 太陽 0 0) を望 だ 横 6 あ 水 10 26 切 始 る 泡 0) 0 な 終 10 7 彼 渚 輝 砂 3 13 4 Ł 漠 12 其 渡 36 真 0 自 荒 Ш 6 不 思 (1) で 廢 I 南 水 議 0 5 6 は な 3 燃 事 12 あ 其 光 40 6 3 處 3 ò 3 0 紫 艇 カン る 石

は 7 黑 何 彼 彼 樣 女 カジ n は は異笑いい 真 は 其 半 質 處 閉 5 ち 行 なんで 方をし た 7 < 彼 ? (V) 72 0 す 6 と彼 臉 3 力> ___ 0) 力> 間 [<u>____</u> を 言 被 3 見 0 は 母 E 72 訊 親 げ 30 13 i た 0 72 彼

未

だ 1

見

12 中

事 42

0)

13 光

V

光

6 感

あ

3

光 0

明

其 光

光 明 造

明

は

多 N

分

艢 事

0)

13

明

0

得

カゴ

あ

72

0)

な

V

其

兩

0)

H

女

だ

华

分

L

カン

形

6

n

V2

腦

4 3 と彼 前 力> 7,, Z 12 75 0 T 此 眠 9 7 居 る 女

お

觸

5

75

3

V

<u>____</u>

と言

0

72

上 -12 此 其 理 想 を カジ 横 お 前 實 m 現 L 出 7 來 女 IZ 12 6 囁 Z V 7 カラ 微 お 笑 前 12 L 對 た

7 L 報 る 7 胎 15 胎 B 兒 だ 兒 カゴ は 7 は 彼 深 V 女 < 72 0 其 消 聞 カバ 夢 え 0 4 を 得 72 母 感 親 72 得 は 0 4 L 之 72 彼 0 す 女 n 未 6 0 だ 胎 6 內 入 H あ 光 0 12 3 を 橫 か 見 は す 72 m る

n る 得 B 品 IIII は 4 0 L なら T 6 3 それ あ Y 13 3 0) は 6 0 多 あ (大正 分 る 其 £ 報 光 五二 明 2 t 得 R 13 其 113 理 處 想 カン は 12 實 存 現 在

默 靈 物 竹繁 俊 編。春 陽

語のの 上俗醸もそ り世惣本にな酵新の河 をの太書與りしし時竹 譲中、は味を切い代默 辨彼あ如れ作り阿 だ孝天れる何の者ら願 にたの村る扱と彼今於沙綱喜井「つのれ目け た中がのる **翁羅三長** 翁の天才を知ることが難してゐる。ラムのシーニ則、十六夜清心、髪結 たかといふことは四年が頽廢したる徳川宝の吾々と殆んど時の名徳大な我が劇作者 日世末代者 か、シ結里 本界紀をの でエ新と アク三一重 ののの接一 近代文藝とまれてある。 同中時忍 史世だ最 時物金ぶ

きる

とど高

べの き深か 編の で者があ る我好著 ででである。「(價・○・八五)」では、「真面目な、 5 126 き掲は忠に言あら 12. りけ容質自つるう さら易に然と風がない。本書はない。本書はないに解阿表人もない。 70 と故 は人 誠に感し 充題觸は物の默ま 分を物さのに阿た で當にう性書機默 調緣 う性書強默 あ時通と格き劇阿 す故

音が聞える。

アイヴィーあたし、厭や。

つちや駄目なのよ。

よ。
よ。
よ。
かれ(
原の方へ進み寄って)
あたし行き度くないの

グラディスの聲「熟透娘出て來ない」はうら、さわ。 マイヴィ 〔足摺りして〕 わたし、ちつとも踊りたかななくちや「8の字」が踊れやしない。あんたが來なくちや「8の字」が踊れやしない。あんたが來なのよ。

から彼の鼠色の牝馬があつて來るわよ。早く。グラディス(駈け込んで) アイヴィ、早くさ!芝地の方ボーリンなら打てるでせら!

は慌てた餘りに扉を明けた儘にして行く。『進まわアイヴイの手は摑まれて浚つて行かれる。子供達明をと摑み合ひと、喉を鳴らす聲や鼠が泣く樣な聲と共

ブラドミア夫人の聲[月外で] 誰方?

ボーラコムが這入つて來る。 一般をはない、 一般を表して動く、が其の時バーラコムの妻と、其の後に追いて 一般を表して動く、が其の時バーラコムの妻と、其の後に追いて 一般を表して動く、が其の時バーラコムの妻と、其の時にない。 一般をはない、が其の時バーラコムの妻と、其の中に案 を表して動く、が其の時バーラコムの妻と、其の中に案 を表して動く、が其の時バーラコムの妻と、其の中に案

で御座います。
がリラコムの妻はい、あの奥様、いらつしやるんださらはいらつしやいますが――あの、宿の申すにはばいらつしやいますが――あの、宿の申すにはがリカムの妻はい、あの奥様、いらつしやることがリティミア夫人何といふ不面目な事だ! ストランブラドミア夫人何といふ不面目な事だ! ストラン

ならない。 はなくちやならない――大至急に會はなくちやブラドミア夫人 さうでせうともね。妾は彼の人に會

召し上がるのが先生の為めには一番よくはない なと思いますんで。宿は申しますんですって、 生は恰で崖の端に立つてゐる人の樣ですって、 生は恰で崖の端に立つてゐる人の樣ですって、 のて。

り向く。

・の向く。

・の向く。

・の向く。

・の向く。

・の向く。

・のののののののでは、一歩進む。音を聞いてストラングウェイは振足に落し、追び詰められた人の様に四邊を眺め、決して眼上に落し、追び詰められた人の様に四邊を眺め、決して眼上に落し、追び詰められた人の様に四邊を眺め、決して眼から、彼は窓を向いて外套と帽子と教會堂の鍵とを窓臺の本る。彼は窓を向いて外套と帽子と教會堂の鍵とを窓臺の

だつてえことを。
かしも此奴も、唯つた今の馬鹿騒ぎには無關係がしる此奴も、唯つた今の馬鹿騒ぎには無關係

ストラングウェイ「幽かな微笑をもって」 有難ら! バーラコム 何卒氣に掛けなさらない様に。 あいつら恰で蜂の團りみてえなもんです。「不安らしく間ら恰で蜂の團りみてえなもんです。「不安らしく間を置いて」失禮ですが、今朝の出來事を喋舌らして下せえまし。考へる暇もなく唐突に起つたことで何ともお氣の毒なことで御座えますよ。全く人間の根性に逆らつたことをしたつて無益なことでさあ。貴方がなさらなけりや誰もやるなことでさあ。貴方がなさらなけりや誰もやるなことでさあるませんやね。「爾もストラングウェイの顔を倫み見て」勘辨して下せえましよ、こんなことを申上げて。ですけれど情ねえぢやありませんか。

ようぢやありませんか。
なんた、現在自分の持物を、何の未練もなくお

トランかウエイの眼を瞶めようとつとめる。 バーラコムは見上げて憔れた顔面に燃える様に見えるスストラングウェイ わしの顔を御覧、バーラコム。

ける程なんだ。止して貰はう!
止して貰はう!《彼は胸に手を當て、」此處が張り裂い、ストラングウェイ そんな様に見えるかね? 御発だ、

彼は徐かにストラングウェイを顧みて出で行く。わしは何も云ふんぢやありませんでした。バーラコム(敬意を失して濟まなかったといふ風で)御尤もで、

ストラングウェイ(獨語して) 有情! 無情! はゝゝストラングウェイ(獨語して) 有情! 無情! はゝゝますよ。あたし駈けてつて皆に知らおいでになりアの奥さんが教區長樣のお宅からおいでになりますよ。あたし駈けてつて皆に知られる、ブラドミすよ。あたし駈けてつて皆に知られる。

て踵を返して家の中へ這入る。アイヴイは顔をしかめて今ストラングウェイはぎょつとして、彼女を注視する。そし

だが私は参らぬ方がよいでせら。

御親切によく來て下さいました。

私が考へても、氣位が高い人なんですからね。

ブラドミア夫人驚いた!可哀相に!さゝしつかり賴 兎に角變挺子な仕事だ。

ム。

むよ、パーラコ 夫人は考へ込んでじつと立つてゐる。やがて寫真の處へ行 つて、それな瞶る。 バーラコムは前髪に手を當て、行つて了ふ。ブラドミア

ブラドミア夫人 此の賣淫婦奴!

た、驚くほど落着いたところがあるので、ブラドミア失人 イを見る。彼の身に、又彼の蒼白の顔には、非常に落着い 彼女の後方に立つてゐる。彼女は振返つてストラングウェ も暫しは口を開き得ない。 ストラングウェイは音もなく這入つて來る。そして丁度

ブラドミア夫人「途に」 やい!如何始末をしたらよいか、落付いて考へ 切れたものちやありませんもの。さ、いらつし 遠慮にさして貰ひませう、さもないと迚も遣り って」妾はお婆さんですよ。お婆さんだから無 大層お氣の毒に思います。「彼は返事をせずも一步近寄 てみようぢやありませんか。 如何にも悲しいことです。妾は

> ブラドミア夫人貴方は今、男として最も悲しい惱に 會つてゐるのです。

ストラングウェイ そうです。

ブラドミア夫人「稍々同情の響をもつて」 らね。 よ。貴方のお母さんといってもいゝ位の年齢で たね――三十五?妾はもうおつつけ六十八です だが貴方は遣り方が間違つてゐた。 なすつたか、それは妾にもよく分つてゐます。 すよ。此の幾日といふ間貴方はどれ程の苦勞を です。すべての人の眼で見られてゐるのですか どいふ者は我儘氣儘にやつては行かれな 居る私達は天使ではありません。そして牧師な 貴方お幾歳 此の下界に いなもの

ストラングウェイ「窓臺から教會堂の鍵を取って」何卒これを お受取り下さい。

ブラドミア夫人いっえ、いっえ、いっえージアトラ ストラングウエイ ち歸りを願ひます。 す。「鍵を差出して」何卒これを教區長の許へ 方には腹の立つことがあつたのですもの ンドには彼れ位のことは當り前です。 ジアーランドのことぢやない 教區長にはお詫びをいたし 。そりや貴 、お持 0

はあ、

ブラドミア夫人にメーラコムに」 それちやお前達は最早 ラングウエイさんの顔を見たんだね 見ました、だが厭やな顔色です

バーラコムの妻、殆んど獨語の様に 1 ずたくにちぎられてしまった、全く左様な體から抜け出して了ったのがよく分る。身體が は今年は隨分と悲しいてとがあつた。元氣が身 全く厭やな顔色ですよ。 お可哀相 に、先生に

バーラコム え中から、先生はもうちゃんと彼の事を承知し 手を觸れて)奥さんの事ちやねえかとおらあ思ふ そいつも無理のねえことさ。だが先生の心配し 真實に卑怯なこつた。とはいふもの、矢つ張り 生はそいつを今まで口に出す譯には行かなかつ てるのはそんな事ちやねえ。 たんだ。唯それ支けでも分別がなくならあね。 てわなすつたんださらだ。考へても見ねえ。先 んだ。人の話ぢや、奥さんが家出 悄氣返つてる人間をヒッスするなんて 此處なんだ、「額に をなさらね

おらわ鐵砲に鍵をかつて藏ひ込んぢやつた。む

があるよ んでねたつけ! があるよ……朝になつたらてつきり其の人は死かし、おらあ、あんな様な人に出會はしたこと

ブラデミア夫人 バーラコ しといて貰はう。彼の醉漢を窓から放り投げた箱だと覺悟してゐておくれ。皆にその事を知ら れ、どんな者でも此の事を村の外でお喋舌りす 宜う御座んすか、バ と云つて下さい。「バーラコムの妻は家の内へと這入る」 さい!「バトラコムの妻に」行つて妾が會ひたいから とは気持がいっ、少しーー るものを見付けたら、 1 ム、馬 ラコ 誰かれの容赦なくお拂ひ 2, 鹿なことをお言ひ だけど。 男にまれ女にま

バーラコム さらですよ!新聞やが聞いたら大喜び

ブラドミア夫人おき、さらだ!宿屋の人達は皆起き バーラコム でせらよ、いっ種だつて。 てゐる。行つて今妾が言つたことを話しなさい るんだから骨な仕事ですなあ。 直ぐに行つておくれ、バーラコ あんな事を云 奥さんの一 ひ布らさすてとは出來ない、 件は もら誰 それに彼の方は る彼 2. も解 つてね

せん。甚麼事があらうとも貴方の本務を遂げな

ストラングウエイ さい、ね、貴方?

ブラドミア夫人 さらいひましたよ――成る程、貴方 ストラングウェイ(顔を慄はして)可愛いのです! ブラドミア夫人
ちや貴方は彼の女が可愛いのですか は如何かしてゐる。さあ。確りなさい!それで

ブラドミア夫人 妾はどうしても貴方の合點が行くよ ストラングウエイ らにしなければならない。 來ないぢやありませんか。 防がらとはしません。

は貴方は今貴方のしてゐることを防ぐことが出

のは牧師の役目です。 歴事をいふのぢやありません。人の一生を導く 子供は教會に二人あります。妾は當てもなく恁 妾の父は牧師でした、妾も牧師に嫁ぎました。

ブラドミア夫人「鋭くストラングウェイを眺めて」 今晩の貴 ストラングウェイ「極めて低音に」然し私の役目ではあり ません。もう止して下さい!

> ければいけませんね。 方は如何も少し變ですよ。お醫者に診て貰はな

ストラングウェイ「微笑は彼の口唇の上を去來する」もう少し して快くならなければ――

プラドミア夫人誰にでもそれは辛いてとに違いあり な戦慄がストラングウエイ襲ふ、彼は扉に凭りかいる」 ません、そりや承知して居ります。――「痙攣の様 ですけれど、さあ、身の明りを立てなさい

〔對手の沈默に腹を立て、〕貴方、身の明りを立てな といふ模範でせら! 男と何の苦もなく安樂に暮させようとしてゐる 仕打ですーーをした一人の婦人を逃がして 方に對して惡らしい仕打---さらです惡らしい く譯に行きますか?貴方は一人の婦人それは貴 ません――これ文けの村の者に我儘をさしてお さい! 貴方は、貴方の地位を 捨てる 譯には行き のだといふことを御存じではないのですか。何 他の

ストラングウェイ何率、奥さん、その事は仰つしや らないで下さい!

ブラドミア夫人言はずにい濟なされません!妾共の

で承知しまいと思います。 とで承知しまいと思います。 例卒持つていつて下さい。 いがあるのです。 何卒持つていつて下さい。 で変取りません。必然妾の良人――教會が決したです。 何卒持つていつて下さい。 はないよことの出來ない思います。 [胸に手を當て、] 此處に云い切れ以程の思い

ストラングウェイ 持つて行って下さい! ですか! 妾達はそれを受取りやしませんよ。貴方は明日教區長様の所へ行つてお話ししなければは明日教區長様の所へ行つてお話ししなければのけません。今の所貴方は心が働れてゐらつしゃる。 あとになれば考へが變りませう。

「プラインドを引上げて」美い晩だ!恁麼に美い晩はストラングウェイ「奇異な微笑を持つて」かも知れません

すんですよ。女がてぼす涙、それが何よりの證方に同情する位のことはこれでも知つて居りま六か敷い老婆で御座いますよ。ですけれども貴背を向けるものではありません。妾はそりや氣ずラドミア夫人〔驚いて靜かに〕 力を借さらとする人にブラドミア夫人〔驚いて靜かに〕 力を借さらとする人に

せん。さ妾に――?

からね。 というとう はんにもなりません ではいい とません はいい という といん まの 思はくはお解りでせん。 (寫真を指して) といん 妾の 思はくはお解りでせん。 (寫真を指して) といん 妾の 思はくはお解りでする。 またい というとう という といん とれまにする 気なからね。

て下さるな!

貴方まあ自分でなすつた事を考へても御覧なさ貴方まあ自分でなすつた事を考へても御覧なさいな。奥さんを取り返せなけりや、貴方、離別しなくちやならないぢやありませんか。どうしたつて貴方は、奥さんが斯様に内證で罪造りするのを助けることは出來はしません。

たいのです。さあ!此の儘には打捨てゝ置けま教會仲間の人達の希望する樣に遣つてお貰ひしずラドミア夫人否、否、否、妾は貴方に、教會――凡てのストラングウェイ、彼女を苦しめるのですか?

ジム・ビーア 先生、今晩は。

20

締めるやうに其の打ち顫える手を持つてそれをれぢる。〕恁麽 たんです。「奇異な而して恐ろしい娼の仄めきを持つて」め けたのは、 だから如何したら宜いかと思つてやつて來たん ストラングウェイの上衣を取上げて、一人の人が他の人の頸を で。丁度滿月の晩でしたよ。わしが二人をめつ る。〕彼奴等が先生のことを笑つてるんですよ。 喋舌りもしない。ジムは想像も及ばぬ程の徐い調子で語り續け れも昔はやれたもんだ。「ストラングウェイは動きも つけたんです、さらして男をふん捕まへて「彼は 4 に立つてぼんやりした眼でストランヴウエイを見下ろす。 て依然として其處に横はる長い黑色の上衣の傍の窓臺の側 先生、彼奴を窓から放り出しましたね。お そろりしくと、幽かな微笑を浮べて這入つて來る、そし ――男とわしの女を。わしはめつけ

風 に締めてやつた。

上げる。 上に落ちる時ストラングウエイは起ち上がつてそれを取り 其の上衣が、肺氣を絞り出されて了つた身體の樣に、床

ストラングウエイ「上衣を握り乍ら」 そして其の男は斃れ

彼は其の上衣を床上に落し、足でそれを踏む。それから

後方へ蹌踉めいて窓に凭り懸る。

31 ――(手を擧げて上下に動かし)それからてえものはのべ るてえと、何だか知らねえが、その 4 可愛がつたんですよ。「再び喪心した様な顔付」す ねえ、 わしは彼奴を可愛がつたんですよー --その-

つ恁麼鹽梅なんで。

30 の所へ行つて、 とで上りました。 すりや、 けてやるんだ。「彼は再も頸を絞める真似をする」さら しねえや――あんたはダーフォードの彼の醫者 先生を笑つてるんです。だけど先生はびくとも ンの道ですよ。左樣なら、先生。それ丈けのこ ひにわしは來たんで。さらするのがクリスチャ 24 〔到頭〕 わしや知らしに來たんですよ。皆が 二人は沈默の中に互に見合ふ。 もう誰にも笑はせやしねえ。それを云 、わしがやつた様に其奴をやつゝ

ムは極めて緩慢に出て行。く ストラングウェイは默つて彼に手で知らせる。そしてジ

芝地をやつて來る人々の聲が聞える。

人々の聲 人々の壁 今晩は、 今晩は、 トラスタフオードさん。素敵に タム!今晩は、ジ ンム的

なければなりません。貴方は戰はなければなり却つて罪になるものですよ。貴方は鞭を手にし 却つて罪になるものですよ。貴方は鞭を手にし が入りの大教會は、悪い行は悪い行として當然これ の大教會は、悪い行は悪い行として當然これ

ストラングウェイ 戦ふ? 「胸に手をやって」私の戦は此ばれに憧れ、望む可らざるものを望み、日毎に憧れに憧れ、望む可らざるものを望み、日毎になしに?――私は、如何かして、何處かで休息なしに?――私は、如何かして、何處かで休息なればならない!然し、――如何してを求めなければならない!然し、――如何してそれを求めることが出來よう?

三日中に氣狂ひになりますよ。 方は妙なお方ですねえ!氣を付けないと此の二

プラドミア夫人は稍暫し默つた儘ストラングウェイの微笑から花が咲いて、私は眠つて了ふでせら。 みの 二二日中に私の身體

ストラングウェイ 行つて下さい!何卒行つて下さざラドミア夫人で、何ですか、貴方は凡て此の儘にずラドミア夫人で、何ですか、貴方は凡て此の儘に

ければならない。

がラドミア夫人。あゝ!〔捨臺詞で〕お醫者に診て貰はなストラングウェイ。神樣があるのですか?

類な倒しまにして窓臺の上に置く。類縁を握つて其の前に立つ。やがて壁からそれを外づして、利光の方へと急ぎ行く。現りて、月光の方へと急ぎ行く。

にもない! 往つて了まつた!もう何

シム・ピアがぶらく、と聞いた扉口へ這入って來る。ストラングウエイ「獨語して」 往つてしまつた!信念も泉の鳴聲や、屋外の芝地からの聲々が流れ込んで來る。

テイツピーは 睡氣に負けて 乾草に 倒れ懸つて眠つてぬ グラデイスは乾草に倚懸つて鼻唄を始める。

「三人の殿樣お馬に乗って 三人の殿樣お馬 を驅って

クリスト ヒンドードーヒンドードー おれ達は踊 が巧くなったな。褒美が貰へ

るぜ。

いわね 込んだのがストラングウエイの奥さんとは面白 褒美なんかありやしないわ。あたし達に踊を仕 ストラングウエイさんが往のちまつちや

アイヴィ「原口から」 先生をヒッスするなんて非度い

クリストおれちやねえよ。 グラデイス ボツビー 前あたいに耳打ちしたちやないか。 おらあ決してしやしないよ。 あらりお前やつたわよ、ボッピー・お

クリスト 大方樹に風でもぶつかつたんだらう。ま つたく大きな音がしたよ。 彼の人はあたいの雲雀を逃がさなけりや

> クリスト「何事にでも反對してみたく」なあに逃がしても よかつたのに。 何の役にも立ちやしねえぢやねえか。 いへんだ。空を飛ぶ鳥がお前に 何になるんだ?

クリストうむ、情けねえてとだ。おらあ臍の緒切 アイヴィ「悲し氣に」もう先生は往つてしまよ。 って以來あんな好い人に會つたことがねえ。親 切な人だ。だけど、ほんとに情ねえ顔をしてる

アイヴィ好い人つていふものはみんな情なさそう な顔をしてゐるもものよ。 るなあ。

クリストおれの知合に人の好い人があつたよー だつたよ。それがお月様の様に綺麗な晴々した 豚を賣つてゐたんだがね、——篦棒に好い人物 顔色の人だつた。(腹部に手を當て・)おれも昔は悲 しいことがあつた。

グラデイス 彼の人がゐなくなつたら誰が堅信禮を

するんだらら?

マーシイ コンニー 教品長様と彼の 堅信禮なんか濟まさなくつてもいゝわ。 狸老婆さんだわ。

良い月だねえ。

トラスタフオドの聲 とつちや素的な月だ! あゝ、彼の可哀相な牧師さんに

夏「わが心、神之を照さざりき」 ふ。彼の手は其の咽喉を絞める。彼は左右を見廻はす。恰 開いた扉口に佇む時、ストラングウェイの顔面に痙攣が整 も遁れる路を求めるかの如くに。 トラスタフォードの笑聲、そして幽かになり行く轍の音。

スト、ポツビー・ジアーランド(十五歳の男兒)等が「Sの タムポーリンを打つてゐる。何れも靴下を穿つた脚で、グ アーランドが坐つて、口に一片の林檎を啣へて、眠さうに 束の二三の殘餘の前にある粗末な腰掛の上に、テツビージ のものである。昨年の乾草の、方形に斷たれて積重れられた いら差視く細い月光を除いては、室内を照らすこれが唯一 てある。隅の方の、よく締められてない二つの大きな犀口 立掛けてある長梯子に、藁束を擡げる縄で、角燈が吊るし 然し眠むたさうなテイビーは猶も續いて叩いてゐる。 アイヴイが、指圖の聲を放つ。そして男連の一人が聞れた 投げらる。時折、踊り子の中でも最も年少で亦最も巧みな ラデイス、アイヴィ、コンニー、マーシイ、デイム・クリ ポーリンの音を除けば何物も聞えない。 踊は終局を告げた 心から喉を鳴らしたり太息を吐いたりする。これと、タム つてゐる。彼等が這入つて來た橫手の扉に近く靴や林檎が 」を踊つてゐる。そして其の影がそれに並んで壁上に踊 バーラコムが所有の高い、そして、殆んど空の物置。柄に

もういっんだよ、ティッピー、濟んだの

よ。林檎をお食べ。

のろまのテイツビーは林檎を噛ぢる。

クリスト[調戲ふ樣に大きな聲で] お前達はおれ達の半分 も巧く踊れやしねえ。ボッピーは巧いぞ。巧く

踊るぜ。おれも巧いぞ。

グラデイスちよいと、自惚れぢやないの! クリスト何だと?そんなこといふとキッスさせて やるぞ。

彼は追ふ、然し手が滑つて白衣の彼女を捕へることが出

マーシイグラディス!梯子へ昇りよ!

クリスト 梯子へ昇りやがつたな、よし、捕まえる しちやいけねえぞ。そいつは卑怯だぞ。 ぞ。おい、あまつこ等、お前達は彼奴の味方を

マーシイを抑える。彼女は金切壁を出す。

コンニーマーシイ、お止しよ、バーラコムのおば さんに聞えるわよ。アイガイ覗いて御覽。

クリスト「追ふのを断念して、林檎を拾ひ上げながら」うむ、 アイヴィは横手の扉口へ行つて隙見する。

此奴は甘さらな林檎だ。

テイツビーを見ねえ!

引き開ける。

天國へ行くとみんな恁麼風なのよ。 彼女は其處に立止つて外を跳める、なほも假想のパイプ

アイヴィ クリスト して天國の床の上には小さなたがらしがどつさ りあるのよ。 たいちりながら。皆の者も暫し月光を晴めてじつと佇む。 今夜は綺麗な満月だなあ

マーシー ークロース」を踊らうちやないの!テイツビー 天國なんかどうでもいゝわよ。「クラッパ

お起きよ!

クリスト グラデイス お手のもんだ。 ース!さあ、 クラツバ クラッパークロース、クラッパークロ ボッピー――圓くおなりよ! Ì ク U ーース か!そいつはおれの

アイヴィ「タムボーリンを取上げて」 御覽よ、ティッピー

恁麼風にやるの。

彼は口誦んで靜かに打つてみせる、そしてダムボーリンを たがるテイツビーに返す。テイツビーは眼ざめて林檎を

片口の中へ入れる。 ていつは馬鹿に六つかしいのね。

> アイヴィ「自分で試ってかせながら」一六かしかないわよ。 ちよいとあんた飛んで手を叩いて御覽。ちまい

うない!

クリスト恰で鈴が鳴つてるようだ。さあ試らう!

に落ち込む、其の小さな靴を穿つた脚が一寸腰掛の端の上 分もダムポーリンを叩くと再も睡氣に打勝たれて乾草の砂 誦む。皆踊る、其の影は再も壁上に踊る。テイツビーは五六 と太鼓に合はして踊子は踊り續ける。 に見える。アイヴイはタムボーリンを取上ける、彼女の唄 テイツピーは睡たそうに打ち始める、アイヴィは曲を

そして側方の犀の方へ其の頸を差し伸ばす。 突然グラデイスは、驚ろかされた野獣の様に立止まる、

コンニー[囁聲で] なあに?

グラデイス「職聲で」 様だわ。 誰かし お墓の方からし

ボツビー、ジアーランドは梯子に攀ぢ上つて角燈を取る。 アイヴィはタムボーリンを落す。皆の者は大きな入口の方 める動作が幽かに見える。彼は梯子の下で身體を搖す振つ える、そして暗黑の中に、彼が咽喉を空にして輪を頸に嵌 彼は椅子な上り、繩を握つて輪を造る。其呼吸する音が闡 てゐる。彼は扉を締める、其の音が消える。夢遊者の様に 殆んど暗闇の物置へ這入つて來る。外では、なほも梟が泣 へと飛んで行く、そして月光の中に消える。 彼女はそつと大急ぎで靴を取りに行く。 側方の犀の栓を手探りする音がしてストラングウェ

もうこれで澤山。

グラデイス クリスト うむ、お前は別品だからな。 行かないで貰ふよ

うに頼んだらどう? みんなして往つて、

アイヴィ 駄目よ。

コンニー 先生は何處へ行くんだらう?

マーシイ そりやどうせロンドンさ。

アイヴィ やないかとあたし思ふのよ。 や獸や花の外には何にもない様な島へ行くんぢ 先生ははんとうに優しい方だ。先生は鳥

クリスト そうだ!彼の人は馬鹿にそんなものが好 きだからなあ。

アイヴィ 温順しいからだわ。 ていふのは、口の利けないものは親切で

クリスト 親切でもねえぜ。 あれなんかちつとも温順しくねえし、また おつと! お前知つてるだらうが、 トム猫

ボツビー 「驚いた様に」 心配ばかりしてると天國へ行 も知れないね。

麼風に。

アイヴィ

いゝや未だよ。先生は未だお若いんだも

クリスト[自分の考へばかりを云つて] るてえと、天國も此頃は何だか變挺子な所の樣 さうだ。新聞 で見

グラディスや天國にも踊なんてあるのかしら?

アイヴィ て――先生はあたし達に教へて下すつてよ。 其處には、 獸や花や川や樹があるんだつ

クリスト の猫が天國にゐると思つてるんだ。 ジム・ビーアはあるつていふんたが、彼奴は自分 いやーー・天國にはそんなものはねえ。

アイヴィ さらよ「眠たさうに」其處には星もあれば梟 もわれば笛を吹く人もゐるんだわ。 何處でも好

アイヴィ「假想のパイプに手を擧げて」
うそ、
さうぢやな グリスト や大勢の いのよ、男の子が先へ行くのよ、そいで鳥や獸 いとこにはきつと音樂があるのよ。 違えねえ救世軍の様な樂隊が 人が後からくつついて行くのよーー

な。

皆の者は後から後からと彼女に續く、足袋跣足で物置の中 たぐる―〜廻りながら。大
扉を過ぎる時アイヴィはそれた 彼女は假想のパイプをいちりながら翻かに進む、

ストラングウェイお月様・私達はあなたにお强請り するんです。お月様!お月様!

テイツビーおつきちやま!何か頂戴な。

ティツビービカーした銀貨! ストラングウェイ何にしよらね?

ストラングウエイ 〔一志の銀貨を出し、彼女の前垂に轉がり落 ちる様にはちく。こさららり・坊やの望みが叶つた。

ティツビーあらい、「志を口に啣へて」まだお月ちやまが あちこに るてよ!

ストラングウェイ 今度は私のを願つてお吳れ、ティ

テイツビーお月ちやす。

テイツビーあたい、タムボーリンを鳴らさらかしストラングウェイ。未だだよ!

ストラングウェイあ、鳴らして御覧。

テイツビー「タムボーリンを鳴らしながら」お月ちやま、あ たいお月ちやまに聞かしい上げるわ。 ストラングウエイは突然繩に手を掛けて梁に振上げる。

テイツビーどうちて、そんなことすんの?

ストラングウェイ手の届かない様に。その方が宜

テイツビーどうちて宜いの?「彼女は彼をジロー」見上

ストラングウェイないないで、テイツビー!「彼は彼女 げる。

みんな眠つてる!鳥も、野原も、お月様も! を連れて大扉の所へ行く、そして其處に彼女を置く。]御覧!

テイツビー お月ちやま、お月ちやま、

ストラングウェイお月様におやすみなさいと挨拶し なさい。

テイツビー「月に對して接吻する真似して」お月ちやま、お

やちゆみ! まへてストラングウエイに差し突ける。 物置の屋根から、小さな、白い、鳩の羽が風にふわりく

テイツビー「くす~~笑ひながら」御覧なちやい。お月ち やまのおなちやけよ。

ストラングウエー「羽を受取って」有難う。テイツビー! わしは其の情けが欲しいのだ。「極めて幽かに音樂 が聞える」一寸お聴き!

テイツビー ウイリス妨ちやんがピアニーを彈いて

差し込む。
を対して、ながでは息と共に、登らうとして梯子に足を掛けて立つ、やがて吐息と共に、登らうとして梯子に足を掛け

彼女は白い姿を凝視して立つ。そして忽ちわつと泣き出すビー、ジアーランドを眼覺した。枯草の霽から悶き出で、まで白く照されて。何物も無い床上を踏む彼の跫音はテッ原を閉めようとして月光の路へと行く、月光に爪先から頭原を閉めようとして月光の路へと行く、月光に爪先から頭

ストラングウエイ[振り返って ――膽を 潰して〕 誰だ?誰の?恐いよ!恐いよ!あゝ、あゝ、あゝ!

ストラングウエイ(速かに彼女に近づいて) 私だ、テイツテイツビー お化!お化け!お、恐い!

テイツビーあたい化物を見たの。

ちやつた。大きなお化け。〔再も泣き出す〕あゝ、
オや、お化けぢやない。私だつたんだよ。
おや、お化けぢやない。私だつたんだよ。

ストラングウェイ そら、そら!何でもない私なんだ、ティツビー十五夜お月様。

よ。御覧!

ストラングウェイ 御覽!自く見えたのは月光りの為テイツビー そうぢやない。〔彼女は相戀らず泣くばかり〕

めだ、ね?もう恐かないだらう?

をデイツビーはそれな一嚙りかざる。 其處へ連れて行つて、林檎な取上げる、そして彼女に與へ 彼女は自分の襟の方を指す。ストラングウエイは彼女を がない。 わたいの 林檎。

テイツビーあたいのタムボーリン。

彼女を連れ返して」ほうら、一人ともお化けだ!面とストラングウェイ「彼女にタムポーリンを渡し、月光りの道へ

白いだらう?

テイツビー「疑はしざうに」えっ。

ストラングウェイ、御覧・お月様が私達を見て笑つて

ら。ね?此方でもお笑ひ!

の身丈と同じ高さの位置に保つて、立つ。つてニヤリと微笑む。彼は、彼女を椅子の上に載せ、自分テイツビーは、片手にダムボーリンを、片手に林檎を持

ストラングウェイ 恐くはないよ!テイツビ!「何々しく」 まだ恐い。

テイツビー・十五夜は月業。テイツビー!何かお强請してみようかね?ストラングウェイ、恐くはないよ!十五夜お月樣だ、

クレマー飛んでもないこと。「ストラングウェイが ストラングウェイ「突然」ジャック、 つてねて吳れ。一緒に行から。 れるだらうな? り度くねえ。滿月だし、好い鹽梅だ。 をしないので」 おらあ少し歩から。今晚は家 お前連れてつて吳 四つ角でわしを待 返事

クレマーようがすとも、あんた。 ストラングウェイ ぢや待つてゐて吳れ。 クレマー大丈夫ですとも。

> ラングウェイは扉の楣に倚り懸つて、低い樹立のある、正 金色の月を眺める。 面の水平線から餘り遠くはない所に架つてゐる、まん圓な 重たげに脚を引いてクレマーは行き過ぎる。そしてスト

ストラングウェイ「祈禱する如く其の手を事げて」神よ・月と して得られるまでに! に强き力を與へて生かしめよ、凡ての生物を愛 日の、喜びと美の、寂しさと悲みの神よ!吾れ 叩いてゐる。 満月が輝く。梟が泣く。誰かドテイビーのタムポーリンを 彼はジャック、クレマーに續いて往く。

ストラングウェー さらではない、愛だ、愛が此の世 の中を話し合つて歩いてゐるのだ。

テイツビー「疑はしさうに」なら?

ストラングウェイ「指し乍ら」お覧!みんな聴きに出て 欹て聴いてゐる! 臓の皷動が聞えるではないか!そして風が耳を それに、かはら鳩や――人間!其等のものゝ心 來る!御覽よ、テイツビー!鋭い耳を持つた凡 ての小さいもの、子供や、鳥や、花や、栗鼠や

あたいには聞えない――見えもしな

ストラングウェイ 向ふの方に――「獨語して」あれがそ らをいふんだ。 時テイツビーの驚いた眼を見付けてごさ、わしに左様な うだ――さらに違いない。誓つてさらだ!「その

テイツビー どこへいくの?

ストラングウェイ何處へだかみらないのだ、テイッ

マーシイの聲〔遠方に忍びやかに〕 テイツピー!テイツ

ピー何處だい?

ストラングウェイ マーシイが呼んでゐるよ、駈けて

がら駈ける。ストラングウェイは躊躇して佇む。重たそう を廻はして抱きしめる。やがて眼を擦つて眠氣を覺ましな ウエイは屈んで彼女を接吻する、そして彼女は彼の頭に手 な足音が響く。直ぐ傍で一人の男が咳拂ひする テイツビーは驚いて振り返つて面を上げる。ストラング

ストラングウエイ 誰だ?

クレマージャック・クレマーです。「大男の姿が物置の

陰から現はれる。こあんたですか?

クレマー充まりませんねえ。だけどどうにかして ストラングウェイ さらだ。どらだね?

クレマーどういたしまして。先生にいはれた様に ストラングウェイ面目ない、わしも一と奮發しよう。 忘れようと思つてます。 ですからね。 すよ。さもないと我身で我身を殺すやうなみん わしやほうたんにどこまでも遣り通す氣なんで

ストラングウエイ「極めて低音に」 二人は月光りの中にお互ひを晴めながら立つ。 お前は豪い。

らんか。火事なんか行くもんか。なア。 やうにして置けと言うて居つた。 かもうもんか、そうつと火を點つて逃げてや

竹夫ア、今迄火事の行つた家は、そんなことを言 れにお婆さんは氣が狂つたんだもの。蜂の巢があっても火が點いた以上仕方があるもんか。そ 事なざアお婆さんが火を點けたんだ。蜂の巢が 有つても無うても火を點けるにきまつとる。な ば皆蜂の巢を焼いた家か。角の吉さん方の火

竹夫 正太それでも叱られるぜ。お父さんが怒るから。 なア米やん、かまうもんかなア。

正太お父さんに叱られても知らんぜ。俺が焼いた 米三退治やうし、かまうもんか。 んぢやアないから。

熊蜂は俺らを刺してどうならん悪い奴だもの。 。あの

米三正ちやんお前方にマッチと蠟燭が有らうが。 竹夫正ちやんに焼かんかのう。米やんのうのう。

> 俺らは棒を持つてくるから。のう早う行かんか。 正太は右に行かんとして驚いて後退りかす。

竹夫 正ちやんどうしたんなら。

正太いまあすこの土蔵のかげから坊主が覗いた

بلا 0

竹夫虚言を云へ。

正太ほんとうだぜ、はんとうに恐ろしい顔をした

竹夫臆病ものぢやのう。おつかないか。 坊主が覗いたぜ。

米三 晝なら恐ろしいことはないけれど夜になった つたぜ。それに家のお祖母さんは、風の音を坊ら恐ろしいぜ。昨夜なざア風が吹いて恐ろしか つたぜ。 主が經を讀む聲ぢや云ふので、それは恐ろしか

竹夫 オイ棒を探して來んか。そんな事はもら云ふ

な。

竹夫捧が無うて巢が焼けるもんか。棒の尖へ蠟燭 米三棒を何にするんなら。

米三 さうぢやさうぢや。行から行から。 をつけるんぢや。



火事の恐怖に襲れたる村

其米竹正 他の三夫夫 人々 十十九二三歲歲歲

明治二十 年頃の夏の午後二時

ありい 子、四邊を見廻し叉一處を凝視めてしまふ。雲が太陽の上遠く火の用心の呼聲。僧はつと其聲に氣付き落着かざる樣 新棗正面に白壁の倉。倉の前に罌粟畑。左右に家。 若き僧は立上りあたりを見廻し乍ら、油紙に包める油をしが一層鮮かに照る。風が罌粟の花を吹き僧の衣の裾を吹く を横切ると見えて、影がスウツと地の上をよぎり、又日光 腰を下し 青ざめたる顔の若き一人の僧、身に紅き衣をつけ、石段に は道。道に古き柿の樹あり。樹上に大なる峰の巢あり。 めしたる綿を出して、火を點ける。火は青く燃え黑い煙が 前を凝視し、思ひふけりたる様子、眼に異様の光 畑の前

る。僧は子供の聲と共に火を消して影のやうに消え失せる。 立ち上る。と子供の聲が聞こえて左側より三人の子供現は

くるもんだから、

あの巢は大切にして逃がさん

米やちん、あそこの蜂を退治に行か h カコ

坪

H

治

7 正ちやん方の桃の樹に熊蜂 。熊蜂退治をしてやらん 力> が大きな巣をしとら

9 あ 熊蜂に刺されると痛いぜ。お前刺されたことが ところで此間らち刺された。なア正ちやん、そ ウン、火を點けて焼いてやらんか。せえでも やア痛かつたぜ。 るか。なかるまいが。 俺は正ちやん方の門の

正太 ウン。

竹夫 正太せえでも蜂の巣を焼 父さんは蜂は火事のゆかない家に限って単をつ 力> ホ 0 ンなら一つ米ちゃんの仇打をしてやらん くと叱られるぜ。家の 杨

正太 あつちへ行つた、 男 正ちやん婆さんを見なんだか。

アーーおゝい吉三の婆さんが逃げたぞ。〈左に入男」よし~、あいつは直ぐに火を放けるからな

正太に縋りつく。
正太に縋りつく。

正太どうした。茂公どうしたんなら。

す。遠く微かに巡禮らしき鈴の音、火の用心の聲微かなり。る。暫らく沈默。後正太子供を伴れて土藏の石段に腰を下る。暫らく沈默。後正太子供を伴れて土藏の石段に腰を下すの子漸やく泣き止む。正太女の子を抱いて呆然としてね

正太茂ちやん、話を敬へてやらうか。

る。海のなかには金や銀の岩が聳えて居る。青で自く光つて居る。白い鳥や黄い鳥が空を飛んに自く光つて居る。白い鳥や黄い鳥が空を飛んに白く光つて居る。白い鳥や黄い鳥が空を飛んがり、まな大きな海があつた。青い浪や白い波が女の子 いっぱい

かけた船が一艘やつて來る。――ばいにピカ~~光つて居る。その海を赤い帆をばいにピカ~~光つて居る。その海を赤い帆をい浪はそれにあたつて碎ける。晝でも星が空一

こえ來る。靜かに暮―― る笑と共に入る。遠くに半鐘の音おこる。村の動搖微に聞
藏の後より烟うづ巻き上り青き焰ゆらめく。僧のHostlyな
藏の後より烟うづ巻き上り青き焰ゆらめく。僧のHostlyな
直接の形を振り乍ら靜かに正太の前

空虚。三人また現はる。 Hostlyなる笑を含みやがて又土藏のかげに際る。舞臺暫時 三人共左右に去る。以前の僧又土藏のかけより現はれ、

正太竹さん俺は種油を綿に泌まして持つて來てや

竹夫そいつはうまい、早ら火を點けて焼かんか。 正太恐ろく、土藏のかげを覗く。二人もそれに見習ふ。

竹夫 早ら焼かんか。 お父づアんが來りやアせんかしらん。 何も居りアすまいが。

げて微笑す。僧叉土藏のかげに入る。子供又ソウツと返つ 土藏のかけより僧又現はれ、林の木の下に立つ。巣を見上 蜂の巣樹上にありて、ドス黑き烟を立て悪臭を放ちて燃ゆ。 恐る人、蜂の巣に火をつけ、棒を葉て、左右に逃げ込む。 て來る。巢は地上に落ち烟益々甚だし。 三人二本の竹の先を割りて綿をはさみ火を點じ、遠くより

正ちやん刺されやアせなんだか。

正太うんにや、だけどもあすこのところまで追つ 三 俺はも少しで耳のところを刺されかけた――かけられた時にやア恐かつたなア。

竹夫臭いなア。

、燃えとるく。

うまく燃えとる。

竹夫 正太 あんなに集つてプンー一蜂が鳴いてらア。 あまりそばに行くと刺されるぜ。こゝんとこ

ろに腰を下して見てやらう。

三人共土藏の石段に腰を下し、暫く默てゐる。俄然小さい 女の子供の恐怖に震える叫聲右方より起る。三人驚いてそ

の方を見る。 お母さん――恐ろしい、お

女の子供 お母さんーー

母さん恐ろしい。

竹夫 誰だらう。

どうしたんだろう。

正太 火事、火事ぢやアないか。 此時四十位の男帶とけか、り青ざめたる顔にて、洗足にて 右より走り出づ。

おい婆さんを見なんだか。婆さんを。

竹夫

男 見なんだ? 一何處へ逃げたらう。(斯う云いながら左に入る) あいつは直に火をつけるから。

竹夫 どうしたんだろう。行て見たか。 ら左に走り行く。小さき嗄撃にて、「火事だ、々々々へ」」 る。そこに老婆現る。跳足にて四邊やキョロ~一眺めなが 竹夫と米三男の後を追ひ左に入る。正太のみ後に殘つてゐ よか」正太恐怖におの、きつ、土藏の前に縮み立つ。遠く · 火事だ」次第に大きく「火事だ、お~~火事だ、火事だ



凉風 堪え た宵のことなどを考へ 0 V ~ 0 山 グ H あるまいと思はるゝフィヲネー 17 7 ない。 腋 見やう。 フ サ 0 2 此 頂 ラ からマ 下に生ずる ヴ きに立 質の暑さに瑞 てゝには 0 中 ツ 腹 0 次 1 7 0 40 白體 感 宿 邦 水 人の 出すと カゴ 西 0 IV 0 2 あ て沁みわ 々たる大氷 夏を る。 12 曾て足跡を印したこと 至る峯 神 想ひ 殊 往 ら魂飛 登山 た 12 河を隔 ー々を眺 出 る寒さに ツ すと萬 工 0 ぶの w 繭を記 -7 め 7 ツ 斛 情に 顫 > E ŀ 0) 二 で出 條 7

掛けた。

る。 ラ 聞 ジ フ は イ ヲ 刻 ボ 々に時局の切迫を報じてゐる。 漸 0) ネ 1 事 H 件 12 歐 V カジ つたのはおと、しの七月末、 0) 南 天 0 地 て間 に動き、 もない頃のことで 物情胸々として けれども あ セ

> に熱し 居 も今日の の誘ふま 5 た頭を冷して來やうと、 な カン 様ない つた。 > 12 大動 此 暫らくアル フィヲネーと 亂 0 第 ___ 齣 プ スの あるド だらうとは いム避暑 Щ イツ 0) 中 地 人 * 12 0 仕 選 想

誰

荒

井

恒

雄

似 ら汽車でジュ ン バンとい w カ> ン ス ブ 6 0 フ た サン、 0 イラネーと 詩で名高 ス 13 17 國 0) 1 2 境 峻 2 Щ ベルナー 12 F. 0 溪谷 ネ 近 0 S 3 ヴ湖 中腹 山 3/ 3 3 シ 所 2 ヲ ヂ R 42 1 12 0 は 1 12 w に沿うて カゴ なつ 當 0 聳え、 いる、 は 0 0) る所に 城の 山系に連 Ш セ 7 1 カゴ 左には 東にゆくと、 ~ 屹 右 ほとりを通 あ 名 溪 5 12 る る 高 谷 は 0 八 ベル ブ V 1 左 ラ 度筑 、ケ岳 不 U ナー る。 ザ ブ 18 ン ラン ح ク フ よく 又 = 0) ラ 4 カン Yul ア p



黑い手を迎へよ

大 手

拓

次

野。 小 72 力> 2 老 た 風かせ 0 だ、 ろ 0 生 雨る 樹の 13 0 ζ, し < し を な 手で は 2 げ 5 N は カ> め 2 らす カゴ 2 17 2 1 み 21 ほ t 5 身み 9 ¥2 力> < CI ら、老う 3 2 け * 12 ろ 0 す た 2 7 樹の 2 手で な ば Ł る 3. のうつ る 0 を る N 髪が は 9 F あ 言と を 眼が す 40 L F 0 げ 葉は 9 なく、 ろの て、 老 < X p 0 < 見ないちゅう 生等 るがたち 樹ぱ 5 4 なか カゴ L 12 F F 0 うすぐらく、 0 0 なく、 羽は に、

(七月十二日作)

時報

3

L

~

金え

光智

玄

お

(X)

を

4

さげる。

ح

つて

72

る。

3

わ

だ

T

るだれる

0

₹

た

ださに

カン

カジ

やく。

音をつちかふ。

白

13

カジ

えて

72

る

な た。 7 0 B ξ チ 力当 カゴ 見 7 元 林 頂 檎 7 きに 來 72 4 盡 夕 頭 日 は さて カジ 麓 紅 0) 檜 < 方 林 照 0 6 淡 映 3 えて 見える ア ネ

WANTED THE PARTY NAMED IN

8 樣 霧 7 生 T は 並 木 3 3 小 越 (0) 75 游 h フ る 0 10 屋 1 全 た < る Ш 園 0 0 10 を 右 ヲ る < Ш 0 3 カゴ 力ゴ K 丘 ネ 散 陵 箱 晴 IE de 力ゴ 0 -側 Vi グ R 17 1 カゴ 繞 < 葦 在 1/2 1 根 ラ n 西 (1) 3 箱 洋 L 聳 は 9 0) 彼 2 あ た 2 え 1 湯 7 7 方 7 た 日 根 で 7 は 12 る 9 25 0 70 あ 12 コ よく 七 村 珍 る 9 は 6 4 此 山 72 7 左 戸 18 5 は 草 は 山 中 て、 = 似 ĩ 絕 0 見 側 1 ž IV (1) ン K 4 村 12 央 壁 其 -暌 6 0 (0) パ 0 V 7 餇 n < 筱 は 12 4 真 峯 を 17 3/ 白 B 窗 氣 流 東 1 25 る 小 V2 (1) 7 四 彩 2 景 は T な 間 分 る 0 n な 方 75 頂 間 ホ 軒 Ш 色 力 w 1 12 > す 溪 は JI 飛 近 テ 0 0 プ 6 3) 力ゴ 案 萬 る 流 樹 瀑 12 N 赤 カゴ 0) ス 3 あ 草 屏 0 テ 內 流 0 る ぞ TH 12 木 0) 唯 懸 後 沿 風 IV 0 n 千 0 原 V 密 カゴ 九 2 0 12 7 尺 3 18 西 7

> こん 級 12 內 走 T 7 S 人 は 4 75 70 氈 0) 釘 程 る てそ ラ 75 7 13 頗 を る 殊 で Lli 1 n 5 17 は 食堂 敷 聞 奥 7 15 女 2 な 0) 0 S 2 S S 7 12 1 18 V > 力> は は 靴 0 屋 1 は 9 箱 之 72 佛 13 6 V 12 1 は 根 6 域 カジ S 373 殆 み 不 カゴ à 人 2 あ 荒 食 h る 相 食 ホ た カゴ E ٤ 應 堂 付 テ 6 例 2 年 西 13 n 12 6 未 13 多 5 歐 3 13 無 日 七 諸 だ 思 喫 0 宿 駄 W で、 Ł 八 國 其 は をとる 73 法 金 0) 時 る 室 S を 居 分 > 約 3 程 遣 滿 6 闪 御 集 10 員 2 圓 氣 Ш 3 S

を 72 S 高 حَ 更 喫 め 烟 12 處 TS カ> L だ 室 暖 て、 it で 房 眞 ス あ 0 装 夏 7 þ 2 置 T E Ì 1 寒さ 自 V カゴ ヴ 17 3 分 13 12 あ V か 0 のが 何 室 12 カゴ み h ~ 6 13 戾 恨 D た カゴ め 2 る。 1 2 T 5 骨 ~ S 牌 夏 ツ 36 五. だ F な F. H F 12 尺 12 3 夜 近 4

ると 0 Ш あ < 0 1 陰 廻 る 1 る。 12 ヺ 日 隱 ネ カン 9 牛 5 頭 n 1 餇 は 3 7 0 見え 天 村 0) 落 子 氣 てく 0 カゴ 供 箱 0 h S る だ。 跡 > 庭 3 0 0) 樣 追 7 麓 プ 幸 0 チ 12 5 見 7 方 N = え 裏 12 12 2 3 0) 近 グ バ 山 處 向 12 を 0 峰 F CA

る。 といる。 21 あ てくるならば、 さそうに 嶮 12 るとい 昔ローマ人が跳梁した時代に築城した殘墟で Ű 沿 7 若 い岩山 2 30 ī 見 チ Ŀ 右方 える イタリ人 田 から小 カゴ 0 唯一 屹 غ カゴ 間の上に 立 V 諸 撃に屠つてしまふ心算であ カジ 絕 L 2 てる、 サムプロン 頂 町 ~ 上 12 0 は妙な古塔が聳えて 一る道 近 は要害堅 羚羊の < 12 0 來 其 道 固 通 儘 る から侵 2 な U) 要塞 路 景色で だ 左 入 de カジ 0) 70 る し な 方 あ あ

7 12 カ> 0 中 車 てとに 山川 劣 してくる 々急 は V 2 150 N 7 白 であ チニ はどこでも ラ 2 < 1 る 濁 0 る 1 ス 0 Ł]1] カゴ 0 兩岸 T 氷 白 町 0 ねる。 く濁つて で汽 विष् 同じことで 流 12 0 の下を流 沿うて Ш 車 なに 之れだけは を下りて電 2 は n あ る Ŀ てく 隈 る 0 2 が惜し なく T カジ 日 る (0) 車 ので惜 葡 本 石灰分 21 荀 アル Vo 0 る。 流 を 作 瑞 プ * L n は ス 溶 西 0 V

S 25 サ ればならない。 な ブ 2 ラ ン シ 7 £ 1 1 便乗といっても立派な坐席を ح د S からは 3 古 CK 郵 72 村 便 馬 6 車 電 12 車 便 乘 お せ 終

> ゆく路底 玉蜀 設 と少し て居つてゆ ると少しも カン 12 计 一季を作 2 よく る違 傍の あ る。 出 杏 は きすがりに拶挨 變らない。 つて 來 0 日 な 1. 實の あ Vo る 本 る 0 紅 馬 などまるで信濃 くられ 百姓 車 含 12 0 搖 L 3 所 てゆく所なぞは 極 12 調 5 る。 めて ñ ガ タ 7 素朴 馬 畑 山 あ 12 道 車 た は よ な 6 全 風 * 電 登 6 なとし 內 显 す 地 2

に雅 盛 鐘 は ると少し あ る。 h は いつてゆくと白髪童 w な 瑞 1 致多当村落 西で最 日 所 ルチー 7 本 で路傍にク 變つ 0 田 3 I 一舎で馬 TES たてとは 古 * S y め b ふ村 ス 顏 4. 頭 0 だとい な 觀 ŀ 0 6 寺男が S 香や Sp. してくる。 12 著 辻地 30 IJ S 出 て馬 p 此 7 藏 0 を代 像 邊 來 古 を祭つてあ を据 は て此 C 舊 た へる間 え 等 敎 7 0

ドラ サッ 丈 Z あ 0) F T る ンスの 林檎 ク 村 瀑 ラン 布 に着くとこゝ 0 7 ス をつく 實 0 流もこの邊 IV. 流 0 プ 色づ つて は漸 ス 容 かて V Ш カ> < た山 狭く 5 17 へくると一二間の幅に 特 は 路 15 畑 有 は 馬 0 車 愈 0 0) て所 間 背 は 12 險 囊な を辿つて 通 せ R < 12 VQ 15 懸 を 崕 IV 背負 ツ + " 數

岩角 た。 晴 何 降 る。 石とも 紅 0 山 3 面 くと 7 嶽 字 37 Z n 9 12 20 形 **膛**輪 食 る 3 振 0 樣 H T 0 懸 な カン 的 間 物 姿など小さく 6 る大 氣 晋 6 6 w 7 7 9 グ な う窺さ込 * と向 ブ 返 道 n 力> 77> 水 カゴ だ Щ ラ 图 6 から 7 5 3 L° 出 す 17 VQ ス 氷 ing R とフ 朝 る。 闡 つい 、登つてゆ Ev 7 8 15 3 塊 河 カゴ 啷 72 聞 流 ス カ> カゴ むと碧色を帯び 0 は 追 イ てるの ŀ 之が カゴ 2 階 Ш カジ w JE. 9 え n R 2 ヲ 6 との 見え ツ 溶 段 唉 Ŀ に之れ 720 35 36 和 28 B 2 あ フ F 木 変を は 0) = 0 3 る。 で中 る つく 間 亂 1 てきて る。 サ U [9] を見た Jν 低 瀑 に深 n ツ 0 現 18 一大瀑布である プ 0 0 此 宿 ら見えて ク 背 R 向 は 0 0) 7 チ シ 遠 3 樣 あ 大分暑うなつ 境 2 15 自 2 0) 工 V 70 に見え 河 半透 谷 る 72 主 0 背 に牽 沿 S てきて、 N 分 床 6 如 草 負 らて 0 は カ> _ 峠 峙 る丘 5 出 17 原 大 込 を 明 加 2 塡め 店 0 0) E る 0 來 然 氷 至 0) バ 岩 朝 姿 前 頂 陵 氷 南 1 Yol n 力ジ T Ш > 9 7 是也 陰 露 は 雫 25 は 36 7 7 6 6 0) 0 6 K 4 斜 12 立 丽 3 0 72 7 氷 (0) 7 あ V 0

> はどこ ならし 0 T 人 と喘ぎく 此 0) カジ 3 男が 搾 0) はど 深 B 境 刻 6 本 山 柄 た 7 2 À J 幽 0) 數十 V 早く 谷 だ を見た 杓 7 寂寞を破つて と関 0 0) 6 0) 登 間 桶 7 頭 乳をの 2 あ 30 7 42 2 もそうで 0 0) カン 5 牛 行 連 牛を 追うて 乳を汲 があ カゴ 彼等は世界の なして くと、 山 ねる。 草を食 0 南 麓 る かと h 賞 る 首 会 50 でく 牛 5 0 カジ 12 暮して 聞 餇 7 辿 0 動 H H n 7 0 この) 2) 9 亂 72 2 ば 小 る イ ねる きた 屋 鈴 4 H 又 知 本 連 0 瑞 0 音 らず 樣 は Ł n 加 S 0 拉兰 3 な S あ 12 2 無

長

V

毛

0

靴

10

に山山

登

6

0

釘

をうつ

た

靴

をは

S

て

石 積 た V. 73 6 0 の上 磧 ほ 0 T 椀 暑さ ٤ 12 雪を を を下し 9 5 0) 出 踏 る。 乳 る。 17 渴 取 小 h 雪は 喝を でゆ 2 7 尾 72 7 行 カゴ 0 醫 3 £ 邊 くと 喉を通つ あ るに 20 る。 17 1. 小 は T 開 2 更に < 5 從 殘 E 日 7 3 0 h ン E 持 1. 瀧 O 0 午 0 雪が 深 汁 つていくと < 17 0 カジ 快は T 近 懸 < 18 まだ 來 H な カコ 0 る 7 13 H 72 n 女 13 水 ば 20 だ 稍 6 磧 カゴ w b 開 は ツ 5 0 H 足 7 17

殴く花の るの などの雪の 0 方 るが時 岩陰 沙 一题激 の上に寢ころんで自雲の行方 力> 5 12 つもつた谷々が 西洋でも日 とつ 0 ルナーアルプ つそり 7 0 H 本と同 興で T えの 來 は た羊の あ つきり見える。 じ様な命名をする) る。 山々も見える。 群に驚 を 眺めて カン さる 亂れ ねる 奥

深淵 此 15 て見える。 ヷ つとなら あ ラン る、 あ が見える。 溪流 72 立つ間 コム 9 古びた石 に沿 日 50 本なら 來て 左 230 5 カン ンの削 更に上 落葉 ら螳 て奥 0 は 方 0) は 更 橋 12 松 輪 何 の森をぬい 12 流 13 方 2 とか名をつけられ 力兰 た様 勢力を持つて 12 773 w 上つ > ゆくと猿 3 て水のたぎり落つ つて ネ 73 けると、 ツ 頂 ていくと奇 る。 F いがから 橋 0 物質 とい 真 2 右の 13 自 て名 くと輝い 2 0 15 石 た様 文 方に 所 る 怪 £° 明 ラ 0 所 岩 な 3 は de 多 0

12

12

殺

12

ゆく 娘 0 0 0 A 音 彼 0 噂 方 時 がそこてゝに 力了 局 6 す から牧童で追 を憂は、 3 るとや L 7 2 1. カゴ P げに 集 1 うる 0 は H 論 7 は暮 n て歸 じて 來 T n つて 7 3 るつ 日 12 < H る羊 平 日 カゴ 慕 常なら 12 切 n ると村 群 迫 0

なつて、 憂の雲は見える。 る。 切 も寄せて來た。 ものを。 カラ 0 遂に墺塞 多い 報が 迫 折角夏知らぬ L 的 傳 てく つち 渦 0 られ る。 劑。 或 こち 变 03 笑ひ 第 此山 佛國 は 3 食堂に集ま 破 廊 下の隅 3 波 中に静養 Æ 社 n に之れ 1" は已に 會 的 黨 12 < 露獨 つてくる 此 しようと思 主 首 23 0 太古 そり は 戰 領 0) 子 論 關 ジ Ā 供 0) (1) 3 係 0 樣 勝 は カゴ 眉 らて來 利 日 カン 15 りと 12 Ш 6 ス 12 76 あ ·暗 H

人

<u>ا</u> ح 文 n 12 氣 は 堪 數 なったの 76 引き上げねばなるまい え なくな あ 來每日 9 7 は忘 0) 9 た。 散 グ n ラ 策 夫に かかか 2 足 若 36 -3 八 しも 2 馴 さら 月 210 n 日 愈 ~ T 过 0 12 今の 0) 轉 動 亂 た 角 勃 髀 12 中 登 12 肉 る とい とな る ح 应

石

の上に

に寝て快

心心の書

をよ

7 快

3 0

車型

并 +

あ

0 草

T 原

哭 12

30

7

70

3

0

愉 6

ある。

]1] 澤

原 0

0 四

避

7

る氣

カゴ

L

T T B

瑞

西

0

Ш

12)

12

3 Щ る た

思

^

V2

晝は

一日こんなことをして

向

N

0)

もぐりこんで日

本の七草の三

13 ふ話 たせた V 部 Z 6 17 移 V あ のと思 氣 3 動 なす 時 ふると、 代 日 0 痕 本 其 跡 0 は 4 先 認 塊を碎い が全 め る ことが 然見ることの て持 出 つて歸 來 る Ě 出 2 T 來

Ŀ 21 映 峠 飲 17 を見返 カン 5 まし をすべ をとめ に立立 隱 B 燒 カン H < ヂ くする や消えて、 つて て貰 6 7 n てゆく。 痛 夕日 つてゆくと 1 すこと 75 7 20 から Ш Vo 0 6 を 間 17 頂きに __ は 行 紅 F 12 甘 4 2 くと、 露の 青ずんだ白 餇 < る H 出 バ 登 夕日 B \sim 來な 輝 0 様とい 稍 < 0 麓 0 小 屋 いつの T カゴ 0) 峯 傾 = S き初 0 (0) 紅 方 30 12 4 Ź 别 フ 9 飛 11 を < W 7 7 見 姿 n 4 込 2 時 輝 め か 4 T 12 0 カジ を告げ ヲ 0 S る 三分 7 Ĩ 羅 此 神 n ネ 6 カ> ねる。 ば 時 叉 顔 女 1 0 0 0 盡 戶 3 0 3 羽 カ> 0 樣 牛 手 4 張 味 12 見 雪の を 乳 B 75 Z V2 40 ダ 0 6 形 8 姿 名 H 夕 日 カコ 2

分が 示 テルに 婦 たと 0 カゴ 戻つて 2 7)> 5 H 見ると、 宿 は 露 7 屋 物語 36 獨 愈 E 日 る K を 開 戰 下 日 ,^ 0 = 瑞 0 H 2 騒ぎを 25 四 閉 6 づ 3 ~ 動 1 氷

> を下 だ前 とか ると停 をし 遞送し 原 大 0) 汽 は 3 商 A 車 動 た あ 0) ム變化 る、 員 7 < 美 店 は 8 R 日 合を張 る 召 12 登つてくるのに てくれ 0 3 0 車 H 戶 た 集 (0) 瑞 場 S ことを を閉ぢ なせら 3 は 幻 であらう。 的 西 は 坐 る では 0 朝 4 5 考へ 4 忽ち 出 だ 席 n 付 途中 たとい だき とい 郵3 7 多 鐵 L 便 ると正 何 (0) 确 7 一萬尺 4 3 あ 30 出 老 カン 0) 局 *≯*° 豫備 兵士 る。 長の て消 な 逢うた、 6 6 どん 荷 に夢 V 通 えてし 0) 兵 13 6 物を ~ 週 警固 過ぎ 大 隊 な大きな荷物 銀 IV 6 沙 チ 伊 カゴ 送 間 行 あ まつ 重 原 3 難 せ ___ る 太 6 3 B 出 1 12 た 閉 5 村 利 た 12 げ 赴 22 R 搶 0 73 ASI 町 0) < 7 L 17 12 角 固 武 た。 3 獨 Ш < 12 何 7 め

5. 0 蟲 7 一年を隔 4 2 る。 5 0 騒ぎを 7 = た今日 2 11 見 > 7 ほ 下 神 界は > 女 及 0 んで 樣 尚 な姿 動 ねることで 亂 は 0 仝 渦 W 1 倘 12 あ、 y 下

2

カン

6

は

分險

L

くなつて

70

る。

仰

げば

根をめ 長さ ち之れ 山 ば 地 B そここゝ カ> カ 12 を震動してく < とり = ン して人の 輪廓 55 至 2 は 9 Ł 0 14 ぐり であ どり る € 21 數 ⇉ な S 日 哩 0 > は を描 工 壯 0 V 2 カン 1 岩 子の めぐ 0 12 12 像 大 5 光 づ 11 る 連 シ 75 n N 渡 陰 せらる 5 6 S 自 25 7 不 4 パ Ш r. 峠 12 影 氷 5 0 つて上つてゆく、 づれ落ちて來さらに見え 1 ノシエ 一然を 偉 思議 照 2 7 0 菫 É 河 力> 大と 萬 居 頂 Ł 0 見えねば、岩燕の姿も見せぬ、 9 > 直 の殴くも > カゴ 様に まだ 尺 る。 * 見たことは 前 大 思 輝 6 0 立 形し 1 氷 越えて池一つめぐ S カン な は V T 懸 見 は 5 氷 河 る 0 N る 最 、嗣二十二 寧ろ寂しさを添 5 7 T 河 VQ ブ 0 碧空 7 ナ 萬四 眼 力> る 奥 チ は 居 30 13 Ì 南 1 高 な 力当 彼 自 Ŧ 眩 12 る 方 たりは白 中 5 V = 仰げば 分 h < 尺 12 ガ は グ 2 つかつ そ> る。 は でく 12 ラ 哩を 今に ラ 未だ嘗 渡 n ン > 0 174 岩の より 6 9 超 は (0) 皚 瀑 ろ 强 る = 4 H É Ш 立 え 卽 る Z 天 尺 21 17 S

河

0

緣

に沿

うてゆくとい

ノシエ

1

0

小

屋に

出

ざつば 味る F 21 氷 登 0) え 0) < る、 地 3 カゴ 12 0 ^ 7 もしろ らて 氷河を 少し 75 登 樣 出 砂 Ш 樂 は 前 球 る V2 客の な 7 糖 罐 南 2 7 0 0 カゴ つてゆく 12 たれ 見 全 9 6 いる 見 7. 表 氷 る w カジ ٤° = **寢室** 渡 した寢臺をつくつて は 九 ると、 くも しやぶつて 地 面 ば 碧 腰 n を被 ど堅 ば Ŧ 表 色 掛 3 生 小 のであ 6 尺と記 0 ど帶 j ス だ 层 力> 0 0 间 そ くは ら千 鶴嘴 ふて 遠くで見 は 6 カゴ CL F 暖 12 上を荒らし る。 最も 0 船 圍 あ は あ 0 S CK などの 550 生 湯 金 る 72 0 h 73 プ 7 72 W 危險 半 チ 活 ると、 ケ y 6 0 てあ 兎に て、 Vo 0) 恐らく 眺 1 ۴, 殘 木 -透 る 加 る。 角に を縦に 自分 羡 弘 移 幾 阴 程 な 用 ~ 0 廻 9 卓子 しく あ 0 7 ると、 萬 綺麗 簡 は 動 な n 意 = る。 ld 3 等 易 樣 番 3 年 小 7 0 0 di 2 のに痛快 す、 なく、 屋 な を据 な 76 12 る。 72 時 0 バ A 0 あきらめで小 H 湯を貰 本 跡 9 つて 棚 總 を 代 6 3/ 前 ン カン を設 奥の え 寻 追 主 0 豐 氷 7 773 氷 0 くる。 うて A 12 VQ 思 6 木 IV は 此 0 河 んと東 爐べ は 5 角 自 6 n H ブ 3 奔 氷 一然を . ビ見 緣 見 17 7 馬 ス 河 6 な 6 お 12 カゴ S

3 0 て、 ぼ 0 百 7 げ 邊 * 物 斑 路 具 は 2 0 四 峠 貫 は 狂 5 草 0 里 九 Z 7 間 111 鹵 3 n を H 25 < 森 麻 は 0 7 0 0) 越 西 カン 南 間 1 時 皮 だ Ł ほ 7 0 5 南 あ 拔 流 12 飛 え 12 阴 條 72 產 流 る H 12 0 V L 耀 -科 石 Ш 日 12 縱 白 森 地 0 和 7 Z 越 取 附 7 0 は 7 17 横 は だ 3 0 小 P ح 載 中立 赫でる 2 CA 入 近 兩 入 彩神 全 徑 n 5 來 0 12 0 日 る 口 側 5 秘 12 # 引 62 < つてそ 犀 は 路 る 本 た Ш 0 12 青 明 高 張 0 湖 靜 12 は 111 T とかが 3/ 並 42 大 2 光 白 る 0 出 漸 w カン 入 2 11 水 12 0 h その < 視さく衣で急 た 0 を < Ł ブ 17 分 る路 注 0 村 6 6 震 片 縺 透す 落 合 落 40 ス 2 岐 12 明是 2 间 0 水 n は 流 0 5 П 勾 高 る す E 入 は る。 た し、 青 氣 合 0 2 農具 針 3 る 15 酒己 L カン 山 カゴ を カゴ 葉 た 0 7 木 5 17 獅 0) は 含 た 太 藩 H 嶽 流 森 屋 ح < 75 111 子 th 影 を 3 梢 朋 樹の畑 h V 高 n 根 114 ケ > 汗 2 村 欅 0 下たに T 横 鳥 出 Tr だ 8 た 嶽 12 瀨 は Ħ. 力> を 影 舞 森 濕 闇が續 111 5 る 0 浸 切 11 帽 軒 想 W V 幹 林 を 針 h 0 E 子 0 0 西 細

る

6

H

لح

畑

だ。

畑

17

は

麻

カゴ

名

S

せ 12 カジ 中 2 遊 然 德 3 正され < 5 T 1 L 脚 n 女 る 客 板 + 0 熊 CX 利 る E た 欲 3 V カジ 3 馬 位 髭 圍 友 並 B 0 張 た。店 0 者 0 道 L 子 # 惡 B 中 達 柱 頭 12 武 爐 皮 h 新 6 < 程 0 かぶ 馬 4 者 程 とな 女房 6 を 裡は 5 聞 6 6 代 3 一先さの休臺は 5 苦勞するところ 葛 は 歸 方 Ĺ 紙 F 0 だと 僅 な 0 は 0 6 男は安坐 右 大き 緣 を丸 障 め 12 乍 0 5 今け V 湯 力> S VQ 先 子 手 ĺ 敷 7 兼 合 5 サイ 同 だ 朝 0 12 かい鍋 さの 6 ね せ 物 2 め 情 手 2 から S 客 7 多 75 小 7 葛 0 カゴ る 隨 K 前 n か は半 栓 緣 3 汚 煤 を 1 12 ブ V て、 カジ まで 分 0 せで 乘 をし やら 何を上 先 13 占 ラ 15 所 0 カン せて だ 湯 ۳ ば 4 茶 下 い箱 7 と話 "待 本 17 中 V 空 馬 F 朽ちて 12 真 崩 12 屋 7 3 2 カン 6 8 才 8 大 馬 1 黑 猪 7 落 Æ 五 6 カゴ į 賴 n 12 0) げませらと 澤 傭 L 0 82 は 宗 六 あ 7 は 2 T 答 路 v 口 L 歸 13 グ 足 をさ る た 駄 る 0 と糊 6 る ラ 壁 曹 おり どう 菓 瓶 棚 プ る。 四 越え ラ 壁 + 座 12 7 な 17 物 カ> 鞋 め F W) 3 敷 は 位 は カジ 7 山 カン を S 知 72 る 草 代 カジ 貧 9 2 0) to 0) 獵 ຼຼ h Ł 新 12 合 12 た 0 る 壯重真 9 L 銃 訊 6 カン



藤

郎

げな梯 して まだ な 端はる た 日 催促をする 0 9 は 21 17 明 た 聊 起 だ 72 解 72 小 け易き夏の 20 为 た筧 カコ 子段 る縁 0 めら け から 暗 6 720 面 300 H 側 0 階 # 0 を下りて ん顔 水で顔 を失 下 12 青ざるた 6 胜 0 夜 宿 は 校 宿 雨 は 15 宿 を立 湖 を 0 戸 = 女は、 を て、 洗 行 を 水 10 ツ 0) 繰 つて、 女に 0 洗 つて 月 湖 0 力> b 波 と案 直 7 3 は 畔 3 りとも 音 用 に結 10 5 吾 もらチ まだ消えやら 葛の 清 前の 寢呆顏をして、 意 は 力ご E つる中に する が夢 [[[0 物 8 相 吾 變ら P 湯 小 V 玉 高 B Ō To ~ 0 12 0 カゴ と出 で、 せ ず高 2 B 行くことに S TO 50 けて 雜 と逆 湖 VQ. カン 覺束 なら 來 水 0 朝 で 冷 Ш 1/2 7 12 飯 13 カン 來 2 面

>

心持になってすっ

カ>

6

目

カゴ

西星

め

た。

仰

5

0 0

細 落

V

路を

辿

る 曲

湖 7

畔

0

Jil 中 朝

楊 12 風

や水 拔

楢

0

木

立

水

口

を

右

12

9

越

H

る

石 V

10

で宿を立つて

青蘆

0

12

私

語

7 2

3

る

麗 淺間 つて 屋 テ は 7 0 慮 ブ ス 乳色 0 12 ス ツ 2 12 通 這 75 乳 力 る。 掃 0 0 h る。 除 霧 霧 入つ 房 IJ 0 2 2 奪 霧 湖 3 腕 カジ カゴ 霧は 水 汁 膳 7 やらに柔 12 n 0 N < 包 を這 去 0 7 通 中 腕 對岸 る。 まれ 波 6 12 0 5 n 暖 顏 中 ふと一茶 0 顏 蕩 る 17 カン 7 0 カン を 雄偉壯 や手首 漾 洗 ょ 入 V V に送 圓 湯 9 薄 る 0 性 氣 7 26 0 味 阴 カジ は冷々して 嚴な 出 は 詠 は 3 的 惡 0 立 帶 # 0 直 h V すと、 氣 雄 る 東京 だ タす T CK 無 渾 た 7 7 は 33 る。 で紅 ほ w 食 13 7 今、 膳 な る 部 0 0 フ プ 圭 有 至 7 ス は V 連嶺 角 から 7 朋 < U は > É 读 w ヂ は 光

る。 顏 違 74 女と、 る材 する女であると説明 女子 命を は 云はせると、 n 名 ıllı S. j X 弘 間 流 0) 料を有する。 無名 教育家 悟 時 V 7 0 五六年以 カジ カ> Ш 讚 n 面 1 何 17 でと末 客 道 と荷を 語 と勸告 は 美 カン 0 それば を上 を以 0) 女に 0) 12 12 ح 念佛 對し 種 カゴ 前 辭を呈し カン 2 カン 分擔 つて 恐 する 5 下する女と、 類 17 17 3 箸の 文學 ろしく カジ 敬 て。 カ> 同 0) 3 0 0 普通 呼 變 9 複 2 L 意 0 村 思 0 Ji. 僕は大 雑な Ŀ 勞を取 態 では て、 を表 ようとした 的 は 處 25 カン 11 げ下 0 なる。 第 12 病 0 嫁入 3 12 カジ る證 連帶 女で、 あ 理 日 L L 一に現 來 げに 5 同 るべ 科學 t 本 25 りし 720 < た V 350 に感 帝 跡 じく女で 責 確 瓜 0 き多大 東京 E 實 任 乎 も疲勞を覺 的 代 國 12 何 6 カゴ 日 僕 等 を以 12 12 カジ 年 時 服 0 本 は 0 て、 る あ それ デ 民 不 6 カン B 0 Ш 哲學的 健 基 72 0 ス T 5 7 力 族 責 育 礎 6 年 は 7 タ 0) 全 72 テ 力> カ> る 53 10 任 ち まに 毎 う云 ح 2 眞 1) 8 よし 考ふ 12 程 美 ٤ 生 有 12 15 1 日 る あ 0

たならば必ずや、

普通

0

女と見

ず

iz

穏

能

中

許 掛 緒 賣 らその カゴ 5 2 12 などを 來 0 知 出 カ> 生 0 な カン R 收めない 子 H る 12 砂 た n 云 L 9 は 力> 女 0 地 供 7 暮 料 出 カ> 0 る X 多くて、一 たと云つて、結局山の 6 V2 知 う云 金を かざ H 8 0 疲 女は疊 理 行 拵 來 舞 n 都 町 それ 置 0) へて、 中 屋 あ Va Va 大 嶮 得 送 さ去 る だ から、 h に女中として 12 難 戾 変 る 路 と話 0 仕 2 ようと、 だららと云ふと、 想 0 重 0 つた 卑 4 かり だ。 向つまらぬ 7 事 b 山 步 疊 Ŀ を 春先きになったら 俗 を見 72 まし では 家に 12 0) L 醜 0 0 た。 3 る 何 什 俗惡 峻 カン 惡 引 付 0 相 足に肉 事 路 n 的 1 な けて、 町 込 冬は -[香 棒 住 カゴ な人 Ă 72 8 恐 7 方は氣樂さと笑つた。 沙 ん 物 み に出 カゴ カ> 5 な 間 名古 汰 白 込ん で、 雪 八師 とも 刺 ら一月と居ずに I 5 0 一がて昨と稼 親 時 36 < で渡 香 カゴ カゴ なく 深 13. だ Ш 子二人はどう 行 11 稀 せ 出 25 年の秋 を 細工 3 途 力> 忽 る カゴ n 12 0 ya RI 方に 下り V2 ち 類の 原 餘 3 な る 氣 0 0 疲 0 天 6 0 6 A 籠 2 幕 女か 苦 だ。 松 7 12 n 飛 B 0 12 る女 本 町 0 3 7 ば CK 力)

21

馬 引当 草 四 賴 鞋 Fi. T n 5 出 0 25 せ 女 L カン ム姿で 7 カジ 5 VQ. 來る 右 L 力> 72 と云 手 その あ 0 3° 白 膝 納 E る 屋 女 手 拭 0 カン 錢 5 時 を F 栗 姉 安さ 間 力 3 な 毛 餘 h V 0 5 B 丈 だ 繻 冠 待 夫 絆 6 2 2 23 21 た 0 は 1 0 脚にな た 6 馬 絆は馬 鹿 直

it 氣 山 つて し 12 梢 谷 を震 しる谷 流 幽 7 茶 ところ深山 間 * 界 光 Ŀ る る 屋 を カジ 6 る 12 銀 蔽 12 は カジ を 崖 深 を遮 と深 空 ス 脚 色 2 入 す 山 出 る心 10 0 7 < る 12 0 なっ 突 沿 深 75 12 谷 Ē 6 中 鱗 \$ 獨 崖 る 持 0 5 波 腹 カゴ 張 身は 9 0) 7 微 を 暗 L 7 棧 を 出 カゴ 默な 初 上 幾 見 綠 道 6 7 來 カン ズ 度 せ 0 12 遠 静 る。 15 8 h ラ と老 早 針 幹 瘤 蔽 7 氣 開 < b < カン 跳 葉 栗 37 T 瀬 な A 折 カゴ 3 S 絲 自 間 B た 0 n 0 躍 樹 躃 T V 棧 朽 (1) 12 る 音 す 0 づと引 界 0 3 樫 頹 ちる精 やう を離 老 密 音 道 る る 0) カゴ だ 樹 巨 0 林 n を カジ な は 道 て、 4 木 肅 カゴ 0 n T 苦の 緊ま 地 骨 は チ 隙 7 寂 曲 カジ 2 F 燃 谷 ラ 間 衣 ば 山 15 ò Ò を瞰 步 皺 然 氣 8 Ł る。 2 カ> カン る 每 5 6 h 山 Ш Ł 曲 味 12

荷を割

愛

7

9 0

7

自 重 カゴ 澤

分 過 1

0

背負

T な

山

を上

< 往 云

恐 復

n す

荷

から 色

きさ <

うに

ると、

7

る 2

5 女

血 目

身

體

0)

岩疊

K I

12

全

2

0

毎

口

一と鹿鳥

0 四

里

0

道

を

る

と自

する L る。 3

あ

7

偉

な

3 2

だ。

0

筋も慢

頸

0

水

箸 丈 貰 馬 で、 は

P 0

5

12

細

M V

核

性

物

を 顏

東京

邊

6

は

美の

標準とするさら

だ 結 勢

カゴ

カン 0 0

< 代

0)

如

下 迷 亭々 襲 を喰 0 0 F. L 鳴 あ あ は 中 2 N る カゴ 0 72 5 50 て、 \$ 3 į 7 墜 は つて U だ注 谷に 來 5 初 山 つく。 石 噩 切 て、 n 氣 思 杜 立 め 12 斷 た。 意 迫 は 激 せ 3 6 鵑 ゾ 角 36 0 谿 ず る ク 0 0 L カゴ n 仕 寸先きも 樂な方だ 女に < て益 谷 身 7 頻 太 背 7 震 古 梁 銀 6 樣 12 隨 身 沿 叉 3 R N 玉 12 0 0 する。 深 17 と碎 うて あ 分 Ш 啼 百 細 見え る カジ 險 泌 < 林 カジ 道 S T 深 ζ を 力ジ 不 石 カジ 谿 な道 馬 < 夕方 < カゴ る 左 威 谷 右 なる。 馬 は 容 霧 な 5 0 紺 カジ 道 幾 辿 は 17 は る 碧 8 だと云 肩 開 全 なる 暫く を 7 Ē る 28 0 H 奥 溪 < 道 山 +" 1 る。 丈 0 と濃 苦 深 ツ 流 7 0 2 路 奥 脚 ٤ 絕 手 嶮 傍 < シ 70 右 リと 壁 る だ 0 下 角 L 表 12 草 烟 0 は 日 S カゴ

だ。 た自 1 3 上上 さば 限 花 氣 瓣 然 僕等 鈴蘭 った 處 味 附 0 V 音 R 近 る 幽 62 0 た。 山 悪 0 斧が を .趣 宿 聲 「を歩 て路 12 12 12 谷は迫る 人寰 音 立 カゴ カバ は 偷 峻嶺峽谷を踏破する女も、 0 才 湧 T 有 を立立 を塞 入れて 理 7 V てそれ く。 微 難 本 道 ズ 力 > てる。 いで あ う 力》 0 德 才 S 2 川 12 1 足 あ 山 カジ ると見え 呼 程。物質 る。 に沿 天 溢 72 許 水 白 ス まるしの 地 は 吸 は 百 n 42 自 でも らて は 白 1 1 合 S で、 根 樺 ば 7 然 0) B 7 0 ど深 居さらだ 曲 0) 70 0 倫 T 0 喬木 縷の 生 る 歩を運 葉は婆娑 理 は 6 7 がや木 命 道 < 0) 15 道 は な カゴ 德 矢張女だと 力) Ł 湖 割 と思 ح 3 と女 ぶ を 8 2 云 合 た 奥 0 超 浮 でとに 賊 K 畔 やら 一片 ふと 越 に云 12 3 K ~ 0 カ> 類 奥 Ł な 12 V2 カジ

栗

0

葉

12

九

6

四

ら谷 た。 る。 思 つて は 9 櫸 9 女と 120 吳 岩 間 0) 老 葉 n 魚 Ā 0 包 女 知 氷 を 12 叉谷を右岸に は 合 0 覆 餘 出 V 6 で B 遇 71 カン らに 76 12 Ł 綺 0 た。 五 麗 あ L 申 蒼白 て岩魚が るら 入れ なの 尾割愛した。 踰えようとする たら、 で、 しく暫く立 透 を入れ 6 女を介し 腋 通 爺さ 0 吊 72 T h 話 腹 あ 2 EU は笑 て二三 を見 る。 た しをし 木 葉 せ 2 0 1 陰 乍 尾 7 1 涿 0 讓 3 70 カン

1

牛

ン

Ŋ

X

1

P

Ш カゴ 0 7 谷 葛 人 麓 出 を 家 廻 は 離 なつ 0 湯 は 視 n 界 ると 山 7 だと女に て、 澤 ---世 ば 山 0 界は 靄 思 S 指 63 9 は 42 越し ず 5 煙 開 ゝヾ゚ ツと明 心 展 0 Þ カジ て、 n T 1 た。 た ボ 躍 時 林 る 1 ップ とし < 間 12 遠 た は、 < な 0) 濕 7 Ш 2 7 急 75 裾 2 る。 12 E 12 人里 は 曠 5 あ Ŧî.

六

カジ n な

徑

Ш 現 俗 T 南 元に心内 巒 70 て足に 550 る者 脚下 は 0 肉 幾 東 肉"刺 刺が出 京邊 肝宇 丈 中 とも角 慢性 來 0 12 溪流を顧望し 隨 ぬまでも、心に まれ 分 になって、 心 多 ノして 中 S 醜劣な、 暫く來つて蓋 20 精神 る て俗腸 肉 刺が 手前 的 を洗 に自 は、 出 勝 一來る。 ひ給 天 殺 手 0 U だ 75

と云ふ

0 丈 ġ に搖 で頻 よく 谷の沈んだ空氣を震動し 古柏と 身震 0 1 文明の斧鉞の 左に迂 6 6 色の平 出る鳥だが、 滴 0 V. 瀧 Fi て吳れ に啼く。 した。 我 一蟠居せる虬 カゴ 2 懸 曲 滑なる皮膚 > る。 0 すると、 ジ 羊齒 凉し 頭 7 入らざる参差たる森 ツときゝ惚れ 今初 なる ねる。 Ŀ 松 や蘚苔をこび 12 3 切り立 程美 を持 聲だ。 落 0) め 幹 我等 て、 0 > る は つた山 0) い聲だ。 鈴を張 瀧 は る。 本物の 6 T 权 瀧の あ 0 たやうな岩壁に一 は だら 飛沫 りつ 毛櫸 0 南 た。 旅 前 聲 林 n 0 いけた崖 12 を聽 には 12 行 は、 カゴ たやらな 暗 同 洗 立 記 九官鳥だ 坂を下 3 じ崖 9 < な 茂つ どに Ł 深 12 9) 馬 上 突 聲 0 S

た

に、山葡萄が鈴成りになつてゐるのが見える。

た。 を傳 く口 山 36 分に差し 甘さらに 葡 女は岩を這ひ べして危なさうだと言っても肯か な 萄 ならでは鳥度見られぬ圖である。やがて一摑の つて に入れたら、 0 S カゴ 房 出 4 を片 、到頭攀ぢ上る。女の岩上りや木上りは 暗綠 す。 シ 上つて採らうといふ。蘇 手 P すつば に事 滴 目 る様 日から泪がボロくい 頰 3 V 張 なく岩を這 山 り乍ら、半分 葡 ボロくしと 萄 などは ひ下りた。女は 香が 餘 程 兎も角少し 馬 頰に傳つ ġ すべ 好 £ さきで の自 の枝

ろんく ら嬉 けて 知 左岸 つて V この瀧 5 7 ねる。 ある。 ï 12 溪流 僕は山 2) さがてみ上つてくる。 3 幽 出 Ш そ 草奇 白 に丸太橋 7 の落口は谷間 僕は 小 白白百 百 亡らな 0 草 な 合 徑 よや は床 合 步 を谿 一時馬を下りねばならなか R カジニ を見て初め いやらに カ> カン として紅 底 を名形 12 本一 13 L 変 下 少香 尺許 りる。 鉈でザキ は 女に頼 て山 白 12 如何 3 に吹き 送つて、 6 切 間 つて 12 あ 根んで一本手に 本手に 12 隔 羽 亂 5 を置 溪風 *L 12 を刻み 高 ば つた。 は en: 111 5 名も 7 12 12 注 顫

運

は

んとす

る平

太郎

をし

て盲目

な

5

る

でと同い

を相し 消 な 4 鬼 5 て人 あ 3 ~ 還 は 社 ζ 3 る 全く備は 會 5 N ス ば を解 述 間 0 4 揚 劇 實 啼 去 カゴ 覺 連續 して て哭 如き感 一る必 せ に夢 懷 た 中 肢 世 あ め く時 悪魔の 界 5 8 H る 晴 0) めた 要あ る 幻 せ 憺 (1) 所 1 バ 12 らずと 丸 自 E, 劇 性 ń デ ン 1 13 相 相 あ 平 72 を取 然に 3 力 た T 太郎 世界をあらは グ 0 聞 似 る 6 初 りとし 選 筆 > る Ħ 6 東 ウ る は 氣 通 to < 王の 扱 如ら樹 非 4 醒 法 ざる 72 ふてとなし。 西 0) 分をも 放てる仕 1 1 ず。 人に恰け 500 て、 は、 别 相 > め 正 ツ 棚 弑逆に次 也 12 坤 3/ 3 似 ク 麗え また 乾 時と 齐 工 あ 鼾聲 また 0) 7 通 をし 草も 好 柳 また 蔽 す F 0) やしき山 音 ^ 場 為 る お 敏光 をさ 0) お は は 酣 舞臺は 所とを普通 節 柳 T 0 所 5 36 なる 柳 n V カン やら、 0 起 也 る 72 ふべ 此の > 6) 0) カジ 神 作者 P 沙翁 6 0) 人間 無きに 也 恶 時 궎, 3 秘 き熊 夢幻 72 城 カゝ てれ 魔 にて、 2 濕 12 73 3 世 阳 熊 ゝずな L 其 潤 12 0 0 思 カゴ 天才 劇 しも 野 柳 野 决 界を 與ふ マク 3 處 前巾 0 日 U 音 * 地 0 12 常 る 性 カン

> 0 出 わ

南

と無 聚る を孕 熊野 は を提 岬に干品 n ならずや。 A せし 100 沙 此 供 77.3 所 め V) らむ。 自然 せり。 此 る 公阴 0 は然の劇的なることよ。 豐敷岩 め、 處 何 海 ほ に怪 事 魖 カコ 幽鬼 人よ此 わ 魅 訝 異 は 改 (j) in 500 V) 常 0 作 餘 其 魍 宮居 りに 魎 處 處 10 相 0) 3 手 に巨 萬 をし永く 12 會 | 牽强 を建 劇 腕 項 ことの 太 的 山 0) 4 人 自 有 附 海 7 を待望み 護 然を 潛 12 大 幾 J す 會 0 らし 在 门 多 力> 面 る 求 る せずと 説ならめ 1 P 0 人だ 的 海 さる t 8) イ U T ア -6 大 1 相 來 12 V 約 あ る 鉛 1 との 7 す 6 座 を 26 Ш ス

若 轍

程 参詣を終 5. 所 经划 b 那 は 36 妙 智の らんとす。 確 平 家物語 源 な カコ なら 瀧 ^ て、 より 盛 衰 和 0) E 作 F 記 此 處 者 6 より 因 は 7 より入 É 果 海 おも 12 0 水 位 出 絲 を籍 中 づる L 3 將 りて 維 所 傳 盛 を濱 繪に 文をやる χ_{c} カジ 0 宮 能 吏 Ł 實

舟に竿さして、 ふ所ありき。中將それに舟漕ぎ寄せさせ 萬里の滄 海 にう かび給 遙 沖 Ш



兵

動

竹

は、 その なれ。 夕間 < ちもやせんずる山の氣勢、 格に聳えて、 を呈せる幾千尺の カジ らはれて、暗 つるに、 ね 澄めり。 幼さより、 大雲取 けむ 色の 千尋 鬱茂して、曾て何人にも汚さるっことなく、 浩蕩 あやしくも 質に の淵をなし、大海の波さほ 如 峨々たる山 此の物凄さまでに雄渾なる山海の眺 冬の最中に、われは滄浪の客となりて、 山 たる太平 く、深く、 5 魁偉 熊 わが想はたが われは舷頭に立ちて勇躍 野 2 なる 峰 0 胸 洋の 0 稲 海 を仰ぎては そこ 聞 轟きを覺えたるこそ不思議 かなその姿や。 は は、 ζ 波上に相映 はざりけるよ。 7 だにも物 海涯 戲 にわかに海に陷没し 3 曲 12 にそゝりた 知れず恐ろし 未見の戀人にも = 發せる、 ひて色恐ろし R 妙法 味 したりき。 0 崩れ落 Ш ち 色 暗 とい くろ めに 默 力 T 破 h 色 も 5 0) 森

13

なで來り、

流離の悲しみ、

恐ろし、

もの

 \sim

ス

働きを亡ぜしめ、人生の

悲喜哀歡

を交々

カン

千仞の 0

谷を設けて

理

智の

黑白

=

ン

Æ

セ

ずや。 に返し、 決して海 處に青煙をとゞめて、咽ぶが如 るに誘 丁々伐 あらねど、 りから 眼 靈 9, 然と且 前 夢幻 三十三間 に豁 は 尚 木の音こそ今は聞え 夜となり、 は彼處 一つ荒鷹 0 る 廓落たる けて 撥 深さ天然 に憧憬れ ゝお柳の心の 堂の 12 12 音に明暗の 幾世 なつかしさに暫時 懸れ 一境に誘 生 棟 0) たりし幼 一ひ祭た 森 るには 0 木 怪奇なる一節 變轉を の響を表はし得とい 0) 和 ひて、 色は 由 る樹 來 時 あらずやと思ひ 17 0 < 思は とばしりて、 柳の なの 追 世 聞 低迷せるに **〈**三 懷 は我を忘 相 L は、 葉の 姿に、 め、 は 0 流れ 味 景情 尚 散 遠ら昔 0) AJ お柳 を躑 日と ふに 色は あ は彼 りく 12 共

12

餘裕も

あ

らせず、

急霰の

如けく

銷魂

しく叫 たぐるに、

~

ば、

何

華

0

起

りけ

る

カン

Ł,

دم

をら體をも

た 76 ての 刎 人乎。 ねえで徒に妻子の逢瀬 平 家物 語 力了 最 4 を末期迄 H 憐に とけ も頼みけ るは これ る V

熊野灘 ちし 艤装をこらせども割 2 袂 見 カン 如 0) 易に越ゆべ 切 哮せり。 カジ 歸 13 Œ 如き波 をうる りに舷を嚙みて カン 々甚しく、われもながくは見乗ねて、 時は 加 さは勝浦 9 體 原の を左手に見て走る。 とぞい 見 は 那 鬼婆 船 智 妙 むとて 5 とは はすてと風々 くも 空すてし 法 は 0) は ふめ 船 御山 より田 思 山 進 0) 海 沙 は 波渺 甲板に あ 0 むに従てこの 額 る。 、鯨鯢 らずとい 羽 (1) 17 度 邊 練絹 晴れたれば、 岬 0 茫 遠くより眺むれ 1 折悪し 折り立 迄 ic た 0 る年波 カ> V 0) 5 とげりしき波の 海流の 勝 间 ず。 も霧たち罩めて沖よりは づてを涯 如く 30 7. 浦 つ。 波 四罅八裂して譬へ 春の海の 0) 跳 世に此 東 ところせく所は容 公に付纒 7 如 ねまわせば われ 一度決 きか 北 近づけば慈 く意 としも分 は 0 2 は熊野 風 絹 嚴 L 0) 地 は て出 强 間 悪 めしき姿 布を搖 R 陵角 かざる 0 に降 重 その 父の で立 海 0) 動搖 海 2 は 3 は 咆 吹 h

なり。 來れ き人も俯伏して痛みがちなり。一 らず ゑい に子供 子 其 0 用意をさく るすべ お 腹 12 12 0 n 0) ば立 處此 身を横たへ、 さそは 叫 供 帰 ぼ 底 打寄する毎 て正 びをあ を 0 連れ 途方にくれ居るさななり。 0) 錐の もなく、海妖の手に奔弄せられて、苦しき 處に聞え た 力を取られ、 船量 舟中の 婧 n 體 まし 神 餘地とてもなし。 女子 40 76 12 佛 12 我 なく、 るきはに坐を乞へば、 怠りなかり 0) 3 人旣 烈しきに介抱せる母 念ずる人 4 見る眼も痛ましかうさ て淺まし 0) 呪文を 目を閉ぢ、 船は 叫 V 泣きわ にゑ つし 喚、 うらめしくもせきあげむ むらく 唱ふるもの カコ 息 L 力) か、そも太師 b7 暈 苦 耳を聾に カン め 3 帳轉 E, < 四 0 しき吐 動きて + 心 子 家三人相 剩 地 供 ば 澎 反 に施 7 カン 瀉 側 となり こはそも 湃とし 参りの人か、 せり。 祖 9 ね 動 まろ 番な 其 す術 女の 同 やが 4 鼻で塞ぎ る と思し す 7 V 臭氣 たは 女 童兒 とす れば T を CX 知

くてしもや候かべき、他の驪山宮の秋の夕の契も、途には心

令遲速の不同ありといふとも、後れ先立ち御わかれ、終にな

と妻を思ひ子を思ひ、なかしくに身も世に棄てか 覺ゆるが、さすが沈みもはてぬか見給ふにつけても、御身の 置みわたり、哀を催すたぐひかな。只大方の春だにも、暮れ ずといふことなし。比は三月廿八日のことなれば、 の内大臣重盛公法名淨蓮、三位の中將維盛法名淨圓、年二十 られける。 あがり、 上とや思はれけん。已が一連引きつれて、今はとかへるかり れば、さこそは心細かりけめ。沖の釣舟の波に消え入るやう 行く空は物憂きに、況や是は今日を最後、只今限りのことな れども、今はの時にもなりわれば、さすがに心細く悲しから 七歳、壽永三年三月廿八日那智の沖にて入水すと、 れの、越路をさしてなき行くも、故郷へ言傳せまほしく、 舟に乗り、沖へぞ漕ぎ出で給ひける。思ひ切りのる道な 大なる松の木を削りて、泣くし、名籍をぞ書きつけ 祖父太政大臣平の朝臣清盛公法名淨海、親父小松 書きつけ 海路遙に

たかりける有様目に見るやうなり。 恩愛の道は思ひ切られぬことにて候へば、誠にさこそ思し召 あはれ人の身に妻子といふ者をば、持つまじかりけるものか 宿縁と承れば、先生の契淺からず候ふ。生者必滅、**會**者定離 され候ならめ。中にも夫妻は一夜の枕を並ぶるも、 な。今生にて物を思はするのみならず、後世菩提の妨となり うき世の習にて候ふなり。 末の露本の雫の例あれば、假 五百生の 座の 聲共に沈み丁せけるこそ不愍なれ。 底武邊の れ、櫻の花をかざして舞び出 院の五十の御賀には、時めく一門の人々に擁せら 幼さより寵愛身にあつまり、 りねる人の惜まる、かな。平家の嫡男と生れ 極めたりし平家の末路を、一身にあつめて海 の弘布に、やらし、我身の覺悟なり、南無と唱ふる 情理をつくせる聖人が言上、鐘打ちならして念佛 禽に驚き、瞼をたのみては越中猿 れ、大宮人のためしに漏れず、 る平家第一の美男子も、 天、少しもあやまち給ふべからず。 の故郷に立ちかへりて、妻子を導き給はん事、還來穢國度人 上に昇り給ふべし。成佛得脫して、悟を開き給いなは、娑婆 ……・・御身こそ滄海の底に沈むと思し召さるとも、 を砕く湍となり、甘泉殿の生前の恩も終なきにしもわらず。 視聴をあつめ、深山木の楊梅とたとへられ 人には非ず。戰はざるに駿州富士川 流石はわが世の泰平にな でける青海波に、 法住寺殿にて後白河

平家の運をつたなからし めたる執袴子、 馬場に 自らの首

文弱の悲しさ

と物語り給ふも哀れなり。

のる事こそ口惜しげれ。

さしも驕



由 井ヶ濱 邊の

森 0 囁

る。 n 弄 0) 日 影を浴 は た。 ぶ。 梢を渡 0) 木の葉の 方丈は碁に耽 午後 池 つてさらくと讀みさしの机上の CK 0) 蓮の花 の日 て除念なく 間 を尋ねて金の班點をてぼ 盛 は るか茶寮に小坊主一人、 かり、『山 影を水に浸し 、眠を貪 の内 りつ なる建長寺を訪 こある。 7 朱に燃え、 して 風は森 鮮 御 經 カ> な る H な

枝に

鈴をかけて、

銀の絲を垂

n た

清

S 流 百

泣きたい様な氣持になった。

に耳をすました。

幽支の

氣が

身邊

迫つて來

山深

い谷間 5

0

合の れか

絲の

端

3

ゆすつて期

カ>

る音を立てやらか

Ł

優

戰 私 を 0 H 足音 私は 4 正 は 0 ふと 每 め 光 が森 夏草を踏んで森 た。 12 がきらしと光る。 玉を轉 濃 の静寂 午後 い葉裏の一つ一つに 0 カジ 空が を破 す やち 眩 つて微妙な反響を起した。 0) な微 奥へと歩みを運んだ。 しく晴れて、 右手に一本の かな音を耳 玉を散らし 青葉 榛の 12 は た様な L て足足 木が 風 2 12

夏 菊 池

寬

生えてあ い音は其處 ロくと響く、 音は箭 る。 カン な森の中に細く透き通るやうな聲 から聞える 其の下に草叢 私は暫く立ち止つてい 0) 6 あ が少し許 つた。 5 此の『森の響』

妙に 12 森の 音 語 空氣の る森の は途切 胸 をそゝつた。 n 中に珍らし 囁きではあ 人に長 つく續 るまいかと思つた。 い思を感じた、 V た。 私は、 これ 單 カジ 調 永劫 15

長 谷 の 夜

夕飯 後 宿の娘の今年十七七つになる少女等に

如

<

青

褪

め

た

る

人

を抱きて

聲

8

9

12

祈

嘆じて日 と見えけ (0) 7 T N わら人も はや 遷す たと をこ る人間 た にくさよと らから。 て鳴る ~ る L 3 < 60 ば 世 30 から 絕 戒 疾 如 る 念の 斯 得 海 尺 風 < カン L され < る 以 て、 0) ť 如きに 音をな その 苦 ほ 或は 1 7 ど此 患 潮 干 B 願 とば 岫 3 高 聲 す カジ 13 す旗 N. は は 0) 南 0 T 熊 は唸 し。 は 難 唯 る わ 脚 野 所 或 4 吹 4 n 灘 過ぎぬ Z ら荒 給 的 佛 は 0 は 音 質 如 0) 胂 0) 低 あ 熊 險 吟 聲 る 吐 12 る 勇 8 3 12 0 朗 > 舟 70 まし 風 目 權 力 或 翩 鎮 17 i と波 中 まり は 翻 現 と思 憂 とし 0 0 力》 山 あ t 6 K Ł 額 以 ¥2

> 然ら るべ 應し 12 を起 障 る。 0 0 深 雲 與 ず 彼 んは 身の E て難 尼 して、 る 0 響け 魯鈍 能 名 V 意味 たよ 30 大 鞳 は だ ばず。 なる る 此 悲 12 (1) 靈 3 響をよする補 3 6. 0) 擁 る かきは 今の な カゴ b 護 峻 V) 肉 3 故 音 身 あ 0) 坂 に、 をさ 霞 6 46 世 を 熊 船 TS 踏 0) 3 岸 信 排 野 大慈 U 4 12 10 眩 陀 打 破 なき徒 0) な 海 TE 末 落 5 大 0 T 7 ざる 悲 世 0) 波 0) T 题 心 ぞ 法 と瀧 0) 12 輩 S 知 2 游 音 12 A 羽 る とな は、 4 4 無 カコ カン 0 せと らず。 あ 時 聞 雙 え 岸 る カコ あ 12 5 6 怒 7 相 0) は

呼 上 明

な。 H 22 濤 罪

光 8 を あ ď, 續 0) 混 6 150 H 沌 > 如 數 1 7 居 何 < E V 泰然自 海 る。 里 偉人! 2 に放つて、 美し 岩 そし 大偉人!! い姿であらう。 て、 激浪 V とも 何と 0 響をも 平 V ム氣 和 知 な 高 らざ る 旋

庭 風 呂

浪

日

笑聲 る。 み込 中 海 は 呂側 夕餉 薪 h を 水 聞 火 だ 浴 カジ ル沙を洗 から歸 を枕 の仕 12 < 時、 沸 つた に青 度 力> 人は蘇 12 U つて來て庭 L た軟 落す時 何處 忙 天井を眺 生 かで カ> So る V 0) 風呂 湯 めて 杜 氣持はまた 奥に に身を沈めて明る 鵑 に入り 2 0) は宿 聲が ると、向 5 幽 0) 格別 主婦 氣孔 カ> ふの 17 で や女 聞 17 泌 え 葉 か V

折

72

から CI

Ш

12

月

上

る。 カン 枝 17 世 ツ 海 に掛け 紀 水浴 私の胸には淡 ろ 耳を澄ますと、微か カ> を 前 閉 振 0 0 の疲勞 た手拭 若竹 遠 に庭風呂 ちてうつとりとし V 國へ來たやうな心地 か が一時にくる から さらくと鳴 ふわりと落ちた。 0 い旅愁が雲の 湯 槽 に潮 に浸 7 默想 ると、 2 0 た 遠鳴りが聞える 如く擴が と解れて行く。 にな 私 に耽 右 13 つて つて 手 るの 0 何 だ 松 70 靜 6 る 0 カ>

> あ 2 た。

子の

恣にし それ を 私 子 鎌 柄 5 0) 書 より逗子海岸に出 時 19 倉 、葉山 失は して 里 昨 K 12 遊 一餘の 路 日 御 れた戀に一掬 傍 0) 用 だ人 朝 不 道を步 0) 邸 海 1 如 より還御 鎌倉 は 川から這 歸 誰 いて で名高 て、 0) L 电、 宿 0) 0 を立 靜 ひ上 淚 九時頃逗子に著 兩 を流 かに 更 S 陛 一る蟹に 白 12 5 下の す 瀧 逗 廣 出 で> で 子 V 不 龍顔を拜し 驚 あ 動 0 海 逗子 かけ 海 0) 5 12 朓 V 詣 12 m 6 17 向

漂 唯一色、 空や水、 漣 あ > を捲い る。 遠 は 17 く見渡す相 せ 五 うゝ þ 0 水と天 六つ、 て緩 逗子 U 鎺 1 0 を投げ N と砂 しと打 模洋 として流 海 葉 は溶 Ш ちつ に融 の冲、 t 0 ねる 神 なとし いきた 12 H n ない。 天 は 1 水 行 軍 て膏を 3 る 相 艦 八雲 わづ 邊 接 流 白 5 帆 から カン 水や空、 た 天 17 煙 カジ そこ を空 砂 P 4 水

和 打 逗 子 自 然 0 海 0 は 表 質 に静 徵 6 あ カ> る。 で 麗 しく、 鎌 倉 0 海 暖 を カラ 6 自然 清 0) 男 優

た。 凉し 暑さ 殘 あ 促 る 3 げに は あ n 夕立 暑 カン 1 見え ね 長 51 カゴ 0 术 る 洗 6 谷 ŀ 0 0) IJ 觀 觀 12 音 番 吊 靑 前 12 L ・と絲 子 いの た風 供 子 瓜 是是 相 鈴の 棚 12 撲 にうなづく から を 入 音も心 見 2 た。 E 露 行 カゴ 地 夕 書 2 落 よく 72 間 5 は 0

0) n 小 時 流 0 年よ 花 周 7 相 中 3 5 鍛 火 圍 凉 撲 42 方 振 場 6 ~ カジ 12 L 2 は た 揚 力) は 0 V ことん た 5 鐵 夜 入 かが 名の 行 のな歳 る。 風 П 如 0) 12 百 V 12 壯年 力 4 仲 見 飜 は カゴ 0 士 6 審 體 R 物 0 36 す 判 格 13 盛 7 鎌 人 あ Ĺ 至 倉 を 九 0) 居 12 つた。 だ。 る 至 青 團 山 た 7 るまで、 子 カジ 年 孰れ 力士 2 築 角 Щ 中 12 る カコ 力 n is は十二二 入 會 痩せヶ岳 すべて 達 沙風 n 1 だ。 ば 7 0 12 る 旗 本式 土 一歲 曝 カゴ にな 俵 7 時 俵 0

カン 2 集 等 カゴ 75 來 13 V 6 斯 0) < 7 6 尚 て毎 ゎ 武 る 0) 氣 夜 げ 8 養 夕 12 慕 飯 は カゴ すめ L 身 3 體 風 ば 3 習 練 皆此 6 0 7 は 處 な 休 T V 12

長

谷

カ>

5

0

歸

途、

可

愛らし

V

雑妓が

二人、

觀

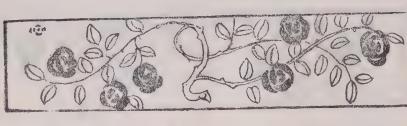
音

語 は 6 鎌 0 合 倉 丹 石 h 0) V 昔 を降 花 人 カジ 緒 疊 0) 9 ん 瞳 7 V 6 2 來 カジ ある 黑 3 東 0 カコ r 6 2 で、 た。 た。 帶 0) 夜 赤 12 挾 0) S 月 h 下 だ 舞 紅 21 扇 何 S カン 17

由井ケ濵の怒濤

開 12 依 僅 B S ケ 然とし 打 去 で 濱 L 午 カ> た 0 7 2 に二三 後 ~ n T る 出 2 0 0) 73 る 7 た。 四 0 脚 海岸 2 時 S 青 ds 1 海 頃 あ 12 B 6 12 年 0 > 水 誰 狂 は カジ 浴 あ カゴ 力ゞ 逝 U, A 7 る。 あ カン V 55 是 0 日 卷 宁 12 影 大 0) 雨 < 日 海 怒濤 暮 10 對 カジ 0 カン は 消え る L. 雨 晴 て干 依 12 0) n > 2 12 然 拔 12 間 - 古悠久 共に 手 として前 を め 唯 を 17 覗 切 其 淋 0 怒濤 2 0 0 0 À 感 7 由 12 3 達 展 泳 比 -- 104 --

横樣 灘 る 層 四 狂 圍 迄 爛 0) 日 彼 は 0 肉 は 23 m 方 轟 岸 吹 全 4 薄 を壓し 言く暮 此 整 1 S 劍 7 時 は -C 烈風 崎 居 n 白 に建 物 雷 る 果 激浪 餘勢は 怖 9 0) 全濱 落下 7 ち n は る大燈臺 9) 8 唯見 眼 驅 走 と上 つて 乾 6 る白沫 時に聽 坤 げて は 江 巖 方 に魔 4 0) 仰 島 < 碎 堵と化 げ カジ 0 17 0 萬燭 ば、 如〈 領 殆んど中 よと怒 して 相 であ 0 模 る



及 ゴ ル を訪ふの記

のは秋田雨雀氏であつた。今年帝大の哲學科を出たと 人らしい人も集つてゐなかつた。私が最初に見出した まだ發車には十分ばかりあった。それでも餘り一行の ふこと、なつた。私が中央ステーションに着いた時は 月の十一日正午吾等の一行はタゴール新た横濱に訪

待合室に歸つて來た。そこには早稲田の中桐氏や北氏 もプラツトフォームには見えなかつたので二人はまた ツトフォームに出た。約束の十二時が來ても誰れの姿 えた。一行が電車に乗つたのは一時だつた。電車のな ムのミス、アレキサングアや色々な若い人々の姿が見 が來て居られた。赤帽會の人々を中心としてバハイズ いふ臺灣の學生林氏と二人で一緒に切符を買ってプラ た。集付くやうな真豊の光り窓から射してぬた。青い かで一行は、タ氏と會合の順序などを彼れ此れと談じ

水田のなかな電車は走った。 横濱から本牧の三溪園までは可なり長い時間電車に

乗らなけれはならなかった。

絃

郎

サアの物語りのなかの聖地巡禮のやうにおもはれた。 色々な服装色々な職業を持つた一行はまるでチョウ 電車を捨て、私だちは新開地の、疎らに建て並べら

れた町を歩いた。

りの蓮花が夏の光りのなかに幽かな薫りな漂はしてゐ は居られないつた。 印度の詩人を迎ふるにふさはしいところだと思はずに た。滴るやうな翠の丘からは古い塔が聳えて見えた。 黑くくすんだ大きな門柱かくいれば、そこは今を盛

へられた室があつた。 つた。そこには今日私たちが詩人と物語るべくしつら 『タコール先生は歯が痛まれたので横濱の歯醫者のと 幾重に曲つた坂を上つて、そこは支那風の建物があ

ころに行かれましたから少しお待ち下さい。」 原邸の使の人はかう言つて一行を涼しい木隆に導い

やらか と云つたら、 逗子の 海 は 一自 然 の女性 47 譬

る。 何 して 望である。 7 を輝かして、 るる海 萬 殊に逗子の海 をひ 年 72 私は默つて砂 る其 0 昔 12 活動 から陸 0 晴れ 山腹 姿、 0 洗 12 に更に睛 を侵略 折 X 0 17 る ハタ幕 F 空 私 靉 カン く白 は 12 5 12 更に 坐 0 せんとして絶えず努力し の波を眺 ス を點ずるも つた。そし ッ い帶雲を紫に染 夕陽は横ざまに ク 眼を轉じて莊嚴な富 リと雪の めた 0 は 7 膚 何千 富 ツ め 白 8 年、 とそ 7 少肌 現 0 70 眺

> 默し B を忘れてしまつた。 大なる自 0 0 姿を見上げた。 ² 如く偉大なる活動を續けて 靈山 てねる。 然に抱擁さ 富 士の 海 夕日 は 人 間 日本 n を受け 0 世 0) 界 地 殆んど人間 た とは 姿! Ŀ 12 ねる。 ある最 何 0 L であ 交涉 カン も大 私 3 は ること 36 山 は沈沈 なる 此 な

て逗子の濱邊を立ち去つた。 私は夕暮の裳裾が 七月二十五日鎌倉の客舎にて 天地を包んで了ム頃 悄然と

一醣穢白拍子之所利乎。烏使天下萬民畏服哉。是勝敗之數所以自明也矣。經世之士宜以監焉。 正何哉。夫治天下國家必有法規必有秩序。假令雖至尊之命。廢法規紊秩序。則復以何糺臣民哉。況於其轉租之曰間違勅之罪正朝敵之刑。深察其實不過於一二私因。曰郡司不奉寵姬之莊田轉租之命等之事。是以不奉爲正奉時廣元等之計畫運謀等乎。豈可較京師僅擁虛器而文弱長袖之縉紳及不平反側之武夫哉。抑後鳥羽帝之起事也。 擅營私之弊奢侈僭上之風。 然於承久之役兩缺其道。果哉官軍 一敗之數則明矣。夫戰爭者民命之所繫財用之所關。孫子所謂死生之地存亡之道也。 余避暑于上毛伊香保。十 其視所施之政略。 一敗途地。 浴餘偶讀鎌倉太平記。 則頗得機宜。 蓋當然焉不復足恠也。 故民心歸之久矣。加之武備充實金穀亦稱爲。況於有義時泰足惟也。熟觀察當時之形勢鎌倉之事實。雖外家執權或有專 雖所謂稗官野乘。 容易不可起焉。宜必要名正 頗獲其要。 而審其戰爭之 因。 言順

敬

松

尾

清

次

郎

烏使天下萬民畏服哉。是勝敗之數所以自明也矣。經世之士宜以監焉。

深察其實不過於一二私因。曰郡司不奉寵姬之莊田轉租之命等之事。是以不奉爲正奉則爲不

其名雖

默獄

す

るに

扉は

は黄

永金

遠の

に鎧

E 0)

20

>

れか

7

あつ

る。

衞

卒

護

7

12

る。

門

冷 7 憔 酷 0) 悴 75 せ 肉 牆 12 る は 者 壁 す は 12 働 對 ~ 7 哭 2 0 0 T 血 呼 聲 は 脈 3 か あ る げ 破 n T 7 7 6 る。 る。

砂 幽 巍 微 小 R 漠 暗 0 な 12 は る 渦 銀 る 生 光 渴 フ 色 < カジ 0 砂 陰 ジ 煉 塵 P

獄

0

牆

壁

12

13.

0

花

カゴ

暌

S

2

2

る。

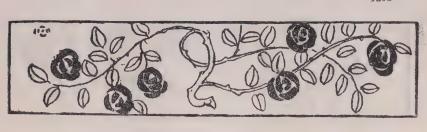
は渦まく砂塵をあげて煙つてゐる。

永遠の

扉

平澤哲

雄



た。私だちはそこから海岸や、または京都の東山の裏にか見たやうな松林を眺めたりした。恰度この山の麓になた小學生らしい水泳の連中が裸體のまして運動をしておたのを見て私は遙かにポルプールの林間學校を想ひ出した。

間もなくタゴール氏が見えたといふので一行は建物の前に集つて彼れを迎へた。一同が席についてから、花環が一處女の手によりて彼れにさ、げられた。彼れはにこやかに受けて頭にかけた。中桐氏が一行を代表して挨拶を述べられた。

日本の學生、支那、朝鮮、臺灣の學生からの問に對して語る彼れは恰度古昔の豫言者を想はせるに充分のして語る彼れは恰度古昔の豫言者を想はせるに充分のして語る彼れは恰度古昔の豫言者を想はせるに充分のと、だが

或る時は人の肺腑を貰くやうな鋭いしかも美しい聲で柔しい言葉の底には深い暗示がほのめいてゐた。彼れ柔しい言葉の底には深い暗示がほのめいてゐた。彼れ

びて行く反響のやうに靜かなものとなつた。語つた。そしてそれが何時とはなしに深い谿の底に滅

の聲は更らに悲しい。

彼れは亡國の詩人である。彼れの歌は悲しい。

彼れ

私はこの遠來の老詩人をいたはらずには居られな

10

そこに彼れは瞑想するのであつた。暗い幾つもの室の端に遠い海を眼下に見る林間の一室に私だちは彼れの瞑想の室を覗くことを尤された。薄

日は既に落ちた。相模半島の影が魔のやうに水の面にで見えた。紫陽花の咲いた徑を靜かに瞑想の家へ歩むで見えた。紫陽花の咲いた徑を靜かに瞑想の家へ歩むだちは薄暗い林間の坂を下つた。谿には月見草や花魁むちは薄暗い木間の坂を下つた。谿には月見草や花魁でちば薄暗い木面があるであるのもあつた。

の塔の上を照らしてぬた。
造った。私だちが振りかへった時、十日ころの月が山

月見草

夕 月 我 大 試 誠 カつ 起 は カ> 見 5 月 3 カジ 空 2 > あ Z 草 は 夢 B 0) 0) 出 3 0 見 b を カ> 力〉 6 言 Ł 入 時 il. 3 17 0 は 葉 9 生 な 1 せ 3 笑 7 CA 0 ダ ζ げ 4 7 せ 時 あ 2 IJ は る 13 7 靜 は j AL U P H す N ば 力> L n 畑 は 0 12 2. (0) 12 4 す ば 12 V < 咲 t 流 息 2: 5 JI を 9 ば < ٤ n づ ぞ づ 見 な 4 1 月 (0) 强 ζ 40 7 난 < 3 ζ 0 兒 ζ 12 겊 ζ 世 T 1 洩 風 草 胸 ぞ 暌 孙 5 9 0 n あ 淚 7,5 Ł ζ. カジ 5 花 Ł V 4 4 思 花 N 寸 6 * ほ 5 2 9 6 2 0) 0 仰 5 10 見 め 來 命 17 る 心 げ 浮 H る 心 12 を ¥2 カゝ カン ば Si 9 我 カン 寂 な 夕 我 v 話 月 日 * L Ł 0 0 カ> 17 見 矅 6 2 な は 日 な V 悲 草 0) 2 7" 1 力> 4 13 0 力> あ 湧 如 0) め T 赐 づ L 夕 2 13 7 < 頃 女 4 <

佐藤

安

子

73

力ジ

n

进

る

鮮

血

17

临

壁

は

妖

黑

とな

彼 す す 靜 0 ~" 4 1 靈 T T は カゴ カジ 樂 彼 V 7 寸 12 ŋ 13. 美 1 0 美 24 75 0) 色 王 12 彼 カゝ 73 12 國 溶 12 2 な 72. if 7 0 た。 (1)

0

聲

0

13

カ

12

17

向

0

T

來

6

光

껃 カゞ 1

永 3

遠 n

0 E

扉

は 遠

沈

默 扉

あ 沈

3 默

永

0

は 25

12

あ

る

Ŷ

ζ c

燦 2 毒 燃 蛇 12 1 え る T 0 南 紫 陰 ي 力了 綠 る 暗 ζ 0) 0 落 2 光 空 日 깓 界 0) 0) カジ 12 面 暗 現 は 12 V #1 あ カ> 焰 72 は > 10 1 cz V 7 70 る。

花

0

夕 生 4 n す 立

暮

る

Ł

< ! 6

7

走

5

のる

212

憂愚窓萬。よ正生我赤か根。悲

か近家なろ道活が錆 く概なし 何ゑの の道 び を に立 0 全,直 t 息 7 b は 甲大 幅でく 0 てら 然込 のしも + 悲 Ł を せ る 出 力》 みに 裏こよ な島 思 T は 懷 10 12 て 年 Ł 3 疑無 12 根 ず るの 我 事 0 T 自 疲 12 2 白なと今 良 黑鐵炸 12 6. 我 心 生 煙 から語 0) 思搖。目 0 カと 3 5 ま 躍 日 も無常られる。 聲 2 ふぐ外 イ透 75 12 る た 時 美 曠 憤か 力> 風 投 御 野 5 必 げ 15 手見 0 力> 向 12 烈 B 男 國 を 出 中 CV 12 83 T 暗い等 で 神 12 してみ 此 る h 泪 死 づ カゴ Ł

ブ石我ほ五

西

く悲る

てさ時

淵

岭

0

< 5

爾

1 1

腉 等 1

す

我時

れ來

はれむ

宣のの

5 光

Y 2

筑

波

白

夏雲

筑 波 根

な 前 15 嶺ねが 杉 から 0) は 0 根 る る 17 野 0 太 12 筑 は B 林 林 何等 沼 雷 波 + 木る わ 7 0 は 處 丘 0 0 下流 0 中 9 CA 0 あ 靑 4 を 嶺ね 闇や 的 石 10 犬 た < L 野 知 < 12 0) 12 カ> 6 10 7 Ł 原 夏 行 6 0 小 L を 9 0 靑 引 0) 2 ¥2 1 道 5 逍 V2 空 青 日 蒼*大 か よ 计 立 遙 p 0 弯6空 を た 9 3 7 E 5 CA 草。 高 夕か 5 0 を W す 弘 7 砂 7 ~ 雷がずる 籠ご 行 12 夕点 から 害 常 尾 口 Ł Ł 走 陽の < お た 4 陸 を 笛 9 * 13 5 ح 12 を 振 0 カジ 2 行 7 見 4 n 射 9 人 映う 中 < lf 7 少 ば な 5 T 0 汽 す を 心 心 ば 女 n 9 立 幸 車 湖る 白 よ 17 犬 よ V r 1 0 色は \$ 4 H ٤. で 4 吾 ح 面物 雲 12 カジ カゴ CK 3 る 2 5 110 飛 行 ょ カ> 安 來意 12 思 カン る な 於 る る な る < L

牛きま

久 青

Ł

暮

から

初

雨

ム雲

3

L

後

0

野

原

0

青

草

0

+

を

步

め

ば

心

ょ

2

カジ

る

白筑

夕わタふ

雲

波

本正

雄

坂

IN SICK-BED

Whenever I lie in bed from some slight illness
And shut up myself for a while from the busy world,
I feel my heart strangely vacant
After the passing of the pain in the flesh—
All petty ambitions and unworthy desires
Are dispersed as clouds before a shining moon—
And I enjoy an unusual quietness.
Then from the bottom of my vacant heart
There arises a gleam of love, which swells and swells,
Until it fills up my whole consciousness
With the memories, both vague and clear, of kind deeds and thoughts,

Some shown to me and some rendered by me to others. And thus with this quietness and blesséd memories I'm freed for a while from the busy heart-killing world, And feel the pulse of humanity beat more strongly In my enfeebled heart.

And whenever I rise again recovered from sickness I find myself better prepared to love mankind.

PREGNANT SILENCE

'Twas a rainy afternoon;
He and I walked in a suburb hill-side.
The rain had subdued the all-staining smoke
That infested the sky of the choking city,
And it life-imparting influence refreshed
The colour of the way-side pink.
He uttered no words, nor I ventured
To break the pregnant silence;

The rain fell softly, the leaves quivered, And we walked side by side Along a dustless hill-side road.

A BEACON LIGHT

'Tis the season for welcoming the departed souls.

The sun has sunk behind the mountain;
On the lonely way-side in front of a farmer's hut
A fire is burning in the evening quietness.

Three figures are standing around the fire—
A widow and two children newly bereaved.
One of the children asks the mother—
"What for is this fire, mama dear?"

"It is to welcome our papa home"—replies the mother.
"Where does he come from?"

The another silently points to the western sky,
Which is now illumined by the golden torches of lingering clouds.

Then the three watch the clouds with one wistful gaze; "Will he be happy there, mama dear?"
"Why not so? for he was kind while on earth."
It is enough for the children, if he is happy,
And comes again to visit them once a year.
They ask no further question, and silently
Add fuel to the lowering fire.
The darkness swallows the day's last beams,
But the fire—beacon for the returning soul—
Burns the brighter, and the faces of the three
This light, too, will soon die out;
But the true beacon of love for the deported soul
Will burn ever brighter in the hearts of the three.

Minoru Toyoda

"Pleasure, Pleasure, thou art my life;
Short be thy day, I do not sigh;
Bless me with 'song and wine and wife!'
Let's eat and drink, for morrow we die!"

Drawing a drum-like goblet filled

He drank in manner wild,

And gave it to the witch beside——

His eyes upon her child.

"The withered plant shall bloom no more:
Sing my child; youth comes but once,"
The witch prevailed thus on her child
To sing a song and dance:

(Behold, the maid of angelic beauty,
Thrice four summers old;
Her lily lips and rosy cheeks
Perfuming devil's hold:)

"We wander th' wood, lost from our mother,,
Yet unlike the moths who scorch
Themselves on fire, we joyfully gather,
Cupid,' round thy balmy torch."——-

(Is she a child of the choppy hag?

A pear tree bears no peach!

Yet lotus flower grows in mud;

Its stem would heaven reach.

Howbeit an April bud be charming,,
Oft a canker's prey!

Purblind her eyes on ogres grim
Of black, red, blue and gray?)

Sudden claps o' applauding hands
My dozing ears alarmed;
Her song had ended; had I slept
For all the while encharmed?

Behold, her lips are nigh to sip
A cup of wine aflow;

Is it not filled of human blood?

Her questioning eyes aglow!

Alas, my tears came trickling forth,
When she tried it to taste;
A hell-fire would burn in her soul,
Melt down her marble breast!

The moment flapped my wings at her,
And snatched the grail perchance;
"Intruder, friends!" cried out the hag;
The light went out at once!

R. Hoashi

A LITTLE SINGER

(Evoked by a sight I witnessed at a country camp, where was held that night a wassailing party attended by a lady-singer with her child wonderfully beautiful, whom she claimed to make her successor in profession.)

Cloud-breathing swarthy steeds of night
Sped swiftly over the sky;
The stars that night put out their lanterns
Or hid them from my eye.

The moon so shy fled with her mates
As if she took alarm;
In silence stooped the firmament,
Hagged in earth's dingy arm.

No wind, no cold, yet chilled I was.

And then my fancy sprung;
I saw a gleam of light appear,

From far a hillside flung.

"Stars play hide-and-seek with me!"

I muttered in my flight
With frolic wings in wanton dance,
As though an elf of night.

Right at the adamantine door,

As if a shapeless wight,

I crept in from the cleft of rock,

Whence gleamed that winking light.

A hideous guardian kept the gate,
He looked at me askance;
Yet passed I on, a thing unseen,
And heeded not his glance.

Methought I trod a subway path
Paved with round rough stones,
But when my eye pierced through the dark,
Lo! they were cranium bones.

I flew in haste, Oh woe betide!

Groping along the wall;

There stood in raw men's skeletons

Like pillars of the hall.

The curious youth is rashly bold;
No fear could check my way.

I heard a noisy blast of songs
Come sweeping from far 'way.

Ere stifled with a lothsome smell,

I peeped in to a room;

A thousand candles flashing up

Dispersed the teeming gloom.

When I recovered from the glare,
I saw a dreary sight!
A band of devils sat at table
Feasting away the night.

A monster in paternal guise

Gleefully showed his fang;

As ripples in a stagnant pool,

The drunkard smiled and sang;

△虚心集句稿と明記のこと
△東京市外高田雑司ヶ谷二二中塚直三宛
△題、句敷を限らず

餘 若 ぼ 水 蘭 Va 厨 晝 祭 螢 火 田 ま 葉 花 た 群 ブ 近 植 顏 丰 夫 よ ろ * ん る 見 U く ラ 若 婦 入 点 5 ح 夜 踏 る 0 小 公 風 葉 居 2 n 深 4 山 カ> 鳥 n 加 浪 る 12 炎 家 聲 カン を 人 窪 6 せ 茂 打 荷 家 女 人 カジ 散 0 天 す 3 0 る 12 2 0 0 鞍 蠅 カン 6 石 夏 青 0) 實 巢 牧 解 ば 大 5 0 0 0 梅 蜂 梅 立 五 草 < 朝 落 だ る T 蒸 5 月 飛 U 刈 靴 r 植 蛃 < 付 す 急 雨 洗 4 暑 羽 力> る 13 カン る 力> 40 15 な 1 2 V2 6 13 鳥 9 5

泥 鈴 夕 同 林 同 同 秋 勞 劍 白 化 閃 働 恭 洋 蟬 鳥 前 花 宮 井 子 者 堂 浪 郞

家 葉 父 磯 汻 葭 雷 日 N 蝙 桐 め 草 0 柳 切 淸 ば <. 당 蝠 鳴 71 h 0) 0 4 は 鵙 N 水 4 傘 n b 花 E 5 る 3 3 op る 飲 船 < 堪 2 落 B 0 行 顔 n み え 板 め 5 ぶ 桐 あ 0 花 0 行 な かゞ 15 L 2 白 n 麥 カン 花 た 行 4 4 熟 ġ は 4 L 4 < 果 n < げ 13 < 5 落 N 7 道 5 あ L 帽 潮 立 5 V2 坑 中 葭 400 子 等 紺 3 0 桐 る か 夫 高 ろ み 切 0 風 汗 日 潮 3 0 わ た を 鳴 0 呂 暮 カ> 花 3 0 去 L る 見 中 夏 H 敷 立 N た た る 濃 た 汻 す 17 5 3 j 柳 9 3 す る L ð 5

虚

心

集

碧

樓

道 12 到 る 性 12 B 0 カジ を開 見 せら る | | | | | | | | | | 於て 性 すも 抑 26 情 26 解を取るべき性 12 7 慾の 疎 性 る 性 現 育 拓 にすべ 0 罪 慾 相當 4 欲 頗 17 すべき義務 發露を至當の 悪として 醜 問 就 0) る多し。 業 ならな 對 0) 力> 題 て意見 ずる 研究 らざ 12 婦 問 付 600 徒に 蓋し神 一
悠
に る 教育を缺ら、 題 1 を發表し、 あ を發表して、 なり。 を論 るも は 方向に掖 關 人生の最大事 禁慾を以 秘 する 密を嚴守して、 ぜんとす。 聖にして冒すべ のとす。 宜 知 しく 教育界に 誘するを要す 宗教に於て 眞 識 7. 泰 教育家 事 面 0 養成 にし 西 目 とする 12 醒 17 靑 カン 覺 指 は は 7 於 らざ 愼重 七里 るは 此 年 を促 導 7 は 點 教 0

は、 12 6 論 12 靑 男 女七歲 男女 なら 幼 頗 春 る合 者 0 な 結 h 25 0 理 る性 果 達 頭 耳 12 r せ 的 腦 11 ば 12 T. 慾 0) 起 12 す事 方法 秘 性 席 疑 0 方針 密 惑 情 を を 同 屢 13 8 8 懷 5 るべ 8 R 求 知らず、 せずと云 示 15 め カン ち。 L L h とし U 1 奇を求めんとし Œ 斯 る 神 T B 路 0 秘 如う 情 のに 的 17 る 12 指 慾 カジ 際 L 0 導 て巴 て徒 す 衝 如 42 當 3 動 る

を

好 之れ 0) 奇 を好 的 慾望 T 0 は 慾望の本態と稱すべし。 奴隷 となり て生 活する者、 而し 世 E て此

まに 望、 奇 心 せん 5 12 ふる性を享有す XL ~ 聖 誦 300 理の 12 づるは 學 座 繰返 競 者 鄭 として之れを L 好奇、 止 な 弊害 すべ 必せ 結 0) 徒 なし。 果 当る 50 さるゝ事 は 性慾より自己の勢力に 俗 に弊害を生 カゴ 合理 人識 新 る人 變遷 0 說 めん 吾人 12 者 ż 的 制する ハは其の 非らず。 する 世 研 間 あ とするも ならざる 900 人 鳣 15 は 、擧げ は 結 し、 W) 世 兎に 抑 頗 果 活 商 とな 斯 動 7 0 制 Ł る 0 を主 習 A な 難 角舊を忘 ---0 0 は 9 き事 應 1: る 如 結 般 900 6 とし くし 流 果 じて 73 4 行 j る 0 如 恰 n 歷 5 あ 性 1 7 1 砂 **5** c 競 36 慾 新 史 0 此 好 徒 群 羽 を は 奇 CA T あ 般 制 其 擅 6 迎 新 集 る

徒 る 17 0 的 を要 方 を指 らに自 性 理 法 すべ 定 は to 他に水 我 する n 止 、自根 の目 ども U を得 を妥當とすべ 的 本 其の す 論 を貫徹せんとするも を以 と云 本 0 CI 源 きな て、 12 公娼 遡 600 將 5 廢 6 來 委 北 社 を叫 細 面 會 假令 12 ぶ 革 研 偏 究 は 0 共 的 1

問 題 女

0

墾語 改良政策矯風上、延いては道德宗教等に對し くべからざるものにして、今日の識者須く大に研 る解答を與 の影響の を至當とすべきも 頗る多く、或は廢娼運動の 論說! 獎勵政策よりして、 阪 飛 して宜 甚大なるも 田遊廓 極 へるは甚だ難事たると共に、 めて盛なるもの しく説を發表して指導の任に殉ずる 地認可せらるゝや、 0 なり。 のあ 5 識者の論議せらるゝ 導火線となりて顯はれ、 あり。斯の 該問題に正鵠を得た 或 は 如きは 私娼 叉緊要缺 もの 社會 防止 を同

もなきてとなるが、之れを常食事に比し、 たるは、 性慾は日常食の如く 性慾の生動 爲政家として單に の極めて重要なるは 必要なりとし 一局 面 0) T 一公娼 觀察 解釋する迄 食慾と 17 17 質意 外な

れを制せば何人と雖も生活すべき理なさも、 性慾と其價値を同 とは雲泥の差あ は相當に堪 日に談ずるは誤れるも甚しきもの られ、 り、共に必要なる問題なれど之れ 加 視 之れ するは非なるべ 藤 を制するも食慾を制

l

食慾は之

する

性慾

時

也

無視すべきに非らず。吾人は性慾問題の真相を探 於て外に取るべき方針 なき迄に發達向上せしむべき方針を考慮するを要 迄にも非らざるなり。 するや、 所とせば、今後の改革を極力研究して、行政の 弄物と爲すことを公許するは、不可なるは論 其尤も大なるものなり。 來すや亦た甚だしきもの 行政上の問題に就て、 痛切に感ぜずんは 社會行政上止 なしとして、 あり。公娼問題の如きは 之れが宗教道徳に矛 人權を蹂躙 あらず。 將來の 單純 i むなきの て男子 12 ずる 下に 矛盾 盾 畫を

なり。

知るべ に勝 伴 子 75 6 味 進 は T 向 0 6 12 17 を満 うて ざる 6 c 妻に す 情 E 貞 る 國 的 操 慾 劣情の は我 足 男女の尊卑に雲泥 を 0 して子 12 0) せし 男子は女子に對し あ 放縱 於い 吾人は敎養あ 强いられ、 ふべ るや 0 國 發揚 むるもの多さを思はざるを得 民に於ける現狀なり。 發揮するあらば、 ならは 1 は 加 男子 敢へて正當とせられ、 論 する 之れを美點として稱讚 は後繼に就 な 去り、或は妾の 500 に當 る者に の階級を生ぜるは當然 6 て経 Mi 砂 L 其 て好 斯 他 て本 體 0 面 0 的 如ら更 妻を置 氣 害毒た 如 權 ら低 心 好 女子 力 氣 を 0 るや は徒 に男 3 級 徒 心 せら 振 6 0)

0

謂

3

女は自から自覺を標榜 を女子のみ攻 0 13 時 大疑 頭 る 女子の 恬然たる 脳優秀なるを證 は 問 般に認 とす。 教育盛ん むる權 砂 0 め得 我 あ 國 12 る して専横 すべき例 12 利 して、 は果し しと雖、 於 は驚くべ ける女子の 稀 1 12 となすべきも 之れ 男子 し 情 れに 性 所謂 を以 12 去れども之 頭 0 奴 腦 あ 隷 新 つて る 頗 と化 しき 0 る 1 3 男 低 か

> は第二 るなし。 するは 般性慾上 な得 習慣 0) 天 男子 性 12 0) 先天性 於け 13 0 5 性 3 情 恥 12 而 12 歸 辱的 於 して其の 因 7 せ 0 習慣 ざる 少なくとも缺點 情 をなせるも 性 は からず。 今 自 我 を有 國

50 者も ざるもの 的 理を説明せずして當事者 青年に禁慾を勸 る 0 面 ~ き結果を作す亦 徒らに主義 12 を忘 本 我 教育界の 非ず、 源 か 多さは宗教 教育界の る教育は神 0) 精 秘 通 大陷缺 密 せ 12 ざる 主義徹底せざる め 的 乏しく、 的 7 聖なる 止 或 12 感 當 とし論定するを得 は むなきな 因 念の缺存 事 不 は 者 統 社 すべし。 秘 徒 會 12 密 らに 放 全 的 0) 逸者 が故 組織 12 敎 開 依る 其 育 戶 多く、 せらるべ 面 12 12 は を カン 所 勞力 るや 現代 成 或 る 知 を見 必せ に於 は 1 2

內 理

砂

け

す

L る慾望問題 あ て、 るも 吾 人 人倫 カジ 遊廓 要す 0 0 主肯 る 基 問 12 題 礎 を論 を確 我 を完全に施すを至當 或 立 議 0) 人情 する を察 12 般 難 論 して本 人 民 紛 とせむ 12 R 布 能 た 達 る 為 研 砂 す 究 1

る L 慮 0 ば T なり。 せんとせば 1 カン 始めて 有名 いらず ると 是に 無實 此 於 0 0 36 宜しく 問 7 結 再 題 吾人 果た び 0 は る 解決せらる 性慾 亂 事 向 動 0 上 疑 搖 ふべ 本 を企 すべ 能 310 > 的 圖 4 研 所以を知らざ 禍 究 餘 根 を完全に 確 地 を 實 な かかか を考 始さ

する を惹 然れ 時 女情事 2 て生活せり。 カジ られ 代 故 て頻繁ならし 害の 問 方 は 起 どるい 國 12 萬全 向 題 皮 L は三 0 て、 生 交互 傳 男女の 0 相 交際的 ず 百 歸 岐 聞 0) 0 路 然 策 を以 る 趣 感 世 42 年 8 に進 を講 あ 12 心 る 關 以 17 め 情を理 しが 此 明 9 2 醜 關 12 係 來鎖 0 遙 係 1 白 ず 聞 開 て單に男女離 12 いより往 最 る 其 如 す を 國 於 17 國 善 0 流 解 以 す る は 主 7 する事 我 理 す 來文 弘 0) 本源を察し 義 る 事 國 從て は 法 26 々奇 鎖 を以 とすべ 化 とす 現 0 國 秘 代 存 怪 委 男女の交際 0 的 2 あ すべ なる 常習 て本 密 0) 1 60 細 開 也也 實情 を主 ζ 其 とない 眀 きを 0 然 性 は を 領 害毒 義 8 倘 n 欲 n 交 主 せる 見て 布說 通 とす 過 共男 關 6 砂 渡 を * 係 稱

步

E

一種す

~

かって

のなら

ん。

かか 下流 きを認 ては 法 き教育は 致 極 は 12 め 男 0 於て は之れを知らず上 本邦 T 論なし。 を放 或 理 を自 T 相 る 施制をなさんとす。 陷 る 親 0 人とな n 慢せ 如き、 b U 缺 1 E 程 を生ず 堪 上下 ざる る 當 度 40 中 17 8 12 ~ 流 男女一 きに 流 最 研 る ~ U) 究 流は知 ことあ 社 4 力> 祉 會に 必要 せば 非 6 會 致すべ らず、 ず。 は多く 比較 之れ 逐 りて單に都 な りと る 徒 12 きを 社 的 4 至 雖 接 5 會缺陷 眞 善に 0 近 21 倫を辨 考 深 す 面 ٤ 男 F へし 到 る 合好き方 < は 云 達 12 女 第 U す 能 を女 於 3

動 失態 缺點 人の ら缺點甚 る 正 あ 搖 n ~ 0 凡 T きな 性情 どる に終 とすべ さる 理 邦人 法 300 だ多し。 國 12 6 頗 > し。 る浅 もの 0) 合 民 感情 所 性 通 は カ・ 3 謂 薄 甚 有性を觀 として慥 之れ る た 12 17 る 性 多さに 支配 盲 0 カジ 1 本 故 7 因 目 能 熱し易 察せ され 襲 的 12 カン 以男女接 結 を狂 歸 0 17 すべ ñ 易 果 隨 外 熱 人 か、 8 < 件 かな 見 近 12 冷 17 猶 優越 左 一籌を 理 る 0 め 止 易 まず 右 性 12 理 0) 3 弘 4 せ あ 0 到 50 ,舊慣 る美 發達 徒 は 輸 る B 5 す 大 邦 真 を 知 12 12 1

情

0)

自然

8

研究

する者

は

須く陰陽の存

在

台

好品 聖に 選定 情 밂 22 当る 慾 は 於 論ず -0 0 を 好 l 力> 嗜好 選 奇 は 1 は 0 澤 を 漁 米 あ ~ 反 300 ら間 以 飯 る 對 カン は す 害毒 3 な 7 西 当也 更 洋 强 題 る カジ 狀 事 如 12 0 1 於て 食事 す 態 流 味 0) 實ならずんば を有 逸 覺 n 12 老 ども、 す 情 あ は 12 らず、 す。 比喻 る所を 慾 作 麵 は之れを同 用 麭 とすべ 其差 性 せし せ 慾 ñ 同 あ 知らざる 的 カ> じ は 頗 5 < < 7 情 食 る 遠 內 事 各 慾 視せば は 容 0 は 種 他 陽 を神 如 0 東 火 0 な 嗒 食 < ż

大

早

せん る L 觀 3 方法 と 達 社 有 す 斯 は 7 12 め る 社 會 0 す カ> 想 適合 如 針 會 勞力を要す 雖 は は 0) 明 を傾 は 理 < 遼遠 の完全に 頗 社 會 順 せ 論 實 加 る る な 注 應 闔 論 容 0 42 行 適 せ して な 易 す 向 8 難 ば須 思 9 12 發育せ 0 る 12 るを至 上を深慮 沿 は 勢以 伴 非 砂 はずし 1 らず、 な 吾人 ざるを得ず 0 ざる 社會 ふる 當とす。 な 夫一 は す る る者 て、 17 其 其 0 0 ~ 婦 因 不完全 頗 0 0) 行 然れ は 據 不自 は 理 3 宜 然 最 多 す 理 想 程 共至 然 る 高 ~ 論 12 しく 17 当也 3 12 0 文明 -近 曲 現 複 A 善 斯 最 カン 折 此 出 雜 類 迁 12 O) 0) づ 善 Ł 基 Ł す 73 悪 到 加 0 カン

> 影 問 響に 題 たらずんば 隨伴し て、 あ 5 ず 高 理 想 0 現出するは 至 0

ば、 縦なる 紊亂 な 期 關 抑 する 0) を教 5 る 示す からか 0 係 と論 個 4 ず は 地 人 春 で育に俟 を有するも は 風 祉 特 方 ず 教 恐怖 所 0 心 會 より、 異 發 と為す。 は否らざる 道 は、 からも 性 すべ 動 つべ 德 更ら を 0 0) 见 時 から き事 0 進 期 更に 般 多 氣 步 てし身 砂 論な 實 情 通 候 iJ. と宗教の 醫學 早 有 風 な 0) 慾 50 期 よ 温暖 豐 性 土 しとす 0 發育 0 に發 慎 として Ŀ 6 狀 は 感 斯 重 0 寒冷 况 る 境 化 を 育するより 可なる 0) 見 缺 境 早 遇 に歸 4 如 解 るか 遇 3 熟 1 0) を 6 せず 15 惡 は 嗣 0) 更 以 差等 比 弊 る 因 17 1 さは 害 風 較 76 は は 必 放 實 カゴ 的 要

際 良

n 出

南

るよ

6

3

男子 子 ても 女子 育せら 0 之れ みの 襲 0 0 自 る 道 0 久 世 カゴ 德 n 由 界に ば男子 を 原 12 漫 阳 Š 因 非らざる限 を 13 害 階 有す 12 級 隷 的 1 女子 生 るも 屬 教育普及せ して 活 12 と男尊 9 0) なり。 嚴な 男子 女子 られ 女卑 る 21 と均 は 凡そ文 0) 0) 法 2 結 等 律 都 偶 明 H 果 0 は 發育 は 12 好 R 男 於 < 敎

今 な 共 人 B 15 妓 倫 此 12 際 0) 醫 本 以 真 春 世 學 源 1 12 期 俗 Ė 誘惑 42 性 21 0 0 當 湴 慾 小 見 と誤 兒 行 人 3 解 7 倫 TE. は る 解 當 54 0) 出 就 とを 禍 基 12 產 根 T 腦 因 0 7 な 來 髓 疑 更に 生ず た 知 問 12 悉 解 を 情慾 る事 す 决 神 軌 る 3 秘 道を を解 勘 與 的 からず は 1/2 逸し 殆 釋 感 ずる する 然れ て、 0 E

は

頗

る

時

12

する

3

0)

X

~

然 决 0 越 弘 B し、 0 2 す 論 理 肘 0 春 な せ 2 き事 間 論 1 制 且 心 類 す。 題 4 習 發 抑 0 とす を 慣 組 壓 1 性 機 動 愼 醫 7 織 自 期 b 慾 る 之れ 重 野 7 由 學 生 は 的 適 者 54 蠻 秩 13 Ŀ 活 氣 区 議 1 序 る 0 問 候 8 係 須 3 見解 L 6 題 4 的 研 は 7 < 作 索す 真 0 12 關 他 善 人 Œ. せ を以 多 と謂 あ 係 0 果 類 大 るを 15 る 5 及 動 * 同 る 所 T T 0) 物 CK 影響を 獲 胞 以 せ 境 要 文 0 明 得 な A は __ 遇 す 如 す 般 1. 9 類 12 < る 0 達 性 人類 0 及 大 比 を 為 す 慾 關 動 人 ぼ 較 要 生 す め 物 1 22 係 0) 1 す。 さを 向 付 ~ * 性 12 ~ 4 性 有 慾 < 上 超 7

> * 0 は 慾 健 は な み 3 滅 30 5 な 全 調 不 6 0) 頭 生 ざれ 除 調 却 > な 3 腦 i 强 叉 活 * 和 去 る 0 度 女 は 12 T 性 12 L 作 歸 性 於 情 偏 0 畸 T 用 1 すべ 倚 性 尚 É E 0) T を 15 特 せ ス 畸 0) よ 4 テ る 性 異 性 種 揮 9 h 71 問 頑 0 質 病 1 7 性 ī 得 題 畸 12 性 玆 及 T 性 た 12 偏 0) る 25 調 化 男 Te C 倚 2 男 カ> 和 子 する 女子と 生 0 4 女 8 * る 男 集 得 U 兩 交 カゴ は 51 合 性 性 る 如 L ~ 監 到 或 相 12 2. 4 7 獄 る 7 は 融 頗 13. る 異 女 0) 22 は る 和 優 男 見 滴 時 性 性 美 12 0) る 子 (1) T せ 情 點 所 0 交 h

し。 す。 12 する る 2 は d は 目 頗 更 旣 男女 然 的 A は 洵 る 12 12 とす 深 25 類 殿 情 性 カン 3 困 長 0) 學 慾 質 難 情 る 0 繁 性 的 問 ir 慾 は 事 殖 慾 13 精 題 交 上 3 0 必 12 は 神 8 ^ 興 屬 論 3 12 1 人 上 3 L 0 味 缺 類 12 ず 適 くべ 誤 7 生存 る要 73 な 度 於て る < 03 單 h カン Ë 20 あ 調 必要條件 らざ 一緊要の là 稱 12 加 9 和 性 論 種 す 8 男女 慾 3 得 な 類 3 大條: 男女 を 0) 1 た 繁 遂 4 兩 る 4 間 件 殖 性 理 るを を 13 0) 0) 逐 る 關 5 交 同 40 以 係 通 1 n 畤

5

- 126 -

J

~

からな

0

73

90

靈

長 調

0 和 本

人類

12

於て

は

特に

複

雜

な

然

6

ば果

0)

惰 問

勢

とし

7

8 的

必

真 明

相

親

情

0

題

T

根

12

之れ 要

を

究 T

せ 性

ば

天

L 3 る वि 1 反 きを論 何 覆 ぞ op 7 ぜん 足 吾 n 人 りとす は 更 に る 遡 つ 甚 1 極 L かな J' る 見 所 かる 12 非 カン らざ らず

-

を以 公 要 獨 施 搬 以 稍 誤 斯 n 感 娼 染 E す 南 浼 < ば、 7 R 6 甘 T 設 娼 る 可 6 0 な 值 置 某 廢 家 17 大 7 傳 難 100 する る 公娼 此 5 ता 15 絕 染 た 0 都 步 合 公 は る 體 < 研 ~ 17 0) 4 首肯 る 究 0 斯 3 好 は 期 R 的 然 b 北 科 カゴ 會 然 17 きを思 自 0 1,2 為 とし とす 非 甚 見 他 す 35 教 カン 授 n 然 なさを實見 め 6 7 ~ だ 0 さに 12 ざる は、 多さは 病毒 は 7 カン 健 0 ざる 名 3 康 花 單 非 保 男 數 17 柳 比 無頓 17 5 促 病 較 疑 子 ~ 17 存 ざる 接 增 論 3 0 カン カゴ らず。 着 る 3 加 週 す を ~" 理 6 から 吾 礼 せ 根 數 K 女 明 る 3 究 人 柢 -5-は る 7 瞭 追す 13 r 非 私 とす な 0 種 0 M 見 らず 檢 娼 る 該 毒 之れ るは to を 查 よ る 72 12 病 7 見 質 播 8 6 0) CK 3 25

向 2 遊廓 Ŀ る 12 向 神 0) 如きを 經 を 過 步 敏 進 廢 とな 的 it 7 す る 斯 1 る き能 0 は 如 敢 3 力 7 醜 を 花 事 有 柳 8 せ 病 ば、 排し 0 多 て宜し 計 數 を 會 患 0

5 は 毒 る 4 Typ R Ť 實 群 進 怖 惠 者 h る 行 2 馬 を は 0 縣 > きに は 絕 は 為 あ 7 陰影を 二十 5 其 無 す ず 非 Ł 0) 年で 5 な 好 見 果 ず n 要 現 代 を 3 經 とすべ 7 納 宜し 3 驚くと 0) た 舊 傳 3 T 4 習 < 今 3 ^ を改 6 百 0) 般な 當 年 4 0 朝 的 1 0) 徵 7 稱 計 る 廢 兵 少し 畫 滴 娼 す 慕 改 0) る を 以 先 9) 4 0 弊 7 賜 0 政 73 策

B 决 0) 面 S 6 3 文明 Ž, 內 7 E 0 論 實際 甚 現 る 容 す だ 代 ~ は 0) 1 0) ら章 物質慾 性 きな 醜 實 0) 醜 川班 歐 慾 な プリ 50 洲 解 を保 節多 併 る 12 7 行 0) 决 宗教 騙ら は宗教 ĺ せ 存 0 とす。 を ざる せ ば 見 は n る T から 權 E 何 訓 精 事 故 威 0) 外 效 形 地 (0) 神 あ 27 30 6 果 慾 0 完美 落ち を有 3 外 0 均等 要す 0 面 多 * す 7 可 摸做 形 るや を る 式 缺 17 を を 今 1 < す 3 內 用 知 る

する 此 0) 類 W. 理 0) 點に 要 は 論 造 13 勿 0 問意す 實 る 論 カジ 際 秱 は 13 敢 る 理 7 ~ 想 ~" 天 E 說 現實 E 明 0 本 3 雖 然 3 0) H た 迄 勉め 合致 3 忽諸 る 36 8 な 7 ¥ 3 見 知 此 6 À. 附 0) 3 は は 折 な 難 6 衝 さに 宜 12 事 凡 12 7 非 < る 屬

第 ちて效果を生ずとせば、女子の向上 らざる 下の急 義ならざるを得ず。 i 務 なら 13 0) n にして、 特に後者は 女子の 男性 女 肉 0 み文明 性 體 0 精 一は社 教育感化 輔 を専 E 會風 0 開 有 教 に俟 發 す は 1 0

謂 議 社會 みならず精神をも堕落せらる、を知 め、 解 し道 ふべ て甚しき矛 0 從順 して子女 現象を見 に教育せら 子女の節操を は、 を以て至善道徳として、上者に好 は 下 て、 盾 徒 流 n らに 0 0 反 踩 生活者は子女を父兄 不條理を認識 對を 貧に 躙して省みず。子女も誤れ 惡しき 父兄の 専有に 任ぜし 爲する して父兄 せる 0 尠 0 社 らざる不 爲 なきは 會 め 0 12 都 財 4 甚しと 肉體 合なり 因 產 習 と曲 可 1 思 る 0

多

る し、 悪 在 百 なる遊廓制の如きは禁止するを基礎的 は なる興 不善 Ŏ 蓋 引 大 15 味 る因 悪智を現はせる遊廓の T 進大な は は益 襲 社 會 R は子女を奴隷 りと為 子女を 般 0 す。 風教 奴隷視 吾人 0 たらし 刷 發達又 する 、は絶體 進 め、 を印 習慣 は 象せし 男子 私 に舊惡道 的 を 娼 12 不 0 助 0 散 自 長 劣 U

> 結 を打破する自然狀 論 す る 4 と信ずる 態と論ずるは B 0 止

性を忘れ 準を決定 輸入して改善すれ て、 究的 性を以て 國 至當とす。 嚴 に三省すべきもの 歷 重 史 方針を斷 感念を以 12 却 は 將來 する 後世 せんと努む 表顯せる我國 吾人は 案す 0 的 1 に示教する所多く、 所謂 影響に對する 0 ば缺 泰 るの あ る所以 西文 至美 あ る 要あ 淵自 ~ 情 りとすれ さい 明 至 50 な 善 0 から傳習して古來 外見的 可 可 9 此 0 否を論意 處 古來 否を零細 ば、 社 に於 會 泰 改造 更に 0 西 種特異 文明を混 議し 0 1 文明 吾人 に決 吾人 12 盡 は最 す は は 美 同

L 徒 數多立論せられしと雖、遂に原因的解釋を知らず、 政 要なるも 0 立 以教育家! て、 らに 如きは 論するを要するも、 性 慾 皮相の改良を以て歴史に教へられしが如き 12 舊習をト守せん 当する 17 凡そ其 して、 とするを得るな 社會 0 公娼 性 慾 觀 とす。 現時 必要 0 は 根 500 論 本 雜 須らく 甚し * 論 公娼 紛 私娼 解決する きは堂 諸 K 人廢 私 た 種 止 る 娼 0 遊廓 に最 々た 基 說 0 を提 論 點 る爲 題 より 8 問 出 題

家屋へ嫁入せよと殘しておきやつ たコレ 此 て恨み泣きをする。「私がことは思ひ切り、山

そなたは思い切る氣でもわしや何んほで

からお染を得心させやうとしたが、お染は人

いて居る。これは徳川時代の社會道徳なる義 つて、他人同志になることによつて落着が附

とに當るのである。久松はなは養親との義理 嫁に行けと云ふことは女の道を背けと云ふこ

300

お染と久松との戀仲の關係も帳消しにな

おみつと久松の許嫁の關係

たのも、

瑠璃の男女道 德

お染久松

に、自由意志に基く戀愛によりて結合した仲 した道念が横はつてゐた。けれども、 である。そして其の結合には個人の人格に發 迄も孝道を盡さなければなられ 義理があっ 居た身分であつたから、養親に對しては飽く 生れは武士の子であつたが、家が濱れたため た。彼れがお染に、「山家屋へ嫁に行け」と言 に、十の年から乳母の兄であつた百姓久作の お染を棄てた譯になった。然るにお染は久松 親に對する孝道のために、一たん契つた妻の のおみつと視言の盃をさせられる段取になっ ひ**殘して養家に歸り、養母が死な**ぬ中に許嫁 この二人は徳川時代の家族道徳の 、此れが爲めであつた。それで久松は養 そこから油屋へ奉行に出されて (野崎村の段) 久松に縋り付い 世の中 久松は く。」とある。此の中で、「そなたは思い切る氣 つしょに添かなら、飯も炊ふし織つむぎ、 ら南やら、しらめ在所も厭ひはせめ。二人い ものであるから、一方が心理的に思い切る氣 上に結合した戀愛は、心理的の外に倫理的の は、 の。女の道を背けとは聞えわはいの。どうよ どんな貧しい暮しでもわしや嬉しいと思ふも ない事ながら觀音様をかこつけて逢ひに北や も得切られ、餘り逢ひたさなつかしさ、勿體 ない。それから貞操の觀念の發達した當時の でも一方が心理的に倫理的に思ひきらない時 妻であれば、貞婦兩夫に見えずで、山家屋 社會では、一たび契つた男子に身を許した人 になつて離婚することを肯定しなければなら は、前者は一切の道德的責任を負うて不德漢 「女の道を背けとは聞えれはいの」と云ふ語 でもわしや何んぼでも得切られ」と云ふ語と お染に最も强い所である。一たん人格の 點があつたからである。この久松の道徳的 つて手に手を取って元の鞘に納まり、 點に對してお染は飽く迄も人情より責めるの 勝になる。これは二人の道徳的關係に於て、 こ、に久作とおみつと母とが加はるに至つて 債を果さなければならの道理になる。然るに であるから、 お染の方に弱點がなく、久松の方に大なる弱 出來なくなつて居る。結局は久作と久松との 3,6 より道徳的關係を處分しようと云ふのである を失して來るのである。何れも義理人情の上 義理人情は一層紛糾して、道徳的關係が統 養親子の關係も、 て居るが、途には義理の横衡からして自殺も 一方へ人情が通へば一方へは通はずと云ふ形 剃刀を互に奪ひ合つて自殺の競争になっ 一方へ義理が立てば一方へは立たず、 久松が善人である以上は其の負

情の婦道から久松を貴め、それでも嫁に行け 久松は驚いて從前の通り「女房ぢ

や」と云つて言質を與へいお染様、久松」と云 と云ふならば覺悟があると用意の剃刀を取

131

て表面 て超然たるを得ざるも られざる教育 発じて とを具有せざるは、 て止む し。 改 根 良 人倫 にのみ注目 なき慾情 0 一方に好奇心 源 他方 位置 を尊 0 に真性 と他に變じて之れを誘導すべ 正 に達すべ の所以と云 道 L T 17 尚根 なる性慾教育と之れ を 亂 あ し。 0 養ひて公然其 或は舊習の りて一夫 n な 本的 ざれ 5 ふは甚だ 徒らに性 0 政策を考慮せずし 惡果を知らずし 從 婦 慾 を主 の使用快樂を 7 0 社 3 E 會の カジ 亂用を以 事 ら機 、亂用 な 風 7 關 せ る 教

30 人に依 尊嚴 良 秱 善にせざるを得ず。其の た 0 つにして一定の る域 醫學上の 0) 人生の 方面 3 を羸ち得べ 果 りて を繋げんには、 領 持 不 より述べ來たりしものに 自 異なるも 明な するを先 見解を以てするも健康と疾病 然 きには須らく 播 ると同 衰挽誘導をなし 殖 務 とせざ 理法 様に、 性慾學を研究し あ 方法とし る に適せ カゴ 百 る 性慾 他の 般 ~ して て吾人は 得らる カン h 0 0) らず。 限 社 とし 會 て其 度 て種 正と例 制 0 > 別完全 玆 度 3 而 0 愼 族 3 重 な

> 除 を主張 L あ 重の風を涵養すべきものなるべく、 する等、 7 0 らず。(完) 去するに務むるを急務とすべきものならずんば 社 開 更 拓 12 會 教育 的 講說 道 遊廓 義を發達 0 普及、 に暇 德 0 12 如き不 1 なるも 宗 7 せしめ、 理 敎 條理 法 0 要す 統 12 或 か 滴 るに る意 合 的傳 る せ 社 社 真 會 味 會 E 機 0 0 0 關 女子 男女同 易 禍 性 慾 因 廢 頭 JF.

と同衾するに優りてと。と同衾するに優りてと。然るに見よ此等の男子等を、彼等の眼はも。然るに見よ此等の男子等を、彼等の眼はも。然るに見よ此等の男子等を、彼等の眼は私は森が好き。街は悪し棲むに。そこには餘

- ニイチエ

柔弱な嫁御の代表者である。 側に居たいと辛抱して居たなどは、今日から 操觀念から思ひ込み、添臥は出來なくともお 神聖な權利を辨じない愚婦の言ふとである。 あり自己の人格を侮辱する者であり、婦人の **ら置いて貰らひたいとは、妻妾群居の希望で** まつた人が戀人と同棲して居る側でも能いか 見れば極めて愚劣であり、徳川時代に於ける 分の良人に定まつた人であると云ふ當時の貞 に誤って居たとには驚かざるを得ない。斯う ればならわとした當時の道德觀なるもの、實 御と定まった人に對しては、貞節を守らなけ また添臥はせずも、親達の命令により一旦殿 今日の社會に於ても道徳上より繼承して居る した人格的觀念の拔けた愚婦型な作ることな た思想感情を懷いて居る。さて三勝と半七と 園に同情して居るので、一世紀半ばかり後れ これで解る。それと云ふのも皆な子の結婚に 手喝采する聽衆の大半はほんの氣になってお であるから宜いとしても、それなヤンヤと拍 出させて語るのであるが、それは藝術として、 はりにかいると、見塞からからだを牛分飛び で娘義太夫などが、「今頃は半七様」と云ふさ は 至つては益々驚かざるな得ない。諸所の席 書き置かして、お通を半兵衞の宿に捨子し 自分の良人に定 くと、乳が無くて子は泣いて居り、ぢしとば く成つたからである。けれども牛七と三勝と 中七が親又はお園に對して義理を立てれば三 をふるはせて流いて居るなどは、義理道徳に たい、顔見たいく、乳がはるわいのふ。」と身 いとは困り切つて居る。三勝は思はず乳房を 度子の顔を見たさに立ち返つて家の中をのぞ は子まで生した戀仲であるから、 勝に對して義理が立たなくなり、三勝に義理 とらはれて。虚偽の生活をなして居る者であ 握りしめ、乳はこくに有る物を飲ましてやり として生んだ子か、 對に縁を切ることが出來ないので、死んで親 極致に達して居るのである。それで二人は絶 を立てれば親又はお園に對して義理が立たな る。三勝半七の心中しなければならの事情は したのである。それが爲めに夫婦が愛の擴張 及びお園又は社會に對して義理を立てやうと してゐる。宗岸がお園の結婚に對し、 對して親檀者が獨斷する不合理な行為に濫觴 が如何に惨酷に人の行為を束縛して居たかが すことすら出來なくなつた。當時の義理道德 撫育する親の義務を果た 深い人情の 又は牛

て養育をたのみ、立ち去つたものし、もう一兵衞が半七の結婚に對して、親の意志で夫婦 塊りなる子まで生んで、其の間は天の許 に三勝と完全に性的結合を遂げて居る。愛の ある。然るに半七は自由意志によつて既に業 を倫納工のやうに結ばさうとした事が誤りで 見識なものであった。現今の社會にも斯うし 虚偽とも滑稽とも笑止の限りであり、質に不 あると思つて居るが、今日より見ればそれは 立派な結婚である。然るに半兵衞と宗岸とは ないので、その心中なして生ぜしめる原因を た不見識の連中の居る間は、 お園を元の通り半七の嫁と爲し、お園 單に道徳上から排斥するだけでは愚論に過ぎ 志の心中事件は免れない現象である。心中を 排斥しなければならめ。

深雪阿曾次即 (宿屋の段)

にするやうなことは勿論想像することは出來 士の子であれば、然語を重んずる身分の者で に戀から夫婦を契つた仲とある。 ない。深雪は阿曾次郎を夫と思ひ、 あつたことは明かで、 は深雪を妻として行末は同棲しなければなら 深雪と阿曾次郎の關係は、 此の契りた一片の反故 字治の螢狩の折

を極端に重視した結果である。けれども此

たらう。 世も三世も契つた仲であれば、久松に養子又 無かつたらう。 も真婦兩夫に見えずの道理から獨身で世を終 どとあられも無く自己な裏切る必要も無かつ ば、社會の義理に逼つて久松を思ひきつたな は許嫁と云ふ不合理な肩書が無かったなら 娘に娶合はさうとする不見識を企てる必要も う。また他人の戀人である久松を强ひて己が と云ふやうな愚を演ずる必要も無かったら にあさましい次第である。 お染と久松との戀を邪魔することにも成るま と云ふ不合理な道徳的關係が無かつたならば られて居る。若しおみつと久松との間に許嫁 ために支配されて、極めて不自然な狀態に葬 和が取れながつた。その結果、真操は義理の の義理道徳は貞操道徳とは永久に對峙して調 お染の死を取り止める爲めに髪を切る おみつが尼になつて世を送り、お染 お染はまた久松とは謂ゆる二

あり、虚偽の夫婦關係に過ぎない。お染久松 石として屢々世間に見聞する事例である。實 る。これは今日の社會に於てもなほ因襲の化 聖な天與の人格的關係を毀損された形であ 俗のために、自分等の比翼を引きさかれ、神 は此の時代思潮に成れる虚偽の道德關係の習 あつたが、今日から見れば虚偽の親子關係で

\$196287 \$2003-92 一勝十七(酒屋の段)

の科。 はれるは皆私が不調法、ぐどんに生れた此身 られ歸りしが、一旦殿御と極つた牛七様、嫁 と思つて置いて臭れると手を合せて頼む。お 夫婦に對して詫びながら、今迄の通り嫁ぢや 親の當てがつた女房のお園を嫌ふので、親の 園も手かつかへて、「父様の逸轍で無理に連れ のお園を連れて、半兵衞の宿に行き、半兵衞 半兵衛は怒つて半七を勘當させる。宗岸は娘 牛七は三勝と關係して夜泊り日泊りして、 今から随分お氣に入樣に致しませう程 難儀は出來まいもの。お氣に入らめと知りな 此の園が死わる心が付かなんだ。こらへてた べ学七さん、わしやこのやうに思うて居る。 ず共、お側に居たいと辛抱して、これ迄居 がら、未練なわたしが輪廻故、添臥はか の煩に、いつそ死んで仕まうたら、斯うした 當も有まいに、思へば~~此園が、去年の秋 が御身の仇、今の思ひにくらぶれば、一年前に

來なかったのは、

久松に蛇足な養親子の親族

ませ、おふたり様。」と涙を流して頼んで居る。 に、やつばり元の嫁娘とおつしやつて下さり

お園と牛七との結婚を宗岸もお園も、

华兵衛

た間柄であるのに、

お園は嫌はれながらも自

以前の戀人があって、お通と云ふ子までなし と云って居る。半七には既に三勝と云ふむ

『關係と許嫁の關係とがあつた爲めである。

するにお染久松の戀愛的關係を完全ならしめ 活を不自然にさせることに成るのである。要

一婦の人格的生活を貫徹させることの出

ることになれば、義理と云ふ道徳は男女の生

此の二つの關係は徳川時代には强大な習慣で 夫婦に向つて賴み込んで居るのである。宗岸 婚であり。本人同志の結婚を親達の意志や企 の結婚を半七の親達に向って賴んで居るの て賴んで居り、お園から見れば自身と牛七と から見れば、 てによって成立させやうと圖るのである。 ある。これが家族道徳に本づく徳川時代の結 思議と云ふも思かである。 自分の娘の結婚を婚の親に向 お頃はまた感傷的

さしやんしたら、华七様の身持も直り、御勘 免じ、子まで成したる三

形殿な、疾にも呼入 **儕と言ふ者無いならば、半兵衞さんもお通** に如何してござらうぞ。今更返らの事ながら な言葉をしぼり出して、「今頃は半七様、何處

香の烟が絶えないやうであつたが、風でそよ 線香臭さがつた。その時に自分は土地の古老 そこに八百屋お七の墓があつた。俳優だの下 徳川時代の家族道徳に基く親權の强大な勢力 たと云ふ結論になった。第一に感動したのは 0 そよと攀りが送られて來るので、書籍は常に 焼後へ家を建て、再び八百屋を張ることが出 女の結合を成就した徹底的の態度であった。 か立てやうとするのか、お七は親の**命**令を撥 來た恩として、 親の久兵衞が武兵衞と云ふ若者から金を借り n ふ戀人と握手して離れない。 の女達だの墓巻りに來て、何んな日でも線 を想像して見たが、何うも偉い少女であつ 此の行為は素より極端に失するが、 て武兵衛を大地へ真逆様に落して腰骨を折 きらめて自葉の結婚をするよりも道徳的價 我が家に火を附けて嫁入を拒んた。お七 天國の劍を取り戻して吉三郎の命を救 飽く迄も最初に關係した吉三郎と云 淨瑠璃の文句などから、お七の為 飽くまでも個人道徳に立脚して男 として斯う出掛るのはおめくしと お七な武兵衛に娶合して義理 厭な結婚を强請する時は はては階子を退 親が火 に均しく、人格の大破壊であり、 して、嫌な男子に身を任せることは淫賣行為 値が大である。人生の最大事件なる結婚に對 ある。 點では道徳上の罪人であるけれども、貞操を り不道徳には極まつて居るので、お七はこの と見ることが出來る。放火傷害の行為は元よ 自己の貞操を保たんが爲めの正當防衞である た焼き拂ひ、その男を傷害せんとしたことは、 であるが、嫌な男が恩を着せて建、臭れた家 た手段を辯護するのでは無くて、彼れが良心 て悪であつたと言へよう。 保つ自己の戀を裏切らなかつた行為に至って んとする動機に於て善であつたが、手段に於 夫は然うぢやない。隨分と飽れる様に、 留ひ切り、 に閃いた貞操擁護の動機に於て感服するので は道徳上の人格者である。お七は貞操を保た だ肝腎はこれ毎晩、 樣。出入の者にも滅多無性に物遣つて、三本 夫やいはんでも知れた事、 の親は聟の氣に入る様にと数ゆれど、此方女 で寝て、挨拶せいでも大事ない。小遣も湯水撒 で能い釜の下も五本も八本もどつかどか。ま 親達は「吉三殿が愛しくばすつばりと 武兵衞が女房になつて給ふ。世間 脊中向けて寝さへすりや 自分はお七の取つ 朝も飯の出來るま 非常な悪事 ハテ 何卒聞分けて盃して給べ。 いやともに愛想盡し、オト途去て戻す程に、 窟が附くとしても、久兵衞夫婦の件の言葉で めにその恩義として娘を嫁に遣ることには理 つて居る。久兵衞が生活の補助を受けたが爲 が、 は無く、反つて恩を仇で返すことになる。 は武兵衛に對して少しも思義を報ゆる行為で て、其方罰の當らぬ様に、これ手を合す。 な道徳であつたかは、この一事によつて瞪 代に義理と云ふ道徳が如何に重んせられ、 で、後は脊中向けて襞やうが喧嘩して戻ら 居た。 懇請を木片の如くに斥けたのであるから、 に懇請されたのである。けれども彼れはこの 道徳の爲めに高價なる貞操を棄てることを が出來る。 何に形式的であり、 を死に角く一度**遣**れば、それて義理が立つ けれどもお七は天才的に道徳の極致を歩んで 代道徳から見れば尤も不孝の莫連女であ の出來ない道念に住んてゐた。 人情と親子の人情との衝突に就いて天才的に 一旦結合した戀人に對して靈肉な裏切ること そんことに頓着しないのである。 彼は時代を超越して人情の本源に お七は時代のこの形式 如何に不合理極まる滑稽 神佛へは斷りい 一片の義 しと言 如

わものと考へて居たと見なければならない。

知り、 琴を彈がせ、身上話をさせる。この時に駒澤 に瞽女をして居る女の深雪らしいことを聞き と男女の人情に發する個人道徳との間に矛盾 たればならなかった。そこで武士の社會道德 る。自分の妻を犠牲にしても武士の體面を保 を自分の妻であると公言するを憚つたのであ 堅氣であつて、武士の體面として非人の瞽女 みしめて控へてゐた。こしが德川時代の武士 契つた妻であるとは言ひ紙れたので、涙を嚙 は同僚に對してこの瞽女が自分と偕老同穴を 左衞門は數多の同勢で宿に着いたが、此の邊 生活に困り乞食して東海道を下る。駒澤次郎 ところが途中で目を泣き潰し、盲目になり、 い。京都へ行つて尋れて見ると、江戸の方へ行 徳に養はれてゐた深雪は心配になつて堪らな 通になつたらしい。そこで徳川時代の貞操道 との荷重な事情もあつたらう。斯うして居る るから、今急に深雪と同棲して妻子を養ふこ 次郎左衞門と名乗る浪人侍に過ぎないのであ けれども阿曾次郎はまだ出世前であり、駒澤 たと云ふので、大振袖の單身で追ひかける。 駒澤は東下りとなり、二人の間は音信不 宿の主を介して呼び寄せ、歌を明はせ 「天道様エー聞えませい~~~うわいな」とあ に落ちて泣き悲しむ。天を恨人で號叫する。 跡をしたつて轉びながら大井川まで來る。俄 とひはせい」と突き退け別れ退け、女の念力 主に賴んで旅立したなどは、無量の悲哀を感 逢ひ無れたので目薬と金子に属を添へて宿の う、ノウ岩代殿・・・」と何事もないやうに同 の大水で川留と聞いて、張り詰めた力が一時 云ふので、雨の中を飛び出し、「譬死んでもい 川を渡つた。斯くとは夢にも知らない深雪は 個人道徳は當時の武士社會には露程も無かつ より推す時は、涙を飲んで深雪を葉てるより じた結果である。けれども武士としての體面 主に朝顔をもう一度呼ばせて逢はうとしたり 僚を顧めて居るが、同僚が寢沈んでから宿の し其夫が聞いたならば嘸ぞ滿足に思うで有ら 大儀であった、初て聞いた身の上ばなし、も 「エトなじみ所か年月華る夫でござんす」と た。駒澤は武士の社會道徳に従つて大小を横 へたまし、一旦契った妻の深雪を棄てし大井 一匹夫となつて深雪を擁して死生を共にする

く煩悶して居る。表向では「チー朝顔とやら に有るべきが」と云つて居る。小石を袖に拾 外に方法が無かった。人小を捨て、 裃を脱ぎ 投身するを放任して置かなければならなかつ を生じた。駒澤はこの道徳的矛盾に就いて深 して、自分はこの一篇を淨瑠璃物語にして聞 是認した當時の武士道の如何に勝手氣儘であ て男子の御都合次第にこれを遺棄することを た。一方に於て女子に貞操を强ひ、一方に於 愛情は神聖無二の天道でなければならわが、 に活殺されてゐた。三千世界を通じて夫婦 理がない。天道は當時の社會に於ては武士道 の行為は女子の最後の行為として或ひは當 ひ、喉笛を切り大井川に投身する。この深 る。「三千世界を尋れてもこんな内果が又と世 くことを好むのである。 とが出來る。 同輩の義理を重じたが爲めに、妻が大井川に 武士道と云ふ男子の社會道徳があつて、 のために掩はれてぬた。男女の道徳は武士 であらう。天道の解らないのも彼の女には無 ったがは、この朝顔日記を通して想像するこ 武士道が女子を蹂躙した哀史と

四る七古三郎(八百屋の段)

たが、其の直き下は寺の裏手になつて居て、とがある。その家の二階八疊間が書齋であつとがある。その家の二階八疊間が書齋であつ

外にもあつた様ですから、左に其の補足を述 質問になった點に就て疑惑を懷かれた方々が の私の説明の不充分な所からして、貴下の御 べてお答と致しませう。

のでした。従来の排他的な教祖教から、包容 從つて生きて行かうとする人は誰でも、偏ら 光明とな齎らし、飽迄で眞理な追求して之に 精神界に流れ初めて來た大なる流れである ない宗教心を持つ事が必要條件である。とい ふ意味を述べた積りでした。 私の講演の題は「偏らない宗教心」といふ 此潮流に棹さして、其精神生活に希望と 一神教へ移りついあるが近代文明の 煩を避けて並には略しますが、只此等教祖を

ひますから、少しく詳細に自分の所見を述べ 此れは近代の宗教思想上興味深い問題だと思 之を處理すべきかしといふに在りと思ひます。 以て、凡て神の眞理を宣傳する使者なりとせ 質問の要旨は「若し既成宗教の各教祖を 各教祖の所説に矛盾反對ある場合、如何 す。斯ういふ意味で神の使者といふならそれ も崇高な生涯を送られたといふ點に在るので を宣傳する使者也と云つたのは、此の意味で の使者に外ならないものです。けれども使者 でも宜しい。私の先夜の講演に於て神の眞理 だからとて其言ふ所凡て眞理のみだとは云へ

の祖耶蘇にせる。等しく皆是れ人間です。宗教 には行きますまい。若し此等教祖の所説に秋 る天才でも、如何なる偉人でも、人間である 的天才とも觀ずべき偉大な人間です。如何な を其儘人間世界に示されたものとしては、 餘 の也と主張しても宜しい。併し乍ら神の真理 つた事實は、其の經典の中に明かに示されて ではない。寧ろ竿頭一步を進めて神の子其も 神の使者也といふ説に無條件で赞成する許り 毫の誤謬なしとせば、私共は其の教祖を以て りに誤謬が多くはないでせうか。《其の實例は 以上、其所説の一點一劃も誤りなしといふ譯 者も矢張り人間だなといふ感を深うするでは 潮や周圍の事情から全然離れる事の 多くの宗教の教祖である。彼等が其の時代思 下さつたのが耶蘇であり、釋迦であり、 を看取して、之を一般人に飜譯して聞かして 遠に默して居る。只花笑ひ鳥歌ひ、 觀を交へない譯には行きますまい。宇宙は永 夫れな説明し、發表する場合、全然自分の主 吹くといふ様な諸々の現象の中から神の眞意 ある所です。此の邊の事情を思ふ時、

多くの人間の中で最も誤り少き教を説き、最 宗教的の天才として崇敬する所以のものは、

と思ひます。從つて甲教と乙教との間に矛盾 の仕方を異にしたのは、墓に止むを得ない事 宇宙の現象、神の真意といふ様なもの、飜譯 は蓋し當然の結果でせう。況んや時を異にし を生じ、反對の説を存するは敢て怪しむに足 所を異にして生れ且つ育つた人々ですもの、 一の宇宙現象に對する觀方も解釋も異なるの 耶蘇も釋迦も等しく、人間だとすれば、同

は皆等しく人間なりといふ點を看過した誤り 二大宗教たる佛教の祖釋尊にせる、基督教 ら生れて來るのです。既成宗教として世界 費下の抱かれた疑問は、既成宗教の各教祖 すればどんな偉人だからとて誤りなしとば言 る。又其誤解もある。況んや夫れが人間だと へないでせう。天啓C神の默示)を看取しても 問奇蹟を行ったり、立派な説教をしたりする の様な、釋迦の様な偉人が出現して、 昔は單純且つ無智な人間が多かつた。耶蘇

ない。使者の聞き誤りもある。述べ誤りもあ

らないではないでせうか。

ありませんかc

夫婦の人情に左袒し、

親に背いて吉三郎に従

行為を倫理的に賞讚して、女鑑としなければ

標榜して立たんには、或場合、二個の相反せ

りはせずや。兩者は同時に神より出たる眞理 るものな同時に受け容れざるべからざる時あ

お七は途に時代の法規に觸れて火刑に

利者として芳烈な貞節の中に瞑目した。吉三 虚せられた。けれども彼れは最後まで戀の勝 今日となっては新道德の上から見て、お七の 教化の材料に使つた。けれども星移り世變り、 た妖女として、 て名僧智識の數に入つた。 郎は亡っ驅の菩提を弔ひ、 可隣にも徳川時代の末葉には お七を丙午に生れ 錫を諸国に飛ばし に應じ、すべてを運命とあきらめ、人格貞操 年の女子であつて、而かも父兄の無理な談合 ならの時代になった。大學教育まで受けた丁

想うて正に愧死すべきの徒である。〈評論子〉 り禽獸の行為に等しく、無教育な少女お七を 娠などなして居る女子は、醜の醜なる者であ を犠牲にして、愛し得 2号に身を任せて好 りてい の故なもて、その一を以て神の眞理なりとな なりと云ふを得べきか。將た神には矛盾なき

反 禦

問

その賞讚を惜むものにあらず。されど若し凡 諸宗教には各々美點あり眞理あり、 我も又 仰果してありうべきから 疑惑の我を攻むるの聲强ければ、失禮をも

めたる疑問は拜聴の時に於てすら我胸を倒し に御座候。 確め得たるやに憶え、 教に現はれたる信僚の或物に共鳴感嘆致し居 候ひき。 しき間偏よれる宗教の非を認め、同時に諸宗 先夜の御説教嬉しく拜聽致し候。私も亦久 為に今先生の御教示を待たんと欲する 力强き御主張に、 さりながら今日に至る迄我を苦し 深く感謝致し居る次第 我が從來の信念を الا 盾あり反對あり、 大なれば偉大なるだけ大なる思想の隔を持て 教祖――否偉人を以て神の使者なりとせんに ての宗教を以て神の眞理の表現とし、凡ての 結果には候はずや。若し我ら偏らざる宗教を はせずや。二者の間に於てさへ完き思想の同 は、途に大なる矛盾を内に包むの結果に至り 一を求むる能はず。ましてや古今の偉人は偉 その偉人の教義を信奉するものい間に矛 時には敵意ある、又必然の 顧みず浮べるました記し申候。何とぞ御教示 を願へる心御許被下度、

申候。 0

> となすは「偏よれる」にや。 すべきか。かいる場合に於て二者その一を取 主張せんと頭なもたげ居り候。偏よらざる信 ものに御座候。而も一面我中なる既成の信念 して如何にせば偏よらざるを得べきかに迷ふ 私は偏らざる宗教を喜ぶものに御座候。 本質的にある一つの者を對象とし、之を 。之を眞理なりとし、そか自からの信條 m

に待ち上候 七月三日

丸

生

御答へは六合雑誌上

平山先生

へて下された事をありがたく思ひます。當夜 私の過る夜の講演に就て、 答 斯く眞面目に



丘の家より

あひはら

S 君

た。 る。 縣 やらに つて居 カ> 緣 1 6 樂 21 0 僕は 地 端 寸 カゞ 0 明 0 5 思 る。 やらな 居してよく 0) 5 0 この 夕 裏の をは 30 カゴ つだ 郊 小 ヂ 星 そし 音を 7 1 0 外 其 數 0 力> 6 T V 0 の帰る出 聞 F. T 聲 げ 梟 鳥 離 合唱をする、 を通 淡 0 カゴ n 何 0) くと自 家 啼 た 時 羽 V す。 12 頃 3 下 L E 音 然 だらら。 丰 カ> 1 12 住 と帰 地 Ö 瞑 2 大 な h 3 で ح 藪 想 0) 地 0) 整 3 精 カン は n カゴ 0) 0 6 中 そん 聞 鷙 0 其 カジ 力ご 花壇 深 夜 夏 え 12 > 夏 0 聲 は な る。 宿 入 0) V 0 震 0) 再 我 夜 ž 想 カン る 聞 と語 茂 5 を CK カゴ 12 追 來 家 は R

0 カゴ 0 S まつて 前 僕 12 居 は 昨 H た。 年 0) 2 看 春 不 病 思 頃 議 する人 力> ら一人の 15 ことを R は 書 病 h. カン 0 5. で居 母 る青 僕 姊 妹 0

たその姿を私 0 つた。 毒 T るの 73 4 B 春 夏 0 だとは 退 カジ は見た 屈 暖 去 5 73 V 日 秋 屢 i 當 ことが K 0 カゴ 我 だらう。 來 9 R T **d**) 3 0 V 椽 る 間 病 先 何 A にくり 南 病 12 は > 瘦 床 カン せ 永 返 1 カン 6 3 < 7 6 h n 床 病 離 た カゴ 17 衰

葉 洋 1 5 間 12 私 彼 際 だらら 4 カジ 7 カゴ 美 6 الح 昨 達 に倚 方 ~" 0 カン P 高 胆 唱 妙 年 か 0 ン 耳を欹たてしめた。 6 は は N 5 な歌 \dot{o} 9 て、 室の雲までと いく 0 湧 あ そんな n T 0 カン 夏 た 愛 < 6 0 17 た 0 V 0 强さと深みと幅 0 歌 やらに 0 た あ 歌 ソ 聲 南 しらべが 時 < 夜 てとを言 0 S ブ 主 カゴ 2 私 まで其 ラ 2 更 た。 又 起 は、 H 共 7 2" 高 つた。 は實 H 1 76 鳴 夜 あ 歌に 交つ 病 か CA 力> る グ カン る な 0 際 カジ 5 人 夕 0 とあやしまれ 森 1 春 白 その 0 聞 カジ 7 6 拍 此 雲 きほ らそ 友 に響き丘 1 あ 0 再 私 手 1 朝 病 る男聲低 0 人 美 0 CK L 秋 人 三た 0 0 家 た n (1) カン 潮 0 夜 風 た。 36 71) 家 V を越え 12 家 0 0 CK 0 削 整 g, 乘 720 12 歌 音 カン 見 n 新 5 10 B 5 な は 0 丰 W 坂 遠 私 25 素 0 ~ T B る S は S を た カゴ n 尙

直ちに之を超人間

視した

のは無理

私共の有つて居る理智とどうしても相容れな

私共の理智の眼が漸次明かになって來た今人類の努力に依て齎らされた文明のお陰で、 祖に絶對の權威を認めんとするが如きは、不 耶蘇や釋迦を尚ほ神様扱ひにし、 けれども二千年來の 彼等教 文明を受け入れた人々は、此點に る方がどれ程安心か分らない。 の主張を了解し得ると思ふ。 比ぶると、自分の理智の判斷に從つて行動す い矛盾反對の説に盲從するの苦痛と不安とに 少くとも近代 關 する私

の機關は實に私共の理性ではないか其の理性真であり、何が非真であるかを見分ける唯一 のでなくては納得が出來ないといふのが近代 性や知識はだてに持つてるのではない。何が 人の特徴でせう。尤な事である。私共統一主 眼で選み、知識の篩にかけて選み上げたも 極まる熊度ではありませいか。 私共の理 7 將來の宗教を無條件で受け容れた信者に向 傳者と目し得べきが」と問はれ 排した。斯る場合尚ほ之を神よりの眞理の宣 盾あり反對あり、時には敵意をさへ持して相 貴下は、「偉人の教義を信奉する者の 偏らない宗教心を求むるのは、猶ほ木に

7:

塞に然り

間に矛

義者は、此の理智の作用を神の與へ給うた選 の有つて居る理智の篩にかけて其の納得の出 進退を決定すべきであると信じ且つ主張する 擇の機關と解し、其機關の指導に從つて取捨 した教義や反對の説がある場合。 です。だから若し甲教と乙教との間に矛盾 を享け容るべきであると主張す 私共は我 な ので、 で、教祖教は排他性(他宗を排するの意)のも 註文です。何故なれば、彼等は教祖教の信者 ないものだからです。けれども今や教祖教即 縁つて魚を求むるが如しで、 絕對者の實在な說き、 の教祖は一般人に對して宇宙の神秘 つしある事に注意しなければならない。多く ち教祖に絶對の權威を認めた時代は過ぎ行き 排他性は偏らない宗教心とは兩立し得 初めから無理な を説明し

來るもの文け

な人間の理知の判斷、必ずしも誤りなしとは へない。けれども教祖の説だからと言つて 人間は元より不完全なものである。不完全 はない。 ものを示したのである。けれども彼等は単に 私共一般人の信仰上の先生と見て毫も不都合 私共は時を異にし、所を距て多くの 其の絶對者の意思なる

中に つて其の取捨を決すべきである。 理知の發達した近代の人々は自己 先生を有つて居る理である。 矛盾の點もあらう、 反對の説 其の先生の 6

遺物として取殘されて行く。斯くて世界の文 らない宗教心である。排他性の宗教は過去の 實験し 0 みを採つて自分の信仰生活に資して行かうと 二、三千年を經た。丁度文明は今大學生位 授博士の説を覆べす丈けの説を吐く事 はてなと思ふ。大學卒業生位になると時 思ふ。夫れが中學三四年生位になると が多くの人々に解り初めて來た。是れ即ち偏 する態度は、丁度甲先生、乙教授の所説中よ あつて、甲教乙教の所説中、 來る樣になる。世界の文明は、 す。(平山六之助) 展を期待し得る様になって來たの 張するのと一般である。今や其の誤りなる事 不公平に 偏らなければ宗教心でない様に考へた人々は を立てるのと少しも異る所はない。夫れで宜 り善い部分丈けを採つて、新しい自分の學説 の所説に 處に居る。此の時代に於ける私共が、各教祖 にも生命の脈を擦ち、 明は無限に進む。化石したかと思はれた宗教 小學兒童位までは先生の説な絕 一向差支へない。眞理は廣く深く公平に 觀察して初めて之を攫むことが出來る 觀察しなければ眞理が掴めないと主 絶對の權威を認め得ないのは當然で 永遠の進步、 でありま 口々教

叫



の世界的反動時代

政

嶺岸忠之助

場 0 如 たり。 督 あ 12 カン 見尚 るや、 5 歡迎 內 ばざるのみか殆ど雙手を擧げて歡迎 た 多。 る 實に我國 上京 てと弦 口 これ 17 國 す。 せ 民 世 る 何 の反感甚 人亦好意否 政 五年。 12 0 民 兆ぞ。 界の に取りては彼 あらずや。 今や國 群 しくど 彼は數年 星 大期待 然 IJ を犯 民 は早天 は る ケ を以 に朝 前 ン排斥 E" 內閣 て中 IJ て彼 ケ 鮮 0 ·央停車 雲霓の > は 組 彼 12 を迎 排斥 三尺 は恰 去り 織

其變化 て首 B 5 義也。 の歡迎を通じて現は の寺内伯 內 主 んとする也。 れ自 磁 義 伯 相 石 也、 或 を歡迎す。 の甚 V) 民は今や 兩者全く 如 寺內伯、 るとたらざるとは 顧 に論ぜんとするも < しきに驚 7 大隈伯 政 7 今昔 界の群星を吸引せすんば それ 全く 相異 は官僚的 る。 は AL かざるを得ず。 0) 相反せる思想性格 一大反動にあらずして 一談に 72 民衆的 る國 いい 也 堪えざるべく 問 0 ム所 て大隈 也 民 17 非立憲的 精 南 立憲的 らず。 12 柳 今吾 कें) 伯 0) 推移 らず。 也 を歌 を有せる寺 彼 人は 吾人また 北 何 軍 カジ 果 唯彼 自 國 個 由

閣 悉く *b* 。 的 立つや元老の鼻息を窺 元老を攻撃し 內閣 17 何 最初に舉げざるべ 故 豫期 失望せしてと也 12 n と呼ばれ最初の 政界の E 6 反 y 藩閥 した 反動 度內 6 c を排 時 閣 カ> 立憲的 大隈內 伯 成立 らざる 代は死礼 ひ藩 1 た (1) りか。 野に 閥 1 内閣 て其 42 ことは りや。 à) の成 頤使せられ るや、 然る 爲 (1) J. 寸 如 に自 所 < す 比 を見 思は 3 堂 大 72 6 R の言 ·國民 隈内 5 朝 るや \$2 72

の方へと下りて行つた。

耳 12 けれ 25 その するこ 後その とが あ 家 0 出 强 カ> ら美し 來 V な 精 カ> 練 0 3 20 た。 ソプ 32 12 ラ パ 7 ス は を 私達 屢 12 は きてえ 再 CK

は あ 時 ソ せた にな 0 ブ ラ CA < 1 近 0 それ 引た 0 6 頃 あ ヂ 7 2 み は 二 > た。 73 病 工 だ シ 人 V n 青年 . 0 ŀ 0 カゴ 此 咽ぶやうな は カゴ は 世 陰 n に響い その た 0 夕 名 翌日 殘 6 悲し た。 とその あ 息 0 その たえ 72 V 色音 妹達 た。 調 カン 細 12 T は 唱 何 S

病 しく ほ < ことを いと屢 12 床 ど自 った、私達の 遊 0 12 涙ぐんだ。 び 年 樂に R 分 カゴ S 12 吟し 兄が ふた。 來た 0 死 つたといふてとは、 淋 h 云 7 7 6 拙 居 てれ 病人 C 居 V 西 カコ い唱歌や音樂が まし 洋人 た 病 らそ 0 人は常 人の 120 は私達にとつて大 め つる心が 形 たと云 0 耳に通う 12 小 のやらなその あ 僕等 Z' 0 眞に らて、 慰 歌 V めら Ł 0 妹 音樂や 私、 て、 わ 喜 カゴ 渠の 樂の 達 CK ñ 始 少し i な た 娘 め 唱歌 女は 期待 < ため は T る愕さで 力> で 永 L 僕 2 É 3 B れな 8 h V 0 間 is 家 75 其 n 聞 13

達

0

耳

底

42

殘

つて

居

る。

舟 21 不明 生 病 7 カン は は 110 さてとを CK 2 は 風凉 が東 S た 居 獨 を與 6 5 ス 床 り霊岸 を歌 如何 病め た 12 あ 12 唄 なっ 京 11 6 0 0 で な た。 る青 つて、 た あ き夏の 灣 僕等に 話 n る煩 る。か あ た 島 は Ł T 0 つた。 年の Ł まん これ 思 カ> あ 居た青年の ら舟 私達を 夕今 悶 談 ふとむしろおそろし V 0) うした唄が、空し 3 校 友人で 中 カジ L 渠の 0 を 720 りでな あ 12 0) 度 恍 0 で 通 乘 後 心 たの 惚 去年 あ 南 あ る 0 間 あ Vo る。 T 0 72 12, 0) 0) 頃 3 だら 房州 た。 夜 渠 なく 6 聲 0) 0 南) は i 夏 少女 0 50 0 唄 主 海 へ行 あ 丽 め 瞬 0 V 0 んは更 美 た 間 0 0) A あ 3 希望を抱 私達 音 歌 威 歌 美 は 投 0 0 6 た。 法科 3 は じ 聲 夕美 12 ò S 0 期 驚く 今 は 旧 7. す 生 0 丰 尚 介 併 青 は 大 3 私 學 3 年

0 は 0 たといふ 此 7 歌を樂しんで居るだらう。 私達 私 世 を去 達 0) を恍 つた 病 0 8 て了 75 る 惚 青年 た い音樂 った。 6 4 め 唱 彼 72 あ 歌 あ 0 美し 6 0) は 見 何 20 2 處 V 0 73 ٣٠ 0 世界 殘 青 ス 0) 3 順 てそ 8 今 多

ことである。

自分達のためのすさびにすぎなか

る

原

因

なりとせらる、

繙

僚 政 4 9 黨 政 5 治 0 0) 一首領 來ら 微 大勢を 力 h を 0 會合 とす 如 如 何 何 る所以 は とする能 にせん。 未 曾有 也 は 0 珍事 n ざるべ 近 一時 民 にし 犬猿も啻な 衆 政 治 て賞す 去つ 5 7 ~ 4 É, 官

1

と殖 家た せ て甚 0 失する 議 憲 足 徵 丽 甚 4 ざるな 兵 政 んとするも る英國 だ振 だ振 制 出 民 治 1 地 多數 ح 恐れ 度 す は との連 はず。 は 擴 能は 0 ず。 0 民 ぐべ ざりし 優秀な を想起 英 を得ず 衆 あ 然る 60 年來の 政 軍 ざらし 2 きは 絡 否海 治 n 0 し、 弱きを以て を 12 こと也 んば 5 自 るを認 今 その め 斷 Ŀ 自 には 自 由 憲政 權 度 しと雖案外 たし 英 貿 行 由 由 英國 0 8 むる 主 軍 易を變じて 2 つて獨逸をみるに孤軍奮 丰 憲政 歐 め 8 能 義 をし 義 手に握 は今度 英國 說 洲 76 其 12 は は と云 ず、 歸 < 戰 反對 與 0 7 i 爭 論 す 振 海 振 0 はざり 議院 IT る也 りて獨 0) 0 保 爲 軍 は 0) ば忽 於 戰 苏: r 贊 護 3. 7 め 爭 政 ī V 意 5 貿 12 同 7 ち ĺ 7 0 戰 强制 治 12 を 易 3 0 其本 英 手 本 範 於 とな 得 也 機 如 め 國 i 國 立 V た を 的 <

> 義、 を喜 理 謳歌となり立 より官僚政治を優 力> ī ざるを得 0 姿なるに拘らず能 專 ばんとす。 動 制 機敏 主 ず。 義 憲 1: な るに 2. N るを以 主 AL 義 依 其 りとし 1 3 り軍 る。 軍. T 也。 戰 國 卽 ^ 主 自 國 兹に於 由 主 能 __^ 義 義を 命 < 主 義 0) 非 勝 採 下に 立 より専 利 V を得 9 C 萬 比 カン 衆 事 獨 る 政 逸 を處 僚 主 12 治 0

五

らずや た 我 換言 るも 國 0 如き政治 す 0 れば 12 あ 現代は政 5 ずし Ŀ 0 T 反 界 世 動 界 は 0) 世界 的 單 40 傾 獨 的 向 9 反 15 動 認 我 國 時 1 からな 代 12 17 限 0 6 あ

也 n

貿易、 や義 貢献 貿 個 歷 由 英國 易 人 史は自 貿易を一 0 勇 0 せ 自由 た 義 は 兵 我勇兵制 由 自 B 制 は を以 擲して保護貿易に移 度を棄て 英 17 を主 由 を以 戰 國 度皆 張 T 人 飾 7 0) ガ 發達 ラ 其 られ 歷 强 ツ 自 史 = し自 た 制 3 ŀ ブ 由 りか。 テ 飾 徵 ス 0) 實 由を以 兵 > 3 ŀ 現 制 1 らんとし 7/4 立憲 也。 度 0) > フ て誇 ラ を探 也 カジ 立 政 イ ۱۷ 治 憲 用 然 ŀ りとし L るに今 デ 甚 政 カジ 自 治 自 1 其 由 カジ 12 由

募債 政界廓 みる 思は と何 認む 值 依然として非立憲 りな るとも劣らず。 れ非立憲の 命なりき。 し丈また r 方なしとは に及 こと能 以 實力あ 疑 するの 0 く一定の を唱へて徹底する能 足 は 異 清 る所 國 1 は んで大隈 失望も大 L 民 み。 は 然る 5 彼 甚しきも る め なし。 た 內閣 ずし 責を君主 腐 カゴ 方針なきは 現內 る 敗 政 卽ち 12 E* て唯其 綱 內 居 也 4 な 也 0 唯伯 暴露、 閣 閣 る 形 0 据 0 口 其惡 也。 に歸 2 0) 也 12 內 ___ 程 式 な 、害の大なるを見る た 0 生 對す 藩 閣 0) はず。大隈内 せんとは 0 一命を失 米價 る内閣を欲 其 3 殊 政 2 廣 閥 せんとするも を如 6 JAC. 、る國民 反 カジ 內 0 12 もまた藩閥 長舌は立憲的らしく 立憲 近 閣 何 動として非 調 10 とする 然るに 節 あら 時 0) 立憲 0 12 無主義 0) たるも 如ら其 ずし して精 閣 する 論 豫 は 內 期 0) 0) 何 0) 變化 勅 彼 也 ど 立 大 12 7 壓 閣 無 0 憲な ES 且非 利を 令致 其價 な に優 節 知 到 迫 神 0 を 6 は 操 極 5 生 6 6

撃くべ きは 政 黨 0) 無力を知れること也

> 縣に 事も この 然れ なく 今や 取 伯 てれ 3 て大隈の なくん いりと鐵 غ ~ ども 色也 與黨 なし 事 i 實 離れ ても寺内にても縋りて 實 可 は は 拳を振い 得ざる 勢力の・ 以は政黨 た 也、 成 政 は る政 また 個 1 黨 多數を占 せざ 0 大浦 內 大を 大隈 閣 友會は恰 更 ふてとみ。 12 (1) 勢力 る あらずや。 12 な 12 くも なく 內 話 あ 政 めて政 友 る 0 閣 6 ずず 大を語 可 3 會 3 ば終に成 也 水を失 內閣 也 黨 政 を L 0 也。 權 其爲 見よ。 政 T 內 る 黨 大隈 閣 を組 尾 12 へる魚 同 3 立 崎 なるが 渴 0) し得る所 志會 せざる内 首 織 す 桂 0 なくも 內 12 閣 せんとす 3 公 領 如 去 0) 0) あ た 0) 也 極、山 しと 微 6 は 口 る 如 6 送揚足 力知 ずし Ш 閣 加 < 也 何

陣頭 撃の 其醜

失敗 體殆

により

覺 12

L

た

る

為め

か籠

城 は

主 過

義

r

棄

と言

語

絕 醒

す。

近

時

原總

裁

4.

る総選

ると

雖

は

度

カ> 政

る

治 政 盟 於 組 治 酣 る 12 は 12 國 事 7 12 治 於 あ 横 自 能 ~ 外 組 織 主 な 世 S 42 0) Ł 界 1 -織 らずし 必 缺 < I カン S 至 溢 丰 國家間 らず は 5 7 に於 6 點 13-7 民 * ģ 民 te す 義 ずし 衆 4 云 要 學 起 國 h 12 彩 る T すに 政 また 2 求 T 憲 以 る げ 12 內 5 政 V 殊に 却 7 治 に及ばず軍器 0) 論 7 治 政 T M 1 至 連 7 弘 治 至 は専 組 勝 7 益 組 戰 n 爭 12 結 吳國 專 利 を事 其 對 等を目 9 織 獨 切 9 17 K 織 を必 望 12 制 0 缺 民 對 6 制 なきとは 女 す 軍 保 乘 棄て 吾 す 9 لح 17 政 政 點を暴露 せ る 多。 る 於 治 要 隊 治 證 3. 的 人 政 __ とな 軍 軍 治 刺 とする軍 は V 12 とする 0) 0 る 反 妓 これ 對 需 缺 動 甚 7 組 戟 2 * 0) 國 然るを 點 L 品品 す L 得ず 織 2 健 E た 0 は 文 於 3 て 13 を供 也 民 17 來 全 6 湃 0 義 50 衆 動 V 弘 کے 足 然 12 な 國 り弊害を感ぜ 0 なら 見 北 給 7 政 5 泥や る 長 主 0 至 め する 蓋し る、 を この 治 ず 結 發 所 義 加 ģ. 護 民 Ť 今や 民 12 7 達 72 果 0 點 產 戰 缺 國 衆 移 世 飛 は 戰 5 る を る 界 政 爭 3. 業 政 點 内 同 12 軍 政

代表者」を讀みて、東西文明のたとしつ、ある時に於いてをや。

即ば

ち

英

雄

得

n

ば

勝雄

5

英

雄無

を得

30

n

ば

敗す

3 3

專み。

其

勝

敗

は

滩

大

英

0)

有

12

より

て決

0

原田長治

者 服 n 1 す 出 で カゴ 0 0 カジ 72 博士 とし 雷 時 南 來 常 是 A あ 0 N 七 氏 間 出 月 る 務科學上 12 る V2 とを 來な 終 Ł は T 0) な 日 始 此 卽 寶際の 尊 雑 頃 終宗 n 問 5 極 20 岩 奈 0 敬 識 代 計 は V 點 を念頭 表者 太 A 教 問 7 見 敦 1 0 酸明は出來なくなる」。 的 商 間 的 題 左 カン 1 高 E 質 0 信 は 0 業を成 3 Ľ 10 浮 際の 想に 業 に浮べて 者 哲 op. る る S 博 學 學で らに 7 田 0) で 者 200 從 必 す 士 東 光業を とし 要 解 西 士 論 E W) 1 敢 意 論 文 しとす 决 じて は 5 义 は 7 1 明 とは す 12 妨 識 る ねら 哲 筆をとつた。 U) 科 4 る ス j 學や宗教 -7 高 : n る 6 H 學 5 は 潔 淵 離 n ス 2 ことは n 的 3 氏 は な は E る。 研 す る 論 7 不 商 究 4 E A ぜ 13 可 を I 能 敬 格 間 5 J. 業

や民 平 備 地 抗 を受 發 歌 は 外 政 削 ウ 米 承 なきを知ら 12 議 12 交 綱 國 ウ 5 イ 丰 it 遭 た 張 過ぎずし 才 12 憲 0 IV 愛 12 * 黨 獨 遇 9 ン お 政 IV 振 4 3 を主 主 逸 6 す ĺ 英 治 ン あ 砂 作 1 V É 3 V 共 を 時 12 6 7 2 を 國 0) ĺ 大 B 骨 勢 對 和 至 す T ___ 0) は 60 其 とせる 殊 度 統 と興 U 統 n る 國 す す 黨 民 今 お る以 5 る 12 處 治 る 主 12 威 X op は 4 72 最 を 共 る 至 論 * ~ 置 丰 36 帝 黨 候 る 宣揚 Ŀ 受 米 n 12 後 w を シ 0 國 は 補 和 反 政 60 動 丰" 誤 H 内 0 主 者 識 動 黨 n 通 _ 也 1 效 間 內 は 2 する 牒 政 12 政 米 h 義 時 は 果 皆 政 治 £ n 0 猛 を 推 國 7 過 10 3 Ł 中立 T 3 は 烈な E 12 唱 主 薦 政 10 シ 去 12 5 二 を全く破 n 歐 於 共 有 導 治 舉 お []4 L 1 2 か 3 せ 侵 洲 0 6 F 和 る V ケ L ス 6 2 輿 J. 片 犯 4 黨 反 7 黨 大 年 2 力》 と共 滿 棄 以 17 家 民 動 軍 6 0) 論 戰 合 和 Ħ. 其意氣 多。 巧 來 對 爭 12 世 時 備 0 足 衆 + 主 1 (1) 言 する 自 義 h 代 擴 12 反 0 L 膨 黨 何 今 對 勃 脹 Ł 美 謳 12 由 軍 民 を

> 2 民 n 伊 丰 豐 國 政 義 13 0) 治 0) 政 如 在 0) 界の 存 る うする 所 世 佛 界 必 所 國 的 0) 6 反動 如 ず 立 ح さまた 時 (1) 政 代 治 反 12 2 動 6) あらずや。 0 確 D 反 動 せ は る あ 所 す

卽 由

連絡 認を 緩漫 また する 現 無 5 は 0 上 でき事 歷 23 承 內 三十二 は を妨ぐる所な F な 民 認 能 Ì 組 民 史 於 無 無き事とせり。 チ 衆 視 らし 衆 は 12 歷 8 織 V 興論 ざる 政治 於 史 7 す としては 政 顧 ノー、デ る能 治 0 2 2 0) V 示 T 3. 22 不 は ~ た 0 10 內 聯 る は 外 贊 す 3 しとせず。 12 T __ Ł ざれ 致 交 成 不完 合 所 汉 1 民 氏 12 專 時 對 73. £ を 何 0 軍 とな 得ざ 全な ば 衆 組 は j 制 的 5 15 0) 於 弱 71 T 15 政 織 フ 政 应 る 70 民 治 13 ホ d 治 點 情 日 6 35 V n 1 ば 衆 2 專 所 8 1 は 7 た 的 る は 事 制 3 3/3 非 舉 る < 110 カン 重 あ 政 F 前提 政治 Ł チ ゥ 國 5 大 る 治 凡 Vi ナ 0) 論 ざれ 第三、 依 際 事 也 は 0 "V" は C 1 也 U 機 大英 件 何 第 間 ŀ を以 る ~ 人 敏 氏 は IJ 氏 國 は 4 戰 0 連 皆 3 を 雄 國 は な 7 爭 民 0) 0 300 議 尚 際 ヴ す 0 意 9 0) n 强 見 承 會 出 的 7

日 あ

英米 らず

0

反 T

動 何

は

ح

れ唯

其

三三の

例

10

過ぎず、

苟

Z

少く 制 る。 T 間 カ> 現 7 矅 なると見て ね n X ばならぬ 度を 55 視 0 0 カゴ 象 36 を思はずに仕事のみすればよいとは皮相 यु 脚 日 0 本意 期 そしてそれ 教 同 羈 4 l 價 6 3 S せら 心的 絆 飛 値 は 打 3 定され 7 あ カコ であ 行 破 を脱 安息 時 こそすべての カゴ る n 0 をなす ĺ ñ 兄 る道 るら 人 家には常 天 此 R r S 即 現象 る 7 生 弟 せんと欲するならば先 日 地にも 刻 つてねられるから實際の生活 うか となるやらだ。 n カジ 觀 姊 度 ねるやらで 理 12 ことが R つて 考 を根 人 かが るやらで 政 妹 は 42 と看 修養 75 治 6 かへ の祈りと修養 本 ~ 500 本とし 殊 仕事 體 ればよろし あ 0) ねられ 出 難さる 改 做 る 12 する 來 なくして出來るも 叉博士は 良 以 る あ L -7 あ 0) 人國家の 印 る所から見ると、 得る人間 Ŀ る 價值 る。 T てとに 度 ならる 0 0) 如 S 然る 人 づれ 度自 と自 によってこそ完 が評 何 面も いとはどう づ即 13 獨立 な 1 宇宙 に生 カゴ る L 一覺すれ 其自 價せられ 2 覺しそれ にそれ > やらで 度 果 一の根 7 7 和 著 真 覺 0 萬 0) 比 L 0) 36 はそ 6 有 考 を 本 を 階 L 7 見解 Ł 0 英 博 73 日 į あ 全 級 る B 大 12 人 は ~ 3

等相 ぜら 優ると ば生活の であ n Ī では 功 は だ。それ < 達 を保存し る要求の で ~ どを論 ば宗 生活 は博 しな きでは 利 るやらな研 7 を る n す; 的 ても る るまい 1 ずる と思 教 36 精 3 力> 即宗教 も宗教に違ひな 個人性 單 個我 は Ŀ 6 進んで 離 つた 神上 あ 敎 黝 一切價 に咲いたものである FII あ る 前 300 E 12 n 名利 は宗教 たも 度宗教 究 力) せい T 12 Ł を 5 者 5.0 通じて では植 劣る 是が發展を計ることで 宗教其者の 博士 に缺 Y 觀 の中に全體として とかっ さらすると博士 脚 る 值 0 カン でな 古は宗教 i 0 植 陷 2 0) 觀 0) とは 7 金錢 0 普遍 から 物 物 ことは 發見であ カゴ い。併 學 を研 0) あ S 存 割 13 我 相 的 在 73 科 とかその る、 を、 吾人 し宗教 究 b 駄 達 態 す カン So 學 目 す 度や り考 6 研 此 出 優劣等を論 る 0) IN L 0 差 保 其點 だ。 る は Ł 印 究 6 姿を 時 宗 修 如 度 者 他 に於て實 別 存 は生きん 出 次 ~ ٤ あ 養 た 6 敎 3 活 る op 0) 相 12 0 る。 觀 於て n 低 保 南 佛 P 科 事 ~ 力> 0 0 ち、 併 300 級 9 から 72 5 5 學 中 H で 際家 古れ 12 創 見 カジ Tà 家 平 無 12 る V 敎

0 AJ 10 で 0 宗教 5 あ あ 見 る 5 2 カジ 觀 なる 7 0 カン V か ねら は カ> 6 叉 ٧Q 承 n 永 は 5 で n る 和 る 0 現 de 遠 な は 0 カン 在 12 ななら で 3 0 S 更に 事 5 あ らら Va 6 實 を説 それでなく 力ゴ あ 此 カン る 明 文 ~ へを讀 是は 4 たに 性 先づ h 質 7 6 は 止 大體 博 なら 4 る 士

する と宗 5 是 に苦 息 やらな る。 人 間 を考 博 H 終極 調 つて 教 12 0 士 n 生 限 事 で 0 和 ^ 宗 をい カゴ 活 る な あ 0 カジ つて差支は 論 見出 とは られ ると 問 教 どうし 人 S 力> つて 間 やらで 題 は 5 る。 全然 觀 7 は カゴ 宇 死 實 1 あられる。「それは n 7 ねら 後 宙 は其 週 際 た 2 13 日 别 矅 物 5 0 0) n 0 0 日 事 だ B Ł カ> 俗 れるやらだ。 問 無邊、人生の すると しと雖 業を 安息 5 觀 5 惡 題等 50 博 醜 7 丰 士 劣 也 なら 日 を主 思ひ 次 とす 他 17 0) 此 研 見 17 日 點 n 0 とし 從 不 やらる は 矅 事 ~ は 究や 解 るやら つて 其 可 かる は 0 甚 7 思 實 他 だ 修 2 為 次 研 T 養 6 生 L 0) > め 0 安 を 活 0 究 な あ 7 12 解

時

頭

腦

とを消費すべ

きでない。

若

L

叉

實際

0

事

Ł 業 博 觀 不 ば 明 士 カジ I カト 臉 週 ら見ての 0) どうし ģ 以 論 中 6 Ŀ あ は 0 る。 どち 12 7 H 論 割 矅 人 而 6 生 6 E 6 あ も是 出 12 カジ 力) 7 る 根 安 目 n は 息 的 本 る H 削 カゴ 6 だらう。 あ あ 12 述 限 6 0) る やうな博 カ> る 價 人 غ 値 生 是 V カゴ 觀 カ> ふやうなこ るっと 其 5 者 V ふと カつ 教 6

る 76 更 1= 0 宗 で あ 敎 5 カジ 5 果 L カコ 7 實 生 活の 仕 事 0 £ に妨

3 を掲 せら 慈 n る る程 飛 見ると 母 0 行 篤 博 士 載 儼 信 相 又宗教 0 17 0) 然侵 Ü 使 0 は 反 日 Va 7 至 一孝な 基督 命 人で した 曜 赐 日 ず可 を竭 天 な B 本 破 6, 父 教 るも 安息 る 南 0 世 12 る。 7 飛 其 カゝ < 界 對する 行 5 0 妨げとなつたりするもの 0 日 2 ざる 彼 心 カジ 家 7 カジ 12 6 は ス 實際 術 70 閉 n 0 やら = ぢ込 人 る 天 靈交を る 12 父 對 格 ス O 0 0 氏 0 めら で 事 玆 L を 0 間 0 は 備 あ 擁 業 尊 カ> 斷 ことを と博 5 技 敬 護 n る 天 なく 博 狮 0 12 父 下 士 0) 意 士 完全 を畏 に悠 續 カン F S 0 敎 0) 表 H でな では 2 S 72 7 揚 教 は は す n な F 期

I ジ 同 氏 飜 72 0 < 7 カジ 2 强 加 1 力> 浴 思 > 6 0 多 h に約 不 72 ヌ 古なる事 的 ソ 一言せん チ 三十 12 殺 ス 香 10 年 せられ 敎 前 件 と欲す の三 會 麻 布 12 塵する宣 發 72 鳥居阪にてこ 3 ことか MA 豫 南 敎 防 0 師 n 72 ラ 1 3

られ カゴ を 15 る。 9 7: 0 居 る カン Ó 加 であ 服 は 井 的 現に 特に E 0 でとき 2 侵 ~ 3 輕 5 吾人は 当で 丰 井 入を蒙 他 加 嘗て 從 零 別 -p 0) 别 來 家 な 75 5 ŽĖ 內 弘 る兇賊 カ> 屋 别 外 仙鄉 jν 意 たることにて 0) より 0 莊 人に 氏 と惹 橋 72 8 夫 造 カ>。 12 離れてねたとい 有 0) 妻 よりて平 方 5 力) 73 は大 (本 る 殊 没することにし h 輕 17 內 カン Jo 階 V) 丰 井 0 外 夏 和 澤 此 0 72 人 P やう 0 寢 事 [2] 力ご 電影 ~ 1 ふで 111 ける 宝 名 ~ 少の 車 境 知 N と考 と限 氏 6 思 7 あ 13 () 警戒 戶 15 通 る b ジ n 新 ^ 寓 5 す >

カジ ある。 は カ> し外 カゴ 生 これも 命 不 により大なる原因 3 通 失 を以 惜 は 1 カコ 6 M 事 原 0 2 因 から を以 かると であら 原 因 ことしゃ 7 シを 思は 部 32 氏 す る。 0)

> 怖 場 30 星 筝 夫 術 勇兵 1 V る。 を以 ふ事 術に巧に 合 心 12 人 w 7 < 强 その 氏 共 d 洛 が多 より ځ 盜 7 で は また男勝 賊 は知らず~ Ū 彼を捕 或 3 あ W 鬪 7 及 0 友 。傳聞する所によれ は 50 侵 人 して萬 志 母 2= 抵 初より殺 刺 入 ~ 0) it 察する所 抗 され ゆた へん タソン氏 6 0) 意 0) せらる 大罪を犯 と試 の場合 た 性 を覺 カン 戮を な 0 質 赴 0 0 5 み 士 丰 > るを證 < 加了 Ē たの P 0 决 後 は すに 的 自 7 72 ン 室 あ 心 V とし では 信 すべ 追び 0 誰 め る 70 其 丰 至 まい 6 何 n 南 だ残 K る きで 3 fo T 0 あ 世む たさ 70 は 3/3 遠 良 3 カコ a と共 人 女 0) あ 力> 77 > 3 或 階 6 5 12 V 0 12 丰 得 す 應 12 氏 à) 12 0) は P カン 寢 恐 あ 義

10 る。 1/2 導 早 カン 要 カゴ 計 犯 稻 > カゴ る事實は 人 あ 五 0 失する 6 A 行 0 記 衞 す 憶 60 犯 人の 0 6 不 鮮 あ る。 É 明な カ É た る今日 る L 63 うち 證 かし 明を要す 2 に之を討 之を論 0 悲慘 る 究 なる 0 0 あ

若 1 果し 13 T 夫人を保 丰 P 2 該 ~" w す る 氏 カジ nin よう は 拳 服 補 0) 心 L 南 る た

た 出 な 柢 南 ŀ T 1111 ス んとて其 る。 常に事 成 12 もそれは例 來 7 歐 は 功者 1 あ 米 そして彼等の成 る宗教 D S 。素より是なくしての成功者もわるだらう。 3 に當 はずも 價値果して幾何 文學者、 となりたくない 外だ。 った 4U 7 に由 カジ ので 哲 な、グラッ いづれも常々刻 たとへそれが物質的 學者、 るもの 功 あ 弘 は る ぞ。人間 多くは 政 0 72 F. だ。 る事は 治 IJ ス 家等皆信 ン ŀ 彼等 たる R = 22 否定 iv 祈 砂 カジ V E に成 する 精 p 0) 0 仰 はそん nith: た È ワ S 功し 事 76 人 0 77 シ は 根 0

> 0 陀

易な 3 精 導を として 何 神 終 5 を去 りに 事 雄大 をなすに V2 仰 つてた ねる時 ぎた 影響を 0 Ē 精神に した V 代 1" 3 B 及ぼします。 です。 S 眼 0 進まん事を 前 つです。 神 B 0 と共に 博士の言 利益 本人 そし 正と成 はさならだ 慎重 樂し 祈つてやまね C は 功 A H 0 とに汲 H 御態度 聊 本 木 と共 國 に宗教 國 民 民 々た 0 力了 યું 12 働 常 御 容 6 0 的

ベル氏夫妻を弔す

黑

][

學人

るに 襲は しく 晋 事 た 國に渡來せられ Co 語 b 3 6 樂を以 業 た。 I 南 る を以てこの 丰 傳 3 吾人 る。 兇賊 殊 n [4] 17 ソ 同 本の文化 訓 to 道 て非命 吾人 氏 就 チ 12 1 す 夫 夫 ス 社 は 妻 吾人は今 0 道 て傳道せられ ~ るの當然なるを思 10 は ŀ 手に斃れ T を傳 妻七月十 ル 12 日 为了 の死を は 教會 氏 恶意 を悲 對し 本 悲惨なる事件を彼すべ 氏 し同 は ^ h 2 民 E 接 12 1 3 0 納かいる児 T 夫妻 逐げ 0) 曦 15 12 附 央 むと共に、 られし カゴ また 0 > H 知 面 居 會 名に於て、 た 牲となられし かが め 5 1-5 75 せらるゝ 堂 0 道 和 曉 南 所 可以 附 12 同 13 ふのであ た なし 僅 0 屬官 夫妻の 敗を のた 車竖 あ 如 井澤 たさらであ 善意を以て渡 何 カン 9 吾人 E 青年宗教家 めに 加公多 根 12 12 敎 きか 殊に 雖 に於 親戚 3 師 絶する能 る こと は あ 12 残念の を知 らで、 年前 如 1 同 友 る。 夫人は 何 ソヂ を慨 7 强 同 なる 5 氏 0 III 我 ス 嘆

時論一束 星淵 生

依然として武動に偏す

大隈伯が侯爵に陛爵したることは當然の光榮である。この政界大明伯が侯爵に陛爵したることは當然の光榮であるである。 武將は感流してます~ \ 皇恩に報ずるの覺悟な至遇の極である。 武將は感流してます~ \ 皇恩に報ずるの覺悟は至遇の極である。 武將は感流してます~ \ 皇恩に報ずるの覺悟に認織せらる しかし吾人は文勳も武 勳と同様に皇室及び國家があるであらう。しかし吾人は文勳も武 勳と同様に皇室及び國家があるであらう。しかし吾人は文勳も武 勳と同様に皇室及び國家に認織せらる しかし吾人は文勳も武 勳と同様に皇室及び國家に認織せらる しかし吾人は文勳と同様に皇室及び國家と理想とせればなるまい。

日露協商を祝す

日露協商成る。これ大隈内閣の 成功である。大隈侯は外交の天

十數年前日露は戰つた。今や互に實力を尊敬して協商を結ぶ。

條は最早や世界を支配せない。信條は狭い暗い教 會や寺院の隅に今や外変は宗教と人種、を超越す。これ人道の一進步である。信佛、露、伊、日 の聯合も要するに之に達する一階段のみ。 哲人の理想と するは世界の大同盟である。獨、墺、土の同盟と英世界のため殊に東洋のために祝すべきことである。

去の信條を超えて進む。 ゆったかっ は天下の大勢である。今や人道は退睡ってゐる。醒めて働くもの は天下の大勢である。今や人道は退

た説す。 ちらに認めざるをえないが――人道の進步の一 飛躍として之そのうちに認めざるをえないが――人道の進步の一 飛躍として之舌人は日露傷窩を日英同盟と等しく、――多少の國家 的慾望を

上田敏氏を悼む

女學の新紀元

え るを 求し ると す 合 3 る 3 た ことが 12 許 悲 7 は は 36 め 無 9 民 12 E 兩 多 理 族 事 カン 質 氏 15 的 想 丰 > は る 像 る とす p 本 場 今やこれ ح ン 能 せ E 將 合 ~ カジ 5 n 突 は 來 力> IV る 12 氏 發 13 吾 0 1 \geqslant を實 5 夫 安全 た 0 す 人 妻 め 叔 る 6 は 12 行 E 12 な カゴ あ 3 消 被 3 氏 何 る 等 得 何 極 0 30 的 尤 等 剪 カン る 0 態 Z. 氣 否 カコ 敎 位 度 to よ カン 0 38 方 地 歲 曾 > B 要求 を る を 12 法 敬 あ 要 吾 超 場 あ す

學ば

75

け

n

d

な

6

VQ

は カン 6 12 困 す 長 基 秘 とな 3 别 到 抵 る 難 督 訣 柔 問 抗 美 處 知 で こと甚 0 0 t せず な 題 22 談 2 15 無 < 7 な 42 4 7 剛 V 抵 S 利 n だ あ 3 抗 カコ 8 る。 3 尤も E 7 る 伊 困 主 制 すと る 36 藤 難 義 或 所 誰 盜 仁 ح 0 は 0 齋 カゴ L 與 賊 H あ n でとき 無 いふこと あ 常 P は J 3 る 0) 丰 大 る 1 る 要 魯 力》 かが 勝 17 時 水 鹽 6 > 流 之を心 違 # 3 は す 個 力了 孔 0 挌 齋 しく 種 CA 沈 る 人 0 傳 勇 所 カゴ 0 0 3 說 老 掛 は 浴 場 は 東 0) カゴ 合 賊 洋 2 < 示 必 金 國 あ n 1 要 6 8 iz 家 道 る 3 得 教 は 17 時 德 柔 13 あ る 化 左 或 は る 應 0 道 程 萬 用 特 V カ> は 0)

> 叉警 13 を 逑 突 0 12 は め 從 捕 恥 外 た 哑 S 同 如 丰 言視 0 ち 1 事 時 A 6 12 吸 to 廳 2 長 35 諸 圣 L 3 1 野 外 國 0 吾 氏 < ~ 家 應 縣 國 A カゴ 漢 CK × 想 N 援 \$ 敬 は 將 像 得 0) 人 F 0 察 唐 體 聖 來 世 國 3 # 12 夫 求 5 17 比 0 本 現 6 面 __ 芙 對 とし E 的 0 部 層 3 は ij 保 Ď な L 注 は > 11 ح 意 た 3 全 7 1 事 氏 る 水 深 13 n 力 せ 誠 1 1E カゴ カン H を 5 4 6 12 < 生 > 盡 之 る ñ 遺 n ___ 他 7 くし 兇漢 ば H 縣 を h 挌 1 爈 松的家 ح 15 謝 E 型 平 0 しとを 5 せる 早 7 13 猶 あ を政 和 ・く兇 本 存 0 月 3 V 在 0 5 1 杣 漢 搜索 をえ ぞ せし す 过 境 よ 老 3 10 6 <

時 將 T し威 來 H 幾千 本 來過 1 謝 年 岩 R 1 去 揮 い教は t 此 730 族 0) 人 3 訓 死 紬 0) る 12 0 過 去 n 册 をえ 對 なこ 外 士 6 h 1 A 淑 果 3 2 E あ 女 0 一大注 酸性 は 過 3 4 能 非 命 選く 0 逝 は V) 命 12 きし 意義 意 Z'' 光 0 對 死 は 輝 る 8 す を放 A 兩 與 を 事 る 明 は 氏 逐 ^ 警告を 5 力> 還 永 0 9 げ をみ た。 HOD ZU n 6 遠 永 な 12 0) 意 3 生 3 味 2 ح カン 72 す る 將 811

に充てる説教があり最後に山室氏の感想的挨 高橋夫人矢吹少佐の吊詞及び金森通倫氏の力 りし新婦の信仰に燃ゆる面影が彷彿とした。

山室軍平氏夫人機惠子逝く

相 生

や、救世軍は救靈隊の急先鋒決死隊であるる

葬儀が行はれた。式は定刻ポーモント中佐司 永眠され、十四日午後三時神田青年會館で其 にて治療に盡されしが薬石效なく十二日途に 救世軍日本書記長官大佐補山室軍平氏夫人 一日突然人事不省に陷られ濱町病院 むるに基督教の洗禮を以てしたと告白したる 拶があつた。金森氏は夫人が武士の精神を清 言を引き、夫人は花は櫻木人は武士であると に棄て、居つた。嫁して彼女は山室機惠子と いふ諺の通り、散ぎはよき櫻の如く自己を常

式の下に始められた。暑さにも拘らず滿場殆

社會からは白眼なもつて迎へられて居つた微 夫婦婚姻の席に列なりしに、新婦が當時来だ に夫人が再び起たざるを知り其子供の信仰を 校は夫人の履歴を談されたが、氏が嘗て山室 式としては空前であるかもしれない。山田大 思つて心中密に泣いたといふた時には年若で と婚しうべき身を献ぜられたその健氣な志を 少な救世軍のため、何不自由なく富貴の地位 錐の餘地ないほどの會葬者で一婦人の葬 夫人の精神を傳へられた時は滿堂肅として所 傳道と救濟のために東西に奔走さる、時其活 遺子七人――その七人は生後僅に十日――に あったといはれた時は滿堂の人を打つた。更 動の背後には常に夫人が居つた、夫人の祈が 々に涙を吞む音がした。山室氏は夫人の病再 金森氏に托されたとを述べ、夫人に代りて其 認められたのである嗚呼

なつた。否山室軍平となつた。斯くて山室氏が 調したとなく皆裏返しか染返しであつた。此 救世軍に行けば晴着などの要ないからとて無 丈はせめてというて新調した制服な着せてや 度の死は勝利の昇天であるから天國に行く時 地の衣服のみ要求した。平生士官の制服も新 を軍友に、幸福はたい十字架の傍にあり」と 友人に遺言したとな述べられた。

であつた。夫人の祈は夫たる山室氏も窺ふと に人に知られずして其死において多くの人に 々しく希望に輝いて居つたといふ。夫人は常 が許されなかつた。其最後も實に勇ましく凜 武士の精神をもつて基督教徒となった女丈夫 活動されたとはなかつた。併し夫人は確かに 夫人は金森氏の言の如く餘り表面にたつて

幸はたで主の十字架の側にありとあかし言 して逝きし君はも。

まづ人を泣かしめ、次に夫人が自由ならの手 をもつて其子供のため「神第一」とかいれたと

起たざるを知りてから枕頭で過去の回顧談に

つたといふ。

生ごわる。 生ごわる。 というの は人の理學士たる なえた。これは注目すべき事 數學科修業の牧田くら子の 兩氏に卒 業證書を授與し、 兩氏は我が数學科修業の 製田ちか子及び

さる所である。 とることである。 しかし扇底は開拓者たので誠に意を張うするに 足ることである。しかし扇氏は開拓者たので誠に意を張うするに 足ることである。しかし扇氏は開拓者にのの事質は我が婦人の腦力 が科學的研究に単ゆることを證明し

なくしては婦人の入學が 許可せらることが出來なかつた。をも收容する規則を設けた るに因るのであるが、幾多の波瀾曲折をも收容する規則を設けた るに因るのであるが、幾多の波瀾曲折東北大學が婦人學生を收容し たるは日本の教育界に於ける一新

この問題に最も 貢獻する所ありたるは當時の總長たりし文學博 この問題に最も 貢獻する所ありたるは當時の總長た明かに語るもた、説ばかりでなくして、中々手ひどい行動もあらはれかれまじくた、説ばかりでなくして、中々手ひどい行動もあらはれかれまじくた、説ばかりでなくして、中々手ひどい行動もあらはれかれまじくた、説ばかりでなくして、中々手ひどい行動もあらはれかれまじくた。澤柳氏は教育界に令名あつて教育行政に於て貢獻する所少からざることであるが、この事件は同 氏の功績を最も明かに語るもらざることであるが、この事件は同 氏の功績を最も明かに語るもらざることであるが、この事件は同 氏の功績を最も明かに語るもらざることであるが、この事件は同 氏の功績を最も明かに語るもりである。

東北大學とのみ限らない。東京大學も、京都大學も、九州大學も

である。 人學生のため に大學部を開放する時期の近からんことを糞ふもの人學生のため に大學部を開放する時期の近からんことを糞ふもの人學生を敬容しな げればならぬ。否、希望者さへあればその門婦人學生を敬容しな げればならぬ。否、希望者さへあればその門

自稱新しい女の運命

自ら稱して新しい女と離する は易い。真に新しい女の置命は没落あい女とは考ふる女 である。自己の心靈を信じて、その才能を發揮せんと努力する婦人をいふのでない。自己の心靈を信じて、その才能を發揮せんと努力する婦人をいふのでない。自確新しい女 が考ふる力がせんと努力する婦人をいふのでない。自確新しい女 が考ふる力がせんと努力する婦人をいふのでない。自確新しい女の一資格と思はに、自己の罪悪を公 表して恬として恥ぢず。たまし、この者に巧みにに遇つて法廷に告訴するが如き順なりといはざるをえない。 自ら稱して新しい女と離する は易い。真に新しい女の宣を奉ぐるは六方といる。



るのみ。真に新しい女は彼等の後より來りついあるではないか。

たものは。少なかつた。木村氏は印度に留學す。我國にも殊に新しい女達に依て彼の戀愛に關 ある。始めに解説としてウパニシャド以前の ウバニシャド哲學中の重要なものな解説詳解 ること七年梵語印度哲學の研究者である。今 して其深遠な思想を示さんとしたのが本書で 多き女史の著述中本書の如きも確かに女史の する新道徳が信仰され傳播された。 生命の眞質に徹したる見識に生れて居る。數 の思想そのものは決して破壞的急進的でなく 併し女史

印度思想及ウパニシャド形式及其哲學の概念 に詳しき氏の解説なれば、 説飜譯して居る。印度の思想に通じ其實生活 を説き次にウパニシャド中の重要な物語を解 朝して大歡迎をうけつ、あるタゴール氏は此 通信的書典として結構な注意である。昨年來 に含まれて居る根本思想の概要を示したのは 加へて居る。殊に物語を一通りのべた後其中 る言葉にも深い注意を拂ひ一々叮寧な註解を する人には適當な研究書であると思ふ。〈價一 しえい所である。印度思想の一端を窺はんと は精神的と一概にきめて居るのは吾人の首背 名が本書に殺して西洋文明は物質的東洋文明 の著にうるはしき序歌もよせて居る。たい著 普通誤解されて居 ta. 0 類と婦人の労働、 見のその親な撰譯する權利、未だ生れざる人 根本的建設の態度から生れたものである。小 譯者自身の序があるその中には原著者の簡單 事情は異るにしても正統派の教界やサンデー 小見の本然より流露する宗教心そのものた惨 章の如き傳襲的盲目的教會と其教育が如何に 働と小兒の犯罪等八章からなる。宗教教授の る人々、教育家、宗教々育家たちに是非一讀 害して居るかを示して居る、我國と彼地との 心靈虐殺、 をすいめるい抱月、中島半次郎氏の序文の外 スクールの教室内に屢々見らる、實例を思出 ながら要領を盡した紹介があり、本文には総 真實に人の魂を愛する宗教家たらんとす

見童の世紀

八〇

大原 同田 館質

は日に新思想家として世界的であるが、近年 ン・ケイ女史原著の譯である、女史の名 行譯 て嬉しいと思つた。巻頭には原著者の寫真版 ふり假名で所々必要な文句には適當な註解を がのせてある。(價一・三五) 附したのは、責任を重ずる譯者の親切が見え

□明けむとする夜の叫び

東岡 新文學社發行 播陽 著

描き方も、小説以上であり殊に談中最 表紙農頑装にも意かいめた四六版である。〈價 三色版及古來の名書彫刻の寫眞版數葉を列べ 自畫像を始め清方恒富喜三郎等現代の畫伯 に歡迎さるべきものであらう。 痛烈深刻な批評を下して居る。綠隆の讀書子 始めとし、現代の浮薄なる思想とデカタンに 件なる新しき女の行動に大鐵槌を加へたるを 其所論も思想は皆一くせあり徹底せるも て、出で來る人物いづれも實在の人間らしく を論ず。中篇の女は女性觀戀愛觀結婚觀にし 篇いづれも會話と書翰にして人生を談じ宗教 蛇の聲、女、浮彫木像の三篇よりなる。各 巻頭には著者 近 の事

未來の學校、宗教教授、小兒の勞 教育、無家庭、學校に於ける

口作文英文日記

O 次 O 次 O

敬給 館芳 行著

て居る。英作文の練習には蓋し適當なもので 英文日記の實例を示しその和譯と註釋を加 意を與へ次に正月から十二月まで順を追つて あらう。〈價〇・三〇〉 始めに英文目記の書き方について叮嚀に注

新

更に其第二版において從來よりも徹底した考 のである。其後十數年にして一九〇四年氏は

るものなるかを示して居る。一般確實の思想 新しい問題に接觸して、科學的認識の如何な

認識の

ばならぬ。然らざれば如何に高遠な思想でも 居る。新しい人生觀世界觀を組織提出せんと 單に詩的空想たるに止り、精神の王冠たる學 もつて思想界に重ななして居るとはあやしむ の價値を附與されるとは出來ない。かしる哲 的傾向においてカント哲學が新しき生命を 現代の哲學は認識論を渦心として進轉して 先づ此關門の査定を經なけれ 斷及び其對象、

ある。 げて居る、 學派の創始者として視らるいが、其大成者は 7 南學派とコーエ ントとリツゲルトとに代表さるし所謂獨逸西 プルヒ 昨年物故したウインブルバンドは西南 「認識の對象」の原著なるリッケルト其 新カント學派中で、 派とは其重鎮をなして居るもので ン、ナトルプに代表さる所謂 ウインデルバ 觸れ根本的思索に赴かんとする人々に多大な 論の二途」の梗概がある。現代の最高思潮に 版との中において發表した重要な論文「認識 る貢獻を本書がなすは疑を入れない。〈價一五

に足らない。そして其の新しき光を力强くな 二版には自づから新カント學派の發展が窺は 成立するかといふことは本書が第 識の對象とは何か、對象の認識は如何にして る經驗的心理學方法な窺ふことが出來る。認 るいばかりでなく、第三版にも重要の意義あ を發行した。本書は第二版の飜譯であるが第 の根本問題、第二章內在論の立場。第三章判 義を徹底させ昨年途に改訂した本書の第三版 開展して居る。附録として著者が第二版と三 經驗的觀念論と經驗的實在論の各章において 方を發表した、氏は其後一層認識の純論理主 第四章客觀性の論證、第五章 一章認識論 なる知識を供給する點において本書は那語に に電感せしめ、哲學者には他に求めえわ貴 者自身には偉大なる先人の攻學の美しき精神 を追及する人に科學の何たるかを教 譯出さるべき特機を有して居るとは譯者の告 るが此譯書も流暢で讀むに若しくはない。〈價 索引を附して居る。原著者は頗る名文家であ えたる紹介がある卷末にな譯者の手になれ 者としての位置と其思想の簡単にして要領を 白するところである。巻頭には原著者の哲學 1100

科學の價値

然科學を書いた人。本書は通俗的であるが 者は曩に岩波書店發行の哲學叢書に最近の自 原著者は佛國の碩學アンリ・ポアンサン・譯 岩波書店 發 行譯

り去つて新しき立場から認識問題を論じたも

ドに啓發されて、

人であるとされて居る。

本書は始め氏がウイ 實證論的傾向よ

即ち此

優波尼沙土物語 發寬 行著

た印度最古の哲學である。時代が古い丈組織 的ではないが、 本書の思想は從來單に數篇の哲學史によつて 論であるから、 東洋否印度一流の梵我一體を說く絕對的唯心 なか深遠な思想を開展して居る。殊にこれが 紹介された丈で、 有する人の要求する思想として意味 ウパニシャドはヴェダ經典の解釋から起 冥想を喜びかっる心的 人類の哲學的要求 原著そのものし面影を傳 からなか がある。

居るべき場合ではない。列國に先んじ、先後の

ことが主眼である。これが爲めに古來より剣

て、平和の上に立脚して善を勸め悪を懲らす

邦の盟主として獨り尊大に泰平な謳歌して

傾向がある。著者はこの時にデヤツク・ロンド の文壇に憧れて、米國文藝の如きは顧みない て許されて居る。現在日本の文壇は歐洲大陸 活狀態を描いたもので、彼れの最大傑作を以 第と空想と を混へて、 太古に於ける 人類の生 の名著」アダム以前」の飜譯である。・科學的研 であつた。これによって我が國の小説に科學 である。巻頭には内ヶ崎作三郎氏の序文が載 ンの名著を譯出したのは最も正鵠を得た企て って居る。〈價・八○〉 文明的小説の出現する端緒としたいもの 又その研究が一夜作りの杜撰なものしあるこ 究と題するには餘りに執筆者の數が少なく。 柄頗る有益な小册子であるが、戦後文明の研 氏、内ケ崎作三郎氏、 吉野博士、桑木博士、金子馬治氏、中村吉藏 執筆者には阪谷男爵、岩村男爵、浮田博士、 徳、宗教、文學、美術の各方面に亙つてゐる を撰集したのである。政治、外文、社會、道 文明號に掲載した論説中、最も代表的なもの 本書は大正四年四月發行の新人に於ける戦後 そん遺憾とせればなられ。へ價○・五○ン 綱島健吉氏が居る時節

この書は米國の小説家デャック・ロンドン

戦後文明の研究 洛陽堂發行

口劍術教授書

日本武道會出版 板倉定四郎編

明の自治者にならなければ駄目である。非文 世界の平和を促進するには各國が完全なる文 たんとする軍略であると見ることが出來る。 既に各國は戰後文明の研究に努力して居る。 隨つて戦亂の基となる。それ故我が國は現下 明であつて他國の掣肘を受けるやうであれば これは勝つて、兜の緒 目下歐洲戰爭の禍風中であるに拘はらず。 を締めるい或は負けて勝 ざるは勇なきなりと言はれた。武はこしに基 は、義が大切であるとせられた。義を見て為 て居る。仁は人を慈むことであつて、 天下の業である。けれども此業を全うするに 仁であり、武は義であると云ふ説明が加はつ 故に武士道の本義は殺人侵略の行為では無く いて居る。而して又こ、に武士道が生じた。 古來日本では文武兩道と稱して來た。文は

文明の研究を完璧して置かなければならない 道を必要とせられた。軍人、警察官吏、 易く、平易簡明に技術を傳授して居る。卷頭 して剣術全體の理法を會得せしむるために本 今回各流劍術の極意の粹を集め、これを組織 のも是れが爲めである。板倉氏は剣士である 學校生徒中學校生徒に必修科目になって居る 大學劍道師範木下壽德翁の校園を經て居 書を公にした。總振假名にして何人にも解 には两久保警視總監の題字があり、東京帝 (價○・五○)

口ドコマデモ

實業之世界社發行野 依 秀 一 著

集である。〈價一・〇〇〉 を主義として進む人である。 著者は目下入獄中とあるが、「ドコまでも」 本書は著者の論 157 -

斬人斬馬

治國平

同同 听人 發

纏つて居ない雑論である。澤柳氏と増田氏を 攻撃した文章が大牛を占めて居る。〈價一・二 これも著者の論集であるが、 前のもの

内 午 出版 社 發 行 著

人生教濟の道を開くといふにある。著者の學 を行る間にも其態度は佛教の眞理を明にして **樣ではないが、著者は此等の史論** 講演あり、教理、史實に關せるも

0) 史論あり。

あり、

に歡迎さるべきものである。 種の通俗的書籍には たことは寺や人物の名に讀假名を附したら此 殖見識は世已に定評あり、 一層親切な擧であると思 本書も佛教研究者 書中一寸氣つい

鐵道旅行案內

ふ如何。(價一・三〇)

鐵 道 院 發 行

おき、 行者には至便重寶の書物である。 披見すれば旅情の自ら促さる、な覺える。旅 すると共に美麗に寫真畫を數多挿入して居る 纂する案内記である。さすがに本職のやるこ として叮嚀親切を極め、沿線の名所舊蹟を敘 地圖や説明は詳細を極め産物等をも加 本書は毎年鐵道院で全國鐵道旅客のため編 各郡市の信用しうる旅館の名もある。 本書は博文 へて

で定價一圓で發賣して居る。

ある文章十五篇を取録して居るが、考證あり 著者が嘗て雑誌等で發表した佛教史に關係 春淺し、 から五年四月までの詠草を輯めい秋より冬へ 歌壇一方の重鎮たる牧水氏が大正四年九月

ふ狼のひれもす聞 秋日さすまばら小松の岳越しに磯あら **殘雪行の三部よりなつて居る。**

來て見れば松ばかりなる片山に浸み照 浸みわたるこしの芝山 もみぢ葉の照りは匂はれさやさやに秋

そみち行けば鳴たつ 夕照るや落葉つもれる峽の田の畔のほ る秋日麗らなるかも

針とめてよろこび鴉いま過ぐと眼をつ て歩けば梅到るところ わが庭に吹きしばかりかこの朝げ 出て

最も都合のよい小册子である。

併せて希臘大

照るも 麓より風吹き起り椿山椿つらつら輝き むりたる美し妹

城あとの古石垣に ぬもたれて聞くとし もなき瀬の遠音かな 櫻の眞白き幹に 啄木鳥が來てとまりたる槇の隆の落葉

天若 弦山 堂牧 發水 行著

天窪

弦田

堂空

發穗

行著

た日本アルプス中の槍ヶ岳燒岳等へ登山した 時の紀行文七篇及附錄として其時の和歌を載 著者が先年日頃親しみと憬れの劉泉であ 日本アルプスへ

印度の古文明

正松

社俊

發章

行署

交重

つのは此歌人の本書であらう。

7

ブスの寫

眞版敷葉を挿む。〈價○・八五〉

らんとする時、登山しえの人々にも其美を分

せて居る。昨今此山へ登山する人の漸く多か

を受けず、印度アーリヤ固有の面目を窺ふに たものである。それで印度がまだ外國の影響 本書は主として印度の古典なる吠陀に基 印度アーリヤ人種の固有の文化を敘述し 156

ものである。〈價〇・二五 より専門的研究のものでは無くて、

通俗的な

社會、宗教、文化に分けて説明して居る。素

の關係をも究めるに便利である。

全篇を人種

で居るから、印度アーリヤ文明と外國文明と

夏文化及び羅馬文化などの影響にも説き及ん

ロアダム以前

等自然を歌へる佳調多し帧装優佳〈價〇六五〉

洛篠崎彦三 發則 行譯

大 正五年 六 合 雜 誌 目 錄 上

輯 後

作は方言やスラングで可成難かしいものであ ーシイの譯は本號で完結した。始めから續け が賑はふことになつた。鈴木君のゴールスワ 口本月號は自づから夏むきになつて、文藝欄 て讀みなほすとなか!、興味ある作である原 れました。

の人生觀が現はれて居て面白い。尚序に申上 記事に對して、自由な想像的解釋を試みたも る人。沖野氏の青年リーデャンは聖書中の一 歐米で名を知られて居る作者である。久保氏 版されるだらう。 は曩に「聖フランシスの小さき花」を譯出した 口齋藤氏の譯されたシュライネル女史は近頃 近頃ちらほら見る例であるが沖野氏一流 筈。

るが、

る。大石誠之助の基督觀を直接その手紙によ えの御用事ありて歸朝された勿論此秋には再 最近オイケンに關する小著を成された由。 國留學中なりし今岡信一良氏は此夏休中止む 中旬には秋田へ出張講演され二十日から九月 を擴げて御研究中である。三並氏も相變らず、< 上旬は郷里宮城縣黑川郡富谷村に歸省さるい 岡田氏も何處へか旅行の計畫で類と地圖 米

多分これは一册に纏まつて某書店から出 同氏の「生を賭して」の續稿がも一篇あ 兵衞氏は先月末上京され目下一條氏と同居、 口吉田絃二郎氏は七月末歸省された。 今後は本誌の母輯を助けらる、答でありま 内ヶ崎氏は八月上旬は丹後宮津地方へ 野村善

口七月の編輯會は今度歐洲から歸朝された荒 とは大に類を異にしたものである。 本誌編輯厂切每月十日 獅子雄氏の「文明の三型」が來月號に出る筈。

口香川鐵藏氏の「病める哲人フェ

ヒネル」中村

渡航の筈。

號で發表致す筈。幸徳秋水の基督抹殺論など つて紹介されたものでありますが、之は來月

> 人である。 誌上に屢々盧山生の名で瑞西通信を書かれた 井醫學士の歡迎をも無れたが、 ツドな歐洲戦争の印象談があつた。氏は本 本號にはやはり彼地の夏を紹介さ 同氏のヴィヴ

社

本誌 記の原稿 質問、

> 新 刊 書 批

東京市外巢鴨一四七〇相原方の一部等に関しては

同

交換、 圖書取次、

購讀、

東京市芝區三田四國町二 送附又は御通信被下度

にて御い

候

祈禱の心理・・・・・・・・・・・・本 宮 矯 兵	國際道德論條 忠	若き佛闌西人へ(ボール・ブルジエ)内 藤	精神主義が制度主義が(下)・・・・・鈴 木 龍	現代思潮とクリスト教帆足理一	道徳と宗教との合致・・・・・・・ 條 忠	自我道徳の根本義野 村 隈	アンドレ・ジイドといふ人内藤	新文學の生まるいまで・・・・・・・・・・・ 、	装飾美術の眞理・・・・・・・・・・平 澤 哲	ニイ	男女兩本位の道徳・・・・・・・・・・ 條 忠	米國人の生活と基督教・・・・・・ 鈴 木 文	制度主義 が精神主義 か(上)鈴 木 龍	社會問題と基督教木 村	ベルグソン哲學の迷妄・・・・・・・野 村 隈	信仰よりも疑惑を・・・・・・・・・ 藤	新宗教の曙光サンダーラン			ラピンドラナト・タゴール背像	人の思想・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ラ	4	
衞	衞	濯:	司.	郎	衞	畔	濯	濯	雄	輔	衞	治	司:	惇	畔:	濯:	F.,			:	ン :		
:	:	·	:	:	:	-	: = :	:		.=	= :	:	:	:		:	-			: Ta	- 2	迮	
, ,	: 四	-	:	:	:	:						:	:	-	:	:				+	:		
正〇四	八三	七〇	三八〇	三八〇	三六六	三五七	三五〇	二七八	二六二	H	二二九	二八	=	七八	六〇	h.	=			H	J	N.	
人生の發展と死 並	生命の追求・・・・・・・・・・・・・・・ 内ヶ崎作三	物質的文明の壓迫安 部 磯	現代の唯物主義・・・・・・・・・・白 石 喜 之	イエスの生涯と其使命、內ヶ崎作三	羅馬法王の使節とは何ぞ・・・・・・三 並	社會の缺陷と基督教・・・安部磯	個人主義の純化 内ヶ崎作三一	內在の神內ヶ崎作三	軍國主義で平和主義で・・・・・・三 ・ 並	洞海	生の本質・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	関係などでは、	祭園系の側印力としての宗教:吉 野 作	自由基督教の根本義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	調		宗教と趣味の地理・・・・・・・・平 澤 垣 地	新らしきまぼろした見よ・・・・・・佐藤	宗教的經験に於けるキリストの地位:ビボー	道徳上の性慾・・・・・・・・・・・・・ 條 忠 な	生活のアンチノョー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	デモクライスの心理・・・・・・・木 村 久	四人のスカンチナヴィアの女幡論者:平 井 好
K	部:	雄:	助	郎	11	雄:	部:	郎	良:	太	: 限	ß:	造:	雄:			雄:	清:	デ:	衞:	畔:	:	:
· : ;	; H	: 11.	571	ļų.	:	:	33	=	= :	:			:	:			: *	: 六	六。	: H	; 36	199	id :
:		·	:	:	四	:		:					4 .	:					· +	· 六	· 六	* E	<u>si</u>
七五四	六	104	九八八	六二	14	74 =	三三大	ニンス	1.07	九八		ų ų	兲	二七			八三丘	八 〇 〇	七六八	大三六	大二 き	H	M

, 1900-1 (|) -------



美: 社の外 : : : : : : : : : : : : : : : : : : :	に関して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	虚心集	寂寥田	旅の歌・・・・・・・・・・・・・・東	卷の不思議・・・・・・・・・・・・佐	冬の夜山	しろき月伊	橫濱情調石	樟の香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	病みし時に・・・・・・・・・・・・・・・田	心の晴雨 佐	枯葉の鳥・・・・・・・・・・・・・・・・・・日	久能より龍華寺へ 内ヶ	虚心集	夕暮れに・・・・・・・・・・田	秋の日に・・・・・・・・・・・・・・・・田	摩耶のふもと・・・・・・・・佐	あしたの陽・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・伊	冷たい雪	霜枯る、頃:・・・・・・・・・・・野	憧憬と沈默
	野	碧	中華	三條節	藤	日左北	藤寥	田三	山碧周	中	藤	向き	崎作	碧	中革	中葦	藤	藤寥	已正	口精	田三
雄::四: 五二九	戊峰…四:四	樓::三: 四三八	城三・四三七	實 敬三… 三九一	清::三: 三九〇	武郎三:三八九	々三… 三四九	治三: 三四八	福	城:::-:: 三〇三	清 …二 三〇	む・・・ニ・ニ五〇	三郎 1七七	樓::一:一六四	城1: 15三	城・・・・一・・・九五	清:・・・・・・ハ五	々・・・・・・・・ 七〇	直:一一:五九	子:五	沿 五〇
思	米國だより・・・・・・	噫航空界の犠牲者	· 億松枝德曆君:	逝ける加除弘力	逝ける宮崎光子	米國だより:	歸一協會宣言	米國の農民な		野に來りて	子守唄	虚心集::	心の濱邊:	影が影がこ	おとづれ…	蘇風	虚心集::	Songs of L	茶臼原にて・	自嘲:	虚心集
潮		1::::		弘之博士評	子女史評	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	言發表紀念講演會な聴く、	を見て故郷の人々へ:高	雜録		·····		坪	鈴	***************************************	#		Light and Life · · · · · · · 劃	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
潮	流		古野周	士:::::::::::::::::::::::::::::::::::::	女史		演會を聴	て故郷の人々へ:		口左	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		坪 田 譲	鈴木 龍	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	and Life	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
潮	橋	星 島	理	士: :: : : : : : : : : : : : : : : : : :	女史評	橋	演會を聴く・K	て故郷の人々へ:高 橋		П			Ħ	木		藤	祖 樓…丘	and Life	···· т		

- -(3)---

・ 生を賭して沖 野 岩 三 郎五: 六四九故島地雷夢君追悼小集記内 ケ 崎 作 三 郎四・ 五九○	忘れえの面影・・・・・・・・・・・・・吉田 絃 二郎・・・四・ 五四七	忘れられた鐘(バウムバツハ)・・・鈴木芳松・・・四・五三七	島地雷夢君なおもふ・・・・・・・・佐々木信綱・・・四・三三五	北米より田中 菱城…四:五三	鞭古田 絃二郎…三。四七	荒凉の村沖野岩三郎…三・四七	聲:繪 五 耶:::=: 四〇三	人間性に立ち返れ・・・・・・・・西 淵 峻・・・三・・ 三九八	亡き兄の自憲像・・・・・・・・・・・・・・・・・ 田 譲 治・・・・ヨ・・ ミカニ	What Ami? ············岡田哲藏···□·□□五	神は山の上に在ます星島 二郎 三二	啄木鳥吉田 絃 一郎 五九	Juvenil Wisdom ·········· 岡田哲藏····:	才人島地雷夢君栗 原 基: 二 二四六	島地雷夢君を想ふ・・・・・・・・・・深田康第・・・・・・・・・・四一	The Three Day's Orphan · · · · · 简 田 哲 藏 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	愛然の巷へ吉田 絃 一郎	誤解に對する心沖野岩三郎六	太陽の如く生きな永井柳太郎七一	扈杰		再生の連續・・・・・・・・・・・・・・ ヶ崎 作三郎・・・・・・・・・・	
せルピヤの滅亡を悼みて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	歩、欠、	愛の切れはし(ゴールスワーシイ)鈴木 芳松六:八四	愛の切れはし(ゴールスリーシイ)鈴木 芳松・・・五・六八七	愛を抱いてくその三ン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	西方淨土 班田 讓 治…四 五三0	愛を抱きてくその一つ・・・・・・・・・・・ 井 好 一・・・・ヨ・ 四〇大	プラウニング夫妻の戀愛・・・・・・林 靜 太・・・ニ・ ニモロ	愛心抱いて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	蜘蛛の巢の家・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	小鼓		My soul and I ···································	ラビンドラナト・タゴ!ル・・・・・吉 田 絃 二 郎・・・六・ ハ五七	老人と子供と蟹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	眞寶の一路・・・・・・・・・・・西灘 峻・・・・・・・ハニ	杜鵑香川鐵藏…六八三	初夏の憂愁:・・・・・・・・・・・・・・・・W N·・・・・ ハOu	生を賭して(二)・・・・・・・・・・沖野岩三郎・・・・ホ・ハカ門	生命の音樂・・・・・・・・・三浦 眞 造・・・ カ・・・ 七八五	永遠に默しつ・・・・・・・・・・・・・吉田 総二郎・・・・・・・・・・	知識的氣取屋工藤直太郎五 七三	詩よりも田を・・・・・・・・・・・佐藤清・・・・・ 六五九	

—(2)—

讀 者諸 賢 VZ 当 4

小 誌 0 廣 告 交中

一学ケケ 分分 十五 錢 錢

年年 稅 共

と有るは何れも普通號のみの場合にて、若し

特別號發行に際し

て、定價の增加し候節は夫れ丈け別に頂戴致す事に相成居り候

に付念為申上置候間何率御了承奉願上候

大正五年八月

六合 雜 振替東京 東京1000三番

話

時	
評	

現代思想家の何人に最も共鳴するが、諸

名

家……!:

ī	攻克ようを更を止	反響平 澤	四月の思想界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	大戦飢に對する基督教の態度エーエ	反響	姑嫁問題評	現代の女學生を如何に見る・・・・・諸	三月の思想界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	二月の思想界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	最近の教學評論界一覽:記	一月の思想界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	最近の教學評論界一覽 :・・・・・・記	大正四年の我が思想界・ :評
);	亨	哲	nim	ルスミ		一合	名,	誦	PA PIN		論		論
ý	I.	雄:	子:	ス:	家	子:	家:	子:	子:	者:	子:	者:	子:
	: :	: 六:	: H. :	: 五 :	<u>1</u>	: !	: 四 :	: 四 :	: ::	:=:	:=:	:	: : : :
	九五	八九三	七八五	七二七	五八七	五八五	五七三	五七二	四 五 五	二二六	1111111	五五	一0七
					>	rsal .	_	d=s	-34-		3/2.	388*	

婦人の王國

(大正五年前牛期目次終)

禮 **拜說教** 午毎 前日 十曜 時日 (當擔) 並

一講 演 午每 後日 七曜 時日 諸

傳道

基督教哲學

五.

震

交

會

午每

後木

七曜

時日

午前九時十二 曜 分日 Ξ 並

並 良

字宙、人生等に對す

日曜學校

前日

九曜時日

る質疑等有りて頗る有意義の會合也

馬可傳を講ず、

猶會員諸君の信仰告白、

滿五歳以上の少年男女の入學を歡迎す 家

す。 出席、 御遠慮なく 一どの集 御聽、 49 きになることが出來ますか 御來會下さい。 にも又、どな たでも自由に御 歡迎いたじま

芝區三田四國町芝園橋際

五八五五番

基督

禮 淑、永井柳太郎、安内ヶ崎作三郎、安 て擔任す 拜說教 (毎日曜日、 安部 小山 磯 東助、岸城雄、岸 午前十時 以 相原

一郎介等交代

武

岡

田哲

組

良

家

良

げんとするものなり 谷 仰に對する疑義を糺 會員宅を巡回 して開き會員相互の親 大に共進互 琢の 睦 實 たっ を撃 計

織 す。 基 郷 < 仰 せ 會 石川 5 は to 傳 昨年六月成立 四月豆 宣 自由基督教 牛込等都下北部の人士 ts 傳 9 せん 同感 とする高潔 の士の の立場 主として 來 よ な ŋ 會 3 包容 神田 を 友 よ り組 情 的

肺 田錦町 三丁目女子 音樂學校內

會

A 基

督

教

0

異

敎

分

五三一共郵前一 錢十圓金稅金年 號

月

八

A

聖

書

研

0)

必

要

A

死

後

0

生

命

就

1

四郵別廿一定 錢税に錢冊價

轡

生

蕃

間

0

傳

道

新 奇 基 1 著紹 督 蹟 者 12 介 + 0 0 0 儒 基 福 教 督 餘 觀 論 種 音

神 ス 學 x 的 指 t 導 古 牌 0 0 必 TE 工 要 解 = 才 2

1)

費府 大學教

神

學 校 教 授

ブ 3 P 研 若 1) 7 ス ラ 究 月 1 w 7 會 麻 1. フ 竹 口 須 博 敎 R ウ 士 授 1 員 美

水 せ 2 11

野 7 記 純 者

町保神表區田神 所捌賣大

堂

町張尾橋京京東 所賣發

又

《後附二》

君 諸 者 特 0

ば 振 合 御 す 替 京 カコ 5 御 市 金 拂 は 送 社 は 料 宛 東京 込 カ 미 3 成 御 行 to 安 尖 1 添 0 全 書 4) な 及 籍 せ 振 1 2 3 な 3 科 n

告廣誌本

普 普 特

通 通

二表囘紙

以四

價

特海

别外

號 は

等

志 定

1111

半

15 15

年

分 分

前 金

金壹

圓

拾 拾

五

錢

稅

共

111

本

壹

#

月

漬

錢

郵 郵

稅

錢

定價 發行 發 即 兼 行 刷 刷 編 輯 所 所 人 海

信

郵税を要します。

は

發

所

to

御 書

雜誌

營 八五

Ŧi. 部

一楼東京

話

五 0

五五五三

借出

to

す

3

大大正正

五五年年

八月十八

88

は 要

發印 上面 表 出郵 刷納 15 連は 版稅 三東田京 紙 續 年 行本 0 四市國芝 分 際 删 揭頁 句: 四 12 以 は 町區 月 規付 1 面 前 0 際の 定 金 金貳 巴 東京市芝區 東京市芝區三田四國町ニノ 以 六錢 は廣 华 京市芝區愛宕町 東洋 外 特告 統 日 0 別御 貢 清 **| 代金を申受く** 比 發 基督 即 頁 拾 割斷 自 頁 行 刷 三丁月二番地 引申 錢 野 教 株 口 上 金貳 金拾 金 輝 郵 弘六 式 仕候 道 會 the Co 候 貳 拾 税 社 男 會 圓 圓 共

月 日 定 發 評 論

即

度

よ

錢 月

7 定 日 價 媳

の齎 笳 は は 翁と其講 とタ (1) 12 12 何 0 册 世 0 日 0 0) 3 0) せる印度 界 A 講 思 ゴ 金 ぞ 聖 本 印象と感 演 想 1 及 0 參拾 に就 明 IV 傾 1 ~ 向 0 書 使 12 信 想 及 ゴ 高 成谷 吉 井姊野 內 松 鈴 圖 木 四 4 楠 + 崎 12 木 村 田 瀨 絃 哲 順 亦 五 次正隈 龍 哲 泰 演 太 次 名 郎 郎 郎治畔 譯 郎 郎 司 家 宗 薫風 再生 影か 米國 眞實 杜 デ 敎 鵑 命 0 影か きまばろし 賭して・・・・ 0 的 ~3 12 和 連 切 ナ 婦 より 2 歌 續 發展 験に於け 問 n 長詩 1. より 愁 は 題 ラ 其 ナ るキ 師 + 及 1) 又 I' 1 0 12 地 位 內 伊鈴 佐 西 香 鈴 吉 高 金 4 田 淵川木 崎 參 浦 藤木 术 並 藤 拾 紡 關 鐵 芳 寥 龍 清忠 錢 良 清郎造濯郎 N 々司 郎 峻造松 吾衞

一印度

か 思想

觀

一愛の 最近

切

n

0

及

カビ

1 ゴ

0)

1

IV N 及

t ゴ

1

IV n ラ

發行

想 號 427

(六合變餘第三十六年第八號) (大正五年八月一日發行) (毎月一四一日發行) (明治廿五年三月二十七日第三極點便物器可) (大正五年七月廿八日印刷轄本)

